

二之宮谷地遺跡

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1994

建設省
群馬県教育委員会
財群馬県埋蔵文化財調査事業団

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第162集

「二之宮谷地遺跡」 正誤表

ページ	行	誤	正
例言	23	「V-2出土土器について」を	「Ⅲ-2出土土器について」を
20	左6	出土遺物から後半	出土遺物から10C.後半
305	右図中2段目	A-16	A-1b
344	表中6	☆	①輝石粒 ②酸化焰 ③明褐色
	7	☆	①輝石粒 ②酸化焰 ③明褐色
	8	☆	①輝石粒 ②酸化焰 ③明褐色
	13	(挿図番号欠落) ☆	第11図-1 ①砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色

資	No. 95-5420	平成8年2月13日	01-330
			26
			(6)

(助)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第162集

二之宮谷地遺跡

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1994

建設省
群馬県教育委員会
(助)群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

埼玉県深谷市と本県の前橋市を結ぶ一般国道17号線のバイパスである上武道路は、前橋市今井町の国道50号線までの区間が開通・供用されており、通過市町村の産業経済の発展に大きく貢献しています。

上武道路の通過する地域は、本県でも有数の埋蔵文化財が分布しています。このため、道路建設工事に先立って埋蔵文化財の記録を後世に残すための発掘調査が昭和48年度より群馬県教育委員会及び当事業団により行なわれています。

本書は、昭和61年9月より昭和62年8月にかけて発掘調査をしました前橋市二之宮町所在地の先土器時代から平安時代にかけての複合遺跡である二之宮谷地遺跡の報告書です。本書には奈良・平安時代の85軒からなる住居域と水田の生産域に伴う灌漑施設、多量の墨書土器、仏教信仰を示す瓦塔片等貴重な遺構・遺物の調査成果が報告されています。

発掘調査から報告書作成に至るまで、建設省関東地方建設局、同高崎工事事務所、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、地元関係者等から種々、ご指導ご協力を賜りました。今回、報告書を上梓するに際し、これら関係者の皆様に衷心より感謝の意を表し、併せて、本報告書が群馬県の歴史を解明する上で、広く活用されることを願い序とします。

平成6年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長

小寺弘之

例 言

- 1 この報告書は、一般国道17号線（上武道路）改築工事に伴い実施した二之宮谷地遺跡（JK37-2）の発掘調査報告書である。
- 2 二之宮谷地遺跡は、群馬県前橋市二之宮町1340-2、1364-1他に所在する。なお、上武道路 STAno では、1052～1065の範囲にあたっている。
- 3 上武道路は建設省関東地方建設局高崎工事事務所が事業主体であり、発掘調査および整理事業については財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施している。
- 4 調査体制および期間は次のとおりである。

発掘調査：調査研究第2課長 桜場一寿
発掘調査担当職員 原雅信、神谷佳明、岩崎泰一、金井武
調 査 期 間 昭和61年9月1日から昭和62年8月13日
整理業務：調査研究第2課長 能登 健
整理業務担当職員 原雅信
整理業務補助員 青木静江、高橋フジ子、原島弘子、鈴木紀子、神谷みや子、木暮芳枝、松岡陽子、田村栄子
遺 物 写 真 佐藤元彦
保 存 処 理 関 邦一、小材浩一
- 5 漆の分析については、国立歴史民俗博物館 永島正春氏に依頼している。
- 6 石器石材の鑑定は、群馬地質研究会 飯島静男氏に依頼している。
- 7 人骨については、大間々高等学校 宮崎重雄氏に依頼している。
- 8 報告書の執筆は、次のとおりである。

土器観察表および「V-2 出土土器について」を神谷佳明、「II-4-(1)瓦塔、(2)瓦」を高井佳弘、木器樹種同定についてを五十嵐由美子が行い、その他は原が担当した。
- 9 遺構名称および番号は、発掘調査時のものをそのまま使用している。そのため、調査中に生じた欠番等も変更せずに準用した。
- 10 調査資料は、一括して群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 11 図中のスクリーントーンは、次のことを表している。

挿図中のスクリーントーンは次のことを表わす



目 次

序

例言 凡例

I 発掘調査と遺跡の概要	1
1 調査に至る経緯	1
2 遺跡の位置と地形	2
3 周辺の遺跡	3
II 発掘調査の記録	5
1 調査の方法	5
2 調査の経過	6
3 遺跡の基本層序	7
4 調査した遺構と遺物	8
(1) 旧石器時代	8
(2) 縄文時代	12
(3) 竪穴住居	18
(4) 掘立柱建物	227
(5) 土 坑	229
(6) 墓 塚	244
(7) 井 戸	249
(8) 溝	264
(9) 埋没水田	267
(10) 溜 井	269
(11) 瓦 塔	278
(12) 瓦	284
(13) 手 捏ね	286
(14) 土 錘	289
(15) 遺構外の出土遺物	291
III 成果と問題点	303
1 ま と め	303
2 出土土器について	305
IV 科 学 分 析	325
1 プラント・オパール分析	325
2 珪藻分析及び花粉分析	329
3 出土土器胎土分析鑑定報告	337
4 採取粘土と出土土器の蛍光X線分析	345
5 出土土器の黒色・赤色付着物について	347
6 二之宮谷地遺跡の人骨について	351

挿 図 目 次

第 1 図	二之宮谷地遺跡の位置	1	第 61 図	17号住居と出土遺物	62
第 2 図	上武道路沿いの地質断面図	2	第 62 図	17号住居出土遺物	63
第 3 図	周辺の遺跡	4	第 63 図	17号住居出土遺物	64
第 4 図	グリッド設定図	5	第 64 図	18号住居	65
第 5 図	基本土層図	7	第 65 図	18号住居と出土遺物	66
第 6 図	旧石器調査区全体図	8	第 66 図	19号住居	67
第 7 図	出土石器	9	第 67 図	19号住居出土遺物	68
第 8 図	その他の石器	10	第 68 図	20号住居	69
第 9 図	その他の石器	11	第 69 図	20号住居出土遺物	70
第 10 図	Bd・Be グリッド石器分布図	11	第 70 図	21号住居	71
第 11 図	縄文土器 (Au-18・19グリッド)	12	第 71 図	21号住居と出土遺物	72
第 12 図	縄文土器分布図 (Au-18・19グリッド)	12	第 72 図	22号住居	73
第 13 図	縄文土器	13	第 73 図	22号住居	74
第 14 図	縄文石器分布図	15	第 74 図	22号住居出土遺物	75
第 15 図	グリッド出土遺物	16	第 75 図	23号住居	76
第 16 図	グリッド出土遺物	17	第 76 図	23号住居	77
第 17 図	住居位置図	18	第 77 図	23号住居出土遺物	78
第 18 図	1号住居と出土遺物	19	第 78 図	23号住居出土遺物	79
第 19 図	2号・3号住居	20	第 79 図	23号住居出土遺物	80
第 20 図	2号・3号住居	21	第 80 図	24号住居	81
第 21 図	2号住居と出土遺物	22	第 81 図	24号住居	82
第 22 図	2号住居出土遺物	23	第 82 図	24号住居と出土遺物	83
第 23 図	3号住居と出土遺物	24	第 83 図	24号住居出土遺物	84
第 24 図	4号住居	25	第 84 図	24号住居出土遺物	85
第 25 図	4号住居と出土遺物	26	第 85 図	25号住居	86
第 26 図	5号住居	27	第 86 図	25号住居と出土遺物	87
第 27 図	5号住居と出土遺物	28	第 87 図	26号住居と出土遺物	88
第 28 図	5号住居出土遺物	29	第 88 図	27号住居	89
第 29 図	6号住居	30	第 89 図	27号住居	90
第 30 図	6号住居	31	第 90 図	27号住居と出土遺物	91
第 31 図	6号住居出土遺物	32	第 91 図	27号住居出土遺物	92
第 32 図	6号住居出土遺物	33	第 92 図	27号住居出土遺物	93
第 33 図	7号住居	34	第 93 図	28号住居	94
第 34 図	7号住居と出土遺物	35	第 94 図	28号住居	95
第 35 図	8号住居	36	第 95 図	28号住居出土遺物	96
第 36 図	8号住居出土遺物	37	第 96 図	29号住居	97
第 37 図	9号住居	38	第 97 図	29号住居	98
第 38 図	9号住居	39	第 98 図	29号住居出土遺物	99
第 39 図	9号住居出土遺物	40	第 99 図	30号住居	100
第 40 図	9号住居出土遺物	41	第100図	30号住居と出土遺物	101
第 41 図	10号住居	42	第101図	31号住居	102
第 42 図	10号住居出土遺物	43	第102図	31号住居出土遺物	103
第 43 図	11号住居	44	第103図	32号住居	104
第 44 図	11号住居と出土遺物	45	第104図	32号住居と出土遺物	105
第 45 図	11号住居出土遺物	46	第105図	33号住居	106
第 46 図	12号住居	47	第106図	33号住居と出土遺物	107
第 47 図	12号住居と出土遺物	48	第107図	33号住居出土遺物	108
第 48 図	13号住居	49	第108図	33号住居出土遺物	109
第 49 図	13号住居と出土遺物	50	第109図	33号住居出土遺物	110
第 50 図	13号住居出土遺物	51	第110図	34号住居	111
第 51 図	14号住居	52	第111図	34号住居と出土遺物	112
第 52 図	14号住居	53	第112図	35号住居	113
第 53 図	14号住居と出土遺物	54	第113図	35号住居と出土遺物	114
第 54 図	15号住居	55	第114図	35号住居出土遺物	115
第 55 図	15号住居	56	第115図	35号住居出土遺物	116
第 56 図	15号住居出土遺物	57	第116図	35号住居出土遺物	117
第 57 図	16号住居	58	第117図	36号住居	118
第 58 図	16号住居出土遺物	59	第118図	36号住居と出土遺物	119
第 59 図	17号住居	60	第119図	36号住居出土遺物	120
第 60 図	17号住居	61	第120図	37号住居	121

第121図	37号住居と出土遺物	122
第122図	38号住居	123
第123図	38号住居	124
第124図	38号住居出土遺物	125
第125図	38号住居出土遺物	126
第126図	39号住居	127
第127図	39号住居と出土遺物	128
第128図	39号住居出土遺物	129
第129図	40号住居	130
第130図	40号住居と出土遺物	131
第131図	41号住居と出土遺物	132
第132図	42号住居と出土遺物	133
第133図	43号住居	134
第134図	43号住居	135
第135図	43号住居と出土遺物	136
第136図	43号住居出土遺物	137
第137図	43号住居出土遺物	138
第138図	43号住居出土遺物	139
第139図	43号住居出土遺物	140
第140図	44号住居	141
第141図	44号住居	142
第142図	44号住居出土遺物	143
第143図	46号住居	144
第144図	46号住居と出土遺物	145
第145図	46号住居出土遺物	146
第146図	47号住居と出土遺物	147
第147図	48号住居	148
第148図	48号住居と出土遺物	149
第149図	49号住居	150
第150図	49号住居出土遺物	151
第151図	50号住居	152
第152図	50号住居と出土遺物	153
第153図	50号住居出土遺物	154
第154図	51号住居	155
第155図	51号住居と出土遺物	156
第156図	52号住居	157
第157図	53号住居	158
第158図	53号住居出土遺物	159
第159図	55号住居と出土遺物	160
第160図	56号住居と出土遺物	161
第161図	57号住居	162
第162図	57号住居と出土遺物	163
第163図	57号住居出土遺物	164
第164図	58号住居	165
第165図	58号住居と出土遺物	166
第166図	58号住居出土遺物	167
第167図	59号住居と出土遺物	168
第168図	59号住居出土遺物	169
第169図	60号住居と出土遺物	170
第170図	61号住居	171
第171図	61号住居出土遺物	172
第172図	62号住居	173
第173図	62号住居	174
第174図	62号住居出土遺物	175
第175図	62号住居出土遺物	176
第176図	64号住居	177
第177図	64号住居	178
第178図	64号住居出土遺物	179
第179図	65号住居	180
第180図	65号住居出土遺物	181
第181図	66号住居	182
第182図	66号住居と出土遺物	183

第183図	67号住居	184
第184図	67号住居と出土遺物	185
第185図	67号住居出土遺物	186
第186図	68号住居	187
第187図	68号住居と出土遺物	188
第188図	69号住居	189
第189図	69号住居と出土遺物	190
第190図	70号住居	191
第191図	70号住居出土遺物	192
第192図	71号住居	193
第193図	71号住居と出土遺物	194
第194図	71号住居出土遺物	195
第195図	71号住居出土遺物	196
第196図	72号住居	197
第197図	72号住居と出土遺物	198
第198図	73号住居	199
第199図	73号住居と出土遺物	200
第200図	74号住居	201
第201図	74号住居	202
第202図	74号住居出土遺物	203
第203図	75号住居と出土遺物	204
第204図	76号住居	205
第205図	76号住居と出土遺物	206
第206図	76号住居出土遺物	207
第207図	76号住居出土遺物	208
第208図	77号住居と出土遺物	209
第209図	78号住居と出土遺物	210
第210図	79号住居と出土遺物	211
第211図	80号住居	212
第212図	80号住居と出土遺物	213
第213図	81号住居	214
第214図	81号住居出土遺物	215
第215図	81号住居出土遺物	216
第216図	82号住居	217
第217図	82号住居出土遺物	218
第218図	83号住居と出土遺物	219
第219図	84号住居と出土遺物	220
第220図	85号住居	220
第221図	85号住居と出土遺物	221
第222図	86号住居	222
第223図	87号住居と出土遺物	222
第224図	88号住居	223
第225図	88号住居	224
第226図	88号住居出土遺物	225
第227図	1号掘立柱建物と出土遺物	227
第228図	2号掘立柱建物と出土遺物	228
第229図	土坑位置図	229
第230図	86・87・88・89号土坑	230
第231図	土坑	235
第232図	土坑	236
第233図	土坑	237
第234図	土坑	238
第235図	土坑	239
第236図	土坑	240
第237図	土坑	241
第238図	土坑出土遺物	242
第239図	土坑出土遺物	243
第240図	墓壇位置図	244
第241図	31号土坑(墓壇)と出土遺物	245
第242図	33号土坑(墓壇)と出土遺物	245
第243図	35号土坑(墓壇)と出土遺物	246
第244図	36号土坑(墓壇)と出土遺物	246

第245図	61号土坑（墓塚）と出土遺物	247
第246図	64号土坑（墓塚）と出土遺物	247
第247図	91号土坑（墓塚）と出土遺物	248
第248図	92号土坑（墓塚）と出土遺物	248
第249図	井戸位置図	249
第250図	井戸	250
第251図	井戸	251
第252図	井戸	252
第253図	井戸	253
第254図	井戸	254
第255図	井戸出土遺物	256
第256図	井戸出土遺物	257
第257図	井戸出土遺物	258
第258図	井戸出土遺物	259
第259図	井戸出土遺物	260
第260図	井戸出土遺物	261
第261図	井戸出土遺物	262
第262図	井戸出土遺物	263
第263図	溝位置図	264
第264図	溝	265
第265図	溝出土遺物	266
第266図	As-B 下水田	268
第267図	温め状遺構、1・2号溜井	271
第268図	1号溜井	273
第269図	1号溜井	274
第270図	2号溜井	275
第271図	3号溜井	276

第272図	温め状遺構出土遺物	277
第273図	瓦塔分布図	278
第274図	グリッド出土遺物	280
第275図	グリッド出土遺物	281
第276図	グリッド出土遺物	282
第277図	グリッド出土遺物	283
第278図	瓦分布図	284
第279図	グリッド出土遺物	285
第280図	手捏ね分布図	286
第281図	グリッド出土遺物	287
第282図	グリッド出土遺物	288
第283図	土錘分布図	289
第284図	グリッド出土遺物	290
第285図	グリッド出土遺物	292
第286図	グリッド出土遺物	293
第287図	グリッド出土遺物	294
第288図	グリッド出土遺物	295
第289図	グリッド出土遺物	296
第290図	グリッド出土遺物	297
第291図	グリッド出土遺物	298
第292図	グリッド出土遺物	299
第293図	グリッド出土遺物	300
第294図	グリッド出土遺物	301
第295図	グリッド出土遺物	302

付 図 上武国道二之宮谷地遺跡全体図

表 目 次

第1表	出土石器一覧表	11
第2表	住居一覧表	226
第3表	土坑一覧表	233
第4表	井戸一覧表	255
付	遺物観察表	363~443

第5表	水田区画一覧表	267
第6表	瓦塔	278
第7表	瓦塔出土一覧表	279

写真図版目次

- PL1 上空から見た遺跡周辺
PL2 上空から見た遺跡周辺
PL3 上空から見た遺跡周辺
PL4-1. 遺跡遠景（東から）
2. 遺跡遠景（東から）
PL5-1. 沖積地の土層（Bx-18）
2. 沖積地の土層（Cb-21）
PL6-1. Ba-2グリッド北壁断面
2. Au-1グリッド北壁断面
3. 暗色帯中落ち込み断面
4. 暗色帯中落ち込み
5. B Pの落ち込み確認状態
6. 5の土層断面
7. 遺物出土状態
8. 遺物出土状態
PL7-1. 縄文土器出土状態（Au-18・19グリッド）
出土遺物
PL8-1. 1号住居
2. 1号住居掘り方
3. 2号住居
4. 2号住居掘り方
5. 2号住居カマド
6. 2号住居遺物出土状態
PL9-1. 3号住居
2. 3号住居カマド
3. 3号住居カマド掘り方
4. 3号住居遺物出土状態
5. 3号住居掘り方
PL10-1. 4号住居
2. 4号住居掘り方
3. 4号住居カマド
4. 4号住居カマド掘り方
PL11-1. 5号住居
2. 5号住居掘り方
3. 5号住居カマド断面
4. 5号住居カマド
PL12-1. 6号住居
2. 6号住居遺物出土状態
3. 6号住居遺物出土状態
4. 6号住居カマド断面
5. 6号住居カマド
PL13-1. 7号住居
2. 7号住居掘り方
3. 7号住居カマド遺物出土状態
4. 7号住居カマド
PL14-1. 8号住居
2. 8号住居掘り方
3. 8号住居カマド
4. 8号住居カマド断面
PL15-1. 9号住居
2. 9号住居カマド
3. 9号住居カマド断面
4. 9号住居掘り方断面
5. 9号住居掘り方
PL16-1. 10号住居
2. 10号住居掘り方
3. 10号住居カマド
4. 10号住居遺物出土状態
PL17-1. 11号住居
2. 11号住居掘り方
3. 11号住居カマド遺物出土状態
4. 11号住居カマド
PL18-1. 12号住居
2. 12号住居掘り方
3. 12号住居カマド
4. 12号住居カマド掘り方
PL19-1. 13号住居
2. 13号住居掘り方
3. 13号住居カマド
4. 13号住居カマド掘り方
PL20-1. 14号住居
2. 14号住居掘り方
3. 14号住居カマド
4. 14号住居カマド掘り方
PL21-1. 15号住居
2. 15号住居掘り方
3. 15号住居カマド
4. 15号住居カマド掘り方
PL22-1. 16号住居
2. 16号住居掘り方
3. 16号住居カマド
4. 16号住居カマド掘り方断面
PL23-1. 17号住居
2. 17号住居カマド
3. 17号住居カマド断面
4. 17号住居遺物出土状態
5. 17号住居掘り方
PL24-1. 18号住居
2. 18号住居掘り方
PL25-1. 19号住居
2. 19号住居掘り方
3. 19号住居カマド
4. 19号住居カマド掘り方
PL26-1. 20号住居
2. 20号住居掘り方
3. 20号住居カマド
4. 20号住居カマド掘り方
PL27-1. 21号住居
2. 21号住居掘り方
PL28-1. 22号住居
2. 22号住居掘り方
3. 22号住居カマド遺物出土状態
4. 22号住居カマド
PL29-1. 23号住居
2. 23号住居カマド
3. 23号住居カマド掘り方
4. 23号住居カマド掘り方
5. 23号住居掘り方
PL30-1. 24号住居
2. 24号住居掘り方
3. 24号住居カマド掘り方
4. 24号住居カマド
5. 24号住居掘り方
PL31-1. 25号住居
2. 25号住居掘り方
3. 25号住居カマド

- 4. 25号住居カマド掘り方
- P L 32—1. 26号住居
 - 2. 26号住居カマド
 - 3. 26号住居カマド遺物出土状態
 - 4. 26号住居カマド掘り方
 - 5. 26号住居貯蔵穴
- P L 33—1. 27号住居
 - 2. 27号住居掘り方
- P L 34—1. 28号住居
 - 2. 28号住居
 - 3. 28号住居カマド
 - 4. 28号住居掘り方
 - 5. 28号住居カマド掘り方
- P L 35—1. 29号住居
 - 2. 29号住居
 - 3. 29号住居カマド
 - 4. 29号住居掘り方
 - 5. 29号住居カマド掘り方
- P L 36—1. 30号住居
 - 2. 30号住居遺物出土状態
 - 3. 30号住居遺物出土状態
 - 4. 30号住居カマド
 - 5. 30号住居カマド掘り方
- P L 37—1. 31号住居
 - 2. 31号住居掘り方
- P L 38—1. 32号住居
 - 2. 32号住居掘り方
 - 3. 32号住居貯蔵穴
 - 4. 32号住居遺物出土状態
- P L 39—1. 33号住居
 - 2. 33号住居カマド
 - 3. 33号住居遺物出土状態
 - 4. 33号住居カマド掘り方
 - 5. 33号住居掘り方
- P L 40—1. 34号住居
 - 2. 34号住居掘り方
 - 3. 34号住居カマド
 - 4. 34号住居カマド掘り方
- P L 41—1. 35号住居遺物出土状態
 - 2. 35号住居遺物出土状態
 - 3. 35号住居カマド遺物出土状態
 - 4. 35号住居遺物出土状態
 - 5. 35号住居遺物出土状態
- P L 42—1. 35号住居
 - 2. 35号住居カマド遺物出土状態
 - 3. 35号住居カマド
 - 4. 35号住居カマド掘り方
 - 5. 35号住居掘り方
- P L 43—1. 36号住居
 - 2. 36号住居掘り方
 - 3. 36号住居遺物出土状態
 - 4. 36号住居カマド掘り方
- P L 44—1. 37号住居
 - 2. 37号住居カマド
 - 3. 37号住居遺物出土状態
 - 4. 37号住居掘り方
 - 5. 37号住居カマド掘り方
- P L 45—1. 38号住居
 - 2. 38号住居遺物出土状態
 - 3. 38号住居遺物出土状態
 - 4. 38号住居遺物出土状態
 - 5. 38号住居遺物出土状態
- P L 46—1. 38号住居
 - 2. 38号住居掘り方
 - 3. 38号住居カマド
 - 4. 38号住居カマド掘り方
- P L 47—1. 39号住居
 - 2. 39号住居掘り方
- P L 48—1. 40号住居
 - 2. 40号住居掘り方
 - 3. 40号住居カマド
 - 4. 40号住居掘り方断面
- P L 49—1. 41号住居
 - 2. 42号住居
 - 3. 41号住居掘り方
 - 4. 42号住居掘り方
- P L 50—1. 43号住居
 - 2. 43号住居掘り方
- P L 51—1. 44号住居
 - 2. 44号住居掘り方
 - 3. 44号住居カマド
 - 4. 44号住居カマド掘り方
- P L 52—1. 46号住居
 - 2. 46号住居遺物出土状態
 - 3. 46号住居カマド断面
 - 4. 46号住居遺物出土状態
 - 5. 46号住居掘り方
- P L 53—1. 47号住居
 - 2. 47号住居掘り方
 - 3. 47号住居カマド
 - 4. 47号住居遺物出土状態
- P L 54—1. 48号住居
 - 2. 48号住居掘り方
 - 3. 48号住居カマド
 - 4. 48号住居遺物出土状態
- P L 55—1. 49号住居
 - 2. 49号住居掘り方
 - 3. 49号住居遺物出土状態
 - 4. 46号住居カマド掘り方
- P L 56—1. 50号住居
 - 2. 50号住居掘り方
- P L 57—1. 51号住居
 - 2. 51号住居掘り方
 - 3. 51号住居断面
 - 4. 51号住居カマド断面
- P L 58—1. 53号住居
 - 2. 53号住居掘り方
 - 3. 53号住居カマド
 - 4. 53号住居カマド掘り方
- P L 59—1. 55号住居
 - 2. 55号住居カマド
 - 3. 55号住居掘り方
 - 3. 56号住居
- P L 60—1. 57号住居
 - 2. 57号住居カマド
 - 3. 57号住居カマド遺物出土状態
 - 4. 57号住居カマド掘り方
 - 5. 57号住居掘り方
- P L 61—1. 58号住居
 - 2. 58号住居
 - 3. 58号住居カマド
 - 4. 58号住居掘り方
 - 5. 58号住居カマド掘り方
- P L 62—1. 59号住居

- 2. 59号住居カマド掘り方
- 3. 60号住居掘り方
- 4. 60号住居
- PL63—1. 61号住居
- 2. 61号住居掘り方
- 3. 61号住居カマド
- 4. 61号住居カマド掘り方
- PL64—1. 62号住居
- 2. 62号住居カマド
- 3. 62号住居遺物出土状態
- 4. 62号住居掘り方
- 5. 62号住居カマド掘り方
- PL65—1. 64号住居
- 2. 64号住居カマド
- 3. 64号住居カマド断面
- 4. 64号住居掘り方
- 5. 64号住居カマド掘り方
- PL66—1. 65号住居
- 2. 65号住居掘り方
- 3. 65号住居カマド
- 4. 65号住居カマド掘り方
- PL67—1. 66号住居
- 2. 67号住居
- PL68—1. 68号住居
- 2. 68号住居掘り方
- 3. 68号住居カマド断面
- 4. 69号住居
- 5. 69号住居掘り方
- 6. 69号住居遺物出土状態
- PL69—1. 70号住居
- 2. 74号住居
- 3. 74号住居掘り方
- 4. 74号住居カマド
- 5. 75号住居
- 6. 75号住居カマド
- PL70—1. 71号住居
- 2. 71号住居掘り方
- 3. 71号住居カマド
- 4. 71号住居遺物出土状態
- PL71—1. 72号住居
- 2. 72号住居掘り方
- 3. 72号住居カマド
- 4. 72号住居カマド掘り方
- PL72—1. 73号住居
- 2. 73号住居掘り方
- 3. 73号住居カマド
- 4. 73号住居カマド掘り方
- PL73—1. 76号住居
- 2. 76号住居掘り方
- 3. 76号住居カマド
- 4. 76号住居カマド掘り方
- PL74—1. 77号住居
- 2. 77号住居掘り方
- 3. 78号住居
- 4. 78号住居掘り方
- 5. 79号住居
- 6. 79号住居掘り方
- PL75—1. 80号住居
- 2. 80号住居掘り方
- 3. 81号住居
- 4. 81号住居掘り方
- 5. 82号住居
- 6. 82号住居掘り方
- PL76—1. 83号住居
- 2. 83号住居掘り方
- 3. 84号住居
- 4. 85号住居
- 5. 85号住居カマド
- 6. 85号住居掘り方
- PL77—1. 86号住居
- 2. 86号住居掘り方
- 3. 87号住居
- 4. 87号住居カマド
- 5. 88号住居
- 6. 88号住居掘り方
- PL78—1. 1号掘立柱建物
- 2. 2号掘立柱建物
- PL79—1. 4号土坑
- 2. 4号土坑遺物出土状態
- 3. 2号土坑
- 4. 5号土坑
- 5. 27号土坑
- 6. 32号土坑
- 7. 43号土坑
- 8. 44号土坑
- PL80—1. 45号・46号土坑
- 2. 47号土坑
- 3. 49号土坑
- 4. 50号土坑
- 5. 51号土坑
- 6. 52号土坑
- 7. 70号～85号土坑
- 8. 70号～85号土坑
- PL81—1. 86号・87号・88号・89号土坑
- 2. 87号土坑出土遺物
- 3. 87号土坑土層断面
- 4. 88号土坑土層断面
- 5. 87号土坑
- 6. 88号土坑
- 7. 98号土坑
- 8. 99号土坑
- PL82—1. 31号土坑(墓墳)
- 2. 31号土坑(墓墳)
- 3. 33号土坑(墓墳)
- 4. 33号土坑(墓墳)
- 5. 35号土坑(墓墳)
- 6. 35号土坑(墓墳)
- 7. 36号土坑(墓墳)
- 8. 36号土坑(墓墳)
- PL83—1. 61号土坑(墓墳)
- 2. 61号土坑(墓墳)
- 3. 64号土坑(墓墳)
- 4. 64号土坑(墓墳)
- 5. 91号土坑(墓墳)
- 6. 91号土坑(墓墳)
- 7. 92号土坑(墓墳)
- 8. 92号土坑(墓墳)
- PL84—1. 1号・8号井戸
- 2. 2号井戸
- 3. 3号井戸
- 4. 4号井戸
- 5. 5号井戸
- 6. 6号井戸
- 7. 7号井戸

	8. 12号井戸	P L 107	出土遺物
P L 85—1.	9号井戸	P L 108	出土遺物
	2. 9号井戸	P L 109	出土遺物
	3. 10号井戸	P L 110	出土遺物
	4. 10号井戸	P L 111	出土遺物
	5. 14号井戸	P L 112	出土遺物
	6. 15号井戸	P L 113	出土遺物
	7. 16号井戸	P L 114	出土遺物
	8. 17号井戸	P L 115	出土遺物
P L 86—1.	18号井戸	P L 116	出土遺物
	2. 19号井戸	P L 117	出土遺物
	3. 20号井戸	P L 118	出土遺物
	4. 21号井戸	P L 119	出土遺物
	5. 22号井戸	P L 120	出土遺物
	6. 23号井戸	P L 121	出土遺物
	7. 25号井戸	P L 122	出土遺物
	8. 26号井戸	P L 123	出土遺物
P L 87—1.	27号井戸	P L 124	出土遺物
	2. 28号井戸	P L 125	出土遺物
	3. 29号井戸	P L 126	出土遺物
	4. 30号井戸	P L 127	出土遺物
	5. 33号井戸	P L 128	出土遺物
	6. 34号井戸	P L 129	出土遺物
	7. 35号井戸	P L 130	出土遺物
	8. 36号井戸	P L 131	出土遺物
P L 88—1.	As-B 下水田 (東から)	P L 132	出土遺物
	2. As-B 下水田 (西から)	P L 133	出土遺物
	3. As-B 下水田 (東から)	P L 134	出土遺物
	4. As-B 下水田 (南から)	P L 135	出土遺物
	5. As-B 下水田 (西から)	P L 136	出土遺物
P L 89—1.	As-B 下水田 (南から)	P L 137	出土遺物
	2. As-B 下水田 B区 (東から)	P L 138	出土遺物
	3. As-B 下水田 B区 (南から)	P L 139	出土遺物
	4. As-B 下水田 B区 (西から)	P L 140	出土遺物
	5. As-B 下水田 C区 (西から)	P L 141	出土遺物
P L 90—1.	1号溜井 (検出状況)	P L 142	出土遺物
	2. 1号溜井 (掘り方)	P L 143	出土遺物
	3. 1号溜井 (井戸部・石敷部)	P L 144	出土遺物
	4. 1号溜井及び温め状遺構	P L 145	出土遺物
P L 91—1.	3号溜井	P L 146	出土遺物
	2. 3号溜井調査状況	P L 147	出土遺物
P L 92—1.	温め状遺構	P L 148	出土遺物
	2. 温め状遺構	P L 149	出土遺物
	3. 温め状遺構 (東から)	P L 150	出土遺物
	4. 温め状遺構 (低地部)	P L 151	出土遺物
	5. 温め状遺構 (降雨後)	P L 152	出土遺物
P L 93	出土遺物	P L 153	出土遺物
P L 94	出土遺物	P L 154	出土遺物
P L 95	出土遺物	P L 155	出土遺物
P L 96	出土遺物	P L 156	出土遺物
P L 97	出土遺物	P L 157	出土遺物
P L 98	出土遺物	P L 158	出土遺物
P L 99	出土遺物	P L 159	出土遺物
P L 100	出土遺物	P L 160	電子顕微鏡写真 (1)
P L 101	出土遺物	P L 161	電子顕微鏡写真 (2)
P L 102	出土遺物	P L 162	15号井戸出土木製品
P L 103	出土遺物	P L 163	31号土坑(墓墳)出土人骨
P L 104	出土遺物	P L 164	33号土坑(墓墳)出土人骨
P L 105	出土遺物	P L 165	61号土坑(墓墳)出土人骨
P L 106	出土遺物	P L 166	64号・91号土坑(墓墳)出土人骨

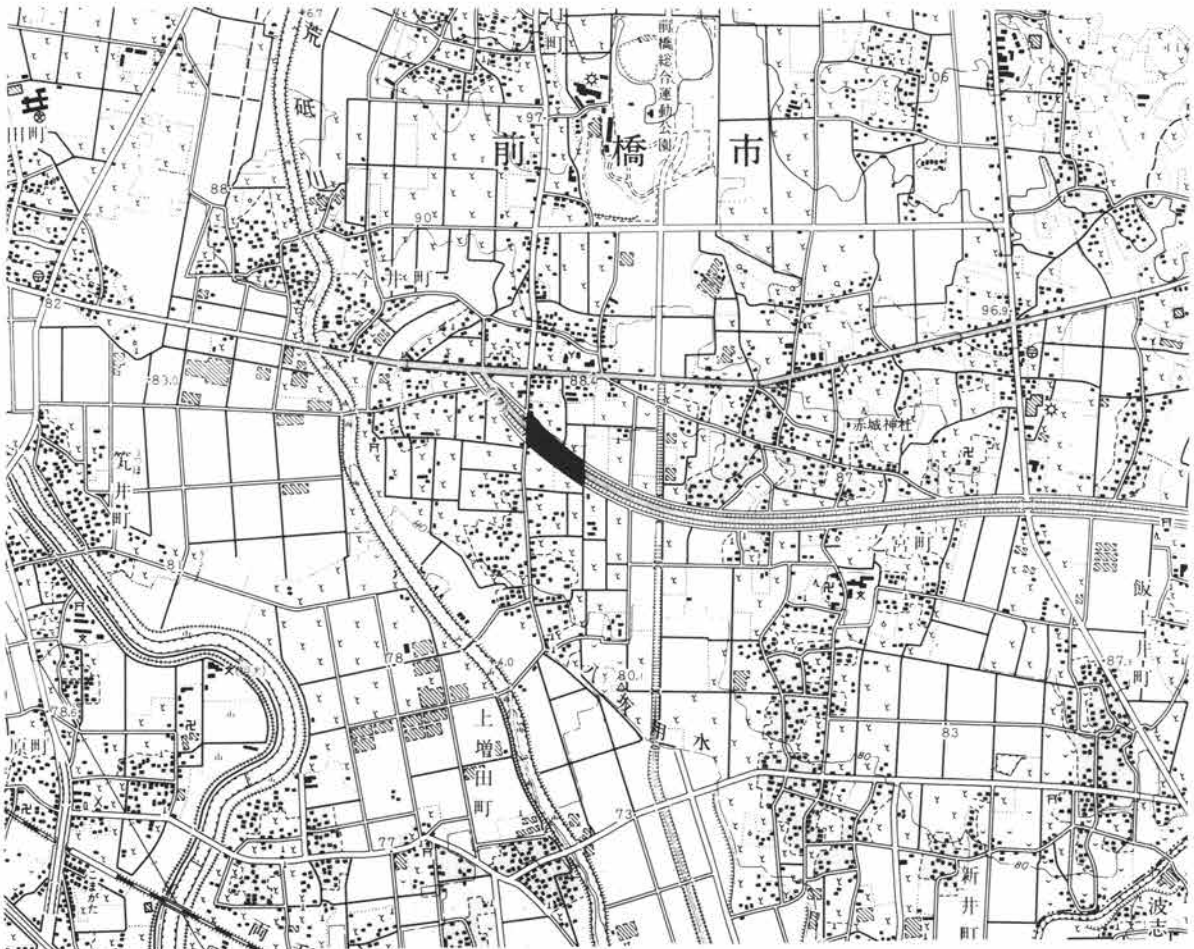
I 発掘調査と遺跡の概要

1 調査に至る経緯

昭和46（1971）年、建設省は国道17号の交通混雑緩和のため、上武道路（国道17号バイパス）の建設計画を発表した。計画路線は、埼玉県熊谷市で国道17号と分岐し、利根川に架橋して群馬県新田郡尾島町・新田町、佐波郡境町・東村・赤堀町、伊勢崎市、前橋市、勢多郡富士見村を経て前橋市田口町で再び国道17号に接続するものであった。この計画に伴い埋蔵文化財と開発諸事業の調整を図ることを目的に、群馬県教育委員会は予定路線内の埋蔵文化財分布調査を昭和46年度に実施している。同年11月には通過路線の正式発表がなされ、昭和48年4月1日付で「一般国道17号線（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書」が建設省

と県教育委員会の間で締結されている。その後、調査体制、用地問題などの準備段階を経て具体的に発掘調査に着手したのは昭和49年1月以降となっている。

昭和53（1978）年には、増大する埋蔵文化財の調査・整理および資料管理・活用などに対応するため、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が設立されることになる。同年以降、上武道路に伴う調査についても群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施することになり現在に至っている。その間、調査体制の拡充・工事計画の進捗など継続的に調査が進められ、昭和63（1988）年には前橋市今井町国道50号線までの発掘調査が終了し、平成元（1989）年3月3日には、尾島町の国道354号線から国道50号線までが供用開始となっている。このような状況の中、二之宮谷地遺跡の調査は昭和61（1986）年9月から昭和62（1987）年8月に実施されている。



第1図 二之宮谷地遺跡の位置（1/2500 大胡）

1 発掘調査と遺跡の概要

2 遺跡の位置と地形

二之宮谷地遺跡は、前橋市の市街地から10km程度東に所在する。この地域は、前橋市の市街地から10km程度東にあたる農村地帯である。近年は、ほ場整備事業や団地造成などをはじめとした大規模開発が盛んに実施され、これに伴う発掘調査も広範囲に展開している。

この遺跡は、広く裾野を広げた赤城山の南麓、標高85m前後の地点にある。赤城山は、第三紀の複合成層火山であり、山体にのるローム層中には、板鼻黄色軽石層 (YP)、板鼻褐色軽石層 (BP)、八崎軽石層 (HP)、などの堆積が確認され、裾野では安定したローム台地を形成している。これらの台地は、山麓を流下する中小河川や湧水によって開析され、帯状の沖積地が形成されている。

第2図は、上武道路関連および周辺の発掘調査の成果をもとに作成されたこの地域の主要地質断面図である。ローム台地は榛名八崎軽石層 (Hr-HP) 以上をのせる洪積台地でゆるやかな東側斜面に比較して西側斜面は急傾斜となっている。特に河川を伴う沖積地では、この傾向が顕著である。宮川が形成した沖積地には砂壤土の堆積が認められ、侵食されなかった中央部分が微高地となっている。この微高地

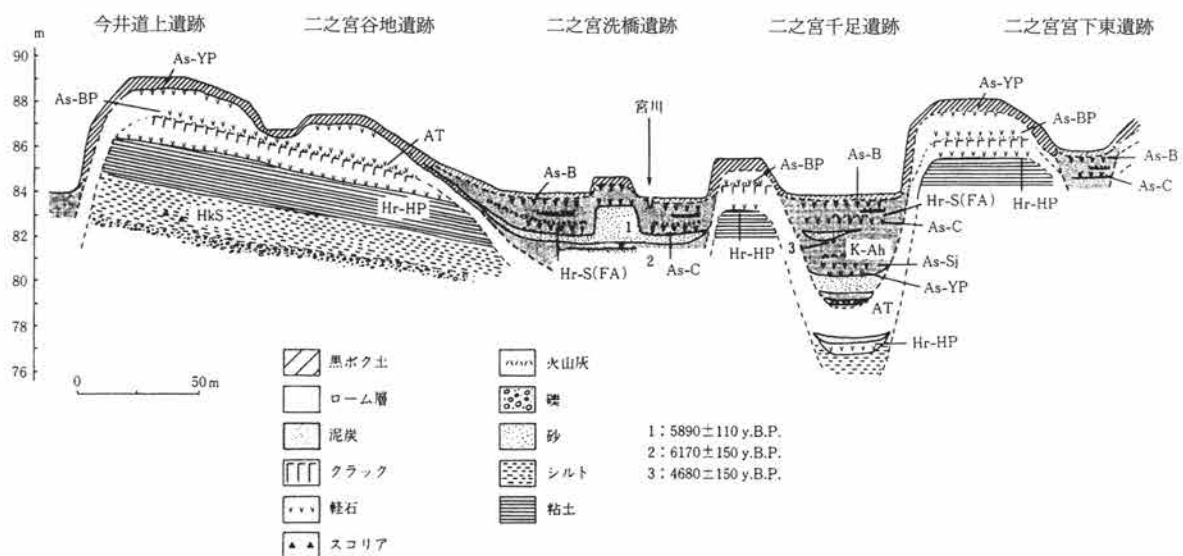
にある二之宮洗橋遺跡、荒砥洗橋遺跡では砂壤土上から縄文時代後期の土器が出土し、砂壤土下からも縄文時代の遺物が検出されている。このような砂壤土層については、飯土井二本松遺跡でも確認されている。ここでは縄文時代早期、前期、中期に堆積した砂壤土層の存在が観察されている。

このことから、この地域では、縄文時代早期から中期にかけて複数回の大規模な山体崩落があったことがわかりつつある。また、宮川遺跡や荒砥島原遺跡が立地する微高地も、この時期に形成された可能性が高いといえよう。

3 周辺の遺跡

赤城南麓にあたるこの地域は、荒砥南部および北部ほ場整備事業や上武道路などの大規模開発が進行している。埋蔵文化財の発掘調査もこれに伴う事前調査として多くの遺跡を確認、調査がおこなわれているが、その大半は調査終了とともに工事が実施され消滅に至っている。しかし、中には国指定となった女堀のほか、荒砥荒子遺跡など少例ながら保存された遺跡もみられる。

赤城山の南麓や西麓のローム台地には旧石器時代の遺跡が数多く分布しており、発掘調査も進んでき



第2図 上武道路沿いの地質断面図 (群馬県史通史編より転載)

ている。今回の調査でも、出土量はさほど多くないものの旧石器時代の存在が確認されている。また、西接する今井道上道下遺跡でも、比較的まとまった資料が得られている。

縄文時代については、断片的ながら良好な資料が調査されつつある。とくに赤城山南麓地域には、河川作用による砂壤土性の微高地がローム台地に付随して形成される地点が多い。先述のように、このような微高地は赤城山の山体崩落土が再堆積することにより形成されたものと考えられている。東接する二之宮洗橋遺跡でも、この砂壤土層および縄文時代の遺物が確認され、この地域の遺跡立地を考える際の重要な資料を提供している。

古墳時代以降、この地域には多数の遺跡が分布している。集落の規模も拡大していくが、同時に主要な生産域である水田も面的広がりをみせていく。特に注目される点は、水田拡大に伴う用水確保を目的とした溜井の存在であろう。荒砥天之宮遺跡の調査

によってその存在が確認され、農業発達史の中に位置づけられた。この調査以降、各地で古墳時代の溜井も検出され、時代動向がより具体的に解明されつつある。

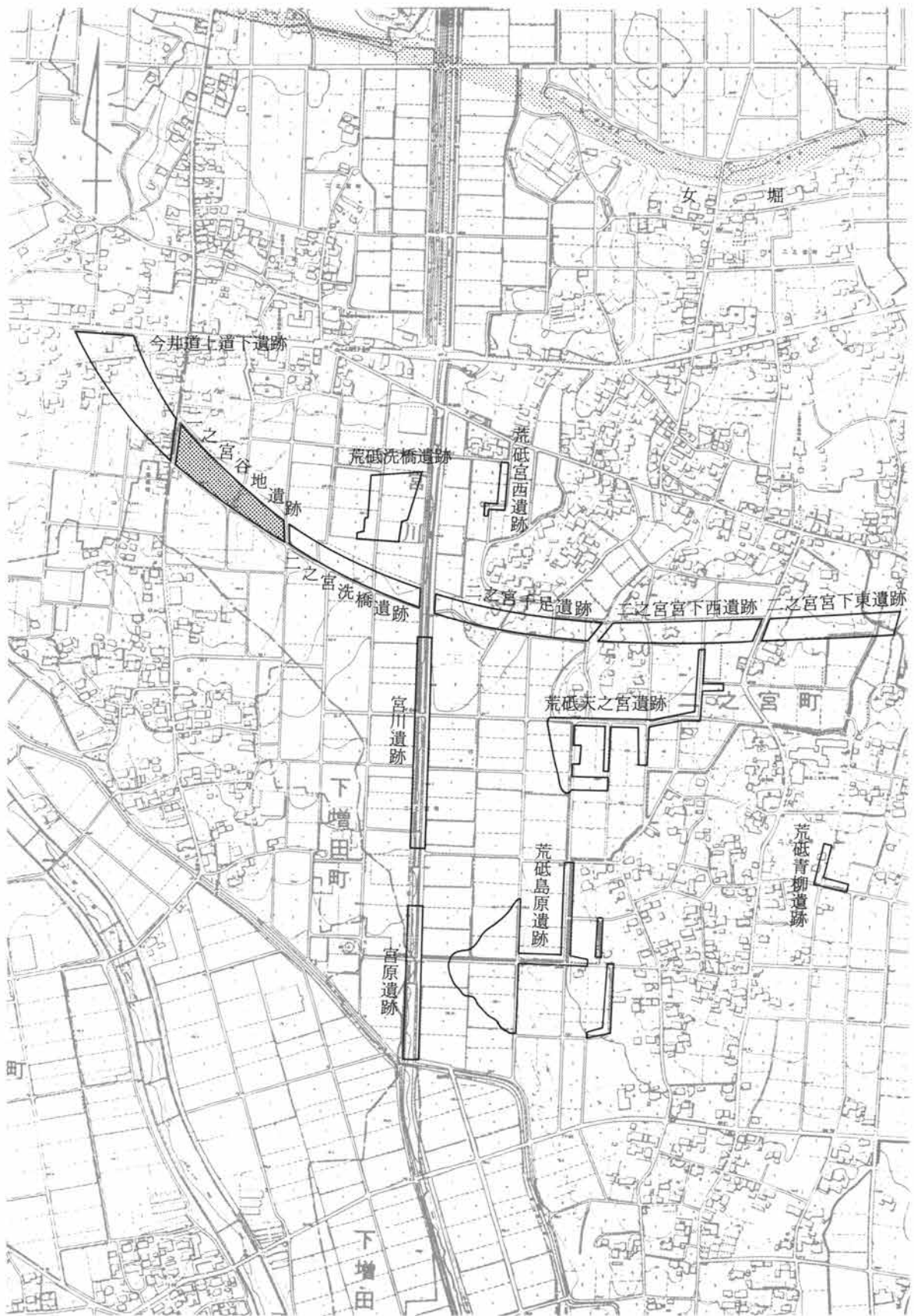
このことは、奈良・平安時代にも継続的に引き継がれ、溜井から河川からの灌漑用水の確保および未開拓地への進出へと展開していく。

二之宮谷地遺跡でも、古墳時代に溜井が掘削され開田している。さらに、当初の溜井とは別の用水確保をしながら、生産域を徐々に拡大し、平安時代へと継続しているのである。そして、1108年(天仁元年)の浅間山の噴火に伴う軽石の堆積により、水田は埋没し、放棄されていく。

女堀は、この火山災害による水田復旧を目的とした用水堀であった。まさに、古代から中世にかけての激動の時代動向が、この地域の歴史からも読み取れるようになってきている。

遺跡名	弥生時代後期		古墳時代前期			古墳時代後期			奈良時代		平安時代		中世		備考
	集落	耕地	集落	耕地	墓	集落	耕地	墓	集落	耕地	集落	耕地	集落	耕地	
荒砥宮川	○	石包丁	○	畠	○		○	○	○		○	B水田			縄文遺物(後期前半)
// 島原	○		○		○		○	○	○		○	B水田			
// 宮原			○					○							
// 洗橋							○		○		○	(B水田)			
// 宮西							○		○		○				
// 天之宮							○	溜井	○	鉄鎌・溜井	○	B水田 溜井			縄文遺物(草創期後半~中期末)
// 青柳									○		○				
二之宮谷地							○		○	溜井	○	B水田			旧石器1面(AT下) 縄文遺物(前期後半~中期末)
// 洗橋			土器								○	B水田			縄文遺物(後期前半)
// 千足			土器	C水田			水田		○	水田	○	B水田	井戸		旧石器2面(AT下・SP下) 縄文遺物(早期末・前期末) 遺物(草創期後半~後期)
// 宮下西							○		○		○		館址		旧石器土坑(?) 縄文遺物(中期)
// 宮下東							木製農具			水田・溜井 木製農具	○	B水田	//	水田	縄文遺物(前期後半)
// 宮東			土器								○	B水田・畠	//		縄文遺物(中期後半)

I 発掘調査と遺跡の概要



第3図 周辺の遺跡 (1/10,000)

II 発掘調査の記録

1 調査の方法

二之宮谷地遺跡は東接して二之宮洗橋遺跡、北西に今井道上・道下遺跡に挟まれた延長約260m、面積13500m²を対象としている。

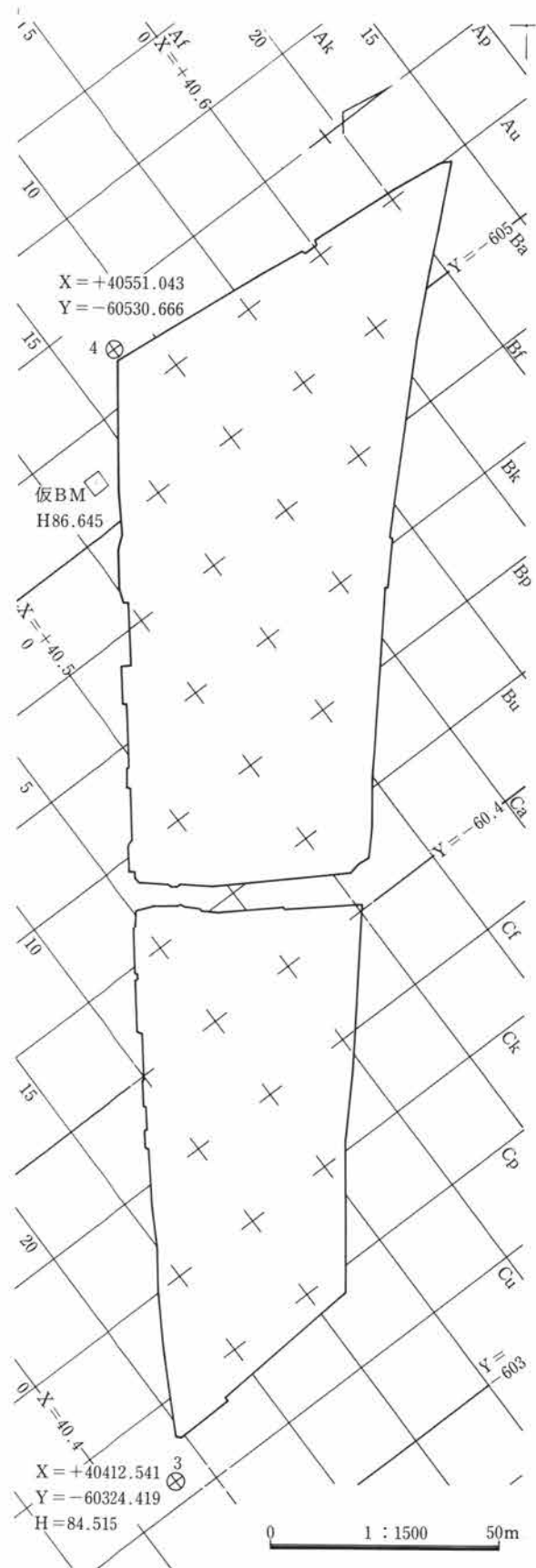
昭和60（1985）年に遺跡の内容および調査範囲の確定を目的として試掘調査を実施し、上記調査対象面積が確定している。この試掘調査により、調査対象地のおよそ2分の1強をローム台地が占め、その北側部分はテフラ層を挟む沖積低地が存在することが確認された。さらにこの部分は近年の開墾により台地部を切り土し、低地部に客土していることもあわせて確認されている。

台地部には住居群をはじめ土坑、溝などの各種遺構が集中的に存在しており、これら遺構は表土下30cm～50cmのローム層上面において確認される。台地部ではテフラ層は認められず、表土層については掘削用重機にて除去しながら遺構検出にあたるものとした。

沖積低地については浅間Bテフラ（As-B）の良好な堆積を認めているため同テフラ上面までの土層の除去後にAs-B下埋没水田の検出を行うものとした。さらに下位には榛名-渋川テフラ（Hr-S）および浅間C軽石（As-C）の堆積層も確認されているため、As-B 下水田の検出につとめるとともに、各テフラ下における水田耕作の可能性を追及するためあわせてプラントオパール分析も実施している。

a. グリッドの設定

グリッドの設定はすでに上武道路に伴う発掘調査で実施してきたように国家座標を基軸に設置している。二之宮谷地遺跡では北西隅を原点とし、x軸にアルファベット小文字（西から東へa、b、c…y）、y軸に数字（北から南へ1、2、3…24）を付している。1グリッド4m方とし、100m単位で大グリッドを設定し、各区を西からA、B、C（アルファベット大文字）と呼称する。グリッド名称はこの大グリッ



第4図 グリッド設定図

II 発掘調査の記録

ド、x軸、y軸の三者併記し、例えばAa-1、Ba-1、Ca-1というように表す。(第4図)

なお、この報告書には直接関係することではないが、発掘調査時におけるグリッド遺物の取り上げおよび遺物注記に際してアルファベット表記の誤記を避けるため、小文字アルファベットについては大文字を使用している。あわせて報告しておく。

b. 調査計画

調査は台地部A区から順次着手し、表土掘削および遺構確認を行う。沖積地についてはAs-B以下のテフラ層および土層状態の把握のため調査区北壁部にサブトレンチをいれる。

竪穴住居および各遺構の重複が認められた場合については、平面確認もしくはサブトレンチにより切り合い状態を土層により確認し、新遺構を調査後、旧遺構の調査を行う。

遺構埋没土層は、基本的に遺構中央部に十字に土層観察用ベルトを設定しその状態を記録するが、土坑、溝など小規模な遺構については一方のみの記録とする。

遺構名称は、住居、土坑、溝、掘立柱建物など遺構種別毎に1号・・・2号・・・と呼称する。すなわち、遺構番号は調査順を示すものであり、時間的前後関係を示すものではない。

記録は、住居をはじめとして各遺構とも縮尺20分の1にて図化し、住居カマドおよび小規模遺構については10分の1とする。なお、平面実測は平板を使用し、図化に際しての基線はグリッドと一致させる。

写真は、モノクロ写真を6×7判および35ミリ一眼レフ、カラー(リバーサル)を35ミリ一眼レフにて撮影する。

調査期間は昭和61(1986)年9月1日から着手し、延べ11カ月間の工程が策定されている。

2 調査の経過

二之宮谷地遺跡の発掘調査は、飯土井中央遺跡(JK30)の調査終了後に引き続き着手している。

発掘調査は昭和61(1986)年9月1日より実施し、昭和62(1987)年8月13日に終了している。

なお、前記のようにこの発掘調査に先行して昭和60(1985)年には試掘調査が行われて、この遺跡の範囲が確定されている。

調査経過は調査日誌に記録しているが、ここではこの日誌をもとに月毎の経過を報告し、開始から終了までの内容を明らかにしておきたい。

9月 調査事務所設営および発掘調査準備。遺構西側にあたるA区より表土掘削を行いながら、遺構確認作業に着手する。住居、土坑、溝などの落ち込みを確認する。あわせてこの時点で遺構種別毎に番号をつける。中旬以降グリッド杭の設定を行い、住居をはじめとして遺構の調査にも着手する。調査は原・岩崎・金井が担当している。

10月 遺構確認作業を継続しながら、遺構調査を進める。住居は遺存状況があまり良好ではなく、カマドについてはいずれも下部のみで天井部、側壁部はほとんど残存していない。低地部も調査着手する。

11月 引き続き住居を主とした遺構調査を行う。さらに低地部の調査にも着手する。

12月 台地部では住居、土坑、溝などの遺構確認および調査を継続する。初旬には遺跡全景について航空写真の撮影を行う。

1月 調査継続。

2月 7日・8日の2日間県民一般を対象とした遺跡説明会を開催する。調査継続。

3月 低地部埋没水田の調査、実測および溜井などの調査を行う。

4月 今月から原・神谷・金井が担当し調査継続する。

5月 As-B 下水田の耕土下の調査を行い温め状遺構を検出する。

6月 低地部はHr-SおよびAs-C下の調査を実施する。このテフラ下には水田遺構のついては確認されない。

7月 調査継続。

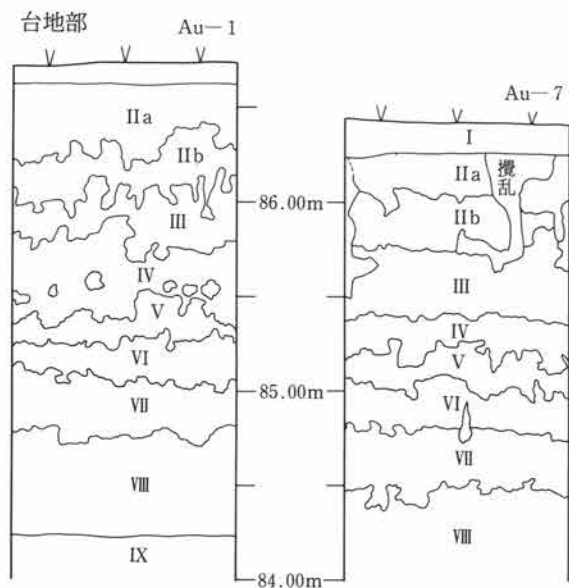
8月 引き続き調査を行いながら、13日にはすべての作業を終了した。

3 遺跡の基本層序

遺跡は台地部と低地である沖積地が含まれる。台地部については近年の開墾に伴い表土層の掘削が行われ、さらにこの掘削土が低地部分に客土されている。このため台地上では耕作土である表土下がほぼローム面となっており、ローム層堆積以後の黒色土中には火山灰もしくは軽石層の検出は行われていない。このため台地上での遺構確認はすべて表土下のローム上面で行っており、住居をはじめ各遺構についてテフラとの関係を示す検出例は得られていない。台地では八崎軽石層(Hr-HP)以降の上部ロームをのせ、安定した土層状態を示している。この層序は赤城山南麓にほぼ共通したものと見え、調査区内ではほとんど変化は認められず、一定した堆積状態が観察されている。土層はA区における柱状図を示しているが、八崎軽石層(Hr-HP)以下の土層状態については、「IV-2珪藻分析及び花粉分析」を参照願いたい。

沖積地では表層に台地部からの客土が厚く堆積し、ほぼ平坦面を形成し現状は一帯が畑地となっている。この客土下には白色軽石粒を含む黒褐色土および灰黒色土が堆積し、その下層には上位から1108年浅間山給源の浅間Bテフラ(As-B)、6世紀初頭榛名山給源の榛名-渋川テフラ(Hr-S)および4世紀中葉浅間山給源の浅間C軽石(As-C)の3枚のテフラの堆積が確認されている。このうちAs-Bは層厚もあり、また下位のテフラとの間層も広いため明瞭に検出できるが、Hr-SとAs-Cについては両者の層間が狭く、とくに平面的な広がりでは重複するほど接する部分も認められる。

なお、遺構面として各テフラ埋没面を調査したが、As-B下に埋没水田が検出されたほか、Hr-SおよびAs-C下には水田は認められていない。これについては「IV-1プラントオパール分析」とも一致した結果を得ている。

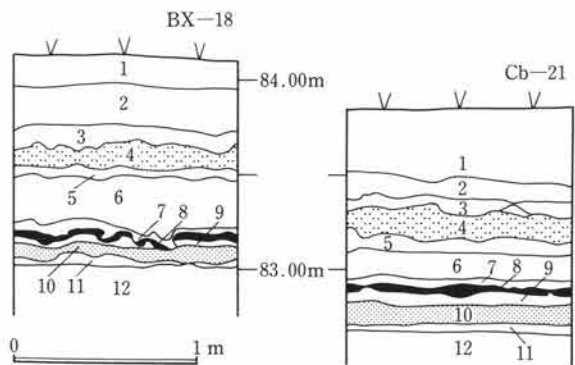


- 台地部土層
- I 表土 耕作土
 - II 黄褐色軟質ローム IIaは風化が進みややや暗い色調となる。
 - III 黄褐色硬質ローム As-SPを混入する。
 - IV 暗褐色硬質ローム As-BPをブロック状に混入する。
 - V 赤褐色軟質ローム 粘土質の土層でやや柔らかい。
 - VI 暗褐色軟質ローム 「暗色帯」上部に相当する。
 - VII 暗褐色軟質ローム VIよりやや暗く「暗色帯」下部に相当する。
 - VIII 暗褐色硬質ローム 粘性の強い土層で黒色鉱物を含む。
 - IX 榛名-八崎軽石 (Hr-HP)

低地部

低地部土層

- 1 客土
- 2 黒褐色土 白色軽石粒を含む。
- 3 灰黒色土 As-Bを混入する粘性をもつ土層。
- 4 浅間Bテフラ (As-B)
- 5 黒色粘質土 II期水田耕土。
- 6 黒褐色土粘質土 I期水田耕土。
- 7 黒色粘質土
- 8 榛名-渋川テフラ (Hr-S)
- 9 黒灰色粘質土
- 10 浅間C軽石 (As-C)
- 11 黒灰色粘質土
- 12 暗灰褐色土 シルト質の土層。



第5図 基本土層図

II 発掘調査の記録

4 調査した遺構と遺物

(1) 旧石器時代

1 概要

二之宮谷地遺跡では、台地部でAT下層の暗色帯から5点の石器が出土している。それらはほとんどが単独の出土で、ブロックとしての広がりはなかった。

2 出土石器 (第7図1～5 PL. 93)

AT下層からは、次の5点の石器が出土している。すべて単独の母岩別資料で、遺跡外からの搬入品である。

1は黒色安山岩製の左右両側縁が平行する石刃で、端部はヒンジフラクチャーを起こしている。打面は自然面で、頭部調整が施される。背面は主要剥離面と同一加撃方向の4枚の剥離面で構成されており、石核には石刃技法が適用され、これによって生産されたことを示唆する。

2は黒色頁岩製の幅広の石刃で、端部は尖頭形となる。打面部は欠損している。背面は主要剥離面と同一加撃方向の2枚の剥離面で構成され、中央部にその稜線が走る。

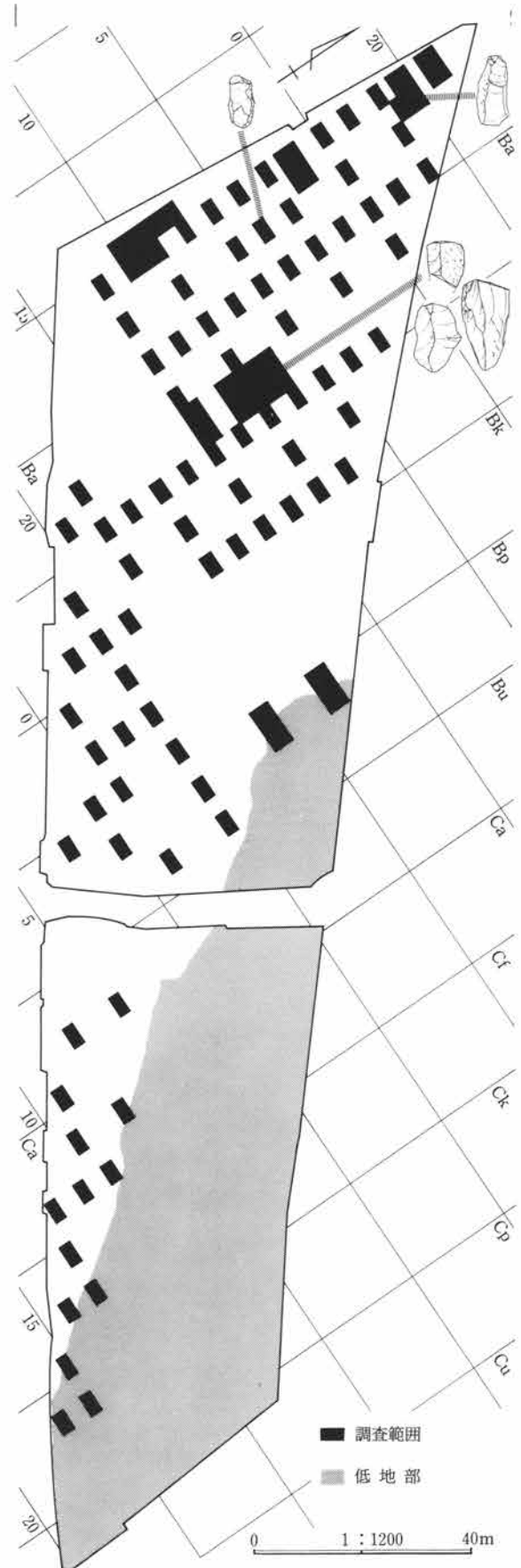
3は黒色頁岩製の石刃で、打面部を欠損している。風化が著しいため、一部剥離面が判然としない箇所がある。

4は黒色安山岩製の縦長剥片で、端部を欠損する。打面は1枚の平坦な剥離面で構成される。打面部に最大幅を持っている。

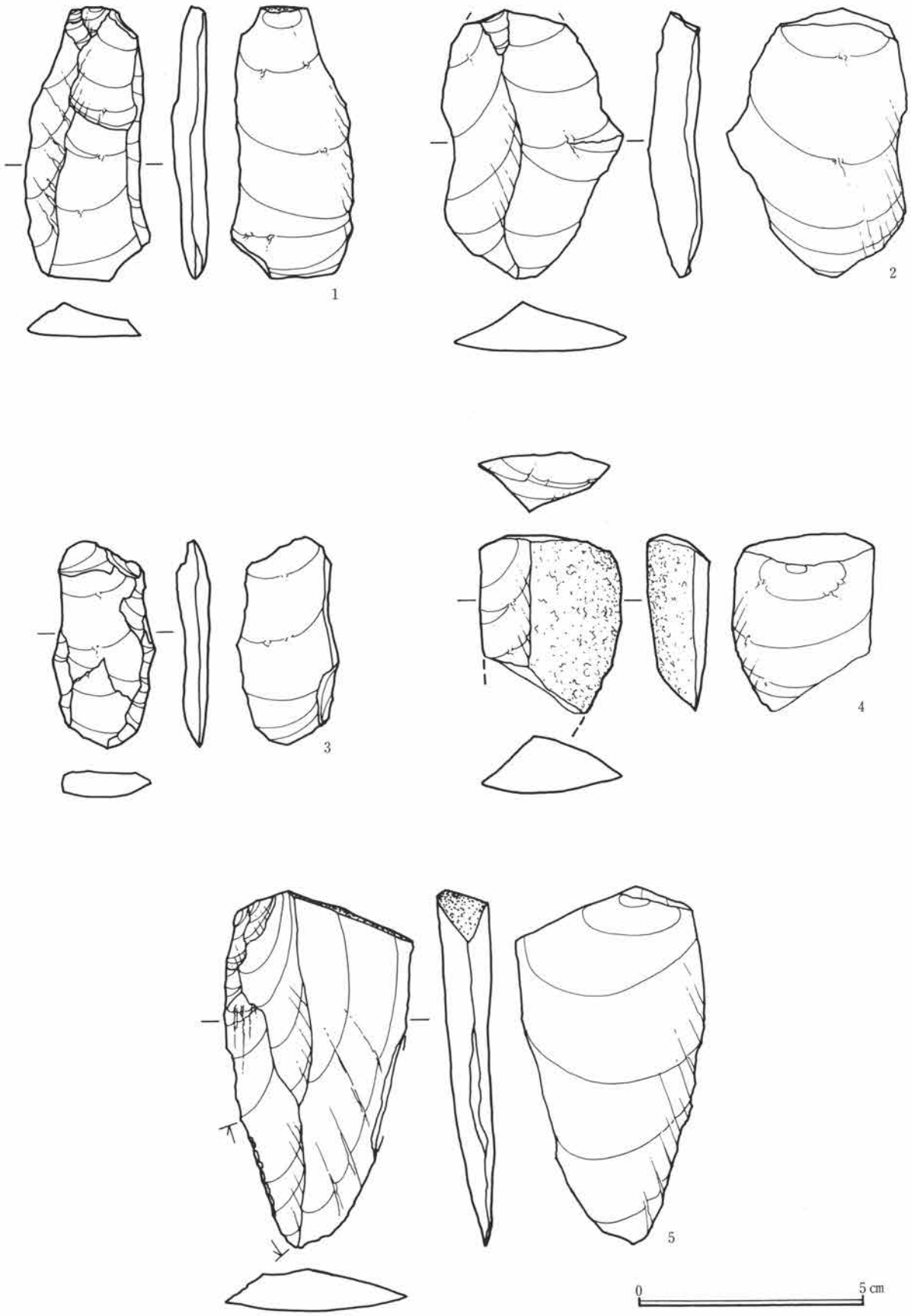
5は黒色頁岩製の縦長剥片で、打面部に最大幅を持っている。端部は尖頭形を呈する。背面側の左側縁下半部には連続する微細剥離痕が認められる。背面は主要剥離面と同一加撃方向の3枚の剥離面で構成される。

3 その他の石器 (第8・9図1～4 PL. 93)

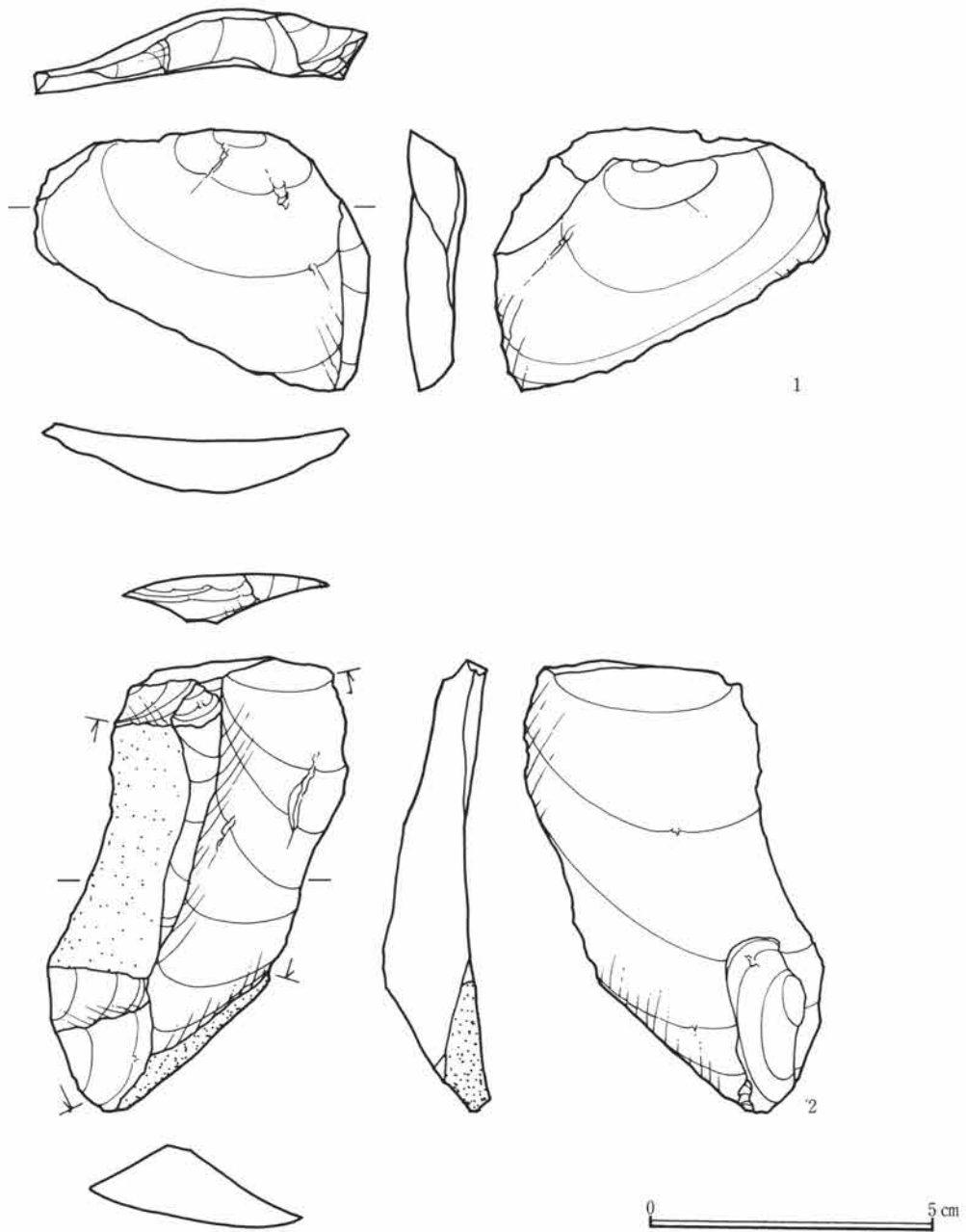
グリッド表採及び縄文時代以降の遺構覆土等から、次の4点が出土している。



第6図 旧石器調査区全体図



第7図 出土石器



第8図 その他の石器

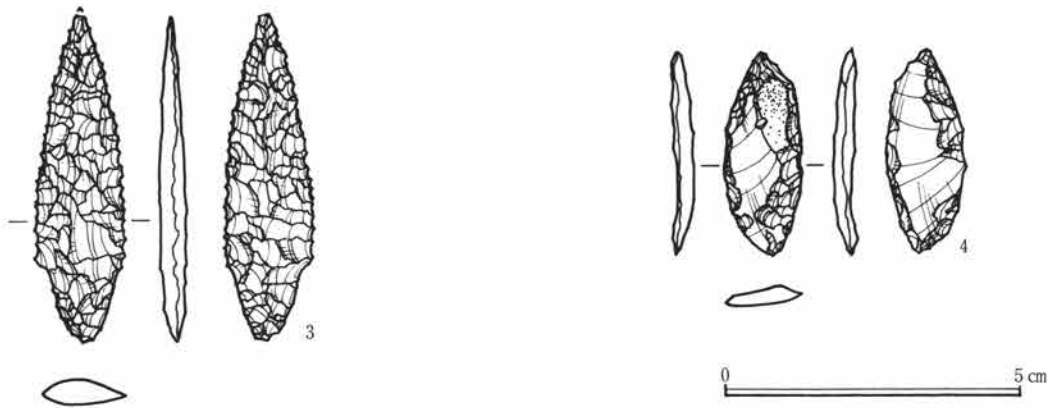
1は黒色頁岩製の横長剥片で、端部はヒンジフラクチャーを起こしている。背面にも横長剥片の剝離痕が残っていることから、打面と作業面を固定して横長剥片が連続剝離されたことが看取される。風化の状況から旧石器時代に属すると判断した。

2は硬質頁岩製の石刃で、反りとねじれがある。打面は欠損し、右側縁上半部と左側縁全体に亘って微細剝離痕が認められる。この石材は緻密で珪化が強

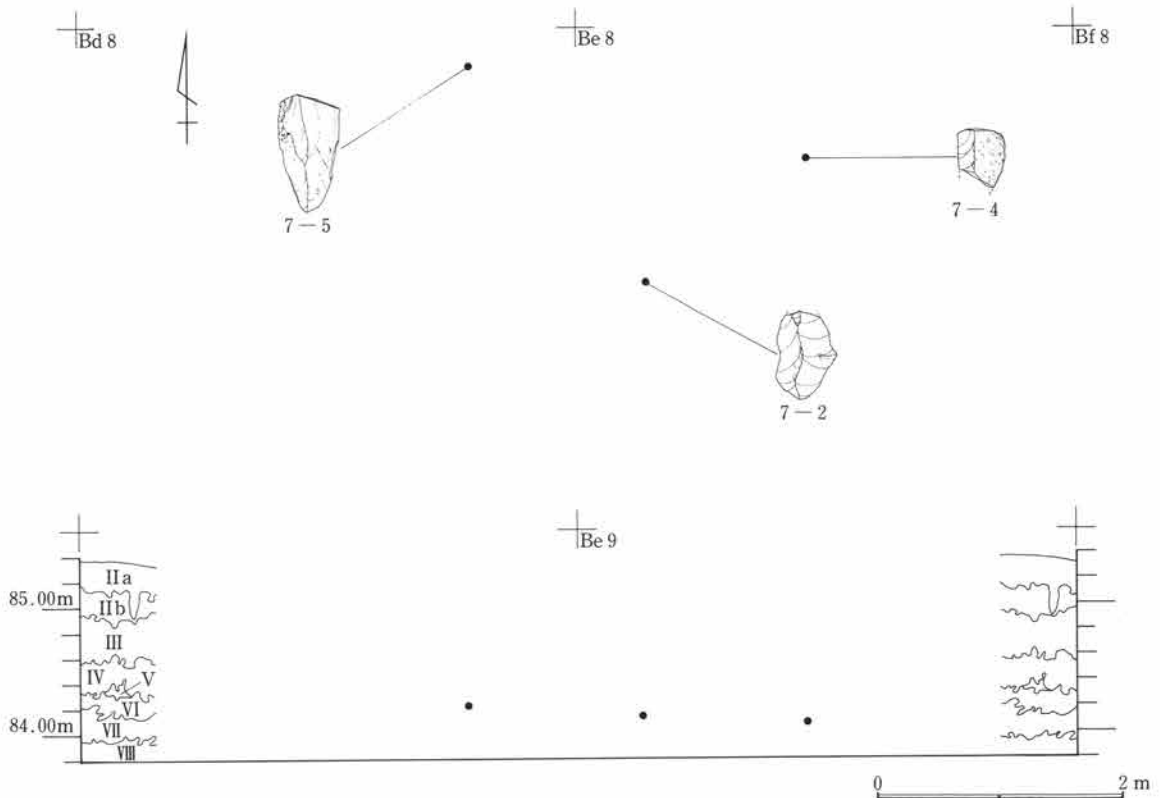
く、褐色を呈することから東北地方産のものと考えられる。

3は黒曜石製の有茎尖頭器で、両面とも入念な押圧剝離によって器体を整形している。茎部の作出は右側縁では顕著ではない。素材は調整加工が全面を覆うため、不明である。

4は黒曜石製の尖頭器で、薄手の縦長剥片を素材とし、両面の周辺部に平坦な調整加工を施している。



第9図 その他の石器



第10図 B d・B eグリッド石器分布図

第1表 出土石器一覧表

挿図番号	図版番号	器種	接合関係	石材	出土位置(単位cm)			最高(単位m)	計測値(単位cm・g)			
					グリッド	N-S	W-E		長	幅	厚	重量
第7図-1	P.L. 93	石刃	—	黒色安山岩	Aw-21	209	83	85.445	6.0	2.8	0.8	11.61
2	P.L. 93	石刃	—	黒色頁岩	Be-8	203	56	84.13	5.8	4.0	1.2	20.78
3	P.L. 93	石刃	—	黒色頁岩	Aw-4	309	72	84.905	4.5	2.2	0.8	8.41
4	P.L. 93	縦長剥片	—	黒色安山岩	Be-8	105	185	84.09	(3.9)	3.2	1.3	15.17
5	P.L. 93	縦長剥片	—	黒色頁岩	Bd-8	30	313	84.215	7.8	4.2	1.2	32.69
第8図-1	P.L. 93	横長剥片	—	黒色頁岩	Av-17	—	—	—	4.5	5.8	1.5	26.91
2	P.L. 93	石刃	—	硬質頁岩	Br-23	—	—	—	7.8	5.3	1.9	37.71
第9図-3	P.L. 93	有茎尖頭器	—	黒曜石	At-5	—	—	—	5.4	1.5	0.5	3.40
4	P.L. 93	尖頭器	—	黒曜石	Aw-2・3	—	—	—	3.4	1.3	0.4	1.47

II 発掘調査の記録

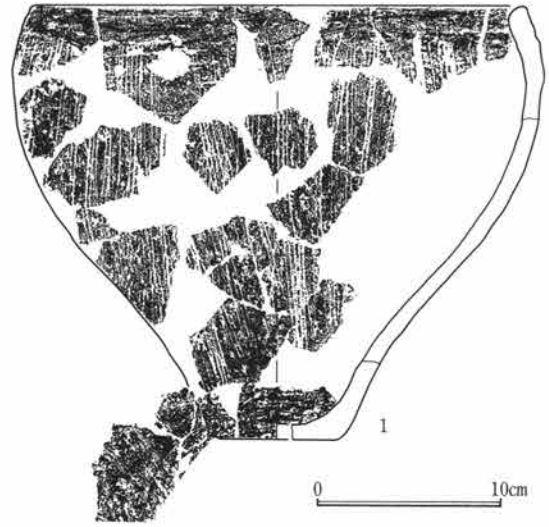
(2) 縄文時代

縄文時代については、土器および石器などの遺物類が出土しているものの、遺構については認められていない。

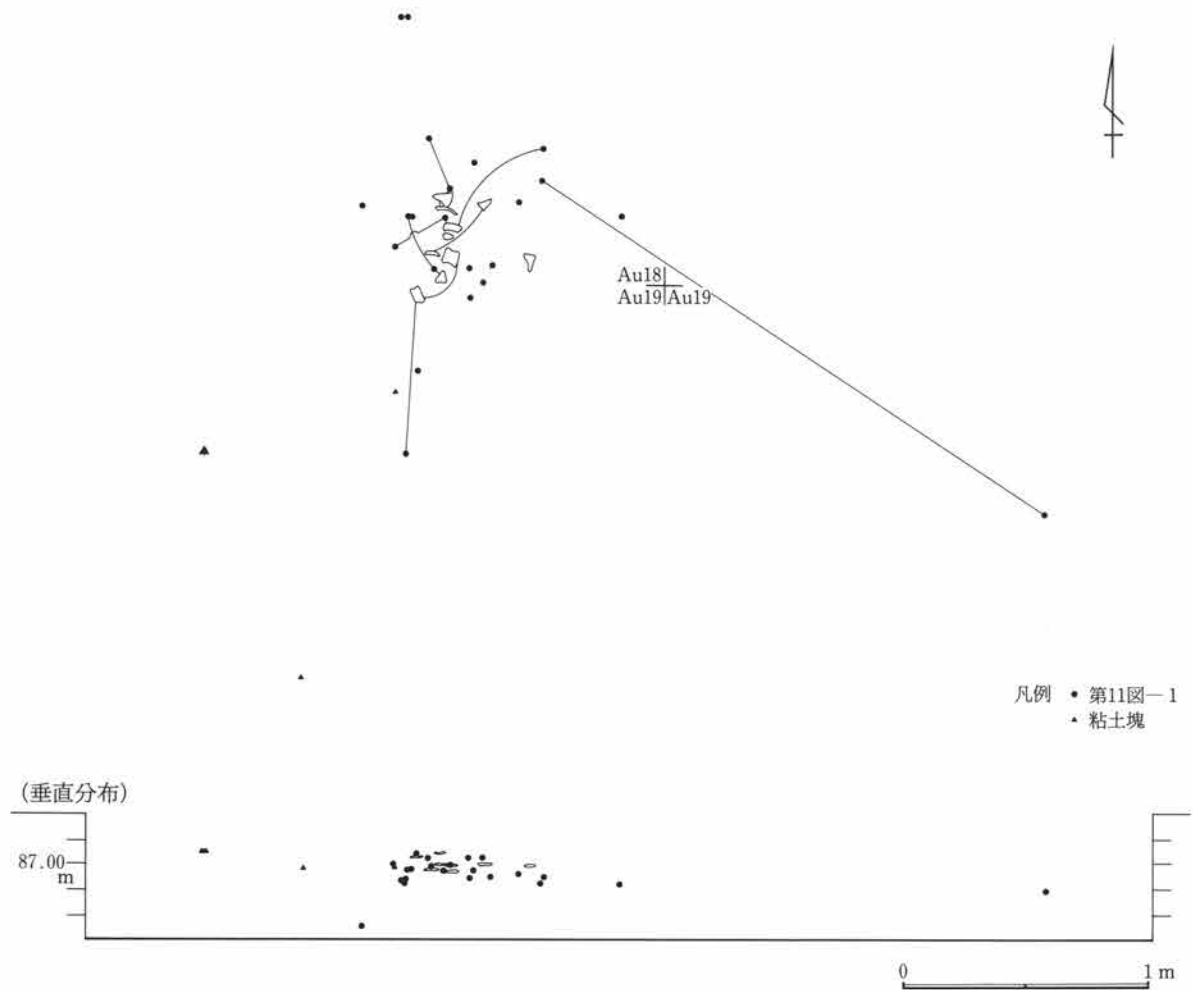
出土土器は早期、前期、中期、後期と多時期にわたるがいずれも小破片であり、量的にも少なく散発的である。また、分布域も遺跡全域にわたり时期的な偏差もみられない。

その中では、Au-19グリッド付近に中期土器片の集中する部分が検出されているが、この部分にも掘り込みなど遺構としての痕跡は認められていない。

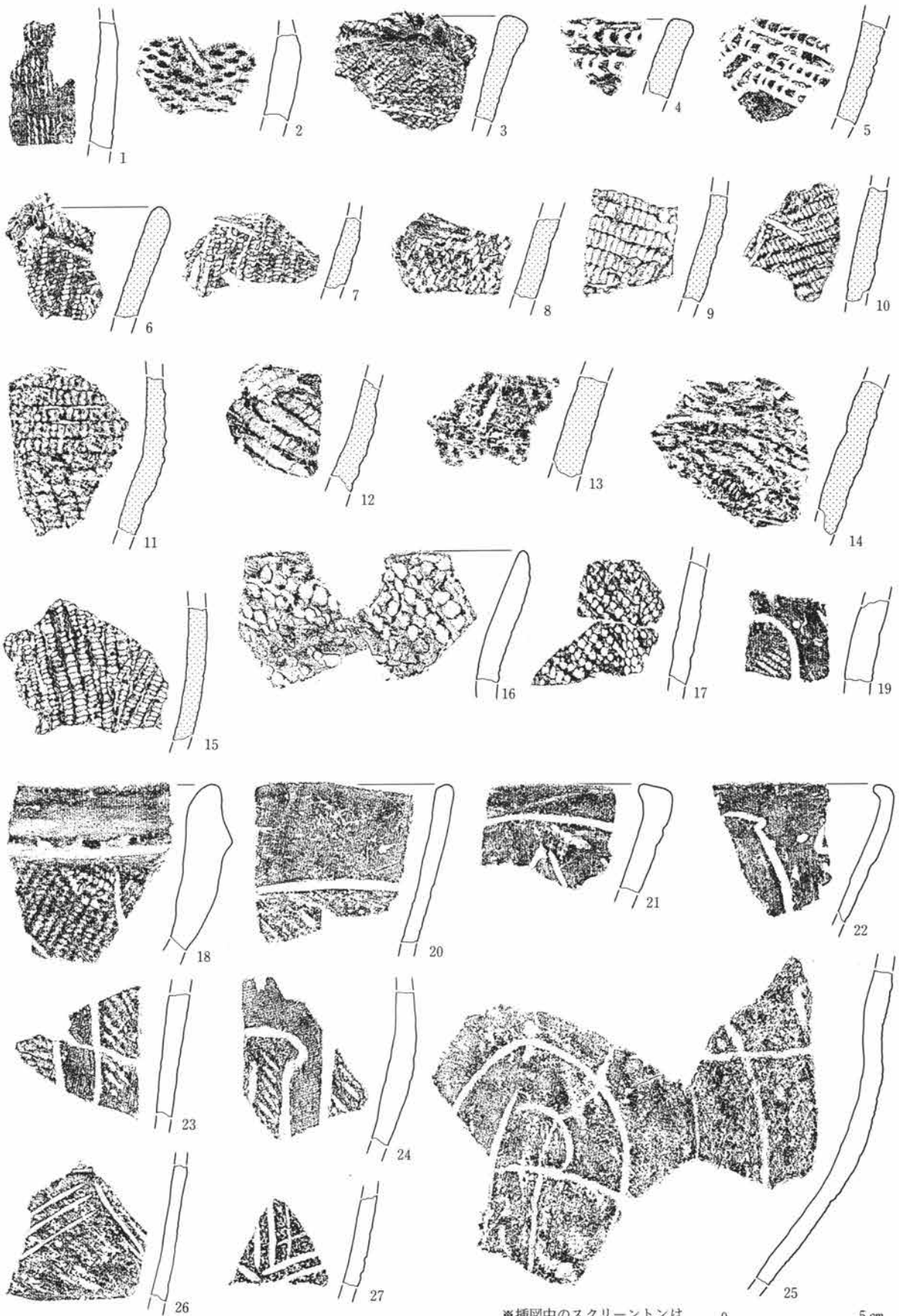
石器類は石鏃、打製石斧、石匙、剥片類が出土するが、石鏃以外については量的にも少なく、出土状(平面分布)



第11図 縄文土器 (Au-18・19グリッド)



第12図 縄文土器分布図 (Au-18・19グリッド)



第13図 縄文土器

※挿図中のスクリーンは
繊維土器を示す

0 5 cm

II 発掘調査の記録

況も不明な点が多い。石鏃は約30点検出され、出土石器の多数を占める。分布をみると、台地部および低地部を含め遺跡全域に分布しているのが特徴的である。出土石器類は、石鏃をはじめ狩猟用具に比重があるものといえる。

このような遺物の在り方や遺構の存在しない点などからみると、この区域が縄文時代には居住地としてではなく、狩猟用の区域として利用されていたことが考えられる。

以下、出土遺物の概要について報告していく。

a 縄文土器 (第11図～第13図)

まず Au-19グリッド付近で認められた土器集中部分とその出土土器について説明し、その後に時期別に土器を報告していきたい。

Au-19グリッド土器集中部分 (第12図)

検出はローム層上面で行われている。平面分布をみると同一個体の土器片がほぼ径1m程度の範囲に分布し、これ以外の個体は含まれない。垂直分布は、標高87mで15cm位の上下幅で集中する。出土土器は小破片が主で、大きな破片でも5cm四方程度である。土器片は口縁部、胴部および底部片が含まれるが、全片の接合には至らず全体の3分の2強を欠損している。第11図に示す土器も図上復元したものである。なおこの部分は土器が分布する以外に掘り込みもしくは焼土など他に痕跡は認められていない。

土器 (第11図) は、水平口縁の深鉢で、球状に膨らむ口縁部に最大径をもち口唇部はゆるやかに内湾する。胴部以下はすぼまり小底径の底部に連続する。復元計測値は口縁部径27cm、底径6.5cm、器高23cmとなる。文様構成は口縁に2cm程度の無文帯をもち、以下半截竹管による縦位条線文が施される。この条線文は太めで深くやや密接するが施文は粗雑であり、底部付近には加えられず無文となる。整形は器内外面とも良好で平滑面を形成し、ヘラ状工具とみられる調整痕も観察される。なお縄文および他文様は認められない。加曾利E3式土器に位置付けられる。燃糸文系土器 (第13図1)

燃糸文土器の胴部片。Rをやや間隔をおいて巻き付けた単軸絡条体Ia類を用いる。器面は平滑であるが、わずかに起伏があり、そのため凹部には燃糸の施文が及んでいない。

押型文土器 (第13図2)

楕円押型文土器の胴部片。単位は不明だが、楕円形は粒がよく整っており、施文も丁寧である。

前期前半の土器 (第13図3～15)

胎土中に繊維の混入が認められる一群である。小破片のため文様構成が不明であり、複数の型式が含まれているものと思われる。

4、5は連続爪形文が施されるもの。4は、口唇に平坦面をもつ口縁部片。5は、山形状の構成をもつ胴部片。いずれも平行線文を引いた後に、爪形文を加える。両片とも繊維の含有量は多く、器内外面に繊維痕が露出する。黒浜式に位置付けられるだろう。

15は、尖底土器の胴部片と思われる。0段4条のLR、RLが観察できるが、回転方位は器形に沿って施文することから斜位となり、条は縦走している。10は直接接合しないが、縄文や器厚が類似していることから、同一個体とみられる。

3、6は口縁部片。いずれも縄文施文であり、羽状構成がみられる。3は、口唇部に平坦面をもつ。6は、波状口縁で、口縁外端にわずかな面をもつ。

11は、LR、R横位、12は、L、R横位による羽状縄文の胴部片。7、8、9はLRが観察される胴部片。これら縄文施文の資料は、花積下層式に含まれよう。

前期後半の土器 (第13図16、17)

16、17は前期後半、諸磯b式土器である。縄文のみの破片であるが、いずれもRL横位が施文されている。16は、口縁部片。口唇は外側に面をもち、縄文は口唇直下から施文される。条に太細があり、明確ではないが、附加条の可能性はある。17はよく燃られた原体が用いられるが、施文には一部で重複がみられる。

中期の土器 (第13図18、19)

18、19は中期末、加曾利E 4式土器である。18は、波状口縁で、口縁部下には微隆起線文が加えられ、以下、RL縦位が施される。19は、区画線内にRL横位が施される胴部片。

後期の土器 (第13図20～27)

20～27は後期初頭、称名寺II式土器。20～22は口縁部片、他は胴部片である。20は沈線下の縄文が観察されるが、不明瞭であるため原体は確定できない。23、24には不明瞭ながらRL横位が観察される。

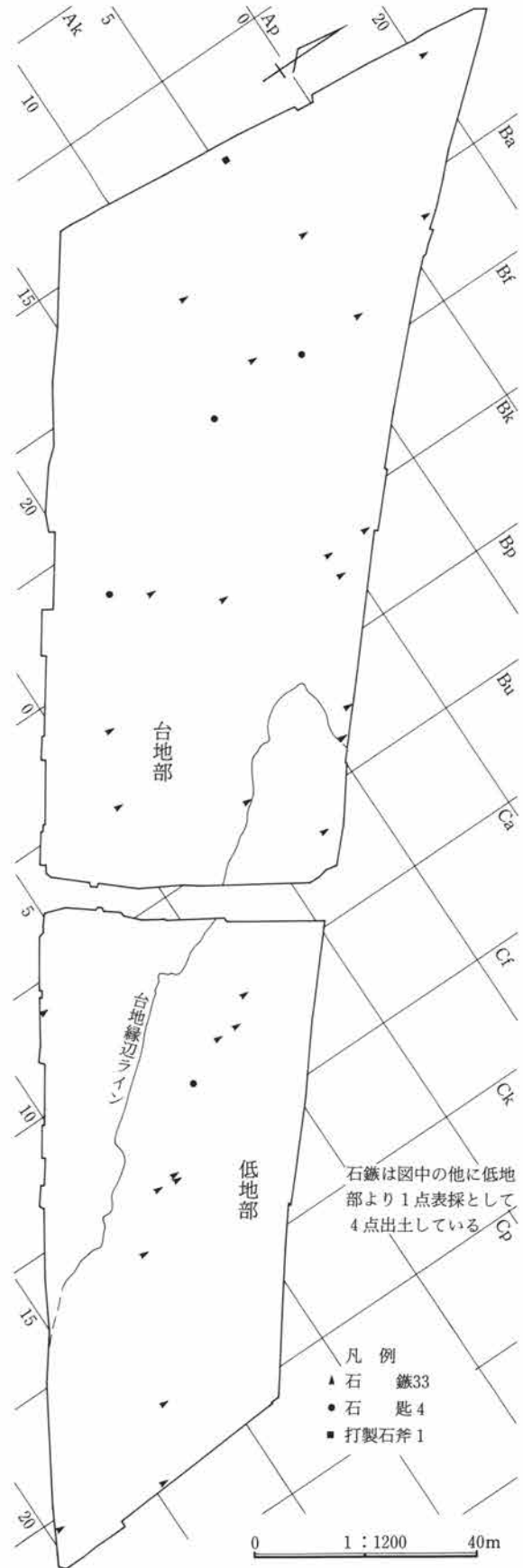
石器をみよう。

出土した石器の種別は、石鏃、打製石斧、石匙、三角錐形石器などがあり、その他は剥片類が少量みられる程度である。この中では石鏃が出土量の大半を占め30点、その他は1～数点である。

出土は、いずれも表土もしくは古墳時代遺溝の住居埋没土、水田耕作土中に混在して検出されたものである。縄文土器との関連等については特に認められていない。

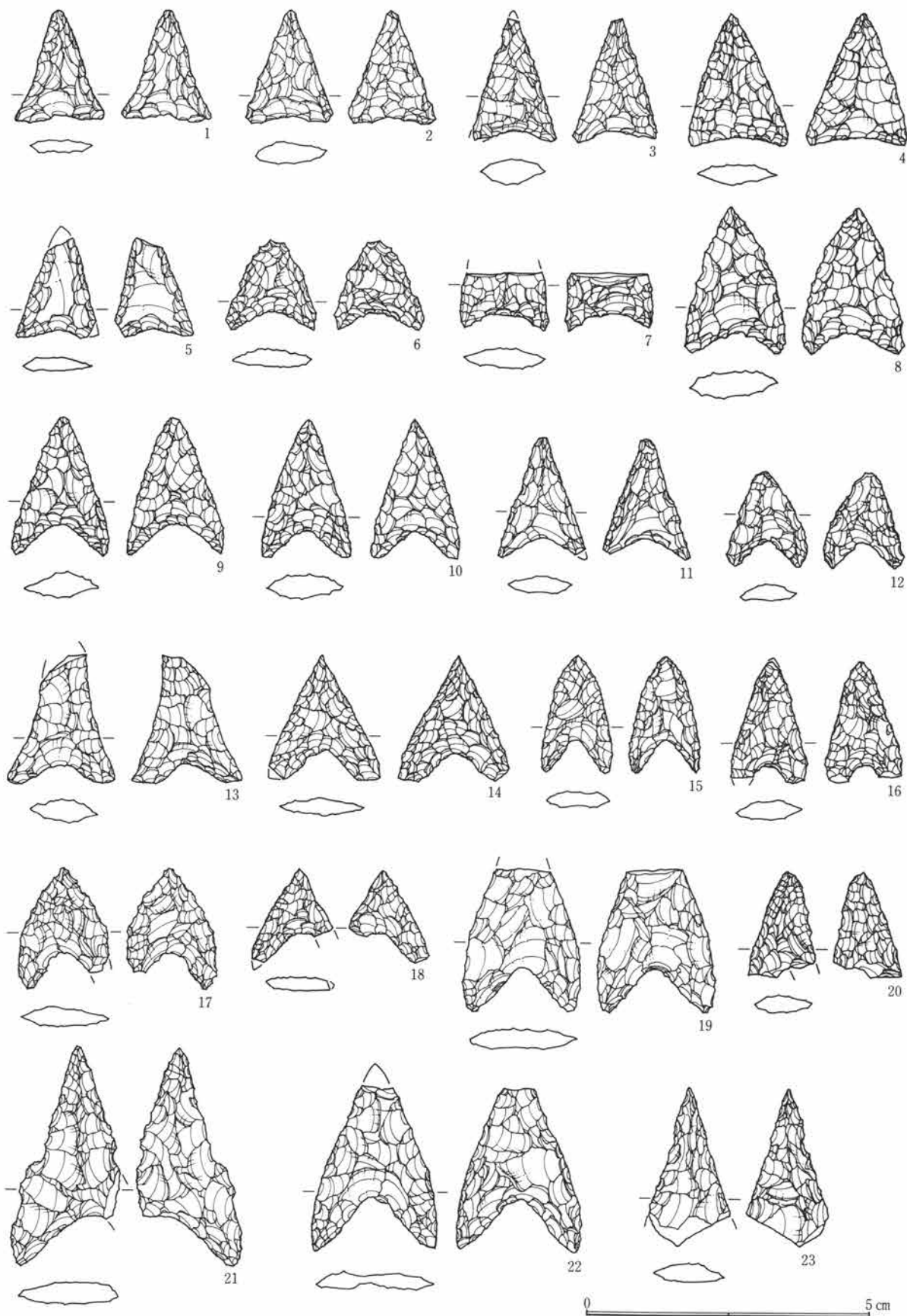
これらの石器類の分布状況は、右図に示すとおりである。この図中には、出土石器のほとんどがグリッド単位で示してある。

石鏃は、台地および低地を含め、遺跡全域に分布していることがわかる。遺溝は全く存在せず、狩猟具のみが広範に分布している点からみれば、水場に集まる動物類の狩猟域として利用された場として理解できる。

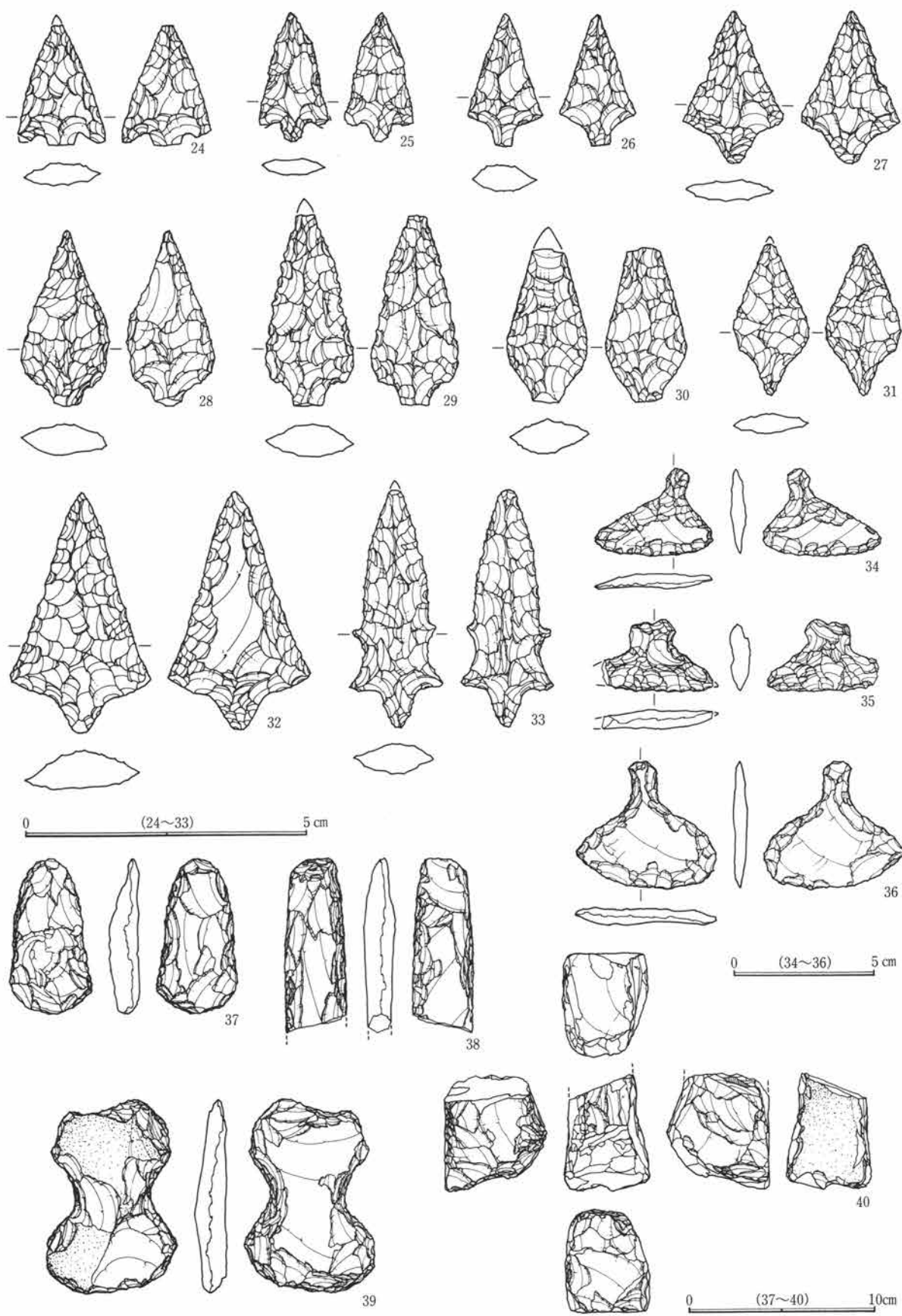


第14図 縄文石器分布図

II 発掘調査の記録



第15図 グリッド出土遺物



第16図 グリッド出土遺物

II 発掘調査の記録

(3) 竪穴住居

調査により計85軒の住居が確認できた。時期的には古墳時代後期から奈良・平安時代にかけて継続的に存在する。調査に際してはすべてローム層上面を遺構確認面としており、住居構築時の生活面はすでに失われている。カマドについても同様であり、天井部は残存せず、燃焼部のみが確認されたにとどまっている。

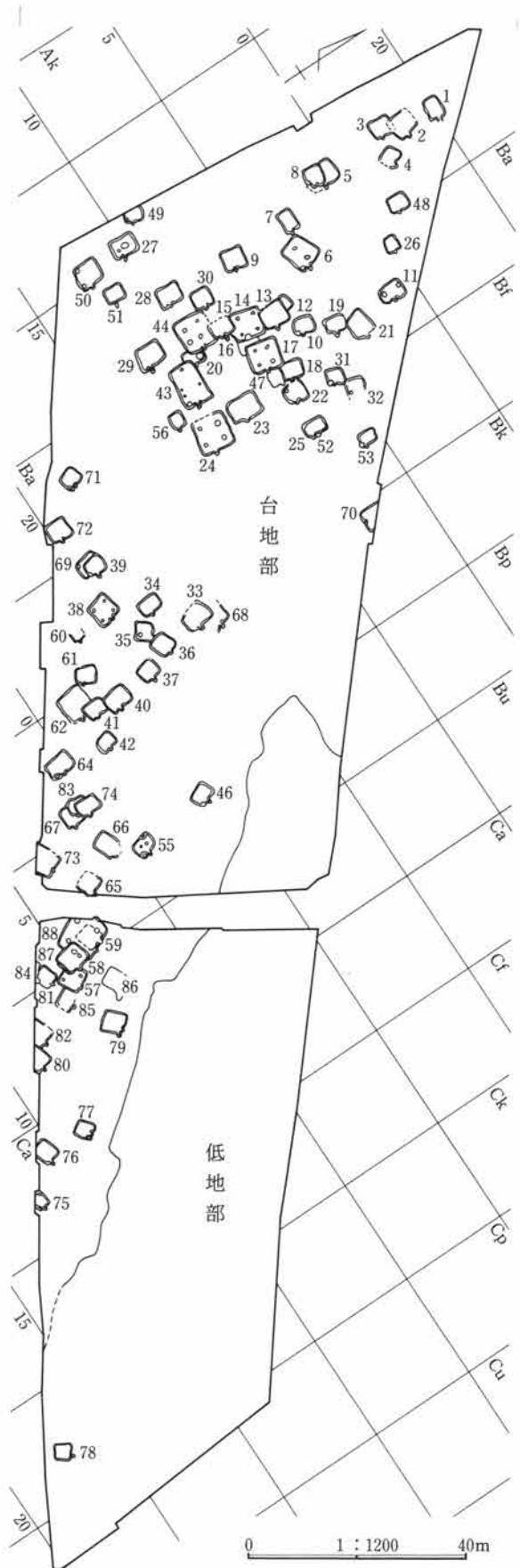
住居間および土坑、溝などの他遺構との重複、近年の耕作・開墾による影響もあり、個々の住居については検出状況が良好でない例も決して少なくない。特に開墾の影響は大きく、台地上を部分的に削り低地部に客土して耕地としている。

カマドは東壁に付設される。同時に埋没水田の存在する遺跡北西から南東に広がる低地にむかって付設されるような状態もみとめられる。低地から多少離れた住居群はほぼ真東に設置されるが、低地に近接したものは東からやや北に振れて、低地に直行するような位置関係となっている点が目立つ。

分布状況を見ると台地部全域にひろがっているが、調査区でみるとB区中央やや西より付近に住居が存在しない幅20m程の空白部が南東から北西にかけて認められる。地形的にみるとこの部分はわずかながら谷頭にむかって低くなっており、その両側の高位部に住居群が占地していることになる。

住居は掘り方もち、埋土した後にロームを主とした張り床を施している。掘り方は一部不明瞭な点も含まれるものの、住居中央部に土坑状の掘り込みをもつもの、縁辺部を掘り込むもの、土坑状の掘り込みを不規則にもつものなどいくつかの種類が存在するようにみられる。

なお、前記したような遺構検出状況であることから、住居上屋構造に関する情報は得られていない。以下、住居番号順に報告するが45号・54号・63号については欠番となっている。これは調査進行時に生じた欠号であり、報告に際してもそのまま準拠している。



第17図 住居位置図

1号住居 (第18図 P.L. 8・95)

位置 Av・w-19・20

重複 住居中央部主軸方向に沿って溝状遺構が切る

主軸方向 N-90°-E 床面積 8.8㎡

形態 縦長長方形で各隅とも丸みをもつ。

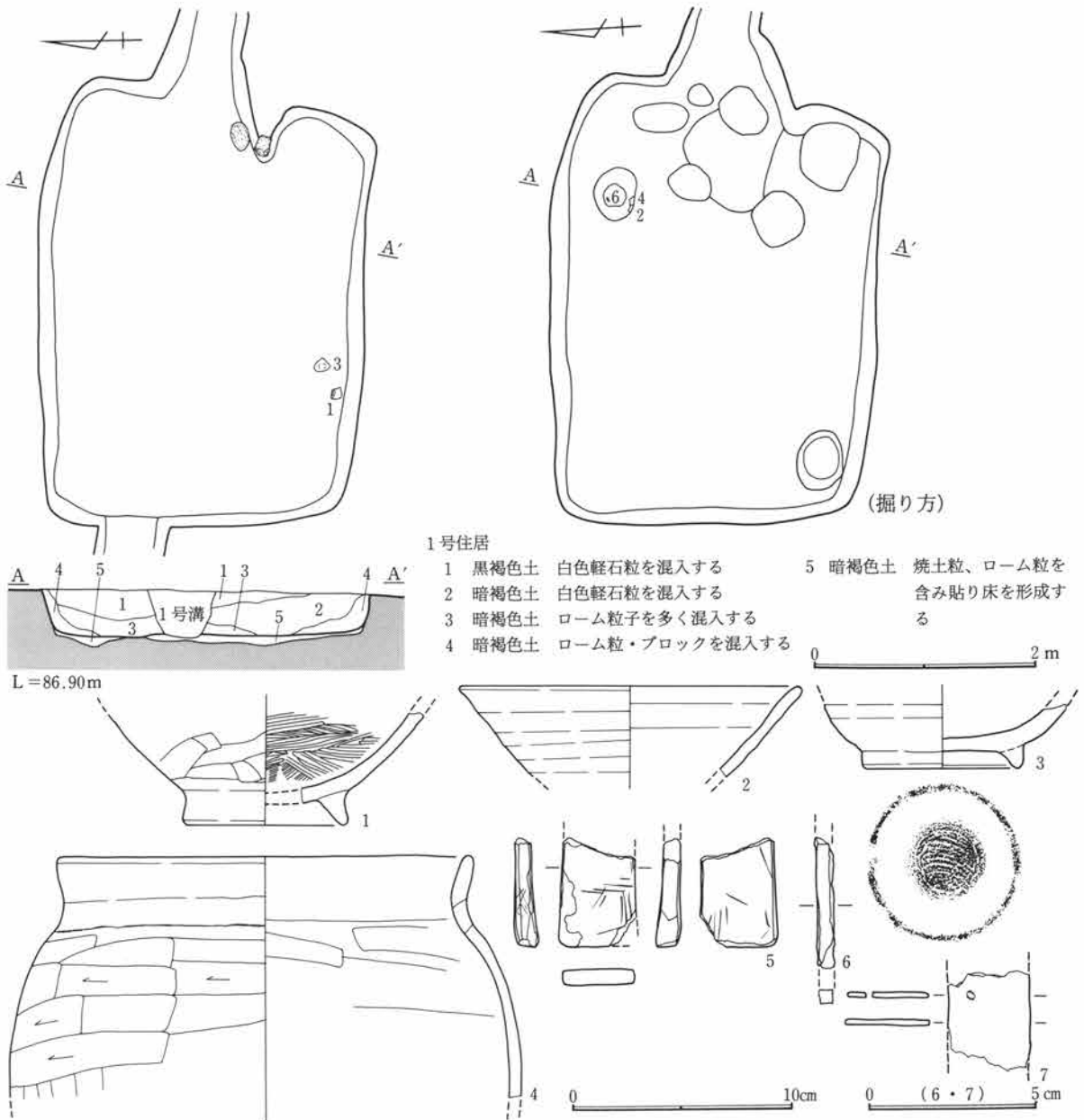
規模 2.9m×3.9m

カマド 東壁中央に設置されるが溝状遺構が縦断しているため左袖および燃焼部の大半は壊され右袖のみの部分的な残存にとどまる。袖は地山を掘り残し、端部には礫が埋設される。

内部施設 住居南東隅に径50cm、深さ30cmの貯蔵穴とみられる掘り込みが存在する。また、北東隅から南西隅の住居対角線上には径40cm、深さ20cmの小穴がそれぞれ隅に接して1穴ずつ認められる。位置からみて柱穴の可能性も考えられたが、これに対応するような小穴については検出していない。

床 ロームを含む暗褐色土による張り床が施される。硬く良好な面が検出されている。

掘り方 床面下10cm程度と浅く不規則な掘り方をもつが、カマド周辺には皿状のくぼみが5カ所程認め



第18図 1号住居と出土遺物

II 発掘調査の記録

られる。

遺物出土状態 遺物量は少ない。さらに溝状遺構が縦断することも影響して残存状況も良くない。とくに床面出土遺物は少なく第18図に示す土器が該当する。

時期 出土遺物から後半に比定される。

2号住居 (第19~22図 P.L. 8・95)

位置 Av・w-21・22

重複 3号住居により住居南西隅付近を切られる。

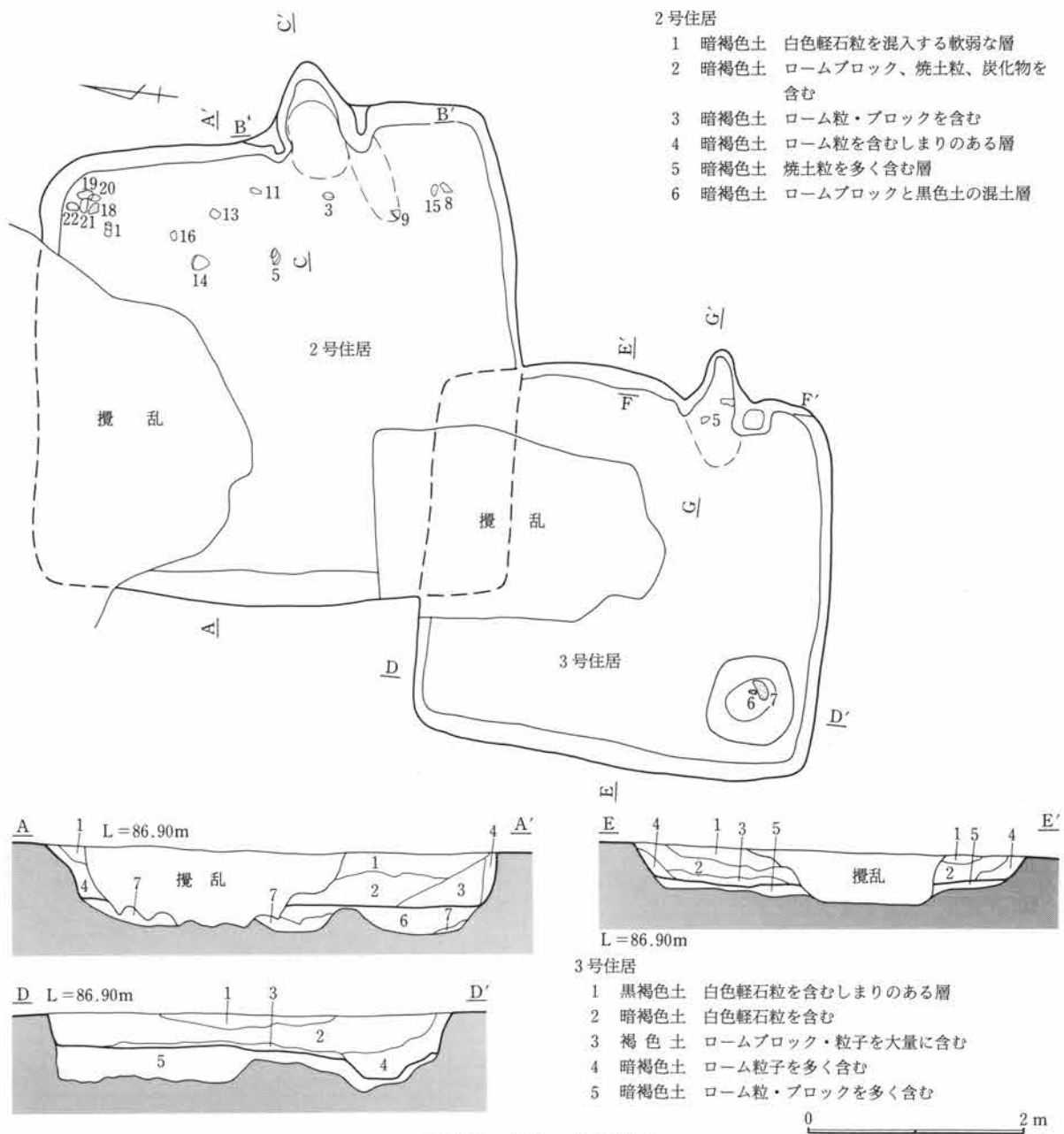
さらにこの住居間重複部分および北西壁部を耕作機械による攪乱をうけている。

主軸方向 N-85°-E **床面積** (15.3m²)

形態 方形平面を呈し、ほぼ矩形を示す。

規模 4.1m×4.3m

カマド 東壁中央やや南寄りに位置する。焚口幅70cm、奥行き80cmを測る。天井部、煙道部とも失われている。燃焼部には厚さ1cm程度の灰層が散布する。また幅1m、奥行き1mの掘り方を持ち、ロームを



主とした褐色土を埋めもどしカマド使用面を構築している。

内部施設 柱穴、貯蔵穴、周溝などの施設は認められていない。

床 張り床を構成し床面は検出したが、全体的にやや軟弱であり硬化面は認められてない。ロームブロック・粒を多く含む暗褐色土を主に床を形成し、ほぼ平坦な面をもつ。

掘り方 カマド前部から中央部分にかけて土坑状の掘り込みが複数連続的に存在する。埋土はロームおよび黒色土を混在する暗褐色土であり、焼土粒・炭化物を少量含む。

遺物出土状態 住居東半部に須恵器、土師器の土器類が、埋没土下部および床面上にかけて出土する。とくに北東隅床面にはこも編み石とみられる棒状礫が5点集中して出土している。なお、北壁・南壁を

中心とした住居西半部は攪乱を受けているため遺物の出土状況は把握できない。

時期 出土遺物から8 C. 中葉に比定される。

3号住居 (第19・20・23図 PL. 9・96)

位置 Au・v-22

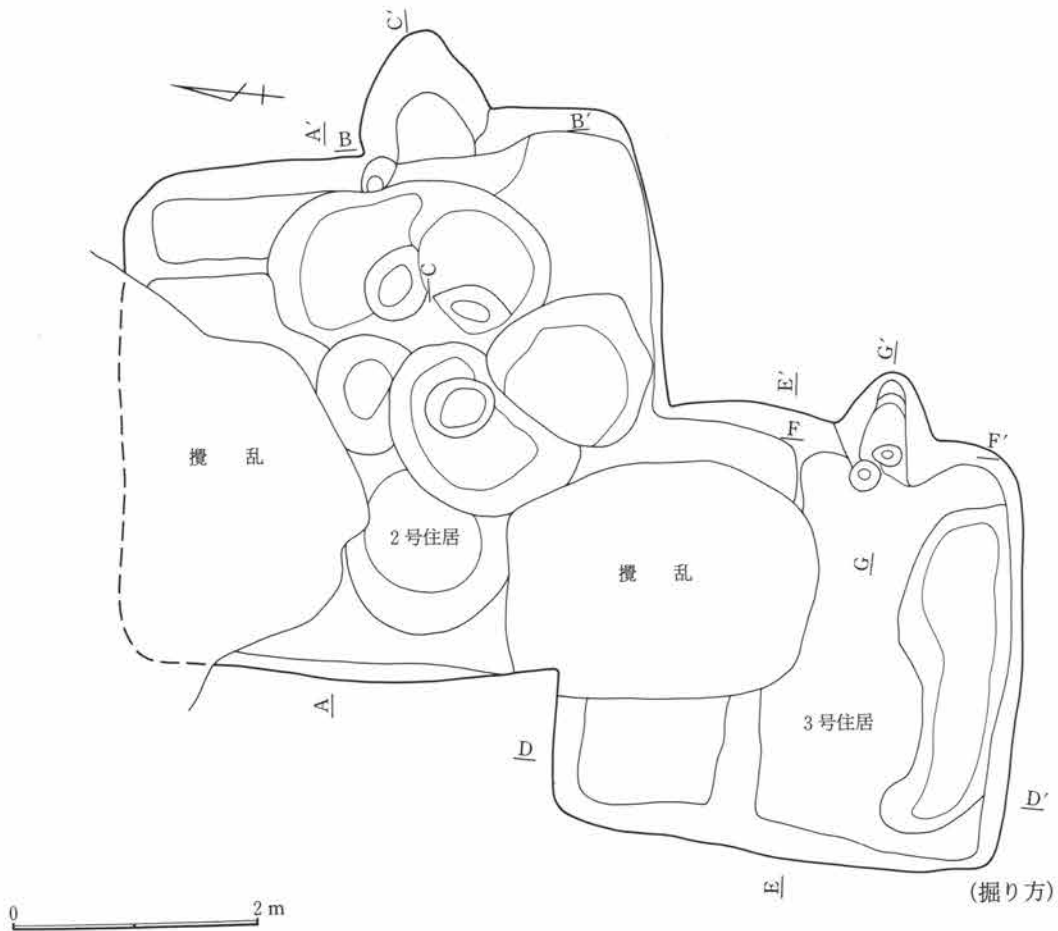
重複 住居北東部で2号住居と重複し、さらにこの部分に耕作による攪乱を受けている。住居間の重複関係は2号住居が古く、3号住居が新しい。

主軸方向 N-92°-E **床面積** (10.5m²)

形態 主軸方向の対辺側がわずかに長いが、ほぼ方形平面を呈するものとみられる。重複部分は不明瞭であるが、検出部分は直線的で矩形を示している。

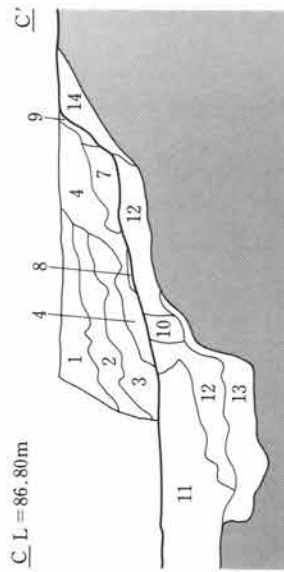
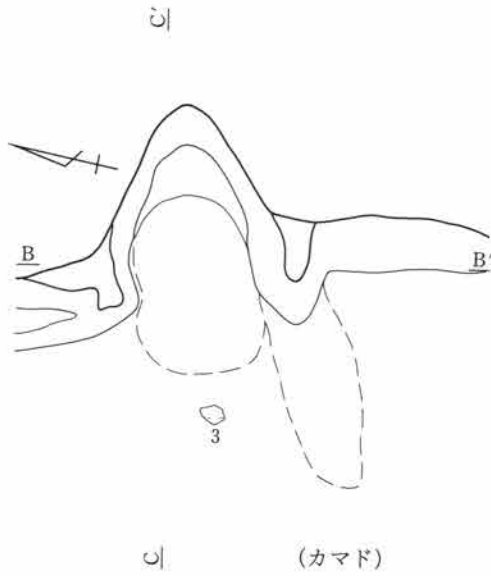
規模 3.5m×3.7m

カマド 東壁に設置され、北東隅から3分の2程度南寄りに位置する。天井部、煙道は残存しないが、埋没土下部には天井部崩落土とみられる火熱を受け



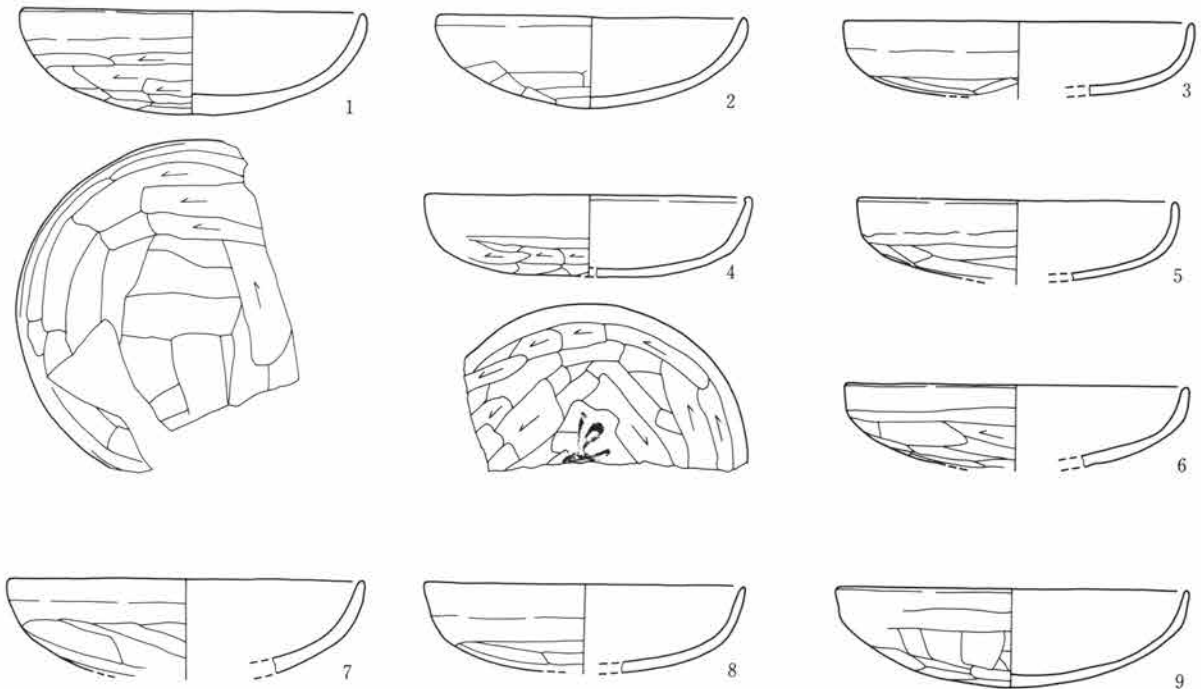
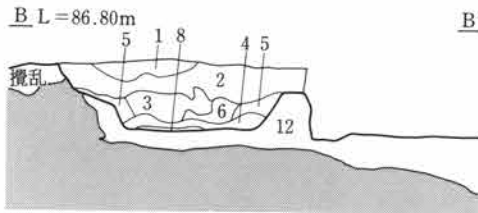
第20図 2号・3号住居

II 発掘調査の記録



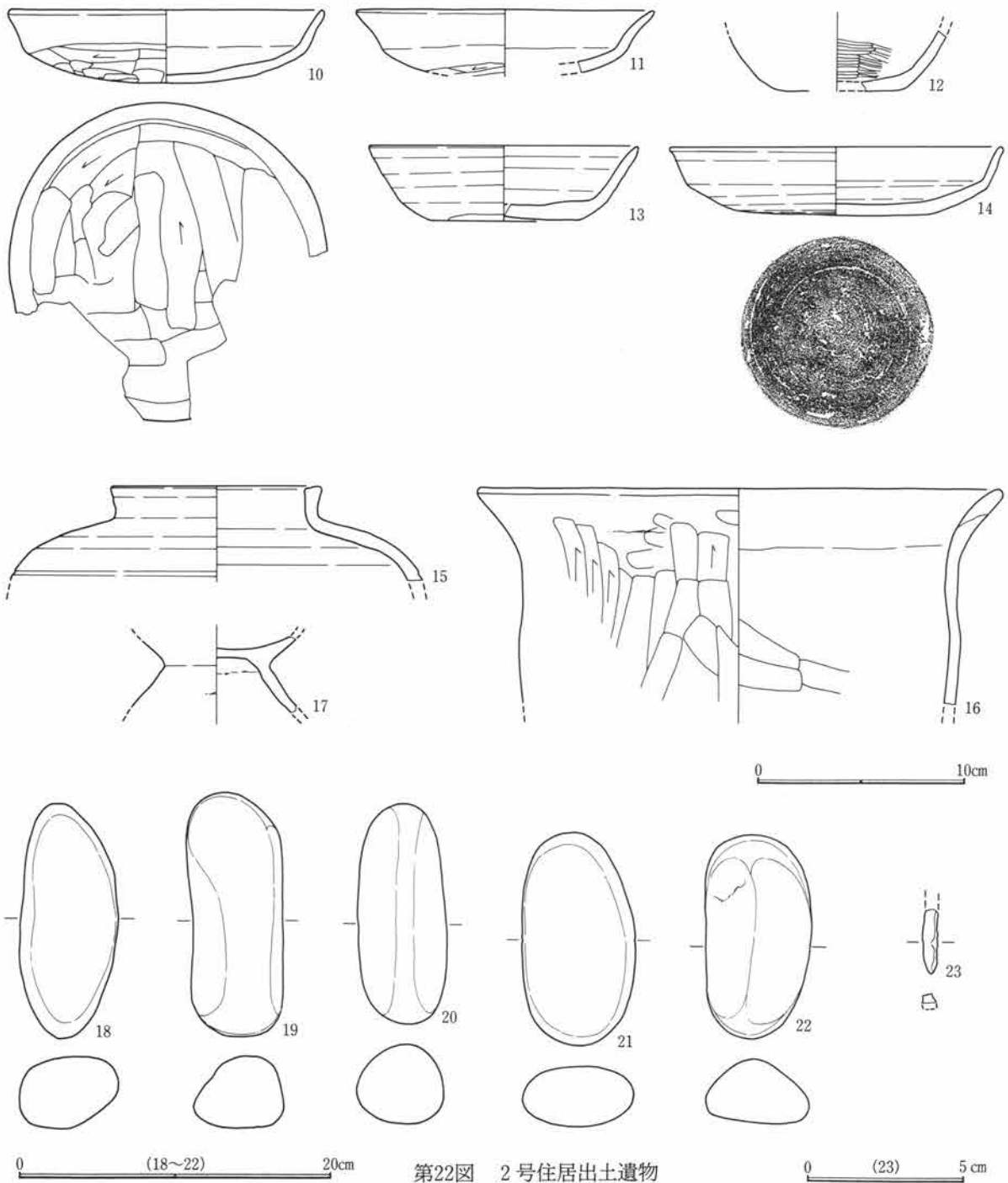
2号住居カマド土層

- 1 黒褐色土 焼土粒を含む
- 2 暗褐色土 ローム粒、焼土粒を含む
- 3 褐色土 焼土ブロックを含む
- 4 暗褐色土 焼土ブロックを多量に含む
- 5 暗褐色土 ロームを多量に含む
- 6 褐色土 壁体崩落土
- 7 暗褐色土 黒色土、焼土を含む
- 8 灰層
- 9 褐色土 ロームを多量に含む
- 10 暗褐色土 ローム、焼土、炭化物を含む
- 11 暗褐色土 褐色土、炭化物を含む
- 12 黒褐色土 ローム粒、炭化物を含む
- 13 褐色土 ロームを多量に含む
- 14 褐色土 焼土を多量に含む



第21図 2号住居と出土遺物

4 調査した遺構と遺物



第22図 2号住居出土遺物

た褐色土がブロック状に堆積している。規模は焚口50cm、奥行70cm。両袖は褐色土により構築され30cm程度住居内に張り出す。

内部施設 南西隅に径80cm、深さ25cmの掘り込みが検出され、穴内には遺物の出土が認められた。このほか周溝、柱穴などは検出されていない。

床 ロームを含む暗褐色土により張り床が施され

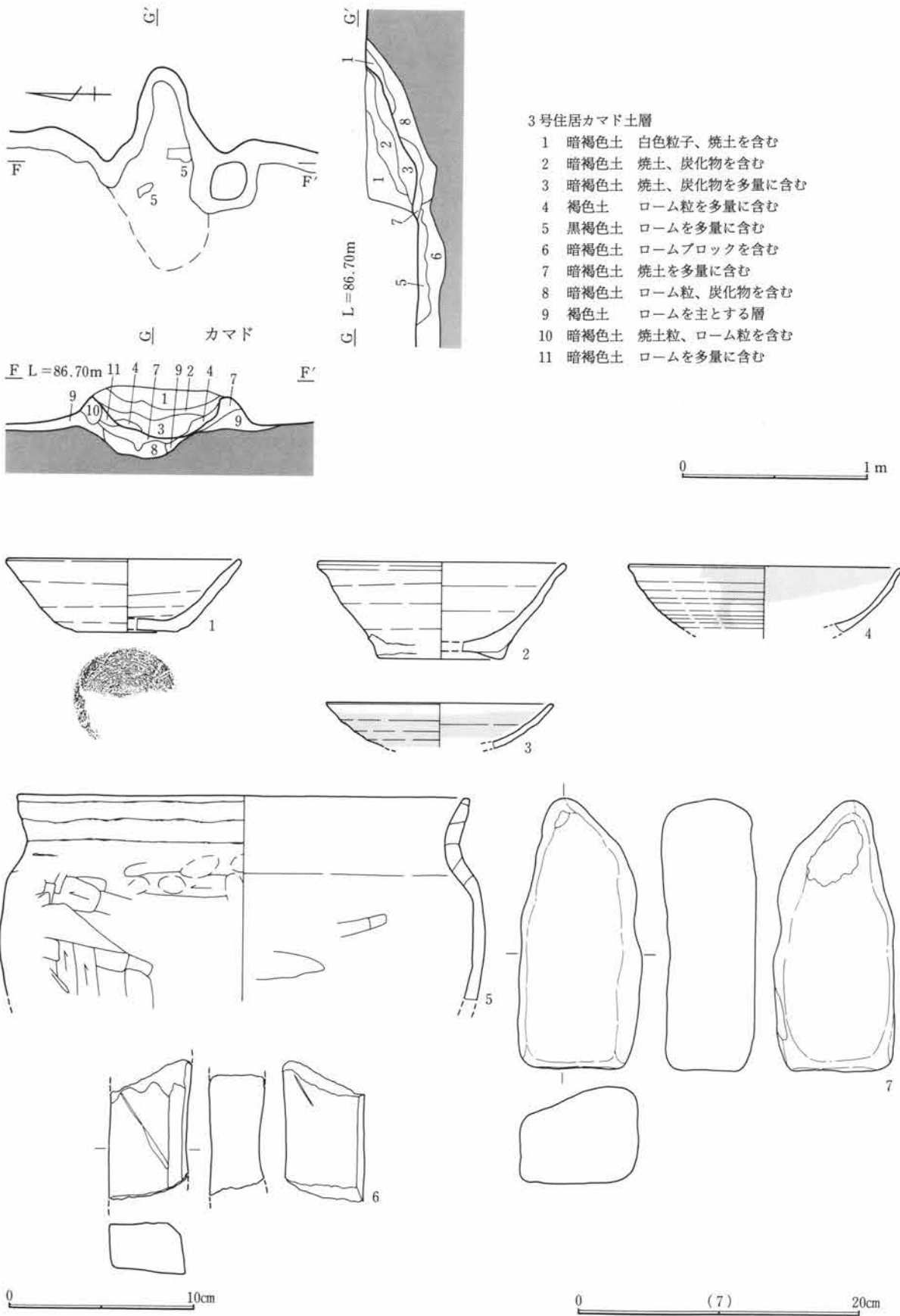
る。

掘り方 住居南および北側縁辺部がやや深めに掘り下げられる。

遺物出土状態 遺物はカマドおよび南西部掘り込み内に認められる。5はカマド、6・7は南西部掘り込みで検出され、1～4は埋没土出土である。

時期 出土遺物から10C.前半に比定される。

II 発掘調査の記録



第23図 3号住居と出土遺物

4号住居 (第24・25図 P.L. 10・96)

位置 Aw・x-22・23

重複 南東隅から南壁にかけて耕作による攪乱を受け、カマド右袖および南壁部分が壊されている。

主軸方向 N-68°-E 床面積 (7.2㎡)

形態 主軸方向の対辺に長軸をもつ横長長方形を呈する。各隅は丸みをもつが、各辺は直線的である。カマド 東壁に設置され、南寄りに偏在するものとみられる。埋没土には天井部崩落土である褐色粘質土がブロック状に堆積している。残存状態はよくないが、奥行きは90cmを計測する。

規模 2.8m×3.3m

内部施設 とくに検出されていない。

床 堅く良好な張り床が形成されている。

掘り方 10cm前後不規則に掘り下げられ、暗褐色土が埋土される。

遺物出土状態 床面上での出土遺物はみられない。

1・2とも埋没土から出土している。

時期 出土遺物から8C.前半に比定される。

5号住居 (第26~28図 P.L. 11・96)

位置 Av・w-0・1

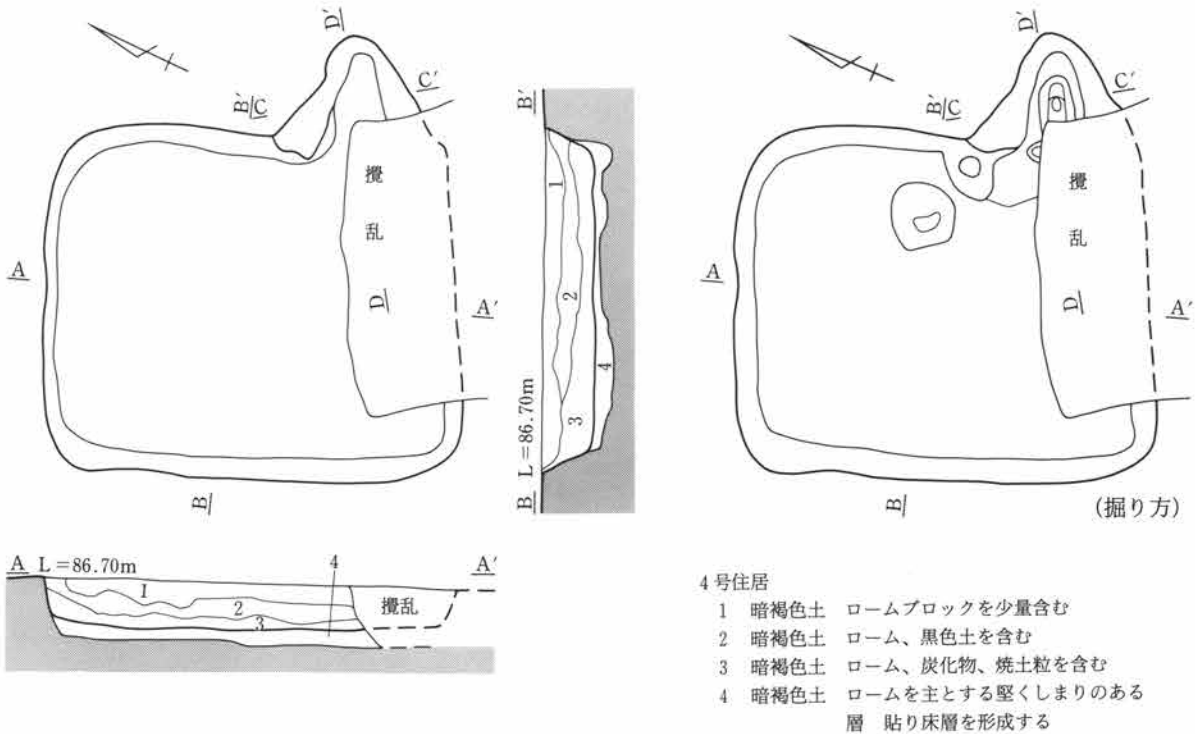
重複 住居南西部で8号住居と重複する。新旧関係については平面および断面観察から5号住居が古く、8号住居が新しい。なお床面までの深さは5号住居の方が深く、8号住居は埋没土中に構築されている。

主軸方向 N-90°-E 床面積 (19.5㎡)

形態 主軸方向の対辺に長軸をもつ横長長方形を呈する。南東隅部分が不明瞭であるため平面形態が確定できないものの、確認部から推定するとあまり歪みはなく、ほぼ矩形を示していると考えられる。

規模 4.2m×5.8m

カマド 東壁に設置される。位置は南東隅が不明瞭であるため明確ではないが、検出状況からほぼ中央であるとみられる。さらに先端部を中心に攪乱が認められ、残存状況はあまり良好ではない。袖部には石英閃緑岩の大型礫が埋設され、周辺にはカマド構築材とみられる石英閃緑岩、角閃石安山岩の礫材が

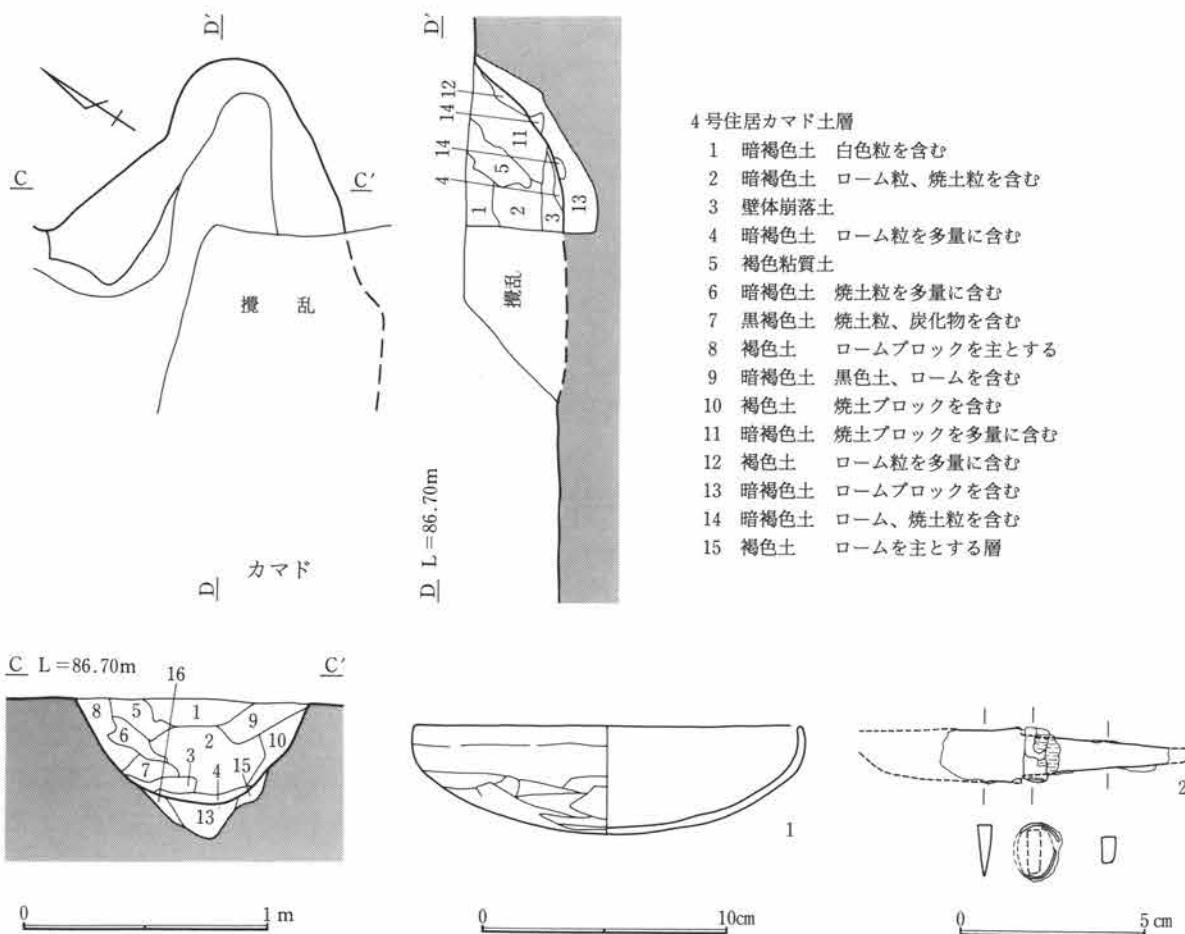


4号住居

- 1 暗褐色土 ロームブロックを少量含む
- 2 暗褐色土 ローム、黒色土を含む
- 3 暗褐色土 ローム、炭化物、焼土粒を含む
- 4 暗褐色土 ロームを主とする堅くしまりのある層 貼り床層を形成する

第24図 4号住居

II 発掘調査の記録



- 4号住居カマド土層
- 1 暗褐色土 白色粒を含む
 - 2 暗褐色土 ローム粒、焼土粒を含む
 - 3 壁体崩落土
 - 4 暗褐色土 ローム粒を多量に含む
 - 5 褐色粘質土
 - 6 暗褐色土 焼土粒を多量に含む
 - 7 黒褐色土 焼土粒、炭化物を含む
 - 8 褐色土 ロームブロックを主とする
 - 9 暗褐色土 黒色土、ロームを含む
 - 10 褐色土 焼土ブロックを含む
 - 11 暗褐色土 焼土ブロックを多量に含む
 - 12 褐色土 ローム粒を多量に含む
 - 13 暗褐色土 ロームブロックを含む
 - 14 暗褐色土 ローム、焼土粒を含む
 - 15 褐色土 ロームを主とする層

第25図 4号住居と出土遺物

崩落している。規模は焚口45cm、奥行き80cmを計測する。

内部施設 床面上では検出されなかったが、掘り方調査により北東隅に幅15cmの周溝状の掘り込みが部分的に認められている。

床 暗褐色土による張り床が施される。8号住居の下部も床面までの深度が5号住居の方が深いため、重複部分についても床面は検出されている。張り床はほぼ水平で堅く良好な面が形成されている。

掘り方 土坑状の掘り込みが重複して加えられ、ロームを含む暗褐色土が埋土される。

遺物出土状態 1～3・5～7・11・19が南東部床面上、12・17・18が北西部で床面から10cm程度上位、13が西側で10cm床面から上位、15・16・20がカマド、21が南東部床面上、10・14が掘り方、4・8・9が埋没土から出土している。

時期 出土遺物から8C.前葉比定される。

6号住居 (第29～32図 P L. 12・97)

位置 Ax・y-2～4

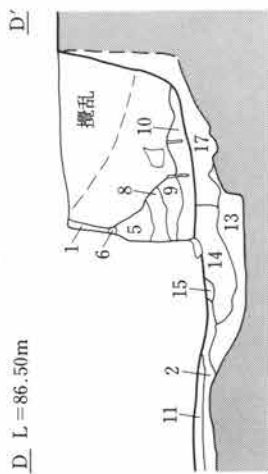
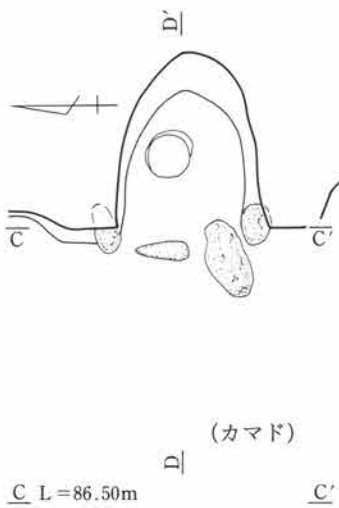
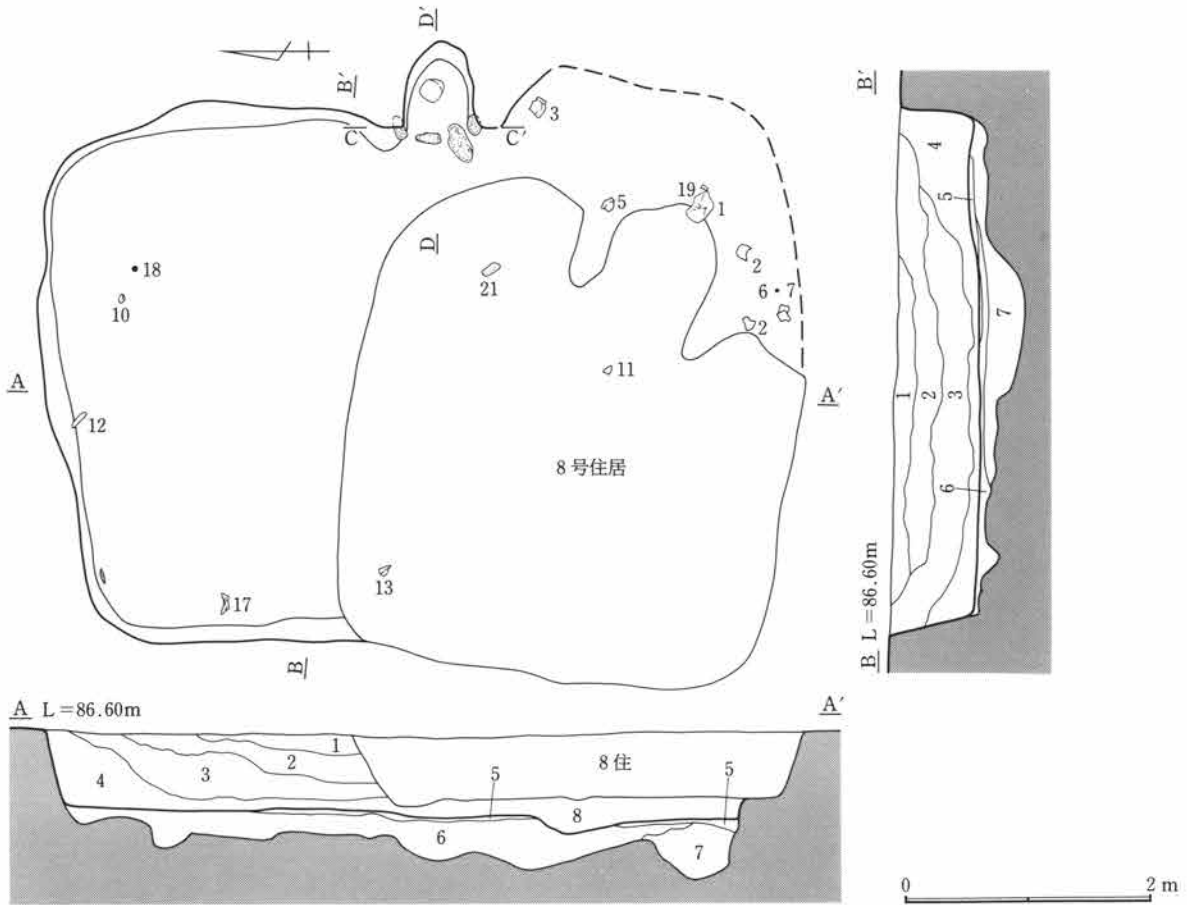
重複 7号住居が西接するが、この部分に2号溝が縦断しているため両住居間の直接的な重複関係は把握できていない。

主軸方向 N-74°-E **床面積** 22.5㎡

形態 主軸方向に長軸をもつ縦長長方形を呈する。平面形態をみるとやや歪みが認められるが、検出時に生じたものとみられ、本来は各辺とも直線的で矩形を示すものと思われる。

規模 4.9m×5.6m

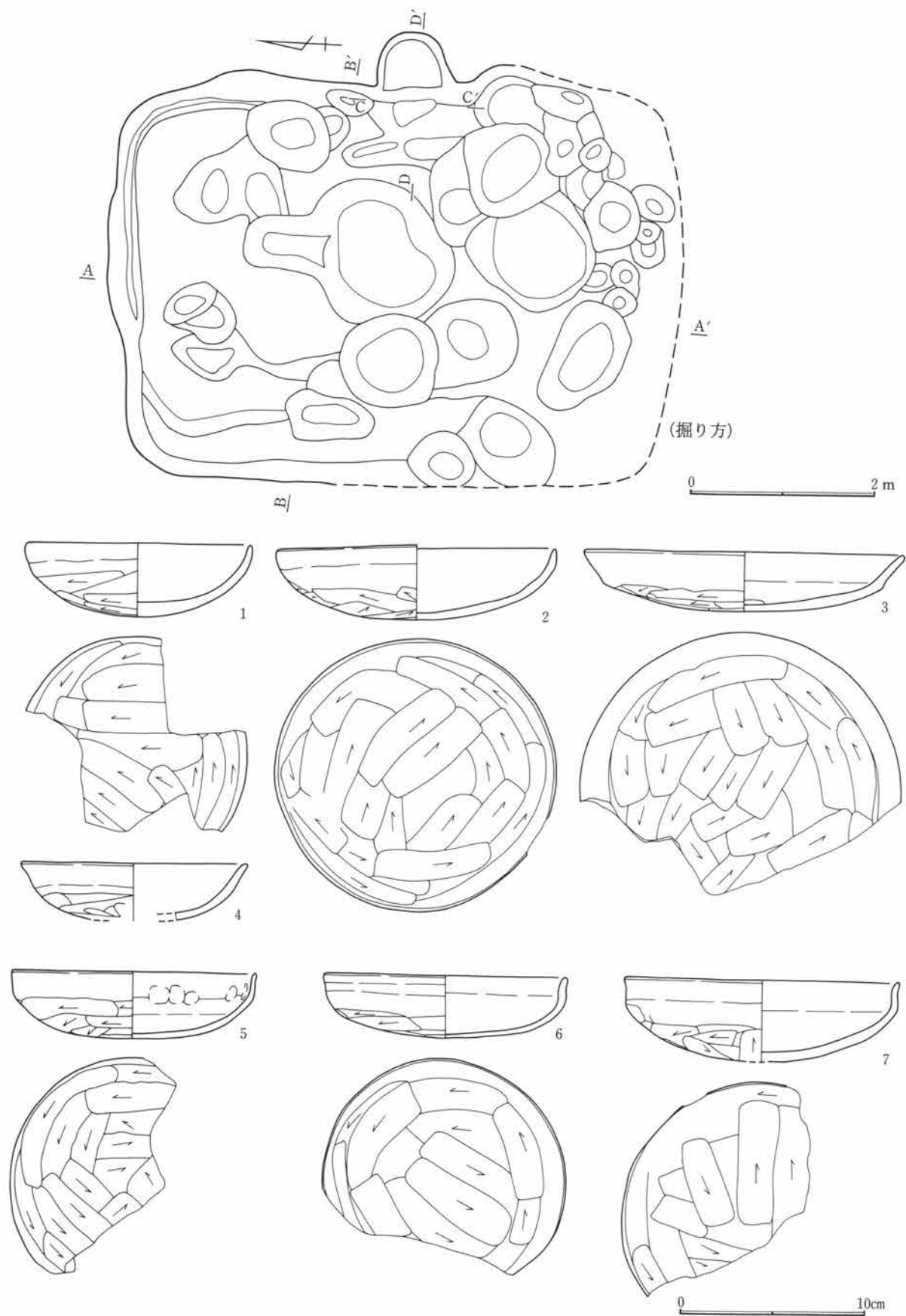
カマド 東壁に設置され、北東隅から3分の2程度南寄りに位置する。天井部、煙道は残存せず、ローム粒、焼土および白色軽石粒などを混入する暗褐色土により埋没する。両袖はロームブロックを多く含む褐色土を主として構築され、幅15cmで20cm～40cm住居内に張り出す。



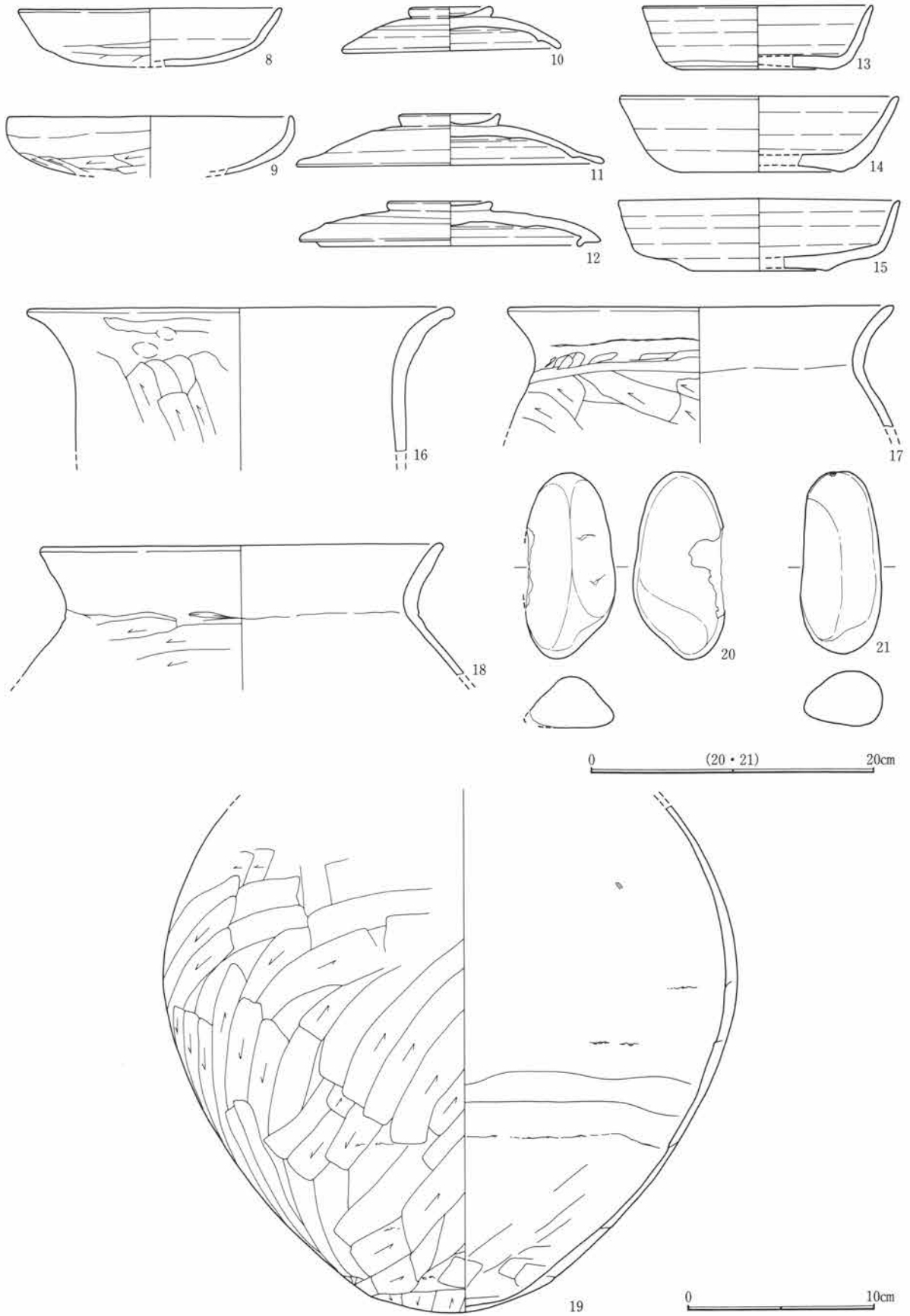
- 5号住居
- 1 暗褐色土 白色軽石粒を含む
 - 2 黒褐色土 白色軽石粒を少量含む
 - 3 褐色土 白色軽石粒を少量含み粘性をもつ
 - 4 暗褐色土 ロームブロックを含む
 - 5 暗褐色土 ロームを主とした貼り床を形成する
 - 6 暗褐色土 ローム粒、白色軽石粒、焼土を含む
 - 7 暗褐色土 ロームブロックを大量に含む
- 5号住居カマド土層
- 1 暗褐色土 ローム、焼土を含む
 - 2 黒褐色土 軽石粒、焼土粒を含む
 - 3 褐色土 ロームを多量に含む
 - 4 灰褐色土 焼土を含む粘質土
 - 5 褐色土 焼土を多量に含む粘質土
 - 6 暗褐色土 焼土、ロームを多く含む
 - 7 暗褐色土 黒色土を多く含む
 - 8 暗褐色土 焼土、ロームを含む
 - 9 褐色土 焼土を多量に含む
 - 10 黒褐色土 灰、焼土、ロームを含む
 - 11 暗褐色土 ロームを多く含む貼り床層
 - 12 暗褐色土 ロームブロックを含む
 - 13 暗褐色土 ロームブロック、焼土ブロックを含む
 - 14 黒褐色土 ローム粒、焼土粒を含む
 - 15 焼土ブロック
 - 16 暗褐色土 ローム粒を多く含む
 - 17 暗褐色土 ローム、焼土を含む

第26図 5号住居

II 発掘調査の記録



第27図 5号住居と出土遺物



第28図 5号住居出土遺物

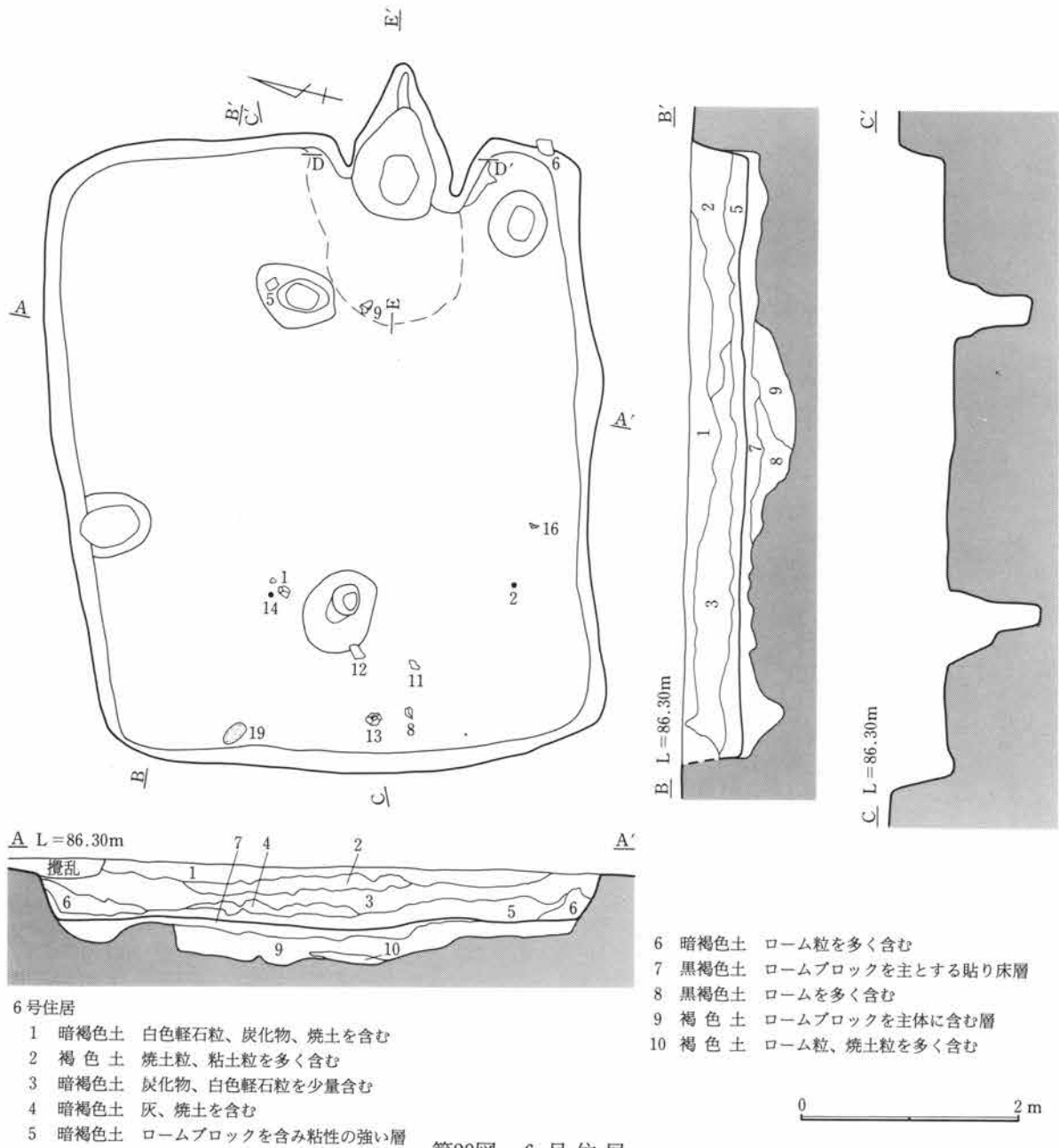
II 発掘調査の記録

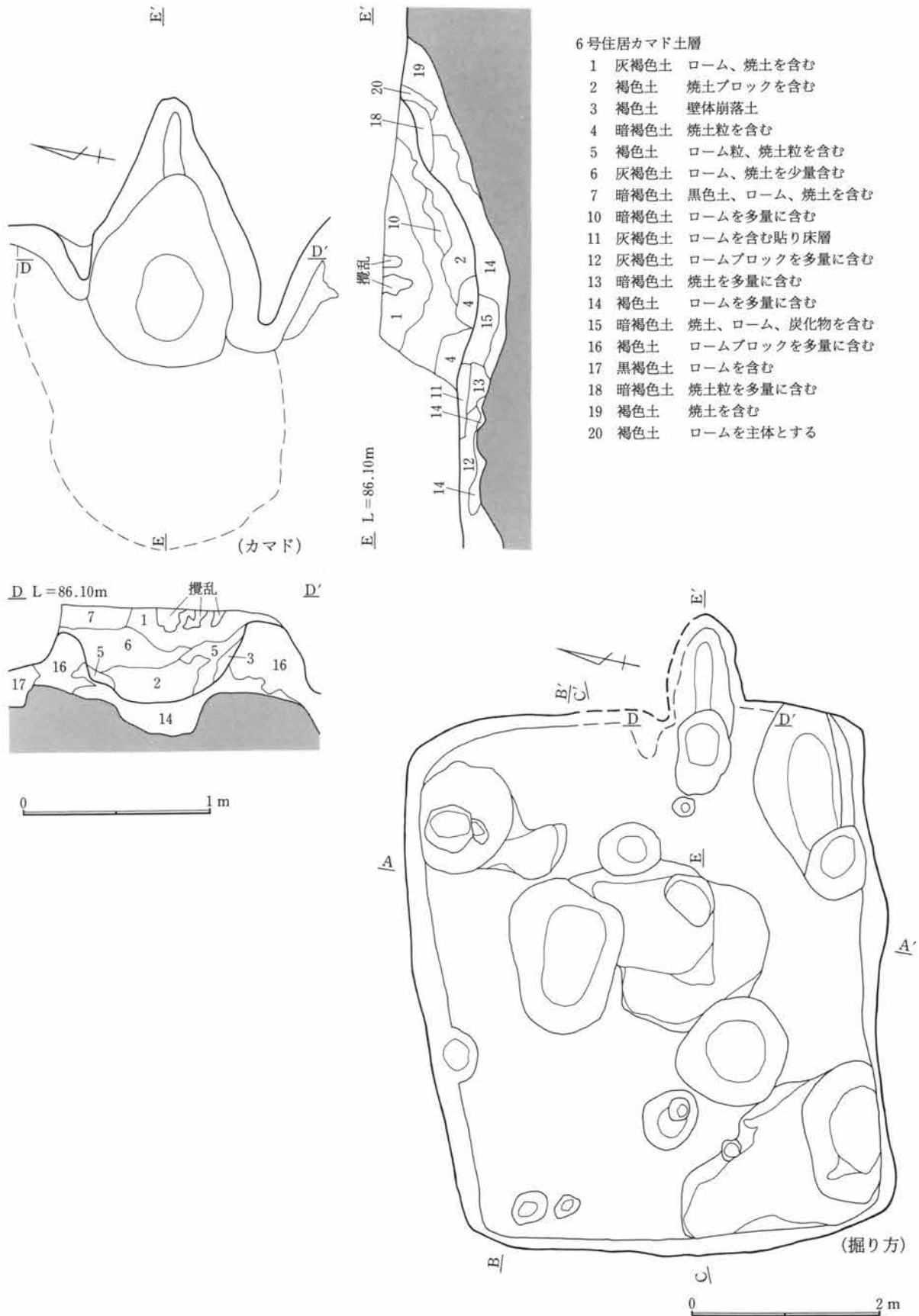
内部施設 南東隅に径50cm、深さ16cmの貯蔵穴が検出されている。穴内からはとくに遺物の出土は確認されていない。また住居中央主軸方向の東側および西側にそれぞれ1カ所づつ小穴が認められる。東側小穴は径60cm、深さ70cm、西側小穴は径60cm、深さ80cmで2穴間は2.8mの距離をもつ。この小穴については柱穴と考えられるが、他には認められていないことから2本による支柱構成となる可能性がある。なお、西壁に接して径60cm、深さ30cmの掘り込みが検出されている。

床 ロームブロックを含む黒色土により張り床が施される。ほぼ水平で堅く良好な面が形成されている。
掘り方 土坑状の掘り込みが不規則に加えられ、褐色土を主として埋土される。

遺物出土状態 遺物量はやや多いが床面出土は少ない。2・8・9・11・13・16・19は南西部で床面から20cm~40cm上位、1・12が北西部小穴、5が北東部小穴、6がカマドから検出され、3・4・7・10・14・15・17・18は埋没土出土である。

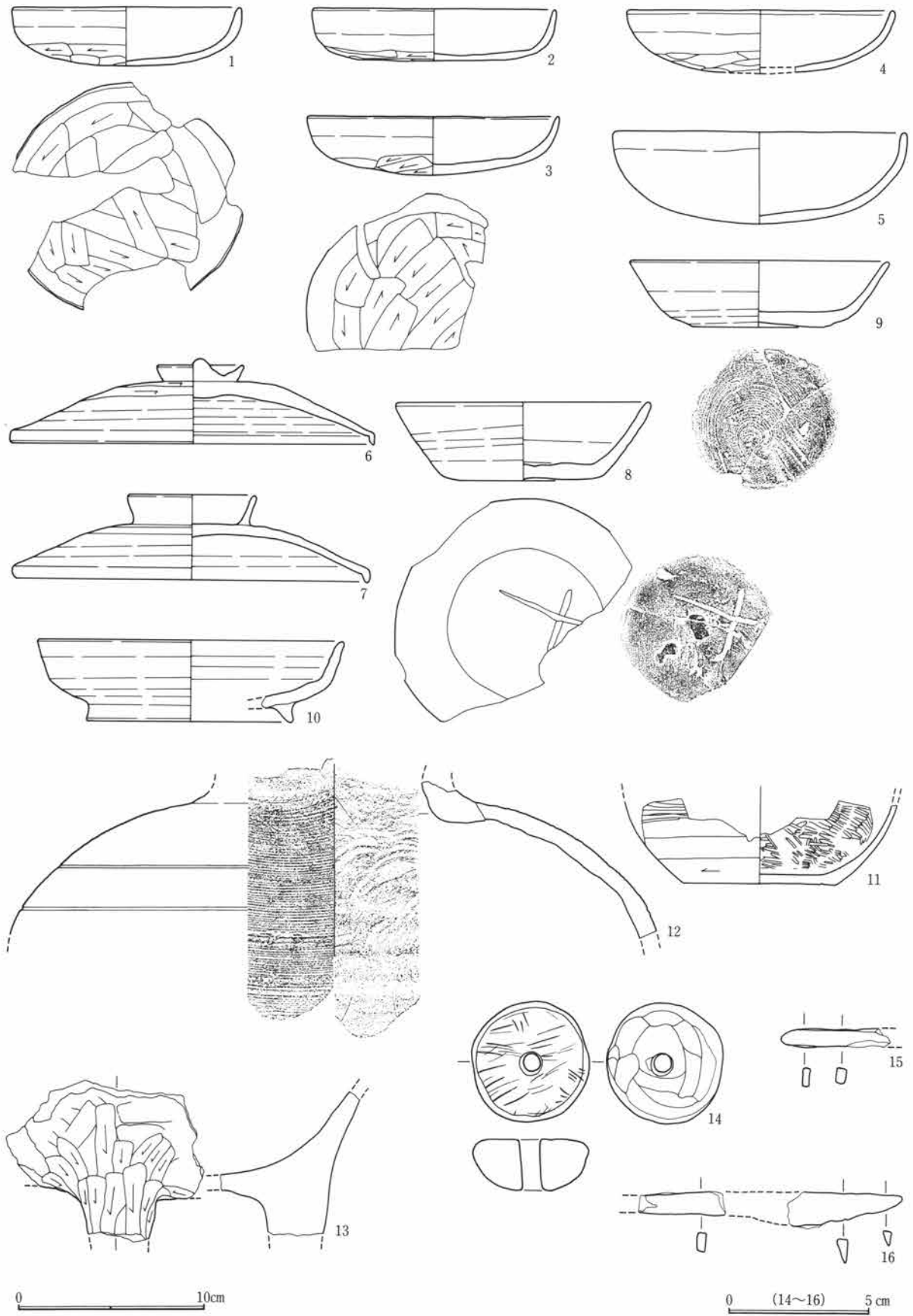
時期 出土遺物から8C.後葉に比定される。



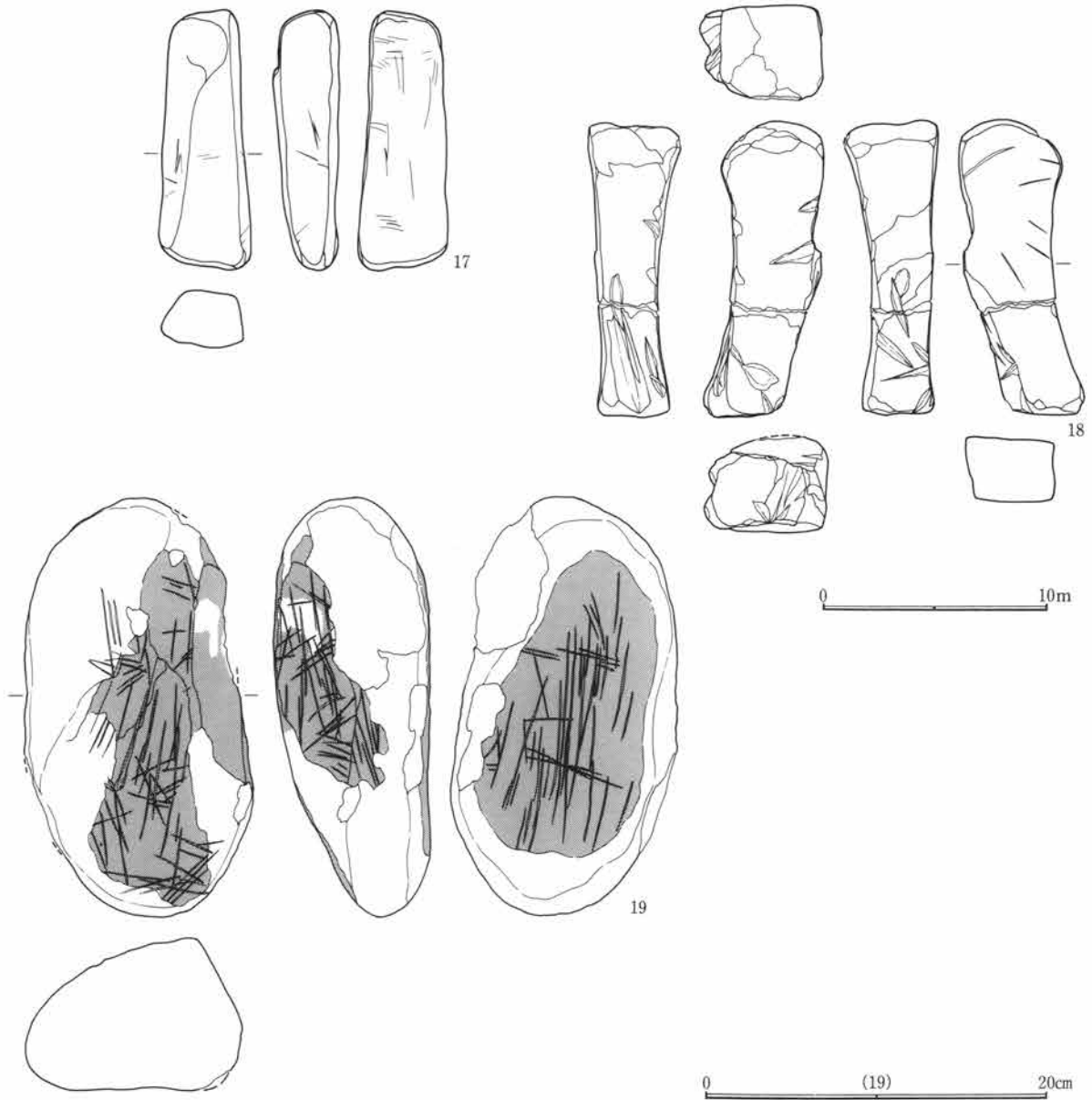


第30図 6号住居

II 発掘調査の記録



第31図 6号住居出土遺物



第32図 6号住居出土遺物

7号住居 (第33・34図 PL. 13・98)

位置 Aw・x-2・3

重複 カマド端部および住居北西部に溝状遺構が接するほか、住居、土坑との重複はみられない。

主軸方向 N-93°-E 床面積 8.2m²

形態 主軸方向に長軸をもつ縦長長方形を呈する。住居平面形には多少の歪みが認められるが、これは検出状態によるものとみられ本来は直線的な形状を示していたと考えられる。なお、カマド北側にあたる北東隅部には張り出しをもち、この部分について

は弧状になっている。

規模 2.6m×3.9m

カマド 東壁に設置されるが、北東隅から3分の2程度南寄りに位置する。左袖は粘性の強い褐色土により構築され、端部には粗粒安山岩の礫材を埋置し幅40cmで60cm程度住居内に張り出す。右袖部は未検出であるがこの部分には粗粒安山岩および石英閃緑岩の礫材が散布しており、左袖同様に袖部が構築されていたものとみられる。

内部施設 床面上では周溝、貯蔵穴、柱穴などにつ

II 発掘調査の記録

いては検出されていない。

床 ロームブロックを多く含む黒褐色土を掘り方埋土とするが、この上面を床面としている。

掘り方 土坑状の掘り込みが複数加えられ、黒褐色土を主として埋土される。

遺物出土状態 3・4が南側床面上、2・7が中央部分で床面から20cm前後上位で出土し、他遺物はいずれも埋没土から検出されている。

時期 出土遺物から10C.前半に比定される。

8号住居 (第35・36図 P.L. 14・98)

位置 Av・w-0・1

重複 北半部で5号住居と重複するが、8号住居が新しい。

主軸方向 N-100°-E **床面積** 8.7m²

形態 住居の北半部分が5号住居埋没土中に構築され遺構の確認に不明確な部分を生じている。同時に残存状況も不良であり形態に歪みが認められているが、確認部分から推定すると主軸方向に長軸をもつ

縦長長方形を呈するものと考えられる。

規模 3.5m×3.7m

カマド 東壁中央に設置される。カマド部も残存状態は不良であり、遺構確認に不明確な部分がある。

上位部分は耕作による攪乱もあり、遺物も周辺に散布している。規模は焚口90cm、奥行き110cmを計る。

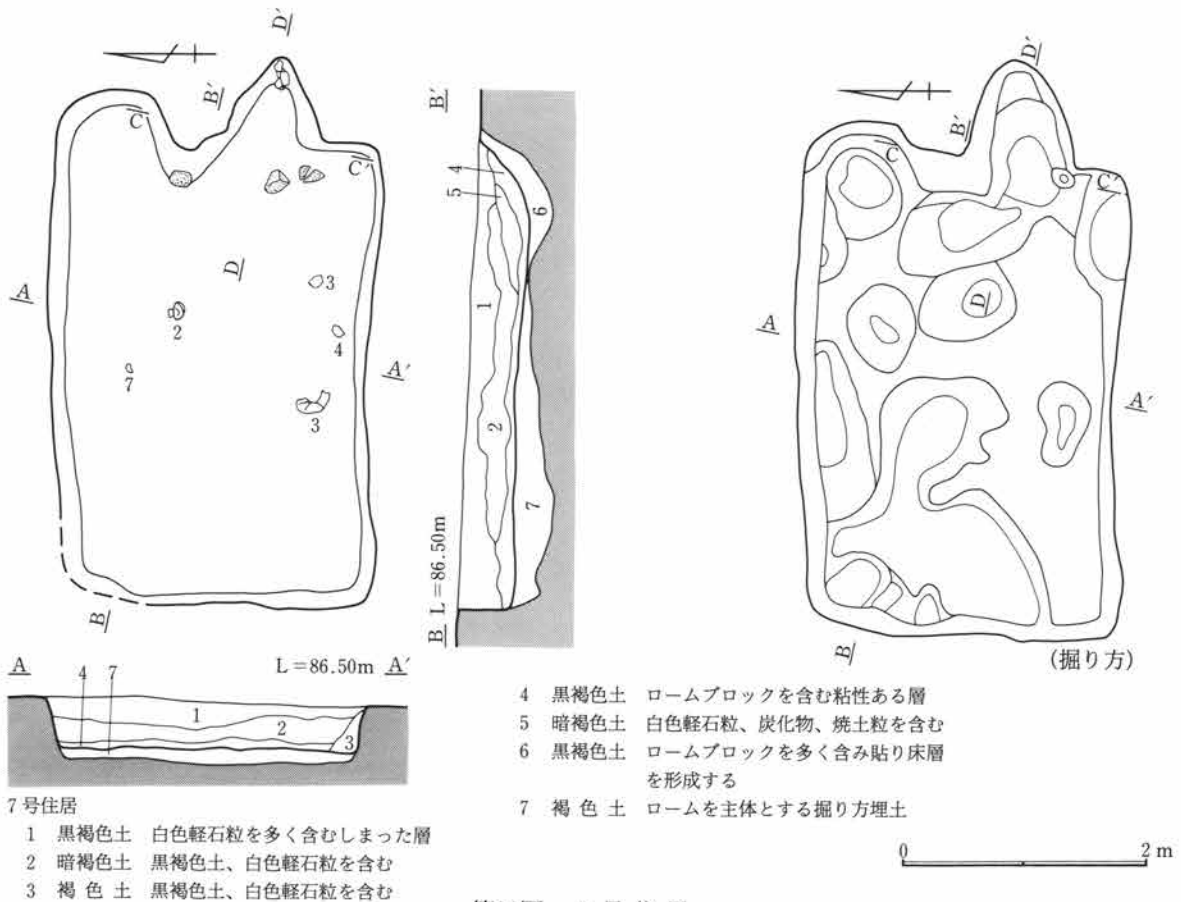
内部施設 南東隅に径55cm×45cm、深さ10cmの貯蔵穴が検出されている。このほか周溝などについては確認されていない。

床 5号住居埋没土中に掘り込まれるため、暗褐色土による張り床が施される。ほぼ水平で堅く良好な面が形成されている。

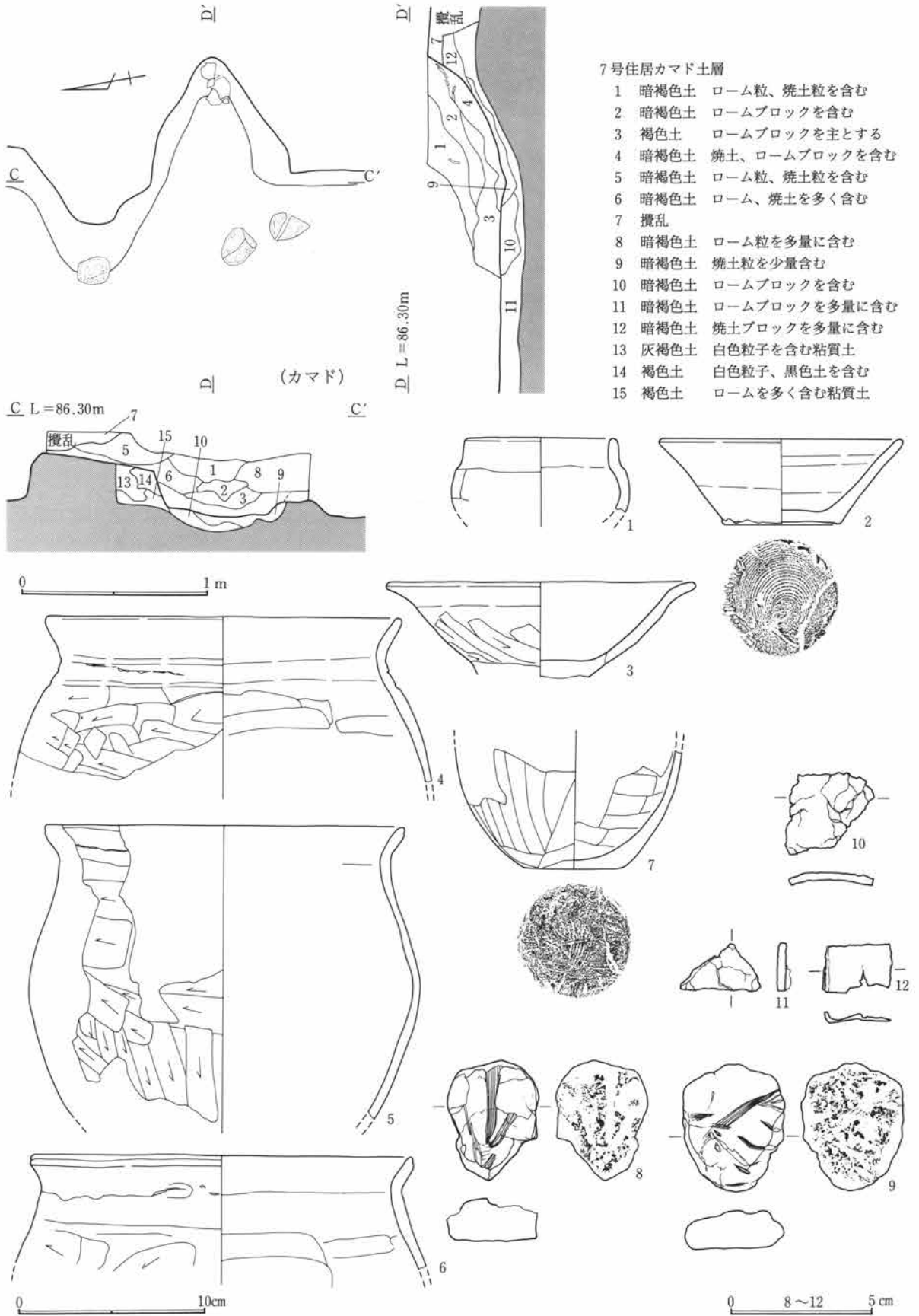
掘り方 埋没土に存在することから確認できず不明である。

遺物出土状態 2・3・5・7・11・13がカマド部分、4・10が南東部で検出され、他遺物は埋没土から出土している。

時期 出土遺物から9C.中葉に比定される。



第33図 7号住居



第34図 7号住居と出土遺物

II 発掘調査の記録

9号住居 (第37~40図 PL, 15・99・100)

位置 Aw・x-5・6

重複 住居および土坑などの他遺構との重複はみられない。

主軸方向 N-101°-E 床面積 13.4m²

形態 主軸方向の対辺に長軸をもつ横長長方形を呈するが、短軸との差は少なく方形平面に近い形状を示している。各辺は直線的であり歪みはみられないが、東西辺をみると西側が東側に比べやや短くなっているため矩形を示さない。

規模 3.8m×4.1m

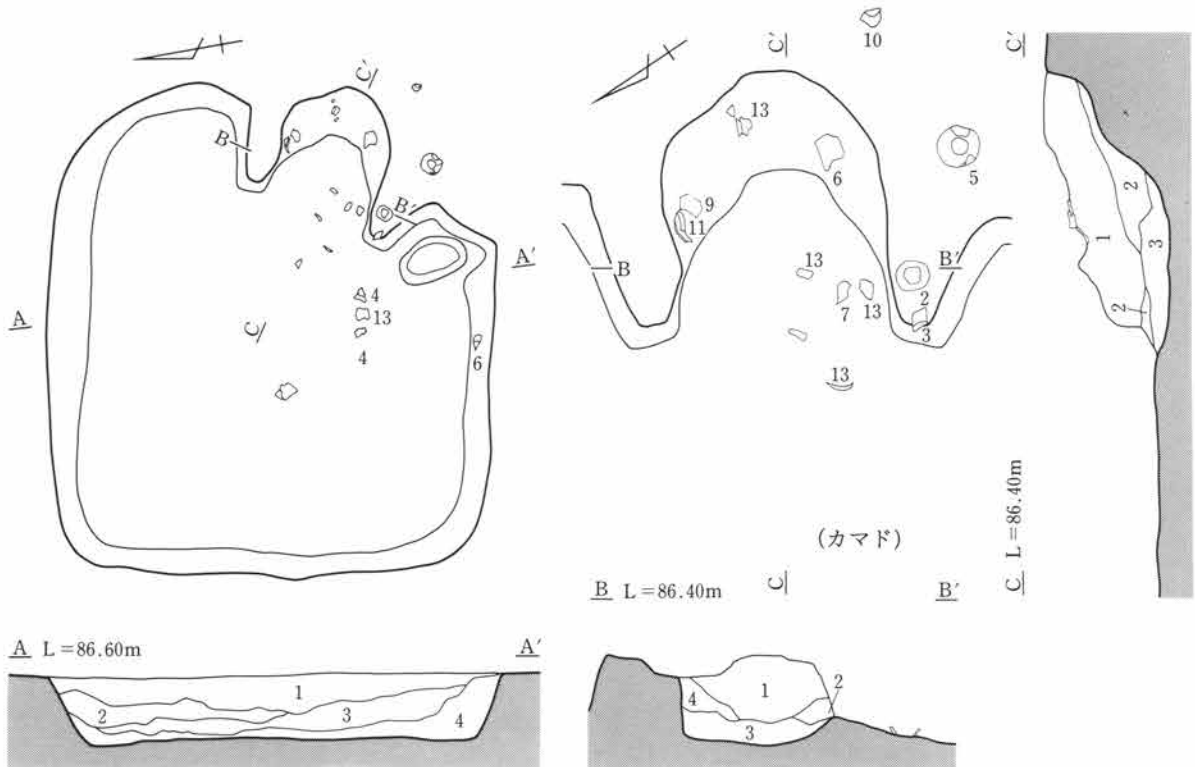
カマド 東壁中央やや南寄りに設置される。天井部、煙道については残存しない。カマド中央部分には焼土が堆積し、前面には灰が散布している。両袖は褐色粘質土により構築され、幅15cmで50cm程度住居内

に張り出す。また右袖端部には粗粒安山岩、左袖端部には角閃石安山岩が構築礫としてそれぞれ埋置されている。規模は焚口40cm、奥行き110cmを計測する。なおカマド内からは土器片などの出土もあるが、とくに中央部には8のミニチュア土器が底面に接して検出されており注目される。

内部施設 床面上では周溝、柱穴などについては検出されていない。しかし掘り方調査によって内部施設に関連する可能性のある掘り込みもみられているが、これについては掘り方の部分で説明する。

床 褐色土と黒色土の混土を掘り方埋土とするが、この上面を床面としている。ほぼ水平で、中央部分では堅く良好な面を形成している。

掘り方 住居全域が20cm前後掘り下げられ、さらに中央部および各隅に土坑状の掘り込みが加えられ



8号住居

- 1 暗褐色土 白色軽石粒を多く含む
- 2 黒褐色土 白色軽石粒を含む粘性のある層
- 3 暗褐色土 白色軽石粒を少量含む
- 4 暗褐色土 ロームブロックを含む粘性のある層

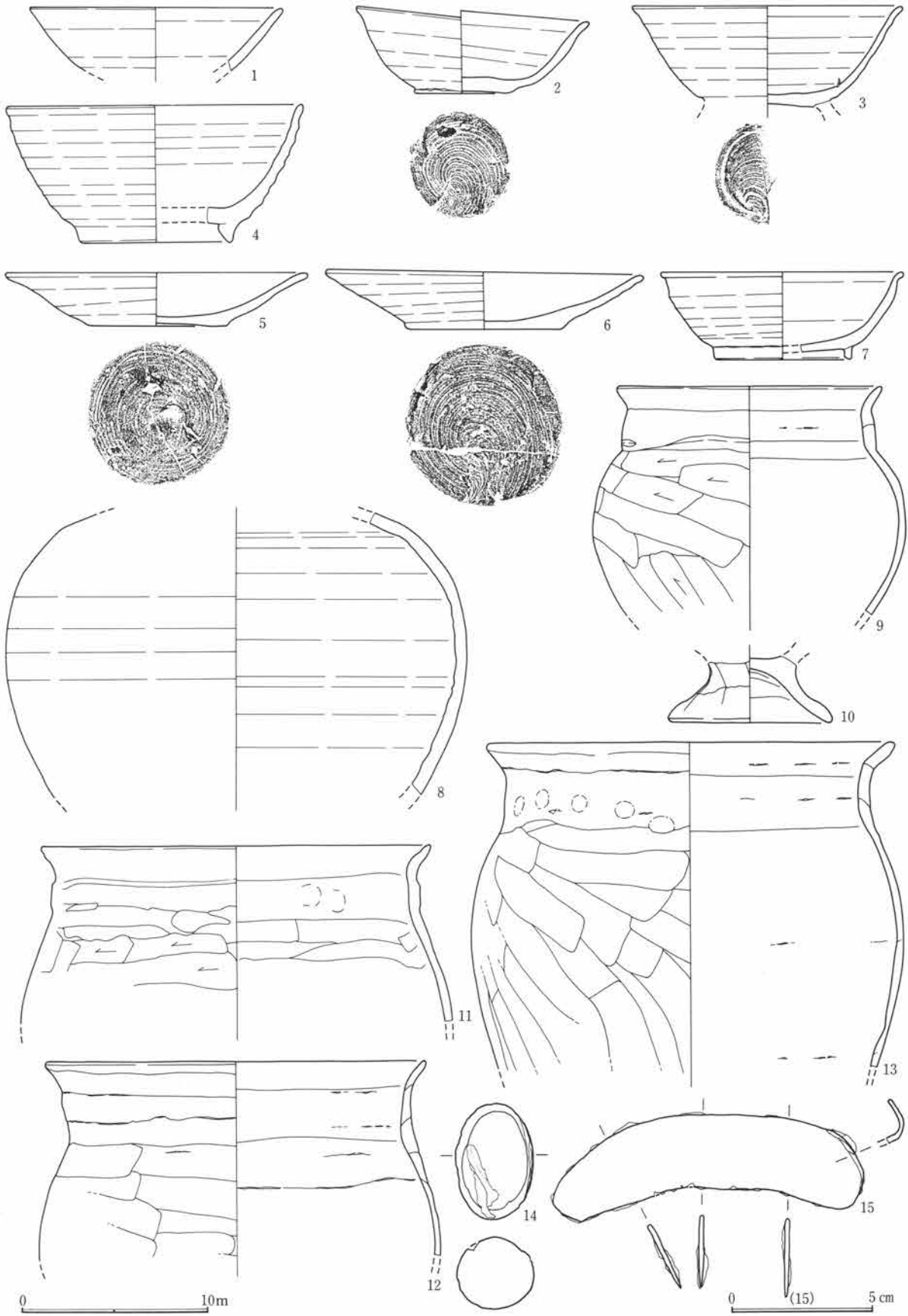
0 2 m

8号住居カマド土層

- 1 暗褐色土 ロームブロック、焼土粒を含む
- 2 暗褐色土 ローム、焼土を含む
- 3 暗褐色土 焼土粒を多量に含む
- 4 暗褐色土 ローム粒を多量に含む

0 1 m

第35図 8号住居



第36図 8号住居出土遺物

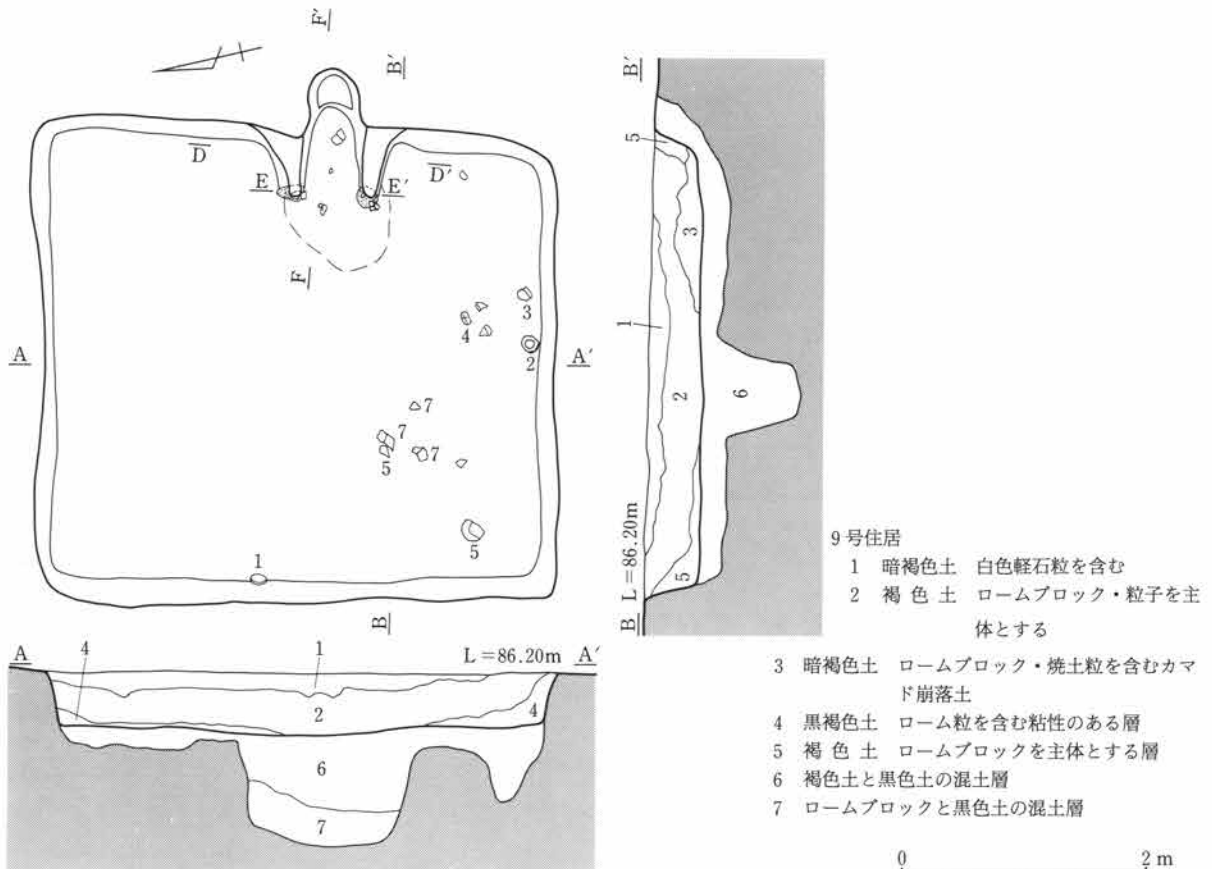
II 発掘調査の記録

る。これらの掘り込みについては中央部のものは明らかに床面下で確認したが、他掘り込みは床面の硬化面が認められない住居周辺部であることも関係して掘り方であるか、床面上での掘り込みであるか明確な調査所見が得られていない。それぞれの規模は次のとおりである。なお、深さは床面からの深度を計測している。中央部掘り方は径150cm、深さ90cm、北東隅掘り込みは径85cm×55cm、深さ30cm、南東隅掘り込みは径100cm、深さ30cm、南西隅掘り込みは径90cm、深さ20cm、南壁中央小穴は径45cm、深さ60cm、北西隅小穴は径55cm、深さ50cm、北壁中央掘り込みは径100cm、深さ20cmとなる。このうち南壁小穴および北西隅小穴の2穴は配置に問題があるものの規模・形態から柱穴に関連することが考えられる。また南東隅掘り込みは位置からみて貯蔵穴としての可能性があるが、ほかの3カ所の掘り込みと類似した規模でもあり確定するには至らない。なお埋土は褐色土と黒色土の混土により行われる。

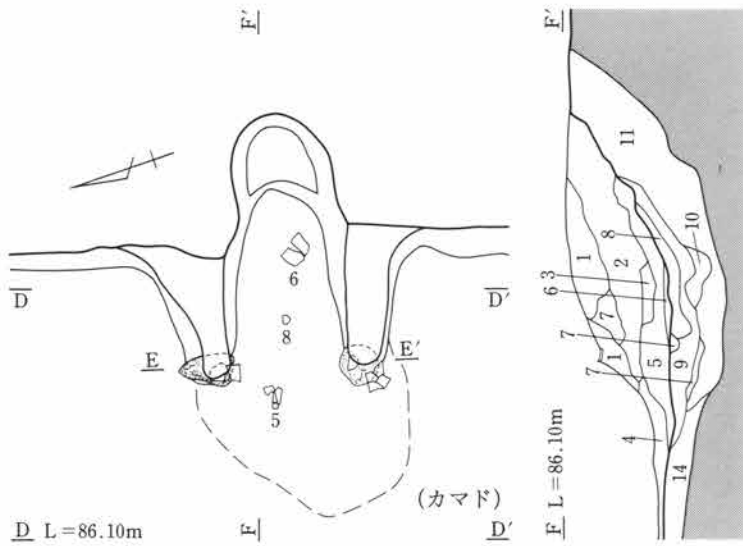
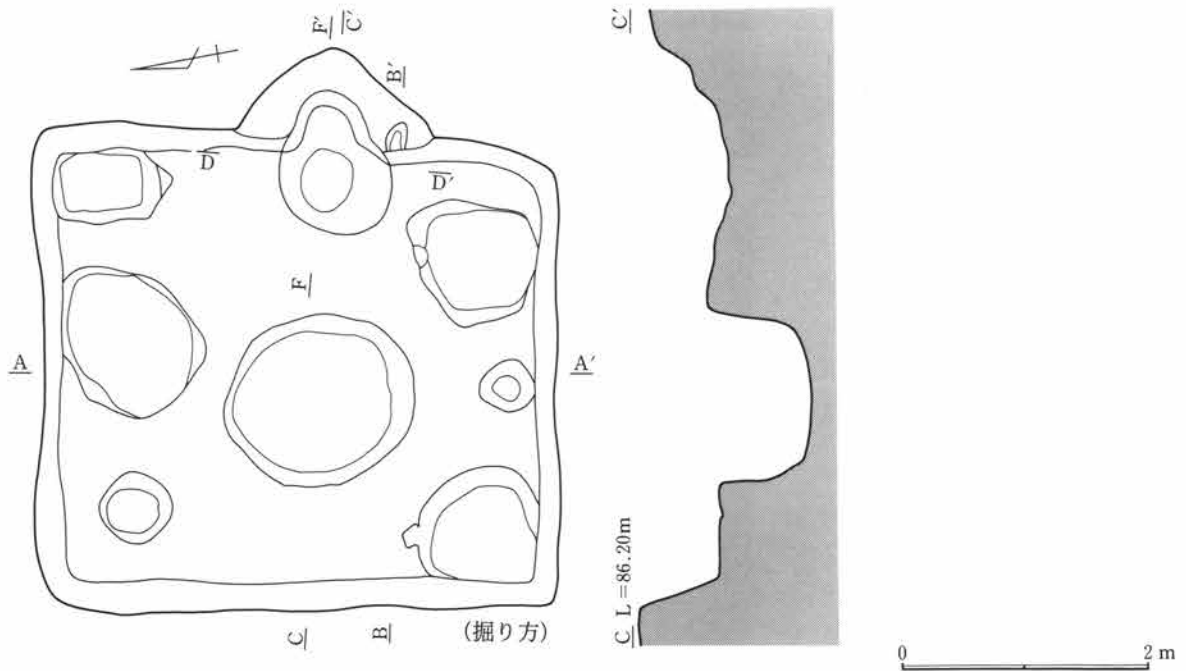
遺物出土状態 土器類は1が西壁、2～4が南東部、5・6がカマド、7が南西部から検出されている。37の砥石は埋没土出土である。

なおこの住居からは特徴的な遺物として8～36の各種土製品がある。このうち8の手捏状のミニチュア土器についてはカマド内出土であることが確認されているが、他例についてはいずれも埋没土中でありその出土状態は不明である。これらの土製品は棒状(9～16)、玉状(18・19)、円盤状(20～22)、板状(23)、植物茎、織布の圧痕をもつもの(23～36)などの種類があり、17は手捏土器の輪積部剥落片とみられる。このような土製品が集中する住居は今回の調査では9号住居のみである。これらの性格については8・17以外は形態上もやや不規則で、さらに出土状態も不明であることから明らかではないが、類例を求めるとすれば“土製模造品”に可能性があるように考えられる。

時期 出土遺物から8C.代比定される。

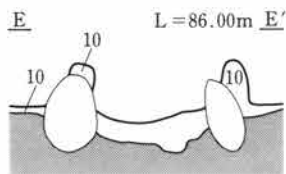
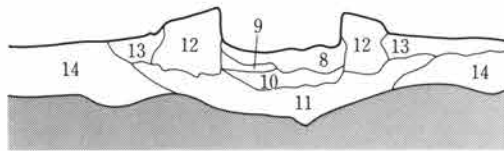


第37図 9号住居



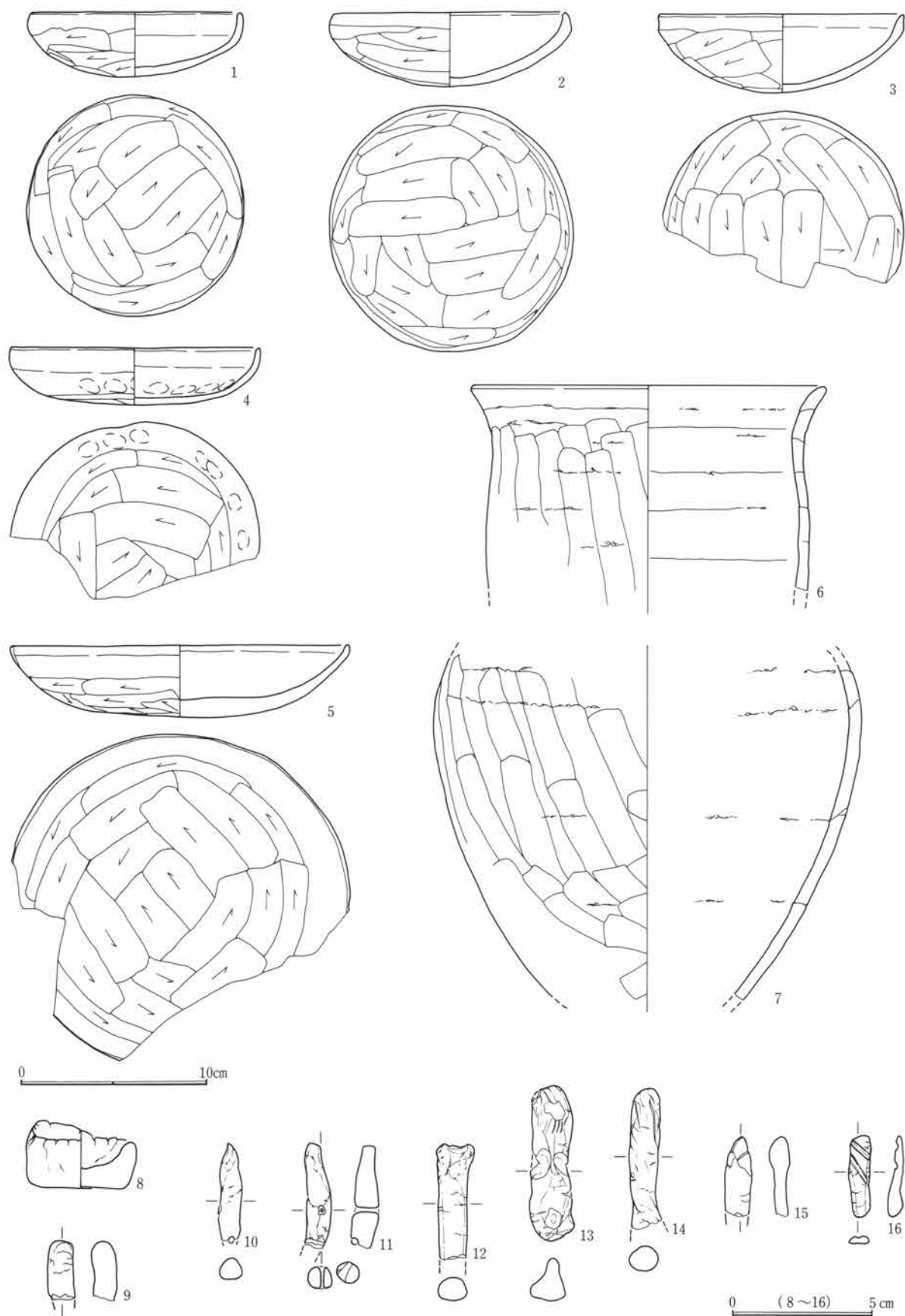
9号住居カマド土層

- 1 暗褐色土 白色粒子を含む
- 2 褐色土 焼土粒を含む
- 3 黒褐色土 褐色土を多量に含む
- 4 暗褐色土 ローム粒を多量に含む
- 5 褐色土 焼土ブロックを多量に含む
- 6 焼土ブロックを主体とする層
- 7 ロームブロック
- 8 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む
- 9 黒褐色土 焼土、灰を含む
- 10 褐色土 ローム粒を多量に含む
- 11 褐色土 ロームブロックを多量に含む
- 12 褐色粘質土
- 13 暗褐色土 ロームブロックを含む貼り床層
- 14 暗褐色土 ローム粒・ブロックを多量に含む



第38図 9号住居

II 発掘調査の記録



第39図 9号住居出土遺物



第40図 9号住居出土遺物

10号住居 (第41・42図 P L. 16・100)

位置 Bb・c-4・5

重複 住居および土坑など他遺構との重複は認められない。

主軸方向 N-100°-E 床面積 8.6m²

規模 2.9m×3.8m

カマド 東壁に設置され、北東隅から3分の2程度南寄りに位置する。天井部、煙道は残存しないが、

II 発掘調査の記録

埋没土には天井部崩落土である火熱を受けた暗灰褐色粘質土がブロック状に堆積する。また右側壁には砂岩が1個残存しており、カマド構築に礫材が用いられていたものとみられる。両袖はロームを含む暗褐色土により構築され幅15cmで20cm住居内に張り出す。規模は焚口80cm、奥行き70cmを計測し、前面には灰、焼土の散布が確認されている。

内部施設 住居南東隅に径60cm、深さ25cmの貯蔵穴が検出されている。穴内には2・5・6・9などの土器類が出土する。このほか周溝、柱穴については検出されていない。

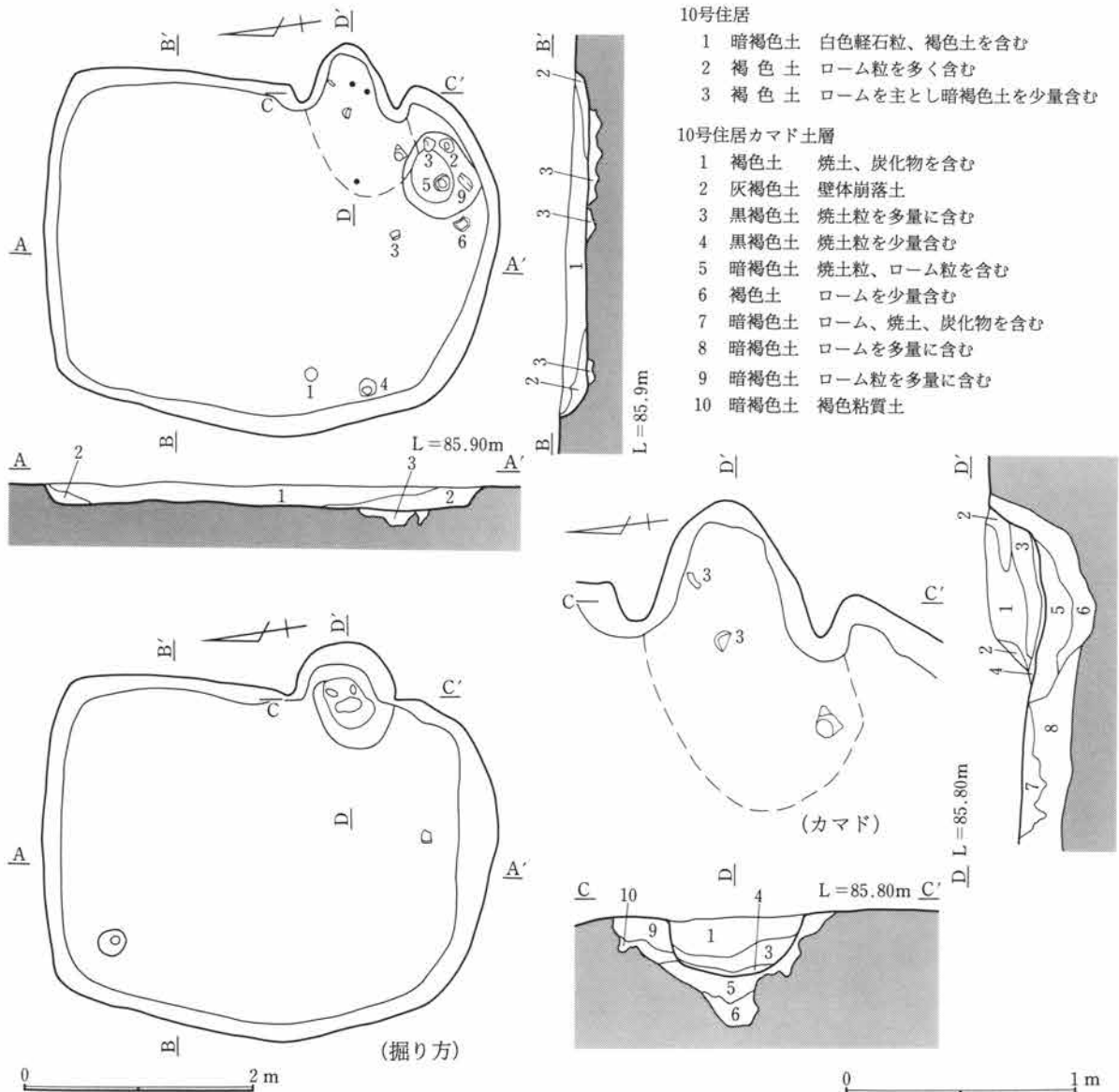
床 ほぼ水平な面が形成されるが、とくに硬化した

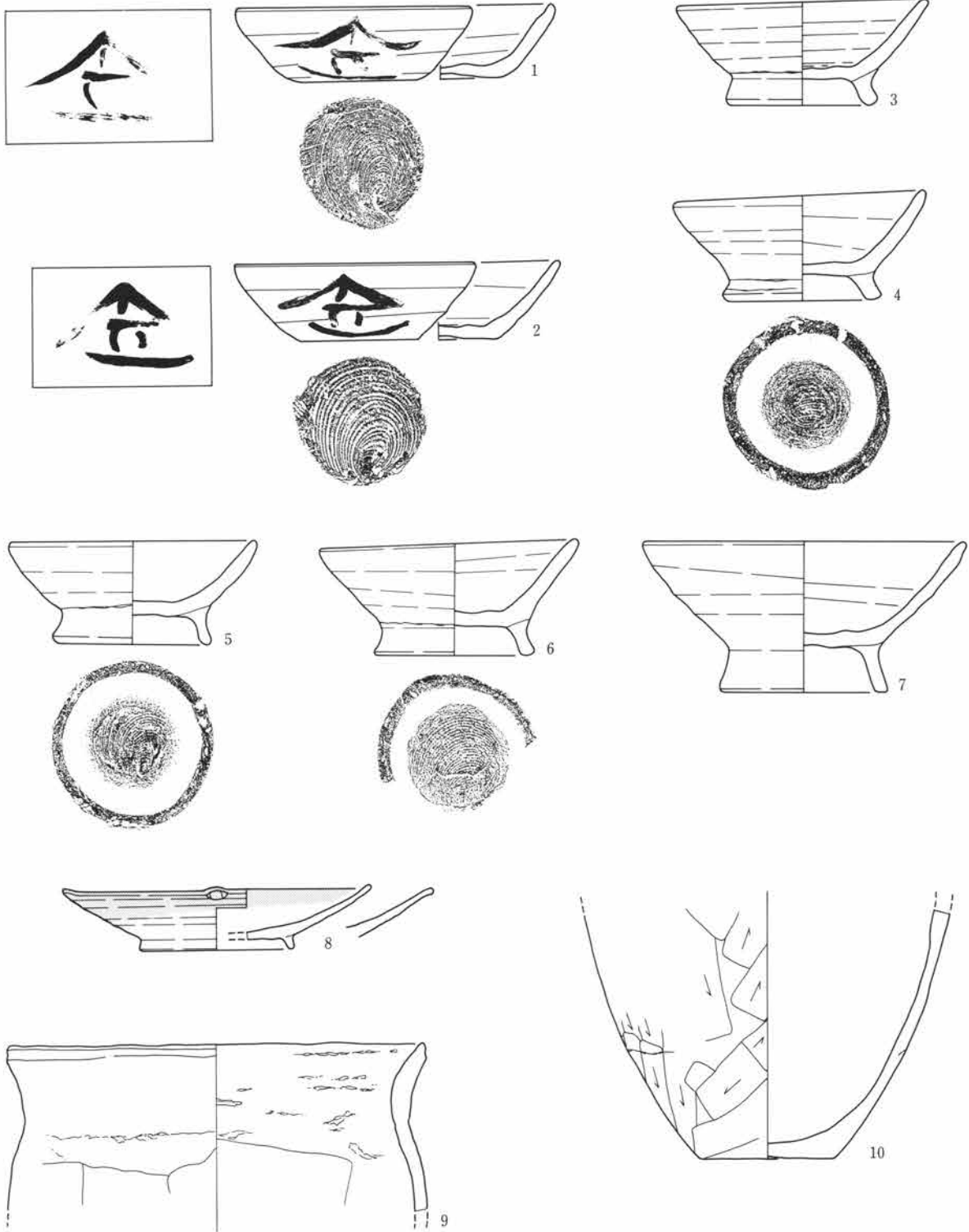
部分は検出されていない。

掘り方 掘り方は浅く、不規則に5cm~10cm掘り下げられ暗褐色土が埋め戻される。カマド部も掘り方をもち、居住部よりやや深めで20cm程度皿状に掘り込まれ、やはり暗褐色土が埋土されている。

遺物出土状態 遺物はカマド部および住居南半部に散布し、とくに貯蔵穴にやや集中する傾向がみられる。1・2の墨書土器は同一の書体をもち、1は南西部床面上、2は貯蔵穴から検出された。3・10はカマド内、4は南西隅床面上、5・6・9は貯蔵穴、7・8は埋没土から出土している。

時期 出土遺物から10C.後半に比定される。





第42図 10号住居出土遺物

II 発掘調査の記録

11号住居 (第43~45図 P.L. 17・101)

位置 Bc・d-0・1

重複 住居、土坑との重複は認められない。

主軸方向 N-87°-E 床面積 10.8㎡

形態 主軸方向の対辺に長軸をもつ横長長方形を呈する。各隅は丸みをもち、とくに北東隅および南東隅は弧状に張り出しぎみとなっている。

規模 3.2m×4.4m

カマド 東壁中央やや南寄りに設置される。天井部、煙道は残存しないが、埋没土には天井部崩落土とみられる火熱を受けた灰白色粘質土がブロック状に堆積している。カマド構築に際しては、礫材が用いられており、両袖、支脚および壁部にも部分的に残存している。礫材は右袖(14)が凝灰岩、左袖がひん岩および角閃石安山岩、壁部には粗粒安山岩、角閃石安山岩が使用されている。カマド中央部には15の支脚が立位で検出され、原位置を保っているものとみられる。下端部を打ち欠き、4分の1程度を底面に埋め込んでいる。規模は焚口40cm、奥行70cmを計測する。

内部施設 住居北西部に径70cm、深さ20cm、南西部

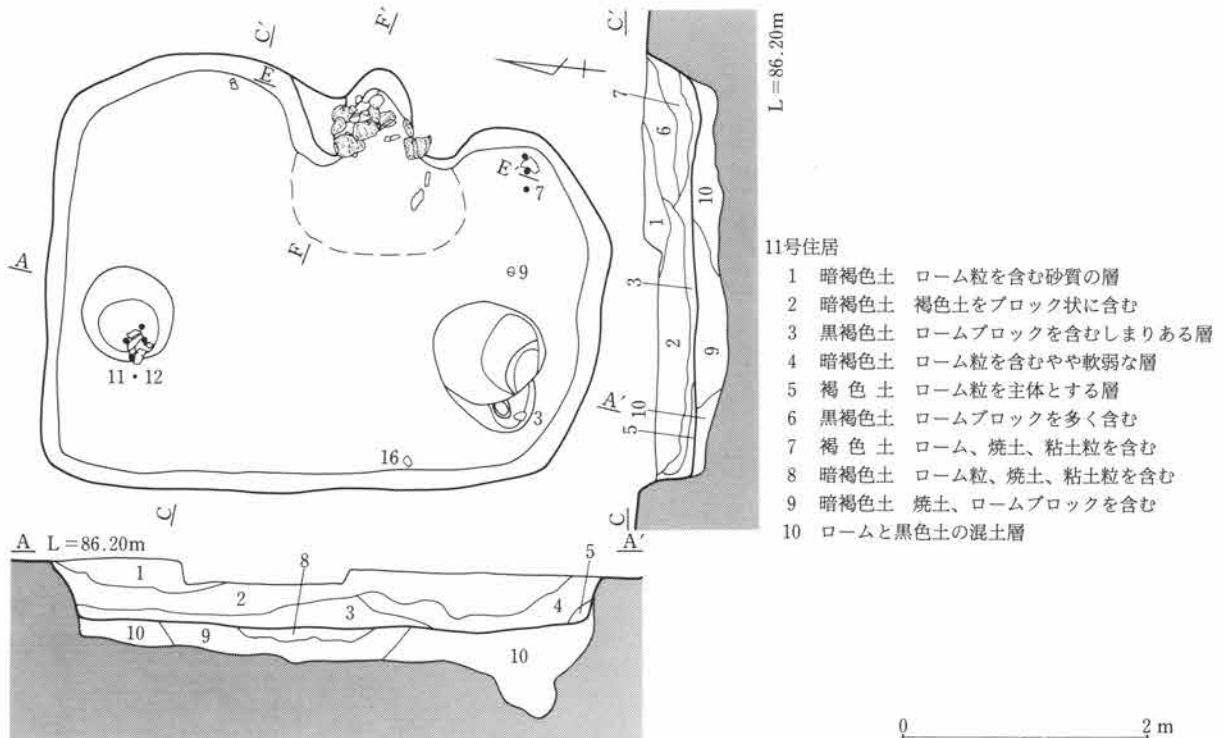
に径90cm、深さ70cmの小穴が検出されている。また南東隅に遺物が多少集中する部分があり、床面上では確認できなかったが、掘り方調査によりこの部分に径50cm、深さ25cmの小穴が認められ、貯蔵穴の可能性はある。

床 ロームを多く含む褐色土により部分的に張り床が施される。ほぼ水平な面が形成されるが、硬化面は認められない。

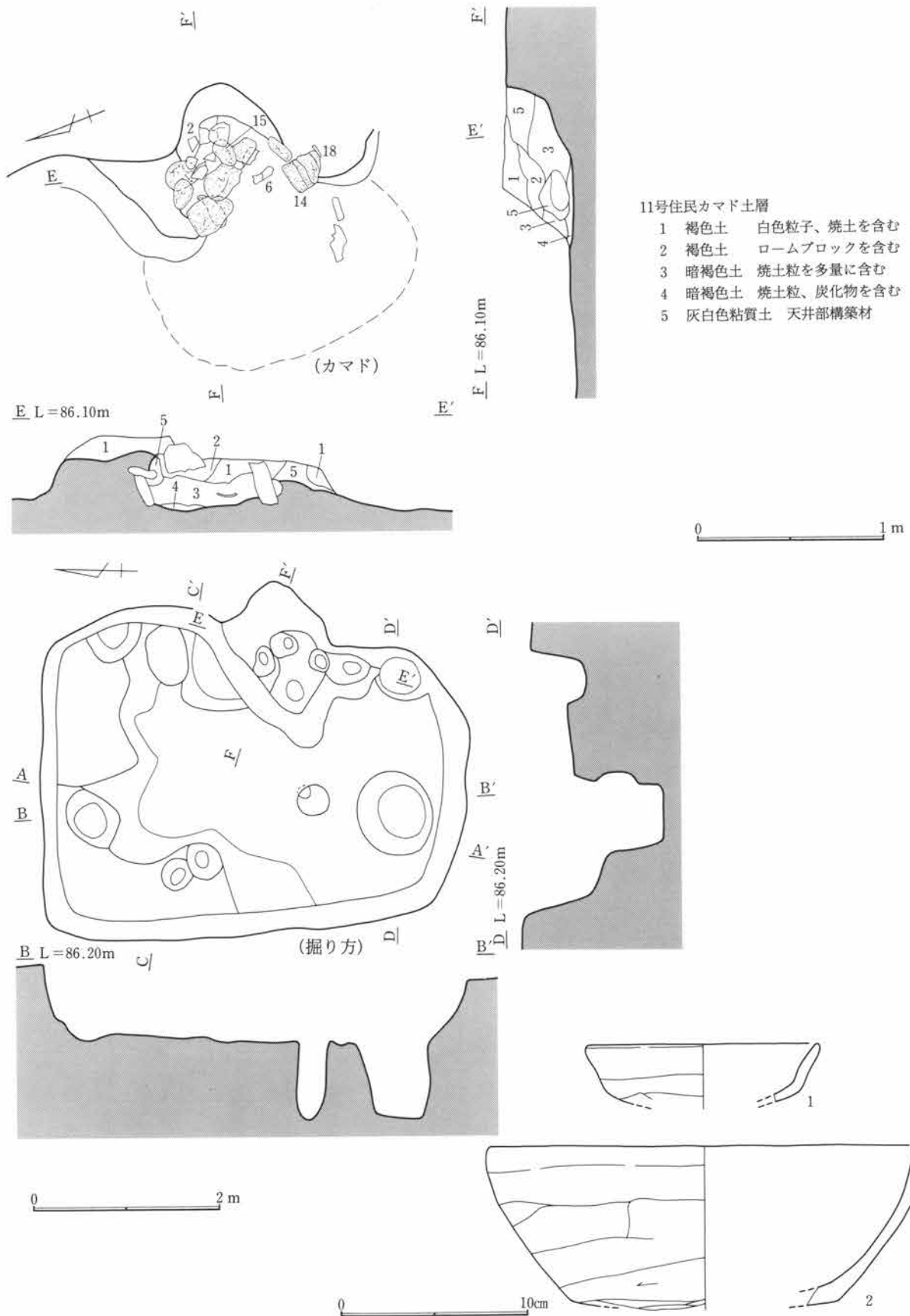
掘り方 全体に掘り下げるとともに、土坑状の掘り込みも加えられ、黒褐色土が埋土される。

遺物出土状態 土器類は2・6がカマド、11・12が南西部小穴、7が南東部小穴、9が南東部床面上出検出され、他の土器および17の土錘は埋没土から出土している。石製品は前記のように14はカマド袖石、15は支脚であり、16の砥石は西壁部、18の鉄製釘はカマド右袖部で検出している。このほか、カマド右袖付近および北西部床面上で炭化材が検出されているが、床、壁をはじめ埋没土などには被熱の痕跡は認められていないため、火災住居とは考えられない。

時期 出土遺物から9C.中葉に比定される。

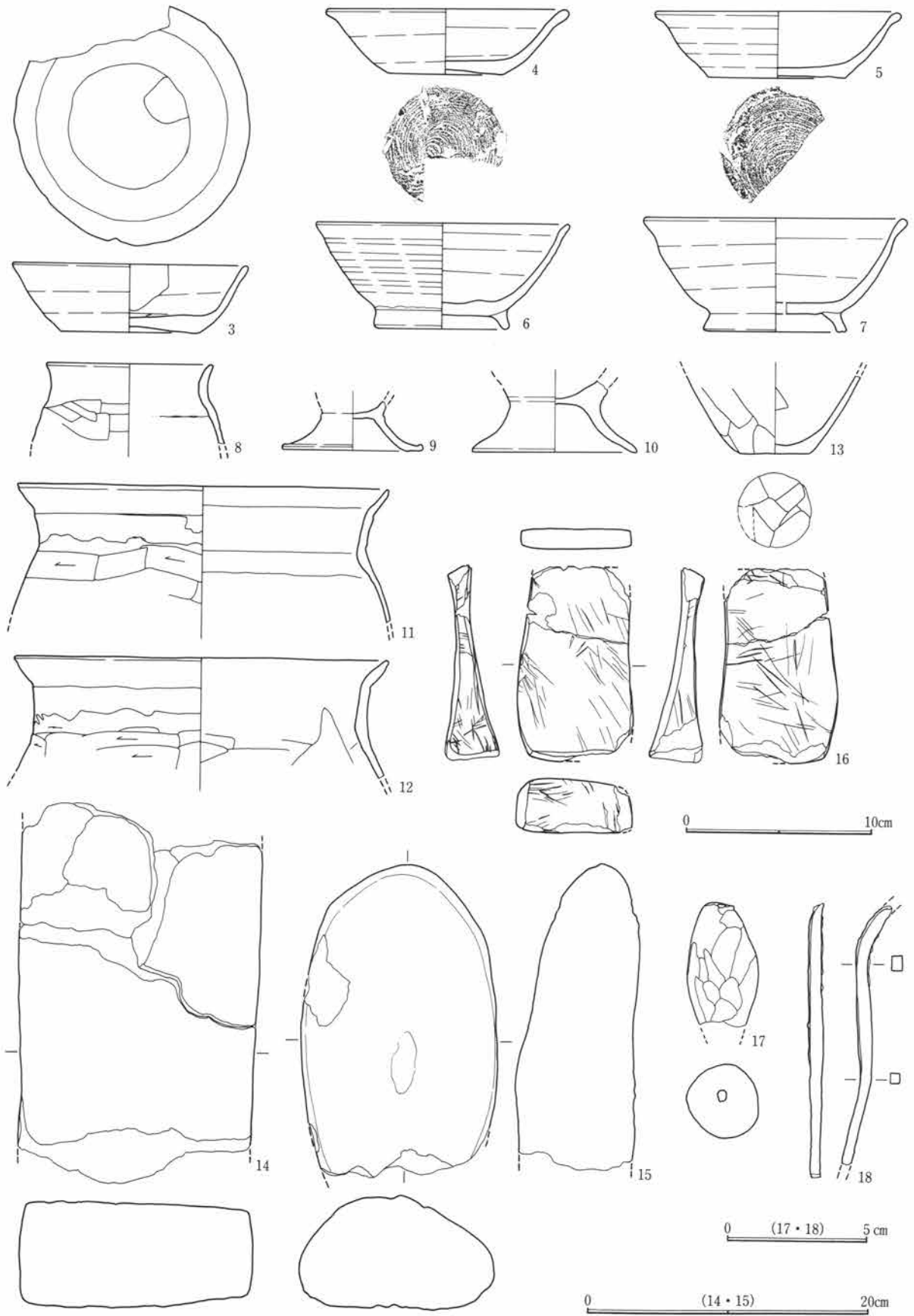


第43図 11号住居



第44図 11号住居と出土遺物

II 発掘調査の記録



第45図 11号住居出土遺物

12号住居 (第46・47図 P L, 101・102)

位置 Ba-5

重複 南部側で13号住居と重複する。平面および断面観察から12号住居が新しい。

主軸方向 N-88°-E 床面積 7.4m²

形態 主軸方向の対辺に長軸をもつ横長長方形を呈する。平面形をみると北西隅および西壁部に歪みが見とめられるが、これは検出状態に伴う歪みとみられ、本来はほぼ矩形を示すと考えられる。

規模 2.5m×3.6m

カマド 東壁に設置され、北東隅から3分の2程度南寄りに位置する。天井部、煙道は残存しない。カマド中央部には粗粒安山岩の礫材が検出されているが、位置からみて支脚と思われる。規模は焚口60cm、奥行き95cmを計測し、袖部は幅20cmで住居内に25cm前後張り出している。

内部施設 床面上では周溝、貯蔵穴および柱穴などは検出されていない。

床 黒褐色土を含むローム土により張り床が施され

る。ほぼ水平で部分的に堅く良好な面が認められている。

掘り方 住居全体が20cm前後掘り下げられ、部分的の径30cm、深さ20cm程度の掘り込みもみられる。ロームを含む暗褐色土により埋め戻される。

遺物出土状態 出土遺物量は少ない。土器類は1がカマド右袖部、8がカマド左壁部、3はカマド前、4~7は住居南東部の床面上で検出している。10・11の礫は南西部床面上、9の土錘は埋没土から出土している。

時期 出土遺物から10C.後半に比定される。

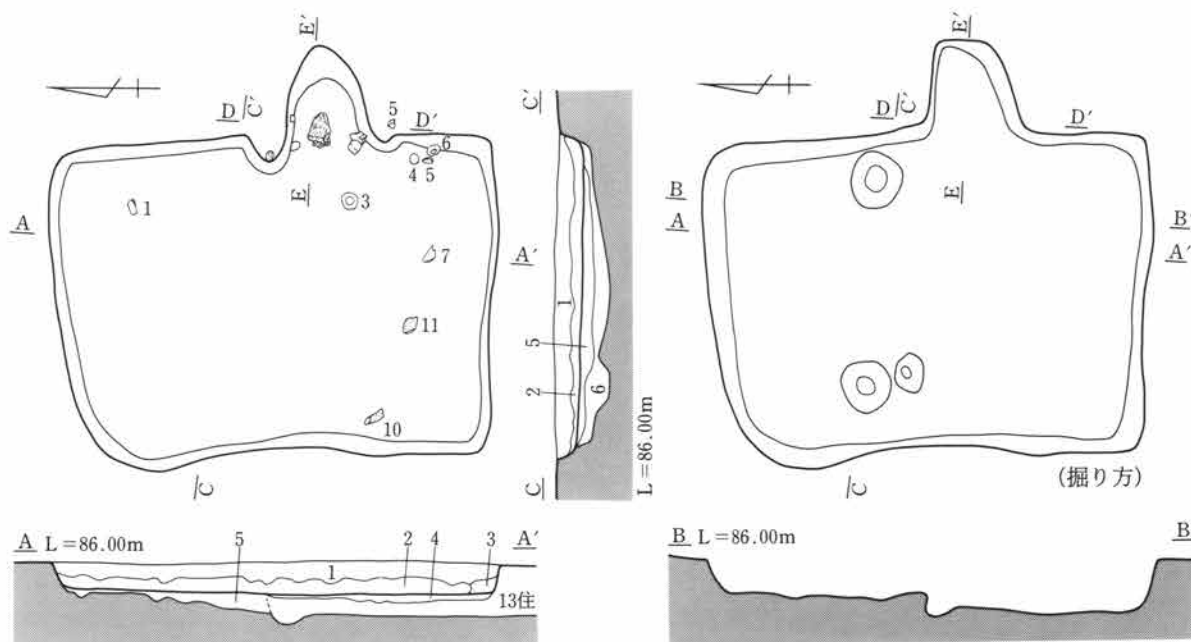
13号住居 (第48~50図 P L, 19・102)

位置 Ba・b-5・6

重複 北西部を中心に12号住居と重複する。12号住居で報告したように、13号住居が古い。

主軸方向 N-91°-E 床面積 (15.9m²)

形態 主軸方向の対辺に長軸をもつ横長長方形を呈する。平面形はほぼ矩形を示し、各辺も直線的であるが、南東壁部には小規模な張り出しが認められる。

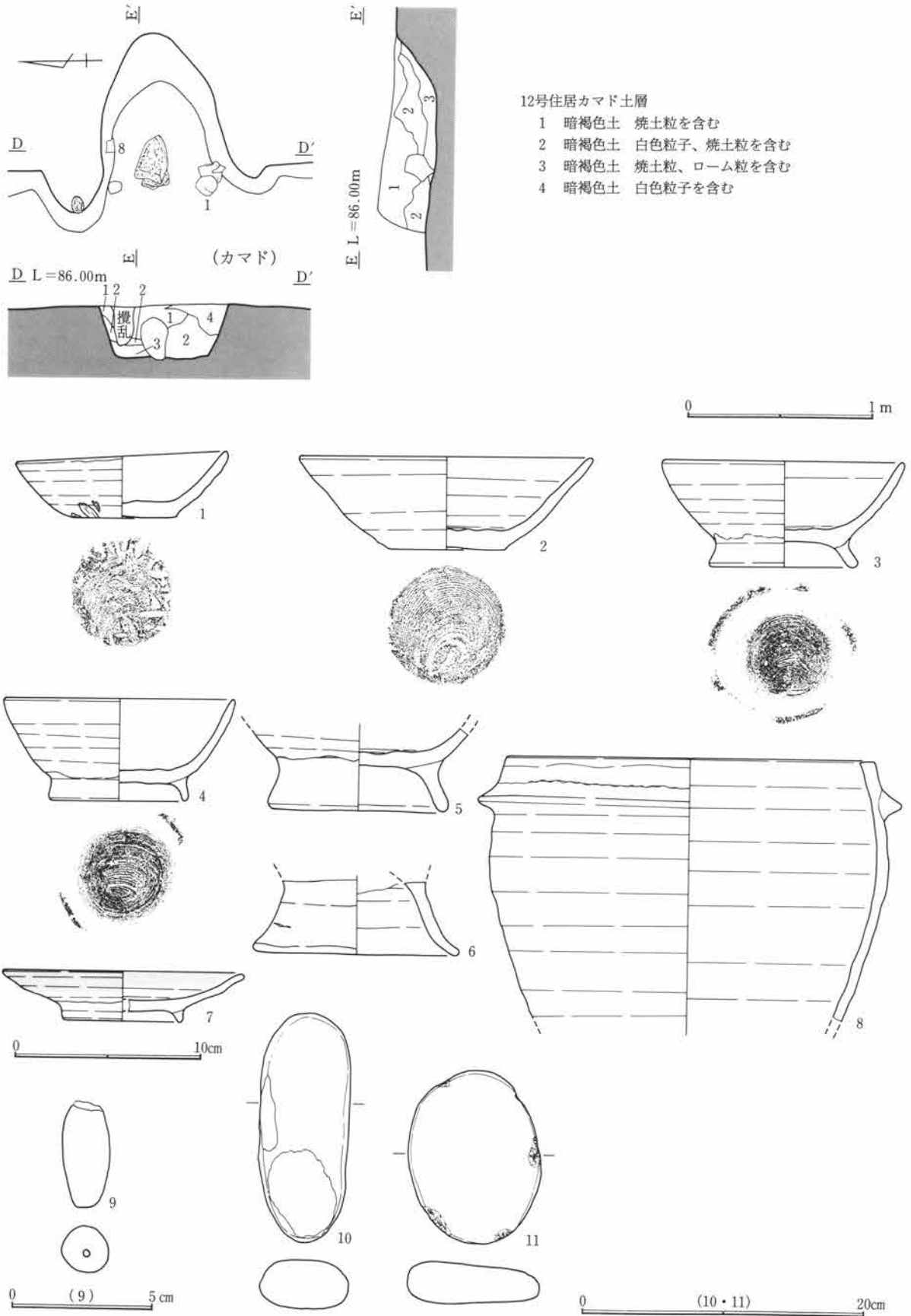


12号住居

- | | |
|---------------------------|------------------------|
| 1 黒褐色土 暗褐色土、白色粒子、焼土を含む | 5 暗褐色土 ローム、焼土、軽石粒を少量含む |
| 2 黒褐色土 暗褐色土、白色軽石粒、ロームを含む | 6 褐色土 ローム、暗褐色土を少量含む |
| 3 黒褐色土 暗褐色土、焼土粒を含む | |
| 4 ロームを主体とし黒褐色土を少量含む(貼り床層) | |

第46図 12号住居

II 発掘調査の記録



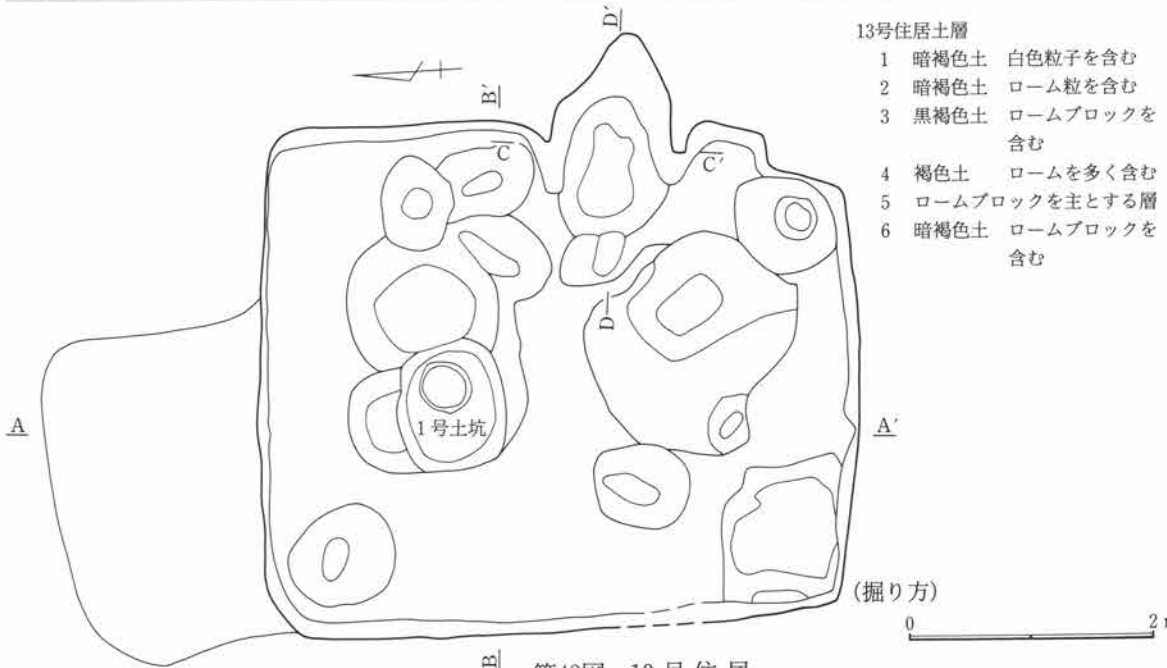
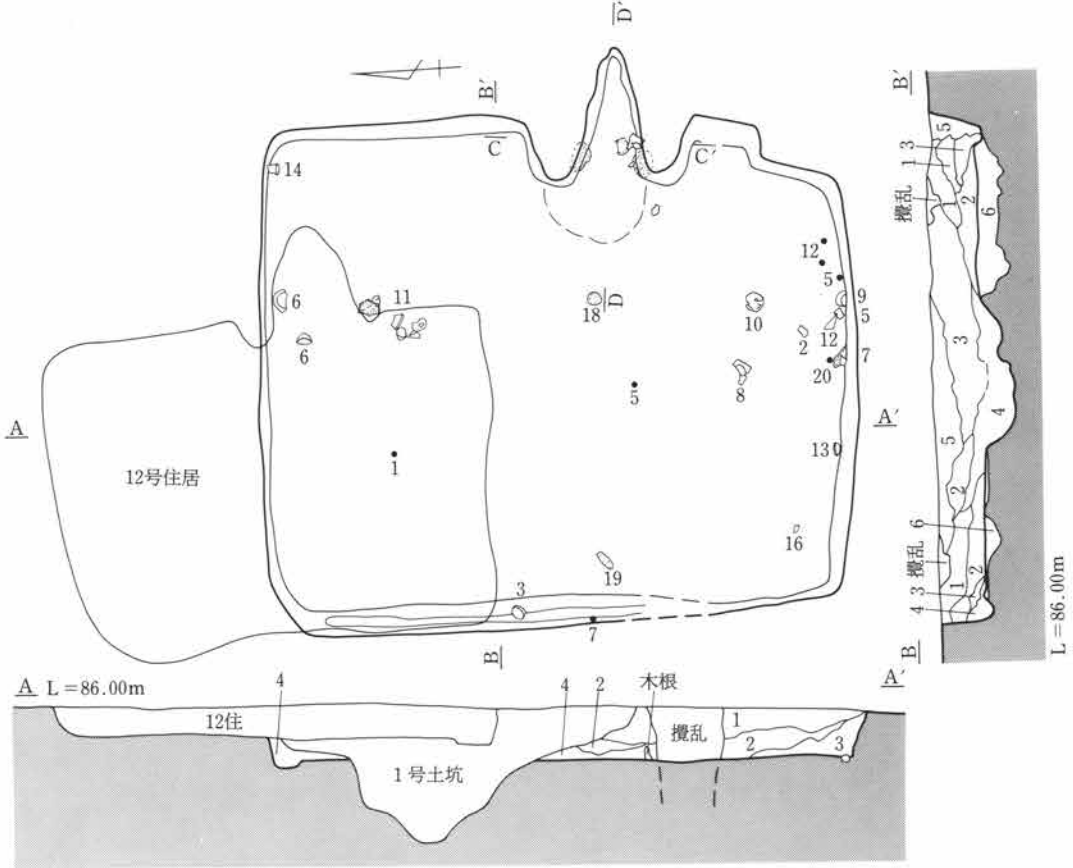
第47図 12号住居と出土遺物

なお、重複部分は新規の12号住居が浅く、13号住居が多少深いため形態確認にはあまり支障を受けない。

規模 4.0m×4.8m

カマド 東壁中央からやや南寄りに設置される。天

井部、煙道は残存しないが、埋没土には天井部の崩落である被熱した褐色土ブロックの堆積が認められている。両袖部やや内側にはそれぞれ礫が設置されている。右袖は角閃石安山岩、左袖は粗粒安山岩が用いられ、カマド壁体を形成している。規模は焚口



第48図 13号住居

II 発掘調査の記録

40cm、奥行き110cmを計測し、全面には灰、焼土の散布が認められる。袖はロームを含む暗褐色土により構築され幅20cmで40cmほど住居内に張り出す。

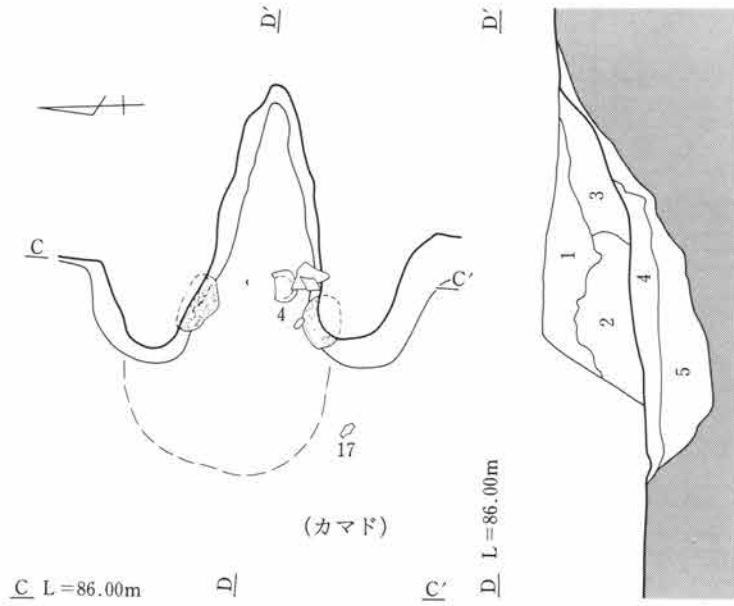
内部施設 西壁部に幅15cm、深さ10cmの周溝が部分的に検出されている。このほかの施設は床面上ではとくに認められていない。ただ、掘り方調査により

南東隅に径70cm、深さ40cmの小穴が認められ、床面では不明であったものの貯蔵穴の可能性はある。

床 黒褐色土を含むローム土により部分的に張り床が施される。硬化面はほとんど検出されない。

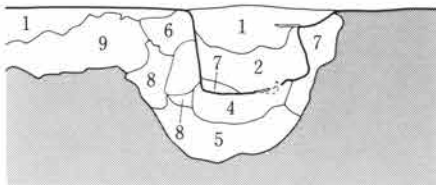
掘り方 土坑状の掘り込みが不規則に加えられる。

遺物出土状態 遺物は南壁付近に接して集中する。

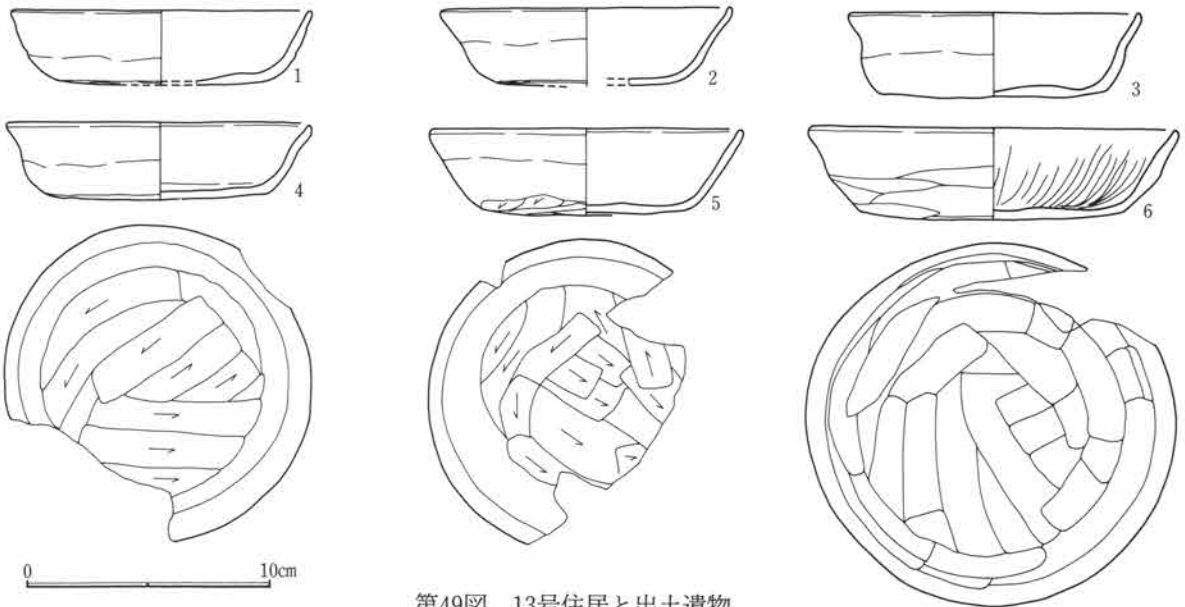


13号住居カマド土層

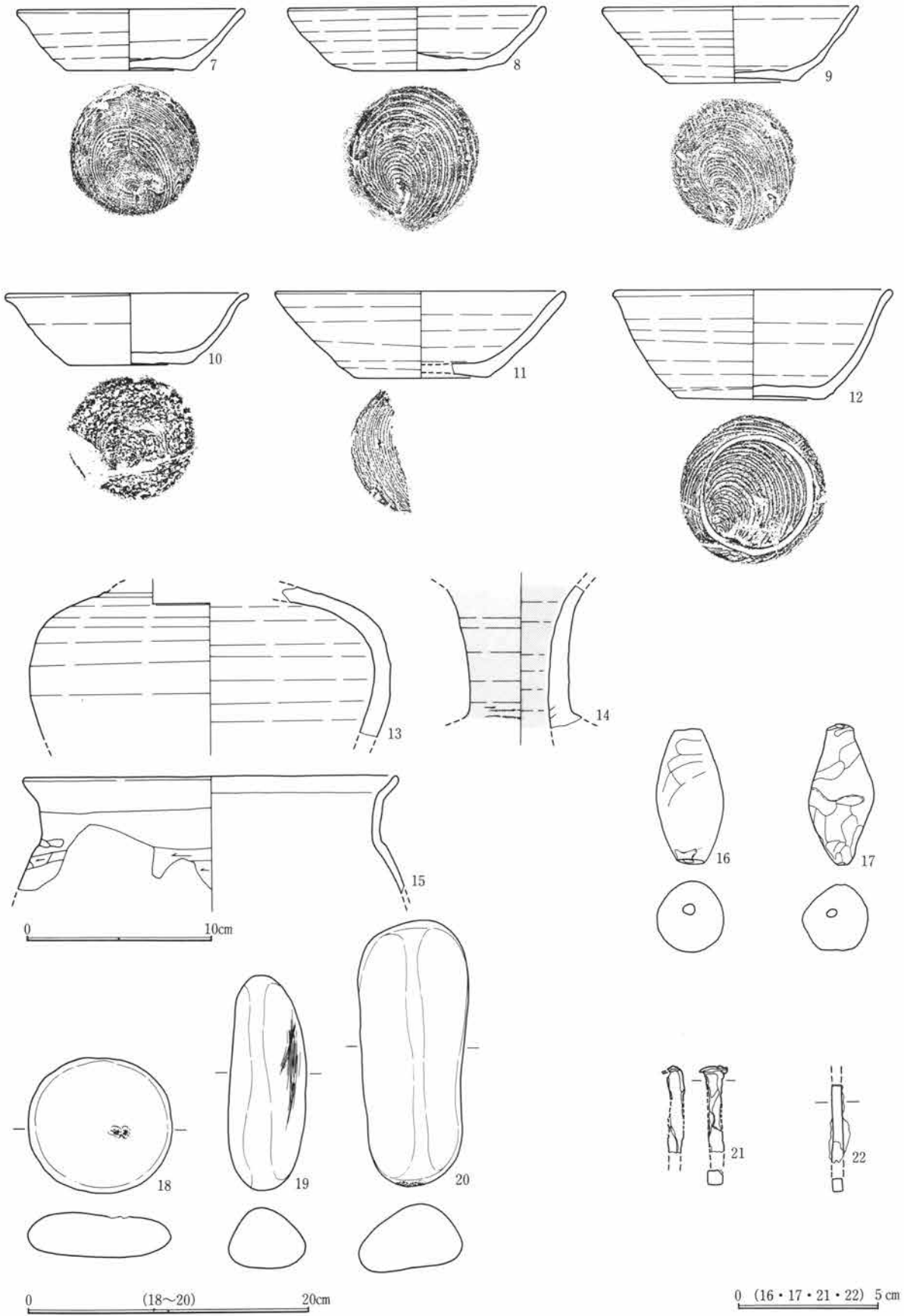
- 1 暗褐色土 白色粒子、焼土粒を含む
- 2 黒褐色土 白色粒子、焼土粒を含む
- 3 暗褐色土 焼土ブロックを多量に含む
- 4 黒褐色土 ロームブロック、焼土を含む
- 5 暗褐色土 ローム、焼土、粘質土を含む
- 6 暗褐色土 ローム粒を多量に含む
- 7 暗褐色土 焼土を多量に含む
- 8 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む
- 9 暗褐色土 ロームブロックを含む



0 1 m



第49図 13号住居と出土遺物



第50図 13号住居出土遺物

II 発掘調査の記録

2・5・7・9・10・12・13がこの部分で床面上および15cm程度上位で出土している。このほか1・3・6・11が床面上、4がカマドで検出され、8・15は埋没土から出土している。土鍾は16が南西部床面上、17がカマド前、18の円礫は中央部、20の棒状礫は南壁付近、19は埋没土から出土している。21・22の鉄製釘は埋没土出土である。

時期 出土遺物から9 C. 中葉に比定される。

14号住居 (第51~53図 P L. 20・103)

位置 Ay・Bab—6・7・8

重複 北壁部で13号住居、南壁部で15号住居、東壁部で16号住居と重複する。平面および断面観察によ

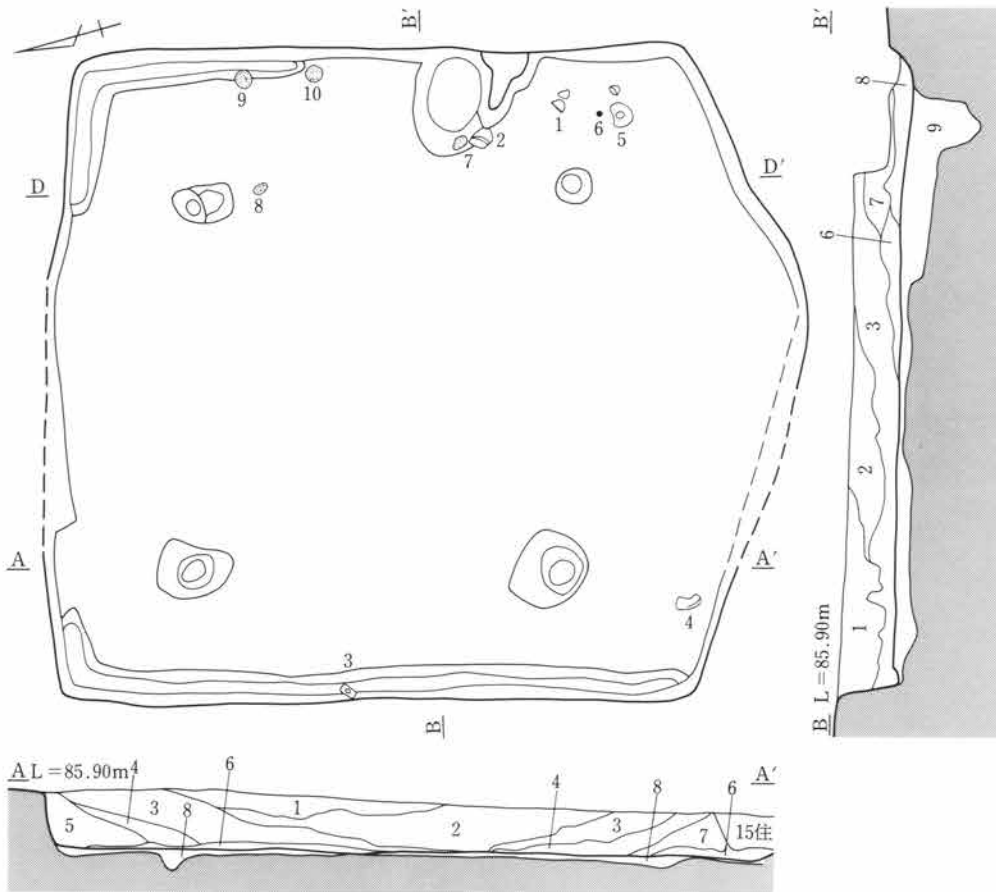
り新旧関係は14号住居→13号住居・15号住居・16号住居となり、14号住居がいずれの住居より古い。

主軸方向 N—106°—E **床面積** 26.7㎡

形態 他住居との重複により検出状態が良好ではなく、平面形状に歪みが生じているが、確認部から推定すると方形平面を呈するものとみられる。とくに南壁に歪みが大きいが、おそらく直線的な壁面を形成すると考えられ、本来はほぼ矩形を示すであろう。

規模 5.2m×5.4m

カマド 重複の影響により検出状況は悪く、燃焼部の痕跡が認められたのみで、住居外についてはほとんど遺失している。袖も右袖のみ残存し、暗褐色粘



14号住居

- | | |
|--------------------------|------------------------|
| 1 暗褐色土 白色軽石粒を多く含む | 7 暗褐色土 軽石粒、ローム粒、焼土を含む |
| 2 暗褐色土 ロームブロック、軽石粒を含む | 8 褐色土 ロームを多く含む |
| 3 黒褐色土 白色軽石粒、ロームブロックを含む | 9 褐色土 ローム、褐色土を混在する軟弱な層 |
| 4 暗褐色土 黒褐色土、軽石粒、ロームを含む | |
| 5 暗褐色土 ローム粒を多く含む | |
| 6 暗褐色土 ロームブロック、黒褐色土を多く含む | |

0 2 m

第51図 14号住居

質土により構築されている。幅15cmで55cm住居内に張り出している。

内部施設 住居対角線上に径30cm～50cm、深さ60cm前後の柱穴が4本検出されている。各柱穴間の距離は280cmで方形配置となり、住居平面形と相似形を示している。また、北東隅および西壁部には幅15cm、深さ8cmの周溝が部分的に巡る。

床 ロームを多く含む褐色土により張り床が施される。ほぼ水平で堅く良好な面が形成されている。

掘り方 全体を浅く掘り下げ、中央部の土坑状の掘り込みを加え、褐色土を埋土する。

遺物出土状態 遺物量は少なくカマド周辺に散布する。1・2はカマド右側、3は西壁部、5・6は南

東部で床面上、4は南西部で床から15cm上位で出土している。7はカマド、8は北東部、9・10はカマド北側東壁で床面上で出土している。

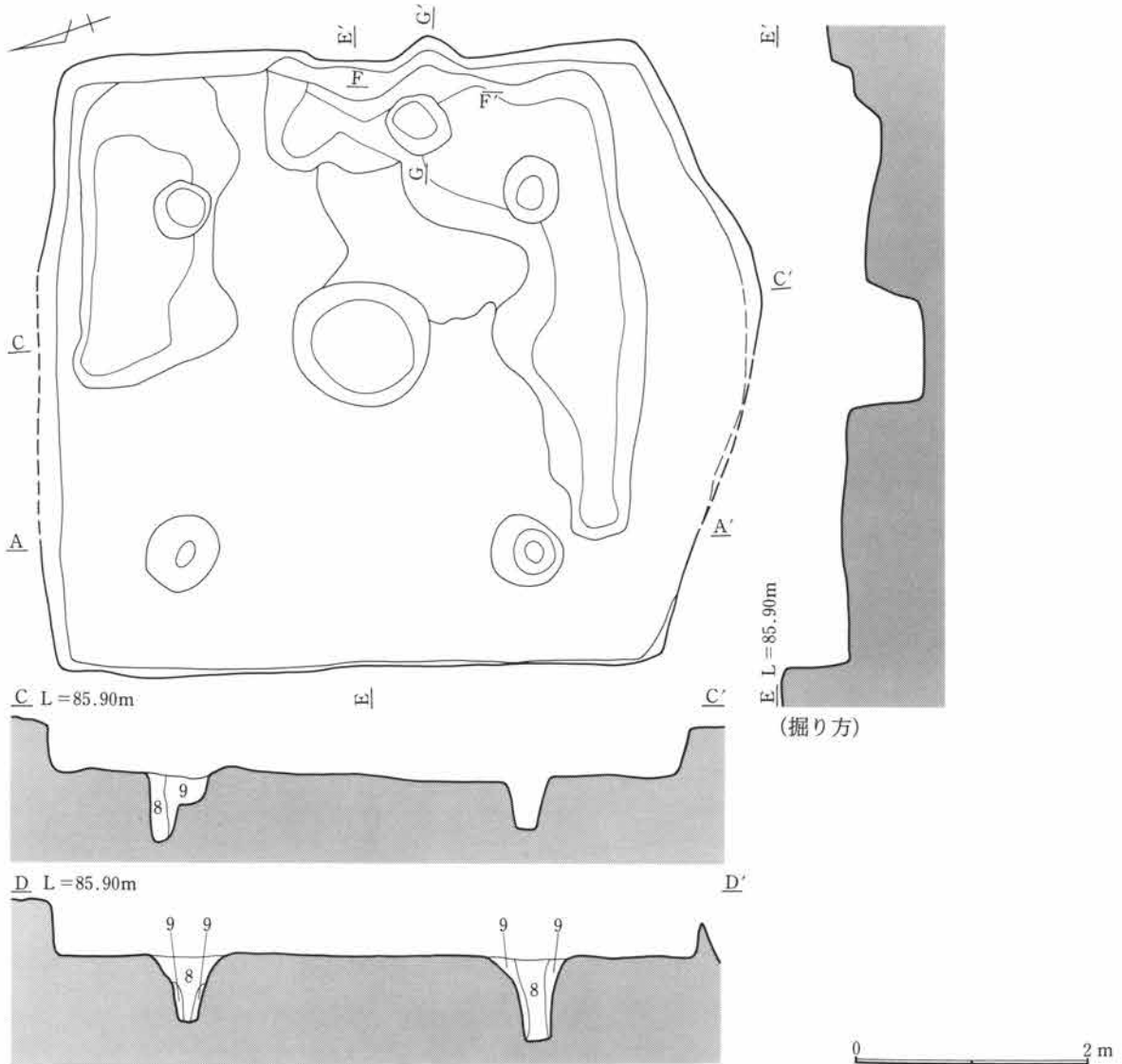
時期 出土遺物は7 C.末～8 C.前葉(1～3)と9 C.後半(4～6)のものが見られる。

15号住居 (第54～56図 PL, 21・103)

位置 Ay・Ba-7・8

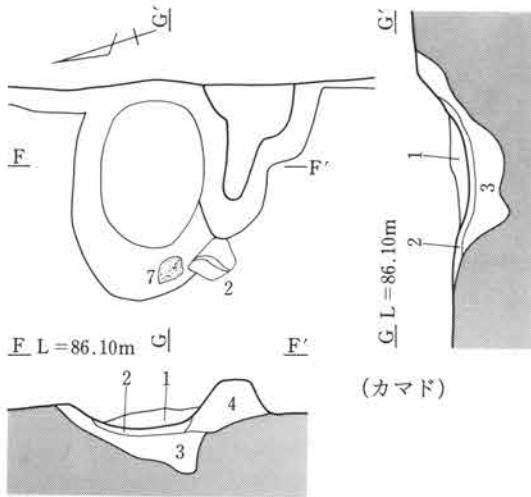
重複 北壁部で14号住居、南壁部で44号住居さらに西壁部で3号土坑および3号井戸と重複する。住居間の重複関係は14号住居・44号住居→15号住居となりいずれもこの住居が新しい。西壁部の土坑、井戸は住居より新しく、この部分を壊している。

主軸方向 N-99°-E **床面積** (10.9m²)



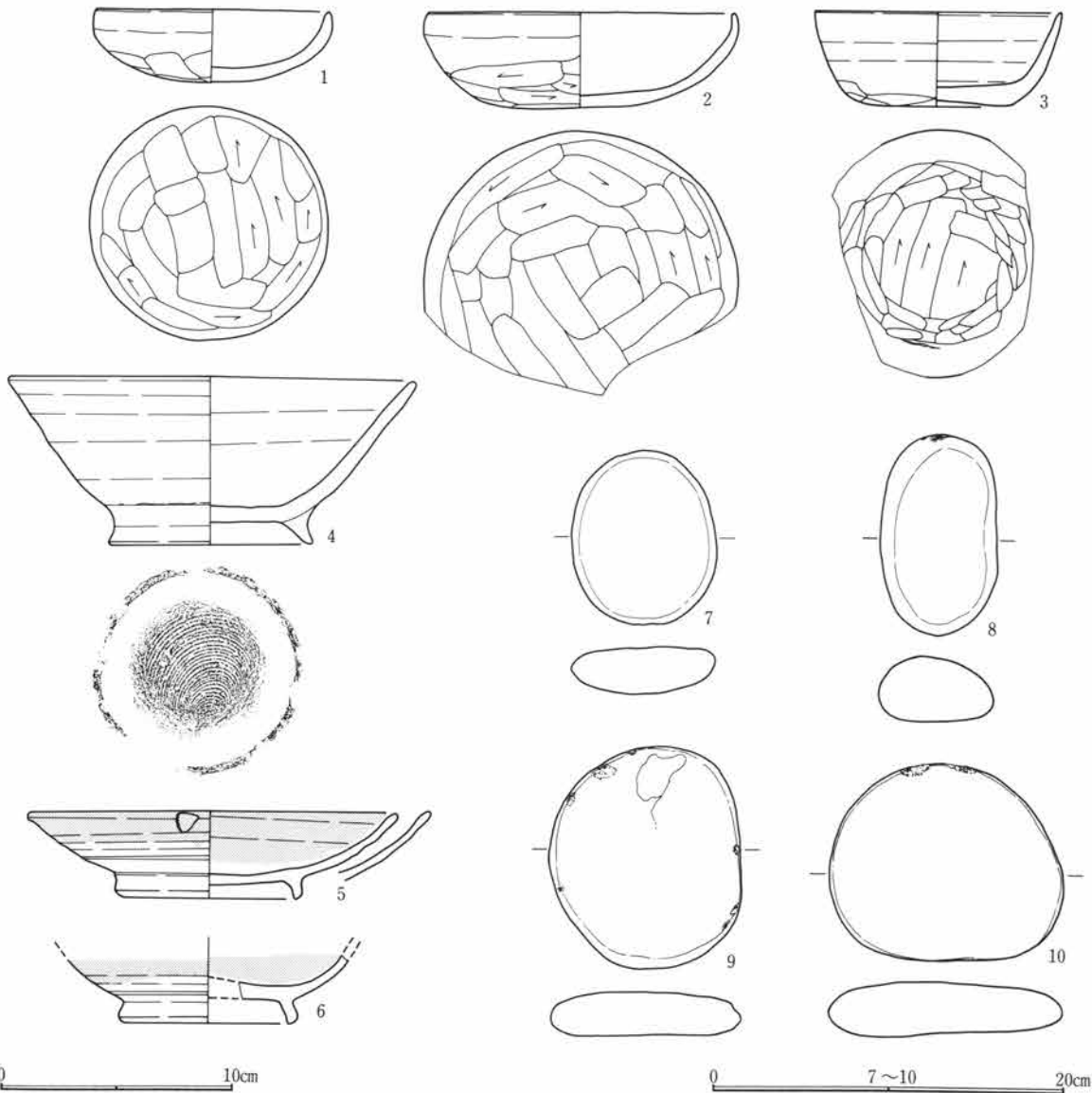
第52図 14号住居

II 発掘調査の記録



14号住居カマド土層

- 1 灰褐色土 焼土、灰を含む
- 2 暗褐色土 灰、焼土粒を含む
- 3 暗褐色土 ロームブロック、炭化物を含む
- 4 暗褐色粘質土 構築材



第53図 14号住居と出土遺物

形態 西壁側が確認できないため形態が確定できないが、検出部からみると主軸方向の対辺に長軸をもつ横長長方形を呈するものと推定できる。各辺に多少歪みが認められているが、重複の影響によるもので本来は直線的な形状を示すものと思われる。

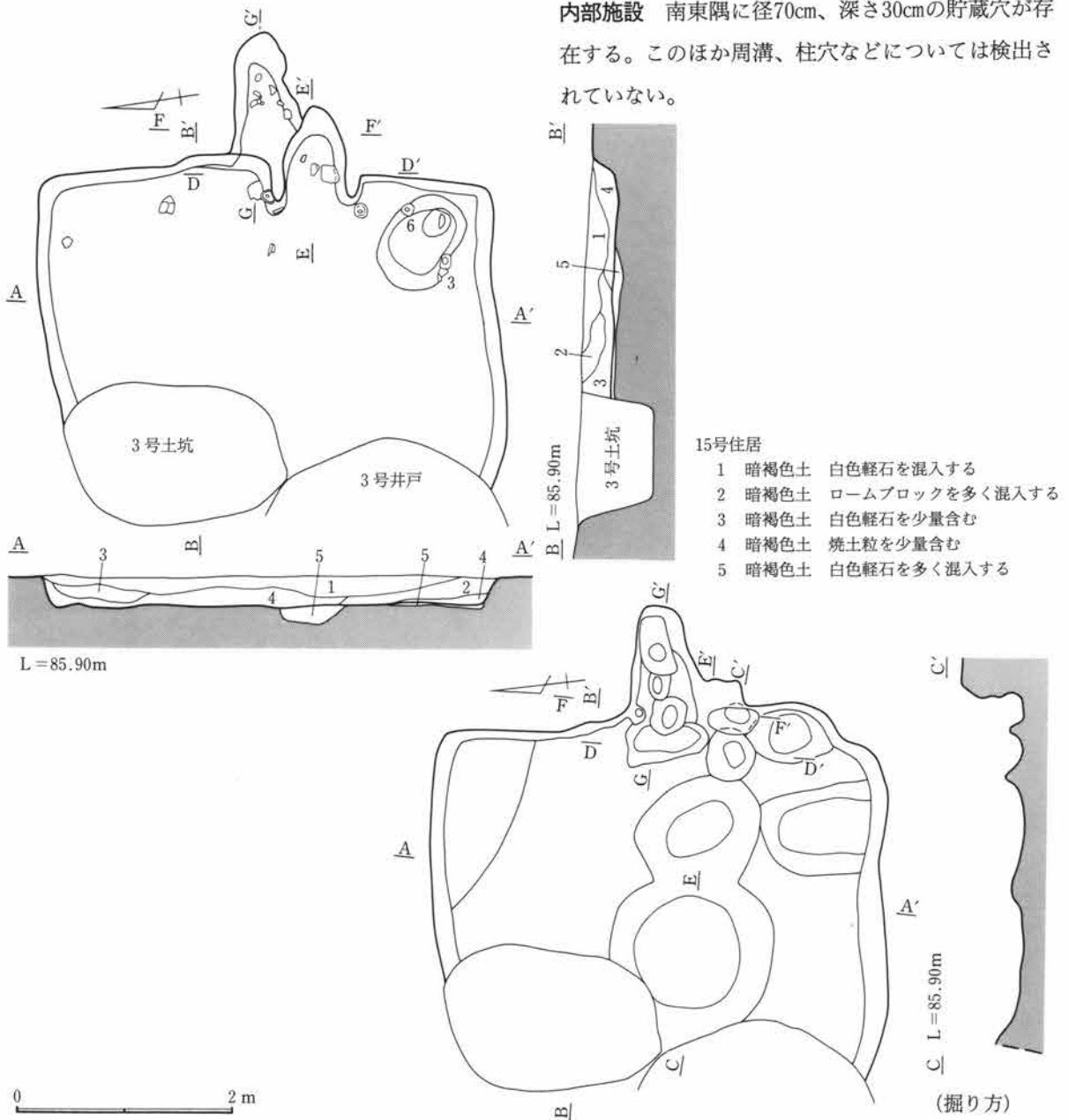
規模 一×4.1m

カマド 東壁中央に設置されるが、調査に伴い2カ所のカマドが検出されている。重複住居がやや集中する区域でもあり、このカマドについても重複の可能性を考慮していたが、調査ではそのような所見は

得られていない。さらに時期的に古いカマドについても15号住居の壁に連続する形状を示していることから、ここではカマドの作り替えを想定しておきたい。調査時には当初検出された時期的に新しいカマドを1号カマドとし、古期を2号カマドとして記録しているため、報告時この名称を準用している。

1号カマドは焚口50cm、奥行き80cmで、暗褐色粘質土により袖部を構築している。幅10cmで40cm前後住居内に張り出す。2号カマドはこのやや北側に位置し、幅60cm、長さ110cmの規模となっている。

内部施設 南東隅に径70cm、深さ30cmの貯蔵穴が存在する。このほか周溝、柱穴などについては検出されていない。



II 発掘調査の記録

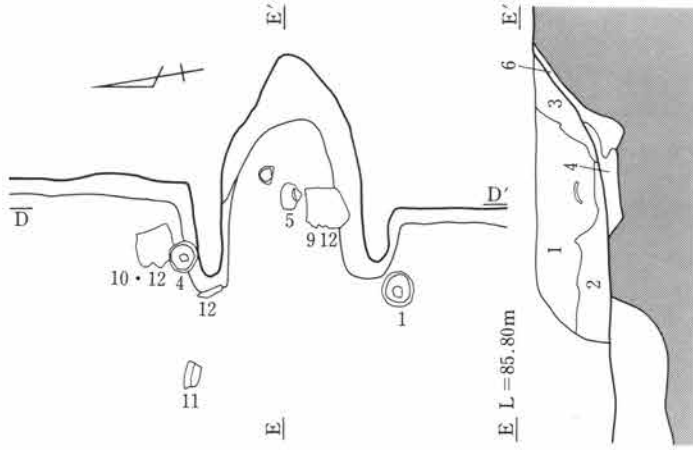
床 掘り方埋土である暗褐色土上面を床面とする。
とくに硬化面は認められていない。

掘り方 土坑状の掘り込みが加えられる。

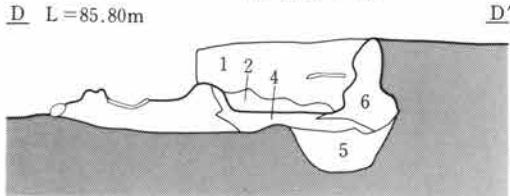
遺物出土状態 遺物はカマド周辺に集中する傾向が

ある。1が右袖部、4が左袖部、2・5・9が1号カマド、12が2号カマド内で出土し、3・11も床面上、6は貯蔵穴で出土している。13・14の鉄製品については埋没土から出土したものである。

時期 出土遺物から9 C. 中葉に比定される。



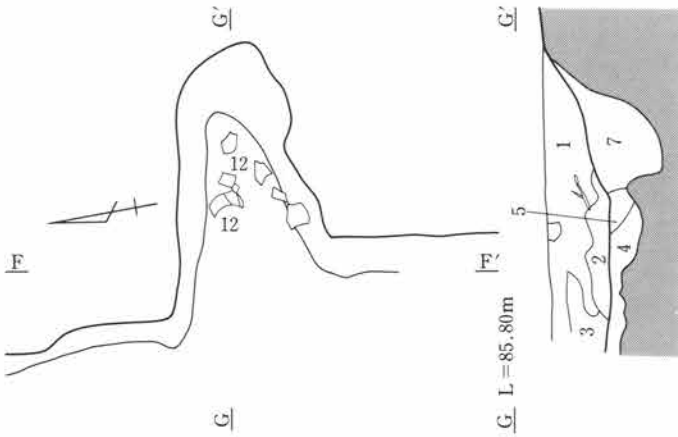
(1号カマド)



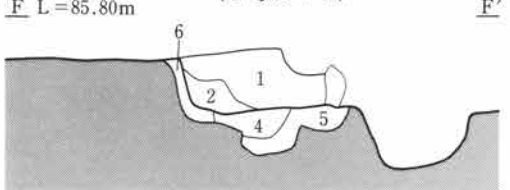
15号住居カマド土層

1号カマド

- 1 暗褐色土 白色粒子、焼土粒を含む
- 2 褐色土 ロームブロックを含む
- 3 褐色土 焼土粒、ロームブロックを含む
- 4 暗褐色土 ローム粒を含む



(2号カマド)



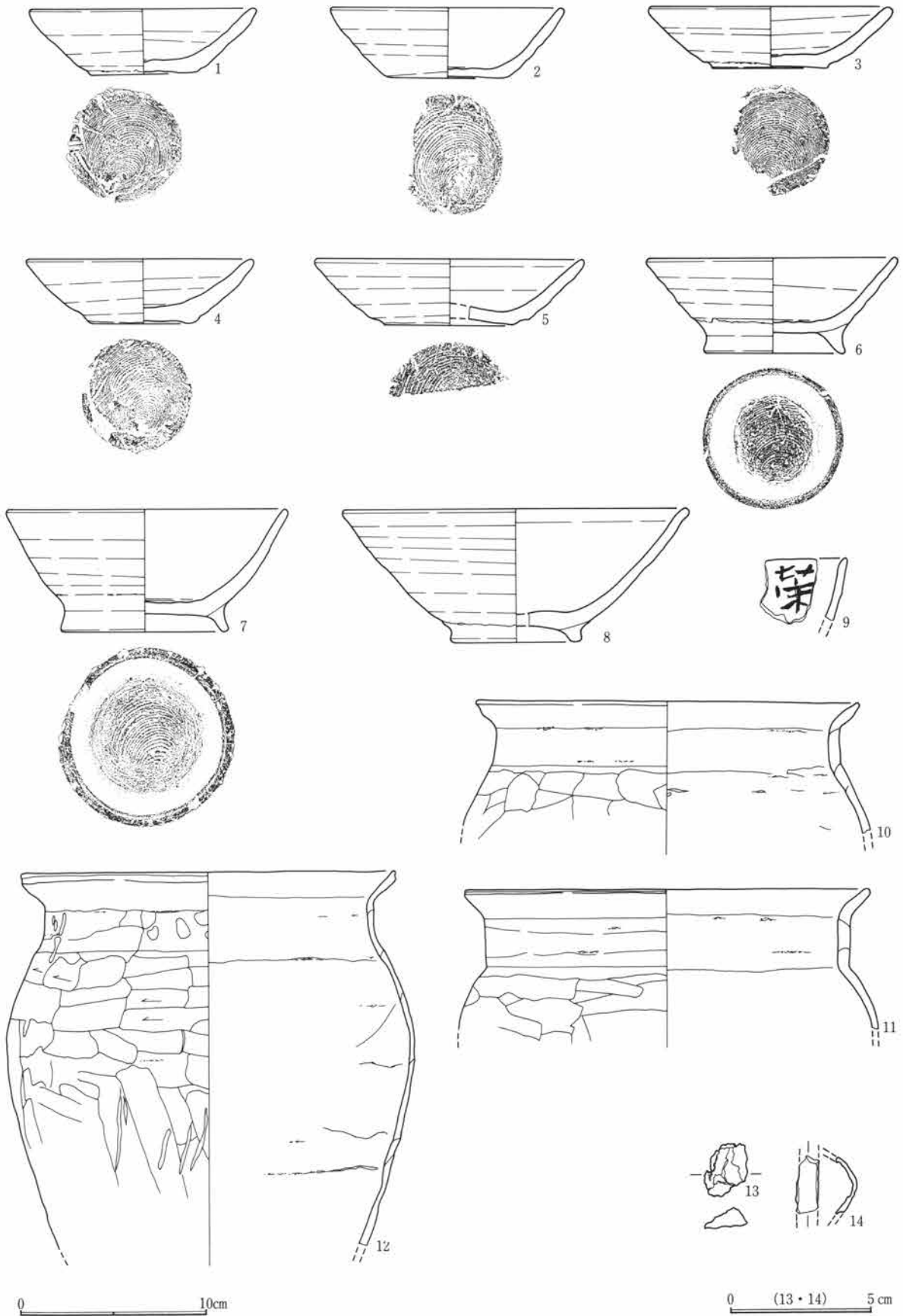
2号カマド

- 1 暗褐色土 白色粒子を含む
- 2 暗褐色土 ロームブロックを含む
- 3 暗褐色土 ローム粒子を多量に含む
- 4 暗褐色土 焼土、ローム、灰を含む
- 5 黒褐色土 ロームブロックを含む
- 6 褐色土 焼土を含む粘質土
- 7 暗褐色土 ローム粒を多量に含む

0 1 m

第55図 15号住居

4 調査した遺構と遺物



第56図 15号住居出土遺物

II 発掘調査の記録

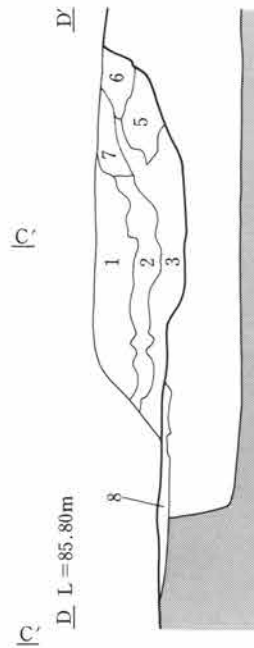
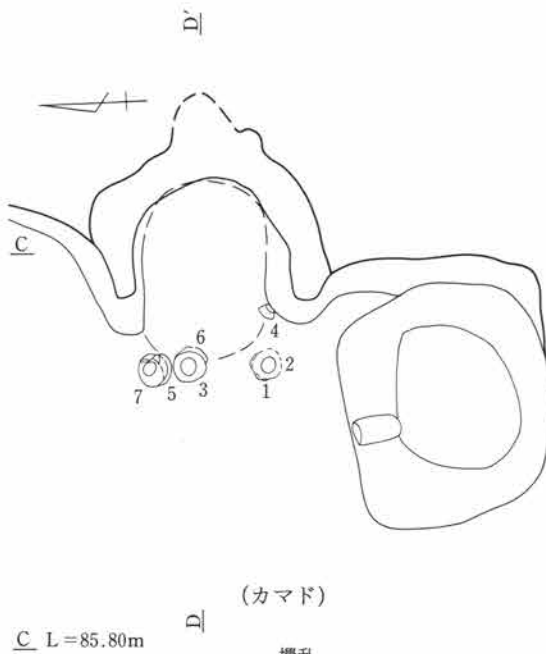
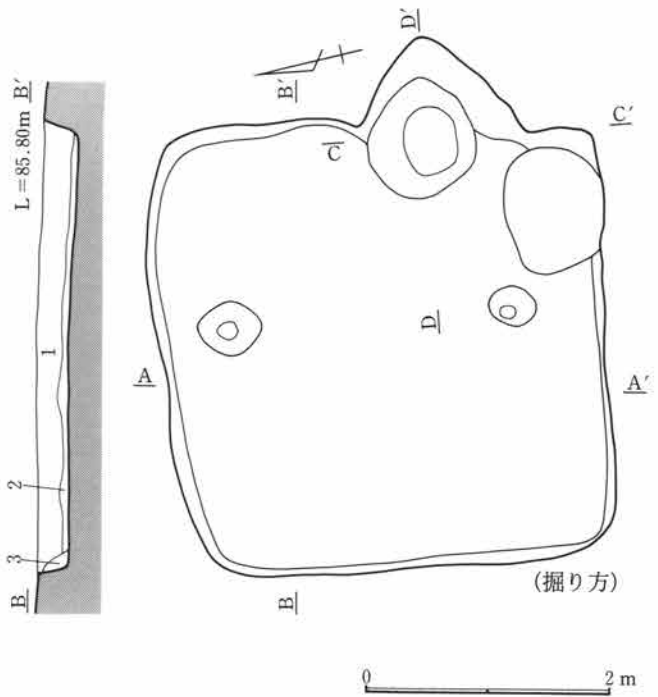
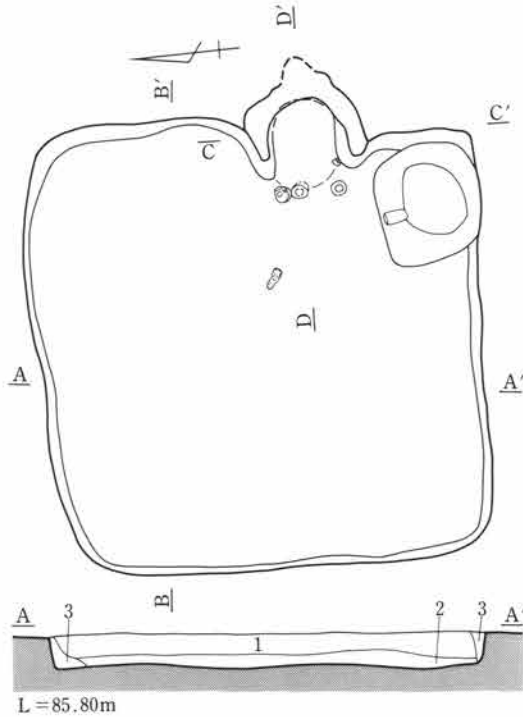
16号住居 (第57・58図 P L. 22・104)

位置 Ba・b-7・8

重複 東側で17号住居、西側で14号住居と重複する。

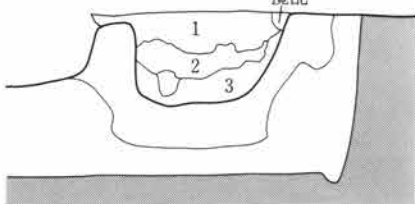
平面および断面観察から両住居より16号住居が新しい。

主軸方向 N-97°-E 床面積 11.0m²



16号住居

- 1 暗褐色土 白色軽石、焼土を含む
- 2 褐色土 白色軽石、焼土を含む
- 3 暗褐色土 ロームブロックを含む



16号住居カマド土層

- 1 黒褐色土 軽石粒、ローム、焼土を含む
- 2 暗褐色土 黒色土、焼土を含む
- 3 暗褐色土 焼土粒、ローム粒を含む
- 4 暗褐色土 焼土ブロックを含む
- 5 灰褐色土 ローム、粘土を多量に含む
- 6 暗褐色土 軽石粒を多量に含む
- 7 灰褐色粘質土 天井部構築材
- 8 黒褐色土 焼土、ロームを少量含む



第57図 16号住居

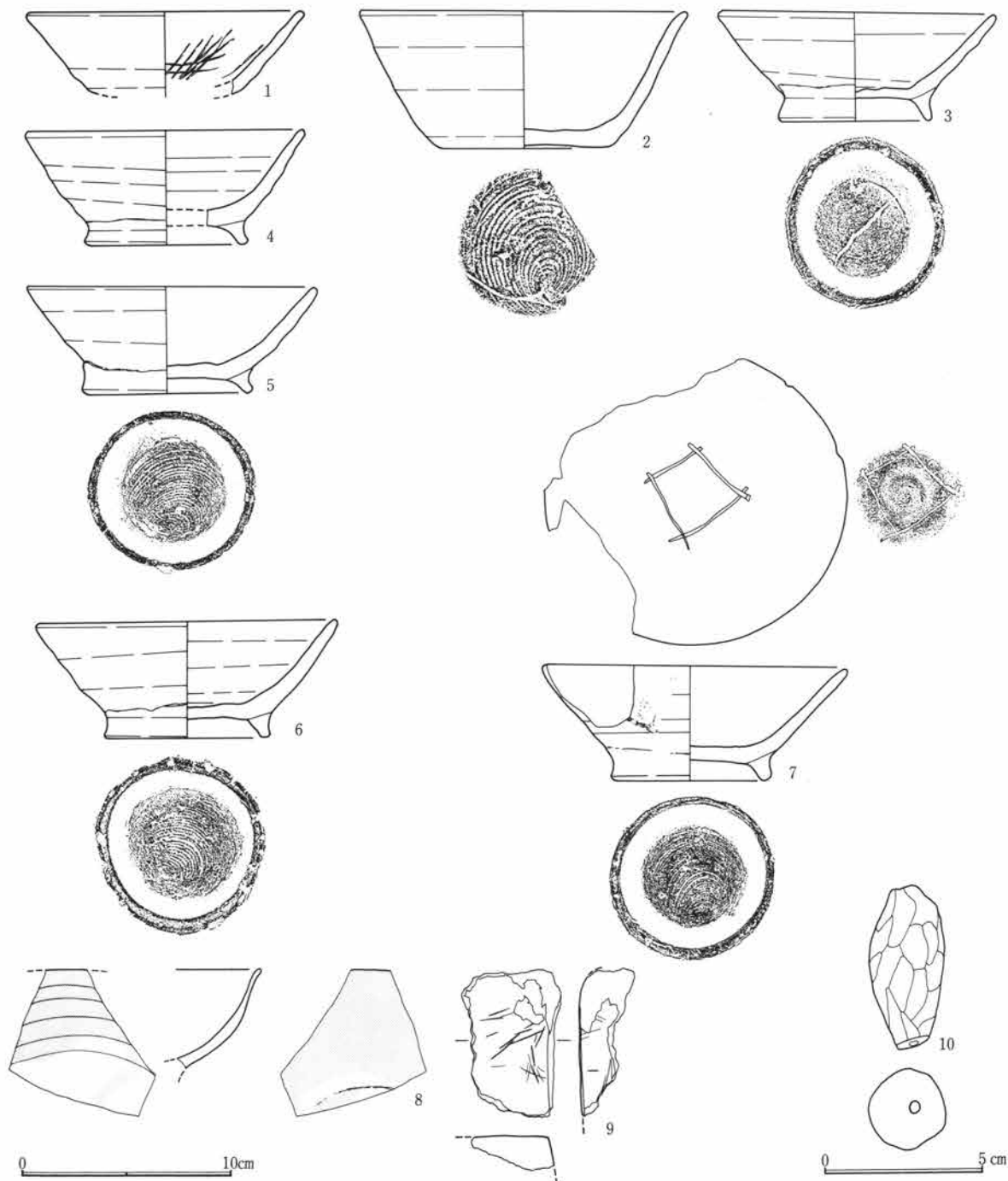
形態 主軸方向に軸をもつ方形を呈する。平面形状は西壁に比べ東壁が長く、さらに東壁もカマド北側にあたる北東部分がやや張り出しぎみとなっている。

規模 3.6m×3.6m

カマド 東壁に設置され、北東隅から3分の2程度南寄りに位置する。埋没土上位には天井部崩落土で

ある火熱を受けた褐色粘質土が認められている。この粘質土は底面のは検出されないため、壁から天井部にかけてのみアーチ状に構築されていたものとみられる。規模は焚口60cm、奥行き95cmで、焚口部分には杯・椀類が複数検出されている。

内部施設 南東隅に径80cm、深さ30cmの貯蔵穴が存在する。このほか周溝などは検出されていない。



第58図 16号住居出土遺物

II 発掘調査の記録

床 ロームを主として暗褐色土を少量混入する張り床を施す。なお部分的に地山を床としている。

掘り方 ほとんど掘り方をもたない。住居中央に径40cm、深さ15cmの小穴が北側および南側に1穴ずつ検出されているが、これが柱穴に関連するものであるかについては不明である。

遺物出土状態 1～7はカマド付近で、3と6および5と7はカマド前でそれぞれ重なった状態で出土し、2も前部、4は右袖で、8～10は埋没土から出土している。

時期 出土遺物から10C.前半に比定される。

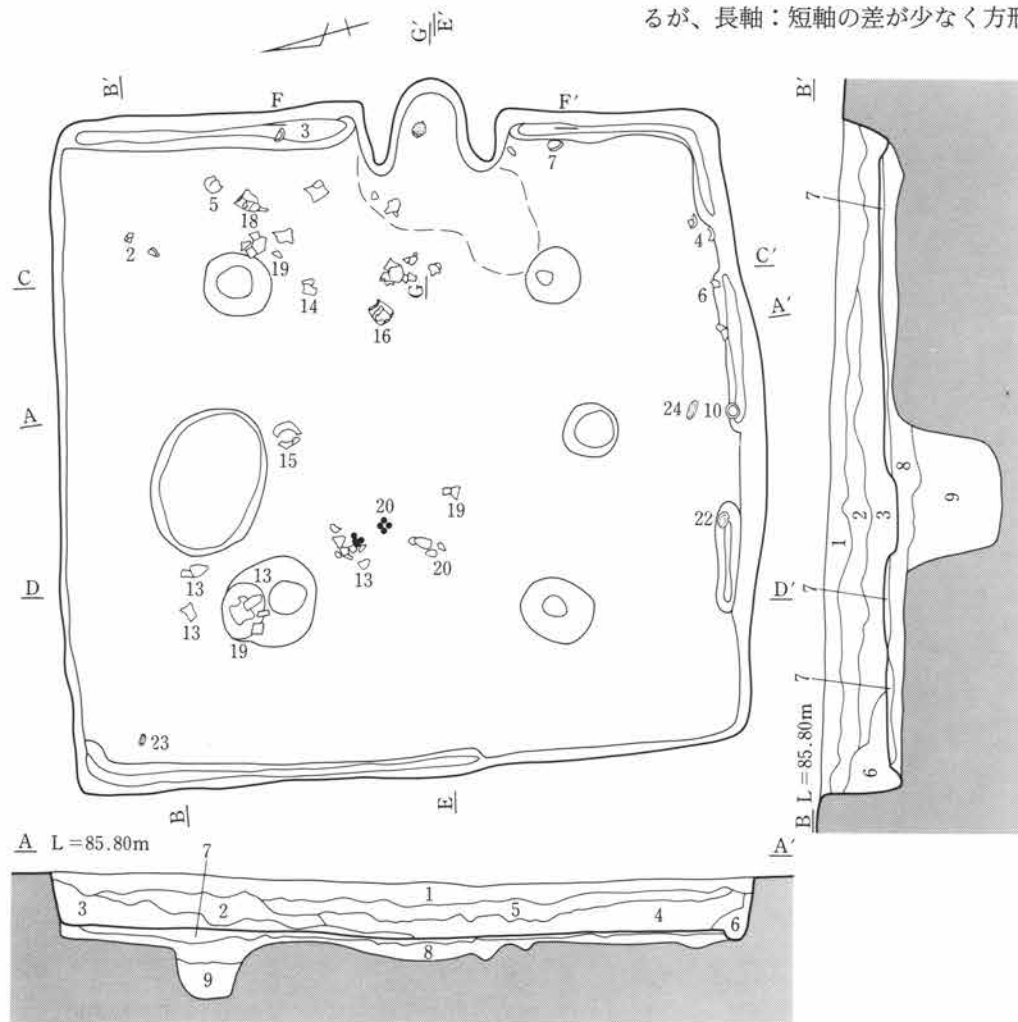
17号住居 (第59～63図 P L, 23・104・105)

位置 Bb・c-6・7・8

重複 西壁部で16号住居と重複する。土層断面の観察から17号住居が古く、16号住居が新しい。また東側で18号住居・47号住居と接するが重複部が少なく、調査所見では明らかではなかったが、出土土器との比較では17号住居がより古いものといえる。

主軸方向 N-101°-E **床面積** 26.4㎡

形態 西壁部を16号住居に切られるが、17号住居の方が深いため形状把握については大きな支障はない。主軸方向の対辺に長軸をもつ横長長方形を呈するが、長軸：短軸の差が少なく方形平面に近い形状



17号住居

- | | |
|--------------------|--------------------------|
| 1 暗褐色土 白色軽石、ロームを含む | 6 暗褐色土 ロームを多く含む |
| 2 暗褐色土 黒褐色土を含む | 7 暗褐色土 ロームを主とした貼り床面を形成する |
| 3 暗褐色土 ロームブロックを含む | 8 暗褐色土 ロームブロックを多く含む |
| 4 暗褐色土 ローム、焼土を含む | 9 暗褐色土 ローム塊を多く含む |
| 5 暗褐色土 ロームを含む | |

0 2 m

第59図 17号住居

を示す。各辺は直線的でほとんど歪みはなく、矩形となっている。

規模 5.4m×5.5m

カマド 東壁中央やや南寄りに設置される。天井部、煙道は残存しないが埋没土には天井部崩落土である黄褐色粘質土な堆積が認められる。両袖はロームを混入する暗褐色土により構築され幅20cmで50cm前後住居内に張り出す。またカマド中央からややずれた位置に支脚が設置され、粗粒安山岩の棒状の礫材が用いられている。カマド規模は焚口60cm、奥行き70cmで、全面には灰・焼土の散布が認められる。

内部施設 住居対角線上に柱穴が4カ所検出された。各柱穴は径40cm～50cm、深さ60cm～70cm、1辺2.5mで住居中央に方形配置される。このほか東壁、南壁および西壁に幅15cm、深さ10cmの周溝が部分的に巡る。なお北西部柱穴に近接する径90cm程度の穴

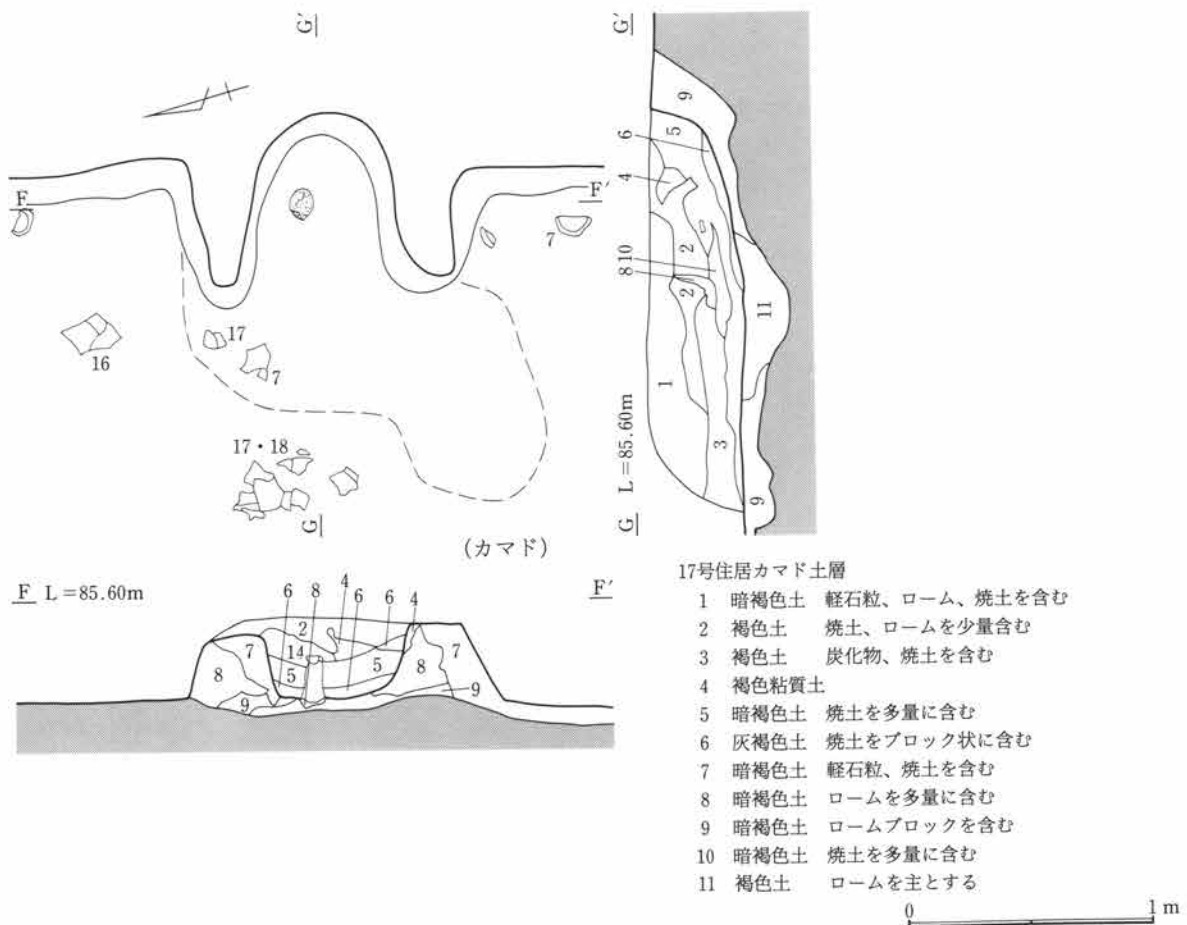
は浅い皿状のくぼみであり住居に伴うか否かについては確認できていない。

床 ロームを含む暗褐色土により張り床が施される。ほぼ水平で堅く良好な面を形成している。

掘り方 全体を掘り下げ、部分的に深さ50cm～80cmの土坑状の掘り込みを加え、ロームを含む暗褐色土を埋土する。

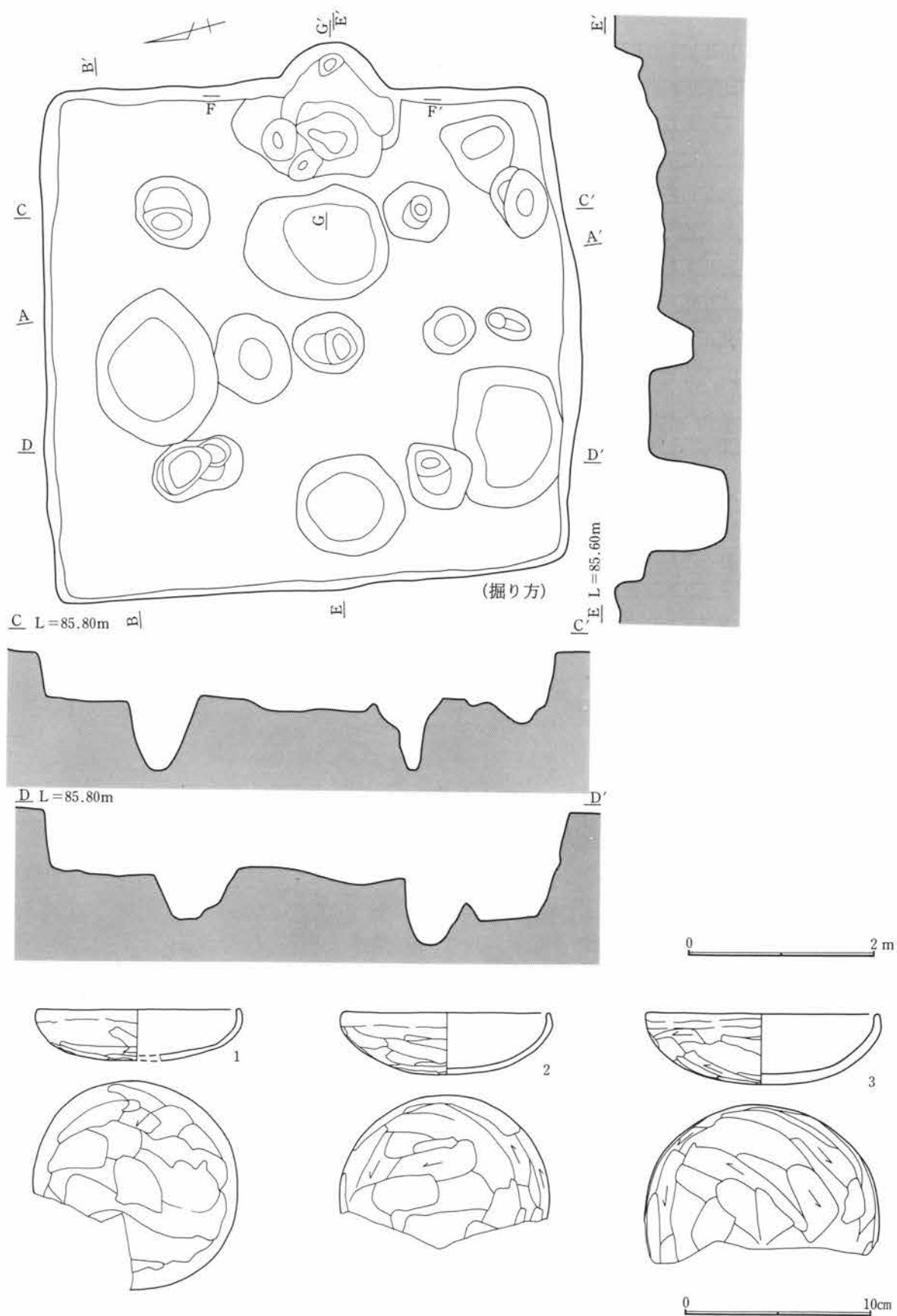
遺物出土状態 遺物量は多い。土器類は2・3・5・14・18が北東部、4・6・10が南壁付近、13・15・16・20が中央部、7・17がカマド付近でそれぞれ床面上、8・11・12がカマド内、1・9・21は埋没土から検出された。22・24の棒状礫は南壁付近、23は北西隅で床面上から出土している。棒状礫はこれらを含め南壁付近で2点、北西隅で4点、東壁北部で4点出土している。

時期 出土遺物から7C.末から8C.初頭に比定される。

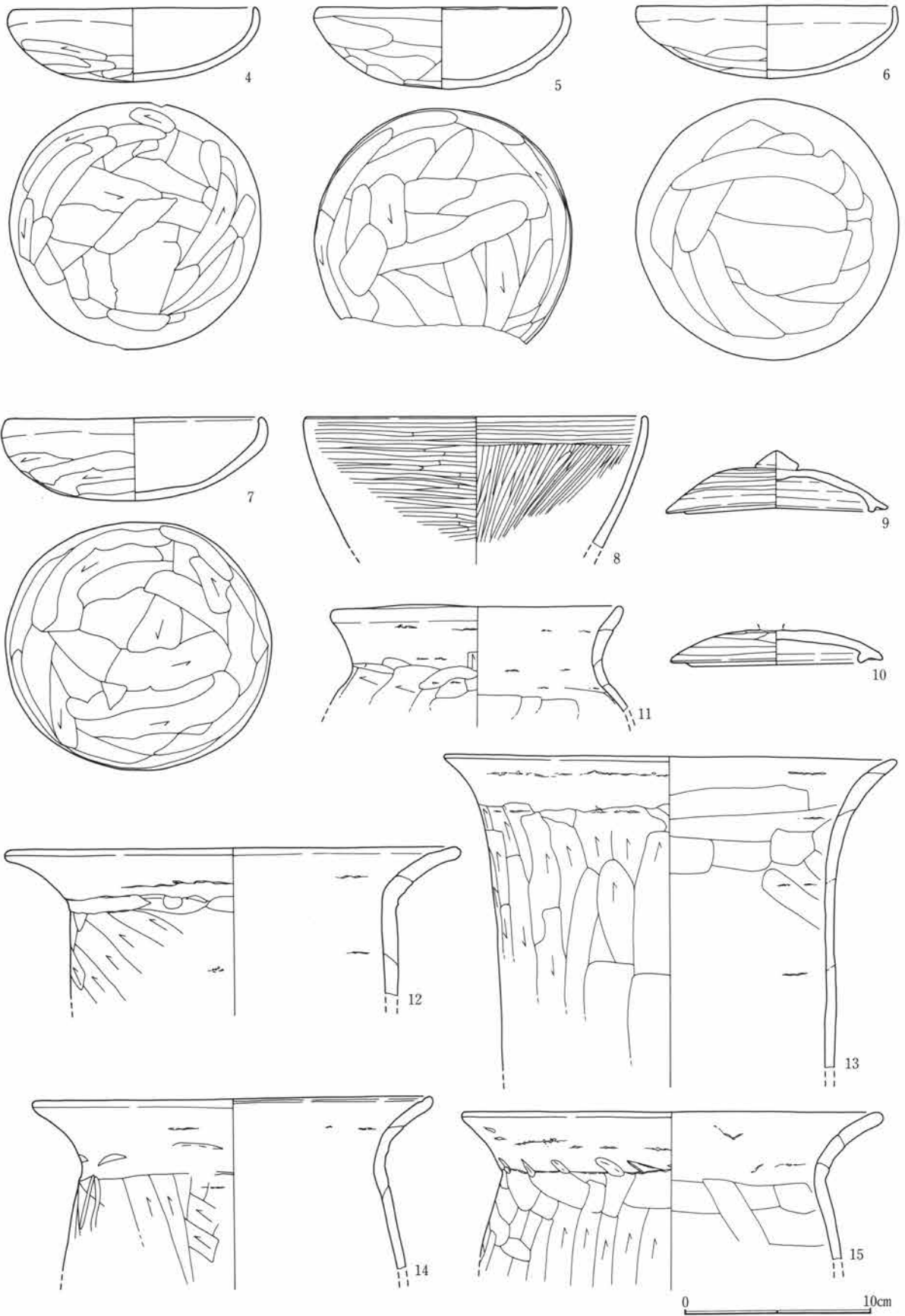


第60図 17号住居

II 発掘調査の記録

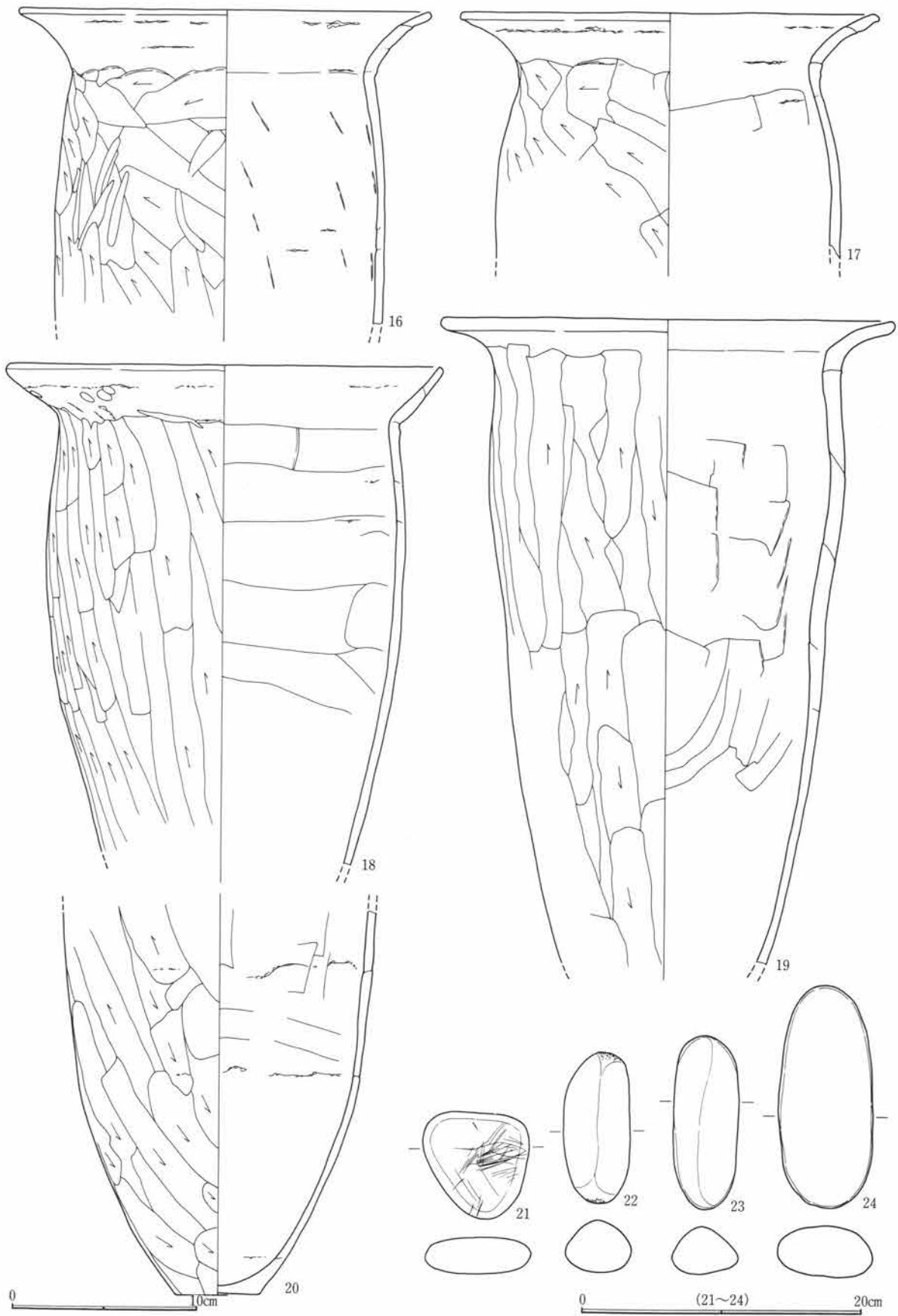


第61図 17号住居と出土遺物



第62図 17号住居出土遺物

II 発掘調査の記録



第63図 17号住居出土遺物

18号住居 (第64・65図 P L. 24・105)

位置 Bc・d-6・7

重複 西半部で47号住居と重複する。土層断面の観察から47号住居が古く、18号住居が新しい。また西側では17号住居と接している。さらにカマド煙道部を溝状遺構により切られている。

主軸方向 N-100°-E **床面積** 10.1m²

形態 主軸方向の対辺に長軸をもつ横長長方形を呈する。あまり歪みはみられず、ほぼ矩形を示している。

規模 3.0m×3.9m

カマド 東壁に設置され、北東隅から3分の2程度南寄りに位置する。煙道部は溝状遺構により壊され、天井部も遺失しており残存状態は良くない。規模は焚口60cmで、底面には5cm程度の層厚で灰層が認められる。

内部施設 床面上では周溝、柱穴などについて検出はされていない。ただ、掘り方調査により南東隅に径50cm×80cm、深さ20cmの掘り込みが認められているが、床面上では不明であったものの貯蔵穴の可能性はある。

床 ロームを含む褐色土により張り床が施される。

ほぼ水平な面を形成するが、とくに硬化した部分は検出されていない。

掘り方 掘り方はあまり深い掘り込みをもたず、10cm~30cm程度不規則に下げ、ロームを混在する暗褐色土で埋め戻している。

遺物出土状態 居住部にはほとんど遺物は認められず、カマド部分に検出される。1・3・4がカマド内、2・5が南東隅掘り込み内、6は埋没土から出土している。7の棒状礫は南西隅掘り込み、10の鉄製馬具は西壁中央、12の鉄製釘は東壁付近、8・9の刀子および11の釘は埋没土出土である。

時期 出土遺物から10C.前半に比定される。

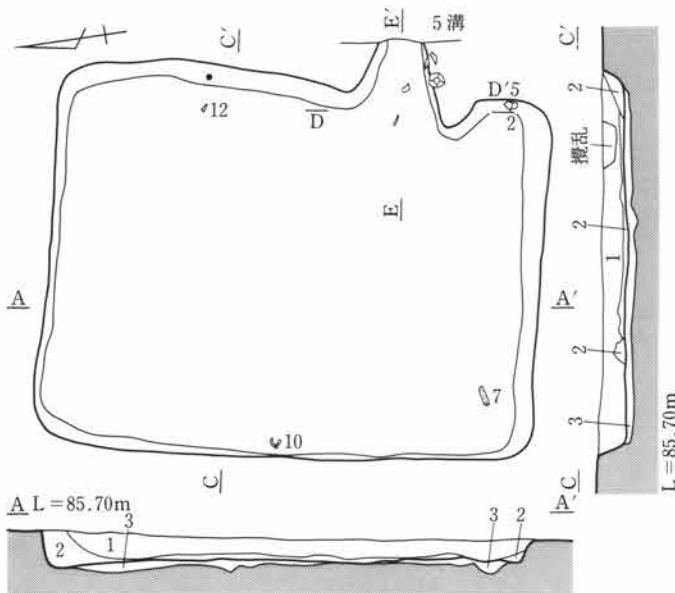
19号住居 (第66・67図 P L. 25・106)

位置 Bc・d-3・4

重複 北東隅で21号住居、南東隅で1号井戸と重複する。住居間の新旧関係は重複部分が少なく、検出時には良好な調査所見が得られていないが、出土土器による比較では21号住居が古く、19号住居が新しいものといえる。なお井戸との関係については19号住居が古く、南東隅が部分的に壊されている。

主軸方向 N-99°-E **床面積** (8.5m²)

形態 主軸方向の対辺に長軸をもつ横長長方形を呈

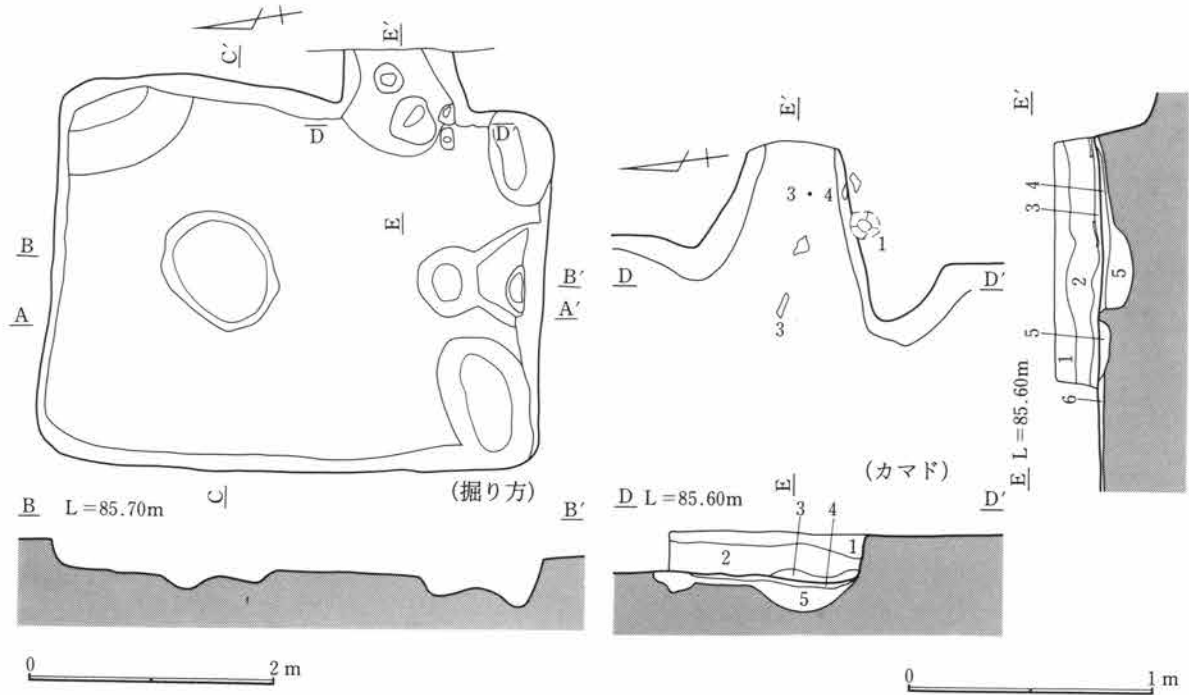


18号住居

- 1 褐色土 白色軽石、焼土を含む
- 2 褐色土 焼土を含む
- 3 褐色土 堅く良好な貼り床を形成する

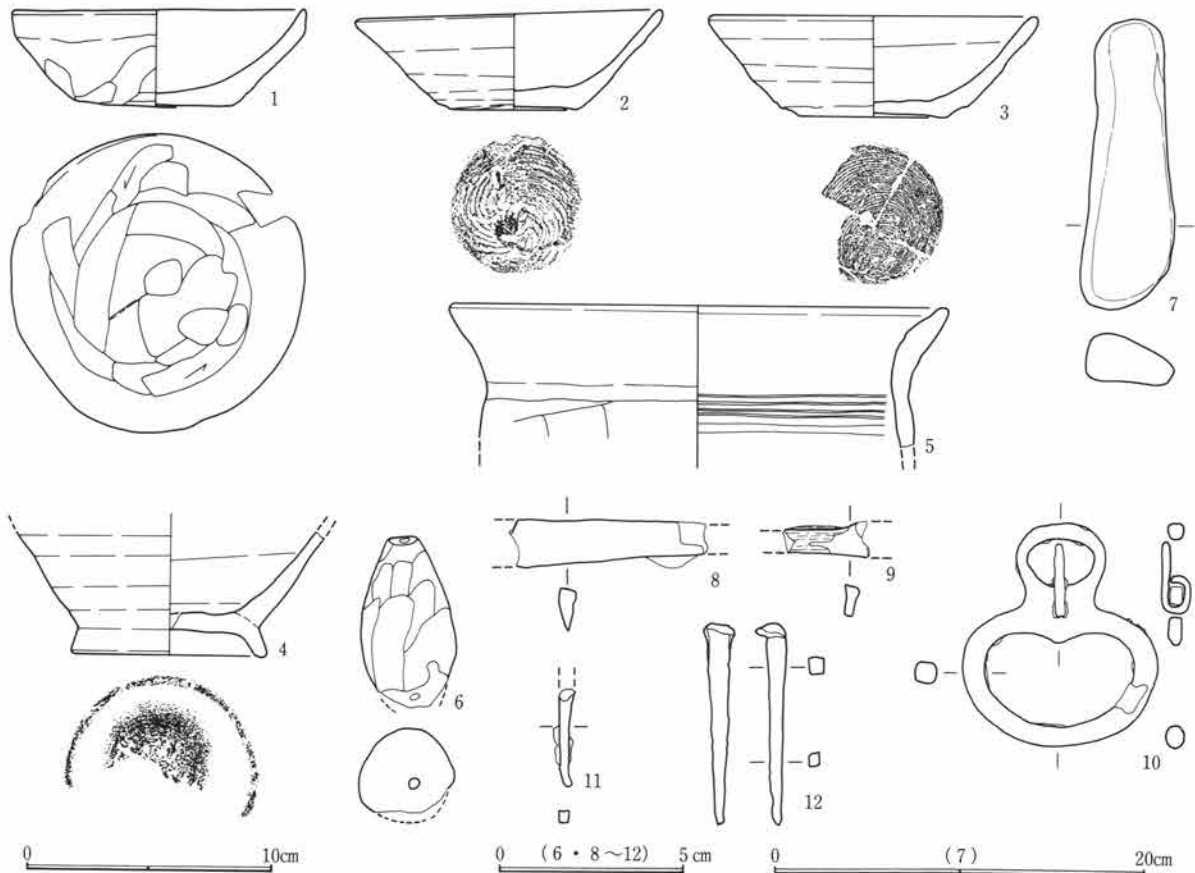
第64図 18号住居

II 発掘調査の記録



18号住居カマド土層

- | | |
|--------------------|------------------|
| 1 褐色土 軽石粒、焼土を含む | 4 暗褐色土 灰を多量に含む |
| 2 暗褐色土 焼土粒、ローム粒を含む | 5 褐色土 ロームブロックを含む |
| 3 暗褐色土 焼土粒、灰を含む | 6 褐色土 ロームを多量に含む |



第65図 18号住居と出土遺物

する。北東および南東の両隅が部分的に不明であるが、平面形状はあまり歪みがなく、ほぼ矩形を示している。

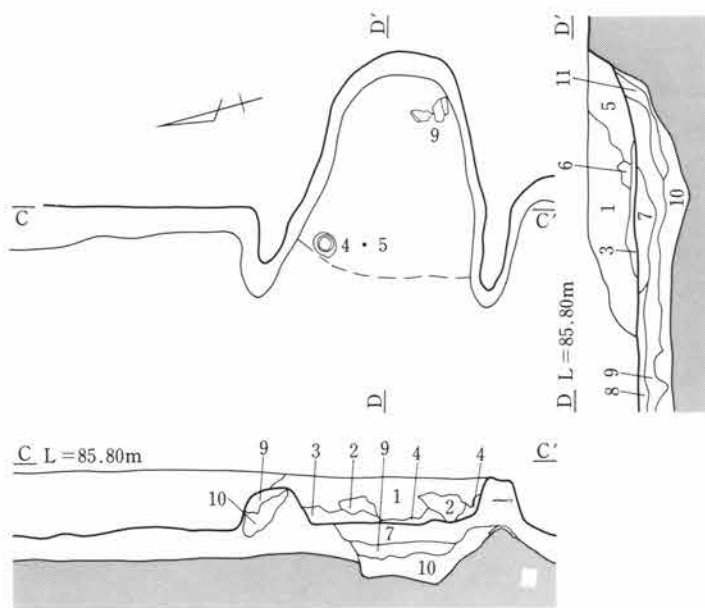
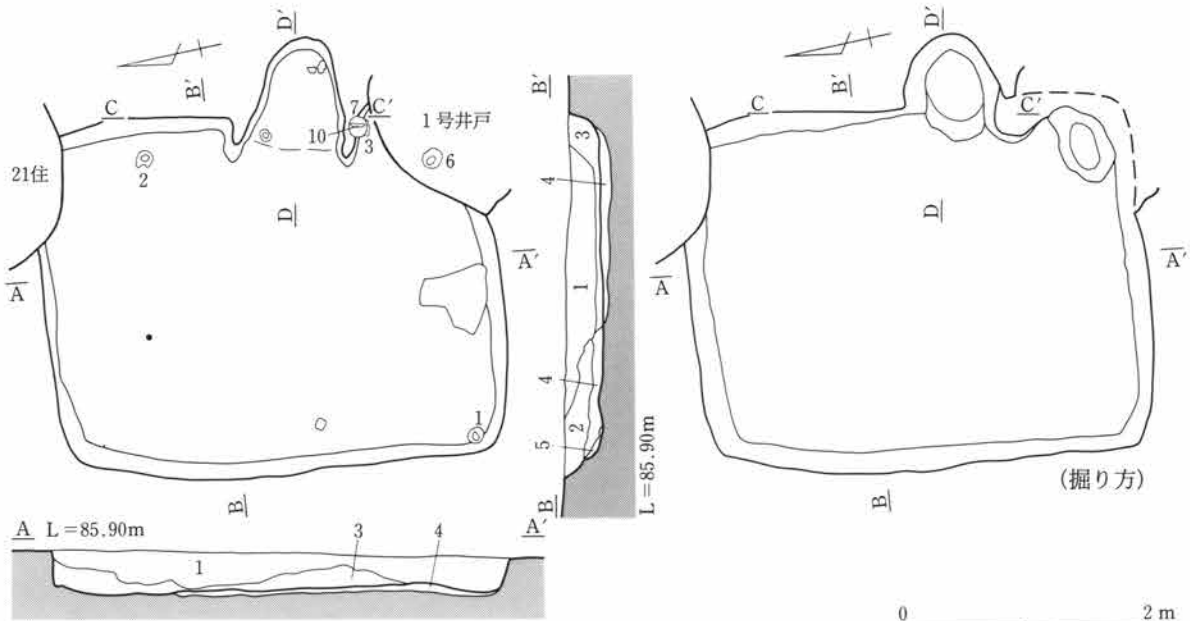
規模 2.9m×3.7m

カマド 東壁中央やや南寄りに設置される。天井部、煙道は残存しないが、埋没土には天井部崩落土である火熱を受けた灰白色粘質土の堆積が認められる。両袖はロームを混入する暗褐色土により構築され、幅10cmで30cm～40cm程度住居内に張り出す。規模は焚口70cm、奥行き90cmを計測する。

内部施設 床面上では周溝、柱穴などについては検出されなかった。しかし1号井戸が重複する南東隅には掘り方調査により径50cm、深さ15cmの小穴が検出されている。床面部は井戸により壊されているため不明であったが、おそらく貯蔵穴の下部のみ残存したものと思われる。穴内からは6の碗が出土している。

床 ローム、黒色土の混土による張り床が施される。
掘り方 浅く10cm前後ほりさげる。

遺物出土状態 カマド部分に多い。3・7はカマド



19号住居

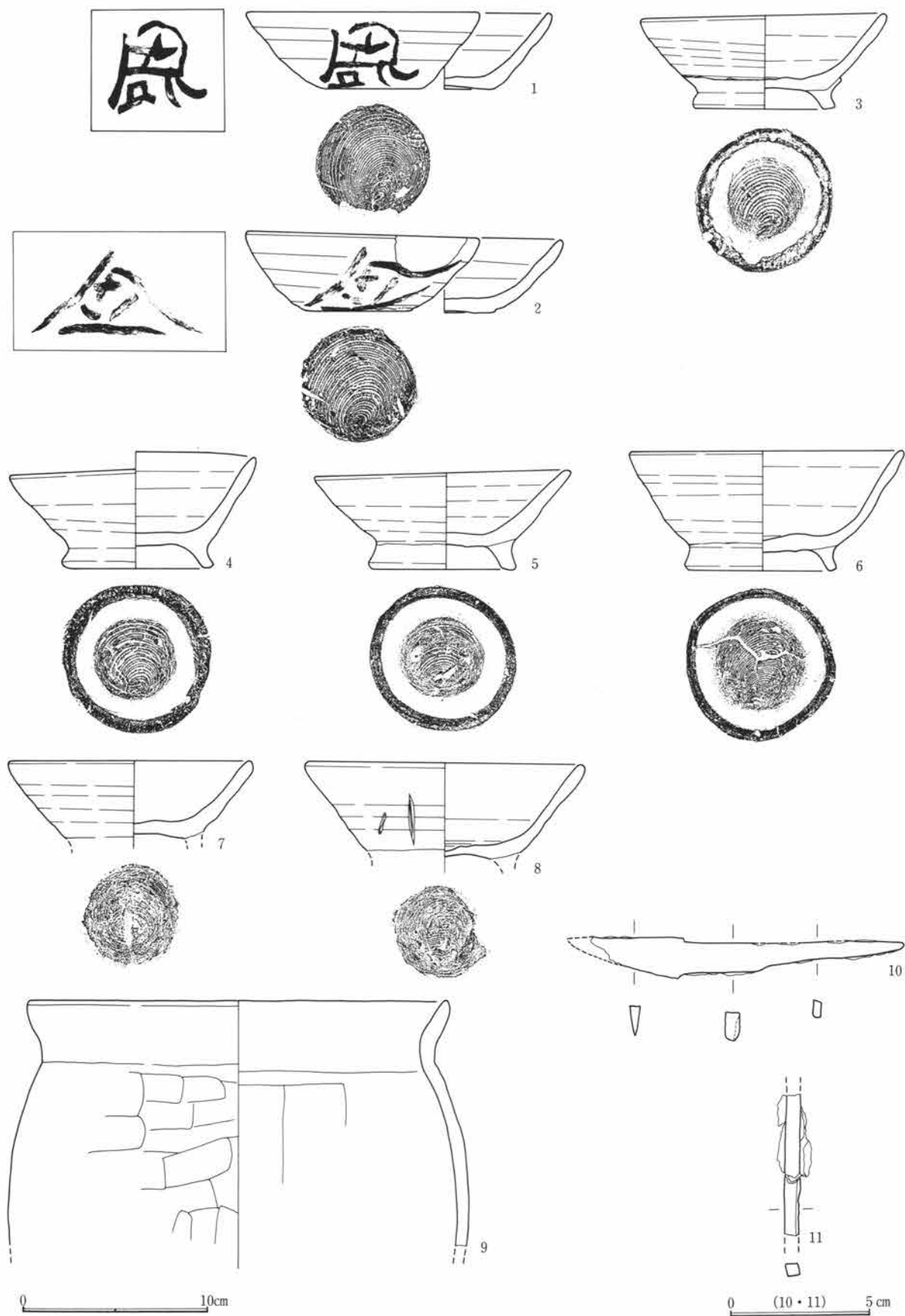
- 1 褐色土 白色軽石、ロームを含む
- 2 褐色土 ロームをやや多く含む
- 3 黒褐色土 ロームブロックを含む
- 4 黒色土とロームとの混土層
- 5 褐色土 ロームを含む

19号住居カマド土層

- 1 暗褐色土 軽石粒を含む
- 2 暗褐色土 ローム、粘質土を含む
- 3 暗褐色土 粘質土、焼土を含む
- 4 褐色土 ロームブロックを含む
- 5 暗褐色土 ローム、焼土を含む
- 6 灰白色粘質土
- 7 黒褐色土 焼土粒、炭化物粒を含む
- 8 褐色土 ロームと黒色土を含む貼床層
- 9 暗褐色土 ロームブロックを含む
- 10 褐色土 黒色土を含む
- 11 黒褐色土 ローム粒を含む

第66図 19号住居

II 発掘調査の記録



第67図 19号住居出土遺物

右袖内、4・5はカマド内にそれぞれ重なった状態で出土し、10の刀子も右袖部で検出されている。1は南西部、2は北東部、9は南東部で床面上、6は貯蔵穴、8および11の釘は埋没土から出土している。

時期 出土遺物から10C.後半に比定される。

20号住居 (第68・69図 P L, 21・106)

位置 Ay・Ba—9・10

重複 北西隅で44号住居、南東隅で43号住居と重複

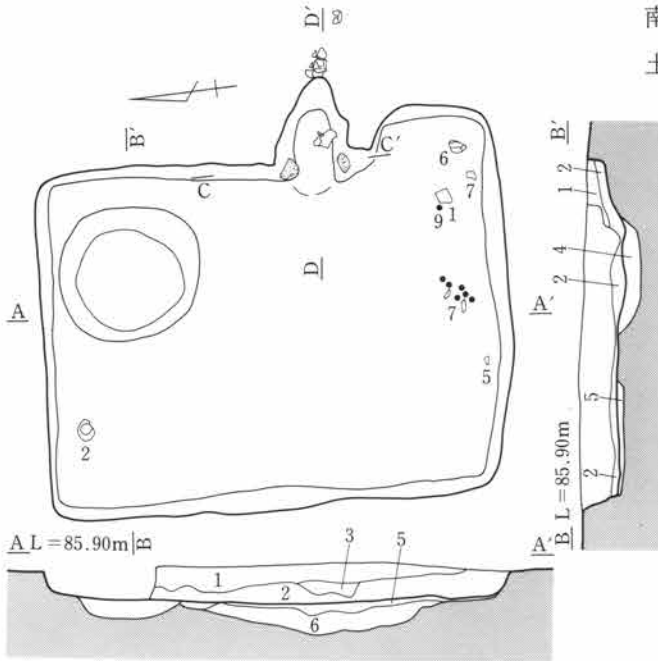
する。両住居間の重複関係はいずれについても20号住居が新しい。

主軸方向 N—94°—E **床面積** 9.0㎡

形態 主軸方向の対辺に長軸をもつ横長長方形を呈する。各辺は直線的でほぼ矩形を示すが、カマド南側の南東部壁が張り出している。

規模 2.8m×3.7m

カマド 東壁に設置され、北東隅から3分の2程度南側に位置する。天井部、煙道は残存しないが埋没土には天井部崩落土とみられるロームを混在する褐

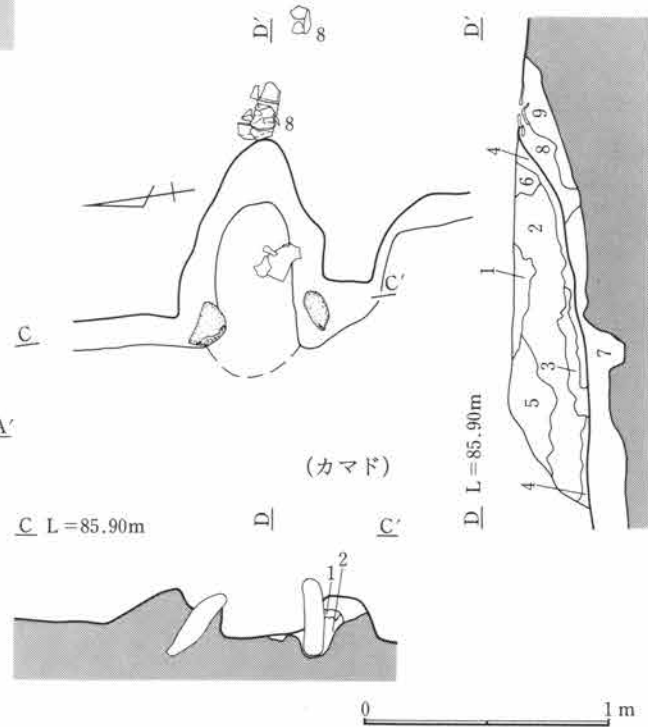
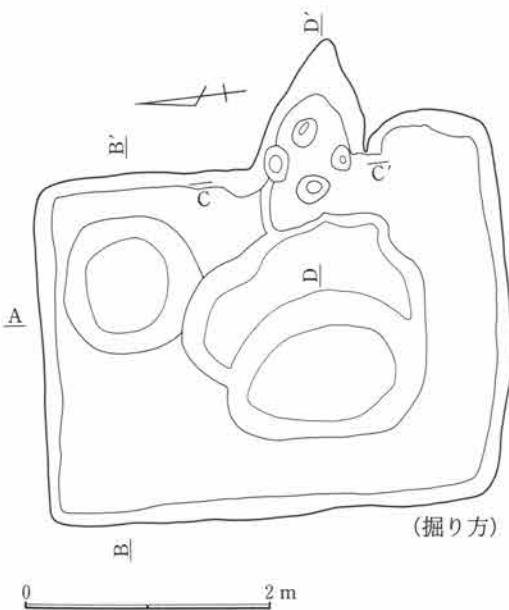


20号住居

- 1 暗褐色土 白色軽石を多く含む
- 2 暗褐色土 ローム、焼土を含む
- 3 暗褐色土 ロームブロックを含む
- 4 暗褐色土 ローム、焼土を多く含む
- 5 暗褐色土 ロームを主として貼り床を形成
- 6 黒褐色土 ロームブロック、焼土を含む

20号住居カマド土層

- 1 黒色土 軽石粒を含む
- 2 褐色土 ロームを多量に含む
- 3 褐色土 ロームブロックを含む
- 4 暗褐色土 ローム、焼土を含む
- 5 暗褐色土 白色軽石を含む
- 6 褐色粘質土 壁体崩落土
- 7 暗褐色土 焼土粒を含む
- 8 灰褐色土 焼土を多量に含む
- 9 暗褐色土 焼土粒、ローム粒を含む

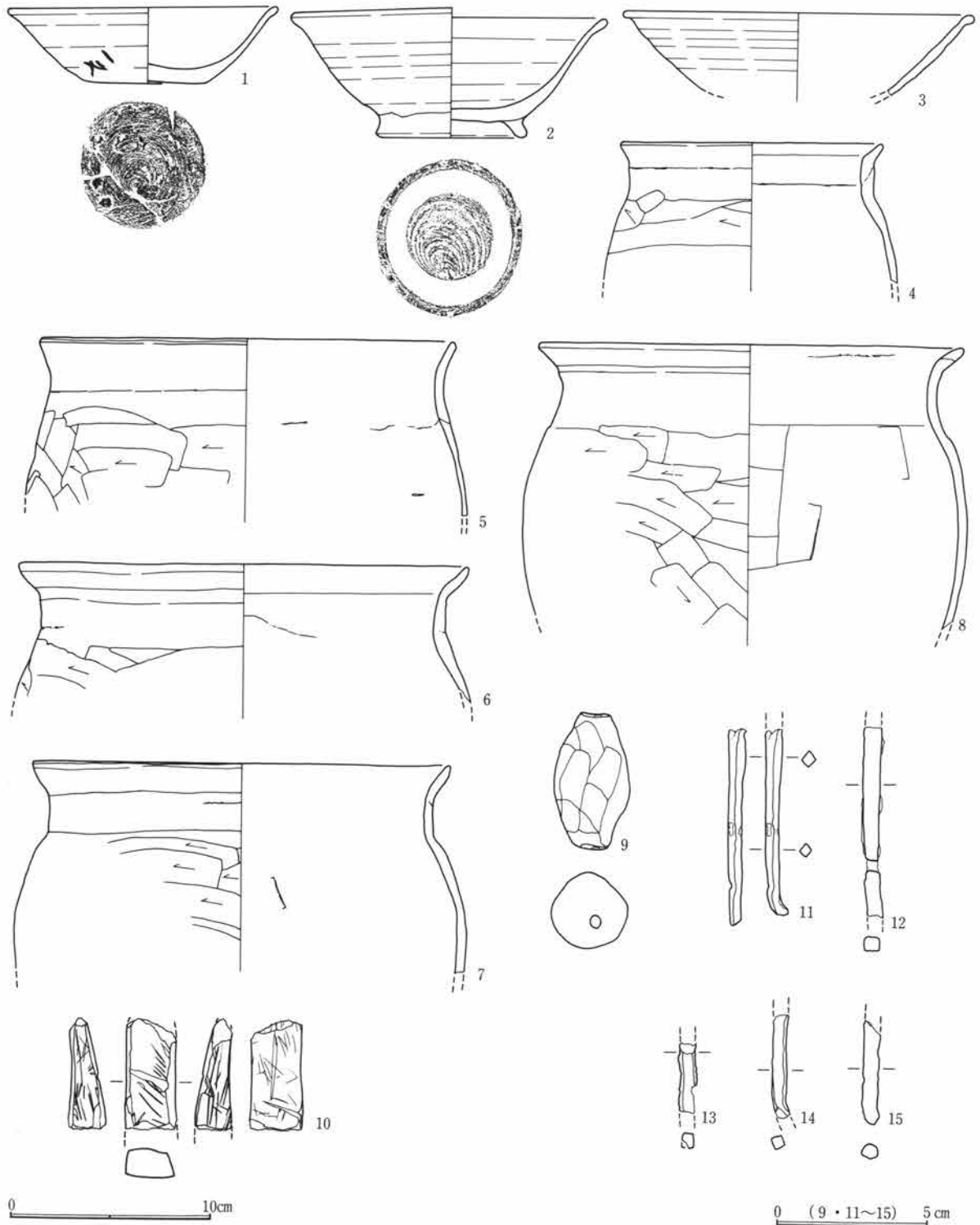


第68図 20号住居

II 発掘調査の記録

色土がブロック状に堆積している。さらにカマド先端部には8の甕片が散布しており、煙道部の掘り込みは検出していないがここに散布する土器片が構築材（補強材）として利用された可能性が、出土状況

から考えることができる。両袖は残存部では地山のロームが掘り残され、さらに粗粒安山岩の礫材がそれぞれ1個ずつ用いられ、10cm~20cm埋置されている。なお掘り方調査によりカマド中央に径20cm、深



第69図 20号住居出土遺物

さ15cmの小穴が認められたが、遺物は未検出であるものの支脚の設置痕とみられる。カマド規模は焚口30cm、奥行き80cmを計測する。

内部施設 周溝、貯蔵穴など認められていない。北東にみられる径110cm、深さ20cmの土坑状の掘り込みはこの住居の伴うものか否かは確定できていない。

床 ロームを混在する暗褐色土により張り床が施される。良好な面が形成されている。

掘り方 中央部に深さ30cm前後の掘り込みが加えられる。

遺物出土状態 2・5・9が床面上、1・6・7がそれぞれ5cm~10cm床面から上位、3・4および10~15が埋没土から出土している。またカマドの項で説明したような状態で8の甕が出土している。

時期 出土遺物から9 C. 中葉に比定される。

21号住居 (第70・71図 P L. 27・107)

位置 Bc・d・e-2・3

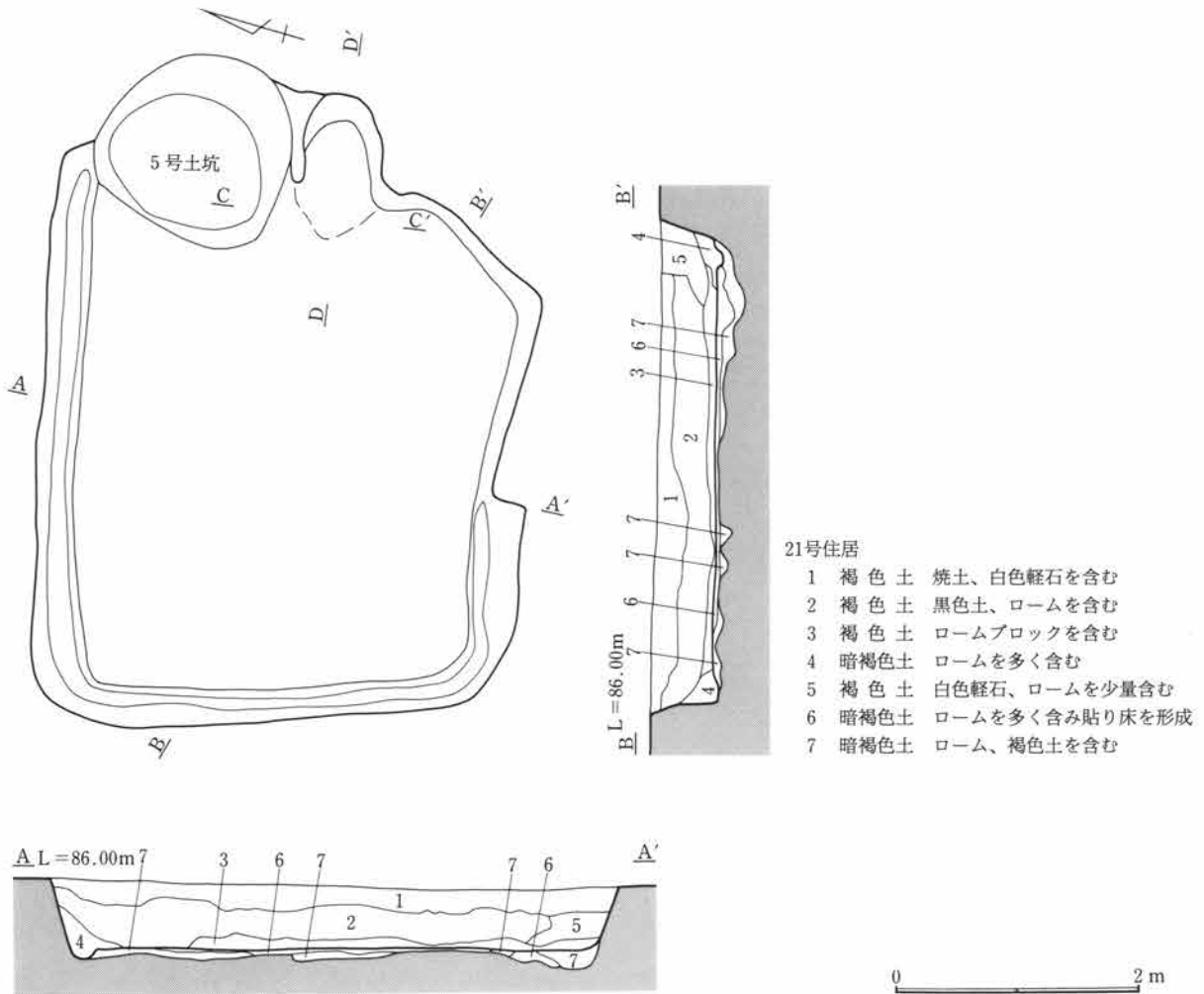
重複 南西隅で19号住居と重複する。重複部分は少ないが、前記の通り21号住居が古く、19号住居が新しい。また北東壁、カマド北側では5号土坑に切られている。

主軸方向 N-72°-E **床面積** 14.3㎡

形態 主軸方向に長軸をもつ縦長長方形を呈する。なお、住居南東隅部分は攪乱の影響によるものか、遺構形態が不明瞭なものとなっている。検出部分で平面形態をみると各辺は直線的でほぼ矩形を示すものとみられる。

規模 3.9m×4.4m

カマド 東壁中央に設置される。天井部、煙道は残存せずカマドの遺存状態は良くない。埋没土は白色



第70図 21号住居

II 発掘調査の記録

軽石粒、焼土粒を含む暗褐色土であり、底面には焼土、灰の散布が認められている。

内部施設 壁下に幅18cm、深さ8cmの周溝が巡る。なお、5号土坑重複部および遺構形態が不明瞭となる南東部は確認できていない。このほか明確な施設については検出していない。

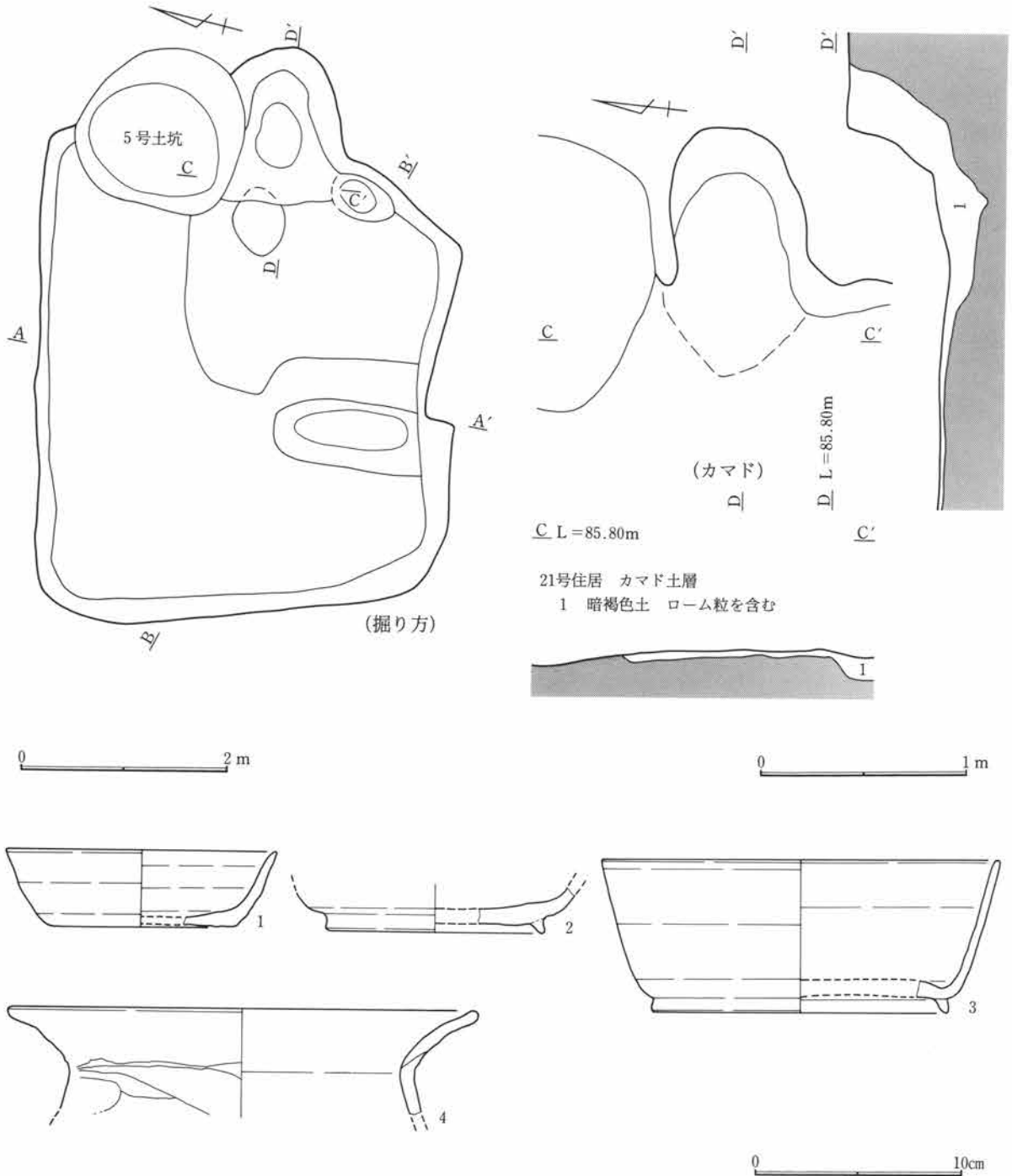
床 ロームを含む褐色土により張り床が施される。

ほぼ水平で堅く良好な面が形成されている。

掘り方 10cm～20cm程度不規則に掘り下げられ、暗褐色土で埋め戻している。

遺物出土状態 床面上での遺物出土は認められていない。図示した1～4の土器類はいずれも埋没土から検出されている。

時期 出土遺物から8C.前半に比定される。



第71図 21号住居と出土遺物

22号住居 (第72~74図 P.L. 28・107)

位置 Bd・e-6・7

重複 住居北西隅部に5号溝が横切る。なお18号住居が西接するがこの溝が存在するため、住居間の重複関係は不明である。

主軸方向 N-90°-E 床面積 11.3m²

形態 基本的に主軸方向の対辺に長軸をもつ横長長方形を呈するが、平面形は矩形を示さずカマド北側の東壁北半部が大きく張り出している。また北西隅部分は溝により壊されているため不明である。

規模 3.5m×3.9m

カマド 東壁に設置され、北東隅から3分の2程度南側に位置する。天井部、煙道は残存せず、白色軽石粒、焼土などを含む暗褐色土が堆積している。カマド内には壁体構築材である礫が複数検出されている。いづれも石材は粗粒安山岩の大型礫を用いており、10cm~20cm埋置している。規模は焚口30cm、奥

行き70cmで、前面には灰および焼土の散布が認められる。

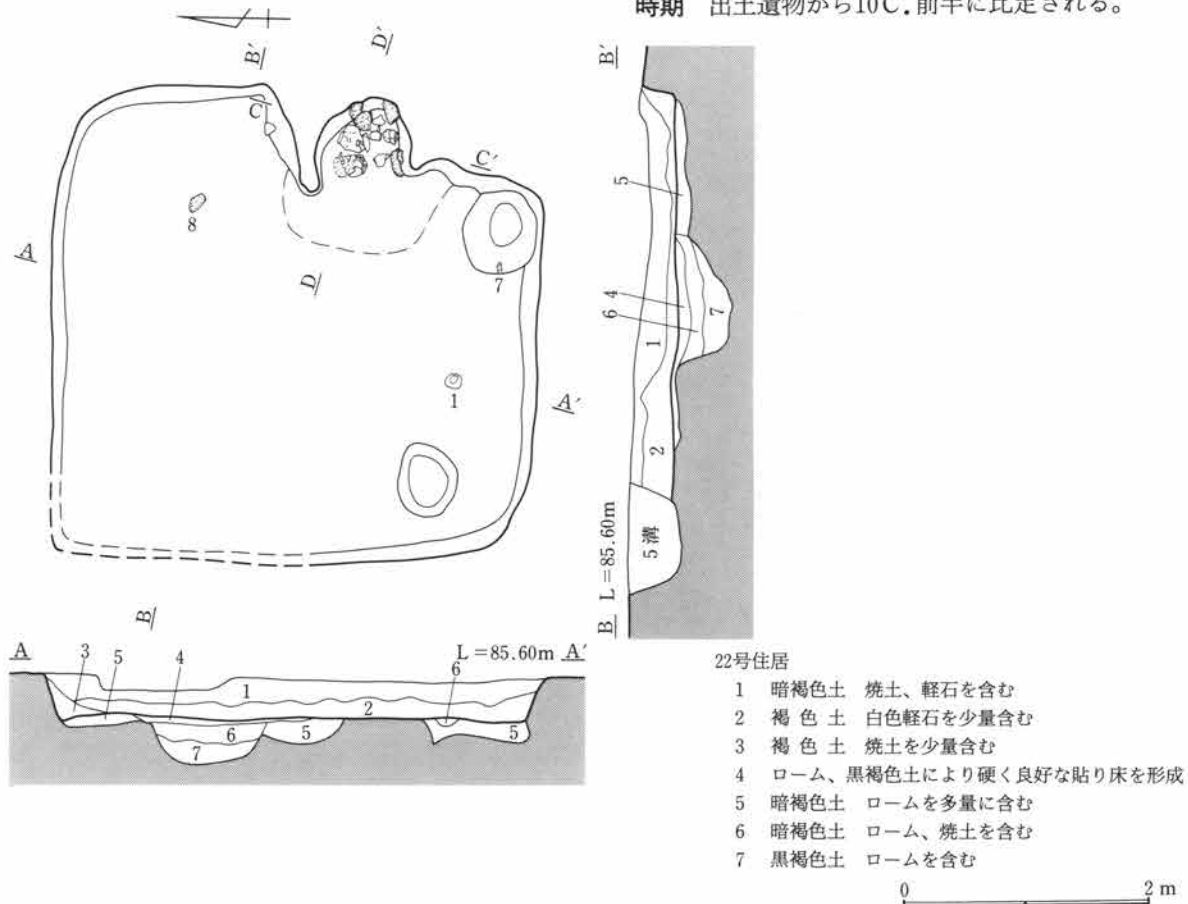
内部施設 住居南東隅に径60cm、深さ30cmの貯蔵穴が存在する。穴内からはとくに出土遺物は認められていない。南西隅付近には径50cm、深さ30cmの小穴が検出され、調査時には柱穴の可能性を考慮したが結局この小穴のみであり、これ以外認められなかった。なお周溝については未検出である。

床 ロームおよび黒褐色土の混土により張り床が施される。ほぼ水平で堅く良好な面が形成されている。また地山のローム面を床とする部分もみられる。

掘り方 径50cm~100cm、深さ20cm~30cm程度の土坑状の掘り込みが複数加えられ、ロームを含む暗褐色土により埋め戻される。

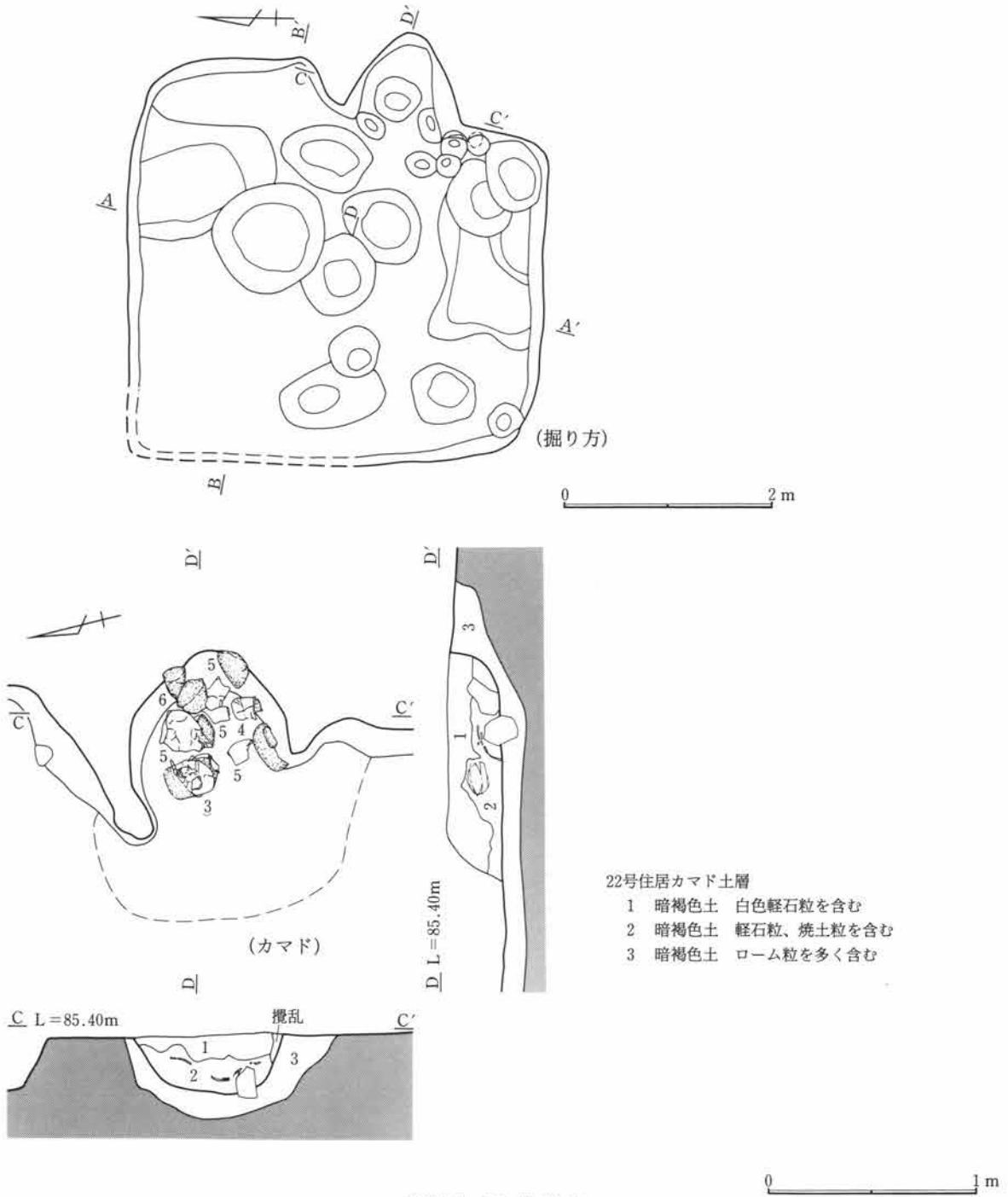
遺物出土状態 2~5はカマド内、1は掘り方で検出され、6はカマド構築礫、7は貯蔵穴、8は北東部床上、9は刀子の茎片で埋没土から出土している。

時期 出土遺物から10C.前半に比定される。



第72図 22号住居

II 発掘調査の記録



第73図 22号住居

23号住居 (第75~79図 P L. 29・107・108)

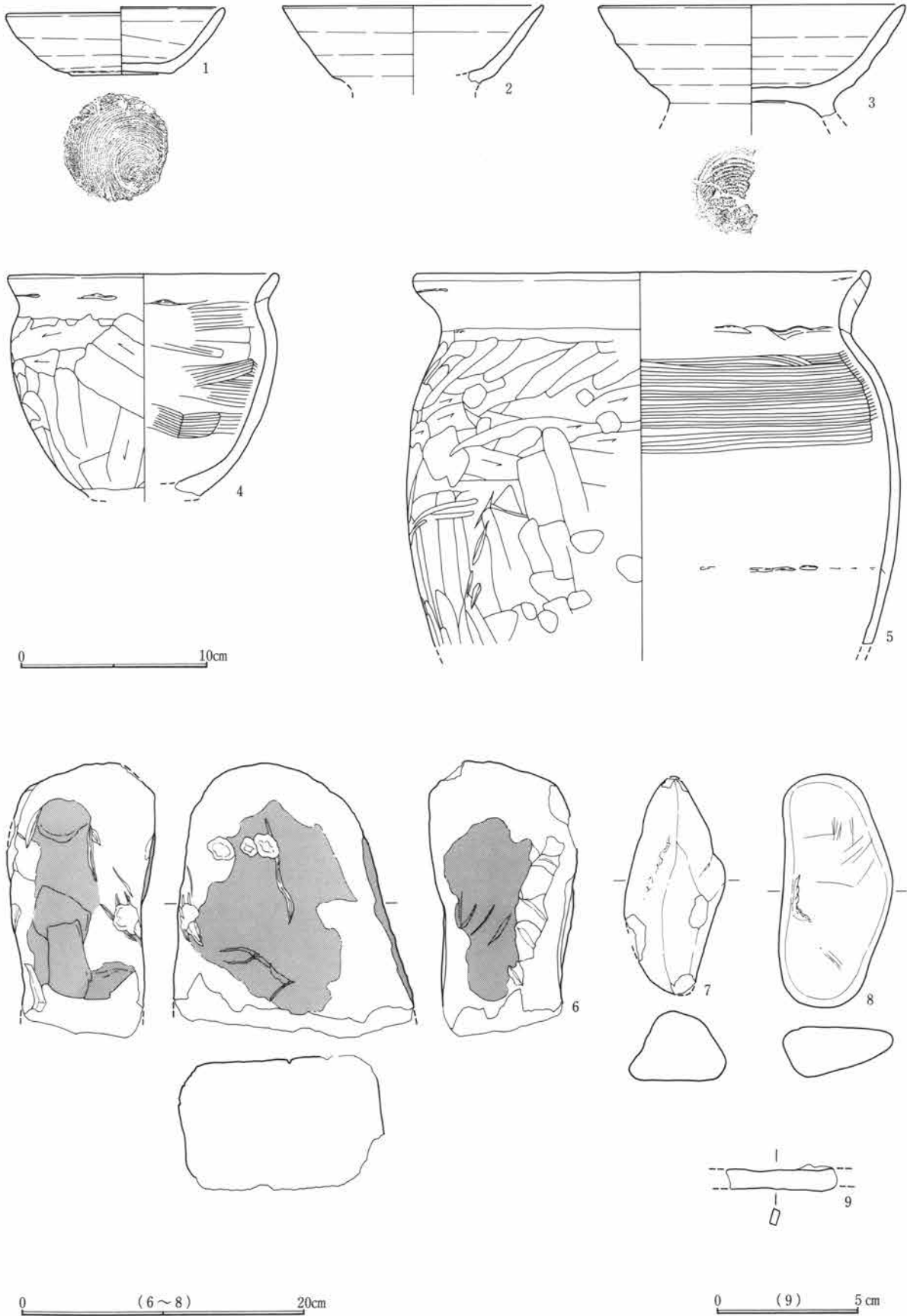
位置 Bc・d・e-8・9・10

重複 住居および土坑など他遺構との重複は認められない。

主軸方向 N-93°-E 床面積 21.0m²

形態 主軸方向の対辺に長軸をもつ横長長方形を呈

する。北東隅および北西隅は直線的に交わり角を構成するが、南東隅・南西隅については丸みをもって壁に接している。平面形はあまり歪みは認められないが、カマド北側の東壁部分が張り出しており、さらに西辺に比べ東辺がやや長くなり、矩形を形成しない。



第74図 22号住居出土遺物

II 発掘調査の記録

規模 4.3m×5.9m

カマド 東壁に設置され、北東隅から3分の2程度南寄りに位置する。天井部、煙道は残存しないが、埋没土中には天井部崩落土である火熱を受けた褐色粘質土の堆積が認められる。またカマド底面には層厚2cm程度の灰層も検出されている。袖は暗褐色粘質土により構築され、右袖部はほとんど張り出しが検出されないが、左袖部は幅20cmで30cm程度住居内に張り出している。カマド構築には壁体に礫材を使用しており、粗粒安山岩、二ツ岳軽石および軽石が5個設置されている。その配置をみると粗粒安山岩と軽石が交互に並べられている。カマド前面には灰・焼土の散布が認められる。規模は焚口85cm、奥行き95cmを計測する。

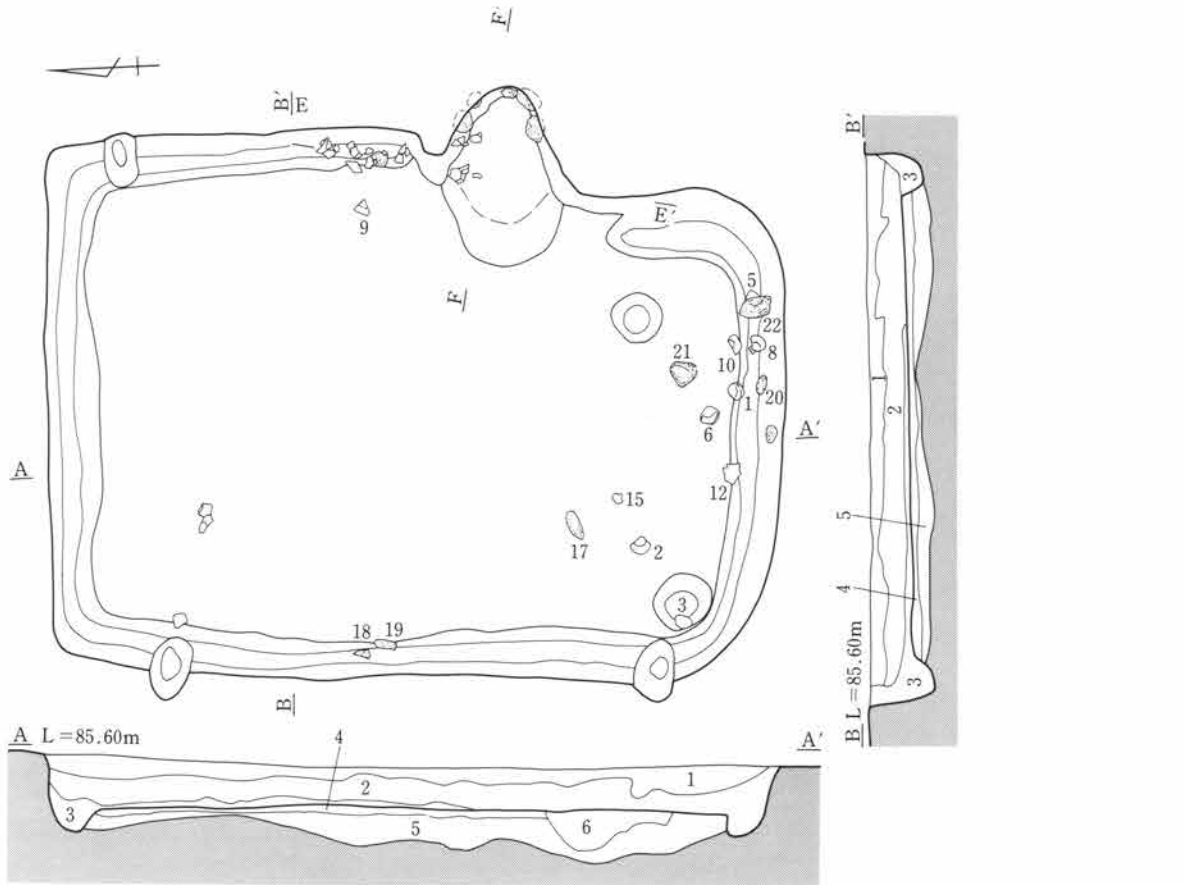
内部施設 壁下に沿って幅20cm、深さ15cmの周溝が

巡る。この周溝は全周せずカマド袖部分で途切れている。このほか配置がやや不規則ながら柱穴と考えられる小穴が4カ所認められている。カマド北側東壁に径60cm、深さ50cm、西壁北寄りに径50cm、深さ40cm、南西隅に径40cm、深さ40cm、南東部に径40cm、深さ40cmの柱穴がそれぞれ存在する。各柱穴間の距離は北辺が4.1m、西辺が4m、南辺が2.4m、東辺が4.3mで、東辺以外が直角に交叉する梯形配置となっている。

床 褐色土および灰褐色土により張り床を施す。

掘り方 土坑状の掘り込みが不規則に加えられる。

遺物出土状態 遺物は南壁付近に偏在する傾向がある。1・8・12・19～20が南壁周溝、16・17が西壁周溝、13が東壁周溝、3が南西柱穴、6・9・15が床面上、11・14がカマドで検出され、他遺物は埋没

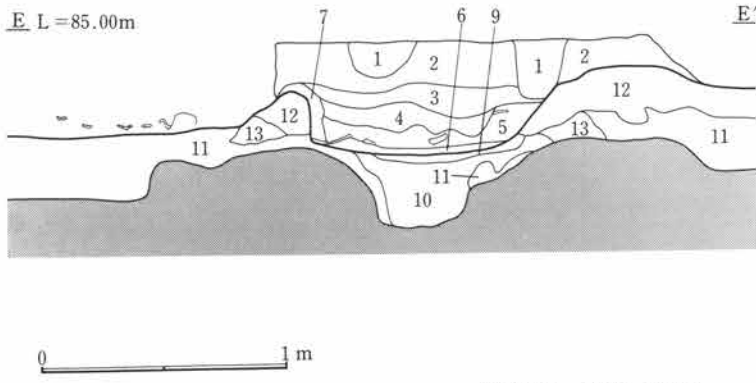
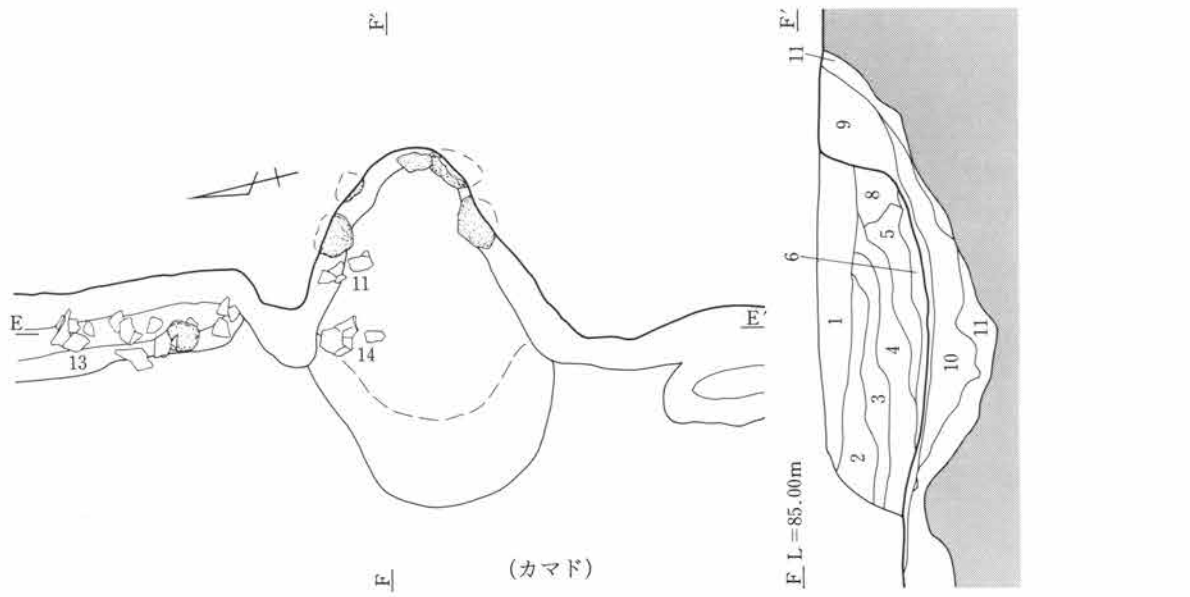
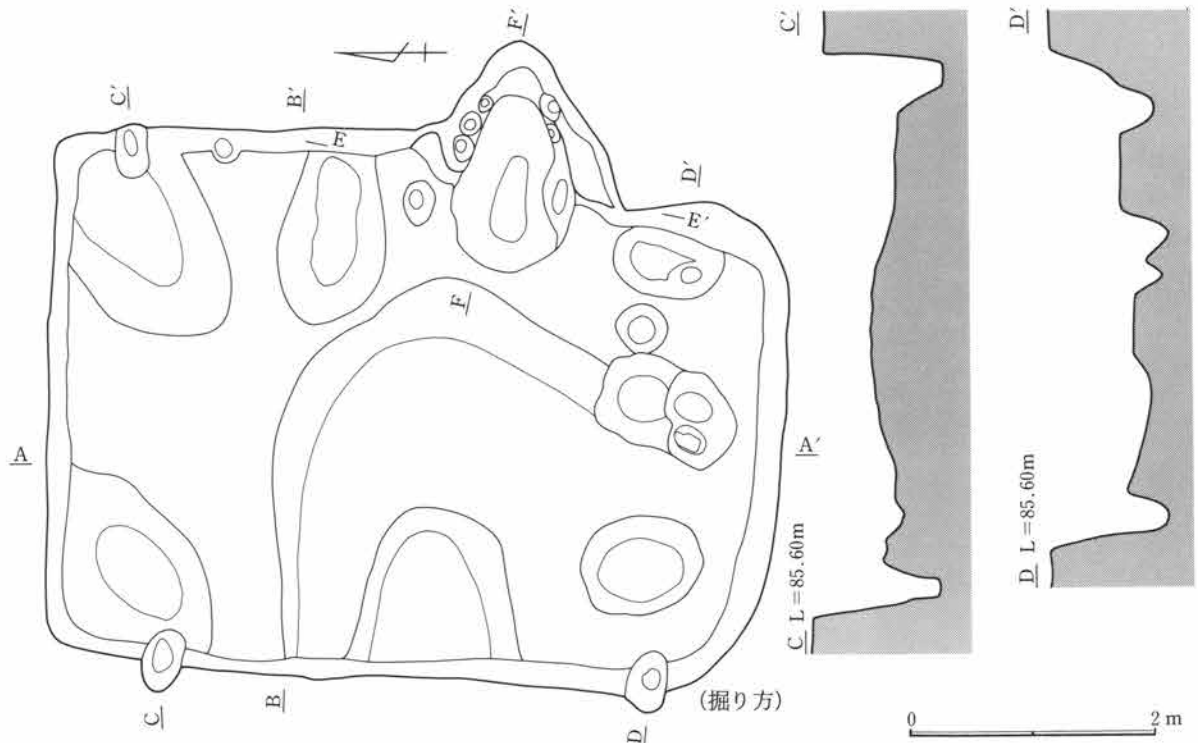


23号住居

- | | |
|---------------------|---------------------|
| 1 褐色土 白色軽石、焼土を含む | 4 灰褐色土 褐色土、焼土を混入する |
| 2 暗褐色土 焼土、炭化物、軽石を含む | 5 黒褐色土 灰褐色土を混入する |
| 3 暗褐色土 ロームブロックを多く含む | 6 褐色土 ローム、灰褐色土を混入する |

0 2 m

第75図 23号住居

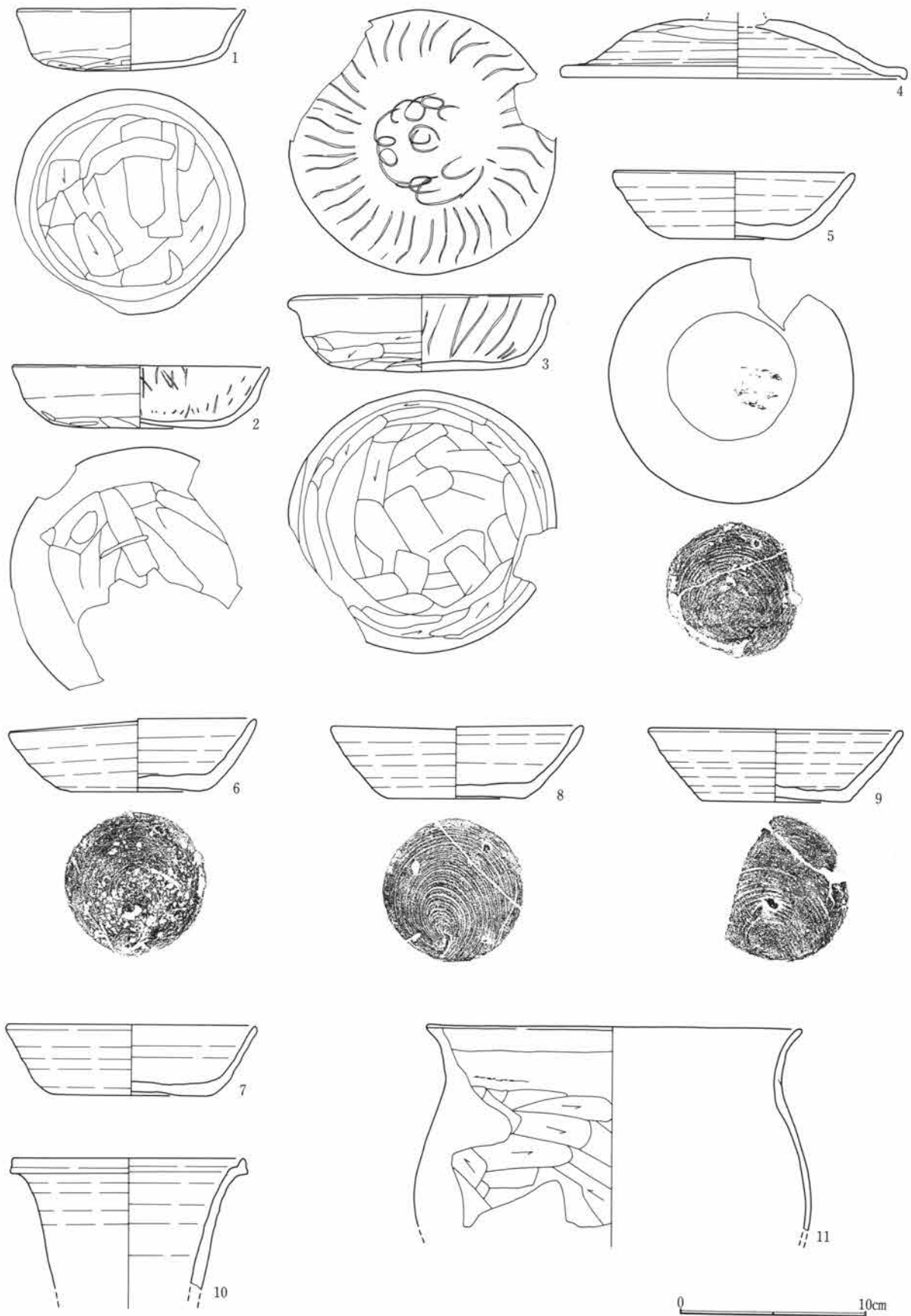


23号住居カマド土層

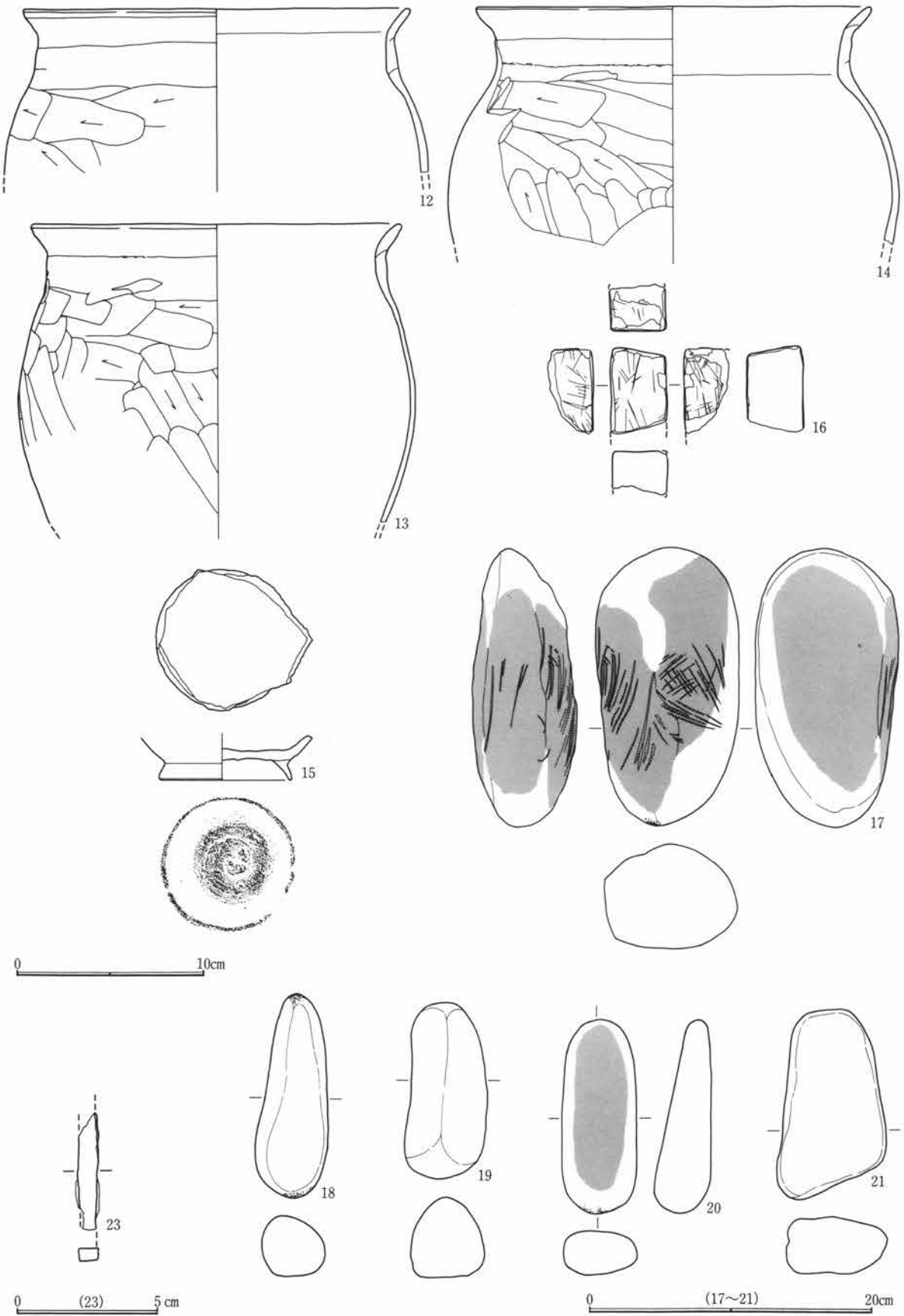
- 1 耕作溝
- 2 褐色土 焼土、軽石を含む
- 3 褐色粘質土 焼土を多量に含む
- 4 褐色土 焼土、粘質土を含む
- 5 暗褐色土 焼土、灰を含む
- 6 黒褐色土 灰を多量に含む
- 7 灰褐色粘質土 壁体崩落土
- 8 暗褐色土 焼土粒を含む
- 9 黒褐色土 灰、焼土を多量に含む
- 10 暗褐色土 ローム、焼土、粘質土を含む
- 11 暗褐色土 ロームを多量に含む
- 12 暗褐色粘質土 袖部構築土
- 13 暗褐色土 ローム、焼土を含む

第76図 23号住居

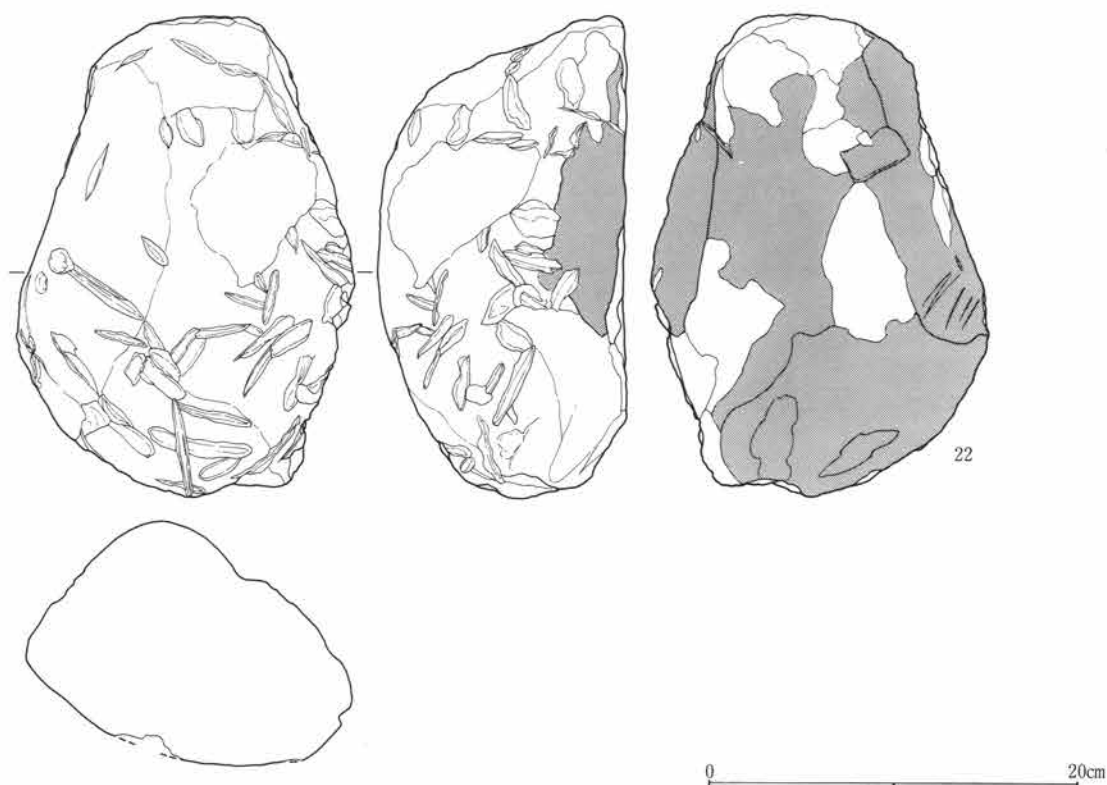
II 発掘調査の記録



第77図 23号住居出土遺物



第78図 23号住居出土遺物



第79図 23号住居出土遺物

土から出土している。

時期 出土遺物から9 C. 中葉に比定される。

24号住居 (第80～84図 P L. 30・108・109)

位置 Bc・d・e-10・11・12

重複 住居西壁中央部で4号井戸と重複する。井戸は住居床面で検出されており、住居が新しい。

主軸方向 N-98°-E **床面積** 35.3㎡

形態 長軸と短軸の差がほとんどない方形平面を呈する。各辺は直線的で平面形態もあまり歪みがなくほぼ矩形を示している。西壁中央部にみられる弧状の張り出しは4号井戸の西半壁部にあたる。この部分の埋没土層の観察では住居壁の立ち上がりは確認されず、井戸壁部と同一の埋没過程を示していた。これは住居埋没時に崩落したとも考えられるが、周溝が途切れることや遺物出土が認められること、さらに明確ではないが床面とみられる面がこの部分まで及ぶことなどを考えあわせると、井戸外壁部を張り出し部として再利用した可能性も考慮される。

規模 6.2m×6.5m

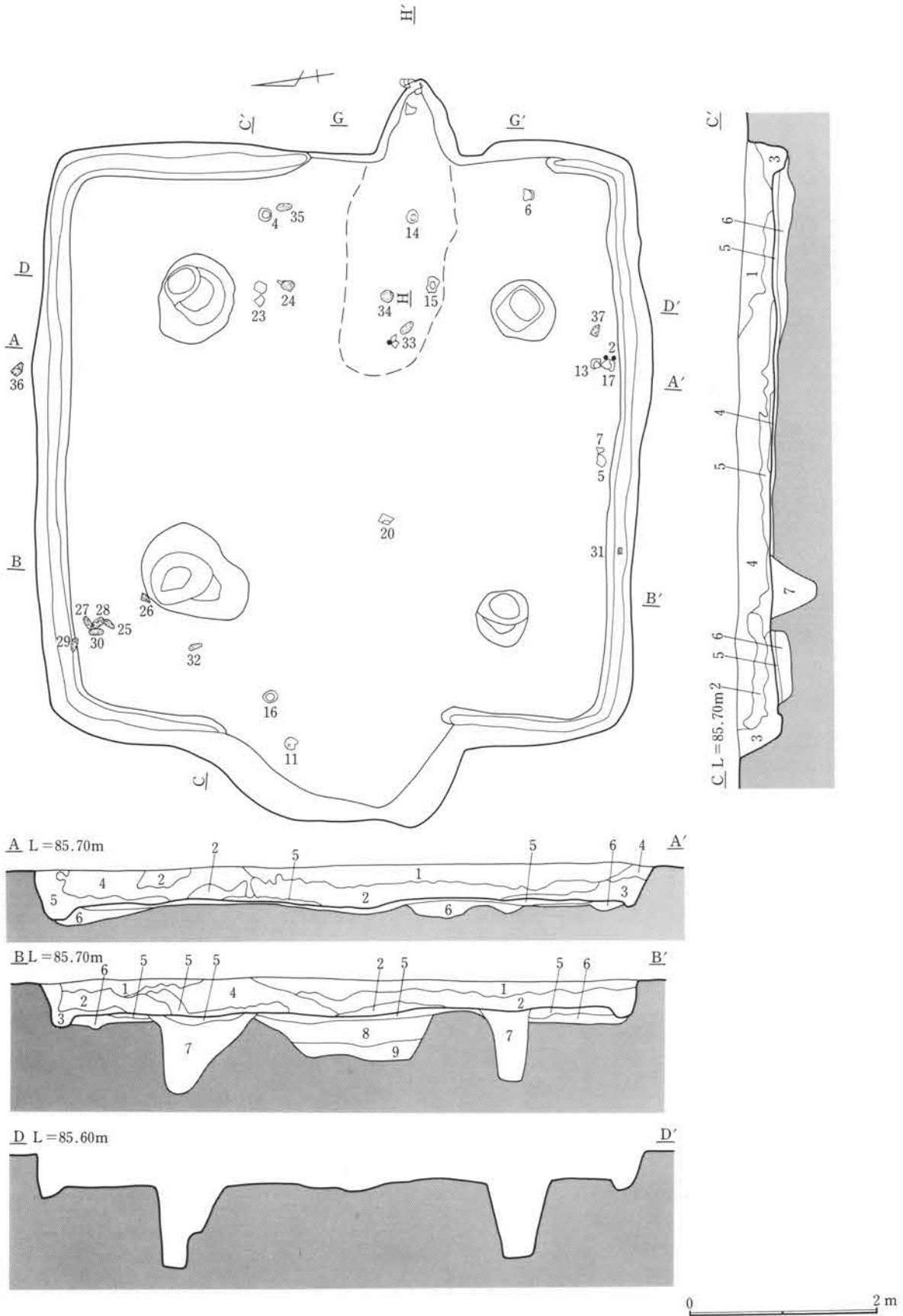
カマド 東壁に設置され、北東隅から3分の2程度南寄りに位置する。

内部施設 壁下に幅20cm、深さ10cmの周溝が巡るが、カマド両側および西壁中央部は途切れている。このほか住居対角線上に径70cm前後、深さ70cm～80cmの柱穴が4穴配置される。柱穴間の距離は南北が3、4m、東西が3mとなる。

床 褐色土により張り床が施される。とくに柱穴に囲まれる中央部分は堅く良好な面が形成されている。

掘り方 中央部に径1.6m、深さ70cmの掘り込みがあるほか、全体的には中央が浅く、周辺がやや深い。

遺物出土状態 土器類は2・5～7・13・15・17が南壁周溝周辺、4・23が北東部、16が西側、20が中央部で床面上、他土器は埋没土から出土している。石器類は棒状礫が目立ち、25～30は北西隅床面上でまとまって出土するが、礫材は粗粒安山岩、溶結凝灰岩、石英斑岩、珪質変質岩など複数が用いられ、この6個の平均重量は384gとなる。ほかについては

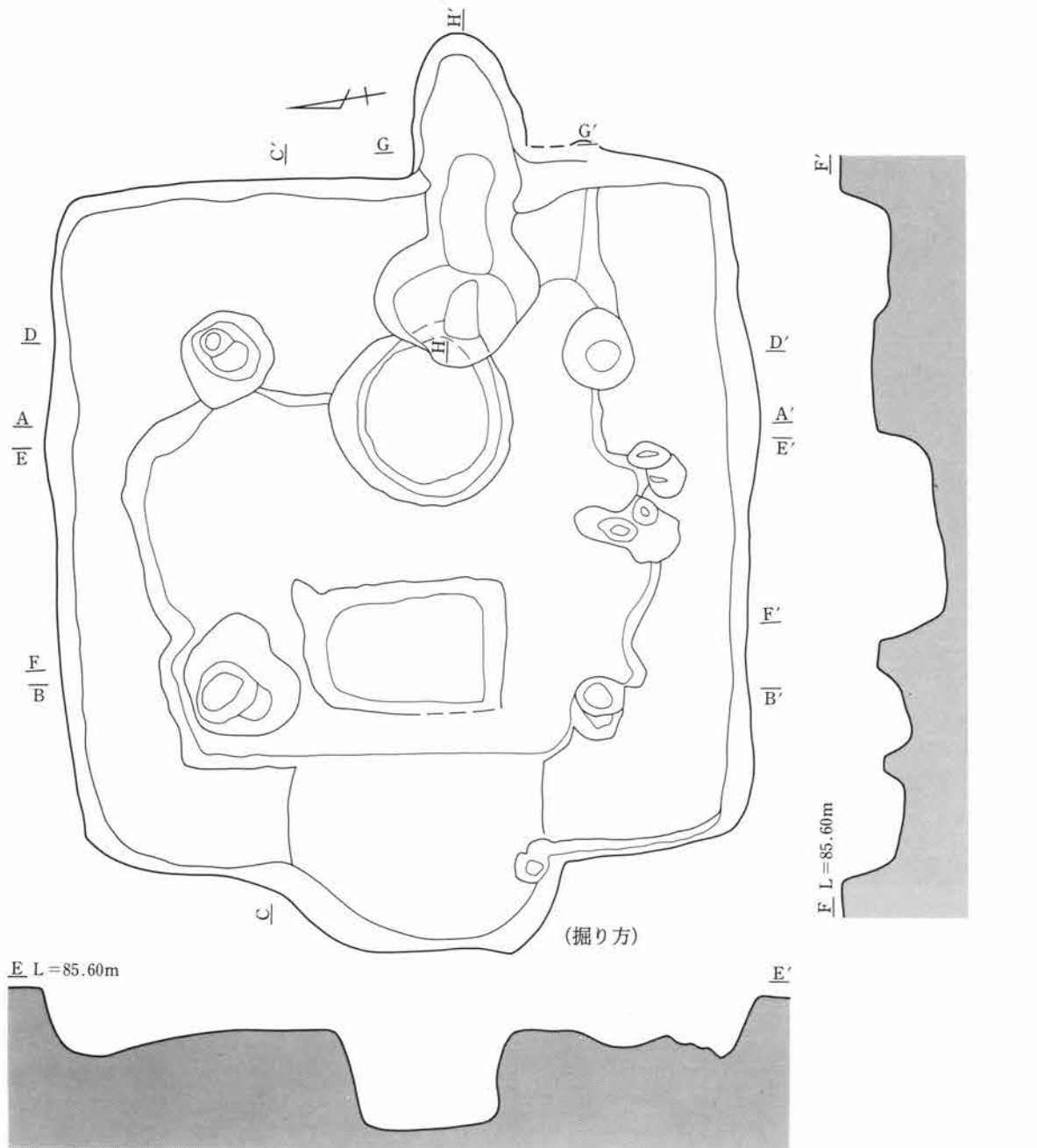


第80図 24号住居

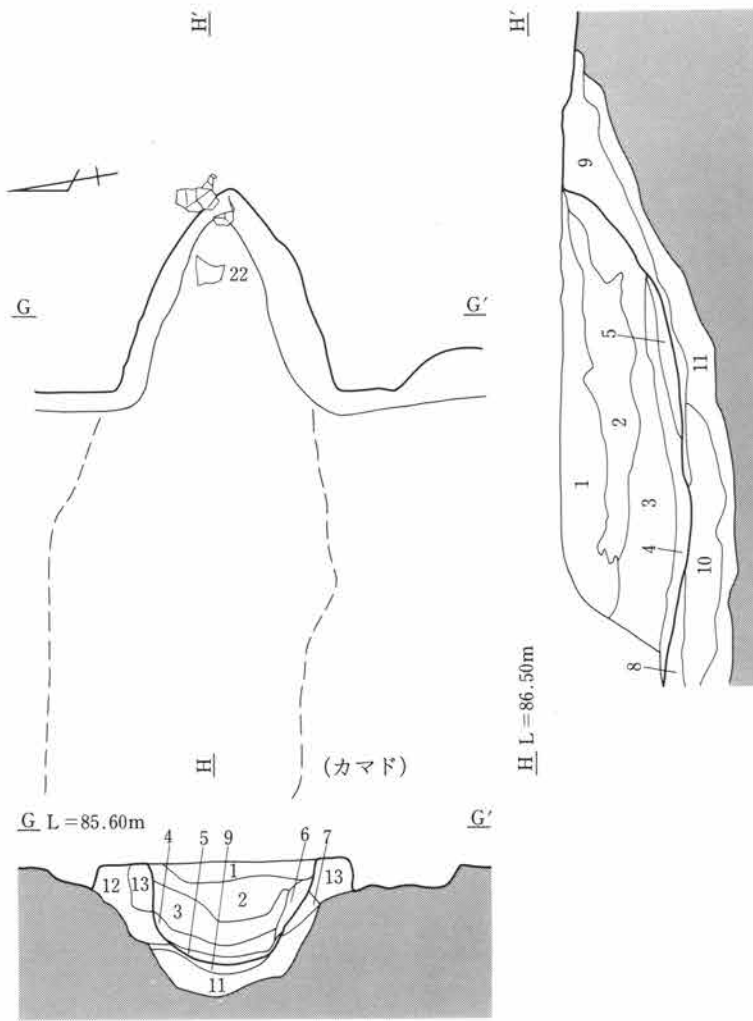
II 発掘調査の記録

24号住居

- 1 褐色土 ローム、焼土、暗褐色土を含む
- 2 暗褐色土 焼土、白色軽石、ロームを含む
- 3 暗褐色土 ローム、焼土、褐色土を混入する
- 4 暗褐色土 ローム、褐色土を含む
- 5 褐色土 硬く良好な貼り床を形成する
- 6 暗褐色土 ロームブロックを含む
- 7 暗褐色土とロームの混土層
- 8 褐色土 ロームを多量に含む
- 9 暗褐色土 ローム、粘質土を含む

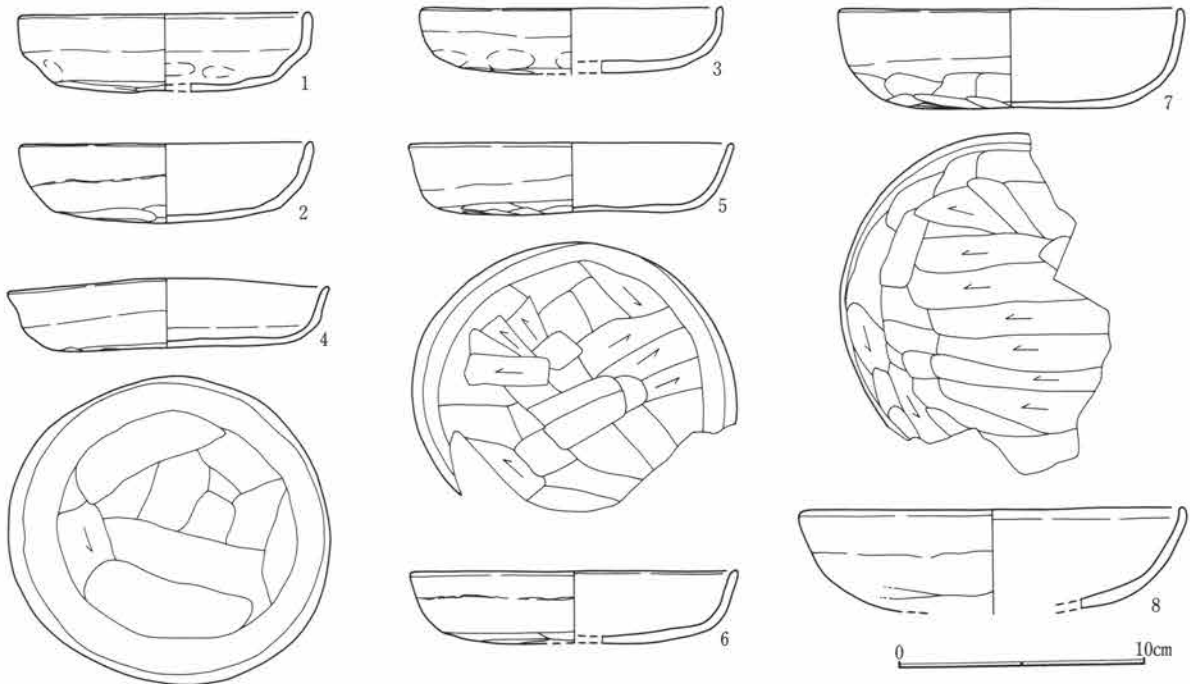


第81図 24号住居



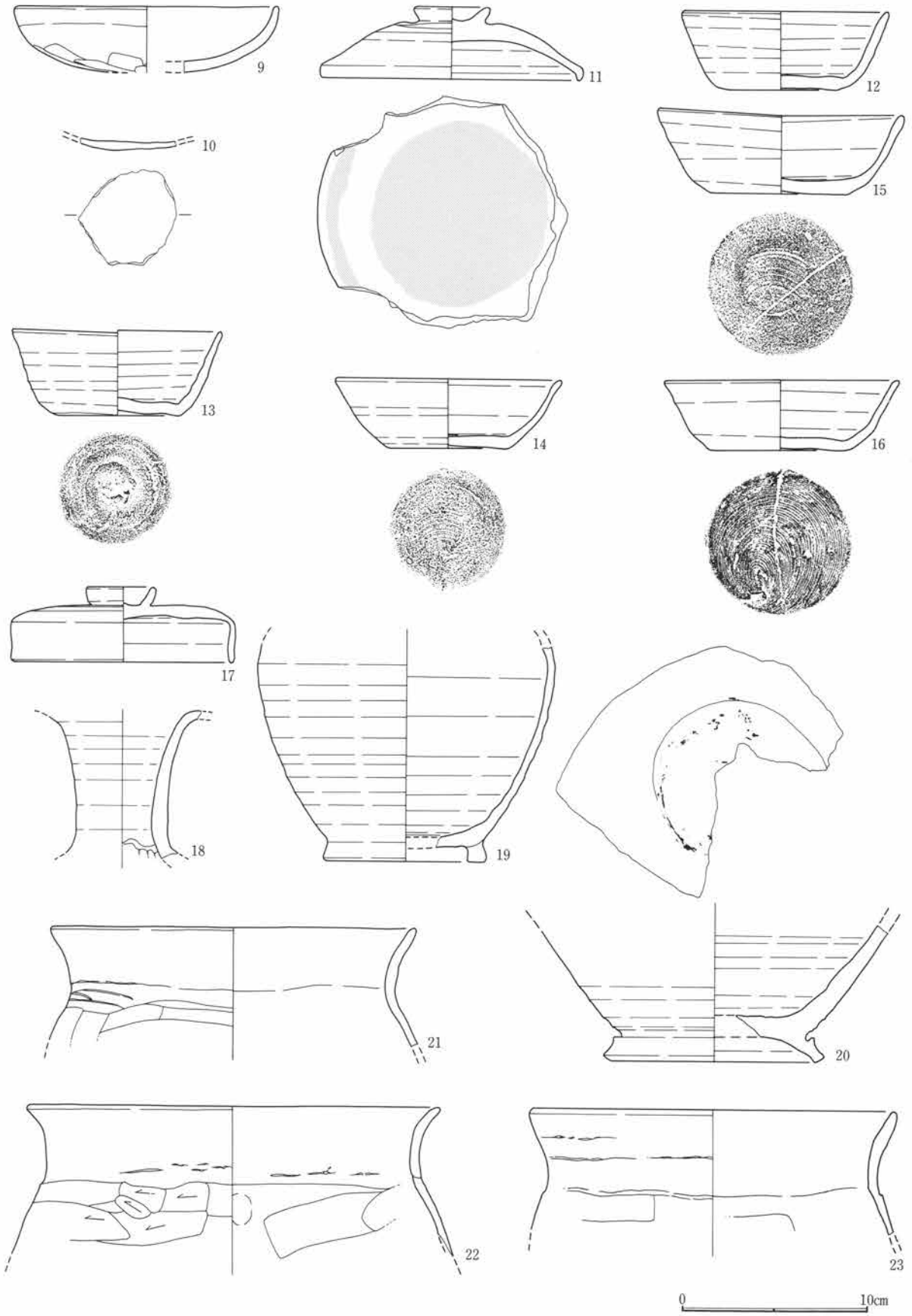
24号住居カマド土層

- 1 褐色土 焼土、軽石を少量含む
- 2 褐色土 焼土を多量に含む
- 3 褐色土 炭化物、焼土を含む
- 4 褐色土 炭化物、灰、焼土を含む
- 5 灰褐色粘質土
- 6 褐色土 粘質土、焼土を含む
- 7 暗褐色土 焼土、軽石粒を含む
- 8 暗褐色土 粘質土、焼土を含む
- 9 褐色土 焼土を多量に含む
- 10 暗褐色土 焼土、粘質土を含む
- 11 褐色土 焼土、ローム、粘質土を含む
- 12 褐色土 焼土を多量に含む
- 13 暗褐色粘質土 袖部構築材

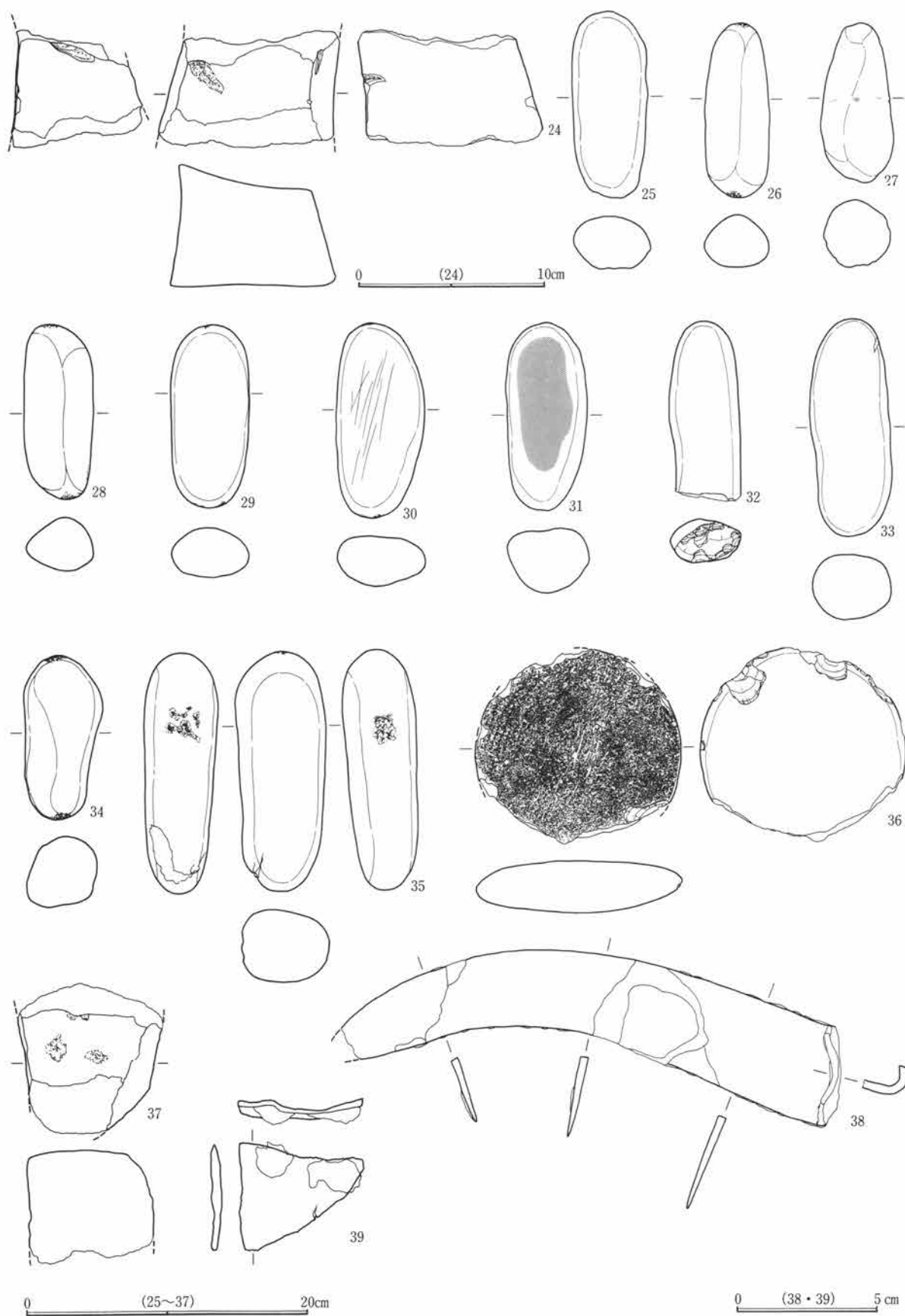


第82図 24号住居と出土遺物

II 発掘調査の記録



第83図 24号住居出土遺物



第84図 24号住居出土遺物

II 発掘調査の記録

床面上に散布し、とくに集中する状況は示していない。24は粗粒安山岩で各面に擦痕が認められ、中央部で出土し、36の扁平円礫は北壁上位、37の二ツ岳軽石は一部に磨り痕をもち南壁付近床面上から検出されている。38の鎌は掘り方、39の鉄製品は埋没土から検出している。

時期 出土遺物から9 C.前葉に比定される。

25号住居 (第85・86図 P.L. 31・110)

位置 Bf・g-6・7

重複 住居北半部で52号住居と重複する。重複関係は25号住居が新しく、52号住居の北壁およびカマド部を残すのみで大部分を壊している。このほか土坑などとの重複は認められない。

主軸方向 N-94°-E **床面積** 8.0m²

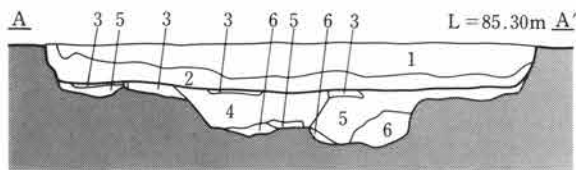
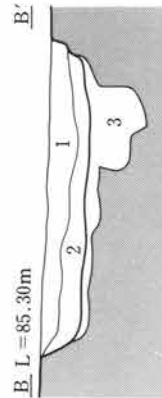
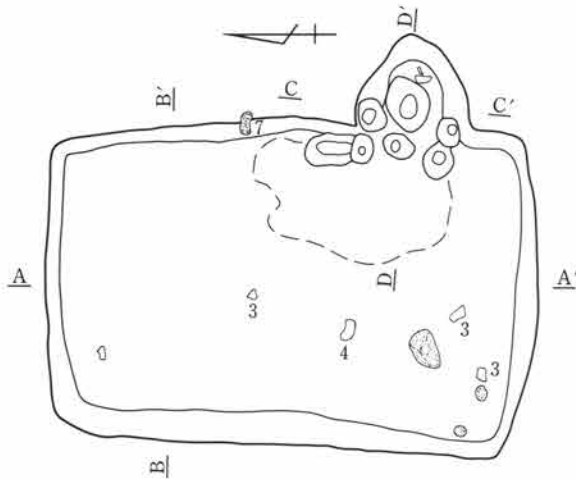
形態 主軸方向の対辺に長軸をもつ横長方形を呈

する。各辺は直線的であるが、平面形状には部分的に歪みが認められる。東辺および北辺はほぼ直角に接するが、南辺および西辺については垂直に交わらず、このため南辺側が幅広となっている。

規模 2.6m×3.9m

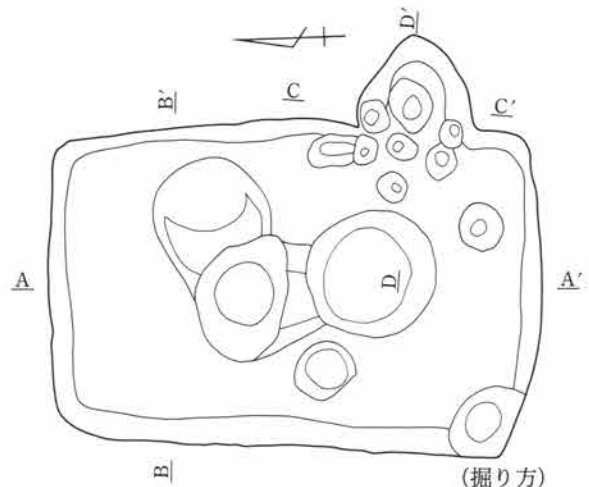
カマド 東壁に設置され、北東隅から4分の3程度南寄りに位置する。残存状態は不良で天井部、煙道をはじめ燃焼部についても検出状況は不明瞭なものであった。図示したカマドはほぼ掘り方にあたるもので、使用面の遺構形態については確定できなかった。袖にあたる部分には礫材設置痕である径20cm、深さ10cm前後の小穴が両袖に2穴ずつ検出されている。さらにこの両袖間にも径20cm、深さ5cmの小穴があり、おそらく支脚設置痕とみられる。規模は焚口40cm、奥行き95cmを計測する。

内部施設 床面上では周溝、貯蔵穴、柱穴などにつ



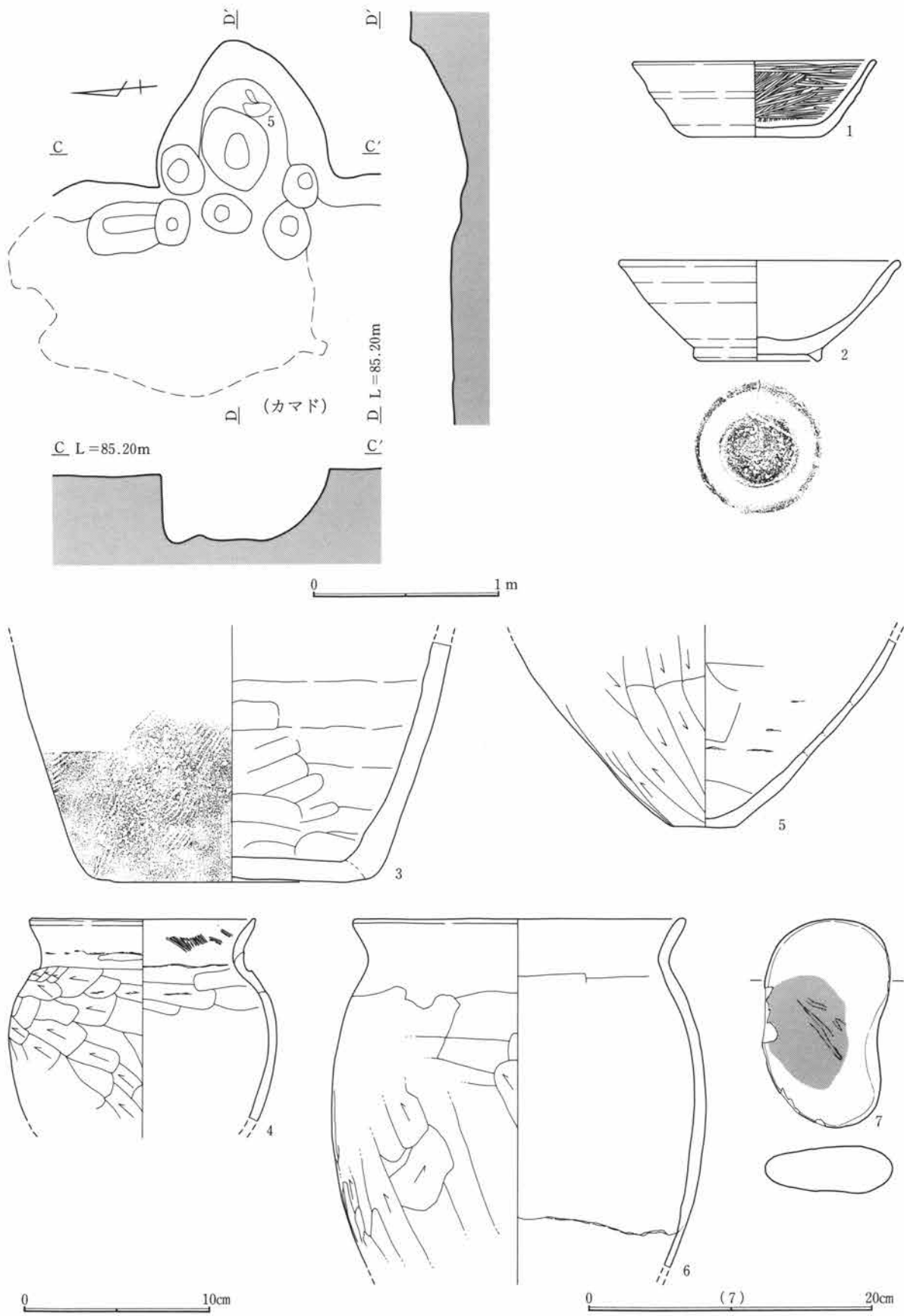
25号住居

- 1 暗褐色土 焼土、白色軽石を含む
- 2 暗褐色土 ロームブロック、焼土を含む
- 3 暗褐色土 ロームを多く含み貼り床を形成する
- 4 暗褐色土 ロームブロック、焼土、灰を含む
- 5 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む
- 6 黒褐色土 ロームブロックを含む



0 2m

第85図 25号住居



第86図 25号住居と出土遺物

II 発掘調査の記録

いては検出されていない。

床 ロームを含む暗褐色土により張り床が施される。

掘り方 中央部に土坑状の掘り込みが加えられ、暗褐色土などを埋土とする。

遺物出土状態 遺物量は少ない。土器類は3・4が中央部床面上、5がカマド内、1・2・6が埋没土から出土し、7の粗粒安山岩の礫は東壁に接して検出された。カマド構築礫の可能性はある。

時期 出土遺物から10C.前半に比定される。

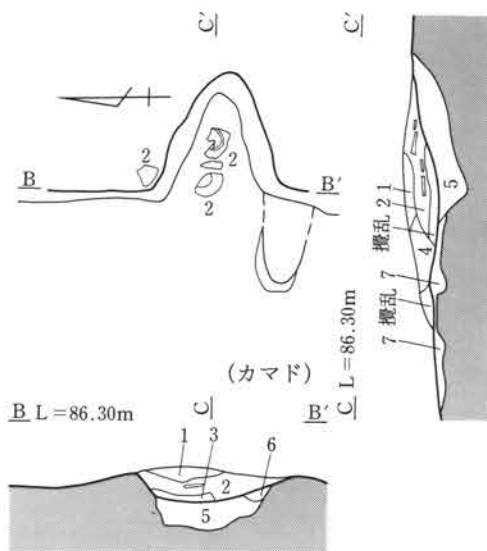
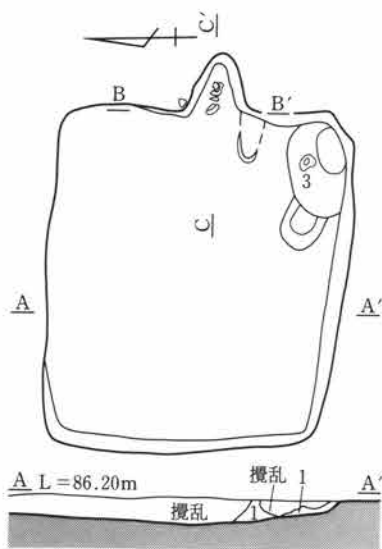
26号住居 (第87図 P L. 32・110)

位置 Ba・b-24・0

重複 耕作による攪乱の影響を受けるが、住居もしくは土坑など他遺構との重複は認められない。

主軸方向 N-92°-E **床面積** 5.6m²

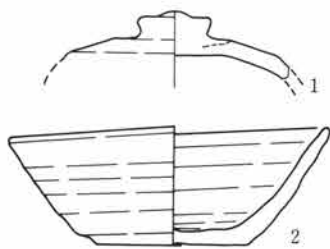
形態 主軸方向に長軸をもつ縦長長方形を呈する。住居北側部分に攪乱をうけているため検出状態は不良である。ほとんどが遺失する北壁部分についても



26号住居

1 暗褐色土 ロームを多く含む

0 2 m

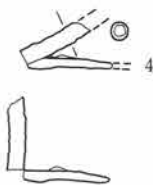
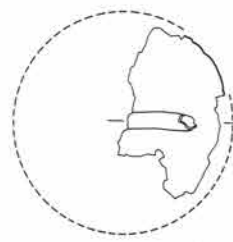
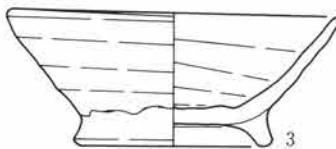


0 10 cm

26号住居カマド土層

- 1 暗褐色土 灰褐色粘質土を多量に含む
- 2 暗褐色土 軽石粒、焼土を含む
- 3 暗褐色土 焼土を少量含む
- 4 暗褐色土 粘質土を少量含む
- 5 暗褐色土 ローム、焼土、炭化物を含む
- 6 褐色土 ロームブロックを含む
- 7 黒褐色土 ロームブロックを多量に含む

0 1 m



0 (4) 5 cm

第87図 26号住居と出土遺物

わずかに痕跡が観察され、さらに北西隅の確認により平面形態についてはほぼ把握することができている。各辺は直線的であり、あまり歪みを生じないが東辺が西辺に比べわずかに長いため矩形は示していない。

規模 2.4m×2.7m

カマド 東壁中央に設置される。天井部、煙道は残存せず、埋没土には暗褐色土が流入し堆積している。袖は右袖のみその痕跡が観察されている。2cm程度の高まりが認められ、幅20cmで住居内に40cm張り出している。規模は焚口35cm、奥行き70cmを計測する。なおカマド内からは2の須恵器杯のほか土師器片などが出土している。

内部施設 南東隅に径75cm×45cm、深さ30cmの貯蔵穴が存在する。このほか周溝などについては未検出である。

床 地山を床面とする。住居西半部にはやや硬質面が確認されるが東半部は軟弱な面となっている。

掘り方 地山を床とするため掘り方はもたない。

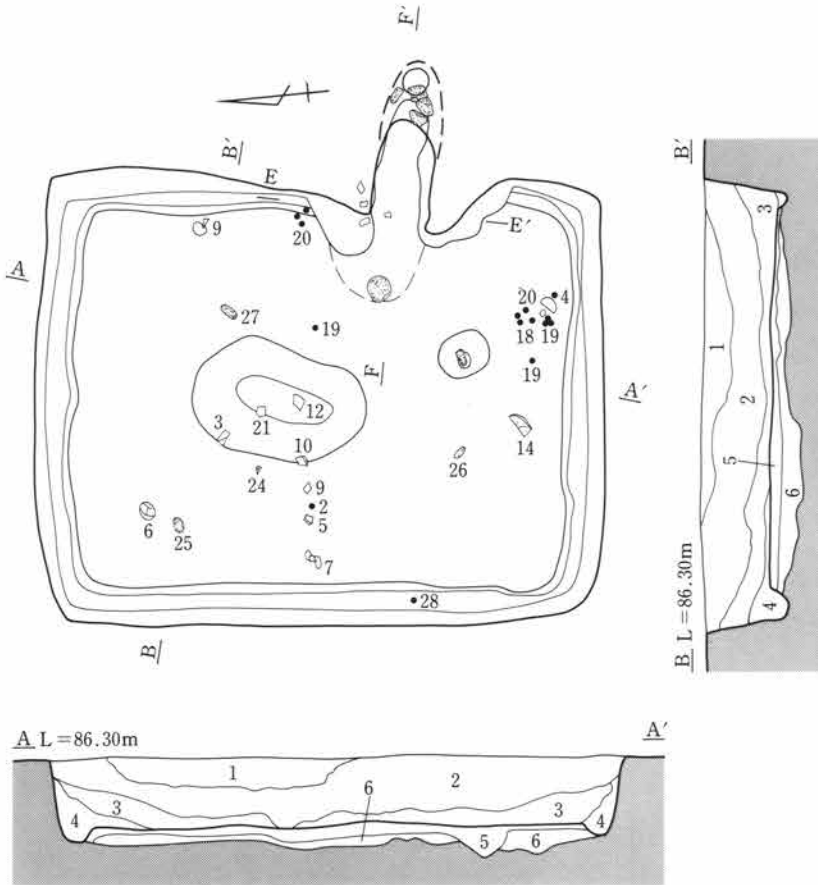
遺物出土状態 遺物量は少なく、2がカマド内、3が貯蔵穴、1が埋没土から出土し、4の紡錘車とみられる鉄製品も埋没土で検出されている。

時期 出土遺物から10C.前半に比定される。

27号住居 (第88～92図 P L. 33・110・111)

位置 At・u-9・10

重複 住居および土坑などの他遺構との重複は認められない。



27号住居

- | | |
|------------------|-------------------------|
| 1 暗褐色土 白色軽石を含む | 4 褐色土 ロームを多量に含む |
| 2 暗褐色土 焼土を少量含む | 5 褐色土 白色軽石、暗褐色土を含む掘り方埋土 |
| 3 暗褐色土 黒褐色土を混入する | 6 灰褐色土 暗褐色土、黒褐色土を混入する |

0 2 m

第88図 27号住居

II 発掘調査の記録

主軸方向 N-95°-E 床面積 13.4m²

形態 主軸方向の対辺に長軸をもつ横長長方形を呈する。各辺は直線的で、平面形状もほとんど歪みはなく、ほぼ矩形を示している。

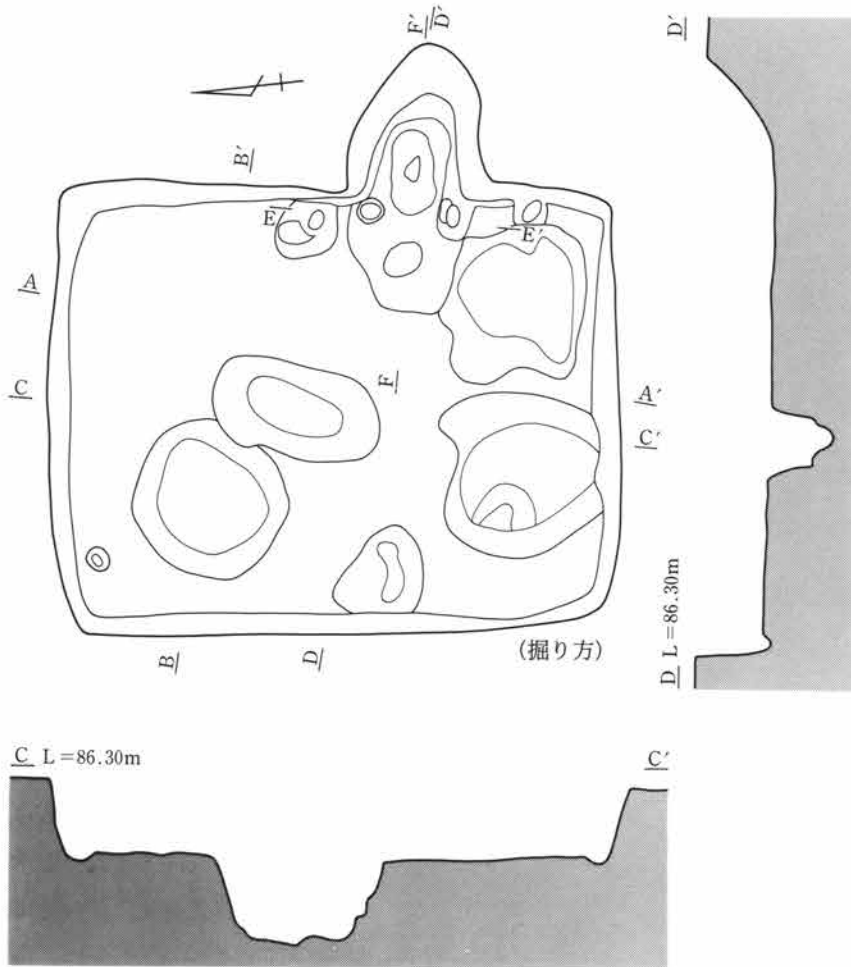
規模 3.6m×4.6m

カマド 東壁に設置され、北東隅から3分の2程度南寄りに位置する。カマドを検出した平面確認の際、天井部および煙道とみられる痕跡が観察されている。天井部は大半が失われているが、カマド先端部付近には暗灰色粘質土による天井部構築の痕跡が一部残存しており、さらにこの端部に煙道である径20cmの円形落ち込みがあり、黒褐色土が流入している。またこの部分には粗粒安山岩礫が数個出土してお

り、煙道部構築時にこのような礫が使用されていたことも考えられる。袖部は褐色粘質土により構築され、とくに左袖中には17の土師器甕を倒置状態で埋設している。右袖にはこのような土器の使用はないが、粗粒安山岩礫材が袖中に埋め込まれている。袖は右袖で幅40cm、左袖で幅20cmで床面から20cm程度の高低差をもっている。またカマド前部には23の石英閃緑岩の円礫が床面上で検出され、灰の散布も認められている。規模は焚口40cm、奥行き150cmを計測する。

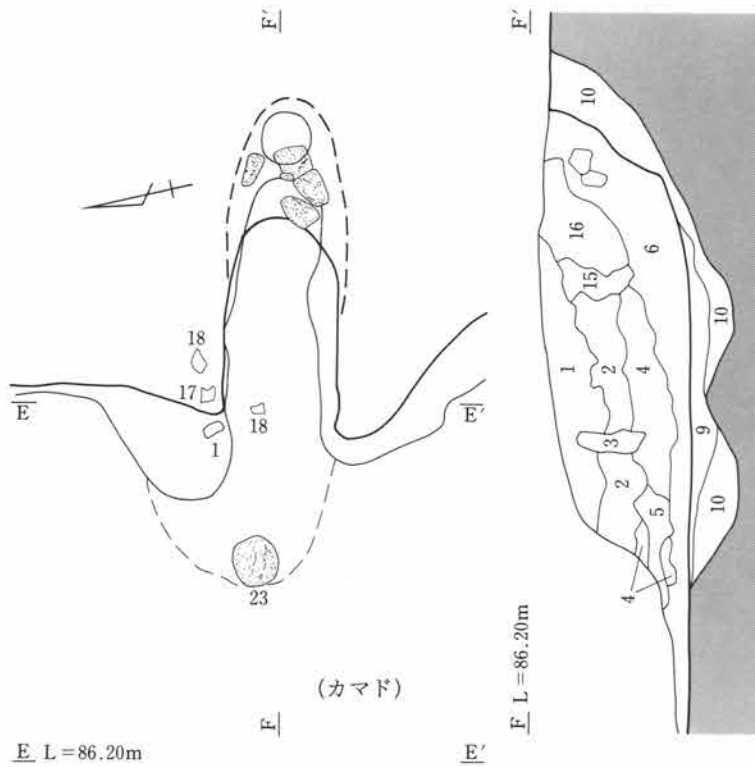
内部施設 壁下に幅20cm、深さ10cmの周溝が巡る。カマド部以外について全周する。

床 褐色土により張り床が施される。ほぼ水平で堅



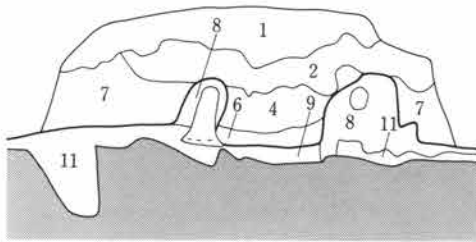
0 2 m

第89図 27号住居

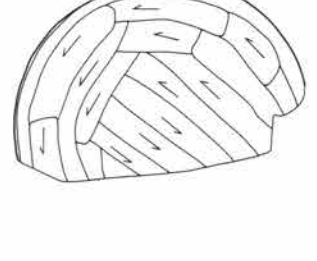
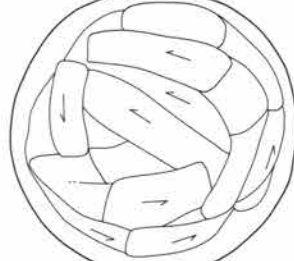
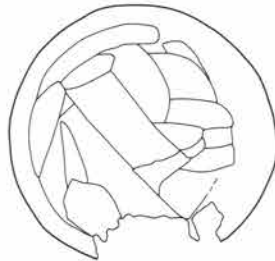
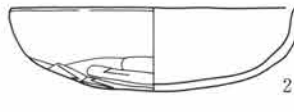
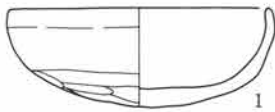


27号住居カマド土層

- 1 黒褐色土 軽石粒も含む
- 2 暗褐色土 ローム粒、炭化物を少量含む
- 3 暗褐色土 焼土ブロックを含む
- 4 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む
- 5 黒褐色土 焼土、ローム、粘質土を含む
- 6 黒褐色土 焼土ブロックを含む
- 7 褐色土 ローム粒を含む
- 8 褐色粘質土 壁体崩落土
- 9 黒褐色土 灰白色粘質土を含む
- 10 褐色土 ロームを多量に含む
- 11 黒褐色土 ロームブロックを含む



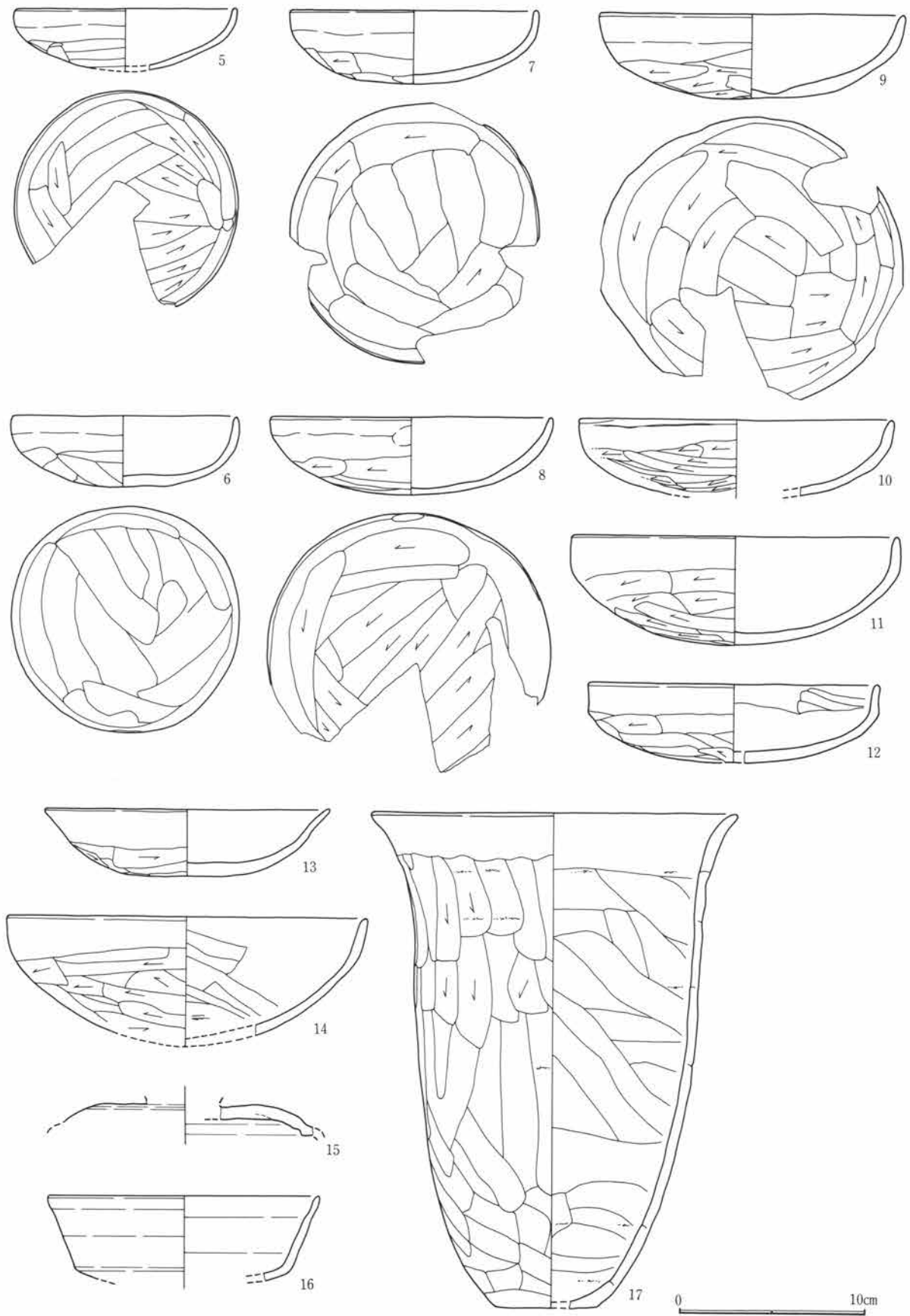
0 1 m



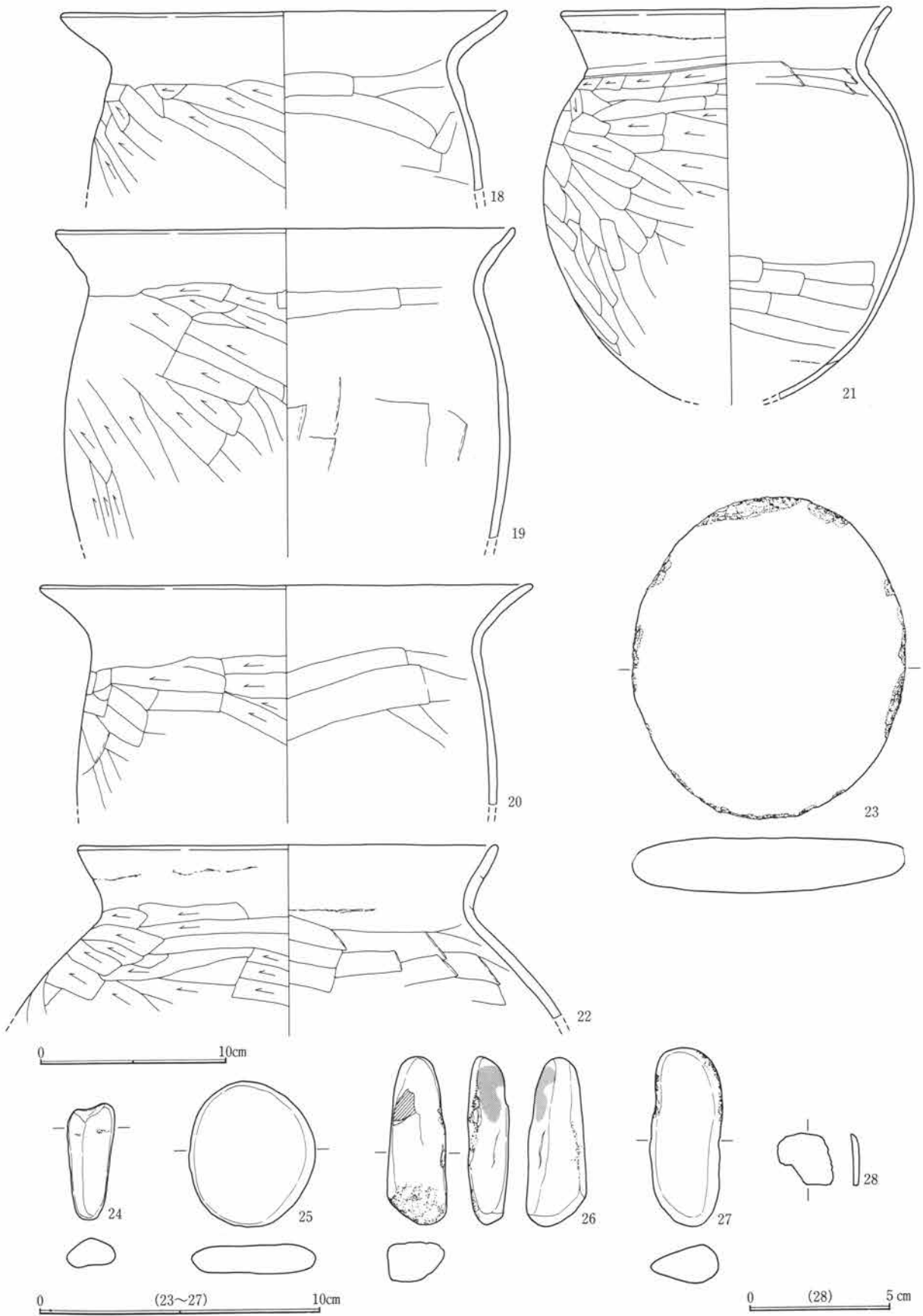
0 10cm

第90図 27号住居と出土遺物

II 発掘調査の記録



第91図 27号住居出土遺物



第92図 27号住居出土遺物

II 発掘調査の記録

く良好な面が形成される。

掘り方 土坑状の掘り込みが複数加えられ、褐色土、灰褐色土などが埋土される。

遺物出土状態 遺物出土量はやや多いが、床面上での検出は少なく、埋没土下層に含まれるものが目立つ。床面上で検出された遺物は、20の甕が東壁、27の棒状礫が北東部、1・15・17・18・23がカマド部で出土した。3・6・7・9・12・21・24の各遺物は住居中央付近で検出されているが、これらの遺物は西壁部から中央へかけて流入した出土状態を示し、いずれも埋没土から得られている。28の鉄製品は西壁周溝から出土している。

時期 出土遺物から8C.前半に比定される。

28号住居 (第93~95図 P.L. 34・111・112)

位置 Av・w-8・9・10

重複 溝状遺構が埋没土上層を南北方向に横断するほか、住居および土坑などの重複は認められない。

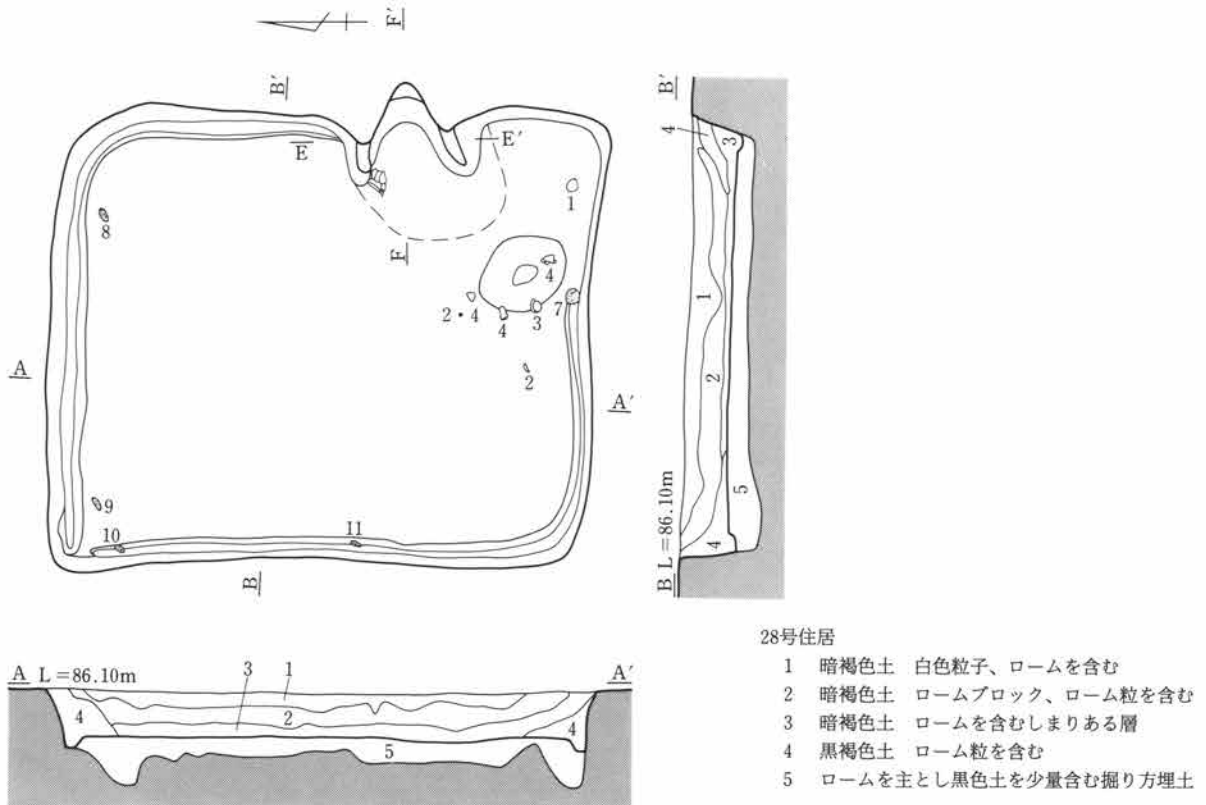
主軸方向 N-92°-E **床面積** 13.8㎡

形態 主軸方向の対辺に長軸をもつ横長長方形を呈する。各隅は丸みをもつとともに、各辺はやや湾曲ぎみであるが、大きな歪みは認められない。

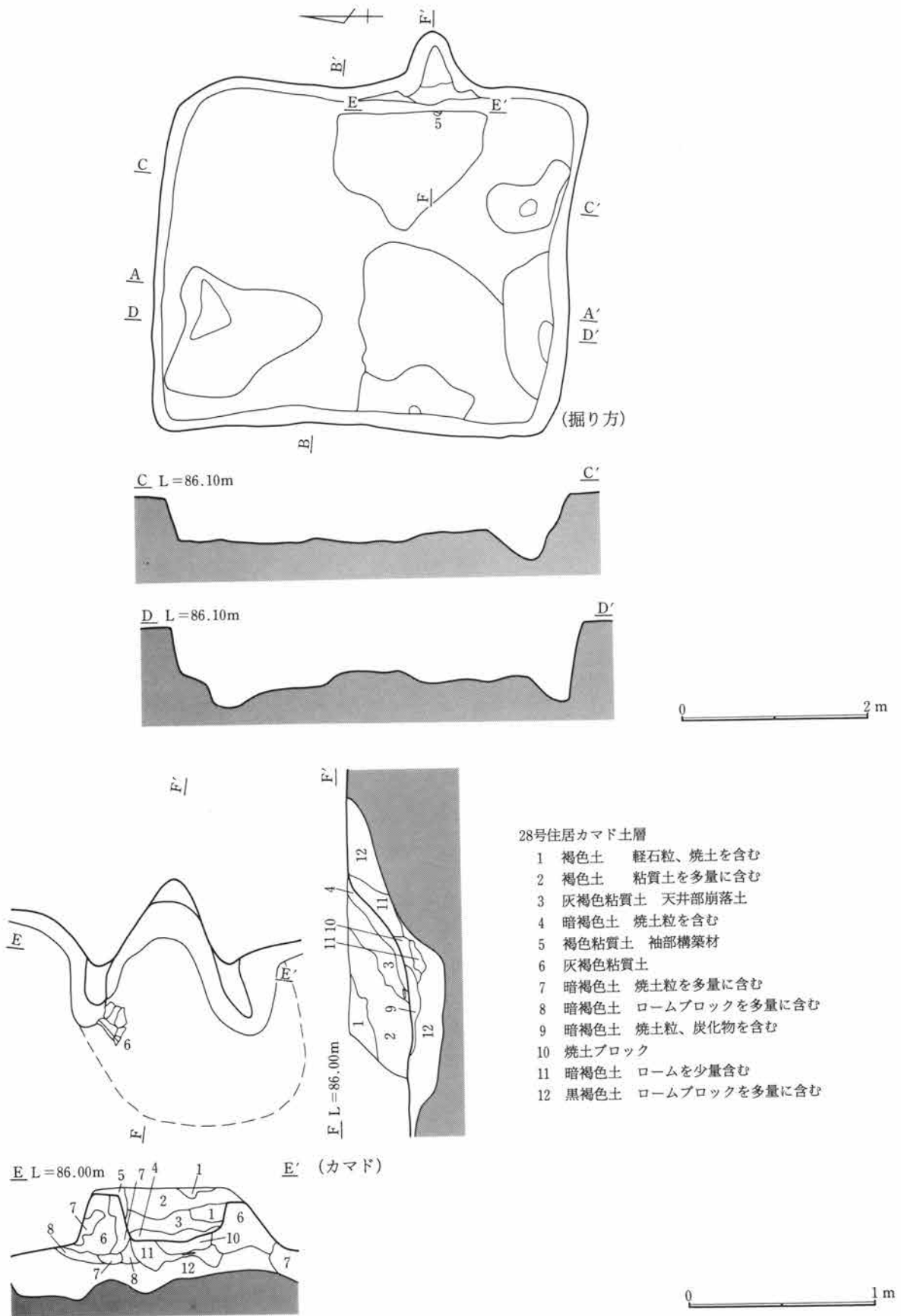
規模 3.6m×4.4m

カマド 東壁に設置され、北東隅から3分の2程度南寄りに位置する。天井部、煙道は残存しないが、埋没土には天井部崩落土である火熱を受けた黄褐色粘質土がブロック状に堆積している。袖部は暗褐色土を含む黄灰色粘質土により構築され、20cm前後の高まりがあり、幅10cmで30cm程住居内に張り出している。カマド部の居住部同様掘り方をもち暗褐色土などにより埋土した後、使用面を構築している。規模は焚口60cm、奥行き90cmを計測する。カマド前部には灰、焼土の散布が認められる。

内部施設 住居南東部分に径75cm×60cm、深さ30cmの小穴が検出されている。他調査例では南東隅に接して位置する場合が一般的でありやや位置を異にするが、やはり貯蔵穴として考えておこう。なお、量

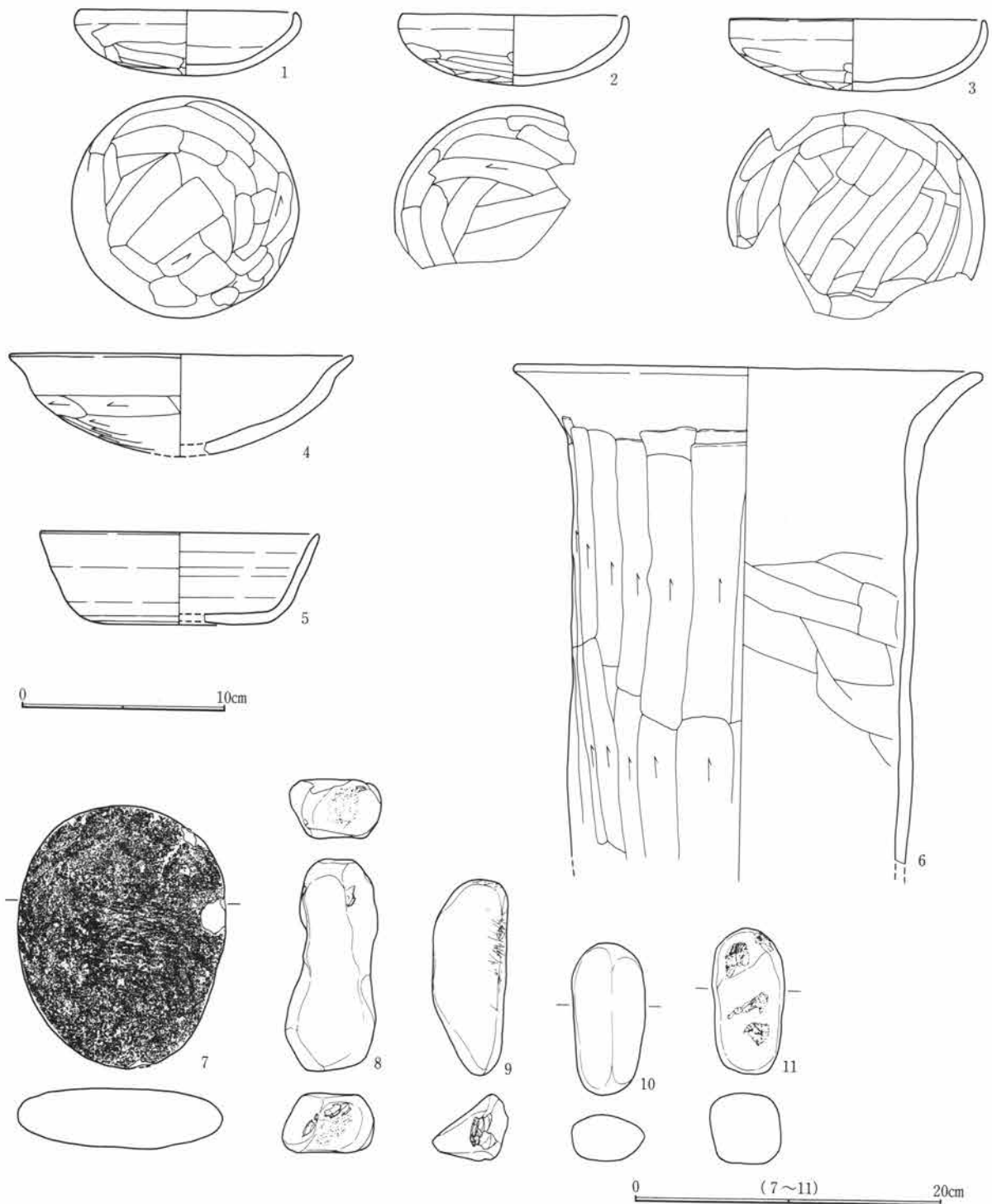


第93図 28号住居



第94図 28号住居

II 発掘調査の記録



第95図 28号住居出土遺物

的にはそれほど多くはないものの遺物類がこの貯蔵穴および周辺に集中する傾向がある。壁下には幅10cm、深さ10cmの周溝が巡る。この周溝は全周せず北西隅および貯蔵穴から東側にあたる南東隅部分は途切れている。このほか柱穴などについては検出され

ていない。

床 ロームを主体とし黒色土を少量含む掘り方埋土により張り床を形成する。ほぼ水平な面を形成し、全体的にしまっている。

掘り方 住居中央部分は20cm前後とやや浅く掘り下

げられ、周辺部分には40cm～50cmと深めの土坑状の掘り込みが不規則に加えられる。ロームを主に黒色土を混入した土により埋め戻される。

遺物出土状態 遺物は住居南側、とくに貯蔵穴とその周辺に集中する傾向がある。3～5は貯蔵穴内、1は南東隅床面上、6はカマド左袖部、2は南東部で床面から10cm上位で出土している。石製品は7の扁平円礫が貯蔵穴に接して、その他棒状礫は8が北東部床面上、10・11が周溝部、9が掘り方から検出されている。なお埋没土からは粗粒安山岩の棒状礫も3点(247g・139g・111g)出土している。

時期 出土遺物から8C前半に比定される。

29号住居 (第96～98図 PL. 35・112)

位置 Ax・y-11・12

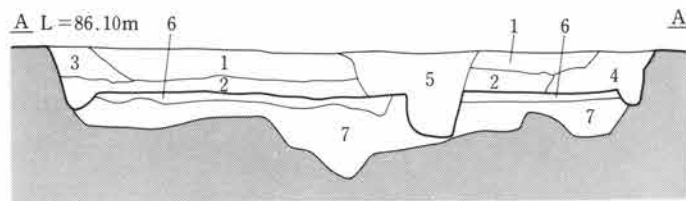
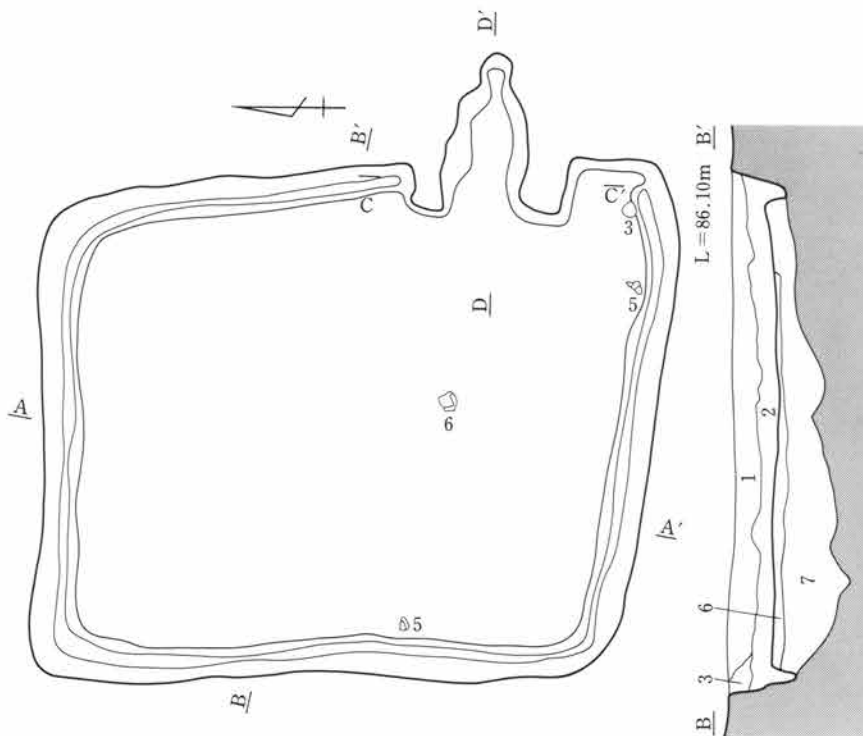
重複 住居および土坑など他遺構との重複は認められない。

主軸方向 N-91°-E **床面積** 16.6m²

形態 主軸方向の対辺に長軸をもつ横長長方形を呈する。平面形態をみると矩形を示さず部分的に歪みが認められる。北辺および西辺については両辺がほぼ直角に交わるが、南辺および東辺はこれに直行せず南東隅に向かって張り出しぎみに接している。平面形態の歪みはこの東・南両辺のずれにより生じているものである。この形状は検出状況によるものではなく、壁下に巡る周溝についても平面形と一致していることから構築時の形状といえる。

規模 4.0m×5.0m

カマド 東壁に設置され、北東隅から3分の2程度



29号住居

- | | | |
|---|------|----------------|
| 1 | 暗褐色土 | 白色粒子、褐色土を含む |
| 2 | 黒褐色土 | ローム粒を多く含む |
| 3 | 暗褐色土 | ロームブロックを含む |
| 4 | 灰褐色土 | 白色粒子、ローム粒を少量含む |
| 5 | 黒褐色土 | 白色粒子、焼土、ロームを含む |
| 6 | 褐色土 | 白色粒子を含む軟弱な層 |
| 7 | 暗褐色土 | ロームを主とする掘り方埋土 |

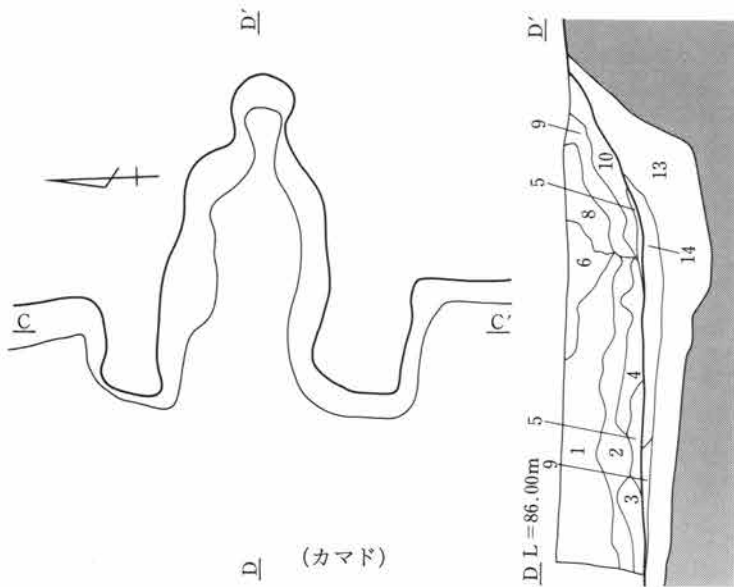
0 2 m

第96図 29号住居

II 発掘調査の記録

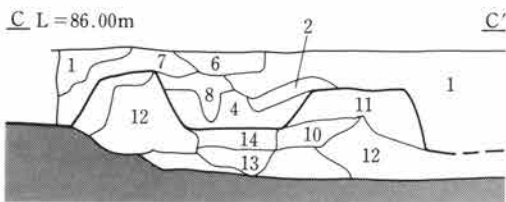


0 2 m



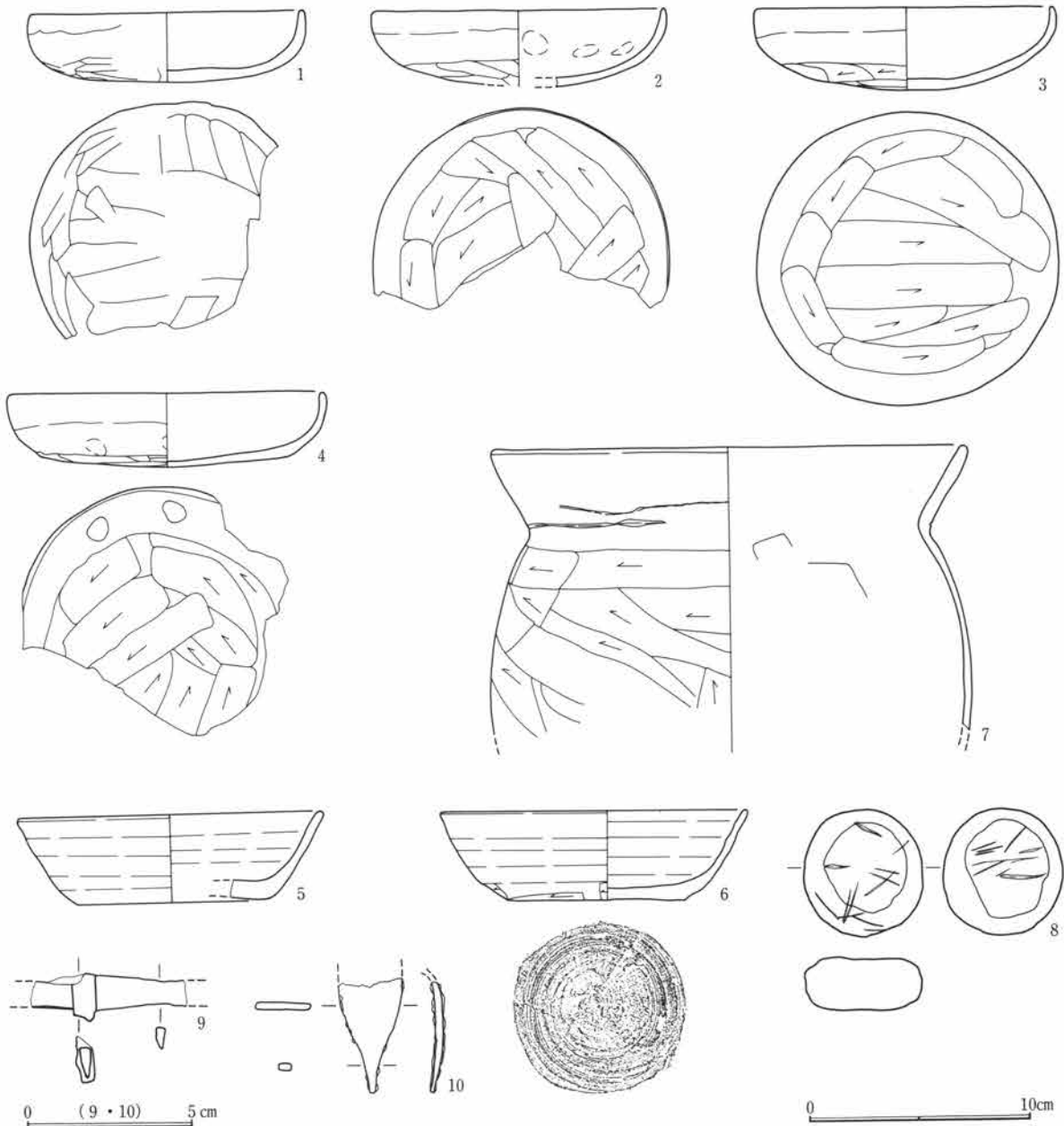
29号住居カマド土層

- 1 褐色土 軽石粒、焼土粒を含む
- 2 黒褐色土 軽石粒、焼土、ロームを含む
- 3 褐色土 ローム、焼土を含む
- 4 暗褐色粘質土 天井部崩落土
- 5 暗褐色土 ローム、焼土を含む
- 6 黒褐色土 ロームを含む
- 7 暗褐色土 壁体崩落土
- 8 暗褐色粘質土 天井部構築材
- 9 褐色土 焼土ブロックを多量に含む
- 10 暗褐色土 粘質土、焼土を含む
- 11 暗褐色土 粘質土を多量に含む
- 12 褐色土 ロームを多量に含む
- 13 暗褐色土 ローム、黒色土を含む
- 14 暗褐色土 ローム、焼土を含む



0 1 m

第97図 29号住居



第98図 29号住居出土遺物

南寄りに位置する。天井部、煙道は残存しないが、埋没土には天井部崩落土である被熱した暗褐色粘質土が認められる。堆積状態をみると使用面上にこの崩落土が接しており、使用停止後に比較的早期に崩壊したものといえる。袖は暗黄褐色粘質土を主として構築され、幅20cm～30cmで住居内に40cm～50cm程張り出している。掘り方にはローム、焼土などを含む暗褐色土が埋土される。

内部施設 壁下に幅10cm、深さ15cmの周溝が巡る。

周溝はほぼ全周するが、カマド南側にあたる東壁部は途切れている。このほか床面上では貯蔵穴もしくは柱穴などについては検出されていない。

床 ロームを含む褐色土により張り床が施される。ほぼ水平で堅く良好な面が形成されている。張り床の層厚は5cm～10cmを計測する。

掘り方 やや不規則ながら土坑状の掘り込みが複数加えられるが、これら掘り込みは住居中央部に集中しており、北・南両縁辺部は浅くなっている。

II 発掘調査の記録

遺物出土状態 住居内に散布し、とくに集中する部分は認められない。3は南東隅床面上、5は南・西壁に接して、7はカマド内出土であり、他遺物は埋没土から検出されている。

時期 出土遺物から8C.後葉に比定される。

30号住居 (第99・100図 PL. 36・112)

位置 Aw・x-7・8

重複 カマド煙道部にあたる先端側に3号井戸が存在するが、確認面での重複部分は少ないものの平面観察から井戸がカマド埋没土を切っている。また住居を南北方向に溝が横断している。この溝は埋没土上層に重複するもので床面まで影響はおよんでいない。このほか住居、土坑など他遺構との重複は認められない。

主軸方向 N-91°-E **床面積** 8.7m²

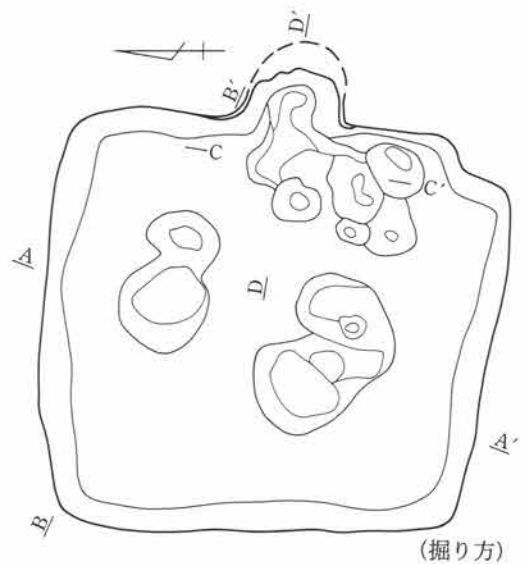
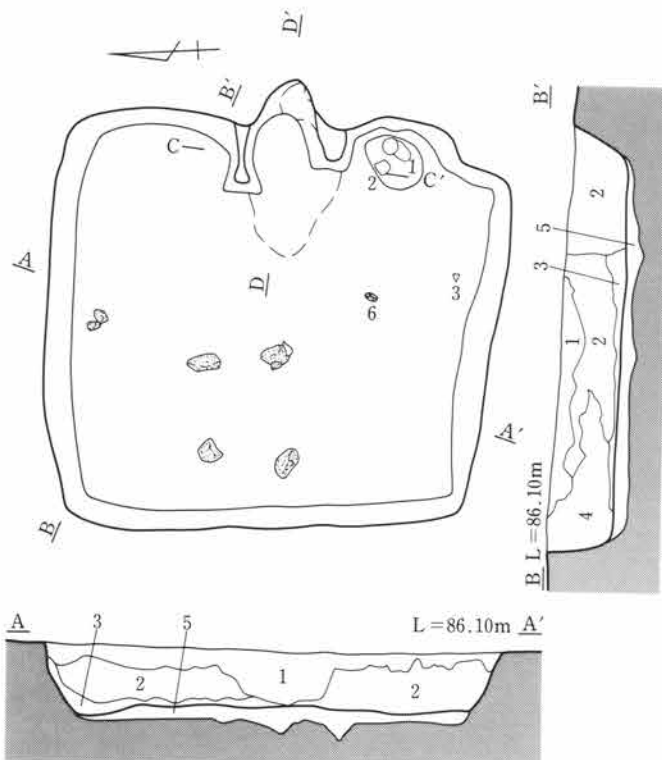
形態 主軸方向の対辺に長軸をもつ横長長方形を呈する。平面形状に歪みもあるが、長軸・短軸の差が少なく方形に近い形態を示している。各辺をみると

北辺および西辺についてはほぼ直角に交わるが、東辺、南辺については直交せず斜行ぎみとなっている。平面形の歪みはこの東・南両辺の形状により生じているものである。なお、カマド南側東壁部は貯蔵穴に伴ってやや張り出している。

規模 3.3m×3.6m

カマド 東壁中央に設置される。残存状態は不良であるが、埋没土中には天井部崩落土である黄灰褐色粘質土の堆積も認められる。袖はロームを主体とする褐色土により構築され、残存高は低いものの幅10cm~20cmで40cm前後住居内に張り出している。カマド前面には灰・焼土の散布が認められ、規模は焚口50cm、奥行き95cmを計測する。

内部施設 カマド右側に径40cm×30cm、深さ15cmの貯蔵穴が存在する。貯蔵穴は東壁に接しており、この部分の壁は弧状に張り出している。穴内からは1・2の杯が出土している。このほか周溝、柱穴などについては検出されていない。

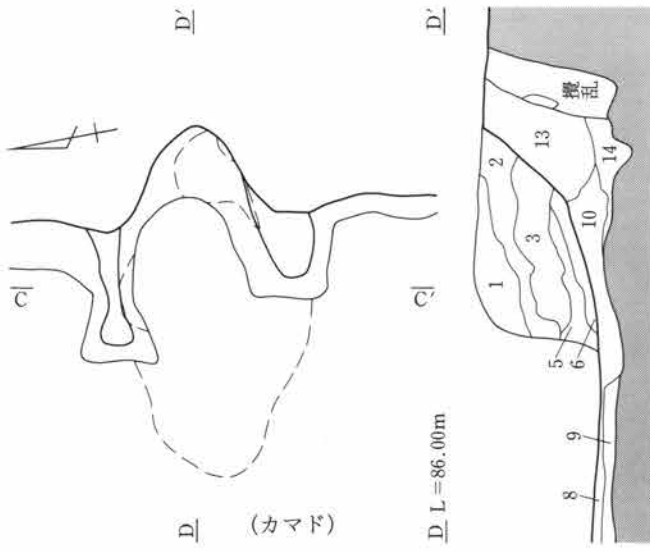


30号住居

- 1 暗褐色土 白色粒子を多く含む
- 2 暗褐色土 ロームを多く含む軟弱な層
- 3 暗褐色土 ロームを少量含む
- 4 暗褐色土 ロームブロックを多く含む
- 5 褐色土 ロームを多く含み、上部は床面を形成

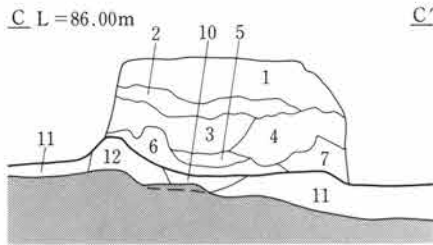
0 2 m

第99図 30号住居

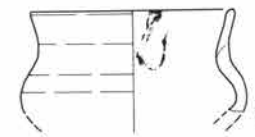
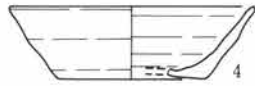


30号住居カマド土層

- 1 暗褐色土 軽石粒を含む
- 2 褐色土 ロームを多量に含む
- 3 暗褐色土 ローム、焼土、炭化物を含む
- 4 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む
- 5 灰褐色粘質土 焼土粒を含む
- 6 暗褐色土 焼土ブロックを多量に含む
- 7 黒褐色土 ロームブロックを多量に含む
- 8 褐色土 ロームを含む貼り床層
- 9 暗褐色土 ロームを多量に含む
- 10 暗褐色土 ローム、焼土を含む
- 11 暗褐色土 ロームブロックを含む
- 12 褐色土 ロームを多量に含む
- 13 暗褐色土 焼土粒を多量に含む
- 14 褐色土 ロームを多量に含む



0 1 m



0 10cm

第100図 30号住居と出土遺物

II 発掘調査の記録

床 ロームおよび暗褐色土の混土を掘り方埋土としているが、この埋土上面を張り床としている。床はほぼ水平で、堅く良好な面が形成されている。

掘り方 全体的に10cm前後掘り下げられ、中央部分に20cm程度の土坑状の掘り込みが加えられる。

遺物出土状態 遺物量はあまり多くない。1・2が貯蔵穴内、3が南東部で床面から20cm上位、4・5は埋没土から出土し、6の磨り痕をもつ粗粒安山岩

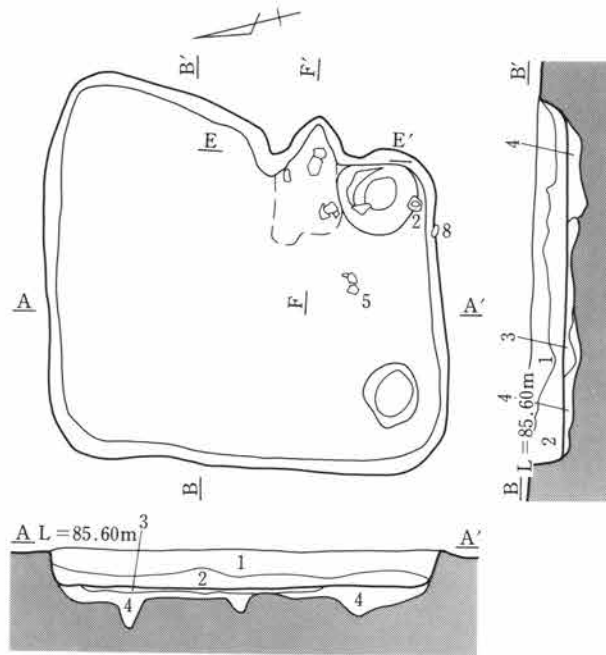
の礫は中央部で床面から10cm上位で検出された。このほか、床面上には砂岩、二ツ岳軽石などの礫材の出土もみられる。

時期 出土遺物から8 C.後葉に比定される。

31号住居 (第101・102図 P L. 37・112・113)

位置 Be・f-4・5

重複 32号住居が北東隅に近接するが、確認面では住居間の直接の重複関係はみられない。このほか住

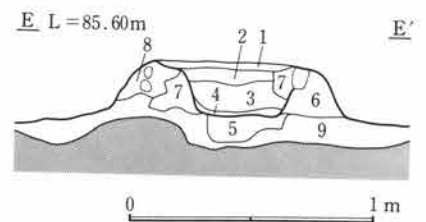
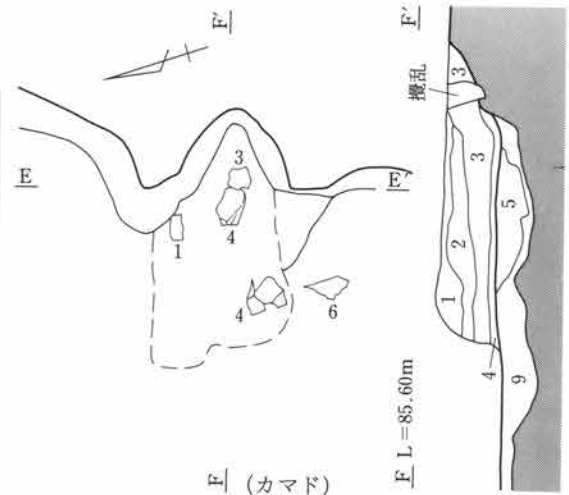
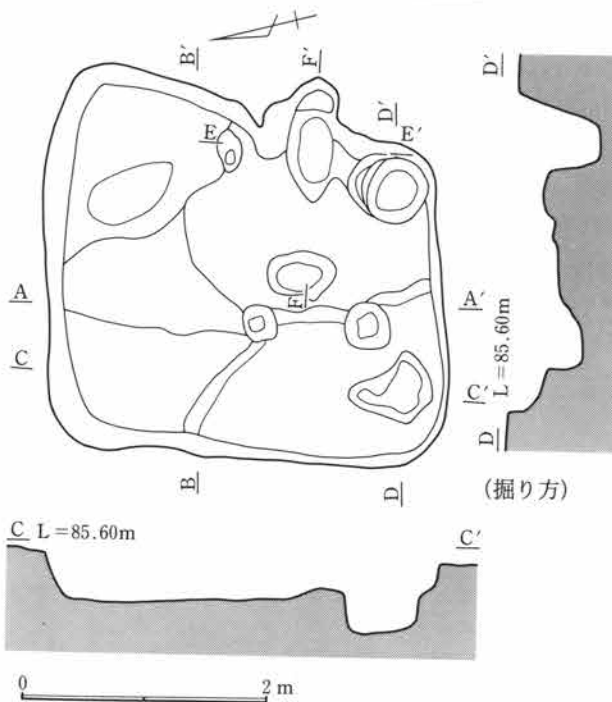


31号住居

- 1 暗褐色土 褐色土 焼土を含む
- 2 暗褐色土 ローム、焼土、白色粒子を含む
- 3 褐色土 ロームを含む良好な貼り床を形成
- 4 暗褐色土 ロームを主とする掘り方埋土

31号住居カマド土層

- 1 褐色土 焼土、軽石粒を含む
- 2 暗褐色粘質土 焼土ブロックを含む
- 3 暗褐色土 粘質土をブロック状に含む
- 4 黒褐色土 灰を多量に含む
- 5 黒褐色土 ローム、焼土を含む
- 6 暗褐色粘質土 袖部崩落土
- 7 褐色粘質土 焼土を含む
- 8 黒褐色土 軽石を含む粘質土
- 9 黒褐色土 ロームを多量に含む



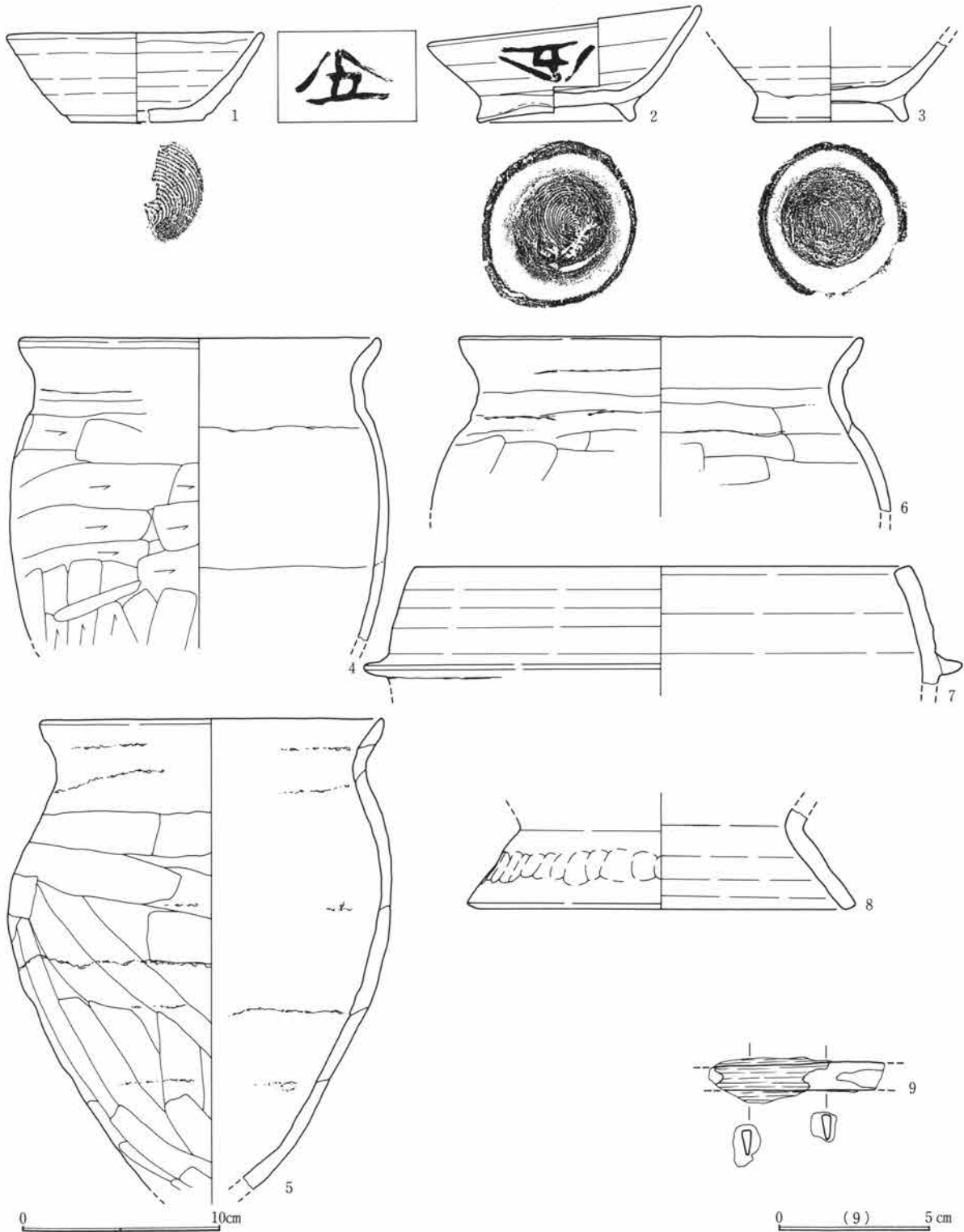
第101図 31号住居

居西壁付近に溝状遺構が横断するが、埋没土上層であるため住居検出に大きな支障は生じていない。

主軸方向 N-109°-E 床面積 7.4m²

形態 北東隅が大きく張り出しているため平面形態

が不規則となり矩形を示していないが、基本的に主軸方向の対辺に長軸をもつ横長長方形を呈するものとみられる。各隅は丸みをもち、各辺は直交しないものの直線的である。北東隅の張り出しはこのよう



第102図 31号住居出土遺物

II 発掘調査の記録

な各辺の検出に伴い明瞭に認められており、検出状態に原因するものではなく本来の形態を示していると考えられる。

規模 2.7m×3.2m

カマド 東壁に設置されるが、北壁から3分の2程度南寄りに位置する。埋没土中には天井部崩落土である火熱を受けた暗褐色粘質土の堆積が認められ、底面には層厚3cm前後の灰層も検出される。袖部は暗褐色粘質土により構築され、この中には小礫の混入もみられる。右袖は大半が失われているが、左袖は幅15cmで25cm程住居内に張り出し、20cmの残存高をもっている。規模は焚口40cm、奥行き50cmを計測し、前面には灰・焼土の散布も認められる。

内部施設 南東隅に径65cm、深さ45cmの貯蔵穴が存在し、2の墨書土器が出土している。南西隅には径40cm、深さ30cmの小穴も認められている。この小穴と南東隅の貯蔵穴とした小穴を含め柱穴の可能性も

考慮したが、他に検出されていないこともあり柱穴としての性格は薄いものと判断している。このほか周溝などについては検出されていない。

床 暗褐色土、ロームを含む褐色土により張り床が施される。ほぼ水平で堅く良好な面が形成されている。

掘り方 住居全体が掘り下げられるが、中央部に比べ周辺部がより深くなる傾向がある。ロームなどを含む褐色土、暗黄褐色土が埋め戻される。

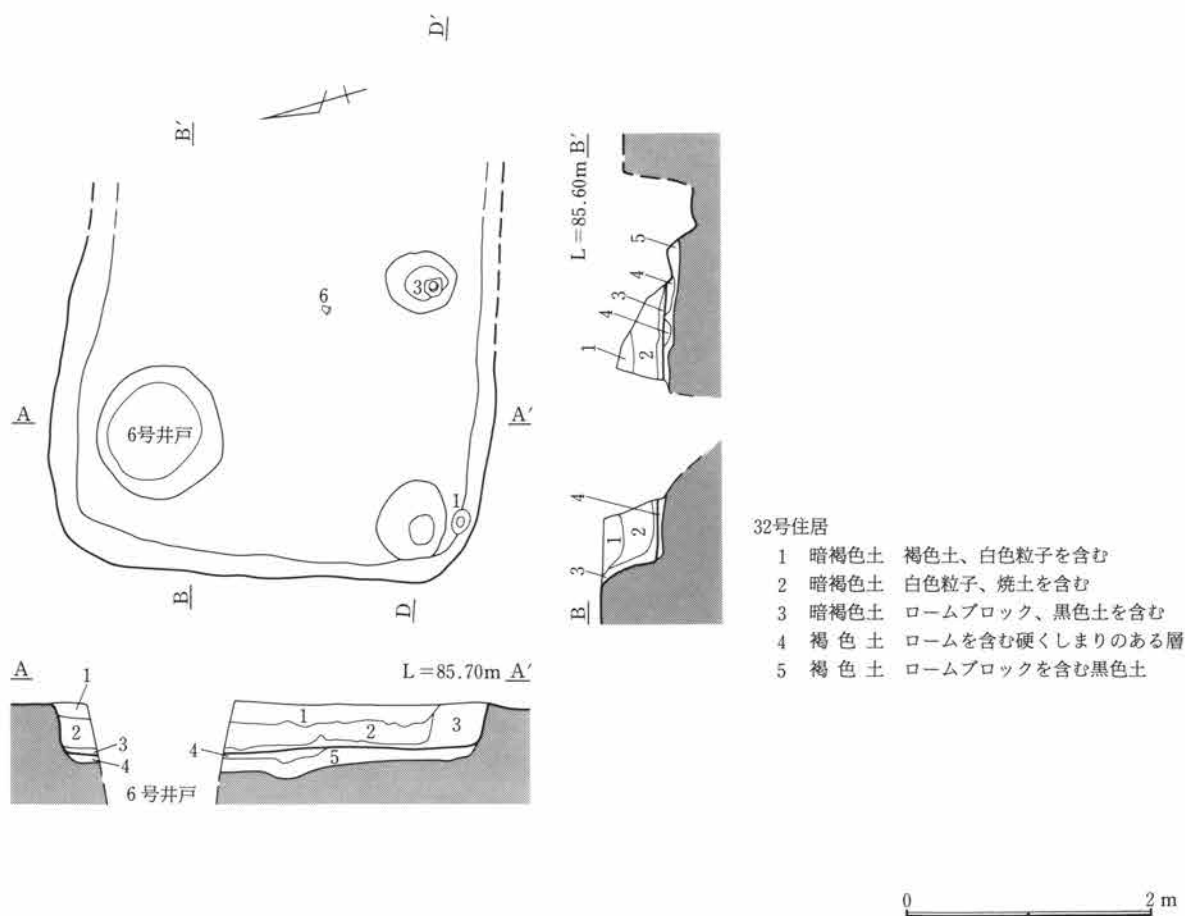
遺物出土状態 土器類は1・3～5・7がカマド内、2が貯蔵穴、6はカマド前部の床面上、8は南東部床面上で出土し、9の柄部木質が残存する刀子は埋没土から検出されている。

時期 出土遺物から10C.前半に比定される。

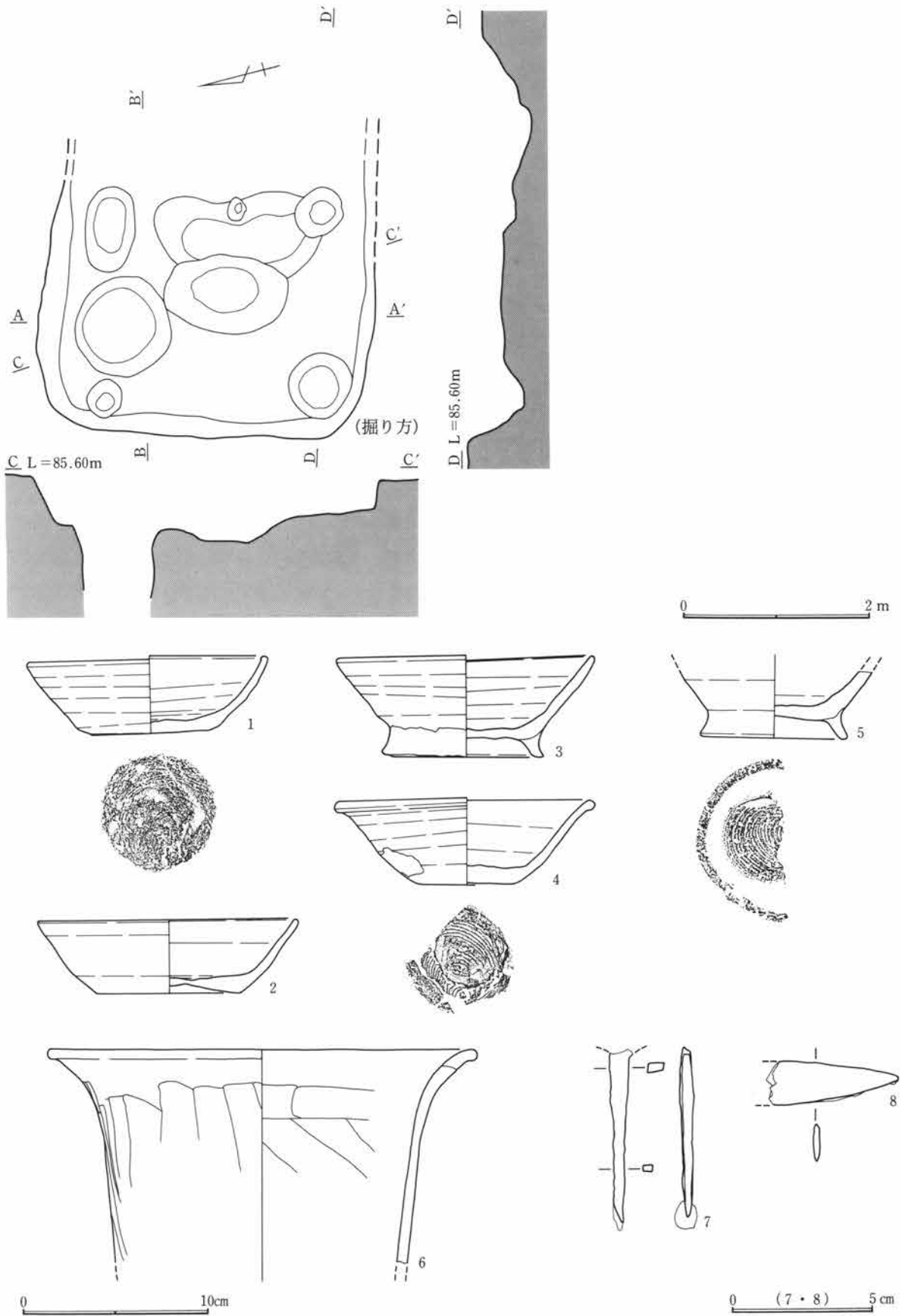
32号住居 (第103・104図 P L. 38・113)

位置 Bf-4・5

重複 住居東半部は溝状遺構が横断するため失われ



第103図 32号住居



第104図 32号住居と出土遺物

II 発掘調査の記録

ている。また北西隅部分には住居埋没後に6号井戸が掘り込まれている。

主軸方向・床面積・規模については除外する。

形態 東壁にカマドが設置されていたと推定すれば、主軸方向に長軸をもつ縦長長方形を呈するものと考えられる。遺存状況は悪いが、検出部分ではあまり歪みのない直線的な平面形状が観察される。

カマド 溝状遺構が重複しているため不明である。

内部施設 南壁に近接して径55cm、深さ20cmの小穴が検出され、3の椀が出土している。南西隅にも径55cm、深さ20cmの小穴が存在する。

床 褐色土により張り床が施される。堅く良好な面が形成されている。

掘り方 土坑状の掘り込みが加えられる。この中には柱穴を構成する可能性がある小穴もみられるが、詳細は不明である。

遺物出土状態 1は南西隅、3は南壁付近小穴、他遺物は埋没土から出土している。

時期 出土遺物から本跡に供伴する1より10C、前半に比定される。

33号住居 (第105～109図 P.L. 113～115)

位置 Bj・k-15・16・17

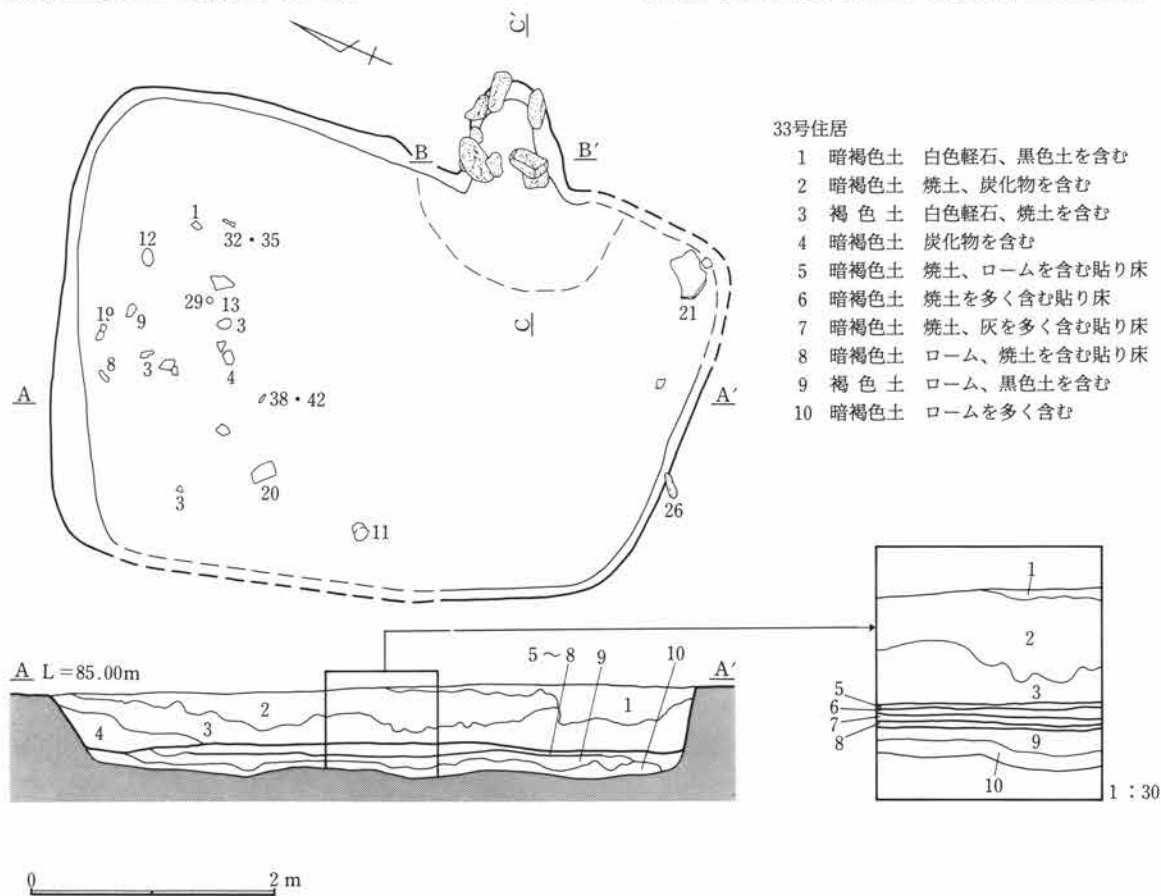
重複 北東隅側に68号住居が存在するが、この重複部分に攪乱があるため両住居の新旧関係は不明である。

主軸方向 N-74°-E **床面積** 15.8m²

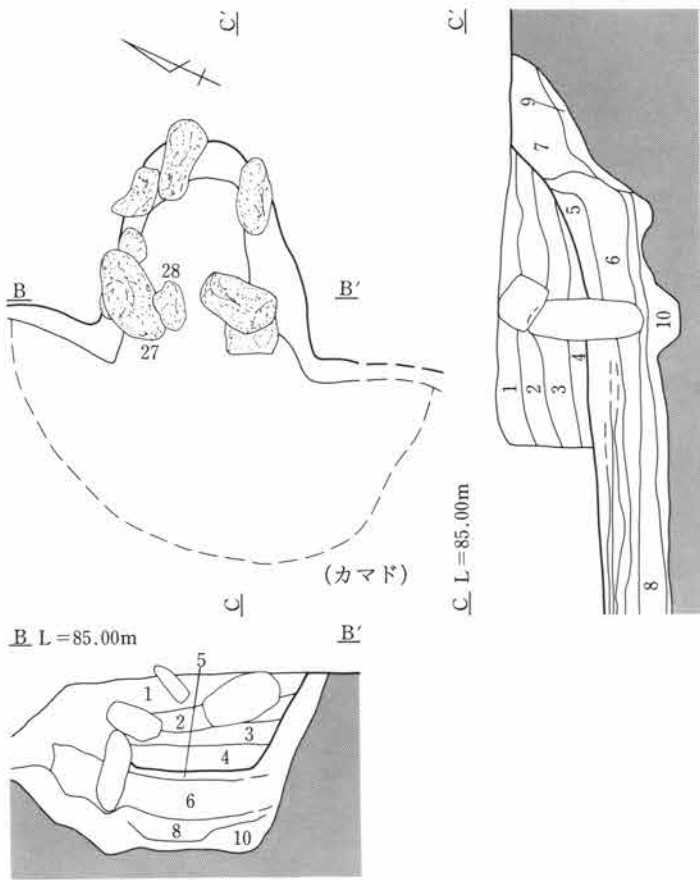
形態 検出された遺構形状はかなり歪みをもっているが、基本的には主軸方向の対辺に長軸をもつ横長長方形を呈するものと思われる。このような歪みは耕作による攪乱および壁部の崩落などにより生じたものと考えられ、本来の形状を失っている部分が多く、とくに西南部分にその影響が大きい。

規模 3.5m×5.1m

カマド 東壁に設置される。住居形状にやや不明瞭な部分をもつが、カマドは壁中央から多少南寄りに位置するようにみられる。天井部、煙道は残存しな



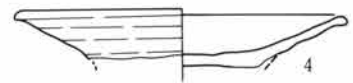
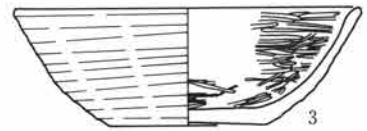
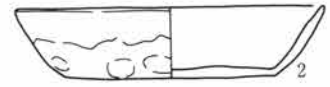
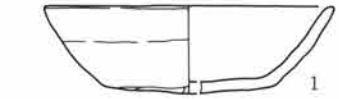
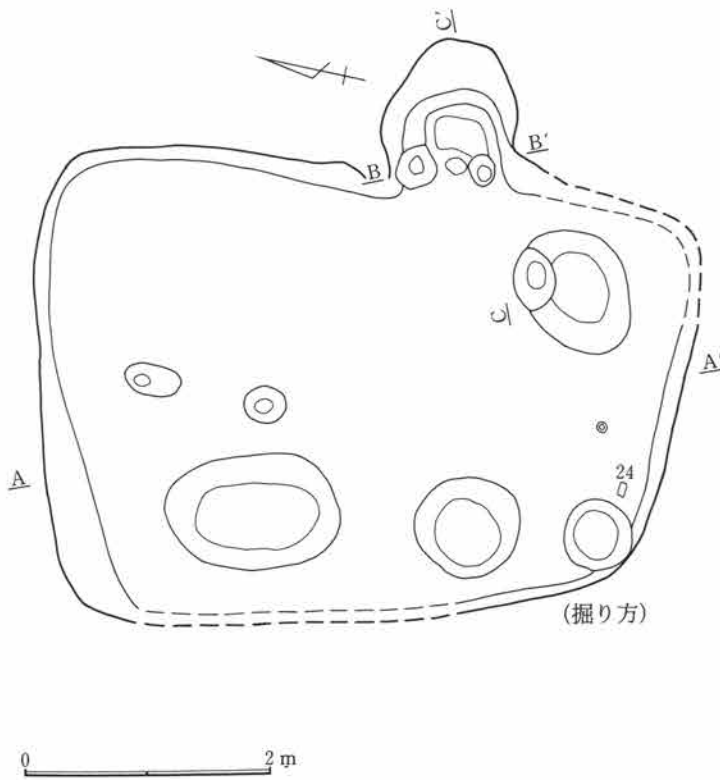
第105図 33号住居



33号住居カマド土層

- 1 暗褐色土 焼土、炭化物を含む
- 2 暗褐色土 焼土ブロック、灰を含む
- 3 褐色土 砂壤土、焼土を含む
- 4 暗褐色土 焼土、炭化物を含む
- 5 暗褐色土 灰を多量に含む
- 6 褐色土 焼土ブロック、灰を含む
- 7 暗褐色土 焼土を多量に含む
- 8 暗褐色土 砂壤土を多量に含む
- 9 暗褐色土 焼土を少量含む
- 10 褐色土 砂壤土、焼土、灰を含む

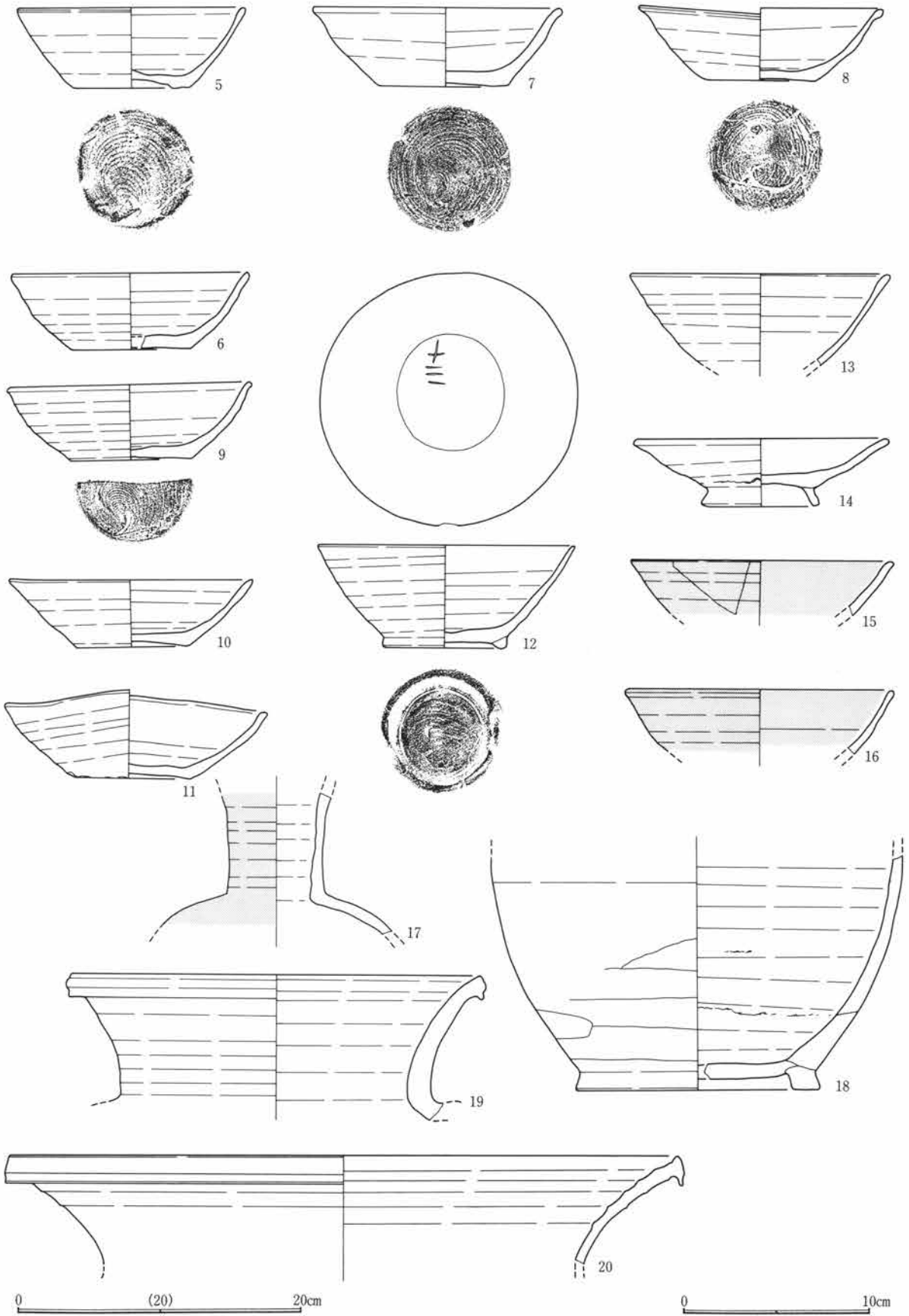
0 1 m



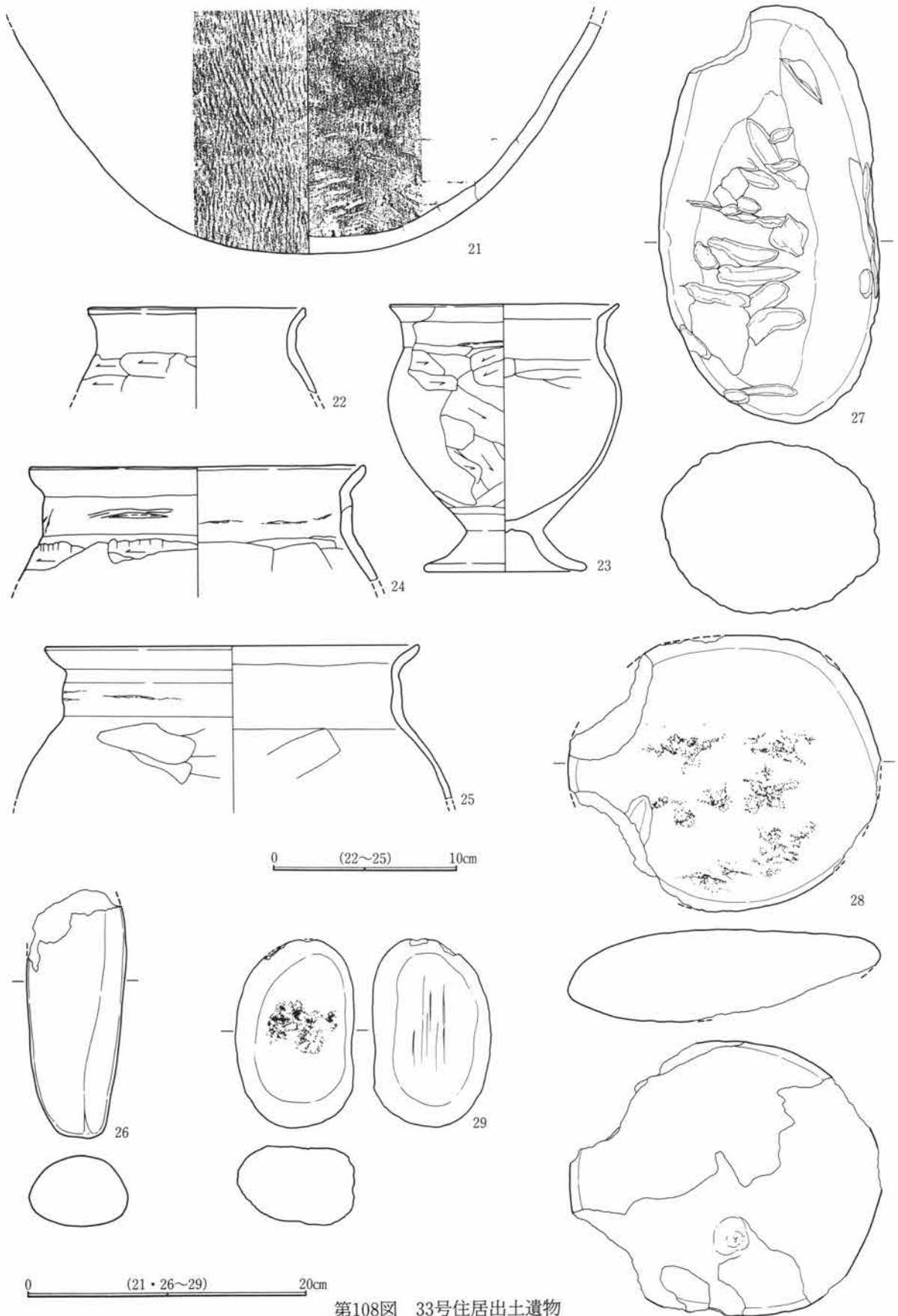
0 10cm

第106図 33号住居と出土遺物

II 発掘調査の記録

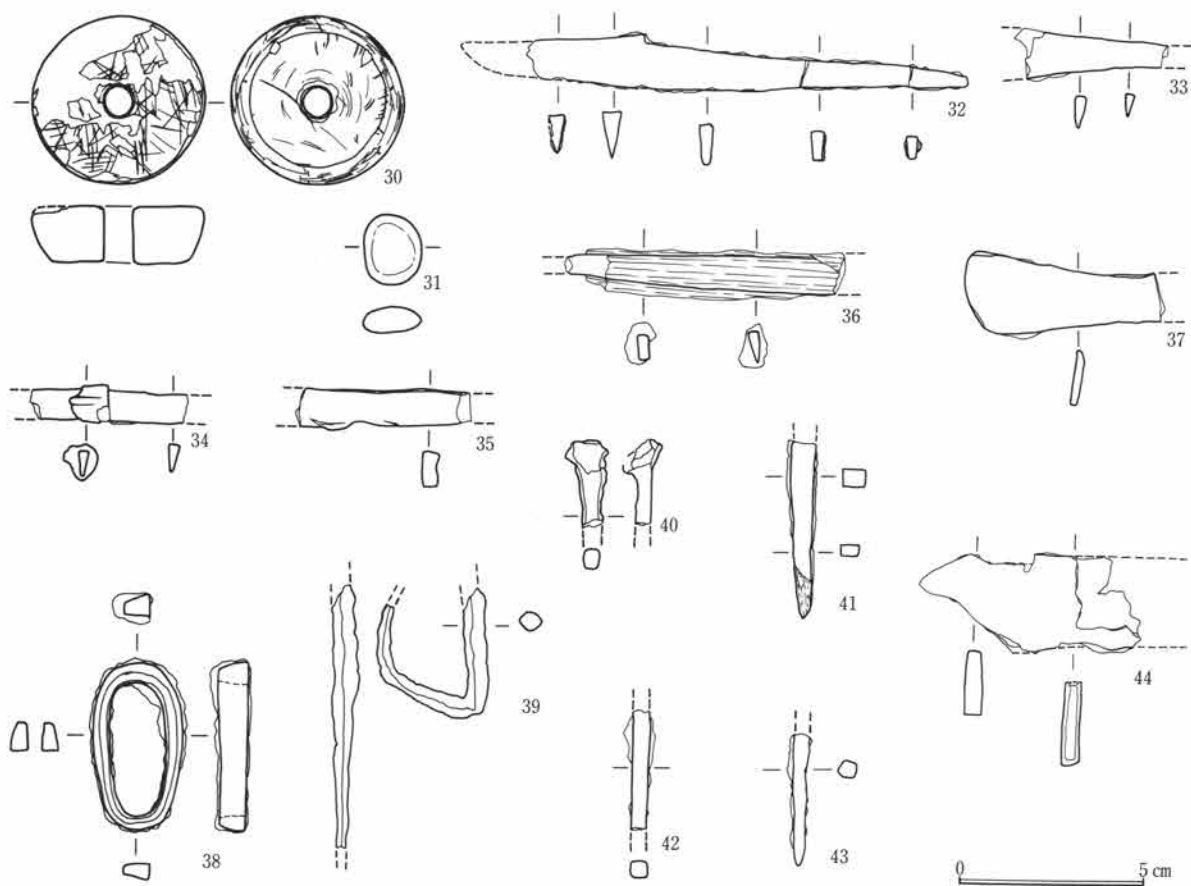


第107図 33号住居出土遺物



第108図 33号住居出土遺物

II 発掘調査の記録



第109図 33号住居出土遺物

いが、埋没土中には火熱を受けた褐色粘質土の堆積が認められている。壁部には構築礫が検出され両袖を含め、粗粒安山岩・角閃石安山岩の礫材が用いられている。なお両袖部分には径20cm～30cm、深さ15cmの袖石設置穴も1穴ずつ検出されている。規模は焚口50cm、奥行き95cmを計測し、前面には灰・焼土の散布が認められる。

内部施設 床面上では周溝、柱穴などについて検出していない。しかし掘り方調査により住居使用面に伴う可能性のある掘り込みも検出されている。1つは南東隅にある径100cm×80cm、深さ30cmの掘り込みで位置からみて貯蔵穴の可能性がある。さらに南西隅の径50cm、深さ35cmの小穴についても穴内から遺物出土が認められている点などから掘り方に伴うというより使用面に関連する掘り込みの可能性が考えられる。

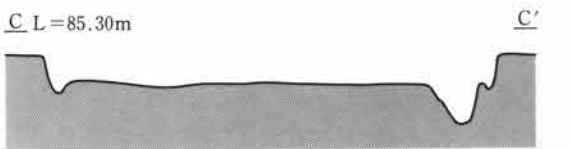
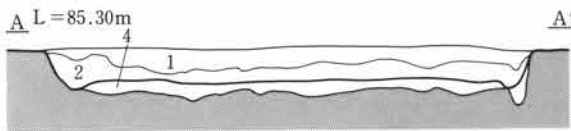
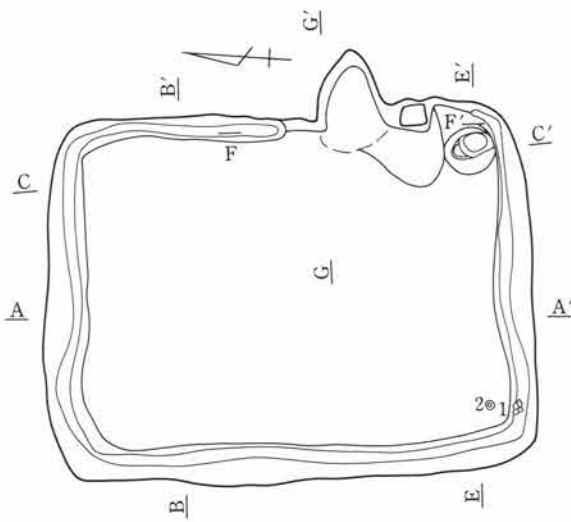
床 暗褐色土および褐色土による張り床が5面確認

されている。これらの張り床は継続的に施されているとみられ、層厚10cm程度のに5面が認められている。各面はいずれも堅く良好な張り床であり数cmの間層をはさみながら連続的に検出されるが、その際下位の床面が上位の床面より状態が不良であるというような所見は得ていない。

掘り方 床面が複数存在することもあり、掘り方は浅い。全体的15cm前後掘り下げ、内部施設で説明した掘り込みのほかに径20cm～120cm、深さ30cm程の土坑状掘り込みが4カ所程度認められる。

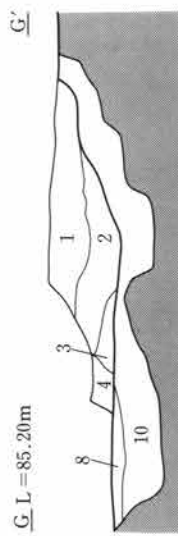
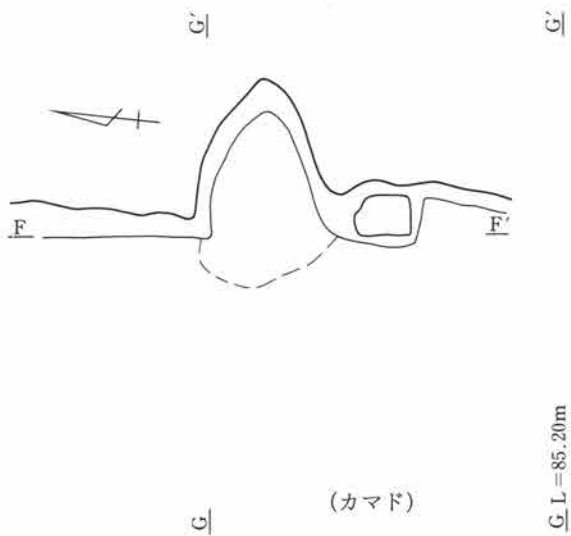
遺物出土状態 遺構形状が比較的明瞭に確認できた住居北側に遺物も集中する傾向があるが、遺構検出状態と一致したものともいえる。土器類は1・3・4・5・9・12・13・19・20・21が床面上、30の紡錘車、33・36の刀子、39・43の釘がやはり床面上で出土している。

時期 出土遺物から9C.中葉に比定される。



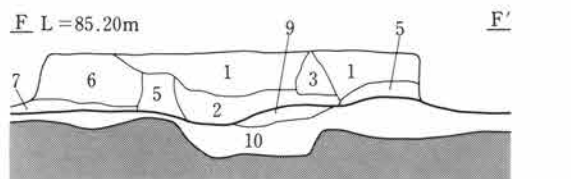
34号住居

- 1 褐色土 白色粒子、ロームを含む
- 2 褐色土 ロームブロックを含む
- 3 褐色土 暗褐色土、ロームを含む
- 4 褐色土 ロームブロックを含む掘り方埋め土



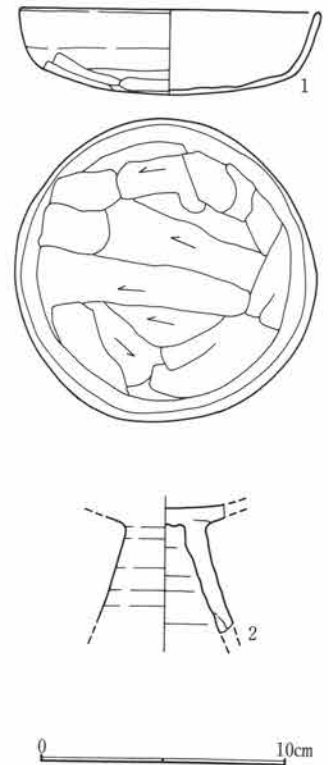
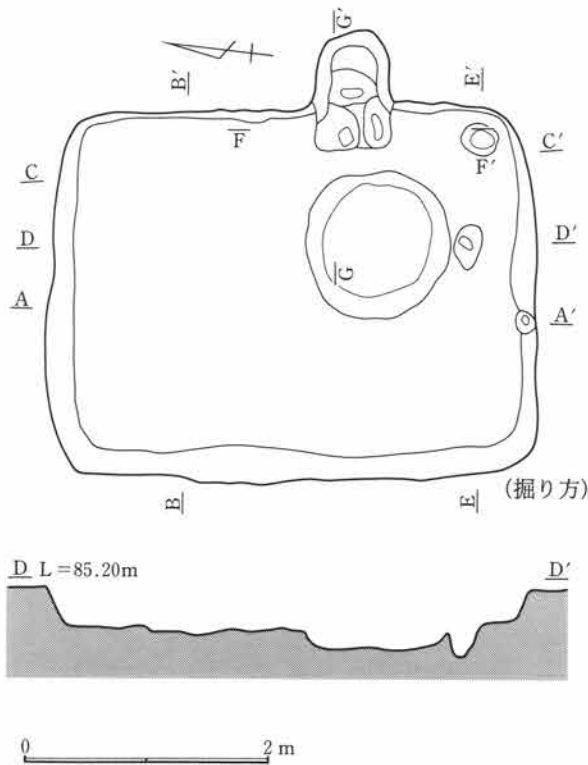
34号住居カマド土層

- 1 褐色土 軽石粒、焼土、ロームブロックを含む
- 2 褐色土 ロームブロック、焼土を含む
- 3 褐色土 粘質土をブロック状に含む
- 4 暗褐色土 ローム、焼土を含む
- 5 褐色土 ロームブロック、黒色土を含む
- 6 褐色土 ロームブロックを多量に含む
- 7 褐色土 軽石粒、焼土を含む
- 8 暗褐色土 ロームブロック、焼土を含む
- 9 暗褐色土 ローム、炭化物を含む
- 10 褐色土 ロームブロック、暗褐色土を含む



第110図 34号住居

II 発掘調査の記録



第111図 34号住居と出土遺物

34号住居 (第110・111図 P L. 40・115)

位置 Bi-17・18

重複 35号住居が東接するが直接重複はせず、土坑など他遺構との重複も認められない。

主軸方向 N-83°-E 床面積 9.6m²

形態 主軸方向の対辺に長軸をもつ横長長方形を呈する。形状はほとんど歪みをもたず各辺も直線的でほぼ矩形を示している。

規模 2.9m×3.9m

カマド 東壁に設置され、北東隅から3分の2程度南寄りに位置する。埋没土中には天井部崩落土である被熱した褐色粘質土がブロック状に堆積し、底面には焼土・灰の薄層も認められる。袖部はほとんど残存していないが、右袖部にはロームブロックを含む褐色土による袖構築の痕跡を認めることができる。規模は焚口50cm、奥行き80cmを計測し、前面に灰・焼土の散布がみられる。

内部施設 壁下に沿って幅15cm、深さ10cmの周溝が巡る。ほぼ全周するが、カマド両側部分については途切れている。また南東部隅には径40cm、深さ30cm

貯蔵穴が検出されている。

床 掘り方埋土であるロームブロックを含む褐色土の上面を床としている。とくに硬化面は認められないもののほぼ水平な面が形成されている。

掘り方 全体的に15cm程度不規則に掘り下げられ、カマド前部である住居中央部に径115cm、深さ30cmの土坑状の掘り込みが認められる。

遺物出土状態 遺物量は少ない。1が南西隅周溝、2が南西隅床面上で出土している。このほか土器片が数点および鉄滓が計12g程度、埋没土から検出されている。

時期 出土遺物から8 C. 中葉に比定される。

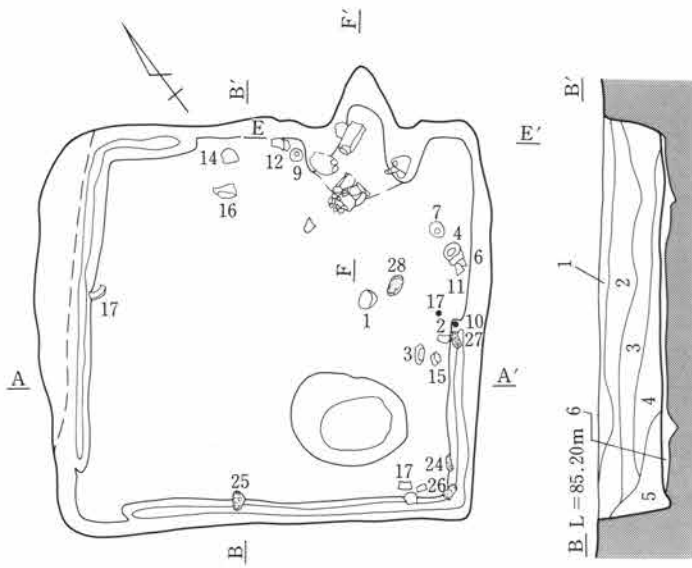
35号住居 (第112~116図 P L. 41・42・115・116)

位置 Bi・j-18・19

重複 36号住居がカマド端部に東接するが検出面での直接の重複は認められない。

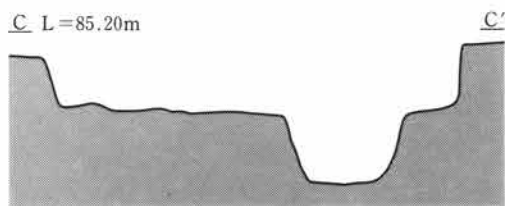
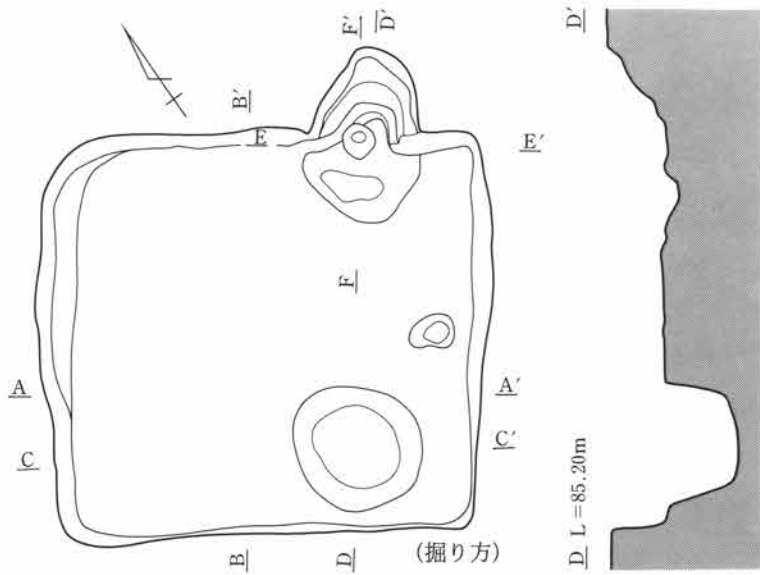
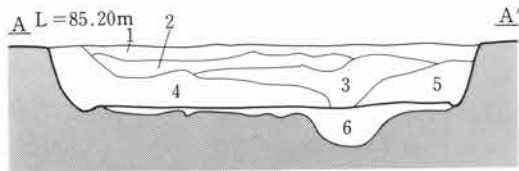
主軸方向 N-34°-E 床面積 9.1m²

形態 ほぼ方形の平面を呈する。壁部の崩落もあり検出形態には不規則な部分もみられるが、本来は直線的な形状をもつものと考えられる。平面形は各辺



35号住居

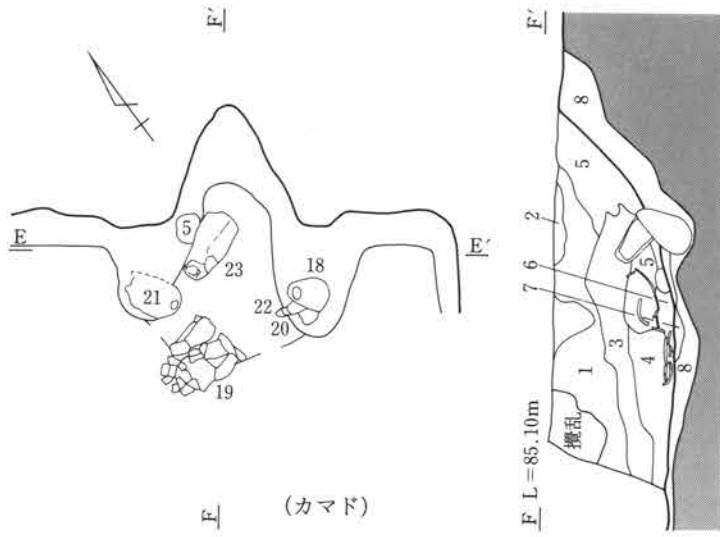
- 1 褐色土 白色粒子、焼土を含む
- 2 褐色土 暗褐色土、白色粒子を含む
- 3 暗褐色土 ロームブロック、白色粒子を含む
- 4 褐色土 ロームブロック、ローム粒を含む
- 5 褐色土 ローム、焼土を含む
- 6 黒褐色土 ローム、焼土を含む掘り方埋め土



0 2 m

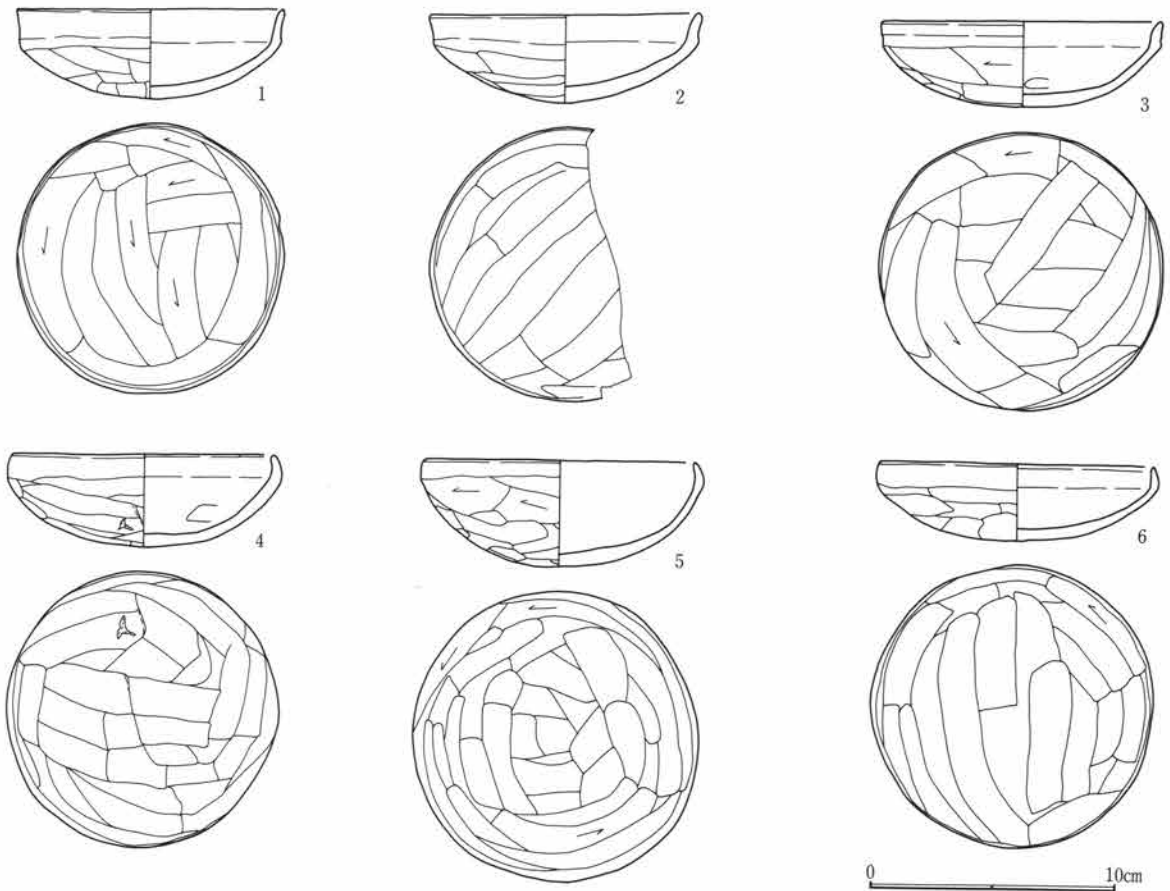
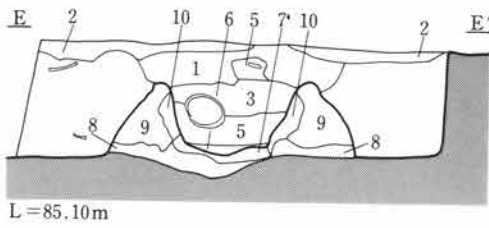
第112図 35号住居

II 発掘調査の記録

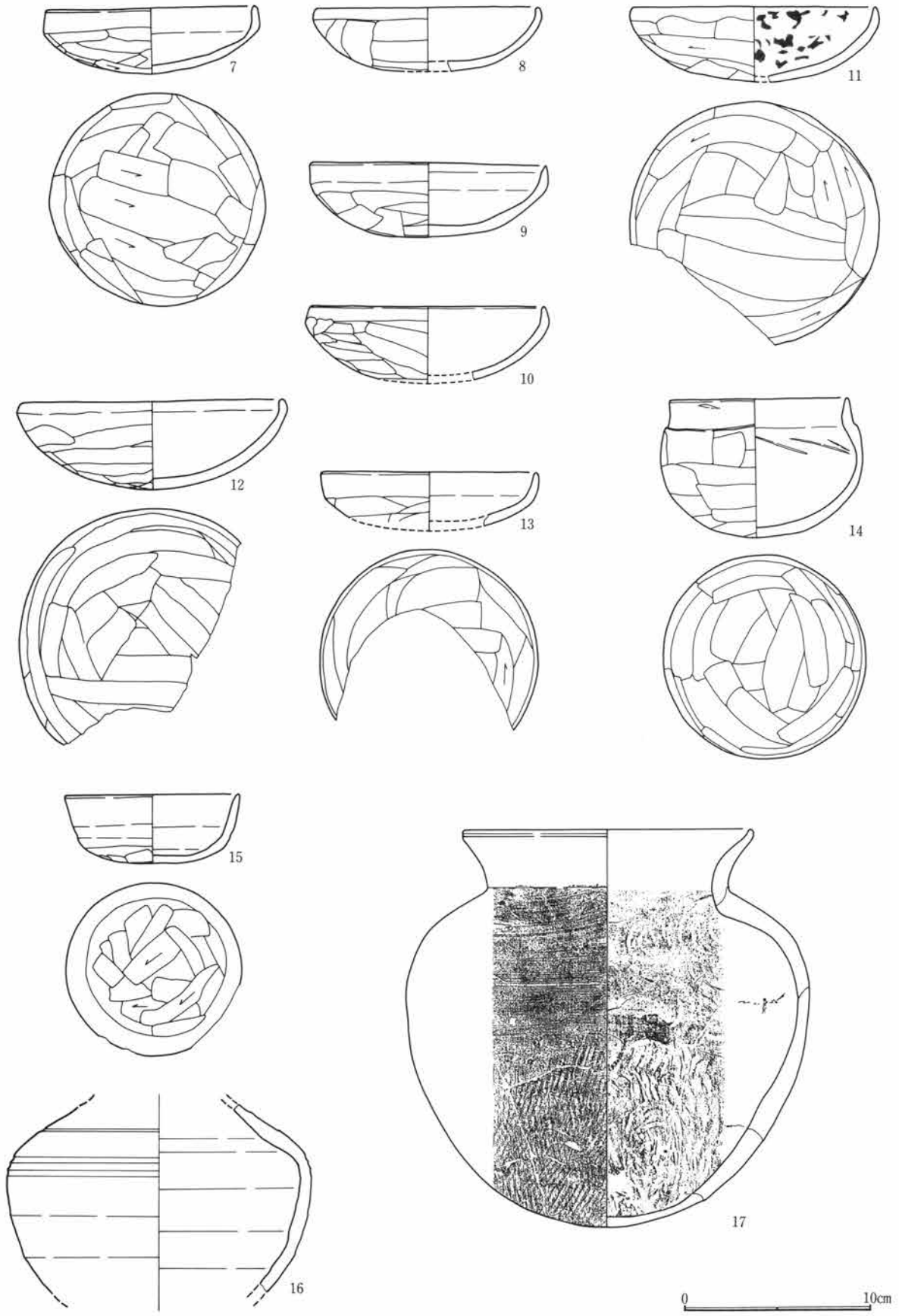


35号住居カマド土層

- 1 暗褐色土 軽石粒、焼土を含む
- 2 褐色土 軽石粒、ロームブロックを含む
- 3 褐色土 ロームブロック、黒色土を含む
- 4 暗褐色土 ローム、焼土を少量含む
- 5 褐色粘質土 天井部崩落土
- 6 黒褐色土 焼土を多量に含む
- 7 灰層
- 8 暗褐色土 ローム、焼土を含む
- 9 褐色粘質土 ローム粒を含む
- 10 褐色粘質土 焼土ブロックを含む

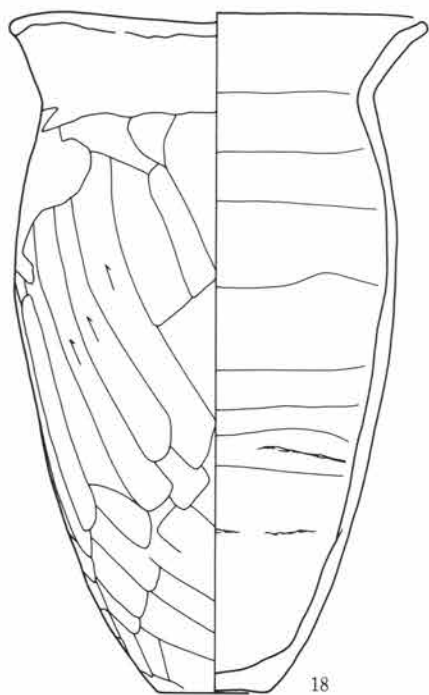


第113図 35号住居と出土遺物

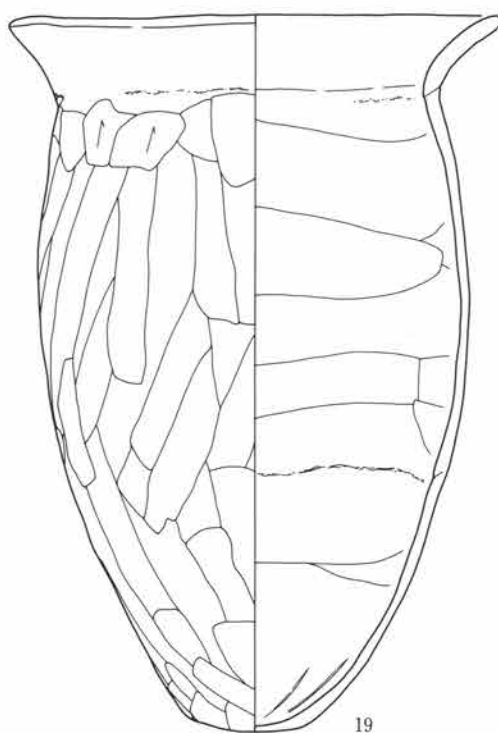


第114図 35号住居出土遺物

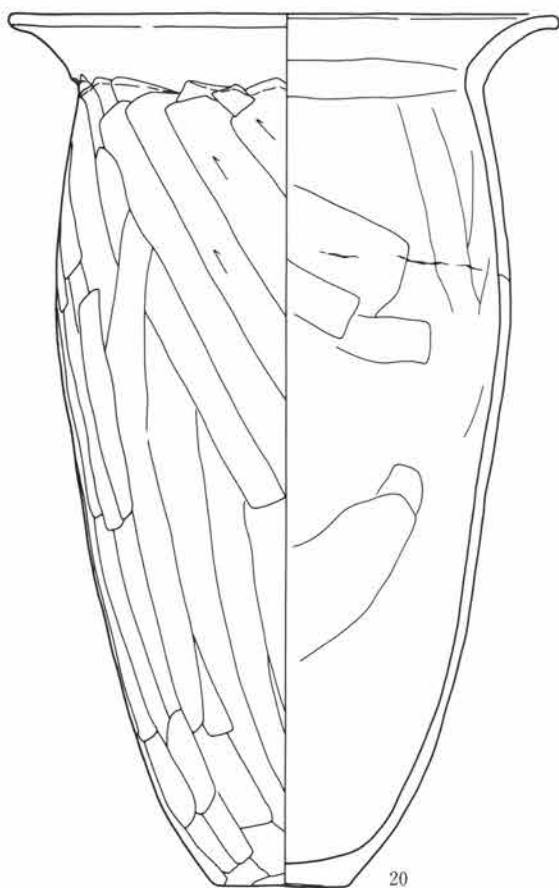
II 発掘調査の記録



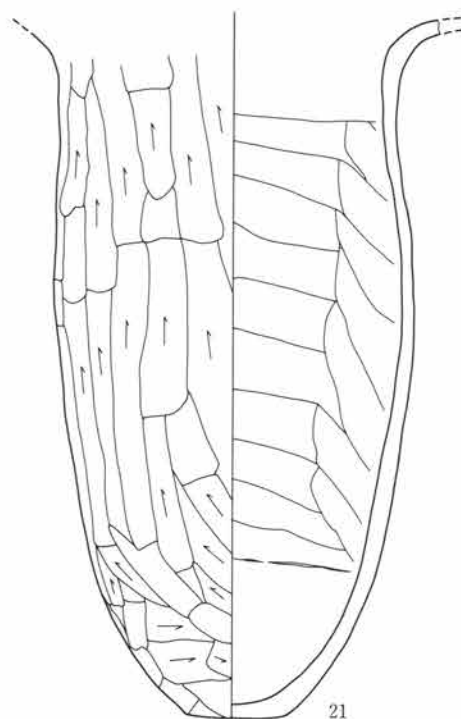
18



19



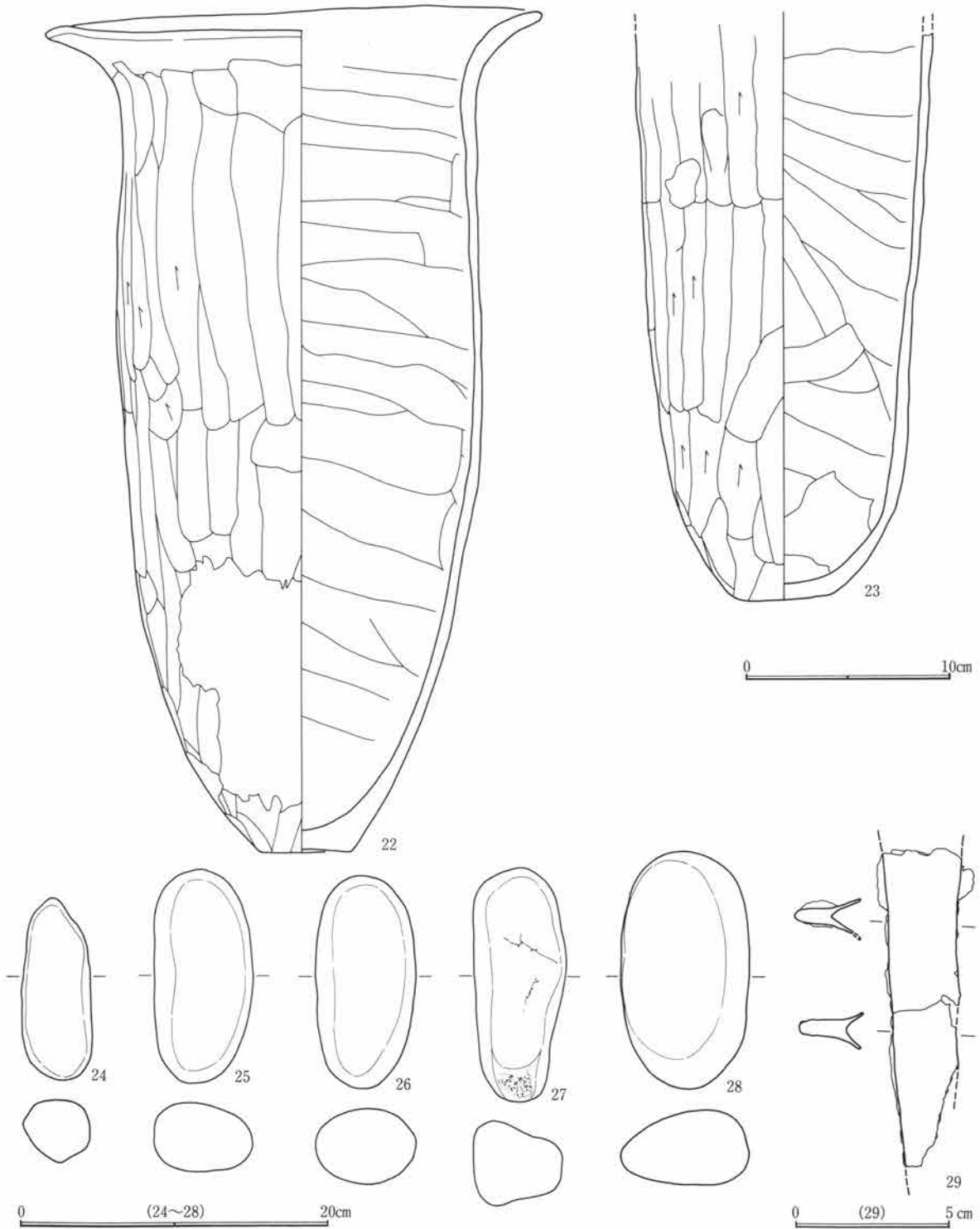
20



21

0 10cm

第115図 35号住居出土遺物



第116図 35号住居出土遺物

が直交せず、平行四辺形状の歪みをもっており矩形を示していない。

規模 3.2m×3.3m

カマド 東壁に設置され、北東隅から3分の2程度

南寄りに位置する。埋没土には天井部崩落土である被熱した褐色粘質土が堆積しており、カマド上部は全く残存していない。袖部には土師器甕が構築材として用いられ、右袖には18、左袖には21の甕がそれ

II 発掘調査の記録

それぞれ倒置状態で設置されている。また壁部には粗粒安山岩の礫材が認められ、構築用として礫材も使用されている。なおカマド部には5の杯のほか19・20・22・23の甕が集中して一括出土している。規模は焚口35cm、奥行き90cmを計測する。

内部施設 南西部に径90cm×70cm、深さ10cm程度の皿状のくぼみが存在するが、このくぼみは掘り方に沿って床面が落ち込んだもので内部施設に伴う掘り込みではない。壁下には幅15cm、深さ10cmの周溝が巡る。全周せず北西隅および南東隅、カマド両側は途切れている。

床 黒褐色土により堅く良好な張り床が施される。

掘り方 南西部に径80cm、深さ50cmの土坑状の掘り込みが加えられ、黒褐色土が埋め戻される。

遺物出土状態 土器類は2・4・6・11が南壁付近、17が南西部、1が中央部、3が南東部、16が北東部、9・12がカマド左側でそれぞれ床面上、5・18~23は前記のようにカマド内、他は埋没土から出土して

いる。棒状礫は24・26が南西周溝、25が西周溝、27が南周溝、28が中央床面上で検出され、29の鉄製品は掘り方から出土している。

時期 出土遺物から8C.前葉に比定される。

36号住居 (第117~119図 P.L. 43・117)

位置 Bj・k-17・18

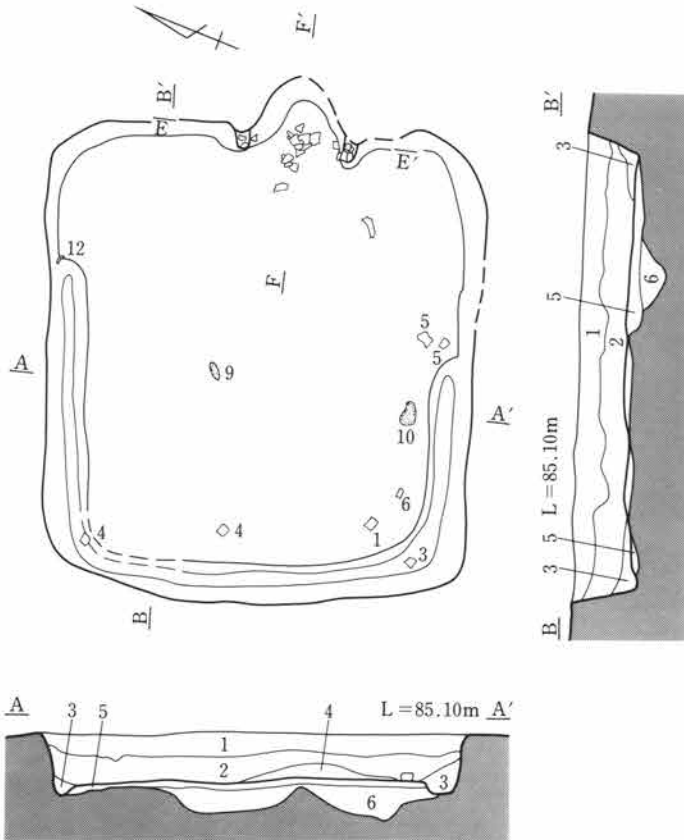
重複 西壁で35号住居と接するが重複部は少なく、平面および土層断面の観察からその関係を確定する所見は得られていない。またカマド部から南壁中央にかけて耕作溝が走り、この部分は攪乱を受ける。

主軸方向 N-69°-E **床面積** 10.3m²

形態 主軸方向に長軸をもつ縦長長方形を呈する。各隅はやや丸みをもつが、各辺は直線的でほとんど歪みはみられずほぼ矩形を示している。

規模 3.4m×3.8m

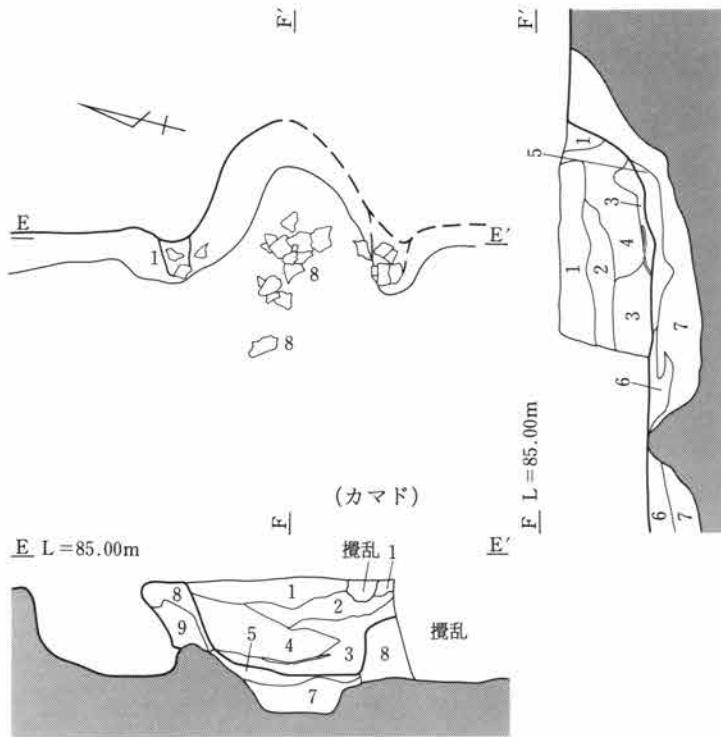
カマド 東壁中央やや南寄りに設置される。天井部は残存しないが、カマド埋没土には天井部崩落土である被熱した灰褐色粘質土の堆積も認められる。両



36号住居

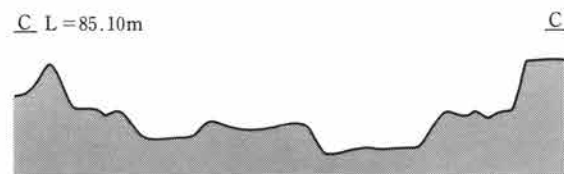
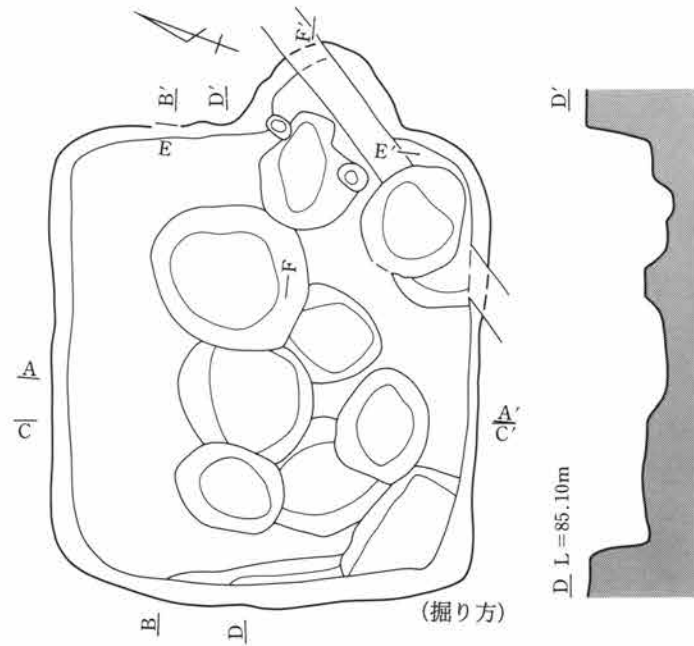
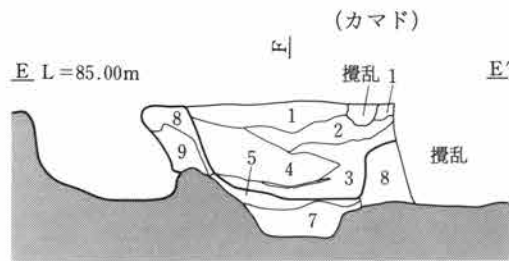
- 1 褐色土 白色軽石、ローム、焼土を含む
- 2 暗褐色土 ローム、軽石、炭化物を含む
- 3 褐色土 ロームブロックを含む
- 4 褐色土 ローム、軽石を含む
- 5 褐色土 ロームブロックを多量に含む
- 6 暗褐色土 ローム粒を含む

第117図 36号住居

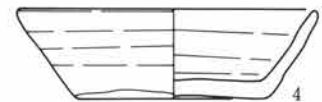
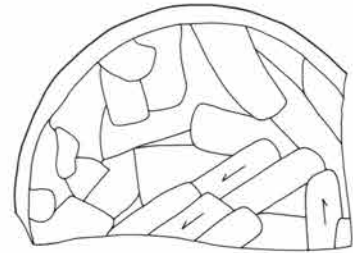
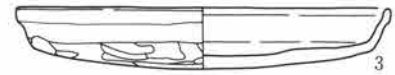
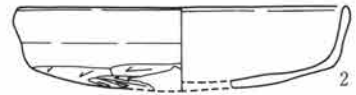


36号住居カマド土層

- 1 褐色土 軽石粒、焼土を含む
- 2 褐色土 ロームを多量に含む
- 3 褐色土 焼土、ロームを少量含む
- 4 灰褐色粘質土 壁体崩落土
- 5 暗褐色土 焼土、灰を含む
- 6 灰褐色土 ローム粒を含む
- 7 褐色土 ロームブロックを含む
- 8 灰白色粘質土
- 9 褐色土 焼土、粘質土を含む



0 1 m

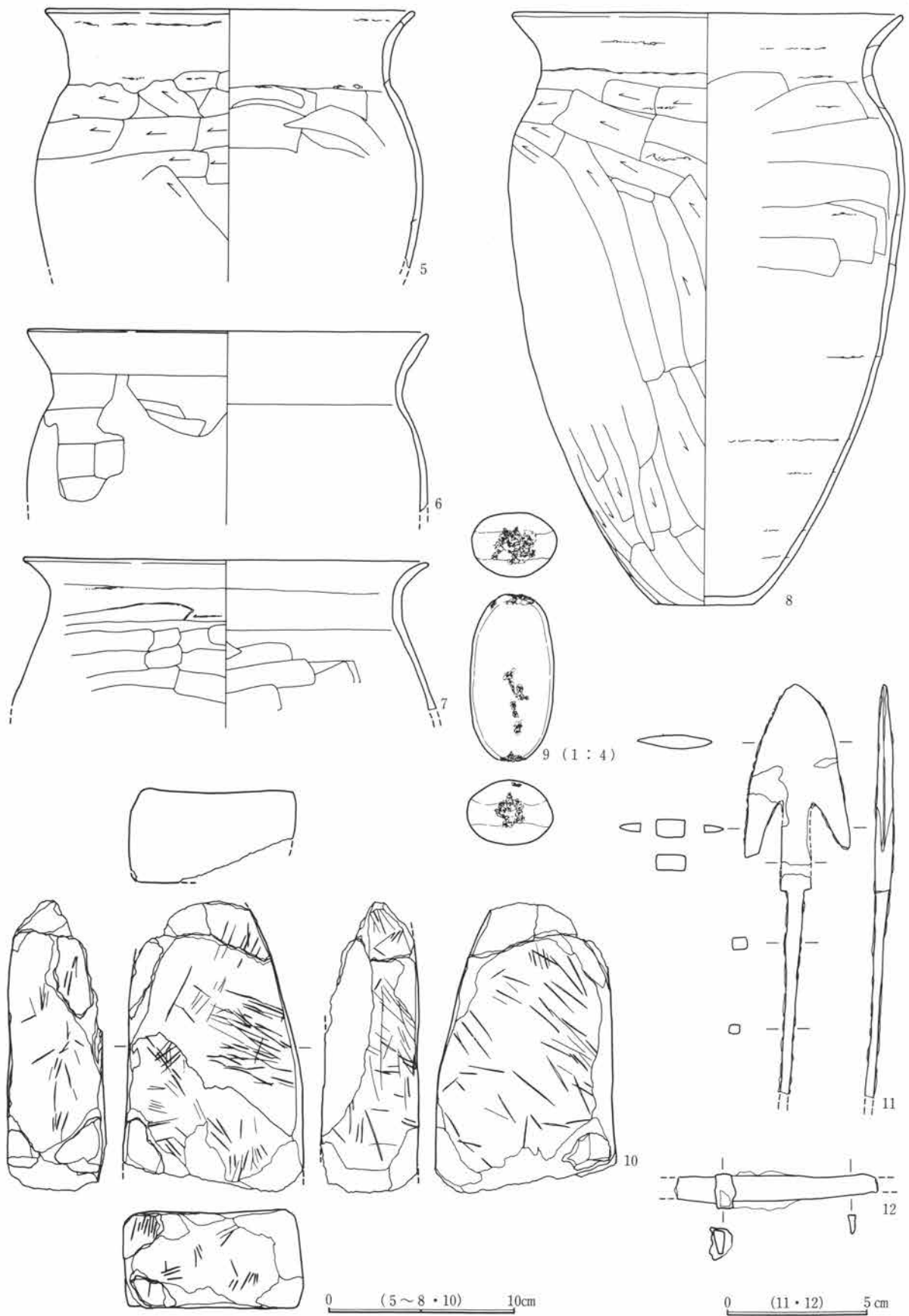


0 10cm

0 2 m

第118図 36号住居と出土遺物

II 発掘調査の記録



第119図 36号住居出土遺物

袖は灰白色粘質土により構築され、さらに土師器甕片などの土器片による壁体の補強も認められる。なお左袖部には地山ロームの一部掘り残しも観察される。規模は焚口80cm、奥行き70cmを計測し、カマド底面には8の土師器甕が集中散布している。左袖掘り方には径20cm、深さ10cmの袖石設置穴が1カ所確認されるが、右袖については耕作溝による攪乱のため不明となっている。

内部施設 壁下に幅20cm、深さ15cmの周溝が巡るが全周はせず北壁中央から西壁および南壁中央にかけての住居西側部にのみ検出される。南東隅掘り方調査により径55cm、深さ15cmの小穴が認められ、床面上では未確認であったが、位置からみて貯蔵穴の可能性が考えられる。

掘り方 径100cm前後、深さ20cm～40cmの土坑状の掘り込みが重複して加えられる。

遺物出土状態 1・3・6は南西隅、5は南壁付近、8はカマド内、4は西側、2・7は埋没土から出土した。9の棒状礫は中央、10の擦痕礫は南壁付近の

床面上、11の鉄鏃は埋没土、12の刀子は北壁に接して検出されている。

時期 出土遺物から9 C.前葉に比定される。

37号住居 (第120～121図 P L. 44・117)

位置 Bk・1-19・20

重複 他遺構との重複は認められないが、耕作溝による攪乱を受けており、およそ住居全体の4分の1程度が壊されている。

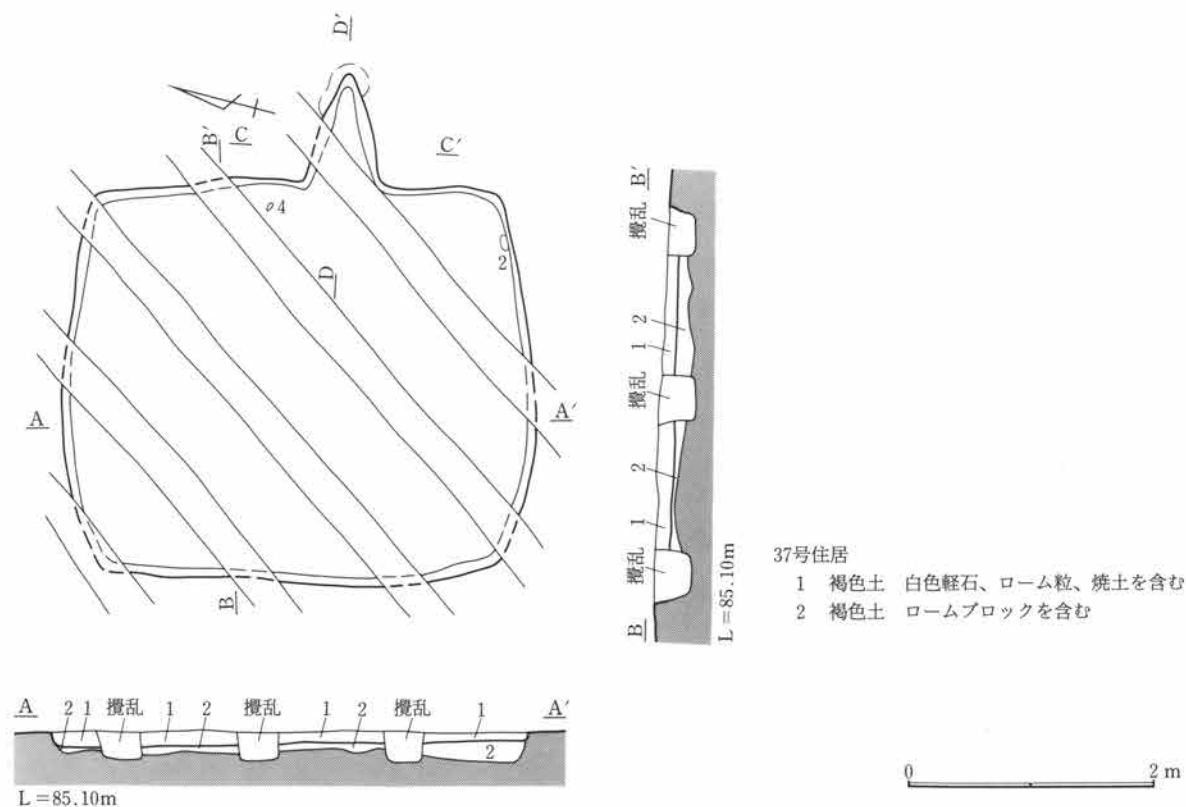
主軸方向 N-76°-E **床面積** 10.3m²

形態 主軸方向の対辺に長軸をもつ横長長方形を呈する。耕作溝の影響により状態はあまり良好ではないが、ほぼ矩形を示すようにみられる。

規模 3.2m×3.7m

カマド 東壁中央やや南寄りに設置される。やはり耕作溝の影響もあり残存状態は不良であり、天井部などの痕跡は全く認められない。規模は焚口60cm、奥行き90cmで、先端部には灰・焼土の散布部分も認められる。

内部施設 特に検出されていない。



第120図 37号住居

II 発掘調査の記録

床 褐色土による掘り方埋土上面を床とする。

掘り方 土坑状の掘り込みがみられる。

遺物出土状態 住居残存状態に伴い遺物量も少ない。1は埋没土、2は南壁床面上、3は掘り方、4の勾玉はカマド左袖付近から検出されている。

時期 出土遺物から8 C.後半に比定される。

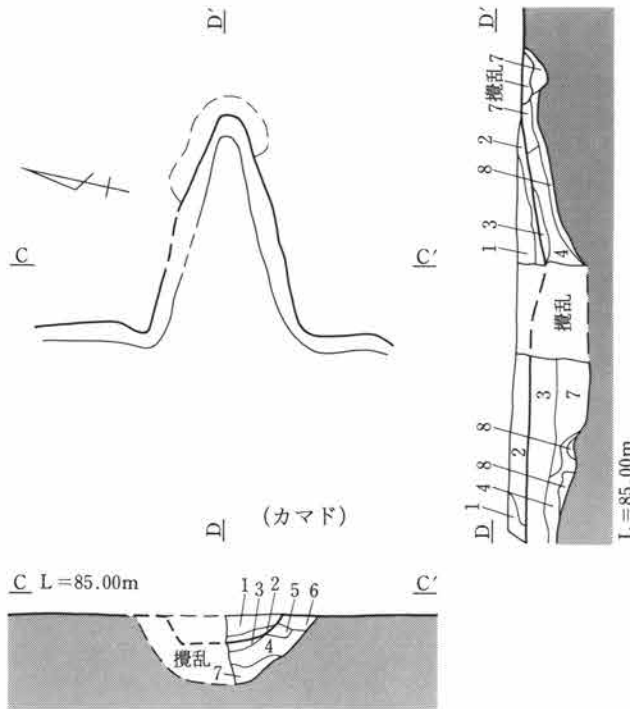
38号住居 (第122~125図 P L. 45・46・117・118)

位置 Bg・h・i-19・20

重複 住居など他遺構との重複は認められない。

主軸方向 N-76°-E 床面積 17.4m²

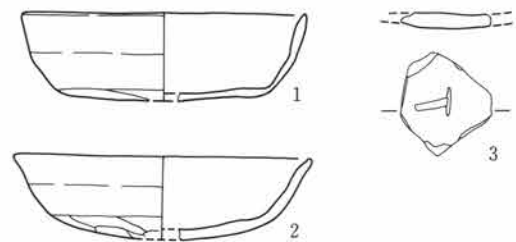
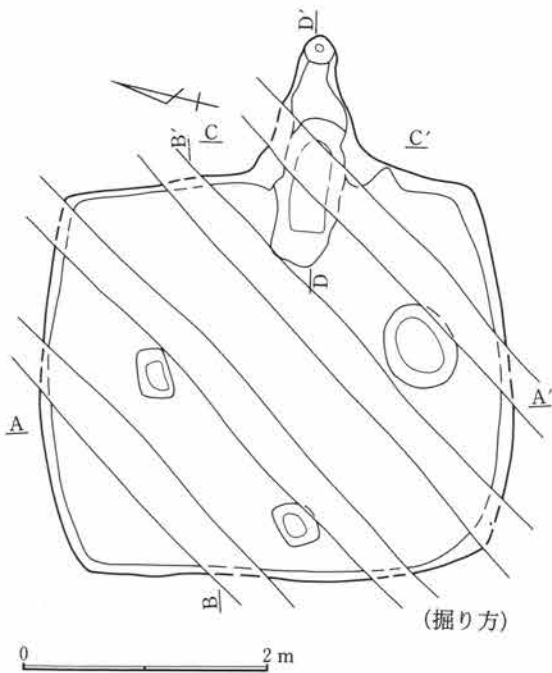
形態 主軸方向に長軸をもつ縦長長方形を呈する。長軸・短軸の差が少なく方形に近い平面形状を示し、



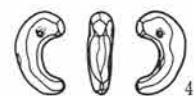
37号住居カマド土層

- 1 暗褐色土 焼土、軽石粒を含む
- 2 暗褐色土 焼土を多量に含む
- 3 暗褐色土 焼土、灰を多量に含む
- 4 暗褐色土 焼土、ローム、炭化物を含む
- 5 褐色土 ローム、焼土粒を含む
- 6 暗褐色粘質土 袖部構築材
- 7 暗褐色土 ロームブロック、焼土を含む
- 8 褐色土 ロームブロックを多量に含む

0 1 m



0 10cm



0 (4) 5cm

第121図 37号住居と出土遺物

各辺は直線的でほぼ矩形となっている。

規模 4.3m×4.5m

カマド 東壁中央部に設置される。天井部、煙道は残存しないが、埋没土中には天井部崩落土である被熱した褐色土の堆積が認められる。なお、この天井部崩落土はカマド使用面を直接被覆している。両袖は暗褐色粘質土により構築され、幅15cmで50cm程度住居内に張り出す。カマド内には土師器甕の胴部片が散布するが、壁面および底面に接して検出されており、用具として使用されたというよりカマド構築に際し補強材として利用された可能性が高いようにみられる。規模は焚口80cm、奥行き90cmを計測する。

内部施設 カマド南側の南東隅との間に径60cm、深さ30cmの貯蔵穴が検出されている。住居対角線には柱穴が4本配置される。この柱穴は径40cm～60cm、深さ60cm前後で円筒形の掘り方をもつ。配置は住居平面とは相似せず、1辺2.5mの方形配置としてい

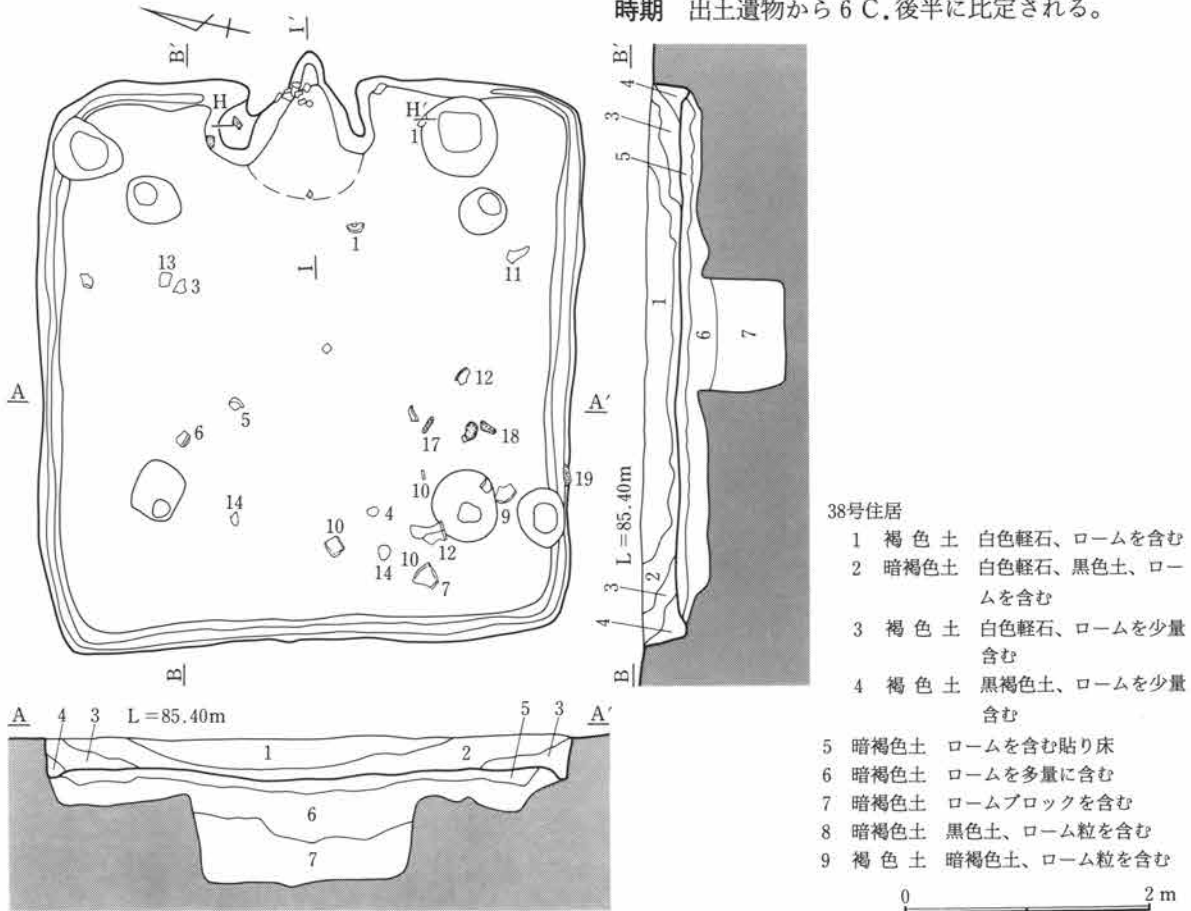
る。壁下には幅20cm、深さ10cmの周溝が巡り、ほぼ全周するが貯蔵穴とカマド右袖間については途切れている。なお、北東隅と南西隅付近には径40cm、深さ10cm～20cmの小穴が認められている。いずれも周溝を切って掘り込まれるが性格については不明である。

床 ロームを含む暗褐色土により貼り床が施される。ほぼ水平で堅く良好な面が形成されている。

掘り方 住居中央に径130cm、深さ70cm程度の土坑状の掘り込みが加えられ、暗褐色土、ロームなどにより埋め戻される。

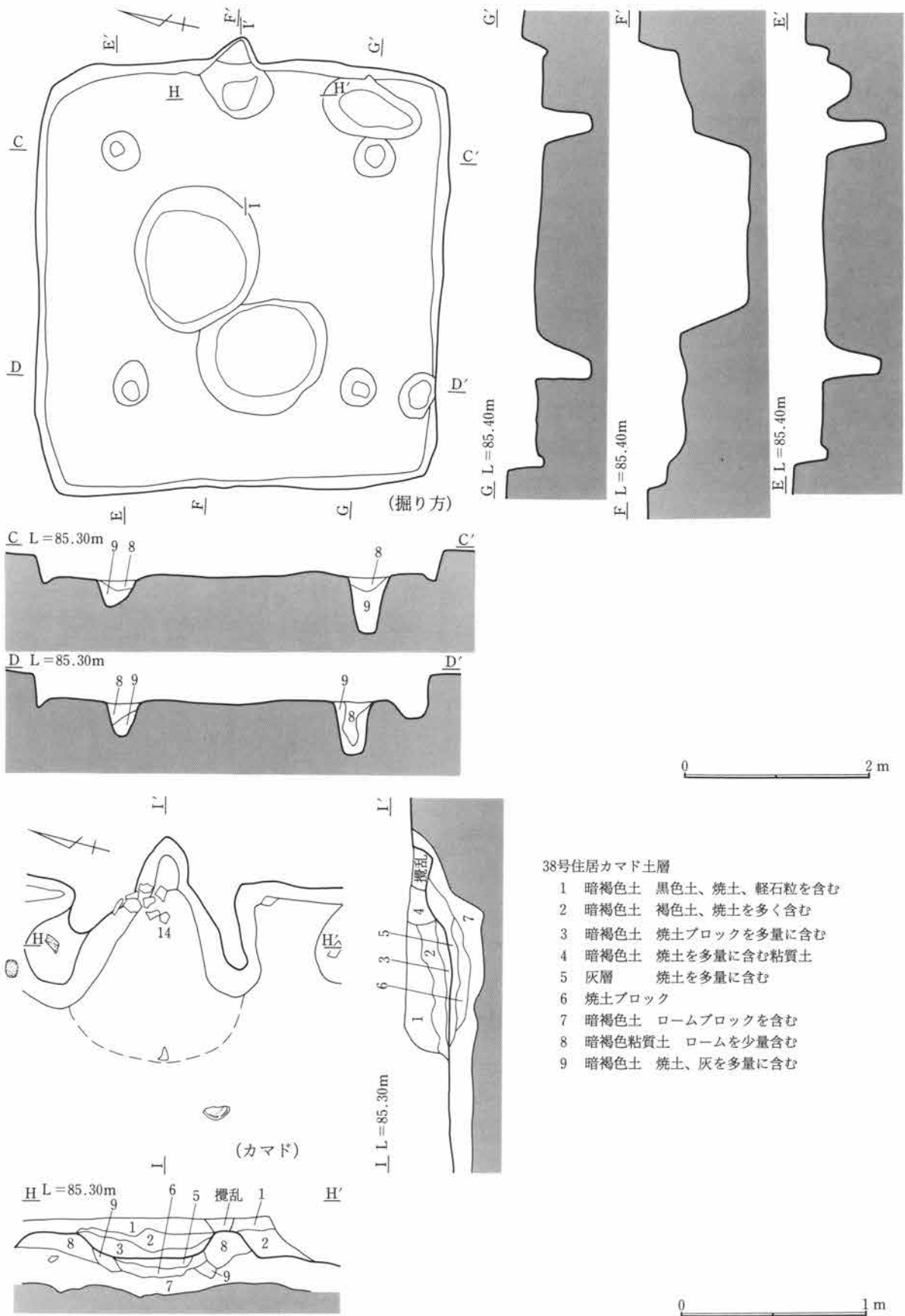
遺物出土状態 南西側にやや集中する。4・7・9・10・12・14が南西部、3・13が北東部、6が北西部、11が南東部、5が中央、1がカマド前でそれぞれ床面上から、2・8が埋没土から出土している。15・16の白玉は埋没土、17～19の棒状礫は南西部床面上から検出されている。

時期 出土遺物から6C.後半に比定される。



第122図 38号住居

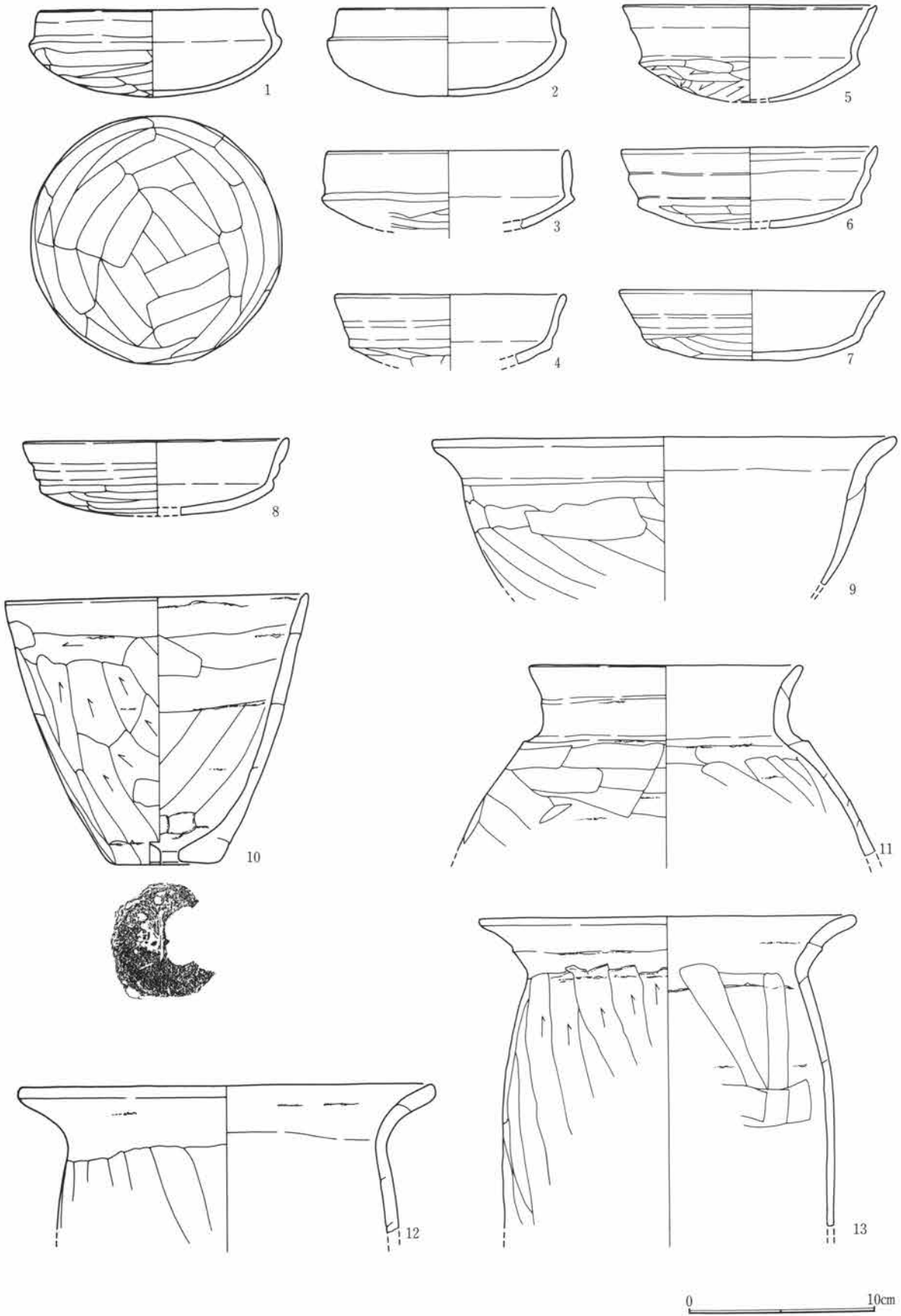
II 発掘調査の記録



38号住居カマド土層

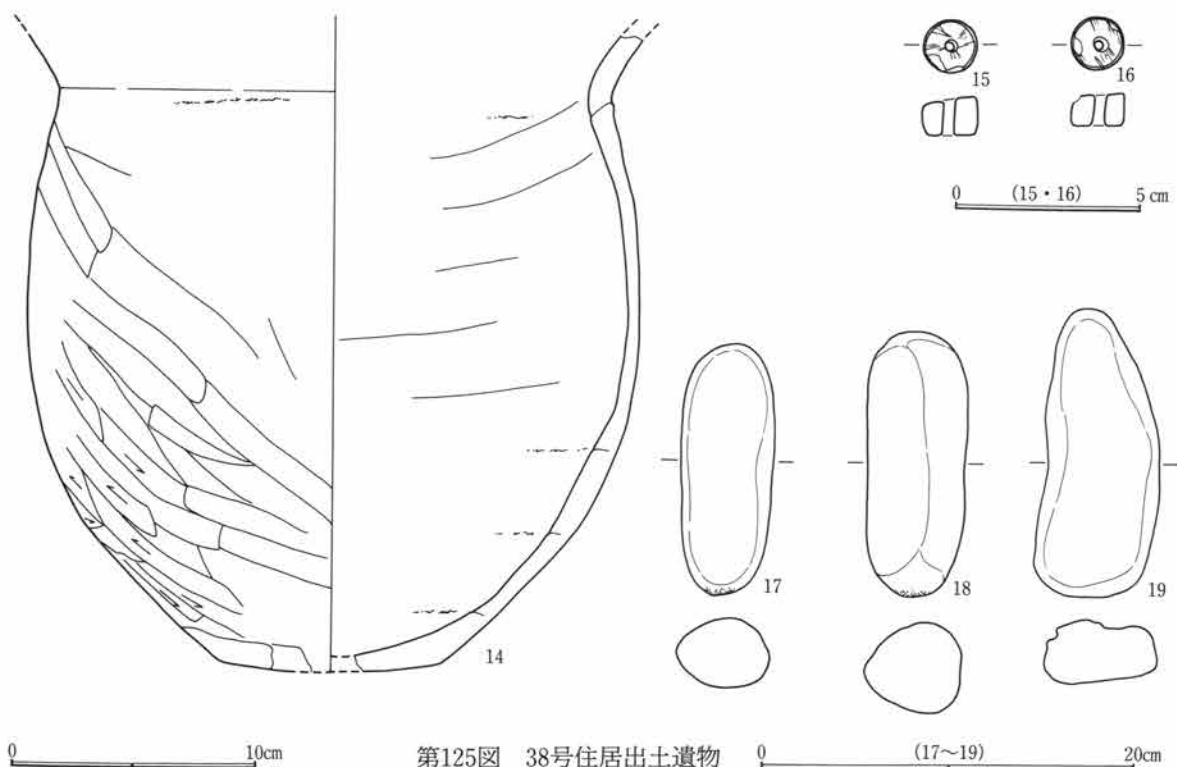
- 1 暗褐色土 黒色土、焼土、軽石粒を含む
- 2 暗褐色土 褐色土、焼土を多く含む
- 3 暗褐色土 焼土ブロックを多量に含む
- 4 暗褐色土 焼土を多量に含む粘質土
- 5 灰層 焼土を多量に含む
- 6 焼土ブロック
- 7 暗褐色土 ロームブロックを含む
- 8 暗褐色粘質土 ロームを少量含む
- 9 暗褐色土 焼土、灰を多量に含む

第123図 38号住居



第124図 38号住居出土遺物

II 発掘調査の記録



39号住居 (第126~128図 P L, 47・118・119)

位置 Bf・g-18・19

重複 69号住居と重複する。平面および土層断面の観察から39号住居が新しく、69号住居が古期である。なお、両住居の出土土器はほぼ同一時期と考えられるもので、このことからみるとあまり時間差をもたない重複例といえる。ただ、重複のありかたには継続性は認められない。

主軸方向 N-84°-E 床面積 8.6㎡

形態 主軸方向の対辺に長軸をもつ横長長方形を呈する。歪みが少なく、ほぼ矩形を示す。

規模 2.9m×3.6m

カマド 東壁中央やや南寄りに設置する。焚口70cm、奥行き100cmで天井部、煙道とも残存せず、下部のみ確認された。掘り方調査により両袖部に径30cm、深さ10cm前後の小穴が認められている。袖石は失われているが設置痕であろう。同時に中央部にも小穴がみられ、やはり遺物は存在しないものの支脚の設置痕の可能性がある。

内部施設 南東隅に径40cm、深さ20cmの貯蔵穴、南西隅を中心に長さ160cm、幅20cm、深さ5cmの周溝が

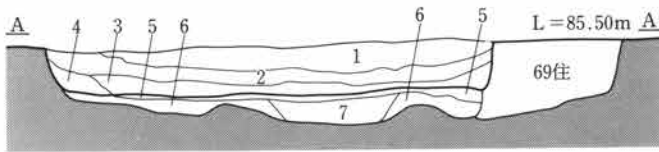
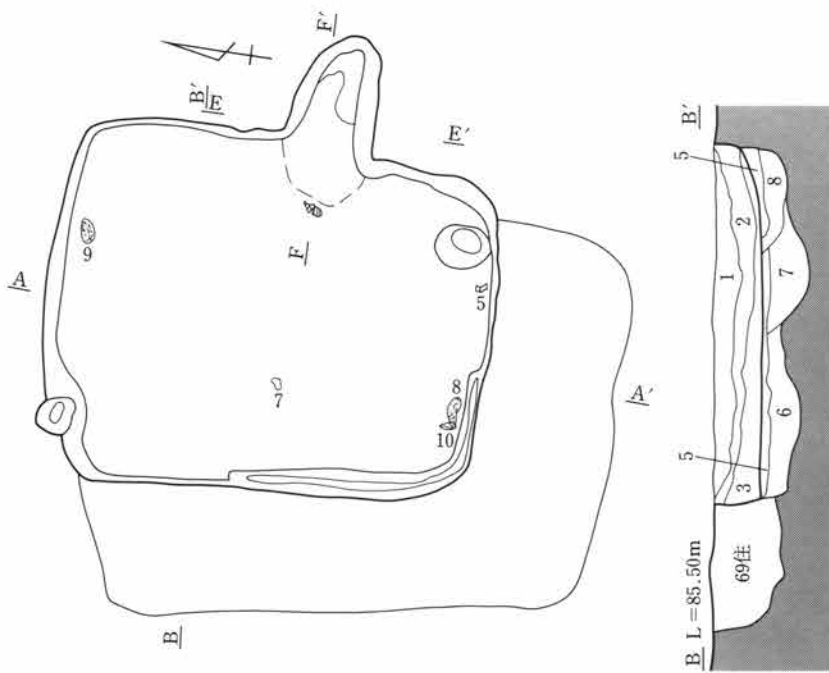
部分的に確認された。その他柱穴などは認められていない。

床 掘り方埋土後にローム、灰褐色粘質土を含む暗褐色土で層厚5cm前後の張り床を施す。住居全域におよぶがとくにカマド前から中央部にかけて硬く良好な面が観察される。なお、面はほぼ水平である。多少の起伏は掘り方に沿ったものである。

掘り方 床面下10cmから40cmの掘り方をもち、深い部分は土坑状の掘り込みとなる。土坑状の掘り込みは住居中央付近に集中する傾向がある。

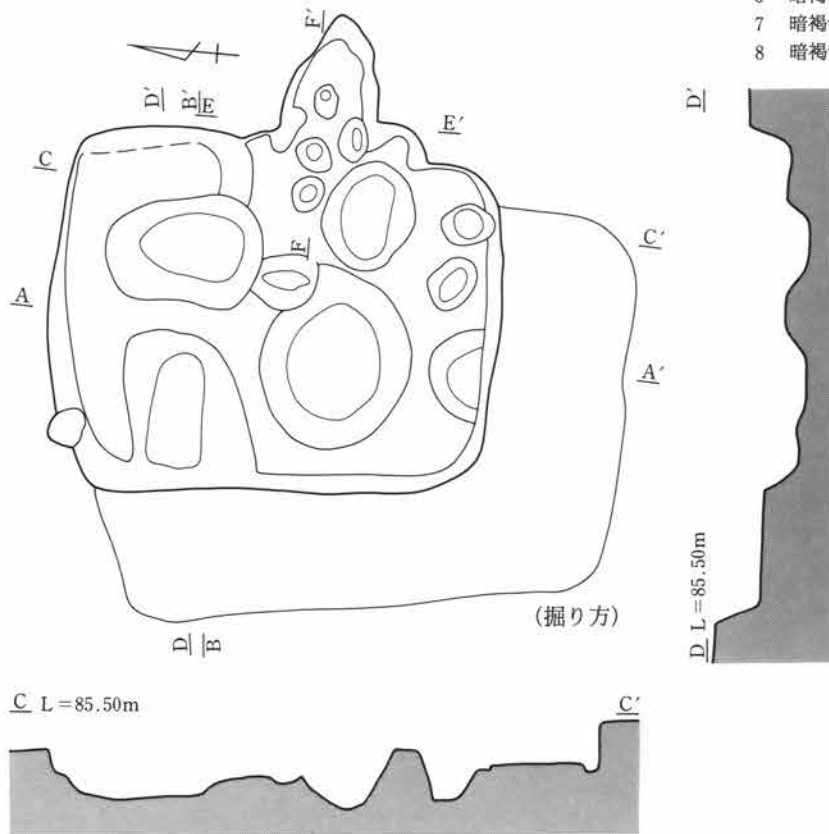
遺物出土状態 出土量は少ない。土器類では2・4・5が床面上、6がカマド内、3・7および1の墨書土器が埋没土から出土している。8~10の棒状礫は床面上で、8・10が南西壁、9が北東壁に接している。また、11・12の砥石は埋没土から出土している。貯蔵穴内からは土師器甕の小片および礫が1点出土している。カマド内にもほとんど遺物は認められず、6の甕も使用面下の掘り方から出土した破片である。

時期 出土遺物から9 C. 中葉に比定される。



39号住居

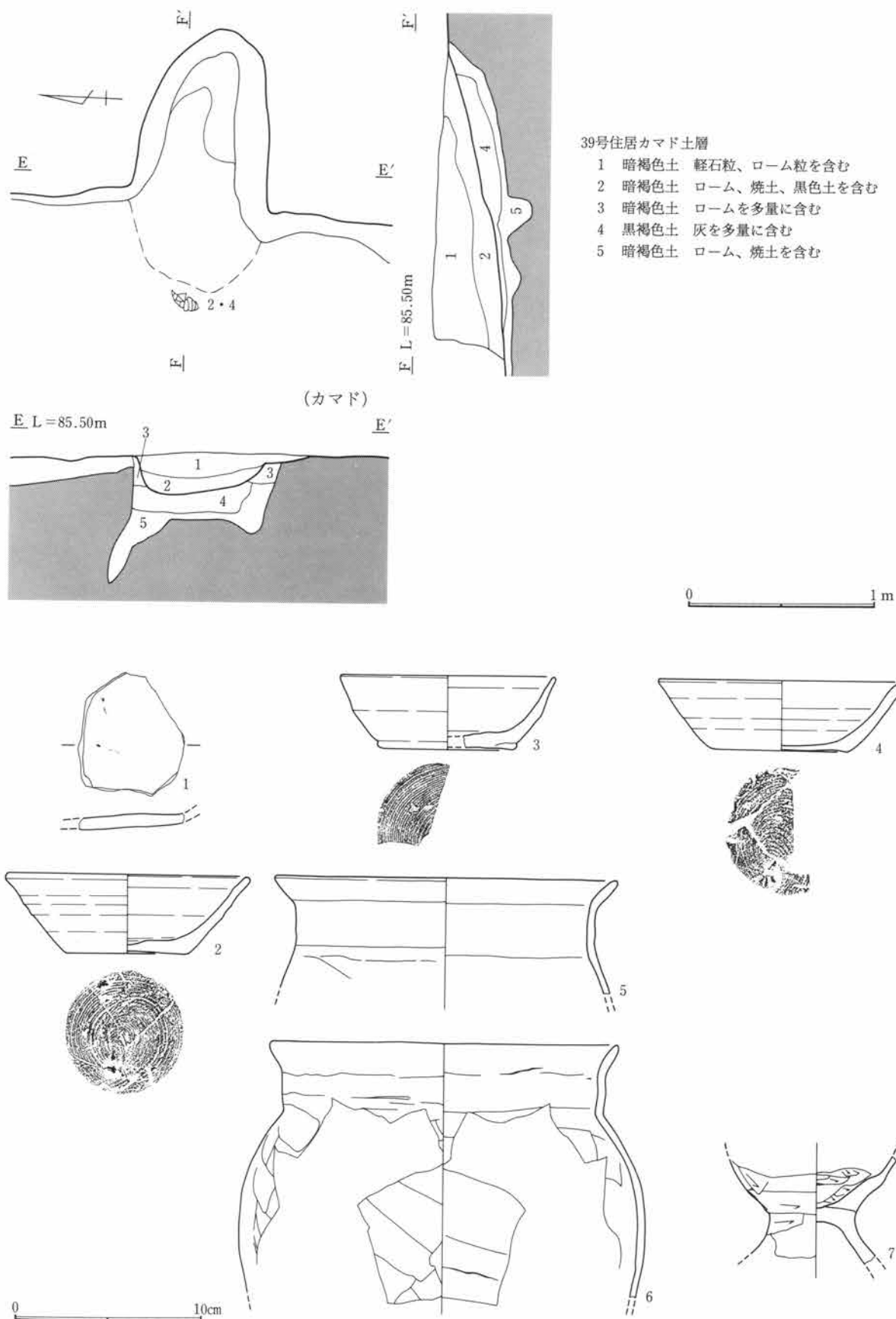
- 1 暗褐色土 白色軽石、焼土を少量含む
- 2 褐色土 暗褐色土、ロームを含む
- 3 褐色土 黒褐色土、焼土、ロームを含む
- 4 褐色土 ロームを多量に含む
- 5 暗褐色土 ローム、粘質土を含む貼り床
- 6 暗褐色土 ロームを多量に含む
- 7 暗褐色土 焼土、ローム、軽石粒を含む
- 8 暗褐色土 焼土、炭化物を含む



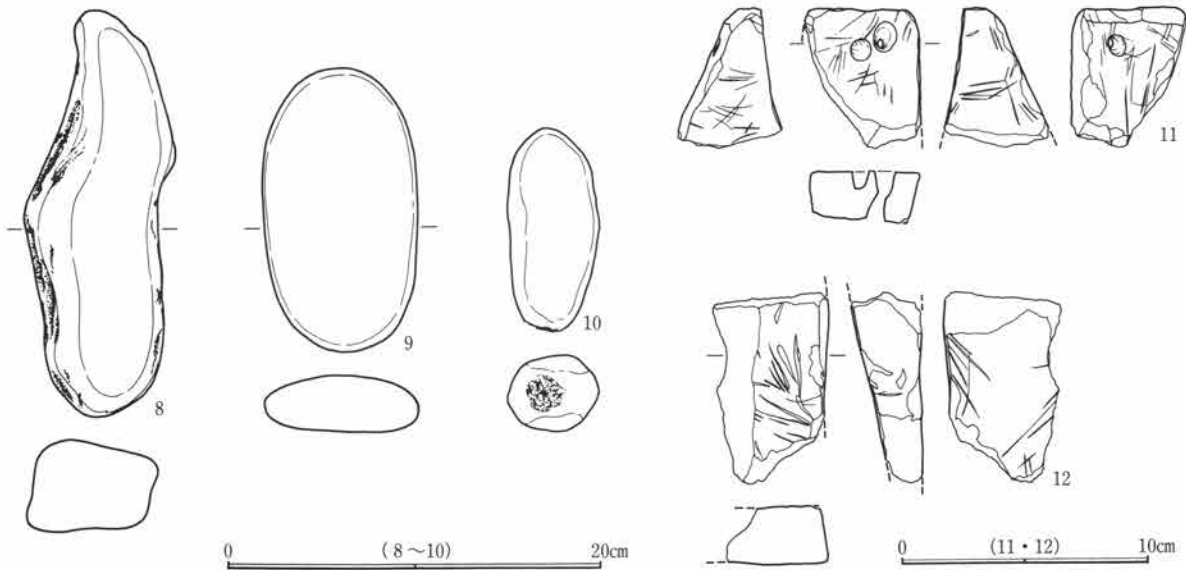
第126図 39号住居

0 2 m

II 発掘調査の記録



第127図 39号住居と出土遺物



第128図 39号住居出土遺物

40号住居 (第129・130図 P L. 48・119)

位置 Bk・I-20・21・22

重複 住居および土坑、溝状遺構との重複は認められないが、近年の耕作により、部分的に住居床面および壁を攪乱している。

主軸方向 N-79°-E 床面積 14.7㎡

形態 主軸方向の対辺に長軸をもつ長方形平面で、各隅とも丸みをもつ。対辺はほぼ平行、接する辺はほぼ垂直に交差し、平面形状の歪みはあまりない。

規模 3.6m×4.8m

カマド 東壁中央やや南寄りに設置される。天井部、煙道とも残存せず、燃焼部である下部のみ確認している。さらにカマド構築に伴うような粘土や礫材なども検出していない。また、カマド左袖部には耕作によるとみられる攪乱を受けている。カマド規模は焚口部70cm、壁掘り込み70cmでゆるやかに立ち上がる。掘り方は一回り大きく掘り込み、埋め戻した後使用面を構築している。掘り方調査でもカマド構築に伴うような袖石をはじめとした設置痕などは認められていない。焚口付近は張り床同様に硬化した面が認められるが、端部にかけてはやや軟弱な面となっている。なお、焚口周辺には焼土、灰の散布が認められている。袖部は左袖が不明瞭ながら一部掘り残しがある。

内部施設 住居南東隅に径40cm、深さ40cmの不整形円形を呈する貯蔵穴が存在する。さらに、これに接して径30cm、深さ20cmの小穴が認められる。この小穴については柱穴の可能性はあるが、床面上では他に検出し得ていない。しかし、掘り方調査時に南西隅に径50cm、深さ15cmの小穴がみられ、これが南東隅の小穴に対応する可能性がある。この2穴間は2.5mの間隔をもつが、掘り方においても他に検出していない。また、壁下に沿って幅20cm、深さ10cmの周溝が確認されている。この周溝は全周せず、南東隅を中心として存在しない部分がある。

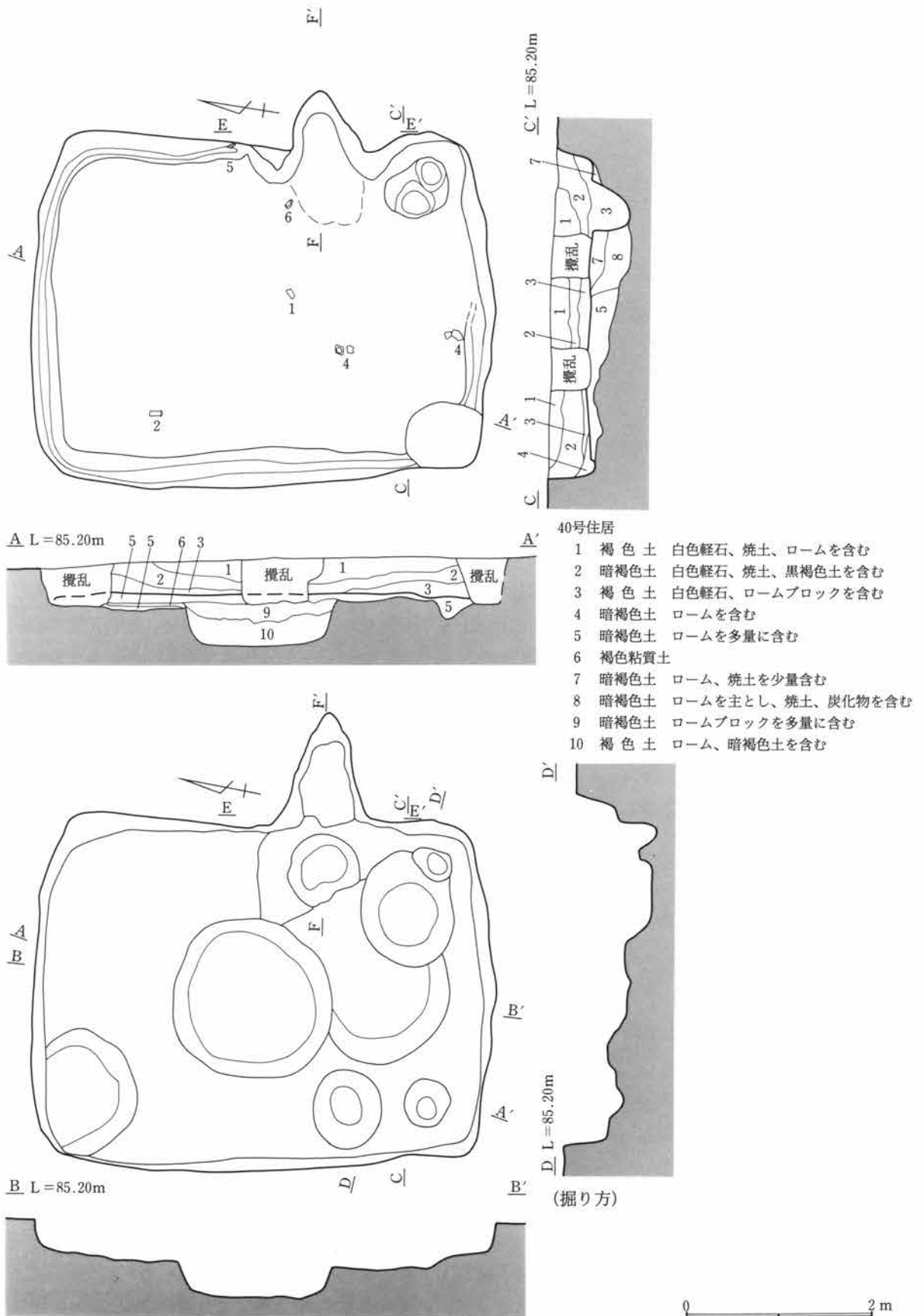
床 ロームを主とした暗褐色土により張り床が形成される。堅くしまった面が検出されているが、とくに住居中央部分は良好な床面となっている。床は多少の起伏をもつものの、ほぼ水平な面となっている。

掘り方 住居中央部に径1.6m、深さ40cmの円形の掘り込みをもち、周辺部は床面下10cm程度不規則に掘り下げられる他、数カ所皿状の凹みが認められる。

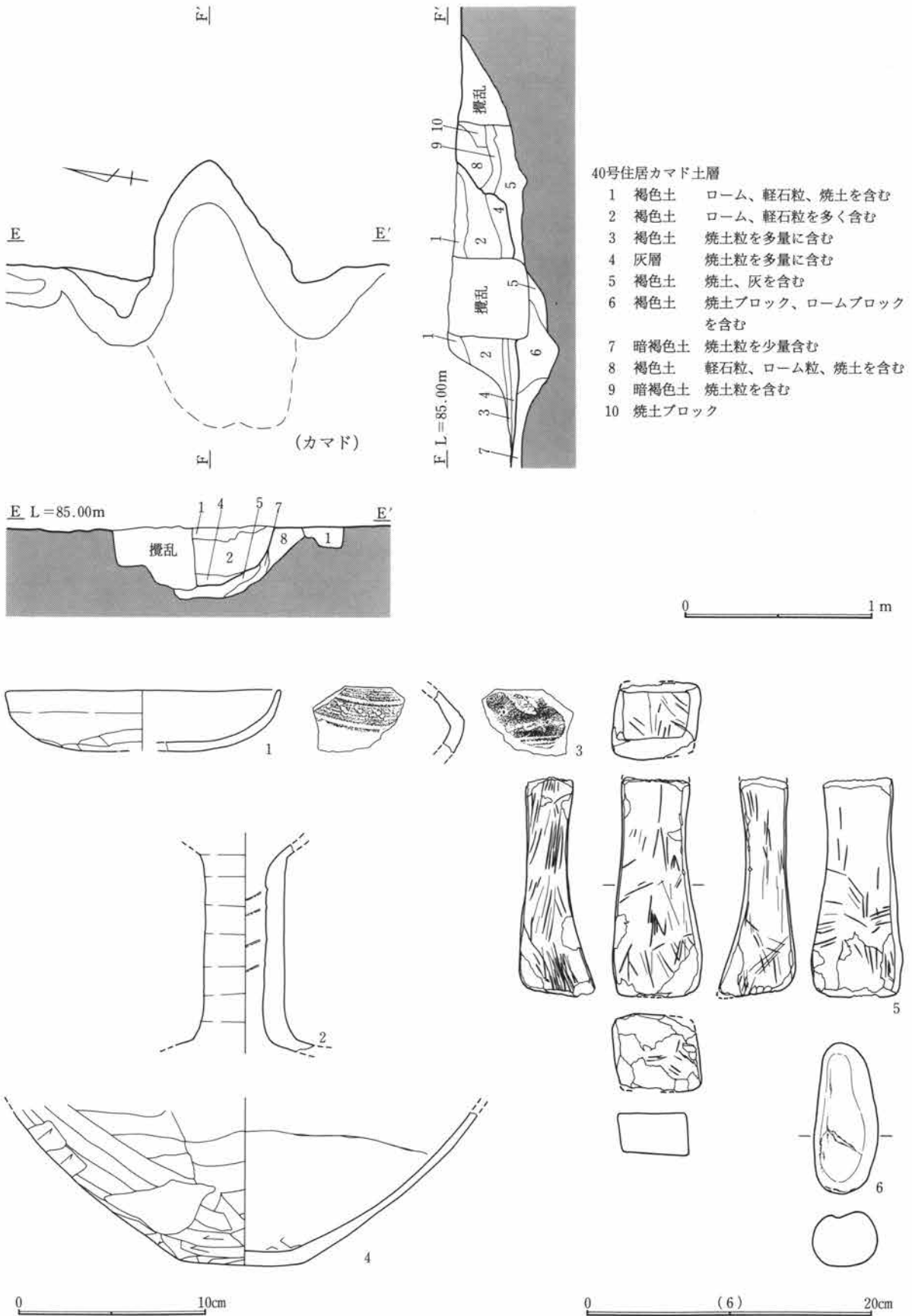
遺物出土状態 遺物量は少ない。土器類では1・2・4が床面上で出土した他、3が埋没土から検出されている。石製品は5の砥石が東壁周溝内、6の棒状礫がカマド前床面上から出土している。

時期 出土遺物から9C.前半に比定される。

II 発掘調査の記録



第129図 40号住居



第130図 40号住居と出土遺物

II 発掘調査の記録

41号住居 (第131図 P.L. 49・119)

位置 Bk・1-22・23

重複 北東隅で40号住居と重複する。平面および土層観察から41号住居が時間的に古い。この他、近年の耕作溝がほぼ50cm間隔で斜走している。この耕作溝による攪乱は住居全体の約二分の一におよぶ。

主軸方向 N-85°-E 床面積 (9.4㎡)

形態 主軸方向の対辺に長軸をもつ長方形で、隅は丸みをもつ。北東隅は40号住居が重複するため不明であるが、南東隅はやや張り出す形態となる。

規模 2.8m×3.8m

カマド 東壁中央やや南寄りに設置される。耕作溝によりカマド自体は3分の1強が攪乱されているため、遺存状況は不良である。天井部や煙道について

も残存せず、両袖もほぼ遺失し、焚口を中心とした燃烧部の確認にとどまった。カマド構築にともなう粘土、礫材についても検出していない。しかし、掘り方には左袖部分に小穴が認められ、袖石の設置痕とも考えられる。

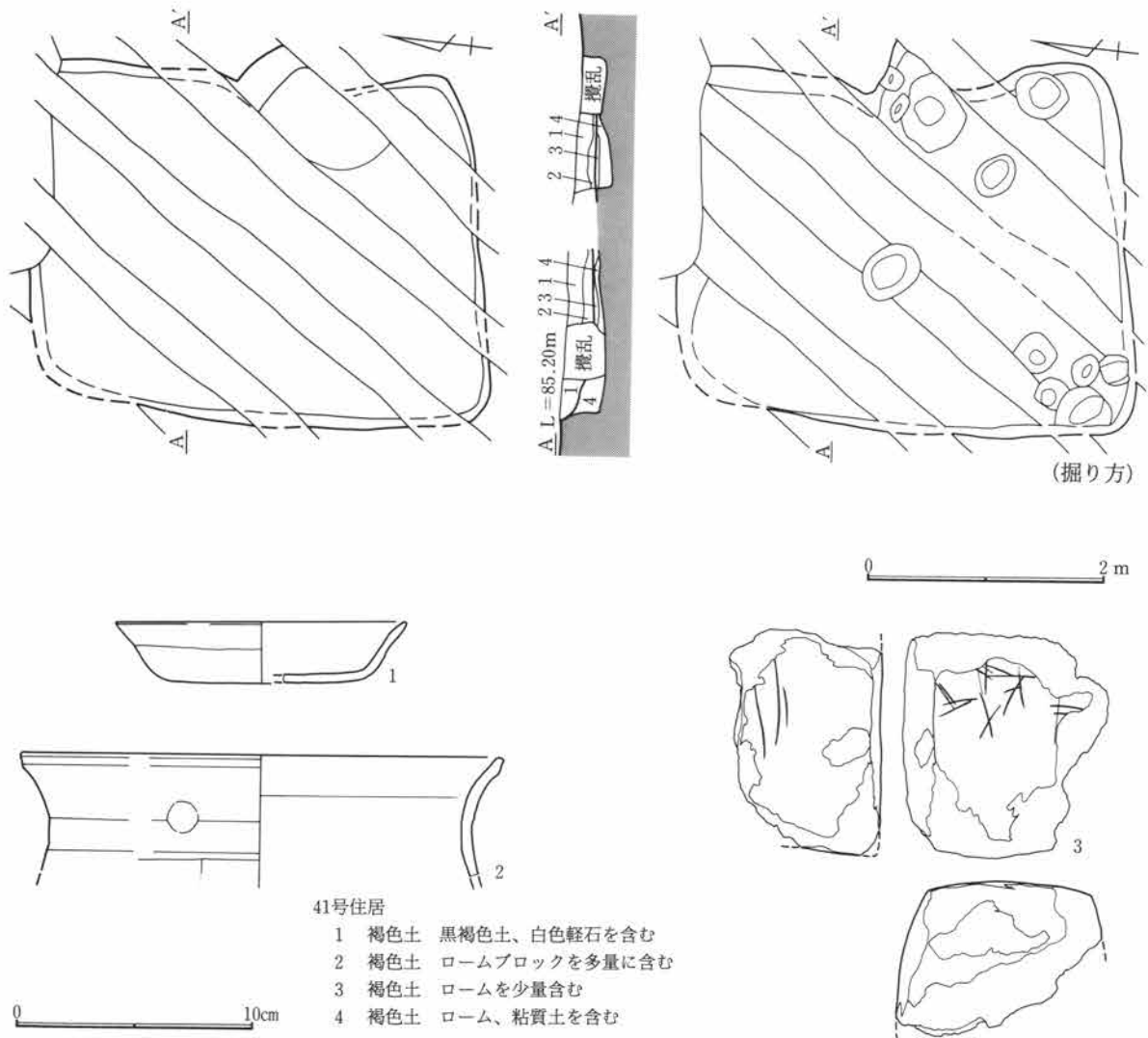
内部施設 攪乱の影響が大きいので、周溝および柱穴は検出していない。

床 ロームを含む褐色土による張り床が施される。残存部分では堅く良好な面が認められている。

掘り方 床面下15cm程掘り下げられ、褐色土を主として埋め戻される。

遺物出土状態 いずれも埋没土中から出土している。

時期 出土遺物から9 C.前半に比定される。



41号住居

- 1 褐色土 黒褐色土、白色軽石を含む
- 2 褐色土 ロームブロックを多量に含む
- 3 褐色土 ロームを少量含む
- 4 褐色土 ローム、粘質土を含む

第131図 41号住居と出土遺物

42号住居 (第132図 P.L. 49・119)

位置 Bm-22・23

重複 住居および土坑との重複はないが、耕作溝が住居を斜走する。この耕作溝による攪乱は住居全体のおよそ4割を占めている。

主軸方向 N-76°-E 床面積 (7.8m²)

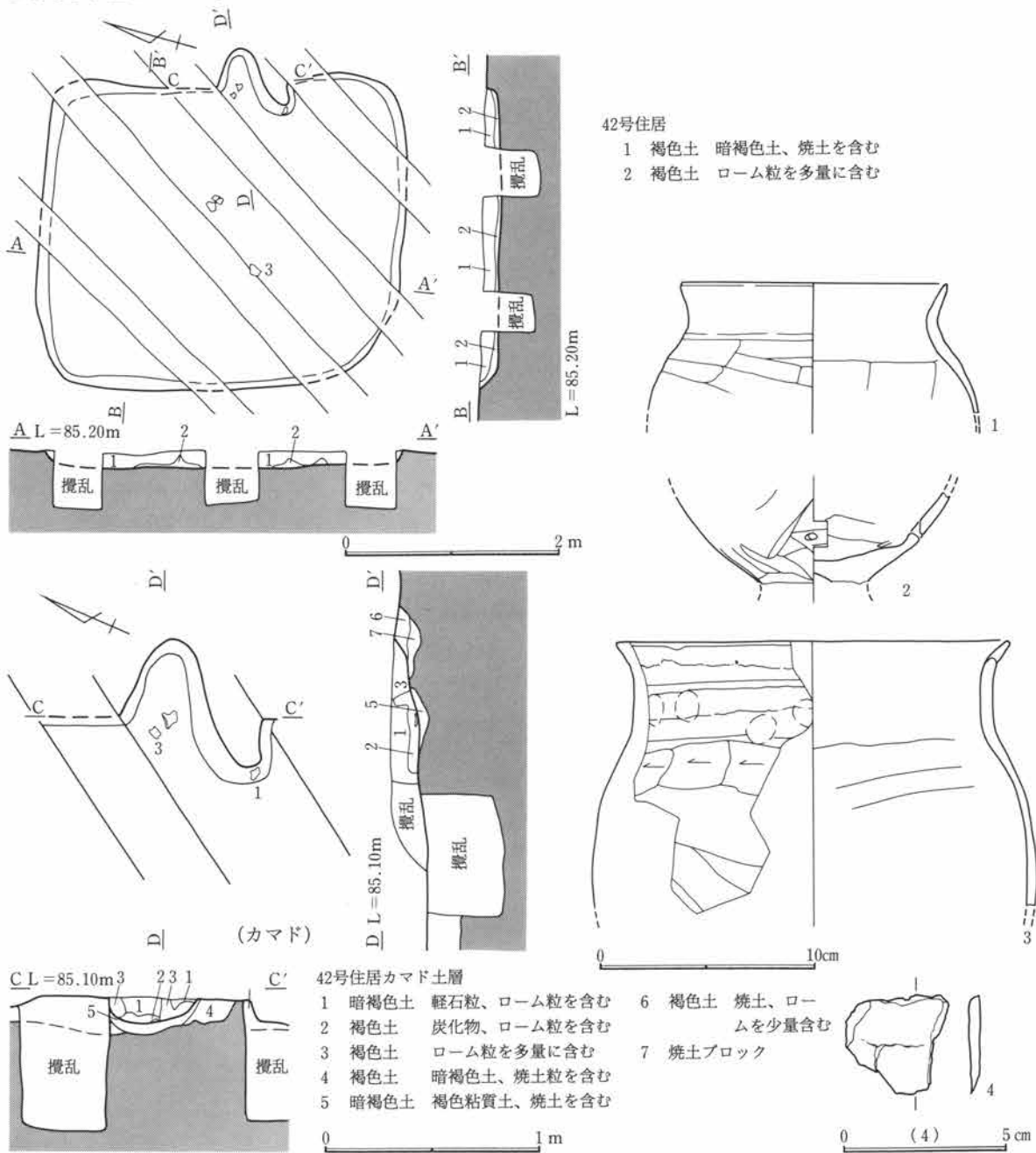
形態 主軸方向の対辺に長軸をもつ長方形であるが、短軸との差は少ない。各隅は丸みを持ち、各辺ともあまり歪みはない。

規模 2.7m×3.3m

カマド 東壁中央に設置される。耕作溝により左袖部が攪乱をうけ遺存しない。規模は焚口約40cm、壁掘り込み50cmで、右袖部は地山掘り残しとする。天井部、煙道は残存せず、構築にともなう粘土や礫材も検出していない。掘り方は使用面から10cm程度不規則に掘り下げられている。

内部施設 周溝、柱穴とも認められない。

床 地山を床面とするが全体的に軟弱である。



II 発掘調査の記録

掘り方 カマド部のみ掘り方が存在し、居住部については認められない。

遺物出土状態 出土遺物は少ない。1～3の土器類はカマド内、4の鉄製品は埋没土から検出している。

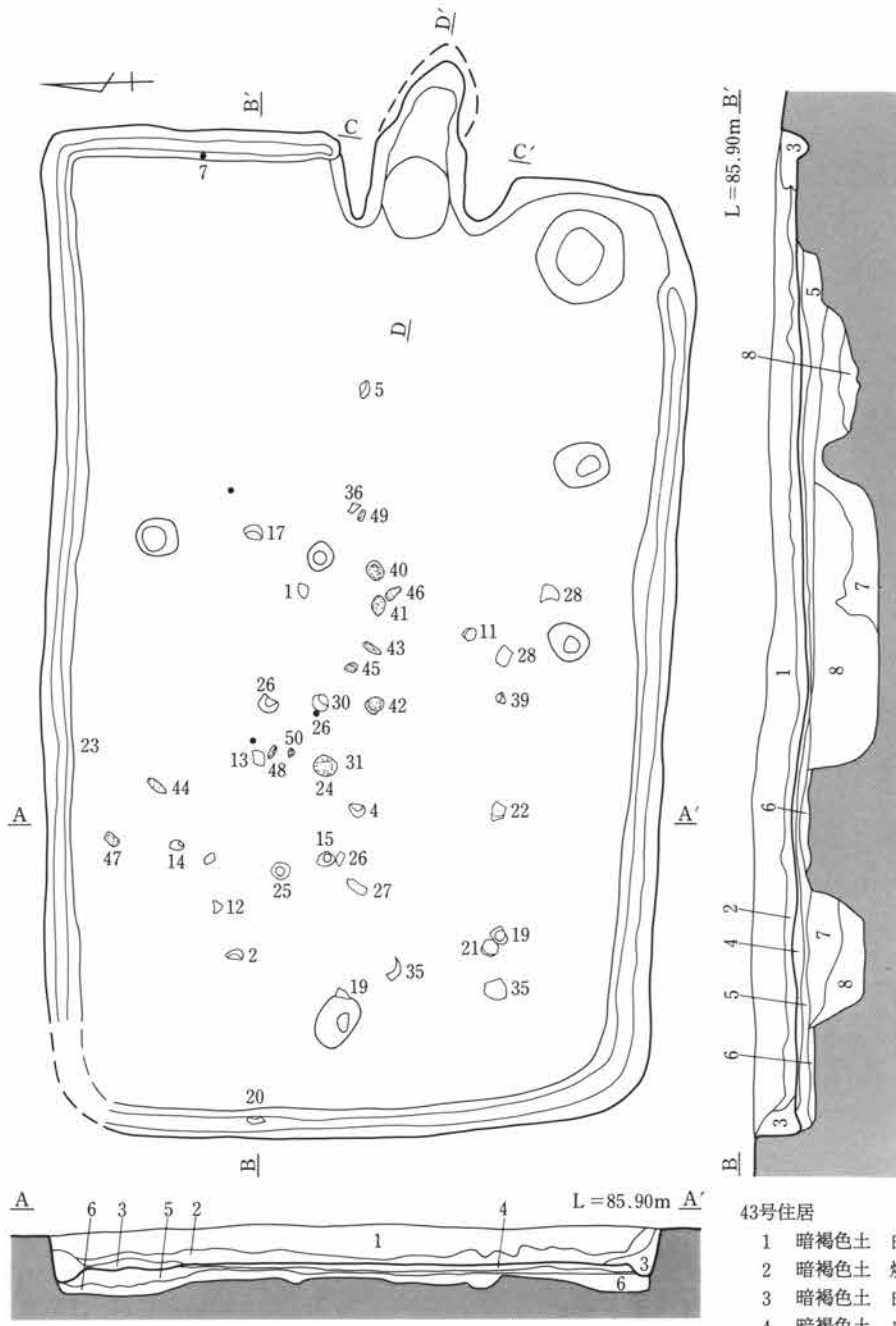
時期 出土遺物から9C、中葉に比定される。

43号住居 (第133～139図 P.L. 50・119～121)

位置 B a・b-10・11

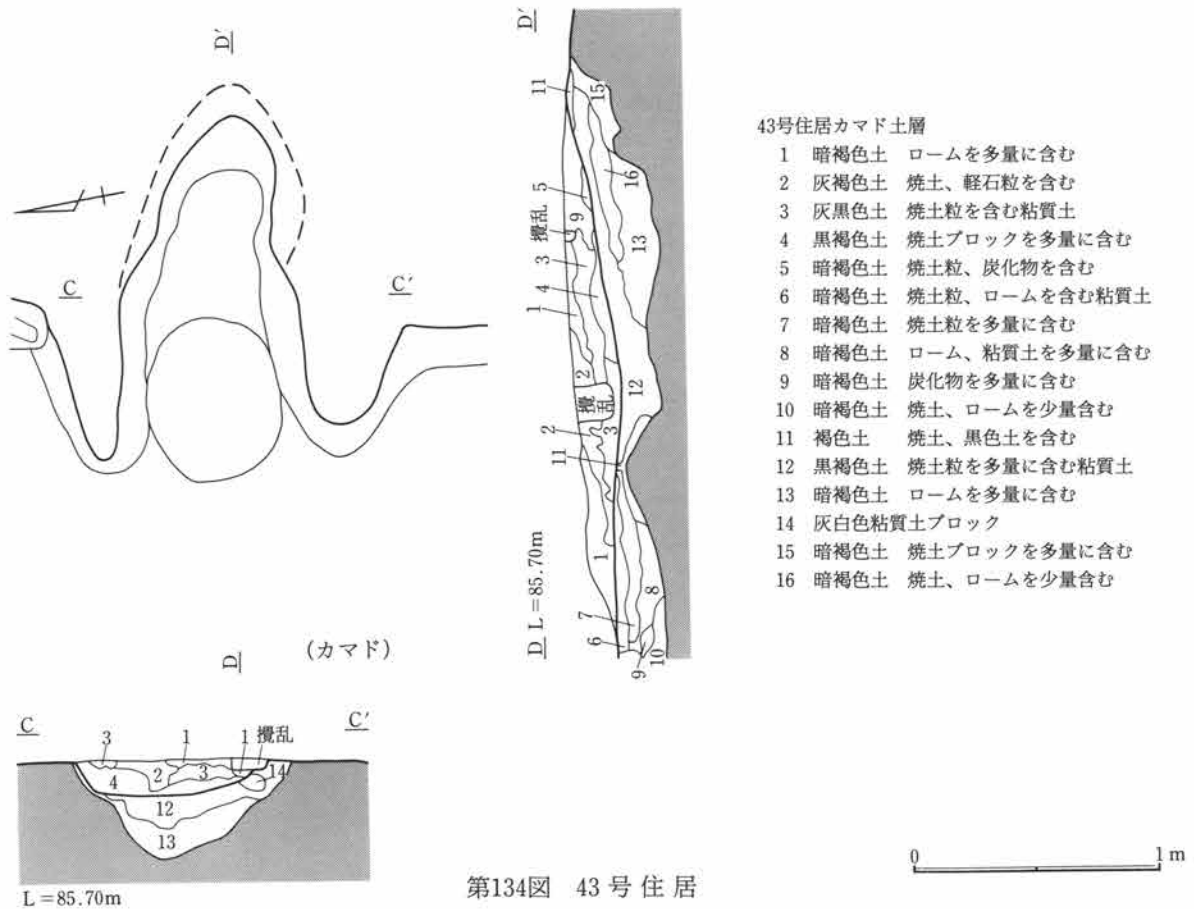
重複 北西隅に耕作溝による攪乱をうけるが、住居および土坑など他遺構との重複は認められない。

主軸方向 N-91°-E **床面積** 35.4m²



- 43号住居
- 1 暗褐色土 白色軽石、焼土、ロームを含む
 - 2 暗褐色土 焼土、褐色粘質土、軽石を含む
 - 3 暗褐色土 白色軽石、焼土を少量含む
 - 4 暗褐色土 ロームを多量に含む
 - 5 暗褐色土 ローム、黒褐色土を含む
 - 6 暗褐色土 ロームを多量に含む
 - 7 暗褐色土 ロームブロックを含む
 - 8 暗褐色土 ロームブロック、黒色土を含む

第133図 43号住居



形態 主軸方向に長軸をもつ長方形平面を呈する。長軸：短軸比が1.6：1と差をもち、床面積も今回調査した住居の中で最も大きい。また、短辺側は長さが一致せず、カマドが設置される東辺が西辺に比べやや長い。各隅は丸みをもち、各辺はほぼ直線的に接している。

規模 5.1m×8.0m

カマド 東壁中央わずかに南寄りに設置される。両袖は地山掘り残して60cm程度住居内に張り出す。規模は焚口80cm、壁掘り込み140cmである。天井部および煙道とも残存せず、燃焼部のみ検出している。また、構築に用いたとみられる粘土や礫材についても出土していない。掘り方は、使用面底面を中心に20cm程度不規則な土坑状に掘り下げ、埋め戻した後カマド面を構築している。燃焼部には焼土を含む灰が5cm程度の層厚で堆積している。

内部施設 南東隅に径70cm、深さ40cmの貯蔵穴が存在する。また住居壁下に沿って幅15cm、深さ10cmの

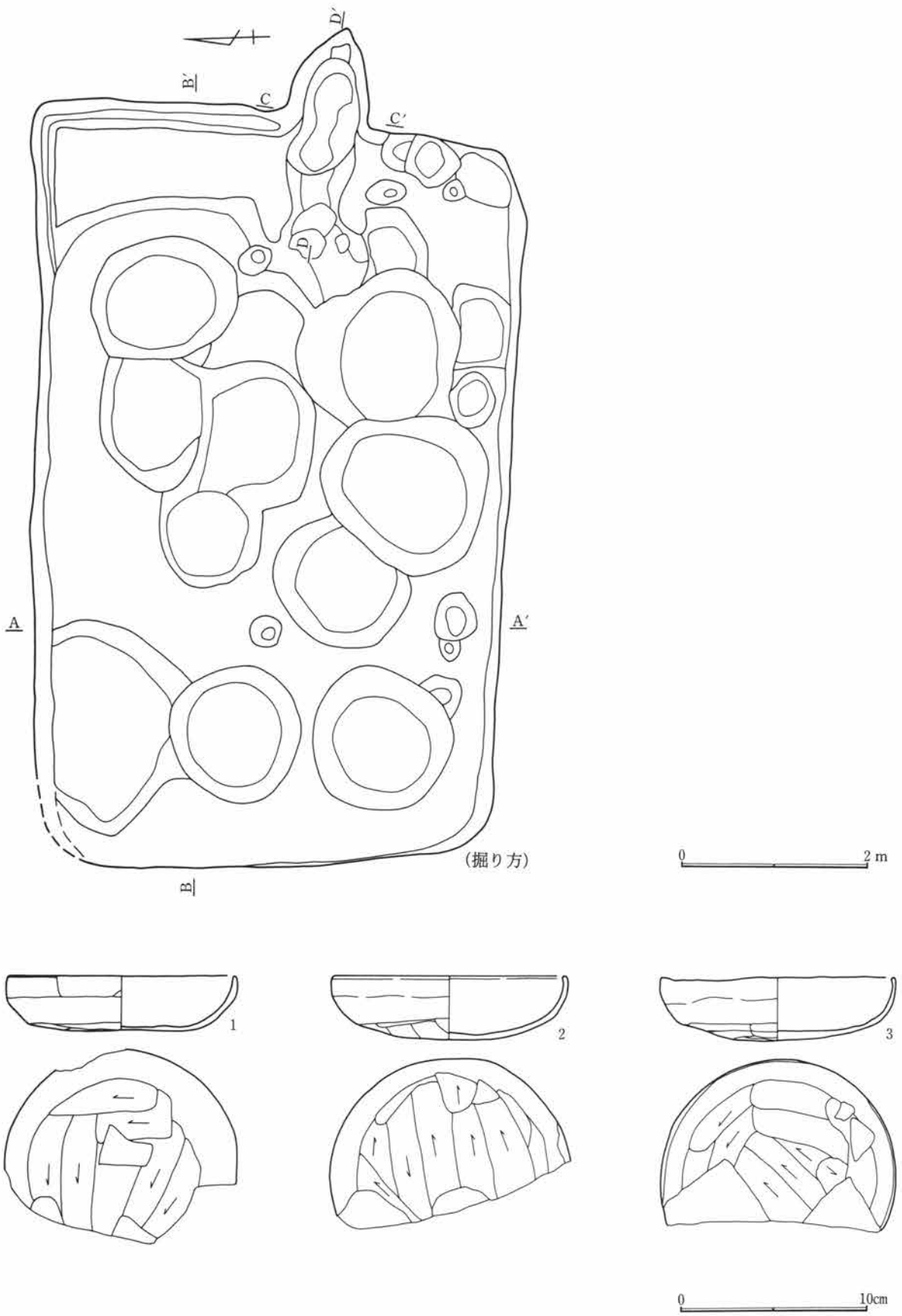
周溝が巡るが、全周はせず貯蔵穴の位置する南東隅部は途切れている。この他床面上では径30cm～40cm程度の小穴が4カ所で認められている。柱穴と考えるには位置が不規則であり、上屋施設に関連する可能性もあろうが確定出来ない。

床 ロームを多量に含む暗褐色土による張り床が施される。床面は掘り方に沿って多少起伏が認められるが、この起伏は住居埋没後の土圧により生じたものとみられ、構築時は水平面が保たれていたと考えられる。

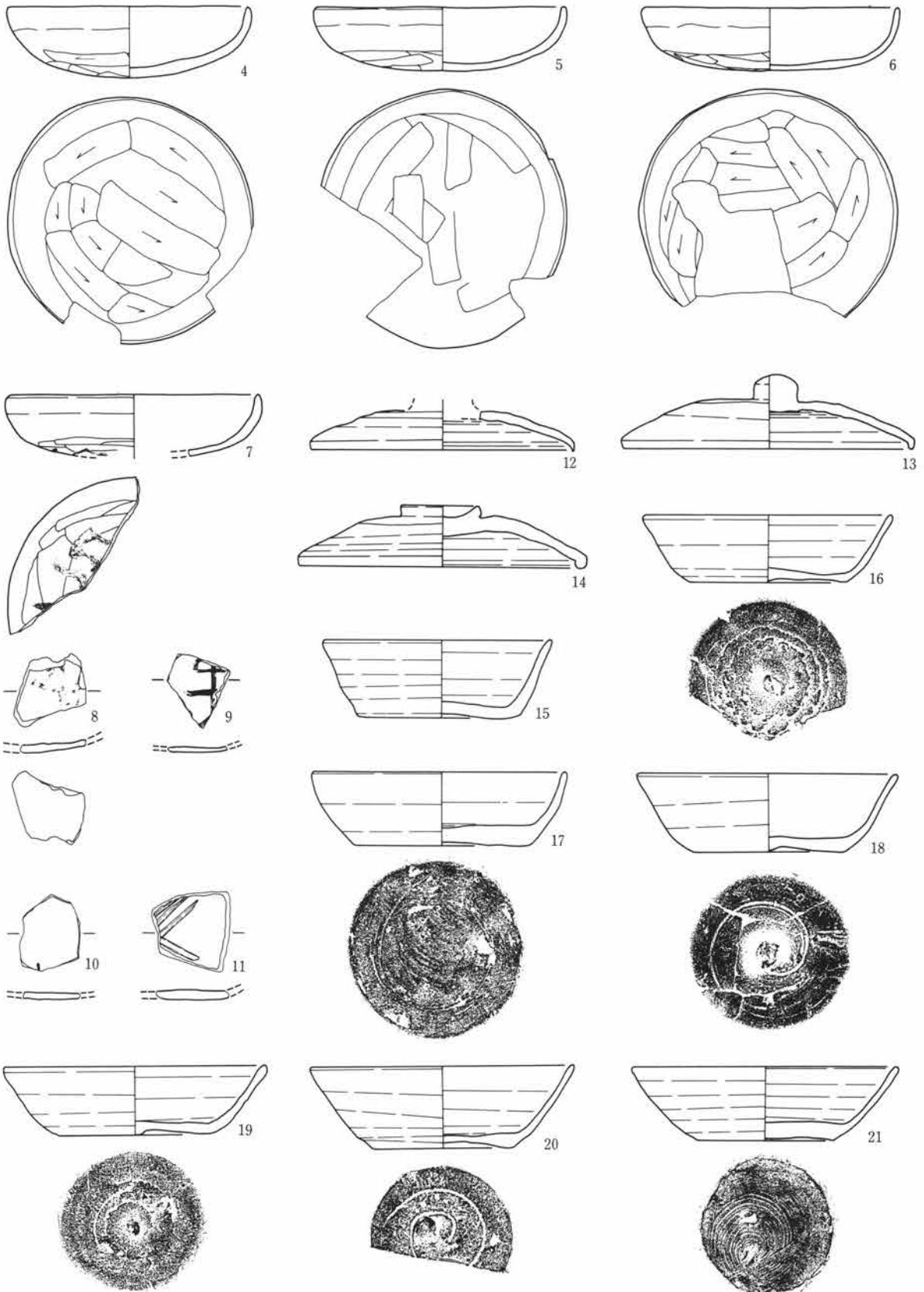
掘り方 径150cm～200cm、床下深さ30cm～50cmの土坑状の掘り込みがそれぞれ接して住居全域にみられ、ロームブロックを含む暗褐色土により埋め戻される。なお、東壁側については土坑状の掘り込みはみられず、掘り方も浅い。

遺物出土状態 遺物量が多いが、床面出土例は少ない。そのほとんどが、住居中央部分を中心に床面から10cm～20cm程度上位で出土している。床面出土遺

II 発掘調査の記録

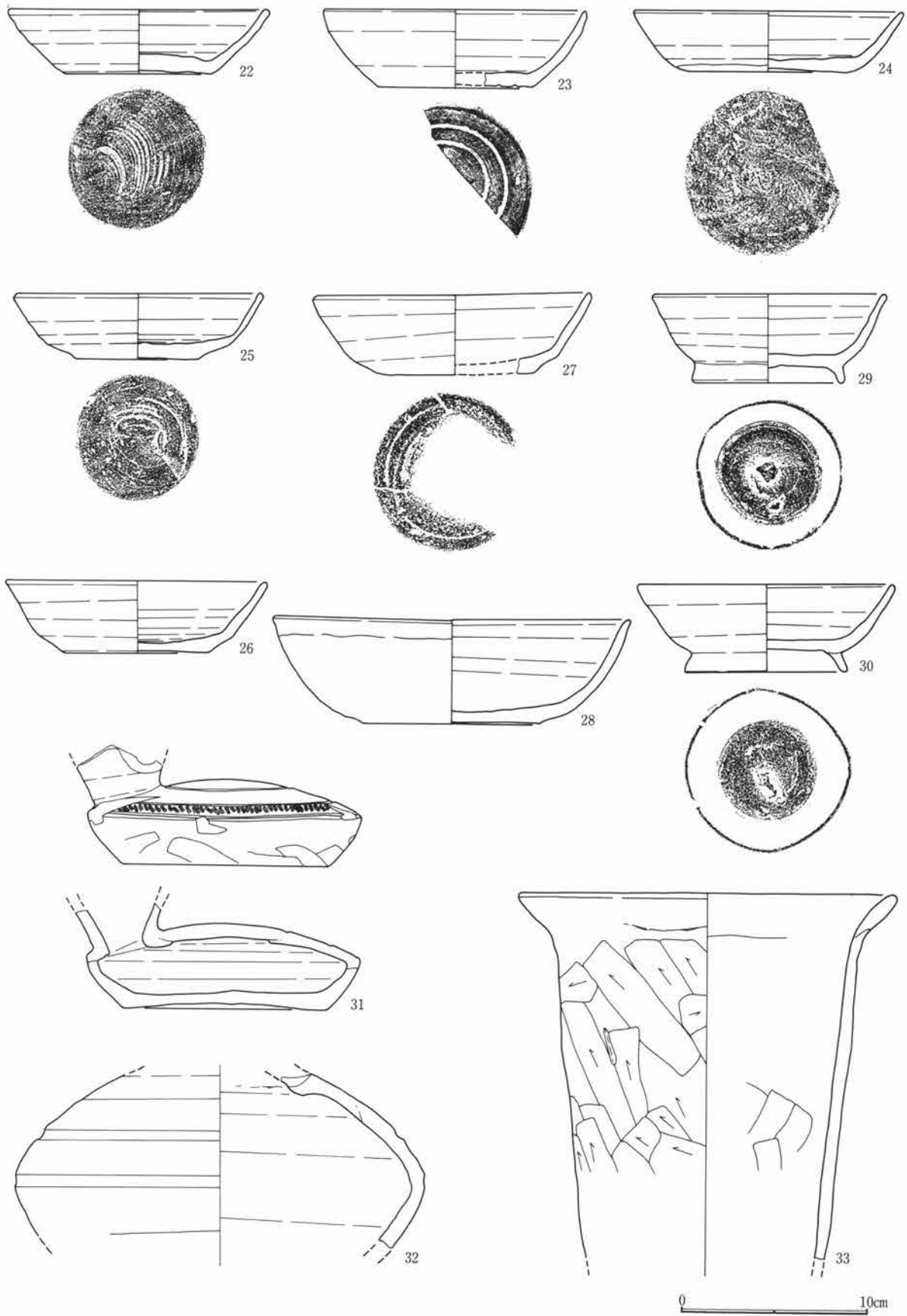


第135図 43号住居と出土遺物

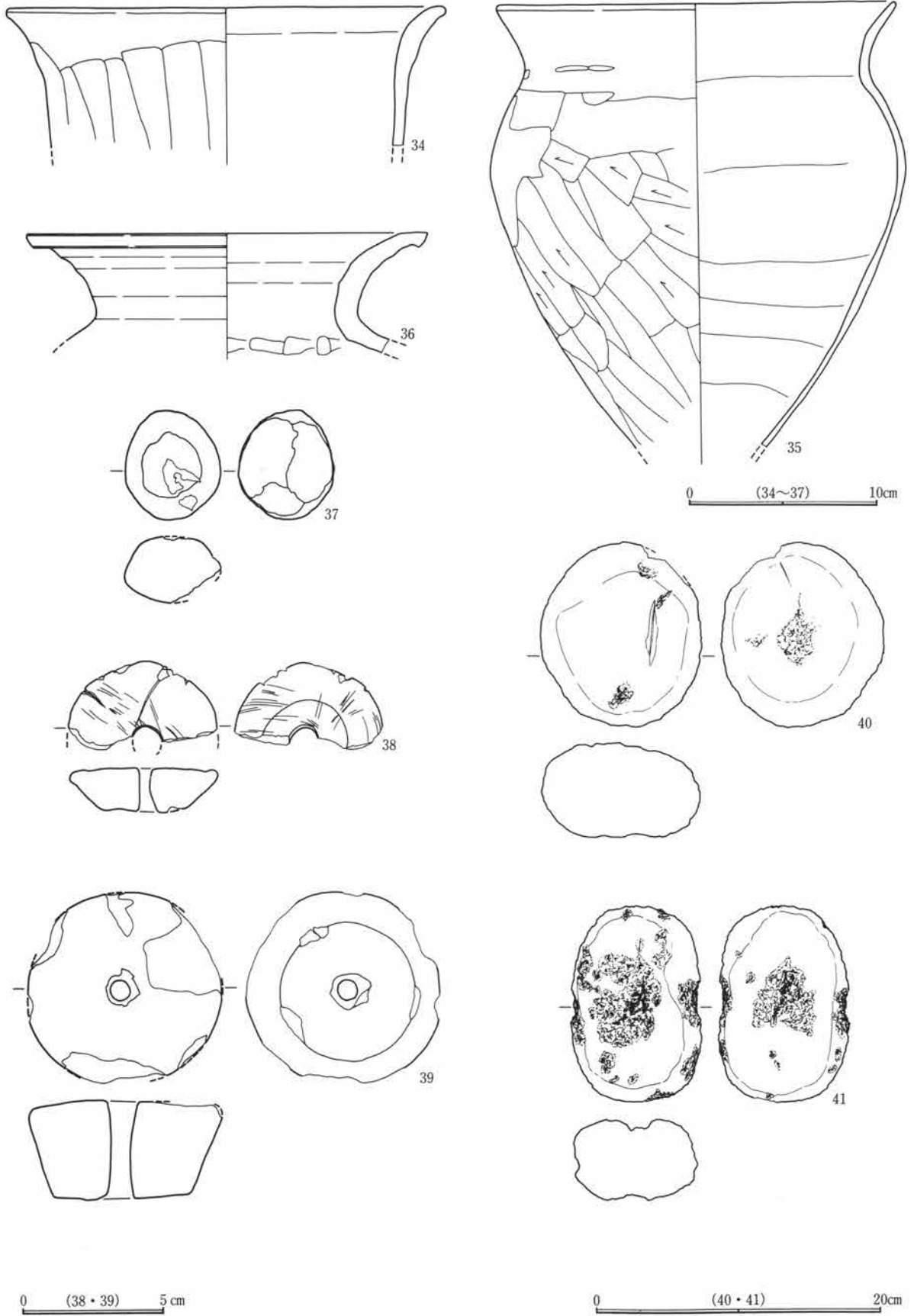


第136図 43号住居出土遺物

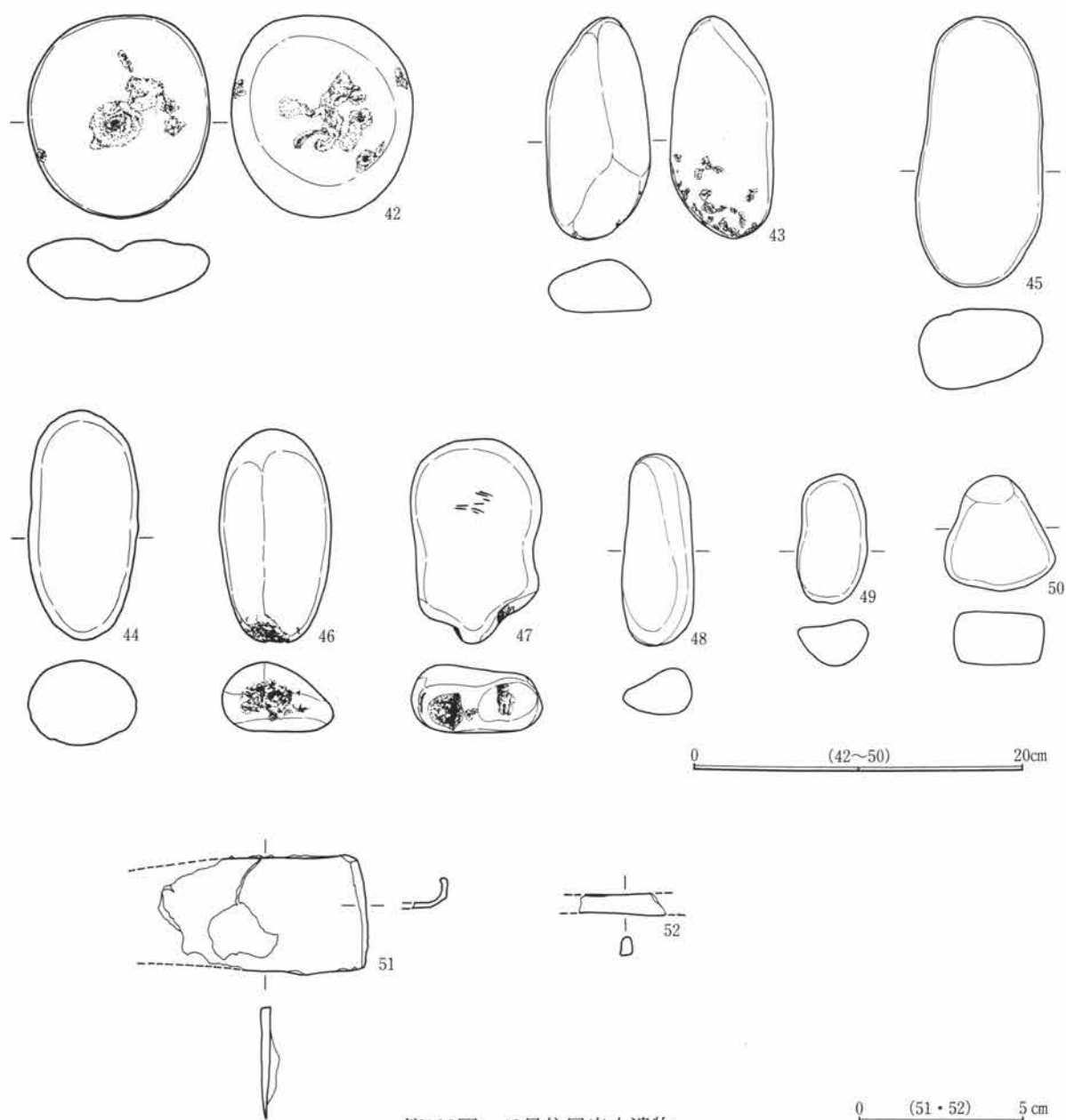
II 発掘調査の記録



第137図 43号住居出土遺物



第138図 43号住居出土遺物



第139図 43号住居出土遺物

物としては、26の須恵器杯の他、40・41・48・50の石製品がある。土器類のなかには31の平瓶、32の長頸壺の他、7～10の墨書土器や11の線刻土器、38・39の軽石製紡錘車および37の未製品、51の鎌、53の刀子などが含まれる。

時期 出土遺物から8 C. 中葉に比定される。

44号住居 (第140～142図 P L. 51・121)

位置 Ax・y・Ba—8・9・10

重複 北壁部で20号住居と重複する。平面および断面観察から20号住居が新しく、44号住居が古い。そ

のほか土坑など他遺構との重複はない。なお部分的に耕作による攪乱を受けている。

主軸方向 N—96°—E **床面積** (34.2m²)

形態 ほぼ正方形平面を呈する。各隅は丸みを持ち各辺は直線的で、あまり歪みはない。今回の調査住居のなかでは大型であり、床面積においても最も大きい43号住居に継ぐ面積をもっている。

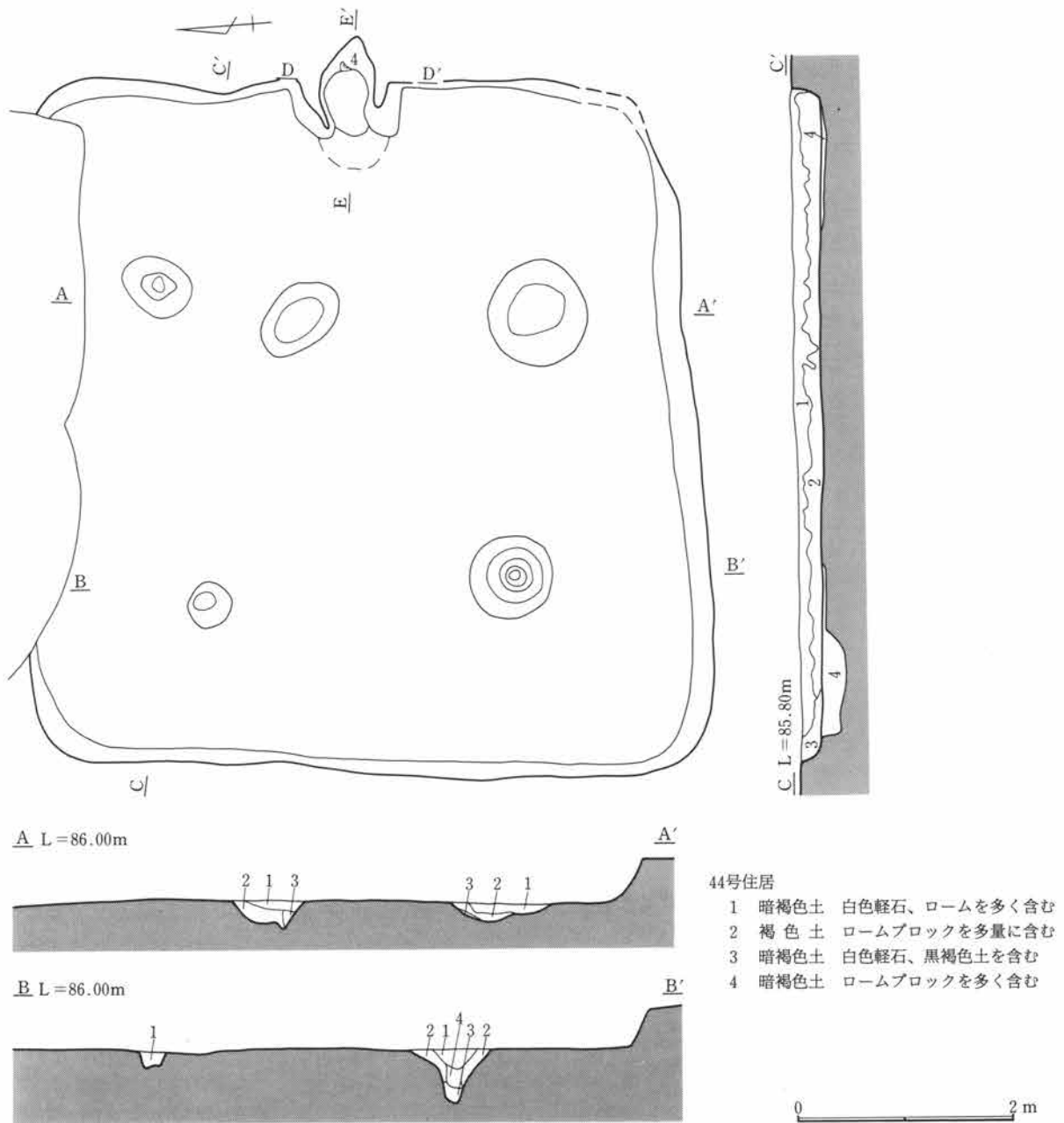
規模 6.2m×6.3m

カマド 東壁中央に設置される。天井部および煙道は残存せず、燃焼部であるカマド下部のみが確認さ

れた。両袖は暗褐色土・黒褐色土などにより形成され、礫材などは用いられていない。両袖とも幅20cmで、50cm程度住居内へ張り出す。平面形は燃烧部がふくらみ袖部がすぼまる形態をもち、規模は焚口40cm、燃烧部50cm、壁掘り込み50cmを計測する。壁体は燃烧による火熱を受け赤化し、硬化した面が形成されている。この硬化面は壁部のみで認められ、底面には及ばない。なお、カマド底面には灰層が3cm程度の層厚で検出されるとともに、焚口部前面にも

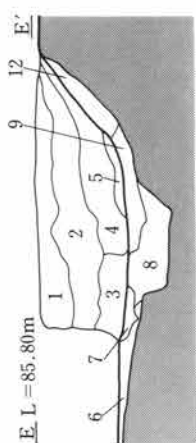
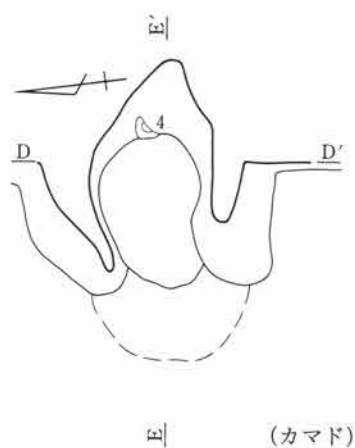
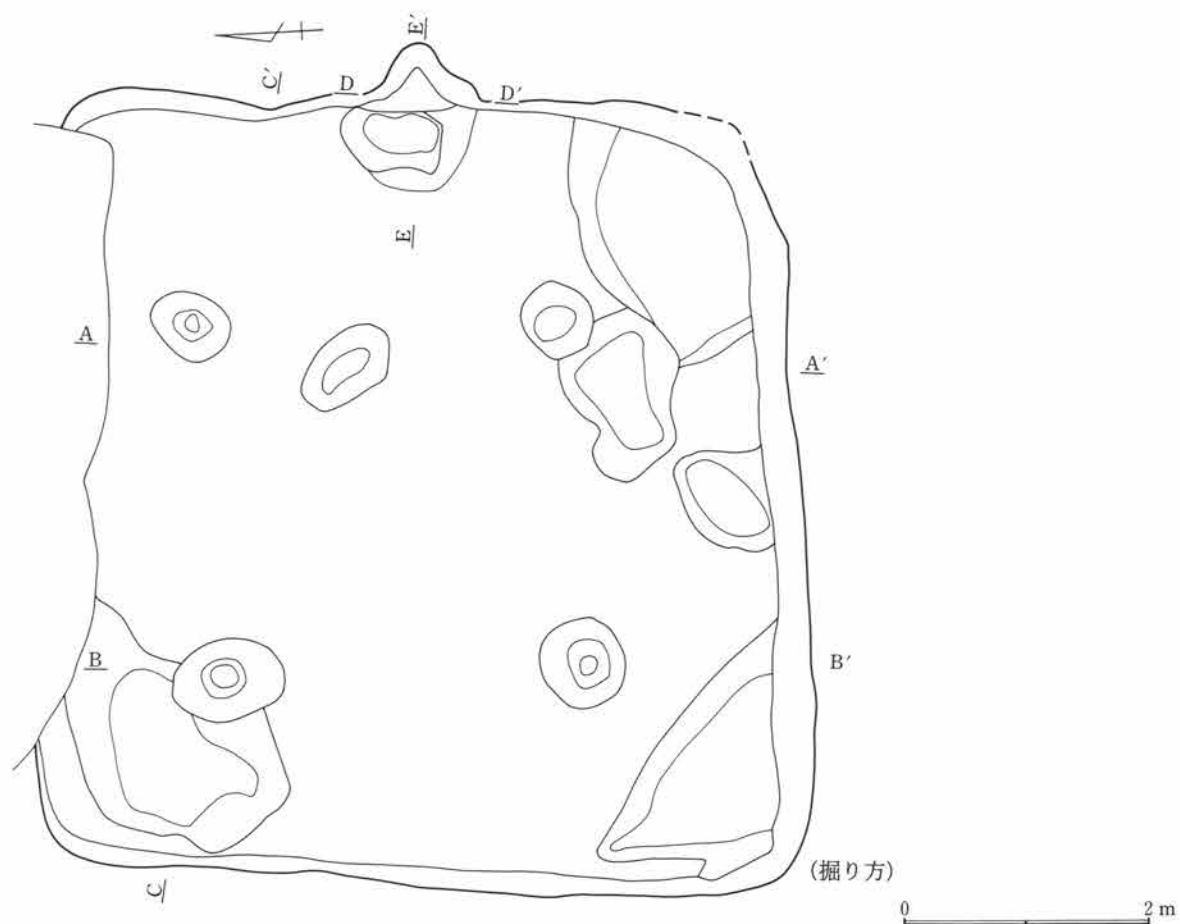
灰の散布が認められる。使用面下には掘り方をもち、燃烧部下に幅40cm、深さ20cm前後の掘り込みがあり、ロームブロックを混入する暗褐色土により埋め戻される。なお、左壁に一部攪乱がみられる。

内部施設 住居対角線上に柱穴が4カ所確認された。柱穴配置は住居平面形に合同したもので、方形配置としている。柱穴間は270cmを計測し、位置は住居中央部にあたり、各壁からほぼ150cmの間隔で設置されている。柱穴は円形で規模は径40cm～70cm、深



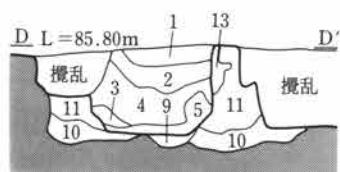
第140図 44号住居

II 発掘調査の記録

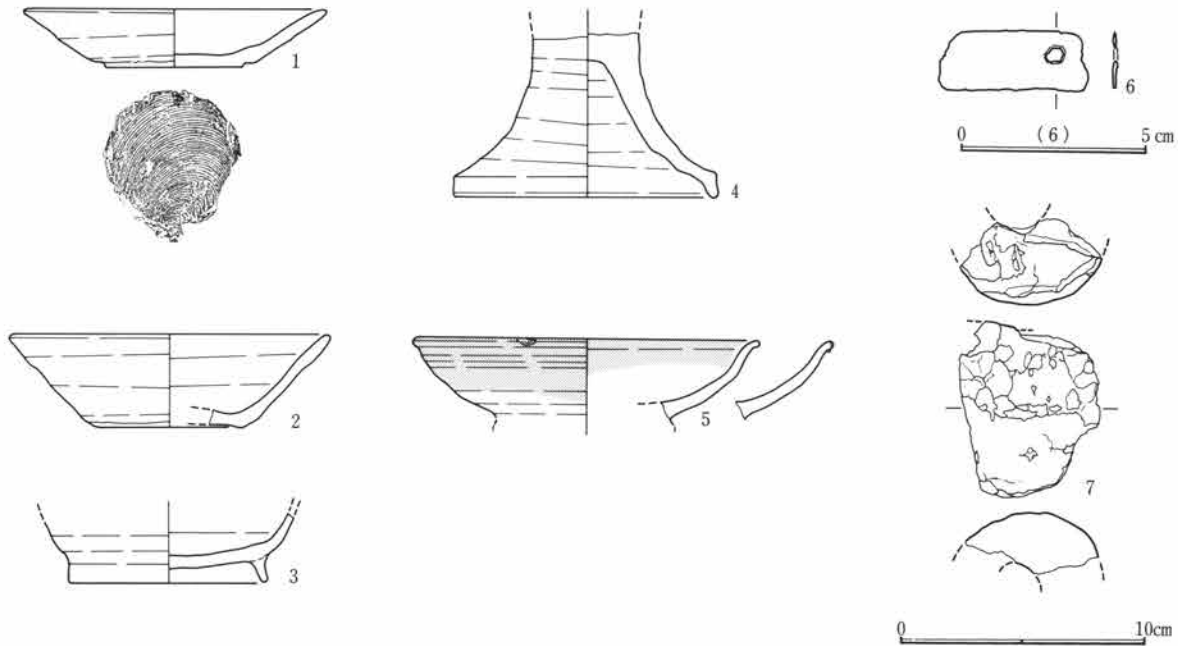


44号住居カマド土層

- | | | |
|----|------|---------------|
| 1 | 暗褐色土 | 軽石粒、焼土、ロームを含む |
| 2 | 黒褐色土 | 焼土、軽石粒、灰を含む |
| 3 | 暗褐色土 | 焼土粒、ロームを含む |
| 4 | 暗褐色土 | 焼土ブロックを多量に含む |
| 5 | 灰黒色土 | 灰を多量に含む |
| 6 | 褐色土 | 軽石粒、焼土を含む |
| 7 | 黒褐色土 | 焼土、炭化物、ロームを含む |
| 8 | 暗褐色土 | ロームブロックを多量に含む |
| 9 | 暗褐色土 | ローム、焼土を多量に含む |
| 10 | 暗褐色土 | ロームを多量に含む |
| 11 | 黒褐色土 | ローム、軽石粒を含む |
| 12 | 黒褐色土 | 焼土を多量に含む |
| 13 | 暗褐色土 | 焼土ブロックを多量に含む |



第141図 44号住居



第142図 44号住居出土遺物

さ平均50cmである。柱材は残存していない。しかし南西隅の柱穴では断面調査により、径15cm程度の柱痕とみられる土層が観察されている。

また、東辺柱穴間に径70cm、深さ20cmの小穴が検出されているが、この小穴が柱穴構造に関連するものかは不明である。そのほか周溝、貯蔵穴などの施設は確認されていない。

床 この住居は縁辺部に掘り方をもち、中央部は地山を床面としている。掘り方部分にはロームブロックを多量に含む暗褐色土により張り床が施される。張り床部および地山を床とする部分を含めほぼ水平であり、堅く良好な面が形成されている。

掘り方 住居各隅を中心として幅200cm×100cm、深さ20cm程度の不整形な土坑状の掘り込みが加えられる。北東隅については20号住居と重複している関係から不明瞭となっている。中央部は床の項で説明したが、地山のローム面をそのまま使用面としており、掘り方はもたない。この範囲はちょうど4柱穴が配置される範囲に一致したものと見える。

遺物出土状態 住居規模は大きいものの遺物出土量は少ない。また完形土器も認められず、出土土器は破片を主としている。さらに床面上から出土する遺

物はほとんどみられず、4がカマド使用面に接して出土した以外、他例はいずれも埋没土から検出されている。この中には6の鉄製品(器種不明)、7の羽口片が含まれ、さらに少量ながら鉄滓も11g出土している。

時期 出土遺物には重複する住居跡のものが混入しているが概ね8C.後葉～9C.前葉に比定される。

46号住居 (第143～145図 P L. 52・121・122)

位置 Bq・r-20・21

重複 住居、土坑など他遺構との重複は認められない。

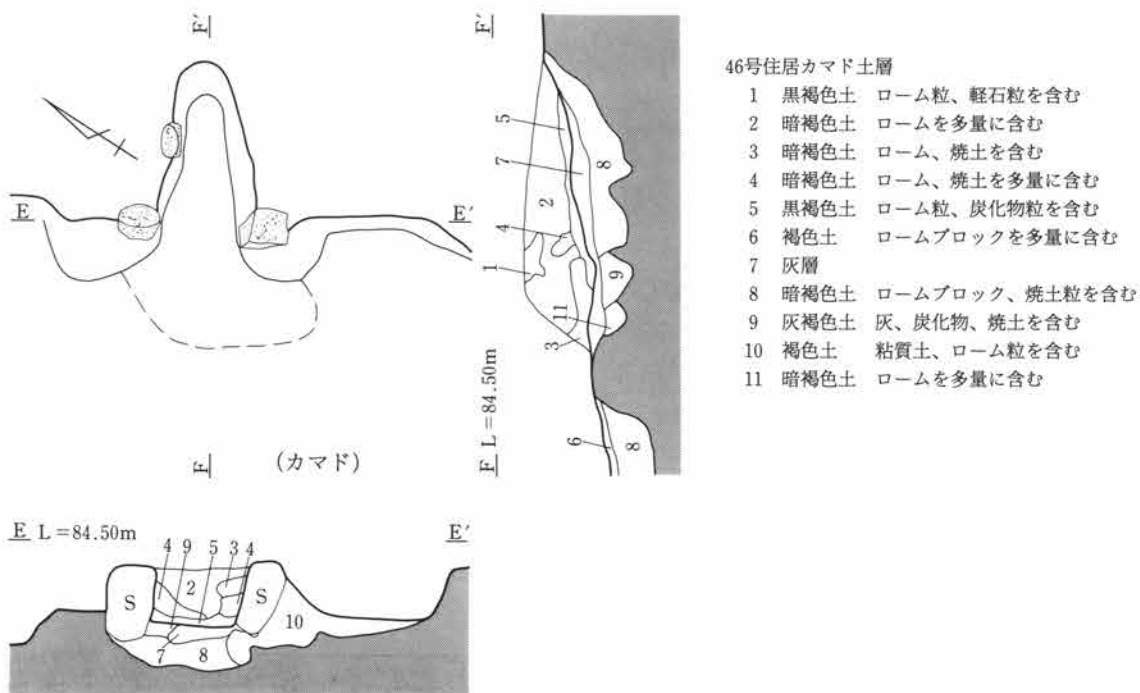
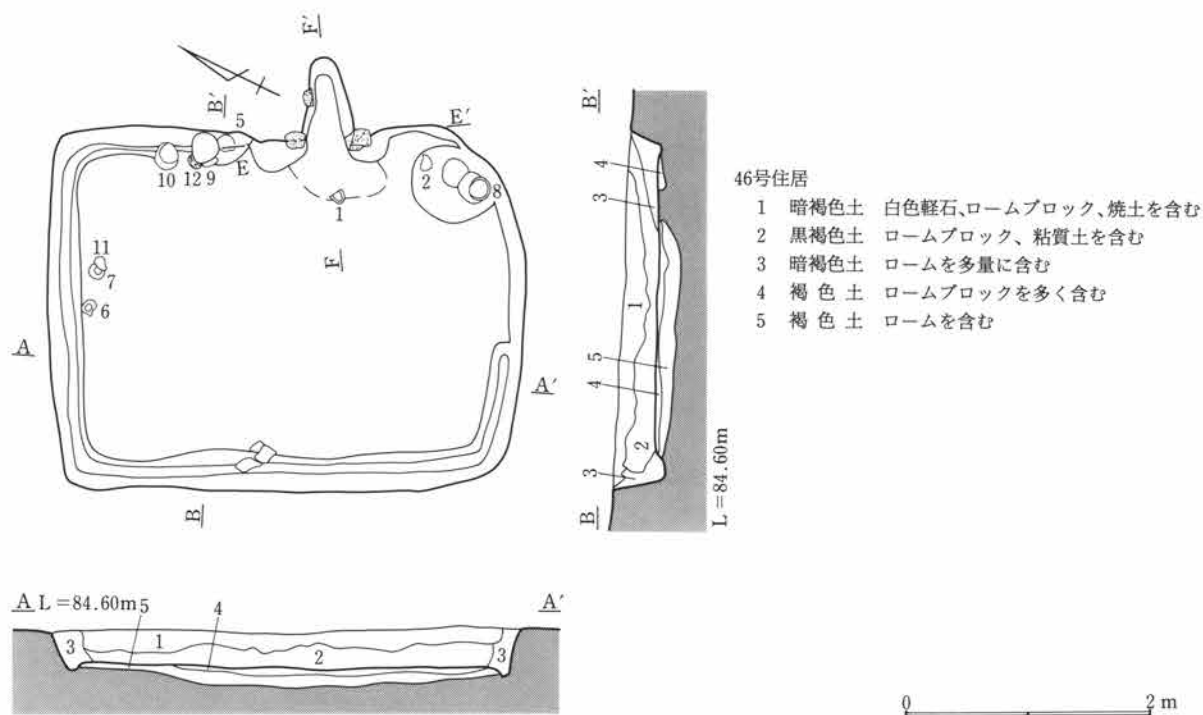
主軸方向 N-65°-E **床面積** 9.0㎡

形態 主軸方向の対辺に長軸をもつ長方形平面を呈する。各隅は丸みをもち、各壁は直線的で形態的にあまり歪みはない。

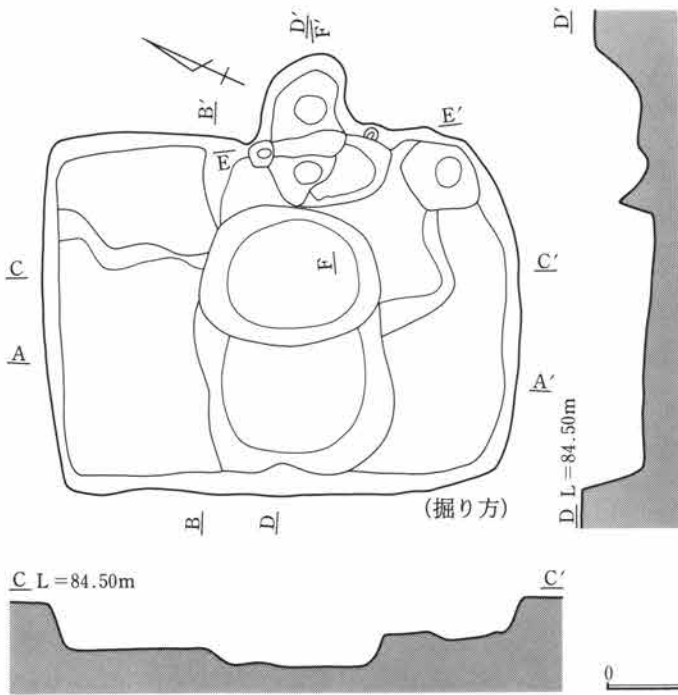
規模 2.9m×3.8m

カマド 東壁中央やや南寄りに設置される。天井部および煙道とも残存せず、燃焼部のみ確認された。規模は焚口35cm、壁掘り込み70cmで、両袖部には柱状加工をほどこした角閃石安山岩の大型礫が用いられている。また、左壁体部にもカマド構築用礫材(粗粒安山岩)が1点検出されている。

II 発掘調査の記録

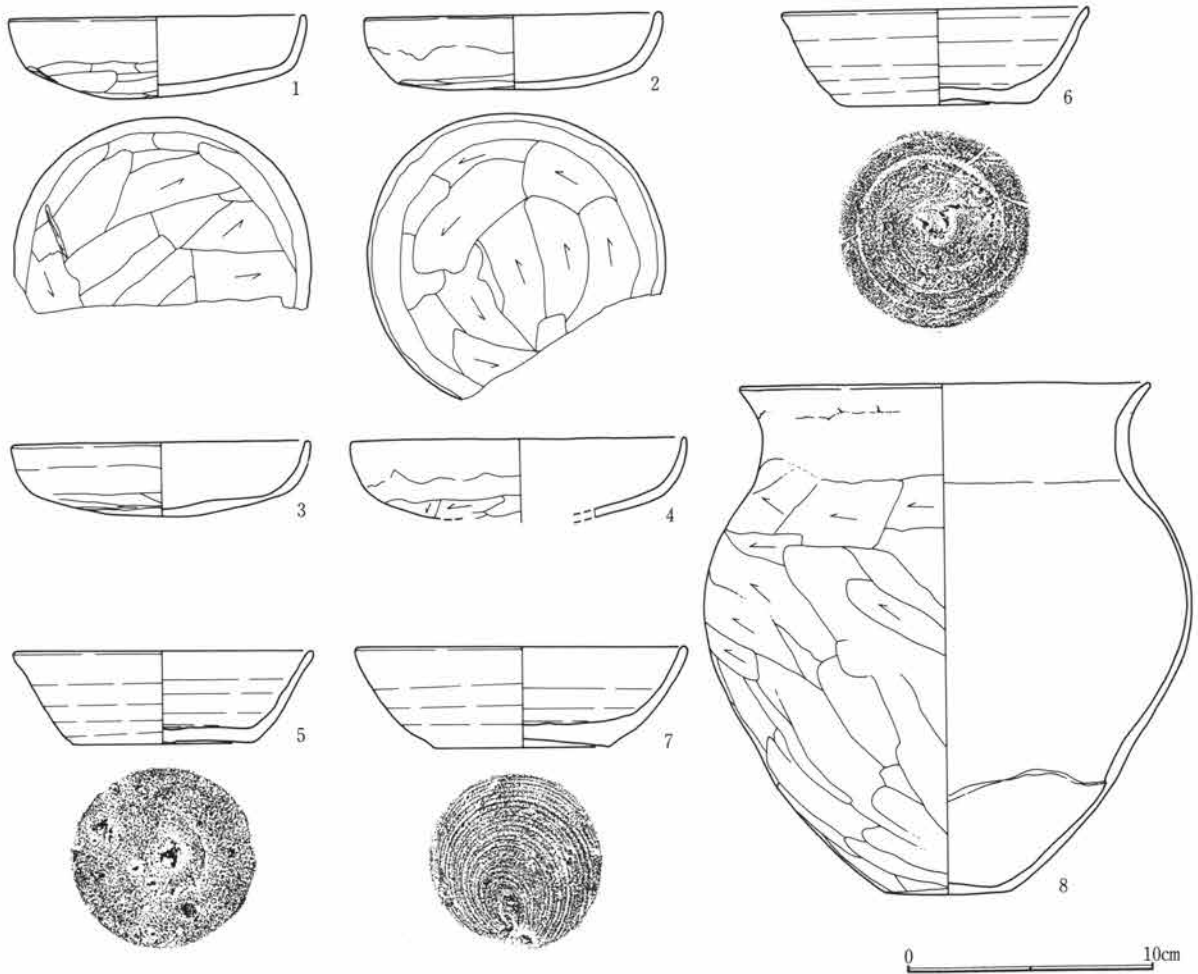


第143図 46号住居



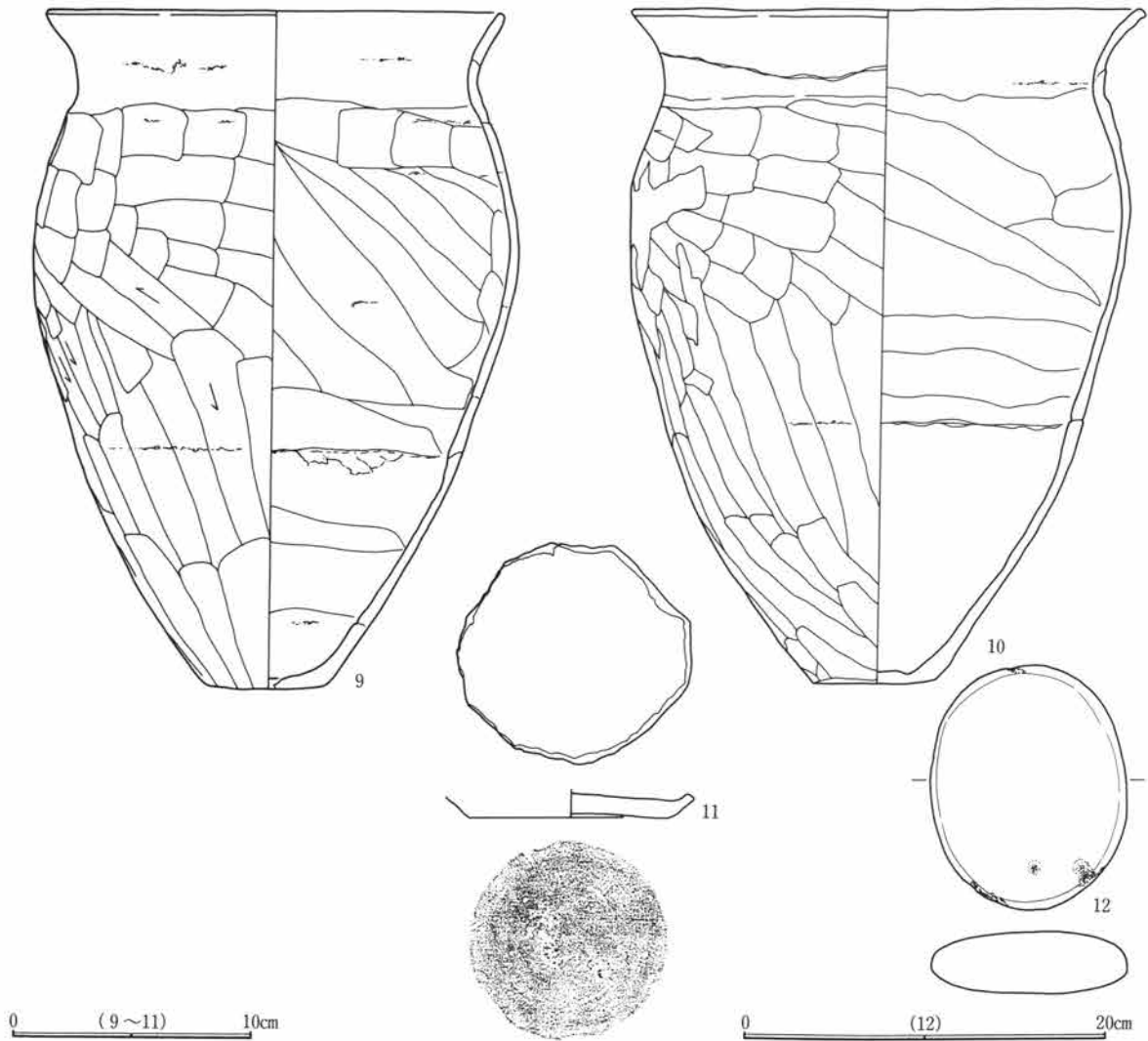
内部施設 壁下に沿って幅20cm、深さ10cmの周溝が巡る。この周溝は全周せず、南東隅を中心として途切れている。また、南東隅に径45cm、深さ30cmの貯蔵穴が検出されている。そのほか柱穴などについては認められていない。

床 部分的に地山のローム面を床面とするが、大半はロームブロックを含む褐色土による。



第144図 46号住居と出土遺物

II 発掘調査の記録



第145図 46号住居出土遺物

る張り床が施される。張り床は層厚8cm前後で堅く良好な面を形成する。床面は細かな起伏をもつものの水平面を保っている。

掘り方 住居全体が掘り下げられるが、とくに中央部分がさらに1段下げられている。

遺物出土状態 カマドが設置される住居東壁および貯蔵穴部分にややまとまった出土状態を示す。5・9・10の土器類、12の円礫が東壁カマド北側の周溝に接して出土している。また、7・6・11が北壁付近の床面上で、2・8が貯蔵穴でそれぞれ出土している。なお、1・3・4は埋没土から検出したものである。

時期 出土遺物から8C.後葉に比定される。

47号住居 (第146図 P L, 53・122)

位置 Bc・d-6・7

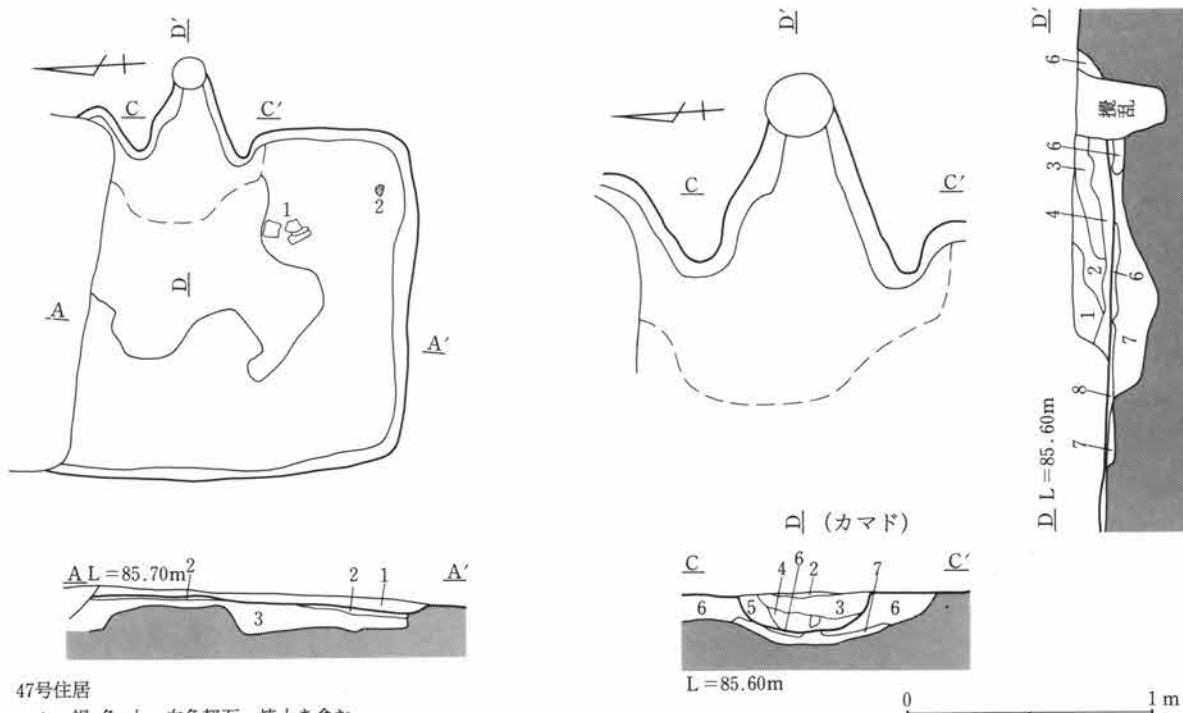
重複 北側を18号住居に切られている。またカマド端部には木根とみられる攪乱をうけている。

主軸方向 N-92°-E **床面積** (7.4㎡)

形態 およそ3分の1程度失われているため確定できないが、主軸方向の対辺に長軸をもつ横長長方形を呈するとみられる。

規模 2.8m×-

カマド 東壁に設置される。天井部、煙道とも残存せず、端部には攪乱をうけている。規模は焚口70cm、奥行き約80cmで、両袖は住居内に張り出し気味となる。カマド前には灰および焼土の散布が認められる。

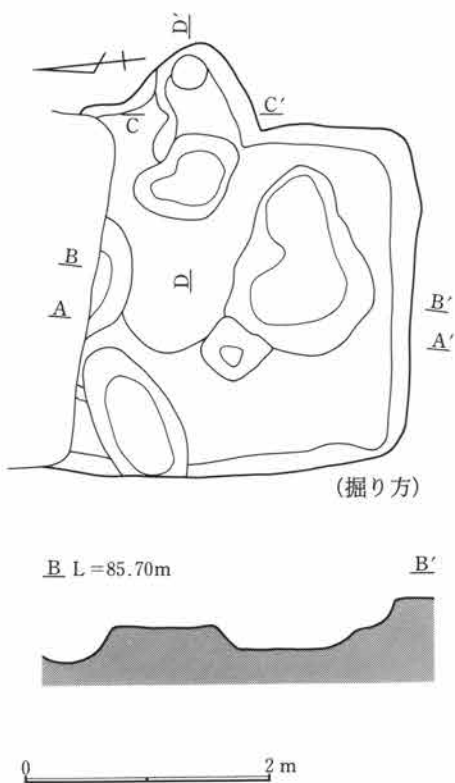


47号住居

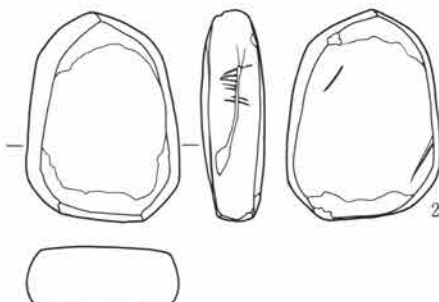
- 1 褐色土 白色軽石、焼土を含む
- 2 暗褐色土 ローム粒、焼土を含む
- 3 褐色土 ロームブロックを多量に含む

47号住居カマド土層

- 1 暗褐色土 軽石粒、焼土を含む
- 2 暗褐色土 粘質土を含む
- 3 褐色粘質土 焼土粒を含む
- 4 暗褐色土 灰、焼土を含む
- 5 暗褐色土 焼土を含む粘質土
- 6 褐色土 ローム粒、焼土粒を含む
- 7 暗褐色土 ロームを多量に含む
- 8 褐色土 ローム、黒褐色土を含む



(掘り方)



第146図 47号住居と出土遺物

II 発掘調査の記録

内部施設 柱穴、周溝もしくは貯蔵穴などについては認められていない。

床 ロームを含む暗褐色土による張り床が施される。住居中央部分はとくに堅く良好な面が検出されている。

掘り方 住居中央部が床面下5cm前後と浅く、周辺部が30cm前後掘り下げられる。ロームブロックを含む褐色土により埋め戻される。

遺物出土状態 1の土器、2の砥石が床面上、3の釘が埋没土から出土している。

時期 出土遺物から9C.中葉に比定される。

48号住居 (第147・148図 P.L. 54・122)

位置 Ay・Ba-23・24.

重複 住居西壁部分で7号井戸と重複する。遺構確認時には不明であったが、断面の観察により井戸が住居より新しい。その他住居、土坑などとの重複は認められないが、南壁の一部には耕作の影響がみられる。

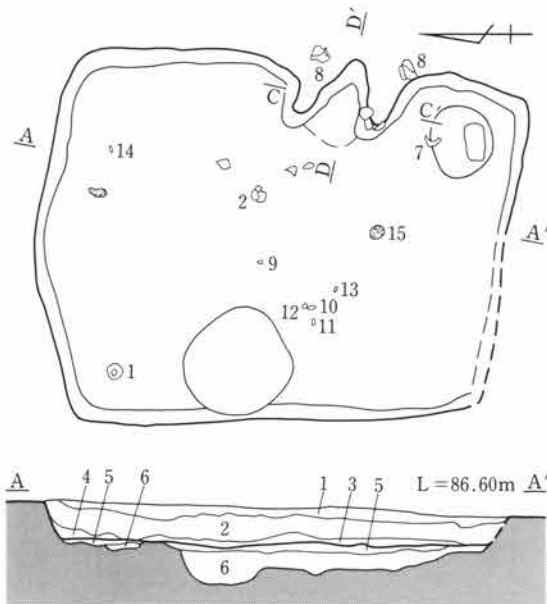
主軸方向 N-92°-E **床面積** 8.6m²

形態 主軸方向の対辺に長軸をもつ横長長方形で、各隅は丸みをもつ。平面形は矩形を示さず、各辺の長さも多少相違しており、やや歪みをもつ。なお壁に湾曲がみられる部分が存在するが、これについては検出状況に伴うものと考えられる。

規模 2.9m×3.8m

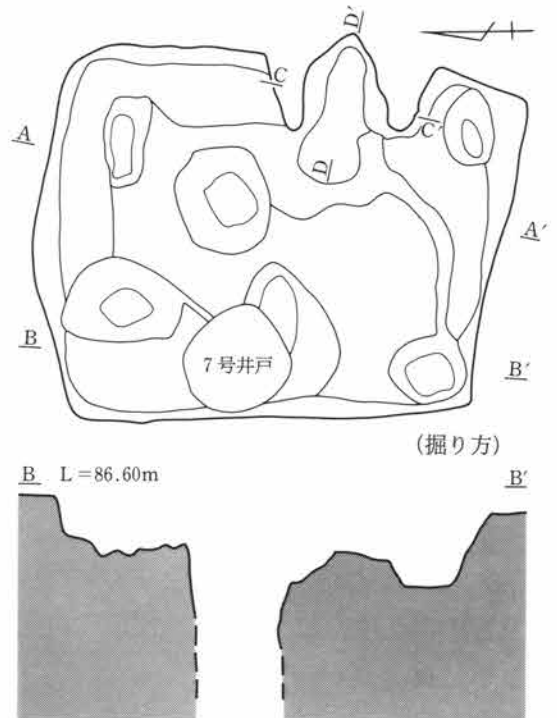
カマド 東壁中央やや南よりに設置される。天井部、煙道は残存せず燃焼部のみ検出している。主体部は住居壁からあまり突出せず、袖部が住居内へ張り出している。規模は焚口50cm、奥行き70cmで、袖はロームを主とする褐色土により造り出される。

内部施設 住居南東隅に計50cm、深さ30cmの小穴が存在する。小穴内には土器片のほか粗粒安山岩礫が数点認められている。この中には側面に加工痕をもつ礫材も1点みられ、カマド構造礫の可能性も考えられる。柱穴は不確定であるが、掘り方調査により住居対角線上に3カ所小穴が認められている。この3穴と南東隅の小穴を含め、その位置関係から4本主柱と考えることも可能である。



48号住居

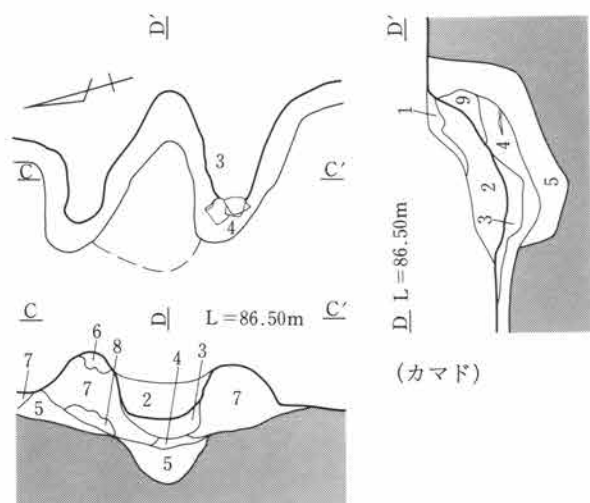
- 1 褐色土 白色軽石、褐色粘質土を含む
- 2 暗褐色土 白色軽石、焼土、炭化物を含む
- 3 暗褐色土 白色軽石、ローム粒を含む
- 4 暗褐色粘質土
- 5 褐色土 ロームを多量に含む
- 6 暗褐色土 ローム、黒褐色土を含む



(掘り方)

0 2 m

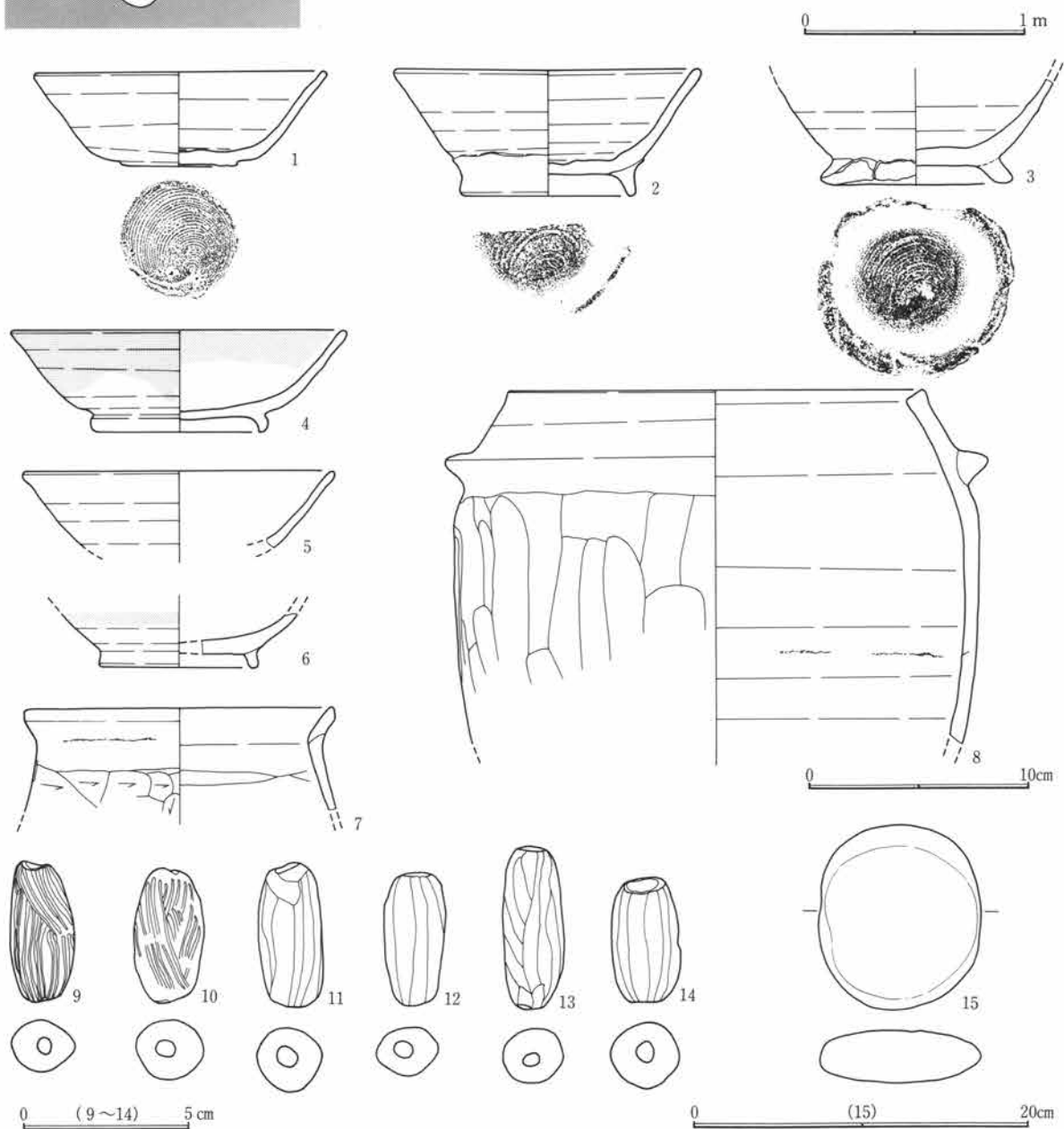
第147図 48号住居



48号住居カマド土層

- 1 褐色土 粘質土をブロック状に含む
- 2 褐色土 軽石粒、焼土粒を含む
- 3 灰層
- 4 暗褐色土 ローム、灰、焼土を含む
- 5 褐色土 ロームブロックを含む
- 6 灰白色粘質土 焼土粒を含む
- 7 褐色土 軽石粒、焼土粒を含む
- 8 暗褐色土 ロームを多量に含む
- 9 褐色土 ローム粒、軽石粒を含む

(カマド)



第148図 48号住居と出土遺物

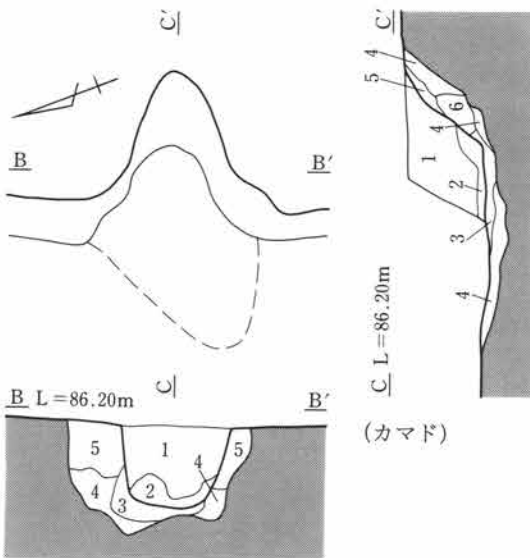
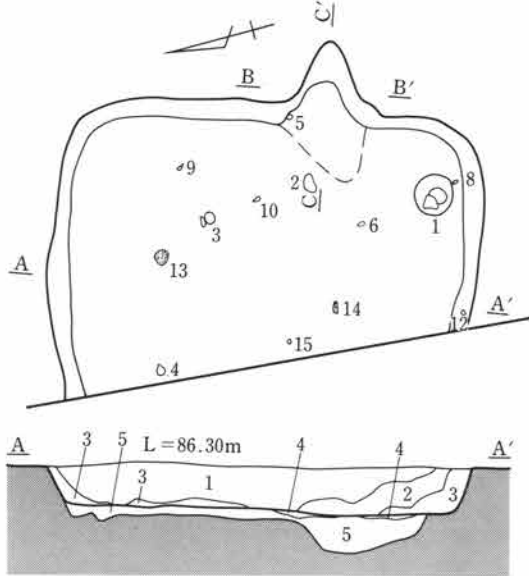
II 発掘調査の記録

床 褐色土とロームの混土による張り床を施す。堅く良好でほぼ水平な面が検出されている。

掘り方 全体的に浅く掘り下げられるが、周辺部がより下げられる傾向があり、中央付近には土坑状の掘り込みもみられる。

遺物出土状態 土器類は1・2・7が床面上、3・4・8がカマド内、5・6が埋没土から出土している。また土錘が6点床面上から出土しているが、14がやや離れた位置であるが、9～13は比較的近接して検出されている。15の偏平円礫は住居中央付近の床面上で出土している。

時期 出土遺物から10C.後半に比定される。



49号住居 (第149・150図 PL. 55・123)

位置 As-8・9

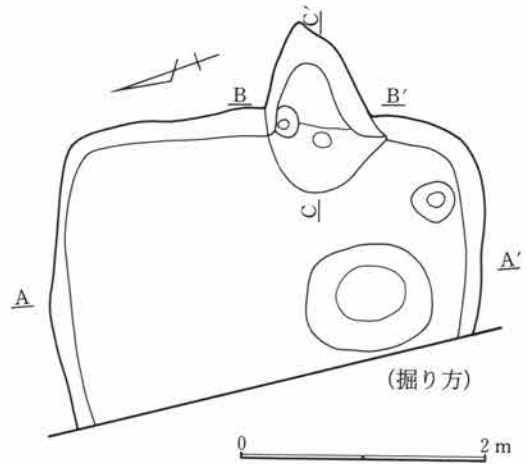
重複 他遺構との重複はないが、住居西側が調査対象地外であるため、およそ3分の1が未調査となっている。

主軸方向 N-106°-E **床面積** (7.0㎡)

形態 住居西側が未調査のため不明である。東側の2隅は丸みをもち、確認壁についてはほぼ直線的となる。

規模 ー×3.4m

カマド 東壁中央やや南よりに設置される。天井部および煙道は残存しない。規模は焚口70cm、壁掘り



49号住居

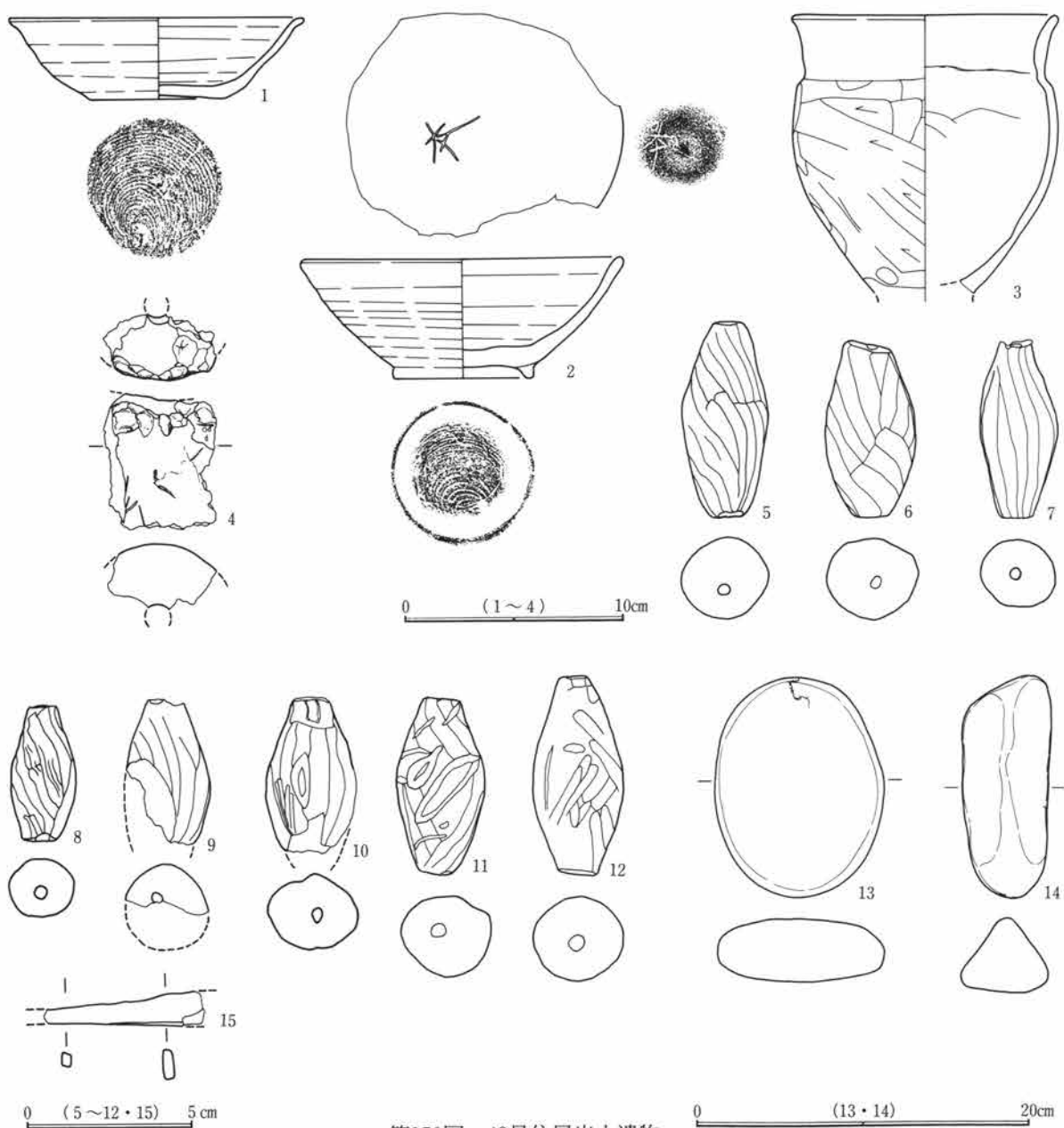
- 1 暗褐色土 白色軽石を含む
- 2 褐色土 ローム、軽石を含む
- 3 褐色土 ロームを少量含む
- 4 暗褐色土 ロームを多量に含む
- 5 暗褐色土 褐色粘質土を含む

49号住居カマド土層

- 1 褐色土 ロームを含む
- 2 暗褐色土 焼土を含む
- 3 灰層 焼土粒を多量に含む
- 4 暗褐色土 ロームを多量に含む
- 5 暗褐色土 ローム、焼土を含む
- 6 褐色土 焼土を多量に含む

0 1 m

第149図 49号住居



第150図 49号住居出土遺物

込み70cmで、底面下に灰層の堆積が認められる。掘り方にはローム、暗褐色土を埋め戻すが焼土が多く存在する部分もあり、カマド構築前、掘り方時に燃焼したと考えられる。

内部施設 住居南東隅に径30cm、深さ30cmの貯蔵穴とみられる小穴が認められる。他柱穴、周溝は認められない。

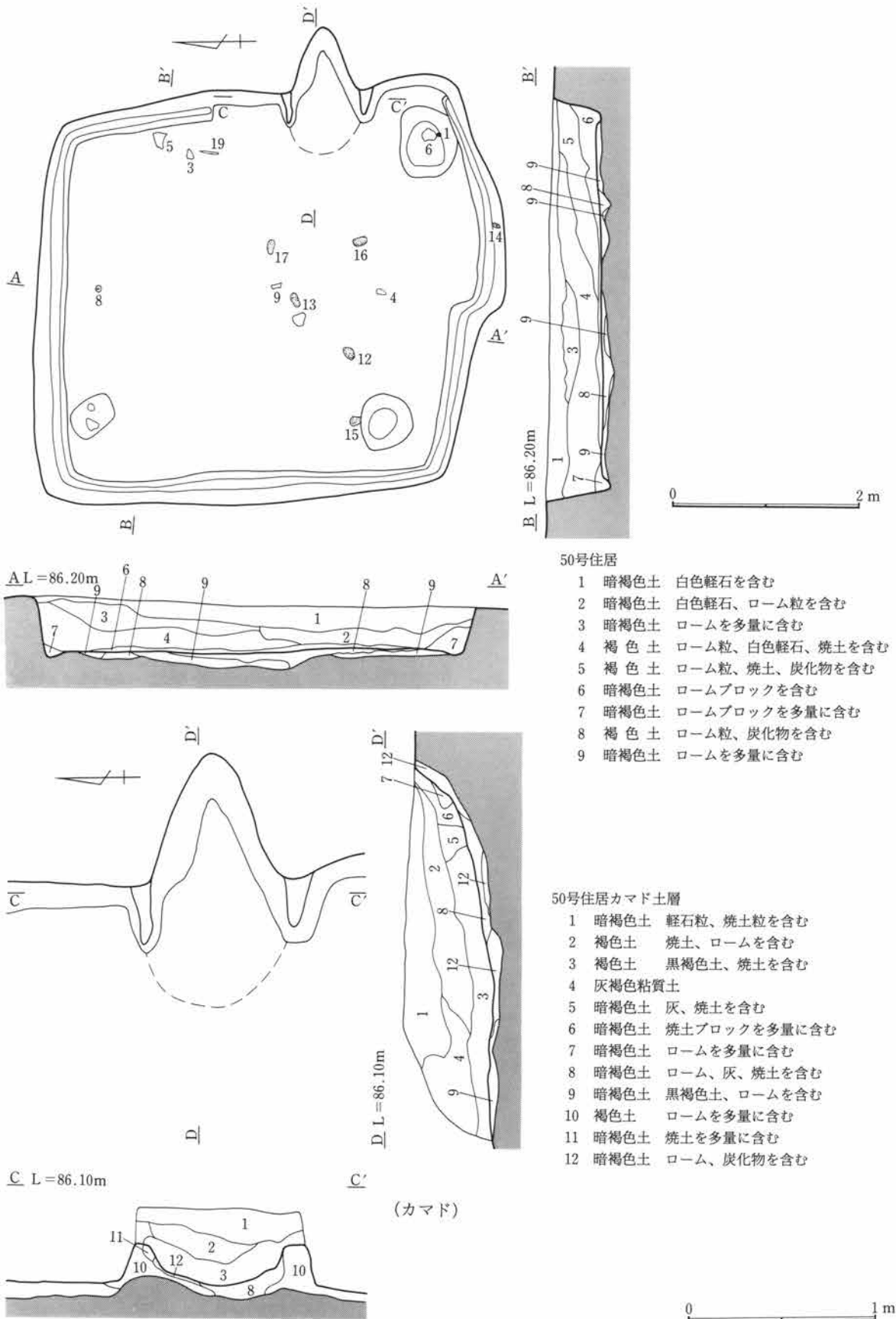
床 ロームを含む暗褐色土により張り床が施される。住居中央を中心に堅く良好な面が検出されている。

掘り方 不規則に10cm程掘り下げ、一部に径100cm、深さ30cmの土坑状の掘り込みも存在する。

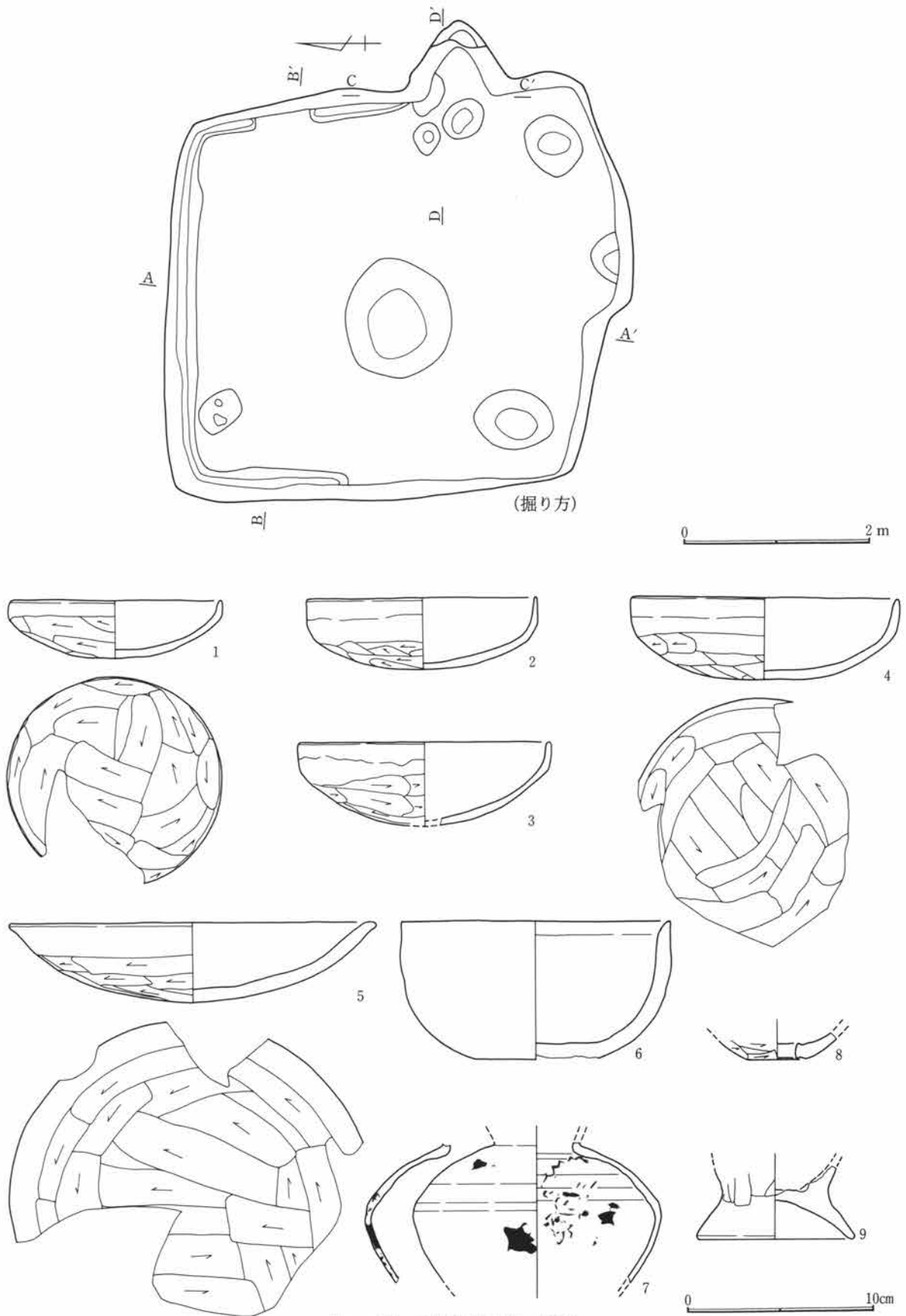
遺物出土状態 土器類は1が貯蔵穴、2・3が床面上から出土している。また、土錘が8点出土している。5がカマド左袖、12が南壁に接して検出された以外はいずれも床面から3cm~15cm上位で認められている。13の偏平円礫は床面上、14の棒状礫、15の刀子茎は床面から14cm程上位から出土している。

時期 出土遺物から9 C.代に比定される。

II 発掘調査の記録

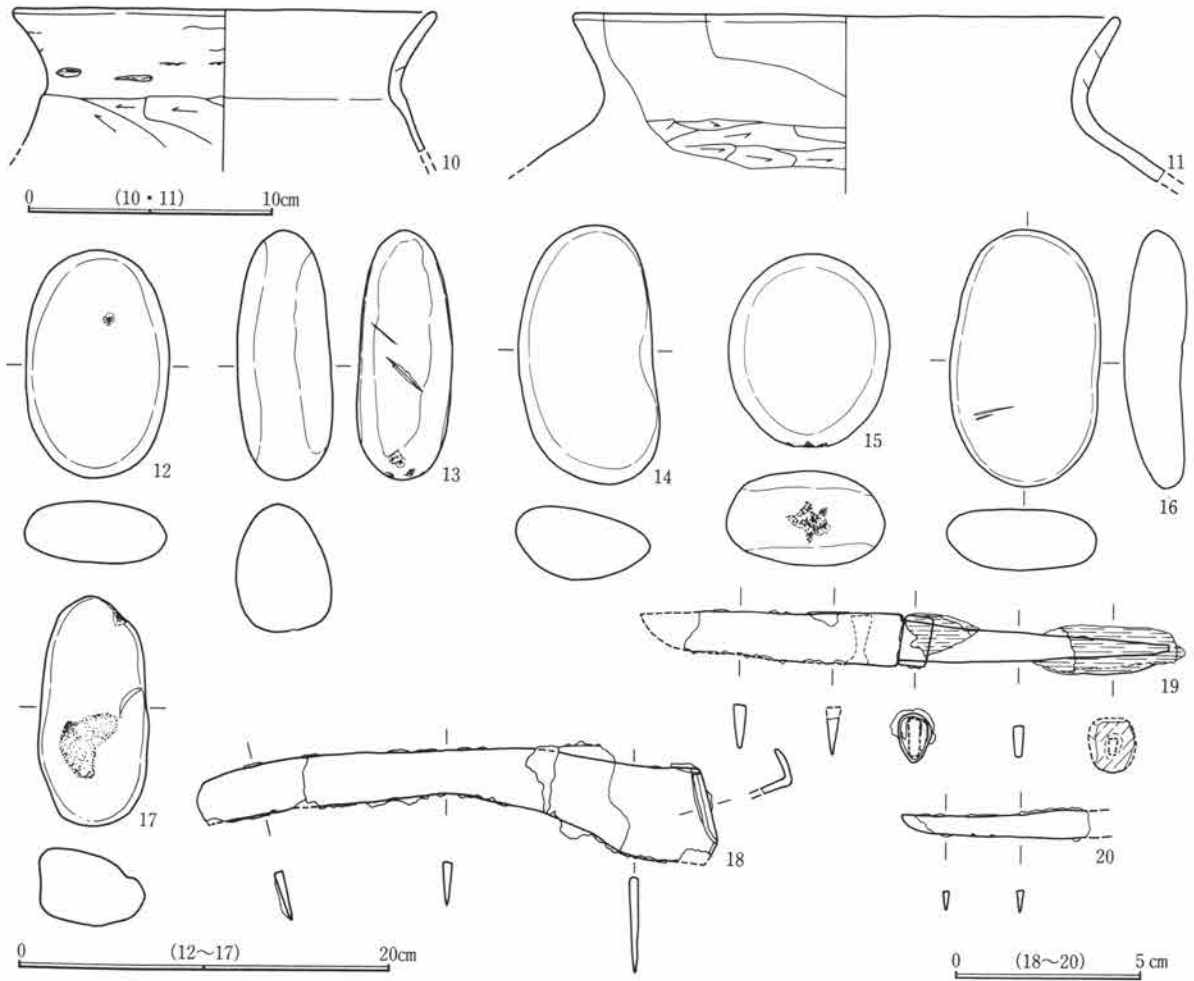


第151図 50号住居



第152図 50号住居と出土遺物

II 発掘調査の記録



第153図 50号住居出土遺物

50号住居 (第151~153図 PL. 56・123・124)

位置 At・u-11・12

重複 他住居、土坑との重複は認められない。

主軸方向 N-88°-E 床面積 17.0m²

形態 主軸方向の対辺がわずかに長い、横長長方形を呈する。また平面形状は矩形とはならず、歪みをもつ。さらに南壁部には張り出しが認められ、壁下の周溝もこの張り出しに沿って巡らされている。

規模 4.3m×4.9m

カマド 東壁中央やや南寄りに設置される。天井部および煙道とも残存しないが、カマド内には構築材の一部である粘質土の堆積が認められている。燃焼部のみ検出されているが、底面下には層厚5cm程度の灰層が認められている。規模は焚口65cm、奥行き90cmを計測する。袖部はロームを主体とする暗褐色

土により構築され、住居内に張り出す。検出時で幅10cm、長さ30cmである。また、カマド前の床面上には灰、焼土の散布が認められる。

内部構造 南東隅に径70cm、深さ15cmの貯蔵穴とみられる小穴が存在し、内部からは6の土器が出土している。この他、南西隅に幅60cm、深さ18cmの小穴が、また北西隅径50cm、深さ20cmの小穴がそれぞれ確認されている。両小穴間は310cmであり、この位置関係から柱穴とも考えられるが、東側についてはこれに対応する小穴はみられない。壁外の存在も考えられるが、確定する所見は得られていないためこの性格については推定するにとどまる。住居壁下には幅15cm、深さ10cmの周溝が巡る。周溝は全周せず、カマド両側部分は途切れている。

床 ロームを含む褐色土により張り床が施される。

部分的に堅く良好な面が検出されている。

掘り方 床面から10cm程度の深さで不規則に掘り下げ、中央部には径120cm、深さ20cmの皿状の掘り込みも認められる。

遺物出土状態 土器類は1・6が貯蔵穴内、9が床面上で出土した以外は、床から15cm～30cm上位で検出された。12～17の棒状礫は床面上で住居中央付近に散布した状態で検出し、19の刀子は床面上、18の刀子、20の鎌は埋没土から出土している。

時期 出土遺物から8C.後半に比定される。

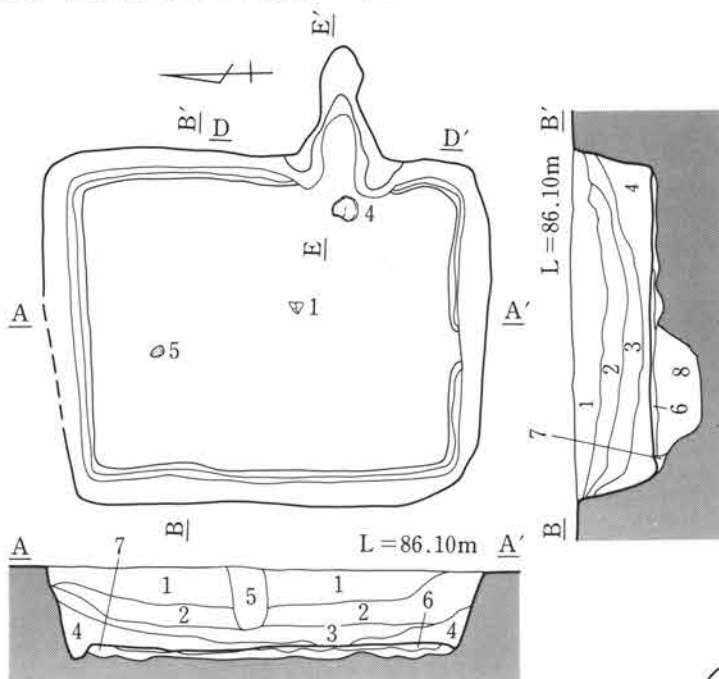
51号住居 (第154・155図 P.L. 57・124)

位置 Au・v-11・12

重複 住居および土坑など他遺構との重複は認められない。

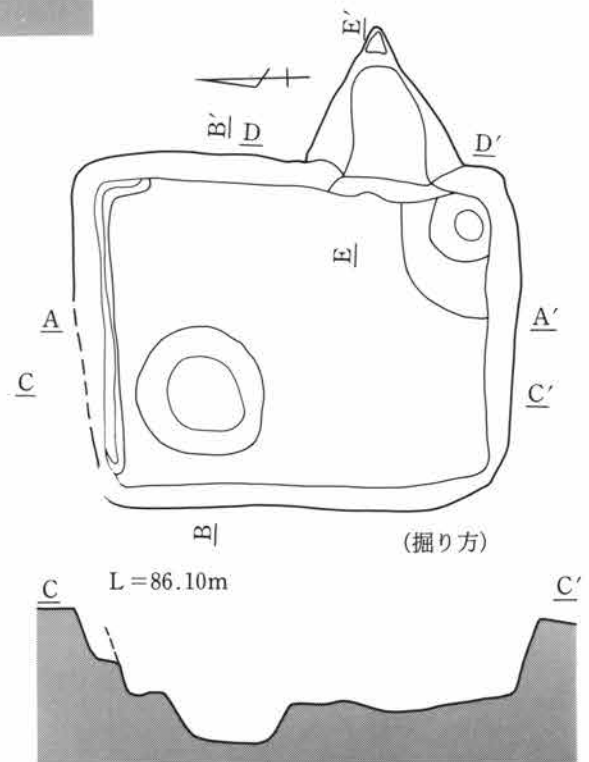
主軸方向 N-92°-E **床面積** (7.4m²)

形態 主軸方向の対辺に長軸をもつ横長長方形を呈する。各辺はあまり歪みがないが、カマドが設置される東壁側が西壁に比べやや長く、さらに北壁も南壁よりわずかにながいため矩形を示していない。



51号住居

- 1 暗褐色土 白色軽石、ローム粒、焼土を含む
- 2 褐色土 白色軽石、ロームブロック、黒褐色土を含む
- 3 黒褐色土 ロームを少量含む
- 4 褐色土 ロームブロックを含む
- 5 褐色土 ロームを含む
- 6 褐色土 ローム、炭化物を含む
- 7 暗褐色土 ロームを多量に含む
- 8 褐色土 ロームブロックを多く含む



第154図 51号住居

II 発掘調査の記録

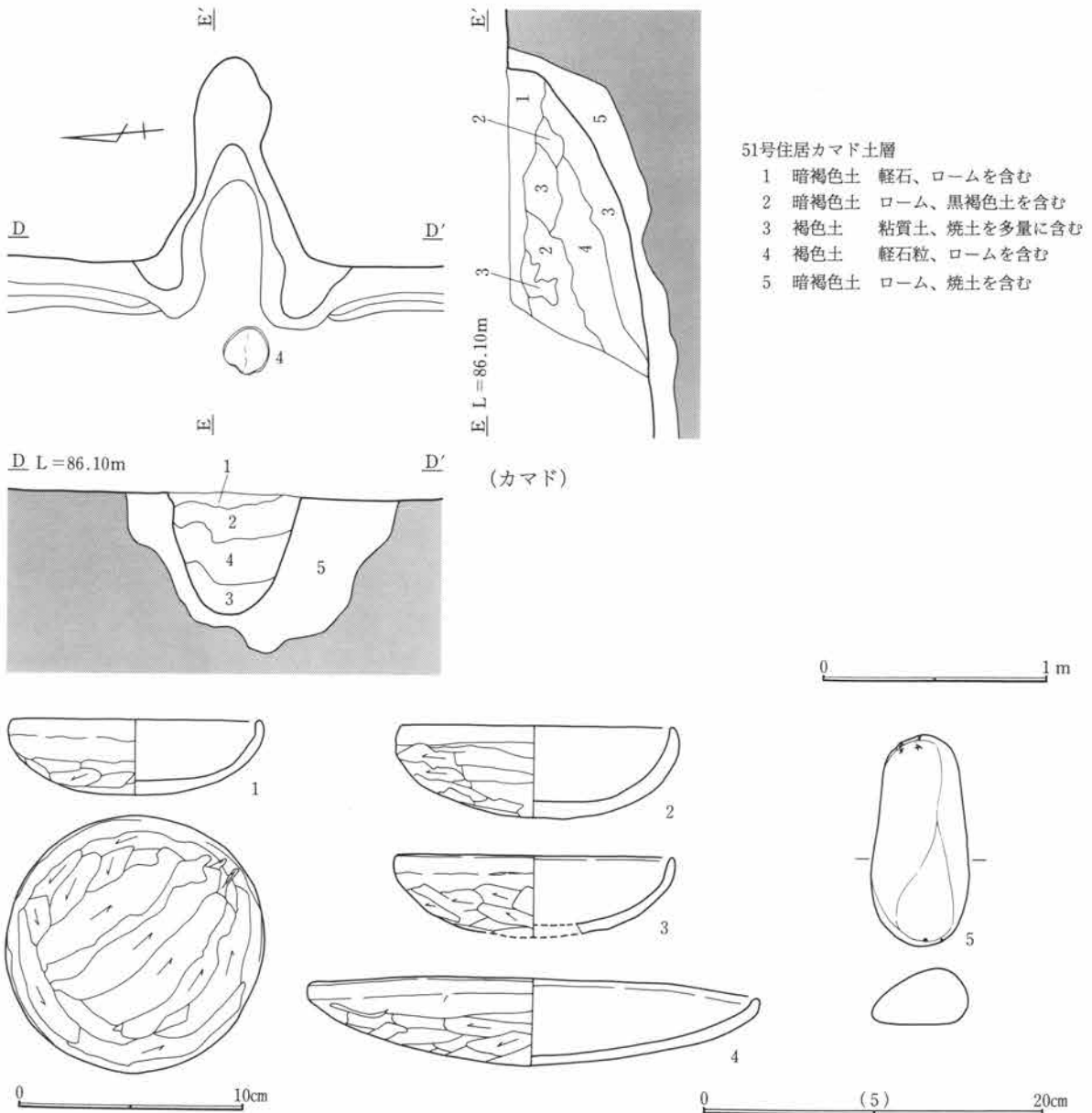
規模 2.8m×3.5m

カマド 東壁やや南寄り、北東隅から3分の2の位置に設置される。天井部および煙道は残存せず、燃烧部のみ検出された。埋没土中には天井部崩落土とみられる火熱をうけた粘質土が、カマド底面に接した状態で検出されている。この埋没状態からみると流入土堆積以前、比較的早い時点でカマドが崩落したものと見える。両袖はローム、褐色土により構築され20cm程度住居内に張り出す。規模は焚口35cm、奥行100cmを計測する。

内部施設 住居壁下に沿って幅15cm、深さ10cmの周

溝が巡る。周溝は全周せずカマド袖部で途切れるほか、南壁中央付近で25cmの幅で途切れる部分がある。この南壁部の周溝は明確に途切れており、ほかに関連する痕跡は認められていないが入り口部に相当する可能性も考えられる。これ以外に床面上では、柱穴などについては検出されていない。なお、掘り方調査により住居南東隅に径50cm、床下深17cmの皿状の掘り込みが認められ、位置からみて貯蔵穴に相当する可能性もある。

床 ロームを含む褐色土により張り床が住居全面に施される。床面は多少起伏をもつがほぼ水平であり、



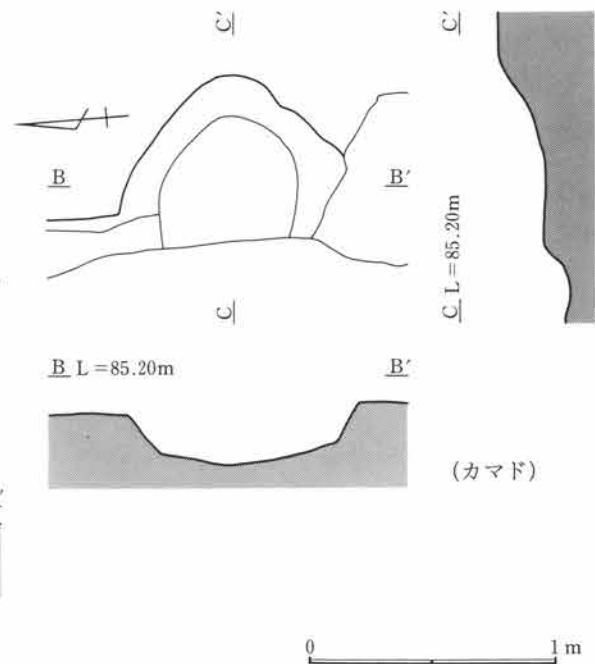
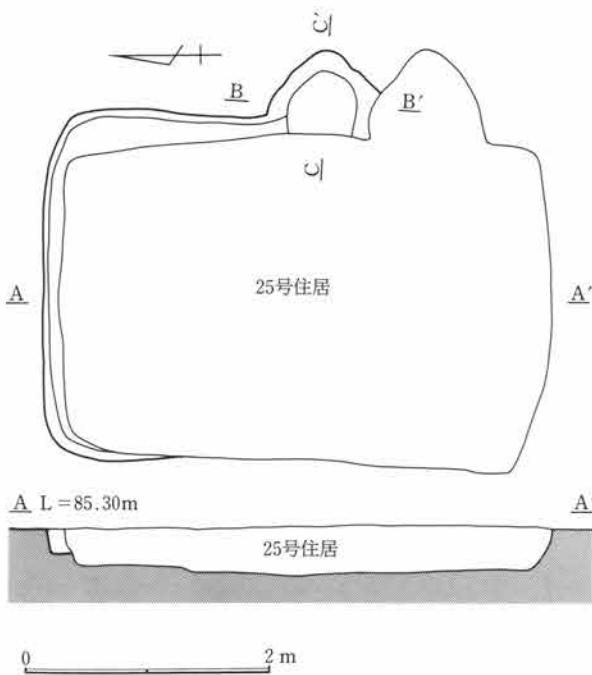
第155図 51号住居と出土遺物

部分的に堅く良好な面が形成されている。張り床の層厚はおよそ5cm前後である。

掘り方 住居全体を10cm～15cm不規則に掘り下げる。また、住居北西部には径90cm、床下深40cmの土坑状の掘り込みもみられる。

遺物出土状態 遺物出土量は少ない。土器類は4がカマド前、1が住居中央で床面上から検出され、2・3が埋没土中から出土している。5の棒状礫は床面上で検出している。

時期 出土遺物から8 C.前半に比定される。



第156図 52号住居

カマド 東壁に設置される。住居の重複もあり遺存状態は悪く、その存在が確認されたにとどまる。残存規模は幅80cm、奥行き60cm、深さ15cmを計測する。

内部施設 住居の大部分を遺失するため不明である。なお、残存部では周溝は認められない。

床 確認部分では地山のローム面を床面としている。残存部では硬化面は認められない。

掘り方 検出部分では掘り方は認められていない。これ以外の部分の掘り方についても重複住居により壊されており不明である。

遺物出土状態 出土遺物は認められない。

時期 特定出来ない。

52号住居 (第156図)

位置 Bf・g-6・7

重複 25号住居と重複する。52号住居が古くカマドおよび住居北東隅から北壁部のみを残し、大部分が25号住居により壊される。

主軸方向 N-92°-E **床面積** 不明。

形態 大半が25号住居により壊されるため不明であるが、残存部から推定して主軸方向の対辺に長軸をもつ横長長方形を呈するものと推定される。

53号住居 (第157・158図 P L. 58・124)

位置 Bh・i-5・6

重複 12号土坑と重複する。土坑が浅いこともあり前後関係を示す所見を得ていない。

主軸方向 N-97°-E **床面積** 6.0㎡

形態 主軸方向の対辺に長軸をもつ横長長方形を呈する。平面形は矩形を示さず全体的に歪みが認められるが、対応する各辺の長さはほぼ一致している。

規模 2.4m×3.1m

カマド 東壁に設置され、北東隅から3分の2程度南寄りに位置する。天井部、煙道とも残存せず燃焼部のみ検出された。カマド内には構築礫材とみられ

II 発掘調査の記録

る粗粒安山岩の大型礫が出土しているが、底面に散布しており本来の位置は失われている。規模は焚口55cm、奥行き60cmである。掘り方をもちカマド中央に径35cm、深さ20cmの小穴が認められる。

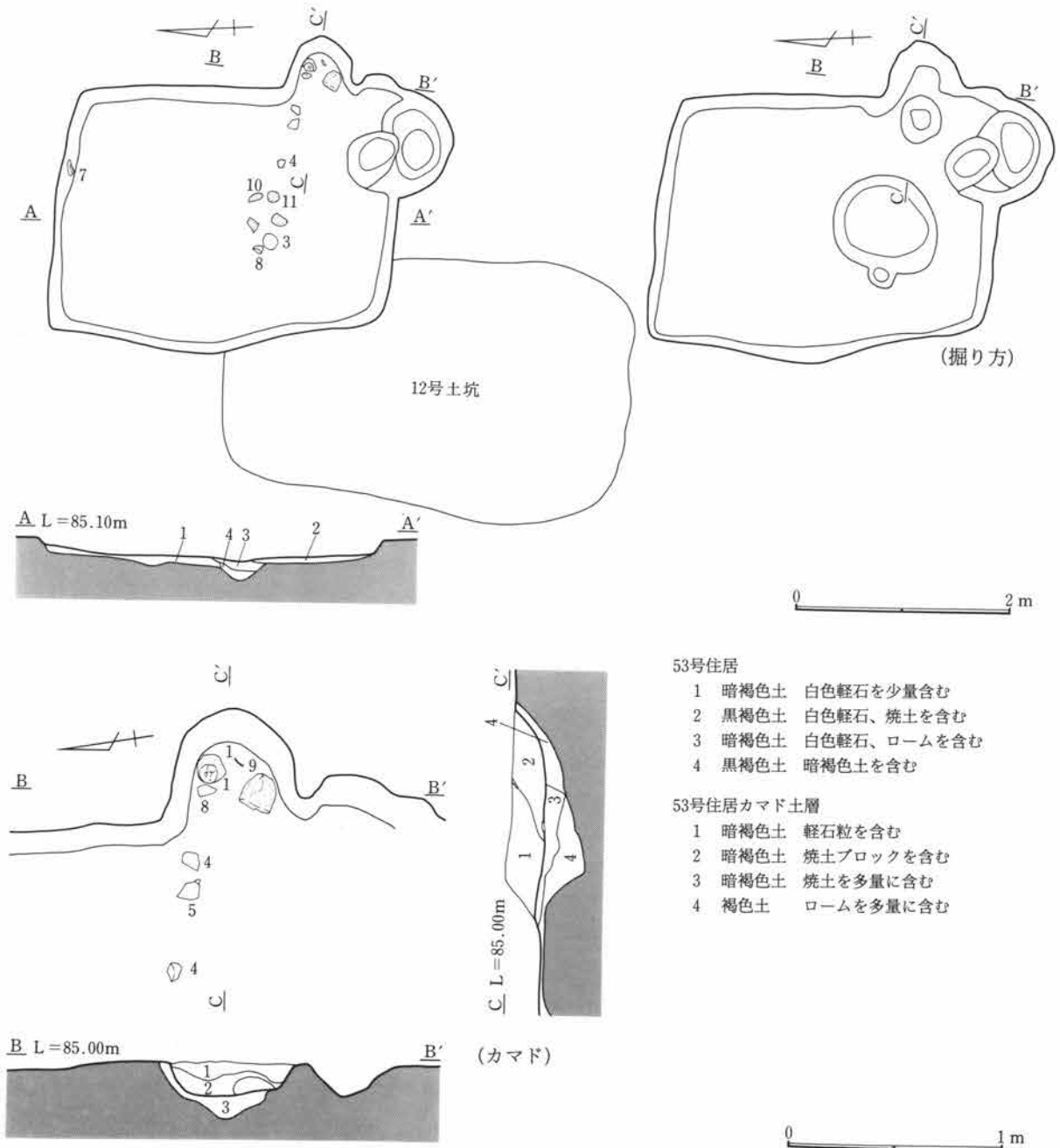
内部施設 南東隅に径40cm、深さ20cmの貯蔵穴とみられる小穴が存在する。さらにこれに接して径70cm、深さ30cmの土坑状の張り出しが認められている。この張り出しについては他遺構の重複も考えていたが、調査過程で住居に伴うものと判断している。こ

のほか、柱穴、周溝などは認められていない。

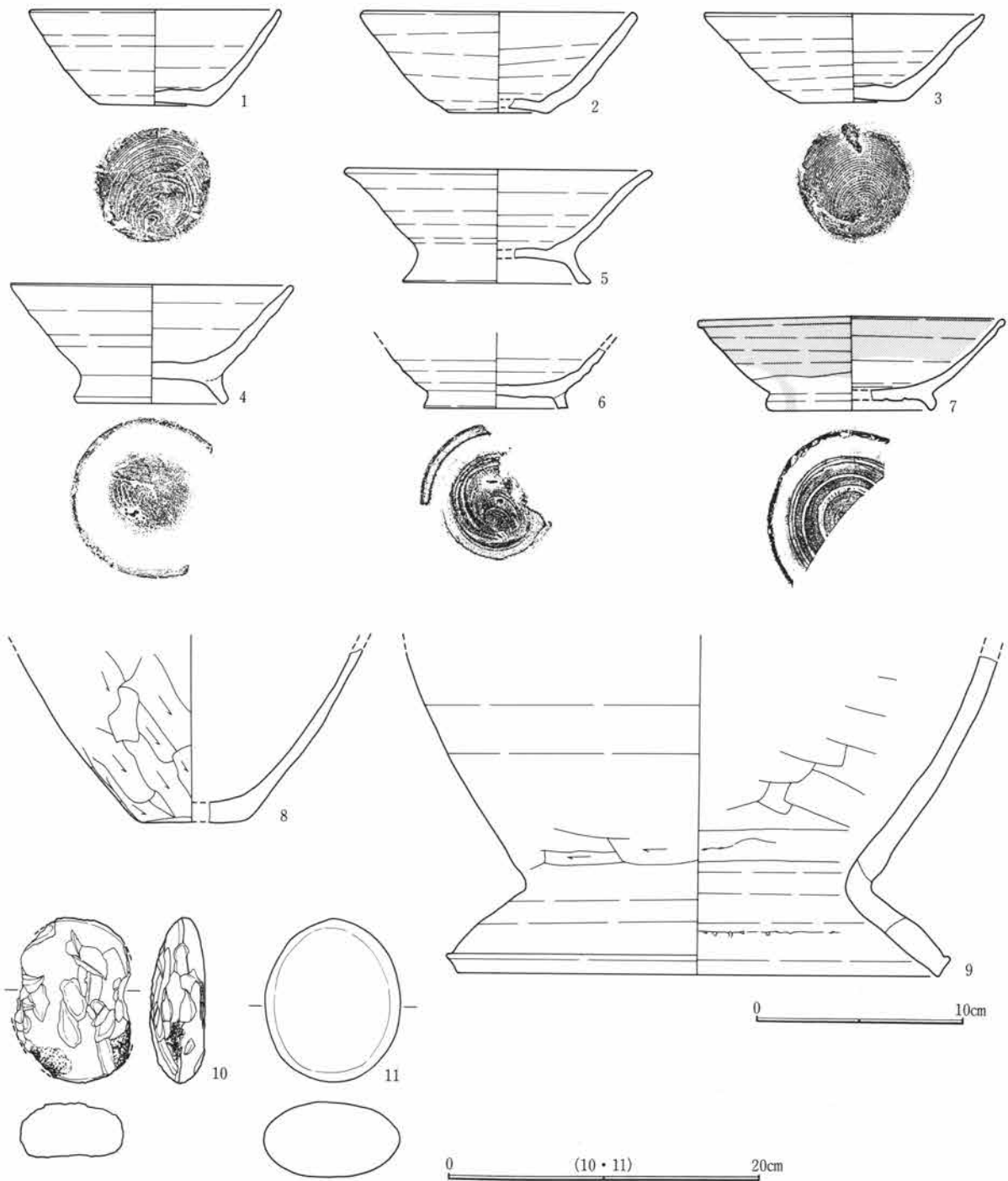
床 張り床だが、全体的に軟弱である。

掘り方 カマド前部に径95cm、深さ26cmの土坑状の掘り込みがあり、暗褐色土により埋め戻される。

遺物出土状態 土器類は1・4・5・9がカマド内、3・8が床面上、7が北壁に接して検出され、他は埋没土から出土している。10・11の棒状礫（粗粒安山岩）は中央部床面上で出土している。



第157図 53号住居



第158図 53号住居出土遺物

時期 出土遺物から10C.後半に比定される。

55号住居 (第159図 P L. 59・124)

位置 Bq・r-23・24

重複 他遺構との重複はみられない。

主軸方向 N-78°-E 床面積 9.3㎡

形態 主軸方向の対辺に長軸をもつ横長長方形を呈

するが、矩形を示さず歪みがみられる。残存深が10cm前後と浅く、遺存状態は良くない。

規模 3.1m×3.7m

カマド 東壁中央部に設置される。残存状態が不良であり、使用面および掘り方が不明瞭な部分をもつ。右袖は未確認であるが、左袖については地山掘り残

II 発掘調査の記録

しとしている。規模は焚口80cm、奥行き90cmである。

内部施設 住居南東隅に径90cm、深さ22cmの貯蔵穴が検出されている。また南壁から西壁には壁下に沿って幅20cm、深さ10cmの周溝が巡る。中央には径50cm、深さ13cmと径30cm、深さ14cmの小穴が2穴認められた。前者の小穴内からは3の杯底部が出土している。

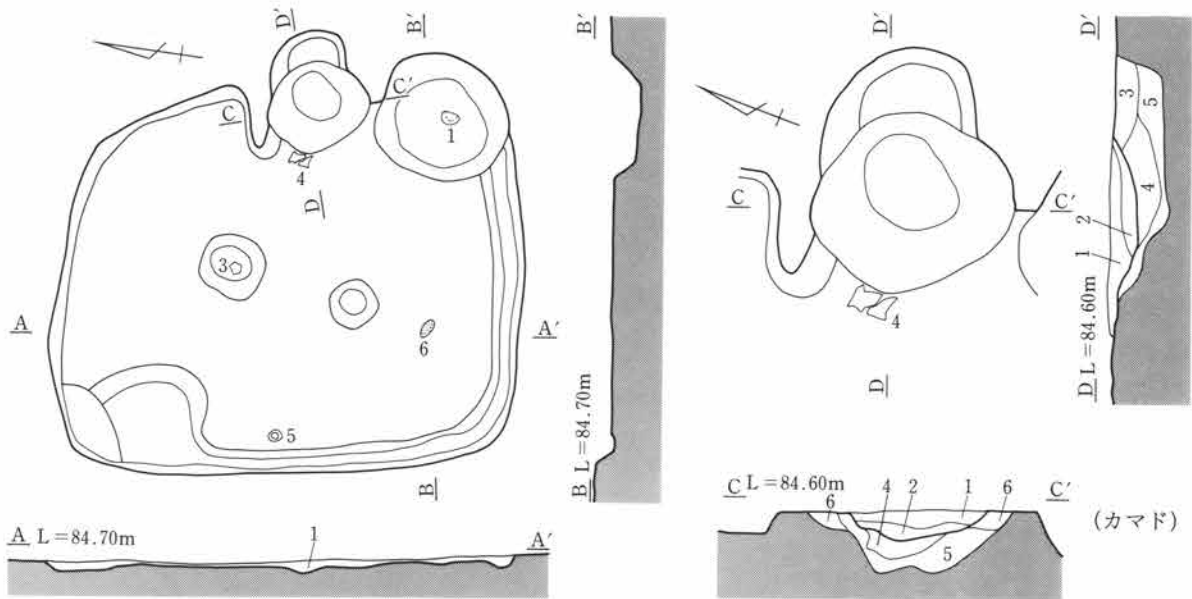
床 地山であるローム面を床面とするが、遺存状態

は悪く硬化面は認められない。残存深が浅いことから、すでに床面が失われていることも考えられる。

掘り方 確認されていない。

遺物出土状態 土器類は1が貯蔵穴、4・5・6が床面上で検出された。5は転用硯で赤色顔料が付着する。6の棒状礫は粗粒安山岩で床面上で出土している。

時期 出土遺物から8C、後半に比定される。



55号住居

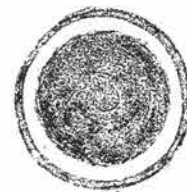
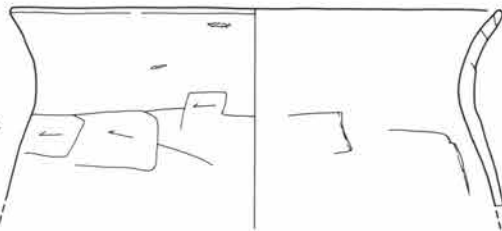
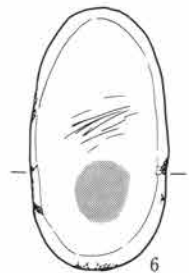
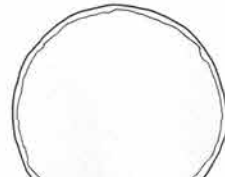
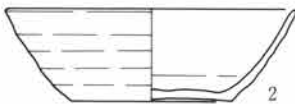
1 暗褐色土 ローム、焼土を含む

55号住居カマド土層

- 1 暗褐色土 軽石粒を含む
- 2 黒褐色土 軽石粒、焼土粒を含む
- 3 暗褐色土 ローム、焼土を含む
- 4 黒褐色土 灰、焼土を含む
- 5 暗褐色土 焼土、ロームを含む
- 6 暗褐色土 軽石、ロームを含む

0 2 m

0 1 m



0 10cm

0 (6) 20cm

第159図 55号住居と出土遺物

56号住居 (第160図 P.L. 59・125)

位置 Bb・c-12

重複 他遺構との重複は認められない。

主軸方向 N-94°-E 床面積 5.0m²

形態 主軸方向に長軸をもつ縦長長方形を呈する。

平面形はあまり歪みをもたない。

規模 2.5m×2.8m

カマド 東壁に設置され北東隅から3分の2程度南寄りに位置し、規模は焚口40cm、奥行き70cmである。

内部施設 柱穴、周溝および貯蔵穴などについては

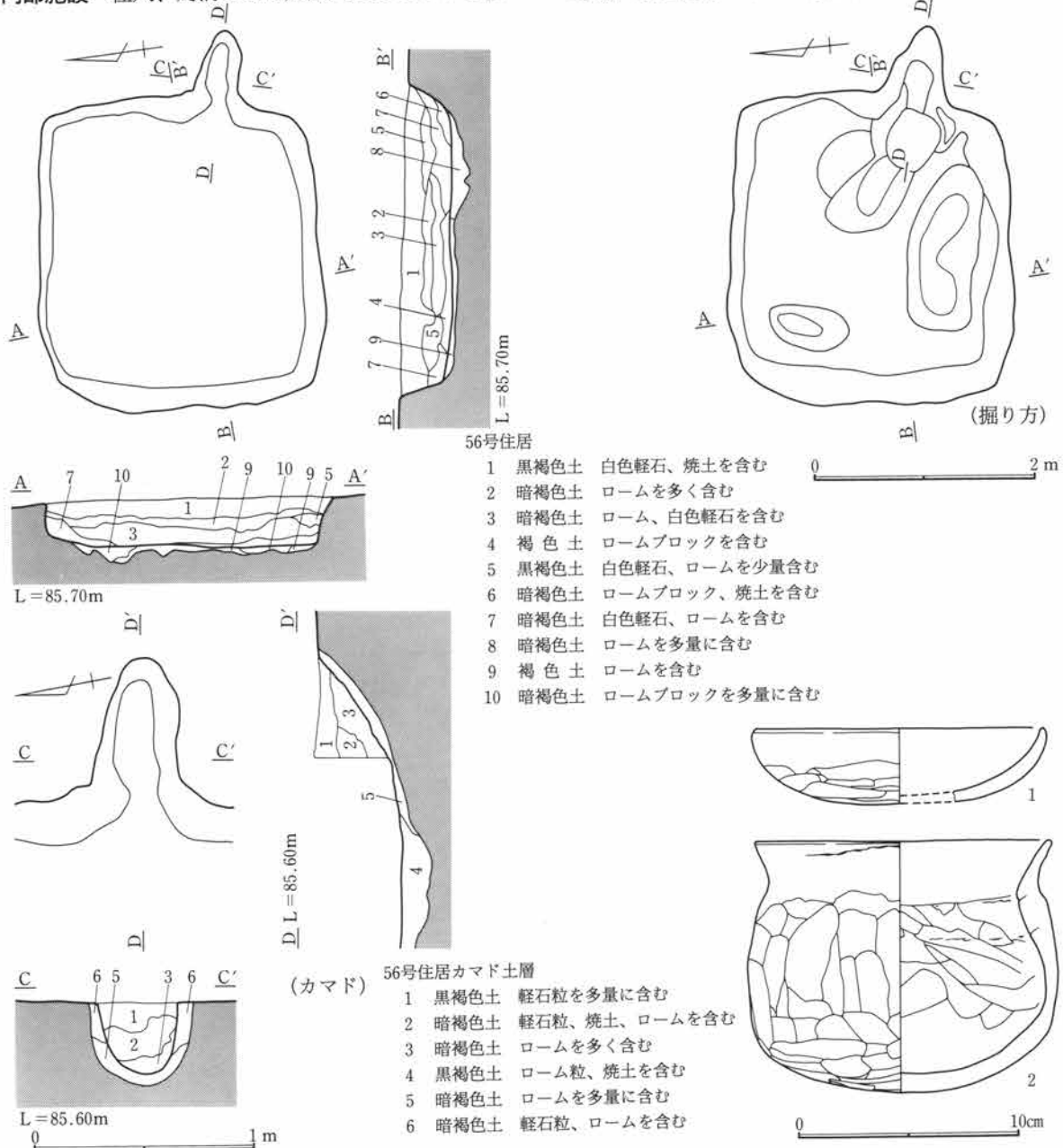
検出していない。

床 掘り方埋土上面を床面とする。ロームを含む暗褐色土であるが、硬化面は認められず全体的に軟弱となっている。

掘り方 不定形な土坑状の掘り込みがみられ、ロームを含む暗褐色土により埋め戻される。

遺物出土状態 遺物出土量は少ない。とくに床面上からの出土遺物は認められず、1・2とも埋没土中で検出している。

時期 出土遺物から8C.前半に比定される。



第160図 56号住居と出土遺物

II 発掘調査の記録

57号住居 (第161～163図 P L. 60・125)

位置 Bt・u-4・5

重複 北西隅部分で58号住居と重複する。平面・断面観察から57号住居が古い。

主軸方向 N-62°-E 床面積 (14.7m²)

形態 主軸方向の対辺がわずかに長いが、長軸と短軸の差が少なく方形に近い平面形を呈する。他遺構により一部遺失するが、あまり歪みはなく矩形を示す。

規模 3.9m×4.1m

カマド 東壁に設置され、3分の2程度南寄りに位置する。天井部、煙道は残存しないが、カマド埋没土中には天井部構築材とみられる火熱をうけた粘質土が崩落した状態で検出されている。袖部は暗黄褐色粘質土により構築され、幅10cmで35cm程度住居内に張り出す。この両袖間の焚口部分には土師器甕が2個体横倒状態で出土している。

内部施設 住居対角線上に柱穴が4カ所配置され

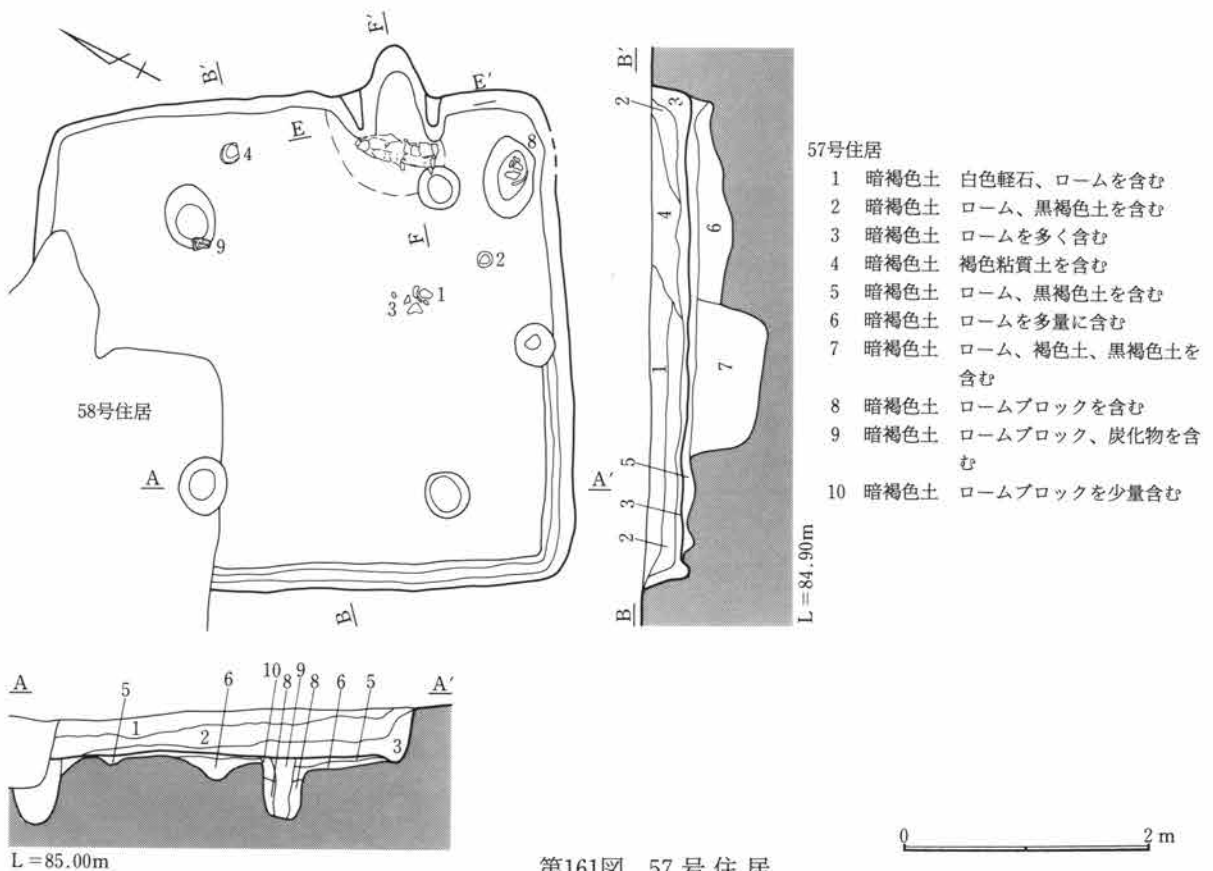
る。各柱穴は径40cm程度で、深さは南東柱穴70cm、北東柱穴85cm、南西柱穴53cm、北西柱穴55cmを計測し、東辺側の柱穴がやや深めとなる傾向がある。配置規模は東西225cm、南北200cmの長方形配置で、北・南壁から100cm、東・西壁から70cm内側に位置する。南東隅には60cm×40cm、深さ14cmの貯蔵穴が存在する。また南西隅を中心に幅15cm、深さ8cmの周溝が認められる。全周せず東半部には存在しない。南壁部では中央に位置する径30cm、深さ25cmの小穴に接している。

床 ロームを含む暗褐色土により張り床が施される。

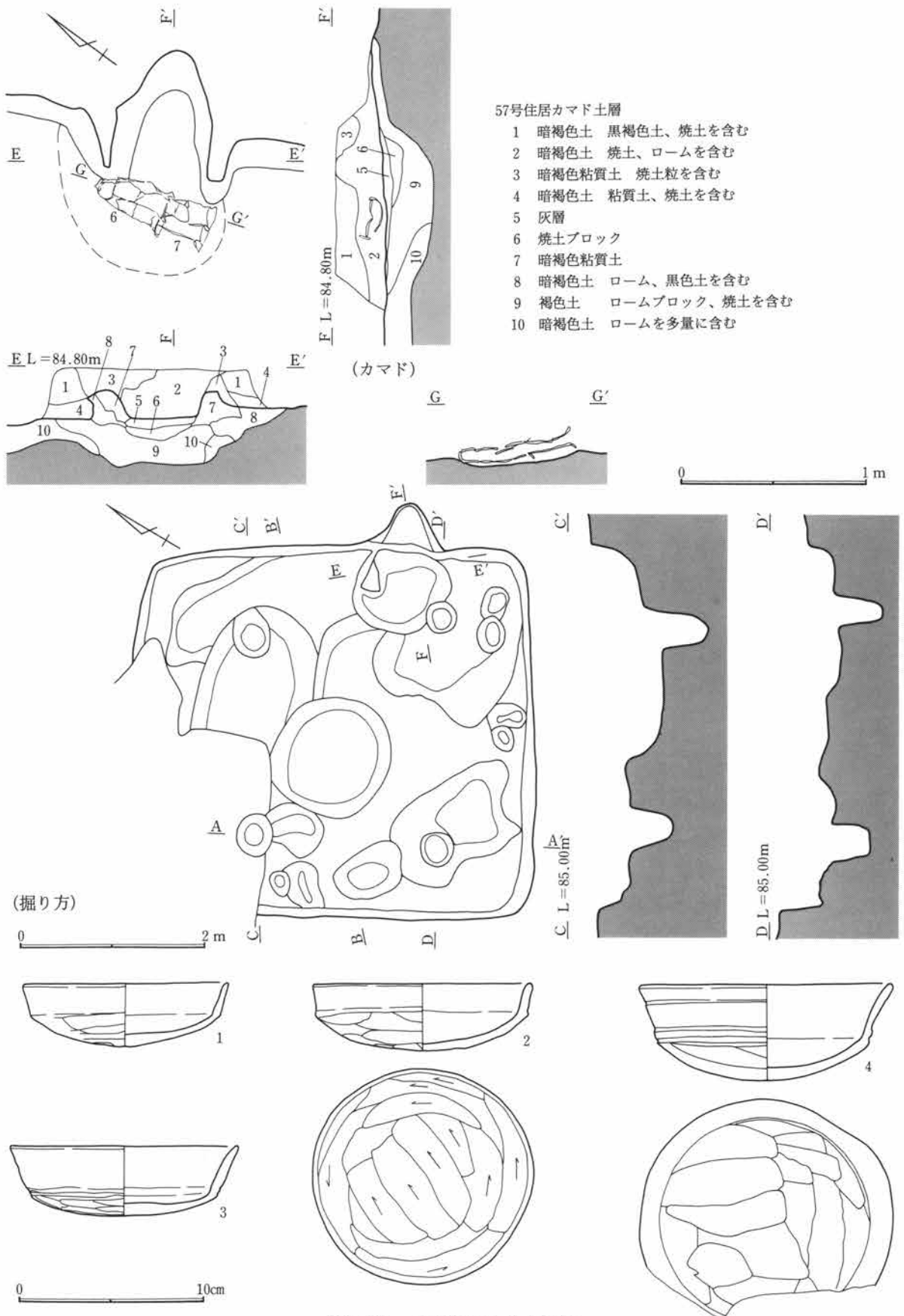
掘り方 土坑状の掘り込みが全体にみられる。

遺物出土状態 カマド焚口に土師器甕が横倒する。7が6の中に重なった状態で出土している。8が貯蔵穴内、1～4が床面上、5および9の棒状礫は埋没土中から出土している。

時期 出土遺物から6C、後半に比定される。

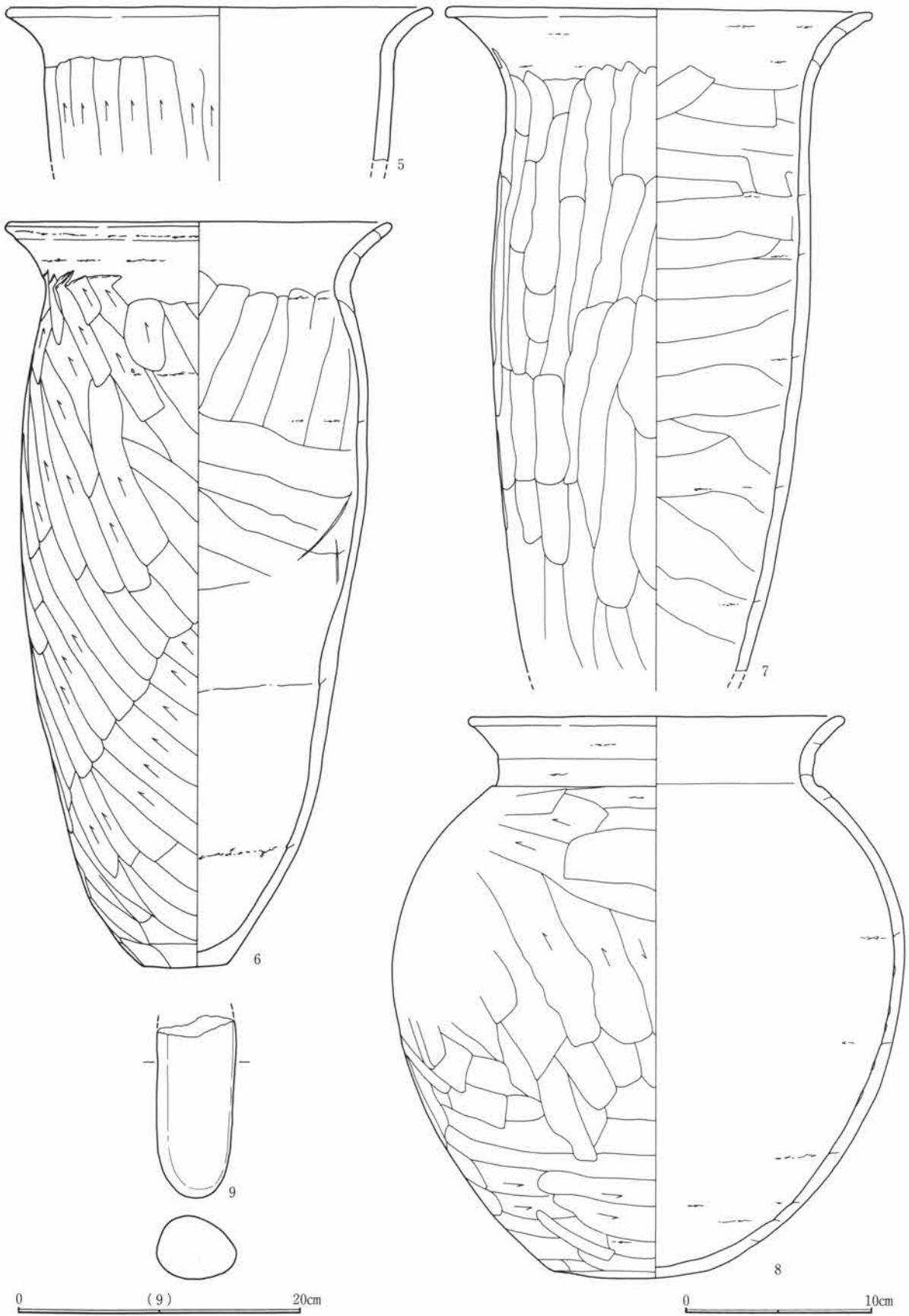


第161図 57号住居



第162図 57号住居と出土遺物

II 発掘調査の記録



第163図 57号住居出土遺物

58号住居 (第164~166図 P L. 125・126)

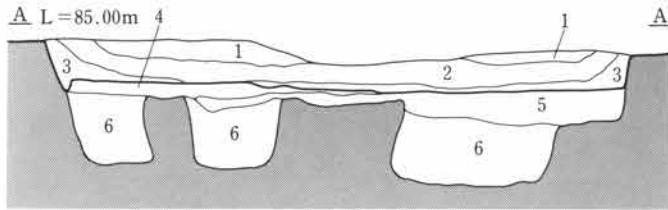
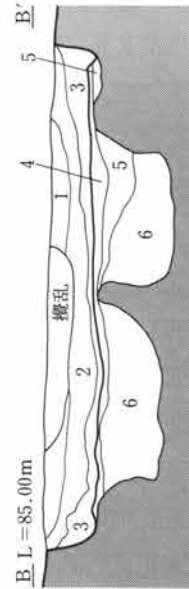
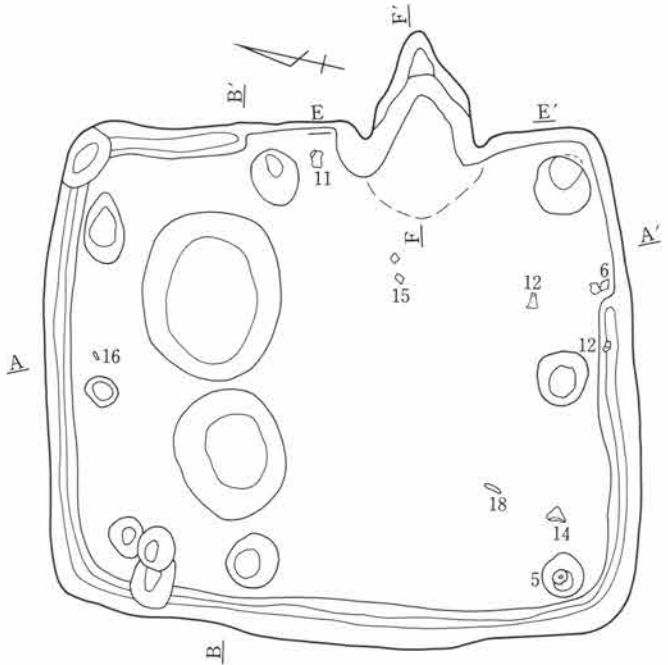
位置 Bt・u-3・4・5

重複

主軸方向 N-80°-E 床面積 16.5m²

形態 主軸方向の対辺に長軸をもつ横長長方形を呈するが、東壁が西壁に比しやや長い。各隅は丸みをもち各辺は直線的である。

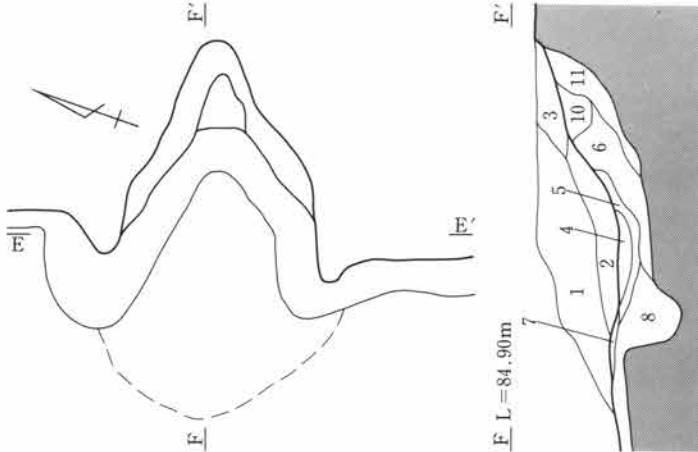
規模 4.2m×4.7m



58号住居

- 1 暗褐色土 褐色土、炭化物、白色軽石を含む
- 2 暗褐色土 炭化物を多く含む
- 3 暗褐色土 ロームブロック、炭化物を含む
- 4 暗褐色土 褐色粘質土を含む
- 5 黒褐色土 暗褐色土、ローム、炭化物を含む
- 6 褐色土 ロームブロック、焼土を含む

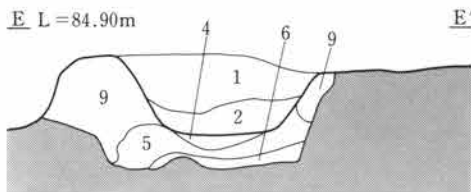
0 2 m



58号住居カマド土層

- 1 褐色土 ローム、焼土を含む
- 2 褐色土 焼土を多量に含む
- 3 褐色土 焼土ブロックを多量に含む
- 4 褐色土 焼土、灰を含む
- 5 暗褐色土 粘質土、灰、焼土を含む
- 6 暗褐色土 ローム、焼土を含む
- 7 灰層
- 8 黒褐色土 灰、焼土粒を含む
- 9 暗褐色土 粘質土、ローム、焼土を含む
- 10 褐色土 焼土、炭化物を含む
- 11 褐色土 ロームを多量に含む

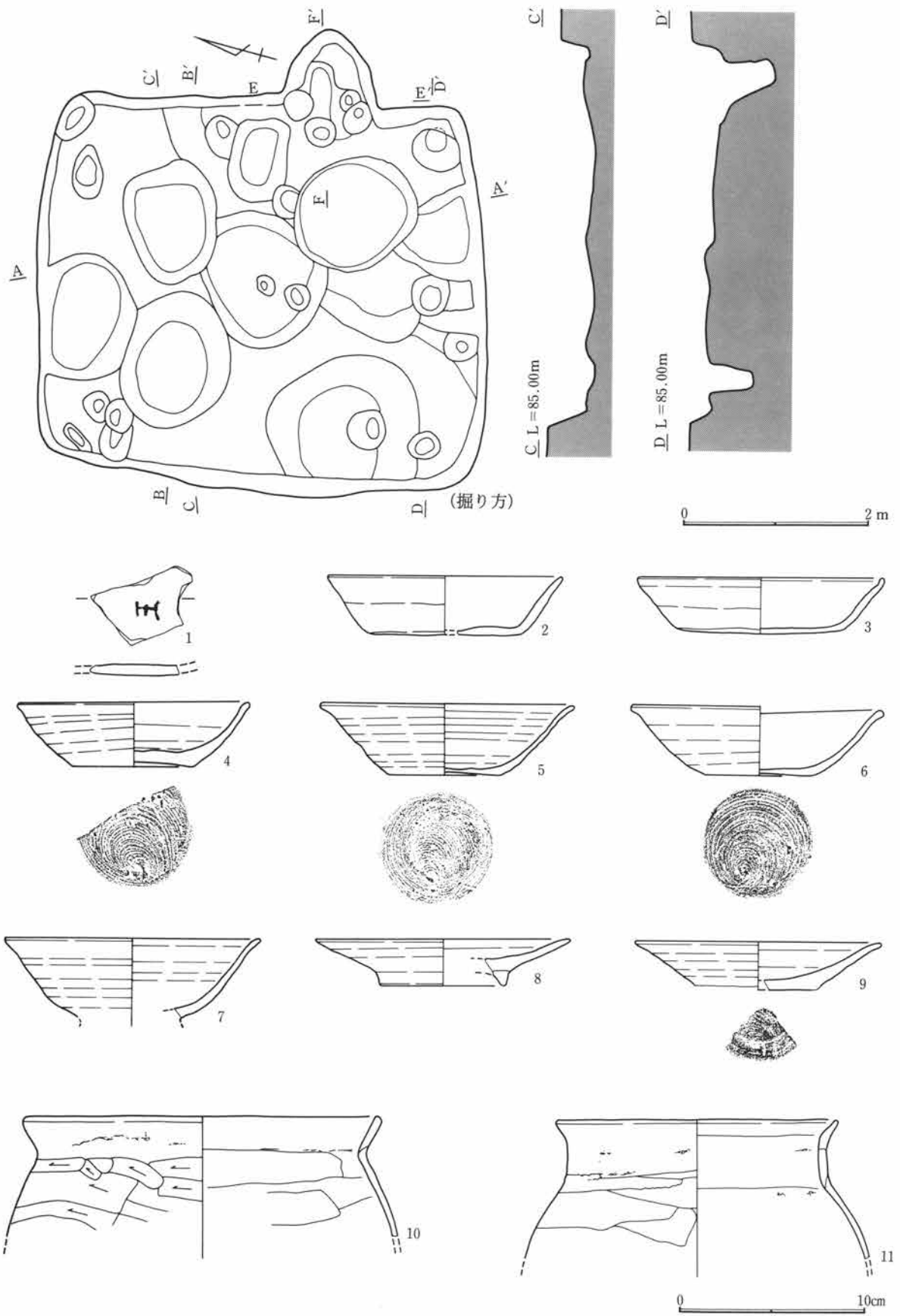
(カマド)



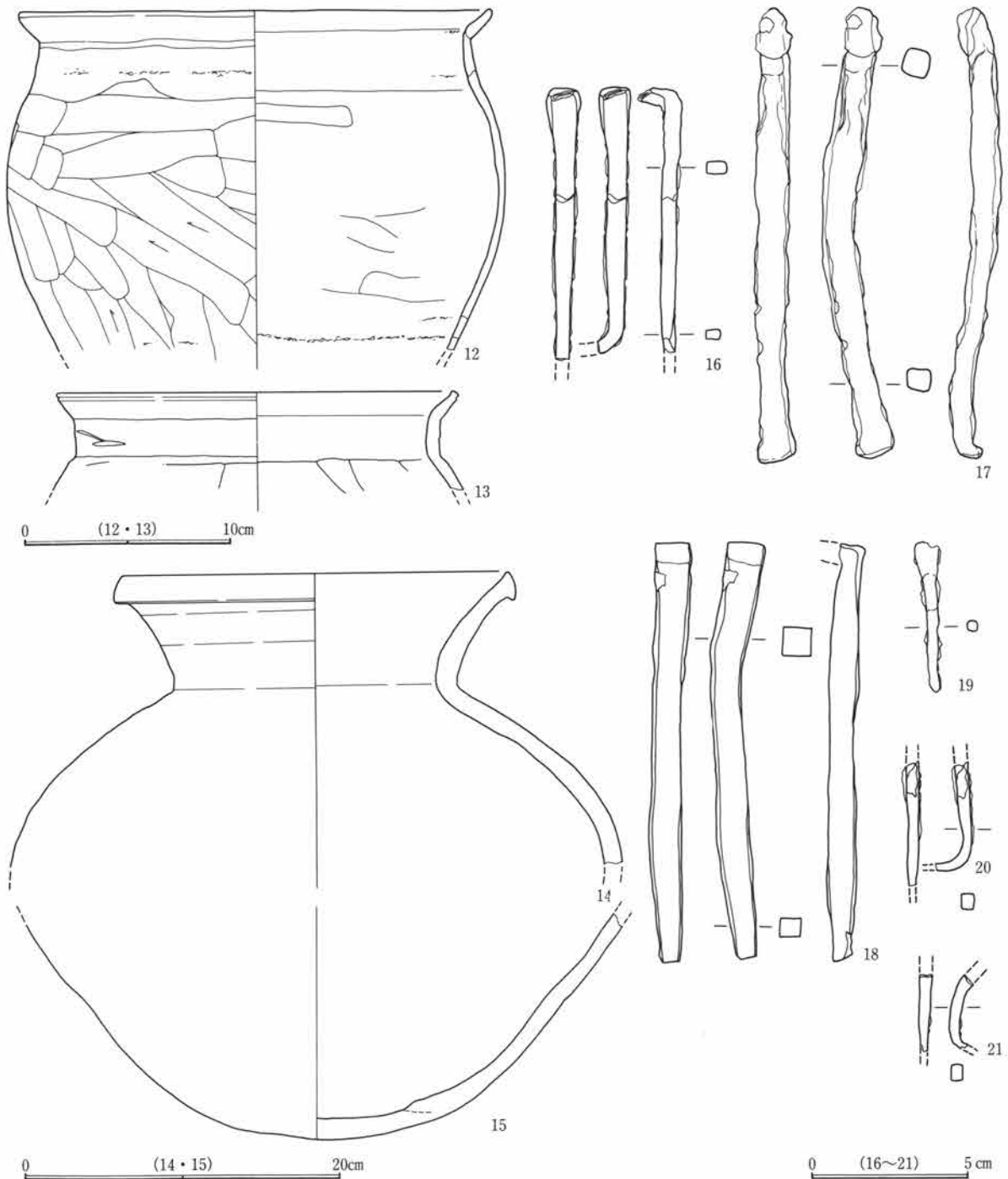
第164図 58号住居

0 1 m

II 発掘調査の記録



第165図 58号住居と出土遺物



第166図 58号住居出土遺物

カマド 東壁に設置され、北東隅から3分の2程度南寄りに位置する。袖はロームを含む暗褐色土により構築され、袖石は検出されないが掘り方調査により両袖端部に設置痕とみられる小穴が存在する。規模は焚口80cm、奥行120cmで、底面には灰のほか炭化物が堆積する。

内部施設 壁下に幅15cm、深さ10cmの周溝が巡る。全周せず南東隅部分およびカマド北側は途切れている。柱穴は計7カ所検出している。北東隅・南東隅・南西隅に1穴ずつ、さらにこの柱穴間に1穴ずつ配置される。未検出であるが北西隅にも存在する可能性があり、8柱穴配置をとるものと考えられる。な

II 発掘調査の記録

お、深さは各隅の柱穴が25cm~50cm、中間に配される柱穴が5cm~25cmと隅柱穴がより深い。

床 暗黄褐色土による張り床が施される。堅く水平な面が形成されている。

掘り方 土坑状の掘り込みが重複して加えられ、ロームを含む褐色土により埋め戻される。

遺物出土状態 土器類は6が床面上、5が南西隅柱穴、7が南東隅柱穴、10・11・14がカマド内で検出され、他は埋没土中から出土している。鉄製品はいずれも釘で16が床面上、他は埋没土から出土した。

時期 出土遺物から9C、中葉に比定される。

59号住居 (第167・168図 P.L. 62・126)

位置 Bs・t-2・3

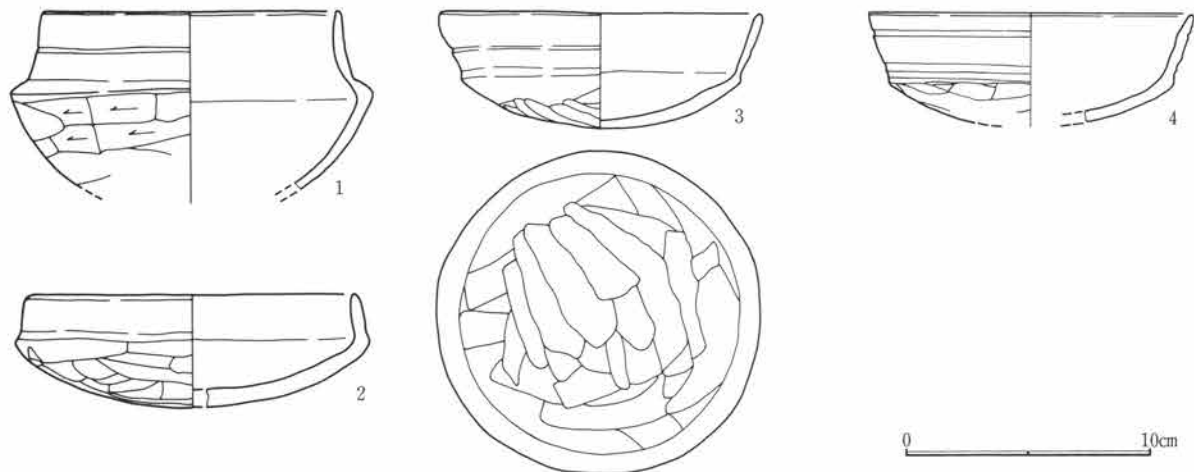
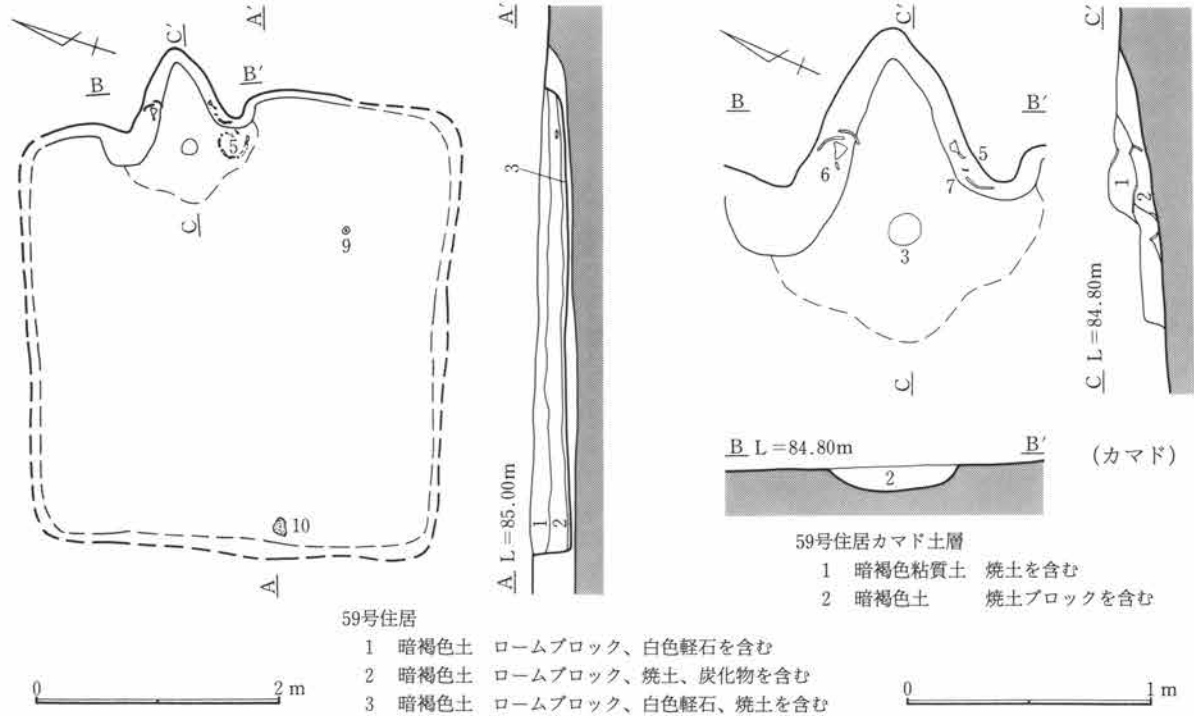
重複 88号住居と重複する。平面・断面観察から59号住居が新しい。

主軸方向 N-72°-E 床面積 11.3m²

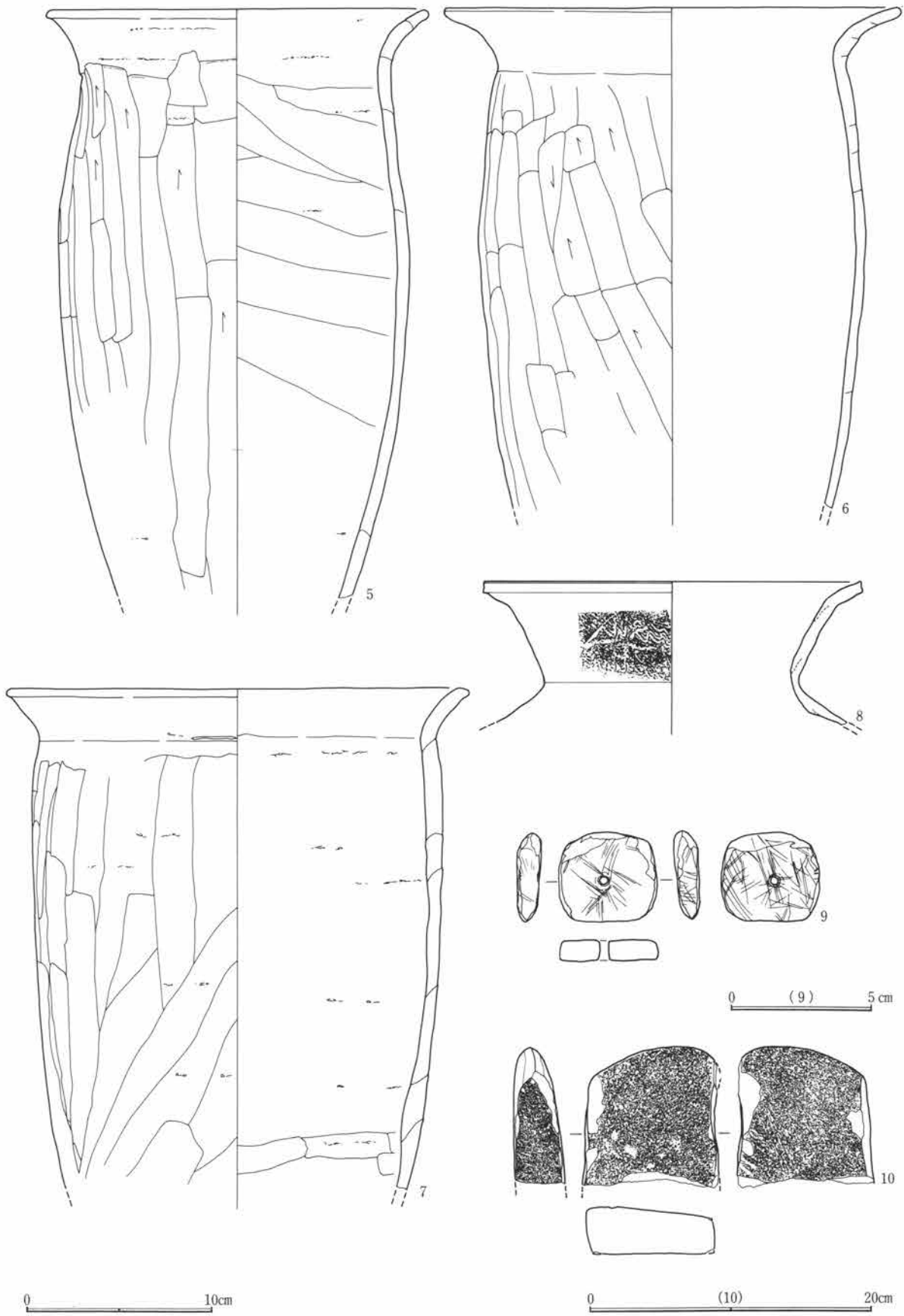
形態 居形態に不明瞭な部分があるが、主軸方向に長軸をもつ縦長長方形を呈する。

規模 3.4m×3.7m

カマド 東壁北寄りに設置され、北東隅から3分の1に位置する。埋没土中には天井材とみられる火熱を受けた粘質土がカマド使用面に直接堆積してい



第167図 59号住居と出土遺物



第168図 59号住居出土遺物

II 発掘調査の記録

る。規模は焚口80cm、奥行き70cmである。

内部施設 柱穴、周溝もしくは貯蔵穴などについては認められていない。

床 ロームを含む暗褐色土により張り床が施される。

掘り方 埋没土中であるため、掘り方は不明である。

遺物出土状態 土器類は3・5～8がカマド内、9・10が床面上、他は埋没土から出土した。9・10は床面上で検出している。

時期 出土遺物から7 C.中頃に比定される。

60号住居 (第169図 P.L. 62・127)

位置 Bg・h-20・21

重複 攪乱などの影響をうけている。

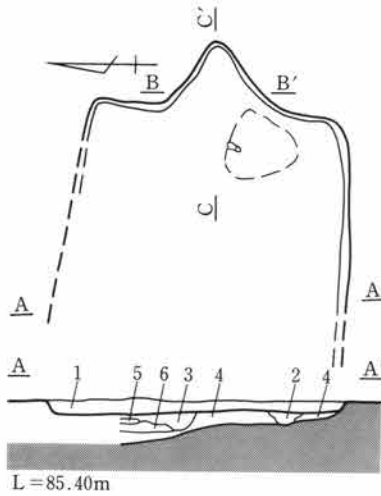
主軸方向 N-94°-E **床面積** -

形態 住居東半のみ検出され、西半は不明である。

規模 2.2m×-

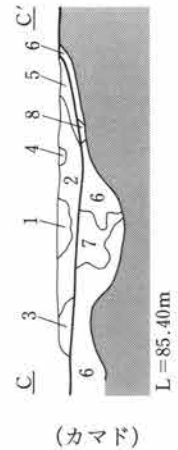
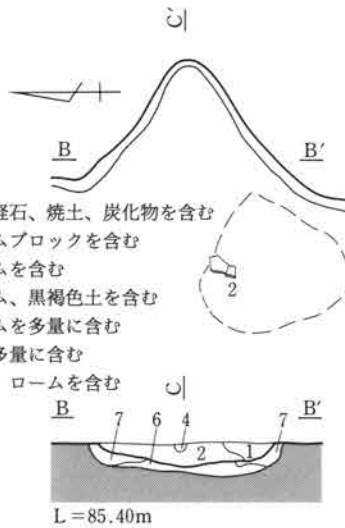
カマド 東壁中央に設置される。規模は焚口80cm、60cmを測るが、残存状況は悪い。

内部施設 住居自体の残存状態が悪く、内部施設とみられる痕跡も不明である。

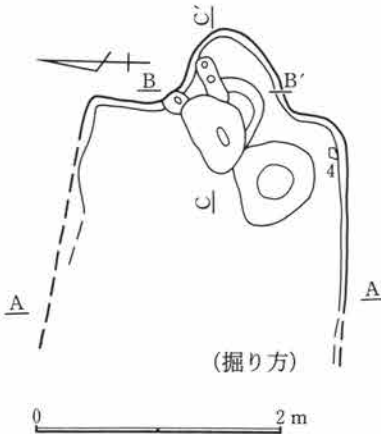


A' 60号住居

- 1 暗褐色土 白色軽石、焼土、炭化物を含む
- 2 黒褐色土 ロームブロックを含む
- 3 暗褐色土 ロームを含む
- 4 暗褐色土 ローム、黒褐色土を含む
- 5 褐色土 ロームを多量に含む
- 6 焼土ブロックを多量に含む
- 7 黒褐色土 焼土、ロームを含む



(カマド)

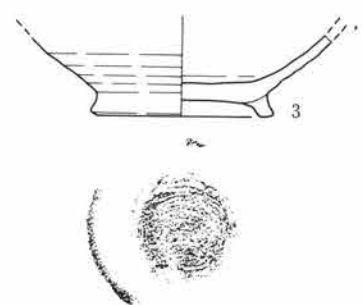
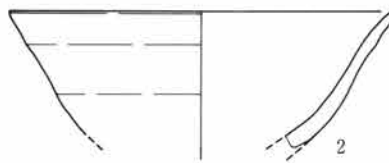
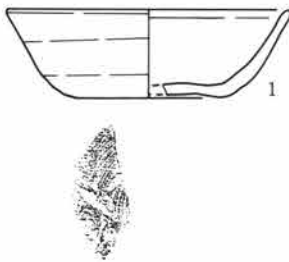


(掘り方)

60号住居カマド土層

- 1 黒褐色土 軽石粒、焼土を含む
- 2 暗褐色土 焼土を多く含む
- 3 暗褐色土 軽石粒、焼土を含む
- 4 焼土ブロック
- 5 暗褐色土 焼土ブロックを含む
- 6 暗褐色土 ロームを多量に含む
- 7 黒褐色土 ローム粒、焼土粒を含む
- 8 暗褐色土 焼土粒を多量に含む

0 1 m



第169図 60号住居と出土遺物

0 10cm

床 掘り方埋土の上面が床面となるが、とくに張り床として硬化面は認められない。

掘り方 不明瞭である。

遺物出土状態 2・4が床面上、他は埋没土から出土している。

時期 出土遺物から9C.前半に比定される。

61号住居 (第170・171図 P.L. 63・127)

位置 Bj-21・22

重複 近年の耕作溝による攪乱を受けている。

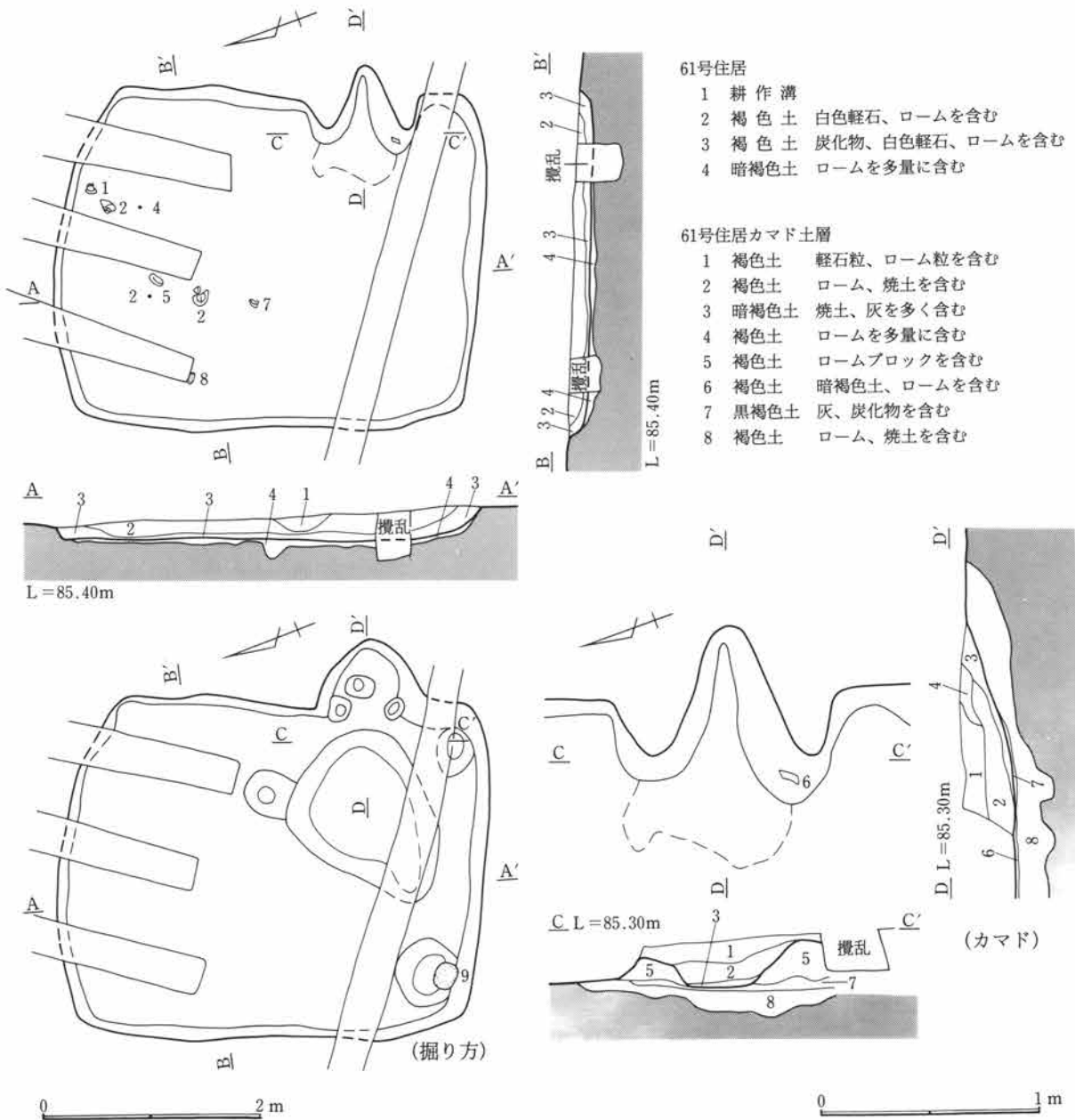
主軸方向 N-111°-E 床面積 (9.2m²)

形態 主軸方向の対辺に長軸をもつ横長長方形を呈する。各隅は丸みをもつが、ほぼ矩形を示している。

規模 2.9m×3.8m

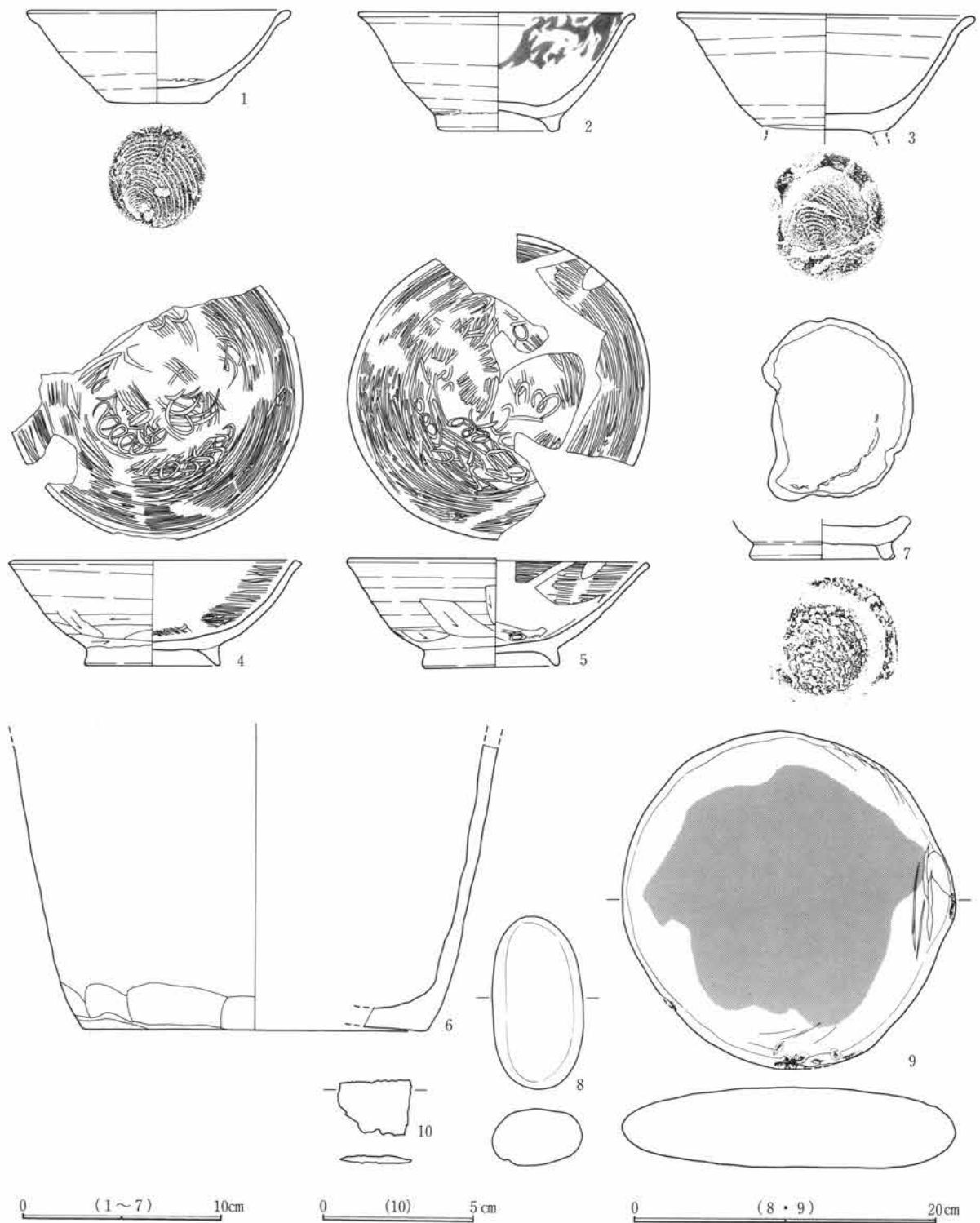
カマド 東壁に設置され、北東隅から3分の2程度南寄りに位置する。袖はロームを多量に含む褐色土により構築され、30cm程住居内に張り出す。掘り方調査により袖部分に袖石設置痕とみられる小穴が検出されている。

内部施設 床面上では不明であったが、掘り方調査により南東隅および南西隅に小穴が認められてい



第170図 61号住居

II 発掘調査の記録



第171図 61号住居出土遺物

る。この2穴に柱穴の可能性もあるが、対応する穴は認められていない。

床 掘り方埋土の上面を床面とする。

掘り方 カマド前に深さ20cmの浅い土坑状の掘り込みが加えられる。

遺物出土状態 1・4・5・7・8が床面上、2・3・6がカマド内、9が掘り方南西隅小穴内、10の鉄製品が埋没土から出土している。

時期 出土遺物から9C.後葉に比定される。

62号住居 (第172~175図 P.L. 64・127・128)

位置 Bj・k・1-22・23

重複 北東隅部分で41号住居と重複する。平面・断面観察から62号住居が古い。また住居南東隅から北西隅にかけて耕作溝による攪乱を受ける。

主軸方向 N-83°-E 床面積 (24.8㎡)

形態 主軸方向がわずかに長い縦長長方形を呈するが、短軸との差は極めて少ない。各隅は丸みをもつが、ほぼ矩形を示す。各辺は直線的であるが、南壁中央部には張り出し部があり、周溝もこの形状に沿っている。

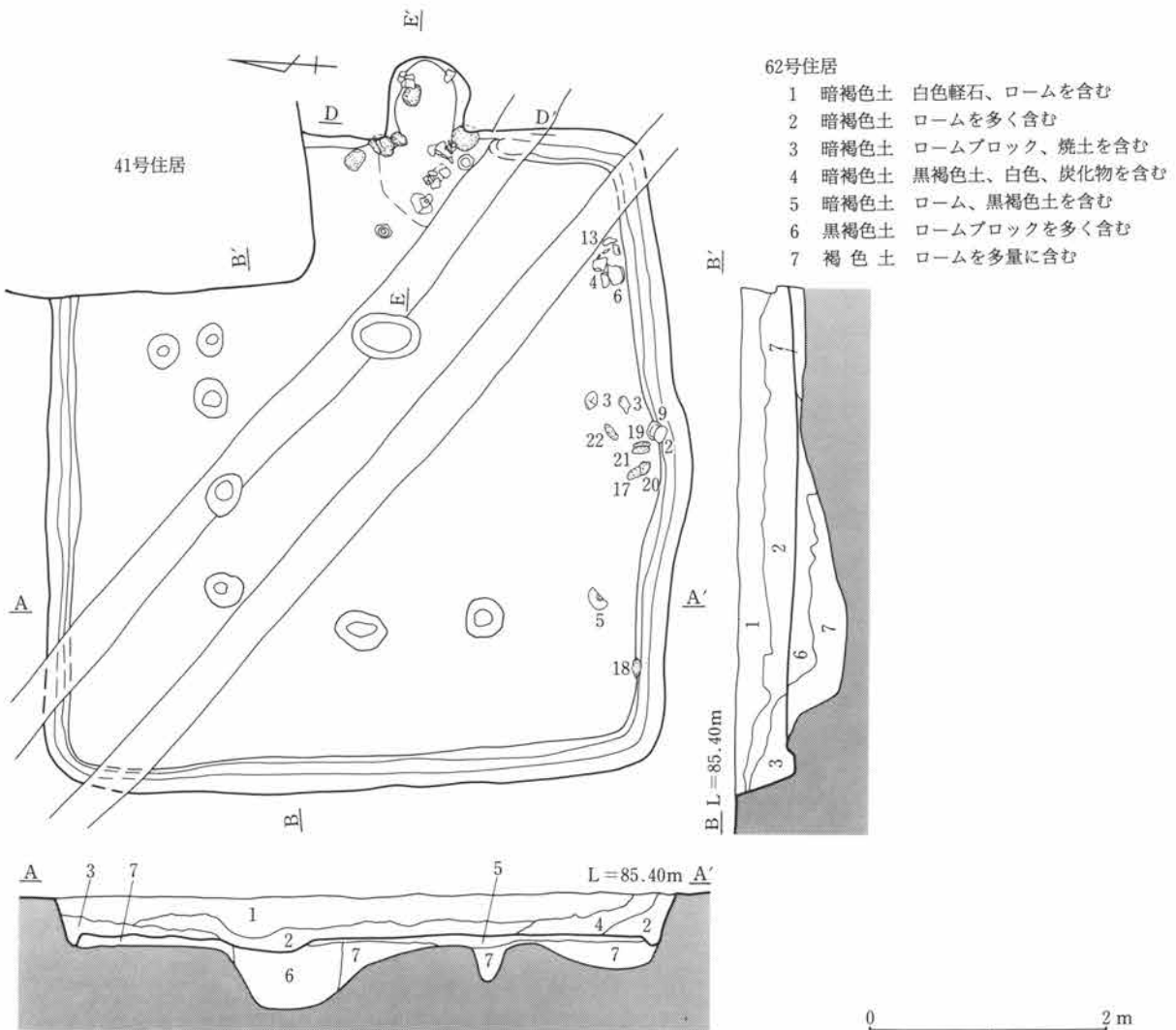
規模 5.2m×5.3m

カマド 東壁中央に設置される。天井部、煙道は残存しない。右袖に角閃石安山岩、左袖に粗粒安山岩

の礫材が配置され、内部にも粗粒安山岩礫が残っており、礫によりカマドが構築されていたものと考えられる。規模は焚口60cm、奥行き80cm。埋没土には天井材とみられる火熱をうけた粘質土が、使用面に直接堆積している。

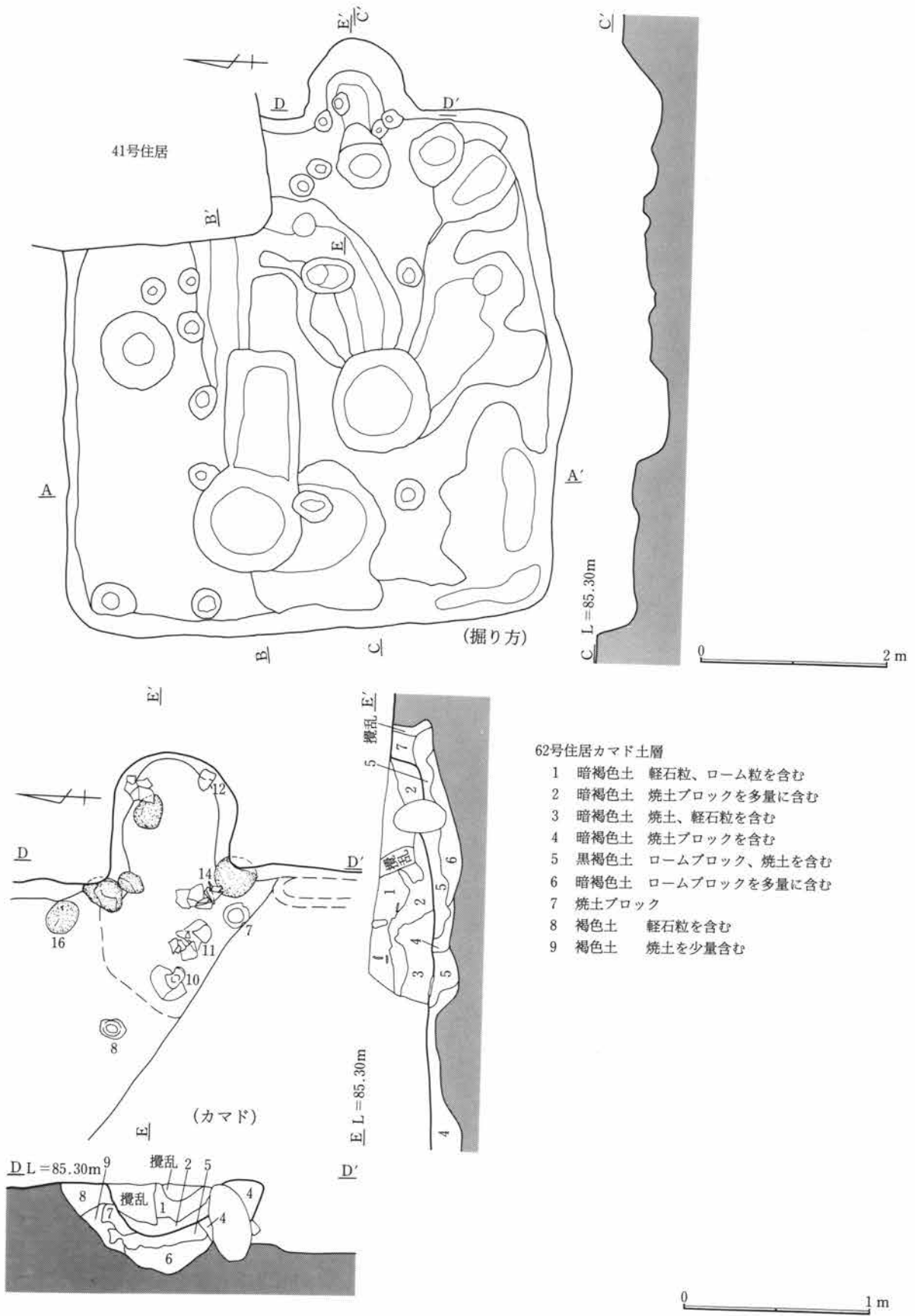
内部施設 幅15cm、深さ10cmの周溝が壁下に沿って巡る。ほぼ全周するがカマド北側は途切れているようである。なお、この周溝は南壁部では壁に沿って張り出している。床面上では未確認であったが、掘り方調査により柱穴の可能性のある小穴が複数検出されている。掘り方により一部遺失しているが、壁から130cm~150cm内側、住居対角線上に配置されるものとみられる。

床 ロームを含む暗褐色土により張り床が施され



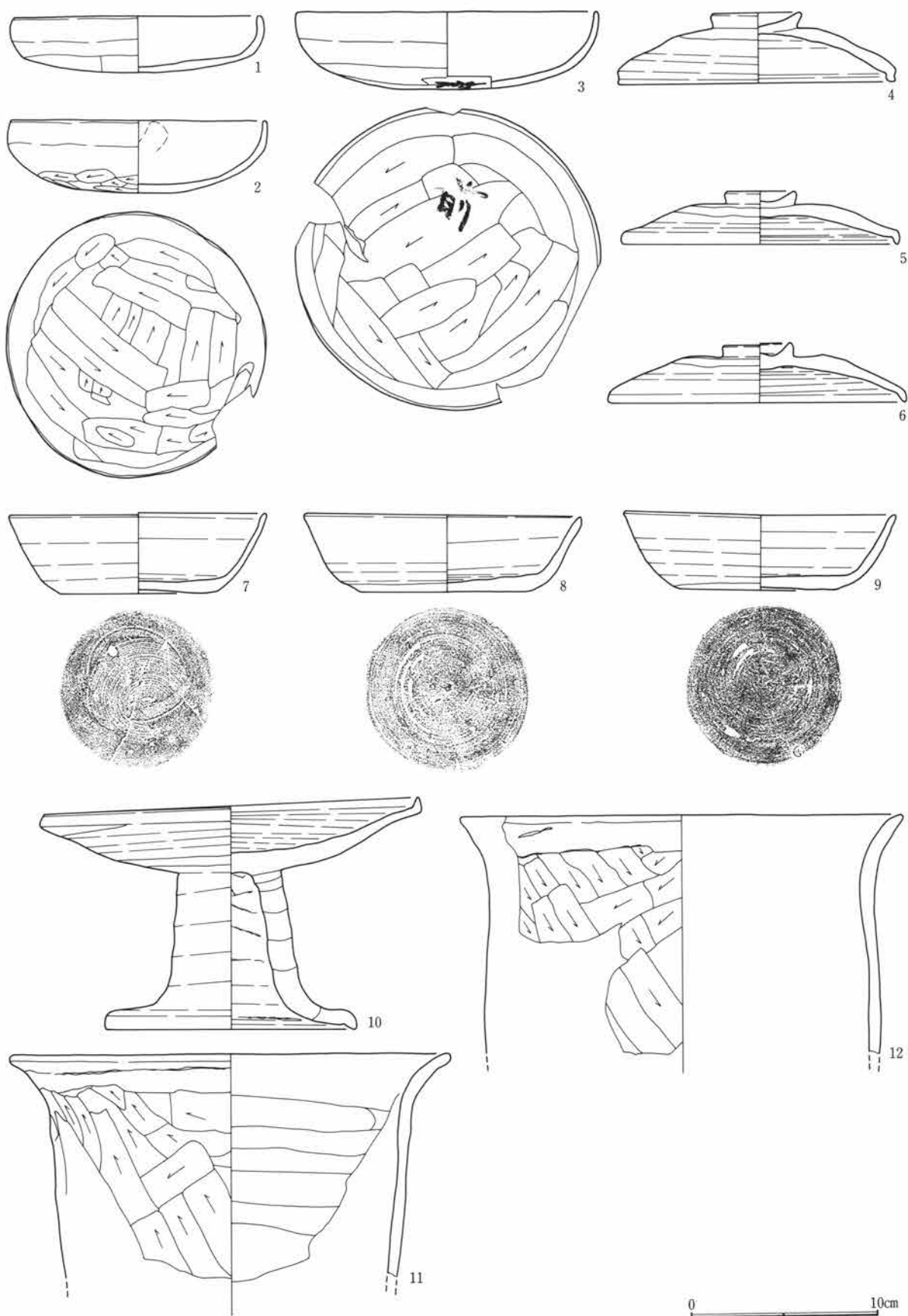
第172図 62号住居

II 発掘調査の記録



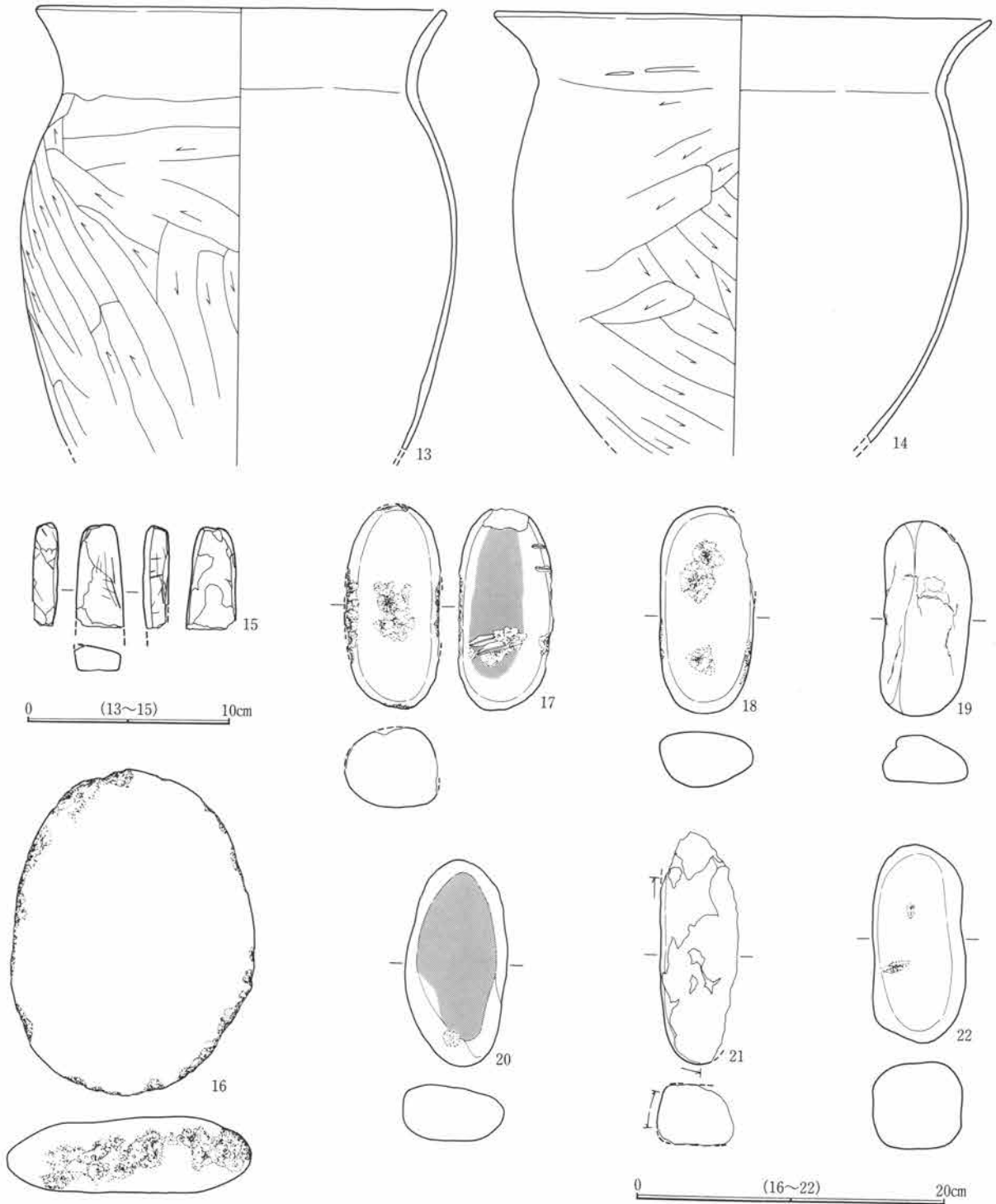
第173図 62号住居

4 調査した遺構と遺物



第174図 62号住居出土遺物

II 発掘調査の記録



第175図 62号住居出土遺物

る。ほぼ水平で堅く良好な面が形成されている。
掘り方 住居全体に不定形な土坑状の掘り込みが重複して加えられ、暗褐色土、黒褐色土で埋め戻される。

遺物出土状態 土器類は3・6・13が床面上、7・

8・10~12・14がカマド内、他は埋没土。石製品は16の円礫がカマド左袖付近、17~22の棒状礫が南壁中央の張り出し部分の床面上で検出されている。

時期 出土遺物から8C、中葉に比定される。

64号住居 (第176~178図 P L. 65・128・129)

位置 Bl・m-24・0

重複 他遺構との重複はとくに認められない。

主軸方向 N-82°-E 床面積 13.5m²

形態 主軸方向の対辺に長軸をもつ横長長方形を呈する。南北壁はほぼ同一規模であるが、東西壁は東側が西側に比べやや長くなっている。各隅は丸みをもつが、各辺は直線的である。

規模 3.4m×4.7m

カマド 東壁中央に設置される。埋没土には天井部構築材とみられる火熱を受けた暗灰褐色粘質土が、使用面に直接堆積している。袖部はこれと類似する粘質土により構築され幅20cmで40cm~50cm住居内に張り出す。カマドは焚口60cm、奥行き80cmの規模をもつ。

内部施設 幅15cm、深さ8cmの周溝が壁下に沿って巡る。全周はせず北西隅および東壁カマド南側は途切れている。南東隅には75cm×110cm、深さ30cmの貯蔵

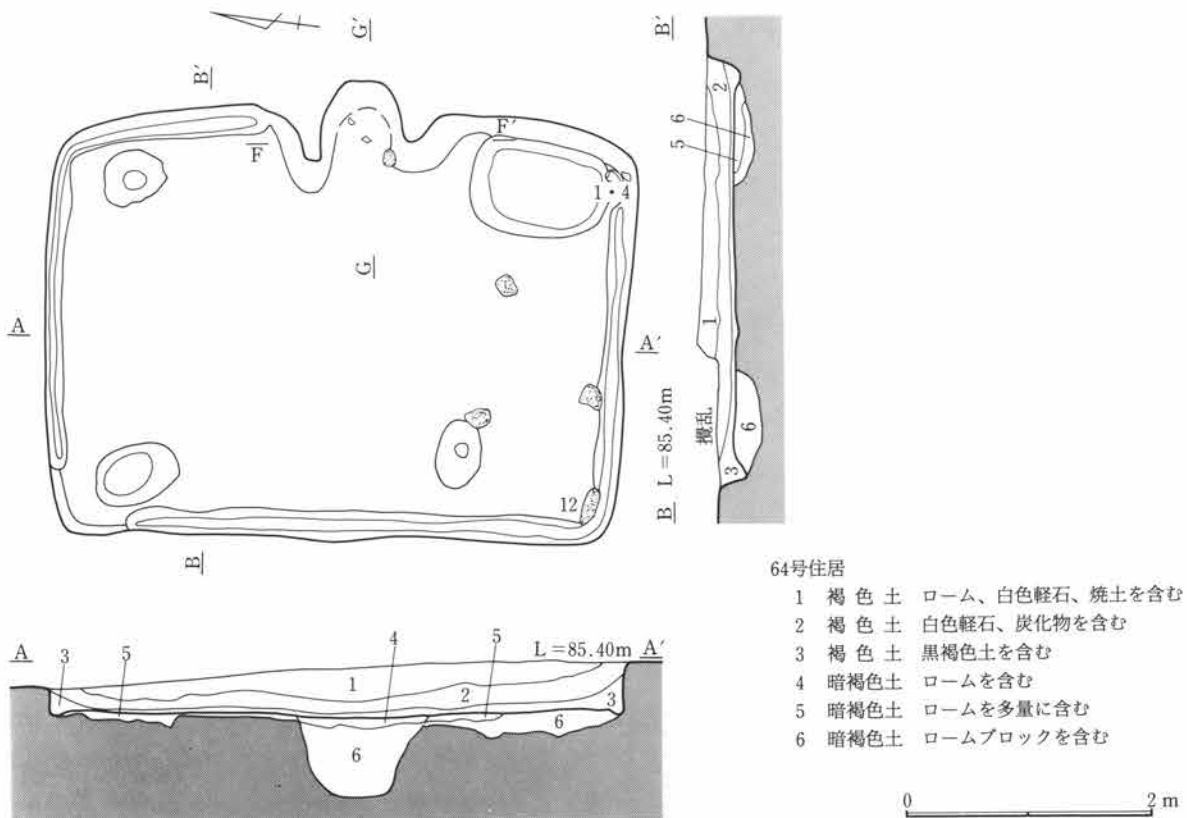
穴とみられる掘り込みが存在する。また、北東隅、北西隅および南西部に径40cm~50cm、深さ20cm~30cmの柱穴とみられる小穴が検出されている。この配置からみると未検出である南東側の1穴についても存在した可能性が高い。

床 ロームを含む暗褐色土により張り床が施される。ほぼ水平で、中央部分は堅く良好な面が検出されている。

掘り方 中央部に径110cm、床面下65cmの土坑状の掘り込みがあり、周辺部にはやや浅めの皿状の掘り込みが加えられる。ロームを含む暗褐色土により埋め戻される。

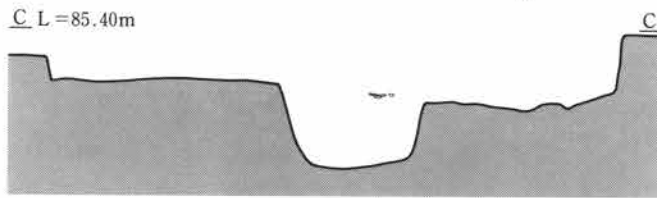
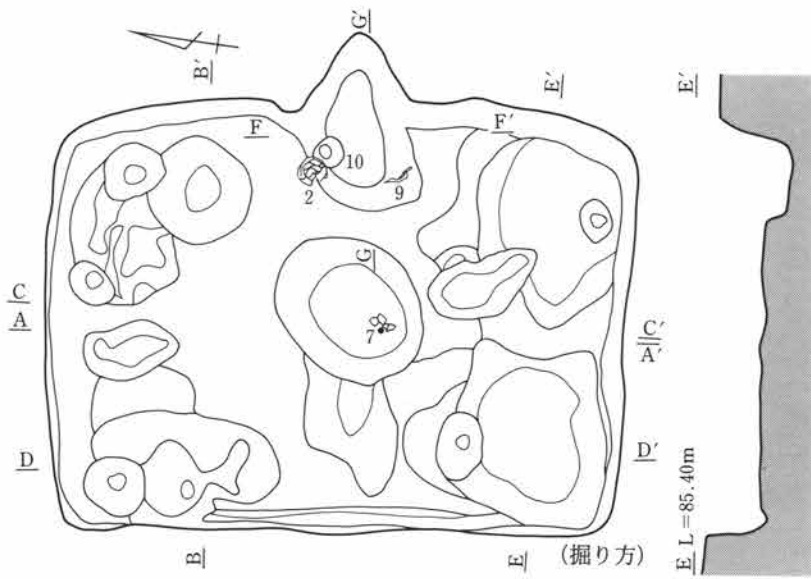
遺物出土状態 土器類は4・5・8が貯蔵穴、2・6・9・10がカマド、7が中央の土坑状の掘り方内、他は埋没土から出土している。11の扁平円礫は南壁周溝、12の棒状礫は南西隅に接してそれぞれ床面上から出土している。このほか埋没土から計96gの鉄滓が認められている。

時期 出土遺物から8C.後葉に比定される。

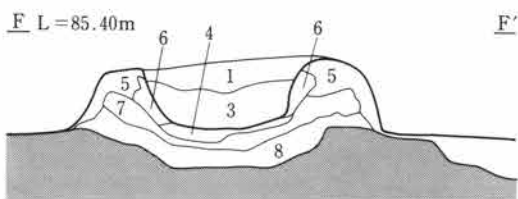
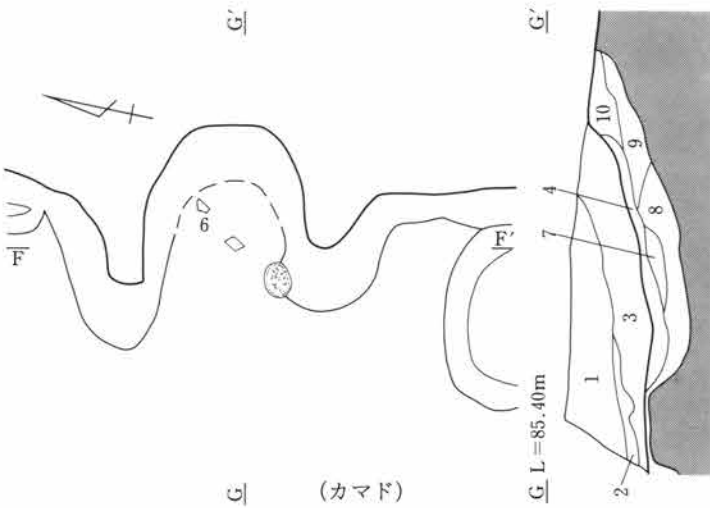


第176図 64号住居

II 発掘調査の記録



0 2 m

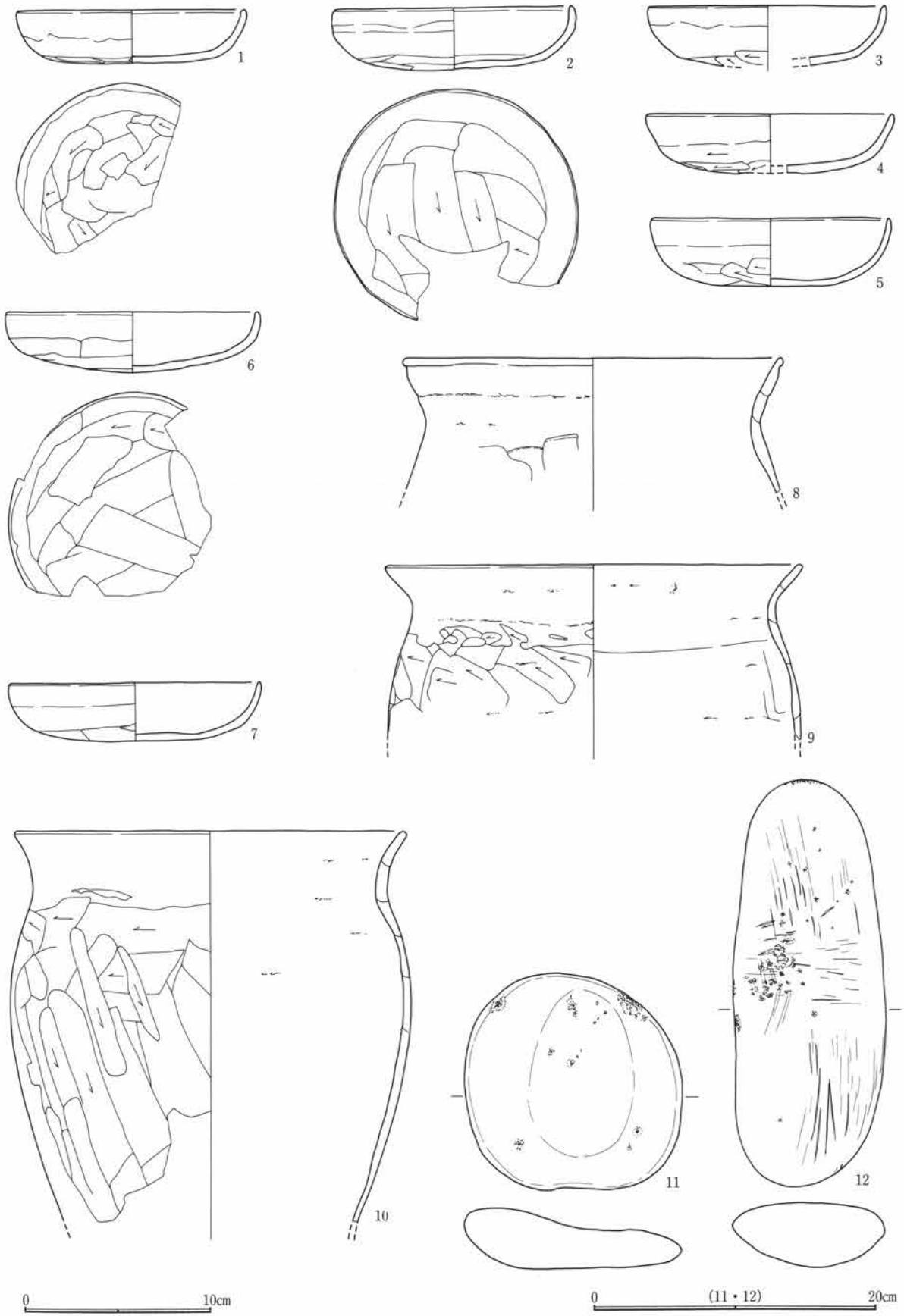


64号住居カマド土層

- 1 褐色土 軽石粒、ロームを含む
- 2 黒褐色土 炭化物、焼土を含む
- 3 暗褐色粘質土
- 4 灰層
- 5 灰白色粘質土
- 6 暗褐色粘質土 焼土ブロックを含む
- 7 暗褐色土 ロームを少量含む
- 8 褐色土 ローム、黒色土を含む
- 9 褐色土 灰、ローム、焼土を含む
- 10 褐色土 軽石粒、焼土を含む

0 1 m

第177図 64号住居



第178図 64号住居出土遺物

II 発掘調査の記録

65号住居 (第179・180図 P L. 66・129)

位置 Bq・r-1・2

重複 住居西壁部で31号土坑、カマド部で36号土坑と重複する。この2土坑とも近世墓墳であり、住居より新しい。このほか北西隅部には近年の攪乱を受けている。

主軸方向 N-62°-E 床面積 (10.2m²)

形態 長軸・短軸差はすくないが、主軸方向の対辺に長軸をもつ横長長方形を呈する。各辺は直線的で

あまり歪みはなく、ほぼ矩形を示す。

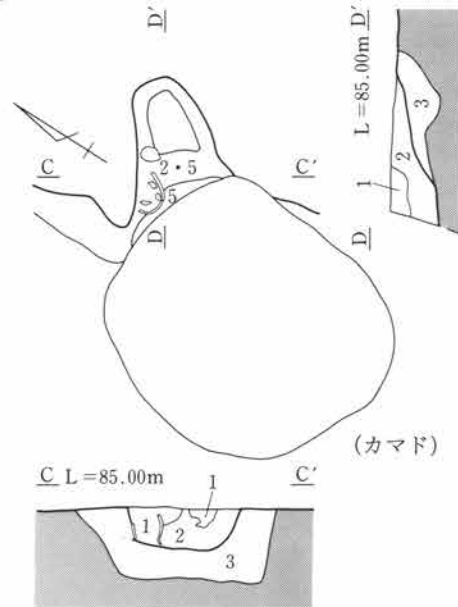
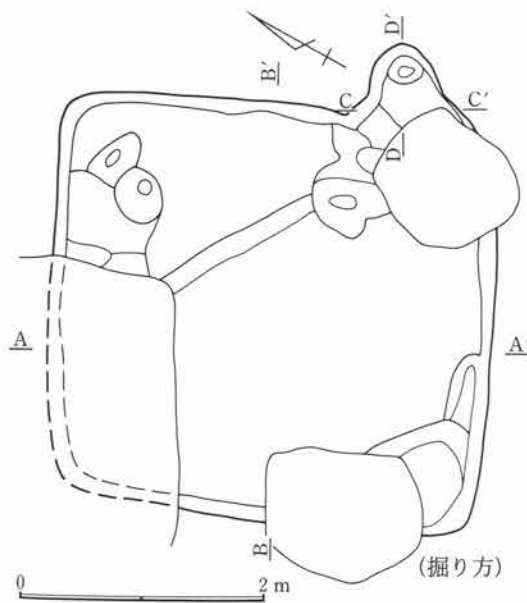
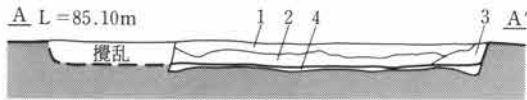
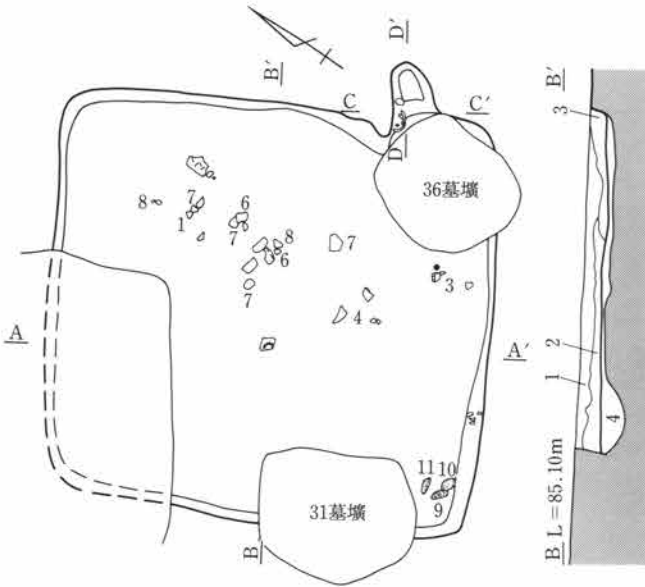
規模 3.3m×3.5m

カマド 東壁に設置され、南東隅近くに偏在する。右袖部を主として土坑による攪乱をうけているが、規模は焚口40cm、奥行き70cm程度と推定される。左壁に接して5の甕が倒位状態で出土している。

内部施設 他遺構および攪乱の影響もあるが、周溝・貯蔵穴などは確認されていない。柱穴については掘り方調査で、北東部および南東部カマド前で1

穴づつ小穴があり位置から考えて可能性がある。2穴とも径40cm、深さ16cm程度で、距離は160cmを計測する。これに対応する西側の小穴については土坑、攪乱により失われているものと考えられる。

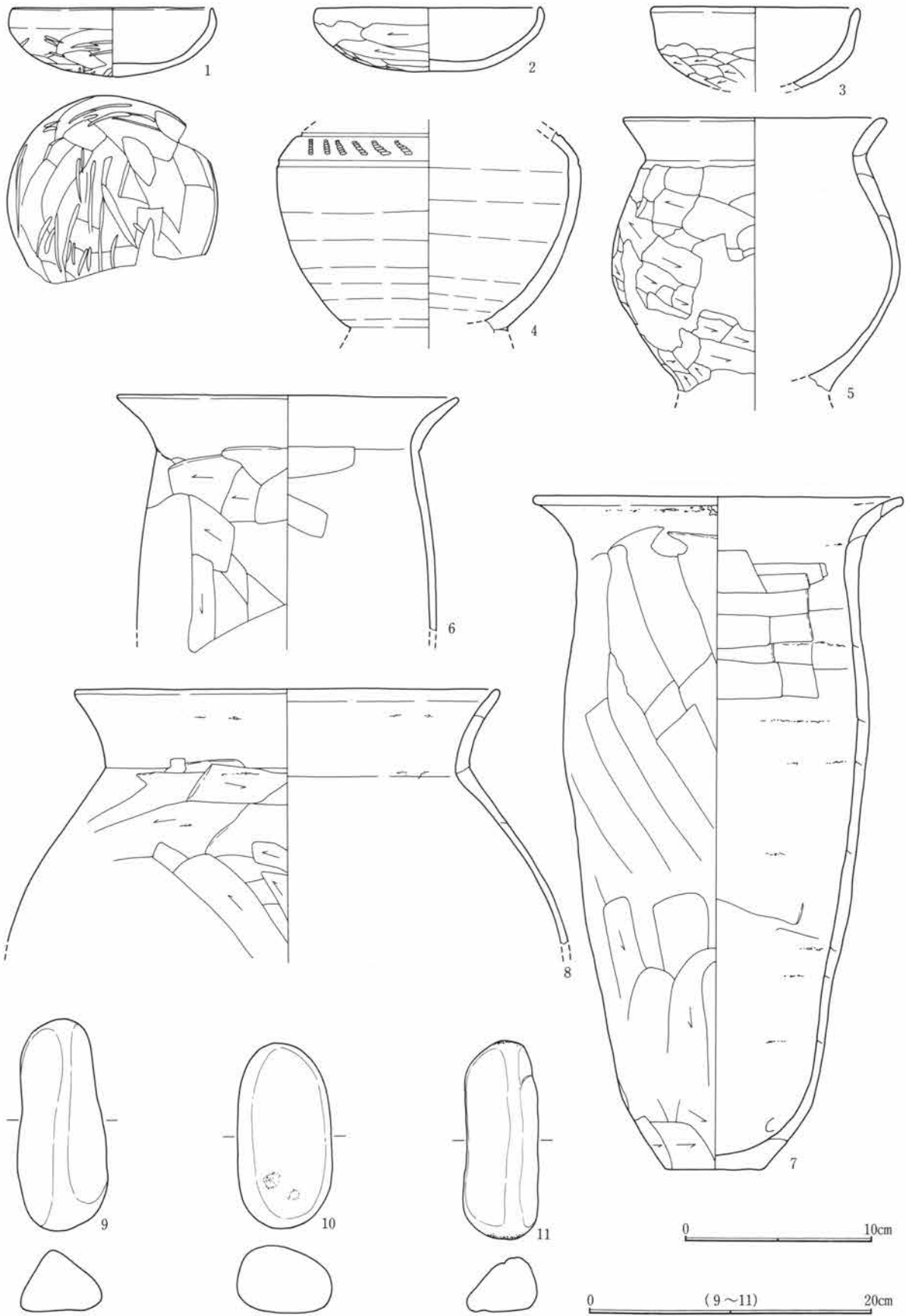
床 ロームブロックを多く含む暗褐色土によ



65号住居カマド土層

- 1 褐色土 ロームを多量に含む
- 2 暗褐色土 ローム、焼土を含む
- 3 黒褐色土 ロームブロック、焼土を含む

第179図 65号住居



第180図 65号住居出土遺物

II 発掘調査の記録

り張り床が施される。ほぼ水平で堅く良好な面が形成されている。

掘り方 あまり大きな掘り込みをもたない。床面下10cm前後掘り下げ、暗褐色土を埋め戻し床面を形成している。

遺物出土状態 遺物出土は重複などにより住居中央から北東部に限定される。土器類では1・6～8が床面上、2・5がカマド左壁に接して検出され、3・4は埋没土下部から出土している。9～11の棒状礫は南西隅床面上から出土している。

時期 出土遺物から7 C. 後期に比定される。

66号住居 (第181・182図 P.L. 67・130)

位置 Bp・q・r-24・0・1

重複 耕作などによる攪乱もあり残存状況は悪い。とくに東半部はカマドを含め不明な部分が多く、掘り方により形状が把握できる程度である。

形態 残存状況が悪いため確定できないが、主軸方向に長軸をもつ縦長長方形を呈するものとみられ

る。

規模 3.5m×—

カマド 使用面はほとんど残存せず、形状は不明である。掘り方調査により東壁部に設置されていたことが確認できたのみである。

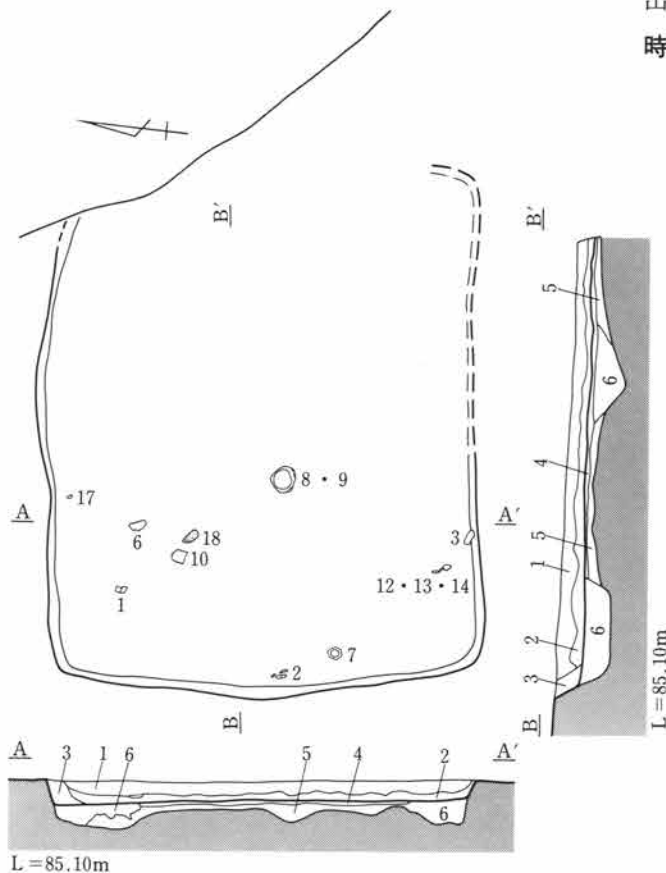
内部施設 残存状態が悪く不明な部分が多いが、周溝は検出していない。そのほかについてもとくに確認していない。

床 ロームブロックを含む暗褐色土により張り床が施される。部分的に堅くしまりのある面が検出されている。

掘り方 中央部が浅く、周辺部がやや深い掘り込みをもち、ロームを含む褐色土により埋め戻される。

遺物出土状態 土器類は2・3・6～9が床面上、1・10は床面から15cmほど上位から出土している。11の砥石はカマド、12～14の鉄製釘は南西壁付近、17の土錘は北壁付近、18の棒状礫は北西部のそれぞれ床面上で検出され、15・16の鉄製釘は埋没土から出土している。

時期 出土遺物から9 C. 前葉に比定される。



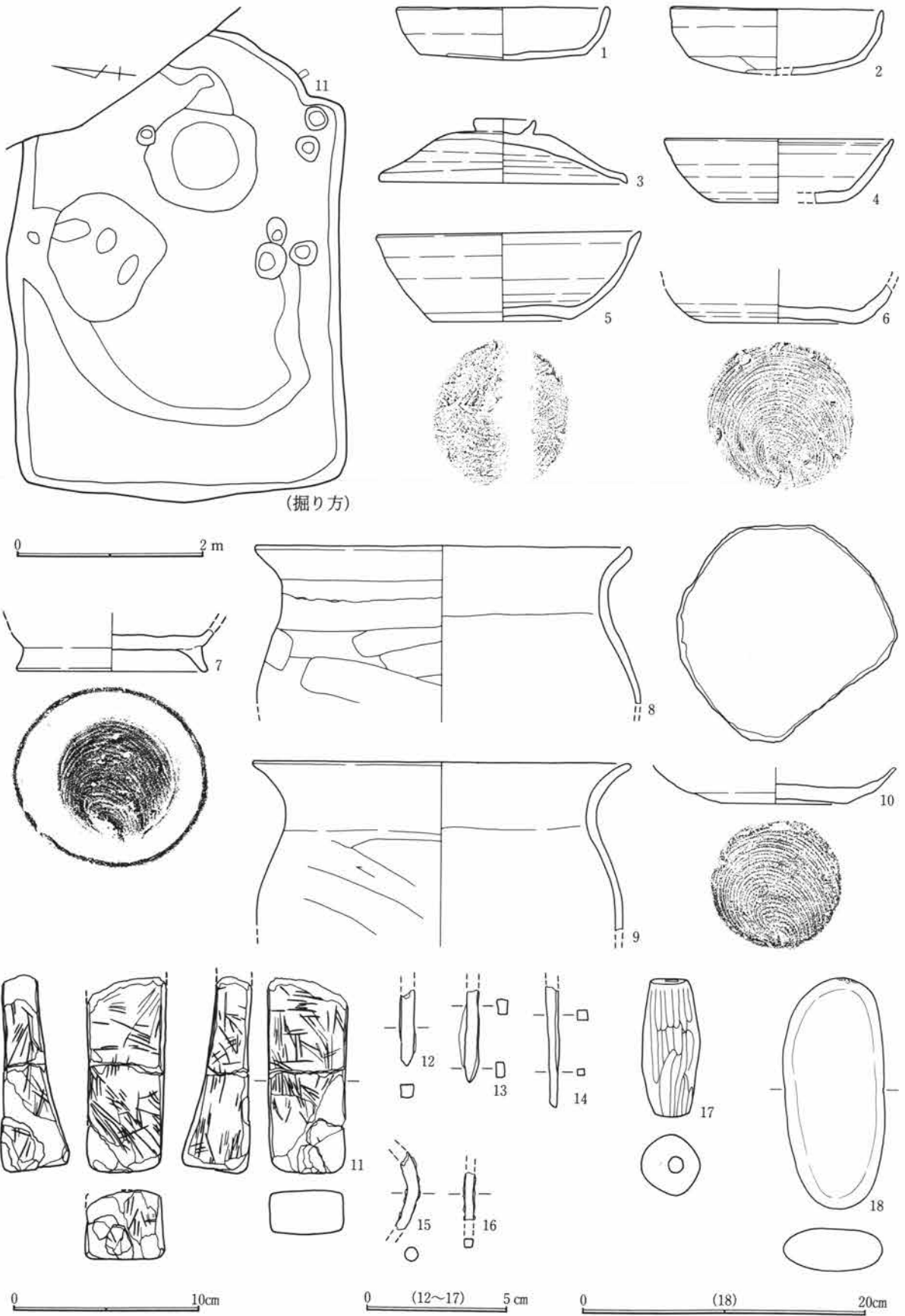
66号住居

- 1 暗褐色土 白色軽石、ローム、焼土を含む
- 2 暗褐色土 白色軽石、ローム、黒褐色土を含む
- 3 暗褐色土 ロームブロックを含む
- 4 暗褐色土 ロームブロックを含み、貼床を形成する
- 5 褐色土 ロームを多量に含む粘質土
- 6 黒褐色土 ローム、褐色粘質土を含む

0 2 m

第181図 66号住居

4 調査した遺構と遺物



第182図 66号住居と出土遺物

II 発掘調査の記録

67号住居 (第183～185図 P.L. 67・130・131)

位置 Bn・o-0・1

重複 北側で83号住居および74号住居と重複する。平面および断面観察から67号住居→83号住居→74号住居の順に新しくなる。67号住居はこの重複により北側3分の1程度が失われている。

主軸方向 N-90°-E 床面積 (12.4m²)

形態 北壁が残存しないため形態が確定しないが、残存部から推定すると主軸方向の対辺に長軸をもつ横長長方形とみられる。

規模 3.6m×-

カマド 東壁に設置され、南東隅近くに偏在する。確認深は浅く残存状況は悪く、天井部および煙道とも遺失している。袖についても張り出し部など確認されず、不明である。規模は焚口70cm、奥行き70cmで、底面には焼土が多く堆積している。掘り方をもちローム、暗褐色土、黒褐色土などにより埋め戻されている。

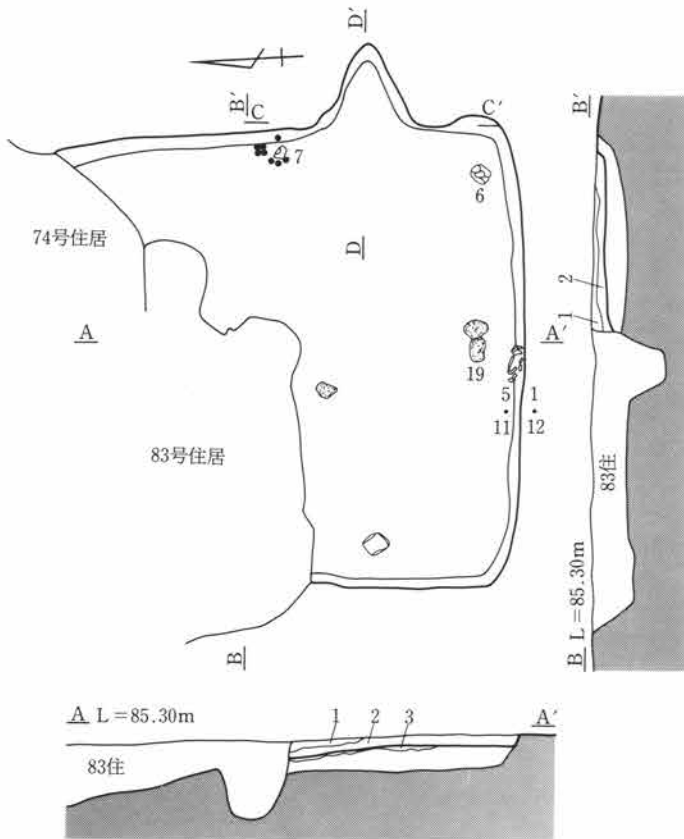
内部施設 床面上では周溝、貯蔵穴もしくは柱穴などについては検出されていない。なお、掘り方調査により径20cm～30cm、深さ30cm～60cmの小穴が4カ所認められ、これらが柱穴に関連する可能性もあるが確定できる所見は得られていない。

床 ロームを含む暗褐色土を掘り方埋土とするが、この上面を床面としている。面は起伏をもち、とくに硬化面は認められていない。

掘り方 住居全域を不規則に掘り下げるとともに、カマド前部には径150cm、深さ20cmの皿状の掘り込みが存在する。また小穴も認められるが、掘り方であるのか、床面からの掘り込みであるのかについて確認し得ていない。

遺物出土状態 土器類は6が南東隅・7がカマド北側の床面上、1・11・12・15が南壁部で検出され、これ以外は埋没土から出土している。17・18の土錘は埋没土、19の偏平円礫は粗粒安山岩で南壁近くの床面上から出土している。

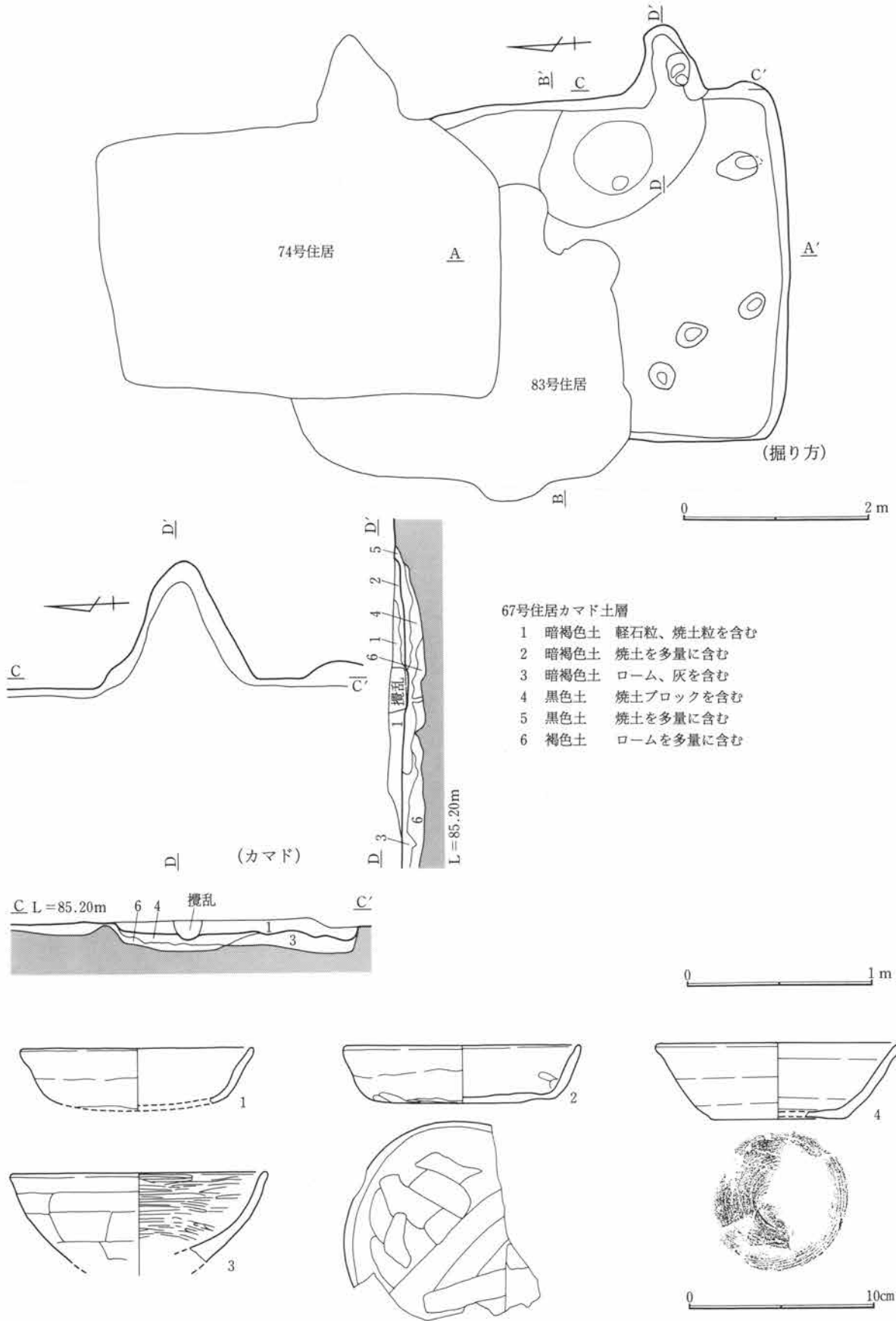
時期 出土遺物から9C.後葉に比定される。



67号住居

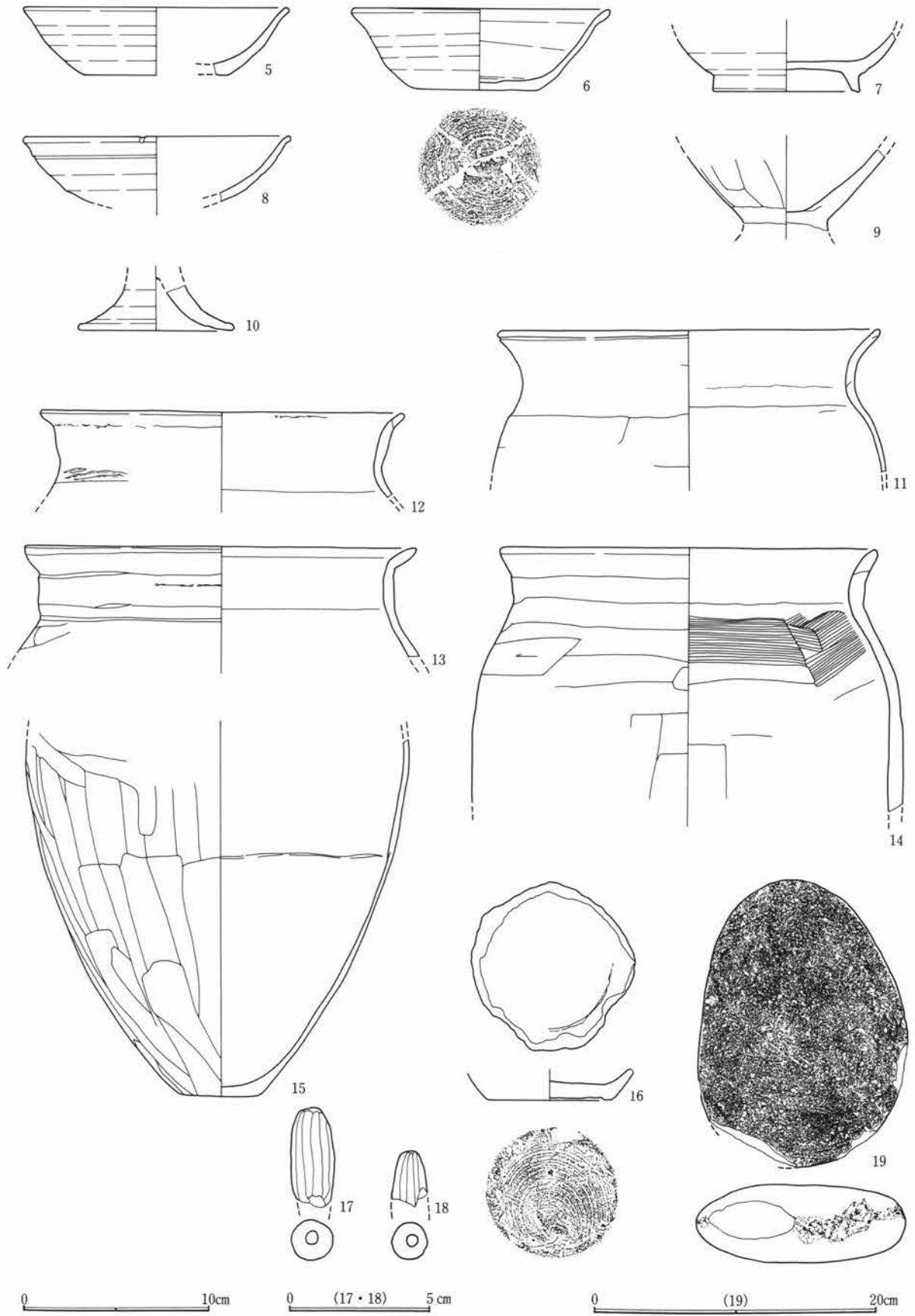
- 1 黒褐色土 白色軽石を多く含む
- 2 暗褐色土 白色軽石、ローム、焼土を含む
- 3 暗褐色土 ロームを多量に含む

第183図 67号住居



第184図 67号住居と出土遺物

II 発掘調査の記録



第185図 67号住居出土遺物

68号住居 (第186・187図 P.L. 68・131)

位置 Bk・1-15

重複 南接して33号住居が存在するが、68号住居との間に幅2.5m、長さ10m、深さ1mの攪乱があり両住居の重複関係を不明にしている。なお、この攪乱によりこの住居のおよそ3分の2が失われている。

主軸方向 N-67°-E

形態 カマドおよび北東隅部分が残存するほか、攪乱によりうしなわれており、形態は不明である。

規模 計測不可

カマド 東壁に設置される。カマド南側が失われているため位置関係は不明である。また右袖部も攪乱の影響があり遺失している。天井部、煙道は残存し

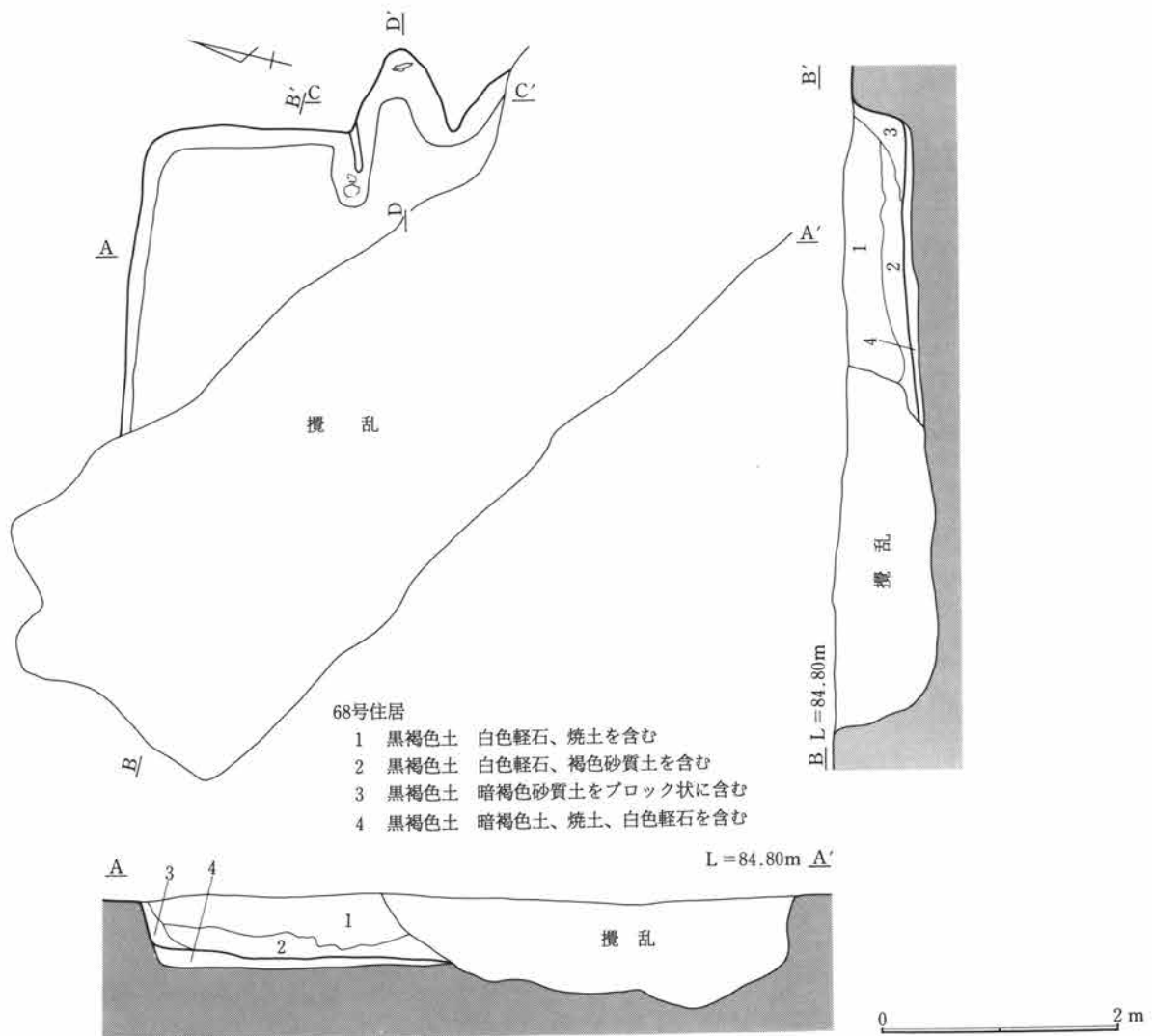
ないが、埋没土に焼土ブロックを多量に含む層があることから天井部の崩落土が堆積しているものとみられる。底面には炭化物を含む灰が5cm程度の層厚で認められている。焚口40cm、奥行き75cmの規模をもつ。左袖は幅10cmで住居内に30cm張り出す。内部施設 残存部では周溝、柱穴などについては検出されていない。

床 黒褐色土を掘り方埋土とし、上面を床面としている。硬化面はとくに認められていない。

掘り方 住居全体を5cm~15cm不規則に掘り下げ、黒褐色土を埋め戻している。

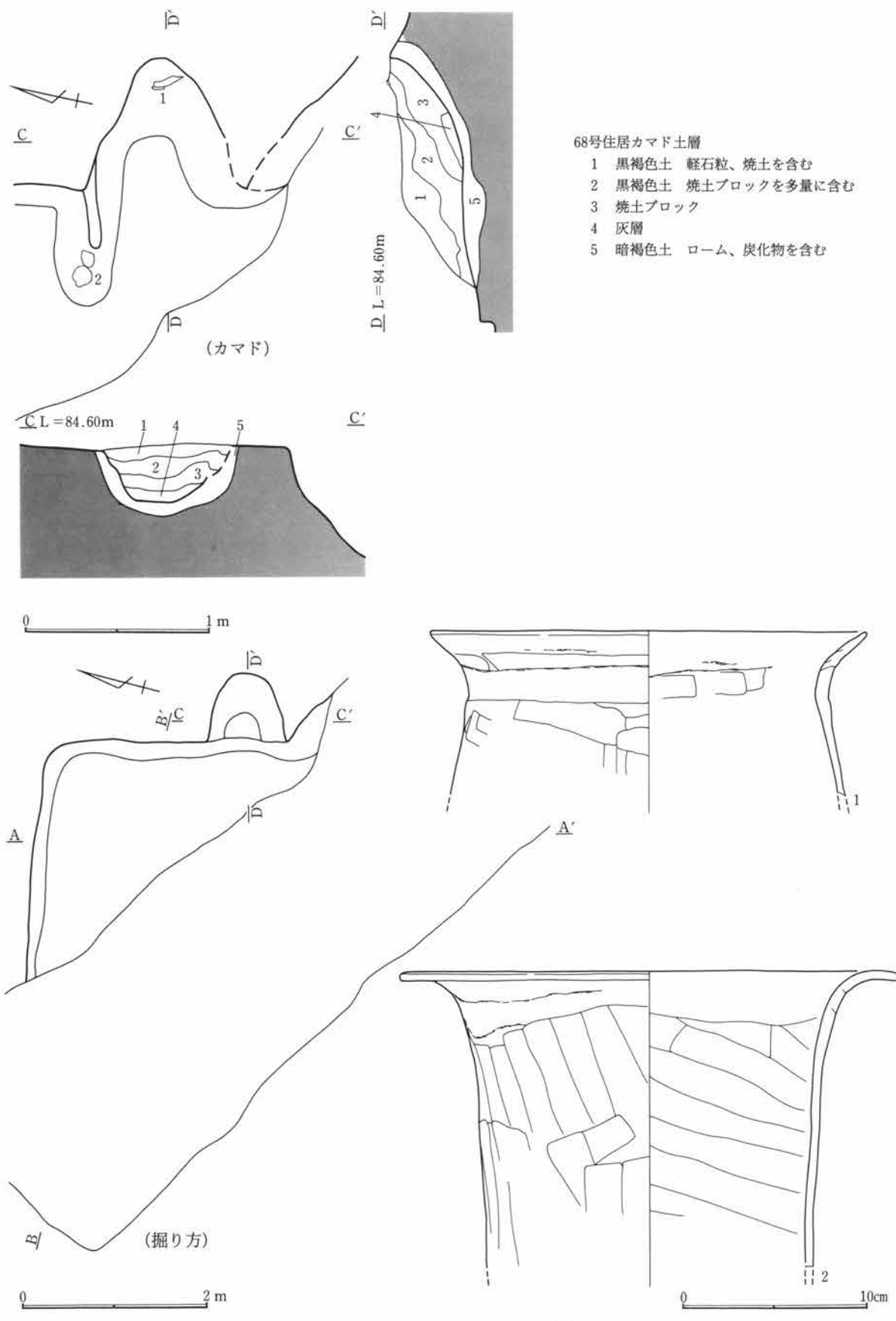
遺物出土状態 攪乱が大きく、遺物出土量も少ない。1はカマド内、2は左袖から検出されている。

時期 出土遺物から7C.後半以降に比定される。



第186図 68号住居

II 発掘調査の記録



第187図 68号住居と出土遺物

69号住居 (第188・189図 P L. 68・131)

位置 Bf・g-18・19

重複 39号住居と重複する。平面および断面観察から39号住居が新しく69号住居が古い。この重複によりカマドを含め約2分の1が失われており、住居南半から西半部が残存していることになる。

床面積 (12.1m²)

形態 カマドが検出されていないが他住居調査例からみて東壁部に存在したことが推定できる。このことを前提にすれば、主軸方向の対辺に長軸をもつ横長長方形を呈するものと考えられる。平面形は矩形を示さず、東側にやや開きぎみの傾向をもつ。

規模 3.1m×4.1m

カマド カマドが設置されることが考えられる東壁部が重複住居により壊されているため不明である。

内部施設 壁下に沿って幅15cm、深さ10cmの周溝が巡るが、全周はせず北西隅から北壁にかけて途切れている。南西隅には径40cm、深さ20cmの小穴が認められるが、性格は不明である。

床 粘質土を含む暗黄褐色土により貼り床が施される。ほぼ水平で堅く良好な面が検出されている。

掘り方 床面下20cm前後不規則に掘り下げ暗褐色土を埋土としている。

遺物出土状態 土器類は3～6・9が床面上、1・2・7が掘り方から出土している。8の棒状礫は北西隅に接して、9の鉄製釘は西壁近くの床面上、10の鉄製品は埋没土から出土している。

時期 出土遺物の大部分は、39号住居からの混入と考えられ、本住居の時期を特定できるものは見られない。

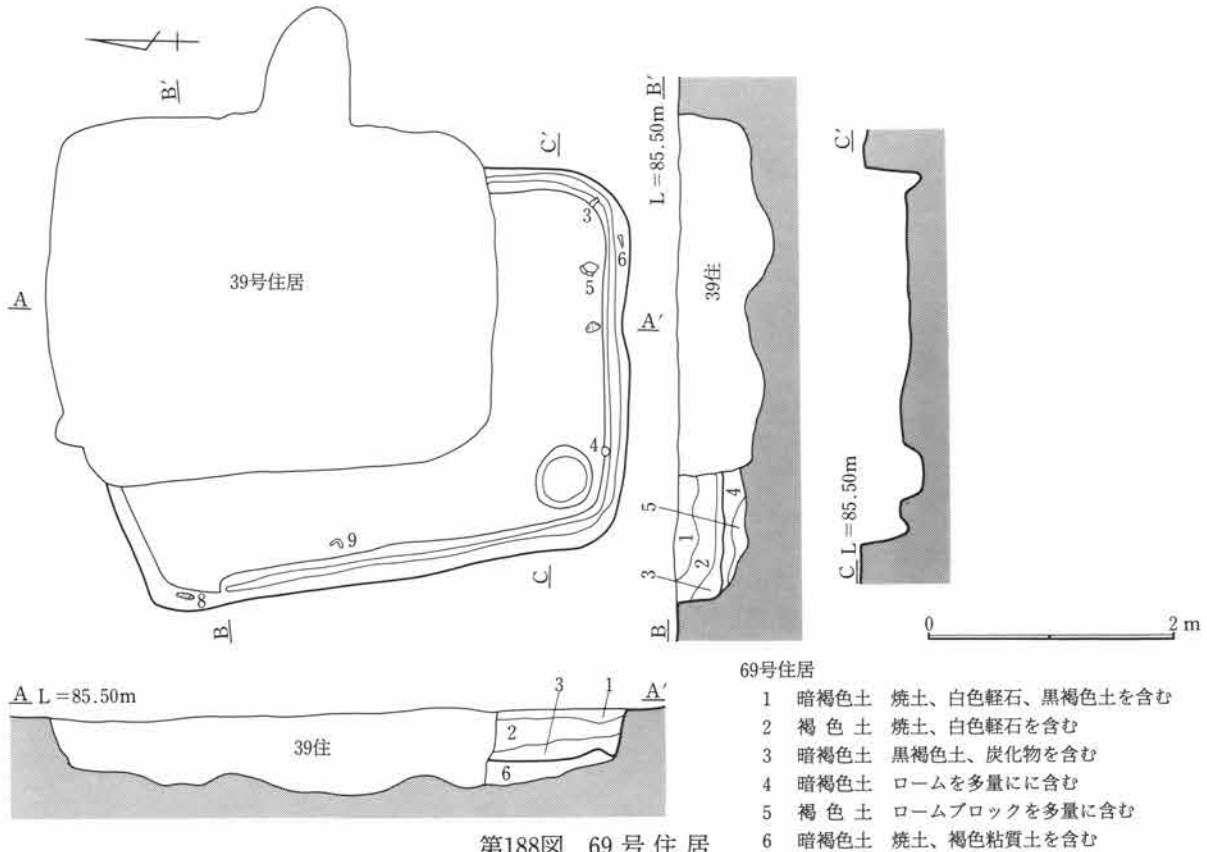
70号住居 (第190・191図 P L. 69・132)

位置 Bk・1-6・7

重複 住居北半部は調査区外となるため未調査となっている。西壁部で17号井戸と接するが、重複部分が少なく新旧関係がやや不明瞭であるが、検出状況からは井戸が新しいと観察された。

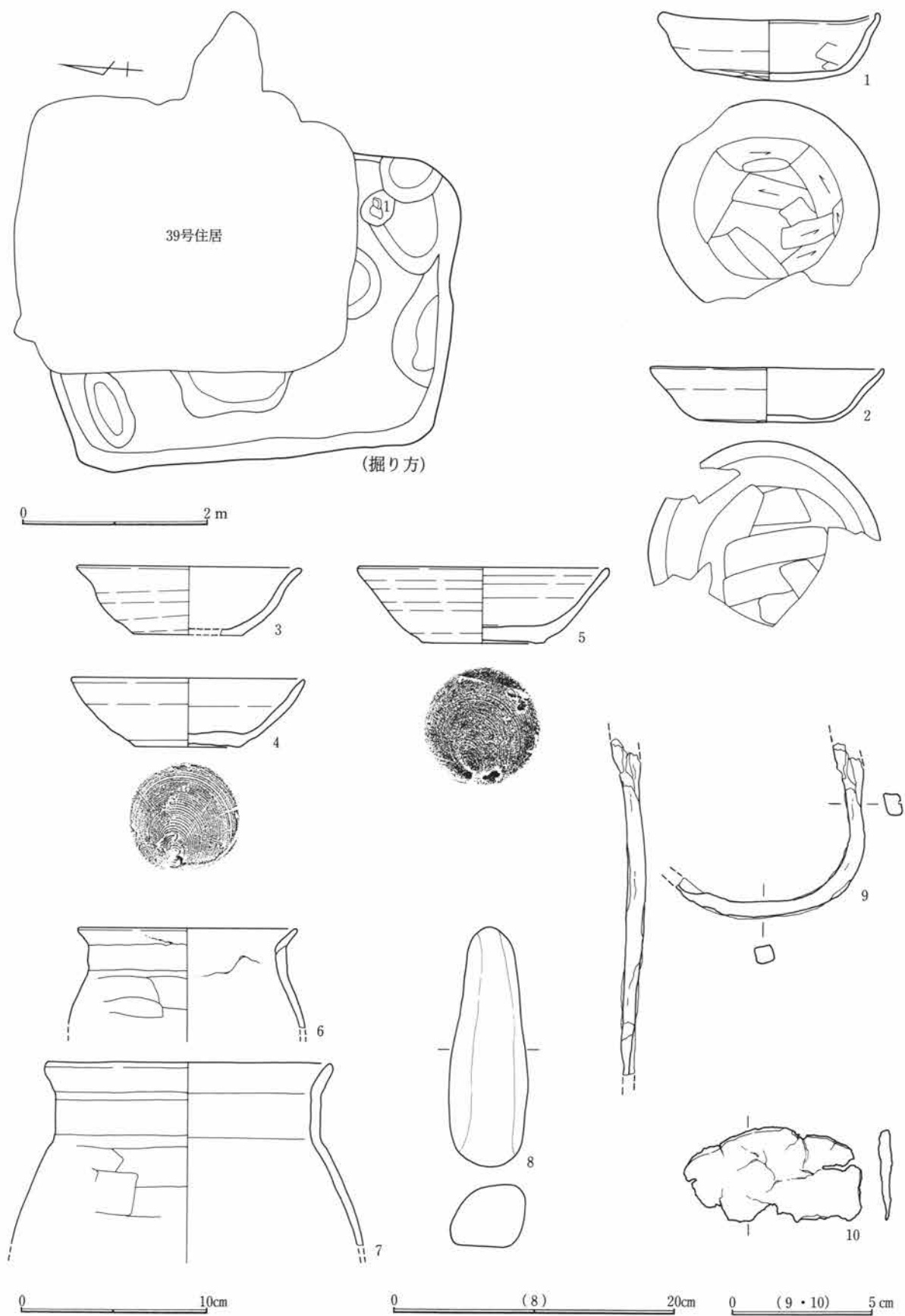
主軸方向 不明 床面積 不明

形態 住居の2分の1が未調査であるため確定でき



第188図 69号住居

II 発掘調査の記録



第189図 69号住居と出土遺物

ないが、検出部分から判断すると南北方向に長軸をもつ長方形と考えられる。隅は丸みを持ち、壁は直線的である。西壁にみられる張り出しについては、この住居に伴うものであるか否か確認できていない。

規模 4.0m×—

カマド 不明である。

内部施設 南壁中央に接して径70cm、深さ30cmの小穴がみられる。位置から柱穴もしくは入口施設に関連することも考えられたが、性格について特定できる所見は得られていない。壁下には幅15cm、深さ10

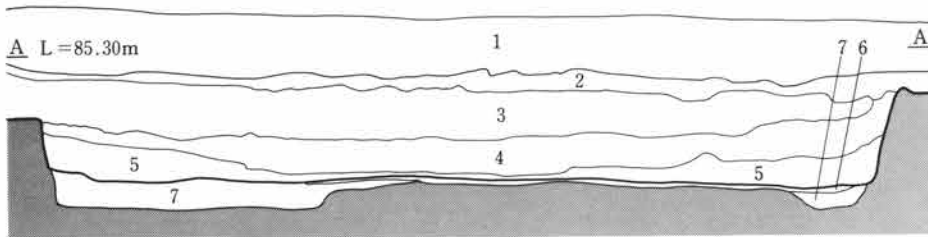
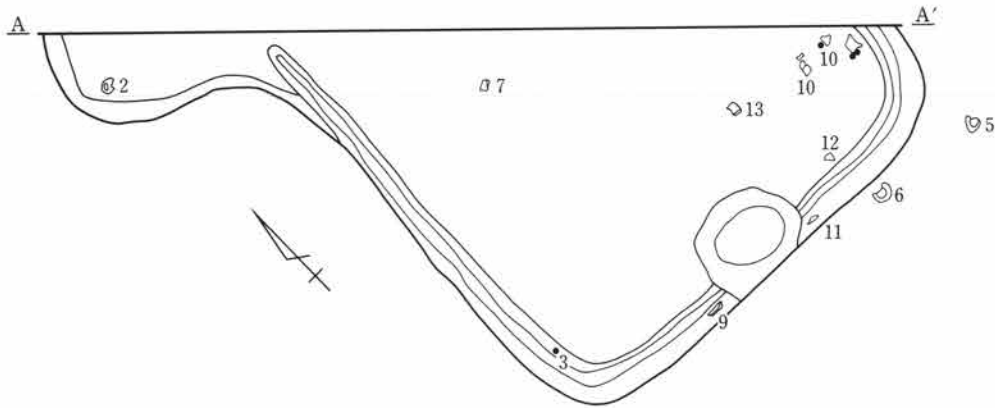
cmの周溝が巡る。

床 ロームを含む暗褐色土により張り床を施す。ほぼ水平で堅く良好な面が形成されている。

掘り方 中央部が床面下5cmと浅く、周辺部が20cm程度と深めの掘り方をもつ。ロームブロックを含む暗褐色土により埋め戻されている。

遺物出土状態 3は西壁、9は南壁、10～12は南東部の床面上、2は西側張り出し部、5・6は南壁上で検出され、これ以外は埋没土中から出土している。

時期 出土遺物から9 C.前葉に比定される。



70号住居

1 表土 耕作土

2 暗褐色土

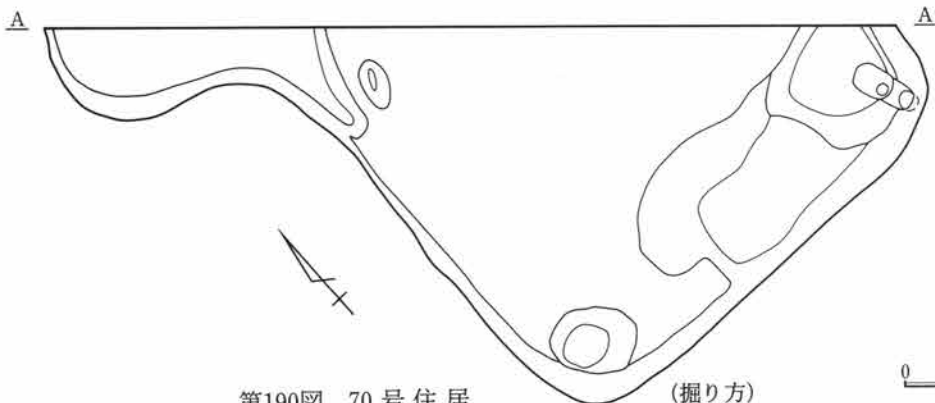
3 黒褐色土 白色軽石を含む

4 暗褐色土 白色軽石、ロームを含む

5 暗褐色土 ロームブロックを含む

6 暗褐色土 ロームを含み、貼床を形成する

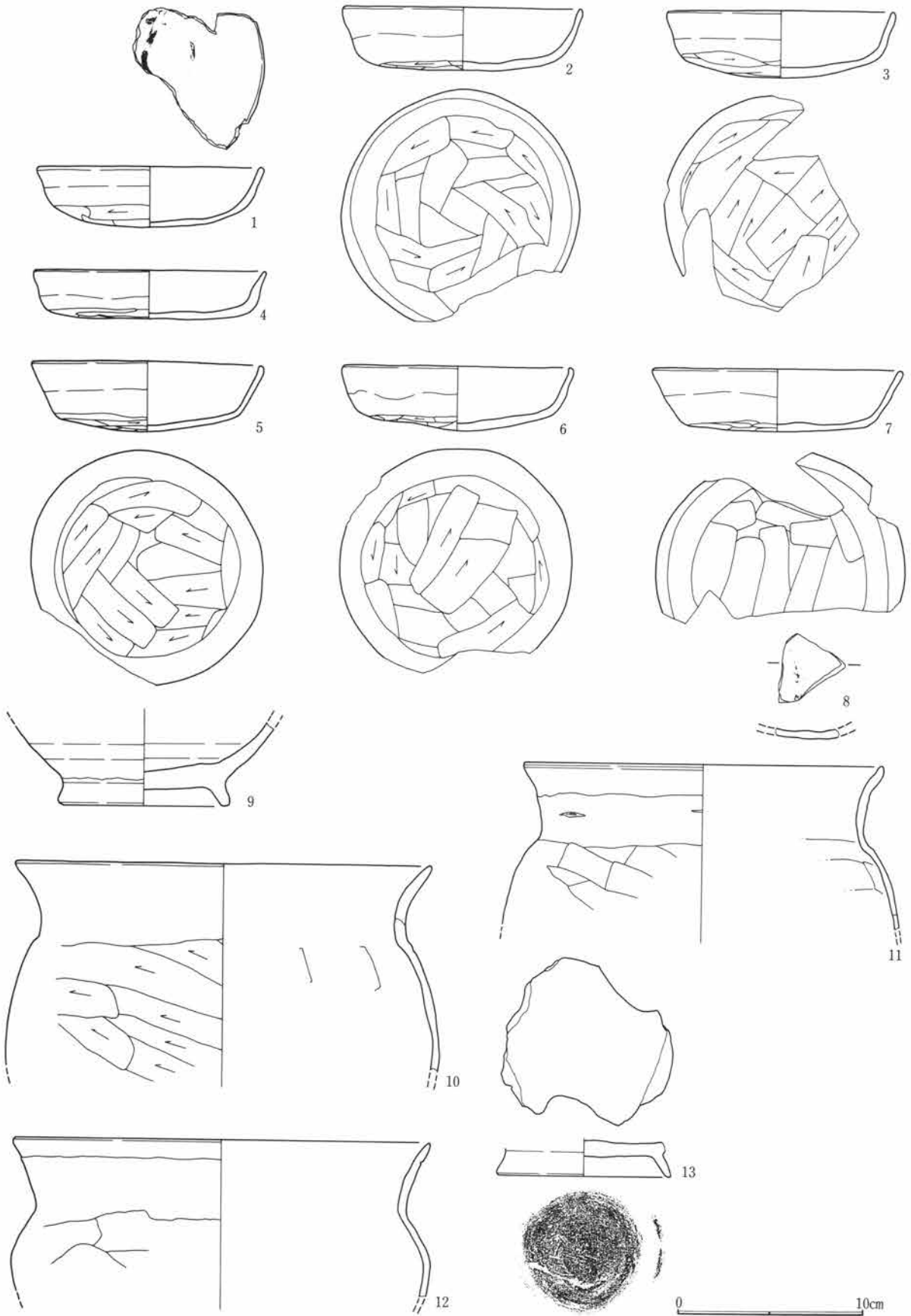
7 褐色土 ロームを多量に含む



第190図 70号住居

(掘り方)

II 発掘調査の記録



第191図 70号住居出土遺物

71号住居 (第192~195図 P.L. 70・132・133)

位置 Bb・c-17・18

重複 他遺構との重複はみられない。

主軸方向 N-69°-E 床面積 8.3m²

形態 主軸方向の対辺に長軸をもつ横長長方形を呈するが、長軸・短軸の差は少なく方形に近い。各隅はやや丸みをもつが、各辺は直線的で矩形を示す。

規模 3.1m×3.4m

カマド 東壁に設置され、北東隅から3分の2程度南寄りに位置する。埋没土下部である底面上には天井部の崩落とみられる焼土ブロックが15cmの層厚で堆積している。また底面中央に土師器小型甕が倒位で検出されている。尚、この土器については図示できていない。袖はロームを主とする褐色土により構

築され、右袖端部には土師器甕19・21・22が重なって出土している。

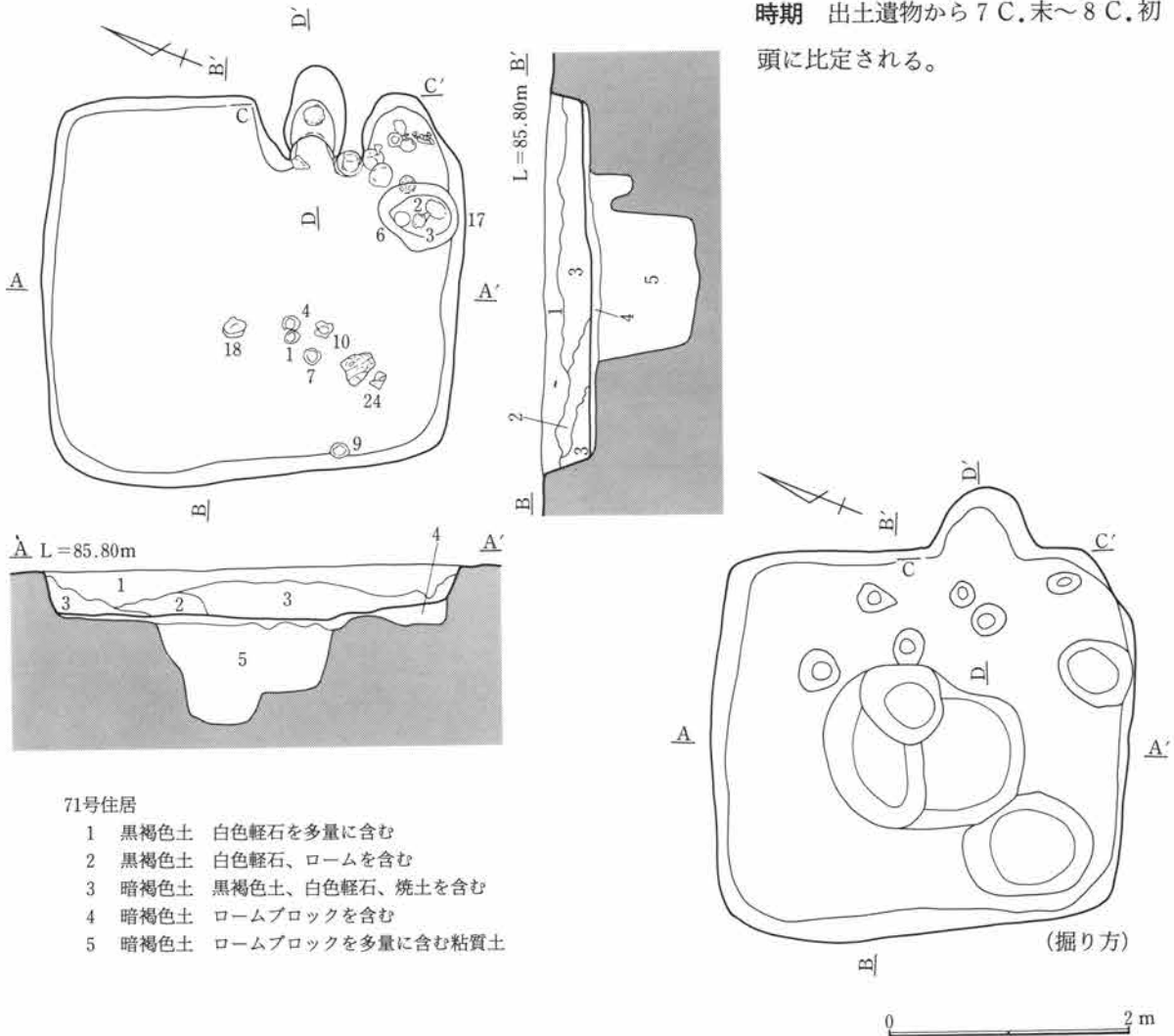
内部施設 南東部に径60cm、深さ20cmの貯蔵穴が存在するほか、周溝等はみられない。

床 ロームブロックをふくむ暗褐色土を掘り方埋土とし、上面を床とする。ほぼ水平であるが、硬化面は認められない。

掘り方 中央部に径150cm、床下深80cmの土坑状の掘り込みがみられる。

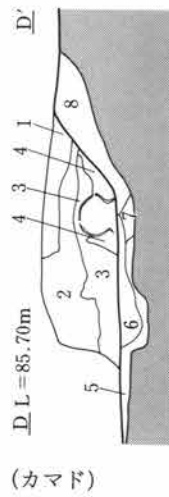
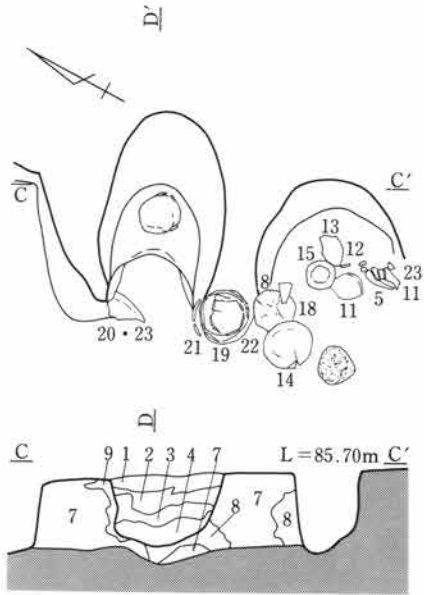
遺物出土状態 カマド右側の住居南東隅から貯蔵穴、住居南西部の2カ所に分布する。2・3・6・17が貯蔵穴、5・8・11~15が南東隅、1・4・7・9・10・18・24が南西部でそれぞれ床面上から、19~23がカマド部、16・25は埋没土から出土している。

時期 出土遺物から7C.末~8C.初頭に比定される。



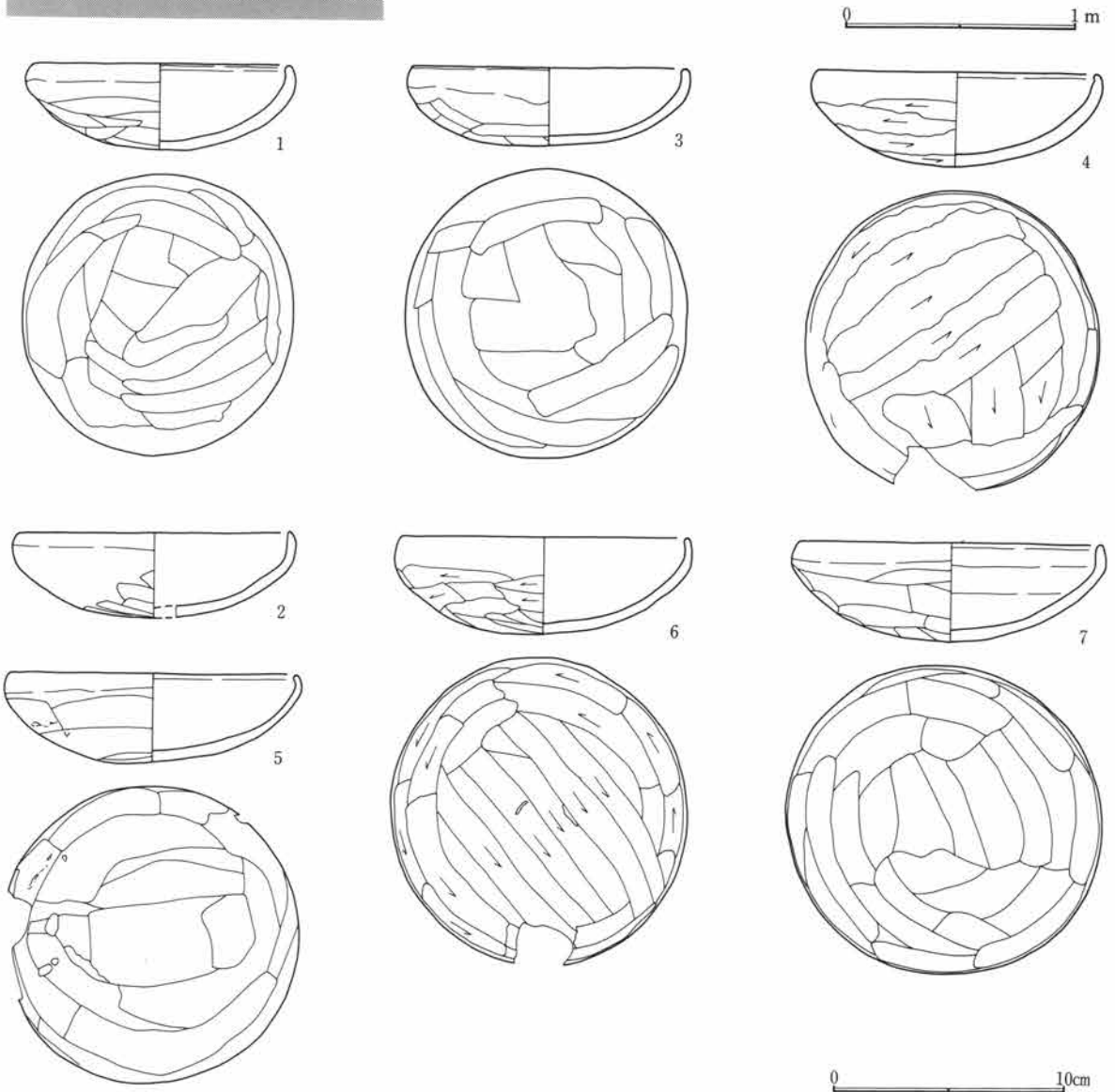
第192図 71号住居

II 発掘調査の記録

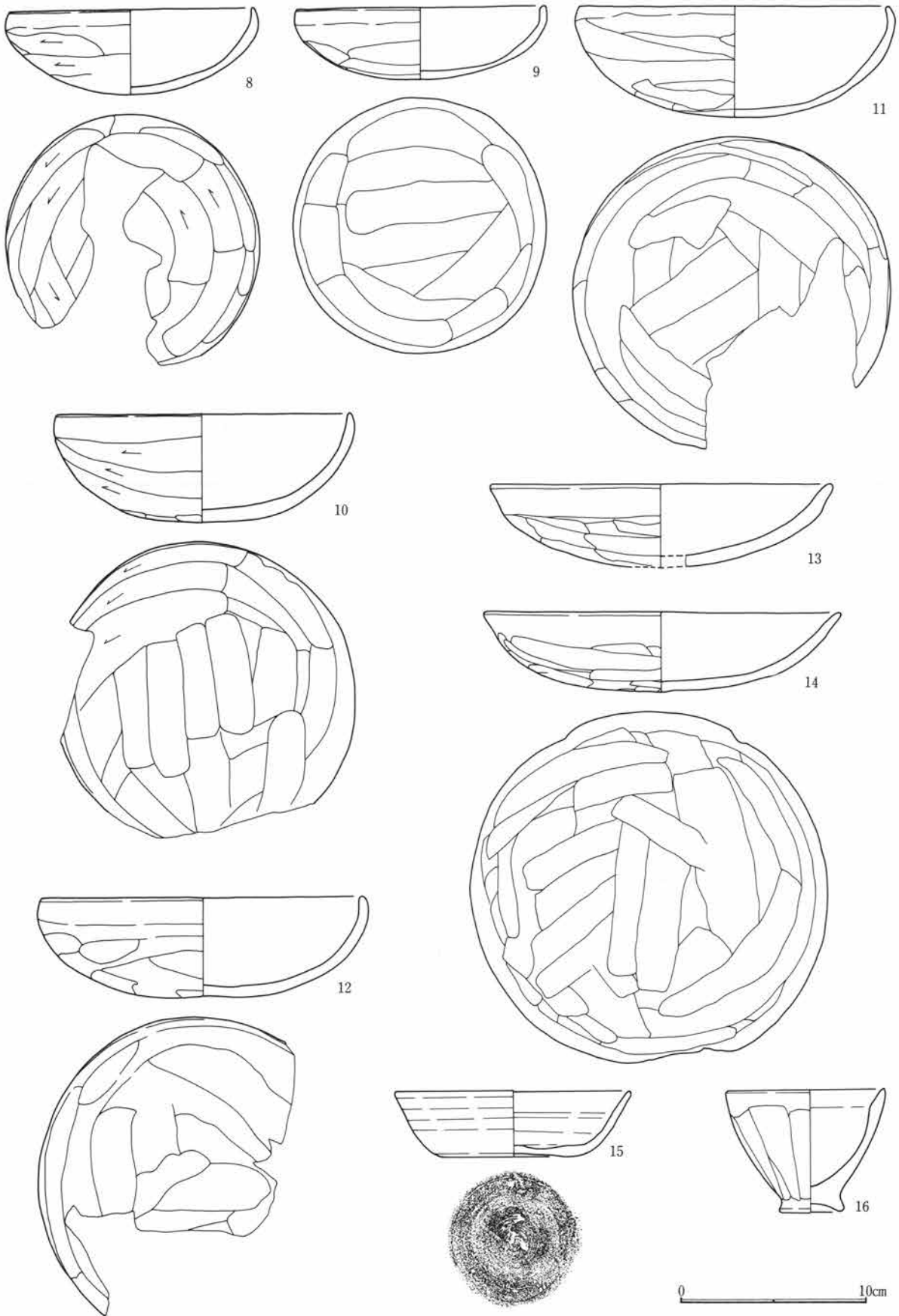


71号住居カマド土層

- 1 暗褐色土 軽石粒、ロームを含む
- 2 暗褐色土 ロームを多量に含む
- 3 焼土ブロック
- 4 黒褐色土 焼土を多量に含む
- 5 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む
- 6 黒褐色土 ローム、焼土を含む
- 7 褐色土 ロームを多量に含む
- 8 暗褐色土 ロームブロック、焼土を含む
- 9 褐色土 焼土ブロックを多量に含む

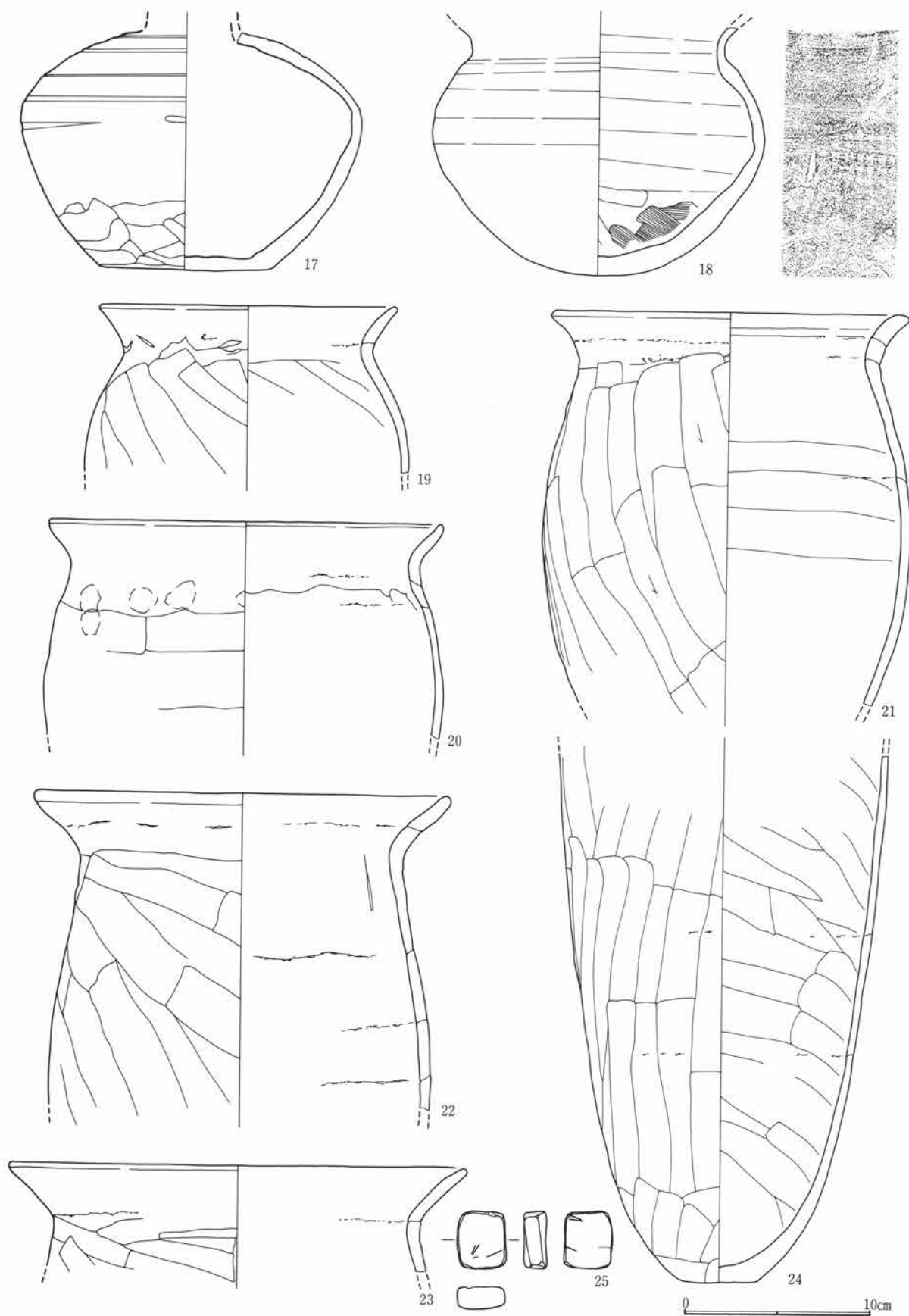


第193図 71号住居と出土遺物



第194図 71号住居出土遺物

II 発掘調査の記録



第195図 71号住居出土遺物

72号住居 (第196・197図 P.L. 71・133)

位置 Bc・d-18・19

重複 他遺構との重複はみられない。

主軸方向 N-93°-E 床面積 12.0m²

形態 主軸方向の対辺に長軸をもつ横長長方形を呈する。各辺は直線的であるが多少歪みがみられる。

規模 3.5m×4.1m

カマド 東壁中央やや南寄りに設置される。天井部、煙道は失われているが、カマド構築礫材が壁部にみられる。壁部の4点は粗粒安山岩、底面の1点二ツ岳軽石である。袖は掘り残して幅15cmで30cm程度住居内に張り出す。規模は焚口25cm、奥行き70cmで、

底面には天井部崩落である粘質土が堆積する。

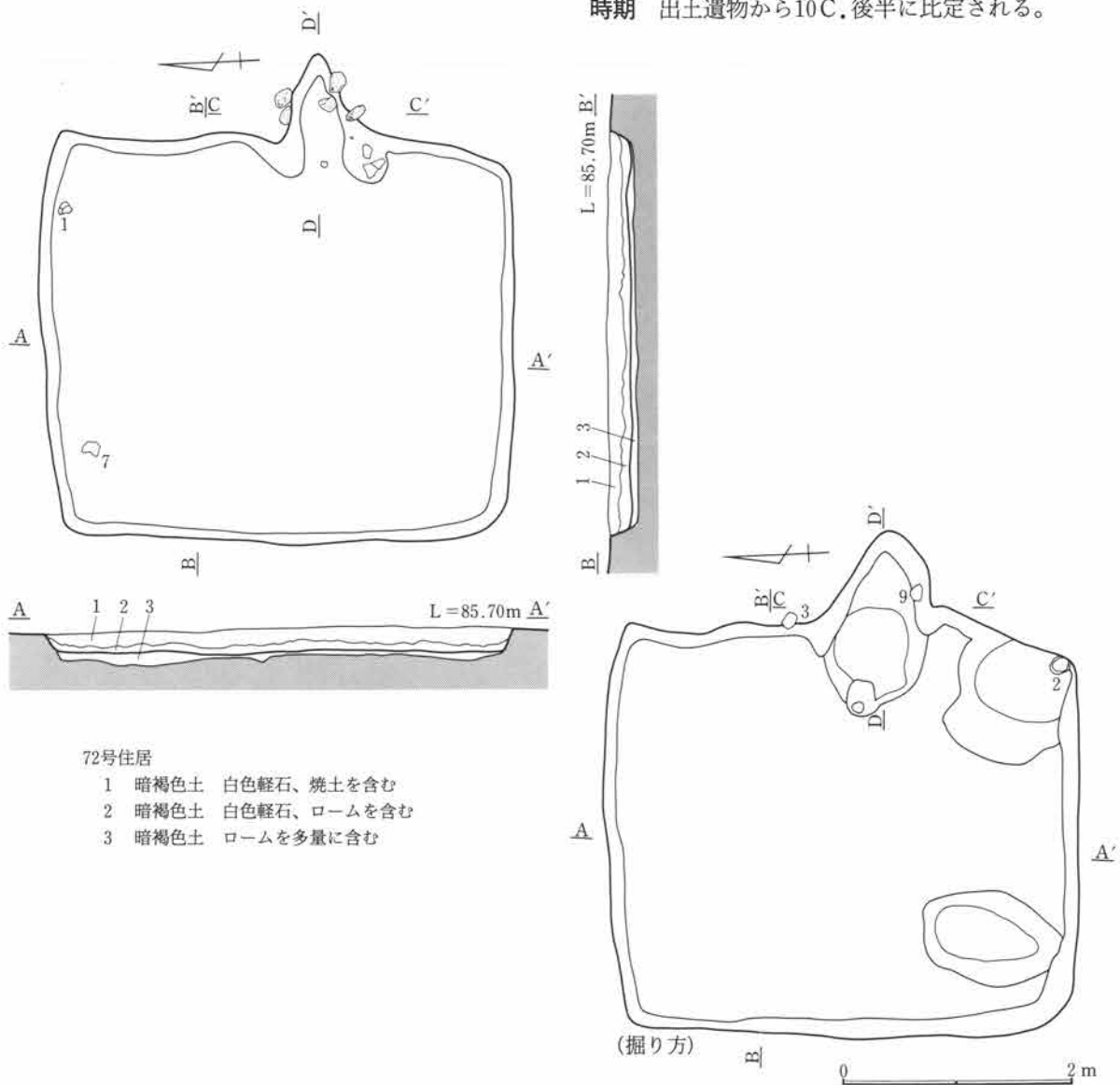
内部施設 掘り方南東隅に径90cm、深さ15cmの掘り込みが検出されているが、この掘り込みが貯蔵穴である可能性も考えられる。このほか周溝などについては認められていない。

床 ロームを多く含む暗褐色土により張り床が形成される。ほぼ水平で堅く良好な面が検出されている。

掘り方 掘り方は浅く、床面下10cm前後不規則に掘り込み暗褐色土を埋土とする。

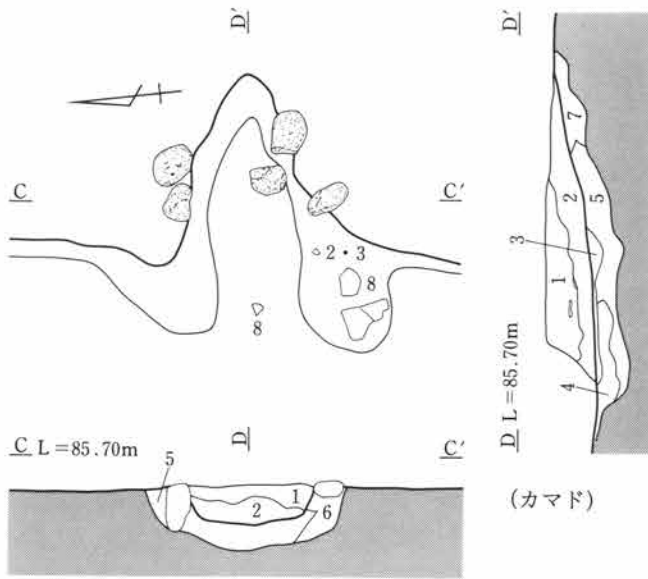
遺物出土状態 遺物量は少ない。1・7が床面上、8・9がカマド、2・4が掘り方で検出され、3・5・6は埋没土から出土している。

時期 出土遺物から10C.後半に比定される。



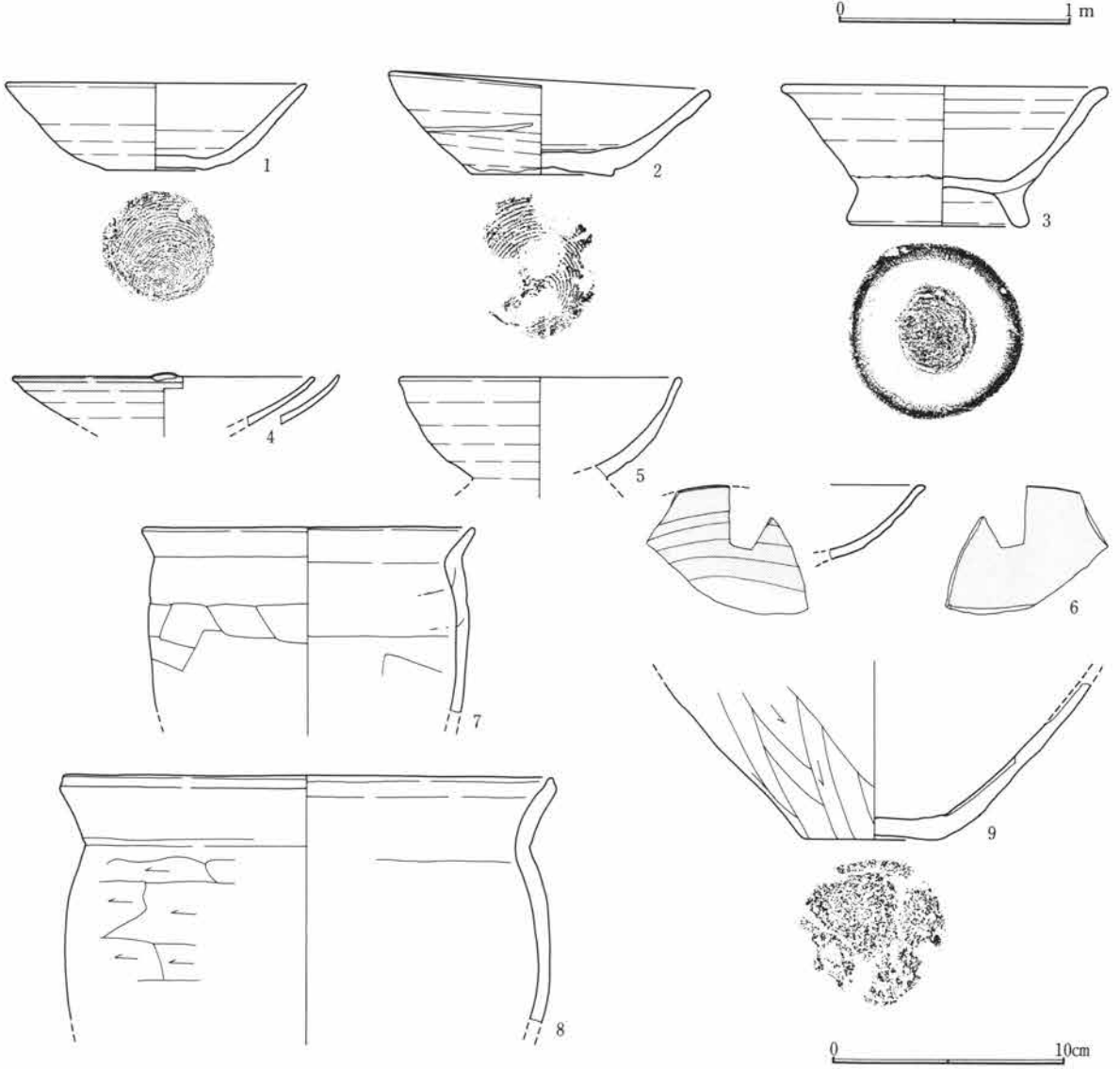
第196図 72号住居

II 発掘調査の記録



72号住居カマド土層

- 1 暗褐色土 軽石粒を多く含む
- 2 暗褐色土 焼土粒、ロームを含む
- 3 黒褐色土 焼土、ロームを少量含む
- 4 暗褐色土 ロームブロックを含む
- 5 暗褐色土 焼土を多量に含む
- 6 暗褐色土 ロームブロックを多く含む
- 7 暗褐色土 ロームを多量に含む



第197図 72号住居と出土遺物

73号住居 (第198・199図 P.L. 72・134)

位置 Bo・p・q-2・3

重複 住居南西部が調査区外のため、およそ4分の1が未調査となっている。また北壁部には近世墓である33号土壌・61号土壌が重複する。

主軸方向 N-65°-E 床面積 (19.5m²)

形態 主軸方向に長軸をもつ縦長長方形を呈する。南西隅部分が未調査であるが、各辺は直線的でほぼ矩形を示すものとみられる。

規模 4.3m×5.0m

カマド 東壁に設置され、北東隅から3分の2程度南側に偏在する。両袖はロームを多量に含む褐色土により構築され、幅15cmで住居内に30cm程度張り出す。底面には天井部の崩落とみられる焼土ブロック

が堆積する。規模は焚口40cm、奥行き60cmである。

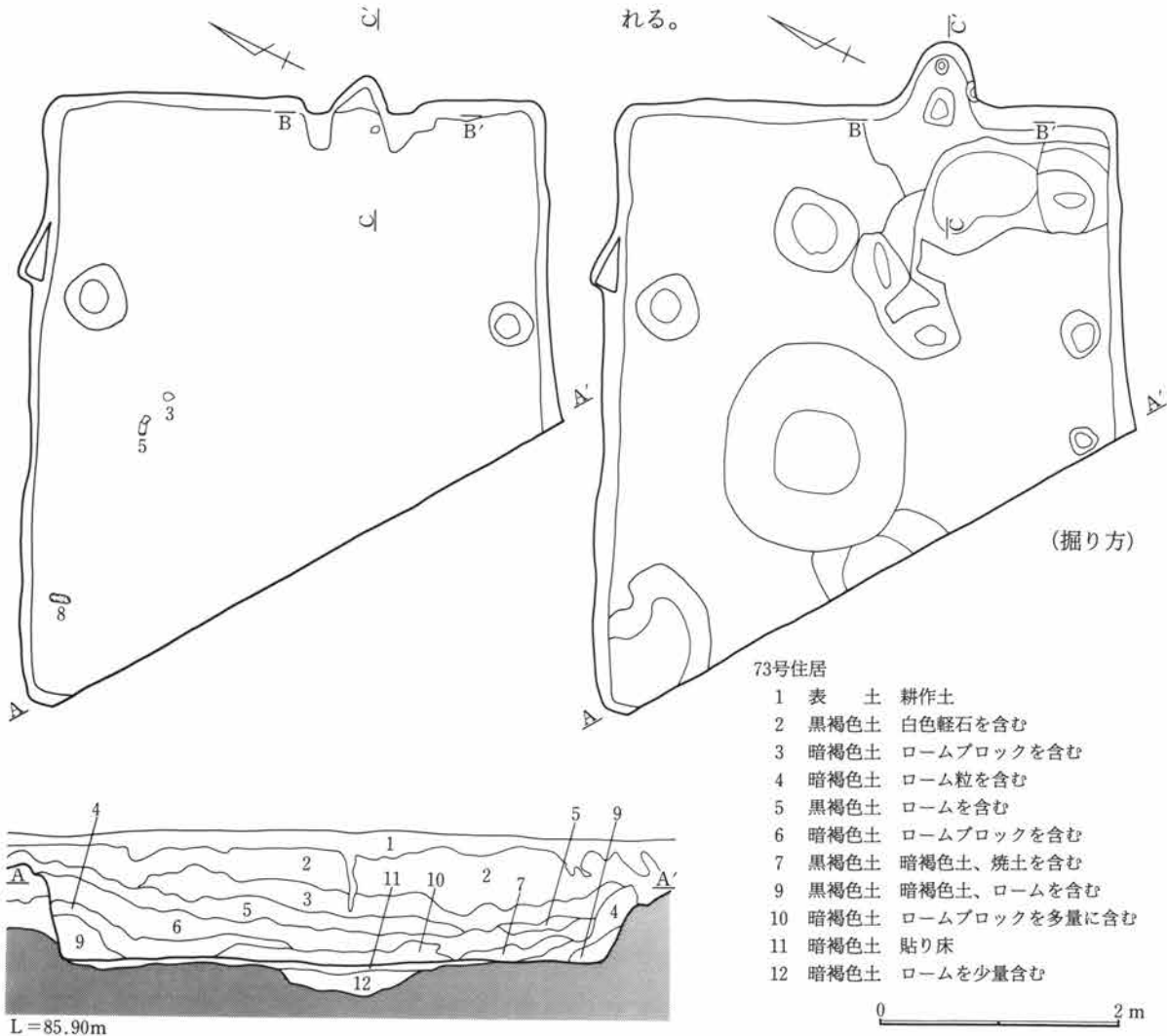
内部施設 北壁および南壁に接して径40cm~50cm、深さ20cmの小穴が1穴づつ検出されている。柱穴に関連する可能性もあるが、確定できない。周溝は認められない。

床 ロームブロックを含む暗褐色土により張り床が施される。ほぼ水平で堅く良好な面が形成されている。なお南側ではローム面を床面とする部分もある。

掘り方 住居中央に径150cm、深さ55cmの土坑状の掘り込みがあり、暗褐色土を埋土としている。

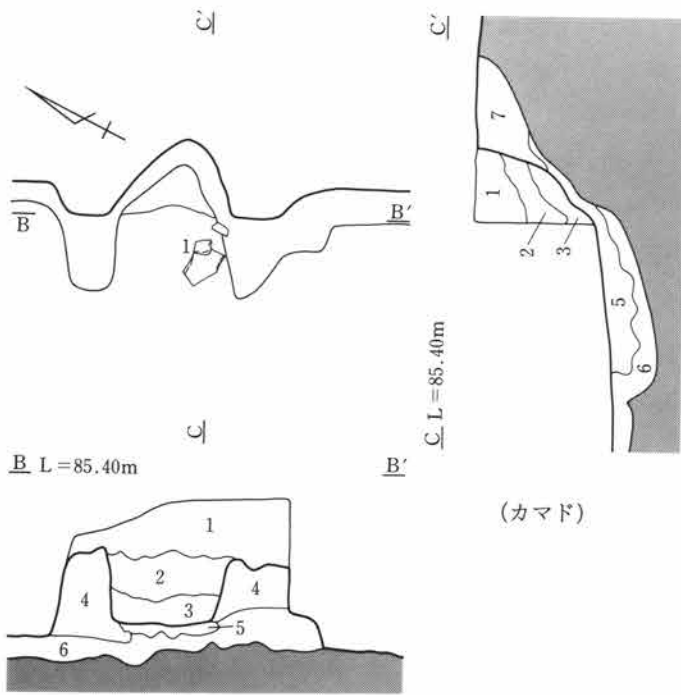
遺物出土状態 遺物量は少ない。土器類は1がカマド、3が床面上のほかは埋没土から出土している。8の棒状礫は北西隅近くの床面上の検出である。

時期 出土遺物から7C.後期~8C.前葉に比定される。

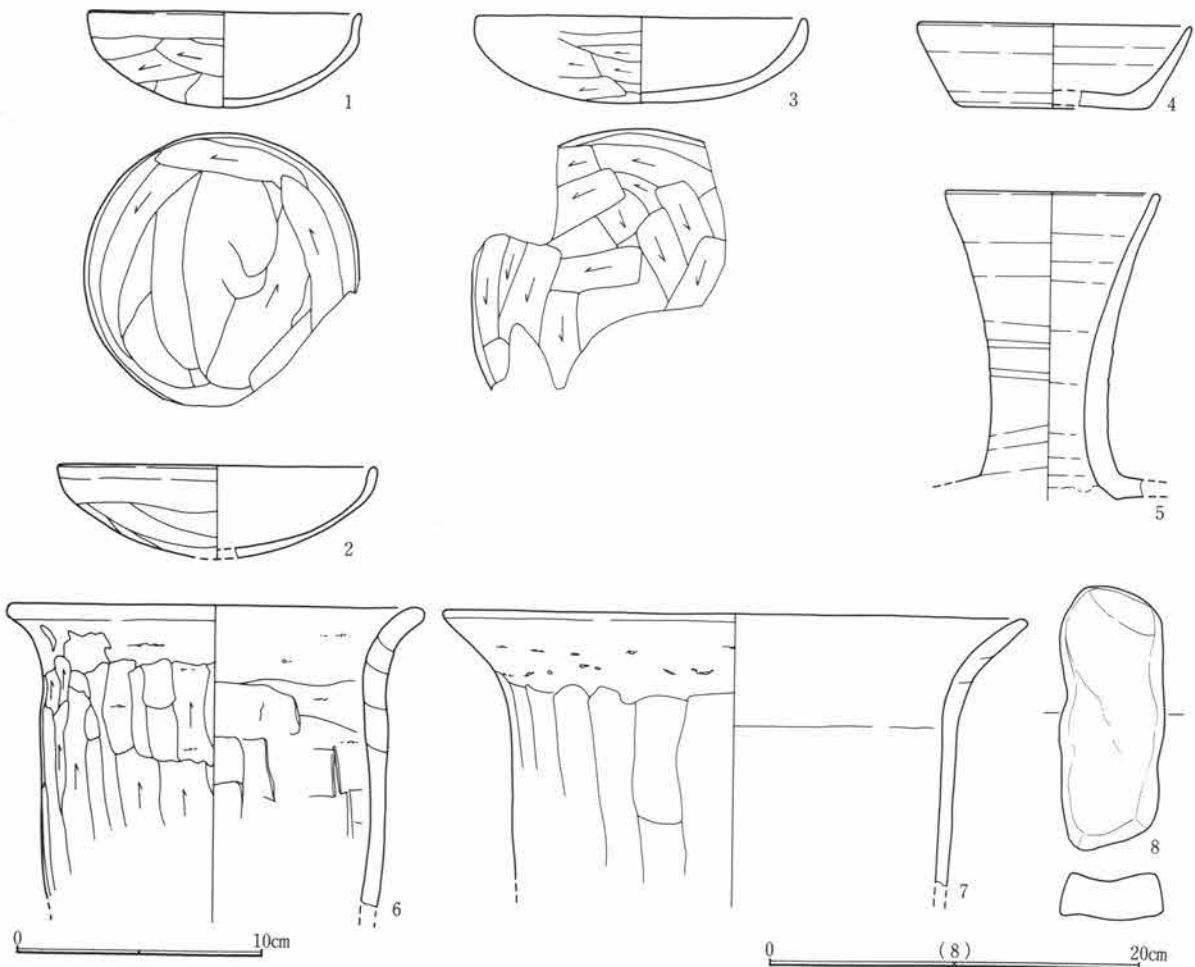


第198図 73号住居

II 発掘調査の記録



0 1m



第199図 73号住居と出土遺物

74号住居 (第200～202図 P L. 69・134)

位置 Bo-24・0

重複 67号住居、83号住居と重複する。平面および断面観察から67号住居→83号住居→74号住居という新旧関係を示している。

主軸方向 N-93°-E 床面積 10.3m²

形態 主軸方向の対辺に長軸をもつ横長長方形を呈する。平面形状をみると住居南側に歪みがみられるが、この部分は遺構重複部にあたっていることから遺構本来の形態ではなく、遺構検出時に関連するものと考えられる。未重複部では各辺は直線的な形状を示している。

規模 2.9m×4.2m

カマド 東壁に設置される。北東隅から3分の2程度南側に偏在する。天井部、煙道は残存しないが埋没土には天井部崩落土とみられる粘質土が堆積している。また端部近くの中央には礫材(粗粒安山岩)

が立位で設置されている。規模は焚口70cm、奥行き90cmを計測する。

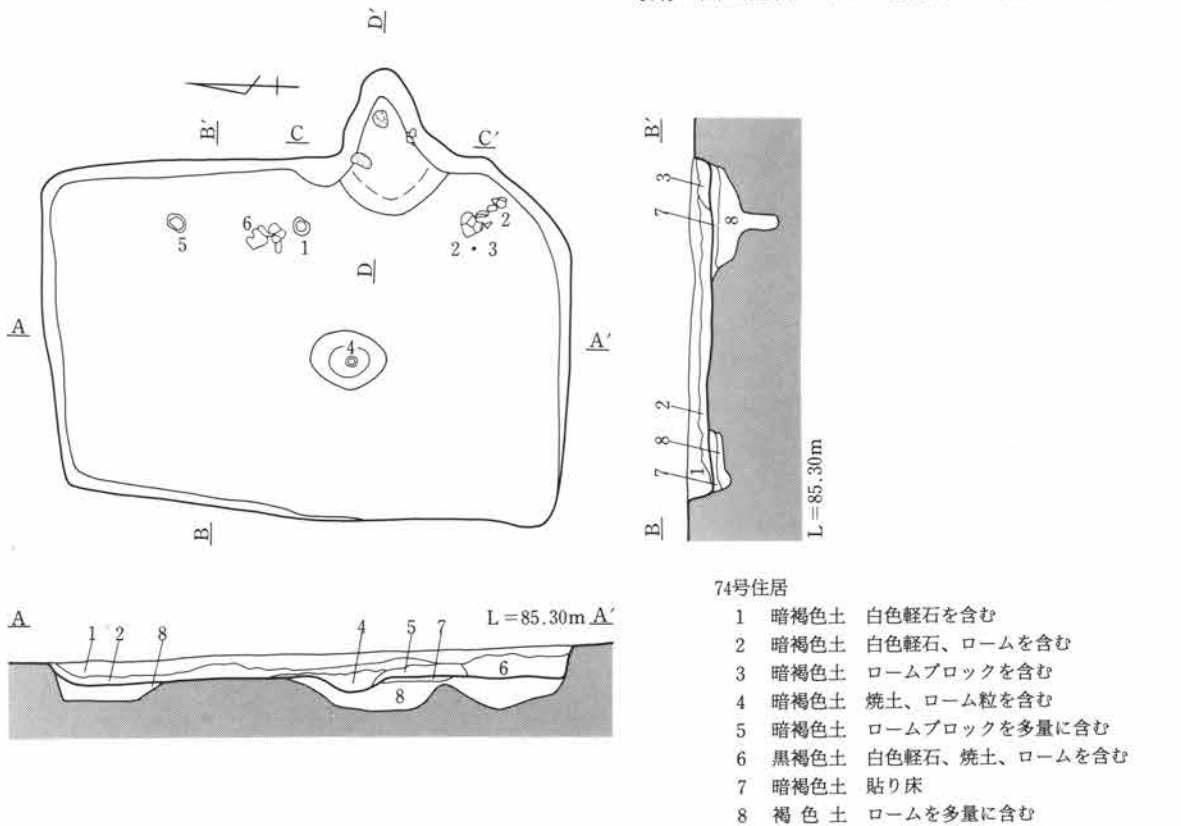
内部施設 住居中央に径50cm、深さ15cmの小穴が1穴認められる。この性格は不明であるが小穴内に4の底部片が出土している。このほか周溝などについては認められていない。

床 ロームを含む暗褐色土により張り床が施されるが、中央では一部地山面を床としている。ほぼ水平で部分的に堅く良好な面が検出されている。

掘り方 重複部分は不明瞭であるが、住居周辺に主として土坑状の掘り込みがみられ、中央部分は浅い掘り方となっている。

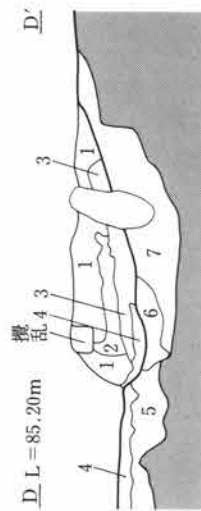
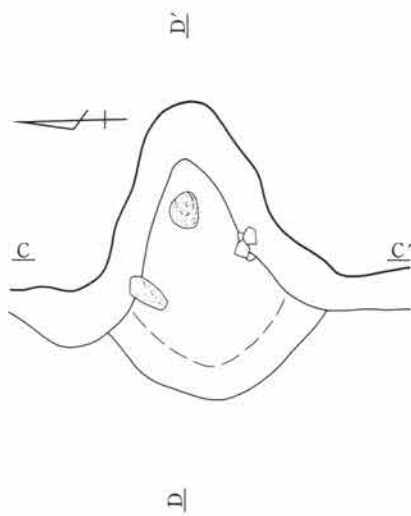
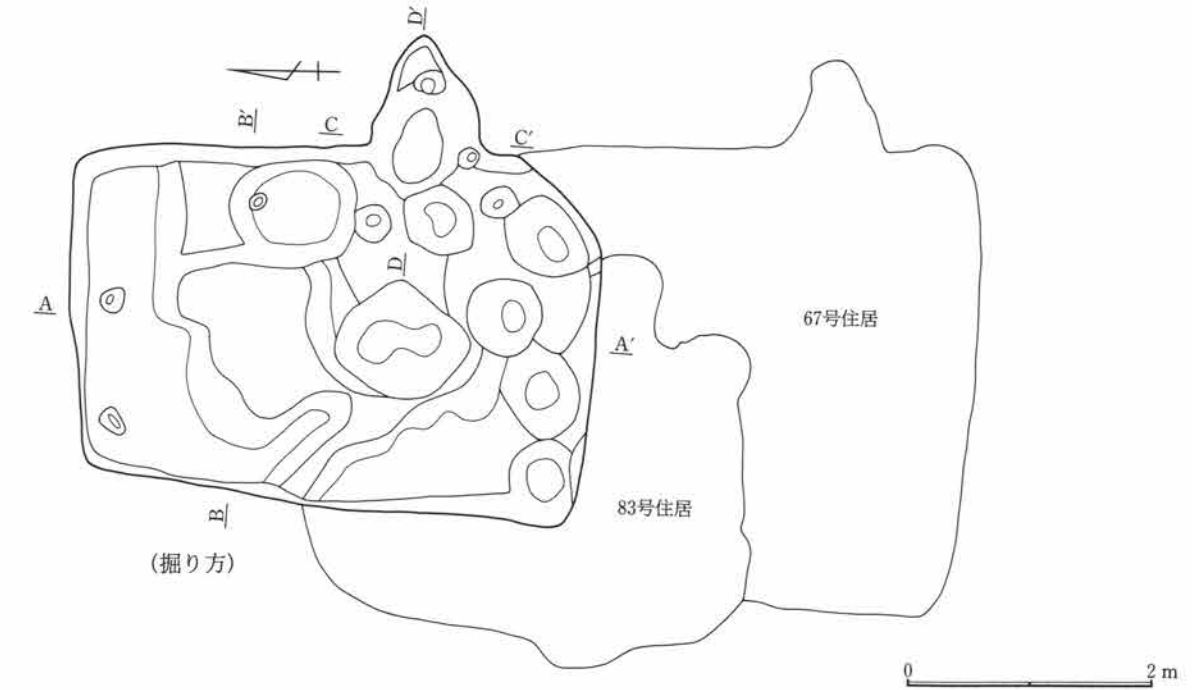
遺物出土状態 遺物量は少ないが、カマド周辺部に集中する傾向がある。1・5・6がカマド北側、2・3が南東隅の床面上、4が中央小穴から出土している。2には「田」の墨書がみられ、5は底部内面に磨痕をもつ転用土器である。

時期 出土遺物から9C.前葉に比定される。



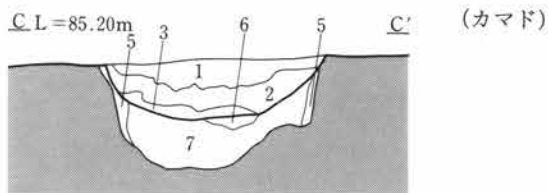
第200図 74号住居

II 発掘調査の記録

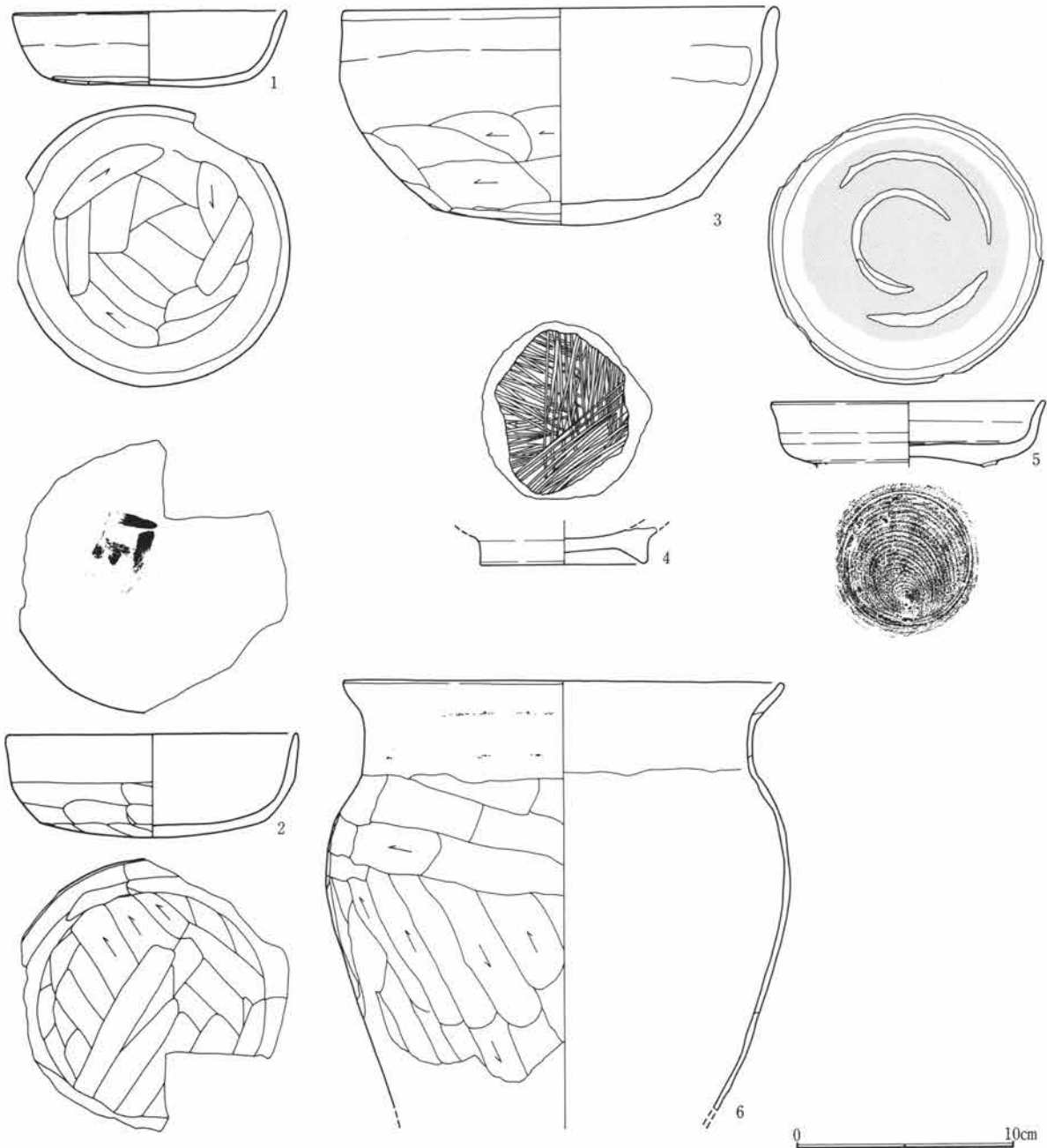


74号住居カマド土層

- 1 暗褐色土 軽石粒、焼土を含む
- 2 灰褐色土 粘質土を多量に含む
- 3 暗褐色土 焼土ブロックを含む
- 4 暗褐色土 ロームを多量に含む
- 5 暗褐色土 ロームブロック、焼土を含む
- 6 灰褐色土 焼土、灰を多量に含む
- 7 暗褐色土 ローム粒、焼土粒を含む



第201図 74号住居



第202図 74号住居出土遺物

75号住居 (第203図 P.L. 69・134・135)

位置 Cc・d-11・12

重複 他遺構との重複は認められないが、住居南西部が調査区外であるため未調査となっている。

主軸方向 N-83°-E 床面積 5.1m²

形態 主軸方向に長軸をもつ縦長長方形を呈する。各辺は直線的でほぼ矩形を示すが、残存状態は悪い。

規模 2.3m×2.8m

カマド 東壁中央部に設置される。残存状態は悪くその痕跡をとどめる程度である。埋没土には灰・焼土・粘質土などが混在している。

内部施設 南東隅に径90cm×60cm、深さ10cmの貯蔵穴が存在する。北西隅には径45cm、深さ40cmの小穴があり、小穴上位に粗粒安山岩の大形礫(重量3500g)が出土している。中央部には径190cm×105cm、深さ20cmの落ち込みがあり、床面が不明瞭であり確

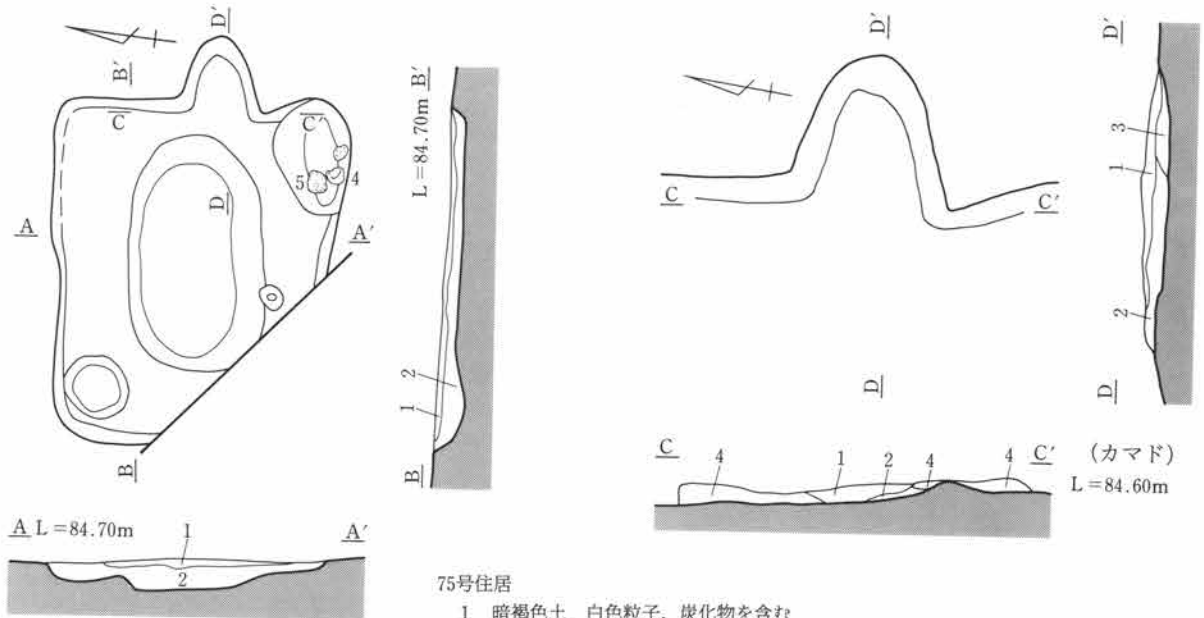
II 発掘調査の記録

認されていないが、掘り方に伴うものと考えられる。
 床 ほとんど残存していない。

掘り方 中央掘り込みが掘り方とみられる。

遺物出土状態 4・5が貯蔵穴、2がカマド、他は埋没土から出土している。

時期 出土遺物から9 C.後半に比定される。

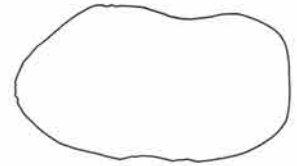
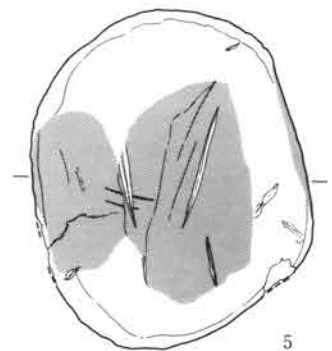
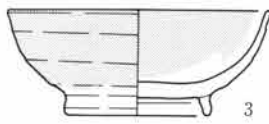
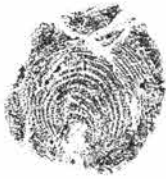
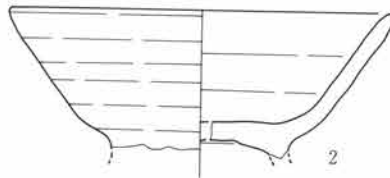
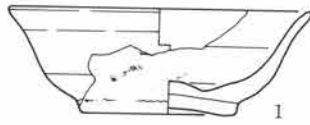


75号住居

- 1 暗褐色土 白色粒子、炭化物を含む
- 2 暗褐色土 ロームを多く含む

0 2 m

0 1 m



0 (1~4) 10cm

0 (5) 20cm

第203図 75号住居と出土遺物

76号住居 (第204~207図 P.L. 73・135)

位置 Ca・b-9・10

重複 他遺構との重複は認められないが、住居南西部が調査区外となるため、未調査となっている。

主軸方向 N-75°-E 床面積 10.2m²

形態 主軸方向に長軸をもつ縦長長方形を呈する。一部未調査があるが、各辺は直線的でほぼ矩形を示すものとみられる。

規模 3.2m×3.8m

カマド 東壁に設置され、南東隅に近く位置する。天井部は残存しないが、埋没土上位には天井部崩落土とみられる粘質土の堆積が認められ、底面には焼土が散布する。規模は焚口40cm、奥行き95cmである。

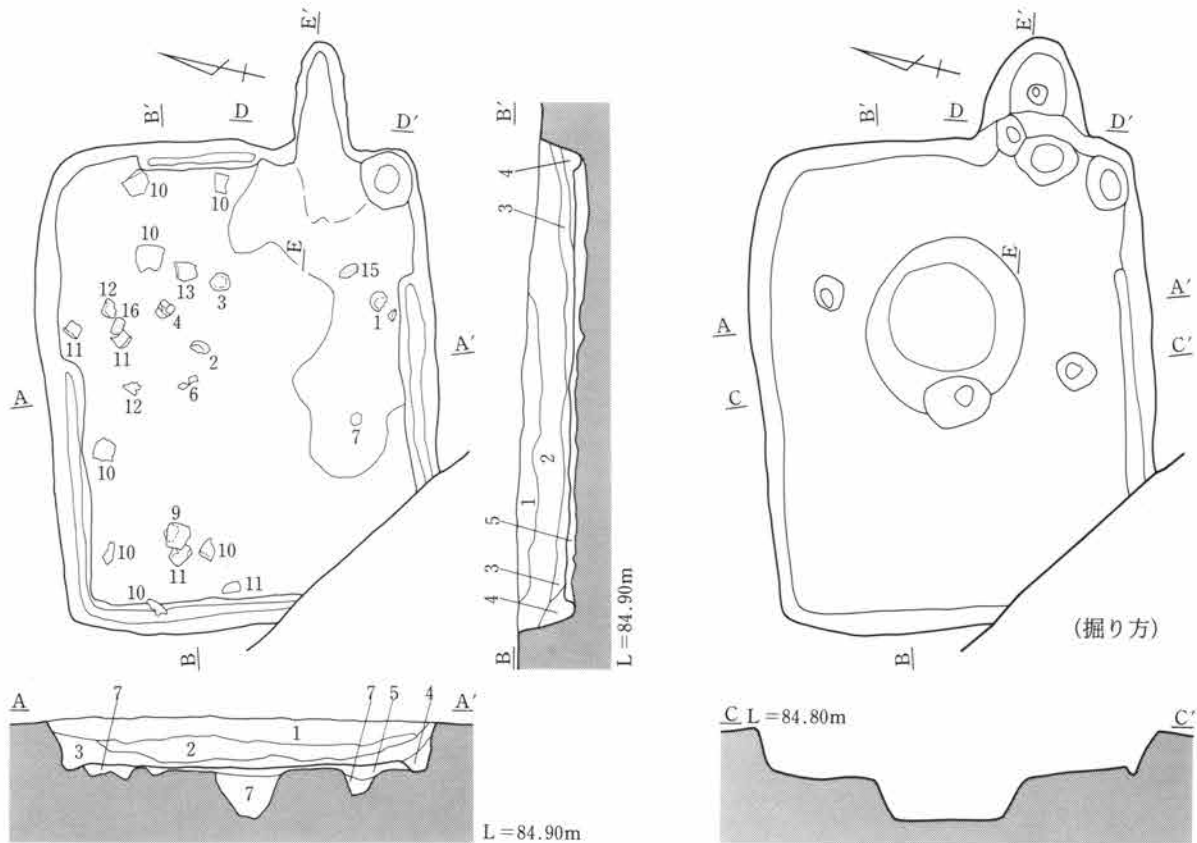
内部施設 南東隅に径40cm、深さ20cmの貯蔵穴が存在する。また壁下に沿って幅15cm、深さ10cmの周溝

が巡る。この周溝は全周せず、北東隅部分および南東隅部分については途切れ、カマド北側に部分的に認められる。柱穴については検出されていない。

床 ロームブロックを含む黒褐色土により張り床が施される。ほぼ水平で堅く良好な面が認められる。

掘り方 一部未調査があるが、遺物は住居北半部に偏在する傾向がある。土器類は2~4・6が北側部の床面上、1・7が南側部の床面上で検出され、5・8は埋没土から出土している。瓦類は北側部に出土し、10・11の2個体は破片が北半部に広く散布しており、それぞれ接合している。12~14の瓦も床面上から検出されている。棒状礫は15が南側、16が北側の床面上で出土している。このほか埋没土からは鉄滓が30g出土している。

時期 出土遺物から8C、後葉に比定される。



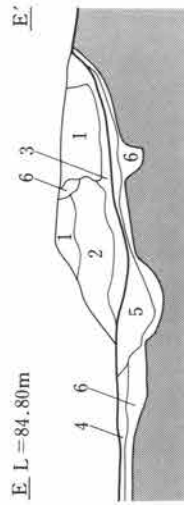
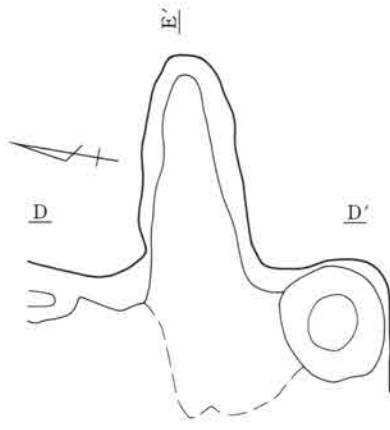
76号住居

- | | |
|-----------------------|-------------------------|
| 1 暗褐色土 白色粒子、焼土、炭化物を含む | 5 黒褐色土 ロームブロックを含む |
| 2 褐色土 白色粒子、焼土、炭化物を含む | 6 暗褐色土 ローム・褐色土をブロック状に含む |
| 3 暗褐色土 焼土、炭化物、ロームを含む | 7 暗褐色土 黒褐色土、ロームブロックを含む |
| 4 褐色土 ロームを多く含む | |

0 2 m

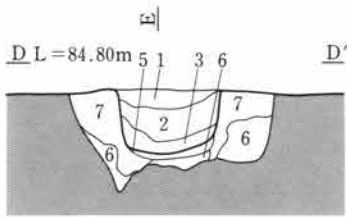
第204図 76号住居

II 発掘調査の記録



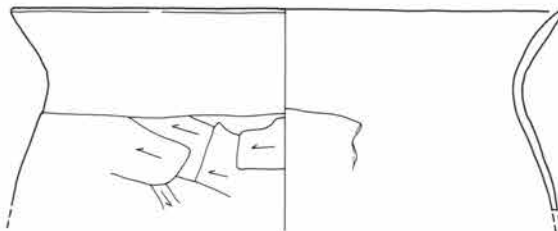
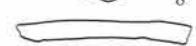
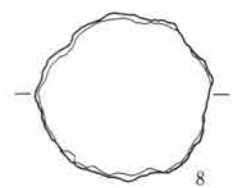
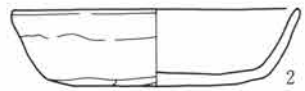
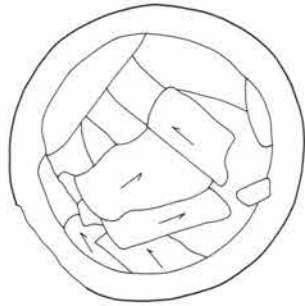
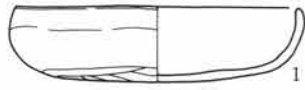
76号住居カマド土層

- 1 暗褐色粘質土
- 2 暗褐色土 焼土ブロック、炭化物を含む
- 3 褐色土 焼土ブロックを多量に含む
- 4 暗褐色土 ロームを含む
- 5 黒色土 灰、炭化物を含む
- 6 暗褐色土 ロームを多量に含む
- 7 暗褐色土 焼土、ロームを含む



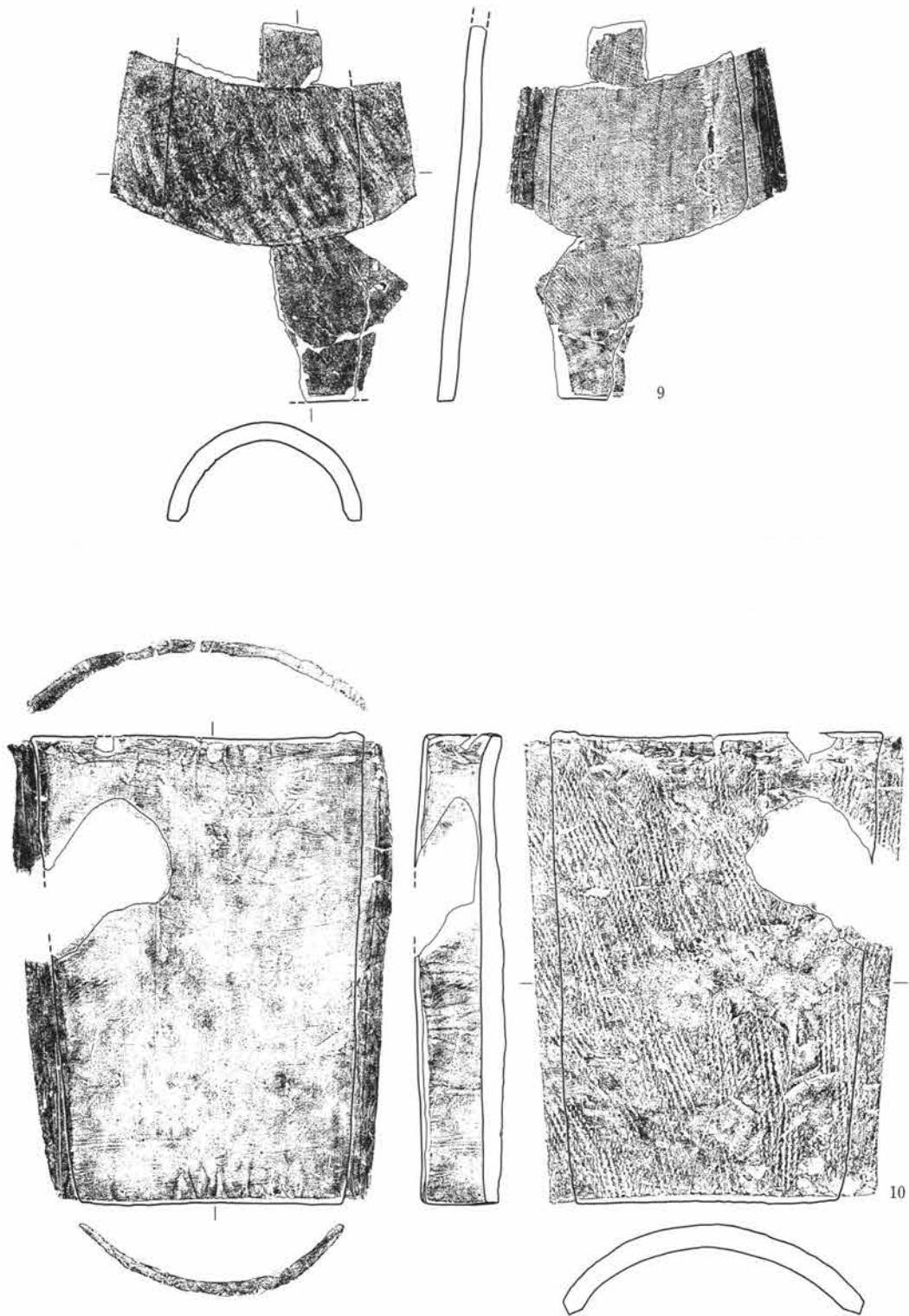
(カマド)

0 1 m



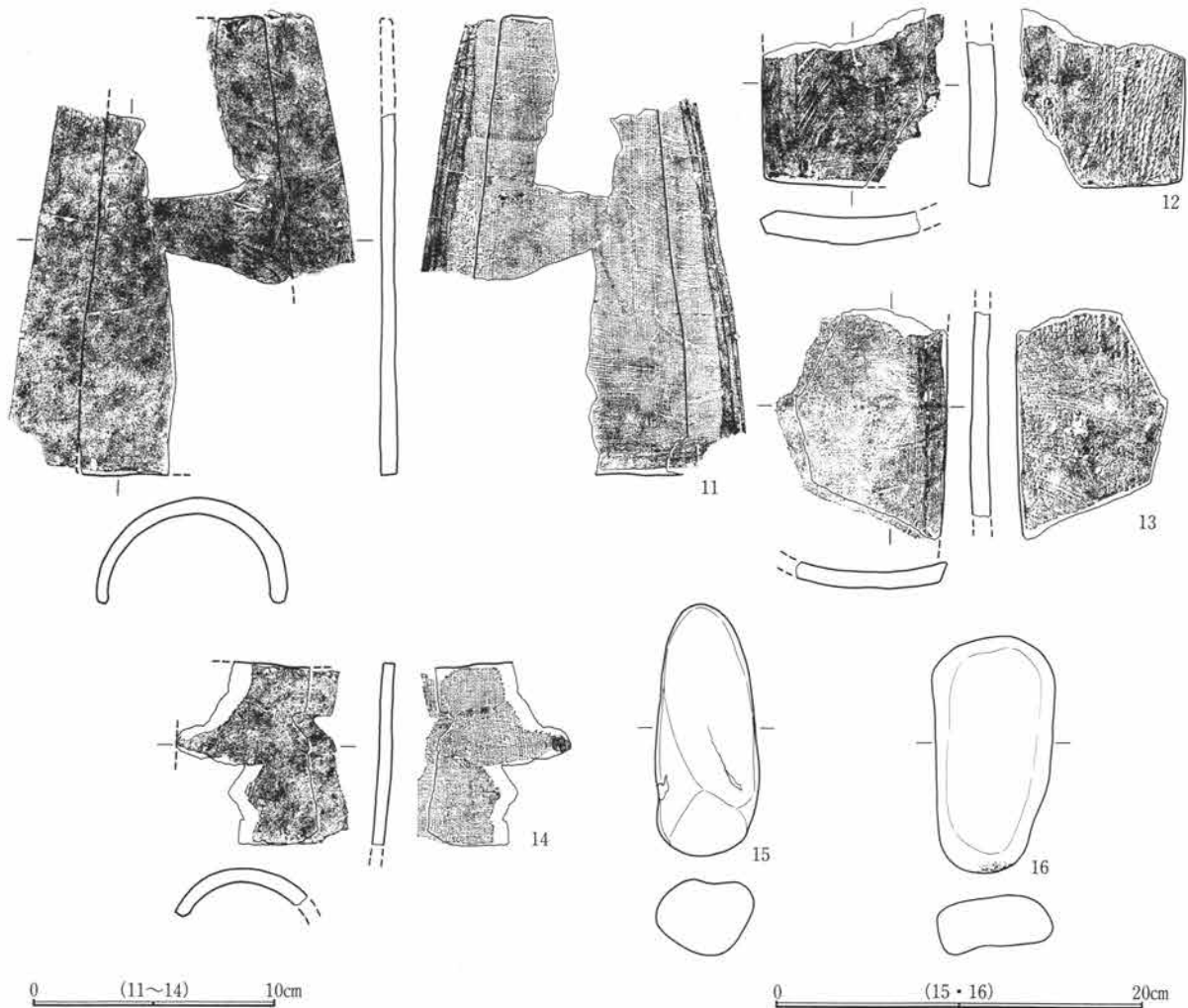
0 10cm

第205図 76号住居と出土遺物



第206図 76号住居出土遺物

II 発掘調査の記録



第207図 76号住居出土遺物

77号住居 (第208図 PL. 74・136)

位置 Ca・b-7・8

重複 住居北東隅に67号土坑が重複する。平面観察から住居が古く、土坑が新しい。

主軸方向 N-54°-E 床面積 8.4㎡

形態 主軸方向に長軸をもつ縦長長方形を呈する。平面形はあまり歪みをもたないが、北および南壁はわずかに張り出しぎみである。

規模 3.0m×3.3m

カマド 東壁中央やや南寄りに設置される。天井部、煙道は残存しないが、埋没土には天井部崩落土とみられる火熱を受けた粘質土の堆積が認められる。袖はロームを含む暗褐色土、黒褐色土により構築され、幅15cm程度で40cm住居内に張り出す。規模は焚口50

cm、奥行き60cmで、住居壁外へあまり突出しない。

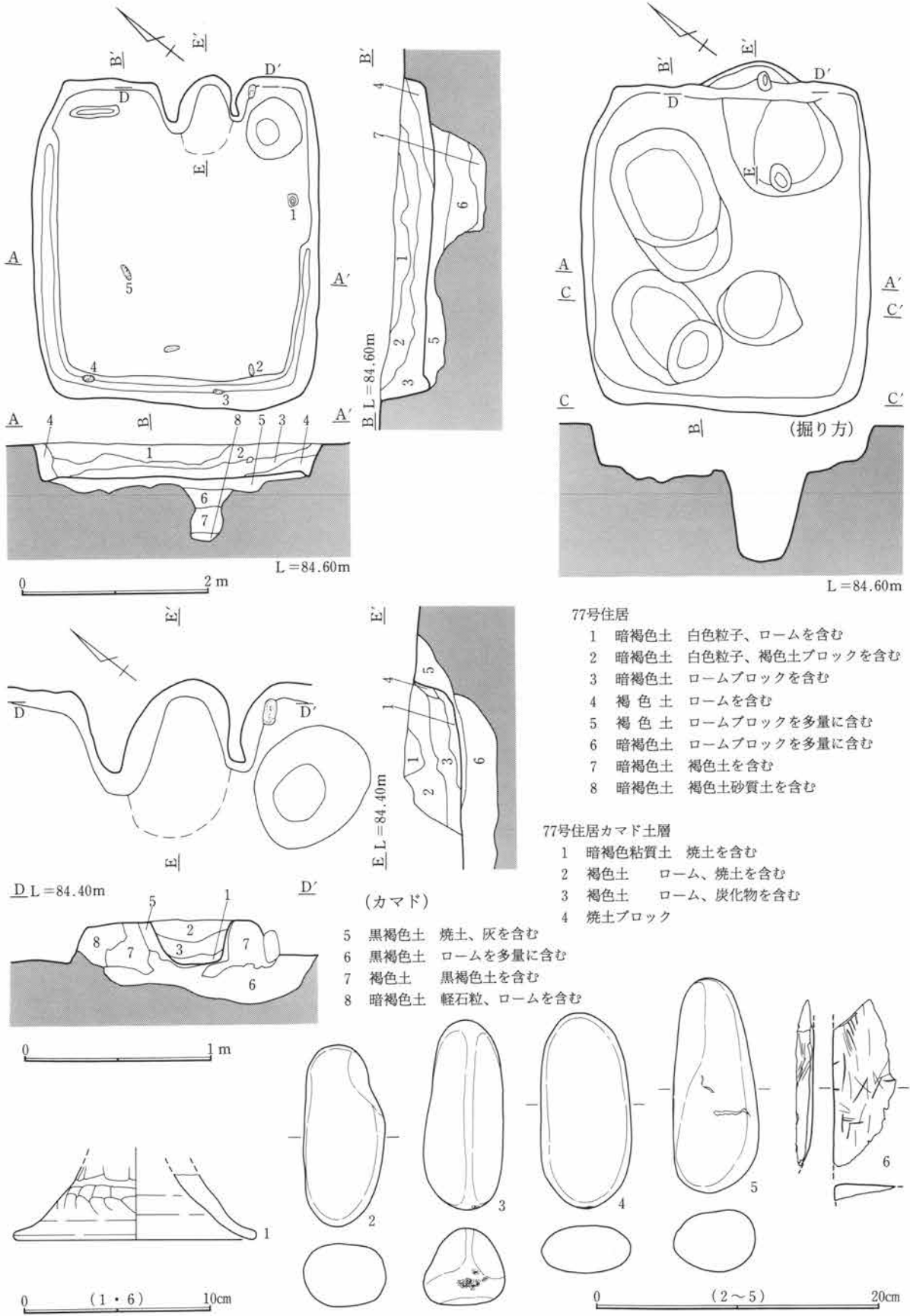
内部施設 住居南東隅に径50cm、深さ20cmの貯蔵穴が存在する。また壁下には幅15cm、深さ8cmの周溝が巡る。この周溝は全周せず北壁から南壁西半部およびカマド北側に部分的に認められる。

床 ロームブロックを多量に含む黄褐色土により張り床が施される。ほぼ水平で堅く良好な面である。

掘り方 土坑状の掘り込みが複数加えられる。深さは不規則で10cm~60cmである。

遺物出土状態 遺物量は少ない。土器は1が南東部床面上で出土し、棒状礫2・3が南西部、4・5が北西部でそれぞれ床面上で検出されている。6の砥石は埋没土から出土している。

時期 特定できない。



第208図 77号住居と出土遺物

II 発掘調査の記録

78号住居 (第209図 P L. 74・136)

位置 Cm・n-16・17

重複 他遺構との重複は認められない。

主軸方向 N-37°-E 床面積 7.7m²

形態 主軸方向に長軸をもつ縦長長方形を呈するが西壁に比べ東壁がやや長く、台形平面となっている。

規模 3.0m×3.1m

カマド 東壁に設置され、北東隅から3分の2程度南側に寄る。使用面はほとんど失われ、掘り方の一

部が検出されている。この掘り方内には焼土、灰および暗褐色土が混在して堆積している。

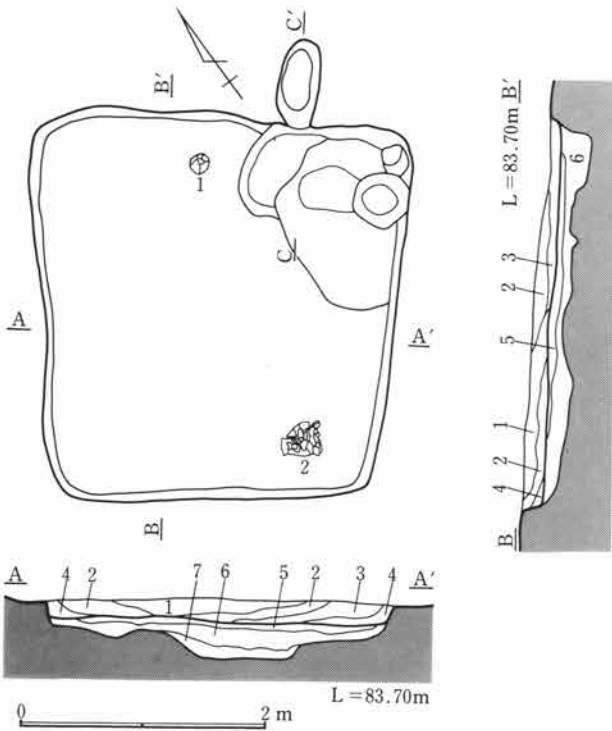
内部施設 カマドと同様に残存状況が不良のため不明な点が多いが、周溝、柱穴などは認められない。

床 ロームを含む黒褐色土により張り床が施される。

掘り方 土坑状の掘り込みが複数加えられる。

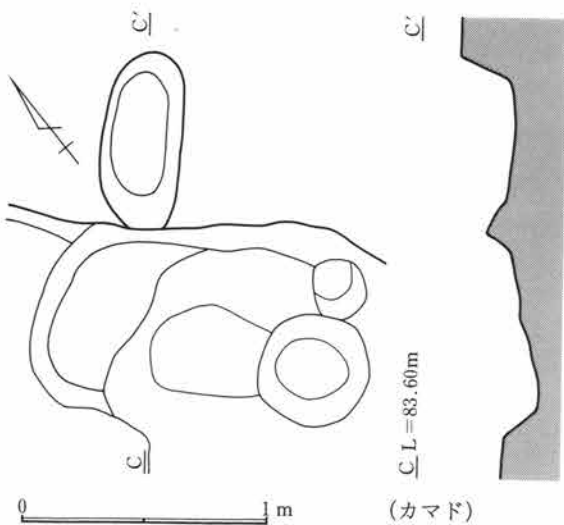
遺物出土状態 遺物量は少ないが、1・2とも床面上で検出されている。

時期 出土遺物から8 C. 中葉以降に比定される。

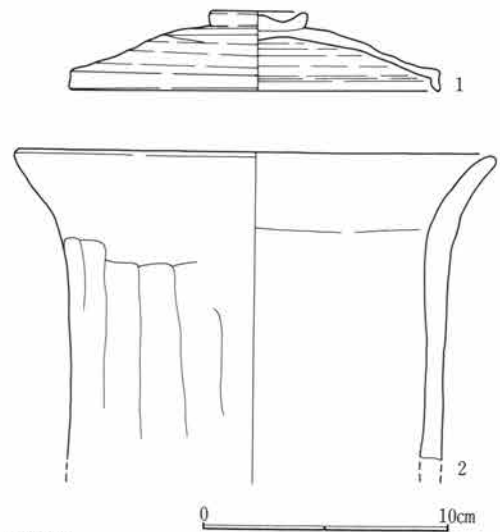


78号住居

- 1 黒褐色土 白色粒子、ロームブロックを含む
- 2 暗褐色土 白色粒子、ロームブロックを含む
- 3 黒褐色土 白色粒子、ロームを含む
- 4 黄褐色土 白色粒子を含む
- 5 黒褐色土 ローム、灰褐色土を含む掘り方埋土
- 6 暗褐色土 ロームを多く含む
- 7 灰褐色土 ロームブロック、黒褐色土を含む



(カマド)



第209図 78号住居と出土遺物

79号住居 (第210図 P L. 74・136)

位置 Bw・x-4・5

重複 他遺構との重複はみられない。

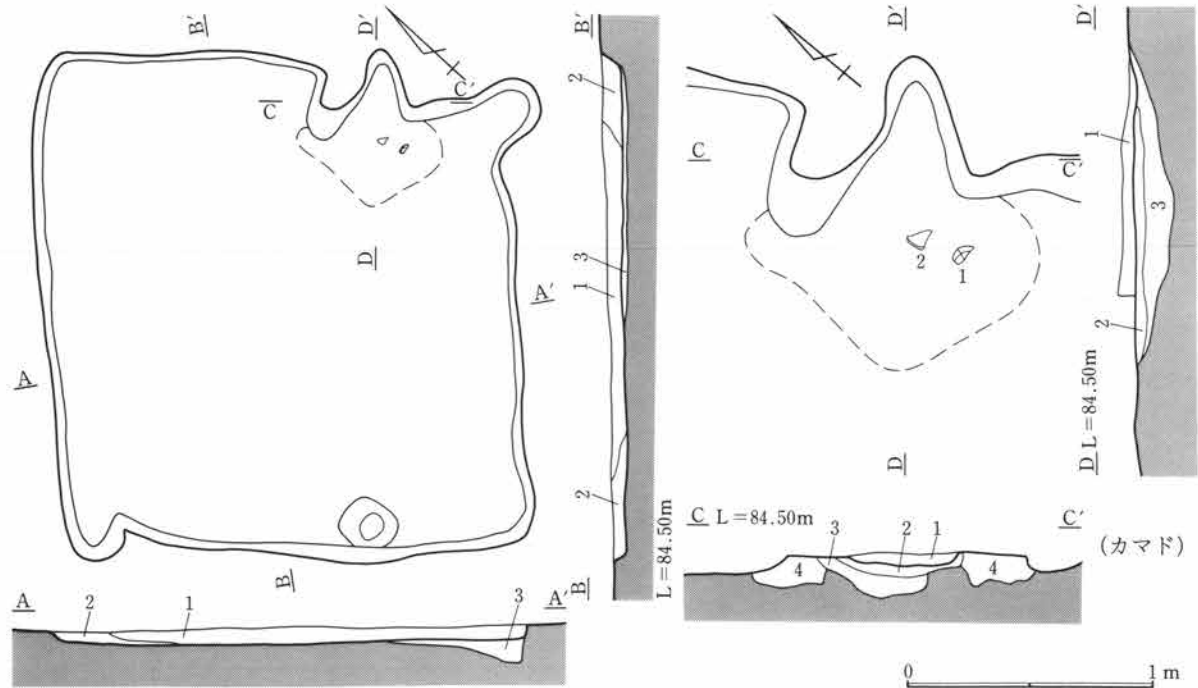
主軸方向 N-51°-E 床面積 12.9㎡

形態 残存状態が不良で検出された形態もやや不規則であるが、主軸方向に長軸をもつ縦長長方形とみられる。なお、短軸との差はすくなく方形に近い形状を示している。

規模 3.8m×4.0m

カマド 東壁に設置され、北東隅から3分の2程度南寄りに位置する。袖部は暗黄褐色土により構築され、幅15cm~25cmで左袖で40cm程住居内に張り出す。規模は、焚口40cm、奥行き70cmでカマド前面には灰および焼土の散布が認められる。

内部施設 西壁に接して径40cm、深さ17cmの小穴が検出された他、周溝などは認められていない。なお、



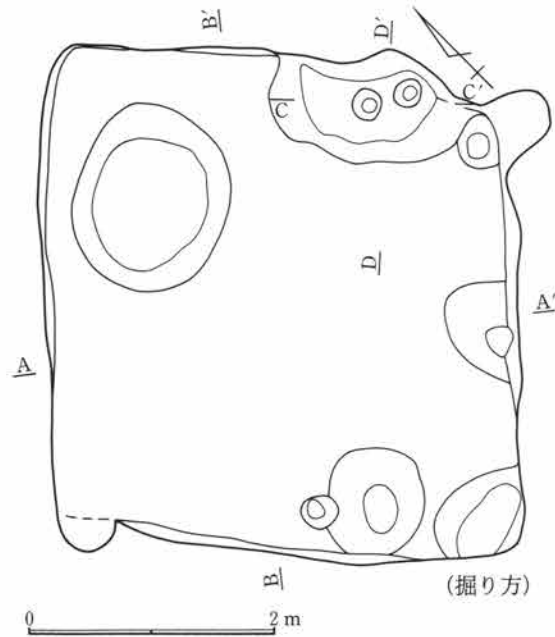
L=84.50m

79号住居

- 1 褐色土 白色粒子、ロームを含む
- 2 暗褐色土 ローム、暗褐色土を含む

79号住居カマド土層

- 1 暗褐色土 焼土、炭化物を含む
- 2 暗褐色土 焼土、灰、炭化物を含む
- 3 褐色土 焼土粒、ロームブロックを含む
- 4 暗褐色土 褐色粘質土を含む

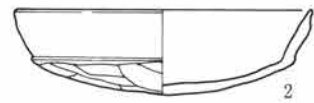


(掘り方)

0 2m



1



2

0 10cm

第210図 79号住居と出土遺物

II 発掘調査の記録

南東隅に弧状の張り出しがみられるが、底面は床面と同一の深さであり、特に深くなっているわけではない。伴うものか異なる掘り込みであるかは確認できる所見を得られていない。

床 一部張り床も施されるが、大半については地山であるローム面を床面としている。

掘り方 土坑状の掘り込みが部分的に加えられるが、量的には少ない。

遺物出土状態 遺物量は少ない。1・2ともカマド部分から出土している。

時期 出土遺物から7C.後半に比定される。

80号住居 (第211・212図 P.L. 75・136)

位置 Bw・x-7・8

重複 住居北壁部で82号住居と重複する。調査所見では80号住居が新しく、82号住居が古い。また、南西隅部は調査区域外のため、未調査である。

主軸方向 N-71°-E **床面積** (9.3m²)

形態 主軸方向の対辺に長軸をもつ横長長方形を呈する。南東隅がやや張り出しぎみとなるが、各辺は

直線的で平面形状にあまり歪みはみられない。

規模 3.0m×3.6m

カマド 東壁に設置され、北東隅から3分の2程度南寄りに位置する。天井部、煙道は残存しないが、埋没土には天井部崩落土とみられる被熱した粘質土の堆積が認められる。規模は焚口50cm、奥行き80cmであり、カマド前面には灰・焼土の散布がみられる。

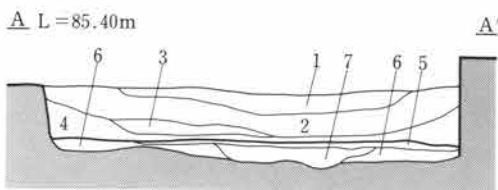
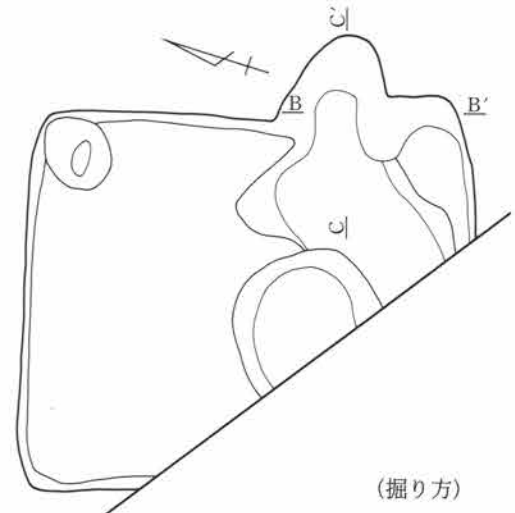
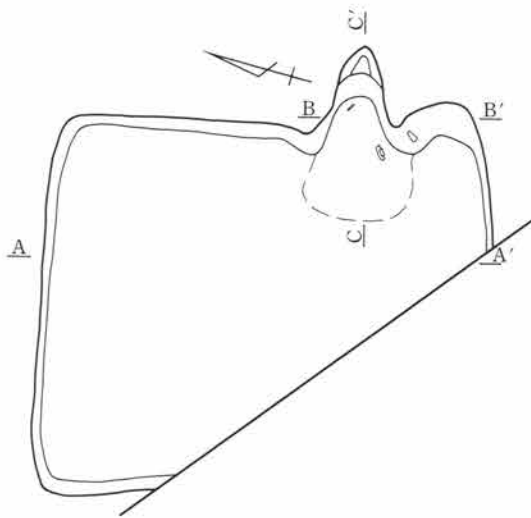
内部施設 床面上では周溝、柱穴などについて確認されていない。ただ掘り方調査により北東隅径55cm、深さ27cmの小穴が検出され、この小穴について用途不明ながら、床面上から掘り込まれていた可能性があり、内部施設に伴うものかもしれない。

床 ロームを含む褐色土により張り床が施される。堅く良好な面が形成されている。

掘り方 中央部に径120cm、深さ30cmの土坑状の掘り込みが加えられる。

遺物出土状態 遺物量は少なく、1~3いずれもカマド内から出土している。

時期 出土遺物から8C.代に比定される。

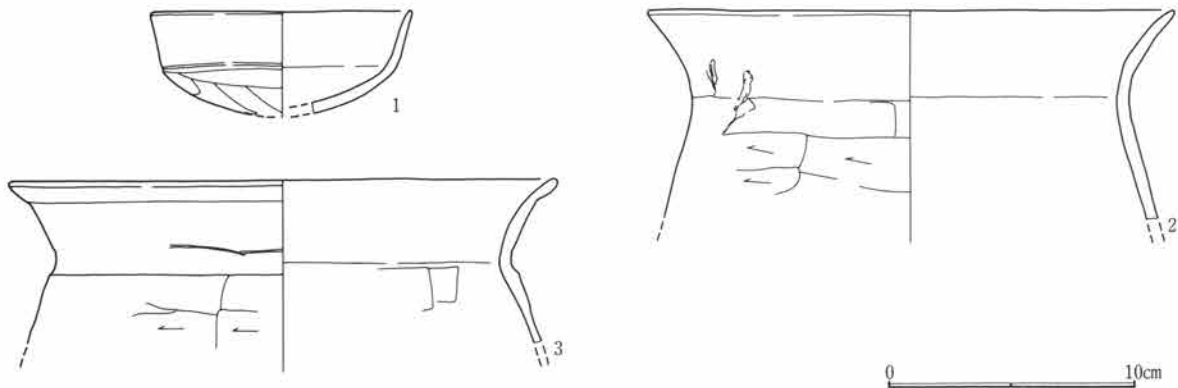
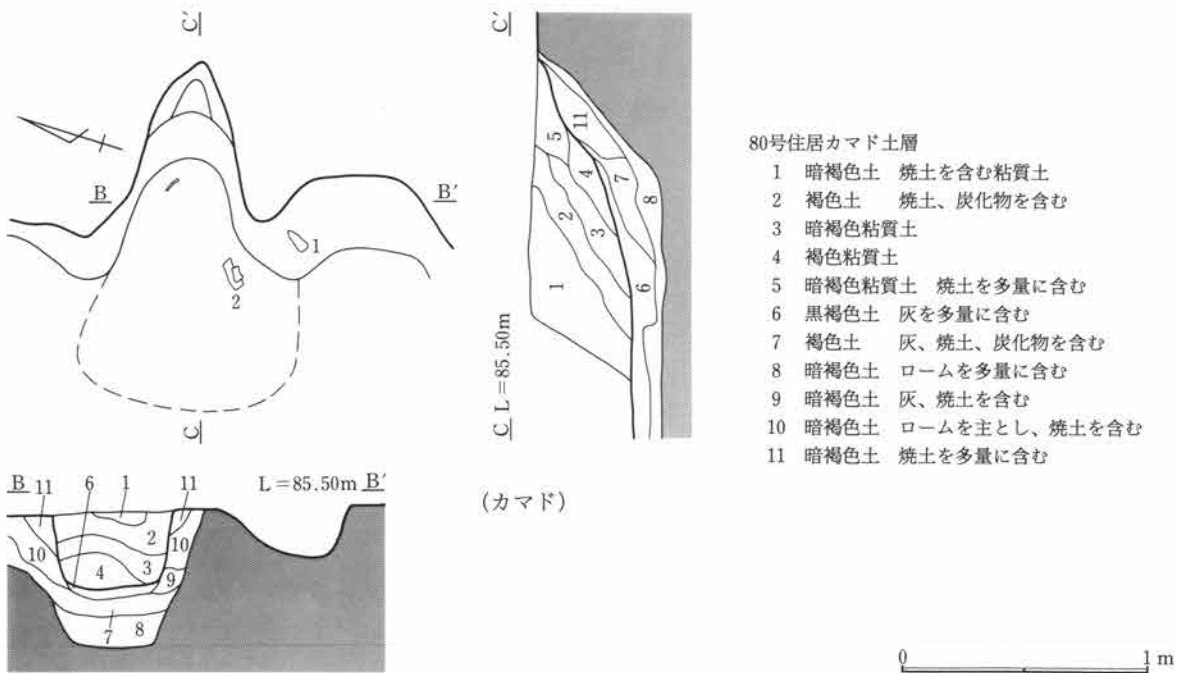


80号住居

- | | | |
|---|------|------------------|
| 1 | 暗褐色土 | 白色粒子、ロームを含む |
| 2 | 暗褐色土 | 白色粒子、褐色土を含む |
| 3 | 褐色土 | 白色粒子、ロームを含む |
| 4 | 褐色土 | ロームブロック、炭化物を含む |
| 5 | 褐色土 | ロームを含み硬く良好な床面を形成 |
| 6 | 暗褐色土 | ロームを多く含む |
| 7 | 暗褐色土 | 褐色土、ロームを多く含む |

第211図 80号住居

0 2 m



第212図 80号住居と出土遺物

81号住居 (第213～215図 P L, 75・136・137)

位置 Bt・u-5・6

重複 住居西壁部で84号住居と重複する。この住居重複部は調査区と接するため、観察面が些少となりその結果両住居の切り合い関係について良好な調査所見が得られなかった。また出土遺物についても、84号住居が部分的検出にとどまり伴出土器もほとんどないため、確実な新旧関係は不明であるが、図示する土器からみると81号住居が84号住居より古い可能性がある。なお、南西隅は調査区外であるため未調査となっている。

主軸方向 N-68°-E 床面積 (8.2m²)

形態 主軸方向に長軸をもつ縦長長方形を呈する。一部未調査であるが平面形状にはあまり歪みがなく各辺もほぼ直線的で矩形を示している。

規模 3.1m×3.4m

カマド 東壁中央やや南寄りに設置される。天井部、煙道は残存しない。使用面である底面には灰および焼土の堆積が認められ、カマド前面にも灰の散布がみられる。袖部はローム、粘質土を含む暗褐色土により構築され、左袖は残存状態が悪いものの、右袖は幅20cmで30cm程度住居内に張り出す。規模は焚口40cm、奥行き60cmである。

内部施設 南東隅に径50cm、深さ18cmの貯蔵穴が検

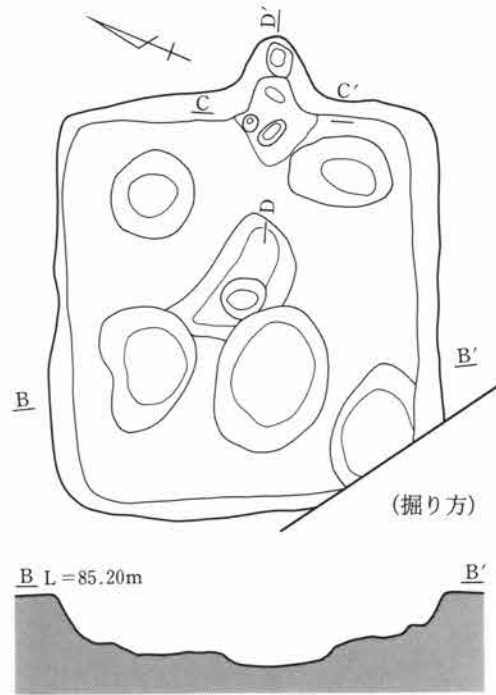
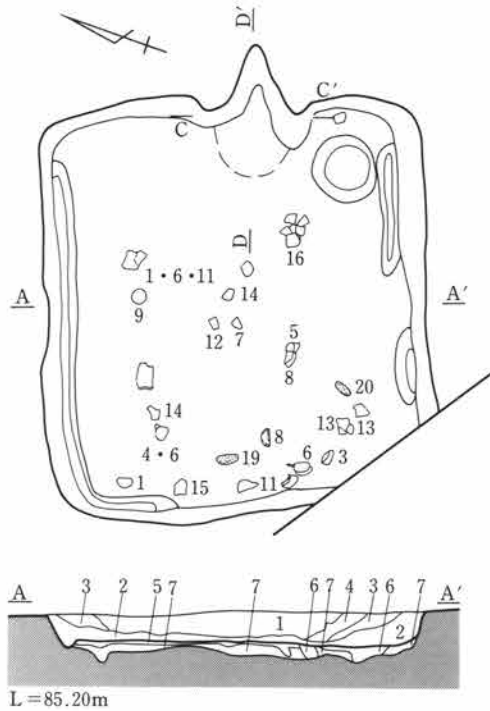
II 発掘調査の記録

出されている。また壁下には幅15cm、深さ5cm~10cmの周溝が巡る。周溝は全周せず北壁部から北西隅にかけてと南壁部に部分的に認められ、他については途切れている。柱穴については検出されていない。床 褐色土を含む黒褐色土により張り床が施される。ほぼ水平な面が形成されているが、とくに硬化

面は認められていない。

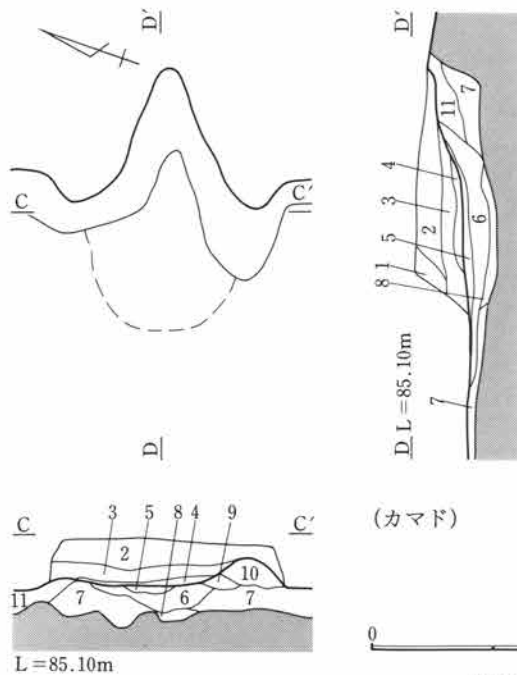
掘り方 計60cm~100cm、深さ10cm~20cmの土坑状の掘り込みが複数加えられ、ロームを含む暗褐色土により埋め戻される。

遺物出土状態 住居全体に散布するが、中央部から西半部にかけてややまとまる傾向がある。土器類は



(掘り方)

0 2 m



(カマド)

0 1 m

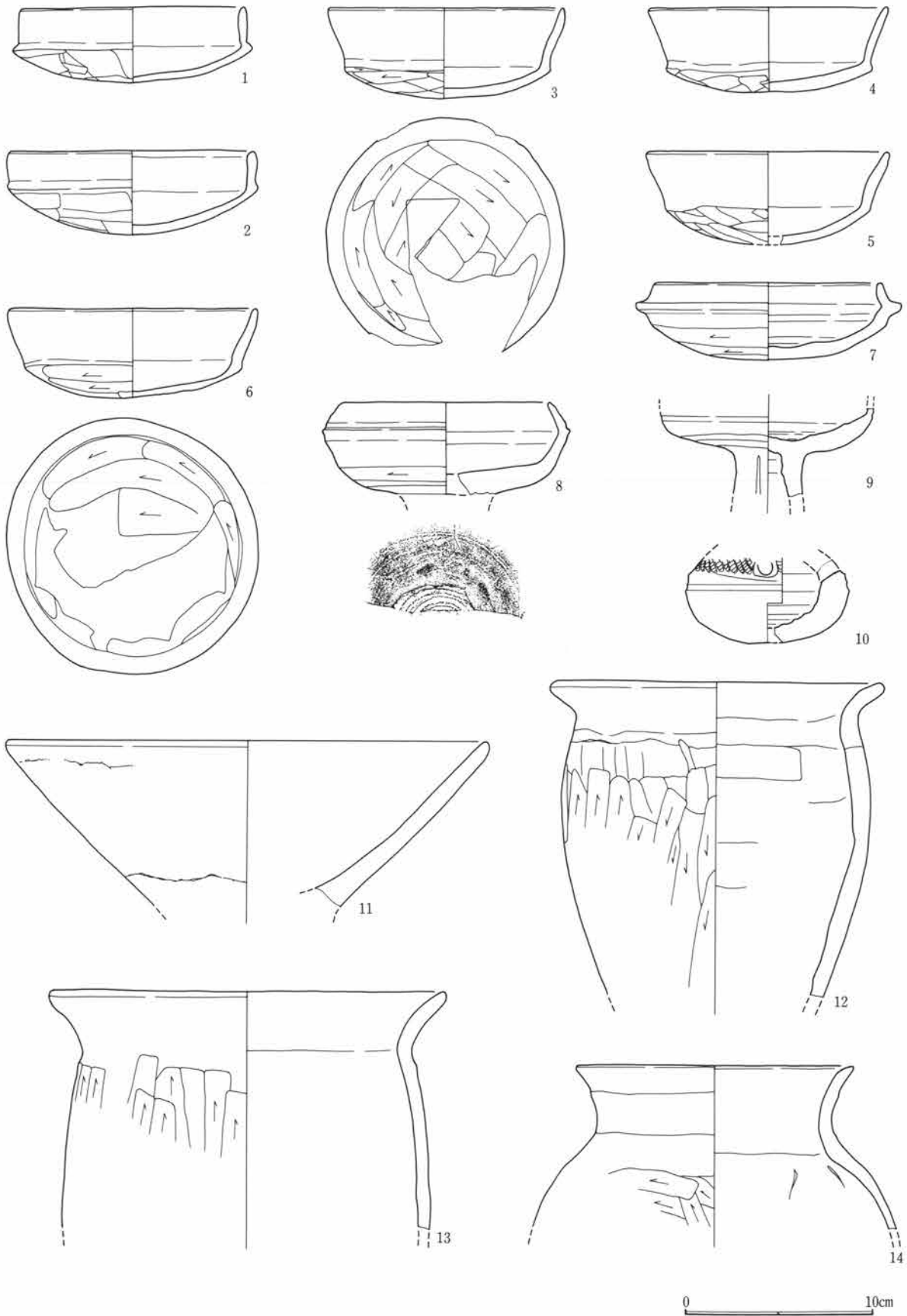
81号住居

- 1 黒褐色土 白色粒子、焼土を含む
- 2 黒褐色土 白色粒子、褐色土を含む
- 3 暗褐色土 褐色土、ロームを含む
- 4 暗褐色土 白色粒子、焼土を含む
- 5 黒褐色土 暗褐色土を含む
- 6 暗褐色土 ローム、黒褐色土を含む
- 7 暗褐色土 ロームを主に褐色土を少量含む

81号住居カマド土層

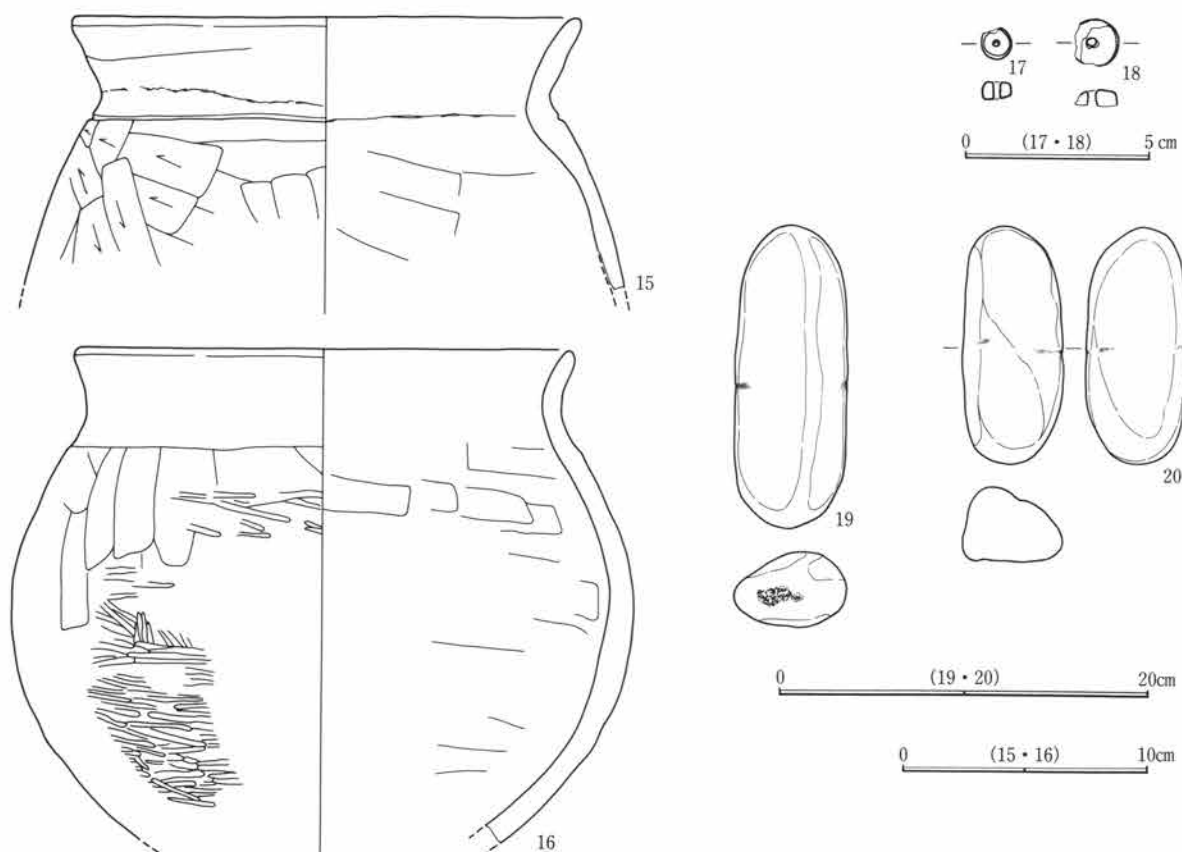
- 1 黒褐色土 ローム、焼土を含む
- 2 暗褐色土 ローム、焼土、軽石粒を含む
- 3 暗褐色土 焼土粒を含む
- 4 黒褐色土 焼土粒、炭化物を含む
- 5 暗褐色土 灰、焼土を含む
- 6 褐色土 ロームブロック、焼土を含む
- 7 暗褐色土 ロームを多量に含む
- 8 褐色土 焼土、灰を含む
- 9 暗褐色粘質土
- 10 暗褐色土 粘質土、軽石粒を含む
- 11 褐色土 ローム、粘質土を含む

第213図 81号住居



第214図 81号住居出土遺物

II 発掘調査の記録



第215図 81号住居出土遺物

1・2・4・6・8・9・14が床面上、3・5・7・11・13・15・16が埋没土下部で床面から7~12cm上位で検出され、10は埋没土から出土している。石製品は17・18の滑石製白玉が埋没土、19・20棒状礫は床面上から出土している。

時期 出土遺物から6 C.後半に比定される。

82号住居 (第216・217図 PL. 75・137)

位置 Bu・v-7

重複 住居南東隅側で80号住居と重複する。平面および断面観察から82号住居が古く、80号住居が新しい。また、南西部分が調査区外となり、住居のおよそ2分の1が未調査となっている。さらに溝状の掘り込みもあり、検出状態は良くない。

主軸方向 N-70°-E **床面積** 不明

形態 南側の隅が2カ所とも確認できないため形態の確定に至らないが、検出部分から推定すると主軸方向の対辺に長軸をもつ横長長方形を呈するものと考えられる。

規模 計測不可

カマド 東壁部に設置される。天井部、煙道は残存しないが、埋没土に天井部崩落土である火熱を受けた粘質土の堆積が認められる。また底面下部には層厚3cm程度の灰層が形成されている。袖部はロームを含む褐色土により構築され幅15cmで20cm程住居内に張り出す。規模は60cm、奥行き70cmを計測する。

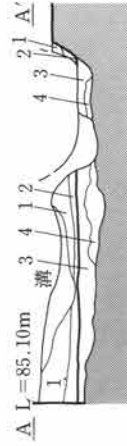
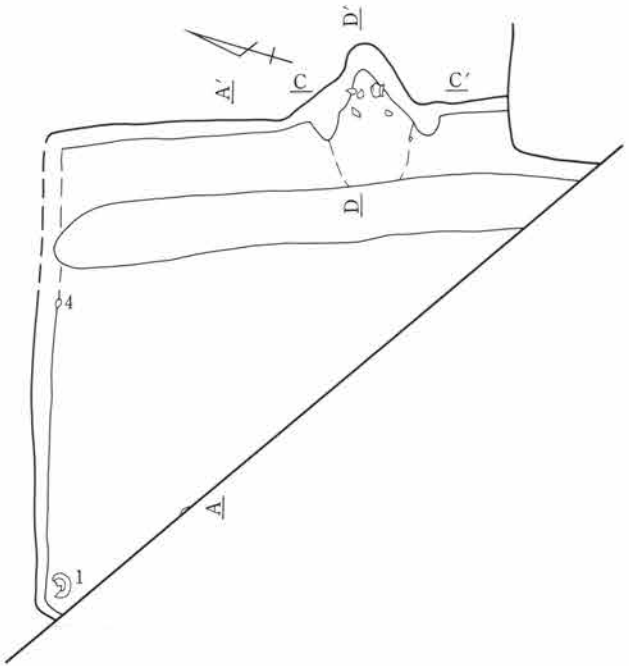
内部施設 検出部分が限られているため不明な部分が多いが、周溝などは認められていない。

床 ロームブロックを含む暗褐色土を掘り方の埋土とするが、その上面を床面としている。

掘り方 土坑状の掘り込みが加えられる。

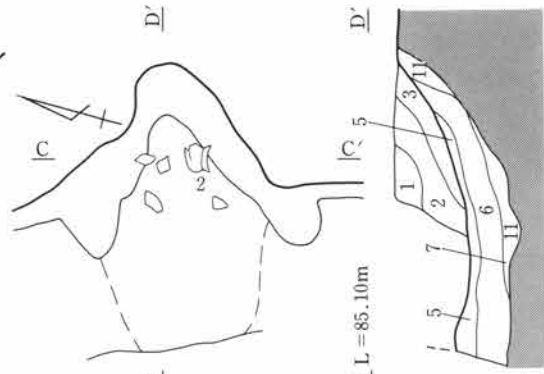
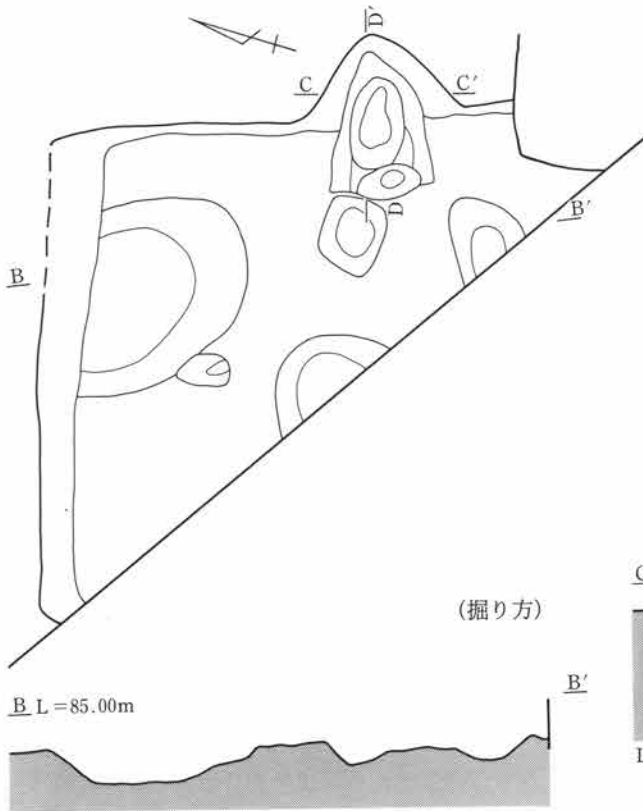
遺物出土状態 遺物量は少ない。1が北西隅、2がカマド内、4の粗粒安山岩製の紡錘車は北壁に接して検出され、3の不明土製品、5・6の鉄製釘は埋没土から出土している。

時期 出土遺物から9 C.前半に比定される。

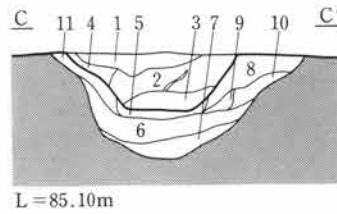


82号住居

- 1 黒褐色土 暗褐色土、ロームブロックを含む
- 2 黒褐色土 暗褐色土を含む
- 3 暗褐色土 白色粒子、焼土を含む
- 4 暗褐色土 焼土、灰褐色土を含む



(カマド)



82号住居カマド土層

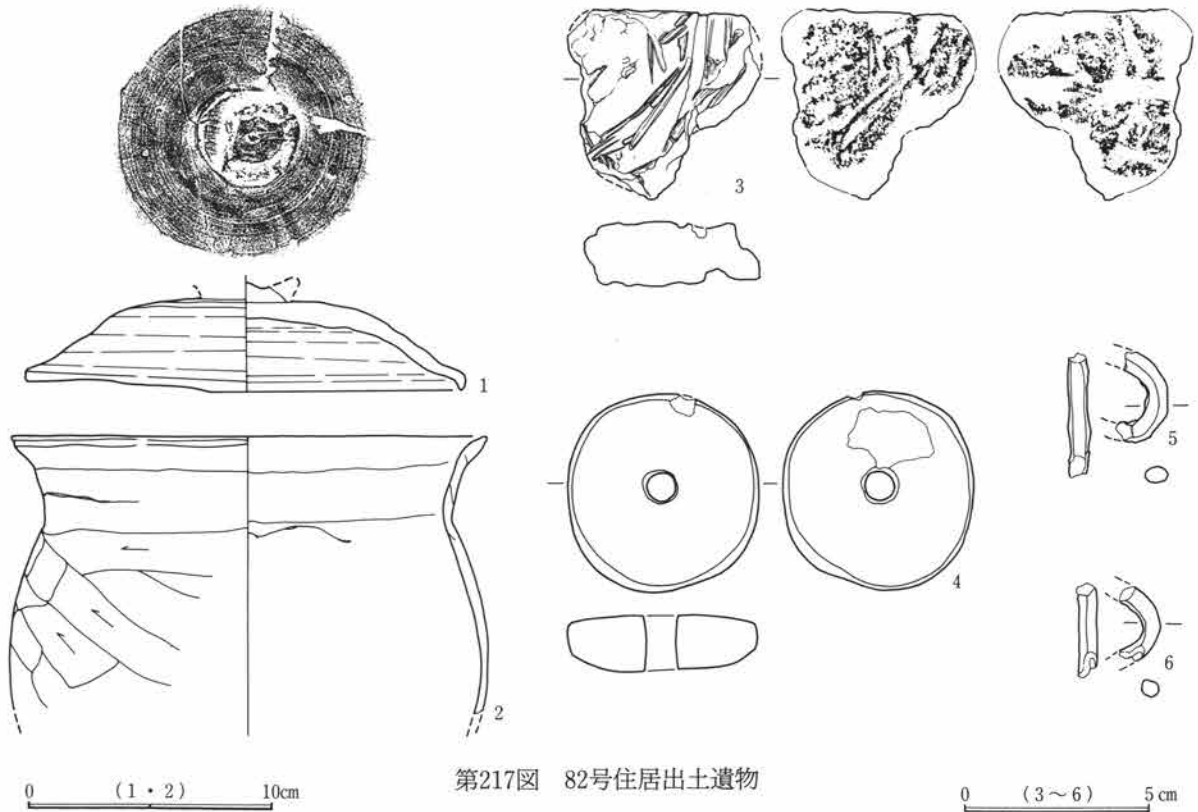
- 1 暗褐色土 軽石粒、炭化物を含む
- 2 灰褐色粘質土
- 3 赤褐色粘質土
- 4 暗褐色粘質土
- 5 灰褐色粘質土 焼土、灰を多量に含む
- 6 褐色粘質土
- 7 褐色土 粘質土、焼土を含む
- 8 褐色土 焼土ブロックを多量に含む
- 9 灰褐色粘質土
- 10 褐色土 ロームを多量に含む
- 11 褐色土 粘質土、焼土を含む

0 2 m

0 1 m

第216図 82号住居

II 発掘調査の記録



第217図 82号住居出土遺物

83号住居 (第218図 P L 76・137)

位置 Bn・o-0・1

重複 67号住居、74号住居と重複する。平面および断面観察から67号住居→83号住居→74号住居の順に新しくなる。74号住居により3分の1程度が失われていることになる。

主軸方向 N-92°-E 床面積 (6.9m²)

形態 主軸方向の対辺に長軸をもつ横長長方形を呈する。重複により検出状態がやや不規則な部分があるが、各隅および各辺とも丸みをもっている。

規模 2.6m×3.5m

カマド 東壁部に設置され、やや南寄りに位置する。左袖部分を74号住居の重複により壊され、検出状況は悪く天井部、煙道は残存しない。カマド内には3の土師器甕の他、土器片が数点出土している。規模は焚口幅は不明であるが奥行きは90cmである。

内部施設 住居南東隅に径60cm、深さ38cm、南西隅に径90cm、深さ30cmの小穴がそれぞれみられるが、この2穴がこの住居に伴うものか否かについての調査所見は得られなかった。中央部の径140cm×80cm、

深さ30cmの掘り込みは、掘り方に伴うものとみられる。その他、周溝などは未検出である。

床 残存状態が悪く、明確に床面として検出されて部分は少ない。

掘り方 床面残存部が少ないため、掘り方についても不明瞭である。

遺物出土状態 遺物量は少ない。1・2は南西部床面上、3はカマド内で出土している。

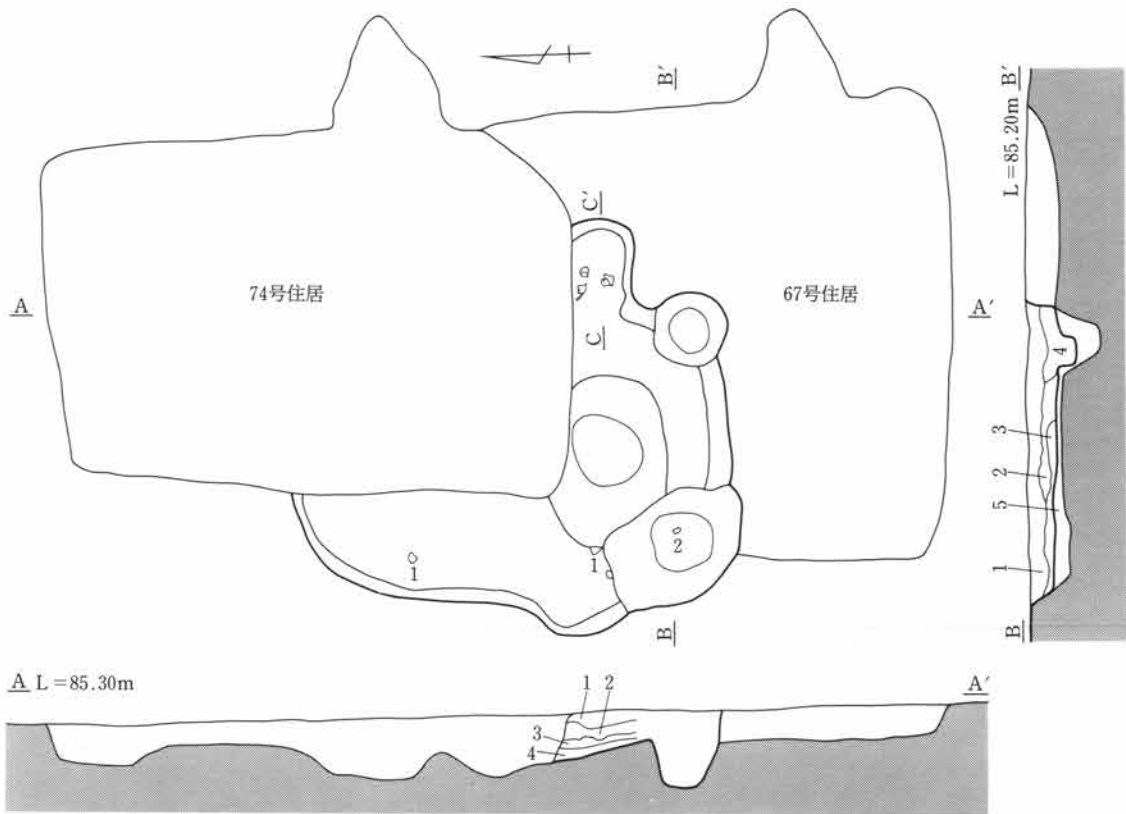
時期 出土遺物から10C.前半に比定される。

84号住居 (第219図 P L. 76・138)

位置 Bs・t-5・6

この住居はカマドおよび北東隅の部分的検出にとどまり、大半が調査区外で未調査となっている。検出部分の少なから重複する81号住居との新旧関係についても良好な調査所見は得られていない。このように部分的確認であるため、カマドが東壁に設置されていること以外、内部施設、床面など不明である。図示する土器も埋没土出土である。

時期 出土遺物から7C.代に比定される。



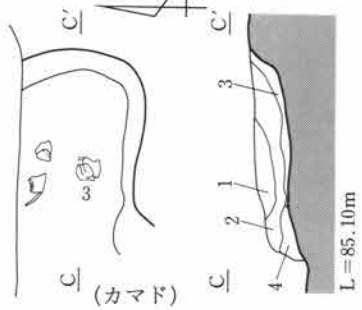
A L = 85.30m

L = 85.20m B'

83号住居

- 1 暗褐色土 白色粒子を多く含む硬くしまりのある層
- 2 黒褐色土 白色粒子、ローム、焼土を含む
- 3 黒褐色土 焼土を含む
- 4 黒褐色土 ローム、焼土を含む
- 5 褐色土 ローム、暗褐色土を含む

0 2 m



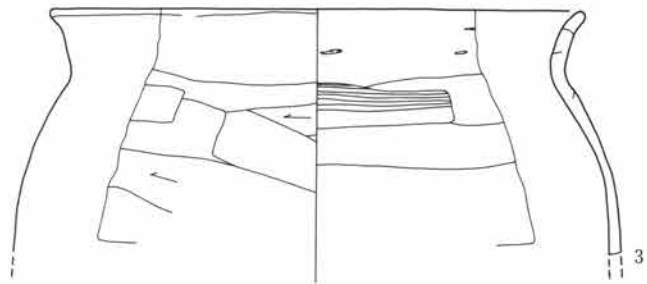
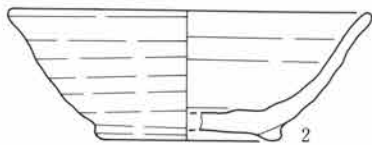
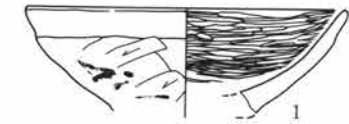
(カマド)

L = 85.10m

83号住居カマド土層

- 1 黒色土 焼土、ロームを含む
- 2 黒褐色土 焼土、ロームを含む
- 3 暗褐色土 ローム、焼土を含む
- 4 暗褐色土 ロームを多く含む

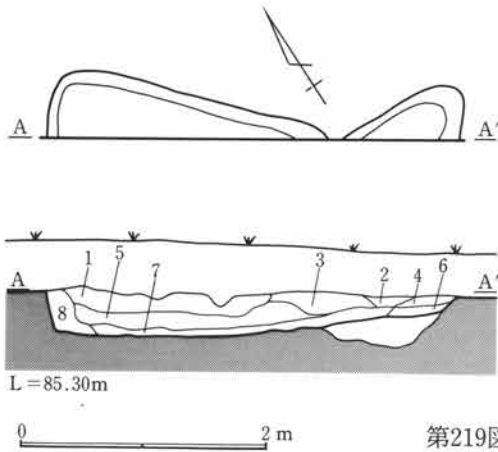
0 1 m



0 10cm

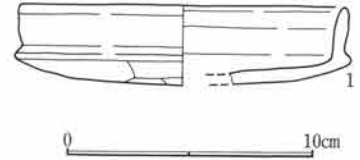
第218図 83号住居と出土遺物

II 発掘調査の記録



84号住居

- 1 暗褐色土 白色軽石、焼土を含む
- 2 暗褐色土 焼土を含む
- 3 褐色土 白色軽石、焼土を含む
- 4 褐色土 焼土を多く含む
- 5 褐色土 ロームブロックを含む
- 6 褐色土 焼土をブロック状に含む
- 7 暗褐色土 ロームブロックを少量含む
- 8 褐色土 白色軽石、焼土を含む



第219図 84号住居と出土遺物

85号住居 (第220・221図 P.L. 76・138)

位置 Bu・v-5・6

重複 2号掘立柱建物、57号住居と重複するが、この住居が新しい。東壁部に溝が横走る。

主軸方向 N-62°-E 床面積 (10.1m²)

形態 主軸方向対辺に長軸をもつ横長方形を示す。

規模 3.0m×3.9m

カマドは東壁に設置され、床面は硬化面は認められ

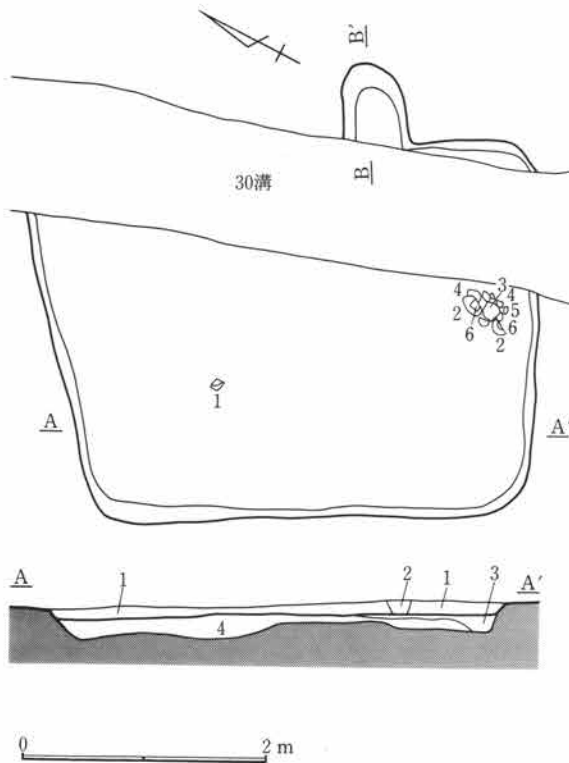
ない。遺物は1が北西部、2～6は南東部床面上に集中して出土している。

時期 出土遺物から9C.前葉に比定される。

86号住居 (第222図 P.L. 77)

位置 Bu・v・w-3・4

カマドとみられる部分に焼土の散布があり、さらに南側に住居状の方形プラン認められたことにより検出された住居である。残存状態は極めて悪く、その存在が確認できる程度であり、伴出遺物もとくに

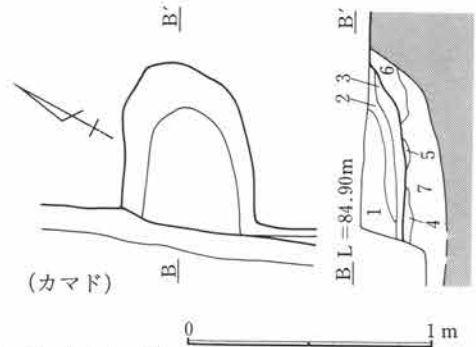


85号住居

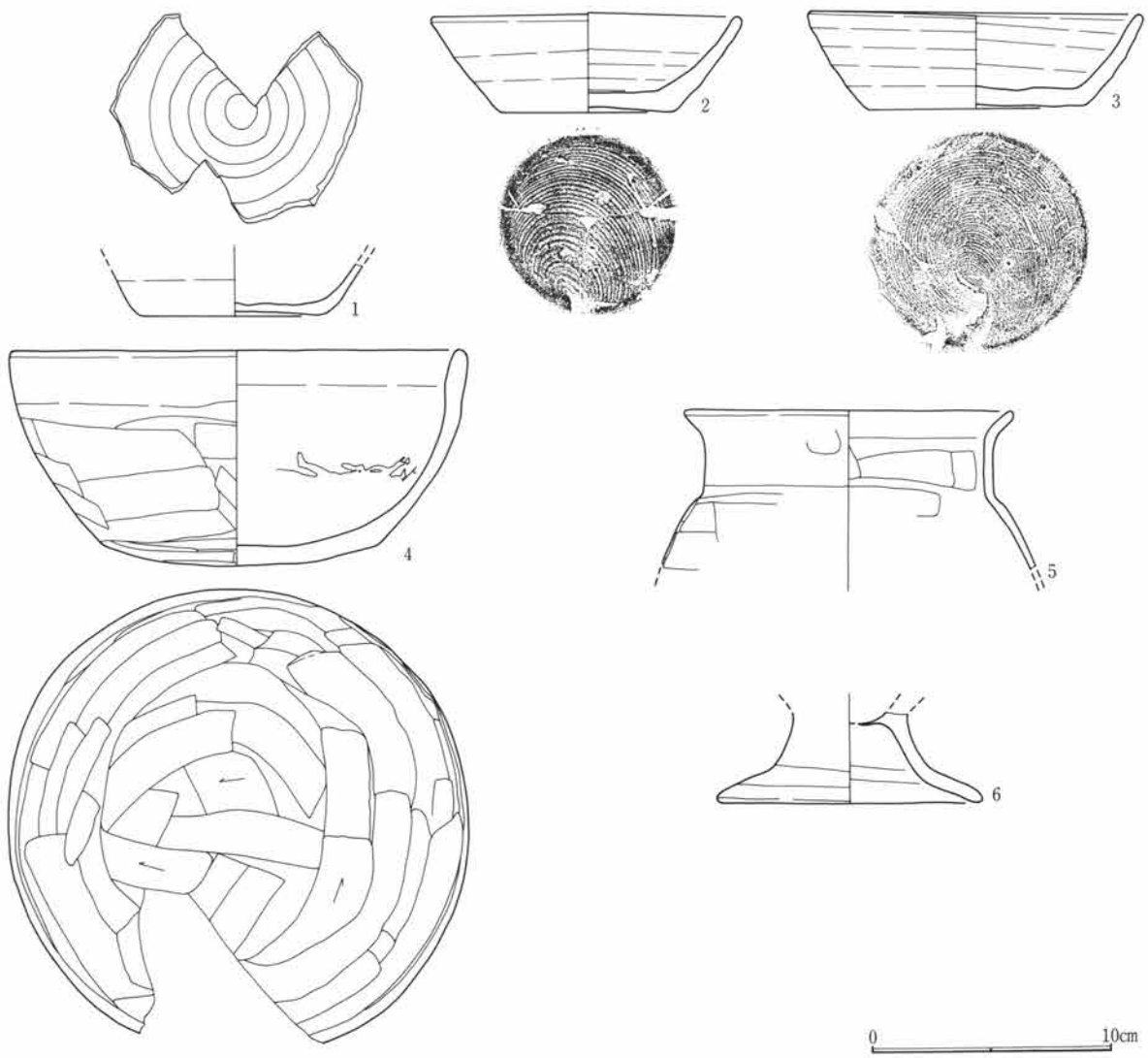
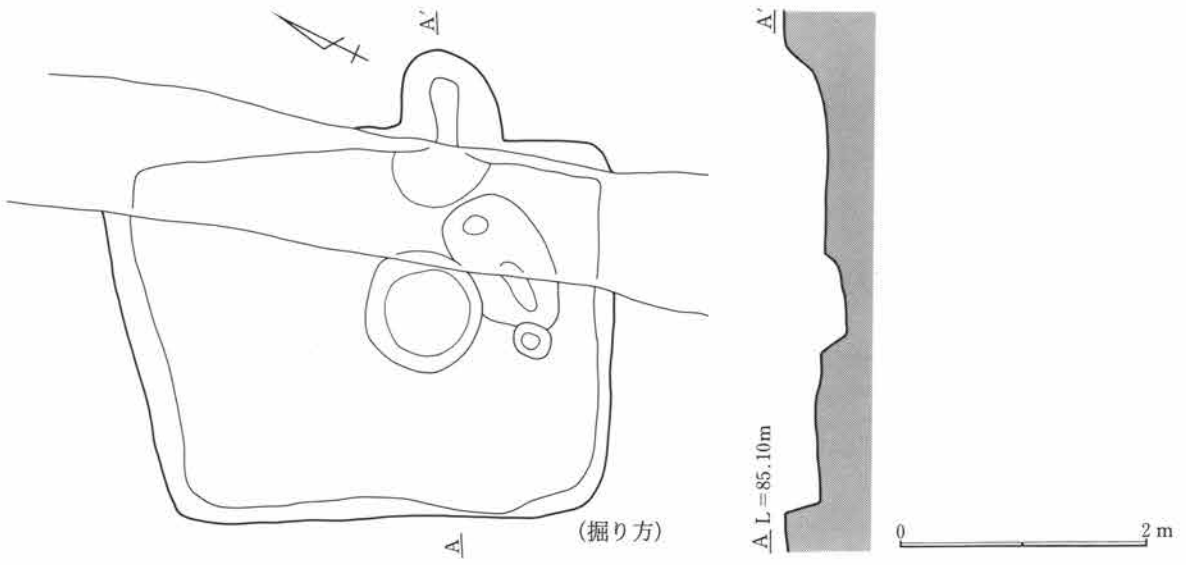
- 1 暗褐色土 ロームブロックを含む
- 2 暗褐色土 褐色土、ロームブロックを含む
- 3 褐色土 ロームブロック、暗褐色土を含む
- 4 暗褐色土 ロームを主に褐色土を少量含む

85号住居カマド土層

- 1 黒褐色土 焼土、ロームを含む
- 2 暗褐色土 焼土、ローム、炭化物を含む
- 3 暗褐色土 ロームを多く含む
- 4 黒褐色土 焼土を多く含む
- 5 暗褐色土 焼土を多量に含む
- 6 暗褐色土 ローム、焼土、炭化物を含む
- 7 暗褐色土 ローム粒を多量に含む



第220図 85号住居



第221図 85号住居と出土遺物

II 発掘調査の記録

限定できない。北側の形状は把握できていない。カマド残存部である径35cm×170cm、深さ5cmのくぼみには灰、焼土が堆積している。

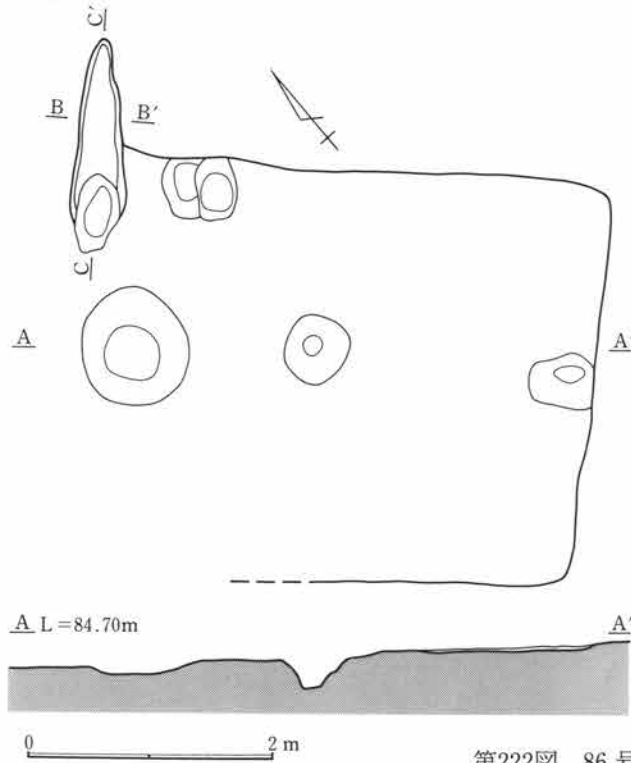
87号住居 (第223図 P L. 77・138)

位置 Bt-5

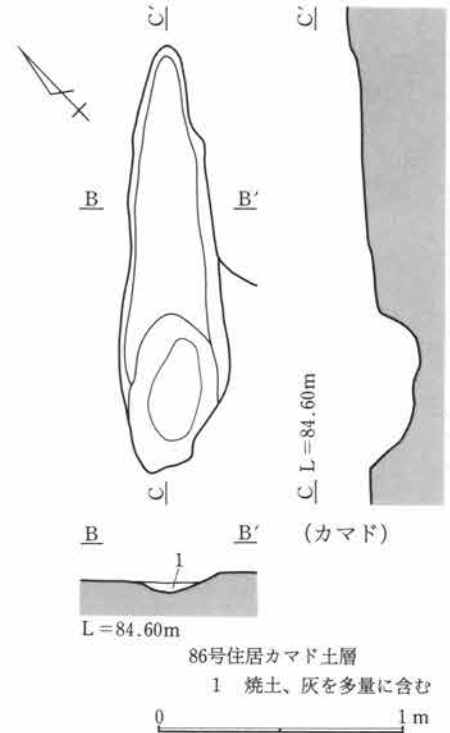
重複 58号住居と重複する。87号住居が古く、カマ

ドおよび南壁部を残すのみで大半が壊されている。主軸方向はN-75°-E、南壁長は2.9m、確認深は10cmである。カマドは東壁に設置され、幅50cm、奥行き80cm。遺物1は埋没土出土である。

時期 出土遺物から9C.前半に比定される。

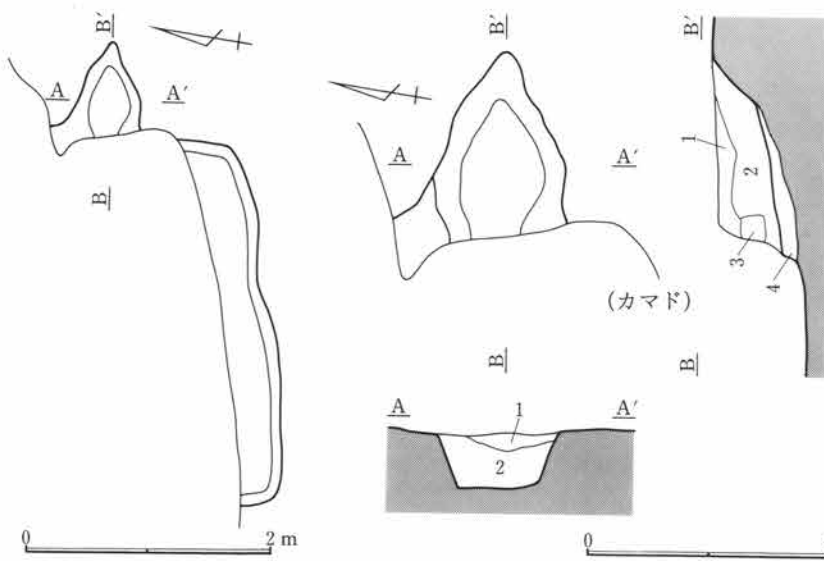


第222図 86号住居



86号住居カマド土層

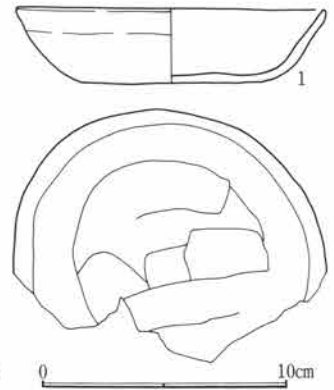
1 焼土、灰を多量に含む



第223図 87号住居と出土遺物

87号住居カマド土層

- 1 暗褐色粘質土
- 2 暗褐色土 焼土、ロームを含む
- 3 黄褐色粘質土
- 4 褐色土 焼土、灰、炭化物を含む



88号住居 (第224~226図 P L. 77・138)

位置 Bs・t・u-3・4

重複 58号住居、59号住居と重複する。兩住居とも88号住居より新しい。また近世墓塚である91号土坑、

92号土坑も重複する。なお住居北西隅は現道下のため未調査となっている。

主軸方向 N-62°-E 床面積 (41.9m²)

形態 調査住居の中では大形である。方形平面を呈し、ほぼ矩形を示している。

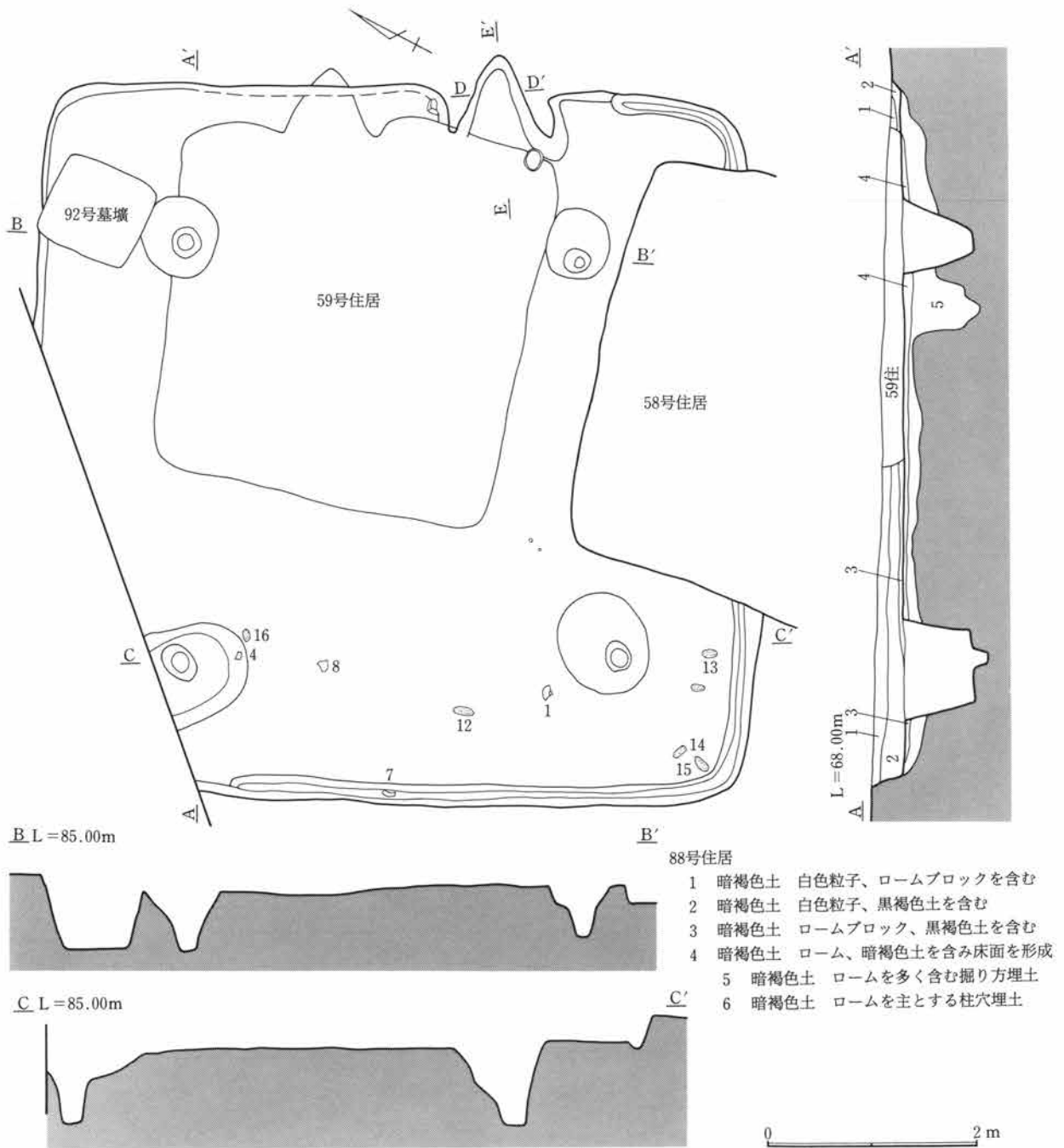
規模 6.7m×6.8m

カマド 東壁に設置され、北東隅から3分の2程度南寄りに位置し、左袖部を59号住居により壊される。

埋没土には天井部崩落土とみられる粘質土が堆積し、規模は焚口80cm、奥行き100cmを計測する。

内部施設 住居対角線上に柱穴が4本配置される。柱穴は径60cm~90cm、深さ50cm~70cmの規模で、一辺3.8m四方、住居平面と相似形を示す。南東隅から西壁にかけて幅15cm、深さ8cmの周溝が部分的に巡る。

床 暗黄褐色土により張り床が施される。ほぼ水平



第224図 88号住居

II 発掘調査の記録

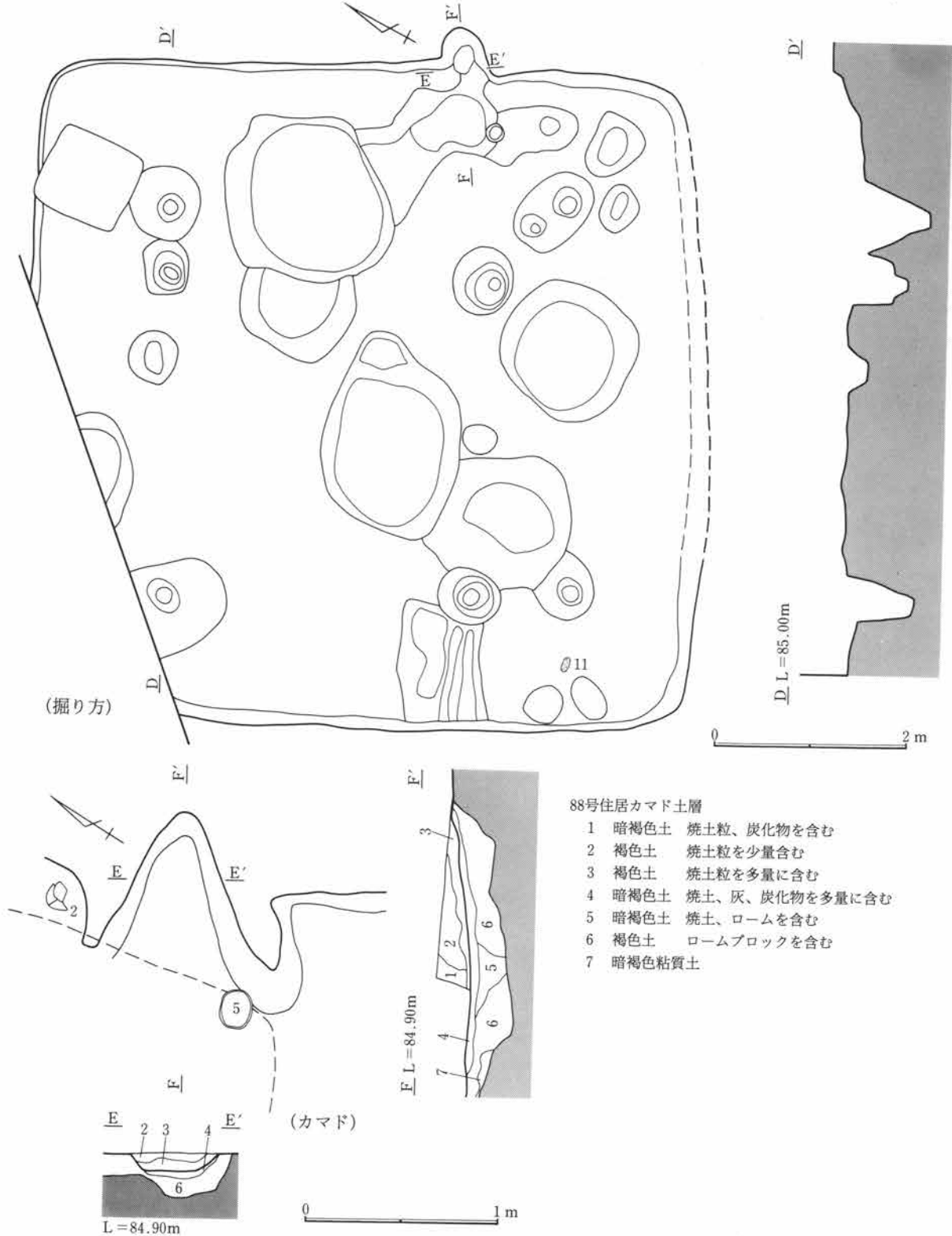
で堅く良好な面が形成されている。

掘り方 土坑状の掘り込みが複数加えられる。

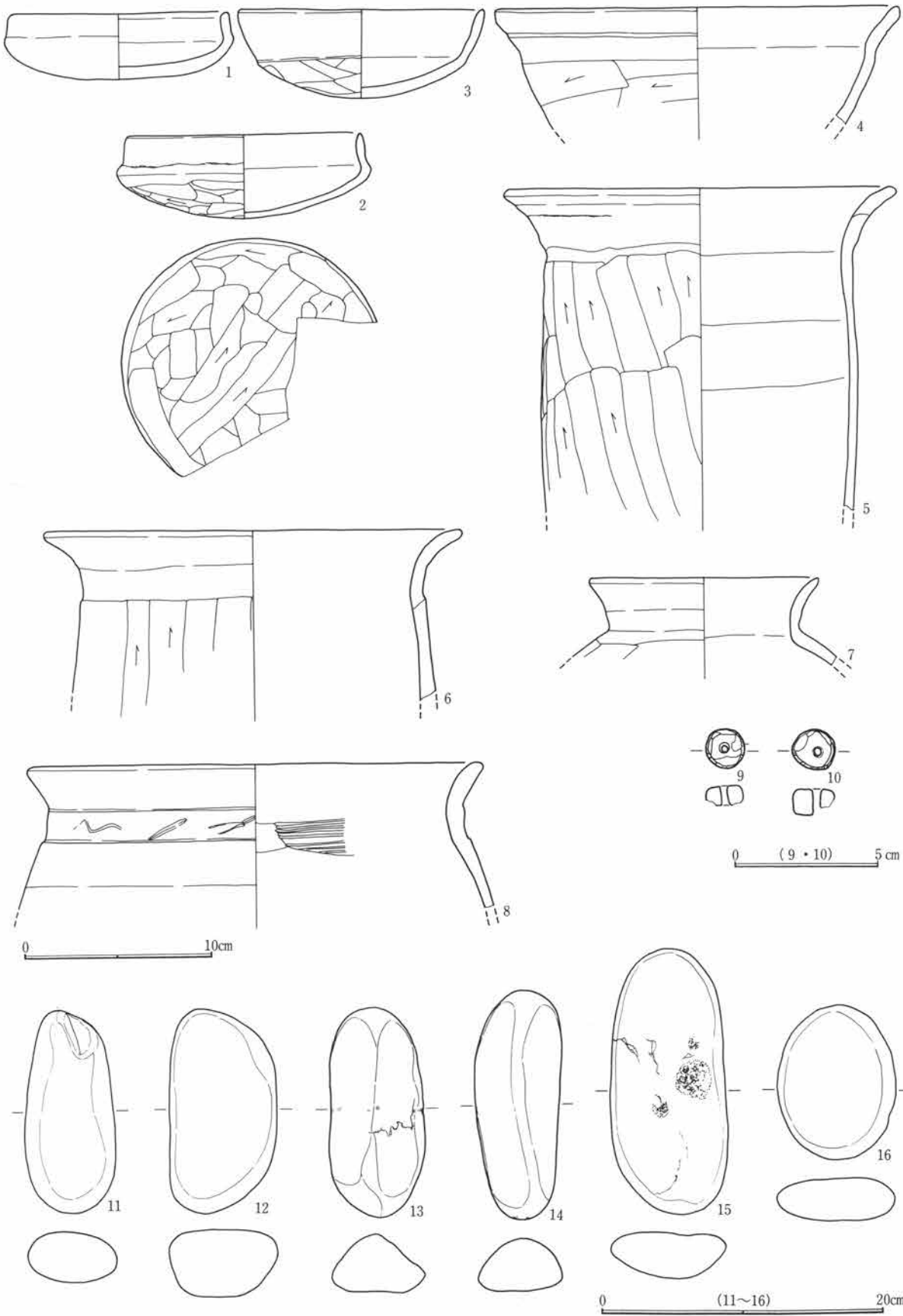
遺物出土状態 土器類は2がカマド左袖、5がカマド右袖に接して検出され、1・4・7・8は床面上、

3・6は埋没土から出土している。石製品は9・10の滑石製白玉は中央付近、11~15の棒状礫は南西部、16の円礫は北西部でそれぞれ床面上から出土した。

時期 出土遺物から7C.中頃に比定される。



第225図 88号住居



第226図 88号住居出土遺物

II 発掘調査の記録

第2表 住居一覧表

番号	平面形	長軸 m	軸 m	床面積 ㎡	主軸方位	挿図図版	写真図版
1	縦長長方形	3.9	2.9	8.8	N-90°-E	18	8・95
2	方 形	4.3	4.1	(15.3)	N-85°-E	19~22	8・95
3	方 形	3.7	3.5	(10.5)	N-92°-E	19・20・23	9・96
4	横長長方形	3.3	2.8	(7.2)	N-68°-E	24・25	10・96
5	横長長方形	5.8	4.2	(19.5)	N-90°-E	26~28	11・96
6	縦長長方形	5.6	4.9	22.5	N-74°-E	29~32	12・97
7	縦長長方形	3.9	2.6	8.2	N-93°-E	33・34	13・98
8	縦長長方形	3.7	3.5	8.7	N-100°-E	35・36	14・98
9	横長長方形	4.1	3.8	13.4	N-101°-E	37~40	15・99・100
10	横長長方形	3.8	2.9	8.6	N-100°-E	41・42	16・100
11	横長長方形	4.4	3.2	10.8	N-87°-E	43~45	17・101
12	横長長方形	3.6	2.5	7.4	N-88°-E	46・47	18・101・102
13	横長長方形	4.8	4.0	(15.9)	N-91°-E	48~50	19・102
14	方 形	5.4	5.2	26.7	N-106°-E	51~53	20・103
15	横長長方形	4.1	—	(10.9)	N-99°-E	54~56	21・103
16	縦長長方形	3.6	3.6	11.0	N-97°-E	57・58	22・104
17	方 形	5.5	5.4	26.4	N-101°-E	59~63	23・104・105
18	横長長方形	3.9	3.0	10.1	N-100°-E	64・65	24・105
19	横長長方形	3.7	2.9	(8.5)	N-99°-E	66・67	25・106
20	横長長方形	3.7	2.8	9.0	N-94°-E	68・69	21・106
21	縦長長方形	4.4	3.9	14.3	N-72°-E	70・71	27・107
22	縦長長方形	3.9	3.5	11.3	N-90°-E	72~74	28・107
23	横長長方形	5.9	4.3	21.0	N-93°-E	75~79	29・107・108
24	方 形	6.5	6.2	35.3	N-98°-E	80~84	30・108・109
25	横長長方形	3.9	2.6	8.0	N-94°-E	85・86	31・110
26	縦長長方形	2.7	2.4	5.6	N-92°-E	87	32・110
27	縦長長方形	4.6	3.6	13.4	N-95°-E	88~92	33・110・111
28	横長長方形	4.4	3.6	13.8	N-92°-E	93~95	34・111・112
29	横長長方形	5.0	4.0	16.6	N-91°-E	96~98	35・112
30	横長長方形	3.6	3.3	8.7	N-91°-E	99・100	36・112
31	横長長方形	3.2	2.7	7.4	N-109°-E	101・102	37・112・113
32	縦長長方形	—	—	—	—	103・104	38・113
33	横長長方形	5.1	3.5	15.8	N-74°-E	105~109	39・113・115
34	横長長方形	3.9	2.9	9.6	N-83°-E	110・111	40・115
35	方 形	3.3	3.2	9.1	N-34°-E	112~116	41・42・ 115・116
36	縦長長方形	3.8	3.4	10.3	N-69°-E	117~119	43・117
37	横長長方形	3.7	3.2	10.3	N-76°-E	120・121	44・117
38	縦長長方形	4.5	4.3	17.4	N-76°-E	122~125	45・46・ 117・118
39	横長長方形	3.6	2.9	8.6	N-84°-E	126~128	47・118・119
40	横長長方形	4.8	3.6	14.7	N-79°-E	129・130	48・119
41	横長長方形	3.8	2.8	(9.4)	N-85°-E	131	49・119
42	横長長方形	3.3	2.7	(7.8)	N-76°-E	132	49・119
43	縦長長方形	8.0	5.1	35.4	N-91°-E	133~139	50・119~121
44	正 方形	6.3	6.2	(34.2)	N-96°-E	140~142	51・121
46	横長長方形	3.8	2.9	9.0	N-65°-E	143~145	52・121・122
47	横長長方形	—	2.8	(7.4)	N-92°-E	146	53・122
48	横長長方形	3.8	2.9	8.6	N-92°-E	147・148	54・122
49	—	3.4	—	(7.0)	N-106°-E	149・150	55・123
50	横長長方形	4.9	4.3	17.0	N-88°-E	151~153	56・123・124
51	横長長方形	3.5	2.8	(7.4)	N-92°-E	154・155	57・124
52	横長長方形	—	—	—	N-92°-E	156	—
53	横長長方形	3.1	2.4	6.0	N-97°-E	157・158	58・124
55	横長長方形	3.7	3.1	9.3	N-78°-E	159	59・124
56	縦長長方形	2.8	2.5	5.0	N-94°-E	160	59・125
57	方 形	4.1	3.9	(14.7)	N-62°-E	161~163	60・125
58	横長長方形	4.7	4.2	16.5	N-80°-E	164~166	61・125・126
59	縦長長方形	3.7	3.4	11.3	N-72°-E	167・168	62・126
60	—	—	2.2	—	N-94°-E	169	62・127
61	横長長方形	3.8	2.9	(9.2)	N-111°-E	170・171	63・127
62	縦長長方形	5.3	5.2	(24.8)	N-83°-E	172~175	64・127・128
64	横長長方形	4.7	3.4	13.5	N-82°-E	176~178	65・128・129
65	横長長方形	3.5	3.3	(10.2)	N-62°-E	179・180	66・129

番号	平面形	長軸 m	軸 m	床面積 ㎡	主軸方位	挿図図版	写真図版
66	縦長長方形	—	3.5	—	—	181・182	67・130
67	横長長方形	—	3.6	(12.4)	N-90°-E	183~185	67・130・131
68	—	—	—	—	N-67°-E	186・187	68・131
69	横長長方形	4.1	3.1	(12.1)	—	188・189	68・131
70	長 方形	—	4.0	—	—	190・191	69・132
71	横長長方形	3.4	3.1	8.3	N-69°-E	192~195	70・132・133
72	横長長方形	4.1	3.5	12.0	N-93°-E	196・197	71・133
73	縦長長方形	5.0	4.3	(19.5)	N-65°-E	198・199	72・134
74	横長長方形	4.2	2.9	10.3	N-93°-E	200~202	69・134
75	縦長長方形	2.8	2.3	5.1	N-83°-E	203	69・134・135
76	縦長長方形	3.8	3.2	10.2	N-75°-E	204~207	73・135
77	縦長長方形	3.3	3.0	8.4	N-54°-E	208	74・136
78	縦長長方形	3.1	3.0	7.7	N-37°-E	209	74・136
79	縦長長方形	4.0	3.8	12.9	N-51°-E	210	74・136
80	縦長長方形	3.6	3.0	(9.3)	N-71°-E	211・212	75・136
81	縦長長方形	3.4	3.1	(8.2)	N-68°-E	213~215	75・136・137
82	横長長方形	—	—	—	N-70°-E	216・217	75・137
83	横長長方形	3.5	2.6	(6.9)	N-92°-E	218	76・137
84	—	—	—	—	—	219	76・138
85	横長長方形	3.9	3.0	(10.1)	N-62°-E	220・221	76・138
86	—	—	—	—	—	222	77
87	—	2.9	—	—	N-75°-E	223	77・138
88	方 形	6.8	6.7	(41.9)	N-62°-E	224・226	77・138

(4) 掘立柱建物

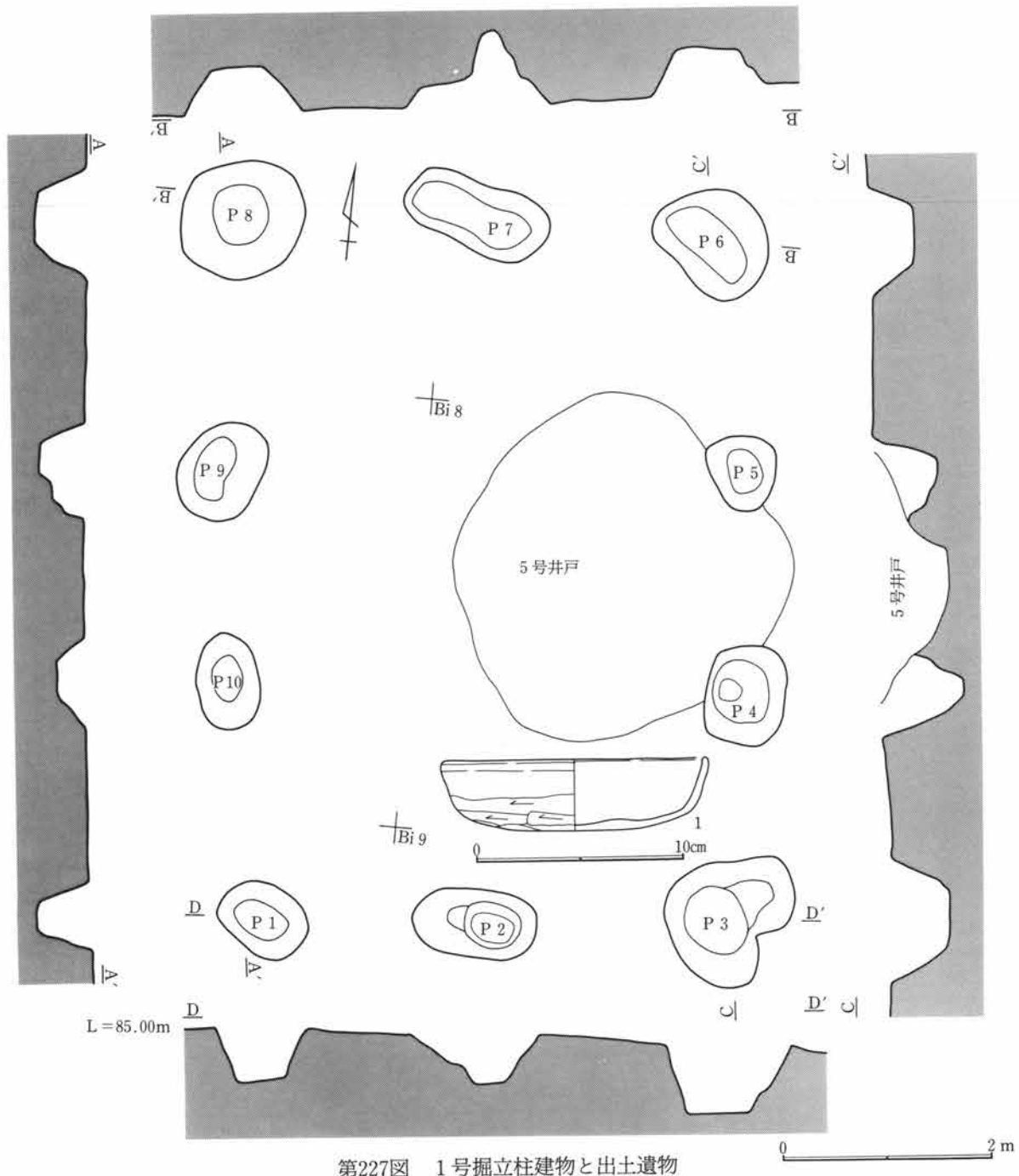
2棟確認している。両者はおよそ100m離れているが、いずれも台地縁辺に立地している。規模もほぼ共通するもので、柱穴の大きさ、柱間などに類似性を示す。しかし、この規模上の類似性とは別に主軸方向に関しては相違点もみられる。1号掘立柱は南北に、2号掘立柱は東西にとそれぞれ異なった方向をとっている。時期については有効な情報がないも

の、住居群との関連を考慮しておきたい。

なお、これら以外にも柱穴とみられるピット状の落ち込みを調査しているが、配置がいずれも不規則であり掘立柱建物としてはここに報告する2棟を検出した。

1号掘立柱建物（第227図、P L78・139）

Bi-08グリッドを中心に確認している。埋没水田の存在する谷頭近くに位置する。10柱穴により構成



第227図 1号掘立柱建物と出土遺物

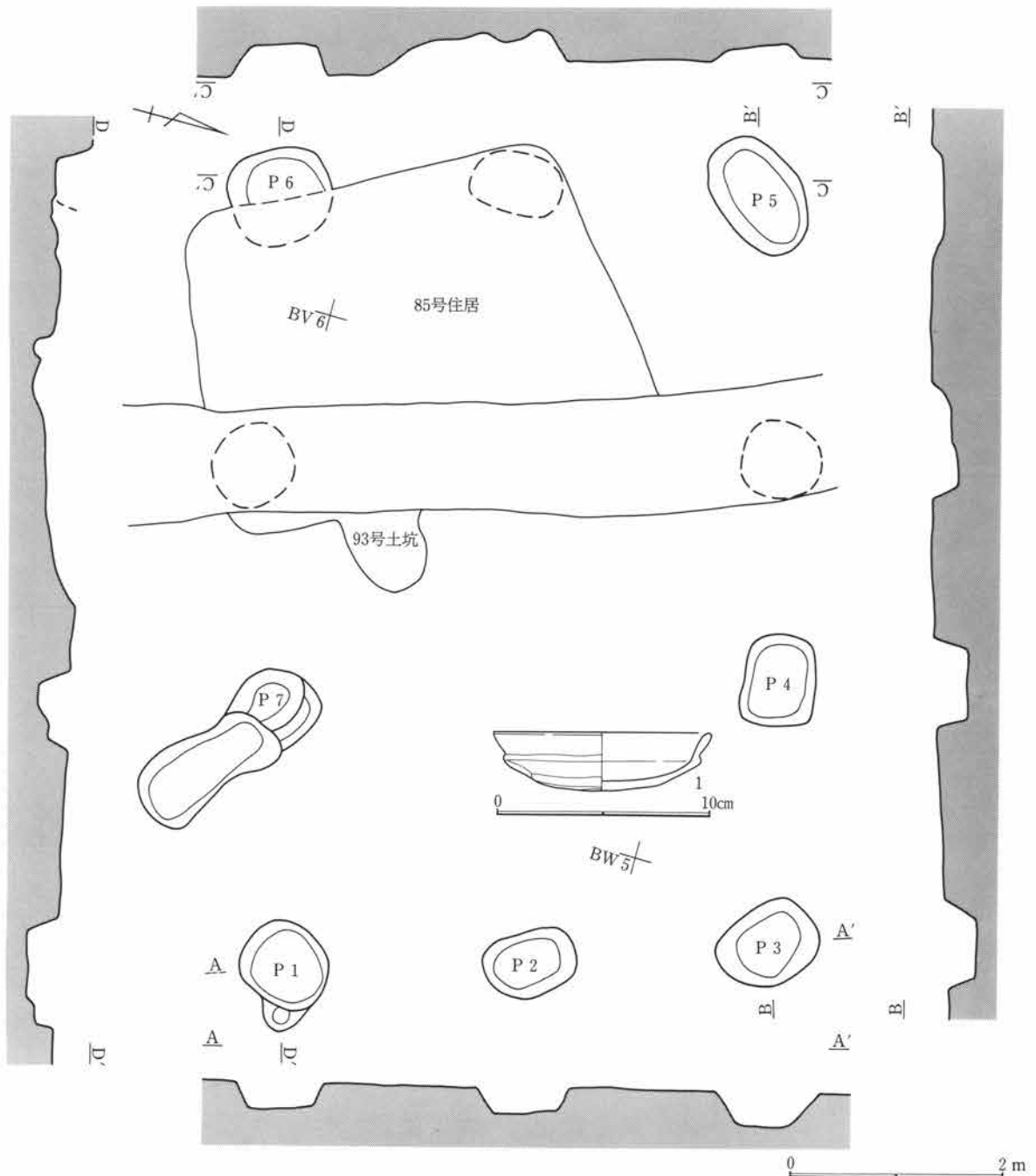
II 発掘調査の記録

され、2間3間の長方形平面をもつ。東辺側中央部の2柱穴を一部5号井戸により切られる。長軸6.5m、短軸4.5mの規模をもち、主軸は真北方向と一致している。柱間は2.2~2.25mを計る。柱穴は楕円形平面を示し径0.6~1.0m、確認深0.3~0.7m。

2号掘立柱建物 (第228図、P L 78・139)

Bw-05グリッドを中心に確認している。台地縁辺から10m程度離れた位置にあり、85号住居と一部重

複しているが掘立柱建物のほうが古い。構成は2カ所欠落しているが10柱穴により2間3間の長方形平面をもつ。1号掘立柱建物と比較してみると、2号がわずかに長軸方向に長い点もあるが、照合するとほぼ一致する規模、柱穴位置であることがわかる。柱穴は楕円形平面で径0.6~1.0m、確認深0.3mを計る。柱痕は平面、断面観察とも認められていない。長軸6.7m、短軸4.5m規模で、柱間は2.2~2.25m。



第228図 2号掘立柱建物と出土遺物

(5) 土 坑

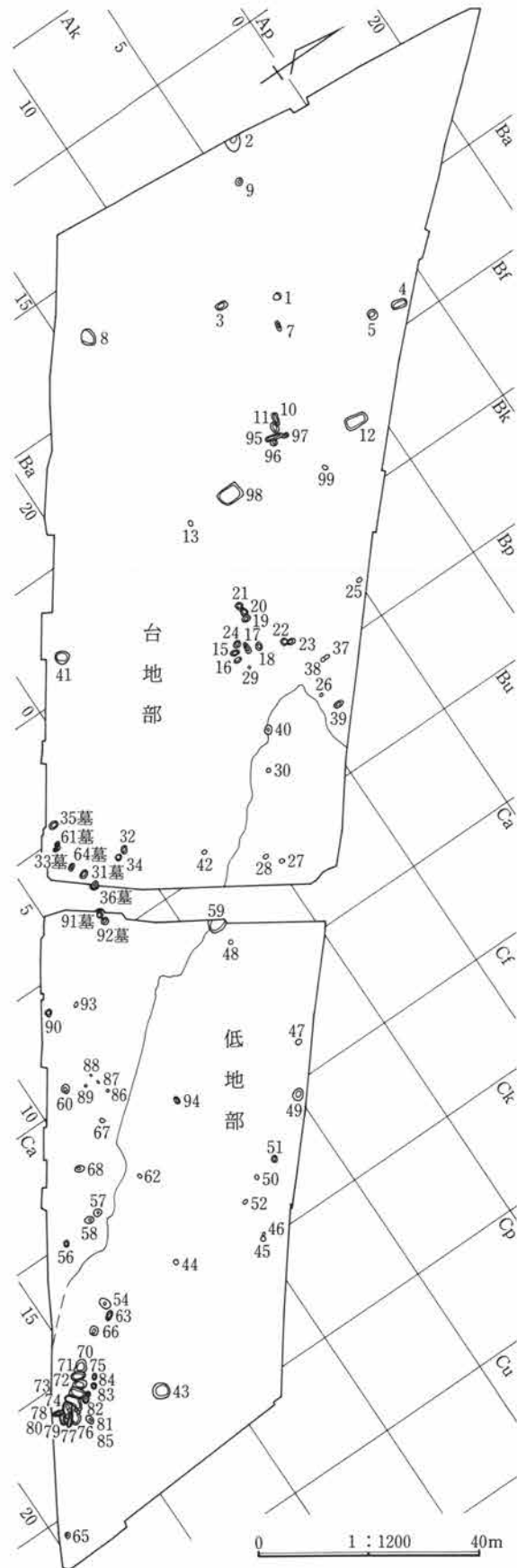
土坑として確認した遺構は計94基であり、遺跡全域に分布している。分布域をみると台地部に59基、低地部に35基となり、台地部ではローム層上面で確認され、限定された調査区内であるが台地縁辺部に集中する傾向も認められる。低地部では堆積する火山灰層を挟んで確認されたものも存在する。これら土坑についてはその性格が不明なものが多く、掘り込みのみの確認にとどまる遺構が大半をしめている。

時期を限定できる情報をもつ土坑は少ないが、この中には特徴的な遺構も認められており注目される。まず、特異な形態的特徴をもつ土坑として、86号・87号・88号・89号の4基があげられる。この4基は口径が小さく、掘削深が深いという形態の共通性と共に近接した位置に確認されており、その関連性が想定される。時期的には87号土坑から出土した遺物から奈良時代が考えられるが、他基についても遺構の形態の共通性からみてこれに類する時期に位置づけることが可能と思われる。

遺物からみると、墨書土器3点を含む4点の壺が一括出土した4号土坑が着目される。4点の土器は土坑北端部底面に接して集中出土しており、他には遺物は存在しない。時期的には住居群と共通する遺構であるが、住居とは重複関係をもたずに単独で検出された。

遺跡中央南端部には、ほぼ東西方向に列をなすように墓壇群が8基確認されている。いずれも江戸時代のものであるが、5基については埋葬人骨の遺存状況が良好であり、他基についても古銭、陶器および鉄製品など良好な埋葬遺物が出土している。なお、発掘調査時は“号土坑”として通番で進めていたが、報告にあたりこれら土坑群(31号・33号・35号・36号・61号・64号・91号・92号)については近世墓壇として別項(6)で一括報告するものとした。

土坑番号については発掘調査時の名称を使用し報告している。このため調査経過中に生じた欠番についてもそのまま欠番として扱っており、6・14・53・



第229図 土坑位置図

II 発掘調査の記録

55・69に該当する土坑は存在しない。

86・87・88・89号土坑 (第230図、P L 81)

径が小さく、掘削深の深い特徴的な土坑が集中して確認されている。Cy-7、By-7グリッドに位置し、台地縁辺から約10m付近に分布する。平面形は径40cm程度の円形を示し、断面形は筒形で確認深1m以上の深度をもつ。なお、遺構確認はローム面にて行っている。遺構確認時では連続的に検出されたため、掘立柱建物の可能性も考えられたが、結果的に4穴のみが認められたにとどまり、建物としての構成はみられない。配置をみると、86号、87号、88号は直線的に列をなし、89号はこの列に直交せず77度の角度で東側に位置する。このように4土坑は方形の配置とならないものの、あえてこの位置関係から規則性をみいだすと、86号を頂点とし、88号および89号を底辺とする二等辺三角形形状の位置関係にあることが認められる。各土坑間の距離は、86号—87号が2.3m、87号—88号が1.7m、88号—89号が2m

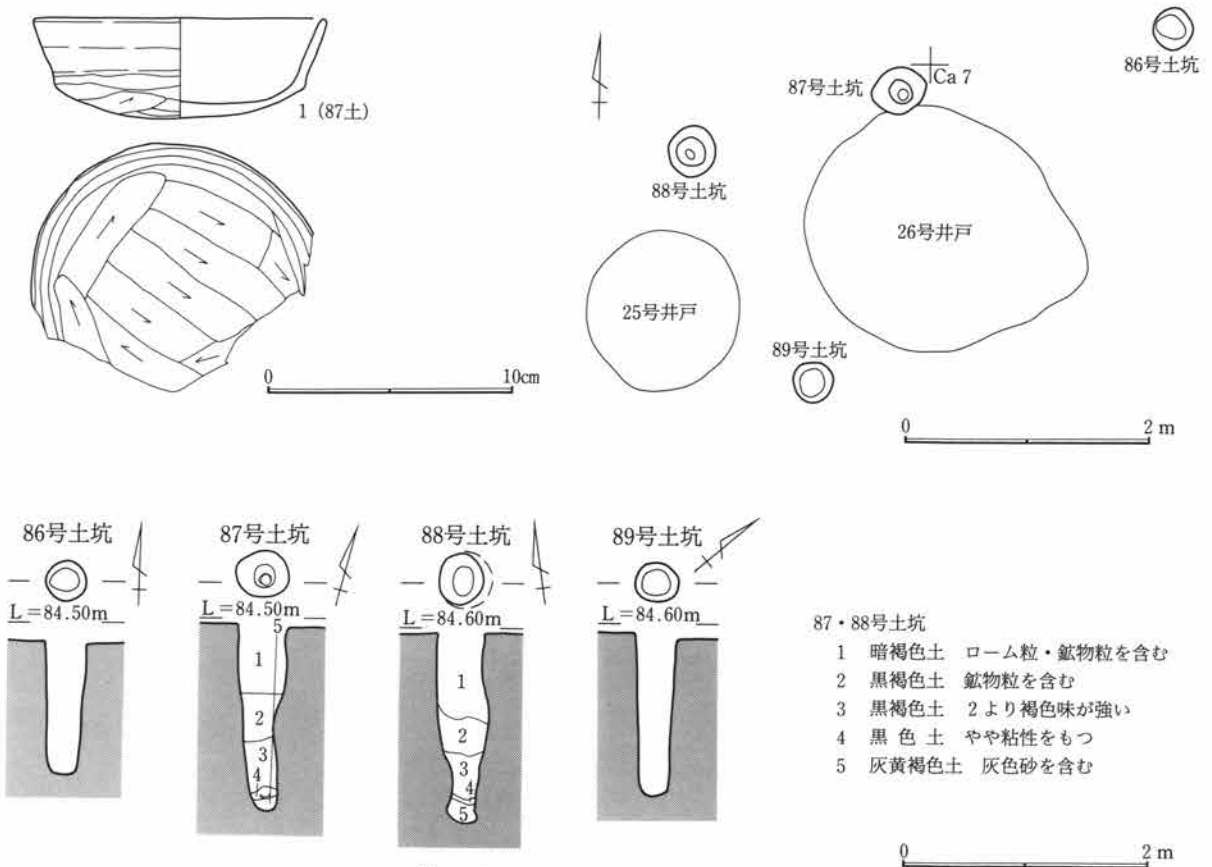
である。時期については87号土坑底部付近より出土した第230図に示す杯が唯一の資料であり、これからみると7世紀後半に位置づけられるものと判断できる。他土坑については、遺物および埋没土層からも時期についての有効な情報を得られていない。しかし、先に示した位置関係および形態上の類似性からみて4土坑とも同様の時間的関係をもつものとの推定もできるのではなかろうか。なお、接して存在する26号井戸は87号土坑を切って掘り込まれており、時間的には新しい。

86号土坑 径30cm、深さ1mで円筒形の掘り方をもつ。遺物の出土は認められない。

87号土坑 径40cm、深さ1.5mで壁部は一部崩落があるが、円筒形の掘り方をもつ。底面から10cm上位に土師器杯(第230図)が出土している。

88号土坑 径40cm、深さ1.4mで壁部に崩落があるが、円筒形の掘り方をもつとみられる。

89号土坑 径35cm、深さ70cmで円筒形の掘り方をも



第230図 86・87・88・89号土坑

つ。遺物の出土は認められない。

特徴的な形態および配置が認められる86号土坑～89号土坑については前記のとおりであるが、他の土坑に関しては以下番号順に概要を報告していきたい。なお、位置・規模および挿図などについては第3表土坑一覧表に一括しているためここでは重複をさけておきたい。また出土遺物は第238・239図に示すが遺物番号は通番としており、以下の説明中ではこの遺物番号のみ表記している。

1号土坑 12号・13号住居と重複する。新旧関係は12号住居より古く、13号住居より新しい。底面には小穴がみられ、埋没土からは「明」の墨書をもつ土師器杯が出土している。

2号土坑 西端部は現道路下のため未調査である。底面はやや不規則な起伏をもち、弧状の断面形態を示し、埋没土から土師器（2・3）が出土している。

3号土坑 15号住居北西部を切って掘り込まれる。住居隅に沿ったような位置であるため住居の一部とも考えられたが、断面観察から住居埋没後に掘り込まれた土坑と判断された。埋没土上部に礫（粗粒安山岩）が1点認められた以外、坑内からは遺物の出土はない。

4号土坑 土坑底面北側に墨書土器3点を含む完形の土師器碗が4点まとまって出土している。ほかに遺物は検出されず、焼土・炭化物などともに認められない。ややしまりのある暗褐色土を埋没土とし、底面はほぼ平坦である。出土状況および出土土器はPL79に示すとうりであるが、この報告書では4点の土器について未報告となってしまった。この点に関しては今後何らかの形で公表し報告の責を果たしたいと思う。

5号土坑 21号住居を切って掘り込まれる円形の土坑で、底面はやや丸みをもつ。出土遺物は認められない。

7号土坑 楕円形の土坑で遺物出土は認められない。

8号土坑 2・3号溝を切って掘り込まれる円形土坑で、遺物の出土は認められない。

9号土坑 円形の浅い皿状の土坑で、4の須恵器蓋が出土している。

10号土坑 長方形の土坑で、11号土坑および95号・96号・97号土坑が接している。

11号土坑 長方形の土坑で、5の土師器杯が出土している。

12号土坑 53号住居と重複する長方形の浅い土坑で、遺物の出土は認められない。

13号土坑 円形の土坑で As-B を含む黒色土を埋没土とする。

15号土坑 As-B を含む暗褐色土を埋没土とする楕円形の土坑で遺物の出土は認められない。

16号土坑 As-B を含む暗褐色土を埋没土とする楕円形の土坑で15号土坑に東接する。

17号土坑 As-B を含む暗褐色土を埋没土とする楕円形の土坑で15号・16号・18号・24号土坑などに近接する。遺物の出土は認められない。

18号土坑 As-B を含む暗褐色土を埋没土とする楕円形の土坑で遺物の出土は認められない。

19号土坑 As-B を含む暗褐色土を埋没土とする楕円形の土坑で遺物の出土は認められない。

20号土坑 As-B を含む暗褐色土を埋没土とし東西に19号および20号土坑と接する楕円形の土坑で遺物の出土は認められない。

21号土坑 As-B を含む暗褐色土を埋没土とする浅い長方形の土坑で遺物の出土は認められない。

22号土坑 As-B を含む暗褐色土を埋没土とする楕円形の土坑で遺物の出土は認められない。

23号土坑 15号溝を切って掘り込まれ、22号土坑が北接する。遺物の出土は認められない。

24号土坑 As-B を含む暗褐色土を埋没土とし、15号・17号土坑などに近接する楕円形の土坑で遺物の出土は認められない。

25号土坑 調査区北側に接して検出された楕円形の土坑で、遺物の出土は認められない。

26号土坑 As-B を含む暗褐色土を埋没土とする円形の土坑で遺物の出土は認められない。

27号土坑 低地部に位置し、As-B を含む暗褐色土

II 発掘調査の記録

を埋没土とする円形の土坑で6・7の土器類が下層から出土している。

28号土坑 低地部にあり27号土坑の南側に位置する。坑内から8の須恵器蓋が出土している。

29号土坑 16号溝を切って掘り込まれる円形土坑で軽石粒を含む暗褐色土を埋没土とし出土遺物はない。

30号土坑 低地部に位置し、21号溝と接する。楕円形の土坑で埋没土上部に礫（粗粒安山岩）が認められる。

32号土坑 暗褐色土を埋没土とする方形の土坑で、下部から底面にかけて9・10の土師器甕が出土している。

34号土坑 暗褐色土を埋没土とする円形の土坑で32号土坑に南接し、遺物の出土は認められない。

37号土坑 楕円形の土坑で遺物出土は認められない。38号土坑 37号土坑に南接する楕円形の小土坑で遺物の出土は認められない。

39号土坑 台地縁辺に位置する楕円形の土坑で、26号溝と接しており、遺物は出土していない。

40号土坑 台地縁辺に位置する楕円形の皿状土坑。

41号土坑 不整形円形の土坑で底面中央に小穴が認められる。As-Bを含む暗褐色土を埋没土とする。

42号土坑 台地縁辺に位置する円形の土坑で、深度は1、3mと深く円筒形を呈する。内部から11の擦痕をもつ棒状礫が出土している。

43号土坑 C区低地部に位置する円形の土坑で断面形は皿状を呈する。遺物は多く、底面に接して粗粒安山岩などの礫のほか12～19の土器類および20の蛇紋岩製紡錘車が出土している。

44号土坑 低地部にかけて位置する楕円形の土坑で底面に小穴がみられる。軽石を含む黒褐色土を埋没土とし、遺物の出土はない。

45号土坑 低地部似位置する円形の小土坑で遺物の出土は認められない。

46号土坑 45号土坑に北接する楕円形の小土坑で、黒褐色粘質土を埋没土とする。遺物の出土はない。

47号土坑 低地部に位置する楕円形の土坑で底面に

小穴がみられ、軽石を含む暗褐色粘質土で埋没する。

48号土坑 低地部に位置する円形の土坑で遺物の出土は認められない。

49号土坑 低地部に位置する楕円形の土坑で鍋底状断面を呈し、底面に接して粗粒安山岩などの礫のほか21～23の土器類が出土している。低地部の土坑のなかでは43号土坑と類似した遺構状態が観察される。

50号土坑 低地部に位置する楕円形の小土坑で遺物は認められない。

51号土坑 50号土坑の南側に位置する円形の小土坑で遺物の出土はない。

52号土坑 50号土坑の北側に位置する楕円形の小土坑でやはり遺物は認められない。

54号土坑 縁辺部付近に位置する楕円形の土坑で摺鉢状断面を呈する。上部に礫が認められている。

56号土坑 浅い円形の土坑で遺物は認められない。

57号土坑 台地縁辺に位置する円形の土坑で、坑内から24～26の土器類のほか27の瓦片も出土している。

58号土坑 57号土坑に北接する楕円形の土坑で底面に小穴がみられる。遺物の出土はない。

59号土坑 不整形の掘り込みで西半部は道路下のため未調査となっている。遺物の出土はみられない。

60号土坑 円形の土坑で底部は鍋底状を呈する。遺物の出土はない。

62号土坑 低地部に位置する円形の小土坑で遺物の出土はない。

63号土坑 縁辺部付近に位置する楕円形の土坑で遺物の出土はない。

65号土坑 低地部に位置し29号溝に接する円形の土坑で、ロームを多量に含む黒褐色土を埋没土とする。

66号土坑 縁辺部付近に位置する楕円形の土坑で底面に小穴がみられる。遺物の出土はない。

67号土坑 77号住居北東隅に重複する楕円形の土坑で軽石を含む暗褐色土で埋没する。

68号土坑 台地縁辺に位置し57号土坑に南接する円形の土坑で壁部は崩落があり、遺物の出土はない。

70号～74号・76号～80号・82号・83号・85号土坑 縁部付近に集中して検出された土坑群で、ほぼ台地縁辺に沿うように東西方向に連続している。それぞれの土坑は規模・形態とも不規則であるが、いずれも重複して掘り込まれている。重複関係、性格などは不明であるが、74号土坑から28の鉄製品、85号土坑から29・30の土器が出土している。

75号土坑 70号土坑などの土坑群に近接する円形の土坑で遺物は出土していない。

81号土坑 やはり前記の土坑群に近接した楕円形の土坑で遺物はみられず、暗褐色土により埋没する。

84号土坑 先に土坑群に近接した浅い円形の土坑で遺物は出土していない。

90号土坑 82号住居と重複する浅い楕円形の土坑。

93号土坑 85号住居と重複し遺構形態は不明瞭である。遺物の出土はない。

94号土坑 低地部に位置する楕円形の土坑で遺物はみられない。

95号土坑 長方形の溝状土坑で11号土坑に近接する。

96号土坑 95号土坑に切られる長方形の土坑である。

97号土坑 95号土坑に南接する長方形の土坑で、95号・96号土坑を含め遺物の出土はみられない。

98号土坑 大形の長方形土坑で底面に礫片（粗粒安山岩）が認められる。

99号土坑 遺構形態はやや不明瞭であるが、埋没土上部に焼土層が認められている。遺物の出土はない。

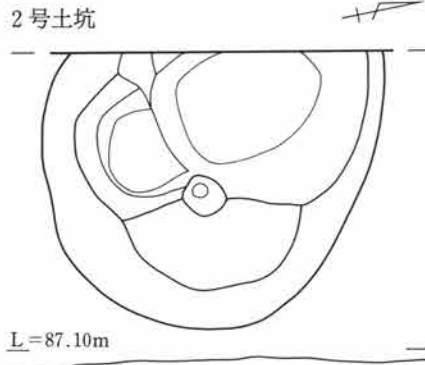
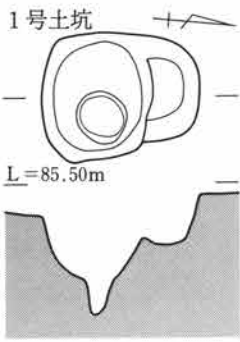
第3表 土坑一覧表

単位：m

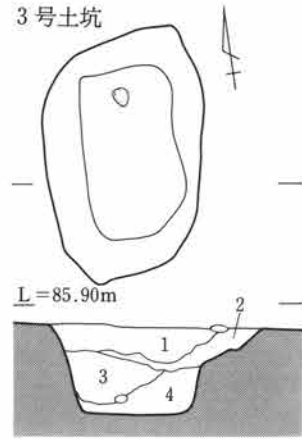
番号	位置 (グリッド)	形状	規模		残存壁高	遺構		遺物		備考
			確認面	底面		挿図	写真	挿図	写真	
1	Ba-5・6	不整形	1.26 × 1.01	0.86 × 0.70	0.95	第231図	PL.19	第238図	PL.139	13住と重複
2	As・t-3	楕円形	(2.23) × 2.64	(1.90) × 2.18	1.17	231	79	238	139	西側は調査区外
3	Ay-7・8	不整長方形	1.87 × 1.24	1.33 × 0.78	0.70	231				
4	Bd・e-1	楕円形	2.74 × 1.40	2.38 × 1.06	0.57	231	79			墨書土器出土
5	Bd・e-2	楕円形	1.73 × 1.58	1.10 × 1.10	0.60	231	79			21住と重複 欠番
6										
7	Bb・c-6	不整形	1.70 × 0.66	1.31 × 0.46	0.37	231				
8	Aw-13・14	楕円形	2.85 × 2.37	2.52 × 1.96	0.23	231				2・3溝と重複
9	Au-4	楕円形	1.27 × 1.08	0.78 × 0.60	0.21	231		238	139	
10	Be・f-8・9	長方形	2.25 × 0.53	2.05 × 0.46	0.25	231				
11	Bf-9	長方形	1.52 × 0.95	1.29 × 0.60	0.23	231		238	139	
12	Bg-6、Bh-5・6	長方形	3.73 × 2.38	3.38 × 1.90	0.18	232	58			53住と重複
13	Bg-14	円形	1.00 × 1.00	0.85 × 0.81	0.22	232				欠番
14										
15	Bm-16	楕円形	1.20 × 0.76	1.03 × 0.61	0.23	232				
16	Bm・n-16	楕円形	1.20 × 0.91	1.00 × 0.68	0.27	232				
17	Bm・n-15	楕円形	1.72 × 0.97	1.60 × 0.75	0.14	232				
18	Bm・n-15	楕円形	1.40 × 0.84	1.18 × 0.61	0.23	232				
19	Bl-14・15	楕円形	1.28 × 0.90	1.07 × 0.75	0.20	232				
20	Bl-14・15	楕円形	1.17 × 1.07	1.07 × 0.90	0.16	232				
21	Bk・l-14・15	隅丸長方形	1.10 × 0.85	0.98 × 0.80	0.20	232				
22	Bn-14	隅丸方形	0.95 × 0.82	0.81 × 0.69	0.32	232				
23	Bn-13・14	楕円形	1.39 × 0.98	1.31 × 0.78	0.37	232				15溝と重複
24	Bm-15・16	楕円形	1.05 × 0.86	0.90 × 0.67	0.23	232				16溝と重複
25	Bn-9・10	楕円形	(0.87) × (0.68)	(0.66) × (0.56)	0.45	232				北東隅は調査区外
26	Bq-14	円形	1.04 × 1.04	0.42 × 0.40	0.13	232				
27	Bv-19	円形	0.95 × 0.92	0.49 × 0.33	0.56	232	79	238	139	
28	Bu-20	不整形	0.85 × 0.68	0.35 × 0.30	0.26	233		238	139	
29	Bn-16	楕円形	0.56 × 0.49	0.43 × 0.31	0.07	233				16溝と重複
30	Br-17・18	楕円形	0.94 × 0.80	0.31 × 0.27	0.38	233				21溝と重複
31	Bq・r-2	隅丸長方形	1.25 × 1.04	1.03 × 0.72	0.38	241	82	241	140	土墳墓 65住と重複
32	Br-0	隅丸長方形	1.13 × 0.98	0.87 × 0.71	0.34	233	79	238	139	
33	Bp-2	長方形	1.07 × 0.74	0.95 × 0.59	0.36	242	82	242	140	土墳墓 73住・61坑と重複
34	Br-0	円形	1.00 × 1.00	0.83 × 0.62	0.50	233				
35	Bo-2	長方形	1.39 × 1.00	1.15 × 0.82	0.57	243	82	243	140	土墳墓
36	Br-2	隅丸方形	1.13 × 0.97	0.86 × 0.78	1.12	244	82	244	141	土墳墓 65住と重複
37	Bp-12・13	楕円形	0.88 × 0.56	0.64 × 0.34	0.17	233				

II 発掘調査の記録

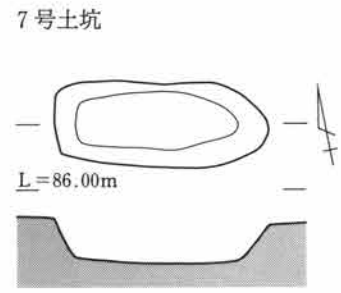
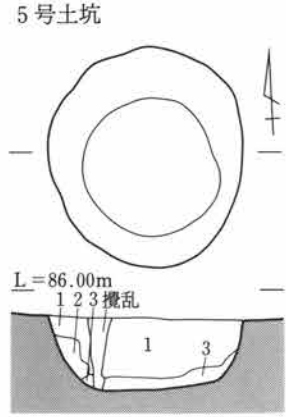
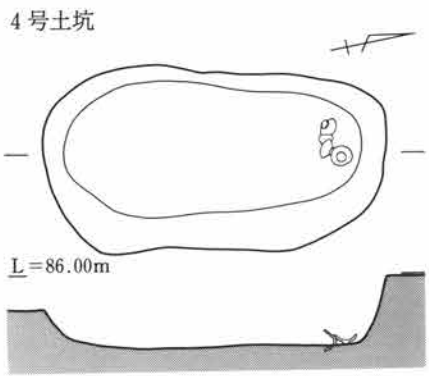
番号	位置(グリッド)	形状	規模		残存壁高	遺構		遺物		備考
			確認面	底面		挿図	写真	挿図	写真	
38	Bp-13	楕円形	0.50 × 0.42	0.35 × 0.25	0.22	233				
39	Br-13・14	不整形	2.01 × 1.03	0.80 × 0.55	0.87	233				26溝と重複
40	Bq-16・17	不整形	1.42 × 1.24	0.69 × 0.58	0.29	233				
41	Bi-22・23	楕円形	2.32 × 2.12	2.12 × 1.89	0.95	233				
42	Bt-22	楕円形	0.77 × 0.69	0.25 × 0.25	1.28	233		238	139	24溝と重複
43	Cm・n-12	楕円形	3.04 × 2.88	2.00 × 1.90	0.52	233	79	238・239	139	
44	Ci-8	楕円形	0.88 × 0.78	0.73 × 0.65	0.70	234	79			
45	Cj-4	円形	0.78 × 0.68	0.66 × 0.60	0.18	234	80			
46	Cj-4	楕円形	0.61 × 0.36	0.49 × 0.23	0.19	234	80			
47	Cd-23	楕円形	1.10 × 0.94	0.29 × 0.23	0.63	234	80			
48	Bx-23	円形	0.81 × 0.71	0.68 × 0.59	0.24	234				
49	Cf-24・0	楕円形	2.07 × 1.70	1.30 × 1.07	0.39	234	80	239	139	
50	Ch-3	楕円形	0.72 × 0.56	0.59 × 0.50	0.12	234	80			
51	Ch-2	円形	1.04 × 0.99	0.88 × 0.84	0.17	234	80			
52	Ch・i-4	楕円形	0.74 × 0.49	0.63 × 0.39	0.16	234	80			
53										欠番
54	Ch・i-12	楕円形	1.86 × 1.68	— × —	0.76	234				欠番
55										欠番
56	Ce・f-12	円形	1.06 × 0.93	0.89 × 0.81	0.17	234				
57	Ce-10	円形	1.46 × 1.40	1.08 × 1.00	0.78	234		239	140	
58	Ce-10・11	楕円形	1.49 × 1.33	0.82 × 0.70	0.75	234				
59	Bv・w-23・24	—	(2.85) × (2.50)	— × —	0.34	235				北西部は道路部分
60	By-8	円形	1.56 × 1.50	0.96 × 0.82	0.82	235				
61	Bp-2	不整形	0.90 × 0.71	0.78 × 0.59	0.80	245	83	245	141	土墳墓
62	Ce-7	楕円形	0.70 × 0.51	0.51 × 0.39	0.38	235				
63	Ci-12	隅丸長方形	1.70 × 0.95	1.40 × 0.68	0.70	235				
64	Bq-2	長方形	0.90 × 0.71	0.78 × 0.59	0.80	246	83	246	141	土墳墓
65	Cp-19	楕円形	1.08 × 0.88	0.67 × 0.61	0.61	235				
66	Ci・j-13	楕円形	1.44 × 1.33	1.18 × 1.03	0.69	235				
67	Cb-7	不整形	0.96 × 0.67	0.76 × 0.48	0.30	235	74			77住と重複
68	Ce-9・10	不整形	1.61 × 1.22	— × —	1.44	235				欠番
69										
70	Cj・k-14・15	不整形	2.03 × 1.84	1.16 × 1.14	0.80	236	80			
71	Cj-15、Ck-14・15	隅丸長方形	2.08 × 1.40	1.58 × 1.00	0.69	236	80			
72	Ck-15	不整形	2.11 × 1.62	16.2 × 1.13	0.51	236	80			
73	Ck・l-15	不整形	2.75 × 1.60	2.28 × 1.40	0.55	236	80			
74	Ck・l-15・16	不整形	2.97 × 1.52	2.05 × 1.46	0.65	236	80	239	140	
75	Ck-14	楕円形	1.06 × 0.78	0.72 × 0.62	0.26	235	80			
76	Cl-15・16	不整形	3.40 × 1.12	3.25 × 0.86	0.25	236	80			
77	Cl-16	不整形	4.53 × 0.85	3.86 × 0.82	0.58	236	80			
78	Ck・l-16	不整形	— × 0.70	— × 0.28	0.98	236	80			
79	Cl-16	不整形	1.57 × 0.82	0.98 × 0.17	0.59	236	80			
80	Ck・l-16	瓢箪形	1.59 × 0.31	1.16 × 0.35	0.26	236	80			
81	Cl・m-15	楕円形	1.31 × 1.13	0.90 × 0.52	0.73	235	80			
82	Cl-15	楕円形	1.32 × 1.10	1.00 × 0.65	0.29	236	80			
83	Ck・l-15	楕円形	1.01 × 0.68	0.63 × 0.31	0.60	236	80			
84	Ck・l-14	円形	0.98 × 0.96	0.83 × 0.70	0.17	235	80			
85	Cl-15・16	円形	0.47 × 0.45	0.28 × 0.27	1.00	236	80	239	140	
86	Ca-6	円形	0.82 × 0.82	0.23 × 0.18	1.04	230	81			
87	By-7	円形	0.41 × 0.35	0.20 × 0.16	1.49	230	81	230	140	26井戸と重複
88	By-7	楕円形	0.42 × 0.37	0.24 × 0.16	1.42	230	81			
89	By-7	円形	0.35 × 0.31	0.22 × 0.19	1.69	230	81			
90	Bv-7	楕円形	(1.20) × 1.18	(1.08) × 0.91	0.21	237	75			82住と重複
91	Bs-2	不整形	1.16 × 0.87	1.05 × 0.73	0.47	247	83	247	141	土墳墓
92	Bt-2	方形	1.00 × 0.93	0.82 × 0.72	0.75	248	83	248	142	土墳墓
93	Bv-5・6	—	(0.79) × —	(0.53) × —	0.27	237				85住・30溝と重複
94	Cc-4	楕円形	1.15 × 0.83	0.91 × 0.44	0.35	237				
95	Bf-9	長方形	2.96 × 0.65	2.74 × 0.51	0.21	237				96坑と重複
96	Bf・g-9	長方形	(1.18) × 0.63	(1.02) × 0.46	0.14	237				95坑と重複
97	Bf・g-8・9	長方形	0.93 × 0.52	0.80 × 0.34	0.26	237				
98	Bg-12・13、Bh-12	隅丸長方形	3.70 × 2.43	3.49 × 2.65	0.24	237	81			
99	Bi-8	不整形	0.83 × 0.43	0.48 × 0.20	0.14	237	81			5井戸と重複



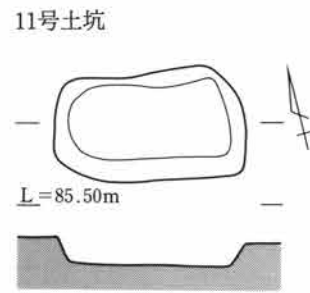
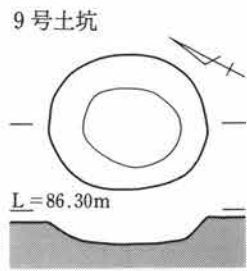
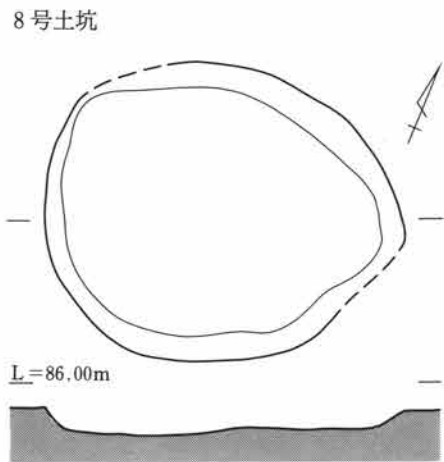
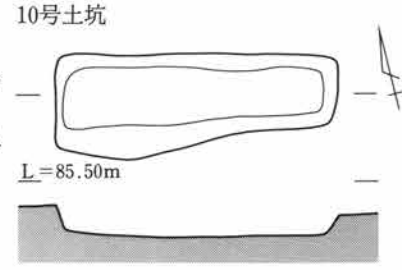
- 2号土坑
- 1 黒色土 軽石粒を含む
 - 2 暗褐色土 白色パミス少量含む
 - 3 褐色土 ロームを多く含む
 - 4 暗褐色土 ロームブロックを含む
 - 5 褐色土 ロームブロック



- 3号土坑
- 1 暗褐色土 軽石・ローム粒を含む
 - 2 黒褐色土 軽石・ローム粒を含む
 - 3 暗褐色土 ロームブロックを含む
 - 4 ロームブロック・焼土・黒色土により構成



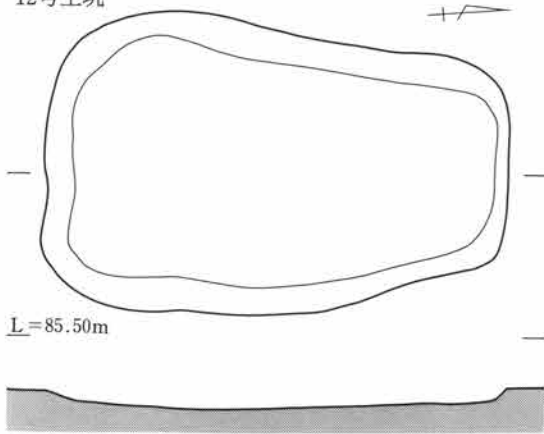
- 5号土坑
- 1 黒褐色土 やや砂質で炭化物を含む
 - 2 黒褐色土 ロームを含む
 - 3 暗褐色土 ローム・黒褐色土を混入



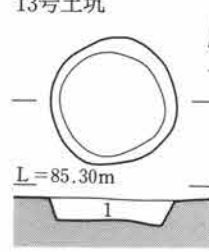
第231図 土 坑

II 発掘調査の記録

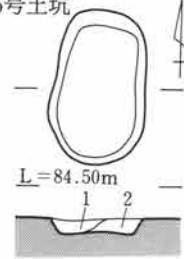
12号土坑



13号土坑



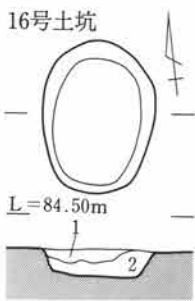
15号土坑



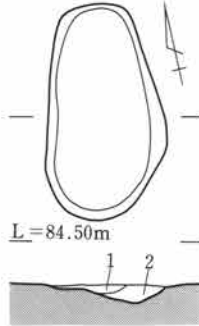
13・15・16・17・18・19・20・21・22・23・24号土坑

- 1 暗褐色土 As-C 軽石・炭化物を含む
- 2 暗褐色土 As-C 軽石・粘土ブロック・炭化物を含む
- 3 暗褐色土 As-C 軽石を少量含む
- 4 黄褐色土 粘土ブロックを主体とする
- 5 黒褐色土 焼土を混入する

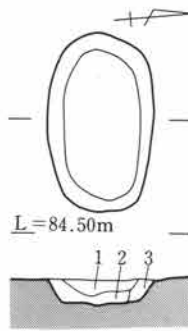
16号土坑



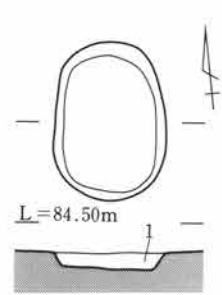
17号土坑



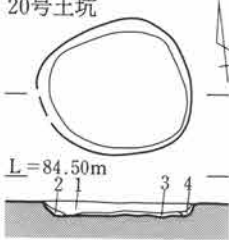
18号土坑



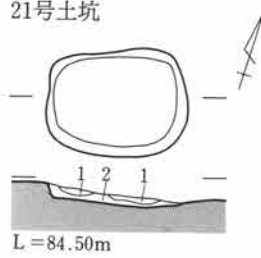
19号土坑



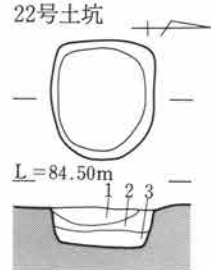
20号土坑



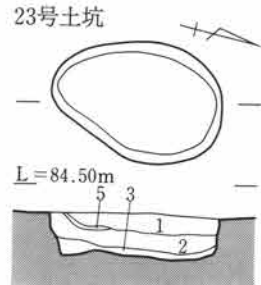
21号土坑



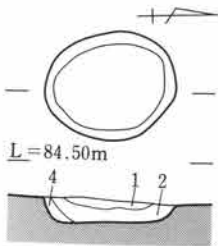
22号土坑



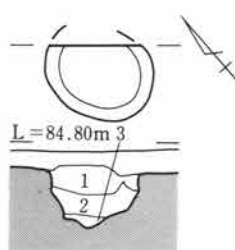
23号土坑



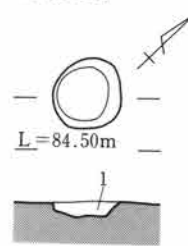
24号土坑



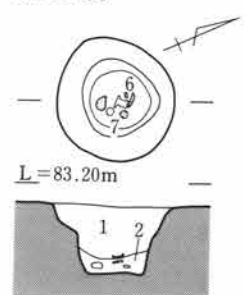
25号土坑



26号土坑



27号土坑



25号土坑

- 1 褐色土 FA・焼土を含む
- 2 暗褐色土 FA・炭化物・ロームを含む
- 3 黄褐色土 ロームブロック・炭化物を含む

26号土坑

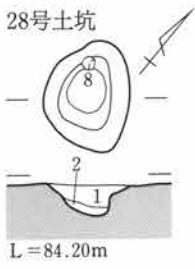
- 1 暗褐色土 FA・粘土ブロックを含む

27号土坑

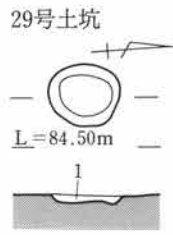
- 1 暗褐色粘質土 FA を含む
- 2 黒褐色粘質土 粘土ブロックを含む

0 2 m

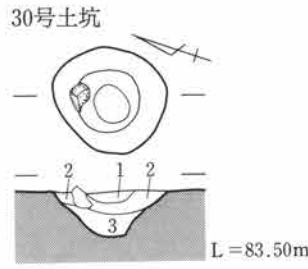
第232図 土 坑



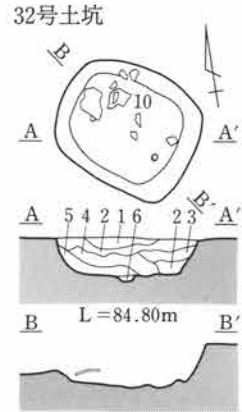
28号土坑
1 暗褐色土 軽石を含む
2 暗褐色土 軽石を微量含む



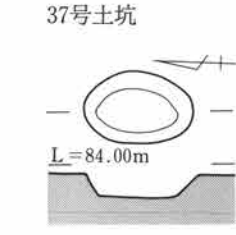
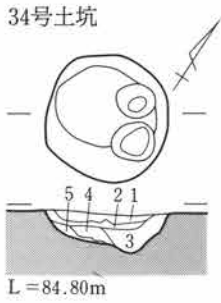
29号土坑
1 暗褐色土 軽石粒を含む



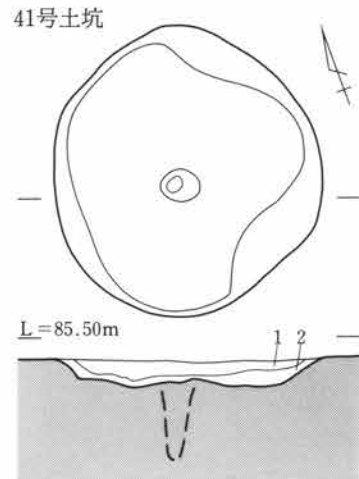
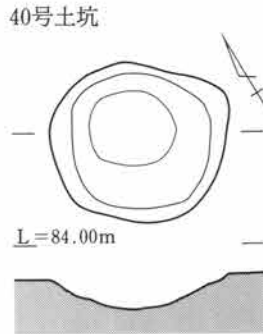
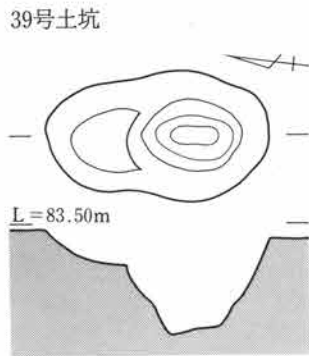
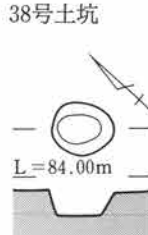
30号土坑
1 黒色粘質土 FAを少量含む
2 黒褐色粘質土 As-Cを含む
3 黒褐色粘質土 As-C・橙色粒子を含む



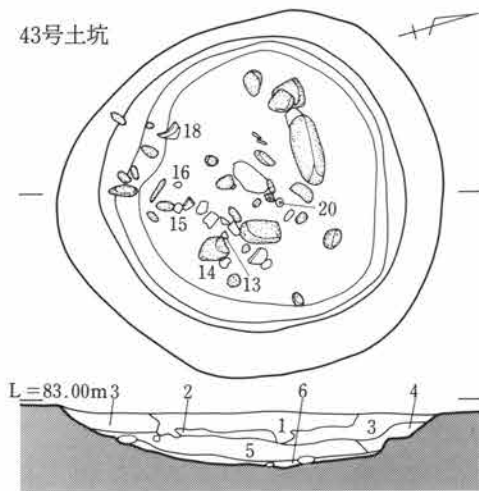
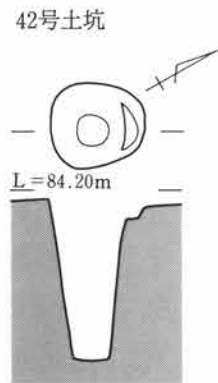
32号土坑
1 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む
2 暗褐色土 軽石・ロームを少量含む
3 暗褐色土 ローム・焼土・粘土を含む
4 暗褐色土 ロームを多く、焼土を少量含む
5 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む
6 暗褐色土 ローム粒を多く含む



34号土坑
1 暗褐色土 粘土を多く含む
2 暗褐色土 ロームを多く含む
3 暗褐色土 ローム・炭化物を含む
4 暗褐色土 炭化物を多く含む
5 暗褐色土 ロームブロックを多く含む



41号土坑
1 暗褐色土 ロームブロックを含む砂質の層
2 暗褐色土 ロームを多く含む



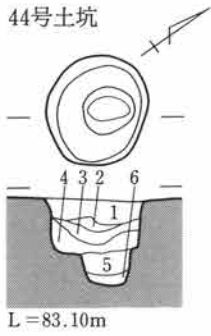
43号土坑
1 黒褐色土 軽石を少量含む
2 黒褐色粘質土 軽石を少量含む
3 黒褐色土 軽石を少量含む
4 黒褐色粘質土
5 暗褐色粘質土 軽石を少量含む
6 黒褐色土 軽石・砂を含む



第233図 土 坑

II 発掘調査の記録

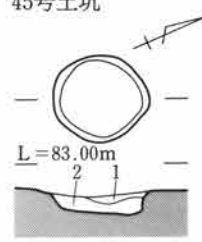
44号土坑



- 44号土坑
 1 黒褐色土 軽石を少量含む
 2 黒褐色土 軽石・砂を含む
 3 黒褐色土 1に類似
 4 暗褐色土 軽石を少量含む
 5 暗褐色土 軽石・褐色土を含む
 6 灰褐色土 暗褐色土ブロックを含む

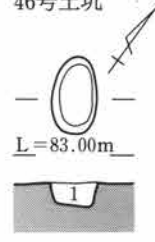
L=83.10m

45号土坑



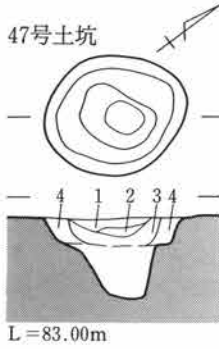
- 45号土坑
 1 暗褐色土 FAブロックを含む
 2 黒褐色粘質土 軽石を含む

46号土坑



- 46号土坑
 1 黒褐色粘質土 軽石を少量含む

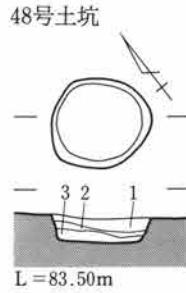
47号土坑



- 47号土坑
 1 暗褐色粘質土 軽石を少量含む
 2 暗褐色粘質土 軽石・砂を含む
 3 黒褐色粘質土 軽石を少量含む
 4 黒褐色土 軽石を多く含む

L=83.00m

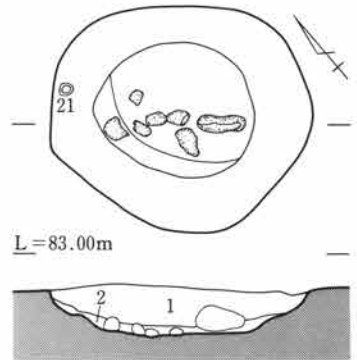
48号土坑



- 48号土坑
 1 黒褐色土 軽石を多く含む
 2 黒色土 軽石を多く含む
 3 黒褐色土 軽石・砂を含む

L=83.50m

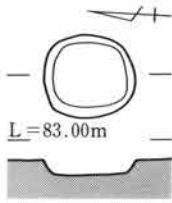
49号土坑



- 49号土坑
 1 黒褐色粘質土 軽石を少量含む
 2 黒褐色土 軽石・砂を含む

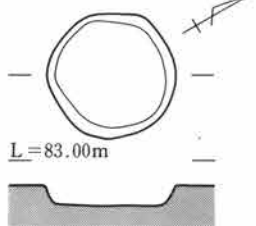
L=83.00m

50号土坑



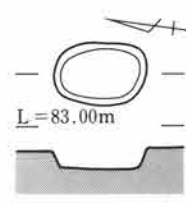
L=83.00m

51号土坑



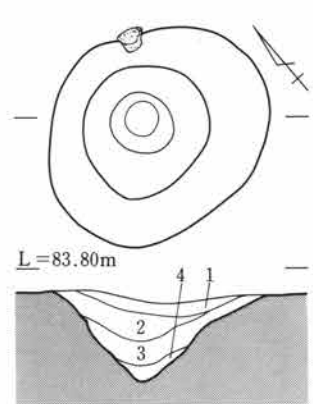
L=83.00m

52号土坑



L=83.00m

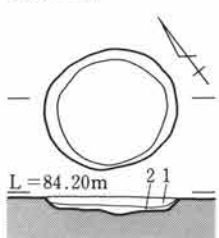
54号土坑



L=83.80m

- 54号土坑
 1 黒褐色土 軽石を含む
 2 黒褐色土 軽石・ローム粒を含む
 3 黒褐色土 ローム粒を少量含む
 4 暗褐色土 ロームを多く含む

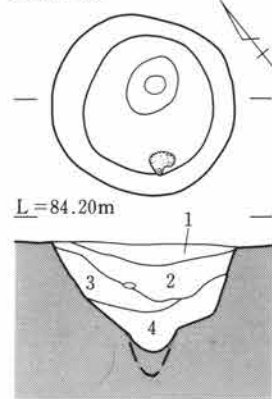
56号土坑



L=84.20m

- 56号土坑
 1 暗褐色土 軽石・炭化物を少量含む
 2 暗褐色土 ロームを多量に含む

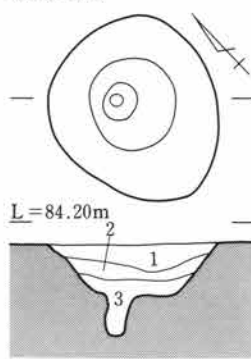
57号土坑



L=84.20m

- 57号土坑
 1 暗褐色土 軽石・ロームブロックを含む
 2 暗褐色土 軽石・炭化物を含む
 3 褐色土 ローム・黒褐色土を含む
 4 黒褐色土 ロームブロックを含む

58号土坑



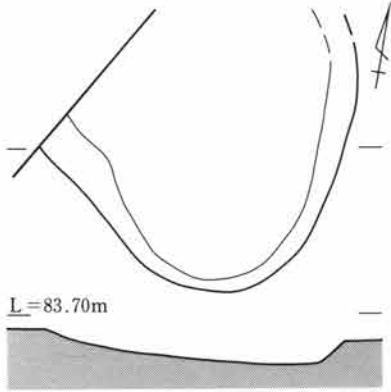
L=84.20m

- 58号土坑
 1 褐色土 ローム・As-Bを含む
 2 褐色土 ローム・褐色土が混在
 3 暗褐色土 ロームを多量に含む

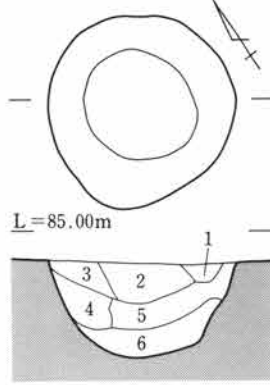
0 2 m

第234図 土坑

59号土坑



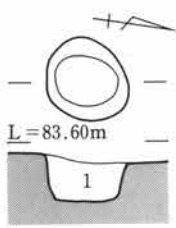
60号土坑



60号土坑

- 1 ロームブロック
- 2 暗褐色土 ロームを多量に含む
- 3 褐色土 炭化物・軽石を少量含む
- 4 褐色土 黒褐色土を混在
- 5 暗褐色土 ロームブロックを含む
- 6 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む

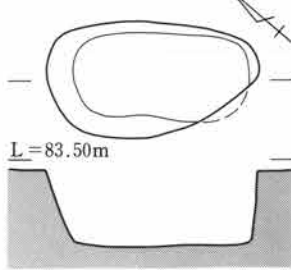
62号土坑



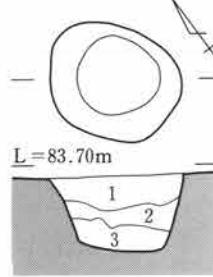
62号土坑

- 1 黒褐色土 ロームブロック・軽石を含む

63号土坑



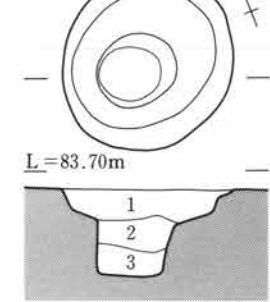
65号土坑



65号土坑

- 1 黒褐色土 ロームブロックを含む
- 2 黒褐色土 ロームブロックをやや多く含む
- 3 黒褐色土 多量のロームブロックを含む

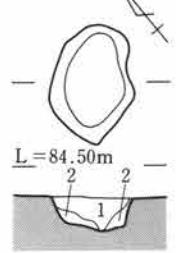
66号土坑



66号土坑

- 1 暗褐色土 軽石・ロームを少量含む
- 2 暗褐色土 軽石を含む
- 3 暗褐色土 ロームブロックを多く含む

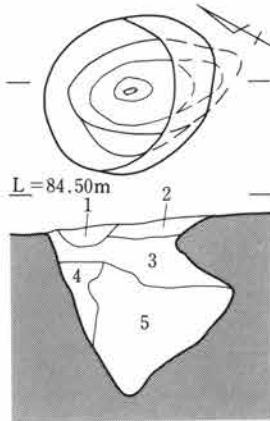
67号土坑



67号土坑

- 1 暗褐色土 軽石・ロームを含む
- 2 黄褐色土 軽石・ロームを多量に含む

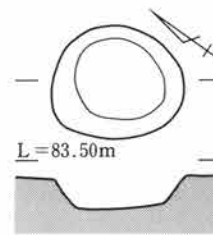
68号土坑



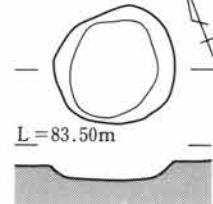
68号土坑

- 1 暗褐色土 軽石粒・ロームブロックを含む
- 2 黄褐色土 ロームブロックを主体とする
- 3 暗褐色土 ロームブロックを多く含む
- 4 黄褐色土 壁部崩落によるロームを含む
- 5 暗黄褐色土 ローム・褐色土を混在する

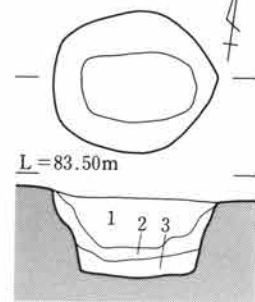
75号土坑



84号土坑



81号土坑



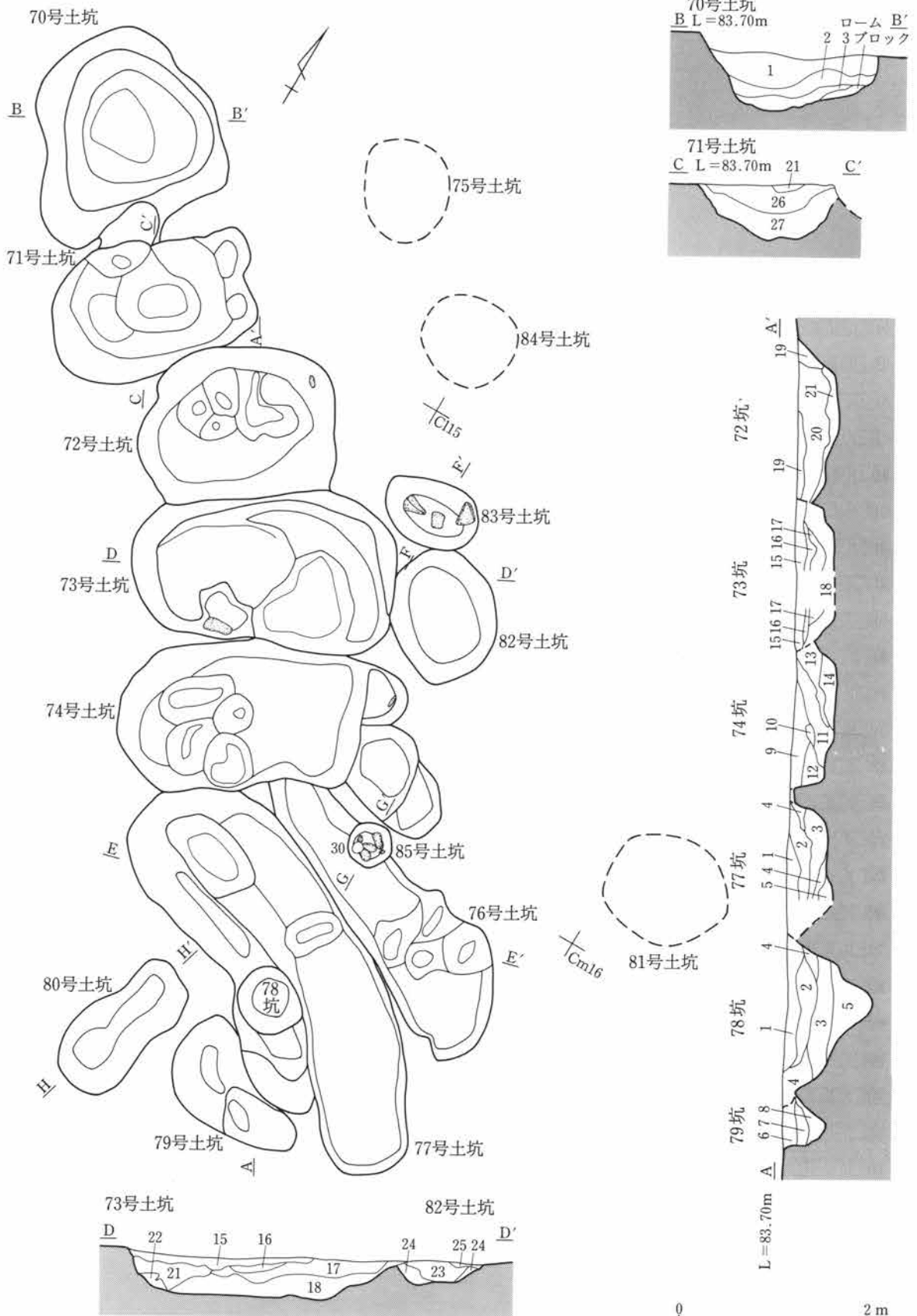
81号土坑

- 1 暗褐色土 軽石を含む
- 2 褐色土 ロームを多量に含む
- 3 褐色土 ローム・褐色土が混在

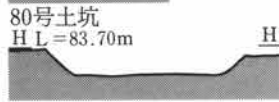
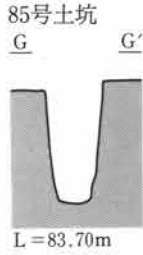
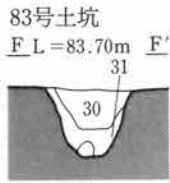
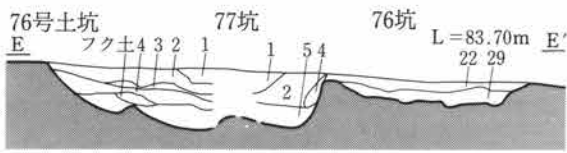
0 2 m

第235図 土 坑

II 発掘調査の記録

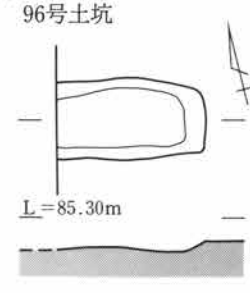
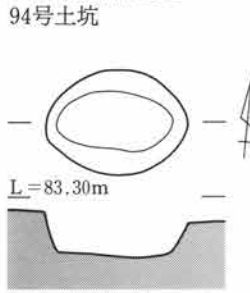
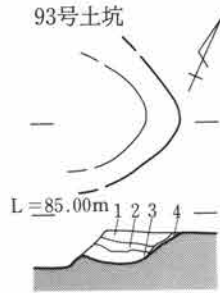
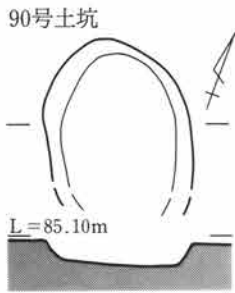


第236図 土 坑

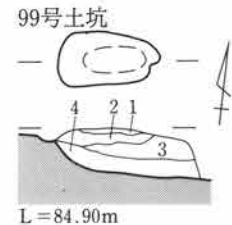
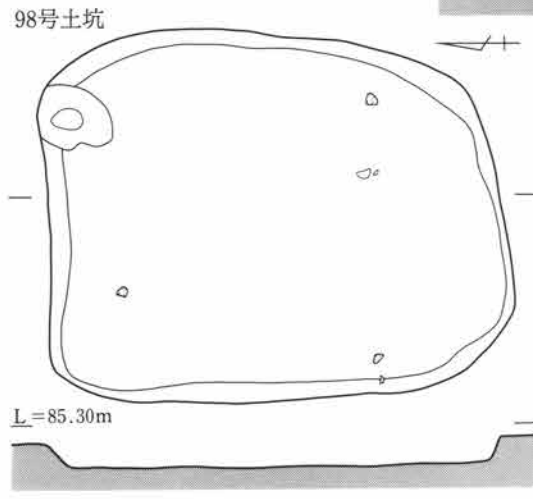
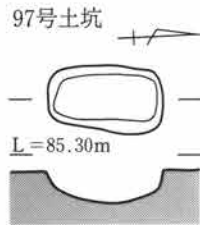
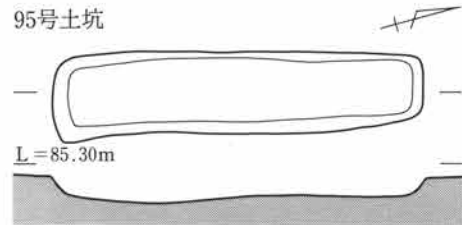


- 70・71・72・73・74・76・77・78・79・82・83号土坑
- 1 暗褐色土 軽石・ローム粒を含む
 - 2 褐色土 軽石・ローム粒を含む
 - 3 褐色土 2に類似するが、色調がやや暗い
 - 4 褐色土 ロームブロックを多く含む壁部崩落土
 - 5 褐色土 指頭大のロームブロックを少量含む
 - 6 褐色土 ロームブロックを含む
 - 7 褐色土 軽石・指頭大のロームブロックを含む

- 8 褐色土 7に類似するが、色調が暗い
- 9 褐色土 白色軽石粒・ロームブロックを含む
- 10 褐色土 ローム粒を含む
- 11 褐色土 9に類似するが、色調が暗い
- 12 暗褐色土 軽石を少量含む
- 13 暗黄褐色土 褐色土を少量含む
- 14 暗褐色土 ローム粒を含む
- 15 暗褐色土 軽石・ローム粒を含む
- 16 暗黄褐色土 ロームブロックを多く含む
- 17 暗褐色土 軽石・ローム粒を含む
- 18 暗褐色土 17に類似するが、色調がやや暗い
- 19 暗褐色土 軽石を多く含む
- 20 褐色土 軽石・ローム粒を含む
- 21 褐色土 ロームブロックを多量に含む
- 22 暗褐色土 軽石・ローム粒を含む
- 23 暗褐色土 軽石を含む
- 24 暗褐色土 軽石・ロームブロックを含む
- 25 暗褐色土 軽石・ローム粒を含む
- 26 褐色土 軽石・ローム粒を含む
- 27 褐色土 軽石を少量含む他、ローム粒もみられる
- 28 褐色土 暗褐色土・軽石を含む
- 29 褐色土 軽石・ローム粒を含む
- 30 黒褐色土 軽石・ローム粒を少量含む
- 31 黒褐色土 ローム(壁部崩落)



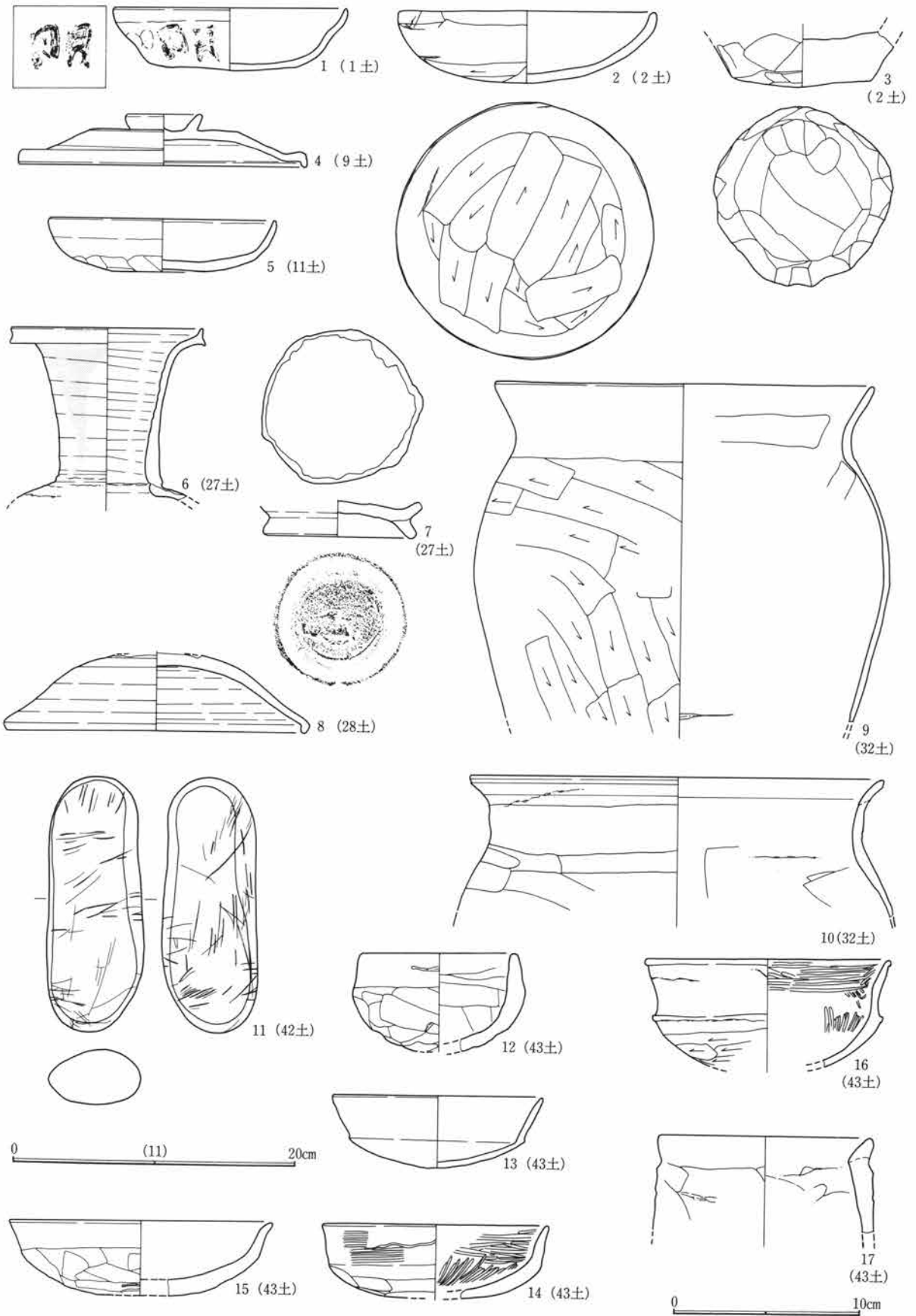
- 93号土坑
- 1 褐色土 黒褐色土を少量含む
 - 2 褐色土 焼土を少量含む
 - 3 暗黄褐色土 褐色土を混在
 - 4 暗黄褐色土 褐色土を多く含む



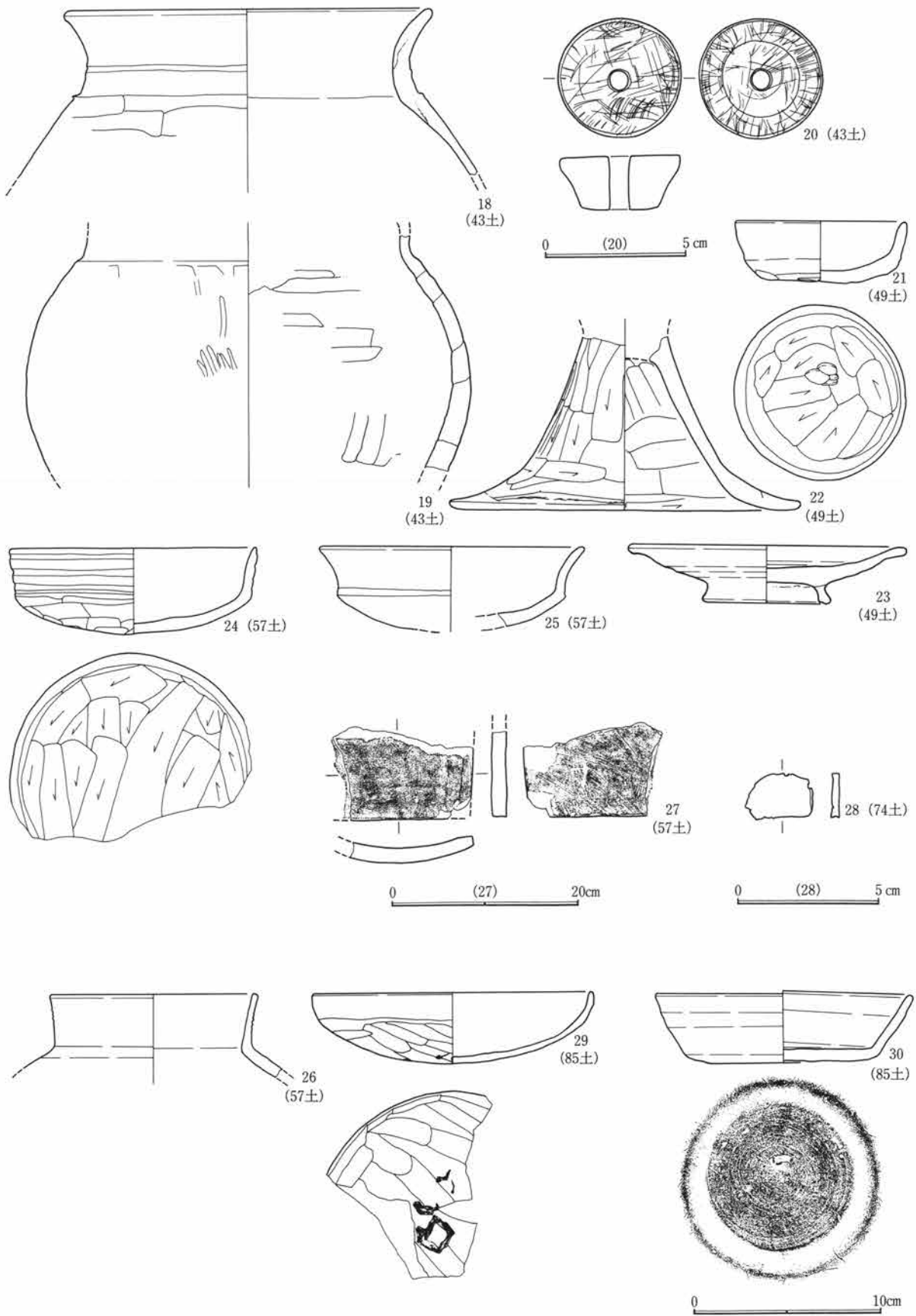
- 99号土坑
- 1 焼土層
 - 2 焼土粒・白色軽石粒を含む黒褐色土
 - 3 焼土粒・白色軽石粒を含む黒色土
 - 4 白色軽石粒を含む黒色土

第237図 土 坑

II 発掘調査の記録



第238図 土坑出土遺物



第239図 土坑出土遺物

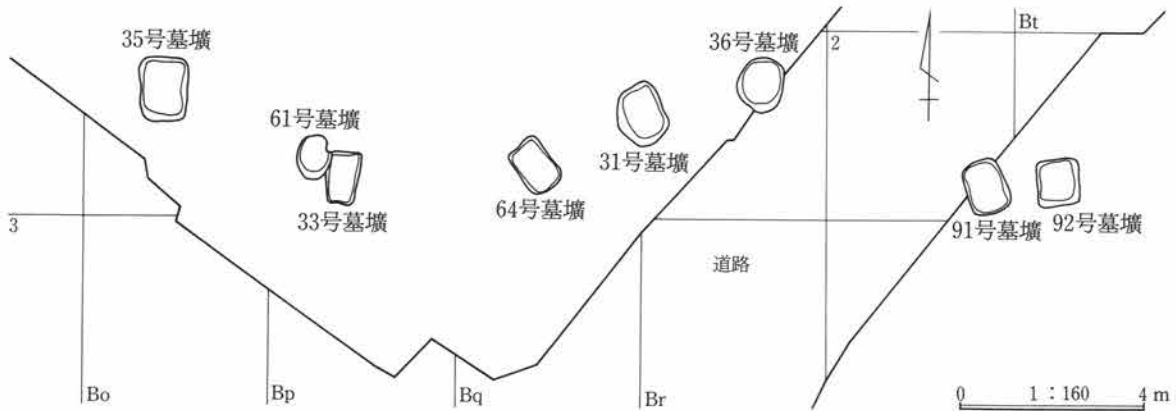
II 発掘調査の記録

(6) 墓 墳 (第240図 P L. 82・83)

近世の墓墳は8基確認されている。いずれも遺跡中央付近に集中しており、東西方向に列をなすように群を形成している。33号墓墳と61号墓墳に重複が認められる他は、ある程度の間隔をもって位置している。間隔は一定しないが、およそ1mから3mを測る。この位置関係からすると、36号墓墳と91号墓墳間の現有道路下(未調査部)にも、さらにもう1基

存在する可能性が高い。

墓墳の形態は、他遺溝との重複および現有道路に接しての検出等の条件により一部不明瞭なものもあるが、方形平面をもつもの5例、楕円形平面をもつもの3例がある。人骨はすべての墳内より1体ずつ検出されている。このうち5基は遺存状況が良好であったが、他例は部分的検出にとどまっている。



第240図 墓墳位置図

31号土坑 確認面1.25m×1.04mでやや不整な長方形平面をもち、深さは40cm程度を測る。人骨は四肢を屈し仰向けの状態で確認している。遺存は比較的良好である。副葬品は古銭が11枚確認された。

33号土坑 長方形平面で長軸をほぼ南北とする。人骨は西向きで両足を屈して横臥し、遺存は比較的良好で骨格のほとんどが確認できる。菊皿2枚、古銭13枚が副葬品として出土している。なお埋土は砂質の黒褐色土である。

35号土坑 隅丸の長方形平面で、長軸は南北方向に一致する。人骨は大半が遺失しており一部の検出にとどまる。瀬戸美濃系の皿2枚、古銭8枚が副葬品として確認された。ロームを含む暗褐色土を埋土とし、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

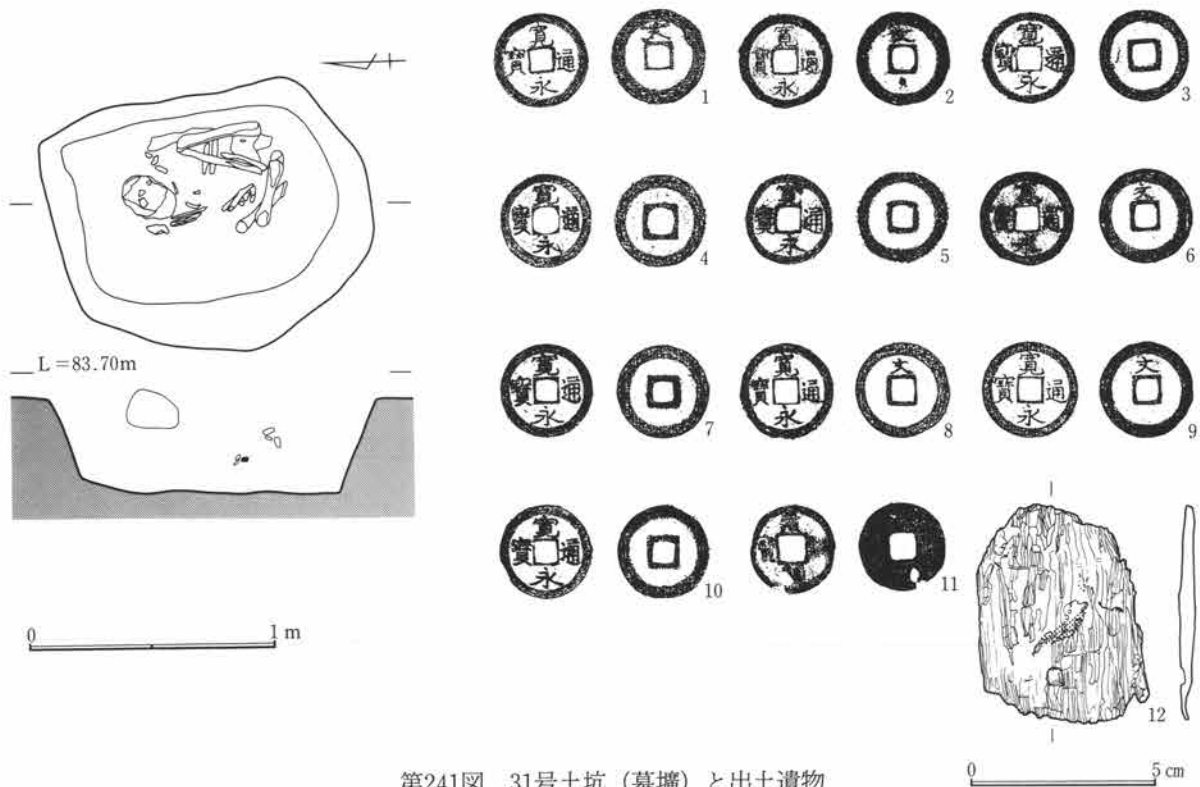
36号土坑 径1m程度の円形墓墳で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。人骨は大半が遺失しており、歯をふくむ部分的検出にとどまる。鉢1点、古銭11枚のほか木製容器(印籠)とこれに付するビーズ玉が1点副葬されている。なお、人骨、副葬品とも墓墳下部中央に集中する。

61号土坑 楕円形平面で長軸を南北方向とし、壁はほぼ垂直に立ち上がる。この墓は頭部に播鉢をかぶせ埋葬するいわゆる“鉢かぶり”の葬法を示している。人骨は遺存状況が悪く、鉢に覆われた頭部が良好であったものの、以外はほとんど遺失している。他に古銭6枚、両端をつぶしたキセルの火皿部1点が副葬される。出土はいずれも墓墳下部である。

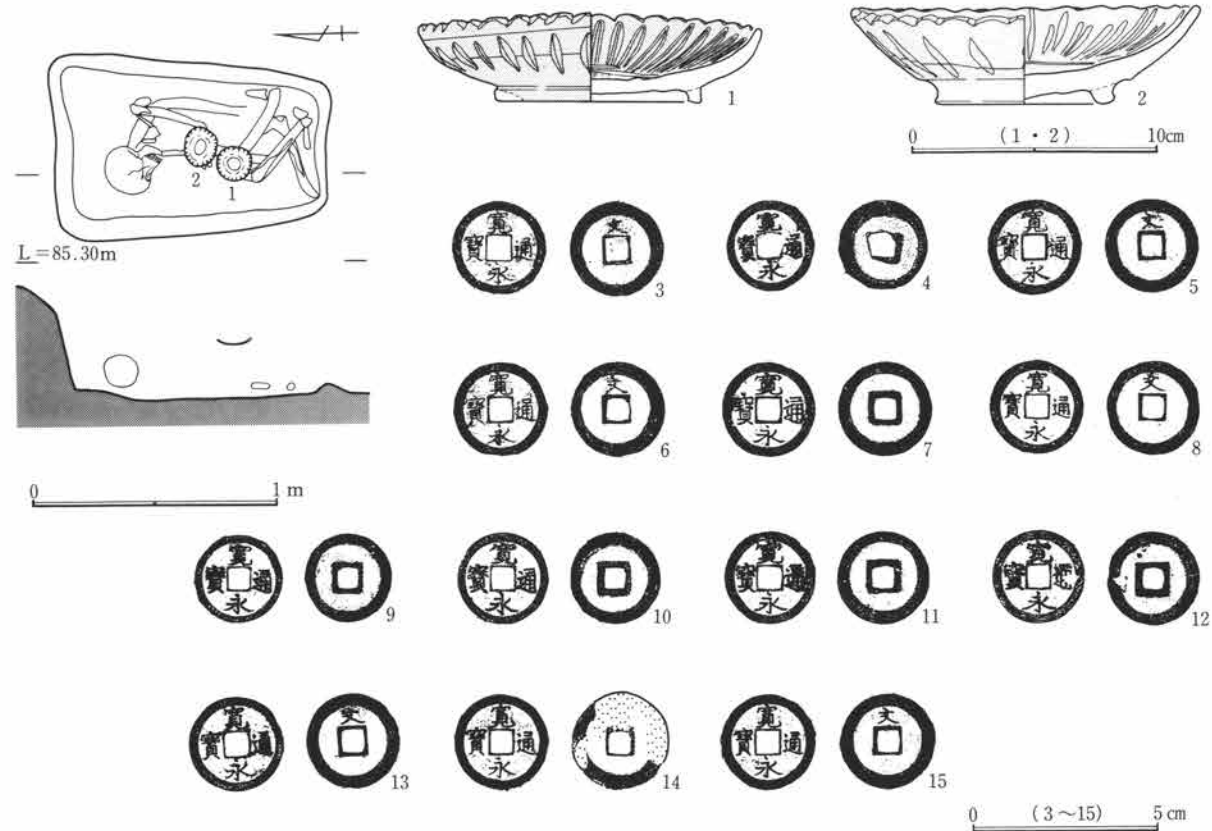
64号土坑 隅丸の長方形平面で長軸は北西から南東方向となる。人骨の遺存はやや良好で、頭部を北におき、両足を屈して横臥する。皿が頭部付近に1枚、古銭が肩部および足部に5枚が副葬されている。

91号土坑 隅丸の長方形平面で壁はほぼ垂直に立ち上がる。北半部が道路下であったためその土圧による影響を人骨もうけるが、遺存は比較的良好である。頭部を北におき、四肢を屈して東向きに横臥する。古銭18枚を副葬する。

92号土坑 一辺1m程度の隅丸方形で壁は垂直に立ち上がる。人骨はほとんど遺失しており、調査時に一部確認できたのみである。北壁下部に礫が1点の他、古銭が2カ所で計17枚副葬される。

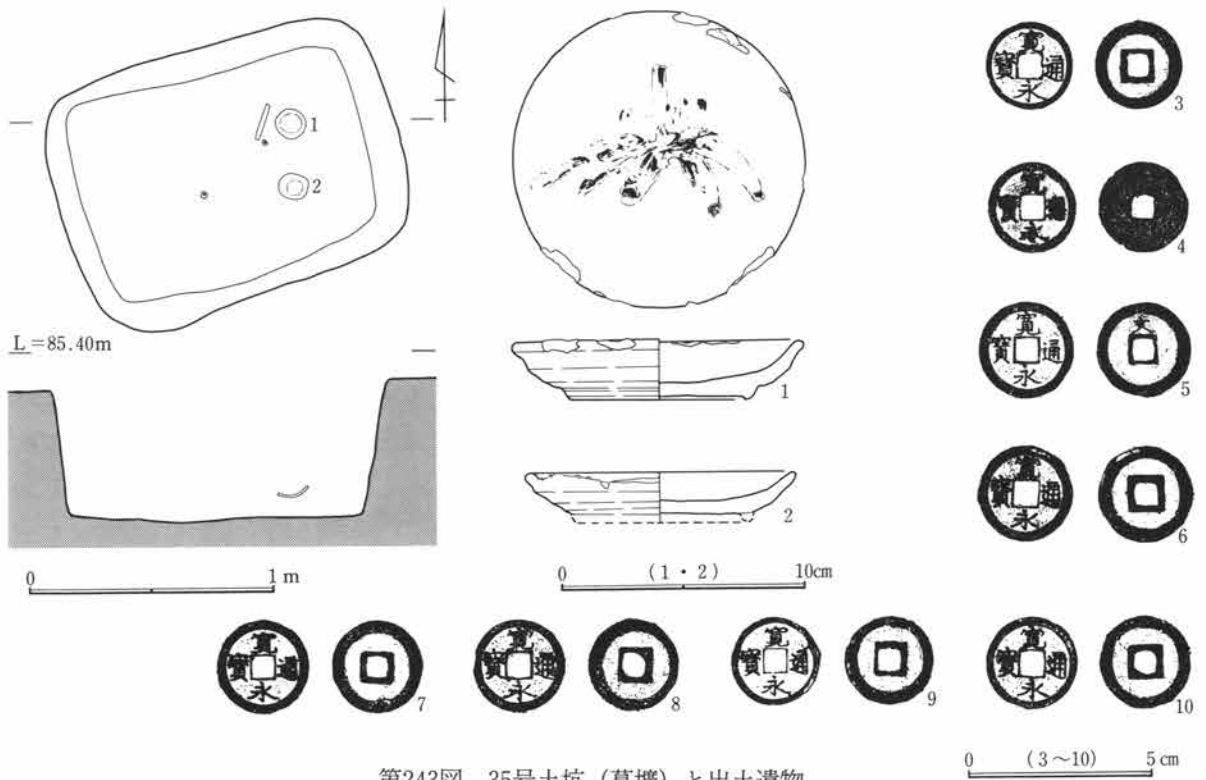


第241図 31号土坑（墓墳）と出土遺物

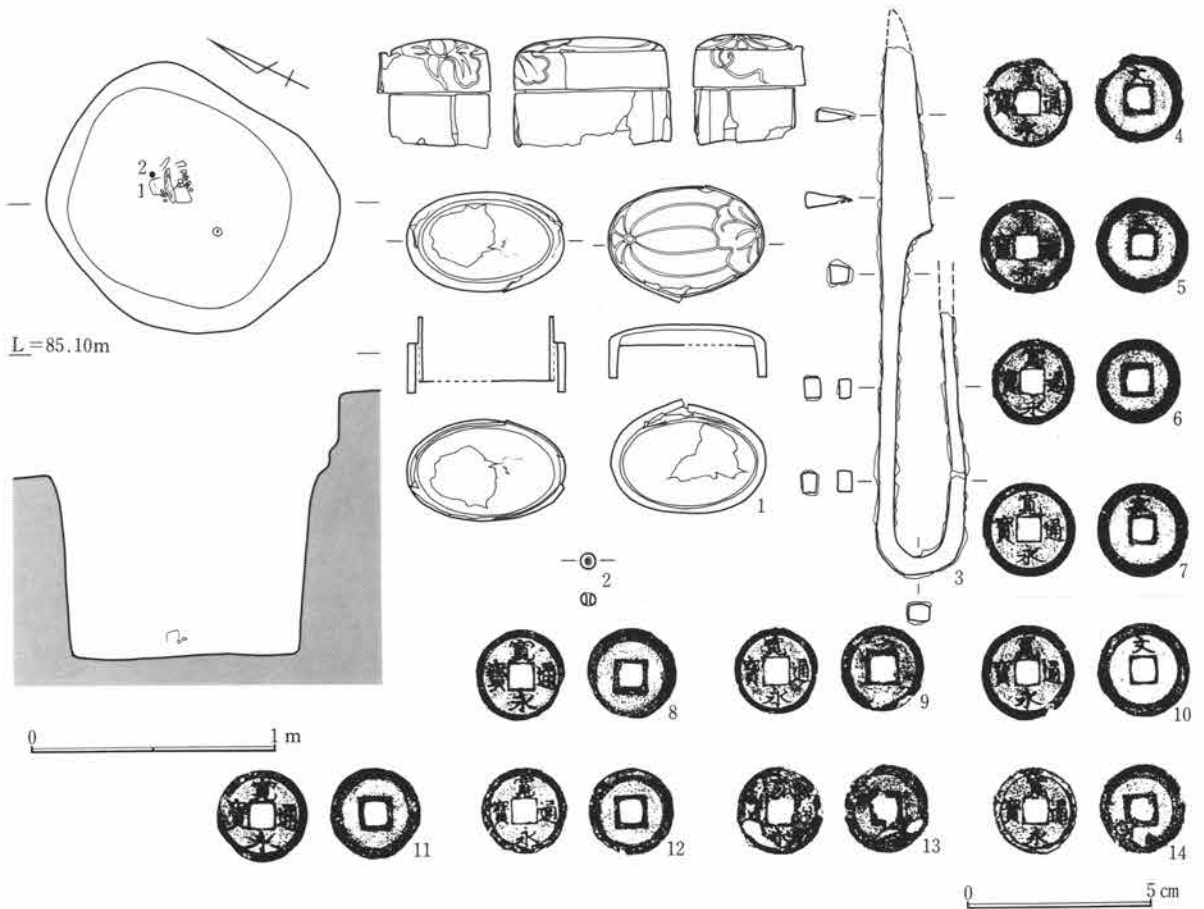


第242図 33号土坑（墓墳）と出土遺物

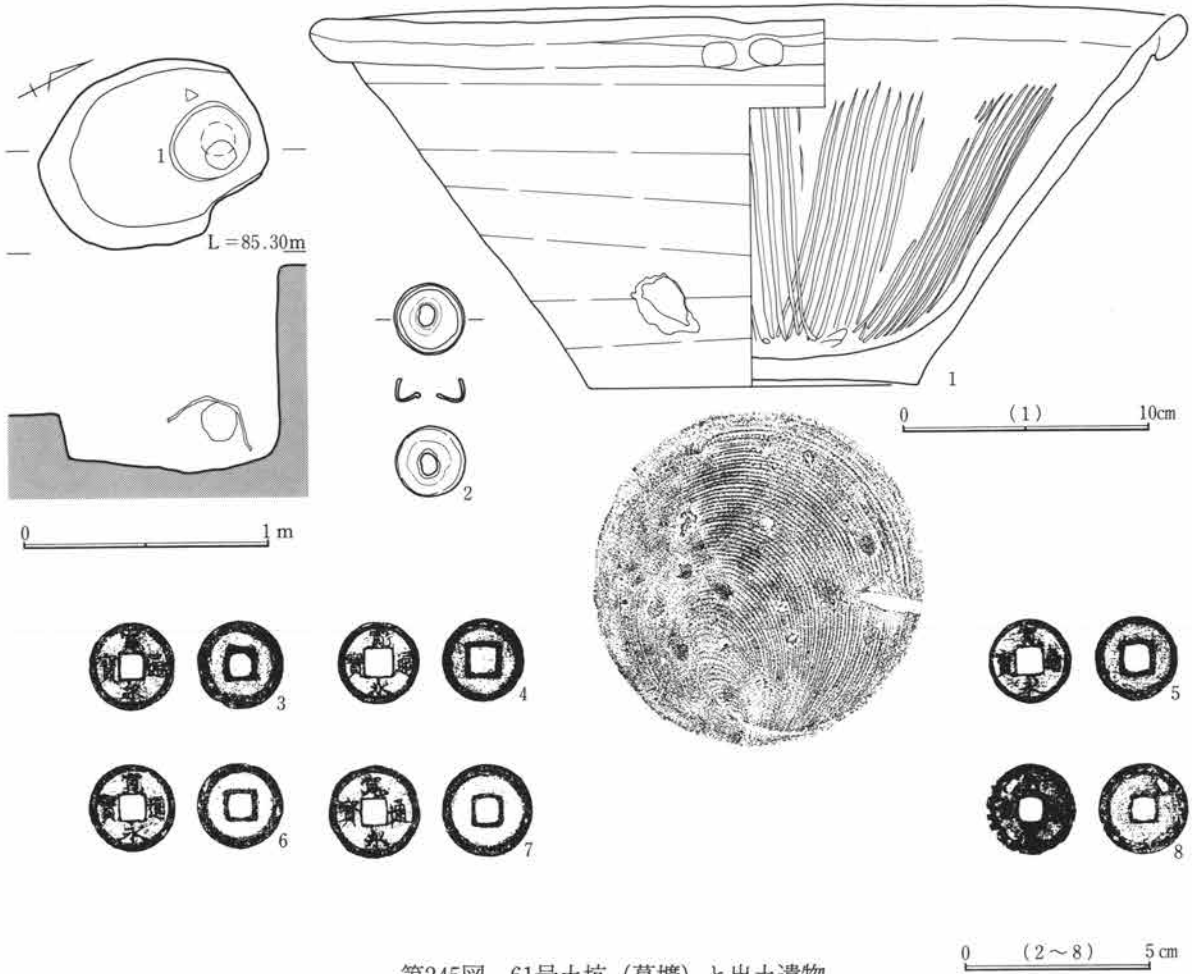
II 発掘調査の記録



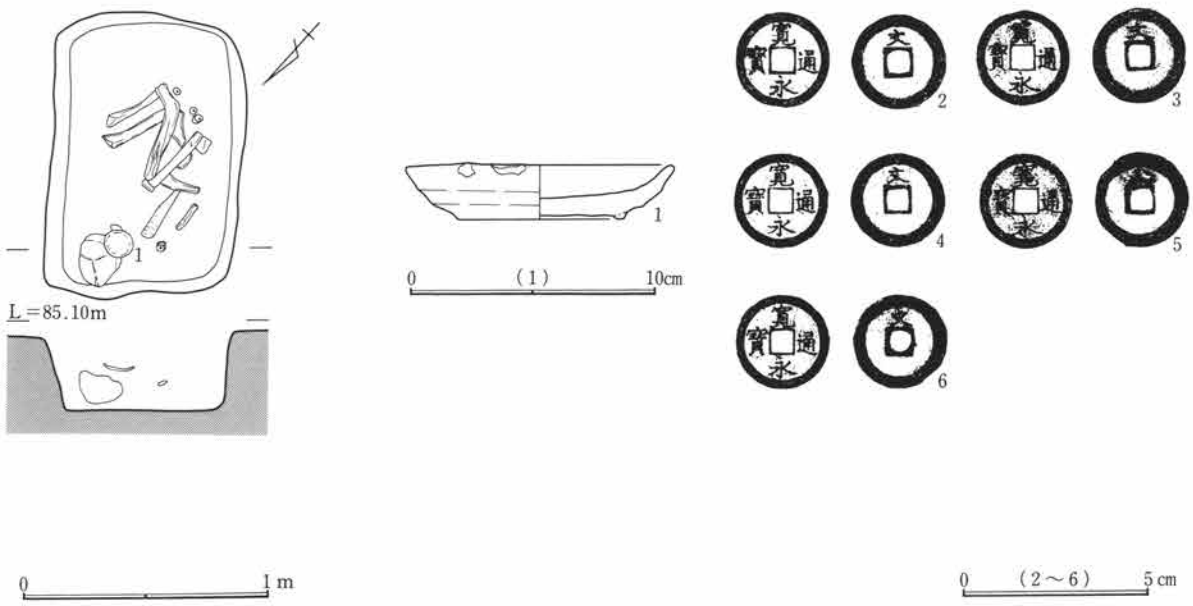
第243図 35号土坑（墓墳）と出土遺物



第244図 36号土坑（墓墳）と出土遺物

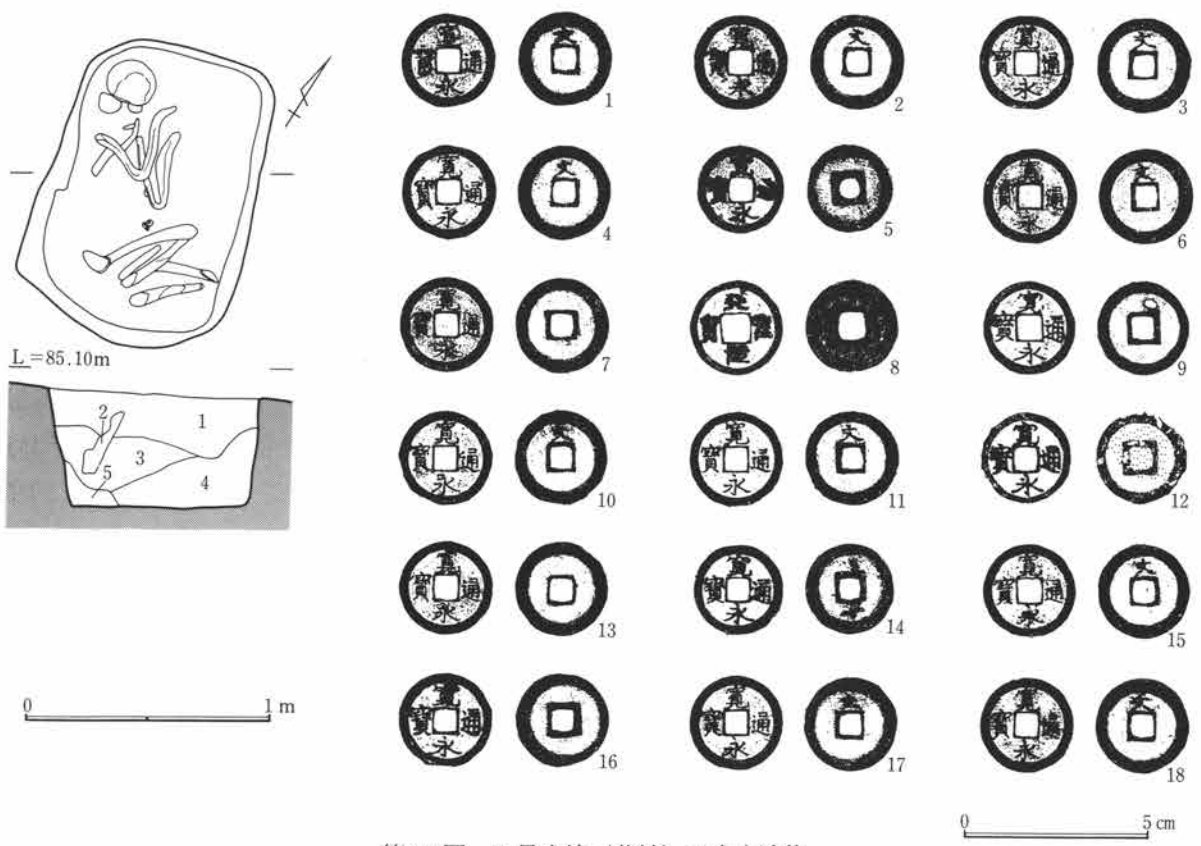


第245図 61号土坑（墓壙）と出土遺物

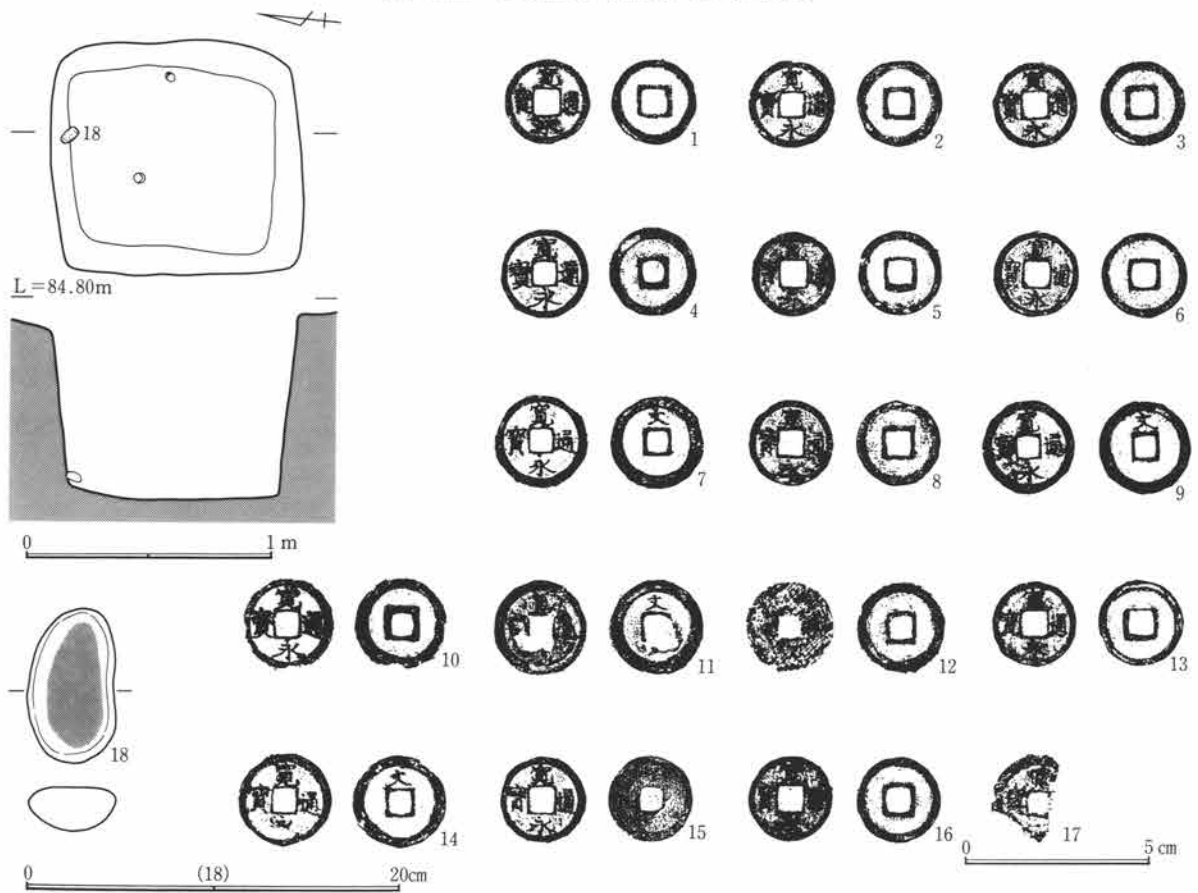


第246図 64号土坑（墓壙）と出土遺物

II 発掘調査の記録



第247図 91号土坑（墓壙）と出土遺物



第248図 92号土坑（墓壙）と出土遺物

(7) 井戸

井戸として確認し調査した遺構は35基である。このうち5基については、湧出部としての井戸とそれに伴う貯水部および通水溝など付帯施設の存在などから、低地部に確認された埋没水田に関連する溜井としての機能をもつ遺構であると判断している。11号井戸、19・20号井戸、31・32号井戸が該当するものと考えられ、これらについては(10)の項目で報告したい。ここではそのほかの井戸について遺構番号順に概要を報告していきたい。なお、各井戸の位置・規模などについては第4表井戸一覧表に示してあるためこれを参照願いたい。さらに遺物は第255図～第262図に示しているが、この中には前記の溜井に伴う井戸の出土遺物も一括して図示している。これは発掘調査から遺物注記までそれぞれの井戸出土遺物として扱っていたため、報告に際してもこれに準拠し、11号井戸・20号井戸・32号井戸の遺物もここに含まれている。

なお井戸出土遺物は通番としているため、以下の説明中では挿図番号を省き遺物番号のみ表示する。

1号井戸 8号井戸と東接するが、断面観察から1号井戸が古い。ロームブロックを混入する暗褐色土で埋没し、1・2の須恵器杯、碗が出土している。

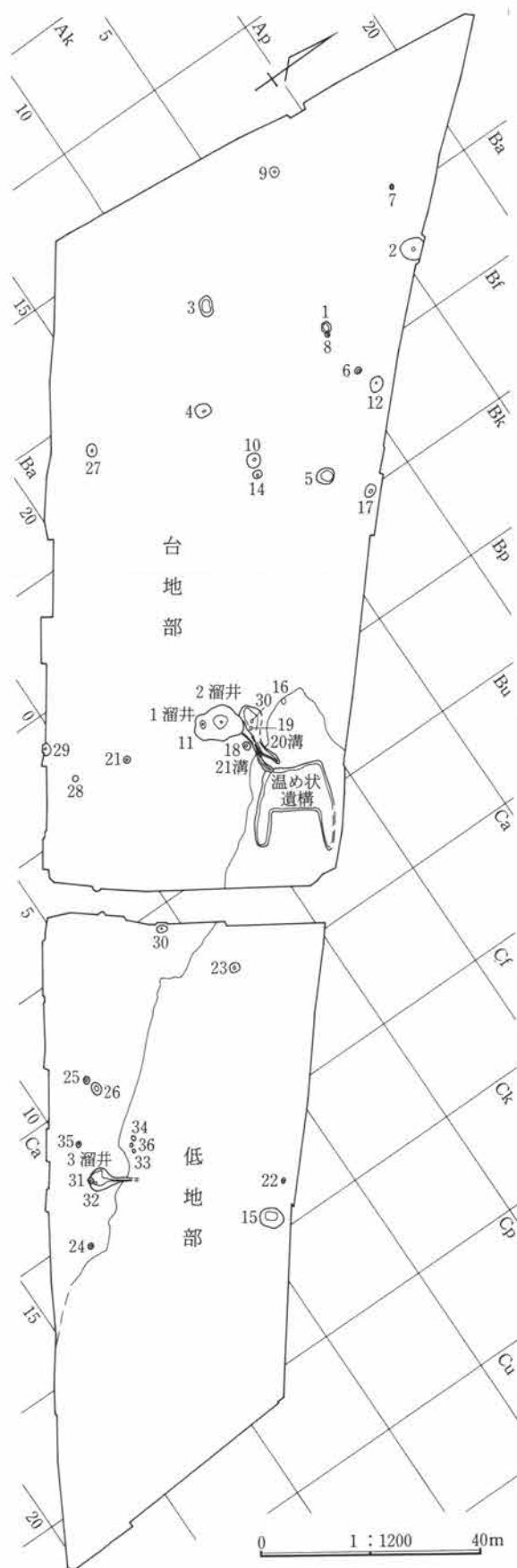
2号井戸 調査区北端に位置し一部未調査がある。口径、掘削深とも今回の調査例では最大規模をもつ。埋土内から6の土製紡錘車、3～5砥石、8の寛永通宝および主として低地部に散布する7の瓦塔軸部片が出土している。

3号井戸 15号住居と重複しローム、軽石粒を含む暗褐色土により埋没し9の寛永通宝が検出された。

4号井戸 24号住居と重複し、住居より古いという所見が得られている。底面に湧出部とみられる掘り込みをもつ。

5号井戸 1号掘立柱建物東辺柱穴を切って掘り込まれる。10の須恵器高杯が出土している。

6号井戸 32号住居と重複し住居埋没後に井戸が掘り込まれる。埋土内から住居に関連する可能性もあるが11の須恵器蓋、12の須恵器盤が出土する。



第249図 井戸位置図

II 発掘調査の記録

7号井戸 48号住居埋没後に掘り込まれる井戸でロームを含む褐色粘質土により埋没し、埋土内から13の内耳土器が検出されている。

8号井戸 1号井戸埋没後に掘り込まれ、ロームを含む暗褐色土により一括埋土される。

9号井戸 他遺構との重複がなく、掘削深も深いため壁部を利用して珪藻・花粉分析を実施している。
 (「IV-2 珪藻分析及び花粉分析」参照。)

10号井戸 16号溝と重複するが井戸が古く、14号井戸が東接する埋没土上層に礫が多量に流入するとともに、14~18の土器類のほか19の甕形土製品が出土している。

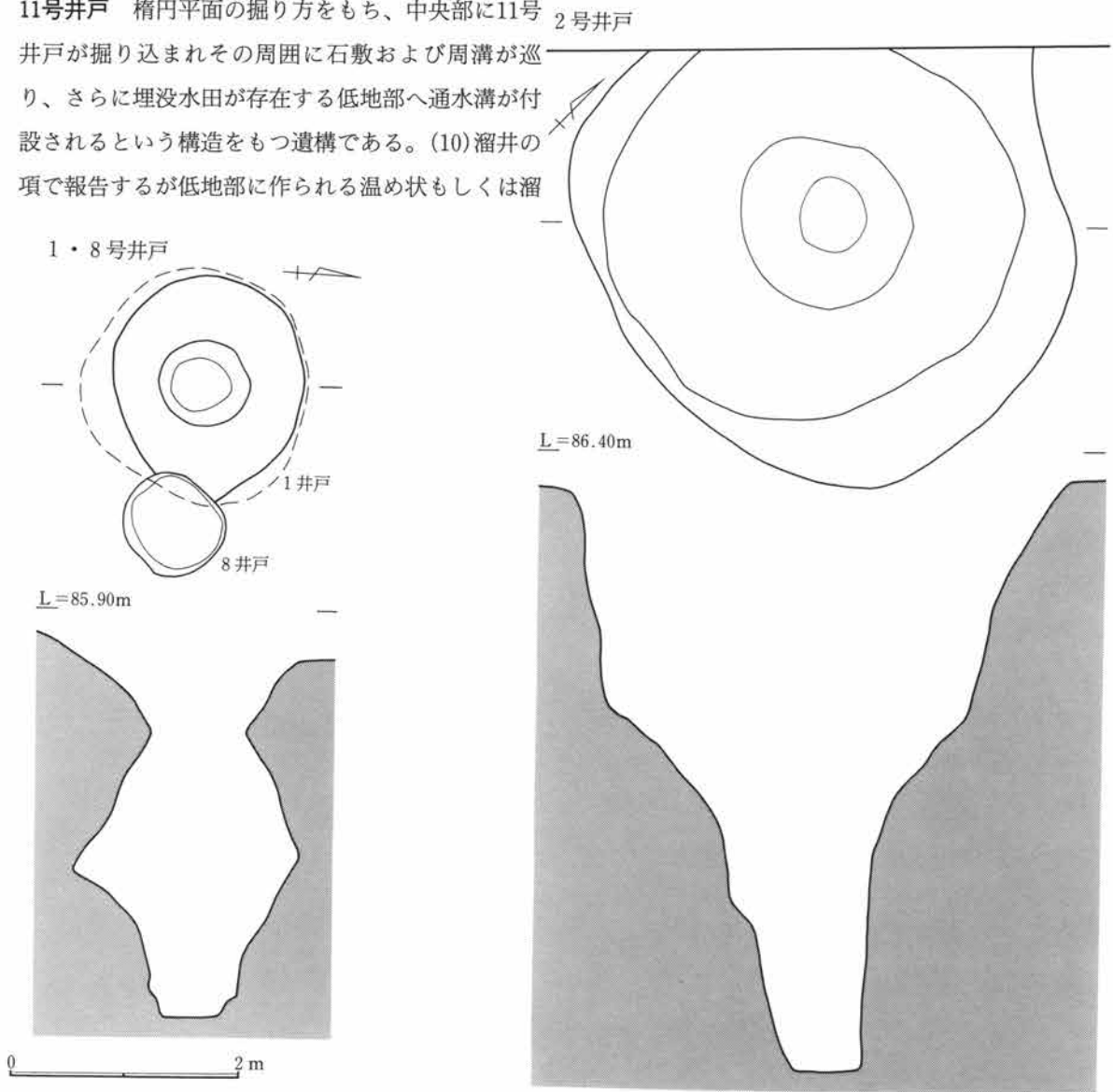
11号井戸 楕円平面の掘り方をもち、中央部に11号井戸が掘り込まれその周囲に石敷および周溝が巡り、さらに埋没水田が存在する低地部へ通水溝が付設されるという構造をもつ遺構である。(10)溜井の項で報告するが低地部に作られる温め状もしくは溜

井状の遺構と一体の機能を果たすものと考えている。なお、11号井戸部からは20~62に示すように多量の遺物が出土している。1号溜井とする。

12号井戸 4号溝と重複し、ロームを含む暗褐色土により埋没する。確認面下2mに湧水層(明灰色火山灰層)がある。

14号井戸 10号井戸に東接する井戸で壁中央は大きく崩落する。ローム、灰褐色粘質土および暗褐色土により埋没し、確認面下2mに湧水層(灰褐色火山灰層)がある。

15号井戸 C区低地部に位置する浅い井戸で、埋没土上面をAs-Bに覆われる。底面に接して礫のほか65



第250図 井 戸

の土師器甕および66～79の土錘14点が集中して検出されている。

16号井戸 台地縁辺に位置する小規模な井戸で、暗褐色砂質土により埋没する。確認面下1.2m～1.5mの褐灰色火山灰層が湧水層となる。

17号井戸 70号住居と重複し、確認面下1.6mの灰色火山灰層を湧水層とする。

18号井戸 台地縁辺に位置し、11号井戸に伴う通水溝に接する。軽石、ロームを含む黒褐色土により埋没し、確認面下1.3m～1.5mの榛名一八崎軽石層(Hr-HP)を湧水層とする。出土遺物は多く78～92の土師器類が検出されている。

19号井戸・20号井戸 両井戸は楕円形平面の掘り方および通水溝を伴い前記11号井戸と類似した構造をもち、やはり水田耕作に関連する用水施設と考えられる。礫、土器片が散布するが、土器については器形復元できる資料は少ない。93の土師器杯は20号井戸出土である。2号溜井とする。

21号井戸 確認面では円形平面を示すが、中段では隅丸方形とみられる掘り方も観察される。ロームを

多く含む黄褐色砂質土で埋没し、確認面下1.6m～1.8mの Hr-HP 層を湧水層とする。

22号井戸 C区低地部に位置し、粘土を混入する暗灰褐色土で埋没する。湧水層は確認面下1.3mの明灰色火山灰層となる。

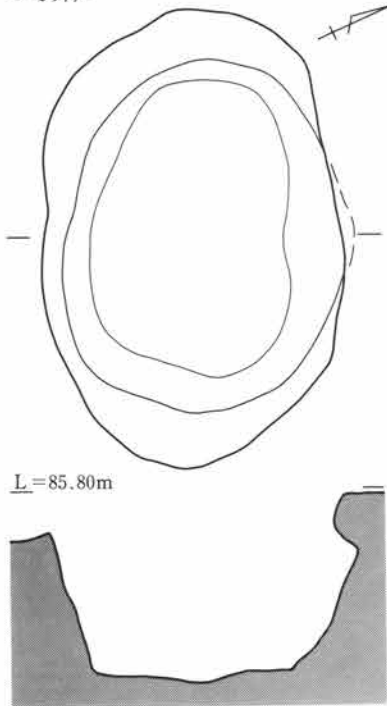
23号井戸 C区低地部に位置し、As-B層下で検出された。埋土内から墨書土器をふくむ96～98の土器が出土している。

24号井戸 台地縁辺に位置し、ロームを含む黒褐色土により埋没する。確認面下1.2mの灰褐色火山灰層を湧水層とする。

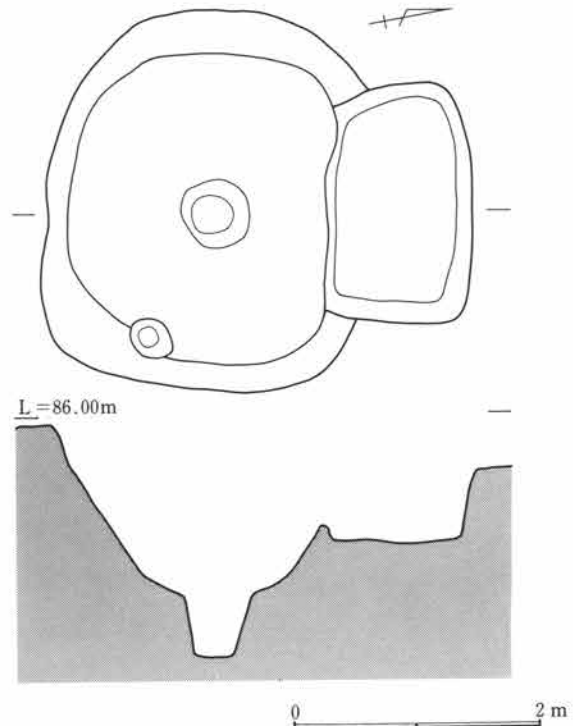
25号井戸 86号土坑～89号土坑および26号井戸に接して位置する。軽石粒、ローム粒を含む褐色土、暗灰褐色土により埋没し、埋土から99の土師器甕が出土している。

26号井戸 87号土坑南端部を切って掘り込まれる井戸でローム、軽石粒を含む暗褐色土および褐色土により埋没する。確認面下1.6m～1.8mの Hr-HP 層を湧水層とし、埋土中には土師器・須恵器の小片が認められている。

3号井戸

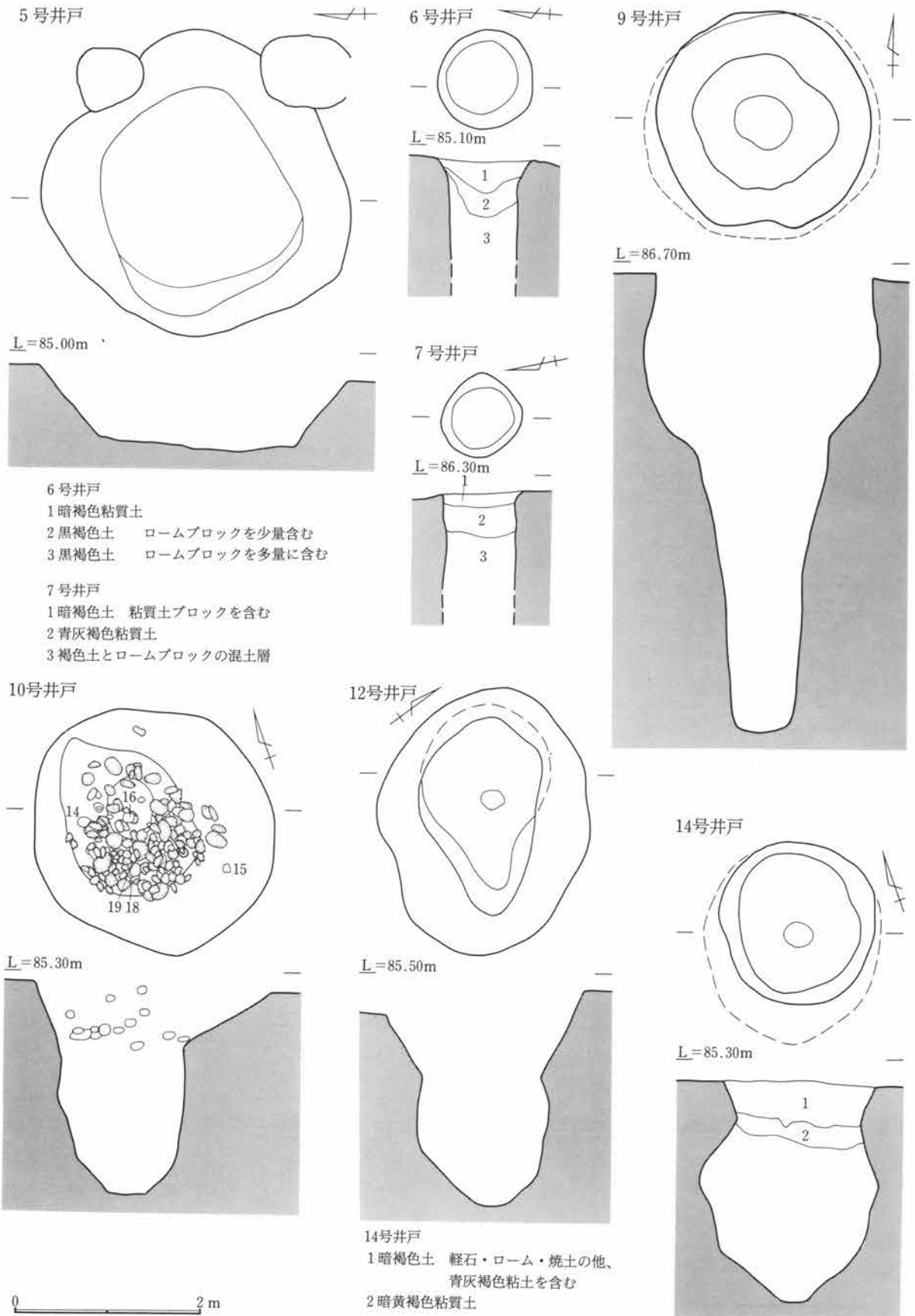


4号井戸



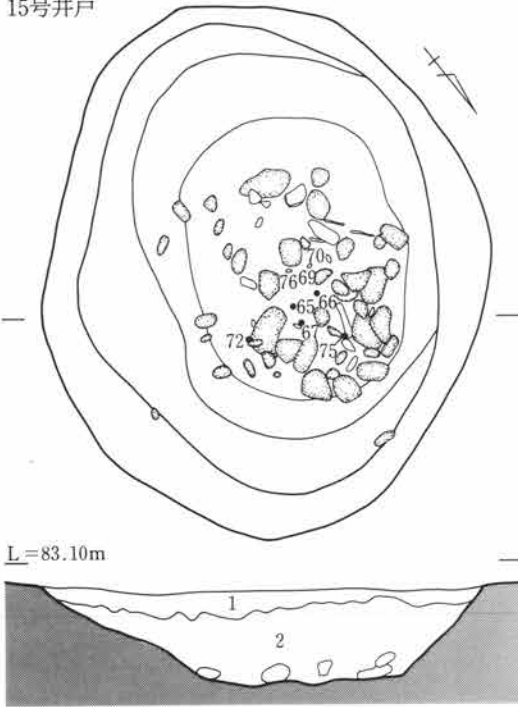
第251図 井 戸

II 発掘調査の記録



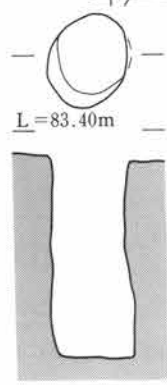
第252図 井 戸

15号井戸



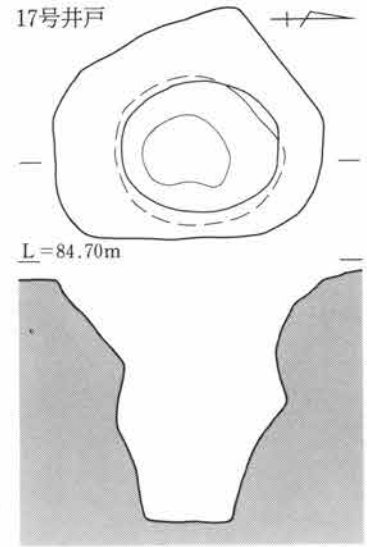
15号井戸
 1 黒色土 軽石を少量含む粘質土
 2 黒色土 軽石を多く含む

16号井戸



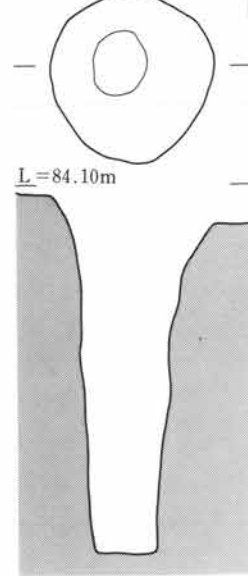
L=83.40m

17号井戸



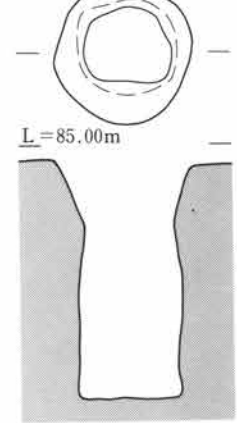
L=84.70m

18号井戸



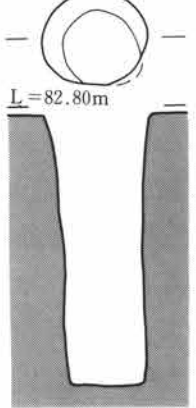
L=84.10m

21号井戸



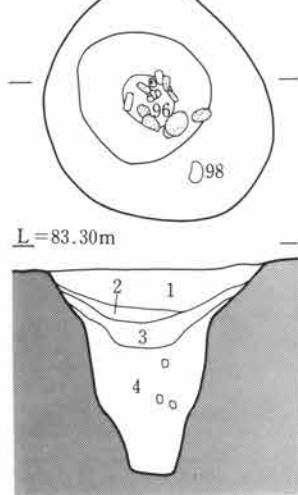
L=85.00m

22号井戸



L=82.80m

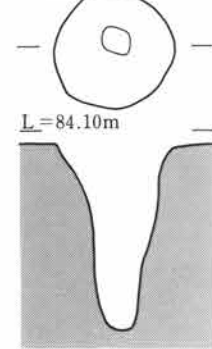
23号井戸



L=83.30m

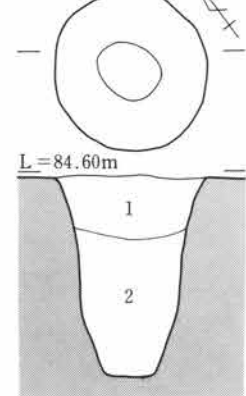
23号井戸
 1 暗褐色土 軽石・炭化物・焼土粒を含む
 2 暗褐色粘質土 粗砂を含む
 3 暗褐色粘質土 粗砂を多量に含む
 4 暗褐色粘質土 黒褐色土のブロックを含む

24号井戸



L=84.10m

25号井戸



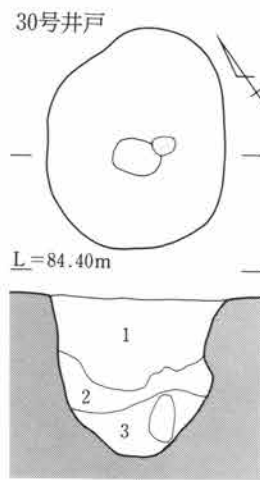
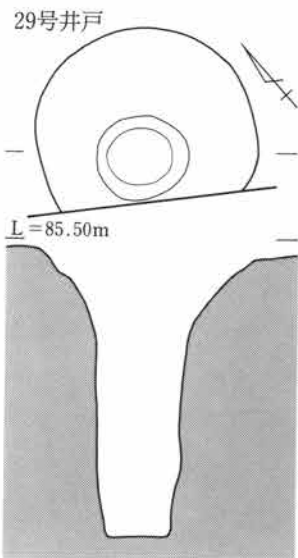
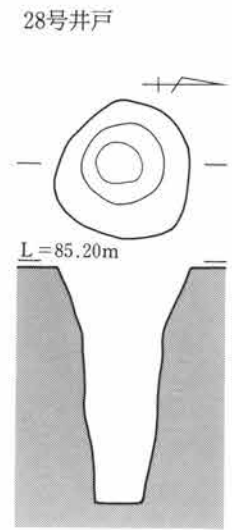
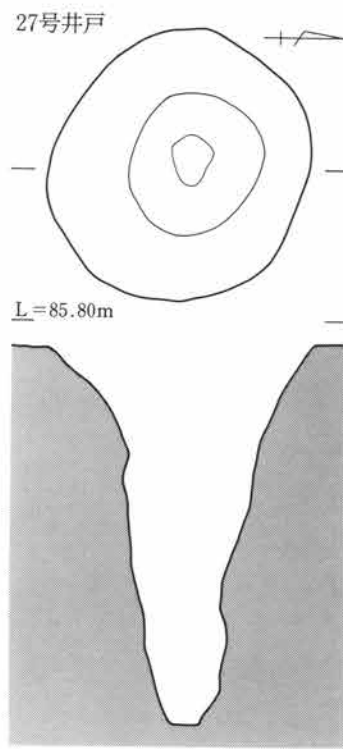
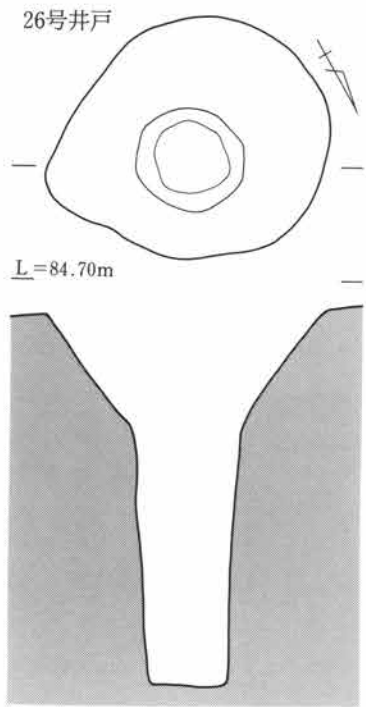
L=84.60m

25号井戸
 1 褐色土 軽石・炭化物を含む
 2 暗灰褐色土 ロームブロックを含む

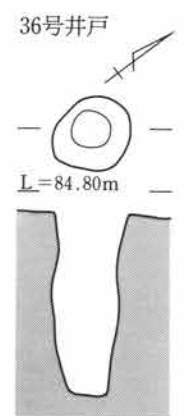
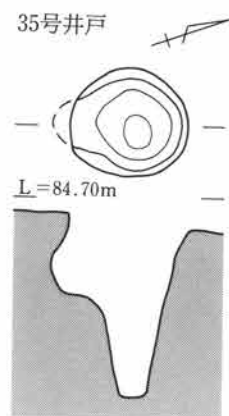
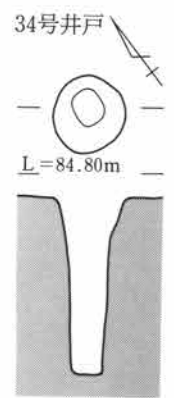
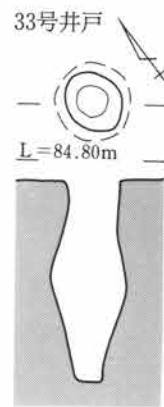
0 2 m

第253図 井 戸

II 発掘調査の記録



- 30号井戸
- 1 暗褐色土 軽石・ロームブロックを多く含む
 - 2 黄褐色土 褐色土ブロックを含む
 - 3 暗褐色土 多量のロームブロックを含む



0 ————— 2 m

第254図 井 戸

27号井戸 他遺構との重複はみられない。ロームを多量に含むとともに灰褐色粘質土も混入する褐色土を埋没土とし、礫20点程度のほか100の内耳土器が埋土から出土している。確認面下1.8mの Hr-HP 層を湧水層とする。

28号井戸 ローム、軽石粒を含む暗褐色土により埋土し、埋土から101の須恵器長頸瓶片が出土している。確認面下1.7mの Hr-HP 層を湧水層とする。

29号井戸 9号住居に南接し、一部調査区外のため未調査がある。ロームを含む褐色土で埋没し、102の須恵器甕片が検出されている。確認面下2mの Hr-HP 層を湧水層とする。

30号井戸 軽石、ロームを含む暗褐色土を埋没土と

し、下層には礫（粗粒安山岩）が流入している。

31号井戸・32号井戸 3号溜井とする。

33号井戸 台地縁辺に位置する。暗褐色土で埋土し底面には砂の堆積が認められる。確認面下1mの褐色灰色火山灰層を湧水層とする。

34号井戸 33号井戸に西接し、ほぼ同様の規模を示す。暗褐色土を埋没土とし土師器小片が数点認められている。

35号井戸 南壁上部が大きく崩落し、確認面下1.4mの Hr-HP 層を湧水層とする。

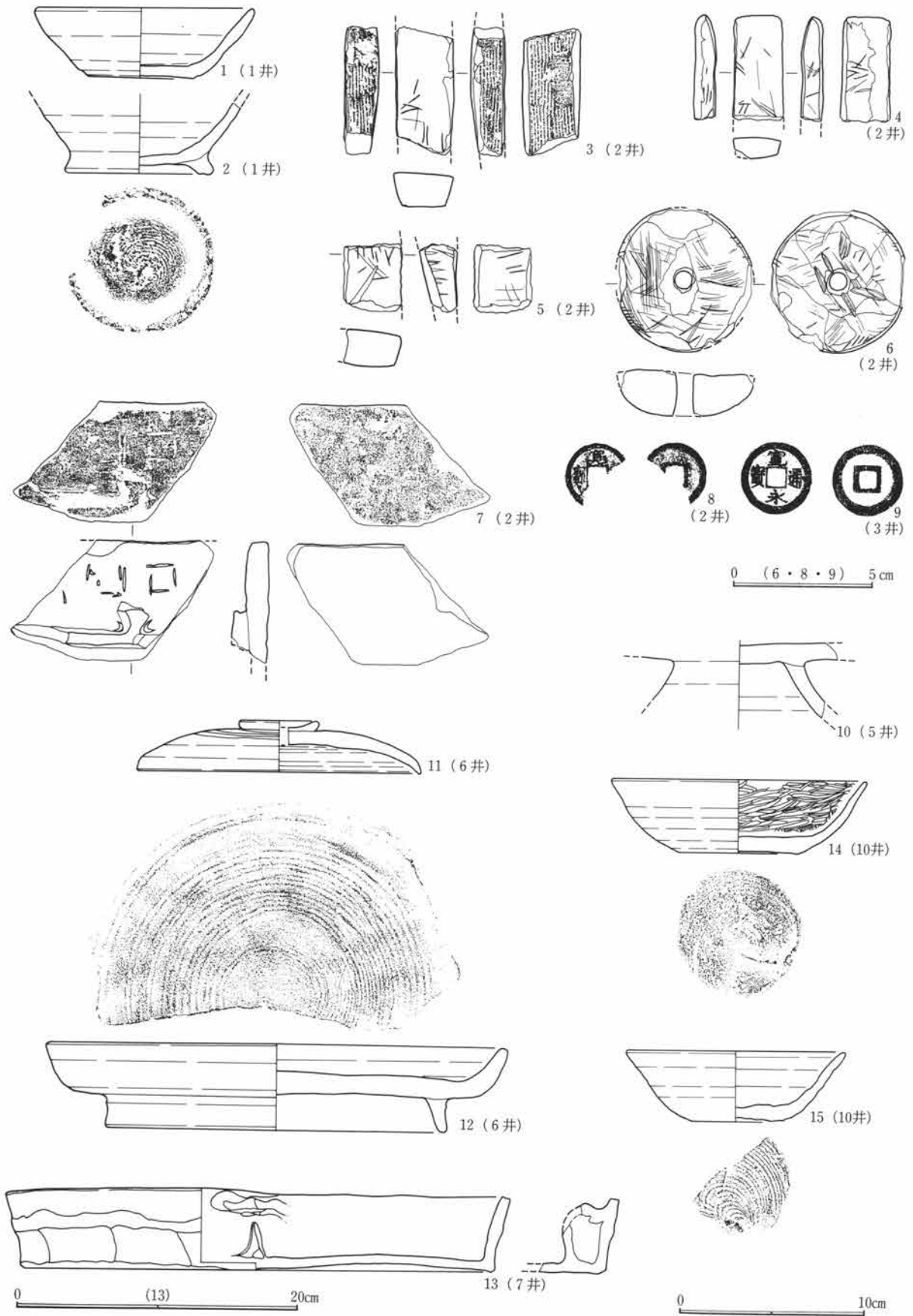
36号井戸 33号井戸、34号井戸に接し、ほぼ同様の規模を示す井戸で、確認面下1mの褐色灰色火山灰層を湧水層とする。埋土内には長頸瓶片がみられた。

第4表 井戸一覧表

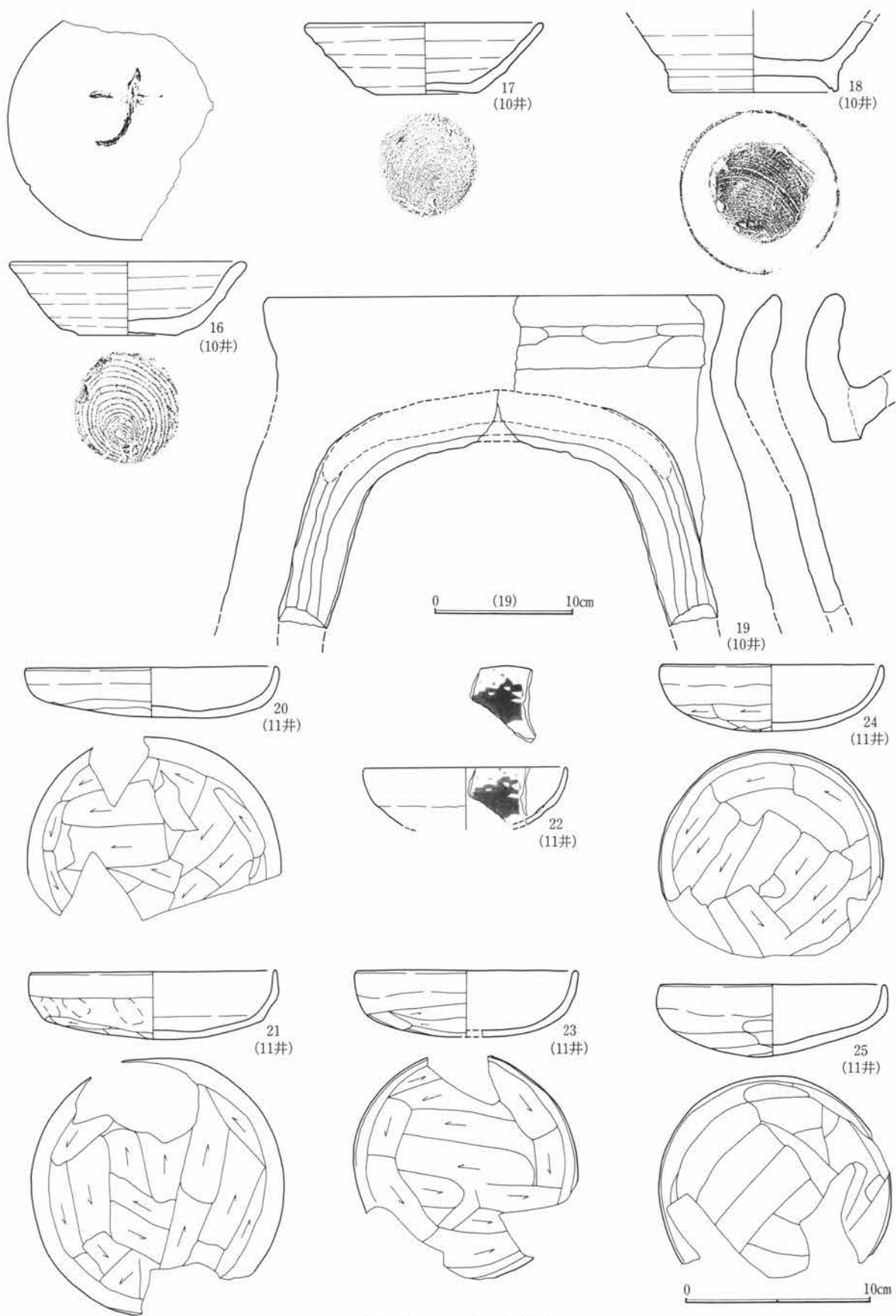
単位：m

番号	位置 (グリット)	形状	規模		残存 深度	遺構		遺物		備考
			確認面	底面		挿図	写真	挿図	写真	
1	Bc・d-4	地山井筒朝顔形	1.92×1.64	0.52×0.45	3.09	第250図	P L 84	第255図	P L 142	8井戸と重複
2	Bb-0, Be-0・1	地山井筒朝顔形	4.40×4.10	0.65×0.56	5.00	250	84	255	142	北東端が調査区外
3	Ax・y-8	地山梯形	3.63×2.43	2.36×1.60	1.48	251	84	255	142	15住と重複
4	Bc・d-10・11	地山井筒朝顔形	3.41×3.00	0.33×0.31	1.86	251	84			24住と重複(住居より古い)
5	Bi-7・8	地山梯形	3.30×3.10	2.21×2.10	0.89	252	84	255	142	1掘立と重複
6	Bf-4	地山井筒円筒形	1.06×1.02	0.78×0.74	1.04	252	84	255	142	32住と重複
7	Ay-23	地山井筒円筒形	0.84×0.77	0.68×0.60	1.03	252	84	255	142	48住と重複
8	Bd-4		0.98×0.86	0.78×0.76	—	250	84			1井戸と重複
9	Au・v-2	地山井筒朝顔形	2.30×2.20	0.60×0.56	4.80	252	85			珪藻・花粉分析
10	Bf・g-10	地山井筒朝顔形	2.65×2.50	0.63×0.48	2.22	252	85	255・256	142	16溝と重複
11	Bo・k-17~19	地山井筒朝顔形				268・269	90	256~259	143・144	1号溜井
12	Bg-3・4	地山井筒朝顔形	2.71×2.27	0.26×0.20	2.25	252	84	260	144	4溝と重複 欠番
13										
14	Bg-10・11	地山井筒朝顔形	1.73×1.63	0.31×0.26	2.31	252	85			
15	Ci・j-3・4	地山梯形	4.23×3.62	2.25×1.75	0.82	253	85	260	144	
16	Bp-15	地山井筒円筒形	0.77×0.62	0.65×0.60	1.62	253	85			
17	Bj・k-6・7	地山井筒朝顔形	2.17×1.83	0.71×0.52	1.91	253	85			70住と重複
18	Bq-17・18	地山井筒朝顔形	1.37×1.29	0.54×0.44	2.84	253	86	262	145	
19	Bp-17	地山井筒円筒形				270	86	261・262	145	2号溜井
20	Bp-17	地山井筒円筒形				270	86	261・262	145	2号溜井
21	Bn-22・23	地山井筒円筒形	1.13×1.11	0.68×0.59	1.89	253	86			
22	Ci-2	地山井筒円筒形	0.85×0.76	0.66×0.59	2.17	253	86			
23	Bx-24, By-23・24	地山井筒朝顔形	1.98×0.48	1.05×0.40	1.64	253	86	262	145	
24	Cf-11	地山井筒円筒形	0.97×0.93	0.26×0.20	1.48	253				
25	By-7		1.29×1.23	0.52×0.41	1.60	253	86	262	146	
26	By・Ca-7	地山井筒朝顔形	2.32×1.91	0.56×0.56	2.98	254	86			87土坑と重複
27	Bb-16	地山井筒朝顔形	2.15×1.98	0.40×0.33	3.01	254	87	262	146	
28	Bn-O	地山井筒朝顔形	1.12×1.10	0.38×0.33	1.88	254	87	262	145	
29	Bl-O	地山井筒朝顔形	— × —	0.53×0.47	2.30	254	87	262	146	南西端が調査区外
30	Bu・v-0, Bu-1		1.77×1.43	0.39×0.28	1.30	254	87			
31	Cd-9	地山井筒円筒形				271	91			3号溜井
32	Cd-9	地山井筒円筒形				271	91	262	146	3号溜井
33	Cd-7	地山井筒円筒形	0.53×0.45	0.26×0.24	1.60	254	87			
34	Cc-7	地山井筒円筒形	0.62×0.57	0.29×0.24	1.41	254	87			
35	Cb-9	地山井筒円筒形	0.93×0.85	0.27×0.22	1.46	254	87			
36	Cc・d-7	地山井筒円筒形	0.67×0.56	0.30×0.30	1.46	254	87			

II 発掘調査の記録

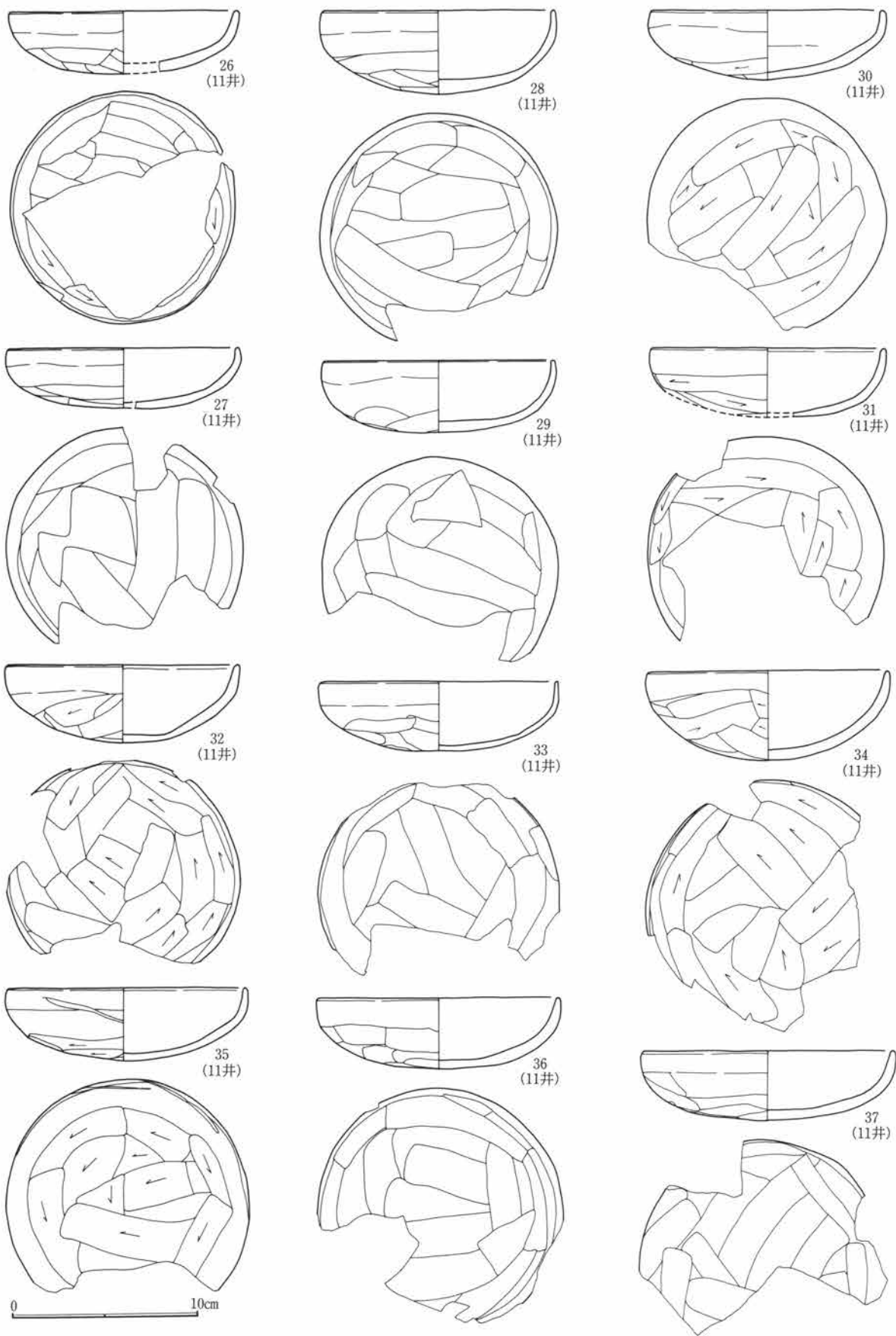


第255図 井戸出土遺物

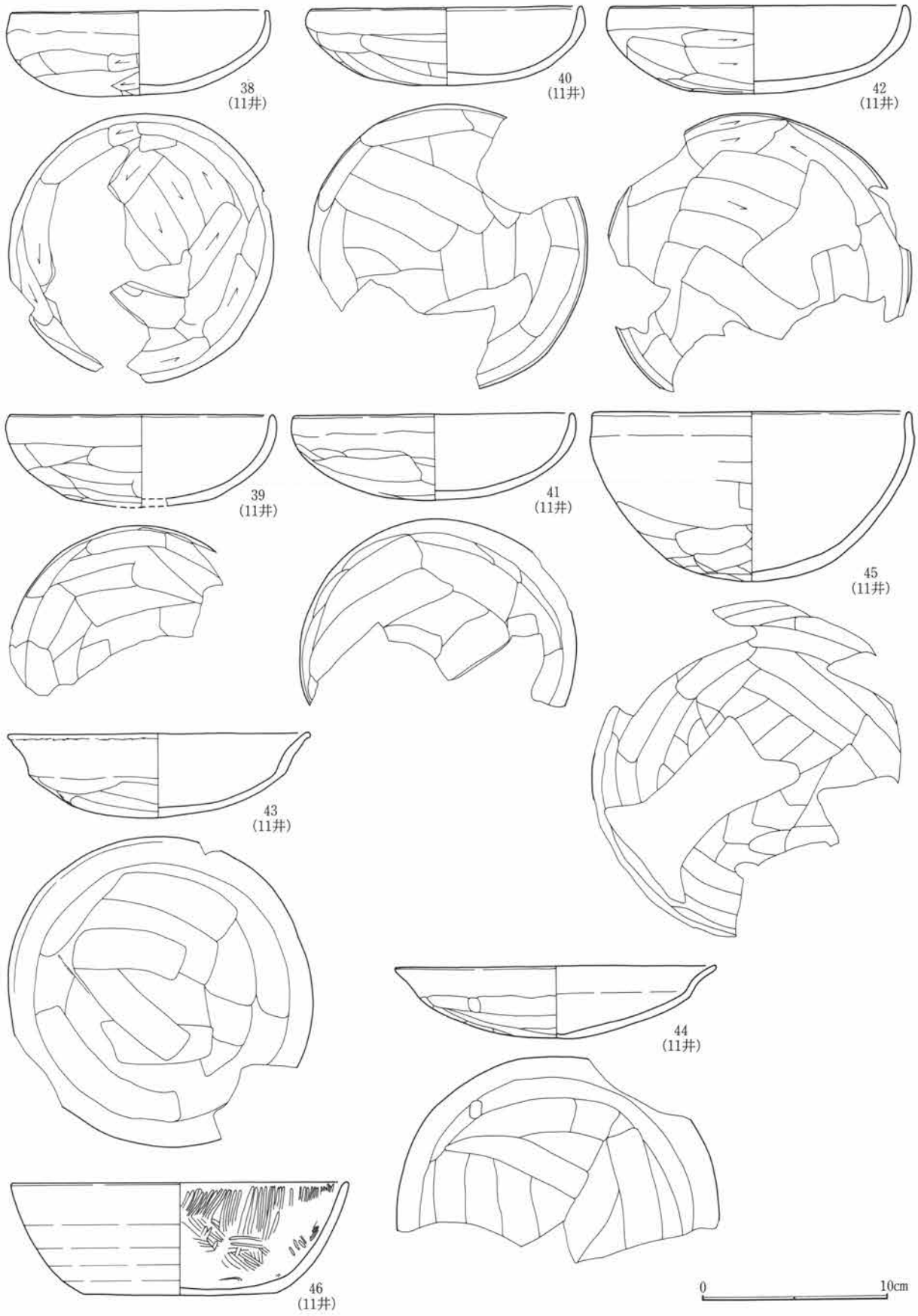


第256図 井戸出土遺物

II 発掘調査の記録

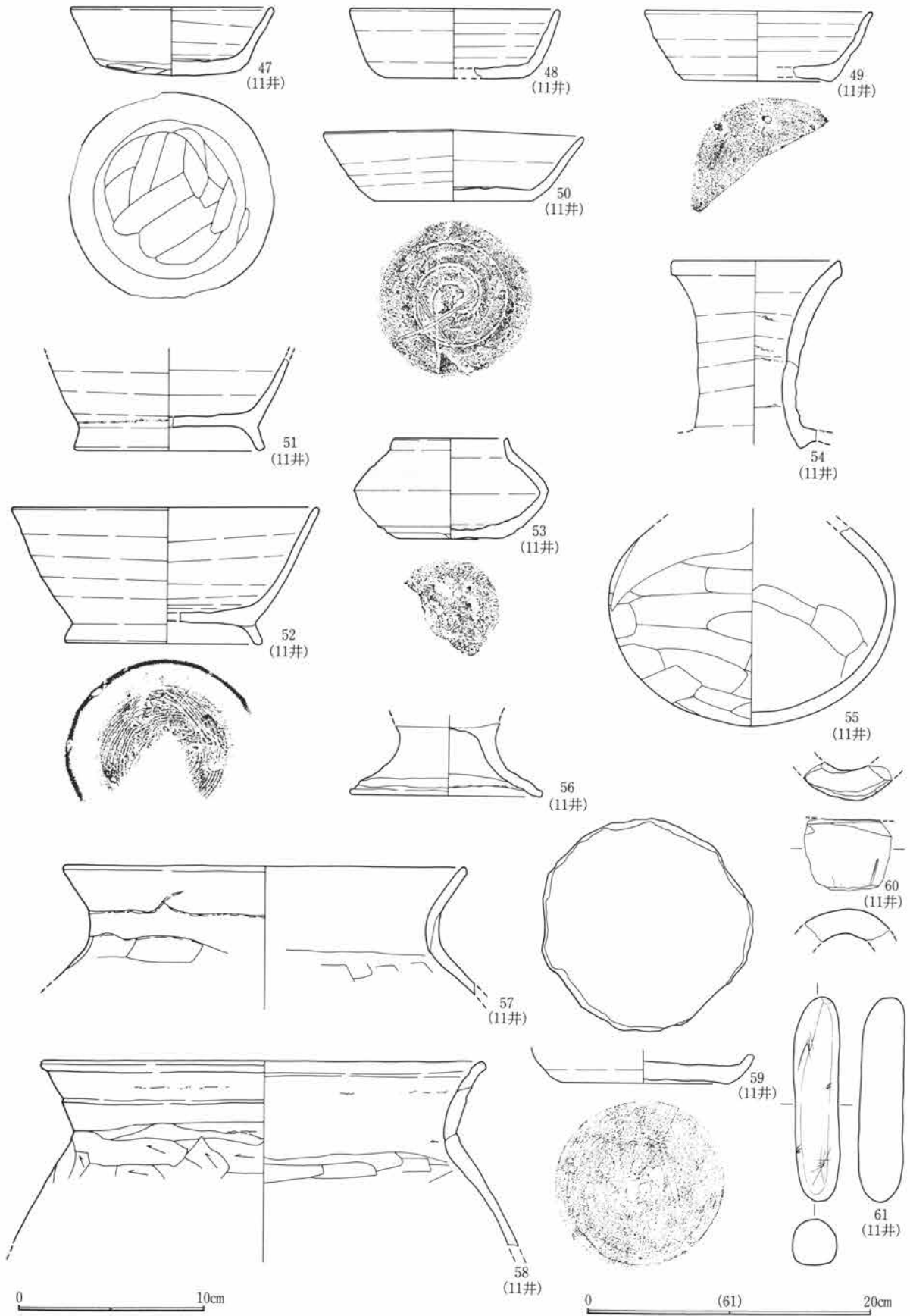


第257図 井戸出土遺物

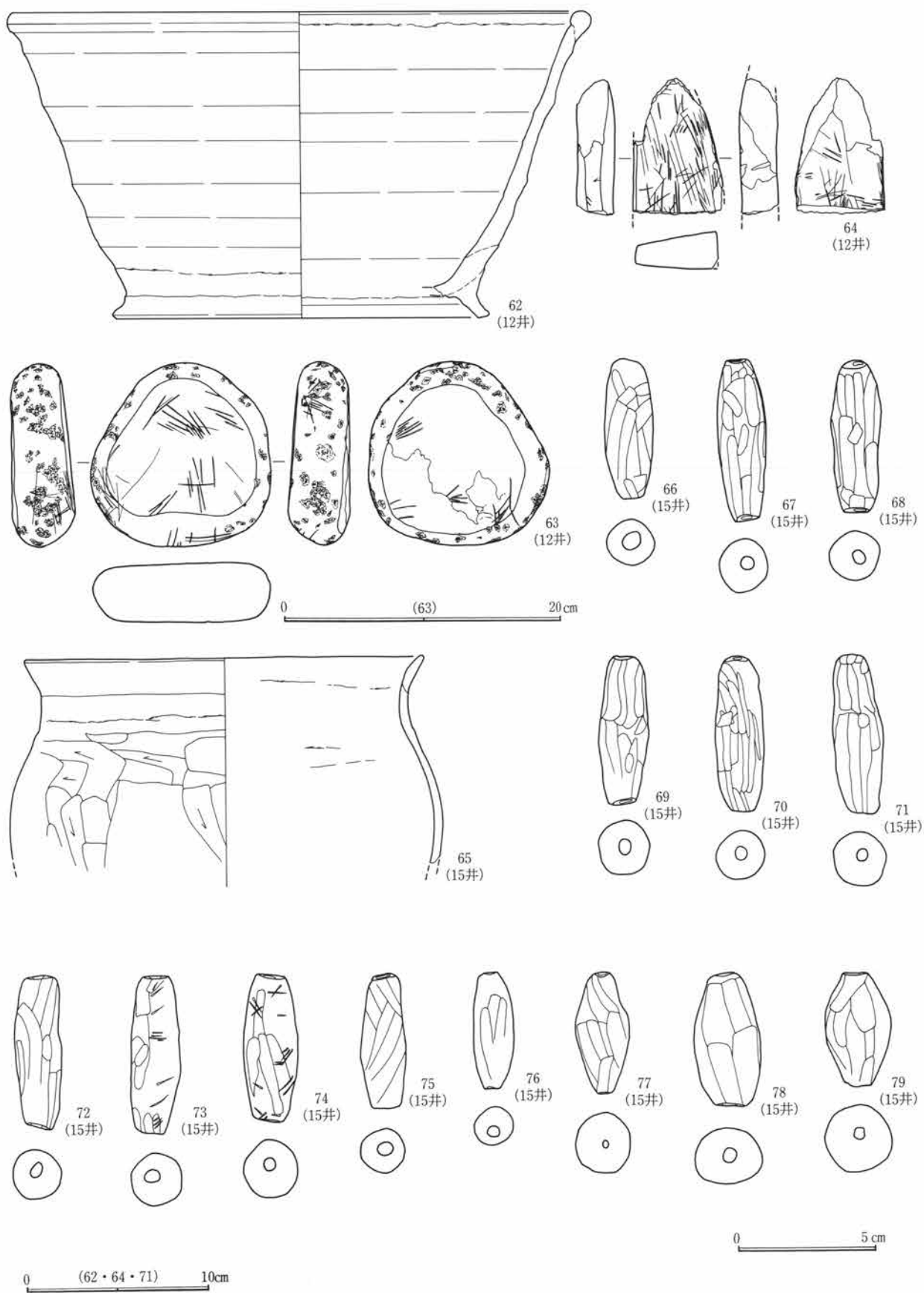


第258図 井戸出土遺物

II 発掘調査の記録

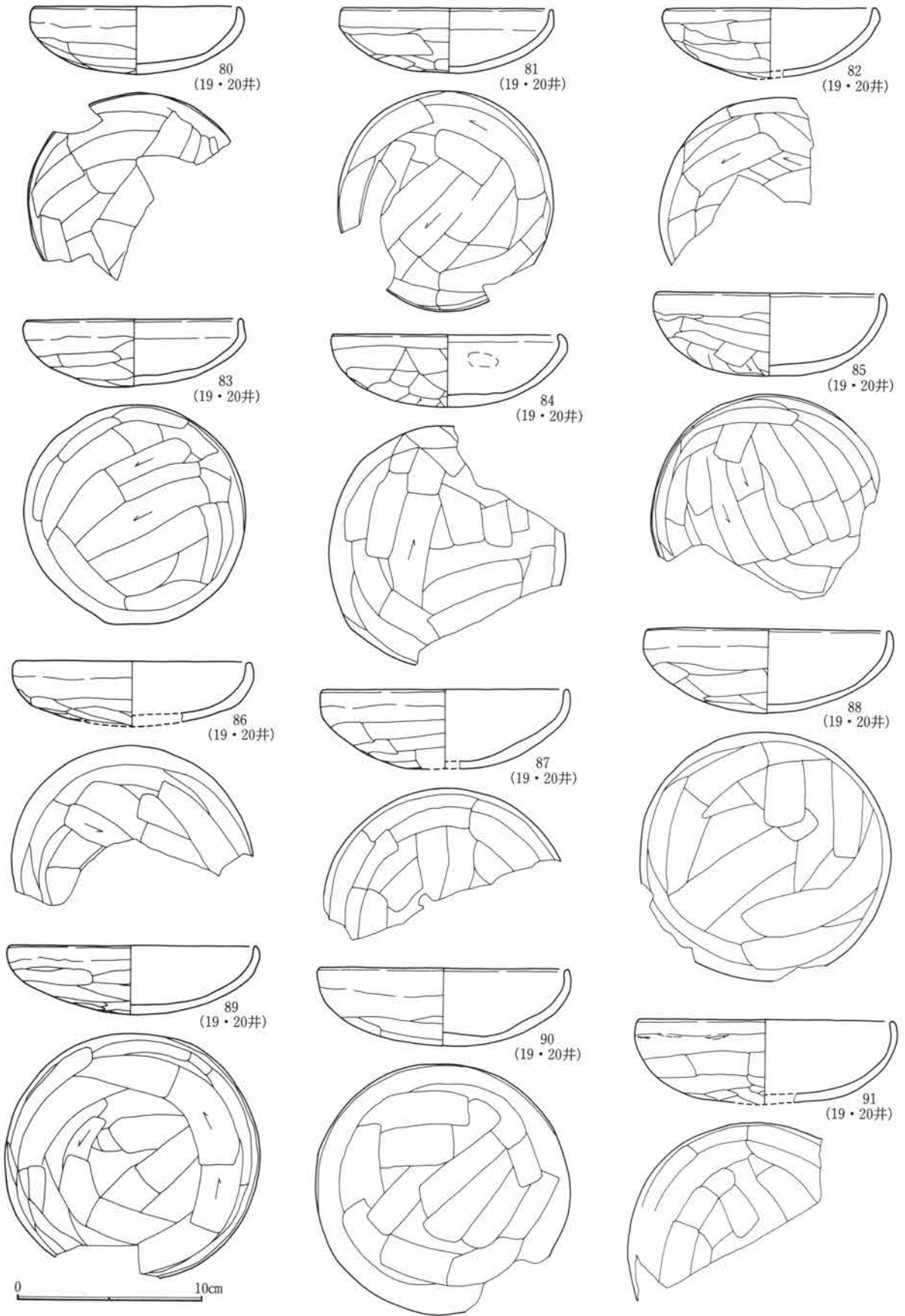


第259図 井戸出土遺物

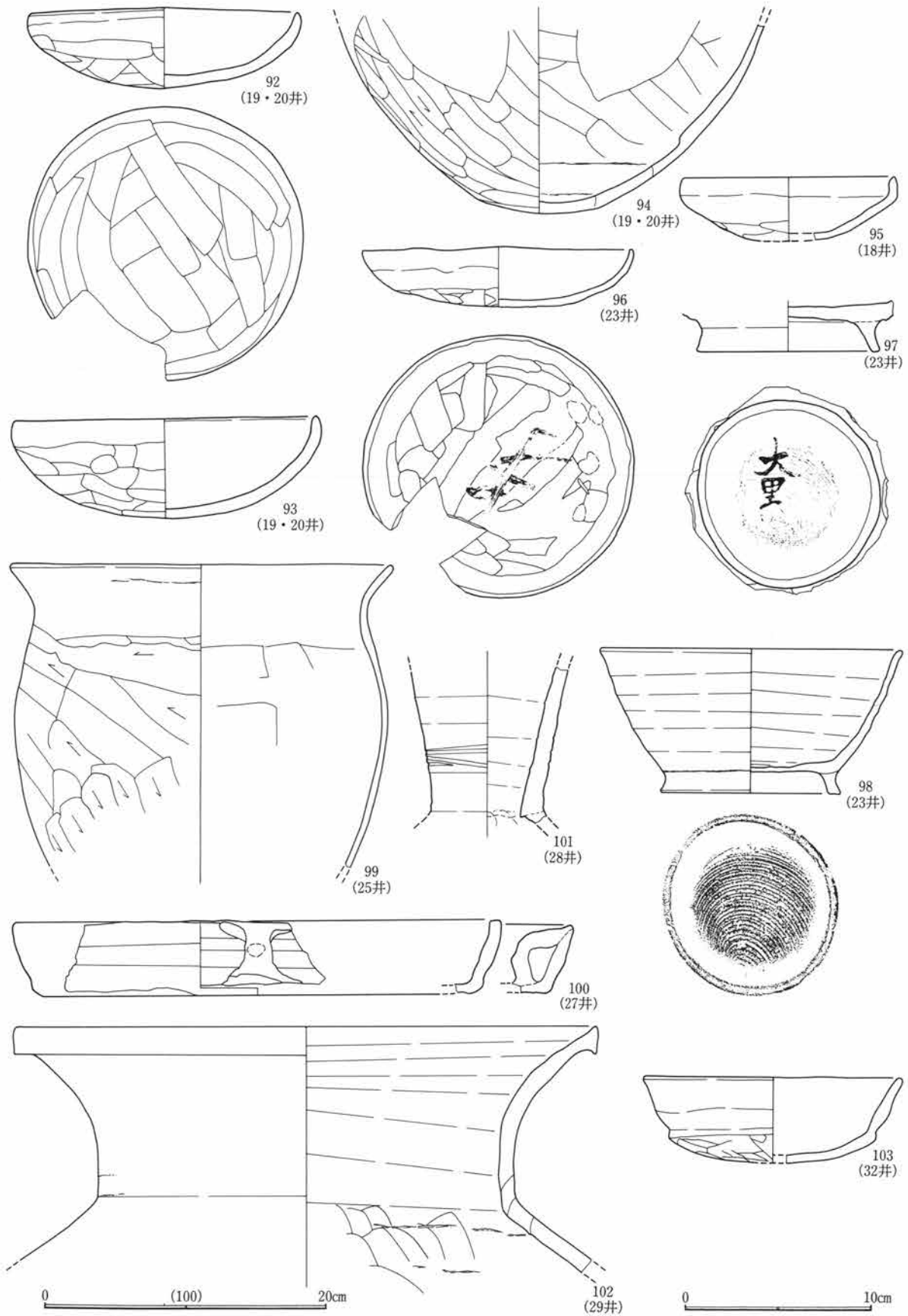


第260図 井戸出土遺物

II 発掘調査の記録



第261図 井戸出土遺物



第262図 井戸出土遺物

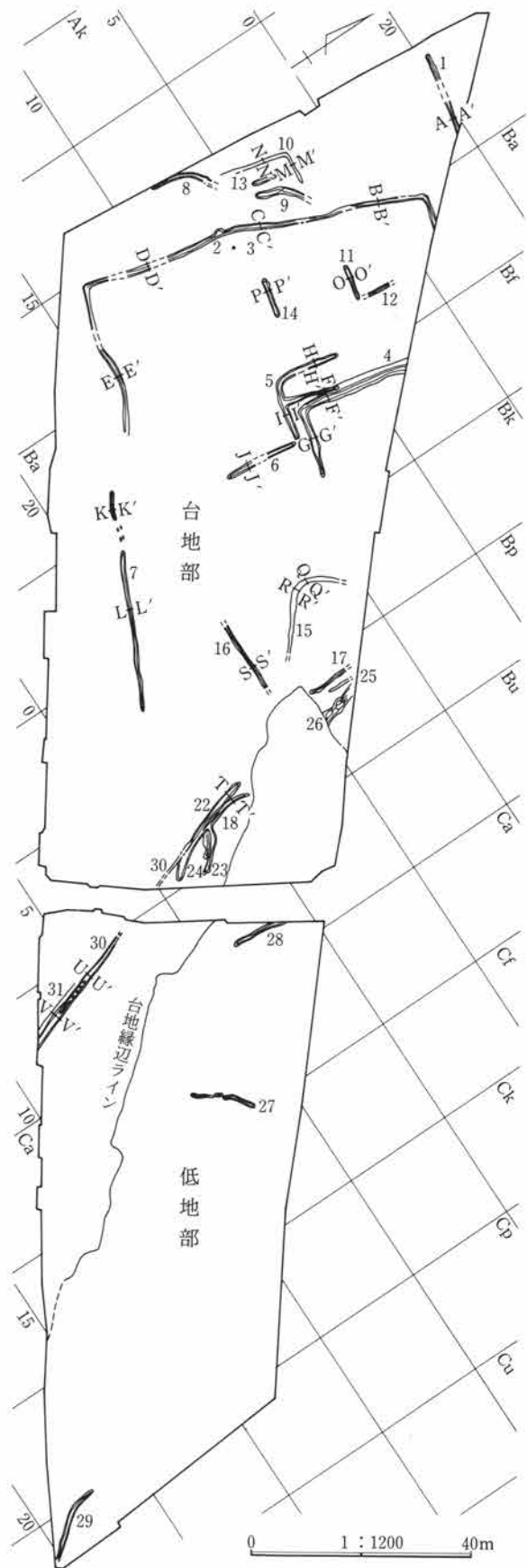
II 発掘調査の記録

(8) 溝

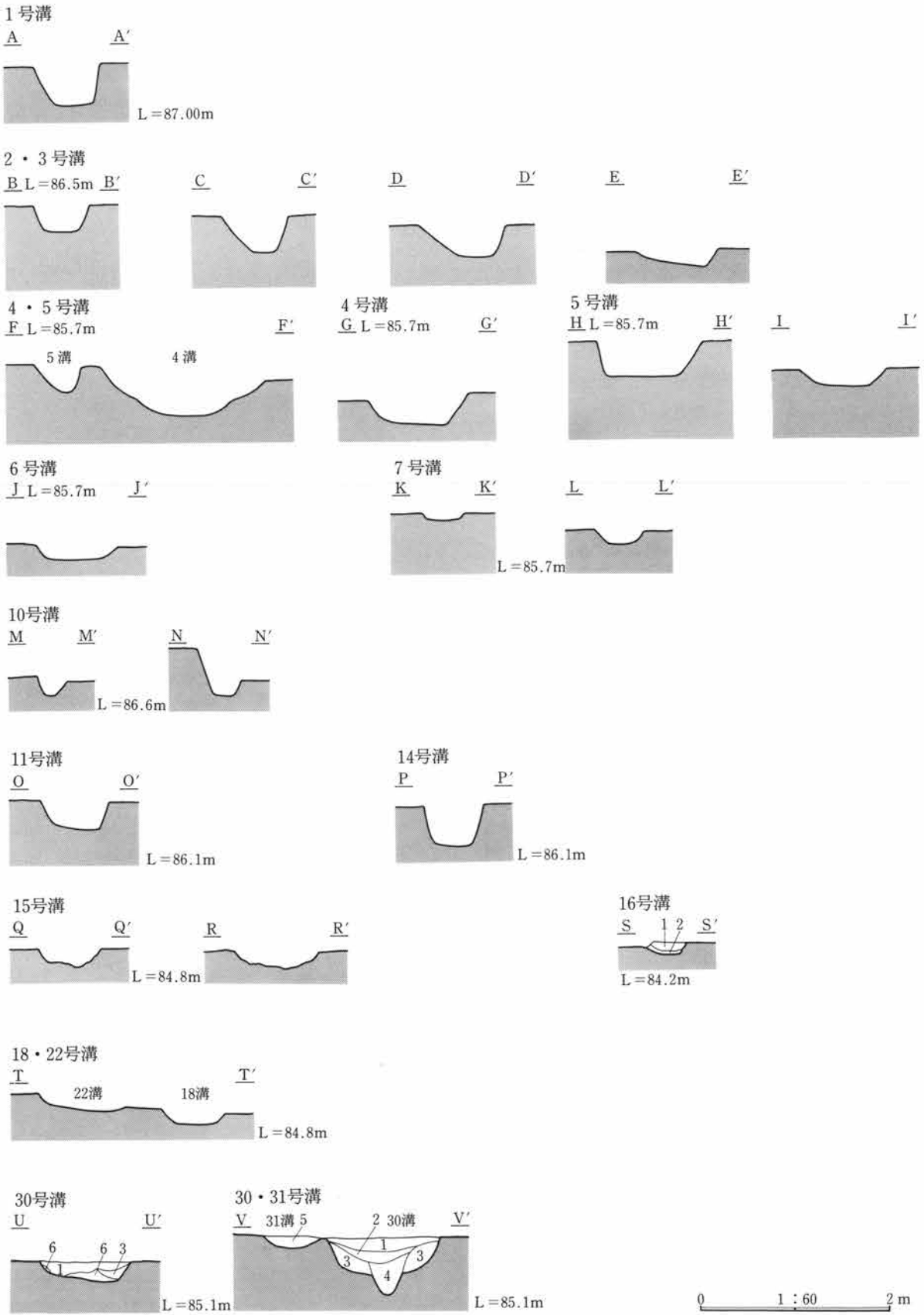
溝として確認された遺構はほぼ調査区全域におよんでいる。この確認状況については、右に示す位置図のとおりであり、遺構番号でみると1号溝～31号溝となっている。この遺構番号は発掘調査の過程で付された番号であるため結果的に重複もみられやや複雑な面もあるが、遺構図面および量は少ないものの出土遺物などこの遺構番号で記録してあることからこの報告に際しても変更せずそのまま使用している。なお、19号溝は欠番であり、20号溝は2号溜井に伴う溝となるためこの項では除外となっている。今回調査した溝は住居などの他遺構との重複も多く、同時に近年の耕作に伴う攪乱も受けており、検出時では確認深が浅い例をはじめ部分的に遺失する場合もみられることなど、調査時の遺存状況はあまり良好ではなかった。そのため部分的確認となる溝が大半を占め、全体の走行もしくは時期などに関し不明な点も含まれる。

確認された溝群をみると、位置および形態などから次のA～Cの3群にまとめることが可能であるとみられる。台地部に位置し、ちょうど谷頭を囲むように存在する方形の区画を構成するA群、台地上で谷頭を挟んで南北方向に走行するB群、低地部に検出されているC群の3群であり、以下このような溝群ごとにその概要を報告していく。

A群の溝 調査区西半部にあたる溝群を一括しておきたい。グリッドラインでみるとBqライン以西に存在する溝群で、1号溝～16号溝がこれに該当する。とくに2・3・7号溝は部分的に途切れもしくは未検出をもつものの連続して方形区画を示す溝とみられる。この方形区画は西辺、南辺およびほとんどが調査区外になる北辺の一部が検出されたが、東辺については南東隅部を含め未確認である。この東辺溝が上層の掘削により遺失しているのか、当初から存在しなかったかについての調査所見は得られていない。規模は溝幅40cm～80cm、深さは数cm～40cm前後とやや不規則で、梯形断面を呈しローム粒を含む暗褐色土を埋没土とする。西辺溝では6号住居、48号



第263図 溝位置図



第264図 溝

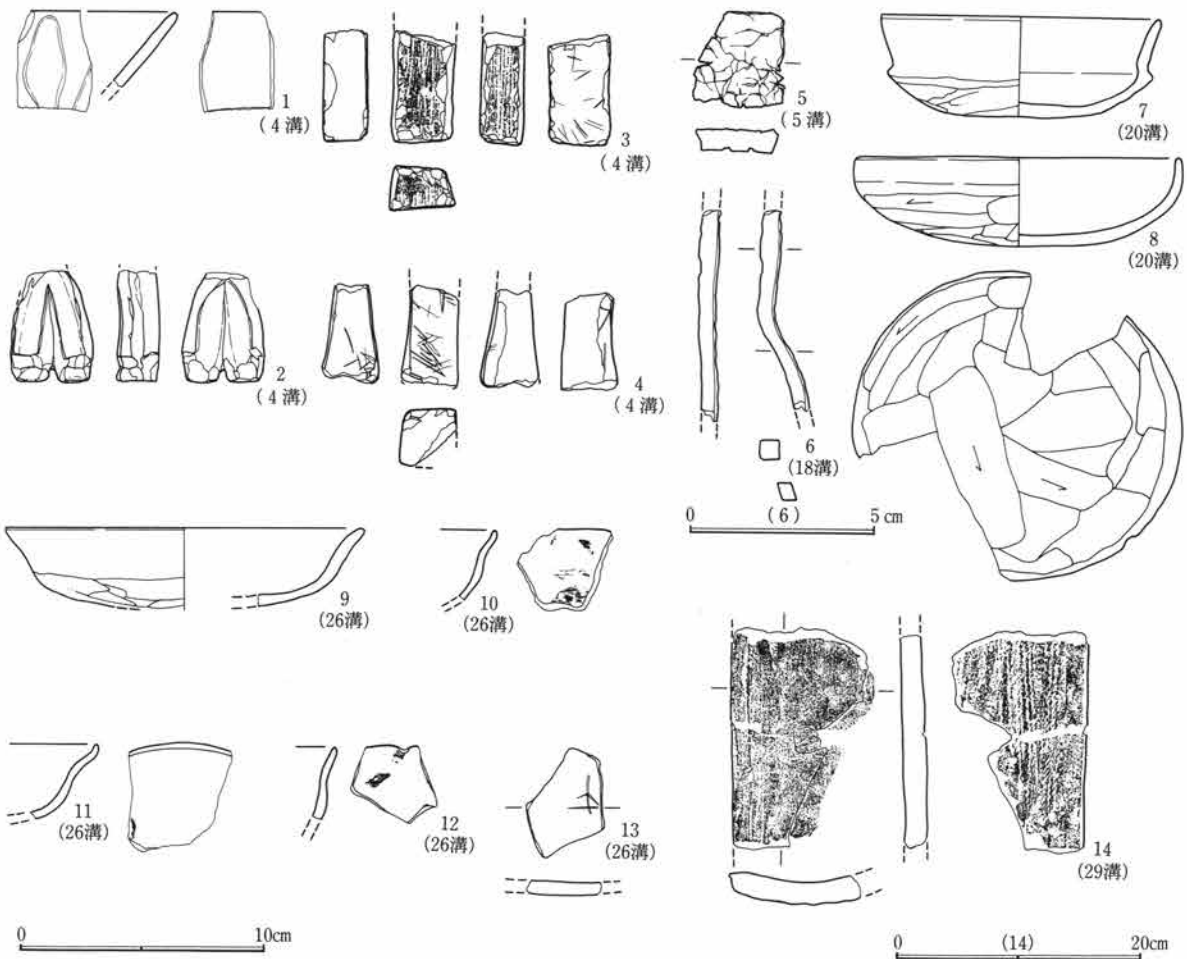
II 発掘調査の記録

住居、51号住居と重複する。6号住居および51号住居では住居埋没土を溝が切っているため明確に新旧関係が示されるが、48号住居に関してはカマド端部に重複部があり、両者の時間的關係が把握しにくい状態であったがやはり溝が新しいものと考えられる。南辺溝では2・3号溝と7号溝は途切れるが、この部分は地形がわずかに低くなっている部分にもあたり、さらに溝が区画内側である北側に弧状に湾曲ぎみに曲がっている。方形区画の形状をみると北西・南西隅は直角を示さずに東側にむかって開きぎみとなり、規模は西辺が64m、南辺が確認長で75mでちょうど谷頭に面した場所に位置している。埋土内からは土師器片、須恵器片などもみられるが、溝に伴うような出土状態をもつ遺物の検出は認められない。このほか4号・5号・9号・10号・11号・12号溝なども部分的ながら方形隅の形状が認められて

いる。遺物は4号溝から1の青磁片、2の土製人形、3・4の砥石、5号溝から5の鉄製品が埋土内から検出されている。

B群の溝 台地上から谷頭をほぼ南北方向に直線的に走行する溝群で17号・18号・22号・26号・30号・31号溝がこれに含まれる。各溝は谷頭を横断するように走行するが、低地部分では確認されていない。なお、低地部南側に位置する溝群は地形に沿って北側、低地部に向かって傾斜している。埋没土はローム、軽石粒を含む黒褐色土を主としている。遺物は18号溝から6の釘、26号溝から9～13の土師器片が出土している。

C群の溝 低地部で確認された遺構で27号・28号・29号溝がある。幅30cm、深さ10cm前後の規模で走行もそれぞれ不規則で部分的検出にとどまる。29号溝から14の瓦片が出土している。



第265図 溝出土遺物

(9) 埋没水田

低地部には上層から浅間Bテフラ (As-B)、榛名一渋川テフラ (Hr-S)、浅間C軽石 (As-C) の3層のテフラの堆積が確認されている。各テフラ層は間層を挟み安定した堆積状態を示しており、それぞれの埋没面について発掘調査を実施している。同時に埋没水田の確認を目的としたプラントオパール分析もおこなっている（「IV-1 プラントオパール分析」を参照）。

a. As-B 下水田 (第266図 P L. 88・89)

この部分の基本的な土層は第266図に示すとうりであり調査の結果、As-B 下の5層上面に埋没水田が検出されている。

低地部の発掘調査は1層の客土を掘削した後、4層 (As-B) 上面まで実施し、さらにこの軽石層を除去しながら水田面の検出を行っている。4層は低地部全域に広がり、多少前後はあるが10cm~20cm程度の層厚をもち、5層を直接覆っている。調査区内である低地部分は谷頭を含む低地南半にあたり、さらに北側および東側に連続している。このため地形的みると谷頭である西側から東側に向かって平均1度、台地縁辺である南側から北側に向かって平均1.5度の傾斜面を呈している。検出された水田はこのような地形に伴う造成が行われており、畦による各区画もほぼ等高線に沿った形状を示しているといえる。水田の検出状況をみてみよう。水田域は低地部全域におよぶものとみられ、前記のようにAs-Bにより被覆されているが、畦の残存状態は良好とはいえない。比較的状态の良好な北西側で水田面と畦の比高差が10cm前後、南東側では数cm程度とその痕跡

が確認される程度でさらに東側南端部ではほとんど平坦となっているため、畦の確認はできていない。また畦の残存状態によるものか水口についても検出に至っていない。検出された水田区画は計87面みられるが、畦によって区画され面積の計測できる水田区画は67面である。これらの区画は全体的に小規模であり最大38㎡、最小4.5㎡を計測し、平均では17㎡となる。これは地形に沿って傾斜面に応じた区画が行われた結果であると考えられる。東端部では東西方向の畦が湾曲ぎみとなっているが、これも地形に沿った区画を示したものと見える。また谷頭に接する西端部では下層に存在する遺構（温め状遺構）に伴うくぼみに即した区画が認められ、やはり地形的な形状にあわせた水田区画となっている。この水田に伴う用水については関連する遺構が調査区内で検出されていないため不明であるが、地形的には谷頭北側の調査区外に用水に関する施設が存在するものと思われる。なお東接する二之宮洗橋遺跡でもこの水田と同一のAs-B下水田が検出されている。

b. 6層の水田

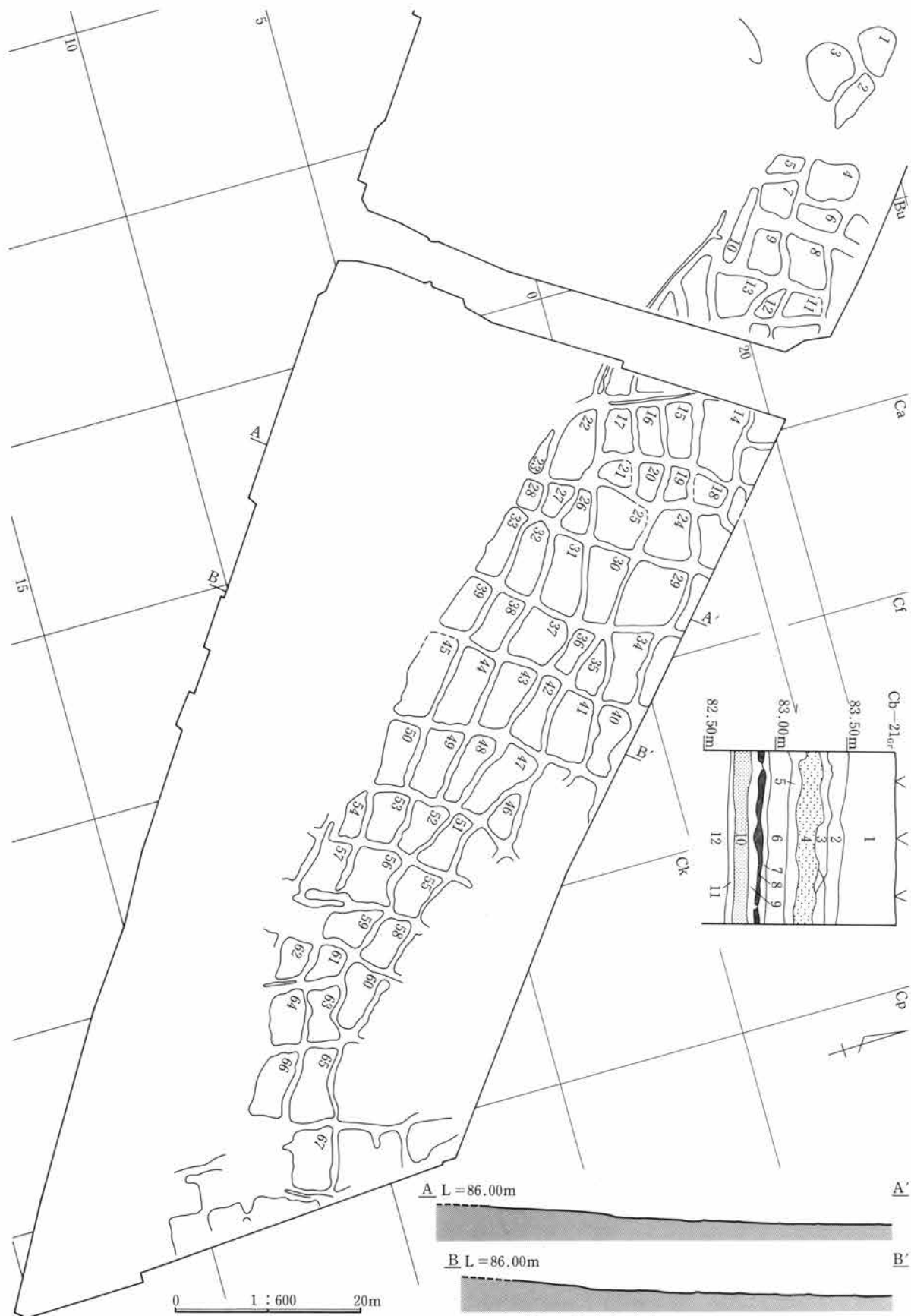
前記As-B下水田が確認された5層の下層である6層にも水田が存在することは、台地縁辺にある1号溜井およびこれに伴う温め状遺構の検出から推定され、プラントオパール分析でもこのことを裏付ける結果も得られている。この層についても水田面の検出に努めたが、畦など明確な遺構は確認できなかった。このことから考えるとHr-S降下後に開田され、以降継続的な水田耕作が行われていたものと考えられる。

第5表 水田区画一覧

区画	面積	区画	面積	区画	面積	区画	面積	区画	面積	区画	面積
1	14.7	11	7.8	21	8.0	31	27.0	41	26.4	51	15.9
2	11.1	12	5.2	22	26.7	32	22.8	42	19.2	52	16.5
3	20.7	13	18.3	23	4.5	33	17.7	43	23.4	53	17.1
4	18.8	14	31.8	24	21.0	34	24.3	44	29.4	54	8.7
5	6.3	15	15.3	25	25.5	35	11.4	45	33.6	55	17.4
6	9.3	16	12.0	26	9.6	36	9.3	46	9.3	56	23.4
7	12.0	17	12.9	27	6.9	37	24.3	47	26.4	57	18.6
8	18.6	18	9.3	28	6.0	38	18.6	48	16.2	58	14.7
9	13.5	19	6.4	29	38.1	39	17.7	49	23.4	59	15.9
10	9.3	20	8.7	30	25.8	40	18.6	50	21.0	60	17.7

単位：㎡

II 発掘調査の記録



第266図 As-B下水田

(10) 溜井

溜井とは水田への用水確保を目的として掘削された井戸であり、湧水を取水・貯水するための湧水・貯水部とその水を水田に供給するための導水部という構造をもつ灌漑施設である。

二之宮谷地遺跡の調査ではこのような溜井が3基確認されている。いずれも台地縁辺に位置するが、1号溜井と2号溜井は谷頭付近に造られ、3号溜井は両溜井から南東へ80m程離れた台地中央部付近の縁辺に存在する。さらに1号溜井と2号溜井は接して検出されているが、その時間的関係を示す調査所見は得られなかった。

1号溜井 (第267～269図・P L90)

湧水・貯水部は8m×6m、深さ60cmの楕円形の掘り込みとその中央に掘削された井戸から成る。この井戸は調査中に11号井戸として記録しており、遺物類を含め報告に際してもこの遺構名称を使用しておりやや繁雑となってしまったが、1号溜井に伴う湧水部としての井戸であることを改めて報告しておく。規模は径2.5m、深さ2mで、上端から1.6m下の青灰色火山灰層を湧水層とする。導水部はこの掘り込みの北端部に幅80cm、深さ10cmの溝が付設され低地部へ給水する構造となっている。さらにこの溝が接する低地内には「コ」字状の平面形態をもつ温め状遺構も検出されているが、この遺構も1号溜井との位置関係などから判断してこれに伴う灌漑施設の可能性も考えられる。

湧水・貯水部の構造は次のとおりである。貯水部である掘り込みは傾斜方向に長軸をもち、底面はほぼ平坦であるがこの傾斜に沿った面を形成する。中央に掘り込まれる井戸の周囲には60cm前後の間隔をあけ幅30cm～1m、深さ10cmの周溝が同心円状に巡る。この周溝は外径5m程度の円状に配置されるが、全周はせず導水部に接する部分で2.4m程の間が途切れている。さらにこの周溝および井戸の間の平坦面に径5cm～15cmの偏平円礫が敷き詰められ、石敷部を形成している。この石敷は南側および東側にそれぞれ1m程度の範囲で2カ所認められ、全面にお

よぶものではない。東側の石敷は周溝と接していないが、南側の石敷については周溝上におよんでおり、この部分からみると周溝と石敷は時間的差異をもつことになる。また周溝に沿って径30cm～50cm、深さ40cm前後の小穴が6カ所認められている。配置はやや不規則で規格性に乏しく、小穴内からも性格を推定するような調査所見は得られていないが、それぞれについて良好な掘り方をもち、中央の井戸を囲むように位置する点からみるとなんらかの上屋構造の存在も想定される。このような中央の井戸、石敷および周溝などに南接して径1m、深さ1.2mの円筒形の掘り込みが検出されている。形態から井戸とも考えられたが、掘削深度が浅く底面が湧水層に達していない可能性もあり井戸としての機能には問題も生じるため性格は不明であるが、調査では11号井戸としている中央部の井戸より時間的に古いという所見も得られている。導水部はやや蛇行しながら、台地縁辺の傾斜に沿って付設され低地へ給水される構造となっている。出土遺物は11号井戸とした部分を中心に埋没土から第256図～第259図(「(7)井戸」の項)に示す土器類が多量に出土している。多少前後はみられるがほぼ8世紀代の土器が主であり、1号溜井の時期もこれを上限とした近接した時期が考えられる。

1号溜井の導水溝に接して前記のような形態をもつ温め状遺構が検出されている。

この遺構は谷頭付近に位置し、As-B 下水田の耕土下で確認されたもので、同水田はこの遺構の埋没形状を利用した区画ともなっている。北端部が調査区外のため一部未調査となっているが、確認面での推定上端面積約127.5㎡、底面積約105㎡、深さ20cm～40cmを計測し、推定貯水量はおよそ32㎡となる。底面には人頭大を中心として大小の礫が多数認められている。礫は全体に散布し、部分的にはやや集中する傾向もあり、その中では溜井からの導水溝が接する部分に顕著である。構造からみると1号溜井からの給水と低地内の自然湧水などの貯水とともに、温水効果も考慮された“温め”施設としても機能し

II 発掘調査の記録

たものと考えられる。ここに貯水された用水が礫なども利用した貯溜により温水化が計られ、地形に沿って水田部へ懸け流されるという構造を示している。

時期は Hr-S (6世紀初頭) 降下以降、As-B 下水田以前でありこの点からみると、遺構としては未検出であったがプラントオパール分析で確認された6層中の水田に伴う用水施設との位置付けが可能である。温め状遺構の出土遺物は第272図に示すように6世中葉から9世紀代の土器類が含まれており、埋没土中から混在して検出されている。温め状遺構の掘削時期を確定する状況を示しているものではないが、この地点の水田耕作の時期を示すものと考えられる。すなわち6世紀中葉前後に開田され、以後継続的に耕作され1108年の As-B 降下前まで水田として利用されていたことになる。

なお1号溜井(11号井戸)出土遺物は8世紀代を中心としたものであり、このような点から考えると開田時はより小規模な面積で行われ、溜井が掘削されて以降開発域が広がったものといえ、以降用水については1号溜井は使用されなくなるとともに、温め状遺構上まで水田面とし別の用水方法を採用しながら As-B 降下まで継続的に水田耕作が行われることになる。

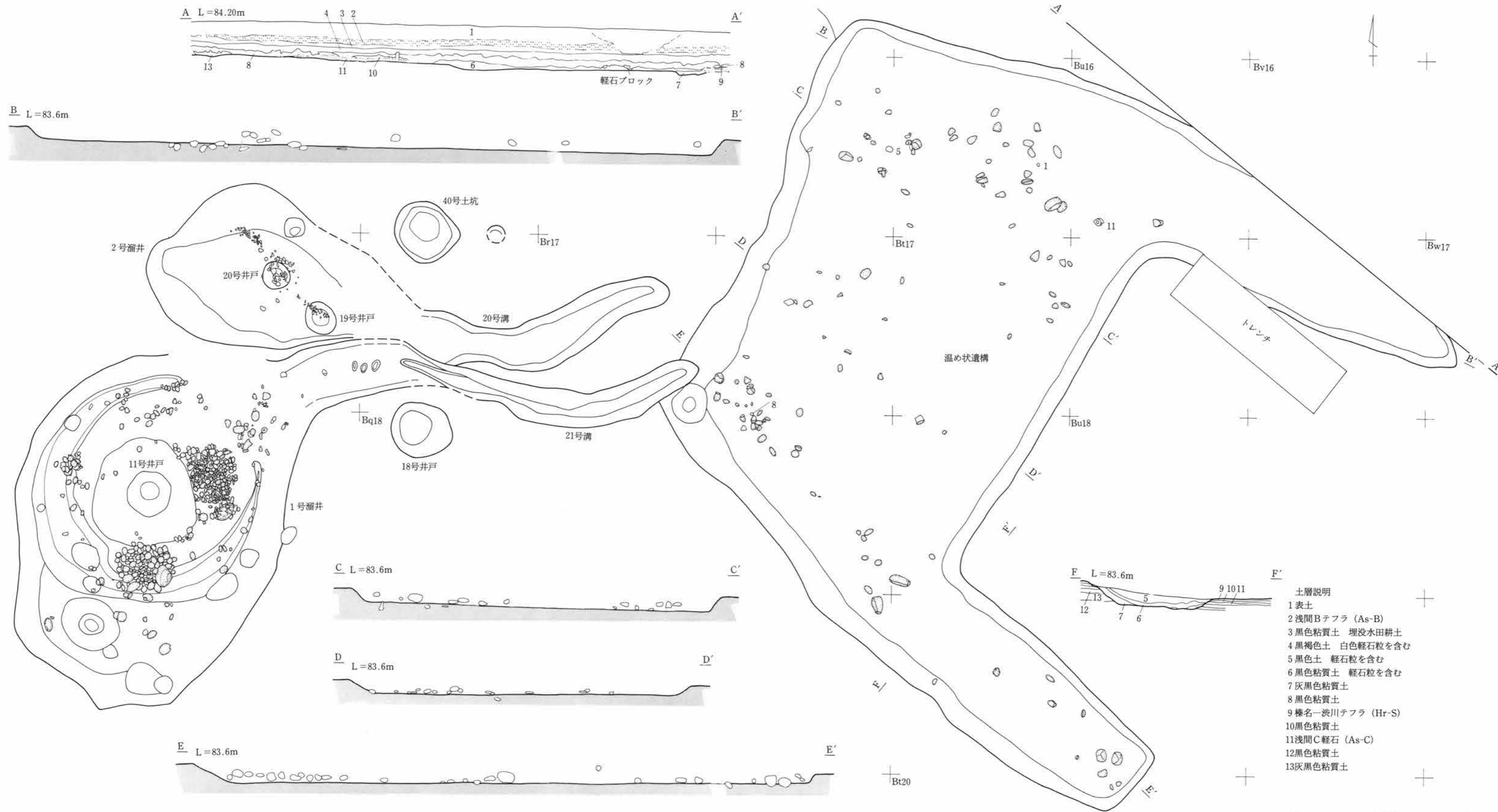
2号溜井(第270図)

1号溜井に北接して検出された楕円形の掘り込みをもつ貯水部、その中央に掘削された湧水部である井戸(19号・20号井戸)および低地に面する東端側に付設された導水部である溝、という構造をもつ溜井である。貯水部は径6m×3.5m、深さ20cm前後の浅い鍋底状断面をとなる不整楕円形を呈している。湧水部としての井戸は2基が認められるが、調査時は東側を19号井戸、西側を20号井戸として記録している。19号井戸は径70cm、深さ1.3m、20号井戸は径65cm、深さ1.2mで井筒円筒形を呈し、2基とも確認面下1m~1.2mの榛名-八崎火山灰層(Hr-HP)を湧水層としている。この2基は1m程度の間隔をもって並んでおり、暗褐色砂質土を主として自然埋

没している。導水部である溝は幅80cm、深さ10cm程度で浅く不明瞭であるが、やや湾曲ぎみに低地部に接している。なお遺物は貯水部埋没土上層に土器片などが流入している。また1号溜井と南接するが両溜井の重複部分がやや不明瞭な検出状態であるため、時間的な関係は同時であるか新旧関係をもつものかを含め確認されていない。しかし、近接した位置に造られるとともに、導水溝もほぼ1号溜井の溝と同様な位置に導水されるような点からみると时期的にも近接した可能性も考えられる。20号井戸埋没土からは第261図80~第262図94の土器器杯が出土しており、この点からも1号溜井と近接した時期が推定できる。

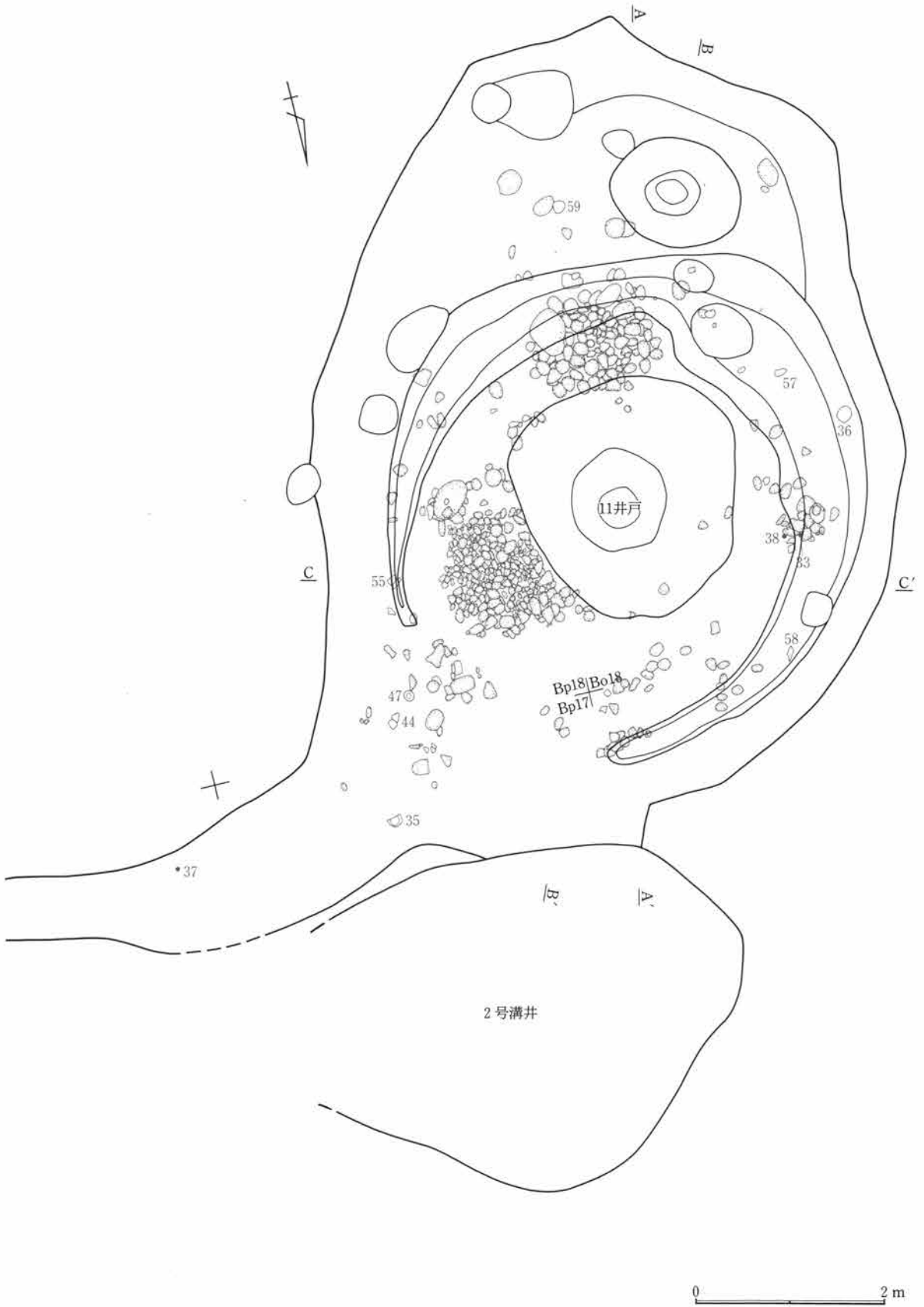
3号溜井(第271図 PL. 91)

1号溜井、2号溜井とは位置が異なり、台地中央付近の縁辺に掘削される。貯水部は径4m、深さ20cmの鍋底状断面を呈する不整円形を示し、南端部に井戸が2基接して掘削される。調査では南端側を31号井戸、その北側を32号井戸として記録している。31号井戸は径1m、深さ1.5m、32号井戸は径55cm、深さ1.2mを計測する。低地側の北端部には幅40cm、深さ15cmの導水溝を付設し、ゆるやかな傾斜で低地部に接している。なお導水溝部に認められる小穴は上層からの掘り込みでこの溜井に伴うものではない。溜井の掘削時期について有効な調査所見は得られていない。ただ32号井戸埋没土から第262図103に示す6世紀中葉~後半の土器器杯が出土しており、前記のようにこの地点の開田時期を考えると水田開発時に伴う灌漑施設との可能性も指摘できる。



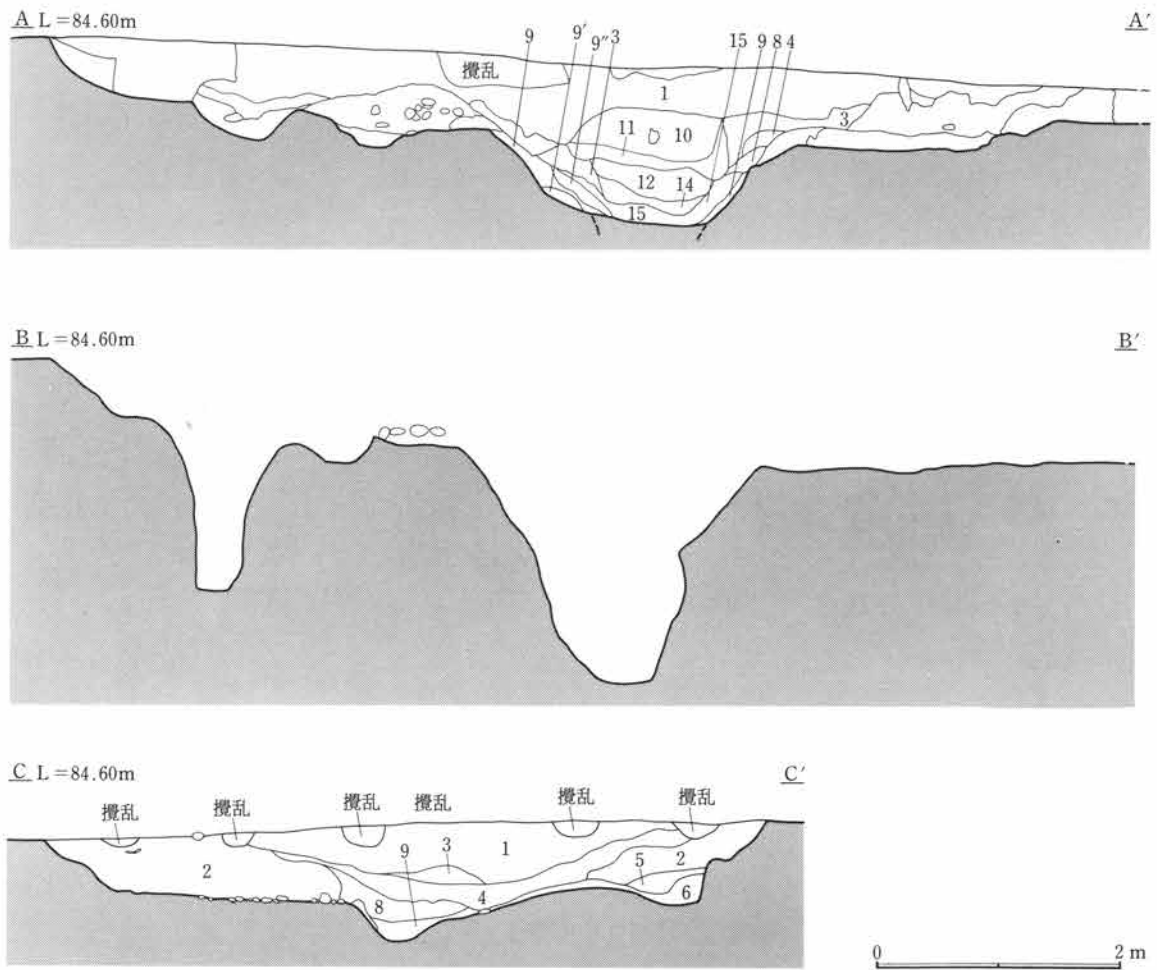
- 土層説明
- 1 表土
 - 2 浅間Bテフラ (As-B)
 - 3 黒色粘質土 埋没水田耕土
 - 4 黒褐色土 白色軽石粒を含む
 - 5 黒色土 軽石粒を含む
 - 6 黒色粘質土 軽石粒を含む
 - 7 灰黒色粘質土
 - 8 黒色粘質土
 - 9 榛名一沢川テフラ (Hr-S)
 - 10 黒色粘質土
 - 11 浅間C軽石 (As-C)
 - 12 黒色粘質土
 - 13 灰黒色粘質土

第267図 わarmeizō遺構、1・2号溜井



第268図 1号溜井

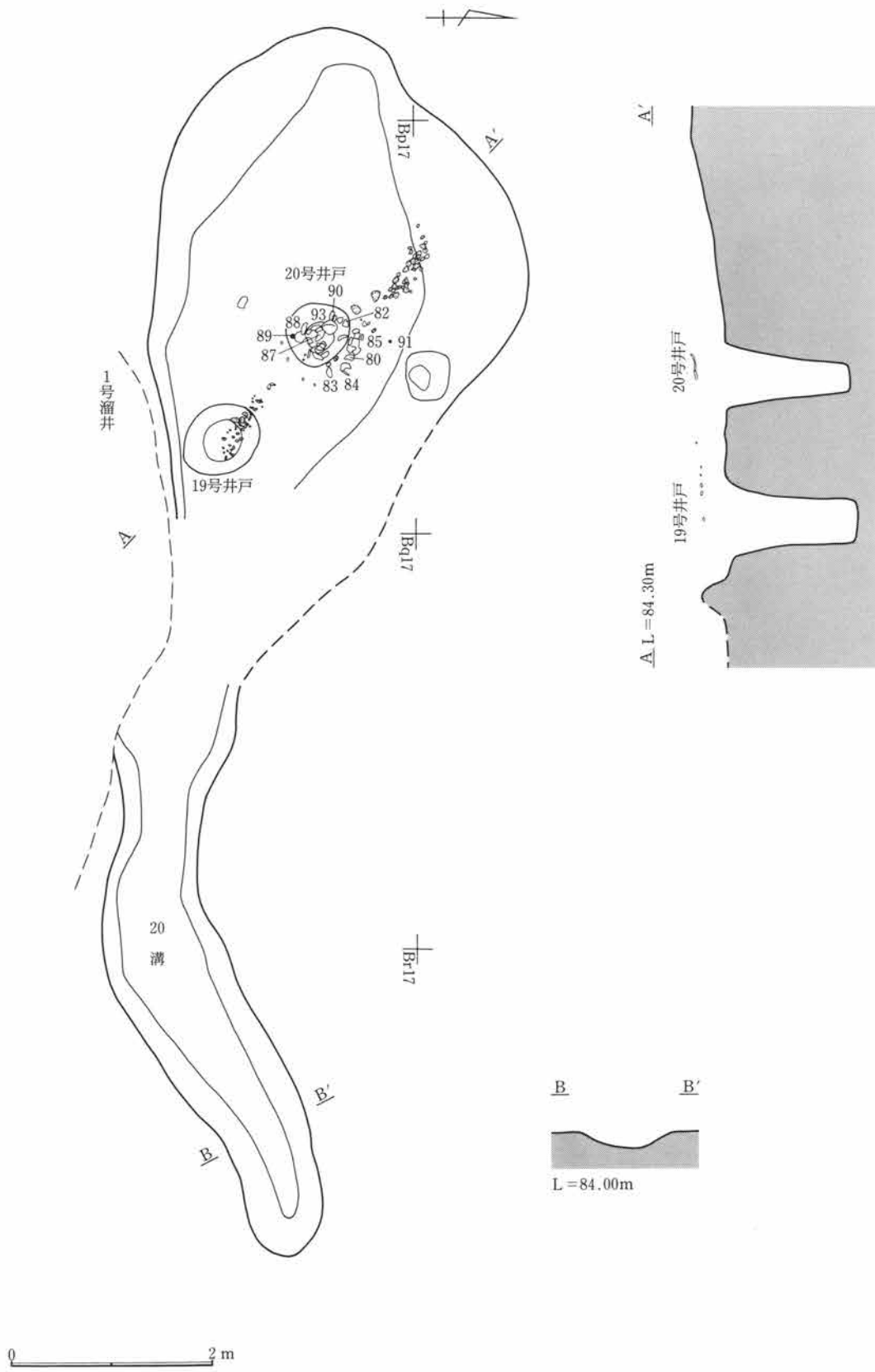
II 発掘調査の記録



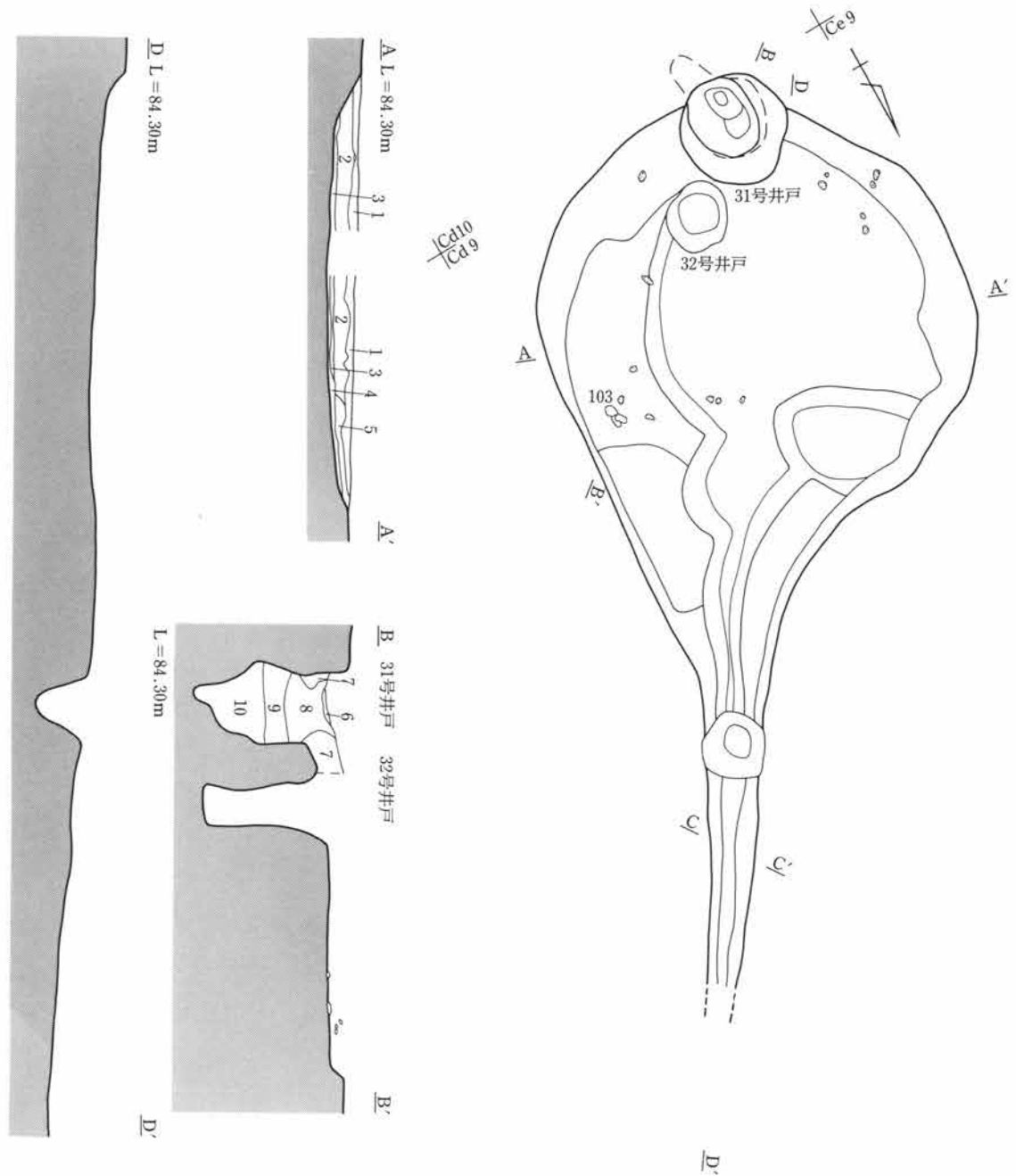
11号井戸

- 1 暗褐色土 白色軽石粒を多量に含む他、粘土粒も多く混入する しまっており、住居埋没土に類似し、土器類・礫等を多く包含する
- 2 暗灰褐色土 白色軽石粒・ローム粒を含み、しまりのある層
- 3 暗褐色土 白色軽石粒をやや多く含む
- 4 暗褐色土 ローム粒を少量含む他、暗灰褐色土をブロック状に含む
- 5 暗灰褐色土 2に類似するが、ローム含有量が多い
- 6 暗褐色土 指頭大のロームブロックを多量に含む
- 7 暗褐色土 ロームブロックを含む
- 8 ロームブロック
- 9 褐色土 壁部崩落土、ロームブロックを多量に含む
- 9' 褐色土 壁部崩落土、ロームブロックをやや多く含む
- 9'' 褐色土 壁部崩落土、ロームブロックを少量含む
- 10 暗褐色土 白色軽石粒を含む
- 11 暗褐色土 白色軽石粒を少量含む
- 12 黒褐色土 焼土粒を少量含む
- 13 黒褐色土 白色軽石粒・焼土粒を含む
- 14 黒褐色土 粘性の強い層
- 15 黒褐色土 粘性が強く、色調より黒味を帯びる
- 16 暗褐色土 ローム粒を少量含む
- 17 暗褐色土 ローム粒を多く含む他、砂質土も認められる (周溝埋没土)

第269図 1号溜井



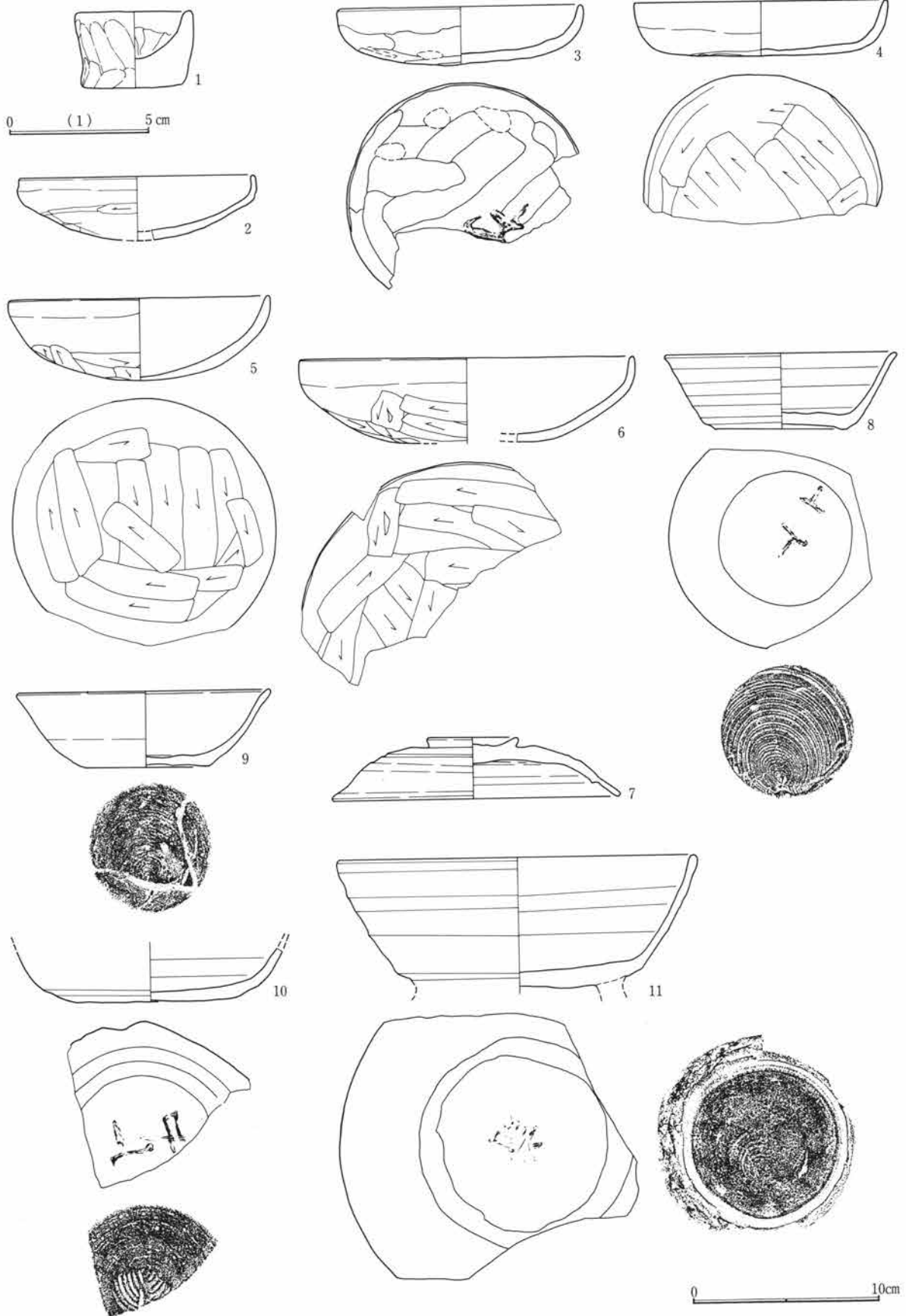
第270図 2号溜井



31・32号井戸

- 1 暗褐色土 白色軽石粒・ローム粒を含む
- 2 黒褐色土 白色軽石粒・ロームブロックを含む
- 3 黒褐色土 白色軽石粒・褐色砂を含む
- 4 褐色砂質土 ロームブロックを含む
- 5 暗褐色土 白色軽石を少量含む
- 6 暗褐色土 褐色砂・ローム粒を含む
- 7 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む
- 8 暗褐色土 ロームブロックを少量含む
- 9 暗褐色土 ロームブロックの他、褐色砂を含む
- 10 黒褐色土 ローム粒を少量含む

第271図 3号溜井



第272図 温め状遺構出土遺物

II 発掘調査の記録

(11) 瓦 塔

本遺跡からは合計28点の瓦塔片が出土している。それらはいずれも小破片であるが、特徴もつかめないほどのごく小さな破片を除けば、以下の2種類に分類することが可能である。遺物観察表にみえる「瓦塔A類」「瓦塔B類」の注記は、この分類を示している。この分類ができた破片は合計26点である。

第6表

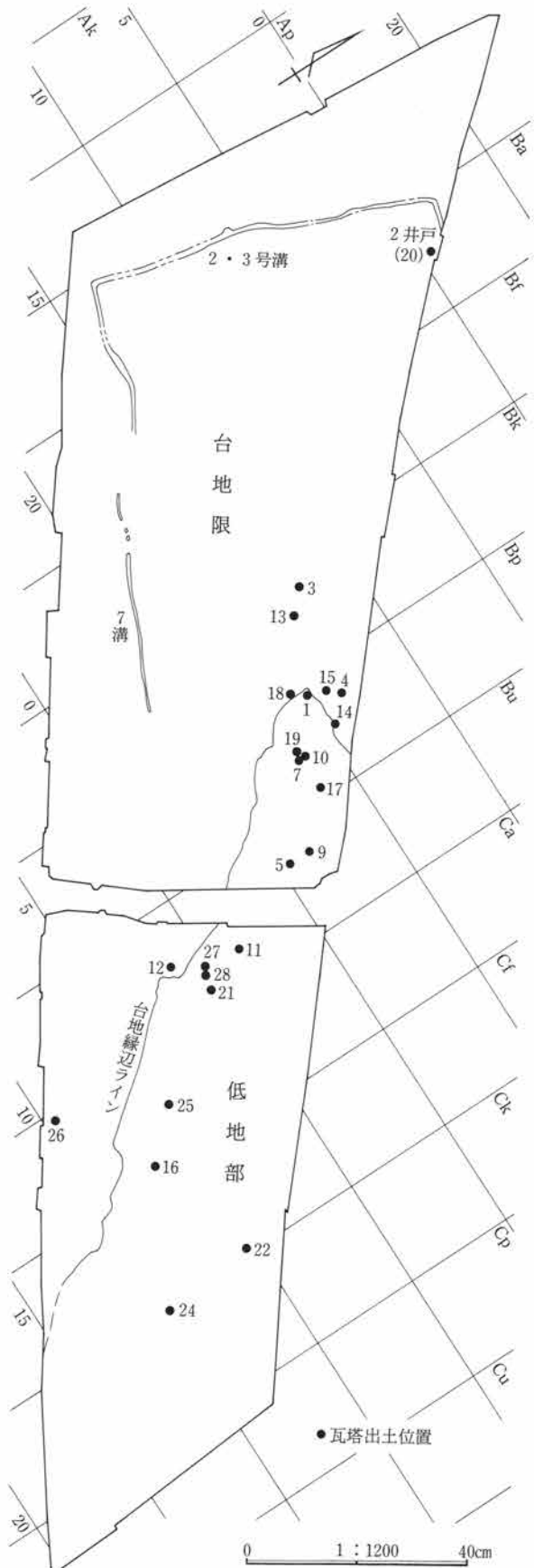
	A 類	B 類
厚 さ	厚 手	薄 手
丸瓦表現	多 節	軒先のみ一節
軒 構 成	二 軒	一 軒
斗 拱 部	不 明	壁付き斗拱は粘土帯作り
彩 色	屋蓋裏に赤彩	軸部一部白彩
焼 成	還元炎	酸化炎主体

(用語の一部は高橋光司氏注1論文に従った)

それぞれの特徴に明確な差異があるため、これら2種類は確実に別個体であったと思われ、本遺跡には少なくとも2基の瓦塔が存在したものと考えられる。もちろん、ここでA類・B類と分類したもののなかに複数個体の瓦塔片が含まれている可能性もあるので、「この遺跡に存在した瓦塔の数は2基であった」と断言することはできない。なお、出土した破片を見る限りでは大棟などの破片は存在せず、金堂などを表したいわゆる「瓦堂」はこの遺跡にはなかったと思われる。

(1) この瓦塔そのものの年代は、高橋光司氏の編年案によれば、A類が8世紀後半、B類が9世紀前半に比定され、両者の間には若干の年代差が想定される。

この瓦塔が遺跡のどこに置かれ、どのような機能を果たしていたのかは、瓦塔片が広い範囲に分散して出土していることから、考える手がかりはきわめて乏しいと言わざるをえない。わずかに関連づけて考えられるのは、遺跡から数多く検出されている掘立柱建物と、少数ながら出土している瓦片である。瓦は軒先瓦の出土はないものの、平瓦は一枚造りで凸面には縄叩きが施されており、さらに表面に黒色処理がされているものが多いという注目すべき特徴がある。これらの特徴は国分寺創建期の早い頃に笠懸窯跡群鹿ノ川窯跡で生産されたものに見られるものであり、胎土なども類似していることから、きわ



第273図 瓦塔分布図

めて、近い関係が考えられるものである。A類の瓦塔は8世紀後半に編年できるものなので、この瓦とは時期的に近接することになり、両者の関連が考えられる。この瓦窯の製品は国分二寺以外には新田郡に分布の中心があり、勢多郡域の分布はこれまで出土地が知られていなかったほど希薄である。新田郡には瓦塔出土地が現在までに8ヶ所知られているが(第7表参照)、このうち、台之原遺跡(廃寺)、上野井遺跡、中江田本郷遺跡の3遺跡から、鹿ノ川窯跡製と考えられる瓦が伴出している。瓦の出土量はどれも少なく、小規模な瓦葺き建物の存在が想定できるのみである(瓦の出土数は本遺跡の場合さらに少ないため、棟などの部分にのみ瓦を使用していたことも考えられる)。つまり、これら新田郡の3遺跡と本遺跡とは、8世紀中頃に小規模な瓦葺きの建物を創建し、8世紀後半から9世紀前半にかけて瓦塔を手に入れていることで共通しているのである。もちろん、瓦塔が出土していても瓦が出土しない遺跡は数多く存在するため、瓦塔と瓦をあまりに強く結び付けて考えるのは危険である。しかし、瓦塔は紛れもなく仏教的な遺物であり、また、古代における瓦と仏教寺院との深い関係を考えれば、両者がまったく無関係に存在したとはむしろ考えにくいと言えよう。やはり、これら小規模な瓦葺き建物は何らかの仏教的施設の一部をなしており、瓦塔はその内部あるいは近傍に安置されていたと考えるのが、自然な理解であるように思う。小規模な瓦葺き建物であれば、礎石を使用しない掘立柱建物であっても十分建築可能であると思われるので、本遺跡で発見されている掘立柱建物のいずれかがその瓦葺き建物に相当する可能性もある。ただし、現状ではその特定は困難である。

なお、瓦塔自体の機能・性格については現在いくつかの説が提出されているが、本遺跡ではその点について考える根拠はほとんどないと言ってよい状況である。そのため、ここでは瓦葺き建物と瓦塔とが何らかの関連をもって存在していたのではないかと推定するにとどめたい。いずれにしる瓦塔と瓦の出

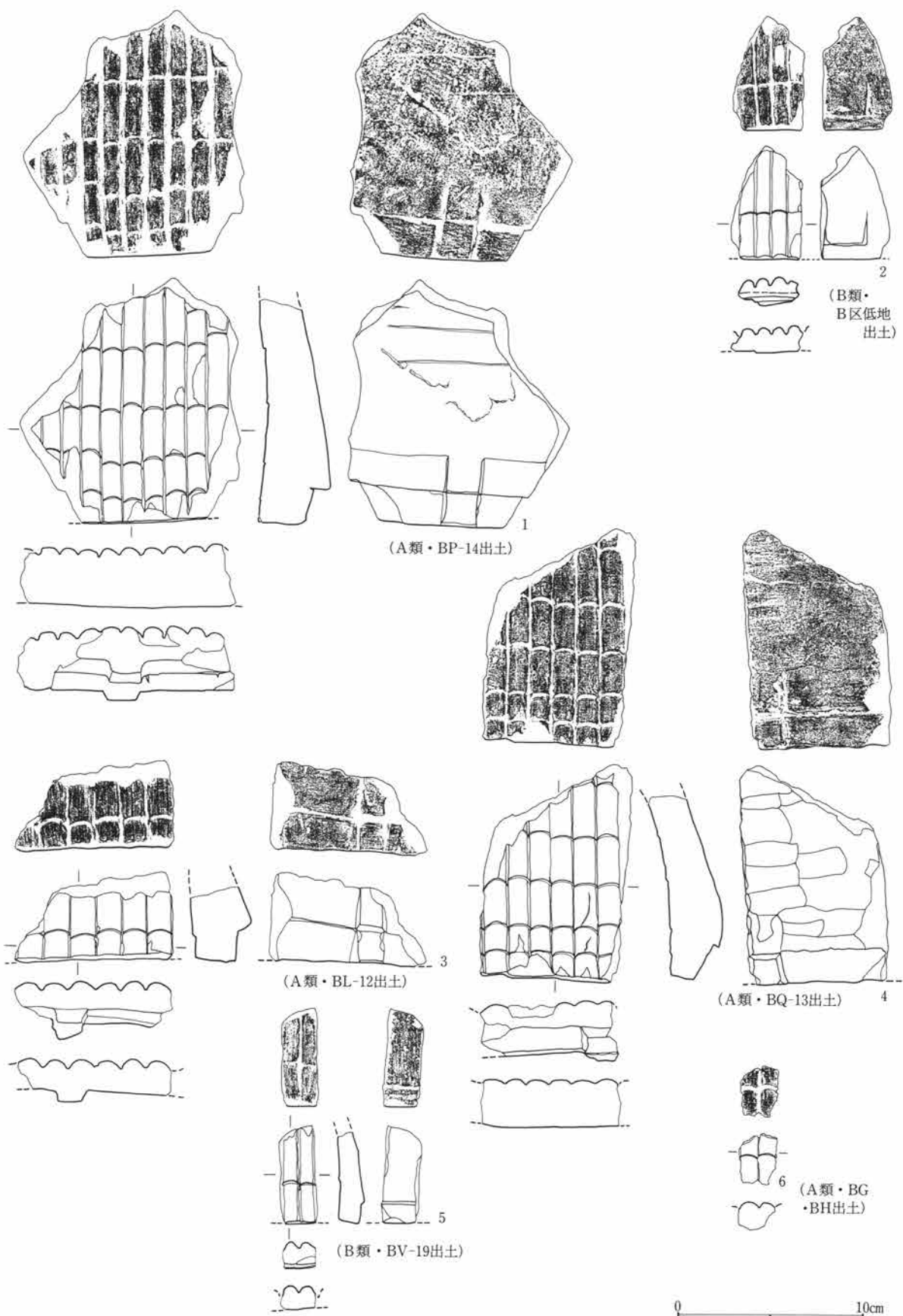
土は、本遺跡の中に小規模ながら仏教的な性格をもった施設が存在したことを示すものであり、古代の村落内における宗教活動を知る上できわめて重要な資料であると言わなければならない。

- (1) 高橋光司「瓦塔小考」(『考古学雑誌』74-3 1989)
- (2) 須田茂「鹿ノ川窯跡」(『群馬県史』資料編2 1986)
高井佳弘「出土した遺物・瓦類」(『瓦からみた上野国分寺』(群馬県教育委員会「史跡上野国分寺跡発掘調査報告書」1989))
- (3) 須田茂「上野国新田郡における古代寺院について」(財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団「研究紀要」7 1990)

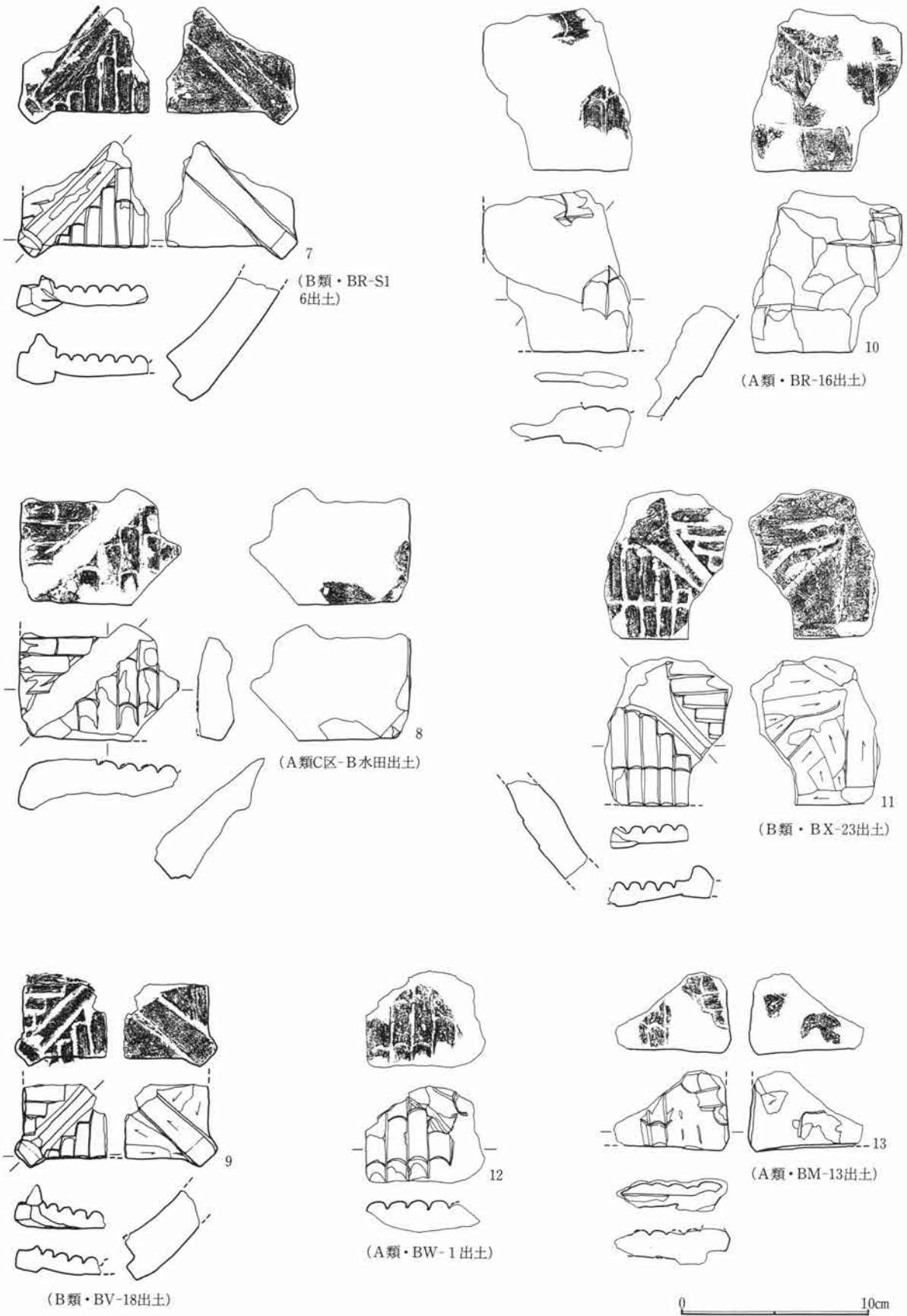
第7表 瓦塔出土地一覧

番号	遺跡名	所在地	郡名
1		安中市高別当字井戸谷	碓氷郡
2		安中市下野尻字桃山	〃
3		安中市下秋間字自性寺	〃
4	黒熊中西遺跡	多野郡吉井町黒熊	多胡郡
5		藤岡市下栗須字津島	緑野郡
6	融通寺遺跡	高崎市大八木町融通寺	群馬郡
7		群馬郡群馬町菅谷字大房	〃
8	上野国分寺跡	群馬郡群馬町東国分	〃
9	大久保A遺跡	北群馬郡吉岡町大久保	〃
10		吾妻郡長野原町長野原	吾妻郡
11	沢入A窯跡	利根郡月夜野町月夜野字藪田	利根郡
12		利根郡昭和村森下字宮原	〃
13		勢多郡赤城村三原田字諏訪上	勢多郡
14		前橋市田口町字入田	〃
15		前橋市上細井町字五十嵐	〃
16		前橋市上細井町字薬師	〃
17		前橋市上泉町字新田塚・次郎房	〃
18		前橋市亀泉町字本郷	〃
19	天神風呂遺跡	勢多郡大胡町茂木	〃
20	上西原遺跡	前橋市下大屋町	〃
21	三騎堂遺跡	前橋市西大室町	〃
22	下縄引II遺跡	前橋市西大室町	〃
23	二之宮谷地遺跡	前橋市二之宮町	〃
24	青雲寺遺跡	勢多郡新里村武井	〃
25		佐波郡赤堀町今井字御伊勢坂	佐位郡
26	下触川上遺跡	佐波郡赤堀町下触字川上	〃
27	上植木廃寺	伊勢崎市上植木本町・元関町	〃
28	上原之城遺跡	伊勢崎市豊城町	〃
29	権現山南遺跡	伊勢崎市豊城町・上諏訪町	〃
30		伊勢崎市茂呂町字蓮蔵	〃
31		佐波郡東村東小保方字下	〃
32	十三宝塚遺跡	佐波郡境町伊与久	〃
33		佐波郡境町上淵名	〃
34	山際窯跡	新田郡笠懸町鹿	新田郡
35	青泉寺裏	新田郡笠懸町鹿	〃
36	笠懸小学校	新田郡笠懸町鹿字堀底	〃
37	台之原遺跡	新田郡藪塚本町杉塚	〃
38	上野井遺跡	新田郡新田町村田	〃
39	中江田本郷遺跡	新田郡新田町中江田	〃
40	小角田前遺跡	新田郡尾島町小角田	〃
41	徳川道上遺跡	新田郡尾島町世良田	〃
42	小丸山遺跡	太田市矢田堀	山田郡
43		太田市東金井字入金井	〃
44		太田市東金井字南金井	〃
45	落合窯跡	太田市吉沢	〃
46	細田遺跡	桐生市菱町	〃
47	風穴遺跡	桐生市菱町	〃

(須田茂氏作成)

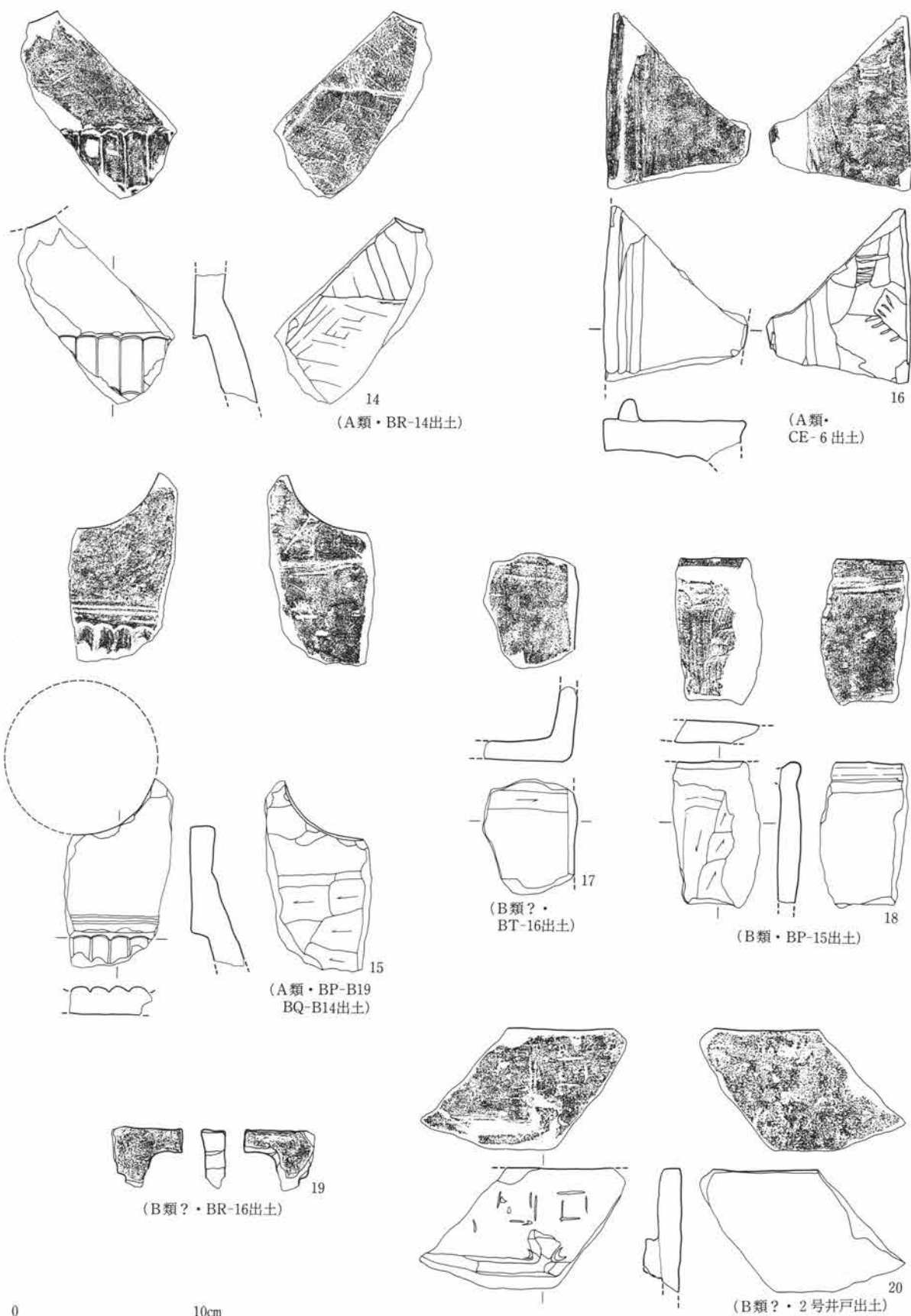


第274図 グリッド出土遺物

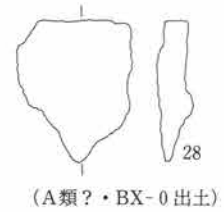
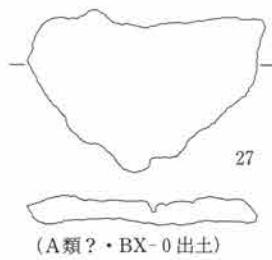
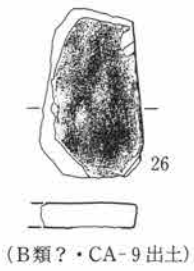
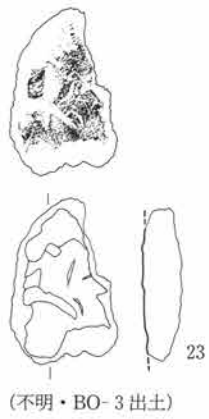
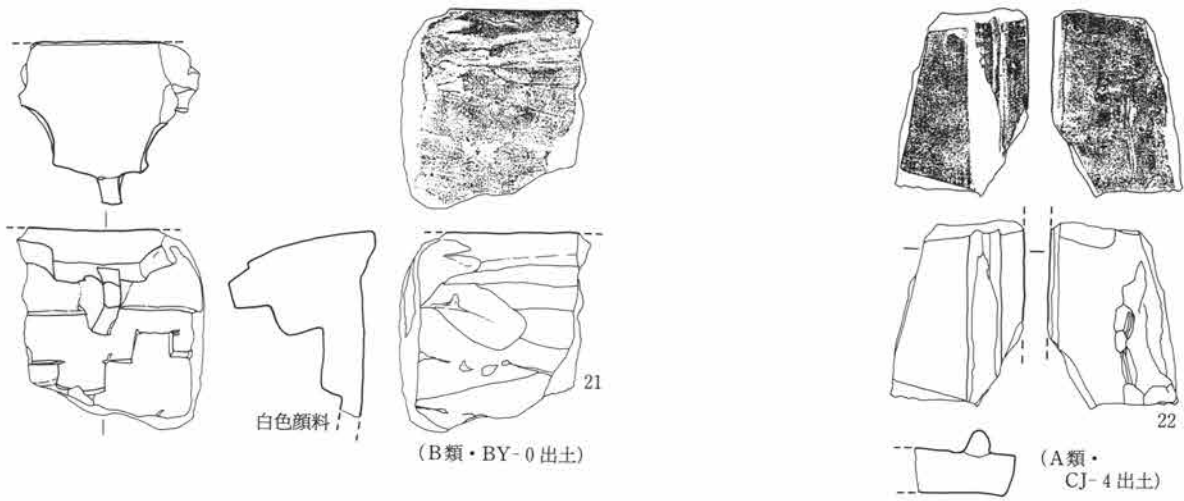


第275図 グリッド出土遺物

II 発掘調査の記録



第276図 グリッド出土遺物



0 10cm

第277図 グリッド出土遺物

II 発掘調査の記録

(12) 瓦

本遺跡からは、本書に図を掲載しなかった破片も含めて、合計41点の瓦が出土している（接合できる破片は、接合したものを1点と数えた）。そのうち本書で報告したのは22点である。内訳は平瓦18点、丸瓦4点で、軒先瓦の出土はない。

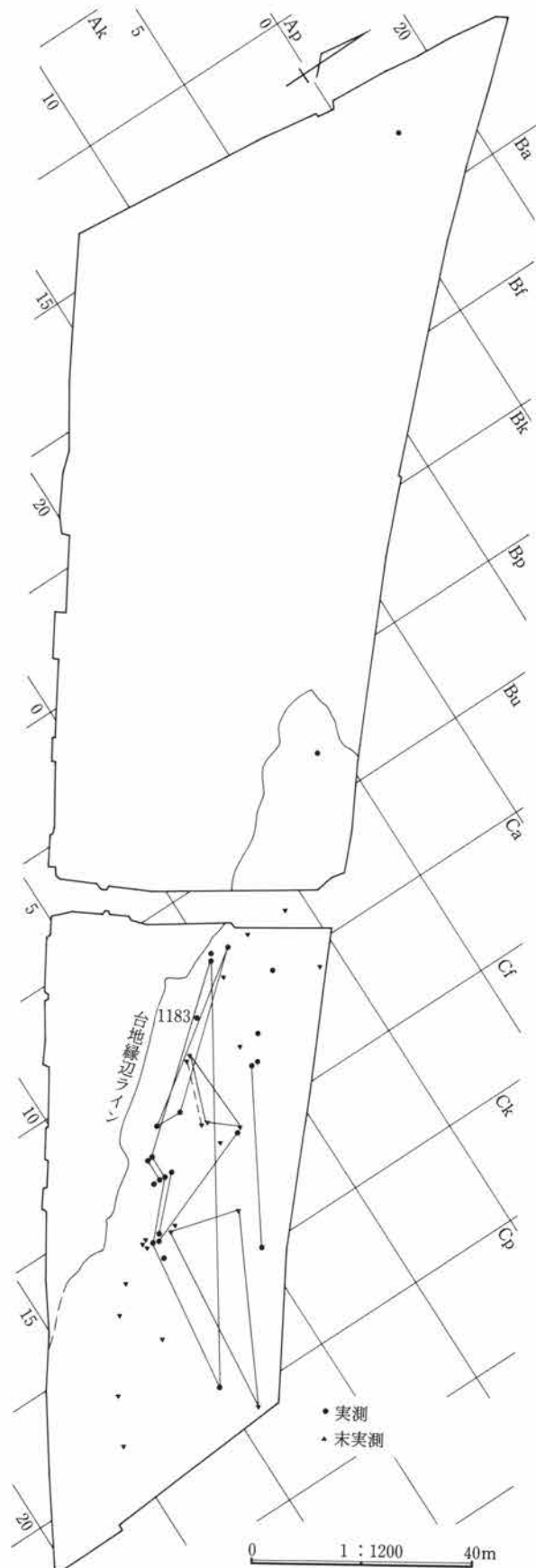
平瓦は、凸面は縦方向の縄叩きで密に打つものが多く、凹面は全面ナデで1部に布目痕や糸切権痕が残り、各端部に面取りを1回施すのが普通である。製作技法は、凹面が全面撫でられているためやや不確実ではあるが、布目痕が残っているところにも模骨痕はなく、一枚造りであると思われる。焼成・色調は様々であるが、表面に黒色処理を施すものが多い（18点中11点）という注目すべき特徴がある。

丸瓦の凸面は全面ナデで、叩きなどは不明である。76号住居の出土品によれば玉縁はなく、行基葺きである。

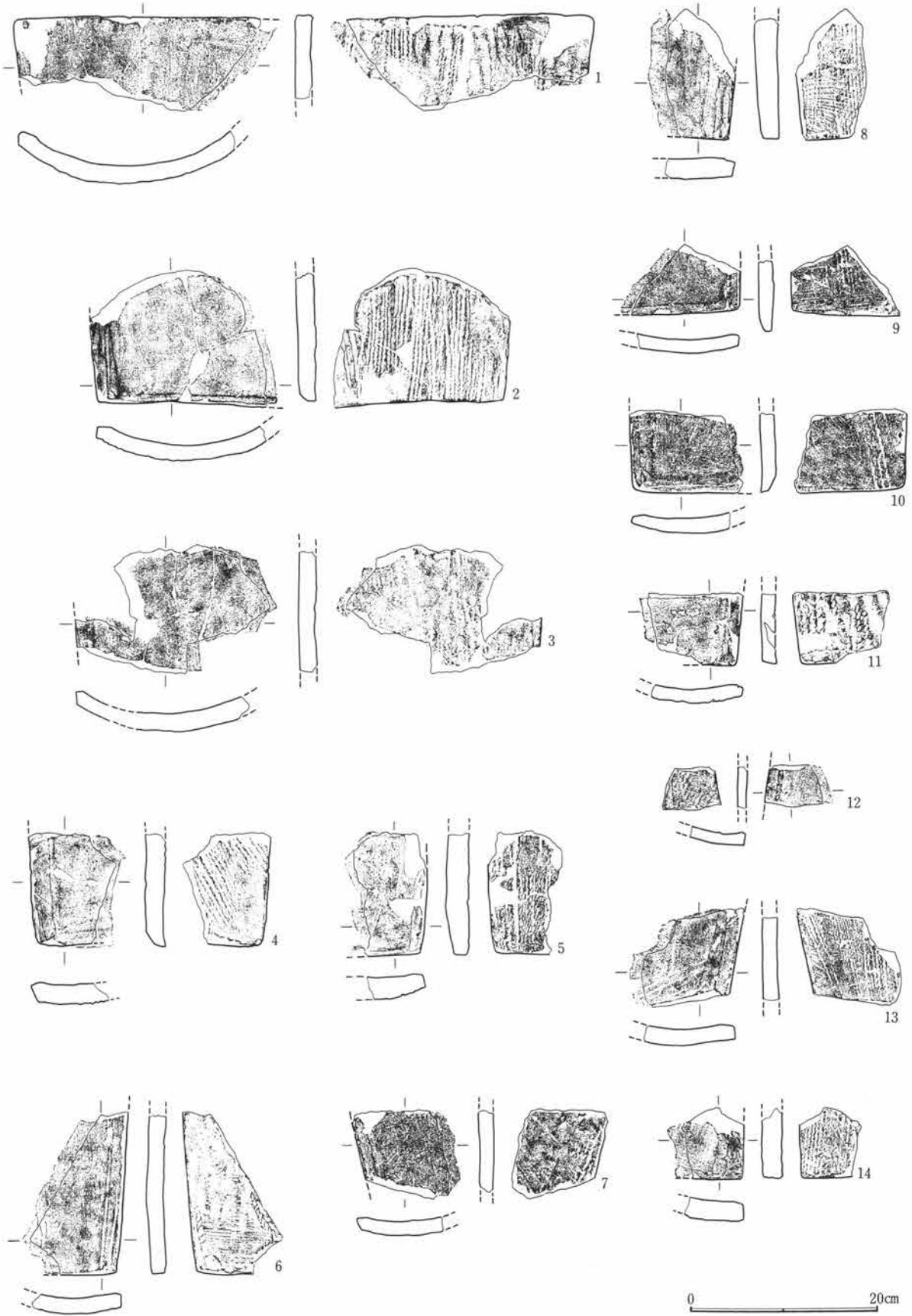
平瓦・丸瓦とも特徴はよくまとまっており、それぞれ単一の瓦窯跡から供給されたものと思われ、複数の瓦窯の製品が混じっている可能性は低い。

平瓦の特徴は、瓦塔の項に述べたように、国分寺創建期の瓦窯である笠懸町鹿ノ川窯跡の製品、しかも初期の段階の製品によく似ている。しかし、同様な平瓦が多量に出土した藪塚本町台之原遺跡では、丸瓦は玉縁式のものであり、本遺跡の丸瓦と相違している。このため、本遺跡の瓦を鹿ノ川窯跡の初期生産品と断定することはできないが、国分寺創建期に行基葺きの丸瓦が生産されていたことは確かであり、笠懸窯跡群の8世紀中頃から後半にかけての製品であることは間違いないと思われる。細かい時期生産窯の特定は今後の課題である。

瓦の出土位置は第278図の通りである。ほとんどが低地部から出土しており、どの建物に使用されていたのかは明らかではない。瓦の出土数が少ないこと、平瓦が少ないことから、棟の部分にのみ瓦を使用していたことも考えるべきであろう。その他、瓦の出土の意味については、瓦塔の項を参照していただきたい。



第278図 瓦分布図



第279図 グリッド出土遺物

II 発掘調査の記録

(13) 手捏ね

手捏ね土器は、計35個体が出土している。

形態的には各種あり、器表裏面に成型にともなう指頭痕が残るもの、ヘラ状工具による調整痕が器面に残るもの、底面に木葉痕が認められるものなどが存在する。また、大きさも大小あり、やや大きめのものの中には、輪積み痕が観察される資料もある。

分布をみよう。

この中には、出土位置が確認されているものの他に、グリッド単位で取り上げているものも含まれるが、相対的な分布状況は把握できるだろう。

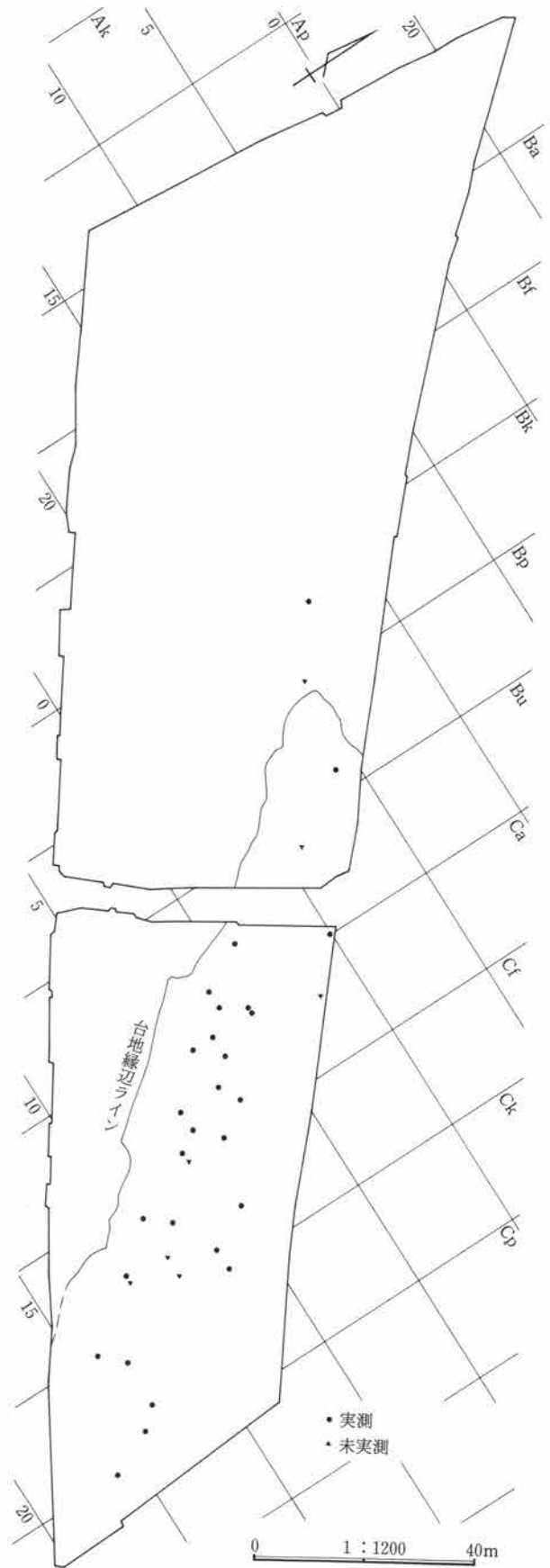
右の図が、その分布状況を示したものである。そのほとんどが、埋没水田が検出された低地部分に集中していることが特徴的である。数点、台地部分にも出土が認められているが、それにしても、台地縁辺部の低地に接した場所といえる。

すなわち、この分布の偏在性からみる限り、日常生活用具としてではなく、生産域である水田において用いられたものとみることができる。

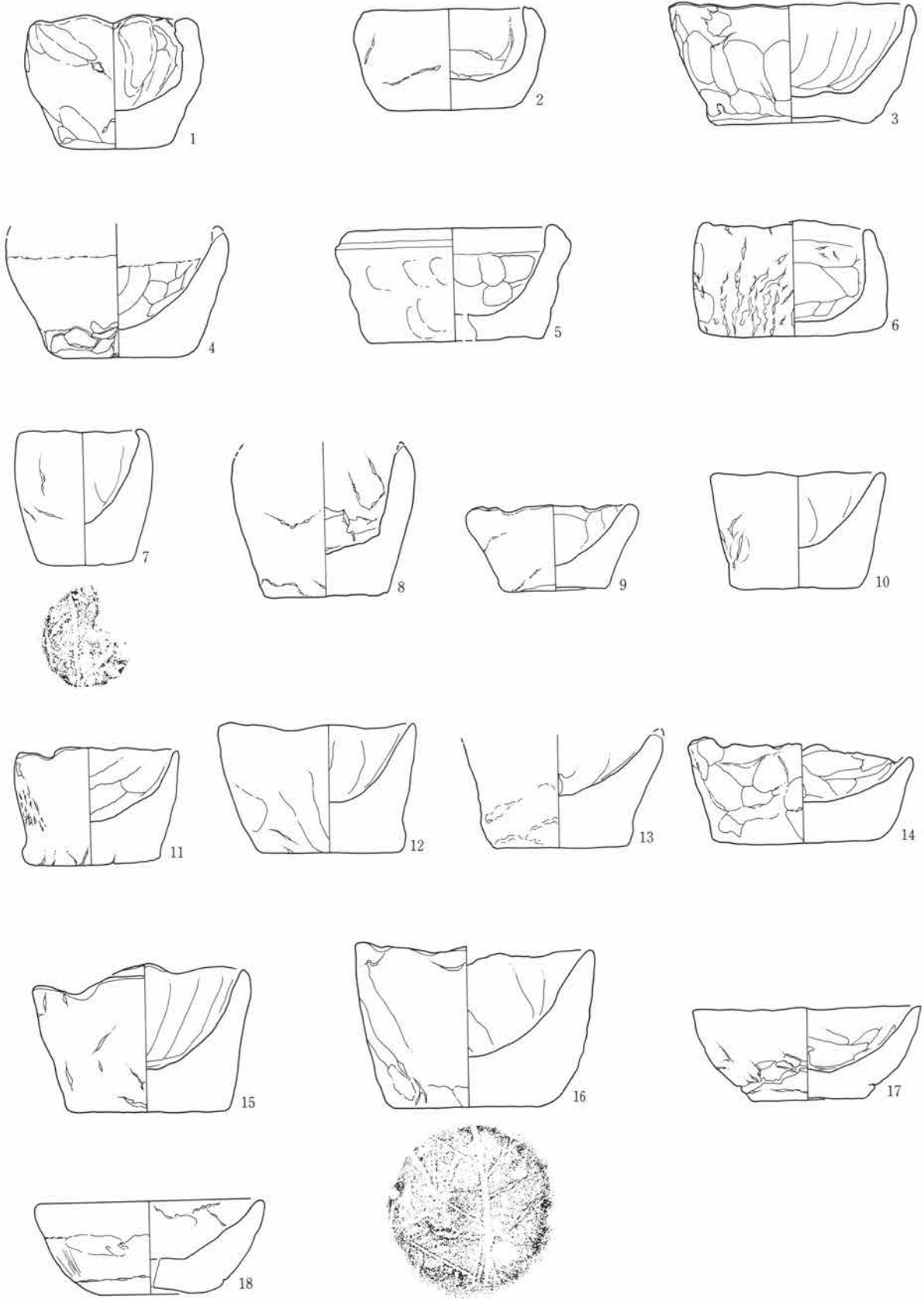
また、出土資料が小型であるということも関係すると思われるが、比較的完形品が多いこともこの場所 で用いられた可能性を示唆するだろう。

このような点から、水田耕作に伴う農業祭祀に供された道具といえよう。

時期的には、浅間B軽石下の埋没水田において出土したものが大半であるが、継続的な耕作が行われていることから、この水田時期を上限として、数時期にわたるものと考えられる。

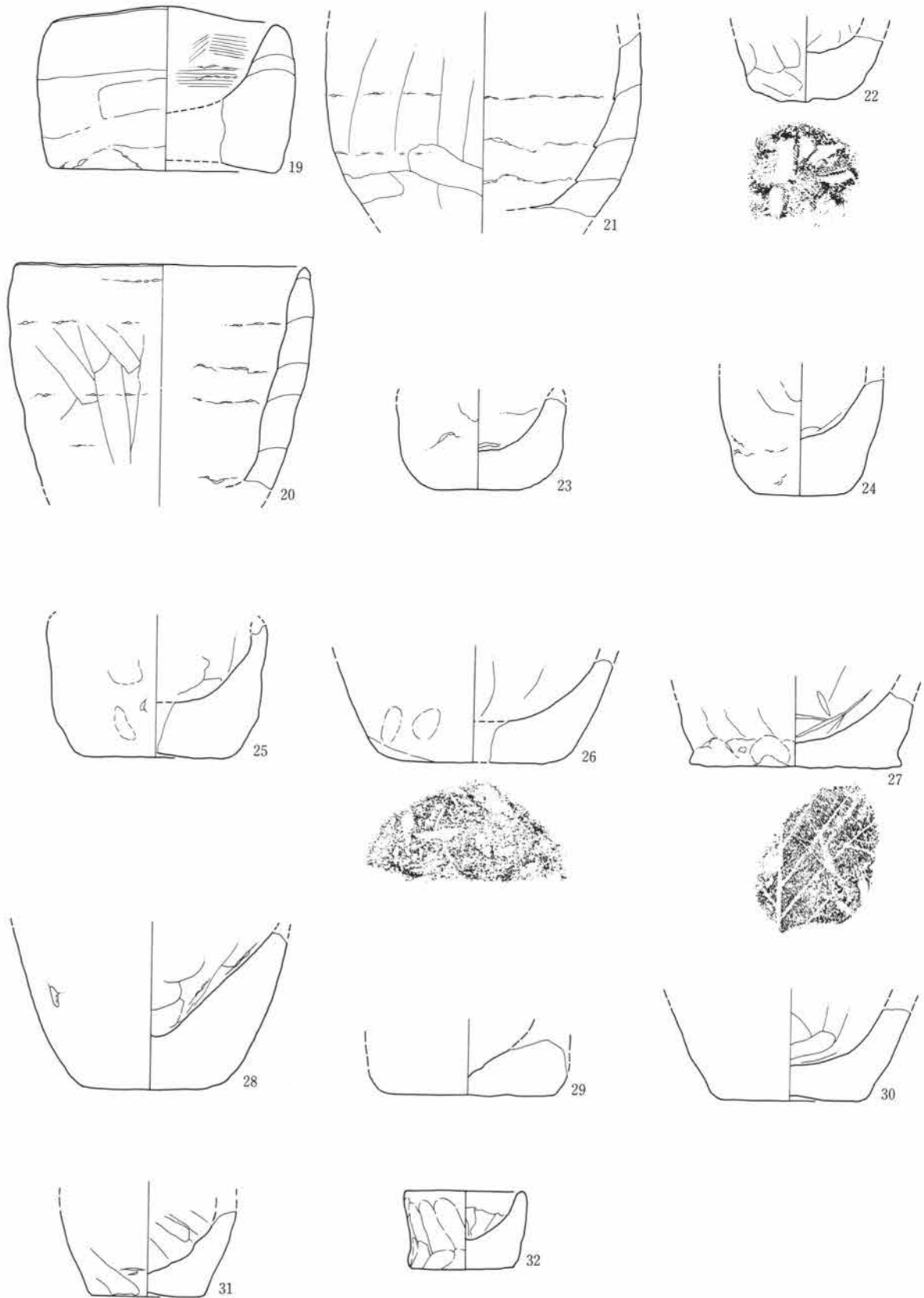


第280図 手捏ね分布図



第281図 グリッド出土遺物

II 発掘調査の記録



0 5 cm

第282図 グリッド出土遺物

(14) 土 錘

計70点が出土している。

出土位置が確認されているものについては、右の分布図に示すとおりである。

土錘が集中する部分は、井戸などの遺溝内から出土したものであり、他の点的分布を示すものはグリッドから出土したものである。低地部から出土したものは、いずれも浅間B軽石下の埋没水田面およびその下位から出土したものである。

土錘は、河川での漁を目的にした網のおもりとして使用されたものであろうが、具体的にその使用状態を推定する調査所見は得られていない。井戸などの遺構から出土したものについても、量的に集中するとはいえ、そのまま同時に使用されたとの判断はできない。

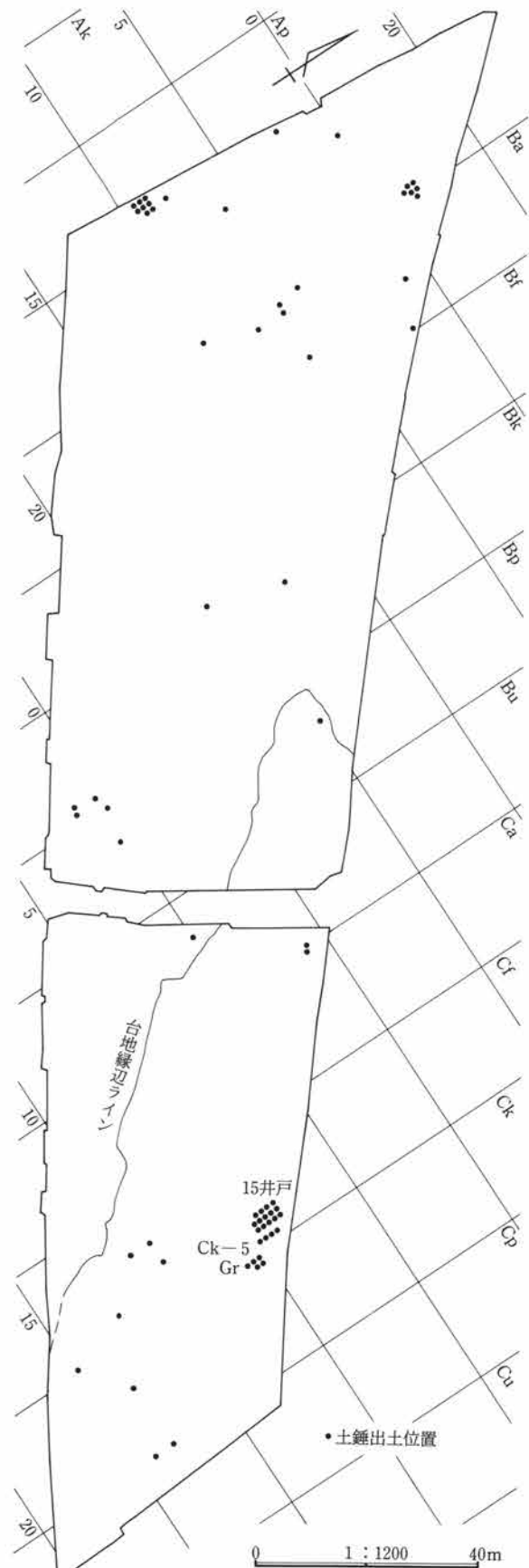
形態や大きさなどは各種あり、集中して出土した例についても決して一様ではない。

製作については、棒状の芯に粘土塊を巻き付け形づくり、ある程度乾燥した段階でヘラ状工具によるケズリ整形が施されている。

土錘については、周辺遺跡でも出土例があり、荒砥洗橋遺跡でも比較的まとまった量が検出されており、生活の中に漁が含まれていたものとみられる。ただ、土錘が量的には限られていることから、近隣河川での小規模なものであったといえる。

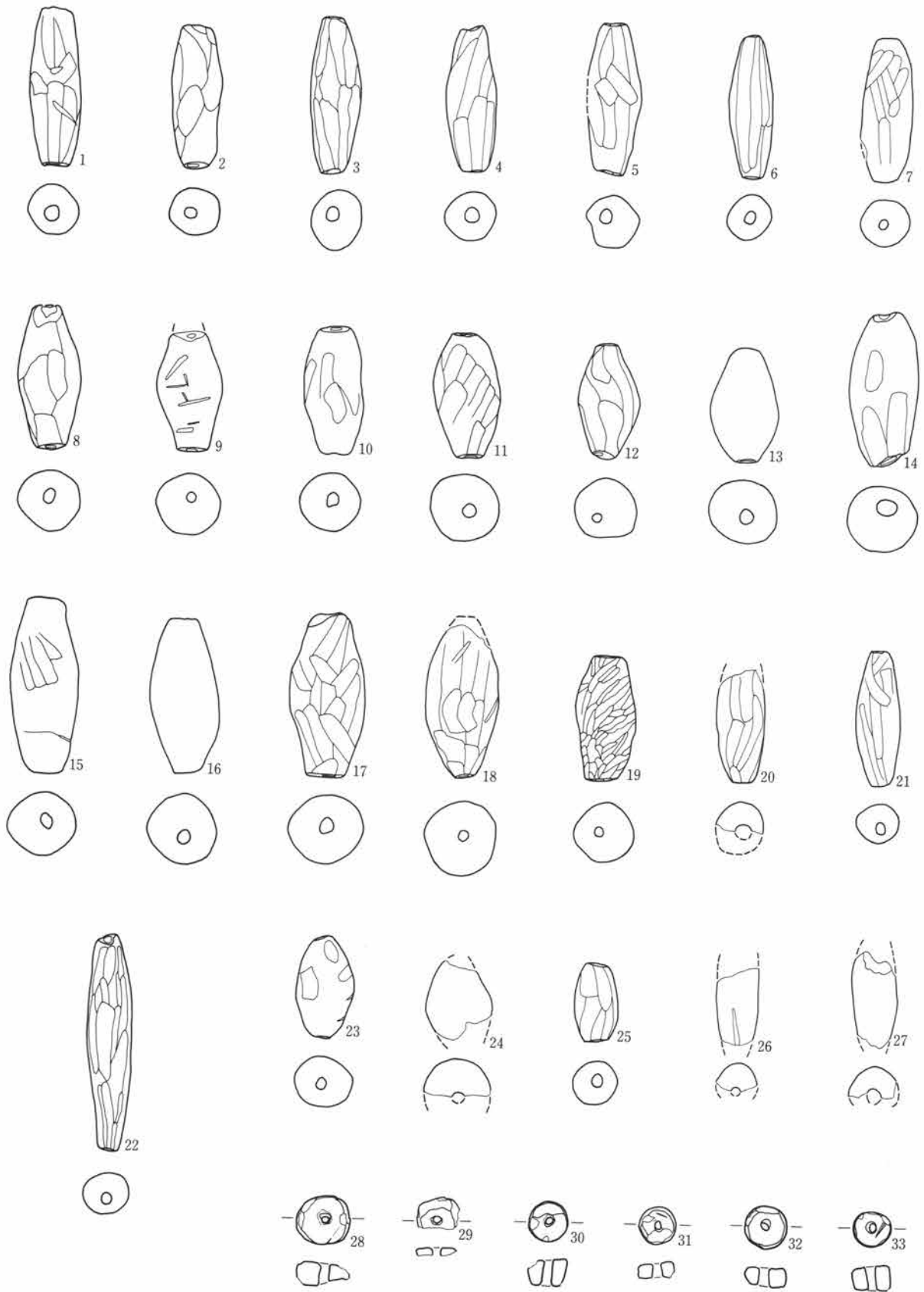
このような点からすれば、多少の流通はあった可能性はあるものの、集落内での食料として消費する程度のものではないと思われる。

なお、284図28～33は滑石製の白玉である。いずれも表土から出土しており、遺構に伴って検出されたものではない。



第283図 土錘分布図

II 発掘調査の記録



第284図 グリッド出土遺物

(15) 遺構外の出土遺物

遺構に伴わない土器は、遺物収納箱で42箱あり、点数では数百点に及ぶ多量の数である。出土土器のうち土師器と須恵器の比率はほぼ同数であるが、時期的には古墳時代後期の土器を1とすると奈良・平安時代の土器は約数十倍出土している。

これらの出土土器の大部分は、台地縁辺に集中して見られる。そして台地縁辺でも特に温め状遺構が位置する西側に多く見られ、出土層位は、ほとんどがFA層上部の水田耕作土層中からである。これらの出土状況を見ると台地上の空間で使用されていた土器が破損等の理由で使用されなくなり水田に廃棄されたものが大部分であると推定される。このような中でも第287図43と44の須恵器は、As-B層下水田跡耕土下から2個並べて置かれた状態で出土しており、水田耕作の祭祀に伴うものと推定される。

第286図1から第287図36は、古墳時代後期の土師器、第287図37から第288図49は、古墳時代後期の須恵器である。

1～26は土師器杯、27は土師器鉢、28～31は土師器高杯、32は土師器台付甕、34～36は土師器甕、33は土師器小型壺、37は須恵器杯、38・39は須恵器高杯、40～44は須恵器、45は須恵器提瓶、46～48は須恵器横瓶で47は横瓶胴部の成形時の最後に張り合わせた部分である。49は須恵器広口壺の肩部である。

第288図51から第295図168は、奈良・平安時代の土師器、須恵器、灰釉陶器である。

51～62は土師器杯、63～67は土師器甕でこれらの杯、甕は概ね8世紀代のものである。69も土師器杯であるが、これは9世紀前半代のものである。

70・71は、黒色土器でともに内面がヘラ研磨後黒色処理が施され、外面口縁部に墨書が見られる。

72～78は須恵器杯蓋である。74は、内面に墨痕が残り、研磨されたような平滑な面をもっていることから、滴の欠いたものの内面を転用硯として再利用している。72も内面が研磨されたように平滑な面をもち、口縁部を打ち欠いたような状態から転用硯として再利用された可能性が考えられる。76は、外

面に「×」の墨書が見られる。

79～97、121～123は、須恵器杯・椀である。79と89の底部は、不定方向へのヘラ削り。82、83、85、86、88、90、91の底部は、回転ヘラ削り。他の底部は、回転糸切りである。82、84、87、90、97には、墨書が見られるが、判読可能なものは82の「入」、84の「十」、97の「上」の3点である。121～123は口縁部を打ち欠いた状態で内面が研磨されたように平滑である。

98～100は、須恵器高杯である。98は、脚部中程に小径の透孔をもつ。100は、承盤状の形態のものである。102～107は、須恵器長頸瓶である。103は、水瓶の口縁部である。104と105は、胴部の肩が明確な稜をもつものである。

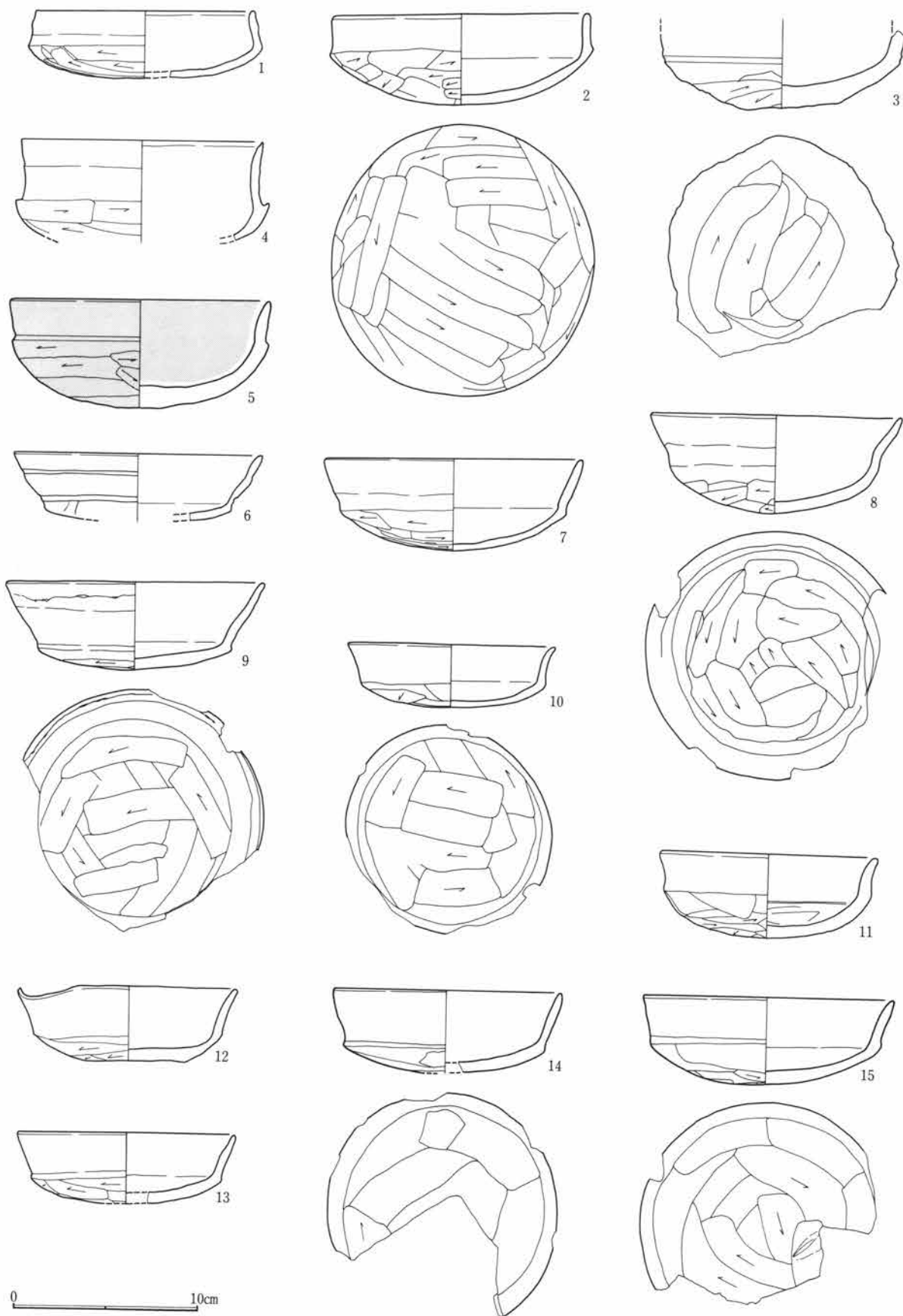
112～117は、灰釉陶器椀である。113、115、116は、施釉方法や高台の形態から光ヶ丘1号窯式期、112、114は、大原2号窯式期、117は、高台の形態から虎溪山1号窯式期である。114は内面底部、117は外面底部に墨書が見られる。118は青磁口縁部片である。

124～168は、墨書、刻書の見られる小片である。これらのうち判読可能なものは、126の「八万」だけである。

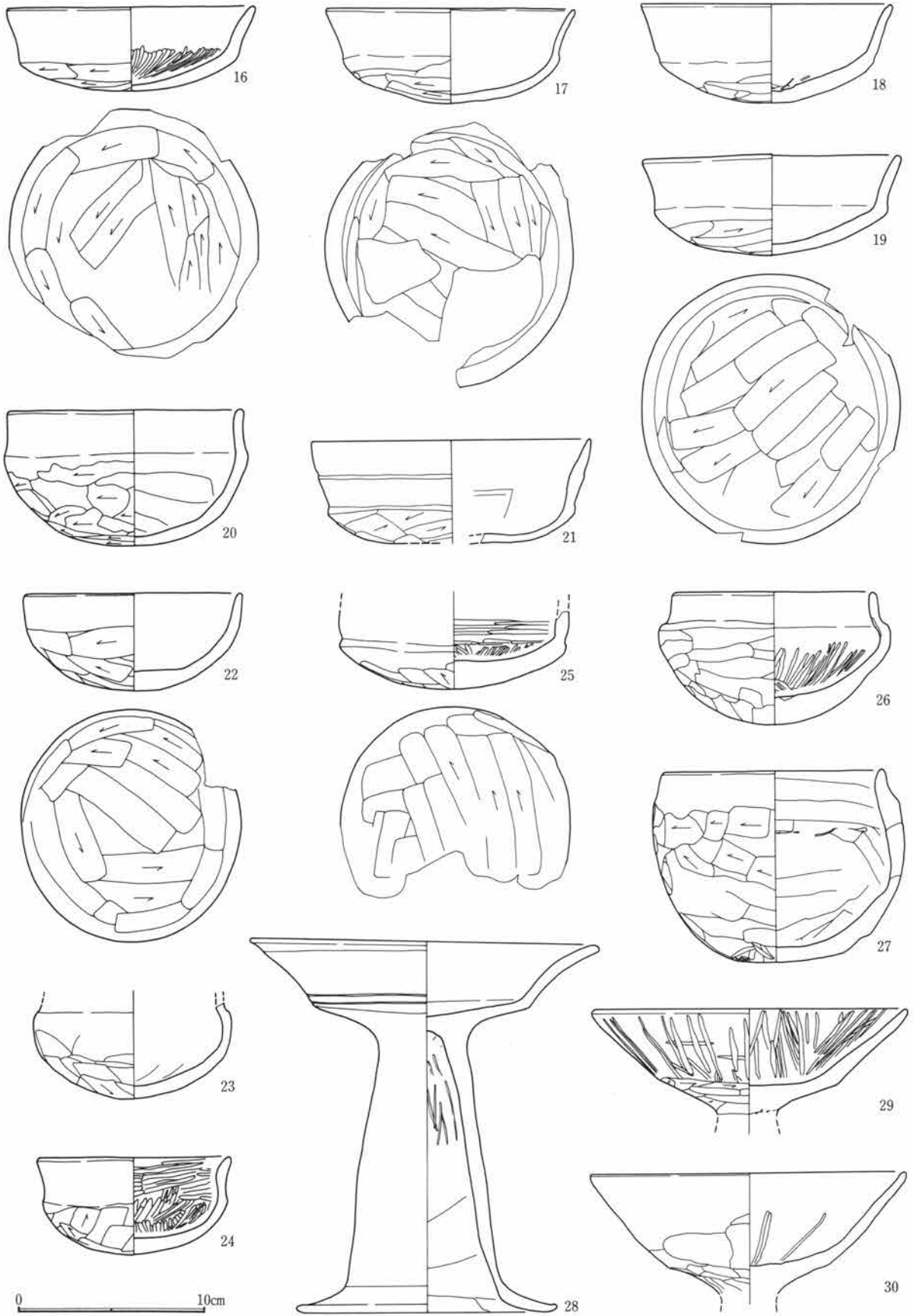
遺構外出土の土器を外観すると古墳時代のもものは、前述のように土器の廃棄場所としての面が見られる一方で43、44のように水田祭祀に使用されたものも見られる。

奈良・平安時代の遺物は、土師器、須恵器とも杯椀の食膳具が多く見られるほか、103の水瓶や100の承盤のような仏器、数多くの墨書が出土していることや瓦塔、瓦を数多く出土していることから遺跡地周地に寺院跡の存在が推定される。

II 発掘調査の記録

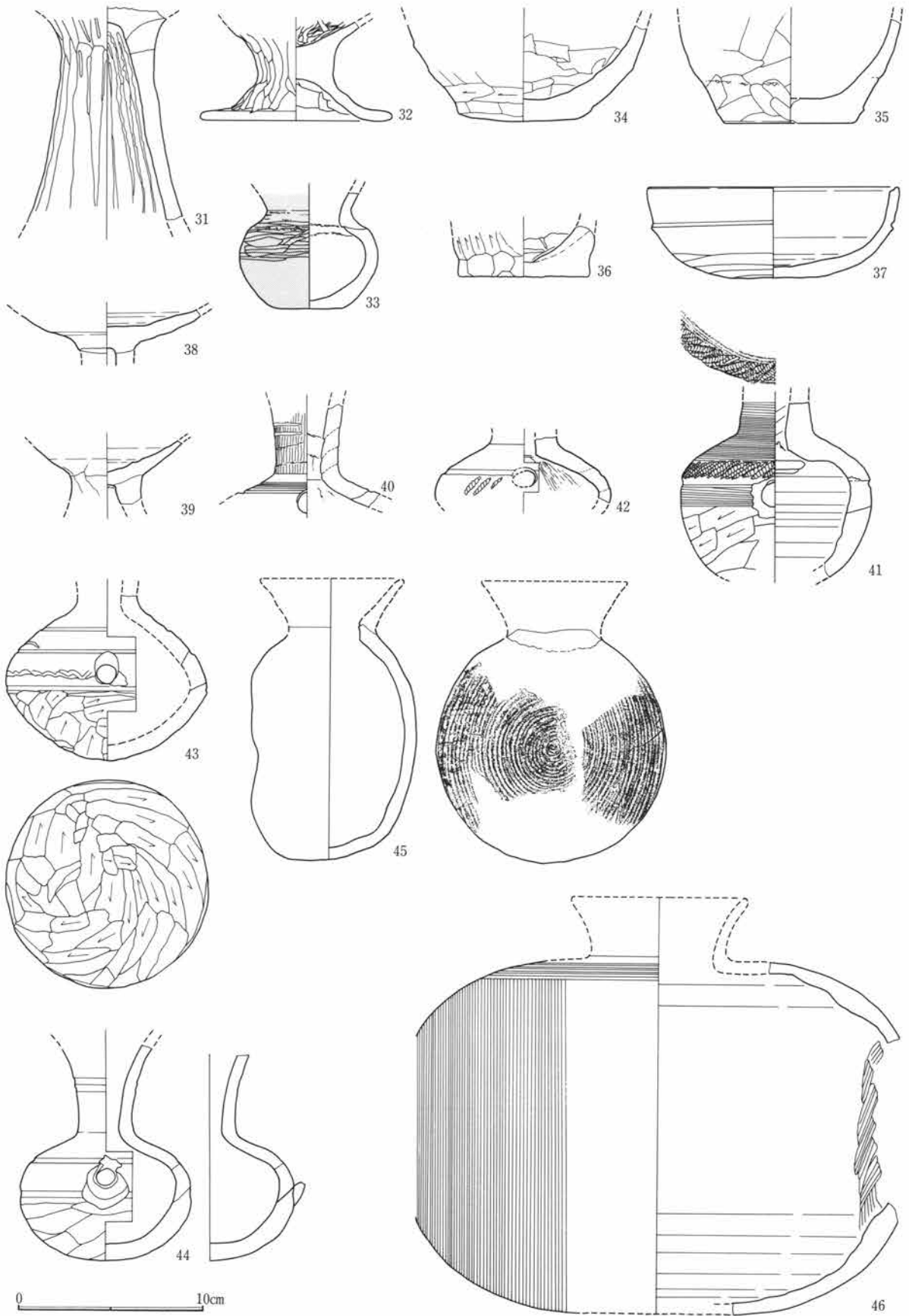


第285図 グリッド出土遺物

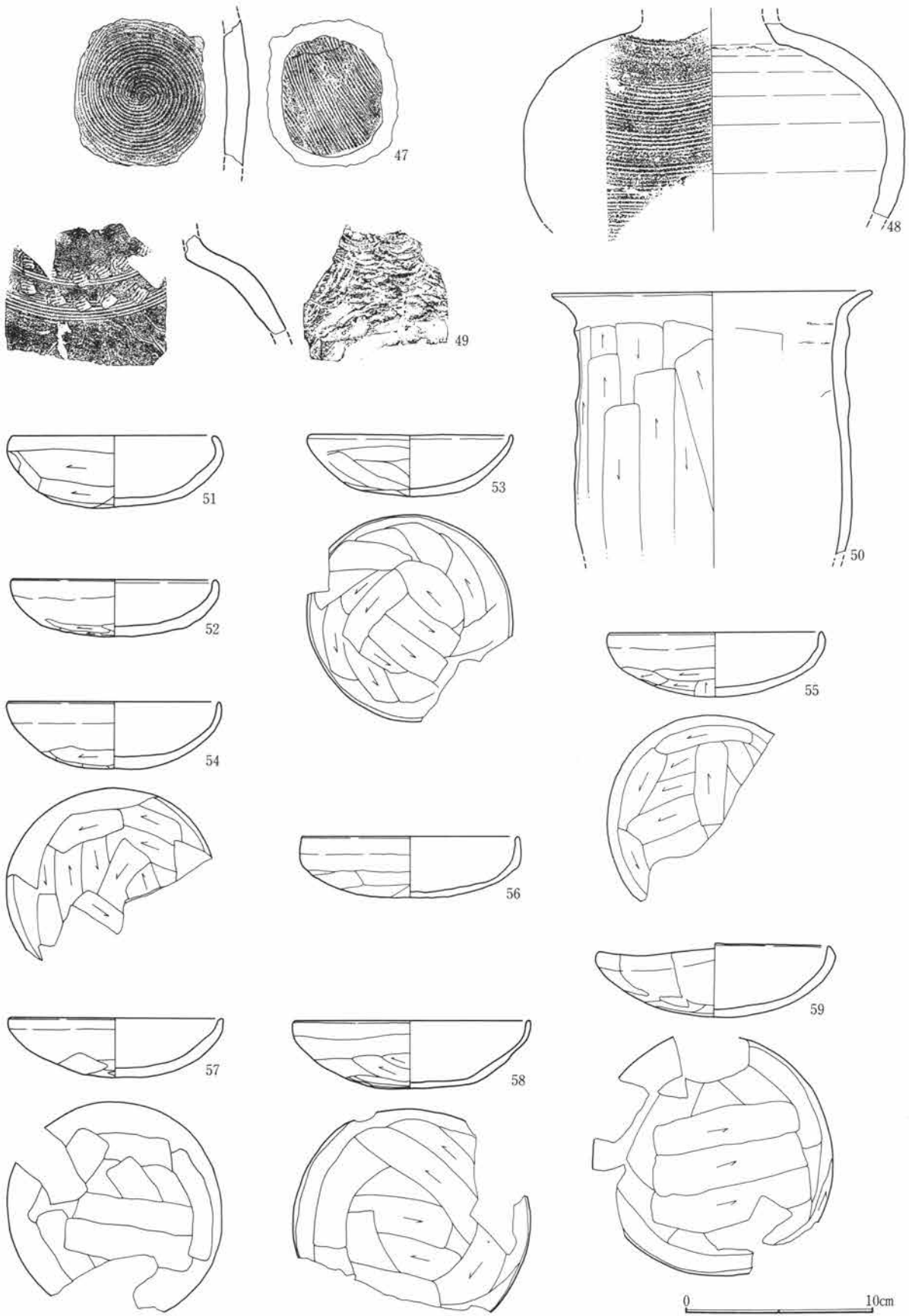


第286図 グリッド出土遺物

II 発掘調査の記録

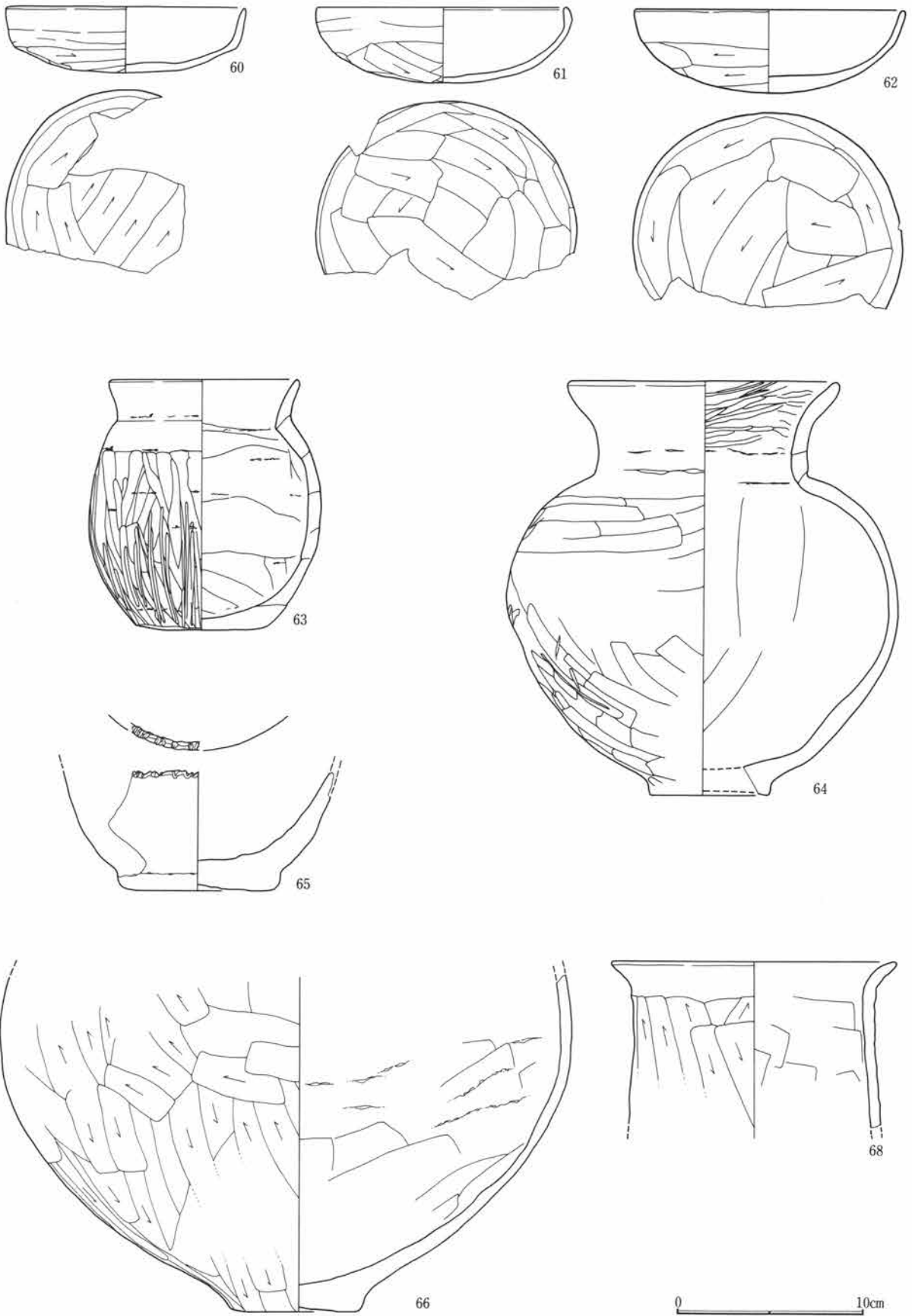


第287図 グリッド出土遺物

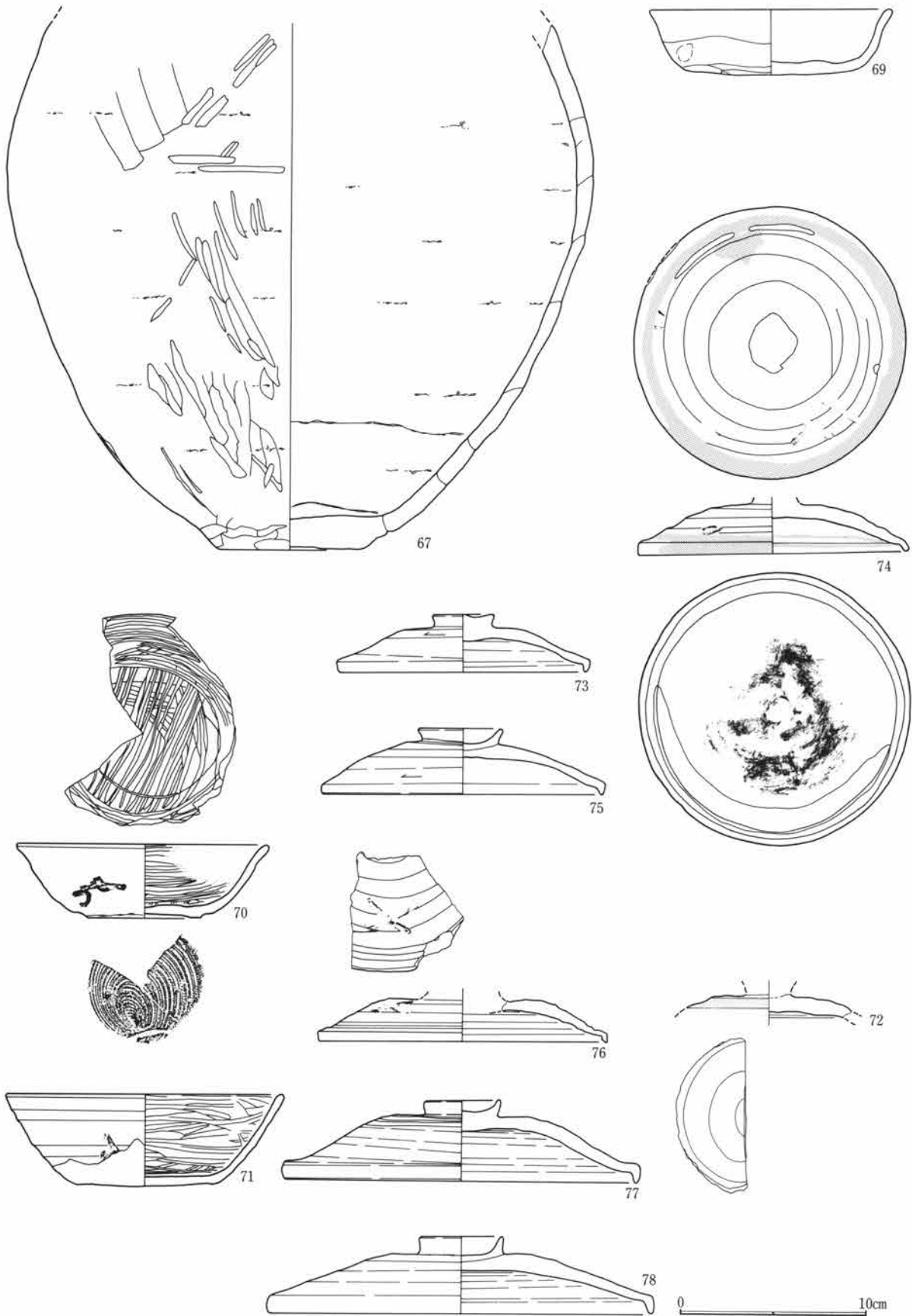


第288図 グリッド出土遺物

II 発掘調査の記録

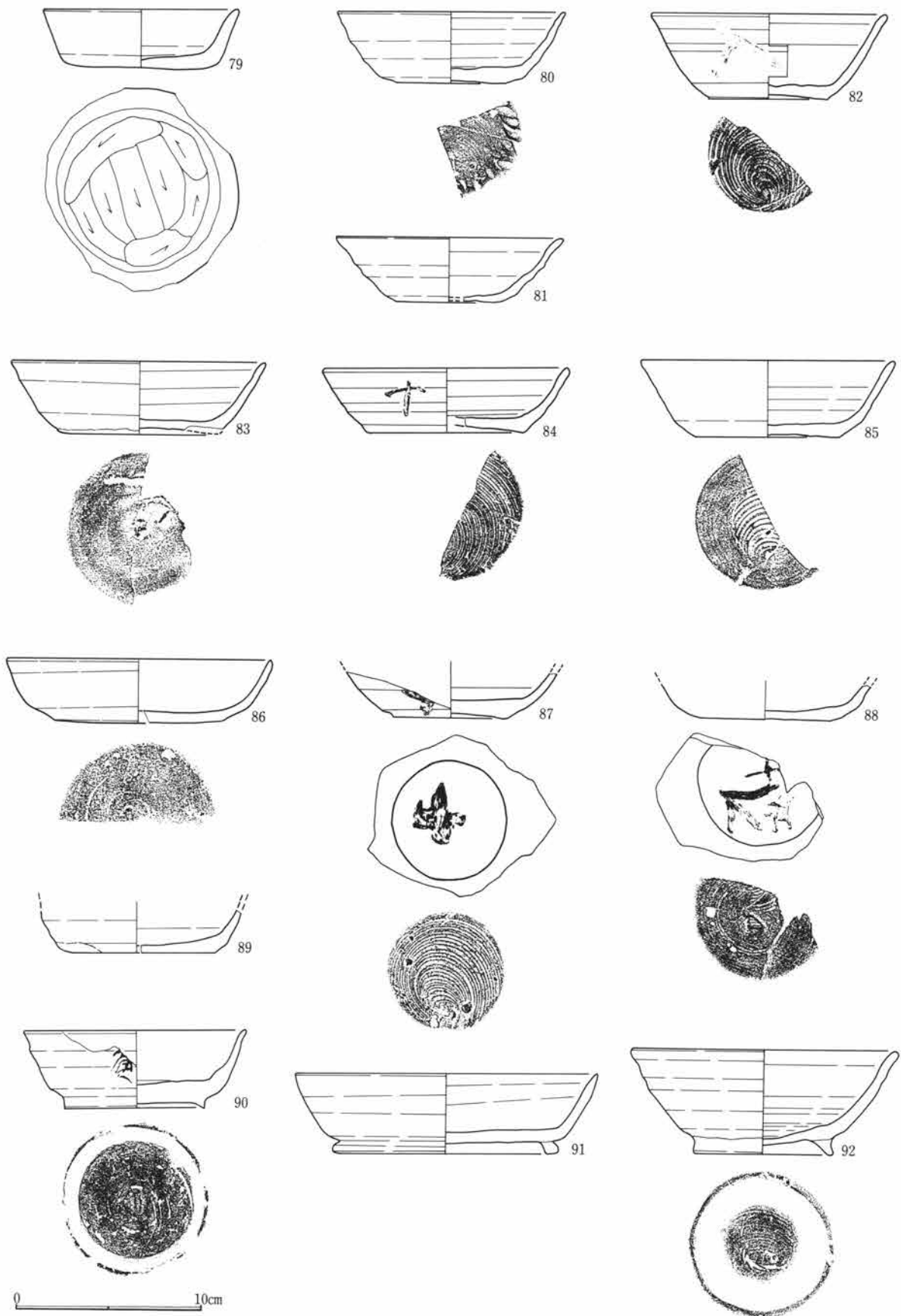


第289図 グリッド出土遺物

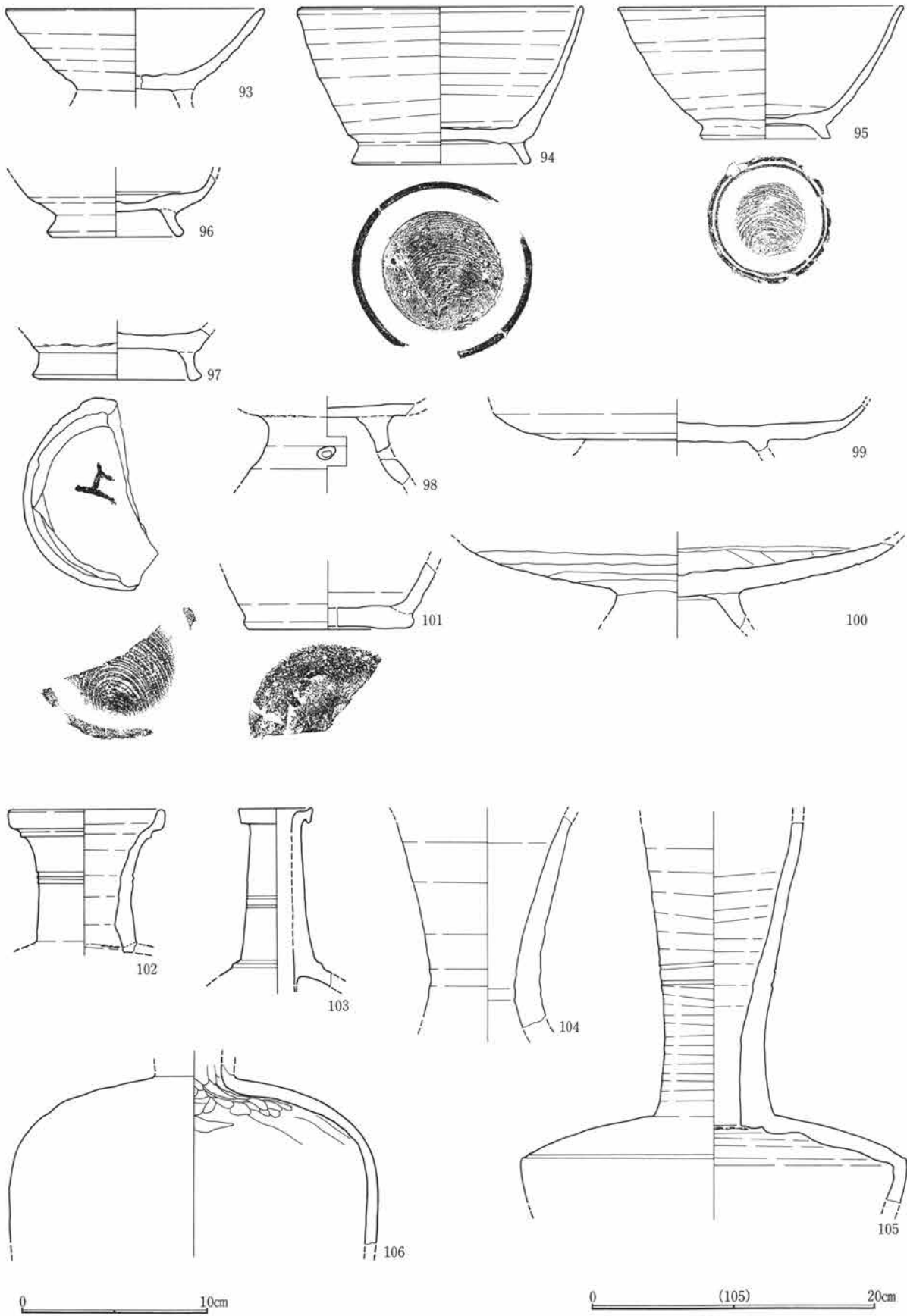


第290図 グリッド出土遺物

II 発掘調査の記録

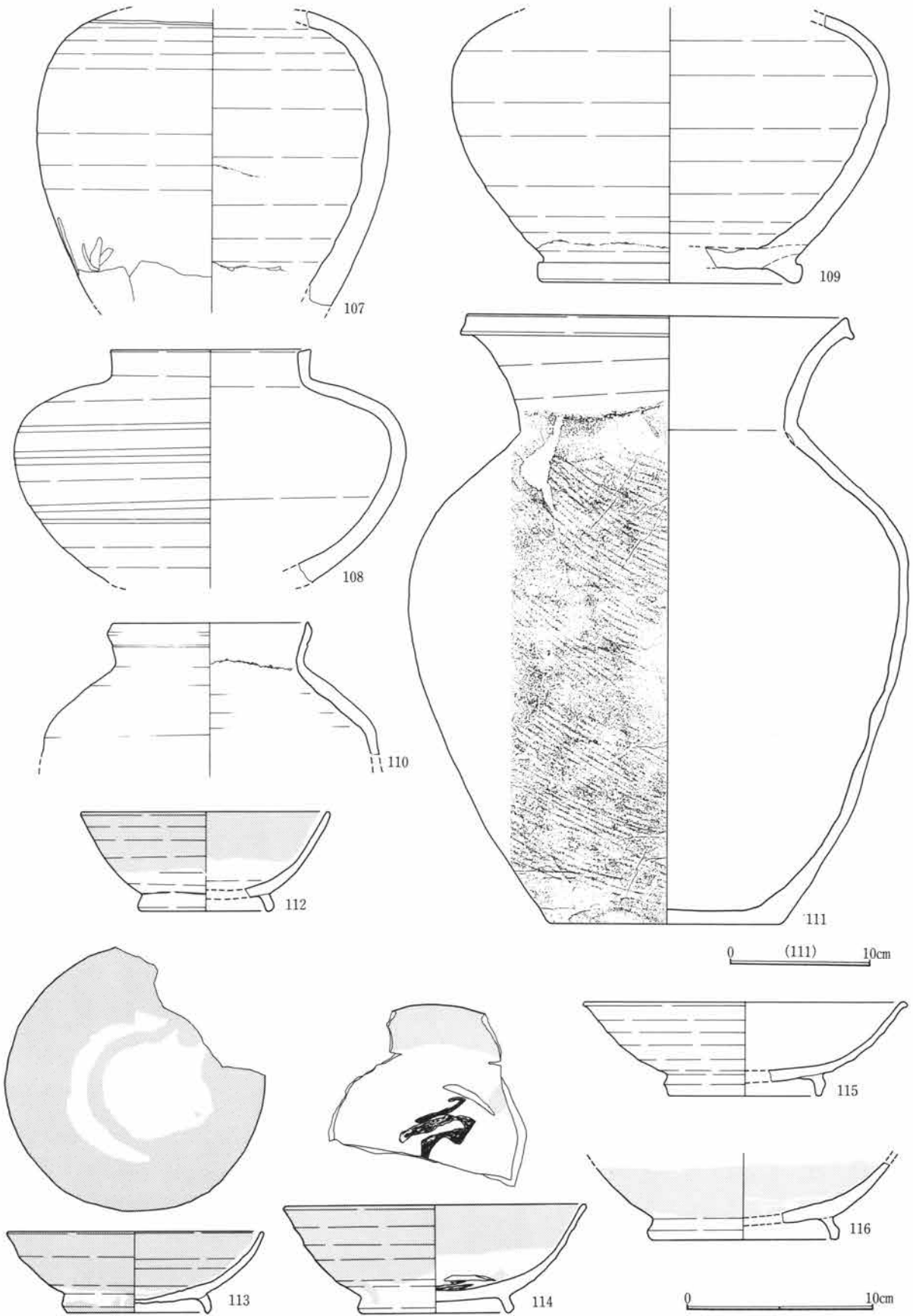


第291図 グリッド出土遺物

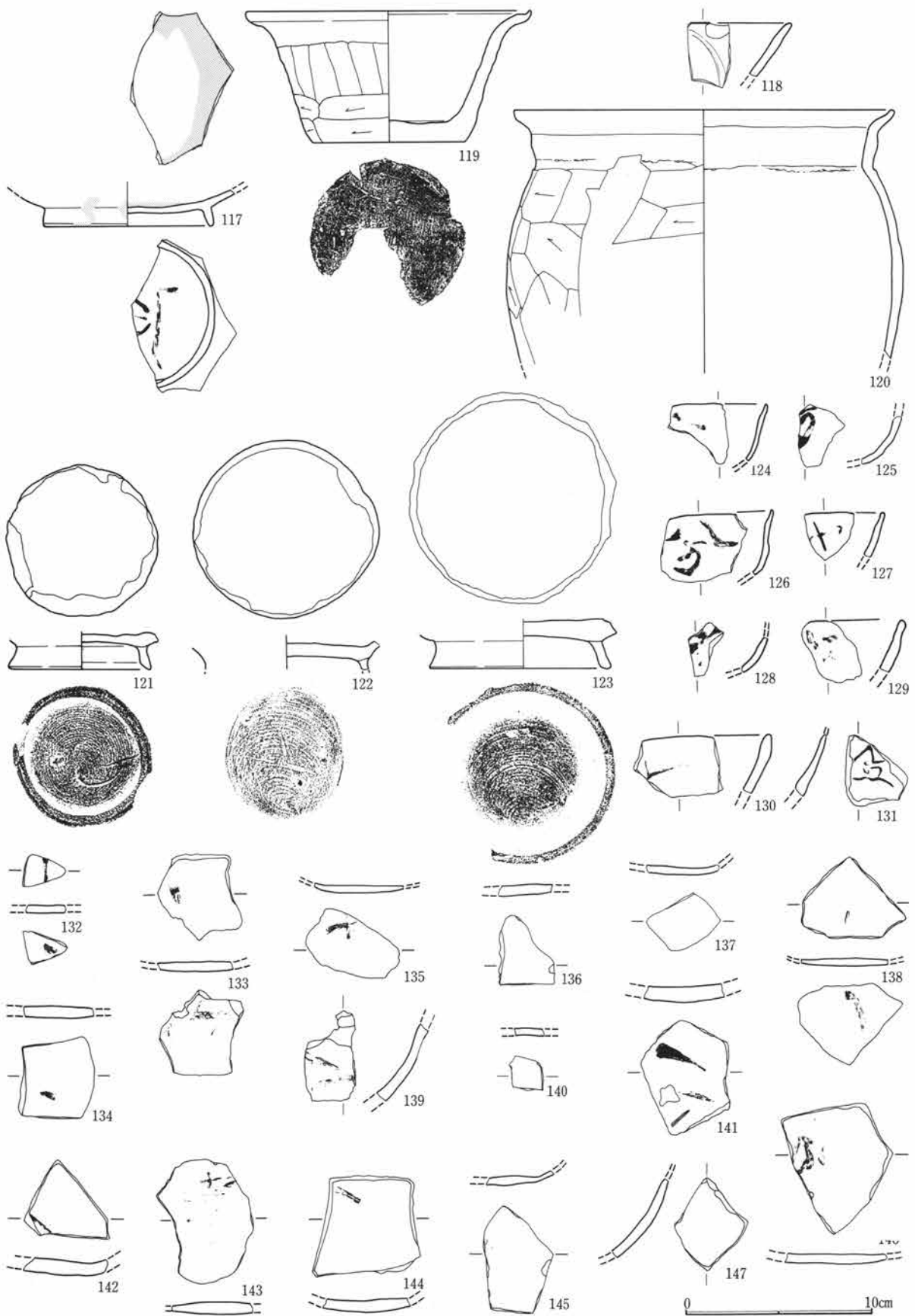


第292図 グリッド出土遺物

II 発掘調査の記録

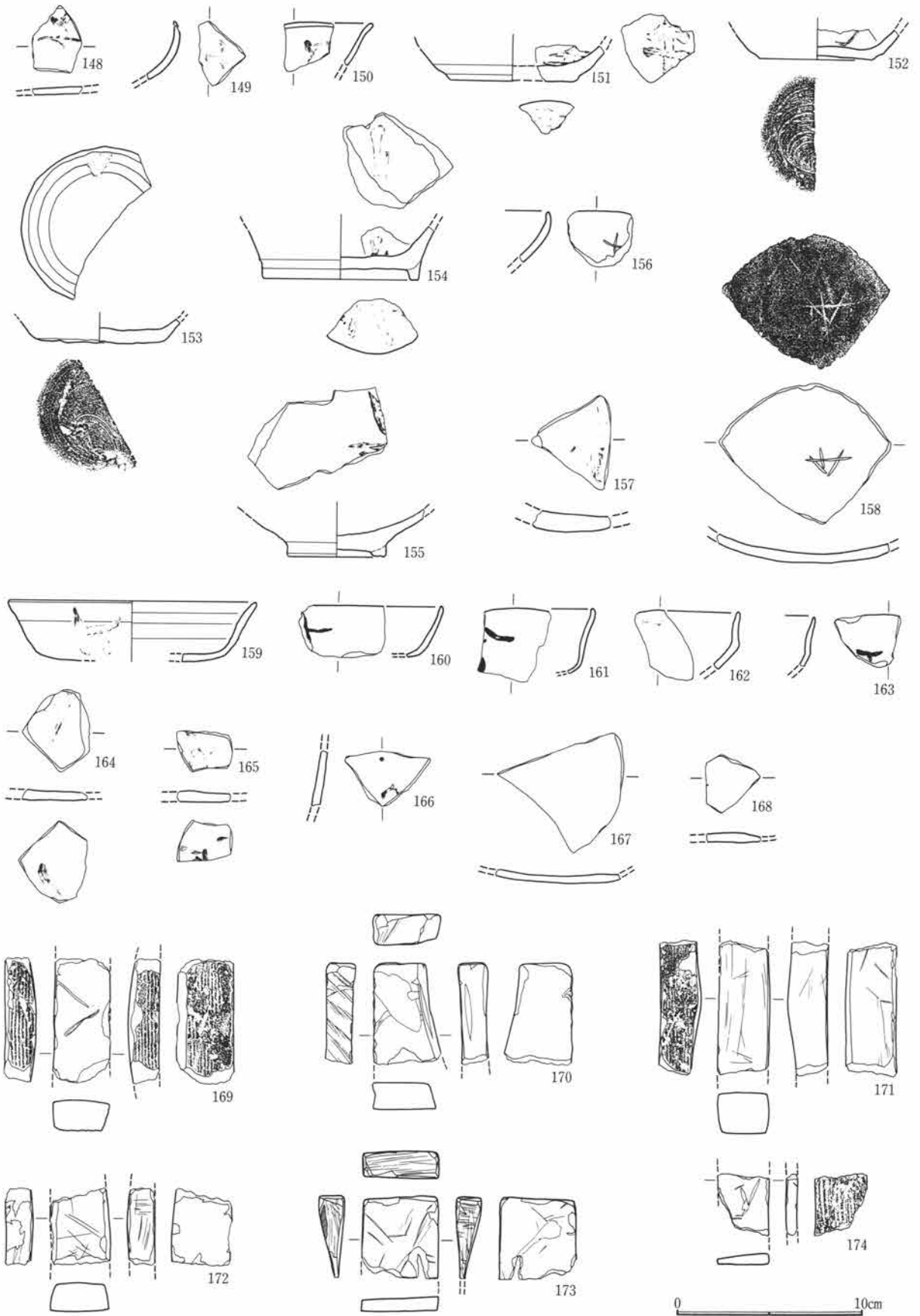


第293図 グリッド出土遺物



第294図 グリッド出土遺物

II 発掘調査の記録



第295図 グリッド出土遺物

Ⅲ 成果と問題点

1 ま と め

A 溜井について

溜井については、荒砥天之宮遺跡で確認され古代の農業発達史に位置づけられた。

すなわち、初期農業社会にあつては、自然湧水利用の用水確保が行われ、労働力および生産力の掌握、拡大に伴って居住域とともに生産域である水田の拡大が進行していく。溜井は、その時代動向の中で生み出された人工の井戸である。湧水利用による限られた水田経営から、新たな用水確保により生産力の拡大が実現したことが理解できる。この遺跡で確認された溜井も、この農業発達史の動向に位置づけられるものである。1号溜井は、湧出部である井戸の周辺に石敷きがあり、さらに上屋の存在を想定させる柱穴も検出されている点が注目される。水田への水補給という機能のみではなく、水資源を重要視することによる付加施設の存在も想定させる。さらに、この溜井の通水路は、水田内にあるくぼみにつながっている。このくぼみは、おそらく温め状の機能をもつものと思われる。溜井から連続する通水路は、規模も小さく、また継続的な通水があつたような所見は得られていない。この遺跡での開田にあつては、一義的には、この温め状のくぼみが用水として利用されたことも推定できる。

谷頭付近に設けられた温め状のくぼみに、湧きだす地下水を溜め、天日で暖めながら、水田へのかけ流しをおこなう、というものだろう。この温め状のくぼみには、大小の礫が多数認められている。いずれも底面に散布しているが、滞水時には礫の上面が水面上に出る。おそらく、太陽熱による温熱効果により高まるようにしたものだろう。主たる用水は、この温め状の部分から得るものとし、台地縁辺には、不足水の補給的用途をはたす溜井が掘削されているのではないだろうか。

このような構造をもつ「温め」は、すでに新里村

の峰岸遺跡で確認されているものである。ただ、峰岸遺跡例は、通水路に伴う温め施設であり、二之宮谷地遺跡例は、滞水に伴う施設となる点が異なっている。

この温め状のくぼみは、開田に伴う施設であり、以降継続的な水田経営の拡大により、この施設は埋められながら、水田化されていく。おそらく、平安時代には、溜井や温め状の灌漑施設によらない別の灌漑方法がとられているのであろう。調査区内では、この時期の用水確保に関する情報は得られていない。

また、1号溜井に接して1カ所、さらに下位に1カ所溜井が存在する。いずれも湧水部である井戸と通水路による構造であり、1号溜井にあるような石敷や柱穴などは認められない。より安定した用水補給を目的とした施設であろう。

B 転用硯について

今回の調査では、製品としての陶硯は出土していないが、転用硯と考えられる資料が15点ほど得られている。ここで転用硯とした遺物にはいくつかの問題点が含まれているものと考えられ、以下の点について整理をしておきたい。

a 転用硯の必要条件

基本的なことであるが、どのような条件をもっている遺物を転用硯とするのであろうか。これまでの報告例から次ぎの内容が指摘できる。

- (1) 摺墨による墨痕を残している。
- (2) 摺墨による磨面をもっている。
- (3) 転用される土器は坏・碗・蓋の底部や甕の胴部など須恵器が用いられる例が多い。さらに転用する際、縁辺部を調整する例が多い。

ほぼこのような特徴をもつ土器片について転用硯として分類されているものといえるだろう。しかし、個々の報告例をみていくとその内容に多少の相違があるように思われる。

特に(1)にある墨痕の有無は、遺物を観察する限り一様ではないようにみられる。言い換えれば、転用硯と分類される遺物の中で、墨痕が認められるもの

が極めて少ないのではないだろうか、ということである。この遺跡で、転用硯としたものについても、朱墨が残る例以外は、墨痕が観察できるものはほとんどないのである。当然、埋没状態により消失する場合がある。事実、隣接する二之宮洗橋遺跡の墨書土器の例では、同一個体の土器片が、一方が台地上、もう一方が低湿地内で出土し、この低湿地出土片には全く墨書が消失していた。このような例からすれば、墨痕の残存は埋没状態によって左右され、不安定なものだともいえるだろう。

しかし、この遺跡では、住居内および低地部を含め、墨書土器と共に出土している。墨書は濃淡はあるが、肉眼で観察できる程度は残っている。それでも、転用硯としたものには、肉眼および赤外線カメラによる観察でも、墨痕は認められていない。何らかの原因により消失したのか、当初から墨が摺られていないのか、いずれかの理由だろう。

このことは、(2)の磨墨による磨面をもつ、という点と関連することになる。いわゆる転用硯とするものは、墨痕が存在するか、または磨面があるか、もしくはその両者が認められるか、いずれかの点が観察できればこれに分類されているだろう。磨墨と磨面が観察できる場合は特に問題はない。しかし、それぞれの遺物を観察していくと、磨面が認められても、墨痕が認められないものがあることに気がつく。二次的に磨面が形成されるほど、磨られているにもかかわらず、墨痕が残らない場合があるのだろうか。同時に、磨墨によって土器面に磨面が形成されるものであろうか。この2点が、遺物観察を経過するなかで問題となった。土器面が、平滑になるほど磨面が形成されているものは、同心円状に面が観察できる。この磨面は、連続的な摩擦により形成されるものだろう。もし、このことが墨によって行われているとすれば、墨痕が残らないことは考えにくい。また、十分な検討を経ていないが、土器面に出土資料と同様な磨面を形成しようとする、木製工具、例えば竹などを使用して連続的な摩擦を加えると、比較的類似する結果が得られている。当時の墨の硬度

がどの程度か不明だが、少なくとも土器面に磨面が形成できるようなものとはいえないのではなかろうか。

そうすると、磨面があり、墨痕の認められない資料は、磨墨されていない、つまり墨が使用されていないものと考えられるのである。

(3)に関係することでもあるが、墨痕や磨面とも認められないものの、坏、椀などの底部片の縁辺を二次的に調整したとみられる土器片がみられる。この遺物については、縁辺の調整のみで他の使用痕がないため、どのような転用を目的としたものであるかは判断できない。しかし、転用硯という点から、改めてこの遺物を見ると、やはり硯としての転用を目的とした可能性が考えられるのである。

前記した墨痕や磨面をもつ資料を含めて、考えてみることにしよう。

転用硯は、土器片の二次的使用であるため製品としての規格性に乏しい遺物である。墨を磨るという目的が達成できれば、その役割がはたせる用具だろう。これには、ある程度の大きさの土器片があれば、足りるということだろう。

では、その目的を果たす土器片は、どのようにして用意されたのだろうか。

この遺跡から得られた資料をもとに考えてみると、次のようなことが推定される。

結論からいうと、前記の各資料は、転用硯として使用する上での、それぞれの準備段階での遺物ではないか、ということである。

土器片の縁辺を調整したものは、硯として転用する準備段階の遺物。

この土器片の器面に、木製工具などを使用し磨面を形成する段階の遺物。

準備したものを、硯として使用する段階。

以上のような準備段階があり、出土遺物にはそれぞれの段階のものが残されているのではないかと推定した。今回の報告では、検証が不十分であるが、このように考えて、いずれの遺物も転用硯として扱うことにした経緯をのべておく。

2 出土土器について

1. はじめに

二之宮谷地遺跡では、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、井戸跡、土坑、水田跡が検出され、これらの遺構からは概ね古墳時代後期から平安時代にかけての遺物、特に土器が主体的に出土している。これらの遺物のうち竪穴住居跡から出土した土器によって二之宮谷地遺跡の集落変遷を考えるうえでの時期設定を行ってみた。

時期の設定にあたっては、各住居跡から出土した土器に土師器杯、碗、甕、甌、黒色土器杯、碗、須恵器杯身、杯蓋、碗、皿、高杯、長頸瓶、浄瓶、甕、短頸壺、甕、羽釜、甌、灰釉陶器碗、皿などがみられるが、普遍的に出土している土師器杯、甕、須恵器杯、碗についてその形態と整形技法の面から分類を行い、各住居跡でのそれぞれの共伴関係を考慮して各期の設定を行った。

2. 分類

各器種の分類にあたっては、前記のように土師器杯、甕、須恵器杯、碗の2種類4器種について行った。これらは、各期の住居において供膳形態および煮沸形態の主体を占める土器であり、住居跡からは普遍的に出土しているものであることから住居跡の属する時期の判断に最も有効であると考えられる。

土師器杯

A類 蓋受けをもつ須恵器杯身と蓋を模倣した形態を呈するタイプ。器形の特徴としては、丸底を呈し、口縁部下に稜をもつ。

A-1

須恵器杯身を模倣した形態。口径が11cm代で口縁部が垂直に立ち上がる形態(a)と口径12~13cm代で口縁部が内傾した形態(b)が見られる。

A-2

須恵器高杯の身を模倣した形態。底部は丸みをもつが中心部が平坦なものと全体に丸底のものがみられる。口縁部は外傾し、下半に段をもつ。

A-3

須恵器杯蓋を模倣した形態。口縁部が大きく外傾す

るもの(口径12~13cm代)とあまり外傾しないもの(11~12cm)が見られ、口縁部下の稜も明確なものと弱いものが見られる。

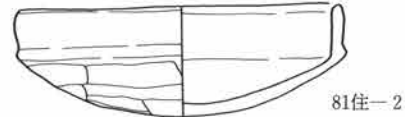
A-4

口縁部下の稜は弱く、口縁部は垂直に立ち上がり、上半が僅かに外反する。口径は、10.5~11.0cmと12.8~14.5の2種類が見られる。

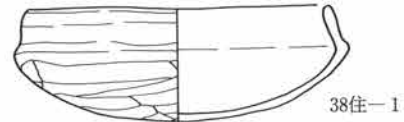
A-5

器高に比べて口径が大きく、盤状を呈する。口縁部下の稜はA-3と同様弱く、口縁部は大きく開き外反する。口径は、12.0~19.0cmであるが、14cm代と18cm代が主体的である。

A-1 a



A-16



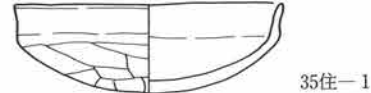
A-2



A-3



A-4



A-5



B類

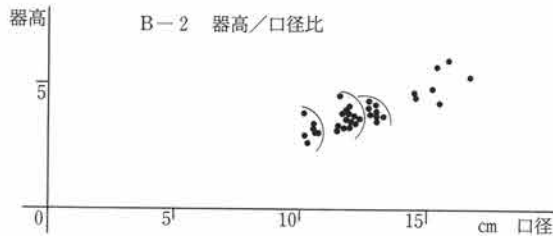
底部は、丸底を呈し、口縁部は内傾または内彎、内彎ぎみになる。

B-1

口縁部は、短く内傾する。口径は、10.3~13.6cmで概ね10cm代と12cm以上の大小の法量分化が見られる。

B-2

口縁部は、内彎し、外面の整形では口縁部横ナデの下位に無調整部分が存在するものも見られる。口径は、10.3~16.6cmで10.5cm前後、12.0cm前後、13.0cm前後、15cm以上の大中小および特大の法量分化が見られる。



B-3

底部は、大部分が丸底であるが一部平底ぎみのものも見られる。口縁部は、内彎ぎみか直接的に立ち上がる。口径は、11.2~15.6cmで12cm前半代と13cm後半代が中心的である。

B-4

底部は、口縁部との境は明確ではないものの平底ぎみである。口縁部は、ほぼ直線的に立ち上がる。口径は、10.2~13.4cmであるが、12cm前後が主体的である。

C類

底部は、緩い丸みをもつがほぼ平底か平底を呈する。口縁部は、直接的に開くものと口縁部上半が外反するものが見られる。口縁部の整形は、横ナデとヘラ削り間に無調整が残るものと無調整だけのものが見られる。

C-1

底部は、緩い丸みをもつがほぼ平底を呈す。口縁部は、僅かな丸みもち、やや開く。底部と口縁部の境は、やや不鮮明である。口径は、11.0~12.0cmで

法量分化は見られない。

C-2

底部は、ほぼ平底化するが若干の丸みが見られるものもある。口縁部は、ほぼ直線的にやや開く。口径は、概ね12cm前後である。

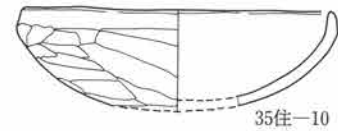
C-3

底部は、C-2と同様である。口縁部は、直線的に大きく開く。C-1、C-2に比べて器高は多少高い。口径は、11.4~12.8cmであるが法量化は見られない。

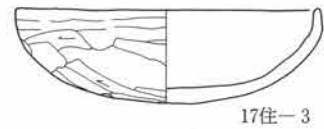
C-4

底部は、ほぼ平底化を呈す。口縁部は、上半で外反

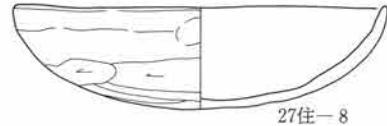
B-1



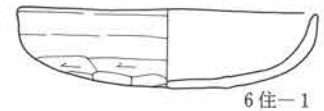
B-2



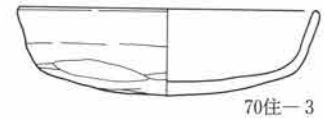
B-3



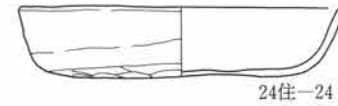
B-4



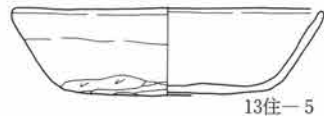
C-1



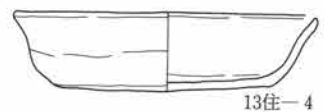
C-2



C-3



C-4



し、口唇部が垂直に立ち上がるものも見られる。口径は、11.4～13.0cmであるが概ね12cm前後が主体的である。

土師器甕

A-1

長胴甕、口縁部は水平方向に大きく開く。頸部のくびれは鮮明ではない。胴部はほとんど膨らみをもたないで上位から中位までほぼ同じ径で、最大径は口径が示す。外面胴部の整形は、縦方向への3～4段程度のヘラ削りである。

A-2

長胴甕、口縁部は大きく外反する。頸部のくびれは鮮明ではない。胴部は多少の膨らみをもちその膨らみは中位で最大になるが、最大径は口径が示す。外面胴部の整形はA-1と同様であるが、底部付近は斜め方向のヘラ削りである。

A-3

長胴甕、口縁部は僅かに外反する程度である。頸部のくびれは鮮明ではない。胴部はほとんど膨らみをもたない。最大径は口径が示す。外面胴部の整形はA-1、A-2と同様に縦方向ヘラ削りである。

A-4

長胴ではないが、口縁部はA-3と同様で、頸部のくびれは鮮明ではなく、口縁部が僅かに外反する程度である。胴部は頸部から底部に向けてつぼまる。最大径は口径が示す。外面胴部の整形は上位から中位までが縦方向ヘラ削りで底部付近が斜め方向のヘラ削りである。

B-1

胴部は長胴甕に比べてやや短小化の傾向が見られる。口縁部は直線的に開き、頸部のくびれは明確である。胴部の膨らみは中位よりやや上であるが、最大径は口径と胴部の膨らみとがほぼ同一である。外面胴部の整形は縦方向ヘラ削りであるが、一部上半が斜め方向のヘラ削りのものも見られる。

C-1

頸部は「く」の字状を呈す。口縁部は直線的に開く。胴部は上位に膨らみをもち、最大径は胴部上位と口

径がほぼ同一、または胴部の方が多少大きくなる。外面胴部の整形は上位が横方向、中位より下位が縦方向への2段のヘラ削りである。

C-2

口縁部と頸部の境は明確でなく、頸部から口縁部は外反ぎみに開く。胴部は上位に膨らみをもつ。最大径は胴部上位と口径がほぼ同一、または胴部の方が多少大きくなる。外面胴部の整形は上位が横方向、中位より下位が縦方向ヘラ削りである。

D-1

「コ」の字状口縁甕の萌芽段階で、口縁部は明確な「コ」の字状ではなく、頸部はやや外傾し、口縁部は直線的に開く。胴部は上位が膨らみ、中位から底部はあまり膨らまずにつぼまり、器壁は全体的に薄く削られている。最大径は胴部上位にもつ。外面胴部の整形は上位が横方向、中位より下位がやや斜め方向のヘラ削りである。

D-2

「コ」の字状口縁甕。頸部は口縁部、胴部の境は明確で直立する。口縁部は直線的に開く。胴部はD-1と同様である。最大径は胴部上位にもつ。外面胴部の整形はD-1と同様である。

D-3

「コ」の字状口縁甕であるが、器壁がD-2に比べてやや厚く、頸部の形状もややだれている。胴部の形状や整形はD-3と同様であるが、胴部の膨らみはD-2に比べてやや弱くなる。

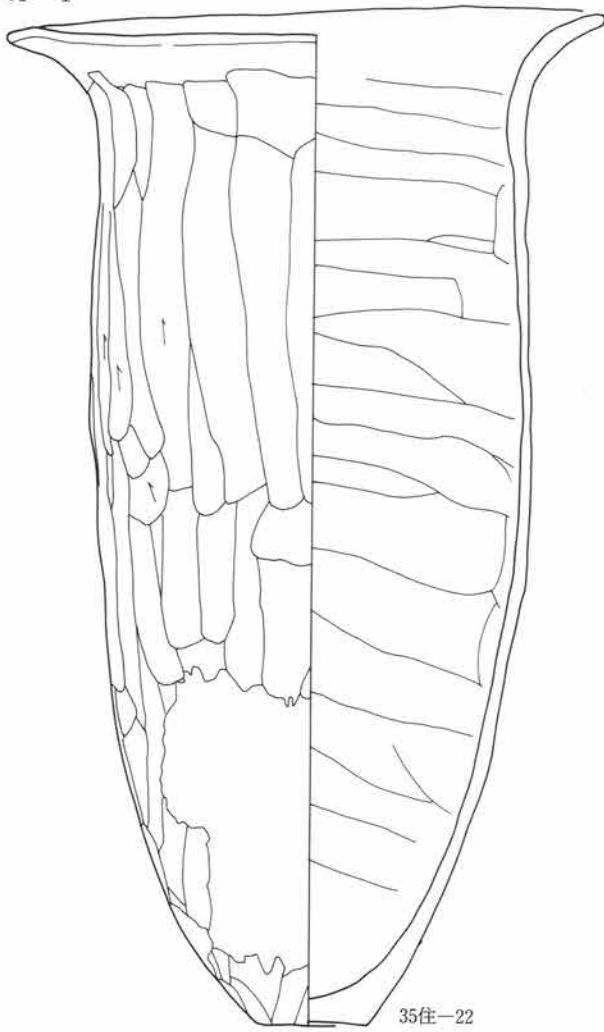
E-1

「土釜」と呼称されている甕。器壁は全体的に厚くなる。頸部から口縁部は「く」の字に開く。胴部は中位にかけて膨らむ。最大径は胴部にもつ。外面胴部の整形はD類と同様に上位が横方向ヘラ削りで中位から下位にかけては縦方向ヘラ削りである。

E-2

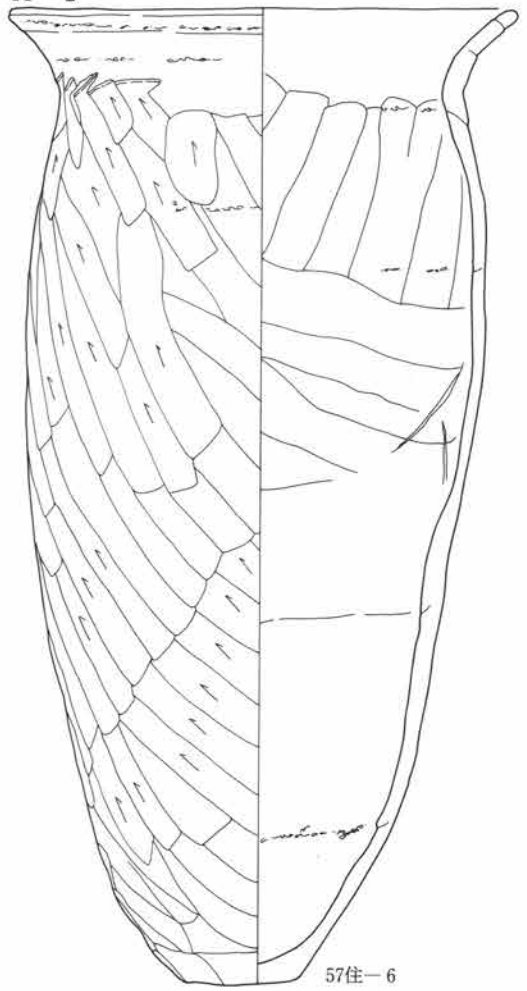
口縁部はE-1に比べて開かず、やや立ちぎみである。頸部は鮮明ではない。胴部は上位で膨らむ。最大径は胴部上位にもつ。外面胴部の整形はE-1と同様であるがE-1に比べてやや雑な整形である。

A-1



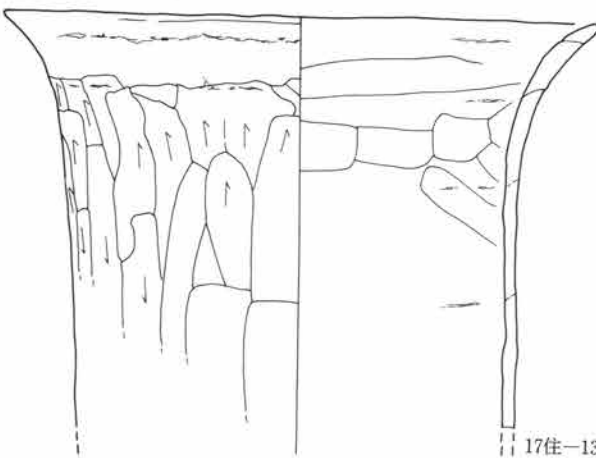
35住-22

A-2



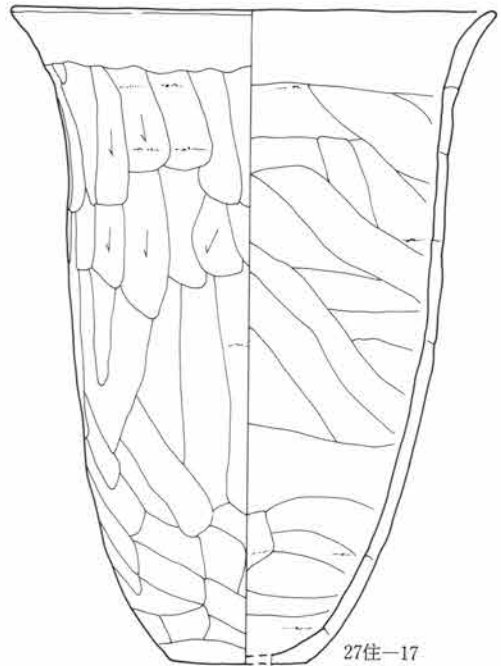
57住-6

A-3



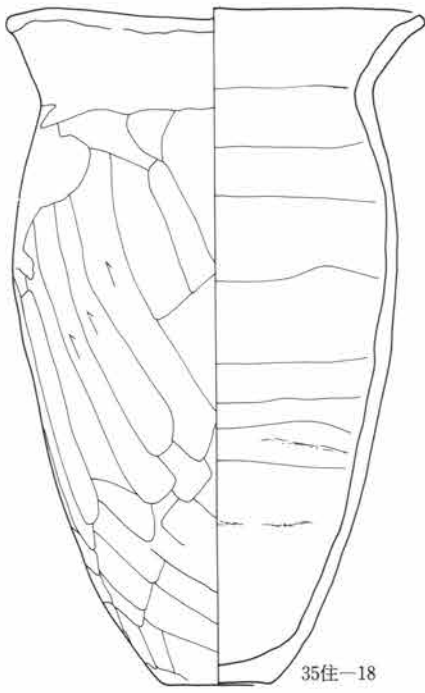
17住-13

A-4

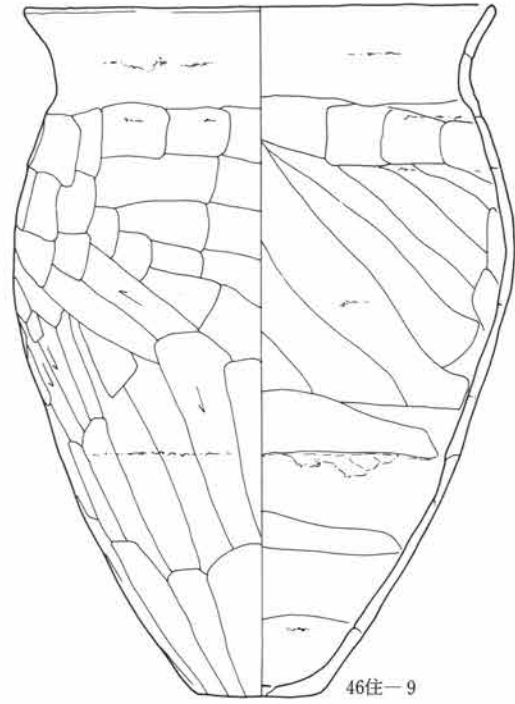


27住-17

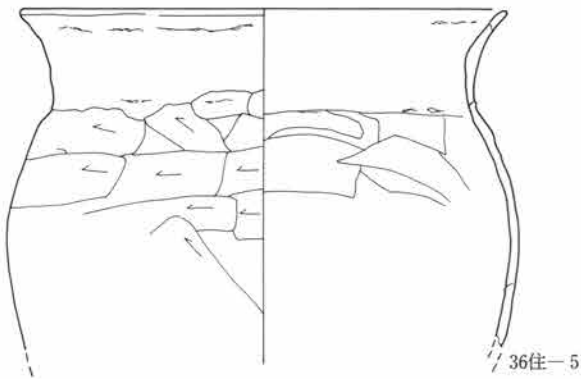
B-1



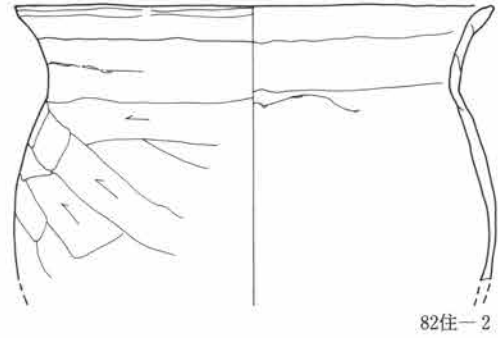
C-1



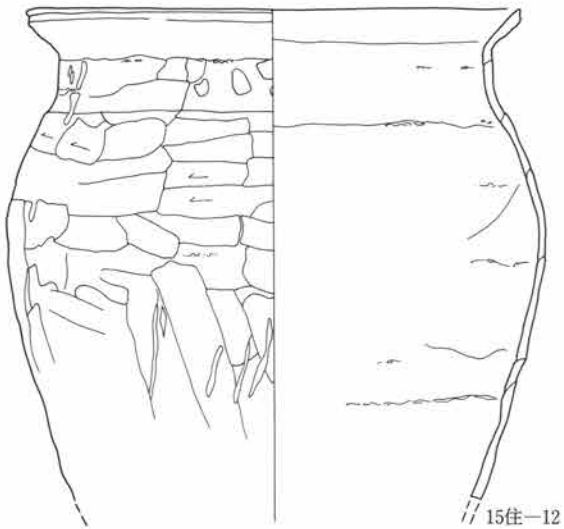
C-2



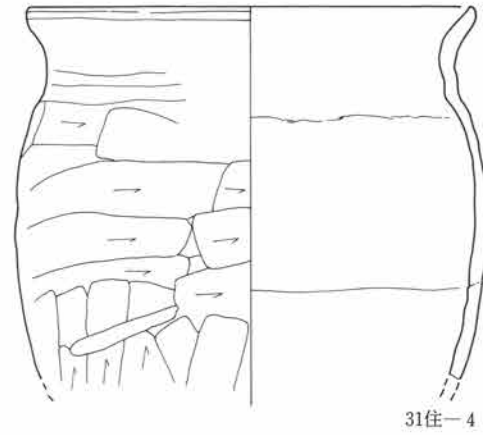
D-1



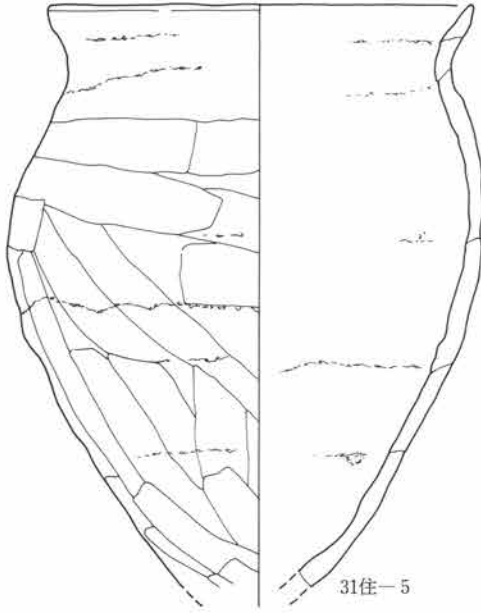
D-2



D-3

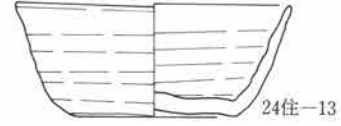


E-1



C-1

口径に比べて器高がやや高い。底部は平底。口縁部は再下部に丸みをもつがほぼ直線的に開く。底部は回転ヘラ切り。底径/口径比は57~58を示す。

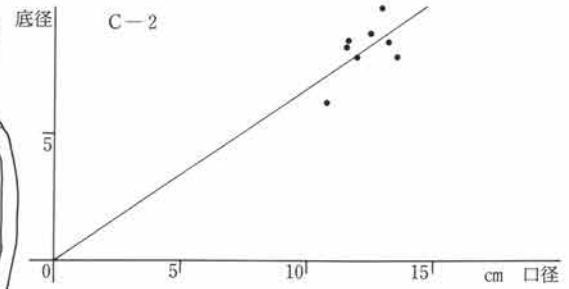
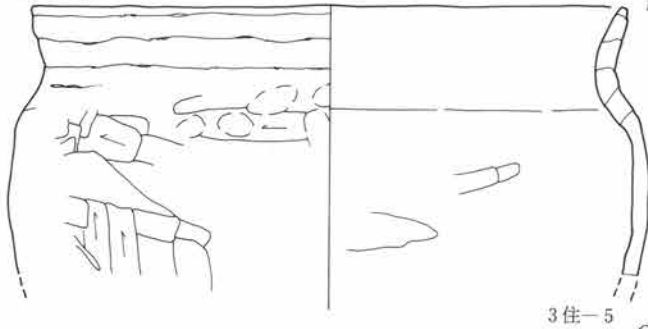


C-2

底部は平底。口縁部はほぼ直線的にやや開く。底部は全面回転ヘラ削りが施されたものが主体である。一部中心部に糸切り痕が残るものも見られる。底径/口径比は66~70を示す。

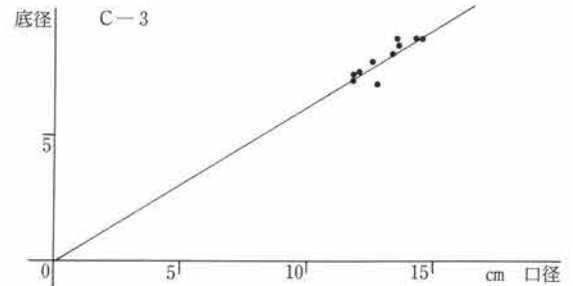
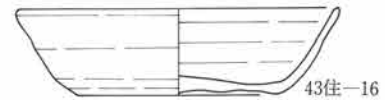


E-2



C-3

形態はC-2と同様であるが、口縁部はC-2よりやや開く。底部の整形は回転ヘラ削りが施されたものが主体であるが、一部回転糸切り無調整のものも見られる。底径/口径比は61~65を示す。



須恵器杯

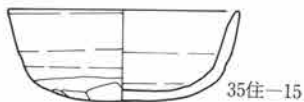
A-1

蓋受けをもつ杯身。底部は丸底。口縁部はやや内傾する。底部の整形は回転ヘラ削り。



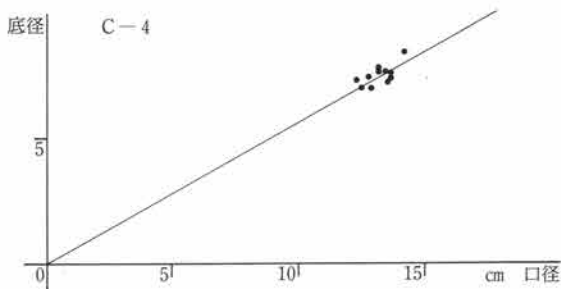
B-1

底部は緩い丸底。口縁部は直線的にやや開く。底部の整形は不安方向ヘラ削り。



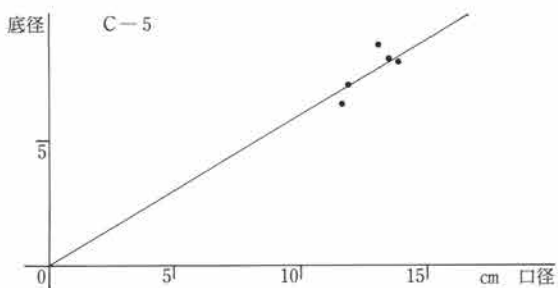
C-4

形態はC-2、C-3と同様であるが、口縁部はC-3より開く。底部は回転ヘラ削りが施されたものが主体であるが、一部底部に糸切り痕が残るものや回転糸切り無調整のものも見られる。底径/口径比は56~65を示す。



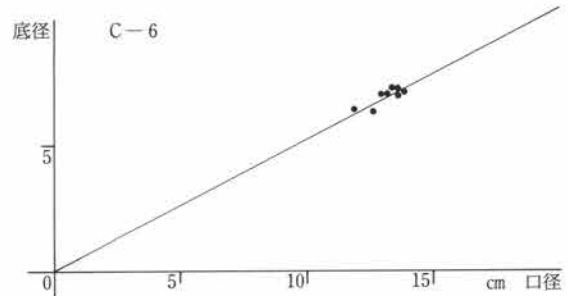
C-5

底部は平底。口縁部はごく緩い丸みを持ち開く。底部は回転ヘラ削り、中心部に糸切り痕が残るもの、回転糸切り無調整のものが見られる。底径/口径比は概ね55~60を示す。



C-6

形態的にはC-5と同様であるが、C-5よりやや開く。底部は回転糸切りで周辺部を回転ヘラ削りを施すものと回転糸切り無調整のものが見られる。底径/口径は50~54を示す。



C-7

底部は平底。口縁部は底部からの立ち上がり部分が大きく開き下位から口唇部は直線的にやや開く程度である。底部は全面回転ヘラ削りが施されたものと中心部に糸切り痕が残るものがある。底径/口径比は49~57を示す。



C-8

底部は平底。口縁部中位に稜をもつ。口縁部は下半が大きく開き、上半がやや立ちぎみに開き口唇部が僅かに外反する。底部は回転ヘラ削り調整が施され、一部口縁部下位に及ぶものもある。

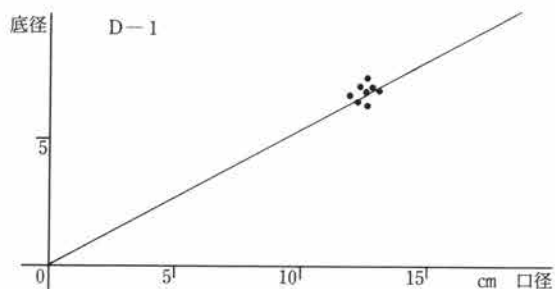


D-1

底部は平底。口縁部は丸みを持ちやや開き、口唇部は若干外反する。底部は回転糸切り無調整。底径/口径比は48~55を示す。

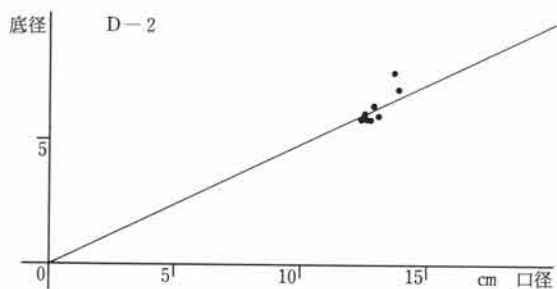


II 発掘調査の記録



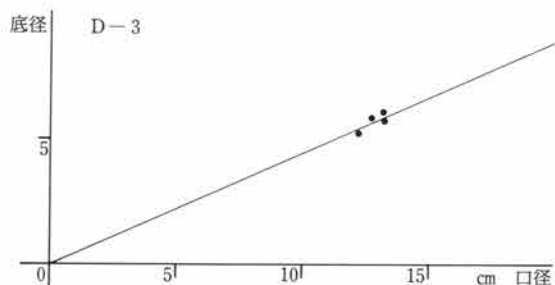
D-2

底部は平底。口縁部は丸みをもち開き、口唇部は外反する。底部は回転糸切り無調整。底径/口径比は46~50を示す。



D-3

形態、底部の切り放し技法はD-3と同様であるが、底径/口径比は45以下である。

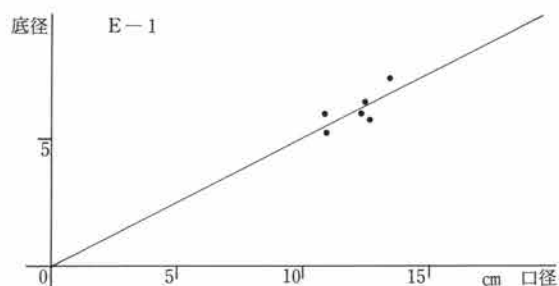


E類

還元焰焼成とともに還元焰焼成でも焼成のあまいものや酸化焰焼成によるものが見られる。

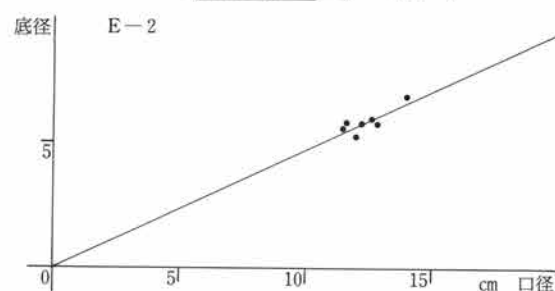
E-1

底部は平底。口縁部は直線的に開く。底部は回転糸切り無調整。底径/口径比51~55を示す。



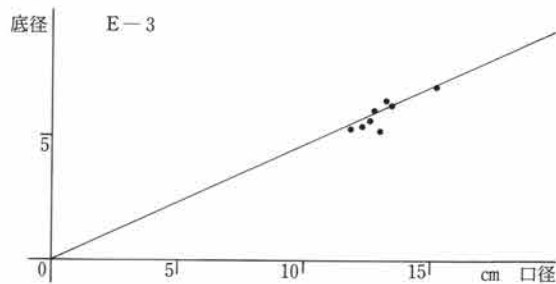
E-2

口径に比べて器高が浅いもの。底部は平底。口縁部は直線的に開く。底径/口径比は46~50を示す。



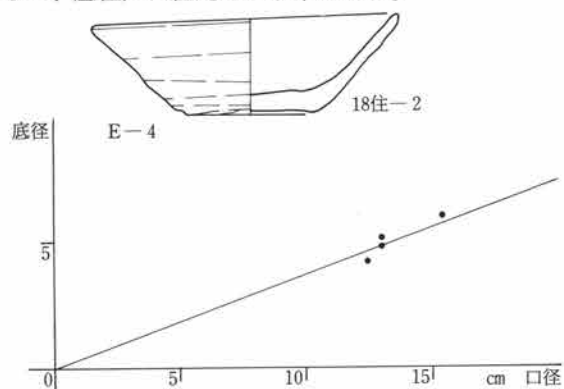
E-3

形態、底部切り放し技法はE-1と同様であるが、底径/口径比が46~50を示す。



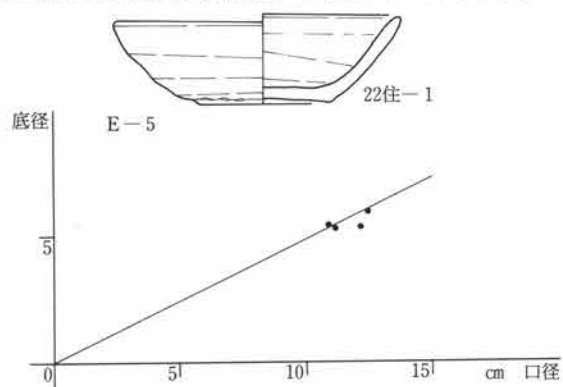
E-4

形態、底部切り放し技法はE-1、E-3と同様であるが、底径/口径比が45以下を示す。



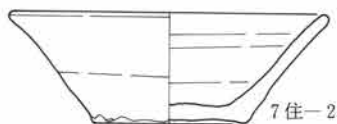
E-5

底部は平底。口縁部は若干の丸みをもち開く。底部は回転糸切り無調整。底径/口径は46~50を示す。



E-6

底部は平底。口縁部は若干外反しながら開く。底部は回転糸切り無調整。底径/口径比は43を示す。



須恵器碗

A-1

口縁部は直線的に立ち上がりあまり開かない。高台は断面三角形で直立、または若干「ハ」の字状に開く。底径/口径比は60以上である。



B-1

口縁部は口唇部が外反ぎみに開く。高台は「ハ」の字状に開く。底径/口径比は50前後を示す。

B-2

口縁部はやや直線的に開き、口縁部が外反する。高台の成形は粗雑である。底径/口径比は54を示す。

B-3

口縁部はやや丸みをもち開き、口唇部が外反する。高台の成形は粗雑である。底径/口径比概ね40~50を示す。

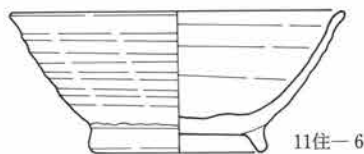
B-4

口縁部はやや直線的に開き、口唇部が大きく外反する。高台の成形はやや粗雑で「ハ」の字状に開く。底径/口径比は46を示す。

B-5

口縁部はやや丸みをもち開き、口唇部が大きく外反する。底径/口径比は49を示す。

B-1



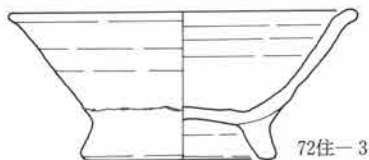
B-2



B-3



B-4



B-5



C類

器壁がやや厚く、成整形は粗雑で、焼成は酸化焰か半還元焰である。

C-1

口縁部は直線的に開く。高台は「ハ」の字状に開く。底径/口径比は50以上である。

C-2

C-1に比べて器高がやや高い。口縁部は直線的に開く。高台は「ハ」の字状に開く。底径/口径比は40台を示す。

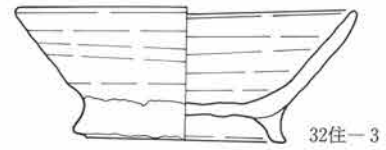
C-3

口縁部は僅かであるが中位から外反しながら開く。高台は「ハ」の字状に開く。底径/口径比は52を示す。

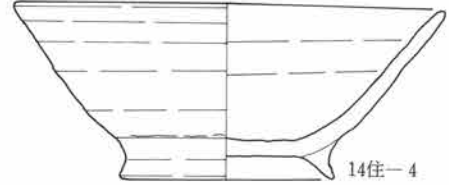
C-4

口縁部は弱い丸みをもちながら開く。高台は「ハ」の字状に開く。底径/口径比は概ね57~60を示す。

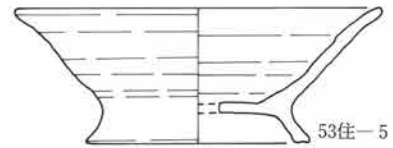
C-1



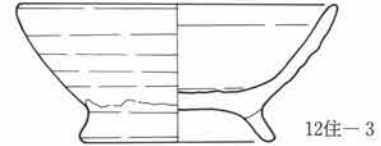
C-2



C-3



C-4



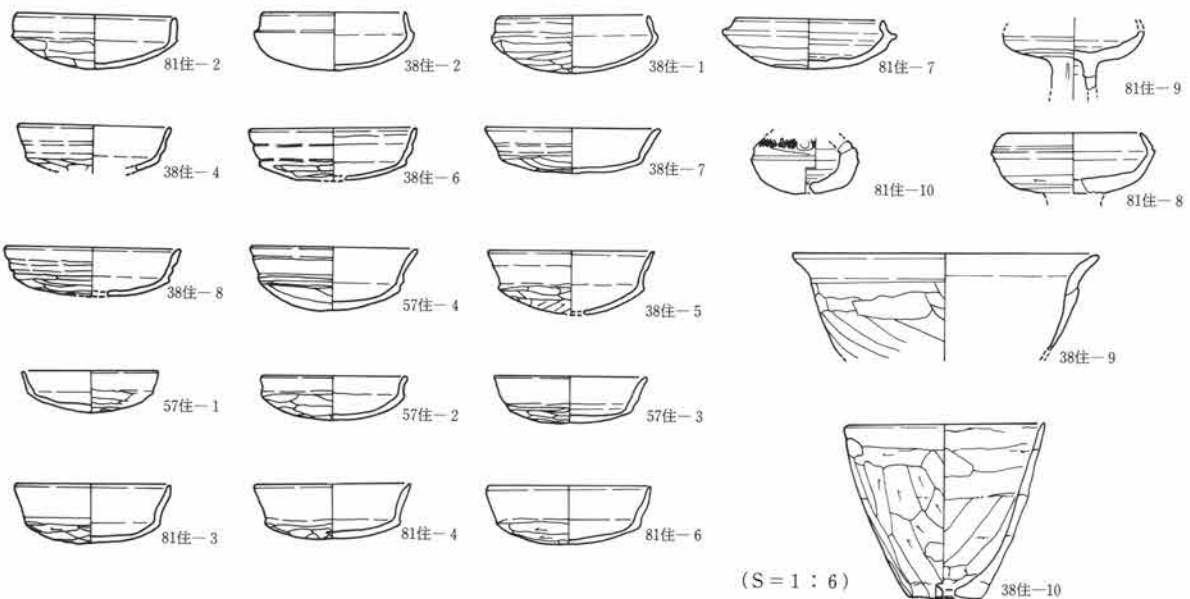
3. 各期の特徴

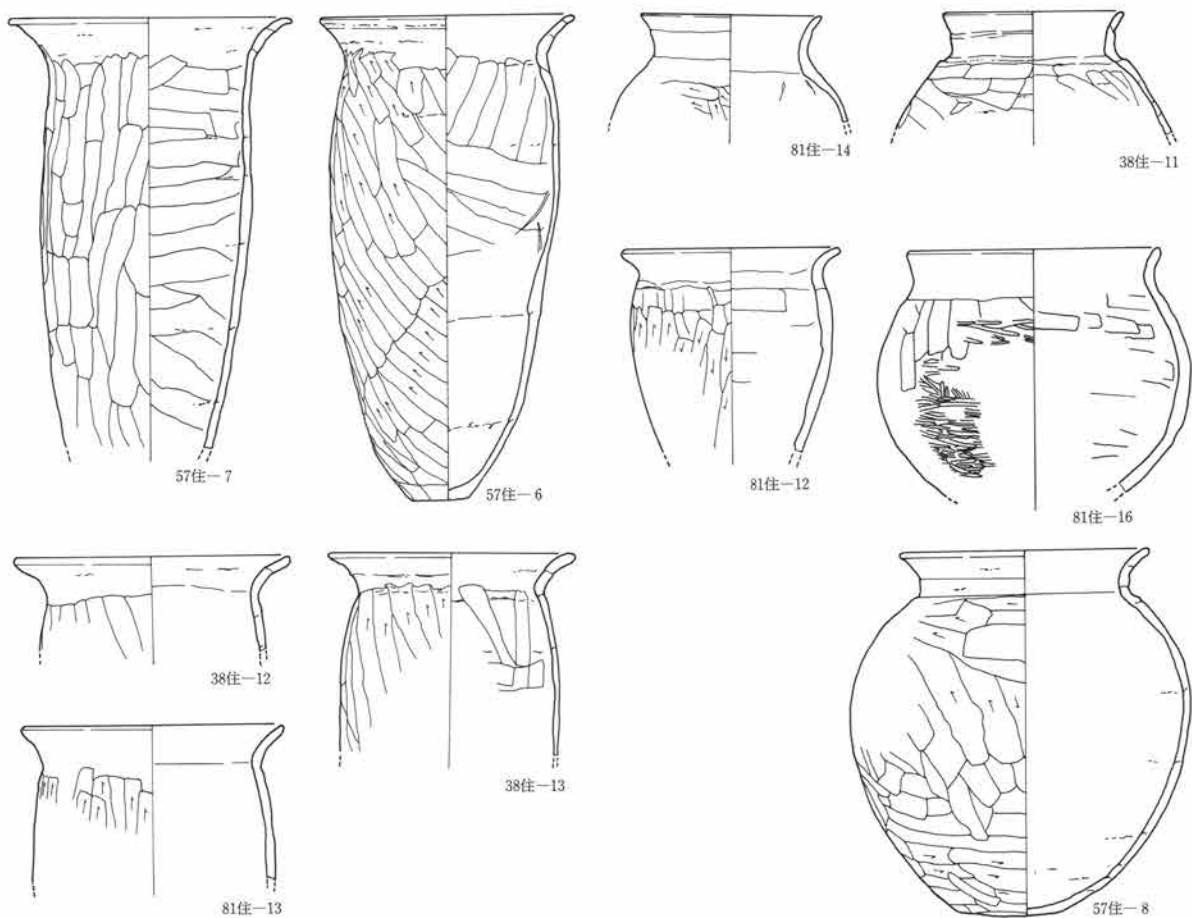
I期

38号住居跡、57号住居跡、81号住居跡に代表される。土師器杯A-1~3、甕A-1~3、貯蔵形態甕、甑、須恵器杯A-1、高杯、甗等で構成される。

土師器杯は、3形態とも口縁部下の稜は明確である。A-1は口唇端部が平坦な直立するものもみら

れる。A-2は底部中心部が平坦で口唇端部に沈線のあるものがある。須恵器は、81号住居跡より杯、高杯が出土している。杯は口縁部はやや内傾するが、口唇端部に若干平坦部がみられ、口縁部下の蓋受けは鐔状に水平方向に張り出す。81住-9の高杯は、破片ではあるが長脚で2段の透孔をもつ形態である。

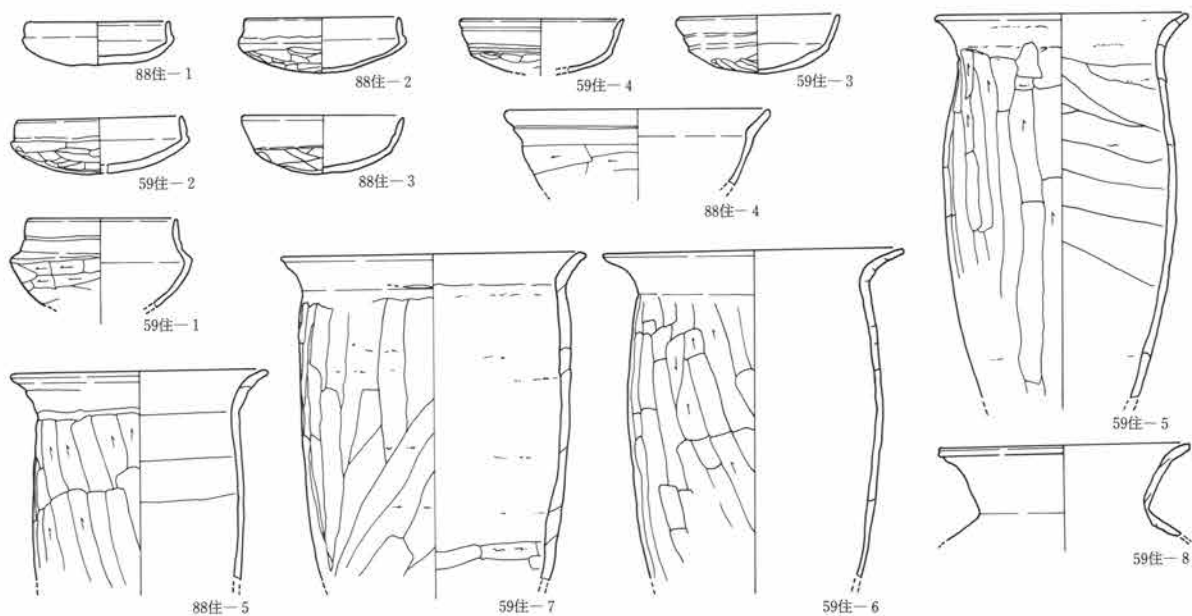




II期

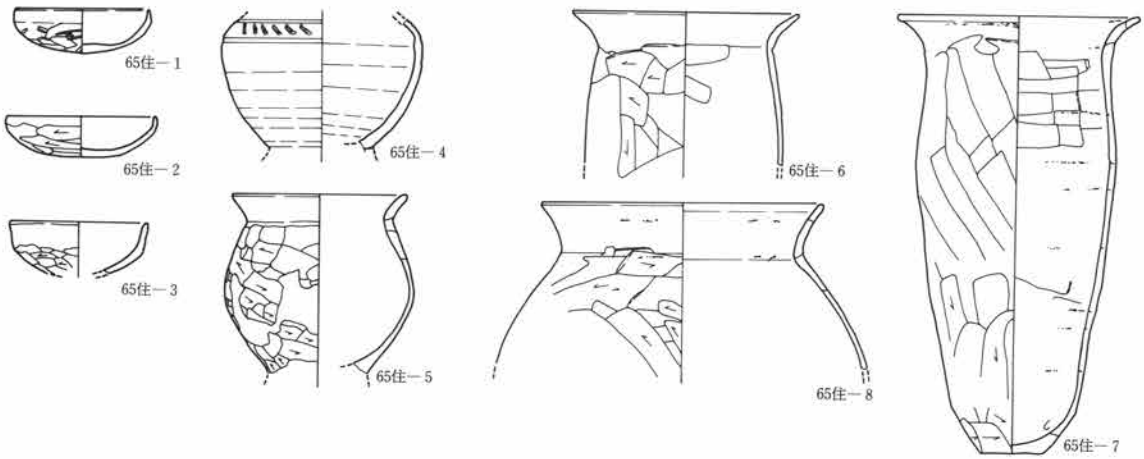
59号住居跡、88号住居跡に代表される。土師器杯 A-1~3、甕A-1~3、貯蔵形態甕、鉢、須恵器甕等で構成される。

土師器杯は、A-1の口縁部が内傾し、口唇端部は丸くなる。A-2は底部の平坦部がなくなり全体的に丸底化する。A-3は口縁部下の稜がやや不明確になる。須恵器杯の出土は、みられない。



III期

65号住居跡に代表される。土師器杯A-3、B-1、甕A-1・2、小型甕、貯蔵形態甕、須恵器長頸瓶等で構成される。



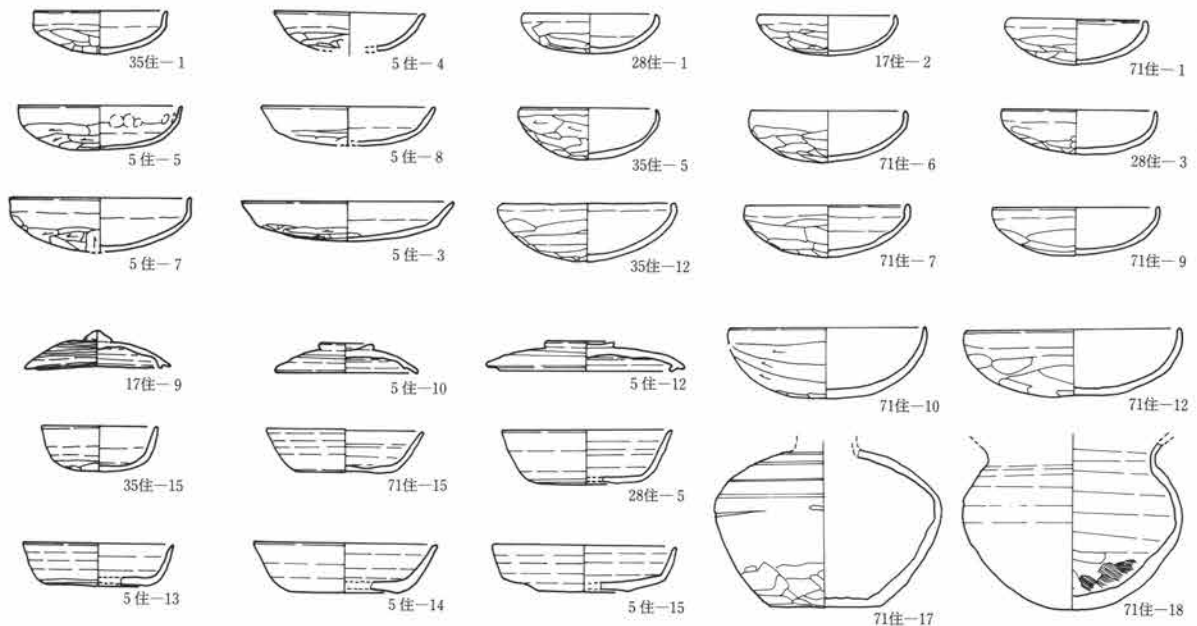
土師器杯は、A-3の口唇部が僅かであるが外反し、口縁部下の稜は不鮮明である。須恵器長頸瓶は、肩が明確で肩部に2条の凹線が施され、凹線の間に刺突文が施されている。

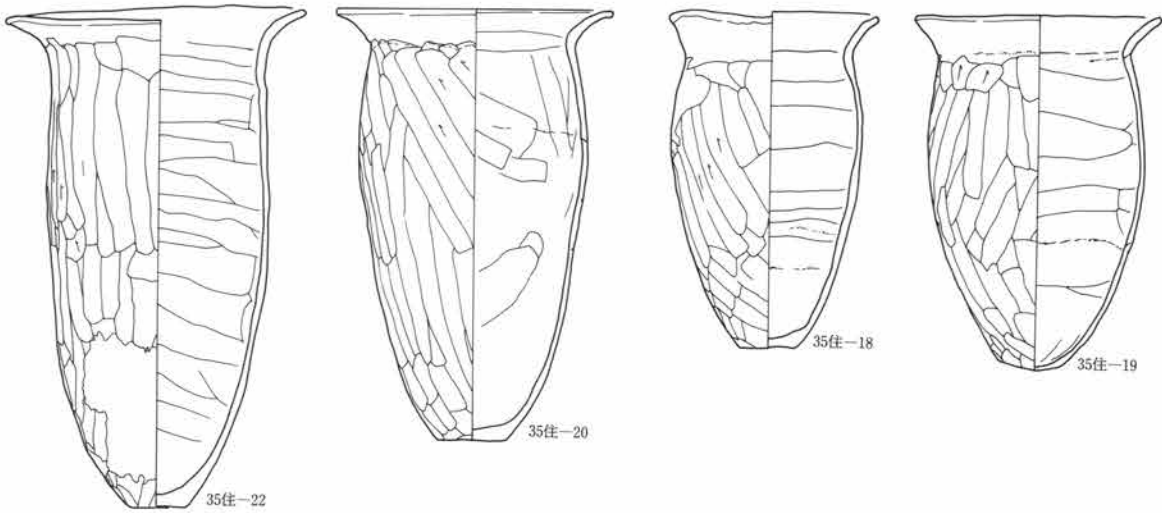
IV期

5号住居跡、17号住居跡、35号住居跡、71号住居跡、73号住居跡に代表される。土師器杯A-4・5、B-1~3、甕A-1~4、B-1、貯蔵形態甕、鉢、短頸壺、須恵器杯B-1、C-1・2・7、杯蓋、長頸瓶、広口壺等で構成される。

土師器杯は、B-1の口径が10.3~11.0cm、12cm代の大きさに法量分化がみられる。B-2は10cm代、

12cm前後、13cm前後、15cm超の大きさに法量分化がみられる。土師器甕は、A類の長胴甕とともに35住-18、19のようなB類のやや器高の短いものがみられる。須恵器杯は、35住-15の底部が丸底を呈すB-1とともにC類のものがみられるが底部は皆回転ヘラ削り調整である。また、杯蓋は内面にカエリをもつものだけである。



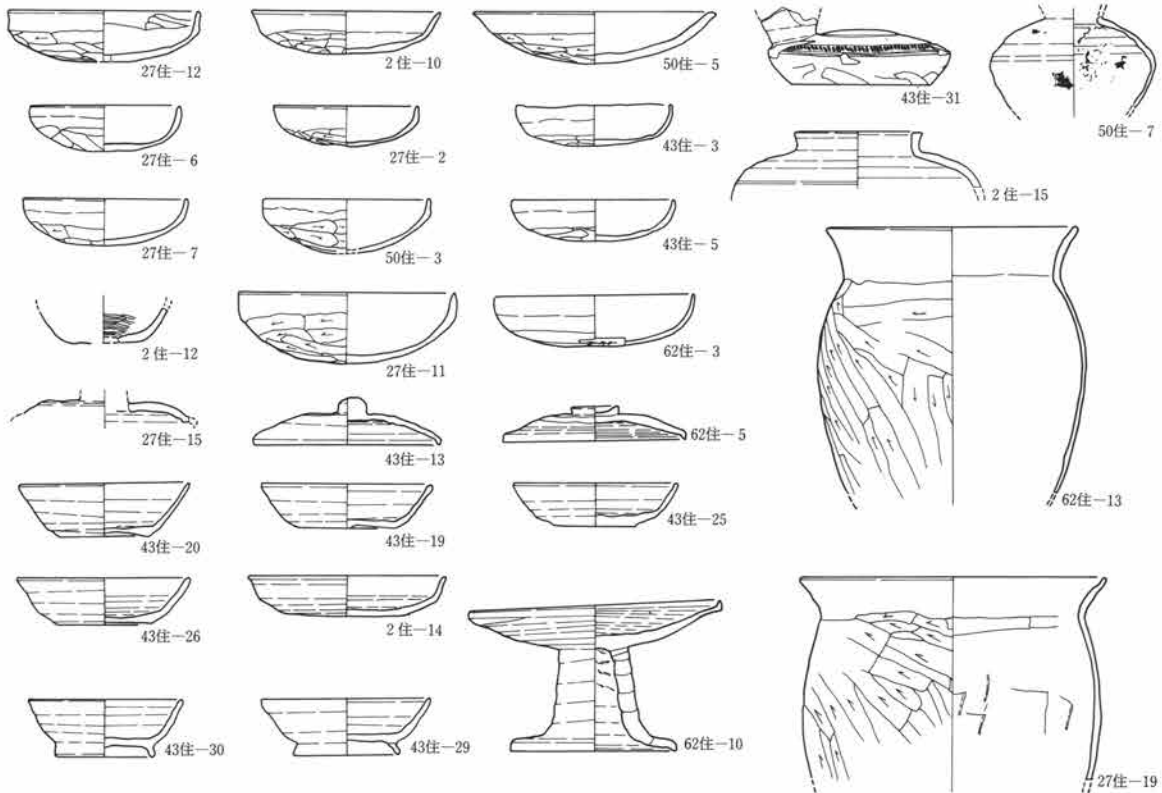


V期

2号住居跡、27号住居跡、43号住居跡、62号住居跡に代表される。土師器杯A-4・5、B-2~4、甕A-4、B-1、C-1、貯蔵形態甕、須恵器杯C-1・3~8、杯蓋、椀A-1、高杯、平瓶、長頸瓶、甕、黒色土器杯で構成される。

V期より須恵器杯蓋の内面のカエリが消滅し、端部折り曲げになる。黒色土器が新たに出現する。須

恵器杯の底部は、前期と同様に全面に回転ヘラ削り調整を施すものが主体であるが43住-19、21、22、25等のように回転糸切り後中央部を残してヘラ削りを施しているものや62住-7のように回転糸切り無調整のものがみられる。土師器甕は、頸部が明確になり、胴部の膨らみが口縁部よりやや大きく「く」の字状口縁に近いC-1がみられる。

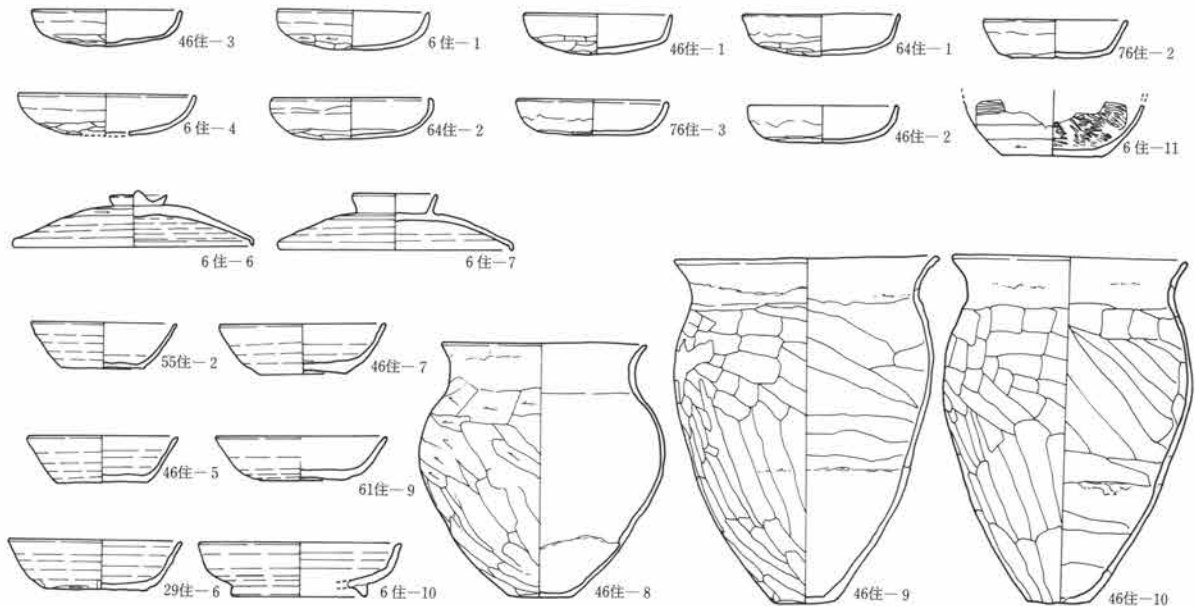


VI期

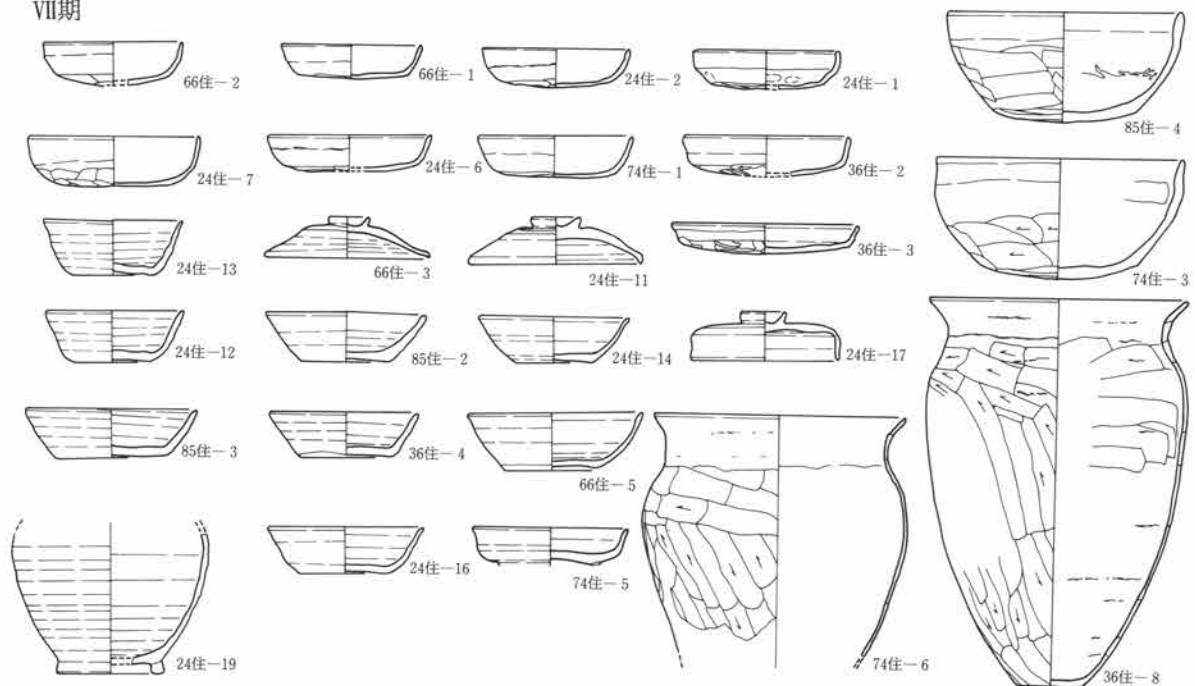
6号住居跡、29号住居跡、46号住居跡、55号住居跡、64号住居跡、76号住居跡に代表される。土師器杯B-3・4、C-1~3、甕C-1・2、黒色土器杯須恵器杯C3~8、杯蓋、椀、甕等で構成される。

土師器杯は、A類がみられなくなり、B類の丸底

を呈する形態のものもやや器高が低くなり、C類の平底の形態のものと共伴する。杯の法量は大小の2分化がみられる程度となる。甕は、口縁部が「く」の字状のものになる。須恵器杯は、底部が回転ヘラ削り調整のものと回転糸切り無調整のものがみられる。



VII期

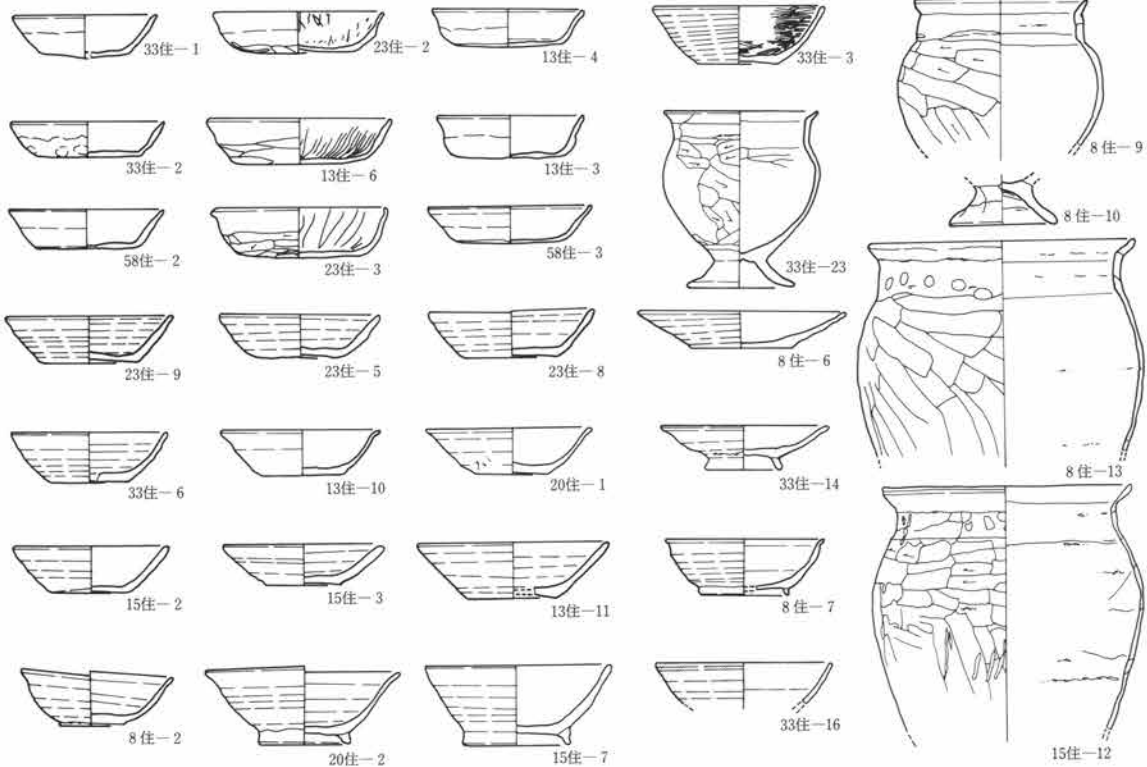


Ⅶ期

24号住居跡、36号住居跡、66号住居跡、70号住居跡、74号低居跡、85号住居跡に代表される。土師器杯B-3・4、C-1~3、皿、甕D-1、台付甕、黒色土器碗、須恵器杯C-3~6、杯蓋、碗、長頸瓶、短頸壺等で構成される。

土師器杯では、Ⅵ期までみられた法量分化がみられなくなる。甕は、口縁部が「コ」の字状に近い形になり、胴部上位が膨らみ最大径をもち、胴部中位から底部にかけてつぼまる。須恵器杯の底部は、回転糸切り無調整が主体的になるが、まだ回転ヘラ削り調整を施すものが多少みられる。

供膳具の中ではⅥ期までは土師器杯が量的に主体をなしていたが、Ⅶ期では土師器杯と須恵器杯の比率がそれほど変わらなくなる。



Ⅸ期

61号住居跡、67号住居跡に代表される。土師器杯C-4、甕D-2・3、黒色土器碗、須恵器D-1・2、碗B類、灰釉陶器碗で構成される。

土師器の供膳具は、僅かに67号住でみられる程度

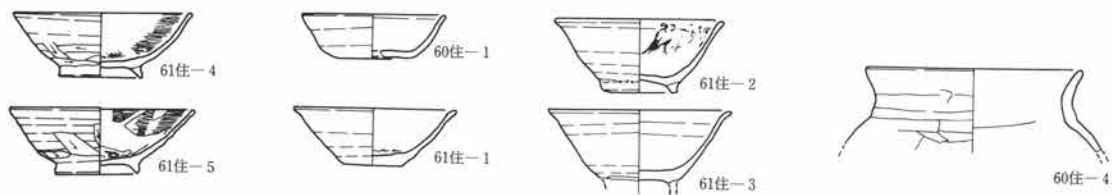
Ⅷ期

8号住居跡、11号住居跡、13号住居跡、15号住居跡、20号住居跡、23号住居跡、33号住居跡、39号住居跡、58号住居跡に代表される。土師器杯C-2~4、甕D-2、台付甕、須恵器杯D-1~3、E-1~3、杯蓋、碗B-2、皿、長頸瓶、甕、灰釉陶器碗で構成される。

土師器杯は、Ⅶ期と同様に法量分化はみられない。また、ヘラ削り整形は底部だけで口縁部の横ナデが施された下は無調整のままである。甕は、口縁部が「コ」の字状になる。須恵器杯・碗の底部は、回転糸切り無調整のものだけになる。

供膳具の土師器と須恵器の比率は土師器が減少し、須恵器の割合が多くなる。

で須恵器が主体を占める。甕は、口縁部に「コ」の字状の形態が残存するが器壁はⅧ期より厚くなる。須恵器杯では、焼成がやや酸化焰ぎみで器壁がやや厚くなり高台の整形が雑なものがみられる。灰釉陶器は、光が丘1号窯式期のものである。

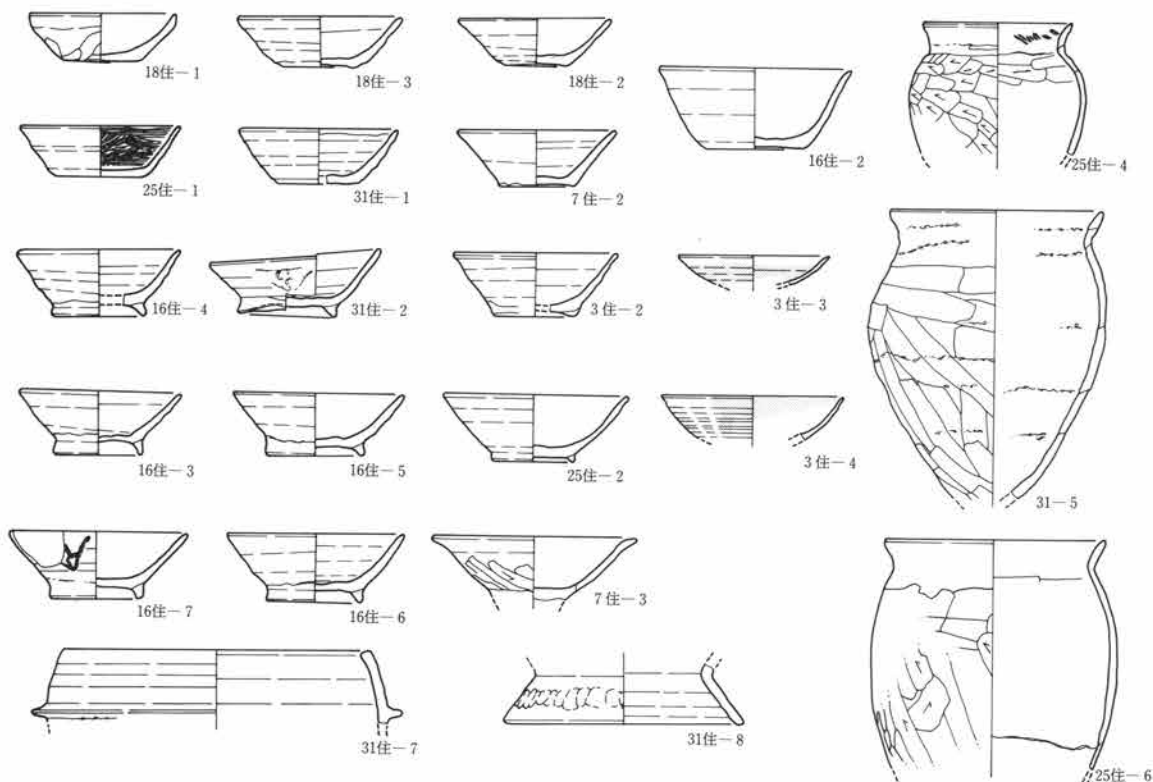


X 期

3号住居跡、7号住居跡、16号住居跡、18号住居跡、25号住居跡、31号住居跡に代表される。土師器甕D-3、E-1、黒色土器杯、須恵器杯E-1・3、椀B-1~3、C-1、羽釜、甑、灰釉陶器椀、皿で構成される。

土師器の供膳具は、18号住-1のもの以外はみら

れない。甕は、「土釜」と呼称される器壁の厚いものになる。須恵器杯・椀は、前期よりさらに還元焰による焼成より酸化焰、酸化焰ぎみのものが主体を占めている。灰釉陶器は、漬け掛けによる施釉方法で高台が三日月形を呈している大原2号窯式期のものがみられる。

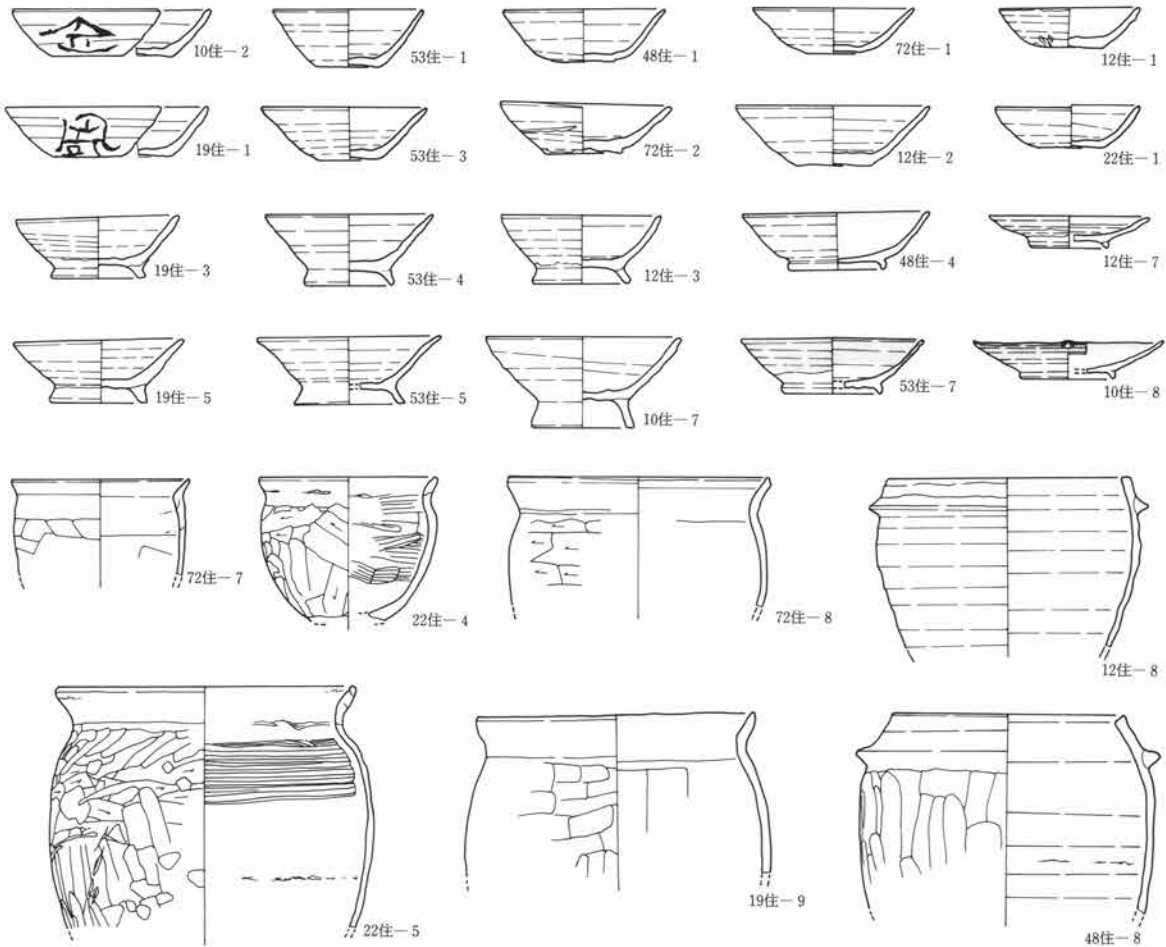


XI 期

10号住居跡、12号住居跡、19号住居跡、48号住居跡、53号住居跡、72号住居跡に代表される。土師器甕E-1・2、須恵器杯E-2~5、杯C-1・3・4、羽釜、甑、灰釉陶器椀、皿で構成される。

土師器甕は、X期より口径がやや広くなる。須恵

器椀は、口縁部にやや丸みをもつC-4が出現し、X期より法量の委小化がみられる。灰釉陶器は、X期と同様に大原2号窯式期とともに虎溪山1号窯式期のものがみられる。



以上のように二之宮谷地遺跡の竪穴住居跡から出土した土器については、11期の時期区分を試みた。

次に各期を通しての特徴と各器種の消長を見てみると次のようになる。

土師器杯は、I期～II期にかけては口縁部下に稜をもつA類の-1～3で構成される。III期ではA類から丸底で口縁部が内傾するB類へ主体が変化している。III期～IV期は、B類が主体的でそれにA-4と口径が大きく器高の低いA-5が多少共伴している。V期になるとA類はA-4・5が若干共伴する程度であるが、新たに平底のC類が出現する。VI期・VII期ではC類が主体になり、VIII期になると土師器杯はC-3・4がごく僅か共伴する程度である。IX期になると土師器杯は全く見られなくなる。

土師器杯では、II期とIII期の間の変化が大きくこの間には連続性が見られず竪穴住居跡の一次的な断絶期間があったと想定される。

土師器甕は、I期～III期にかけては長胴甕のA類が主体的であるが、IV期になると器高のやや短小化したB類が主体的になる。V期～VI期には「く」の字状口縁甕のC類が主体になる。VII期からVIII期にかけては「コ」の字状口縁甕のD類が主体になり、VII期にはD-1、VIII期にはD-2、IX期にはD-3が主体を占める。X期以降には土師器甕はE類が主体的になるが、土師器甕の出土量自体もやや減少する。土師器甕は、以上のように長胴甕→「く」の字状口縁甕→「コ」の字状口縁甕→土釜と県東部の遺跡で見られる様相と同様である。

煮沸具は、I期からIX期までは土師器甕だけがあるが、X期では土師器甕とともに羽釜が出現してくるが、二之宮谷地遺跡では群馬県の西部や北部に比べて少量である。

須恵器杯は、I期に丸底で有蓋のA類が見られるが、II期、III期では須恵器杯の出土は見られない。

IV期では底部丸底のB類とともに底部が平底で回転ヘラ切り、回転ヘラ削り調整のC類が見られ、主体はC類が占めている。C類の中には擬宝珠形や環状の摘をもち、内面にカエリをもつ蓋を伴うものも見られる。V期～VII期は、C類だけであるが、V期では底部を回転糸切り放し後回転ヘラ削り調整を施しているものが見られる。また、蓋は内面にカエリをもつものが少数になり、端部を折り曲げたものが主体的になる。VI期では、底部が回転糸切り無調整のものが見られる。VII期では底部が回転糸切り無調整のものが主体を占めるようになる。VIII期ではC類から口縁部が丸みをもち口唇部が外反するD類へと変化し、若干ではあるがE類も見られる。底部は回転糸切りで切り放し後の調整は見られなくなる。IX期では、焼成が十分な還元がなされず、焼き締めのみが見られる。X期では、E類が主体的になり、焼成も酸化焰によるものが主体的になる。

須恵器碗は、VII期までのごく僅かしか見られず、普遍的に見られるのはVIII期からである。VIII期とIX期ではB類が主体的で、X期以後はC類が主体的になる。C類は須恵器杯のE類と同様に焼成が十分な還元が行われていないものや酸化焰によるものである。

黒色土器は、V期から見られるが、量的にはごく少量である。

灰釉陶器は、VII期から見られ、VII期～IX期では光が丘1号窯式期、X期では大原2号窯式期、XI期では虎溪山1号窯式期のものが共伴する。灰釉陶器の出土は、碗・皿・長頸瓶が見られる

が、出土量は周辺遺跡と比較してもあまり多くない。

二之宮谷地遺跡土器形態別消長表

形態	I期	II期	III期	IV期	V期	VI期	VII期	VIII期	IX期	X期	XI期
土師器杯	A-1										
	A-2										
	A-3										
	A-4										
	A-5										
	B-1										
	B-2										
	B-3										
	B-4										
	C-1										
	C-2										
	C-3										
	C-4										
土師器碗	A-1										
	A-2										
	A-3										
	A-4										
	B-1										
	C-1										
	C-2										
	D-1										
	D-2										
	D-3										
E-1											
E-2											
羽釜											
須恵器杯	A-1										
	B-1										
	C-1										
	C-2										
	C-3										
	C-4										
	C-5										
	C-6										
	C-7										
	C-8										
	D-1										
	D-2										
	D-3										
	E-1										
	E-2										
	E-3										
E-4											
E-5											
E-6											
須恵器碗	A-1										
	B-1										
	B-2										
	B-3										
	B-4										
B-5											
C-1											
C-2											
C-3											
C-4											
黒色土器											
灰釉陶器											

光が丘 大原2 虎溪山

4. 実年代について

二之宮谷地遺跡における各器種の画期によって11期に区分された土器群に年代を付与することは、土器そのものに紀年銘の記載でもない限り直接年代を求めることは非常に難問である。

二之宮谷地遺跡の土器群の中には多くの墨書が見られるものの年代を想定できるものは見られない。したがって紀年銘以外の二次的な出土遺物より年代を求めざるを得ないが、二之宮谷地遺跡で年代を求めることが可能な共伴遺物は皆無と言って良い状態である。

このような中で二之宮谷地遺跡の画期の土器群に年代を付与するには、先学の研究によって求められた他遺跡の成果を基に間接的資料から援用することとした。

二之宮谷地遺跡では、Ⅱ期とⅢ期の間に不整合が見られるが、Ⅲ期からⅪ期にかけての土器群の流れの中には漸移的な形態的变化がみられることからⅢ期からⅪ期にかけてはそのなかの幾つかの期に年代を付与できれば他の期にもある程度は機械的に付与できると考えられる。

今までの古代の土器研究の成果において年代を想定できる資料として次のようなものが上げられる。

1. 竪穴住居跡出土の銭貨(皇朝十二銭)によりその銭貨の初鑄年を共伴する土器群の年代の上限として年代を推定する。
2. 竪穴住居跡出土の銚帯の使用年代を基に推定する。
3. 竪穴住居跡出土の須恵器からその形態から生産地の編年を援用して推定する。
4. 竪穴住居跡出土の畿内産土師器から平城宮土器編年を援用して推定する。
5. 竪穴住居跡出土の灰釉陶器から生産地での編年を援用して推定する。
6. 古代寺院、特に国分寺瓦は、その造営、再建等からその製作年代が明確であることから共伴する土器群においても瓦の製作年代を基に推定する。

以上のような資料から各遺跡の土器群には、その

土器群の年代が付与されている。これらの先学の成果を基に二之宮谷地遺跡の土器群の年代を想定すると次のようになる。

I期は、81号住出土の須恵器杯が陶邑窯MT-85と同様の形態であることから陶邑窯MT-85の年代を援用すると6C、後半の年代が想定される。

V期は、須恵器杯蓋に「カエリ」をもつ形態のもの「カエリ」をもたないで口縁部端部を折り曲げる形態のものが共伴している。県内では、杯蓋の「カエリ」は概ね8C、中葉まで残り、「カエリ」をもたない形態のものは8C、初期から出現するが、主体を占めるのは8C、第2四半期以後とされていることからV期の年代は8C、中頃と想定される。

VIII期は、土師器甕がD-2類で一般に「コ」の字状口縁甕と呼称されている形態の完成されたものでこの土師器甕は8C、の第2四半期から第3四半期にかけて見られるものであることからVIII期は8C、中頃に想定される。

X期は、共伴して出土している灰釉陶器の大部分は大原2号窯式期のもので虎溪山1号窯式期のものはみられないことから10C、前半に想定される。

XI期は、共伴して出土している灰釉陶器の大部分は虎溪山1号窯式期のもので丸石2号窯式期のものはみられないことから10C、後半に想定される。

5. ま と め

以上のように二之宮谷地遺跡の竪穴住居跡出土の土器について分類とその共伴関係を基にして時期設定を行った。I期・Ⅱ期とⅢ期以降の間に断絶が見られるもののⅢ期からⅪ期の7C、後期から11C、後半にかけては継続して存続している。

二之宮谷地遺跡の土器群では、個々の種類・器種での時期の細分の設定は可能ではあるが、竪穴住居跡からの出土量に差が見られ明確な共伴関係が把握できないため、やや大まかな区分に終わったが、今後今井道上・道下遺跡、二之宮洗橋遺跡等近隣の成果を踏まえてより詳細な検討をおこないたい。

引用・参考文献

- 1978 井上唯雄「群馬県下の歴史時代の土器」『群馬県史研究』第8号
- 1981 田辺昭三『須恵器大成』角川書店
中沢 悟「出土土器の分類と編年」『清里陣場遺跡』(群馬県埋蔵文化財調査事業団)
- 1983 綿貫綾子「出土土器の分類と編年」『有馬条里遺跡』(渋川市教育委員会)
- 1984 坂口 一・三浦京子『中尾遺跡(遺物編)』(群馬県埋蔵文化財調査事業団)
小島敦子「賀茂遺跡出土の平安時代の土器について」『賀茂遺跡』(群馬県埋蔵文化財調査事業団)
唐沢保之「奈良・平安時代の土器の分類」『芳賀団地遺跡群』第1巻(芳賀東部団地遺跡Ⅰ)前橋市教育委員会
- 1986 坂口 一・三浦京子「奈良・平安時代の土器の編年—住居の重複と共伴関係による土器型式組列の検討—」『群馬県史研究』24号
小林敏夫「出土土器の編年」『大久保A遺跡』(吉岡村教育委員会)
外山政子「平安時代の土器について」『下佐野遺跡Ⅱ地区』(群馬県埋蔵文化財調査事業団)
坂口 一「古墳時代後期の土器の編年—三ツ寺Ⅲ遺跡を中心とした土師器と須恵器の平行関係—」『群馬文化』208 群馬県地域文化研究協議会
三浦京子「出土土器について」『下東西遺跡』(群馬県埋蔵文化財調査事業団)
桜岡正信「土器の分類と時期設定」『上野国分僧寺・尼寺中間地域』(群馬県埋蔵文化財調査事業団)
- 1988 中沢 悟・飯田陽一「奈良時代の須恵器について」『研究紀要』5 (群馬県埋蔵文化財調査事業団)
綿貫邦男「成果と課題—各段階の土器様相—」『鳥羽遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区』(群馬県埋蔵文化財調査事業団)
徳江秀夫「出土土器の検討」『荒砥天之宮遺跡』(群馬県埋蔵文化財調査事業団)
唐沢・前原「土器の分類」『芳賀団地遺跡群 第2巻 芳賀東部団地遺跡Ⅱ』前橋市教育委員会
- 1989 徳江秀夫「出土土器について」『荒砥洗橋遺跡・荒砥宮西遺跡』(群馬県埋蔵文化財調査事業団)
- 1991 坂口 一「荒砥三木堂遺跡出土の土師器と須恵器の編年—農耕集落分析の基礎的作業—」『荒砥三木堂遺跡Ⅰ』(群馬県埋蔵文化財調査事業団)
桜岡正信「7世紀代以降の土師器坏の画期とその要因について—群馬県地域を中心として—」『群馬考古学手帳』Vol.2 群馬土器観会

IV 科学分析

1 プラント・オパール分析

古環境研究所

1. はじめに

二之宮谷地遺跡では、発掘調査によって浅間Bテフラの下層から水田跡が検出されていた。また、FA下層についても調査が行なわれたが水田遺構は確認されず、浅間Cテフラの下層については未調査であった。

そこで、水田跡の確認および探査を目的として、プラント・オパール分析調査が行なわれた。以下に、その結果を報告する。

2. 試料

現地調査は昭和62年8月3日に行ない、図1に示した2地点について試料を採取した。層序は1層～12層に区分され、このうち4層は浅間Bテフラ、8層はFA、10層は浅間Cテフラ混じりである。

試料は、容量50ccの採土管ならびにポリ袋を用いて、各層ごとに5～10cm間隔で採取した。採取した試料数は34点であり、これらすべてについて分析を行なった。

3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法(藤原、1976)」をもとに、次の手順で行なった。

試料土の絶乾(105°C・24時間)、仮比重測定、試料土約1gを秤量(精度:1/10000g)、ガラスビーズ混入、脱有機物処理(電気炉灰化法または過酸化水素法)、超音波による分散(150W・26KHz・15分間)、沈底法による20 μ m以下の微細粒子除去、乾燥、オイキット中に分散、プレパラート作成、検鏡・計数。

同定は、機動細胞に由来するプラント・オパール(以下、プラント・オパールと略す)を対象に、400

倍の偏光顕微鏡下で行なった。計数は、ガラスビーズ個数が300以上になるまで行なった。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。

試料1gあたりに混入したガラスビーズの個数に、計数結果(プラント・オパールとガラスビーズ個数の比率)をかけて、試料1gあたりのプラント・オパール個数を求めた。これに仮比重をかけて、試料1ccあたりのプラント・オパール個数を求めた。

こうして求められたプラント・オパール密度に、表1の換算計数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体各部乾重)をかけて、植物体生産量(t/10a \cdot cm)を算出した。これに層厚をかけて、その層の堆積期間中に生産された植物体の総量(t/10a)を求めた。

表1 各植物の換算係数(単位:10⁻⁵g)

※藤原、1979の第1表を一部改変

植物名	葉身	全地上部	種実
イネ	0.51	2.94	1.03
ヒエ	1.34	12.20	5.54
ヨシ	1.33	6.31	—
ゴキダケ	0.24	0.48	—
ススキ	0.38	1.24	—

4. 分析結果

イネ、キビ族(ヒエなどが含まれる)、ヨシ属、タケ亜科(竹笹類)、ウシクサ族(ススキなどが含まれる)について同定・定量を行ない、数値データを表2に示した。上記以外のプラント・オパールも見られたが、分析の目的が水田跡の確認や探査であるため、ここでは割愛した。表3にイネの植物体生産量の算出過程を示した。

図2に、イネのプラント・オパール密度を示した。柱状図内のドットは、試料の採取箇所を示している。

図3に、イネ、ヨシ属、タケ亜科について植物体生産量を示した。柱状図内のポイントは、最上面から1m深の位置を示している。なお、No.1地点とNo.2地点で横軸のスケールが異なっているので注意されたい。

5. 考察

(1) 水田跡の確認および探査について

IV 科学分析

表2 試料1gあたりのプラント・オパール個数

No.1地点					
試料名	イネ	ヨシ属	タケ亜科	ウシクサ族	キビ族
2-1	951	0	21,868	8,557	0
2-2	3,790	0	40,748	16,110	948
2-3	2,766	1,844	38,727	22,130	922
3-1	4,836	967	30,952	7,738	0
3-2	3,926	2,945	14,724	12,761	0
4	0	0	0	0	0
5-1	3,941	4,927	55,181	22,664	0
5-2	2,898	5,795	44,431	18,352	966
6-1	7,648	956	76,477	7,648	956
6-2	3,628	1,814	56,238	4,535	0
6-3	7,861	1,965	73,698	7,861	0
6-4	6,348	5,441	85,240	10,882	0
7	0	17,844	44,609	11,896	0
8	0	0	0	0	0
9	0	17,182	38,181	20,045	955
10	0	4,510	10,825	6,314	0
11	0	3,742	69,234	8,420	0
12-1	0	959	93,026	18,222	1,918
12-2	0	0	41,296	28,811	0
No.2地点					
試料名	イネ	ヨシ属	タケ亜科	ウシクサ族	キビ族
2-1	6,734	2,886	55,797	22,126	0
2-2	5,238	1,048	49,239	9,429	0
3	8,552	6,652	31,357	7,602	0
4-1	0	0	0	0	0
4-2	0	0	0	0	0
5-1	6,841	5,864	62,549	22,479	0
5-2	3,015	10,554	51,261	19,600	0
6-1	11,729	977	86,014	13,684	977
6-2	19,818	12,881	68,370	29,726	0
7	0	11,018	13,021	14,022	3,005
8	0	957	957	1,915	0
9	948	36,017	105,206	20,852	1,896
10-1	0	19,395	73,170	9,697	0
10-2	0	8,468	72,444	18,817	941
11	0	23,638	195,995	20,683	985

表3 イネの生産量の推定

No.1地点								
層名	深 cm	層厚 cm	P.O.数 個/g	仮比重	P.O.数 個/cc	稲葉重 t/10a.cm	稲穂重 t/10a.cm	稲穂総量 t/10a
2-1	0	7	951	0.91	800	0.15	0.08	0.58
2-2	7	8	3,790	0.91	3,400	0.65	0.35	2.80
2-3	15	7	2,766	0.91	2,500	0.48	0.26	1.80
3-1	22	6	4,836	1.01	4,800	0.92	0.49	2.97
3-2	28	5	3,926	1.00	3,900	0.74	0.40	2.01
4	33	9	0	1.30	0	0.00	0.00	0.00
5-1	42	4	3,941	0.54	2,100	0.40	0.22	0.87
5-2	46	3	2,898	0.54	1,500	0.29	0.15	0.46
6-1	49	5	7,648	0.78	5,900	1.13	0.61	3.04
6-2	54	6	3,628	0.78	2,800	0.53	0.29	1.73
6-3	60	6	7,861	0.78	6,100	1.17	0.63	3.77
6-4	66	6	6,348	0.78	4,900	0.94	0.50	3.03
7	72	5	0	0.59	0	0.00	0.00	0.00
8	77	4	0	1.00	0	0.00	0.00	0.00
9	81	3	0	0.50	0	0.00	0.00	0.00
10	84	8	0	0.82	0	0.00	0.00	0.00
11	92	3	0	0.80	0	0.00	0.00	0.00
12-1	95	5	0	1.01	0	0.00	0.00	0.00
12-2	100	—	—	1.01	0	0.00	0.00	—
No.2地点								
層名	深 cm	層厚 cm	P.O.数 個/g	仮比重	P.O.数 個/cc	稲葉重 t/10a.cm	稲穂重 t/10a.cm	稲穂総量 t/10a
2-1	0	6	6,734	0.98	6,500	1.24	0.67	4.02
2-2	6	6	5,238	0.98	5,100	0.97	0.53	3.15
3	12	8	8,552	0.77	6,500	1.24	0.67	5.36
4-1	20	6	0	1.30	0	0.00	0.00	0.00
4-2	26	6	0	1.30	0	0.00	0.00	0.00
5-1	32	4	6,841	0.37	2,500	0.48	0.26	1.03
5-2	36	4	3,015	0.37	1,100	0.21	0.11	0.45
6-1	40	7	11,729	0.61	7,200	1.38	0.74	5.19
6-2	47	7	19,818	0.61	12,000	2.29	1.24	8.65
7	54	3	0	0.60	0	0.00	0.00	0.00
8	57	7	0	1.08	0	0.00	0.00	0.00
9	64	5	948	0.46	400	0.08	0.04	0.21
10-1	69	5	0	0.80	0	0.00	0.00	0.00
10-2	74	4	0	0.80	0	0.00	0.00	0.00
10-2	78	—	—	0.80	0	0.00	0.00	—

浅間Bテフラ直下の5層上面は、発掘調査によって水田遺構が検出されていたところである。分析の結果、同層の上部からはイネのプラント・オパールが3,900~6,800個/g検出された。上層の浅間Bテフラ層からはイネは全く検出されないことから、上部から後代のプラント・オパールが混入したことは考えられない。したがって、同層で稲作が行なわれていたものと判断される。

6層の上部では、イネのプラント・オパールが7,600~12,000個/gと多量に検出された。この密度は上層の5層を大きく上回っているため、上部からプラント・オパールが混入したことは考えにくい。したがって、同層で稲作が行なわれていた可能性は高いと判断される。

7層以下でイネのプラント・オパールが検出されたのは、No.2地点の9層のみである。同層はイネを含まないFAの直下であることから、上部からのプラント・オパールの混入は考えにくい。しかし、1,000個/g未満とごく微量であるため、ここで稲作が行なわれていたのではなく他所から水平的に混入したものである危険性も考えられる。

(2) 稲の生産量について

水田跡が検出されていた5層とその下層の6層について、稲穀の生産総量を推定した(表3参照)。その結果、5層では平均1.4t、6層では平均12.7tと算出された。当時の稲穀の年間収量を10aあたり100kgと仮定すると、5層で稲作が営まれたのは10数年間、6層では約130年間であったものと推定される。

なお、これらの値は、収穫方法が穂刈りで行なわれ、稲わらがすべて水田内に還元されたことを前提として求められている。したがって、ここで推定した稲穀の生産総量ならびに稲作期間は、あくまでも目安として考えられたい。

(3) 土層の堆積環境について

タケ亜科は比較的乾いた土壌条件のところ

し、ヨシは湿地に育成している。したがって、両者の出現状況を比較することによって土層の堆積環境(乾湿)を推定することができる。

No.1地点とNo.2地点では若干の差異は見られるものの、ほぼ同様の出現傾向が認められた(図3参照)。これらの結果を表4にまとめる。

表4 堆積環境の推定

層位	植生	環境
2層~3層上部	タケ亜科>ヨシ	乾燥
3層下部~5層	ヨシ >タケ亜科	湿潤
6層	タケ亜科>ヨシ	乾燥
7層~11層	ヨシ >タケ亜科	湿潤
12層	タケ亜科>ヨシ	乾燥

以上のように、11層から7層の時期にかけてはヨシが繁茂するような湿潤な環境であったものと推定される。その後、イネの出現する6層の時期にはやや乾燥化し、5層の時期には再び湿潤化してヨシが繁茂したものと推定される。

◎ 参考文献

- 藤原宏志, 1976. プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)―数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法―, 考古学と自然科学, 9: 15-29.
- 藤原宏志, 1979. プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)―福岡・板付遺跡(夜臼式)水田および群馬・日高遺跡(弥生時代)水田におけるイネ(*O. sativa* L.)生産総量の推定―, 1984. 考古学と自然科学, 12: 29-41.
- 藤原宏志・杉山真二・外山秀一, 1984. 地層の区分と水田址の探査, 那珂君休遺跡II, 福岡市埋蔵文化財調査報告書, 第106集: 11-15.
- 藤原宏志・杉山真二, 1984. プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)―プラント・オパール分析による水田址の探査―, 考古学と自然科学, 17: 73-85.

IV 科学分析

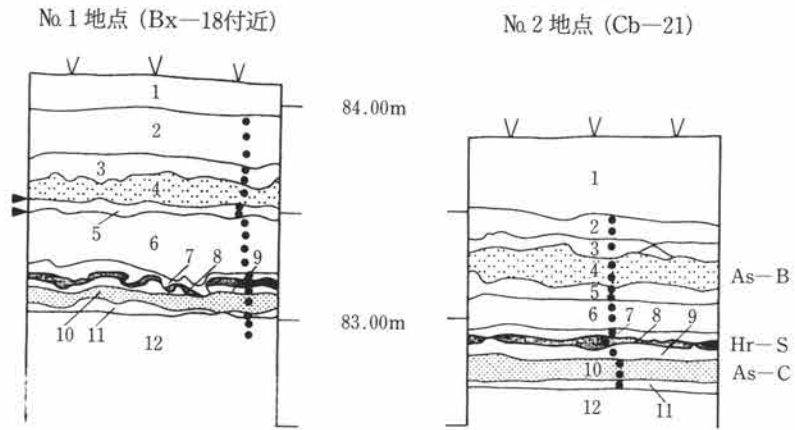


図1 分析試料の採取箇所

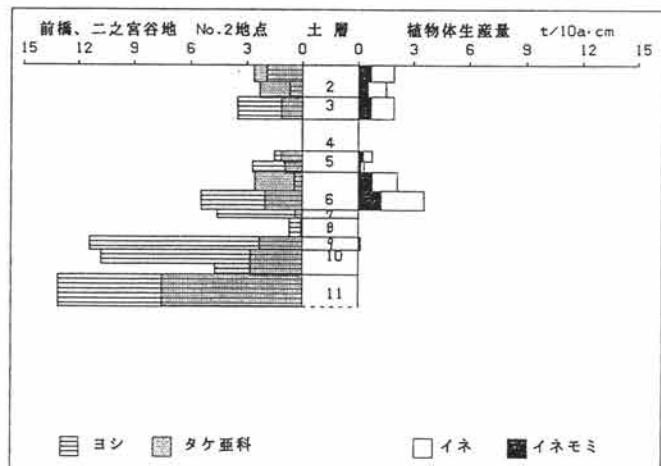
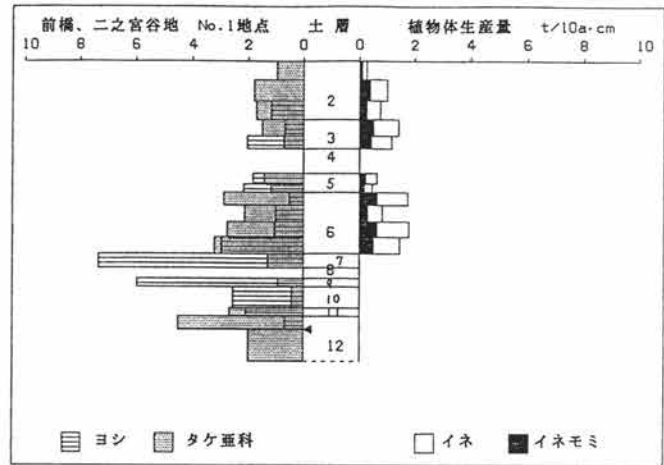
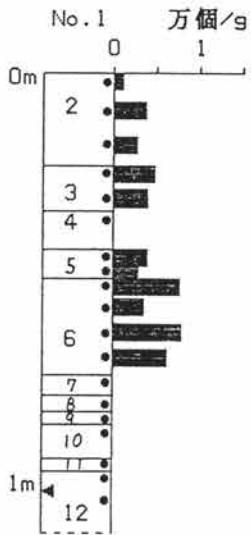


図2 イネのプラントオパール密度

図3 おもな植物の推定生産量

2 珪藻分析及び花粉分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

1 目 的

二之宮谷地遺跡は、赤城山南麓の前橋市二之宮町に位置する。

遺跡は、段丘上に立地しており、特に約4万年前と推定される八崎浮石層(H.P)以深で、堆積層は粘土・砂・シルトが主であった。このような堆積物は、一般に水の影響によって生成されたものと考えられているが、その生成時期が堆積時であるのか、その後であるのかは、該期の遺跡の存在を予測するうえで、重要な問題のひとつとなるものと考えられる。そこで上記の点を確認するために珪藻分析を試みることにした。また、あわせて花粉分析を行ない堆積時の古植生を理解することも試みた。

2 試 料

試料は、JK37-2 9号井戸断面から採取した34点で、そのうち13点(Na2・6・9・13・15・18・20・22・24・27・31・32・34)を珪藻分析、5点(Na2・13・20・27・31)を花粉分析に供した(図1)。堆積層の層相は、上位より八崎浮石層(H.P)、HP混りの褐色粘質土、暗青色、青色粘土層、砂層、青灰色～褐色砂質土、未同定の白色パミス層よりなる。

3 珪藻分析

3-1 分析方法

珪藻化石の抽出は、以下に示す方法で行なった。

1) 試料の秤量(500cc用のツールピーカ使用)

① 岩質により秤り取る量を決める(泥炭1~2g:シルト、粘土7~10g:砂、砂質シルト、細砂15~30g)。当地点では、7g秤量した。

2) 過酸化水素水(H₂O₂)処理(効果:試料の泥化、有機物の分解と漂白)

① 試料が浸る程度に蒸留水を加えてから28%

H₂O₂溶液を10cc加え、ホットプレート上で加熱処理する。

② 反応が弱まったら再度28%溶液を10cc加え①と同様に処理する。

③ 試料が、灰白色になったら処理を中止する。

3) 粘土分の除去

① 過酸化水素水処理済み試料に蒸留水を加え全量を500ccにする。良く攪はんした後、7時間以上放置し、粘土分と珪藻殻を含む砂分とを分離する。

② 放置後、真空ポンプで上澄み液を吸い取り浮遊した粘土分を除去する。

③ 分散剤(ピロリン酸ナトリウム)を加え、①、②の操作を上澄み液が透明になるまで繰り返す。

4) L字形管分離(効果:細砂分と珪藻殻とを分離し珪藻殻の濃縮を行なう)。

① 蒸留水を約7~8割満たしたL字形管の中に水洗を終了した試料をあける。そのまま1~2分放置した後、底部に沈殿した砂をピンチコックをあけて流し去る(砂の多い試料に限る)。

② L字形管の末端にあるピンチコックを開けて、懸濁液をピーカに約半分流し込み、そのまま1~2分放置する。

③ ピーカの懸濁液をL字形管の中に静かに流し込む(ピーカの底に沈殿した砂は入れない)。L字形管の末端にあるピンチコックを開けて、懸濁液をピーカに約半分流し込み、そのまま1~2分放置する。

④ ③の操作を4~5回繰り返し細砂分を除去する。

5) 散 布

① 検鏡し易い濃度に希釈した懸濁液をピペットで0.5cc秤り取り、18×18mm/mのカバーガラス上に静かに滴下する。そのまま自然乾燥するまで放置する(パラフィン伸展器を用いて対流の起こらない温度40~50°Cで乾燥しても良い)。1試料につき2枚のプレパラートを作製する。

IV 科学分析

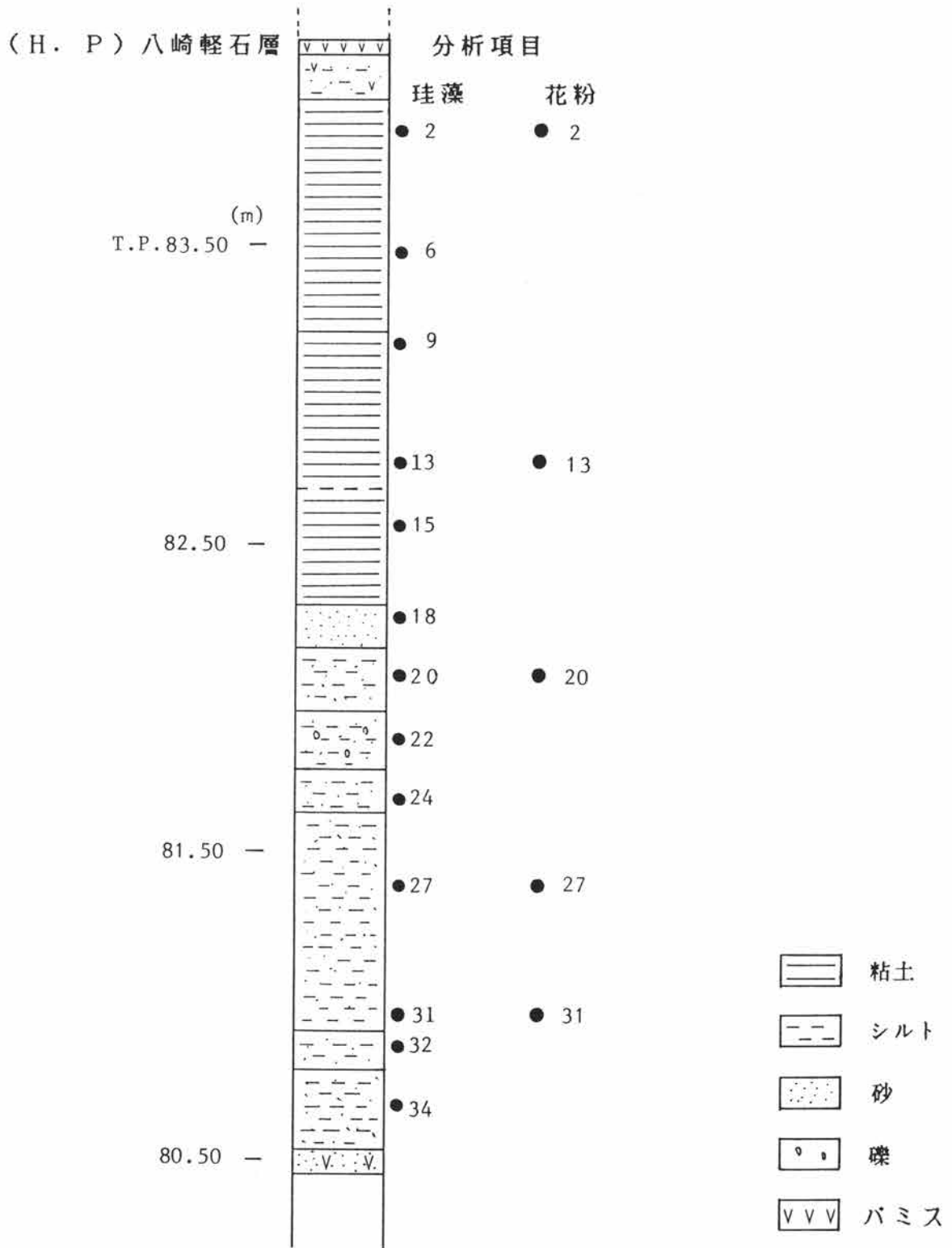


図1 9号井戸 珪藻・花粉分析試料採取地点土層柱状図

6) 封 入

- ① 乾燥したカバーガラス上にプリウラックス 1 滴を滴下し、パラフィン伸展器で加熱し、溶剤のエタノールをとばす。
- ② スライドガラスに貼りつけ、ホットプレート上で加熱しながら完全にエタノールをとばし、気泡が残らないように有柄針を用いてカバーガラス全体を押しつけ、永久プレパラートを作製する。

7) 検 鏡

- ① 珪藻殻の算定は、メカニカルステージを用い縦線に沿って移動させ、任意に出現する珪藻が 200 個体以上になるまで行なう(珪藻殻数の非常に少ない試料はこの限りでない)。
- ② 珪藻殻が半分以上破損したものや溶解したものは 1 個体として数えなかった。また、細長い針状形の珪藻は、先端 2 個体をもって 1 個体として数えた。また、ハイフォンで結んだ分類群は、双方の区分が明瞭でないものである。

8) 同定及び生態性

試料から検出された珪藻化石の同定及び生態性は、Kolbe(1927)、Hustedt(1930, 1959, 1961~1966)、Patrick and Reimer(1966, 1975)、Patrick(1977)、Florin(1970)などを参考にした。

9) 結果の表示法

各試料から検出された珪藻は、塩分濃度に対する適応性(Halobine spectra)を基準として、真塩性(海水生)、中塩性(汽水生)、貧塩性(淡水生)に区分した。貧塩性に付いては、更に塩分、水素イオン濃度(pH)、水の流動性(Current rate)の各適応性に対する生態区分も行ない表にまとめた(表1)。珪藻化石が100個体以上検出された試料については、全体を基数とした出現率1%以上を示す珪藻化石について主要珪藻化石変遷図を作成した(図2)。図中のグラフの内、左端に書かれた海水、海水~汽水、汽水、淡水生種の比率は全体基数、右端に書かれた淡水生種の生態区分の比率は、淡水生種の合計を基数としたものである。

3-2 結 果

No. 2、6、9、13、15、18、20、22、24、27、31、32、34の13試料を分析した結果、No. 6、9、13、15、18、20、22、24、27、31、32の11試料から珪藻化石が検出された。一方、No. 2、34は珪藻化石を全く含まず、No. 6・9・13、18、22、32は珪藻化石の含有数が極めて少なかった。珪藻の多く検出された5試料について、以下に述べる。

○ No.31試料

Navicula mutica, *N. contenta* fo. *biceps*, *Nitzschia frustulum* などの付着性種が優占することにより特徴付けられる。これらの種の内 *Nitzschia frustulum* を除き、大気に常に触れるような岩石の表面、苔の表面、土壌表層中などの好気的環境にも十分生育することの出来る種であり、いわゆる陸生珪藻とされるものである(小杉, 1986)。この他、*Hantzschia amphioxys*, *Pinnularia borealis*, *Stauroneis obtusa* などの陸生珪藻を伴う。なお、*Nitzschia frustulum* は流水、止水問わず検出される流水不定性種である。

○ No.27試料

Navicula mutica, *Pinnularia borealis*, *Hantzschia amphioxys*, *Navicula contenta* fo. *biceps* などの陸生珪藻が優占することにより特徴付けられる。また、*Navicula confervacea*, *Aulacosira italica* などの流水不定性種を伴う。この内前種は、好気的環境にも生育するとされる種である(Patrick, 1977)。

○ No.24試料

Navicula mutica が優占し、*Pinnularia borealis* を伴う。これらの珪藻は、陸生珪藻とされるものである。

○ No.20試料

Navicula mutica を優占とし、*N. contenta* fo. *biceps*, *Pinnularia borealis*, *hantzschia amphioxys* などの陸生珪藻が多産する。

○ No.15試料

IV 科学分析

Navicula contenta fo. *biceps*, *N. mutica*, *N. contenta* を優占とし、*Eunotiopraerupta*, *Hantzschia amphioxys*, *Pinnularia intermedia*, *P. borealis*, *P. subcapitata* などの付着性種を伴なう。これらの種は、好気的環境に生育する陸生珪藻とされるものである。

3-3 考察

珪藻分析の結果、No.15, 20, 24, 27, 31の珪藻群集は、好気的環境下で生育する種群が多産することにより特徴付けられる。これに対し、一般水域から検出される水生珪藻(小杉, 1986)は、No.31, 27, 24において、1~2種検出されたが、割合としては少なかった。よって、3試料の堆積環境としては水の影響は極く少なかったものと思われる。No.20, 24試料になると、検出種が陸生珪藻にほぼ限定されることから、さらに水の影響の少ない乾燥した好気的環境が推定される。

今回、花粉化石もほとんど検出されなかったが、今回の珪藻分析の結果を考え合わせると、好気環境のもとで花粉外膜が酸化分解されて消失してしまったものと考えられる。このように、花粉の残存度合は、陸生珪藻の産出度合と負の相関があると考えられ、花粉の酸化分解を裏付けるものと言えよう。

珪藻・花粉ともに検出されない上半分の粘土層の堆積環境は不明であるが、もともと無化石であったか、二次的に分解消失されてしまったのか、その原因については今のところ不明である。

以上、今回の珪藻分析結果からは、八崎浮石層(H. P)以深の粘土・砂・シルトの生成が堆積時より後に生じたものと考えられる。またその生成因は、堆積後の風化や地下水の影響と考えられる。水の影響が後天的であるとすれば、上記の堆積物の堆積時に遺跡地が湖底や川底であった可能性は否定される。仮にその当時人類が遺跡周辺に活動していたとすれば、遺跡の立地する段丘上にもその痕跡が遺された可能性もあるが、これは石器等の確実な考古学的証拠をもって語られるべき問題と思われる。

以上、今回の珪藻分析結果からすると、八崎浮石層(H. P)以深の堆積環境は、珪藻の検出されない粘土層上部を除いて、陸生珪藻が多産することから好気的環境であったことが推定される。しかし、層相の点からみると、シルト~砂であり、流水域の堆積物と考えられ珪藻分析結果と矛盾する。これは、遺跡が段丘上に立地することから、河川の氾濫に伴ない極く短期間のうちに洪水性の砂やシルトが堆積したことが予想される。

このような粗粒物質が堆積する状況下では、珪藻は粘土物質と共に流れ去ってしまい、含有数は極めて少ないことになる。一方、粘土中においても非常に少ない場合もあり (No. 2, 6, 9, 13)、粘土中にもともと珪藻が少なかったか、堆積後に分解消失されてしまったかのいずれかが原因として考えられる。

砂~シルト中に陸生珪藻が多く含有されるのは、洪水が引いた後、好気的環境がおとずれ、陸生珪藻が生育したと考えられる。一方、陸生珪藻は季節風の強まる秋から冬にかけて空気中にも浮遊しており (Kawai, 1981) 風成堆積物中にも十分検出される可能性がある。しかし、今回の二之宮谷地遺跡の場合は、前者の解釈が妥当と思われる。

4 花粉分析

4-1 分析方法

花粉・孢子化石の抽出方法は、次に示す物理化学処理を順に行なった。

試料10~15gを秤量し、HF (フッ化水素) 処理を行ない、試料中の珪酸質の溶解と試料の泥化を行なう。次に重液 (ZnBr₂ 比重2.2) を用いて、有機物 (比重1.3~1.8以下) と鉱物質 (比重2以上) を分離させ、有機物を濃集する。普通は、その濃集した有機物残渣についてアセトリシス処理及びKOH処理を行なうのだが、本試料では、重液分離後の残渣が極めて少ないため処理をそこで止めた。重液分離後の残渣をスライドガラス上にマイクロピペットで滴下して、グリセリン (屈折率 1.25) により封入しプレパラートを作成した。そのプレパラートを

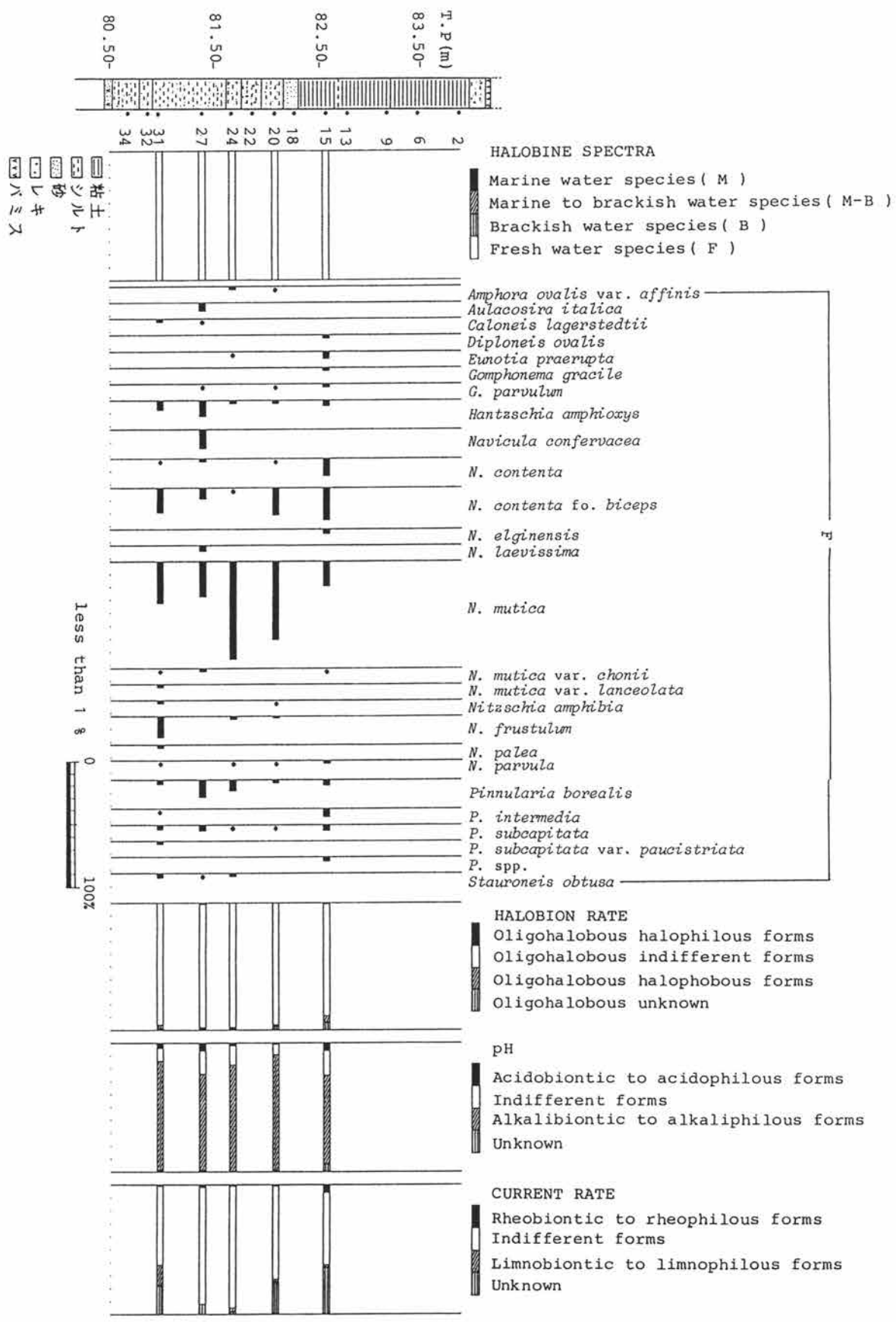


図2 9号井戸内試料主要珪藻化石群変遷

IV 科学分析

Species Name	Ecology			2	6	9	13	15	18	20	22	24	27	31	32	34
	H.R.	pH	C.R.													
<i>Achnanthes hungarica</i> Grunov	Ogh-hil	al-bi	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Achnanthes lanceolata</i> (Breb.)Grunov	Ogh-ind	al-il	r-ph	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Achnanthes minutissima</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Amphora ovalis</i> var. <i>affinis</i> (Kuetz.)V.Heurck	Ogh-ind	al-bi	ind	-	-	-	-	-	-	1	-	2	-	-	-	-
<i>Aulacosira italica</i> (Ehr.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6	-	-	-
<i>Aulacosira epidendron</i> (Ehr.)Crawford	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-
<i>Caloneis lagerstedtii</i> (Lagerst.)Cholnoky	Ogh-hob	ac-il	ind	-	-	-	2	-	-	-	-	-	1	2	-	-
<i>Caloneis bacillum</i> (Grun.)Mereschkovsky	Ogh-ind	al-il	r-ph	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Caloneis schroederi</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cocconeis placentula</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Cymbella minuta</i> Hilse ex Kabh.	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-
<i>Diploneis elliptica</i> (Kuetz.)Cleve	Ogh-ind	ind	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Diploneis ovalis</i> (Hilse)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	1	2	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia praerupta</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	ind	-	-	-	-	5	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Eunotia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	1	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Fragilaria brevistriata</i> Grunov	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Frustulia vulgaris</i> (Thwait.)De Toni	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Gomphonema angustatum</i> var. <i>producta</i> Grunov	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema gracile</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema parvulum</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-ph	-	-	-	-	2	-	1	-	-	1	-	-	-
<i>Gomphonema</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.)Grunov	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	3	1	4	2	5	-	2	13	7	1	-
<i>Navicula anglica</i> Ralfs	Ogh-ind	al-il	r-ph	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Navicula confervacea</i> (Kuetz.)Grunov	Ogh-ind	al-bi	ind	-	-	-	-	1	-	-	-	-	15	-	-	-
<i>Navicula contenta</i> Grunov	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	13	1	1	-	-	2	1	-	-
<i>Navicula contenta</i> fo. <i>biceps</i> (Arnott)Hustedt	Ogh-ind	al-il	unk	-	-	8	9	25	8	43	1	1	8	20	-	-
<i>Navicula cuspidata</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-bi	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Navicula elginensis</i> (Geg.)Ralfs	Ogh-ind	al-il	r-ph	-	-	-	1	3	2	-	1	-	-	-	-	-
<i>Navicula elginensis</i> var. <i>neglecta</i> (Krass.)Patrick	Ogh-ind	al-il	r-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Navicula ignota</i> Krasske	Ogh-unk	ind	unk	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula ignota</i> var. <i>anglica</i> Lund	Ogh-unk	ind	unk	-	-	-	-	-	2	-	1	-	-	-	-	-
<i>Navicula laevis</i> Kuetzing	Ogh-ind	ac-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-	-
<i>Navicula mutica</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	7	4	19	11	121	1	76	29	34	-	-
<i>Navicula mutica</i> var. <i>cohnii</i> (Hilse)Grunov	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	1	1	-	-	-	-	-	2	1	-	-
<i>Navicula mutica</i> var. <i>lanceolata</i> Frangueli	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-
<i>Navicula muticaoides</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula paramutica</i> Bock	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula seminulum</i> Grunov	Ogh-ind	al-bi	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Navicula subnympheum</i> Hustedt	Ogh-ind	ph-in	r-unk	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Navicula</i> cf. <i>tantula</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-il	unk	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-
<i>Neidium affine</i> var. <i>longiceps</i> (Geg.)Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-ph	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Neidium herrmannii</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Neidium</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia amphibia</i> Grunov	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	2	-	-
<i>Nitzschia denticula</i> Grunov	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Nitzschia frustulum</i> (Kuetz.)Grunov	Ogh-ind	al-bi	l-ph	-	-	-	-	-	3	-	2	-	17	1	-	-
<i>Nitzschia palea</i> (Kuetz.)W.Smith	Ogh-ind	al-bi	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-
<i>Nitzschia parvula</i> Levis	Ogh-ind	ind	ind	-	-	1	-	2	-	2	-	1	-	1	-	-
<i>Pinnularia borealis</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	-	-	1	1	4	1	5	-	8	14	3	-	-
<i>Pinnularia intermedia</i> (Lagerst.)Cleve	Ogh-ind	ind	unk	-	-	1	1	6	1	-	-	-	-	1	-	-
<i>Pinnularia microstauron</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	-	-	-	-	1	-	-	-	1	1	-	-	-
<i>Pinnularia nobilis</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	unk	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	4	3	2	-	1	4	3	-	-
<i>Pinnularia subcapitata</i> var. <i>paucistriata</i> (Grun.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-
<i>Pinnularia substomatophora</i> Hustedt	Ogh-ind	ac-il	unk	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	3	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Rhopalodia gibberula</i> (Ehr.)O.Muller	Ogh-hil	al-il	ind	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Stauroneis obtusa</i> Lagerst	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	2	1	3	1	-
<i>Surirella angusta</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-bi	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Surirella ovata</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Marine Water Species				0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Marine to Brackish Water Species				0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Brackish Water Species				0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Fresh Water Species				0	1	25	23	102	31	201	6	102	106	107	4	0
Total Number of Diatoms				0	1	25	23	102	31	201	6	102	106	107	4	0

LEGEND

H.R.: 塩分濃度による分類
 Ogh-hil: 塩分濃度による分類
 Ogh-ind: 塩分濃度による分類
 Ogh-hob: 塩分濃度による分類
 Ogh-unk: 塩分濃度による分類
 pH: pHによる分類
 ac-bi: 塩分濃度による分類
 ac-il: 塩分濃度による分類
 ind: pHによる分類
 al-bi: 塩分濃度による分類
 al-il: 塩分濃度による分類
 unk: pHによる分類
 C.R.: 塩分濃度による分類
 l-bi: 塩分濃度による分類
 l-ph: 塩分濃度による分類
 ind: 塩分濃度による分類
 r-bi: 塩分濃度による分類
 r-ph: 塩分濃度による分類
 unk: 塩分濃度による分類

表 1 9号井戸内試料珪藻分析結果

顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現したすべての種類 (Taxa) およびその個数を計数した。

4-2 結 果

花粉・孢子化石の産状は、5 試料とも化石の含有数が極めて少なく、試料番号 2 でイネ科が僅かに検出されただけである(表 2)。そのイネ科の花粉は外膜が壊れており、現生花粉のような形状は示さず変形してつぶれていた。したがって、JK37-2 9 号井戸内の断面の八崎浮石層より下位の堆積層の堆積時の植生を復元することは、花粉分析においては困難である。花粉・孢子化石が堆積物中に残存しなかった原因としては、堆積時あるいは堆積後の経年変化により酸化分解したと考えられ、水成堆積物ではない可能性が考えられる。今後、花粉・孢子化石が検出されない堆積物の化学的な研究が進むにつれて、このことはより明確にされると考える。

表 2 9 号井戸内試料花粉分析結果

試 料 番 号	2	13	20	27	31
イ ネ 科	1	0	0	0	0
不明花粉	1	0	0	0	0
Pseudoschizaea	0	0	0	1	0
樹木花粉	0	0	0	0	0
草本花粉	1	0	0	0	0
不明花粉	1	0	0	0	0
シダ種孢子	0	0	0	0	0
総花粉・孢子	2	0	0	0	0

区分		適応性	環境(例)	
水生珪藻	強塩生種 (Polyhalobous)	塩分濃度 40,000mg/l 以上に出現するもの	低緯度熱帯海域、塩水湖	
	真塩生種 (Euhalobous)	海産生種：塩分濃度 30,000mg/l ~ 40,000mg/l に出現するもの	一般海域 (ex 大陸棚及び大陸棚以深の浅海・深海)	
	中塩生種 (Mesohalobous)	汽水生種：塩分濃度 500mg/l ~ 30,000mg/l に出現するもの	河口・内湾・沿岸・塩水湖・潟	
	弱塩生種 (Oligohalobous)	弱中塩生種 (β -Mesohalobous)	弱中塩生種 (Halophilous) 注1	一般融水域 (ex 湖沼・池・塩水湖上域・高塩領域 沼・河川・川・沼沢地・泉) 一般融水 湿原・湿地
		貧塩-好塩性種 (Halophilous) 注2	貧塩-不定性種 (Indifferent) 注2	
		貧塩-機塩性種 (Halophobous) 注3	貧塩-機塩性種 (Halophobous) 注3	
		(好ミズゴケ種) (Sphagnophilous)	(好ミズゴケ種) (Sphagnophilous)	
	広域塩性種 (Euryhalinous)	低濃度から高濃度まで広い範囲の塩分濃度に適応して出現する種類	一般淡水~汽水域	
	pH 酸性性種 (Acidobiontic)	pH. 7 以下に出現、pH. 5.5 以下で最もよく生育するもの	湿原・湿地・火口湖 (酸性水)	
	好酸性種 (Acidophilous)	pH. 7 付近に出現、pH. 7.0 以下で最もよく生育するもの	湿原・湿地・沼沢地	
	pH-不定性種 (Indifferent)	pH. 7 付近で最もよく生育するもの	一般融水 (ex 湖沼・池沼・河川)	
	好アルカリ性種 (Alkaliphilous)	pH. 7 付近に出現、pH. 7.0 以上で最もよく生育するもの		
真アルカリ性種 (Alkalibiontic)	pH. 8.5 以上のアルカリ性水域にのみ出現するもの	アルカリ性水域 (少ない)		
真止水性種 (Limnobiontic)	止水にのみ出現するもの	流入水のない湖沼・池沼		
好止水性種 (Limnophilous)	止水に特長的であるが、流水にも出現するもの	湖沼・池沼・流れの緩やかな川		
流水不定性種 (Indifferent)	止水にも流水にも普通に出現するもの	河川・川・池沼・湖沼		
好流水性種 (Rheophilous)	流水に特長的であるが、止水にも出現するもの	河川・川・小川・上流域		
真流水性種 (Rheobiontic)	流水域にのみ出現するもの	河川・川・流れの速い川・渓流・上流域		
好気性種 (Aerophilous species)	好気的環境 (Aerial habitats) 多少のしめり気があれば土壌表面中やコケの表面に生育可能である 特に土壌中に生育するものについての環境を Soil habitats という。	○ 土壌表面中、○ 樹幹や倒木上のコケに付着、 ○ コケに付着、○ 木の根元のコケに付着、 ○ 濡れた岩の表面に付着、○ 濡れたコケに付着、 ○ 水辺のコケに付着、○ 霧の飛沫で湿ったコケや 岩上の壁に付着、○ 石灰岩上に生えたコケに付着 などさまざまな生活形態がある		

注1) 少量の塩分がある方がよく生育するもの 注2) 少量の塩分があっても、これによく耐えることのできるもの 注3) 少量の塩分にも耐えることのできないもの
(区分、適応性は田中・吉田・中島, 1977 奥利根地域域学術調査報告書 II p.114~135を基に一部即除、環境については加筆作成した)

(別紙) 珪藻の区分・適応性・環境

3 出土土器胎土分析鑑定報告

第四紀 地質研究所 井上 巖

X線回折試験及び電子顕微鏡観察

1 実験条件

1-1 試料

分析に供した試料は第1表胎土性状表に示す通りである。

X線回折試験に供する遺物試料は洗浄し、乾燥したのちに、メノウ乳鉢にて粉碎し、粉末試料として実験に供した。

電子顕微鏡観察に供する遺物試料は断面を観察できるように整形し、 $\phi 10\%$ の試料台にシルバーペーストで固定し、イオンスパッタリング装置で定着した。

1-2 X線回折試験

土器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定はX線回折試験によった。測定には日本電子製JD X-8020 X線回折装置を用い、次の実験条件で実験した。

Target : Cu、Filter : Ni、Voltage : 40Kv、Current : 30mA、ステップ角度 : 0.02° 、計数時間 : 0.5 SEC。

1-3 電子顕微鏡観察

土器胎土の組織、粘土鉱物及びガラス生成の度合についての観察は電子顕微鏡によって行った。

観察には日本電子製T-20を用い、倍率は、35、350、750、1500、5000、の5段階で行い、写真撮影をした。

35~350倍は胎土の組織、750~5000倍は粘土鉱物及びガラスの生成状態を観察した。

2 実験結果の取扱い

実験結果は第1表胎土性状表に示す通りである。第1表右側にはX線回折試験に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の組成が示してあり、左側には、各胎土に対する分類を行った結果を示している。

X線回折試験結果に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現れる各鉱物に特有のピークの高さ(強度)を $\%$ 単位で測定したものである。

電子顕微鏡によって得られたガラス量とX線回折試験で得られたムライト(Mullite)、クリストバーライト(Cristobalite)等の組成上の組合せとによって焼成ランクを決定した。

2-1 組成分類

1) Mo-Mi-Hb三角ダイアグラム(第3図)

第1図に示すように三角ダイアグラムを1~13に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。

Mo、Mi、Hb、の三成分の含まれない胎土は記載不能として14にいれ、別に検討した。三角ダイアグラムはモンモリロナイト(Mont)、雲母類(Mica)、角閃石(Hb)、のX線回折試験におけるチャートのピーク高を、パーセント(%)で表示する。

モンモリロナイトは $Mo / (Mo + Mi + Hb) * 100$ でパーセントとして求め、同様にMi、Hb、も計算し、三角ダイアグラムに記載する。

三角ダイアグラム内の1~4はMo、Mi、Hbの3成分を含み、各辺は2成分、各頂点は1成分よりなっていることを表している。

位置分類について基本原則は参考図に示す通りである。

2) No-Ch、Mi-Hb菱形ダイアグラム(第4図)

第2図に示すように菱形ダイアグラムを1~19に区分し、位置分類を数字で記載した。記載不能は20として別に検討した。

モンモリロナイト(Mont)、雲母類(Mica)、角閃石(Hb)、緑泥石(Ch)、のうち、a) 3成分以上含まれない、b) Mont、Ch、の2成分が含まれない、

IV 科学分析

c) Mi、Hb、の2成分が含まれない、の3例がある。

菱形ダイアグラムはMont-Ch、Mica-Hbの組合せを表示するものである。Mont-Ch、Mica-HbのそれぞれのX線回折試験のチャートの高さを各々の組合せ毎にパーセントで表すもので、例えば、 $Mo / Mo + Ch * 100$ と計算し、Mi、Hb、Ch、も各々同様に計算し、記載する。

菱形ダイアグラム内にある1～7はMo、Mi、Hb、Ch、の4成分を含み、各辺はMo、Mi、Hb、Ch、のうち3成分、各頂点は2成分を含んでいることを示す。

位置分類についての基本原則は第2図に示す通りである。

2-2 焼成ランク

焼成ランクの区分はX線回折試験による鉱物組成と、電子顕微鏡観察によるガラス量によって行った。

ムライト (Mullite) は、磁器、陶器など高温で焼かれた状態で初めて生成する鉱物であり、クリストバーライト (Cristobalite) はムライトより低い温度、ガラスはクリストバーライトより更に低い温度で生成する。

これらの事実に基づき、X線回折試験結果と電子顕微鏡観察結果から、土器胎土の焼成ランクをI～Vの5段階に区分した。

a) 焼成ランクI：ムライトが多く生成し、ガラスの単位面積が広く、ガラスは発泡している。

b) 焼成ランクII：ムライトとクリストバーライトが共存し、ガラスは短冊状になり、面積は狭くなる。

c) 焼成ランクIII：ガラスの中にクリストバーライトが生成し、ガラスの単位面積が狭く、葉状断面をし、ガラスのつながりに欠ける。

d) 焼成ランクIV：ガラスのみが生成し、原土（素地土）の組織をかなり残してい

る。ガラスは微小な葉状を呈する。

e) 焼成ランクV：原土に近い組織を有し、ガラスは殆どできていない。

以上のI～Vの分類は原則であるが、胎土の材質、すなわち、粘土の良悪によってガラスの生成量は異なるので、電子顕微鏡によるガラス量も分類に大きな比重を占める。このため、ムライト、クリストバーライトなどの組合せといくぶん異なる焼成ランクを出現することになるが、この点については第1表の右端の備考に理由を記した。

3 分析結果

3-1 タイプ分類

二之宮谷地遺跡出土の土器13個、二之宮洗橋遺跡の土器7個、今井道上道下遺跡出土の粘土2個、二之宮宮東遺跡の未焼成土器1個、洗橋遺跡の粘土1個の24個を分析した。分析した結果は第1表胎土性状表に示す通りである。第1表には三角ダイアグラム、菱形ダイアグラムの位置分類、焼成ランクに基づいてA～Hの8タイプに分類された。最も多いタイプはHタイプで8個が該当する。続いて、Bタイプが多く、6個が該当する。Fタイプは3個、DとEタイプは各2個、A、C、Gの3個は各1個という分類になっている。

電子顕微鏡によるガラスの分析では、粗粒のガラスが生成する焼成ランクI～IIは3個、中～粗粒のガラスが生成する焼成ランクIIは2個、中粒のガラスが生成する焼成ランクIIIは14個と最も多く、細粒のガラスが生成している焼成ランクIVは1個である。

Aタイプ…洗橋-17

Mont、Mica、Hbの3成分を含み、Ch 1成分に欠ける。

Bタイプ…谷地-6、8、10、洗橋-15、18、宮東-21

Hb 1成分を含み、Mont、Mica、Chの

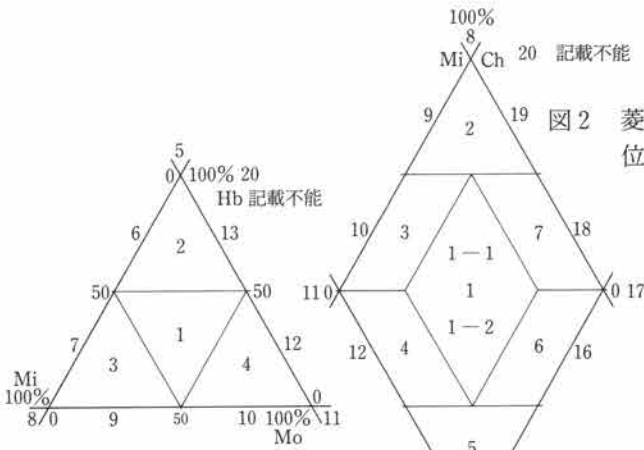


図1 三角ダイアグラム位置分類図

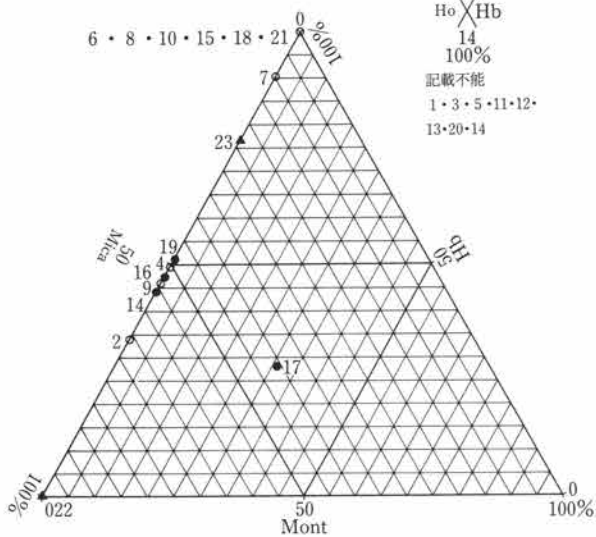


図3 Mo-Mi-Hb三角ダイアグラム位置分類図

3成分に欠ける。固体数は6個である。固体数の多いことから推察して、在地あるいは在地近傍の可能性が高い。

Cタイプ…道上道下-23

Mica、Hb、Chの3成分を含み、Mont 1成分に欠ける。〔へ〕層粘土

Dタイプ…谷地-7、洗橋-19

Mica、Hbの2成分を含み、Mont、Chの2成分に欠ける。谷地-7はHbの検出強度が高く異質である。

Eタイプ…谷地-2、洗橋-14

Mica、Hb、Cbの3成分を含み、Most 1成分に欠ける。

図2 菱形ダイアグラム位置分類図

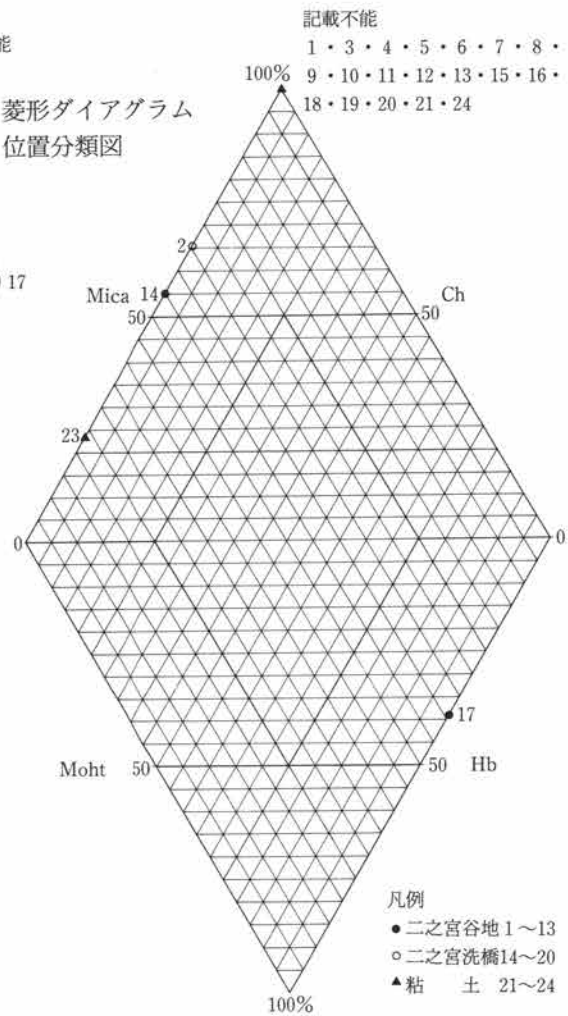


図4 Mo-Ch, Mi-Hb菱形ダイアグラム位置分類図

凡例
●二之宮谷地1~13
○二之宮洗橋14~20
▲粘土 21~24

Fタイプ…谷地-4、9、洗橋-16

Mica、Hbの2成分を含み、Mont、Chの2成分に欠ける。組成的のDタイプと類似するが、検出強度が異なるために、位置分類が違っている。

Gタイプ…道上道下-22

Mica、Chの2成分を含み、Mont、Hbの2成分に欠ける。〔チ〕層粘土

Hタイプ…谷地-1、3、5、11、12、13、洗橋-20、洗橋粘土-24

Mont、Mica、Hb、Chの4成分に欠ける。

谷地-1、3、11は須恵器で、高温焼

IV 科学分析

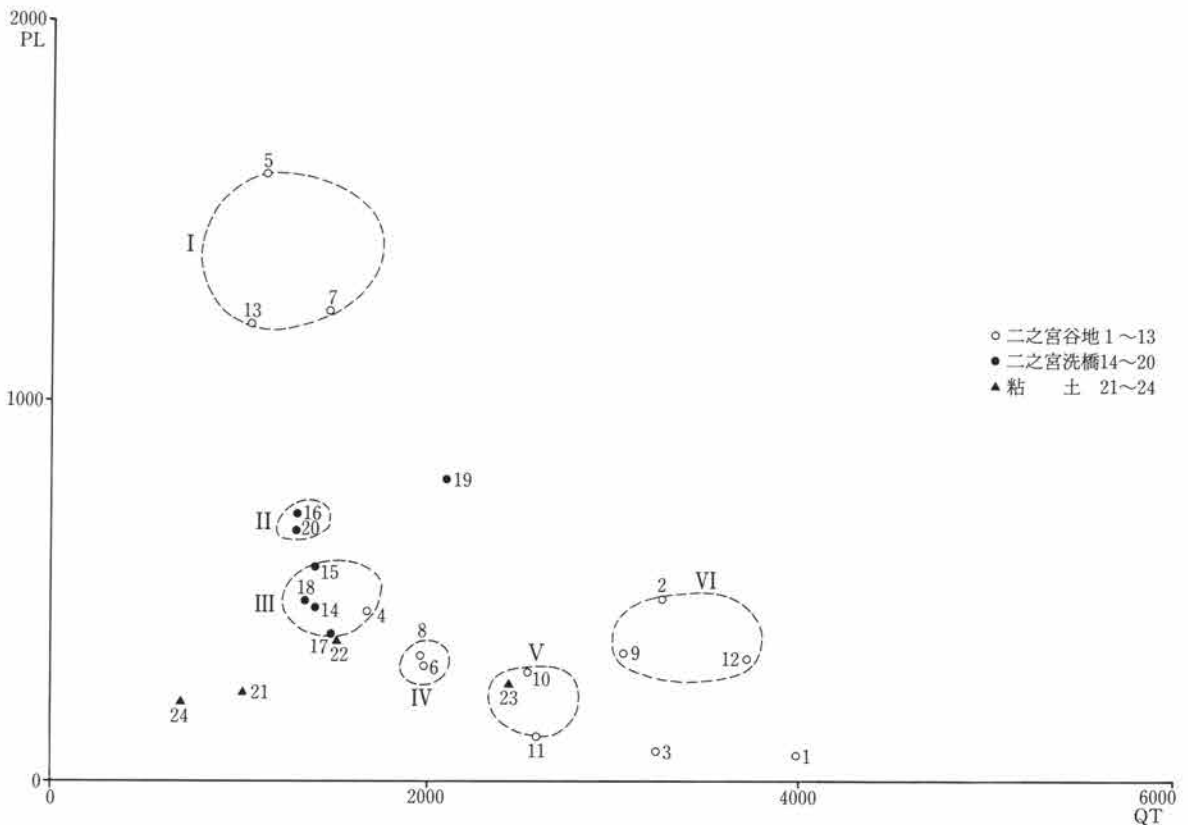


図5 石英(Qt)-斜長石(Pl)相関図

成にともなって鋳物が分解し、ガラス化したもの。

谷地-5、13、洗橋-20は4成分を含まず、 $n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot 1\text{H}_2\text{O}$ (アルミナゲル) で構成される。

以上の結果から明らかなように、胎土は多岐にわたり、統一性に欠けるように見受けられる。これは分析した土器や瓦塔などの種類が多いことと一致するものである。この中で、Bタイプは5個の土器が該当し、組成の類似するDとFタイプとで5個が該当する。この3タイプで、土器の50%を占めている。このことから推察して、これらは在地あるいは在地近傍の可能性が高い。

遺跡より採取した粘土のうち洗橋-24の粘土はHタイプで、このタイプに属する土器は7個該当している。このうち須恵器を除く土器が粘土と同じ組成と言うことになる。道上道下遺跡の〔チ〕と〔へ〕

の粘土に該当する土器は検出されていない。

3-2 石英(Qt) - 斜長石(Pl)の相関について(第5図)

土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を製作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るということは個々の集団が待つ土器製作上の個有の技術であると考えられる。

自然状態における各地の砂は個々の石英と斜長石の比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば、各地域における砂は各々個有の石英-斜長石比を有しているといえる。

この固有の比率を有する砂をどの程度粘土中に混入するのか前記のように各々の集団の有する個有の技術の一端である。

第5図Qt-Pl相関図に示すように、土器はI~VI

の6グループと“その他”に分類された。20個の土器に対して6グループと言うのは多いが胎土のタイプ分類でも同じ現象が認められており、これは土器及び瓦塔の種類が多いことに由来している。

Iグループ…谷地—5、7、13

斜長石の強度が非常に高い特殊なグループで、谷地遺跡だけで検出されている。5はHタイプの甕、7はDタイプの土製品、13はHタイプの縄文土器と器種は異なる。5と13はともにHタイプで、共通性がある。

IIグループ…洗橋—16、20

16は土師の坏で、Fタイプ、20は土師の甕で、Hタイプと器種、組成とも異なる。洗橋遺跡の土器で構成される。

IIIグループ…谷地—4、洗橋—14、15、17、18、道上道下—22

4は土師の坏で、Fタイプ、14は土師の坏で、Eタイプ、15は土師の坏でBタイプ、17は土師の甕で、Aタイプ、18は土師の甕で、Bタイプの胎土で構成される。このグループは土師の甕と坏が共存し、洗橋遺跡の土器が集中するのが特徴である。谷地遺跡の土器1個がこのグループに含まれている。

IVグループ…谷地—6、8

6と8はともにBタイプで、土製品である。

Vグループ…谷地—10、11、道上道下—23

10はBタイプの瓦塔、11はHタイプの瓦塔という共通性がある。

VIグループ…谷地—2、9、12

2は土師の坏で、Eタイプ、9はFタイプの瓦塔、12はHタイプの瓦塔で構成される。

“その他”…谷地—1、3、洗橋—19

1は須恵器の短頸壺で、石英の強度が高い。3も須恵器であるが石英の強度が低く、1とは異なる。19は土師器の甕で、Dタイプの胎土である。斜長石の強度が幾分高く、どのグループにも属さない。

以上の結果から明らかなように、谷地遺跡の土器は4グループに分かれて分布するが、洗橋遺跡の土器とは共存しない。洗橋遺跡の土器は2つのグループに集中し、谷地遺跡の土器とは異なるグループを形成し、両者の間に差があるように見受けられる。

4 ま と め

- i) 土器胎土と粘土合わせ24個分析した。分析の結果A～Hの8タイプに分類された。このうち粘土だけのタイプが2個あり、土器としては6タイプに分かれる。Bタイプと類似する組成を待つCとFタイプを併せたものは各々5個づつあり、固体数の多いことから推察して、この3タイプは在地あるいは在地近傍の可能性が高い。
- ii) 電子顕微鏡によるガラスの分析では粗粒のガラスが生成しているのは須恵器で、焼成ランクはI～IIと高い。土師器と瓦塔は中粒のガラスが生成し、焼成ランクはIIIと幾分低いのが特徴である。
- iii) Qt-Plの相関では、土器はI～VIの6つのグループと“その他”に分類された。谷地遺跡の土器と洗橋遺跡の土器ほとんど共存することではなく、各遺跡の土器でグループを構成しているのが特徴である。“その他”とされたものの内、谷地—1と3はともに須恵器で、明らかに異質である。洗橋—19はどのグループにも属さず、異質である。
- iv) 遺跡から採取した粘土について言えば、洗橋の粘土と同じ組成を持つ土器はHタイプで5個が該当するが、道上道下遺跡の粘土に該当する土器は検出されていない。

第1表 胎土性状表

試料 No	タイプ分類	焼成ランク	組成分類			粘土鉱物			造岩鉱物			ガラス	備考	
			Mo-Mi-Hb	No-Ch.Mi-Hb	Mont:Mica	Hb	Ch(Fe)	Ch(Mg)	Halloy	K-fels	Pyrite			Qt
二之宮谷地-1	H	I~II	14	20									粗粒	細粒砂を含む碎屑性粘土
2	E	III	7	9	169	87	205						中粒	細粒砂を含む碎屑性粘土
3	H	I~II	14	20					119				粗粒	細粒砂を含む均質な粘土
4	F	III	7	20	121	115							中粒	細粒砂を含む碎屑性粘土
5	H	III	14	20						1139	1600	345	中粒	細粒砂を混入した碎屑性粘土
6	B	III	5	20		517				1994	301	238	中粒	細粒砂を含む碎屑性粘土
7	D	III	6	20	131	1266				1477	1236	204	中粒	細粒砂を含む碎屑性粘土
8	B	III	5	20		347				1970	321		中粒	細粒砂を含む碎屑性粘土
9	F	III	7	20	110	95				3064	335		中粒	細粒砂を含む碎屑性粘土
10	B	III~IV	5	20		99				2543	284		細~中粒	細粒砂を含む碎屑性粘土
11	H	I~II	14	20						2592	113	196	粗粒	細粒砂を含む碎屑性粘土
12	H	III	14	20						3724	319	170	中粒	粗粒砂を混入した碎屑性粘土
13	H	III	14	20			191			1065	1203		中粒	中粒砂を混入した碎屑性粘土
二之宮洗橋-14	E	III	7	9	157	123	178			1413	456	128	中粒	細粒砂を含む碎屑性粘土
15	B	III	5	20		93				1401	559	168	中粒	細粒砂を含む碎屑性粘土
16	F	II	7	20	121	105				1326	699	145	中~粗粒	細粒砂を含む碎屑性粘土
17	A	III	1	16	123	163	104			1491	385		中粒	細粒砂を含む碎屑性粘土
18	B	II	5	20		77				1355	471	139	中~粗粒	細粒砂を含む碎屑性粘土
19	D	III	6	20	134	146				2131	789	167	中粒	細粒砂を含む碎屑性粘土
20	H	III	14	20			167			1306	653	196	中粒	細粒砂を含む碎屑性粘土
二之宮東-21	B		5	20		171			116					
今井道上道下-22	G		8	8	154		184							
-23	C		6	10	125	413	158							
-24	H		14	20						691	207			

焼成ランク Mu: I Mu-Cr: II Cr-glass: III glass: IV 原土: V
 Mont: モンモロナイト Mica: 雲母類 Hb: 角閃石 Ch: 緑泥石 Ka: カオリナ
 Hy: 紫蘇輝石 Qt: 石英 Pl: 斜長石 Cr: クリスタリン Cr: ライト Mu: ムライト

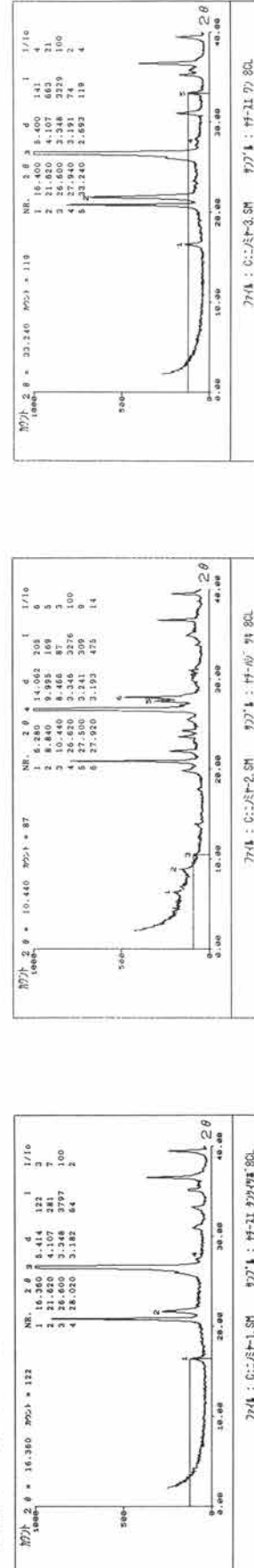


図6 X線回折チャート(1)

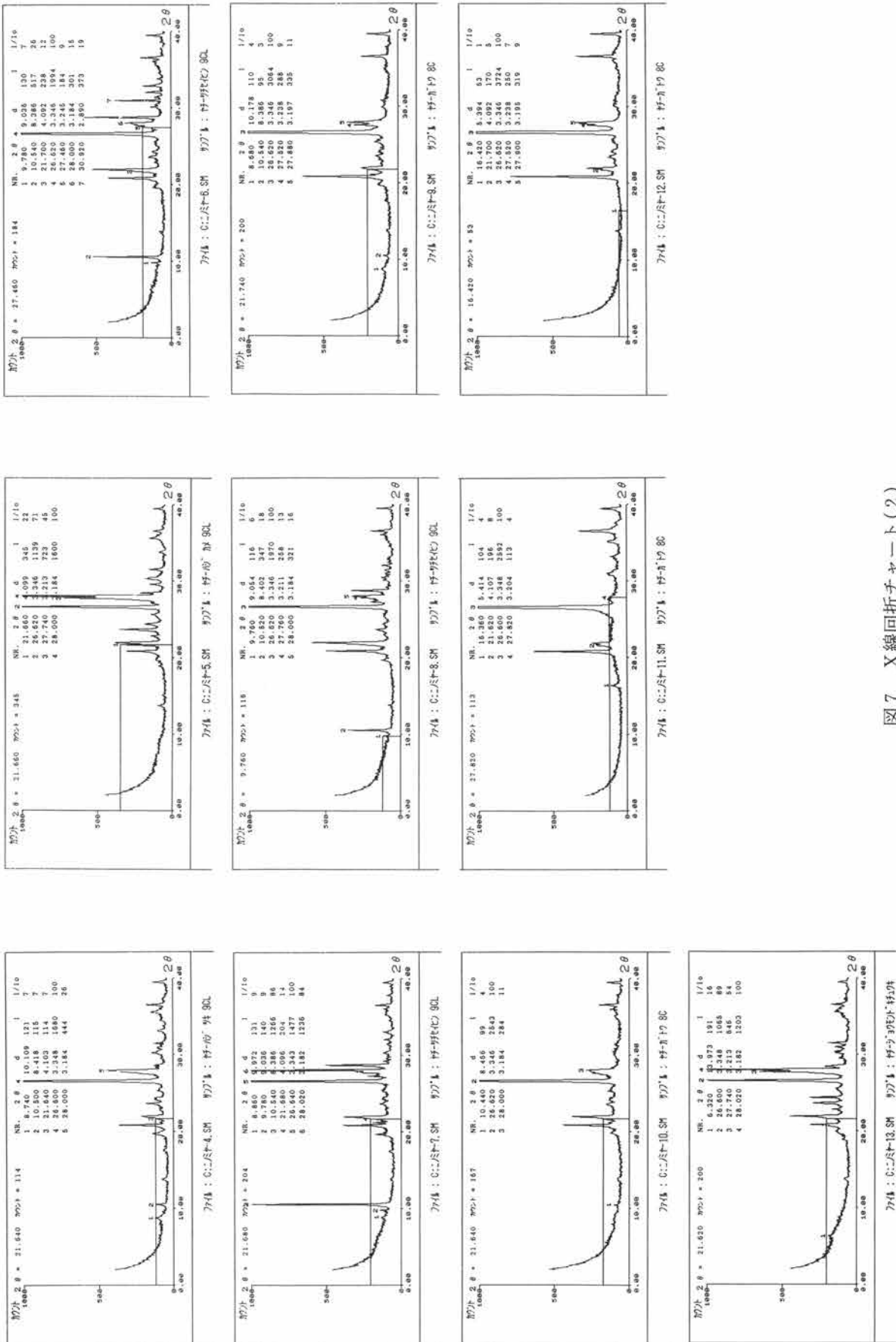
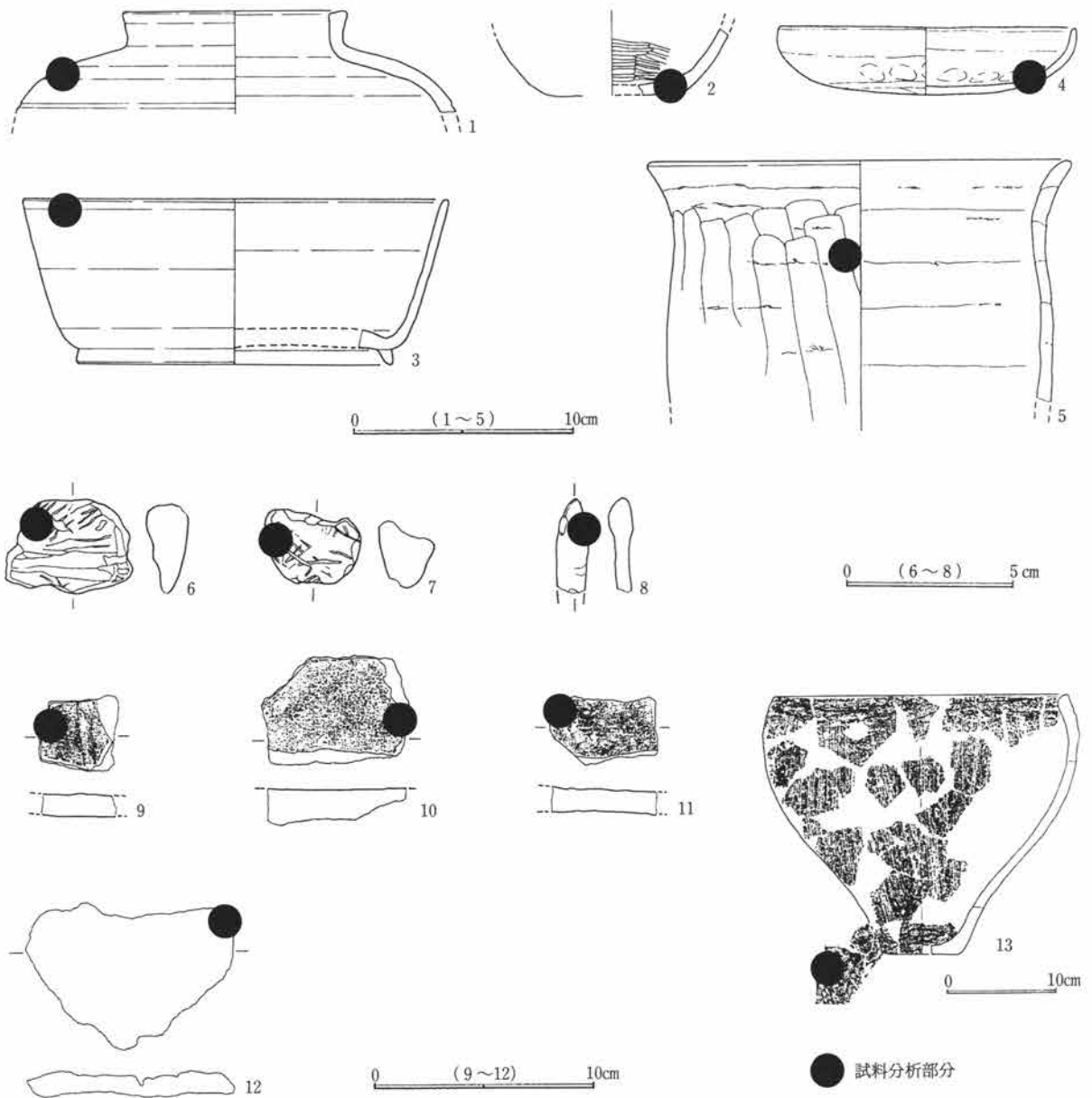


図7 X線回折チャート(2)

IV 科学分析



No.	種類 器種	出土遺構	挿図番号	タイプ 分類	QT・PI 相関	①胎土 ②焼成 ③色調の視点	県工業試験場 分析試料番号
1	須恵器 壺	2号住居跡	第22図15	H	その他	①微砂粒 ②還元焰 ③灰色	1(983)
2	黒色土器杯	2号住居跡	第22図12	E	VI	①微砂粒 ②酸化焰内面黒色処理 ③橙色	
3	須恵器 碗	21号住居跡	第71図3	H	その他	①微砂粒 ②還元焰 ③灰色	2(984)
4	土師器 杯	9号住居跡	第39図4	F	III	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	8(990)
5	土師器 甕	9号住居跡	第39図6	H	I	①細砂粒 ②酸化焰 ③浅黄色	
6	土製品	9号住居跡	第40図31	B	IV	☆	
7	土製品	9号住居跡	第40図34	D	I	☆	
8	土製品	9号住居跡	第39図15	B	IV	☆	
9	瓦 塔	グリッド	第277図24	F	VI	①砂粒含 ②還元焰 ③灰白色	
10	瓦 塔	グリッド	第277図25	B	V	①白色粒子含 ②酸化焰 ②浅橙色	7(989)
11	不明	グリッド		H	V		
12	瓦 塔	グリッド	第277図27	H	VI	①砂粒・赤色粒子含 ②還元焰 ③浅黄色	6(988)
13	縄文 深鉢	グリッド		H	I	☆	

第8図 胎土分析試料

4 採取粘土と出土土器の蛍光X線分析

群馬県工業試験場 小 沢 達 樹

分析方法及び測定条件

試料 供試料を振動ミル粉碎機により10 μ m以下に粉碎し、5～10gを油圧プレス機を用いて径4cmの円板状に成型して使用した。

分析装置 理学電機㈱KG-4型

測定条件

分光結晶；Fe,Sr,RbにはLif(2d=4.028A)
Ca,K,Ti,AlにはEDDT(2d=8.80
8A)
NgにはADP(2d=10.648A)

検出器；Lifを使用したときS.C
EDDT,ADPを使用したときP.C

時定数；1

計数法；Fe,Ca,K,Ti,Sr,Rbはチャートによる。Si,Al,Ngは定時計数法による。チャートの速さは4°/minとした。

波高分析器；積分方式

測定線；FeK β ,CaK α ,KK α ,TiK α ,AlK α ,
MgK α ,SrK α ,RbK α の各一次線
を使用した。

X線照射面積；20mm ϕ

測定方法

検量線法；6点

標準試料；群馬県埋蔵文化調査事業団から依

頼を受けた土器(295、310、336、
345、360、380)を湿式化学分析し
て、標準試料とした。

分析資料は、この遺跡の西側に隣接している今井道上道下遺跡の粘土採掘土坑採取粘土と二之宮谷地遺跡出土遺物との関連を調べることを目的とし、抽出にあたった。粘土採掘土坑の異なる層位から抽出した9・10の2点の粘土サンプルと、二之宮谷地遺跡の奈良・平安時代の出土遺物8点を対比した。分析に供した出土遺物を須恵器・瓦・瓦塔・土師器と異なる製品に分散させたのは、今後の分析の方向性を深めるために、あえて行ったものである。

分析結果のうち、一般的に用いられている Sr・Rb・Ca・K の4元素の相関図を次頁に示した。

これより、粘土採掘土坑と重なる値の資料を得ることはできなかった。1～4の須恵器・瓦については付近に窯跡のないことから、予想された結果であった。土師器の5・8は最も期待した資料であったが、8のみがやや近い値となった。この結果の中で、粘土採掘土坑の2点の値が特に Sr/Rb の差で大きいことが問題点としてあげられよう。反面、Tiでは極めて近い値が得られている。

なお、今回分析した資料の一部については、平行して別の機関による分析(337頁参照)を試みた。本分析の1・2・6・7・8がこの分析の1・3・12・10・4にあたる。また、採掘土坑の粘土についても同様の分析を試みているので、併せて参照されたい。

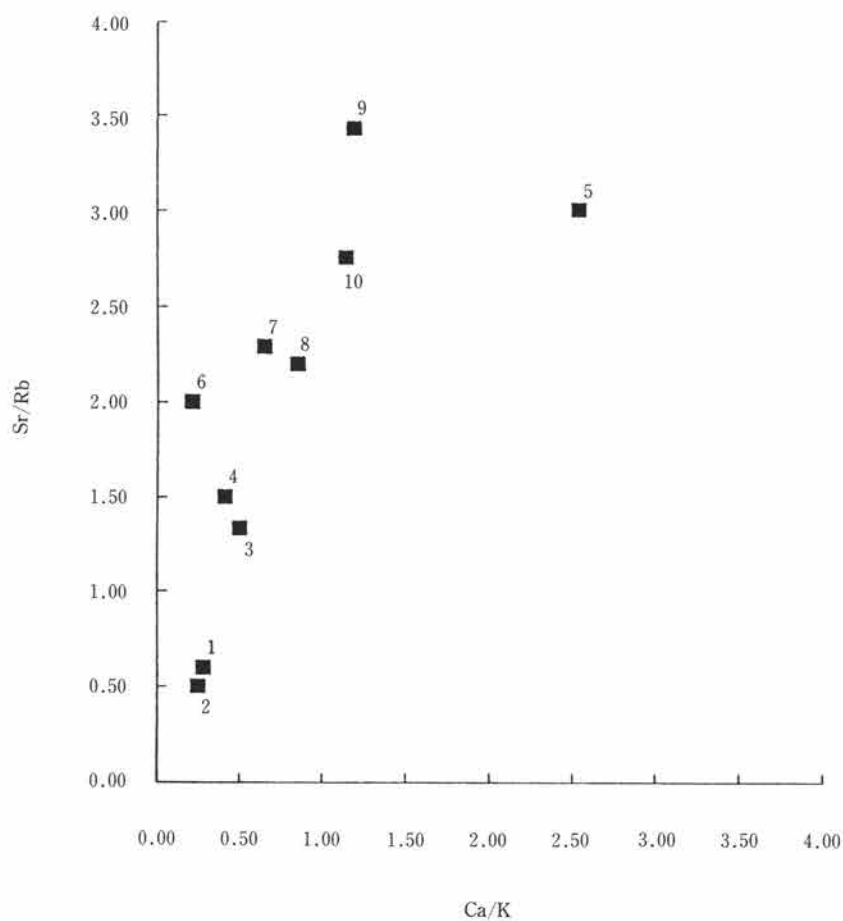
第6表 分析結果

試料	SiO ₂ (%)	Al ₂ O ₃ (%)	MgO (%)	Fe ₂ O ₃ (%)	TiO ₂ (%)	K ₂ O (%)	CaO (%)	Sr/Rb	Ca/K
983	69.82	15.32	1.19	4.60	0.83	1.37	0.38	0.60	0.28
984	74.66	20.10	1.17	3.41	0.77	1.64	0.42	0.50	0.25
985	65.16	13.81	0.97	6.94	0.93	1.32	0.66	1.33	0.50
986	59.39	20.40	0.41	6.31	0.84	1.40	0.57	1.50	0.41
987	52.45	27.04	0.71	5.86	1.13	0.49	1.25	3.00	2.54
988	62.17	21.21	1.02	6.35	0.94	1.82	0.39	2.00	0.21
989	61.18	21.81	0.41	6.03	1.00	1.20	0.78	2.29	0.65
990	55.63	19.75	2.75	8.48	1.16	1.80	1.53	2.20	0.85
991	55.42	23.05	1.01	7.50	1.27	0.71	0.85	3.43	1.19
992	62.25	21.12	1.28	6.00	1.26	0.90	1.03	2.75	1.14

IV 科学分析

番号	試験番号	出土遺構(掲載図版)	種別	器種	Ca/K	Si/Rb
1	983	2住(22図-15)	須恵器	短頸壺	0.28	0.60
2	984	21住(71図-3)	須恵器	椀	0.25	0.50
3	985	76住(207図-14)	瓦	男瓦	0.50	1.33
4	986	グリッド(279図-9)	瓦	女瓦	0.41	1.50
5	987	グリッド	土師器	手捏ね	2.54	3.00
6	988	グリッド(277図-27)	土製品	瓦塔	0.21	2.00
7	989	グリッド(277図-25)	土製品	瓦塔	0.65	2.29
8	990	9住(39図-4)	土師器	杯	0.85	2.20
9	991	今井道上・道下遺跡粘土採掘土坑	粘土		1.19	3.43
10	992	今井道上・道下遺跡粘土採掘土坑	粘土		1.14	2.75

Ca/K対Sr/Rb比率グラフ



5 出土土器の黒色・赤色付着物について

国立歴史民俗博物館情報資料研究部 永嶋正春

1 はじめに

前橋市二之宮谷地遺跡から出土した奈良・平安時代の遺物については、その整理中に調査担当者によって黒色あるいは赤色の付着物が認められる土師器・須恵器が検出されている。それらは土器への当初の塗りとは考えられない状況を呈しており、いずれも二次的使用による付着と判断されるという。これは、これらの資料が漆のパレット、灯明皿、転用硯などである可能性が強いことを示唆している。

遺跡の性格を捉えてゆく上で、遺物の持つ属性をできるだけはっきりさせることが重要であり、そのため筆者が上記の内容を確定すべく調査を実施した。ここではその結果を報告し、本遺跡を理解するための一助としたい。なお調査は、非破壊的な手法による蛍光X線分析と、光学顕微鏡による微細部の観察並びに所定の場所からごく微小に採取した資料についての層断面観察とによった。

2 赤色付着物

第45図-3 僅かに欠損のある須恵器杯であるが、内底面の微小な凹部にのみ赤色顔料の付着が認められる(図1)。内底部表面は、全体としてはやや荒い作りを示すこの須恵器の表面のなかでは、どちらかといえばやや研磨されたような平滑さを有しており、硯として転用されたと見るのが自然な状況である。したがって赤色顔料は、擦られて顔を出した、あるいはより大きくなった器胎に内在する気泡部・空洞部にかろうじて付着残存したものである。この赤色顔料を含む内面を蛍光X線分析したところ、須恵器本来のものに以外に有意なものとして微小ではあるが水銀のピークが確認された。したがってこの赤色顔料のなかには朱(HgS赤色硫化水銀)が存在する。ただ顕微鏡で確認した場合、大きさが10ミ

クロン(100分の1mm)前後の透明で鮮鋭な赤色を有する朱粒以外にきわめて大きさの小さな赤色粒子がむしろ多く存在している(図2)。後者の赤色顔料は、その大きさと色調等からはベンガラ(α -Fe₂O₃、赤酸化鉄)と考えたいところではあるが、現時点での蛍光X線分析データからは鉄の化合物とは確認できない。朱の微粉碎されたものである可能性も捨てきれないので今後別途の方法により確認したい。なお一部の凹部には黒色墨状の残存物が見られるので、赤色墨(朱墨など)ばかりでなく、通常の墨を下ろすための転用硯であった可能性も考える必要がある。

第221図-1 須恵器杯の断片で、底部の4分の3程を中心に残存する。内底部表面は他部に比しはるかに平滑に磨きあげられているが、これは転用硯としての使用状況を反映したものとみてよい。底部から胴部への立ち上がり付近の内面を中心にしてごく僅かに赤色顔料の付着が認められる(図3)。当該部分の蛍光X線分析によると、微小な水銀のピークに加え同程度の強度で鉛の存在が確認できる。この鉛は胎土に由来しないことは確かであり、したがって朱以外に鉛化合物も付着していると考えざるを得ない。内底面には白色顔料かと思われる微視的な汚れが存在するようでもあり、鉛はこれに由来すると考えるのもあながち無理なことではない。鉛白(塩基性炭酸鉛)などの鉛系白色顔料の存在を考えるのである。正倉院に伝来する白墨(鉛白)のようなものの使用は十分考えられることである。

3 黒色付着物

第171図-2 完形の土師器杯であるが、口縁部内面の1個所にのみ黒色物が集中して付着している(図5)。付着箇所、付着物の性状、黒色付着物のほぼ全面にわたって下層に黄白色の層が認められることなど、灯明皿としての典型的な使用痕跡を示している。ただ微視的に見ると一見漆と粉らわしいような光沢のある黒色塗膜様の部分も存在することから、念のため参考に該当箇所の層断面(図6)を観察したと

IV 科学分析

ころ、あまり熱変質の進んでいないと思われる黄白色透明な油状の層から、熱による変質の進んだ黒色の層までが複雑に何り組んだ状況を示しており、類似の漆の性状とはやや異なっている。したがって、本資料は外観通り灯明皿として使用されたものと判断する。

第152図—7 須恵器の断片であるが、内面ばかりではなく外面及び割れ断面にもかなり黒色味の強い漆様の薄い塗膜が付着している。破損後、容器のくぼみを漆液容器に利用したと見られよう。塗膜層断面でみると、付着物は間違いなく漆であり、内容物の均質さからクロメられた漆と判断できる。なお、全体に塗膜の黒色化が進んでいること、空気に触れた面すなわち漆の表面や漆層内部に走る空洞との界面の黒色化がより一段と進んでいることは、漆の固化に当たって熱が加わったことを示している。あるいはこの須恵器断片を容器として、少量の生漆の加熱クロメ加工を行なったものであろうか。

第256図—22 土師器坏の口縁部小断片であり、内面に漆様のものが付着する(図7)。付着物は薄手で、縮み皺が非常によく目立つ。特に底部の方向に向けて整然とした微細な皺があるのを特徴とする。付着物の層断面(図8)は、それがよくクロメられた漆であることを示すとともに、縦横に走る繊維状のものが層中の全面に渡って均等に分散している状況が把握できる。繊維状のものの横断面は、径5ミクロン前後の円形を呈しており、太さのばらつきも少ない。以上の特徴からすると、この付着物には漆とよ

く馴染んだ紙が含まれていると考えることができる。さすれば、図7に見える縦皺の上端が紙の末端になり、通常言うところの漆蓋紙とは様相を異にしてくる。結果としては漆紙にはなっているものの、いわゆる漆の蓋紙として使われていたものではないのかもしれない。ちなみに赤外線テレビによっても文字は確認されなかった。

4 おわりに

奈良・平安時代の住居跡、建物遺構、土壌などからは、しばしば漆関係の資料や転用硯などが出土する。それらの内容によっては、公的な施設や村落寺院の存在あるいはそれらとの関係を検討できる場合もある¹⁾。本遺跡の場合も、漆液容器や朱などの顔料使用を示す転用硯が出土しているところから、小規模ではあるかもしれないが漆作業や色彩的作業が行なわれていたと考えることができるわけであり、近くに寺院等の存在を類推する事になる。墨書土器等を含め、総合的な検討が必要である。

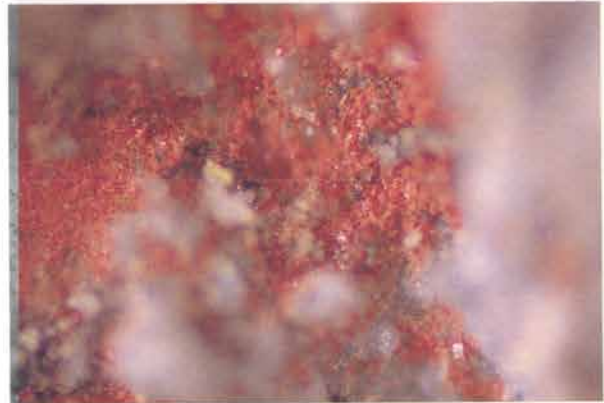
1) 群馬県下においては、戸神諏訪遺跡の場合、寺院的な遺構の周辺住居等から、寺の存在を示す墨書土器に加えて、灯明皿や朱の付着した転用硯などが出土している。

永嶋正春「出土土器の黒色・赤色付着物について」『戸神諏訪遺跡』関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第30集 群馬県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990

5 出土土器の黒色・赤色付着物について



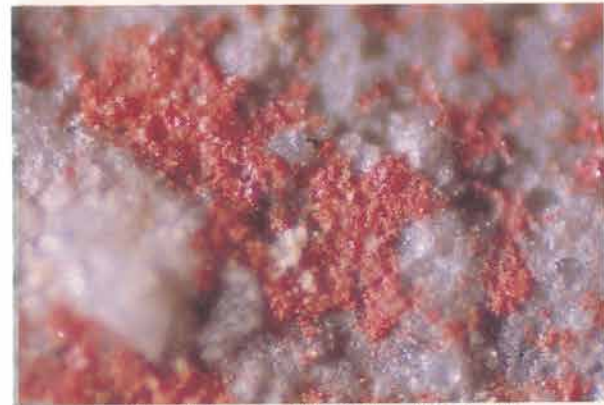
1. 第45図-3 転用硯内面 約6.25倍



2. 第45図-3 赤色顔料 約312.5倍



3. 第221図-1 転用硯内面 約6.25倍



4. 第221図-1 赤色顔料 約312.5倍



5. 第171図-2 灯明皿 約6.25倍



6. 第171図-2 油状付着物断面 約312.5倍



7. 第256図-22 漆液容器(パレット)約6.25倍



8. 第256図-22 漆層断面 約312.5倍

6 二之宮谷地遺跡の人骨について

宮崎重雄

二宮谷地遺跡は、群馬県前橋市二之宮町字谷地にあり、赤城南麓の末端部に位置している。この遺跡の北側約200mには国道50号線が東西に走っている。

調査は昭和61年9月から62年8月まで行われ、この調査区中央南側では、近世の墓坑が集中して7基確認され、この内、人骨の保存状況が良好なものが2基で、他はわずかに痕跡が認められる程度である。特に注目されるのは61号土坑で、すり鉢を頭に被った状態で出土した。

本報告では次ぎの規準に従って記述してある。

- 1) 略号はIが切歯、Cが犬歯、Pが小臼歯、Mが大臼歯を意味する。
- 2) 扁平脛骨の定義は、森本(1981)によった。
- 3) 身長推定法は藤井(1960)を用いた。
- 4) 縫合線の癒合度はKrogman & Iscan(1986)によった。
- 5) 歯槽の吸収度、歯石の形成度、大臼歯の咬耗度はBrothwell(1981)を用いた。
- 6) 大臼歯以外の歯の咬耗度の表示は柘原(1957)を用いた。
- 7) 年齢段階の区分は片山(1990)を参考にした。
- 8) 歯の計測法は藤田(1949)、人骨の計測法は馬場(1991)に従った。
- 9) 歯・歯槽の状況を示す記号は、アラビア数字が残存永久歯、○が歯槽開放、●が歯槽閉鎖、△が未萌出、dが第1乳臼歯、○で囲った数字または記号は齶歯、×は欠損のため状況不明を意味する。

31号土坑(性別:男性、年齢:熟年期~老年期)

土坑は、長軸135cm、短軸105cm、深さ35cmの広卵型で、頭部を北にし、頭頂部を上、顔を南に向け、下肢骨は南南西で胡座状に組まれた仰臥屈葬姿勢である。上肢骨は腕組しているように見える。

保存状況は不良で、体幹骨がほとんど残存しておらず、上肢骨では手根骨・中手骨・指骨・下肢骨では足根骨・中足骨・指骨を風化による溶蝕でほとんど失っている。

上腕骨の骨体横断示数は101.0である。大腿骨は、後側面の筋線の発達がよく、骨幹は左右幅の割に前後径が小さく、骨体中央断面指数は89.4である。また、脛骨骨幹中央部における脛示数を求めると80.4であり、正脛である。大腿骨推定最大全長から得られた推定身長は154.9cmであり、江戸時代後期の日本人男性の平均身長156.5cmにごく近い値である。

眉弓・上項線の発達は良く、外後頭隆越は隆越し、乳様突起は大きめである。下顎角の発達も良好で、オトガイ部は比較的平面的である。

座骨切痕は男性であることを示している。

江原他(1988)の頭骨各形質の分類基準に従えばオトガイ三角の形態は6である。

× 7 6 5 4 0 2 1	1 2 3 4 5 6 0 8
0 0 6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 7 8
右	左

頭蓋の縫合線は、内側面も外側面も矢状縫合の癒合が4の段階まで達し、消失している。他の縫合線の様子は破片となっていてははっきりしない。

口蓋部の縫合の様子は切歯縫合がすでに消失し、横口蓋縫合の外側部も消失している。

右下顎第2大臼歯の歯槽は、径12.0×11.3mmのお椀型の凹湾部をなし、齶歯の脱落によって生じたものと思われる。また右下顎の各大臼歯では歯槽が吸収されており、歯槽縁がシャープになり陥凹していて、その程度は近心の臼歯ほど著しい。

右下顎中切歯は、不整歯列をなし、唇側へ20°傾斜し、右下顎犬歯は右が唇側に30°捻転し、左下顎犬歯も15°捻転している。

下顎の犬歯は左右とも唇側が咬耗を受け、象牙質が大きく露出し、右下顎中切歯も切縁の唇側が大きく咬耗を受け、象牙質が露出している。

IV 科学分析

咬合は、弱い鋏状咬合のように観察される。

33号土坑（年齢：男性、年齢：熟年期後半～老年期）

長辺110cm、短辺65cm、深さ41cmの南にやや狭くなった隅丸方形である。頭蓋を北にして、顔を南南西に向け、左側頭部を上に行っている。体幹部は左を上にし、膝を西に屈曲させた横臥屈葬姿勢である。上肢は腕組みをしていたようである。

保存状況は、体幹骨が発掘時に観察されたものの、取り上げできず、体肢骨も、上肢骨では手根骨・中手骨・指骨、下肢骨では足根骨・中足骨・指骨を風化による溶蝕で失っている。

脛骨骨体中央部における脛示数は74.0で、正脛である。

大腿骨推定最大全長から推定身長を求めると、147.3cmとなり、江戸時代後期日本男性の平均身長156.5cmに比べるとときわめて小さい。

頭蓋の各示数は、長幅指数が73.4で長頭に属し、長高示数は78.3で高頭に、副高示数は106.7で狭頭、頭蓋長耳プレグマ高示数は68.5で高頭、頭蓋幅耳プレグマ高示数は93.3で狭頭に属する。また、頭蓋冠高示数が56.1で、頭蓋冠高幅示数が79.3で、横前頭示数が80.4、横前頭頭頂示数が66.7の中前頭、冠状頭頂示数が83.0、横頭頂後頭示数が85.4、大後頭孔示数が77.4、脳頭蓋モジュールが257.2、眼窩示数が92.5、眼窩顔高示数が52.1、眼窩間示数が54.2、口蓋示数が87.0の広口蓋、前頭上顔示数が89.1である。

頭蓋の特徴は、頭頂部が高く、眉弓の隆越は顕著で、前頭部側面観の後方への傾斜が強く、前頭結節はほとんど見られない。上項線の発達は良く、項線がはっきりしており、外後頭隆起の発達も良い、乳様突起は良く発達し、頬骨弓は太くて大きい。

江原他（1988）の頭骨各形質の分類基準によれば、下顎角部の形態はII、下顎下縁の形態はIII、オトガイ三角の形態は6である。ただし、土圧によって、下顎関節突起幅・下顎筋突起幅・下顎角幅など下顎枝部の左右幅は本来のものより小さくなっている。

座骨切痕は狭く、男性であることを示している。

Nakahashi（1986）の性判定法で用いられている頬骨幅（ZB）Iは14.6mm、ZB IIは9.7mm、ZB IIIは22.0mmであり、寛骨臼厚（CSB）は35.4mmである。この計測値も男性である可能性を示している。

× 7 6 5 4 ○ 2 1	1 2 3 4 5 ○ ● △
○ ● 6 5 4 3	2 1 1 2 3 4 5 6 ○ ○
右	左

右上顎側切歯・右上顎犬歯の咬耗は進み、舌側半が抉る取られたようになっていて、象牙質が露出し、特に後者では歯髓腔が露出している。左上顎犬歯も同様で、咬合面舌側の3/4に象牙質が露出し、咬耗は歯頸部近くまで至っているが、切縁はほとんど咬耗されてない。下顎切歯はいずれも切縁に象牙質が大きく露出し、左下顎第2切歯の咬耗面は遠心に強く傾斜している。下顎の犬歯は左右とも象牙質が大きく露出し、左犬歯の咬耗面は遠心に傾斜している。下顎小白歯では、第1小白歯が左右とも、咬合面のほぼ2/3を咬耗され、舌側が高く、エナメルがより多く残り、頬側には象牙質が露出し、頬側・舌側間は段差になっている。左第2小白歯では頬側半にかなり大きく象牙質が露出し、咬耗はほぼ歯頸部まで達するが、舌側半はほとんど咬耗を受けていない。右第2小白歯では頬側半が歯頸線を越えた所まで咬耗されている。上顎大白歯では、右第2大白歯で舌側歯根の歯髓腔が露出している。右第1大白歯では舌側咬頭が抉り取られたようになっていて、舌側歯根の歯髓腔が露出している。下顎大白歯では、右第1大白歯で頬側の咬耗が甚だしく、特に遠心側では、咬耗をまぬがれた歯根がわずかに歯槽におさまっているのみである。舌側歯冠部に少量のエナメルが残るが、近心歯根の舌側面も咬耗されている。頬側面から見ると、歯槽縁が5.0mmの深さで凹湾している。右第3大白歯は歯はなく、歯槽がお椀状に凹んでいて、齶歯で脱落した痕と思われる。左第2大白歯・同第3大白歯は槽間中隔がなく20.0×8.0mm、

深さ12.4mmの単一の歯槽になって開放している。このうち、第2大臼歯相当部の歯槽の方が深くなっている。

頭蓋骨内板の縫合線の癒合状況は冠状縫合・ラムダ縫合が4、矢状縫合が3-4の段階で、縫合のほぼ全長が癒合している。また、口蓋縫合は切歯縫合が4、横口蓋縫合外側部が3、正中口蓋縫合が1の段階まで癒合している。このことは、本個体が少なくとも熟年期後半以上の年齢であることを示している。

35号土坑（性別：？、年齢：状年期？）

長辺126cm、短辺92cm、深さ51cmの南にやや狭くなった方形の土坑である。

歯が1本残存しているのみである。この歯は近心側のみに咬耗があり、遠心側にはまったく咬耗痕がなく、遠心隣接面に接触面がなく、歯根がほぼ単根かしていることなどから、大きめのはでありながら第3大臼歯（右下顎）の可能性が高い。近心側歯頸部に6.0×4.5mmの齧蝕による穴が開いており、最深部は歯髄に達している。頬側歯頸部にもC2程度の齧蝕がある。遠心舌側には歯石が付着している。

36号土坑（性別：女性 年齢：熟年期～老年期）

長辺110cm、短辺91cm、深さ100cmの南にやや狭くなった隅丸方形である。土坑のほぼ中央部に歯牙のみ残存し、その他は焼骨片が10数片残存するのみである。

現在は10本の遊齧歯が存在する。

×××××××1	××3×××××
×76543××	××345×××
右	左

下顎第1大臼歯は、咬耗がBrothwellの4まで進行している。したがって壮年期後半から熟年期前半程度の年齢が推定される。

犬歯の大きさは女性を思わせる。

61号土坑（性別：男性？、年齢10歳）

土坑は、長軸88cm、短軸71cm、深さ75cmの広卵形で、埋存姿勢は頭頂部を北にし、顔を西に向けていたが、体幹骨・体肢骨の埋存状況は不明である。したがって、埋存姿勢は分からない。

上腕骨の骨体横断示数は80.8で、橈骨の骨体断面示数は67.6、大腿骨骨体中央横断面示数は97.3、脛骨の骨体中央部における脛示数は82.0で正脛である。

本個体は、下顎左の第1乳臼歯・第2乳臼歯、右の第1乳臼歯・第2乳臼歯、上顎左第2乳臼歯がまだ乳歯として残存している。永久歯は、中切歯・側切歯・左上顎犬歯がすでに萌出し、萌出途上にあるのが第1大臼歯、右上顎犬歯・左右の下顎犬歯・各第1大臼歯・その他の犬歯・上顎第1小白歯・右上顎第2小白歯である。ただし左上顎側切歯は先天的に欠如し、右上顎第2大臼歯は脱落している。上顎・下顎とも第3大臼歯は未萌出である。右下顎第3大臼歯の石灰化の程度を見ると歯冠部のみに限られ、山路（1958）・早川（1959）の0度である。

犬歯の中では右上顎犬歯が最も萌出が早く、あとわずかで歯頸部まで萌出するまで至っているが、他の犬歯は咬頭のみが萌出している。

残存部で見ると、軸椎の椎体骨端、踵骨の近位骨端部、指骨の近位骨端、中手骨の遠位骨端、第1中手骨の近位骨端がまだ癒合していない。脳頭蓋の縫合線は外板・内板ともまだ癒合してなく、口蓋縫合も癒合していない。これらのことから、本個体はおよそ10歳の年齢が推定される。

頭蓋骨の特徴は、頭頂部がやや高いが、眉弓はほとんど隆起しておらず、前額部は狭く、前額部の側面観はほとんど鉛直で、前頭結節は発達している。上項線は発達が悪くはつきりせず、外後頭隆起はほとんど隆起していない。乳様突起は小さく発達が悪く、眼窩は比較的小さい。下顎角はあまり発達しておらず、眼窩上切痕は湾状である。

頭蓋の各示数は、長幅指数が67.8の過長頭で、横前頭頂示数が70.2の中前頭で、横頭頂後頭示数が

IV 科学分析

82.0で、口蓋指数が92.2の広口蓋である。また下顎骨に関する示数は、下顎枝示数が62.1、下顎体高示数が56.7である。

江原ほか(1988)の分類基準による下顎角部の形態はI型で、下顎下縁部の形態はIII型、オトガイ三角の形態は6型である。

上顎右第2乳白歯の歯根は、近心側の3/4が齶蝕(C3)によりなくなっている。

△○6543-1	1234◎67△
△76ed321	123de67△
右	左

咬合は軽い缺状咬合であったと推定される。

乳白歯は咬耗がわずかに進み、左下顎第1・第2乳白歯では頬側近心咬頭・舌側近心咬頭にわずかに象牙質が露出し、右下顎では第1乳白歯で象牙質の露出はなく、頬側溝等にわずかにエナメル質のみの咬耗が見られる。第2乳白歯では頬側咬頭にわずかの象牙質の露出が見られるが、舌側咬頭には咬耗はない。

永久歯は上顎第1小臼歯・各第1大臼歯にごく僅かの咬耗があるほかは未咬耗である。

下顎第1大臼歯は近遠心径が頬側で小さく、舌側で大きい特徴がある。

本個体の頭部にはすり鉢が被せてあり、特別な埋葬風習に関わるものであることを示している。

東日本の各地には、盆地には、盆中に死んだ人、ハンセン病または結核で亡くなった場合などに、頭に鍋を被せて葬むる風習が知られており、本遺跡近隣地域では近年まで盆中に死んだ人に鍋を被せる風習は存続していたという。

文献(桜井、1992)その他により、筆者の知るところによれば鍋被埋葬人骨発見例はこれまで少なくとも22例を数えている。そのうちハンセン病の症状が認められる人骨で確実に見られるものは、非常に少なく、青森県八戸市の史跡根城跡東構地区出土の中世末～近世初頭の壮年期女性1例のみである(森

本、1984)。この個体は顔面正中部に土中で圧迫を受けたらしく、鼻骨が軽く陥没し、上・下顎骨の歯槽突起全部が壊れているが、骨口蓋正中部には母指頭大の鼻腔面におよぶ慢性骨炎像が認められ、切歯質も拡大していることから上顎前歯歯槽部の萎縮の存在が推測できる。

Zimmerman & Kelley (1982)、Brothwell (1981)などによって、ハンセン病患者の骨などに現われる異常な症状を示すと次のようである。

骨性の変化は頭蓋と四肢骨末端部に現われる。バクテリアが骨の末端部を浸食することで発生し、神経系が侵されると感覚の喪失部をつくり、循環系が侵されると、壊疽の部分をつくる。足指や手指や喪失するにつれて、中足骨は鉛筆状になり、骨は段々と先細りになり、失くなる。また関節炎で癒合することもある。脛骨・腓骨のような下肢の大きい骨は骨膜の感染で多孔質になり、目立った血管溝をつくり、不規則形になる。梨状口の縁は侵蝕され、鼻孔の床面は感染し浸蝕される。口蓋骨の口蓋面は多孔質化が起こり、完全に吸収される。上顎は切歯の喪失を伴う場合と、伴わない場合とがあるが、萎縮する。鼻孔の下にある前鼻棘と呼ばれる小さな骨の突起は欠失するか、小さくなる。

遺存骨からハンセン病を診断する場合、骨髄炎、梅毒、結核、凍傷、菌類感染である可能性も考慮しなければならない。もし頭蓋と指骨がハンセン病に侵されていれば、診断はきわめて簡単である。他の病気でこの組み合わせが見られることは少ないからである。

以上の症状に照らして、二之宮谷地遺跡出土61号人骨のハンセン氏病罹患の可能性はあるのだろうか。

検出されている四肢骨末端部の骨は足指・手指が3、中手・中足骨が3、踵骨が1であるが、いずれも変形したり、萎縮したりしていることはなく、癒合もしていない。脛骨は左右とも、多孔質になっているとはいえ、目立った血管溝もない。梨状口の縁は侵蝕されているとは認め難く、鼻孔の床面は浸

蝕されているとは言い難い。口蓋面が特に多孔質になり、ましてや吸収されるなど言うこともない。上顎切歯は左側切歯が先天的に欠失しているが、他は完存し、上顎骨の萎縮はない。前鼻棘に物に異常は認められない。これらの事実から、本個体は少なくとも、骨にまで影響するハンセン病に罹患していたとは認め難い。

また、Brothwell (1981) によれば、結核に罹患している骨の症状は、長骨や短骨の骨端部に骨の破壊が生じていることである。しかし、最も信頼のおける結核の診断は椎骨の変形である。

本個体では、長骨の骨端部は、若令による骨端離脱や風化による溶蝕で欠失しており、椎骨も残存しているものが数少なく、材料不足ではあるが、現存材料で見ると、変形しているものは見当たらず、結核に罹患していた証拠を示さない。

すなわち、本個体は当時天刑病として恐れられていたハンセン病や結核に罹患していた可能性は薄く、鍋被りは近年まで当地で行われていた、盆中に亡くなった人に対する儀礼とするのが最も妥当と考えられる。

64号土坑（性別：女性、年齢：老年期）

土坑は、長軸109cm、短軸72cm、深さ30cmの隅丸方形で、頭部を南西隅に置き、顔を北に向け、背を東に腹部を西にして横臥屈葬姿勢で埋存していた。

室内で観察される体幹・体肢骨は左上腕骨、左橈骨片、寛骨片、左右の大腿骨片、左右の脛骨片、右距骨である。しかしいずれの部位も保存状況は極めて不良で、変形甚だしく得られた有効な計測値もごく僅かである。

左寛骨臼の最大径は45.0mmであり、左大腿骨の保存長は271.0mmで、大腿骨頭垂直は36.0mm、骨体中央周は70.0mmを計測できる。脛骨全長はおよそ264.8mmである。脛骨全長から推定される身長は139.4でかなり小柄の個体が考えられる。

頭蓋骨も土圧による変形甚だしく、つぶれている。

頭蓋の全体的なようすは女性を思わせる。

脳頭蓋の縫合線には、土圧で亀裂が生じてしまっていて、癒合の程度は知り難いが、癒合を完了している縫合線はなさそうで、内板で癒合度2～3程度と思われる。

上顎・下顎には1本の歯も残存せず、開放した歯槽もなく、老齢のために生前に脱落し、歯槽が閉鎖したものと思われる。

91号土坑（性別：男性、年齢：熟年期後半～老年期）

スケッチによる記録によれば、土坑は、長軸114cm、短軸78cm、深さ43cmの隅丸方形で、頭部を北西隅に置き、顔を南に向け、背を東に腹部を西にして体軸を南東方向に伸ばした横臥屈葬姿勢で埋存していた。

室内での観察では、頭蓋骨は変形甚だしく、保存状況は極めて不良で、有効な計測値は外後頭隆起の厚さ16.5mmだけである。取り上げられた部位は、左鎖骨片、左肩甲骨片、左右の上腕骨片、左尺骨片、右橈骨・尺骨片、左右の大腿骨片、左右の脛骨片等である。

上腕骨では三角筋粗面の発達がよく、骨体横断面数は77.6である。大腿骨骨体は近位にいくにつれて横径が増すなどの特長があり、骨体中央横断面示数は92.6である。また脛骨骨体中央部の脛示数は76.9で正脛である。

眉弓の隆起は頭著で、前額部の側面観は後方に傾斜している。上項線の発達は良く、項線のがはっきりしている。外後頭隆起の発達は良く、乳様突起も大きめである。これらのことは男性であることを示唆している。

下顎は現在残っておらず、残存している歯は1本もない。

頭蓋骨の縫合線の状態は冠状縫合が4、矢状縫合が4、ラムダ縫合は3の段階で癒合はかなり進んでおり、本個体は老齢にいたっているものと思われる。

IV 科学分析

引用文献

- 馬場悠男 1981 「人骨計測法」『江藤盛治・人類学講座一別巻Ⅰ』、雄山閣、東京。
- Brothwell, D. R., 1981 *Digging up bones*. British Museum of Natural History, Cornell University Press, Ithaca.
- 江原昭善・松本 真・木下 実 1988 「出土人骨の形質」『伊川津遺跡』, 343-39, 愛知県渥美町教育委員会。
- 藤井 明 1960 「四肢長骨の長さとし長との関係について」『順天堂大学体育学部紀要 3』, 49-60。
- 藤田恒太郎 1959 「歯の計測基準について」『人類学雑誌 61』 27-32。
- 早川企三男 1959 「本邦人女児歯牙のレントゲン所見による年齢推定に関する研究」『犯罪学雑誌 25(5):別輯Ⅱ』, 1-27
- 平本嘉助 1981 「骨から見た日本人身長の移り変わり」『考古学ジャーナル 197』, 24-28。
- 片山一道 1990 「古人骨は語る」, 同朋社, 京都。
- 上条雍彦 1978 「日本人永久歯解剖学」, アナトーム社, 東京。
- Krogman, W. M. and Iskan, M. Y., 1986 *The human skeleton in Forensic medicine*. 2nd ed. Charles C. Thomas, Springfield.
- 森本岩太郎 1981 「日本個人骨の形態学的変異—扁平脛骨と踵距面—」『小丘 保編・人類学講座—日本人Ⅰ』, 雄山閣, 157-118。
- 森本岩太郎 1984 「南部地方における被鍋埋葬知見」『人類学雑誌 92』 115。
- Nakahashi, T. and Nagai, 1986 Sex assesment of fragmentary skeletal remains. *Journal of the anthoropological society of Nippon*. 94(3) 289-305.
- 桜井準也 1992 「近世の鍋被り人骨の出土例とその民俗学的意義」『民族考古 1』 85-98。
- 栃原 博 1957 「日本人歯牙の咬耗に関する研究」『熊本医学会雑誌 31:補冊, 4』, 1-27
- 山路千秋 1958 「本邦人男児歯牙のレントゲン所見による年齢推定に関する研究」『犯罪学雑誌 24(5):別輯Ⅰ』, 34-76。
- Zimmerman, M. R. and Kelley, R. A., 1982 *Atlas of human paleopathology*. Praeger Publisher, New York.

人歯計測値

凡例

①記号・数字

○：あり ×：なし

I：切歯 C：犬歯 P：小白歯 M：大白歯 m：乳白歯

上1/4の数字：上顎歯 下1/4下顎歯

②単位：mm

③記録項目：主に上条（1978）による

31号土坑

切 歯

	歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠長	型	棘突起	舌面隆線	舌面溝	齧裂溝	唇面溝	唇面隆線	咬耗度	齧 歯
上	RP ²	7.7	5.8	10.3	1	×	2本	1本	中央	×	×	1	×
	RP ¹	8.4	7.4	10.5	1	2本	×	×	中央	×	×	2	×
	LP ¹	8.5	7.3	11.5	1	2本	×	×	中央	×	×	1	×
	LP ²	7.2	6.8	9.8	2	×	×	×	中央	×	×	2	×
下	RI ₂	6.3	6.2	7.5			○	○	×	×	×	1	×
	RI ₁	5.5	5.8	6.3			×	×	×	×	×	2	×
	LI ₁	5.4	6.3	6.4			×	×	×	×	×	2	×
	LI ₂	6.1	6.1	6.7			×	×	×	×	×	1	×

犬 歯

	歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠長	棘突起	中歯	舌隆線	舌面溝	舌面隆線	舌面溝	遠心溝	副隆線	唇面溝	咬耗度	齧 歯
上	UR														
	UL	7.9	8.8	10.3	1本	?	?	○	遠心	?	?	×	×	1	×
下	LR	6.7	7.4	8.2	×	?	?	×	×	×	×	×	?	2	×
	LL	6.7	7.3	8.6	×	○	○	×	×	×	×	×	?	2	×

上顎小白歯

歯種	近遠心径	頬舌径	歯冠長	頬側副隆線		舌側副隆線		咬合面型	近遠心溝		介在結節		唇面隆線	咬耗度	齧 歯
				近心	遠心	近心	遠心		近心	遠心	近心	遠心			
RP ²	6.4	9.0	7.2	?	○	?	?		?	?	?	?	×	1	×
RP ¹	7.2	8.8	7.7	○	?	?	?	8	?	?	?	?	×	1	×
LP ¹	6.9	9.0	8.2					?	○	○	?	?	×	1	×
LP ²	6.6	8.4+	7.9						?	?	?	?	×	1	×

下顎小白歯

歯種	近遠心径	頬舌径	歯冠長	舌側咬頭の位置	連合隆線の経過	副隆線				辺縁溝		咬合面の溝形	舌側付加結節	舌側溝	Blackの分類	咬耗度	齧 歯
						頬側		舌側		近心	遠心						
						近心	遠心	近心	遠心								
RP ₂		6.7	8.1	1	/	?	?	?	?	△	×	/	/		Y	1	×
RP ₁	7.1		7.6	3	b	?	?	?	?	×	×	2	b		/	1	×
LP ₁		7.2	7.8	3	b	?	?	?	?	×	×	2	b	近心弱	/	1	×
LP ₂		6.4	8.1	1	/	?	?	?	?	△	×	/	/		Y	1	×

舌側咬頭の位置

- 1：頬側咬頭頂に対し舌側咬頭頂が近心に位置するもの
- 2：頬側咬頭頂に対し舌側咬頭頂が同位置にあるもの
- 3：頬側咬頭頂に対し舌側咬頭頂が遠心に位置するもの

上顎大白歯

歯種	近遠心径	頬舌径	歯冠長	咬耗度	齧 歯
RM ²	9.5	11.9	6.5	4+	×
RM ¹	10.1	11.3	6.1	5	×
LM ¹	10.1	11.6	5.2	5	×
LM ³	9.6	10.6	6.6	4	×

下顎大白歯計測値

歯種	近遠心径	頬舌径	歯冠長	咬耗度	齧 歯
RM ₁	11.5	11.4	4.4	4	×
LM ₁	11.5	11.2		5	×
LM ₂	9.6	11.0		5	×
LM ₃	10.1	10.7		4	×

IV 科学分析

33号土坑

切 齒

	齒種	近遠心径	唇舌径	齒冠長	棘突起	舌面隆線	舌面溝	齧 齧 溝	齧 齧 溝	唇面溝	唇面隆線	咬耗度	齧 齒
上	RI ²	7.4	6.6	9.9	?	?	?	×	○	○	○	6	×
	RI ¹	7.3	6.5	9.5	?	○	○	×	○	○	○	5	×
下	RI ₂	6.4											
	RI ₁	5.6											
	LI ₁	5.7											
	LI ₂	6.9											

犬 齒

	齒種	近遠心径	唇舌径	齒冠長	棘突起	齒 齧 齧 溝	舌面溝	齧 齧 溝	齧 齧 溝	遠心溝	唇面溝	唇面隆溝	咬耗度	齧 齒
上	UR			9.6	?	?	?	?	?	?	×	×	6	×
	UL	8.1	7.1+	9.7	?	?	?	?	?	?	×	×	6	×
下	LR	7.4	8.0	6.3										
	LL	7.8		10.0										

上顎小白齒

齒種	近遠心径	頬舌径	齒冠長
RP ²	6.8		7.7
RP ¹			6.9
LP ¹	8.0	9.3	8.4
LP ²	7.3	9.6	8.0

下顎小白齒

齒種	近遠心径	頬舌径
RP ₁	7.7	8.3
LP ₁	7.5	
LP ₂	7.5	

上顎大白齒

齒種	近遠心径	頬舌径
RP ²	9.7	7.7
RM ¹		7.2

下顎大白齒計測値

齒種	近遠心径	頬舌径	齒冠長
RM ₁	10.9+		
LM ₁	11.1	11.6	5.3

35号土坑

下顎大白齒計測値

齒種	近遠心径	頬舌径	齒冠長	辺 縁 溝		副 隆 溝						三 角 溝			裂溝型	咬耗度	齧 齒				
				近 心	遠 心	近 心 頬 側	近 心 舌 側	遠 心 頬 側	遠 心 舌 側	近 心 遠 心	近 心 遠 心	近 心 遠 心	近 心 遠 心	近 舌				遠 頬	遠 舌		
																				×	○
RM ₃	11.7	10.8	6.4	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	+	5	2	C 3

36号土坑

切 齒

	齒種	近遠心径	唇舌径	齒冠長	咬耗度	齧 齒
上	RI ¹	8.0			2	×

上顎小白齒

齒種	近遠心径	頬舌径	齒冠長	咬合面溝	齧 齧 溝	咬耗度	齧 齒
LP ²	5.8	8.6	7.0	8	近	4	×

犬 齒

	齒種	近遠心径	唇舌径	齒冠長	棘突起	中央舌面隆線	舌面溝	齧 齧 溝	齧 齧 溝	遠心溝	副隆線	唇面溝	唇面隆線	咬耗度	齧 齒
上	UR	7.6	8.2+	7.1+	1本	○	○	○	○	○	?	○	○	1	×
下	LR	6.7	7.6	8.0	×	○	○	○	×	×	?	×	×	1	×
	LL	6.6	8.1	8.1	×	○	○	○	×	×	?		○	1	×

下顎小白齒

齒種	近遠心径	頬舌径	齒冠長	舌側咬頭の位置	連合隆線の経過	副 隆 線				辺 縁 溝		咬合面の溝形	舌側付加結節	舌側溝	Blackの分類	咬耗度	齧 齒
						頬 側	舌 側	近 心	遠 心	近 心	遠 心						
RP ₂	6.5	8.0	5.5	1	/	?	?	?	?	○	○	/	/	/	Y	4	×
RP ₁	6.8	7.7	7.1			?	?	?	?	×	×	2	b	近	/	1	×
LP ₁	6.2	7.7	6.8			?	?	?	?	×	?	1	b	近	/	1	×
LP ₂	6.8	8.2	6.1			?	?	?	?	×	×	/	/	/	Y	1	×

舌側咬頭的位置

- 1: 頬側咬頭頂に対し舌側咬頭頂が近心に位置するもの
- 2: 頬側咬頭頂に対し舌側咬頭頂が同位置にあるもの

下顎大白歯

歯種	近遠心径	頬舌径	歯冠長	咬耗度	齧 齒
RM ₂	10.5	10.6	6.0	4	×
RM ₁	10.7	10.2	6.0	4	×

61号土坑

切 歯

	歯種	近遠心径	頬舌径	歯冠長	型	棘突起	舌面隆線	舌面溝	齧 嬰 齒	唇面溝	唇面隆線	咬耗度	齧 齒
上	RI ¹	10.3	7.3	13.0	3	5本	弱	弱	×	不明瞭	不明瞭	1	×
	LI ¹	9.6	7.7	13.2	3	3本	弱	弱	○	○	不明瞭	1	×
	LI ²	8.4	6.9	11.4+	2	2本	弱	弱	○	○	○	1	×
下	RI ₂	6.7	6.6	10.1			○	○	○	不明瞭	不明瞭	1	×
	RI ₁	6.2	6.2	10.3			弱	弱	○	不明瞭	不明瞭	1	×
	LI ₁	6.4	6.22	10.1			弱	弱	○	○	○	1	×
	LI ₂	5.7+	6.8	10.5			○	○	○	不明瞭	不明瞭	1	×

犬 歯

歯種	近遠心径	頬舌径	歯冠長	棘突起	出 歯 隆 線	舌面溝	舌 面 隆 線	舌 面 溝	遠 心 溝	副 隆 線	唇 面 溝	唇 面 隆 線	咬耗度	齧 齒
UR	8.4	8.7+	11.7+	1本	2本	3本	○	×	○	○	2本	○	0	×
LR			11.6											

上顎小白歯・乳白歯

歯種	近遠心径	頬舌径	歯冠長	頬側副隆線		舌側副隆線		近 遠 心 溝		介 在 結 節		咬耗度	齧 齒
				近 心	遠 心	近 心	遠 心	近 心	遠 心	近 心	遠 心		
Rm ²	9.8	6.9	7.0									2	C 3
RP ¹	7.5	10.0	7.3	○	○	×	○	○	○	○	×	1	×
LP ¹	7.6	10.4	9.3	○	○	×	○	○	○	○	×	1	×
LP ²	7.0	9.8	8.1	○	○	○	×	○	○	×	×	0	×

下顎乳白歯

歯種	近遠心径	頬舌径	歯冠長	咬耗度	齧 齒
Rm ₂	10.7	9.1	6.0	2	×
Rm ₁	19.2	6.7+	7.2	2	×
Lm ₁	9.2	6.7+	7.0	2	×
Lm ₂	10.7	9.3	6.1	2	×

上顎大白歯

歯種	近遠心径	頬舌径	歯冠長	辺縁結節		副 隆 線								辺 縁 溝		舌側咬合溝	咬合部の隅化	咬耗度	齧齒
				近 心	遠 心	近 心 類 側		近 心 舌 側		遠 心 舌 側		遠 心 舌 側		近 心	遠 心				
						近 心	遠 心	近 心	遠 心	近 心	遠 心	近 心	遠 心						
RM ¹	10.9	11.9	7.4	?	○	?	?	○	○	○	○	○	×	×	○	4	B 1	2	×
LM ¹	10.9	12.0	8.1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	○	4	B 1	2	×
LM ²	19.6	12.4	8.0	×	×	○	○	○	○	/	/	○	○	×	○	4	C 2	1	×

下顎小白歯

歯種	近遠心径	頬舌径	歯冠長	遠心咬頭の退化	辺 縁 溝	副 隆 線								三 角 溝				裂溝型	咬耗度	齧齒	
						近 心 類 側		近 心 舌 側		遠 心 類 側		遠 心 舌 側		近 類	近 舌	遠 類	遠 舌				
						近 心	遠 心	近 心	遠 心	近 心	遠 心	近 心	遠 心								
RM ₁	11.7	10.7	8.6	F	○	○	○	○	○	×	○	×	○	○	○	○	/	/	Y5+1	2	×
LM ₁	11.9	10.9	7.9+	F	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	/	/	Y5+1	2	×

IV 科学分析

人骨計測値 (単位: mm)

四肢骨

上腕骨

	31号土坑	61号土坑	91号土坑
1. 上腕骨最大長	21.6+	160.0+	240.0
5. 中央最大径	19.3	14.6	23.7
6. 中央最小径	19.5	11.8	18.4
6a. 三角筋粗面位最小径	19.0	14.7	
6b. 中央横径		12.5	22.0
6c. 中央矢状径		14.1	19.8
7. 骨体最小周	63.6		64.0
7a. 中央周		45.0	67.5
14. 肘頭窩幅	29.0		
骨体横断面示数(6/5)	101.0	80.8	77.6

橈骨

	61号土坑
1. 橈骨最大長	123.5+
4. 骨体横径	11.1
4a. 骨体中央横径	10.6
5. 骨体矢状径	7.5
5a. 骨体中央矢状径	7.8
骨体断面示数(5/4)	67.6

尺骨

	61号土坑
1. 尺骨最大長	137.4
3a. 骨体中央周	32.0
11. 骨体矢状径	9.2
11-01. 骨端前面幅	11.1
11-02. 骨体後面幅	9.1
11-03. 骨体内側面幅	11.5
12.	11.1

大腿骨

	31号土坑	33号土坑	61号土坑	64号土坑	91号土坑
1. 大腿骨最大長	405.0 e	370.0(+5)	227.3+	271.0+	352.0+
6. 骨体中央矢状径	25.2	26.3	18.3		26.2
7. 骨体中央横径	28.2		18.8		28.3
8. 骨体中央周	85.0		59.0	70.0	86.0
11. 骨体下最小矢状径		25.6			26.5+(5e)
12. 骨体下横径		28.0			
13. 大腿骨上端幅		89.0?			
14. 前頭頸長		71.0?			
18. 頭垂直径				36.0	
骨体断面中央示数(6/7)	89.4		97.3		92.6

脛骨

	31号土坑	33号土坑	61号土坑	64号土坑	91号土坑
1. 脛骨全長		303.0+(10e)	230.6+	267.0(+5e)	281.0+
8. 中央最大矢状径	26.0 e	25.4	19.5		27.7
9. 中央横径	20.9	18.8	16.0		21.3
9a. 栄養孔位横径			19.3		
10. 骨体中央周					77.0
中央黄疽示数(9/8)	80.4	74.0	82.0		76.9

距骨

	33号土坑
1. 距骨長	43.2
1a. 距骨最大長	47.8
12. 後距骨關節面長	25.4

踵骨

	61号土坑
1. 踵骨最大長	53.2
1a. 踵骨全長	50.7
4. 踵骨高	27.6
4a. 踵骨最大口	31.4
5. 踵骨体長	52.9
5a. 荷重腕長	36.3
7. 踵骨隆起高	26.7
9. 後距骨關節面長	23.0 e
10. 後距骨關節面幅	19.6

軸椎

	61号土坑
1a. 軸椎腹側垂直径	31.5 e
1b. 軸椎椎体腹側垂直径	18.2
1b'. 椎体尾側矢状径	18.6
5. 椎体尾側横径	12.4
8. 椎体尾側横径	17.9
10. 椎孔矢状径	18.5
11. 椎孔横径	21.7

61号土坑

指骨・中手・中足骨

	上肢右(?)第4(?)指基節骨	上肢中節骨	下肢第1指基節骨	右(?)第1中手骨	右第2中手骨	右(?)第3(?)中手骨
全長	28.3	18.7	19.0	26.5	41.0	36.0
中央最小幅	6.8	6.5	9.6	8.6	6.7	8.6
遠位最大幅	6.1	6.4	10.3			

頭蓋骨

	31号土坑	33号土坑	91号土坑		31号土坑	33号土坑	91号土坑
1. 脳頭蓋最大長		184.0	180.0	48(d). 頬骨最小高		25.1	
1b. オフィリオン脳頭蓋長		184.0		48(5). ナジオン・オルビターレ投影距離		31.0	
1c. メトピオン脳頭蓋長		179.5		50. 前眼窩幅		26.0?	
1d. ナジオン脳頭蓋長		183.0	174.0	51. 眼窩幅		40.0	
2. グラベラ・イニオン長		180.0	158.5	52. 眼窩高		37.0	
2a. ナジオン・イニオン長		184.5	154.5	54. 鼻幅			24.0
2b. スフラグラベラ・イニオン長		157.3		57. 鼻骨最小幅	9.2		6.7
2c. オフィリオン・イニオン長		179.0		57(2). 鼻骨上幅	13.2		7.2
3. グラベラ・ラムダ長		180.0	175.0	61. 上顎歯槽突起幅		61.0 e	60.5
3a. ナジオン・ラムダ長		182.0	174.0	61(2). 前上顎歯槽突起幅		42.0 e	39.5
4a. 側頭骨最大長		85.5	79.0	62. 口蓋長		46.0	38.5
4b. 側頭鱗最大長		57.0	57.0	62 a. オラーレ・後鼻棘距離		52.0?	
4c. 乳突部最大長		42.5		62(1). 前口蓋長		36.0	
5. 頭蓋底長		115.0 e		63. 口蓋幅	39.4	40.0 e	35.5
5(1). ナジオン・オピスティオン長		146.0		63 a. 口蓋最大幅	40.0		39.0
6(1). 頭蓋底後部長		7.8		63(1). 口蓋後端幅	40.0?	40.0	
6(2). 後頭骨後部投影長		4.8		63(2). 前口蓋幅	30.2	25.0	
7. 大後頭孔長		31.0 e		66. 下顎角幅			83.4
8. 脳頭蓋最大幅		135.0	122.0	67. 前下顎幅	49.6	51.7	44.3
8a. 脳頭蓋側頭頭長幅		134.5	122.0	68. 下顎長			58.8
9. 最小前頭幅		90.0	85.7	68(a). 下顎臼歯弦長			18.1
9(1). 眼窩後幅		91.1		69a. 下顎結合高	33.4	35.7	25.7
9(2). 上前頭横断幅		40.0		69(1). 下顎体高	30.7	30.4	23.3
10. 最大前頭幅		112.0		69(2). 下顎体高	24.4	24.9	22.5
10(a). 前頭骨最大幅			10.1	69(3). 下顎体厚			13.2
10(b). ステファニオン幅		102.0?		69(b). 下顎体厚			15.1
11. 両耳幅		122.5		70. 下顎枝高			48.5
11 a. 真両耳幅		119.8		70(a). 投影下顎枝高			44.0
11(1). 外耳道幅		107.0		70(1). 前下顎枝高、筋突起高			50.0
12. 最大後頭幅		115.3	100.0 e	70(2). 最小枝高			39.5
13. 乳様突起間幅		97.5		70(3). 下顎切痕深			12.5
13 a. 乳様突起幅		21.0		71. 下顎枝幅			30.1
13(1). 乳突部最大幅		127.9		71 a. 最小下顎枝幅			30.1
14. 頭蓋最小幅		65.0		71 b. 下顎頭長			13.5+
16. 大後頭孔幅		24.0		71(1). 下顎切痕幅			29.5
17. バジオン・プレグマ高		144.0 e					
17(1). 脳頭蓋最大幅		142.0 e					
19 a. 乳様突起高		33.8					
19 c. 側頭骨最大高		82.0					
19 d. 側頭鱗最大高		43.0					
20. 耳・プレグマ高		126.0					
20 a. 耳軸・プレグマ投影高		133.0					
22. 頭蓋冠高		107.0					
22 a. 頭蓋冠高		101.0					
22 b. 頭蓋冠高		73.5					
22 c. 頭蓋冠高		125.0					
41. 側頭長		81.0					
41 a. 耳頬骨長		58.0					
42. 下顎長		125.0 e					
43. 上顔幅		101.0					
43(1). 内眼窩顔幅		91.0					
44. 両眼窩幅		92.3					
44 a. 後両眼窩幅		92.5					
47. 顔高		124.0					
48. 上顔高		71.0 e	51.0 e				
48(1). 齒槽部高			43.1				
48(2). 下顔高			41.2				
48(3). 上顎骨最小高		45.5					
48(3a). 頬骨区域高		31.8 e					
48(4). 頬骨高		25.1					

IV 科学分析

B区の水田耕作土から上顎5本、下顎3本の右のみの馬歯が8本出土した。

馬歯の年代は浅間A軽石相当期ないしはそれにごく近接した時期で、江戸時代中期と考えられている。歯は、歯根部を流水による磨耗などで欠き、頬側面・舌側面も磨耗を受け一部欠損している。その色調は湿地に長期に埋存していた特徴を残している。

計測値に見るように、各歯とも小さく、咬耗も進んでいて、歯冠高が低い。

右上顎第1大白歯の前小窩・後小窩は全体が大き

く空洞化しており、その深さは17mmに達している。

計測値からこの馬は小型在来馬(体高105~122cm)相当の馬格をしていたことが推測され、歯冠高は12~14歳程度の年齢を示している。犬歯が検出されず、性別は不明である。

江戸時代の農耕馬にこの様な小型馬がいたことはそれほどまれなことではない。

歯はすべて右側のもので、左が検出されない理由は明らかでない。

馬歯計測値

上顎白歯計測値

歯種	第三前白歯	第四前白歯	第一後白歯	第二後白歯	第三後白歯
歯冠長	24.6	24.8	22.5	22.9	23.1+
歯冠幅		23.3	21.7	23.3	16.0+
原錐幅		8.7	9.7	9.1	
歯冠高	頬側	35.4	24.5	34.9	32.5
	舌側	33.6	25.7	32.7	
咬合面の傾斜		87°	80°	77°	68°

単位：mm

下顎白歯計測値

歯種	第三前白歯	第四前白歯	第二後白歯
歯冠長	27.4	26.0	24.0
歯冠幅	13.2+	13.1+	11.5+
歯冠高	頬側	30.0	33.8
	舌側	30.8	33.5
下後錐谷長	8.9	8.0	6.6
下内錐谷長	12.0	10.2	8.0
double knot長	15.6	14.4	12.4
咬合面の傾斜	88°	82°	80°

単位：mm

遺物観察表

凡 例

遺物観察表中の量目欄の数値前の記号の示す内容は、下記のとおりである。

- | | |
|-------|-------|
| ① 口径 | ② 底 径 |
| ③ 高台径 | ④ 器 高 |
| ⑤ 摘み径 | |

また、数値単位の記載がないものは、全てセンチメートル (cm) を示す。

1号住居跡

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第18図1 P.L. 95	黒色土器 椀	床 1/4	② 7.1 ③ 7.4	①粗砂粒 ②酸化焰内面黒色処理 ③浅黄色	外面体部は左方向のヘラ削り、底部の整形は不明。 内面はヘラ磨き。	
第18図2 P.L. 95	須恵器 椀	床 口縁部1/4	① 15.6	①微砂粒(含雲母) ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	ロクロ整形、回転方向不明。	
第18図3 P.L. 95	須恵器 椀	床 1/3	② 7.1 ③ 7.1	①粗砂粒(含石英) ②酸化焰ぎみ ③灰黄色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部回転糸切り、 高台周辺は貼付時のナデ。	
第18図4 P.L. 95	土師器 甕	床 口縁部～胴 部上位片	① 18.4	①粗砂粒(含雲母) ②酸化焰 ③橙色	頸部に輪積痕が残る。口縁部は横ナデ。胴部は中 位に縦方向のヘラ削り後、上位に左方向のヘラ削 り。	
第18図5 P.L. 95	砥石	埋没土 破片	(22g)	流紋岩		
第18図6 P.L. 95	鉄釘	埋没土 破片				
第18図7 P.L. 95	鉄製品	埋没土 破片			器種不明。	

2号住居跡

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第21図1 P.L. 95	土師器 杯	床 1/4	① 13.4 ④ 4.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	外面口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。口縁部横 ナデと底部ヘラ削りの間に無調整部分が見られ る。内面口縁部は横ナデ。	
第21図2 P.L. 95	土師器 杯	床 1/4	① 12.1 ④ 3.6	①微砂粒 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	外面口唇部は横ナデ、底部はヘラ削り。口唇部横 ナデと底部ヘラ削りの間に無調整部分が見られ る。	
第21図3 P.L. 95	土師器 杯	床 1/4	① 13.7	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	外面口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。口縁部横 ナデと底部ヘラ削りの間に無調整部分が見られ る。内面口縁部は横ナデ。	
第21図4 P.L. 95	土師器 杯	床 1/4	① 12.6 ④ 3.3	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい赤褐色	口縁部は横ナデ、外面底部はヘラ削り。口縁部横 ナデと底部ヘラ削りの間に僅かに無調整部分が残 る。	外面底部中 央に「上」 の墨書。
第21図5 P.L. 95	土師器 杯	床 1/3	① 12.8 ④ 3.1	①微砂粒 ②酸化焰 ③明黄色	外面口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。口縁部横 ナデと底部ヘラ削りの間に無調整部分が見られ る。内面口縁部は横ナデ。	
第21図6 P.L. 95	土師器 杯	床 1/4	① 13.5 ④ 3.3	①微砂粒 ②酸化焰 ③橙色	外面口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。口縁部横 ナデと底部ヘラ削りの間に無調整部分が見られ る。内面口縁部は横ナデ。	
第21図7 P.L. 95	土師器 杯	床 1/3	① 14.0 ④ 3.7	①微砂粒 ②酸化焰 ③橙色	外面口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。口縁部横 ナデと底部ヘラ削りの間に無調整部分が見られ る。内面口縁部は横ナデ。	
第21図8 P.L. 95	土師器 杯	床 1/3	① 12.6 ④ 3.5	①微砂粒 ②酸化焰 ③橙色	外面口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。口縁部横 ナデと底部ヘラ削りの間に無調整部分が見られ る。内面口縁部は横ナデ。	
第21図9 P.L. 95	土師器 杯	床 1/2	① 14.0 ④ 3.9	①微砂粒 ②酸化焰 ③橙色	外面口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。口縁部横 ナデと底部ヘラ削りの間に無調整部分が部分的に 見られる。内面口縁部は横ナデ。	
第22図10 P.L. 95	土師器 杯	床 1/2	① 15.0 ② 13.2 ④ 3.5	①微砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部は外傾し、底部との間に弱い稜をもつ。口 縁部は横ナデ、底部はヘラ削り、稜の一部に無調 整の部分が見られる。	
第22図11 P.L. 95	土師器 杯	床 1/3	① 14.2	①微砂粒 ②酸化焰 ③にぶい赤褐色	口縁部はやや外反し、底部との間に弱い稜をもつ。 口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り、稜の下部に無 調整部分が見られる。	
第22図12 P.L. 95	黒色土器 杯	床 1/3	② 5.6	①微砂粒 ②酸化焰内面黒色 処理 ③橙色	内外面ともヘラ研磨。	

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 器 類 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第22図13 P L. 95	須恵器 杯	床 1/3	① 12.8 ② 7.0 ④ 3.5	①微砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向は右回りか？底部は不定方向へラ削り。	
第22図14 P L. 95	須恵器 杯	床 1/3	① 15.5 ② 8.8 ④ 3.2	①細砂粒(含長石) ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転へラ削り。	
第22図15 P L. 95	須恵器 短頸壺	口縁部片	① 9.8	①微砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向不明。口縁部は直立し、口唇部は平坦面をもち、肩部に凹線が巡る。	
第22図16 P L. 95	土師器 甕	口縁部～胴部上位	① 24.6	①粗砂粒 ②酸化焰 ③にぶい褐色	外面口縁部は横ナデ、胴部は底部から頸部に向けてのへラ削り。内面胴部はへラナデ。	
第22図17 P L. 95	土師器 台付甕	底部～脚部	② 5.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい褐色	脚部は横ナデ。	
第22図18 P L. 95	棒状礫	床 完形	599 g	粗粒安山岩		
第22図19 P L. 95	棒状礫	床 完形	693 g	変質安山岩		
第22図20 P L. 95	棒状礫	床 完形	604 g	粗粒安山岩		
第22図21 P L. 95	棒状礫	床 完形	573 g	溶結凝灰岩		
第22図22 P L. 95	棒状礫	床 完形	520 g	石英斑岩		
第22図23 P L. 95	鉄釘	埋没土 破片				

3号住居跡

挿図番号 図版番号	種 器 類 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第23図1 P L. 96	須恵器 杯	埋没土 1/3	① 12.2 ② 5.4 ④ 3.8	①細砂粒 ②還元焰やや酸化焰 ③にぶい褐色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転系切り無調整。	
第23図2 P L. 96	須恵器 椀	埋没土 1/3	① 13.0 ②7.0③7.0 ④ 5.1	①粗砂粒 ②酸化焰 ③にぶい褐色	ロクロ整形、回転方向不明。底部切り放し技法は不明。高台は雑な成形で貼付。	
第23図3 P L. 96	灰釉陶器 皿	埋没土 小片	① 12.0	①緻密 ②還元焰堅緻 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向不明。口唇部は釉の剥落が見られるが、漬け掛けか。釉調は不透明でやや黄色味を帯びている。	
第23図4 P L. 96	灰釉陶器 椀	埋没土 小片	① 12.6	①緻密 ②還元焰堅緻 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向不明。施釉方法は漬け掛け。釉調は不透明な灰白色。	
第23図5 P L. 96	土師器 甕	カマド 口縁部～胴部上位	① 23.6	①細砂粒(含雲母) ②酸化焰 ③橙色	頸部から口縁部に輪積痕が残る。口縁部は横ナデ、外面胴部は縦方向へラ削り後最上部に左方向のへラ削り。頸部下部に指頭痕。内面胴部はへラナデ。	
第23図6 P L. 96	砥石	南西掘込 両端欠損	(105 g)	粗粒安山岩		
第23図7 P L. 96	棒状礫	南西掘込 完形	1,935 g	粗粒安山岩		

4号住居跡

挿図番号 図版番号	種 器 類 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第25図1 P L. 96	土師器 杯	埋没土 1/3	① 15.5 ④ 4.3	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部は横ナデ、外面底部はへラ削り。口縁部横ナデと底部へラ削りの間に無調整部分が見られる。	
第25図2 P L. 96	鉄製品 刀子	埋没土 両端欠損			柄部木質一部残存。	

5号住居跡

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備 考
第27図1 P.L. 96	土師器 杯	床 ⅓	① 11.8 ④ 3.9	①微砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部は横ナデ、外面底部はヘラ削り。口縁部横ナデと底部ヘラ削りの間に無調整部分が見られる。	
第27図2 P.L. 96	土師器 杯	床 完形	① 14.6 ④ 4.0	①微砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部は横ナデ、外面底部はヘラ削り。口縁部横ナデと底部ヘラ削りの間に無調整部分が見られる。	
第27図3 P.L. 96	土師器 杯	床 ⅓	① 16.9 ④ 3.1	①細砂粒(含雲母) ②酸化焰 ③橙色	口縁部は横ナデ、外面底部はヘラ削り。口縁部横ナデと底部はヘラ削りの間に僅かに無調整部分が見られる。内面底部中央に指頭痕が残る。	
第27図4 P.L. 96	土師器 杯	埋没土 ⅓	① 12.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部は横ナデ、外面底部はヘラ削り。口縁部横ナデと底部ヘラ削りの間に無調整部分が見られる。	
第27図5 P.L. 96	土師器 杯	床 ⅓	① 12.8 ④ 3.5	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい褐色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。内面口縁部に指頭痕が残る。	
第27図6 P.L. 96	土師器 杯	床 ⅓	① 12.8 ④ 3.5	①微砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部は横ナデ、外面底部はヘラ削り。口縁部横ナデと底部ヘラ削りの間に無調整部分が見られる。	
第27図7 P.L. 96	土師器 杯	床 ⅓	① 14.5 ④ 4.4	①微砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部は横ナデ、外面底部はヘラ削り。口縁部横ナデと底部ヘラ削りの間に無調整部分が見られる。	
第28図8 P.L. 96	土師器 杯	埋没土 ⅓	① 14.0 ④ 3.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部は横ナデ、外面底部はヘラ削り。口縁部横ナデと底部はヘラ削りの間に僅かに無調整部分が見られる。	
第28図9 P.L. 96	土師器 杯	埋没土 ⅓	① 14.6	①微砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部は横ナデ、外面底部はヘラ削り。口縁部横ナデと底部ヘラ削りの間に無調整部分が見られる。	
第28図10 P.L. 96	須恵器 蓋	掘り方 ⅓	① 10.5 ④ 2.3 ⑤ 4.4	①微砂粒(黒色鉍物粒) ②還元焰 ③オリーブ灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。偏平摺を貼付。かえりは僅かに引き出されている。天井部摺周辺は回転ヘラ削り。	
第28図11 P.L. 96	須恵器 蓋	床 ⅓	① 16.2 ⑤ 5.3 ④ 2.7	①微砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。偏平摺を貼付。かえりは僅かに引き出されている。天井部摺周辺は回転ヘラ削り。	
第28図12 P.L. 96	須恵器 蓋	埋没土 完形	① 15.9 ⑤ 5.5 ④ 2.4	①細砂粒(黒色鉍物粒) ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。偏平摺を貼付。かえりは口縁端部を折り返して付けられている。天井部は回転ヘラ削り。	
第28図13 P.L. 96	須恵器 杯	埋没土 ⅓	① 12.0 ② 8.0 ④ 3.3	①微砂粒 ②還元焰 ③オリーブ灰色	ロクロ整形、回転方向右回りか？底部と体部最下位は回転ヘラ削り。	
第28図14 P.L. 96	須恵器 杯	掘り方 ⅓	① 14.5 ② 8.8 ④ 3.9	①細砂粒 ②還元焰軟質 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向不明。底部切り放し技法は摩耗のため不明。	
第28図15 P.L. 96	須恵器 杯	カマド ⅓	① 14.8 ② 7.2 ④ 3.7	①細砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転ヘラ削り。底部から体部下部は水平に開き、上部は僅かに外傾しながら開く。	
第28図16 P.L. 96	土師器 甕	カマド 口縁部～胴部上位片	① 22.6	①粗砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部は横ナデ、外面胴部は下位からの縦方向ヘラ削り。頸部に指頭痕が残る。内面胴部はヘラナデ。	
第28図17 P.L. 96	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴部片	① 23.0	①細砂粒(褐色粒) ②酸化焰 ③橙色	口縁部に輪痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、外面胴部は左方向のヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第28図18 P.L. 96	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴部上位	① 21.4	①細砂粒(含石英) ②酸化焰 ③橙色	口縁部は横ナデ、外面胴部は左方向のヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第28図19 P.L. 96	土師器 甕	床 胴部～底部	②8.5～9.0 胴部最大径 30.0	①細砂粒(含雲母) ②酸化焰 ③橙色	外面胴部は上位が左方向、中位・下位が底部から斜め方向のヘラ削り。底部もヘラ削り。内面上半はヘラナデ、下半はハケ整形。	内面に靱痕あり。
第28図20 P.L. 96	棒状礫	カマド 完形	401 g	粗粒安山岩		

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第28図21 P.L. 96	棒状礫	床 完形	404g	変質安山岩		

6号住居跡

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第31図1 P.L. 97	土師器 杯	北西小穴 1/2	① 11.8 ④ 3.0	①細砂粒 ②酸化焙 ③にぶい橙色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。口縁部横ナデと底部ヘラ削りの間に無調整部分が見られる。	
第31図2 P.L. 97	土師器 杯	埋没土 1/2	① 12.6 ④ 2.6	①細砂粒 ②酸化焙 ③にぶい橙色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。口縁部横ナデと底部ヘラ削りの間に無調整部分が見られる。	
第31図3 P.L. 97	土師器 杯	埋没土 1/2	① 13.0 ④ 3.0	①細砂粒 ②酸化焙 ③にぶい橙色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。口縁部横ナデと底部ヘラ削りの間に無調整部分が見られる。	
第31図4 P.L. 97	土師器 杯	埋没土 3/4	① 13.8	①細砂粒 ②酸化焙 ③にぶい橙色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。口縁部横ナデと底部ヘラ削りの間に無調整部分が見られる。	
第31図5 P.L. 97	土師器 杯	北東小穴 3/4	① 15.2 ④ 4.8	①微砂粒 ②酸化焙軟質 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、口縁部下半から底部にかけては摩耗のため整形は不明。	
第31図6 P.L. 97	須恵器 蓋	カマド 3/4	① 19.0 ⑤ 4.6 ④ 4.4	①微砂粒 ②還元焙 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。摘は擬宝珠形で貼付。口縁端部は折り曲げ。天井部摘周辺は回転ヘラ削り。	
第31図7 P.L. 97	須恵器 蓋	埋没土 3/4	① 18.6 ⑤ 6.8	①細砂粒 ②還元焙 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。摘は輪状で貼付。口縁端部は折り曲げ。天井部摘周辺は回転ヘラ削り。	
第31図8 P.L. 97	須恵器 杯	埋没土 3/4	① 13.2 ② 8.6 ④ 4.0	①細砂粒 ②還元焙 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は不定方向ヘラ削りか？底部に「×」のヘラ描きが見られる。	
第31図9 P.L. 97	須恵器 杯	埋没土 3/4	① 13.6 ② 7.0 ④ 3.5	①細砂粒 ②還元焙 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。	
第31図10 P.L. 97	須恵器 杯	埋没土 1/2	① 16.0 ② 14.8 ④ 4.2	①微砂粒 ②還元焙軟質 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向不明。底部切り放し技法不明。高台は貼付。	
第31図11 P.L. 97	黒色土器 杯	埋没土 1/2	② 8.0	①粗砂粒 ②酸化焙内面黒色処理 ③にぶい橙色	ロクロ整形、回転方向右回りか？底部は回転ヘラ削り。外面口縁部上半はヘラ研磨。下半は回転ヘラ削り。内面はヘラ研磨	
第31図12 P.L. 97	須恵器 甕	埋没土 胴部片		①粗砂粒 ②還元焙 ③灰白色	外面はカキ目。内面は同心円状のあて具痕が残る。	
第31図13 P.L. 97	土師器 火舎	埋没土 脚部基部片		①細砂粒 ②酸化焙 ③にぶい橙色	外面はヘラ削り。内面は横ナデ。	
第31図14 P.L. 97	石製 紡錘車	埋没土 完形	35.8g	砥沢石		
第31図15 P.L. 97	鉄製品 刀子	埋没土 破片				
第31図16 P.L. 97	鉄製品 刀子	埋没土 破片				
第32図17 P.L. 97	砥石	埋没土 完形	193.9g	粗粒安山岩		
第32図18 P.L. 97	砥石	埋没土 完形	210g	粗粒安山岩		
第32図19 P.L. 97	砥石	埋没土 一部欠	(2,740g)	粗粒安山岩		擦痕あり

7号住居跡

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第34図1 P.L. 98	土師器 椀	埋没土 小片	① 7.6	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部は横ナデ。体部は左方向ヘラ削り。	
第34図2 P.L. 98	須恵器 椀	埋没土 口縁部に一 部を欠	① 12.6 ② 6.2 ④ 4.4	①細砂粒 ②還元焰やや酸化焰 きみ ③浅黄色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。	
第34図3 P.L. 98	須恵器 椀	床 高台を欠	① 16.0 ② 6.8	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部切り放し技法は高台貼付時のナデで不明。内面口縁部に煤が付着。	
第34図4 P.L. 98	土師器 甕	床 口縁部～胴 部片	① 18.8	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	「コ」の字状口縁甕。頸部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は左方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第34図5 P.L. 98	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴 部片	① 18.8	①細砂粒 ②酸化焰 ③明赤褐色	「コ」の字状口縁甕。口縁部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部上位は左方向ヘラ削り、中位は縦方向ヘラ削り。内面はヘラナデ。	
第34図6 P.L. 98	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴 部片	① 19.8	①細砂粒 ②細砂粒 ③にぶい赤褐色	「コ」の字状口縁甕。口唇部に1条の凹線、頸部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は左方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第34図7 P.L. 98	土師器 甕	埋没土 胴部下位 ～底部	② 5.2	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	外面胴部は縦方向ヘラ削り。底部は回転糸切り後周囲をヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第34図8 P.L. 98	土製品	埋没土		①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	胎土中に植物茎を含む。	
第34図9 P.L. 98	土製品	埋没土		①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	胎土中に植物茎を含む。	
第34図10 P.L. 98	鉄製品	埋没土			器種不明。	
第34図11 P.L. 98	鉄製品	埋没土			器種不明。	
第34図12 P.L. 98	鉄製品	埋没土			器種不明。	

8号住居跡

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第36図1 P.L. 98	須恵器 杯	埋没土 1/5	① 13.2	①細砂粒 ②還元焰 ③灰オリーブ色	ロクロ整形、回転方向不明。	
第36図2 P.L. 98	須恵器 杯	カマド 完形	① 12.2 ② 5.2 ④ 4.4	①粗砂粒(φ3~5) ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。	
第36図3 P.L. 98	須恵器 椀	カマド 1/2	① 14.0 ② 6.6	①細砂粒 ②還元焰 ③にぶい橙色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。高台剥落。	
第36図4 P.L. 98	須恵器 椀	床 1/5	① 15.5 ② 9.6 ④ 7.1	①細砂粒 ②酸化焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向不明。底部切り放し技法不明。高台は貼付、高台周辺はナデ。	
第36図5 P.L. 98	須恵器 皿	カマド 完形	① 15.8 ② 7.4 ④ 2.8	①粗砂粒(φ3~5) の円礫 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。	
第36図6 P.L. 98	須恵器 皿	埋没土 口縁部の一 部を欠く	① 16.7 ② 8.2 ④ 3.0	①粗砂粒(φ2~3) の円礫 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。	
第36図7 P.L. 98	灰釉陶器 椀	カマド 1/5	① 12.6 ② 7.4 ④ 4.5	①微砂粒(黒色鉱物) ②還元焰堅緻 ③灰黄色	ロクロ整形、回転方向右回りか?底部の切り放し技法はヘラ調整のため不明。高台は断面角形で貼付。釉は大部分剝離しているが内面のみ施釉か。	猿投黒笹14号窯式期

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 類	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第36図8 P L. 98	須恵器 長頸壺	埋没土 胴部片		①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向不明。外面肩部に自然釉が付着。	
第36図9 P L. 98	土師器 台付甕	埋没土 口縁部～胴部片	① 13.8	①微砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	「コ」の字状口縁甕。頸部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部上位は左方向、下半は縦方向ヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第36図10 P L. 98	土師器 台付甕	床 脚部	② 4.5 ④ 8.6	①細砂粒 ②酸化焰 ③浅黄色	台付甕脚部。外面は縦方向ヘラ削り。内面上半はヘラナデ、下半は横ナデ。	
第36図11 P L. 98	土師器 甕	カマド 口縁部～胴部上位片	① 20.6	①細砂粒 ②酸化焰 ③明赤褐色	「コ」の字状口縁甕。口縁部から頸部は横ナデであるが、外面頸部の中程に無調整部分がある。外面胴部は左方向ヘラ削り、内面は横ナデ。	
第36図12 P L. 98	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴部上位片	① 20.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	「コ」の字状口縁甕。口縁部から頸部は横ナデであるが、外面頸部の中程に無調整部分がある。外面胴部は左方向ヘラ削り、内面は横ナデ。	
第36図13 P L. 98	土師器 甕	カマド 口縁部～胴部中位	① 21.4	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	「コ」の字状口縁甕。口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は上位が左方向のヘラ削り、中位以下が縦方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第36図14 P L. 98	円礫	埋没土 完形	56 g	二ツ岳軽石		
第36図15 P L. 98	鉄製品 鎌	埋没土				

9号住居跡

挿図番号 図版番号	種 類	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第39図1 P L.100	土師器 杯	西壁 完形	① 11.0 ④ 3.4	①微砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。	
第39図2 P L.100	土師器 杯	床 完形	① 12.0 ④ 3.8	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。口縁部横ナデと底部ヘラ削りの間に僅かに無調整部分が残る。	
第39図3 P L.100	土師器 杯	床 1/2	① 12.6 ④ 4.1	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。	
第39図4 P L.100	土師器 杯	床 1/2	① 13.0 ④ 3.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。口縁部は横ナデと底部の間に無調整部分が見られ、無調整部分には指頭痕が残る。	
第39図5 P L.100	土師器 杯	カマド 1/2	① 17.4 ④ 3.8	①粗砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。口縁部横ナデと底部ヘラ削りの間に無調整部分が見られる。	
第39図6 P L.100	土師器 甕	カマド 口縁部～胴部片	① 18.6	①細砂粒 ②酸化焰 ③浅黄色	輪積痕が残る。口縁部は横ナデ、外面胴部は縦方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第39図7 P L.100	土師器 甕	床 胴部下半片		①細砂粒 ②酸化焰 ③浅黄色	輪積痕が残る。外面胴部は縦方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第39図8 P L.100	土師器 手捏ね	カマド 完形	① 3.9 ② 2.8 ③ 2.0	①微砂粒 ②酸化焰 ③明赤褐色	手捏ね。	
第39図9 P L. 99	土製品	埋没土		①輝石粒 ②酸化焰 ③明赤褐色	棒状土製品。	
第39図10 P L. 99	土製品	埋没土		①輝石粒 ②酸化焰 ③明赤褐色	棒状土製品。中央に穿孔がある。	
第39図11 P L. 99	土製品	埋没土		①輝石粒 ②酸化焰 ③明赤褐色	棒状土製品。中央に穿孔がある。	

挿図番号 図版番号	種 器 類 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第39図12 P L. 99	土製品	埋没土		①輝石粒 ②酸化焙 ③明赤褐色	棒状土製品。	
第39図13 P L. 99	土製品	埋没土		①輝石粒 ②酸化焙 ③明赤褐色	棒状土製品。	
第39図14 P L. 99	土製品	埋没土		①輝石粒 ②酸化焙 ③明赤褐色	棒状土製品。中央にねじれがみられる。	
第39図15 P L. 99	土製品	埋没土		①輝石粒 ②酸化焙 ③明赤褐色	棒状土製品。	
第39図16 P L. 99	土製品	埋没土		①輝石粒 ②酸化焙 ③明赤褐色	棒状土製品。ヘラ状圧痕がみられる。	
第40図17 P L. 99	土製品	埋没土		①輝石粒 ②酸化焙 ③明赤褐色	手握ね土器の粘土帯の一部か。	
第40図18 P L. 99	土製品	埋没土		①輝石粒 ②酸化焙 ③明赤褐色	玉状土製品。中央に穿孔がある。	
第40図19 P L. 99	土製品	埋没土		①輝石粒 ②酸化焙 ③明赤褐色	玉状土製品。中央に穿孔がある。	
第40図20 P L. 99	土製品	埋没土		①輝石粒 ②酸化焙 ③明赤褐色	円形土製品。	
第40図21 P L. 99	土製品	埋没土		①輝石粒 ②酸化焙 ③明赤褐色	粘土粒をつまんだような状態を示す。	
第40図22 P L. 99	土製品	埋没土		①輝石粒 ②酸化焙 ③明赤褐色	円形土製品。	
第40図23 P L. 99	土製品	埋没土		①輝石粒 ②酸化焙 ③明赤褐色	不定形土製品。	
第40図24 P L. 99	土製品	埋没土		①輝石粒 ②酸化焙 ③明赤褐色	片面に植物茎の圧痕がみられる。	
第40図25 P L. 99	土製品	埋没土		①輝石粒 ②酸化焙 ③明赤褐色	片面に植物茎の圧痕がみられる。	
第40図26 P L. 99	土製品	埋没土		①輝石粒 ②酸化焙 ③明赤褐色	植物茎の圧痕がみられる。	
第40図27 P L. 99	土製品	埋没土		①輝石粒 ②酸化焙 ③明赤褐色	植物茎の圧痕がみられる。	
第40図28 P L. 99	土製品	埋没土		①輝石粒 ②酸化焙 ③明赤褐色	片面に植物茎の、もう一方に布の圧痕がみられる。	
第40図29 P L. 99	土製品	埋没土		①輝石粒 ②酸化焙 ③明赤褐色	植物茎の圧痕がみられる。	
第40図30 P L. 99	土製品	埋没土		①輝石粒 ②酸化焙 ③明赤褐色	植物茎の圧痕がみられる。	
第40図31 P L. 99	土製品	埋没土		①輝石粒 ②酸化焙 ③明赤褐色	植物茎の圧痕がみられる。	

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第40図32 P L. 99	土製品	埋没土		①輝石粒 ②酸化焰 ③明赤褐色	植物茎の圧痕がみられる。	
第40図33 P L. 99	土製品	埋没土		①輝石粒 ②酸化焰 ③明赤褐色	植物茎の圧痕がみられる。	
第40図34 P L. 99	土製品	埋没土		①輝石粒 ②酸化焰 ③明赤褐色	植物茎の圧痕がみられる。	
第40図35 P L. 99	土製品	埋没土		①輝石粒 ②酸化焰 ③明赤褐色	植物茎の圧痕がみられる。	
第40図36 P L. 99	土製品	埋没土		①輝石粒 ②酸化焰 ③明赤褐色	植物茎の圧痕がみられる。	
第40図37 P L. 100	砥石	埋没土 端部欠		砥沢石		

10号住居跡

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第42図1 P L. 100	須恵器 杯	床 完形	① 11.4 ② 5.6 ④ 3.6	①細砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。体部に「金」の墨書。	
第42図2 P L. 100	須恵器 杯	貯穴 完形	① 11.6 ② 5.8 ④ 3.7	①細砂粒(含石英) ②還元焰 ③にぶい黄褐色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。体部に「金」の墨書。	
第42図3 P L. 100	須恵器 椀	カマド 口縁部の一 部を欠	① 12.0 ②7.1③7.5 ④ 5.1	①細砂粒 ②還元焰やや酸化焰 ぎみ ③にぶい黄橙 色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。高台は貼付で高台の周辺は貼付時のナデ。	
第42図4 P L. 100	須恵器 椀	床 完形	① 12.0 ②7.1③7.8 ④ 5.2	①細砂粒 ②還元焰やや酸化焰 ぎみ ③橙色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。高台は貼付で高台の周辺は貼付時のナデ。	
第42図5 P L. 100	須恵器 椀	貯穴 口唇部の一 部を欠	① 12.0 ②7.1③7.8 ④ 5.1	①細砂粒 ②還元焰やや酸化焰 ぎみ ③橙色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。高台の貼付で高台の周辺は貼付時のナデ。	
第42図6 P L. 100	須恵器 椀	貯穴 口唇部の一 部を欠	① 12.0 ②7.1③7.9 ④ 5.6	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。高台は貼付で高台の周辺は貼付時のナデ。	
第42図7 P L. 100	須恵器 椀	埋没土 ⅓	① 15.6 ②7.3③8.2 ④ 7.2	①細砂粒 ②還元焰 ③にぶい黄色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部切り放し技法はヘラ調整のため不明。	
第42図8 P L. 100	灰釉陶器 輪花皿	埋没土 ⅓	① 15.1 ②8.0③8.1 ④ 3.0	①緻密(含黒色鉱物 粒) ②還元焰堅緻 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向不明。底部切り放し技法はヘラ調整のため不明。施釉方法は漬け掛け、釉調は透明でやや緑色を帯びている。	虎溪山1号 窯式期
第42図9 P L. 100	土師器 甕	貯穴 口縁部～胴 部片	① 20.5	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい赤褐色	口縁部は横ナデ。外面胴部は左方向のヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第42図10 P L. 100	土師器 甕	カマド 胴部～底部	② 6.6	①細砂粒(含雲母、 石英) ②酸化焰 ③橙色	外面胴部は縦方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。底部整形は不明。	

11号住居跡

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第44図1 P.L. 101	土師器 杯	埋没土 1/2	① 11.8	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。口縁部横ナデと底部ヘラ削りの間に無調整部分が見られる。	
第44図2 P.L. 101	土師器 椀	カマド 1/4	① 22.2 ② 13.6 ④ 8.4	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。体部は左方向ヘラ削り。底部はヘラ削り。	
第45図3 P.L. 101	須恵器 杯	埋没土 口縁部の一部欠	① 12.3 ② 7.2	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。内面に赤色顔料が付着。	
第45図4 P.L. 101	須恵器 杯	埋没土 1/4	① 12.5 ② 6.0 ④ 3.5	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。	
第45図5 P.L. 101	須恵器 杯	埋没土 1/4	① 12.9 ② 7.2 ④ 3.4	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。	
第45図6 P.L. 101	須恵器 椀	カマド 1/2	① 13.3 ②7.0③7.2 ④ 5.5	①粗砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り後ヘラナデ。高台は貼付。	
第45図7 P.L. 101	須恵器 椀	南東小穴 1/4	① 13.6 ②6.9③7.6 ④ 5.9	①粗砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切りか？高台は貼付。	
第45図8 P.L. 101	土師器 台付甕	埋没土 口縁部～胴部片	① 8.8	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部は横ナデ、外面胴部は左方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第45図9 P.L. 101	土師器 台付甕	床 脚部片	② 4.8 ③ 8.6	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	脚部は内外面とも横ナデ。	
第45図10 P.L. 101	土師器 台付甕	埋没土 脚部片	② 5.4 ③ 7.4	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	脚部は内外面とも横ナデ。	
第45図11 P.L. 101	土師器 甕	南西小穴 口縁部～胴部上位片	① 19.6	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	「コ」の字状口縁甕。口縁部は横ナデ。頸部も横ナデであるが中央部に無調整部分が残る。外面胴部は左方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第45図12 P.L. 101	土師器 甕	南西小穴 口縁部～胴部上位片	① 19.6	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	「コ」の字状口縁甕。口縁部から頸部は横ナデ、頸部中央部に無調整部分が残る。外面胴部は左方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。頸部に煤が付着。	
第45図13 P.L. 101	土師器 甕	埋没土 胴部～底部	② 3.9	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	外面の胴部・底部はヘラ削り。内面はヘラ削りナデ。	
第45図14 P.L. 101	礫	カマド 完形	3,590 g	未固結凝灰岩	カマド袖石。	
第45図15 P.L. 101	礫	カマド 一部欠	2,756 g	粗粒安山岩	一方の端部を打ち欠いて、支脚として使用。	
第45図16 P.L. 101	砥石	埋没土 一部欠	(155.9 g)	砥沢石		
第45図17 P.L. 101	土錘	埋没土 一部欠	(24.7 g)		外面ヘラ削り。	
第45図18 P.L. 101	鉄釘	カマド 両端欠				

12号住居跡

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第47図1 P.L. 101	須恵器 杯	カマド 完形	① 11.0 ② 5.5 ④ 3.5	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	ロクロ整形、回転方向左回り。底部は回転糸切り。底部に乾燥時のあて具跡が見られる。	
第47図2 P.L. 101	須恵器 杯	埋没土 1/4	① 15.4 ② 6.0 ④ 4.8	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	ロクロ整形、回転方向左回り。底部は回転糸切り。	

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第47図3 P.L. 101	須恵器 椀	床 完形	① 12.0 ②7.2③7.3 ④ 5.3	①細砂粒 ②酸化焙 ③にぶい橙色	ロクロ整形、回転方向左回り。底部は回転糸切りであるが高台貼付時のナデのため中心部のみ残る。	
第47図4 P.L. 101	須恵器 椀	床 3/4	① 12.6 ②7.2③7.9 ④ 5.4	①細砂粒 ②酸化焙 ③にぶい橙色	ロクロ整形、回転方向左回り。底部は回転糸切りであるが高台貼付時のナデのため中心部のみ残る。	
第47図5 P.L. 101	須恵器 椀	床 体部下位～ 底部	② 8.6 ③ 9.5	①細砂粒(含石英) ②酸化焙 ③明赤褐色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部切り放し技法は高台貼付時のナデで不明。	
第47図6 P.L. 101	須恵器 椀	床 高台	③ 10.8	①細砂粒 ②酸化焙 ③にぶい橙色	ロクロ整形、回転方向不明。	
第47図7 P.L. 101	灰釉陶器 皿	床 1/2	① 12.8 ②6.6③6.4 ④ 2.6	①微砂粒 ②還元焙堅緻 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回りか？底部切り放し技法はナデ整形のため不明。施釉方法は漬け掛け、釉調は不透明な浅黄色。	虎溪山1号 窯式期
第47図8 P.L. 102	須恵器 羽釜	カマド 口縁部～胴 部片	① 19.4	①細砂粒 ②還元焙やや酸化焙 ぎみ③にぶい黄褐色	ロクロ整形、回転方向不明。罅は小型の断面三角形で貼付。胴部は無調整。	
第47図9 P.L. 101	土錘	埋没土 完形	8.8 g		外面は磨滅している。	
第47図10 P.L. 102	棒状礫	床 一部欠	(527 g)	溶結凝灰岩		
第47図11 P.L. 102	扁平礫	床 完形	497 g	粗粒安山岩	側面に一部打ち欠きがある。	

13号住居跡

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第49図1 P.L. 102	土師器 杯	床 1/4	① 11.8 ② 8.2 ④ 2.9	①微砂粒 ②酸化焙 ③にぶい橙色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。口縁部横ナデと底部ヘラ削りの間に無調整部分が見られる。	
第49図2 P.L. 102	土師器 杯	床 1/4	① 11.4 ② 7.2 ④ 3.0	①微砂粒 ②酸化焙 ③にぶい黄褐色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。口縁部横ナデと底部ヘラ削りの間に無調整部分が見られる。	
第49図3 P.L. 102	土師器 杯	床 完形	① 11.5 ② 9.0 ④ 3.4	①微砂粒 ②酸化焙 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。口縁部横ナデと底部ヘラ削りの間に無調整部分が見られる。	
第49図4 P.L. 102	土師器 杯	カマド 口縁部の一 部を欠	① 12.0 ② 9.0 ④ 3.1	①微砂粒 ②酸化焙 ③にぶい橙色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。口縁部横ナデと底部ヘラ削りの間に無調整部分が見られる。	
第49図5 P.L. 102	土師器 杯	床 3/4	① 12.5 ② 8.0 ④ 3.3	①微砂粒 ②酸化焙 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。口縁部横ナデと底部ヘラ削りの間に無調整部分が見られる。	
第49図6 P.L. 102	土師器 杯	床 口縁部の一 部を欠	① 14.7 ② 10.5 ④ 3.7	①細砂粒 ②酸化焙 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は左方向のヘラ削り。底部はヘラ削り。内面は口縁部から見込み部にかけてやや雑な放射状暗文が施されている。	
第50図7 P.L. 102	須恵器 杯	床 口縁部の一 部を欠	① 11.9 ② 6.8 ④ 3.2	①粗砂粒(φ 5 mmの 礫) ②還元焙 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。	
第50図8 P.L. 102	須恵器 杯	埋没土 口縁部の一 部を欠	① 12.7 ② 6.3 ④ 3.8	①粗砂粒(φ 5 mmの 礫) ②酸化焙 ③にぶい橙色	ロクロ整形、回転方向右回りか？底部は回転糸切りであるが器面が荒れているため不鮮明である。	
第50図9 P.L. 102	須恵器 杯	床 3/4	① 13.5 ② 6.9 ④ 4.0	①粗砂粒(φ 5 mmの 礫) ②還元焙 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。	
第50図10 P.L. 102	須恵器 杯	床 3/4	① 13.6 ② 6.5 ④ 3.5	①細砂粒 ②還元焙 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。	
第50図11 P.L. 102	須恵器 杯	床 1/4	① 15.2 ② 7.0 ④ 4.5	①細砂粒 ②酸化焙 ③にぶい橙色	ロクロ整形、回転方向不明。底部は回転糸切り。	

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第50図12 P L. 102	須恵器 椀	床 高台欠	① 14.6 ② 7.7	①細砂粒 ②還元焰 ③灰黄褐色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。 高台は剥落。	
第50図13 P L. 102	須恵器 平瓶	床 小片		①微砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向不明。肩部から体部上半は 回転ヘラナデ。体部下半はヘラナデ。	
第50図14 P L. 102	灰釉陶器 長頸瓶	埋没土 頸部片		①細砂粒 ②還元焰 ③オリーブ黄色	ロクロ整形、回転方向不明。施釉方法は不明。釉 調は透明感のある緑色。	
第50図15 P L. 102	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴 部片	① 19.8	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	「コ」の字状口縁甕。口縁部から頸部は横ナデ。 外面胴部は左方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第50図16 P L. 102	土錘	床 完形	19.5 g		外面ヘラ削り。	
第50図17 P L. 102	土錘	カマド 完形	21.6 g		外面ヘラ削り。	
第50図18 P L. 102	円礫	床 完形	465 g	粗粒安山岩	一部に打痕がみられる。	
第50図19 P L. 102	棒状礫	埋没土 完形	541 g	灰色安山岩		
第50図20 P L. 102	棒状礫	埋没土 1,021 g	変質安山岩			
第50図21 P L. 102	鉄釘	埋没土 端部欠				
第50図22 P L. 102	鉄釘	埋没土 両端欠				

14号住居跡

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第53図 1 P L. 103	土師器 杯	カマド 完形	① 9.7 ④ 3.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。口縁部横ナデ と底部はヘラ削りの間に無調整部分が見られる。	
第53図 2 P L. 103	土師器 杯	カマド 3/4	① 12.8 ④ 4.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。口縁部横ナデ と底部はヘラ削りの間に無調整部分が見られる。	
第53図 3 P L. 103	須恵器 杯	西壁 3/4	① 10.3 ② 5.4 ④ 4.0	①細砂粒 ②還元焰 ③明オリーブ灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は一定方向ヘ ラ削り。	
第53図 4 P L. 103	須恵器 椀	埋没土 完形	① 17.0 ②8.2③8.7 ④ 6.9	①細砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向左回り。底部は回転糸切り。 高台は貼付。	
第53図 5 P L. 103	灰釉陶器 輪花皿	床 口縁部の一 部を欠	① 15.5 ②8.0③8.0 ④ 3.6	①細砂粒 ②還元焰堅緻 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部切り放し技法 はナデ調整のため不明。高台は貼付。施釉方法は 刷毛塗り。釉調はやや透明感のある緑灰色。	光が丘1号 窯式期
第53図 6 P L. 103	灰釉陶器 椀	床 底部片	② 7.2 ③ 7.6	①細砂粒 ②還元焰堅緻 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向不明。底部切り放し技法は ナデ調整のため不明。高台は貼付。施釉方法は不 明。釉調は透明感のある緑色。	
第53図 7 P L. 103	偏平礫	カマド 完形	257 g	粗粒安山岩		
第53図 8 P L. 103	偏平礫	床 完形	427 g	石英閃緑岩		
第53図 9 P L. 103	偏平礫	カマド 完形	576 g	石英閃緑岩		
第53図10 P L. 103	偏平礫	カマド 完形	701 g	粗粒安山岩		

遺物観察表

15号住居跡

挿図番号 図版番号	種 類	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第56図1 P L. 103	須恵器 杯	カマド 完形	① 11.8 ② 5.8 ④ 3.4	①粗砂粒 ②還元焰燻焼成 ③にぶい橙色	ロクロ整形、回転方向左回り。底部は回転糸切り。	
第56図2 P L. 103	須恵器 杯	カマド 1/2	① 12.3 ② 6.6 ④ 3.6	①粗砂粒 ②還元焰燻焼成 ③淡黄色	ロクロ整形、回転方向左回り。底部は回転糸切り。	
第56図3 P L. 103	須恵器 杯	カマド 1/2	① 12.6 ② 6.0 ④ 3.2	①粗砂粒 ②還元焰燻焼成 ③浅黄色	ロクロ整形、回転方向左回り。底部は回転糸切り。	
第56図4 P L. 103	須恵器 杯	カマド 完形	① 12.8 ② 5.8 ④ 3.4	①粗砂粒 ②還元焰燻焼成 ③浅黄色	ロクロ整形、回転方向左回り。底部は回転糸切り。	
第56図5 P L. 103	須恵器 杯	カマド 1/4	① 14.0 ② 6.9 ④ 3.4	①粗砂粒 ②酸化焰 ③浅黄色	ロクロ整形、回転方向左回り。底部は回転糸切り。	
第56図6 P L. 103	須恵器 椀	貯穴 3/4	① 12.8 ②7.1③7.4 ④ 5.0	①細砂粒 ②還元焰やや酸化焰 ぎみ ③浅黄色	ロクロ整形、回転方向左回り。底部は回転糸切り。 高台は貼付。	
第56図7 P L. 103	須恵器 椀	埋没土 1/2	① 16.0 ②7.3③7.0 ④ 6.9	①細砂粒 ②還元焰やや酸化焰 ぎみ ③黄橙色	ロクロ整形、回転方向不明。底部は回転糸切り。 高台は貼付。	
第56図8 P L. 103	須恵器 椀	埋没土 口縁部の一 部を欠	① 18.3 ②7.7③6.9 ④ 6.9	①細砂粒 ②還元焰やや酸化焰 ぎみ ③浅黄色	ロクロ整形、回転方向左回り。底部は回転糸切り。 高台は貼付。	
第56図9 P L. 103	須恵器 杯	カマド 小片		①細砂粒 ②還元焰やや酸化焰 ぎみ ③灰黄色	ロクロ整形、回転方向不明。口縁部に「冨」の墨 書。	
第56図10 P L. 103	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴 部片	① 20.2	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	「コ」の字状口縁甕。口縁部から頸部は横ナデ。 外面胴部は左方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第56図11 P L. 103	土師器 甕	カマド 口縁部～胴 部片	① 21.3	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	「コ」の字状口縁甕。口縁部は横ナデ。頸部も横 ナデであるが中央部に無調整部分が残る。外面胴 部は左方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第56図12 P L. 103	土師器 甕	カマド 口縁部～胴 部中位	① 19.6	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	「コ」の字状口縁甕。輪積痕が残る。口縁部から 頸部は横ナデ。外面胴部は上位が左方向ヘラ削り、 中位が縦方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第56図13 P L. 103	鉄製品	埋没土 破片			器種不明。	
第56図14 P L. 103	鉄製品	埋没土 破片			器種不明。	

16号住居跡

挿図番号 図版番号	種 類	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第58図1 P L. 104	須恵器 杯	カマド 1/2	① 12.8	①細砂粒 ②還元焰燻焼成 ③灰色	ロクロ整形、回転方向不明。	
第58図2 P L. 104	須恵器 杯	カマド 1/2	① 15.2 ② 7.6 ④ 6.2	①細砂粒 ②還元焰やや酸化焰 ぎみ③にぶい黄橙色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。	
第58図3 P L. 104	須恵器 椀	カマド 完形	① 12.8 ②6.8③7.2 ④ 5.0	①細砂粒(含石英) ②還元焰やや酸化焰 ぎみ ③橙色	ロクロ整形、回転方向左回り。底部は回転糸切り。 高台は貼付。	
第58図4 P L. 104	須恵器 椀	カマド 1/2	① 12.8 ②7.2③7.6 ④ 5.3	①細砂粒(含石英) ②還元焰やや酸化焰 ぎみ③にぶい黄褐色	ロクロ整形、回転方向不明。底部は回転糸切り。 高台は貼付。	
第58図5 P L. 104	須恵器 椀	カマド 完形	① 13.4 ②7.6③8.0 ④ 5.0	①細砂粒 ②還元焰やや酸化焰 ぎみ③にぶい黄褐色	ロクロ整形、回転方向不明。底部は回転糸切り。 高台は貼付。	

挿図番号 図版番号	種 器 類 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第58図6 P L. 104	須恵器 椀	カマド 口縁部の一 部を欠	① 13.9 ②7.6③8.2 ④ 5.4	①細砂粒 ②還元焰やや酸化焰 ざみ③にぶい黄橙色	ロクロ整形、回転方向不明。底部は回転糸切り。 高台は貼付。	
第58図7 P L. 104	須恵器 椀	カマド 口縁部の一 部を欠	① 14.2 ②7.2③7.6 ④ 5.3	①細砂粒 ②還元焰やや酸化焰 ざみ③にぶい黄橙色	ロクロ整形、回転方向不明。底部は回転糸切り。 高台は貼付。口縁部外面に「今」の墨書、底部内 面に「口」の刻書。	
第58図8 P L. 104	灰釉陶器 椀	埋没土 口縁部片		①緻密 ②還元焰堅緻 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向不明。内面見込み部に重ね 焼き痕が残る。施釉方法は漬け掛け。釉調は不透 明な灰色。	
第58図9 P L. 104	砥石	埋没土 破片	(57.2g)	砥沢石		
第58図10 P L. 104	土錘	埋没土 完形	20.8g		外面へら削り。	

17号住居跡

挿図番号 図版番号	種 器 類 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第61図1 P L. 104	土師器 杯	埋没土 1/4	① 10.4 ④ 2.7	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部は横ナデ。底部はへら削り。口縁部横ナデ と底部へら削りの間に無調整部分が見られる。	
第61図2 P L. 104	土師器 杯	床 1/2	① 10.6 ④ 3.2	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部は横ナデ。底部は左方向へら削り。	
第61図3 P L. 104	土師器 杯	床 1/2	① 12.1 ④ 3.7	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部は横ナデ。底部は左方向へら削り。内面の 器面は剥落がめだつ。	
第62図4 P L. 104	土師器 杯	床 完形	① 12.7 ④ 3.8	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部は横ナデ。底部はへら削り。口縁部横ナデ と底部へら削りの間に無調整部分が見られる。	
第62図5 P L. 104	土師器 杯	床 1/4	① 13.0 ④ 4.2	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口唇部は横ナデ。底部は左方向へら削り。	
第62図6 P L. 104	土師器 杯	床 完形	① 13.4 ④ 3.7	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部は横ナデ。底部はへら削り。口縁部横ナデ と底部へら削りの間に無調整部分が見られる。	
第62図7 P L. 104	土師器 杯	床 完形	① 13.4 ④ 4.3	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部は横ナデ。底部はへら削り。口縁部横ナデ と底部へら削りの間に無調整部分が見られる。	
第62図8 P L. 104	土師器 杯	カマド 口縁部片	① 18.0	①微砂粒(含雲母) ②酸化焰 ③橙色	外面は横方向へら研磨。内面は口唇部が横方向へ ら研磨後放射状暗文が施されている。	
第62図9 P L. 104	須恵器 蓋	埋没土 完形	① 11.5 ⑤ 2.2 ④ 3.0	①微砂粒(黒色鉱物 粒)②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。蓋は擬宝珠形で貼 付。天井部は口縁部まで回転へら削り。	
第62図10 P L. 104	須恵器 蓋	床 完形	① 11.5 ④ 3.0	①微砂粒(黒色鉱物 粒)②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。蓋は剥落。天井部 は口縁部まで回転へら削り。	
第62図11 P L. 104	土師器 甕	カマド 口縁部～胴 部上位	① 15.0	①細砂粒(含雲母) ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部は横ナデ。外面胴部は横方向へら削り、内 面はへらナデ。	
第32図12 P L. 104	土師器 甕	カマド 口縁部～胴 部上位	① 23.2	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	輪積痕が残る。口縁部は横ナデ。外面胴部は斜め 方向のへら削り、内面はへらナデ。	
第62図13 P L. 104	土師器 甕	床 口縁部～胴 部上半	① 23.2	①細砂粒 ②酸化焰 ③赤褐色	輪積痕が残る。口縁部は横ナデ。外面胴部は縦方 向のへら削り、内面はへらナデ。	
第62図14 P L. 104	土師器 甕	床 口縁部～胴 部上位	① 20.8	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	輪積痕が残る。口縁部は横ナデ。外面胴部は横方 向のへら削り後縦方向へら削り、内面はへらナデ。	

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第62図15 P L. 104	土師器 甕	床 口縁部～胴 部上位	① 21.6	①細砂粒 ②酸化焙 ③橙色	輪積痕が残る。口縁部は横ナデ。外面胴部は縦方向へら削り後頸部下に横方向へら削り。内面はへらナデ。	
第63図16 P L. 105	土師器 甕	床 口縁部～胴 部上位	① 21.6	①細砂粒 ②酸化焙 ③橙色	口縁部は横ナデ。外面胴部は斜め方向へら削り後頸部下に横方向へら削り。内面はへらナデ。	
第63図17 P L. 105	土師器 甕	床 口縁部～胴 部上位	① 21.8	①細砂粒 ②酸化焙 ③橙色	輪積痕が残る。口縁部は横ナデ。外面胴部は斜め方向へら削り、内面はへらナデ。	
第63図18 P L. 105	土師器 甕	床 口縁部～胴 部下位	① 22.6	①細砂粒 ②酸化焙 ③橙色	輪積痕が残る。口縁部は横ナデ。外面胴部は底部から頸部に向けてのへら削り。内面はへらナデ。	
第63図19 P L. 105	土師器 甕	口縁部～胴 部下位	① 23.6	①細砂粒(含石英) ②酸化焙 ③橙色	輪積痕が残る。口縁部は横ナデ。外面は縦方向へら削り。内面は上半が横方向へらナデ、下半が縦方向へらナデ。	
第63図20 P L. 105	土師器 甕	床 胴部下半～ 底部	② 4.4	①細砂粒(含雲母) ②酸化焙 ③にぶい褐色	外面胴部は縦方向へら削り、底部もへら削り。内面はへらナデ。	
第63図21 P L. 105	円礫	埋没土	222 g	粗粒安山岩		擦痕あり
第63図22 P L. 105	棒状礫	南壁 完形	279 g	粗粒安山岩		
第63図23 P L. 105	棒状礫	床 完形	315 g	石英閃緑岩		
第63図24 P L. 105	棒状礫	南壁 完形	611 g	粗粒安山岩		

18号住居跡

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第65図1 P L. 105	土師器 杯	カマド ほぼ完形	① 11.5 ② 6.4 ④ 3.8	①粗砂粒(含雲母) ②酸化焙 ③にぶい橙色	回転台による整形、回転方向は不明。口縁部は横ナデ、体部上半は無調整、下半はへら削り。底部は不定方向へら削り。	
第65図2 P L. 105	須恵器 杯	南東掘り込 3/4	① 12.0 ② 5.0 ④ 3.9	①細砂粒 ②還元焙やや酸化焙 ぎみ ③浅黄色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。	
第65図3 P L. 105	須恵器 杯	カマド 1/4	① 12.8 ② 6.0 ④ 3.9	①細砂粒 ②還元焙やや酸化焙 ぎみ ③にぶい橙色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。	
第65図4 P L. 105	須恵器 碗	カマド 1/6	② 7.3 ③ 7.8	①細砂粒 ②還元焙やや酸化焙 ぎみ ③橙色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。高台は貼付。	
第65図5 P L. 105	土師器 甕	南東掘り込 口縁部～胴 部片	① 19.6	①細砂粒 ②酸化焙 ③明赤褐色	頸部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は横方向へら削り、内面はへらナデ。	
第65図6 P L. 105	土錘	埋没土 一部欠	(24 g)	①細砂粒 ②酸化焙 ③赤褐色	外面へら削り。	
第65図7 P L. 105	棒状礫	南西掘り込	351 g	粗粒安山岩		
第65図8 P L. 105	鉄製品 刀子	埋没土				
第65図9 P L. 105	鉄製品 刀子	埋没土			柄部木質一部残存。	
第65図10 P L. 105	鉄製品 馬具	西壁 破片				
第65図11 P L. 105	鉄釘	埋没土				
第65図12 P L. 105	鉄釘	東壁				

19号住居跡

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第67図1 P L. 106	須恵器 杯	床 口縁部の一 部を欠	① 12.0 ② 5.3 ④ 3.9	①細砂粒 ②還元焰やや酸化焰 ぎみ③にぶい黄橙色	ロクロ成形、回転方向左回り。底部は回転糸切り。 外面口縁部に「畠」の墨書。	
第67図2 P L. 106	須恵器 杯	床 口縁部の一 部を欠	① 12.2 ② 5.8 ④ 4.2	①細砂粒 ②還元焰やや酸化焰 ぎみ ③浅黄色	ロクロ成形、回転方向左回り。底部は回転糸切り。 外面口縁部に「念」の墨書。	
第67図3 P L. 106	須恵器 椀	カマド 完形	① 12.8 ②6.8③7.4 ④ 5.0	①細砂粒 ②還元焰やや酸化焰 ぎみ ③浅黄色	ロクロ成形、回転方向左回り。底部は回転糸切り。 高台は貼付、畳付けに乾燥時のあて物痕が見られ る。	
第67図4 P L. 106	須恵器 椀	カマド 完形	① 12.7 ②7.2③7.5 ④ 6.0	①細砂粒 ②還元焰やや酸化焰 ぎみ③にぶい黄橙色	ロクロ成形、回転方向左回り。底部は回転糸切り。 高台は貼付。	
第67図5 P L. 106	須恵器 椀	カマド 完形	① 13.0 ②7.2③7.6 ④ 5.3	①細砂粒 ②還元焰やや酸化焰 ぎみ③にぶい黄橙色	ロクロ成形、回転方向左回り。底部は回転糸切り。 高台は貼付。	
第67図6 P L. 106	須恵器 椀	貯穴 完形	① 14.2 ②7.6③8.0 ④ 6.2	①細砂粒 ①還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、回転方向左回り。底部は回転糸切り。 体部中程に輪積痕が残る。高台は貼付。	
第67図7 P L. 106	須恵器 椀	カマド 高台を欠	① 12.6 ② 7.0	①細砂粒 ②還元焰やや酸化焰 ぎみ③にぶい黄橙色	ロクロ成形、回転方向左回り。底部は回転糸切り、 周辺部の高台は貼付時のナデ。高台は剥落。	
第67図8 P L. 106	須恵器 椀	埋没土 1/4	① 14.2 ② 8.0	①細砂粒 ②還元焰やや酸化焰 ぎみ③にぶい黄橙色	ロクロ成形、回転方向左回り。底部は回転糸切り、 周辺部の高台は貼付時のナデ。高台は剥落。	
第67図9 P L. 106	土師器 甕	床 口縁部～胴 部片	① 22.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③褐色	口縁部は横ナデ、外面胴部は上位が左方向、中位 が縦方向へラ削り、内面はへらナデ。	
第67図10 P L. 106	鉄製品 刀子	カマド				
第67図11 P L. 106	鉄釘	埋没土				

20号住居跡

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第69図1 P L. 106	須恵器 杯	埋没土 完形	① 12.8 ② 5.8 ④ 3.6	①細砂粒 ②還元焰やや酸化焰 ぎみ ③浅黄色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。	
第69図2 P L. 106	須恵器 椀	床 口縁部の一 部を欠	① 15.0 ②6.9③7.3 ④ 6.2	①粗砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。 高台は貼付。	
第69図3 P L. 106	灰釉陶器 椀	埋没土 口縁部片	① 16.6	①緻密 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向不明。施釉方法は刷毛塗り か？釉調はやや透明感のある緑灰色。	
第69図4 P L. 106	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴 部片	① 12.6	①細砂粒 ②酸化焰 ③明赤褐色	「コ」の字状口縁甕。口縁部から頸部は横ナデ。 外面胴部はへら削り、内面はへらナデ。	
第69図5 P L. 106	土師器 甕	床 口縁部～胴 部片	① 20.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	「コ」の字状口縁甕。頸部に輪積痕が残る。口縁 部から頸部は横ナデ。外面胴部は左方向へラ削り、 内面はへらナデ。	
第69図6 P L. 106	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴 部片	① 21.8	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	「コ」の字状口縁甕。頸部に輪積痕が残る。口縁 部から頸部は横ナデ。外面胴部は左方向へラ削り、 内面はへらナデ。	
第69図7 P L. 106	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴 部片	① 20.2	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	「コ」の字状口縁甕。頸部に輪積痕が残る。口縁 部から頸部は横ナデ。外面胴部は左方向へラ削り、 内面はへらナデ。	
第69図8 P L. 106	土師器 甕	カマド 口縁部～胴 部片	① 20.6	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	「コ」の字状口縁甕。頸部に輪積痕が残る。口縁 部から頸部は横ナデ。外面胴部は上位左方向へラ 削り、中位は縦方向へラ削り、内面はへらナデ。	

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第69図9 P L. 106	土錘	床 完形	21.5 g	①細砂粒 ②酸化焰 ③赤褐色	外面ヘラ削り。	
第69図10 P L. 106	砥石	埋没土 破片	(29.9 g)	砥沢石	4面に擦痕。	
第69図11 P L. 106	鉄釘	埋没土				
第69図12 P L. 106	鉄釘	埋没土				
第69図13 P L. 106	鉄釘	埋没土				
第69図14 P L. 106	鉄釘	埋没土				
第69図15 P L. 106	鉄釘	埋没土				

21号住居跡

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第71図1 P L. 107	須恵器 杯	埋没土 小片	① 12.6 ② 9.0 ④ 3.6	①微砂粒(黒色鈹物 粒) ②還元焰 ③褐色	ロクロ整形、回転方向不明。底部は回転ヘラ削り。	
第71図2 P L. 107	須恵器 杯	埋没土 小片	② 10.0	①粗砂粒 ②還元焰軟質 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向不明。底部は回転ヘラ削り。 高台は貼付。	
第71図3 P L. 107	須恵器 碗	埋没土 小片	① 18.4 ② 14.0 ④ 7.1	①微砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向不明。高台は貼付。	
第71図4 P L. 107	土師器 甕	埋没土 口縁部片	① 22.4	①細砂粒 ②酸化焰 ③褐色	口縁部は横ナデ。外面胴部は横方向ヘラ削り、内 面はヘラナデ。	

22号住居跡

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第74図1 P L. 107	須恵器 杯	掘り方 完形	① 11.2 ② 5.3 ④ 3.5	①細砂粒(含雲母) ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向左回り。底部は回転糸切り。	
第74図2 P L. 107	須恵器 杯	カマド 口縁部片	① 13.6	①細砂粒 ②還元焰 ③褐色	ロクロ整形、回転方向不明。	
第74図3 P L. 107	須恵器 碗	カマド 1/2	① 15.8 ② 8.6	①細砂粒 ②還元焰やや酸化焰 ③橙色	ロクロ整形、回転方向左回りか？底部は回転糸切 り。	
第74図4 P L. 107	土師器 台付甕	カマド 口縁部～胴 部1/2	① 13.6 ② 5.8	①粗砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部は横ナデ。外面胴部は上半が左方向ヘラ削 り、内面は横方向ハケ目(一単位11条)。底部は脚 部との接合のためナデ。	
第74図5 P L. 107	土師器 甕	カマド 口縁部～胴 部中位	① 23.4	①粗砂粒 ②酸化焰 ③褐色	口縁部は横ナデ、外面胴部は上位が斜め方向と横 方向ヘラ削り、中位は縦方向ヘラ削り。内面は横 方向ハケ目。	
第74図6 P L. 107	礫	カマド 一部欠	(2,161 g)	粗粒安山岩	カマド構築材。	
第74図7 P L. 107	棒状礫	貯穴 完形	572 g	粗粒安山岩		
第74図8 P L. 107	棒状礫	床 完形	712 g	粗粒安山岩		
第74図9 P L. 107	鉄製品 刀子	埋没土 茎部				

23号住居跡

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第77図1 P.L. 107	土師器 杯	南壁 口縁部の一 部を欠	① 11.8 ② 9.4 ④ 3.2	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部は上位から中位が横ナデ、下位は無調整。 底部はヘラ削り。	
第77図2 P.L. 107	土師器 杯	埋没土 1/2	① 13.5 ② 9.4 ④ 3.2	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	口縁部は上半が横ナデ、下半は無調整。底部はヘ ラ削り。内面口縁部は放射状暗文。	
第77図3 P.L. 107	土師器 杯	柱穴 口縁部の一 部を欠	① 13.5 ② 10.2 ③ 4.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部は上半が横ナデ、下半が左方向ヘラ削り。 底部はヘラ削り。内面は口縁部に放射状、底部に 螺旋暗文が施されている。	
第77図4 P.L. 107	須恵器 蓋	埋没土 1/2	① 18.0	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。摘は欠落。口縁部 は折り曲げ。天井部は摘周辺に回転ヘラ削り。	
第77図5 P.L. 107	須恵器 杯	埋没土 口縁部の一 部を欠	① 12.6 ② 6.4 ④ 3.5	①細砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。 底部に「田」の墨書。	
第77図6 P.L. 107	須恵器 杯	床 3/4	① 13.4 ② 7.2 ④ 3.8	①細砂粒 ②還元焰軟質 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。	
第77図7 P.L. 107	須恵器 杯	埋没土 1/2	① 13.2 ② 7.8 ④ 3.7	①細砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。	
第77図8 P.L. 107	須恵器 杯	南壁 口縁部の一 部を欠	① 13.2 ② 7.0 ④ 3.9	①細砂粒 ②還元焰 ③灰黄褐色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。	
第77図9 P.L. 107	須恵器 杯	床 1/2	① 13.2 ② 7.8 ④ 3.7	①細砂粒 ②還元焰 ③灰黄褐色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。	
第77図10 P.L. 107	須恵器 長頸壺	埋没土 口縁部片	① 12.2	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向不明。口唇部は上下に引き 出されている。	
第77図11 P.L. 108	土師器 甕	カマド 口縁部～胴 部上位	① 19.6	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい褐色	「コ」の字状口縁甕。口縁部から頸部は横ナデ。 外面胴部はヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第78図12 P.L. 108	土師器 甕	南壁 口縁部～胴 部上位	① 22.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	「コ」の字状口縁甕。口唇部に凹線が巡る。口縁 部から頸部は横ナデ外面胴部はヘラ削り、内面は ヘラナデ。	
第78図13 P.L. 108	土師器 甕	東壁 口縁部～胴 部中位	① 19.2	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	「コ」の字状口縁甕。口縁部から頸部は横ナデ。 外面胴部は上が左方向、中位が斜め方向ヘラ削り。 内面胴部はヘラナデ。	
第78図14 P.L. 108	土師器 甕	カマド 口縁部～胴 部中位	① 20.6	①細砂粒 ②酸化焰 ③明赤褐色	「コ」の字状口縁甕。頸部に輪積痕が残る。口縁 部から頸部は横ナデ。外面胴部は上位が左方向、 中位が縦方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第78図15 P.L. 108	須恵器 椀	床 底部	② 7.0 ③ 7.2	①微砂粒 ②還元焰 ③黄灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転ヘラ切 り後高台を貼付。内面の底部周辺部は擦り磨かれ ている、体部には自然釉が付着。	
第78図16 P.L. 108	砥石	西壁 破片	(43.6g)	砥沢石		
第78図17 P.L. 108	砥石	西壁	1,480g	粗粒安山岩		
第78図18 P.L. 108	棒状礫	埋没土 完形	421g	粗粒安山岩		
第78図19 P.L. 108	棒状礫	南壁 完形	440g	粗粒安山岩		
第78図20 P.L. 108	棒状礫	南壁 完形	396g	粗粒安山岩		
第78図21 P.L. 108	棒状礫	埋没土 完形	663g	粗粒安山岩		
第79図22 P.L. 108	砥石	埋没土 完形	2,614g	粗粒安山岩		

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 器 類 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第78図23 P.L. 108	鉄製品 刀子か	埋没土				

24号住居跡

挿図番号 図版番号	種 器 類 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第82図1 P.L. 108	土師器 杯	埋没土 1/2	① 11.4 ② 9.1 ④ 3.1	①微砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整で指頭痕が残る。底部はヘラ削り。	
第82図2 P.L. 108	土師器 杯	南壁 1/3	① 11.4 ② 9.0 ④ 3.2	①微砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整で指頭痕が残る。底部はヘラ削り。	
第82図3 P.L. 108	土師器 杯	埋没土 1/4	① 12.0 ② 9.0 ④ 2.6	①微砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整で指頭痕が残る。底部はヘラ削り。	
第82図4 P.L. 108	土師器 杯	床 完形	① 12.6 ② 9.3 ④ 2.9	①微砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整で指頭痕が残る。底部はヘラ削り。口縁部の一部に煤の付着が見られる。	
第82図5 P.L. 108	土師器 杯	南壁 3/4	① 12.7 ② 10.4 ④ 2.8	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。	
第82図6 P.L. 108	土師器 杯	南壁 3/4	① 12.8 ② 10.2 ④ 2.8	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。	
第82図7 P.L. 108	土師器 杯	南壁 1/2	① 13.4 ② 8.0 ④ 3.9	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は左方向ヘラ削りが施されているが横ナデとの間に僅かに無調整部分が残る。底部はヘラ削り。	
第82図8 P.L. 108	土師器 杯	埋没土 1/5	① 15.0 ② 9.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整か？底部はヘラ削り。	
第83図9 P.L. 108	土師器 杯	埋没土 1/4	① 13.8 ④ 3.4	①細砂粒 ②酸化焰 ③明赤褐色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。	
第83図10 P.L. 108	土師器 杯か	埋没土 底部片		①細砂粒 ②酸化焰 ③明赤褐色	底部に墨書。判読不明。	
第83図11 P.L. 108	須恵器 杯蓋	埋没土 口唇部の大部分を欠	① 13.6 ⑤ 4.0 ④ 3.7	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。口唇部は折り曲げ。摘は輪状で貼付。天井部摘周辺は回転ヘラ削り。天井部内面は研磨が施されている。	転用硯
第83図12 P.L. 108	須恵器 杯	埋没土 3/4	① 10.8 ② 6.4 ④ 4.1	①粗砂粒(黒色鉄物粒) ②還元焰軟質 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転ヘラ切り無調整。	
第83図13 P.L. 108	須恵器 杯	南壁 3/4	① 11.0 ② 6.4 ④ 4.1	①細砂粒(黒色鉄物粒) ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転ヘラ切り無調整。	
第83図14 P.L. 108	須恵器 杯	埋没土 1/2	① 11.8 ② 6.4 ④ 3.6	①粗砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は糸切り後回転ヘラ削り。内外面に火禿痕が見られる。	
第83図15 P.L. 108	須恵器 杯	南壁 3/4	① 12.8 ② 7.4 ④ 4.3	①粗砂粒 ②還元焰 ③にぶい黄橙色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り後回転ヘラ削り。	
第83図16 P.L. 109	須恵器 杯	床 口縁部の一部を欠	① 12.3 ② 7.3 ④ 3.6	①粗砂粒(赤色鉄物粒) ②酸化焰 ③橙色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。	
第83図17 P.L. 109	須恵器 短頸壺蓋	南壁 口縁部の一部を欠	① 11.5 ⑤ 3.7 ④ 3.9	①粗砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。摘は輪状で貼付。天井部は回転ヘラ削り。	
第83図18 P.L. 109	須恵器 長頸瓶	埋没土 口縁部～頸部		①粗砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向不明。頸部に胴部との接合痕が見られる。	

挿図番号 図版番号	種 類	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第83図19 P L. 109	須恵器 長頸瓶	埋没土 胴部中位～ 底部片	② 8.3 ③ 8.4	①細砂粒(黒色鉱物 粒) ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向不明。底部切り放し技法は 高台貼付時のナデのため不明。	
第83図20 P L. 109	須恵器 長頸瓶	床 胴部下位～ 底部片	② 10.2 ③ 11.4	①細砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向不明。底部切り放し技法は 高台貼付時のナデのため不明。内面底部に漆付着。	
第83図21 P L. 109	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴 部上位片	① 19.0	①微砂粒 ②酸化焰 ③明赤褐色	頸部に輪積痕が残る。口縁部は横ナデ、外面胴部 は横方向へら削り、内面はへらナデ。	
第83図22 P L. 109	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴 部上位片	① 22.8	①微砂粒 ②酸化焰 ③明赤褐色	頸部に輪積痕が残る。口縁部は横ナデ、外面胴部 は横方向へら削り、内面はへらナデ。	
第83図23 P L. 109	土師器 甕	床 口縁部～胴 部上位片	① 19.0	①微砂粒 ②酸化焰 ③明赤褐色	頸部に輪積痕が残る。口縁部は横ナデ、外面胴部 は横方向へら削り、内面はへらナデ。	
第84図24 P L. 109	砥石	床 破片	(319 g)	粗粒安山岩		
第84図25 P L. 109	棒状礫	床 完形	359 g	珪質変質岩		
第84図26 P L. 109	棒状礫	床 完形	341 g	粗粒安山岩		
第84図27 P L. 109	棒状礫	床 完形	336 g	石英斑岩		
第84図28 P L. 109	棒状礫	床 完形	357 g	粗粒安山岩		
第84図29 P L. 109	棒状礫	床 完形	432 g	粗粒安山岩		
第84図30 P L. 109	棒状礫	床 完形	480 g	粗粒安山岩		擦痕あり
第84図31 P L. 109	棒状礫	床 完形	498 g	溶結凝灰岩		磨痕あり
第84図32 P L. 109	棒状礫	床 破片	(307 g)	ホルンフェルス		
第84図33 P L. 109	棒状礫	床 完形	630 g	変質玄武岩		
第84図34 P L. 109	棒状礫	床 完形	353 g	粗粒安山岩		
第84図35 P L. 109	棒状礫	床 完形	925 g	粗粒安山岩		打痕あり
第84図36 P L. 109	円礫	北壁 一部欠	(1,014 g)	粗粒安山岩		擦痕あり
第84図37 P L. 109	軽石製品	床 破片	(398 g)	二ツ岳軽石		擦痕あり
第84図38 P L. 109	鉄製品 鎌	掘り方				
第84図39 P L. 109	鉄製品	埋没土			器種不明。	

25号住居跡

挿図番号 図版番号	種 類	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第86図1 P L. 110	黒色土器 杯	埋没土 1/4	① 12.6 ② 7.2 ④ 4.0	①粗砂粒(含石英) ②酸化焰内面黒色処 理 ③にぶい橙色	ロクロ整形、回転方向不明。外面底部は回転へら 削り。内面は全面的にへら研磨。	
第86図2 P L. 110	須恵器 椀	埋没土 1/4	① 14.5 ② 6.8 ④ 5.2	①細砂粒 ②還元焰軟質 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向不鮮明であるが左回りか？ 底部切り放し技法は摩滅のため不明。高台は貼付。	
第86図3 P L. 110	須恵器 甕	床 胴部～底部 片	② 15.0	①粗砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形か？回転方向不明。外面胴部は平行叩、 内面はへらナデと指ナデ。底部外面は無調整、内 面は回転へらナデ。	

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第86図4 P L. 110	土師器 台付甕	床 口縁部～胴 部中位片	① 11.8	①細砂粒(含雲母) ②酸化焰 ③にぶい橙色	頸部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、 外面胴部は上位が左方向、中位が斜め方向のヘラ 削り、内面は上位が刷毛目、中位がヘラナデ。	
第86図5 P L. 110	土師器 甕	カマド 胴部下位～ 底部片	② 3.3	①細砂粒(含雲母) ②酸化焰 ③橙色	「コ」の字状口縁甕。外面胴部は縦方向ヘラ削り、 内面はヘラナデ。底部はヘラ削り。	
第86図6 P L. 110	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴 部中位	① 17.4	①粗砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は上位が左方 向ヘラ削り、中位は縦方向ヘラ削り。内面はヘラ ナデ。	
第86図7 P L. 110	礫	壁 完形	478 g	粗粒安山岩		擦痕あり

26号住居跡

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第87図1 P L. 110	須恵器 杯蓋	埋没土 天井部片	⑤ 3.0	①細砂粒 ②還元焰やや酸化焰 ぎみ③にぶい黄橙色	ロクロ整形、回転方向不明。摘は擬宝珠形で貼付。 天井部摘周辺は回転ヘラ削り。	
第87図2 P L. 110	須恵器 杯	カマド 完形	① 12.8 ② 6.0 ④ 4.7	①粗砂粒 ②還元焰 ③にぶい黄橙色	ロクロ整形、回転方向左回り。底部は回転糸切り。	
第87図3 P L. 110	須恵器 椀	口縁部の一 部を欠	① 13.1 ② 7.4 ③ 8.0	①細砂粒 ②還元焰 ③黄灰色	ロクロ整形、回転方向左回り。底部は回転糸切り。 高台は貼付。	
第87図4 P L. 110	鉄製品 紡錘車	埋没土			軸部と輪部一部残存。	

27号住居跡

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第90図1 P L. 110	土師器 杯	カマド 口縁部の一 部を欠	① 10.2 ④ 3.9	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ 削り。	
第90図2 P L. 110	土師器 杯	埋没土 完形	① 11.2 ④ 3.3	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ 削り。	
第90図3 P L. 110	土師器 杯	埋没土 1/2	① 11.4	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ 削り。	
第90図4 P L. 110	土師器 杯	埋没土 1/2	① 11.4 ④ 3.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ 削り。	
第91図5 P L. 110	土師器 杯	埋没土 3/4	① 11.4 ④ 3.3	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ 削り。	
第91図6 P L. 110	土師器 杯	埋没土 完形	① 11.7 ④ 3.7	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ 削り。	
第91図7 P L. 110	土師器 杯	埋没土 口縁部の一 部を欠	① 12.8 ④ 3.8	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ 削り。	
第91図8 P L. 110	土師器 杯	埋没土 3/4	① 14.6 ④ 4.1	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ 削り。	
第91図9 P L. 110	土師器 杯	埋没土 1/2	① 15.8 ④ 4.5	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ 削り。	
第91図10 P L. 110	土師器 杯	埋没土 1/4	① 16.5	①細砂粒 ②酸化焰 ③明赤褐色	口縁部は横ナデ。底部はヘラ削り。	

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第91図11 P.L. 110	土師器 杯	埋没土 1/4	① 16.8 ④ 5.7	①細砂粒 ②酸化焙 ③橙色	口縁部は横ナデ。底部はヘラ削り。	
第91図12 P.L. 110	土師器 杯	埋没土 1/3	① 15.0 ④ 4.2	①細砂粒 ②酸化焙 ③橙色	口縁部は横ナデ。底部はヘラ削り。口縁部下に一部無調整部分が見られる。	
第91図13 P.L. 110	土師器 杯	埋没土 1/3	① 14.8 ④ 3.5	①細砂粒 ②酸化焙 ③橙色	口縁部は横ナデ。底部はヘラ削り。口縁部下に一部無調整部分が見られる。	
第91図14 P.L. 110	土師器 杯	埋没土 1/3	① 19.6 ④ 6.8	①細砂粒 ②酸化焙 ③橙色	口縁部は横ナデ。底部はヘラ削り。口縁部下に僅かに無調整部分が見られる。内面口縁部は横ナデ、底部はヘラナデ部分が見られる。	
第91図15 P.L. 110	須恵器 杯蓋	カマド 1/4	④ 1.6	①粗砂粒(φ5mmの角) ②還元焙 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向不明。天井部筒周辺部は回転ヘラ削り。	
第91図16 P.L. 110	須恵器 杯	埋没土 1/8	① 14.0	①粗砂粒 ②還元焙 ③にぶい黄橙色	ロクロ整形、回転方向不明。底部は回転ヘラ削り。	
第91図17 P.L. 111	土師器 甕	カマド 完形	① 18.8 ② 5.2 ④ 25.9	①粗砂粒 ②酸化焙 ③明赤褐色	口縁部は横ナデ。外面胴部は上・中位が頸部に向けてのヘラ削り、下位が横方向ヘラ削り。内面はヘラナデ。底部はヘラ削りか？	
第92図18 P.L. 111	土師器 甕	カマド 口縁部～胴部上位片	① 23.4	①細砂粒 ②酸化焙 ③橙色	口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は斜め方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第92図19 P.L. 111	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴部中位片	① 24.0	①細砂粒 ②酸化焙 ③明赤褐色	口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は斜め方向、中位は縦方向ヘラ削り。内面はヘラナデ。	
第92図20 P.L. 111	土師器 甕	床 口縁部～胴部上位片	① 25.8	①細砂粒 ②酸化焙 ③橙色	口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は斜め方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第92図21 P.L. 111	土師器 甕	埋没土 1/4	① 17.2	①細砂粒 ②酸化焙 ③橙色	口縁部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は上半が左方向、下半が斜め方向ヘラ削り。内面はヘラナデ。	
第92図22 P.L. 111	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴部上位片	① 22.0	①細砂粒 ②酸化焙 ③橙色	口縁部に輪積痕が残る。口縁部は横ナデ。外面胴部は左方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第92図23 P.L. 111	円礫	カマド 完形	2,682 g	石英閃緑岩		
第92図24 P.L. 111	棒状礫	埋没土 完形	82 g	粗粒安山岩		
第92図25 P.L. 111	円礫	埋没土 完形	316 g	粗粒安山岩		
第92図26 P.L. 111	棒状礫	埋没土 完形	223 g	珪質頁岩		打痕 擦痕あり
第92図27 P.L. 111	棒状礫	床 完形	230 g	粗粒安山岩		
第92図28 P.L. 111	鉄製品	西壁 破片			器種不明。	

28号住居跡

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第95図1 P.L. 111	土師器 杯	床 完形	① 10.3 ④ 3.1	①細砂粒 ②酸化焙 ③橙色	口縁部上半は横ナデ。底部はヘラ削り。口縁部下 半から底部ヘラ削りの間は無調整部分が見られ る。	
第95図2 P.L. 111	土師器 杯	床 1/3	① 10.6 ④ 3.4	①細砂粒 ②酸化焙 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ 削り。	
第95図3 P.L. 111	土師器 杯	貯穴 1/2	① 12.2 ④ 3.5	①細砂粒 ②酸化焙 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ 削り。	

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第95図4 P.L. 111	土師器 杯	貯穴 ¼	① 16.6	①細砂粒(赤色鉱物 粒) ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。	
第95図5 P.L. 111	須恵器 杯	貯穴 ¼	① 13.3 ② 7.2 ④ 4.4	①粗砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向不明。底部は回転ヘラ削り。	
第95図6 P.L. 111	土師器 甕	カマド 口縁部～胴 部中位	① 22.0	①粗砂粒(赤色鉱物 粒) ②酸化焰 ③明赤褐色	口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は底部から頸 部に向けてのヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第95図7 P.L. 112	円礫	床 完形	1,144 g	粗粒安山岩		擦痕あり
第95図8 P.L. 112	棒状礫	床 完形	484 g	黒色頁岩		
第95図9 P.L. 112	棒状礫	掘り方 完形	317 g	黒色頁岩		
第95図10 P.L. 112	棒状礫	周溝 完形	221 g	玢岩		
第95図11 P.L. 112	棒状礫	周溝 完形	294 g	粗粒安山岩		

29号住居跡

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第98図1 P.L. 112	土師器 杯	埋没土 ¼	① 12.0 ④ 3.1	①細砂粒(赤色鉱物 粒) ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ 削り。底部に「才」の墨書。	
第98図2 P.L. 112	土師器 杯	埋没土 ½	① 12.9 ④ 3.4	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ 削り。内面見込み部に指頭痕が見られる。	
第98図3 P.L. 112	土師器 杯	床 完形	① 13.0 ④ 3.7	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ 削り。	
第98図4 P.L. 112	土師器 杯	埋没土 ¼	① 14.8 ④ 3.3	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ 削り。	
第98図5 P.L. 112	須恵器 杯	南西壁 ¼	① 13.4 ② 8.2 ④ 3.8	①細砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向不明。底部は回転ヘラ削り。	
第98図6 P.L. 112	須恵器 杯	埋没土 ½	① 13.6 ② 8.0 ④ 4.0	①粗砂粒(黒色鉱物 粒) ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転ヘラ削 り、体部最下部の一部にもヘラ削りが見られる。	
第98図7 P.L. 112	土師器 甕	カマド 口縁部～胴 部中位	① 20.8	①粗砂粒(赤色鉱物 粒) ②酸化焰 ③橙色	口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は左、斜め方 向ヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第98図8 P.L. 112	円礫	埋没土	185 g	粗粒安山岩		擦痕あり
第98図9 P.L. 112	鉄製品 刀子	埋没土 両端部欠損				
第98図10 P.L. 112	鉄製品	埋没土 破片			器種不明。	

30号住居跡

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第100図1 P.L. 112	土師器 甕	貯穴 完形	① 11.8 ④ 3.2	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ 削り。内面底部中央に煤が付着。	
第100図2 P.L. 112	土師器 杯	貯穴 ¼	① 17.8	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部上半は横ナデ。口縁部下半から底部はヘラ 削り。口縁部横ナデとヘラ削りの間に僅かに無調 整部分が見られる。内面に煤が付着。	

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第100図3 P L. 112	須恵器 杯蓋	埋没土 口縁部片	① 13.6	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向不明。口縁部は折り曲げ。 天井部中央部は回転ヘラ削り。	
第100図4 P L. 112	須恵器 杯	埋没土 口縁部～底 部小片	① 9.8 ② 5.8	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向不明。底部は回転ヘラ削り。	
第100図5 P L. 112	須恵器 瓶	埋没土 口縁部～胴 部小片	① 8.1	①微砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向不明。内面に煤が付着。	
第100図6 P L. 112	砥石	埋没土 破片	(168.8g)	粗粒安山岩	片面に多数の擦痕あり。	

31号住居跡

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第102図1 P L. 112	須恵器 杯	カマド 1/3	① 12.4 ② 6.5 ④ 4.4	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	ロクロ整形、回転方向左回りか？底部は回転糸切り。	
第102図2 P L. 113	須恵器 椀	貯穴 完形	① 13.4 ②8.0③7.9 ④ 5.5	①細砂粒 ②還元焰燻焼成 ③にぶい黄橙色	ロクロ整形、回転方向左回り。底部は回転糸切り。 高台は貼付。外面口縁部に「壺」の墨書。	
第102図3 P L. 112	須恵器 椀	カマド 体部～底部	② 7.5 ③ 7.6	①細砂粒 ②還元焰 ③浅黄色	ロクロ整形、回転方向左回り。底部は回転糸切り。 高台は貼付。	
第102図4 P L. 113	土師器 甕	カマド 口縁部～胴 部中位片	① 17.6	①粗砂粒 ②酸化焰 ③灰褐色	胴部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ。 外面胴部は上位が右方向、中位が縦方向ヘラ削り。 内面はヘラナデ。	
第102図5 P L. 113	土師器 甕	カマド 口縁部～胴 部下位片	① 16.6	①粗砂粒(赤色鉱物 粒) ②酸化焰 ③橙色	口縁部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ。 外面胴部は上位が左方向、中位から下位が縦方向 ヘラ削り。内面はヘラナデ。	
第102図6 P L. 112	土師器 甕	床 口縁部～胴 部上位片	① 19.6	①粗砂粒 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	口縁部と頸部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は 横ナデ、頸部中程に無調整部分が見られる。外面 胴部は右方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第102図7 P L. 112	須恵器 羽釜	カマド 口縁部～鏝 部片	① 24.4	①粗砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向不明。鏝は小型の断面三角 形で貼付。	
第102図8 P L. 113	須恵器 甕	床 底部片	⑥ 18.2	①粗砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向不明。脚部中央に指頭痕が 見られる。	
第102図9 P L. 113	鉄製品 刀子	埋没土 破片			柄部に木質が残存する。	

32号住居跡

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第104図1 P L. 113	須恵器 杯	床 ほぼ完形	① 12.4 ② 6.1 ④ 4.0	①粗砂粒 ②還元焰 ③灰オリーブ色	ロクロ整形、回転方向左回り。底部は回転糸切り。	
第104図2 P L. 113	須恵器 杯	埋没土 1/4	① 13.4 ② 7.4 ④ 3.8	①粗砂粒(黒色鉱物 粒) ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回りか？底部は回転ヘラ 削り。	
第104図3 P L. 113	須恵器 椀	埋没土 完形	① 13.4 ②8.0③8.3 ④ 5.3	①粗砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向左回り。底部は回転糸切り。 高台は貼付。	
第104図4 P L. 113	須恵器 椀	床 1/2	① 13.4 ② 5.2	①細砂粒 ②還元焰 ③灰黄色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。 高台は剝落。	
第104図5 P L. 113	須恵器 椀	埋没土 底部片	② 7.8	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	ロクロ整形、回転方向不明。底部は回転糸切り。 高台は貼付。	

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第104図6 P L. 113	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴 部中位片	① 22.4	①粗砂粒 ②酸化焰 ③浅黄色	口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は縦方向ヘラ 削り、内面はヘラナデ。	
第104図7 P L. 113	鉄製品 鉄鏃	埋没土			鉄鏃の基部片。	
第104図8 P L. 113	鉄製品 刀子	埋没土			刀子の先端部片。	

33号住居跡

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第106図1 P L. 113	土師器 杯	床 1/4	① 11.4 ② 6.8 ④ 3.4	①粗砂粒(含雲母) ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ 削り。	
第106図2 P L. 113	土師器 杯	埋没土 1/4	① 12.2 ② 8.2 ④ 2.8	①微砂粒 ②酸化焰 ③にぶい褐色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整で指頭痕が見 られる。底部はヘラ削り。	
第106図3 P L. 113	黒色土器 杯	床 3/4	① 13.6 ② 6.2 ③ 4.6	①粗砂粒(赤色鉱物 粒) ②酸化焰内面黒 色処理③にぶい橙色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。 内面は口縁部、底部ともヘラ研磨。	
第106図4 P L. 113	黒色土器 皿	床 高台を欠	① 13.0 ② 6.0	①粗砂粒(φ5mmの礫) ②酸化焰黒色処理 ③淡黄色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。 高台は剥落。焼成時は黒色処理が施されていたが 一部2次焼成を受けて吸炭が剥離している。	
第107図5 P L. 113	須恵器 杯	床 1/2	① 11.8 ② 6.0 ④ 4.2	①粗砂粒(黒色鉱物 粒) ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。	
第107図6 P L. 113	須恵器 杯	埋没土 1/4	① 12.4 ② 6.2 ④ 3.9	①粗砂粒 ②還元焰 ③褐色	ロクロ整形、回転方向右回りか?底部は回転糸切 り。	
第107図7 P L. 113	須恵器 杯	埋没土 1/4	① 13.1 ② 6.8 ④ 4.1	①粗砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回りか?底部は回転糸切 り。	
第107図8 P L. 113	須恵器 杯	埋没土 1/4	① 12.8 ② 5.8 ④ 3.8	①粗砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回りか?底部は回転糸切 り。	
第107図9 P L. 113	須恵器 杯	床 1/4	① 12.8 ② 6.4 ④ 3.8	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	ロクロ整形、回転方向右回りか?底部は回転糸切 り。	
第107図10 P L. 113	須恵器 杯	埋没土 1/2	① 12.8 ② 5.8 ④ 3.6	①細砂粒 ②酸化焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回りか?底部は回転糸切 り。	
第107図11 P L. 113	須恵器 杯	埋没土 1/4	①11.8～ 13.7 ② 6.6 ④ 4.5	①細砂粒(赤色鉱物) ②酸化焰 ③にぶい橙色	ロクロ整形、回転方向右回り。焼成時の歪み大。 底部は回転糸切り。	
第107図12 P L. 114	須恵器 椀	床 完形	① 13.3 ②6.4③6.4 ④ 5.4	①細砂粒 ②還元焰燻焼成 ③にぶい黄橙色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。 高台は貼付。内面底部に「十三」の線刻。	
第107図13 P L. 113	須恵器 椀	床 1/4	① 13.4	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向不明。	
第107図14 P L. 114	須恵器 皿	埋没土 1/2	① 13.0 ②5.6③6.1 ④ 3.6	①細砂粒 ②酸化焰 ③浅黄色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。 高台は貼付、高台周辺は貼付時のナデ。	
第107図15 P L. 114	灰釉陶器 椀	埋没土 口縁部小片	① 13.8	①緻密 ②還元焰堅緻 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向不明。内外面に施釉されて いる。釉調は不透明な灰色。	
第107図16 P L. 114	灰釉陶器 椀	埋没土 口縁部小片	① 14.0	①緻密 ②還元焰堅緻 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向不明。施釉方法は刷毛塗り か?釉調は透明感があり、やや緑色を帯びた灰色。	

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第107図17 P L. 114	灰釉陶器 長頸瓶	埋没土 頸部～胴部 小片		①緻密 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向不明。釉調は不透明な緑灰色。	
第107図18 P L. 114	須恵器 長頸瓶	埋没土 胴部下半片	② 12.4 ③ 12.8	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向不明。胴部下位に輪積痕が残る。外面胴部下位は回転ヘラ削り。外面胴部、内面底部に自然釉付着。	
第107図19 P L. 114	須恵器 甕	床 口縁部片	① 21.4	①粗砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、口唇部に凸帯が1条巡る。	
第107図20 P L. 114	須恵器 甕	床 口縁部片	① 47.4	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、口唇部は上下に引き出されている。内外面に自然釉が付着。	
第108図21 P L. 114	須恵器 甕	床 胴部下位～ 底部	② 16.2	①粗砂粒 ②還元焰 ③灰白色	外面胴部は平行叩、内面は同心円状あて具痕が見られる。	
第108図22 P L. 114	土師器 台付甕	埋没土 口縁部～胴 部上位	① 11.4	①微砂粒 ②酸化焰 ③にぶい赤褐色	口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は左方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第108図23 P L. 114	土師器 台付甕	埋没土 1/3	① 12.0 ②4.0③8.2 ④ 14.0	①微砂粒(赤色鉱物 粒) ②酸化焰 ③にぶい赤褐色	「コ」の字状口縁甕。口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は上位が横方向、中位・下位が縦方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。脚部は横ナデ。	
第108図24 P L. 114	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴 部上位	① 17.6	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	「コ」の字状口縁甕。口縁部から頸部は横ナデ、外面胴部は横方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第108図25 P L. 114	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴 部上位	① 19.8	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	「コ」の字状口縁甕。口縁部から頸部は横ナデ、外面胴部は横方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第108図26 P L. 114	棒状礫	埋没土 端部欠	(1,049 g)	石英閃緑岩		
第108図27 P L. 114	砥石	埋没土 ほぼ完形	4,485 g	角閃石安山岩	円礫上面に使用痕が残る。	
第108図28 P L. 114	偏平礫	埋没土 一部欠	2,227 g	角閃石安山岩	上面に打痕状の使用痕がみられる。	
第108図29	円礫	埋没土	731 g	粗粒安山岩	擦痕、打痕がみられる。	
第109図30 P L. 114	紡錘車	床 完形	52.4 g	蛇紋岩	全面に製作に伴う擦痕が残る。	
第109図31 P L. 114	偏平礫	埋没土 完形	2.8 g	石英	全面が磨かれた碁石状の礫。	
第109図32 P L. 114	鉄製品 刀子	埋没土 一部欠			先端部を一部欠損するが、ほぼ完形の刀子。	
第109図33 P L. 115	鉄製品 刀子	床 破片			刀子の茎部片。	
第109図34 P L. 115	鉄製品 刀子	埋没土 破片			刀子の茎部片。止金具が残存する。	
第109図35 P L. 115	鉄製品 刀子	埋没土 破片			刀子の茎部片。	
第109図36 P L. 115	鉄製品 刀子	床 破片			刀子の茎部で木質が残存する。	
第109図37 P L. 115	鉄製品 刀子	埋没土 破片				
第109図38 P L. 115	鉄製品 刀子	埋没土			刀子の止金具。	
第109図39 P L. 115	鉄釘	床 一部欠			孤状に湾曲して出土。	
第109図40 P L. 115	鉄釘	埋没土 釘頭部				
第109図41 P L. 115	鉄釘	埋没土 釘先端部				
第109図42 P L. 115	鉄釘	埋没土 両端欠損				

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第109図43 P L. 115	鉄釘	床 釘先端部				
第109図44 P L. 115	鉄製品	埋没土 破片			器種不明。	

34号住居跡

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第111図1 P L. 115	土師器 杯	周溝 完形	① 11.9 ② 10.0 ④ 3.4	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。	
第111図2 P L. 115	須恵器 高杯	床 底部～脚部 上位片		①微砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回りか？	

35号住居跡

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第113図1 P L. 115	土師器 杯	床 完形	① 10.5 ④ 3.5	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。口縁部下に弱い稜をもち、稜下に無調整部分が僅かに残る。	
第113図2 P L. 115	土師器 杯	南壁 1/2	① 10.6 ④ 3.5	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。口縁部下に稜をもつ。	
第113図3 P L. 115	土師器 杯	床 完形	① 11.0 ④ 3.4	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。口縁部下に稜をもち、稜線上や稜下に極僅かに無調整が残る。	
第113図4 P L. 115	土師器 杯	南壁 完形	① 10.4 ④ 3.6	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。口縁部横ナデと底部ヘラ削りの間に僅かに無調整部分が残る。	
第113図5 P L. 115	土師器 杯	カマド 完形	① 10.8 ④ 4.2	①粗砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部は幅が狭く横ナデ。底部はヘラ削り。	
第113図6 P L. 115	土師器 杯	南壁 完形	① 11.0 ④ 3.0	①粗砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。口縁部横ナデと底部ヘラ削りの間に極僅かに無調整部分が残る。	
第114図7 P L. 115	土師器 杯	埋没土 完形	① 11.0 ④ 3.4	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。	
第114図8 P L. 115	土師器 杯	埋没土 1/3	① 11.6 ④ 3.3	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部は幅が狭く横ナデ、底部はヘラ削り。	
第114図9 P L. 115	土師器 杯	床 完形	① 12.2 ② 3.9	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。内外面の器面が荒れている。	
第114図10 P L. 115	土師器 杯	南壁 1/3	① 12.2	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。	
第114図11 P L. 115	土師器 杯	南壁 3/4	① 12.6 ④ 3.9	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。内面に漆？が付着。	
第114図12 P L. 115	土師器 杯	カマド 1/3	① 13.6 ④ 4.6	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。	
第114図13 P L. 115	土師器 杯	埋没土 1/3	① 11.2	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。	
第114図14 P L. 115	土師器 短頸壺	北壁 完形	① 9.3 最大径10.5 ④ 7.2	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部は横ナデ。外面胴部は横方向ヘラ削り。底部もヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第114図15 P.L. 115	須恵器 杯	南壁 完形	① 9.2 ② 7.4 ④ 3.6	①細砂粒(白色鉱物 粒) ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向左回り。底部は手持ちヘラ 削り。	
第114図16 P.L. 115	須恵器 広口壺	床 胴部片	最大径16.0	①細砂粒(白色鉱物 粒) ②還元焰 ③緑灰色	ロクロ整形、回転方向不明。肩部に凹線が2条巡 る。	
第114図17 P.L. 115	須恵器 広口壺	床 3/5	① 15.0 最大径21.0 ④ 20.6	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	胴部に輪積痕、頸部に口縁部の接合痕が残る。口 縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は上位がカキ目、 中位から底部は平行叩。内面は同心円状あて具痕。	
第115図18 P.L. 115	土師器 甕	カマド 1/5	① 16.3 ② 4.3 ④ 26.9	①細砂粒(含雲母) ②酸化焰 ③にぶい橙色	胴部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ。 外面胴部は上・中位が頸部へ向けて、下位が斜め のヘラ削り。内面はヘラナデ。底部もヘラ削り。	
第115図19 P.L. 116	土師器 甕	カマド 完形	① 19.0 ② 4.4 ④ 28.3	①細砂粒(含雲母) ②酸化焰 ③橙色	胴部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ。 外面胴部は上・中位が頸部へ向けて、下位が斜め のヘラ削り。内面はヘラナデ。底部もヘラ削り。	
第115図20 P.L. 116	土師器 甕	カマド ほぼ完形	① 21.7 ② 5.3 ④ 34.5	①粗砂粒 ②酸化焰 ③橙色	胴部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ。 外面胴部は上・中位が頸部へ向けてのヘラ削り。 内面はヘラナデ。底部整形は不明。	
第115図21 P.L. 116	土師器 甕	カマド 口縁部～頸 部を欠	② 3.9	①粗砂粒 ②酸化焰 ③橙色	外面胴部は上・中位が頸部に向けてのヘラ削り。 内面はヘラナデ。底部はヘラ削り。	
第116図22 P.L. 116	土師器 甕	カマド ほぼ完形	① 23.3 ② 4.4 ④ 40.3	①粗砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は頸部に向け てのヘラ削り、内面はヘラナデ。底部はヘラ削り。	
第116図23 P.L. 116	土師器 甕	カマド 胴部中位～ 底部	② 4.3	①粗砂粒 ②酸化焰 ③橙色	外面胴部は頸部へ向けてのヘラ削り、内面はヘラ ナデ。底部はヘラ削り。	
第116図24 P.L. 116	棒状礫	周溝 完形	304 g	玢岩		
第116図25 P.L. 116	棒状礫	周溝 完形	586 g	溶結凝灰岩		
第116図26 P.L. 116	棒状礫	周溝 完形	686 g	粗粒安山岩		
第116図27 P.L. 116	棒状礫	周溝 完形	733 g	玢岩	端部に打痕がみられる。	
第116図28 P.L. 116	棒状礫	床 完形	859 g	粗粒安山岩		
第116図29 P.L. 116	鉄製品 鋤	掘り方			鋤先の柄部。この先に刃部がつくとみられる。	

36号住居跡

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第118図1 P.L. 117	土師器 杯	床 1/2	① 12.2 ② 9.0 ④ 3.3	①細砂粒(含雲母) ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ 削り。	
第118図2 P.L. 117	土師器 杯	埋没土 1/4	① 13.0 ② 12.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ 削り。	
第118図3 P.L. 117	土師器 皿	床 1/3	① 14.6 ② 13.4 ④ 2.4	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。	
第118図4 P.L. 117	須恵器 杯	埋没土 2/3	① 11.8 ② 7.4 ④ 3.5	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。	
第119図5 P.L. 117	土師器 甕	床 口縁部～胴 部中位片	① 19.4	①細砂粒 ②酸化焰 ③赤褐色	口縁部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ。 外面胴部は上位が左方向、中位が縦方向へ削り、 内面はヘラナデ。	
第119図6 P.L. 117	土師器 甕	床 口縁部～胴 部上位片	① 20.8	①細砂粒 ②酸化焰 ③明赤褐色	口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は横方向へ削 り、内面はヘラナデ。	

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第119図7 P.L. 117	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴 部上位片	① 21.2	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は横方向へラ 削り、内面はへらナデ。	
第119図8 P.L. 117	土師器 甕	カマド 1/2	① 20.4 ② 5.0 ④ 30.7	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は上位が左方 向、中位から底部が頸部へのへら削り。内面はへ らナデ。底部はへら削り。	
第119図9 P.L. 117	棒状礫	床 完形	484 g	粗粒安山岩	両端部に打痕がみられる。	
第119図10 P.L. 117	砥石	床 破片	(1,017 g)	砥沢石	各面に擦痕が多数みられる。	
第119図11 P.L. 117	鉄鏃	埋没土 一部欠	(23.7 g)		茎部が長い、長三角形の鉄。	
第119図12 P.L. 117	鉄製品 刀子	北壁			刀子、柄部。止金具が残存する。	

37号住居跡

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第121図1 P.L. 117	土師器 杯	埋没土 1/4	① 11.2 ② 7.2 ④ 3.4	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はへら 削り。	
第121図2 P.L. 117	土師器 杯	床 1/4	① 11.8	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はへら 削り。	
第121図3 P.L. 117	土師器 杯	掘り方 底部小片		①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	底部外面に「丁」の刻書。	
第121図4 P.L. 117	勾玉	カマド 完形	2.1 g		つくりはていねいであるが、外面に工具による調 整痕が残る。	

38号住居跡

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第124図1 P.L. 117	土師器 杯	床 1/4	① 11.4 稜径12.6 ④ 4.6	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部下に明確な稜をもつ。口縁部は横ナデ、底 部はへら削りか？稜下に僅かに無調整部が残る。	
第124図2 P.L. 117	土師器 杯	埋没土 ほぼ完形	① 11.8 稜径13.2 ④ 4.5	①粗砂粒(赤色鋳物 粒) ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部下に明確な稜をもつ。口縁部は横ナデ、底 部はへら削り。稜下に僅かに無調整部が残る。	
第124図3 P.L. 117	土師器 杯	床 1/4	① 12.6 稜径13.2	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部下に明確な稜をもつ。口縁部は横ナデ、底 部はへら削り。	
第124図4 P.L. 117	土師器 杯	床 1/4	① 12.2 稜径10.6	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部下に明確な稜をもち、口縁部に凹線が2条 巡る。口縁部は横ナデ、底部はへら削り。	
第124図5 P.L. 118	土師器 杯	床 1/4	① 13.2 稜径11.6	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部下に明確な稜をもち、内面口唇部に凹線が 1条巡る。口縁部は横ナデ、底部はへら削り。	
第124図6 P.L. 118	土師器 杯	床 1/4	① 13.4 稜径11.6 ④ 4.2	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部下に明確な稜をもち、口縁部に凹線が2条 巡る。口縁部は横ナデ、底部はへら削り。	
第124図7 P.L. 118	土師器 杯	床 1/4	① 13.8 稜径11.4 ④ 3.6	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部下に明確な稜をもち、口縁部に凹線が2条 巡る。口縁部は横ナデ、底部はへら削り。	
第124図8 P.L. 118	土師器 杯	埋没土 1/4	① 13.8 稜径12.2 ④ 3.9	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部下に明確な稜をもち、口縁部に凹線が2条 巡る。口縁部は横ナデ、底部はへら削り。	
第124図9 P.L. 118	土師器 鉢	床 口縁部～体 部上位片	① 24.2	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部は横ナデ、体部はへら削り。	

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第124図10 P.L. 118	土師器 甗	床 ほぼ完形	① 15.8 ② 5.8 ④ 13.8 孔径 1.0	①粗砂粒(赤色鉱物 粒) ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部は横ナデ、外面胴部は最上位が左方向、その下は口縁部へ向けてのヘラ削り、内面はヘラナデ。底部に木葉痕が残る。孔は1カ所。	
第124図11 P.L. 118	土師器 甗	床 口縁部～胴 部上位片	① 14.2	①粗砂粒(赤色鉱物 粒) ②酸化焰 ③浅黄色	口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は左方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第124図12 P.L. 118	土師器 甗	床 口縁部～胴 部上位片	① 21.4	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は縦方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第124図13 P.L. 118	土師器 甗	床 口縁部～胴 部上位片	① 19.6	①粗砂粒(赤色鉱物 粒) ②酸化焰 ③橙色	口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は頸部に向けてのヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第125図14 P.L. 118	土師器 甗	床 1/4	② 8.8	①粗砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部は横ナデ。外面胴部は斜め方向ヘラ削り。	
第125図15 P.L. 118	白玉	埋没土 完形	3.4g	滑石		
第125図16 P.L. 118	白玉	埋没土 完形	3.0g	滑石		
第125図17 P.L. 118	棒状礫	床 完形	398g	粗粒安山岩		
第125図18 P.L. 118	棒状礫	床 完形	592g	変質安山岩		
第125図19 P.L. 118	棒状礫	床 完形	553g	粗粒安山岩		

39号住居跡

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第127図1 P.L. 118	土師器 杯	埋没土 底部小片		①細砂粒 ②酸化焰 ③明赤褐色	杯身底部に「全」の墨書。外面底部は平底でヘラ削り。	
第127図2 P.L. 118	須恵器 杯	床 3/4	① 12.6 ② 6.4 ④ 4.1	①細砂粒 ②還元焰 ③暗オリーブ灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。	
第127図3 P.L. 118	須恵器 杯	埋没土 1/4	① 12.6 ② 7.4 ③ 3.3	①細砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向不明。底部は回転糸切り。	
第127図4 P.L. 118	須恵器 杯	床 1/4	① 12.8 ② 7.0 ④ 3.6	①粗砂粒 ②還元焰 ③浅黄色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。	
第127図5 P.L. 118	土師器 甗	床 口縁部～胴 部上位片	① 19.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③明赤褐色	「コ」の字状口縁甗。口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は横方向ヘラ削り。	
第127図6 P.L. 118	土師器 甗	カマド 口縁部～胴 部中位片	① 18.2	①細砂粒(赤色鉱物 粒) ②酸化焰 ③橙色	「コ」の字状口縁甗。口縁部から頸部は横ナデであるが頸部中程は無調整。外面胴部は上位が横方向、中位が斜め方向のヘラ削り。内面はヘラナデ。	
第127図7 P.L. 118	土師器 台付甗	埋没土 底部片	② 4.6	①細砂粒 ②酸化焰	胴部と底部・脚部の接合痕が残る。外面胴部は縦方向ヘラ削り、内面はハケ目。脚部は横ナデ。	
第128図8 P.L. 118	棒状礫	床 完形	1,172g	粗粒安山岩		
第128図9 P.L. 119	棒状礫	床 完形	664g	粗粒安山岩		
第128図10 P.L. 119	棒状礫	床 完形	230g	粗粒安山岩		
第128図11 P.L. 119	砥石	埋没土 破片	(87g)	砥沢石	各面に使用痕が残る。	
第128図12 P.L. 119	砥石	埋没土 破片	(93g)	砂岩	各面に使用痕が残る。	

遺物観察表

40号住居跡

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第130図1 P L. 119	土師器 杯	床 1/5	① 13.8	①細砂粒 ②酸化焙 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。	
第130図2 P L. 119	須恵器 水瓶	床 頸部片		①細砂粒(黒色鉱物 粒) ②還元焙 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。外面片面に自然釉が付着。	
第130図3 P L. 119	須恵器 長頸瓶	埋没土 肩部片		①細砂粒(黒色鉱物 粒) ②還元焙 ③灰色	ロクロ整形、回転方向不明。肩部に2条の沈線が施され、その間に列点文が施されている。	
第130図4 P L. 119	土師器 甕	床 胴部下位～ 底部片	② 6.6	①細砂粒 ②酸化焙 ③暗灰黄色	外面胴部・底部はヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第130図5 P L. 119	砥石	周溝 一部欠	(216g)	砥沢石		
第130図6 P L. 119	棒状礫	床 完形	295g	砂岩		

41号住居跡

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第131図1 P L. 119	土師器 杯	埋没土 1/8	① 13.8 ② 10.0 ④ 2.8	①細砂粒 ②酸化焙 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。	
第131図2 P L. 119	土師器 甕	埋没土 口縁部～頸 部片	① 9.5	①細砂粒 ②酸化焙 ③橙色	「コ」の字状口縁甕。口唇部に凹線が1条巡る。口縁部から頸部は横ナデ、頸部に指頭痕が見られる。外面胴部は横方向へラ削り。	
第131図3 P L. 119	軽石製品	埋没土 破片	(169.1g)	軽石	一部に擦痕がみられる。	

42号住居跡

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第132図1 P L. 119	土師器 台付甕	カマド 口縁部～胴 部上位	① 12.0	①微砂粒 ②酸化焙 ③にぶい橙色	「コ」の字状口縁甕。口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は左方向へラ削り、内面はヘラナデ。	
第132図2 P L. 119	土師器 台付甕	カマド 胴部下位～ 底部片	② 4.8	①細砂粒 ②酸化焙 ③にぶい橙色	底部と脚部で接合。外面胴部は縦方向へラ削り、内面はヘラナデ。胴部に焼成後の穿孔が見られる。	
第132図3 P L. 119	土師器 甕	カマド 口縁部～胴 部上位片	① 17.6	①細砂粒 ②酸化焙 ③橙色	「コ」の字状口縁甕。口縁部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデであるが頸部中程に無調整が残る。外面胴部はヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第132図4 P L. 119	鉄製品	埋没土 破片			器種不明。	

43号住居跡

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第135図1 P L. 119	土師器 杯	床 2/3	① 12.0 ② 9.0 ④ 2.8	①細砂粒 ②酸化焙 ③にぶい橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。	
第135図2 P L. 119	土師器 杯	床 1/2	① 12.2 ② 9.9 ④ 3.3	①細砂粒 ②酸化焙 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。	
第135図3 P L. 119	土師器 杯	埋没土 1/2	① 12.2 ② 10.1 ④ 3.3	①細砂粒 ②酸化焙 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。	
第136図4 P L. 119	土師器 杯	埋没土 完形	① 12.5 ② 9.5 ④ 3.6	①細砂粒 ②酸化焙 ③にぶい橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。	

挿図番号 図版番号	種 類	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第136図5 P L. 119	土師器 杯	掘り方 1/5	① 12.8 ② 10.3 ④ 3.3	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。	
第136図6 P L. 119	土師器 杯	埋没土 1/5	① 13.2 ② 10.6 ④ 3.2	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。	
第136図7 P L. 119	土師器 杯	埋没土 1/5	① 12.8 ② 10.6 ④ 3.2	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。外面底部に墨書。	
第136図8 P L. 119	土師器 杯	埋没土 底部小片		①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	底部はヘラ削り。外面と、内面に墨書。	
第136図9 P L. 119	土師器 杯	埋没土 底部小片		①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	底部はヘラ削り。内面に墨書。	
第136図10 P L. 119	土師器 杯	埋没土 底部小片		①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	底部はヘラ削り。内面に墨書。	
第136図11 P L. 119	土師器 杯	埋没土 底部小片		①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	底部はヘラ削り。内面に線刻。	
第136図12 P L. 120	須恵器 杯蓋	床 1/2	① 13.0	①細砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回りか？口縁部は折り曲げ。天井部中央付近は回転ヘラ削り。口縁部に重ね焼き痕が見られる。	
第136図13 P L. 120	須恵器 杯蓋	埋没土 2/3	① 14.8 ⑤ 2.2 ④ 3.7	①細砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。口縁部は折り曲げ。摘は円筒状で貼付。天井部中央付近は回転ヘラ削り。	
第136図14 P L. 120	須恵器 杯蓋	埋没土 1/3	① 14.4 ⑤ 4.1 ④ 3.1	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。口縁部は折り曲げ。摘は偏平で貼付。天井部中央付近は回転ヘラ削り。	
第136図15 P L. 120	須恵器 杯	埋没土 口縁部の一 部を欠	① 11.6 ② 8.6 ④ 4.0	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転ヘラ切り後不定方向ヘラ削り。	
第136図16 P L. 120	須恵器 杯	埋没土 1/2	① 12.6 ② 7.9 ④ 3.4	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転ヘラ切り無調整。	
第136図17 P L. 120	須恵器 杯	埋没土 口縁部の一 部を欠	① 13.0 ② 8.8 ④ 3.7	①粗砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転系切り後周辺部を不定方向ヘラ削り。	
第136図18 P L. 120	須恵器 杯	埋没土 口縁部の一 部を欠	① 13.2 ② 7.6 ④ 4.0	①細砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転ヘラ切り無調整。	
第136図19 P L. 120	須恵器 杯	埋没土 口縁部の一 部を欠	① 13.4 ② 7.6 ④ 4.5	①細砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転ヘラ切り無調整。	
第136図20 P L. 120	須恵器 杯	埋没土 1/2	① 13.5 ② 7.2 ④ 4.2	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転ヘラ切り後不定方向ヘラ削り。	
第136図21 P L. 120	須恵器 杯	埋没土 2/3	① 13.6 ② 7.0 ④ 3.7	①細砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転系切り後周辺部を不定方向ヘラ削り。	
第137図22 P L. 120	須恵器 杯	埋没土 2/3	① 13.6 ② 7.6 ④ 3.3	①細砂粒 ②還元焰 ③暗オリーブ灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転系切り後周辺部を不定方向ヘラ削り。	
第137図23 P L. 120	須恵器 杯	埋没土 1/3	① 13.8 ② 8.2 ④ 4.0	①細砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回りか？底部は回転ヘラ削り。	
第137図24 P L. 120	須恵器 杯	埋没土 1/3	① 14.2 ② 8.4 ④ 3.2	①粗砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転ヘラ削り。	

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第137図25 P L. 120	須恵器 杯	埋没土 口縁部の一 部を欠	① 12.8 ② 6.5 ④ 3.4	①粗砂粒(φ5mmの礫) ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り 後回転ヘラ削り。	
第137図26 P L. 120	須恵器 杯	床 完形	① 13.6 ② 7.4 ④ 3.7	①粗砂粒(φ5mmの礫) ②酸化焰 ③橙色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は不定方向ヘ ラ削り。	
第137図27 P L. 120	須恵器 杯	埋没土 1/5	① 14.4 ② 8.2 ④ 4.3	①粗砂粒(φ5mmの礫) ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転ヘラ削 り。	
第137図28 P L. 120	須恵器 杯	埋没土 3/4	① 18.5 ② 9.2 ④ 5.5	①細砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転ヘラ削 り。	
第137図29 P L. 120	須恵器 椀	埋没土 1/5	① 12.2 ②8.0③8.1 ④ 4.6	①粗砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転ヘラ切 り後周辺部を回転ヘラ削り。高台は貼付。	
第137図30 P L. 120	須恵器 椀	埋没土 1/5	① 13.4 ②7.9③8.6 ④ 4.6	①粗砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転ヘラ切 り後周辺部を回転ヘラ削り。高台は貼付。	
第137図31 P L. 120	須恵器 平瓶	埋没土 口唇部を欠	最大径14.2 ② 10.7	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部から体部、天 井部周辺部を成型し、口縁部を接合後天井部中央 部を貼付。底部は回転ヘラ切り後回転ヘラ削り、 周辺は不定方向ヘラ削り。体部下半もヘラ削り。 天井部は接合部に1条と周辺に2条の凹線が施さ れ、周辺の凹線の間列点文が施文されている。 天井部・体部の一部に自然釉が付着。	
第137図32 P L. 120	須恵器 長頸瓶	埋没土 肩部片		①細砂粒 ②還元焰 ③浅黄色	ロクロ整形、回転方向不明。肩部に凹線が2条施 されいる。	
第137図33 P L. 120	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴 部中位片	① 19.8	①粗砂粒 ②酸化焰 ③灰褐色	口縁部は横ナデ。外面胴部は頸部に向けてのヘラ 削り、内面はヘラナデ。	
第138図34 P L. 120	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴 部上位片	① 23.0	①粗砂粒 ②酸化焰 ③灰褐色	口縁部は横ナデ。外面胴部は頸部に向けてのヘラ 削り、内面はヘラナデ。	
第138図35 P L. 120	土師器 甕	埋没土 1/5	① 20.4	①細砂粒 ②酸化焰 ③灰黄色	口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は上位が左方 向、中位以下は上位へ向けて斜めのヘラ削り、内 面はヘラナデ。	
第138図36 P L. 120	須恵器 甕	埋没土 口縁部片	① 21.0	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向不明。内面頸部に指ナデ。	
第138図37 P L. 121	軽石製品	埋没土 一部欠	(42.4g)	軽石	球状の軽石製品。器種不明。	
第138図38 P L. 121	軽石製品	埋没土 1/2	(8.6g)	軽石	紡錘車状の軽石製品。	
第138図39 P L. 121	軽石製品	埋没土 ほぼ完形	71.7g	二ツ岳軽石	紡錘車状の軽石製品。	
第138図40 P L. 121	敲石	床 一部欠	413g	軽石	一部に敲打痕がある。	
第138図41 P L. 121	敲石	床 完形	808g	粗粒安山岩	両面、両側面に集合打痕がある。	
第139図42 P L. 121	敲石	埋没土 完形	492g	粗粒安山岩	両面に集合打痕がある。	
第139図43 P L. 121	棒状礫	埋没土 完形	386g	粗粒安山岩	端部に打痕がある。	
第139図44 P L. 121	棒状礫	埋没土 完形	522g	粗粒安山岩		
第139図45 P L. 121	棒状礫	埋没土 完形	892g	粗粒安山岩		
第139図46 P L. 121	棒状礫	埋没土 完形	454g	石英閃緑岩	端部に打痕がある。	

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第139図47 P L. 121	棒状礫	埋没土 完形	577 g	変質安山岩	端部に打痕がある。	
第139図48 P L. 121	棒状礫	床 完形	215 g	変質安山岩		
第139図49 P L. 121	棒状礫	埋没土 完形	98 g	粗粒安山岩		
第139図50 P L. 121	石製品	床 完形	235 g	粗粒安山岩	各面が整形され、平滑面をもつ。	
第139図51 P L. 121	鎌	埋没土 破片			柄部装着部が残存。	
第139図52 P L. 121	鉄製品	埋没土 破片			刀子柄部か。	

44号住居跡

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第142図1 P L. 121	須恵器 皿	埋没土 3/5	① 12.0 ② 5.5 ④ 2.3	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向左回り。底部は回転糸切り。	
第142図2 P L. 121	須恵器 杯	埋没土 1/4	① 12.6 ② 5.6 ④ 3.6	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向不明。底部は回転糸切り。	
第142図3 P L. 121	須恵器 椀	埋没土 底部	② 7.8 ③ 8.0	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部切り放し技法は高台貼付時のナデのため不明。	
第142図4 P L. 121	須恵器 高杯	カマド 脚部片	③ 5.4	①細砂粒(黒色鈹物 粒) ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向左回り。	
第142図5 P L. 121	灰釉陶器 椀	埋没土 口縁部片	① 13.8 ② 7.0	①微砂粒(黒色鈹物 粒) ②還元焰堅緻 ③灰色	ロクロ整形、回転方向不明。施釉方法は漬け掛け。釉調は不透明な黄色みを帯びた灰色。	
第142図6 P L. 121	鉄製品	埋没土 破片			1ヶ所穿孔がみられる。器種不明。	
第142図7 P L. 121	羽口	埋没土 破片				

46号住居跡

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第144図1 P L. 121	土師器 杯	埋没土 1/2	① 11.6 ② 10.5 ④ 3.2	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部はへら削り。	
第144図2 P L. 121	土師器 杯	貯穴 3/5	① 11.6 ② 9.3 ④ 2.9	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はへら削り。	
第144図3 P L. 121	土師器 杯	埋没土 1/4	① 11.8 ② 10.2 ④ 2.9	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はへら削り。	
第144図4 P L. 121	土師器 杯	埋没土 1/5	① 13.2 ② 11.8	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はへら削り。	
第144図5 P L. 121	須恵器 杯	床 口縁部の一 部を欠	① 11.8 ② 7.2 ④ 3.7	①粗砂粒(φ5mmの礫) ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転へら切り。外面に火燂痕が見られる。	
第144図6 P L. 121	須恵器 杯	床 口縁部の一 部を欠	① 12.0 ② 7.5 ④ 3.8	①細砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転へら切り。	
第144図7 P L. 121	須恵器 杯	床 完形	① 13.0 ② 7.0 ④ 3.9	①粗砂粒 ②還元焰燻焼成 ③灰オリーブ色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。	

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第144図8 P L. 122	土師器 甕	貯穴 %	① 16.0 ② 5.5 ④ 20.2	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部上位は左方向、中位以下は頸部方向へのヘラ削り。内面は横ナデ。底部はヘラ削り。	
第145図9 P L. 122	土師器 甕	床 ほぼ完形	① 18.4 ② 5.0 ④ 27.6	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部上位は左方向、中位以下は縦方向へのヘラ削り。内面は横ナデ。底部はヘラ削り。	
第145図10 P L. 122	土師器 甕	床 ほぼ完形	① 20.6 ② 5.0 ④ 27.4	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部上位は左方向、中位以下は縦方向へのヘラ削り。内面は横ナデ。底部はヘラ削り。	
第145図11 P L. 122	須恵器 杯	床 底部	② 9.0	①細砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転ヘラ切り後回転ヘラ削り。口縁部は打ち欠かれ、内面底部は擦り磨かれている。	転用硯
第145図12 P L. 122	円礫	床 完形	746 g	粗粒安山岩	一部に打痕がある。	

47号住居跡

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第146図1 P L. 122	土師器 甕	床 口縁部～胴 部中位片	① 21.0	①細砂粒(赤色鉱物) ②酸化焰 ③明赤褐色	口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は上位が左方向、中位が頸部に向けてのヘラ削り。内面はヘラナデ。	
第146図2 P L. 122	磨石	床 完形	180 g	粗粒安山岩	各面とも研磨され、擦痕もみられる。	
第146図3 P L. 122	鉄釘	埋没土 一部欠				

48号住居跡

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第148図1 P L. 122	須恵器 杯	床 完形	① 13.0 ② 5.2 ④ 4.2	①細砂粒(含雲母) ②還元焰 ③浅黄色	ロクロ整形、回転方向左回り。底部は回転糸切り。	
第148図2 P L. 122	須恵器 椀	床 1/4	① 13.4 ②7.7③7.9 ④ 5.5	①粗砂粒 ②還元焰 ③にぶい黄橙色	ロクロ整形、回転方向左回り。底部は回転糸切り、高台は貼付で周辺はナデ。	
第148図3 P L. 122	須恵器 椀	カマド 体部～底部	② 7.8 ③ 8.6	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	ロクロ整形、回転方向右回りか？底部は回転糸切り。高台は貼付で周辺はナデ。	
第148図4 P L. 122	灰釉陶器 椀	カマド 1/2	① 14.8 ②7.7③7.9 ④ 4.4	①緻密 ②還元焰堅緻 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部切り離し技法はヘラ調整のため不明。高台は貼付。施釉方法は漬け掛け。釉調は不透明な灰黄色。	大原2号窯 式期
第148図5 P L. 122	灰釉陶器 椀	埋没土 口縁部片	① 14.0	①緻密 ②還元焰堅緻 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向不明。施釉方法は漬け掛けか？釉調は不透明な灰緑色。	
第148図6 P L. 122	灰釉陶器 椀	埋没土 底部片	② 7.0 ③ 7.3	①緻密 ②還元焰堅緻 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向不明。底部切り離し技法はヘラ調整のため不明。高台は貼付。施釉方法は不明。	
第148図7 P L. 122	土師器 甕	床 口縁部～胴 部上位	① 13.7	①細砂粒(含雲母) ②酸化焰 ③にぶい褐色	頸部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は横方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第148図8 P L. 122	須恵器 羽釜	カマド 口縁部～胴 部中位	① 18.4	①粗砂粒(φ5mmの礫) ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	ロクロ整形、回転方向不明。罎は小型の断面三角形で貼付。外面胴部は罎へ向けてのヘラ削り。	
第148図9 P L. 122	土錘	床 完形	11.1 g	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	器面に研磨痕がみられる。	
第148図10 P L. 122	土錘	床 完形	13.6 g	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	器面に研磨痕がみられる。	

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第148図11 P L. 122	土錘	床 完形	14.2 g	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	器面にヘラ削り痕がみられる。	
第148図12 P L. 122	土錘	床 完形	10.1 g	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	器面にヘラ削り痕がみられる。	
第148図13 P L. 122	土錘	床 完形	13.6 g	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	器面にヘラ削り痕がみられる。	
第148図14 P L. 122	土錘	床 完形	12.9 g	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	器面にヘラ削り痕がみられる。	
第148図15 P L. 122	偏平礫	床 完形	453 g	粗粒安山岩		

49号住居跡

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第150図1 P L. 123	須恵器 杯	貯穴 口縁部の一 部を欠	① 13.0 ② 6.0 ④ 3.6	①粗砂粒(φ5mmの礫) ②酸化焰 ③橙色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。	
第150図2 P L. 123	須恵器 椀	床 3/5	① 14.0 ②6.2③6.3 ④ 5.3	①細砂粒 ②還元焰 ③黄灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。高台は貼付。内面底部に「夆」の刻書。	
第150図3 P L. 123	土師器 台付甕	床 3/5脚部欠	① 11.6 ② 4.5	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は上位が左方向、斜め方向ヘラ削り。内面はヘラナデ。	
第150図4 P L. 123	土製品 鞆羽口	埋没土 端部片		①粗砂粒 ②酸化焰 ③灰黄色	外面ヘラ削り。端部に鉄分の付着が見られる。	
第150図5 P L. 123	土錘	床 完形	30.4 g	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	外面にヘラ削り痕が残る。	
第150図6 P L. 123	土錘	埋没土 完形	28.5 g	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	外面にヘラ削り痕が残る。	
第150図7 P L. 123	土錘	埋没土 完形	21.0 g	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	外面にヘラ削り痕が残る。	
第150図8 P L. 123	土錘	埋没土 完形	12.7 g	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	外面にヘラ削り痕が残る。	
第150図9 P L. 123	土錘	埋没土 端部欠	(10.3 g)	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	外面にヘラ削り痕が残る。	
第150図10 P L. 123	土錘	埋没土 端部欠	(20.9 g)	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	外面にヘラ削り痕が残る。	
第150図11 P L. 123	土錘	埋没土 完形	27.0 g	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	外面にヘラ削り痕が残る。	
第150図12 P L. 123	土錘	床 完形	31.8 g	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	外面にヘラ削り痕が残る。	
第150図13 P L. 123	偏平礫	床 完形	719 g	粗粒安山岩	上面がやや磨耗している。	
第150図14 P L. 123	棒状礫	埋没土 完形	442 g	粗粒安山岩		
第150図15 P L. 123	鉄製品 刀子	埋没土 破片			刀子の基部片。	

遺物観察表

第50号住居跡

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第152図1 P L. 123	土師器 杯	貯穴 ⅓	① 10.8 ④ 3.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部は横ナデ。底部はヘラ削り。	
第152図2 P L. 123	土師器 杯	埋没土 ⅓	① 12.0 ② 11.0 ④ 3.7	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。	
第152図3 P L. 123	土師器 杯	埋没土 ⅓	① 13.2 ② 12.0 ④ 4.3	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。	
第152図4 P L. 123	土師器 杯	埋没土 ⅓	① 13.7 ② 13.0 ④ 4.3	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。	
第152図5 P L. 123	土師器 杯	埋没土 ⅓	① 19.0 ② 16.0 ④ 4.2	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。	
第152図6 P L. 123	土師器 椀	貯穴 口唇部の大部分を欠	① 14.2 ② 6.5 ④ 7.1	①粗砂粒 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	器面が荒れているため整形技法は不鮮明である。	
第152図7 P L. 123	須恵器 長頸壺	埋没土 胴部片		①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向不明。肩部はヘラ削り。外面に自然釉付着。内面と断面に漆が付着。	
第152図8 P L. 123	土師器 甔	埋没土 底部	② 3.2 孔径 1.8	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい褐色	底部片。孔の周辺はヘラ削り。	
第152図9 P L. 123	土師器 台付甕	床 脚部	② 6.3 ③ 8.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	脚部は横ナデ、胴部はヘラ削りか。	
第153図10 P L. 123	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴部上位片	① 16.6	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	頸部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は左方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第153図11 P L. 123	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴部上位片	① 21.6	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	頸部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は左方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第153図12 P L. 123	棒状礫	床 完形	484 g	粗粒安山岩		
第153図13 P L. 123	棒状礫	床 完形	580 g	粗粒安山岩		
第153図14 P L. 123	棒状礫	床 完形	579 g	粗粒安山岩		
第153図15 P L. 123	棒状礫	床 完形	580 g	粗粒安山岩	端部に打痕がみられる。	
第153図16 P L. 124	棒状礫	床 完形	565 g	石英閃緑岩		
第153図17 P L. 124	棒状礫	床 完形	379 g	粗粒安山岩		
第153図18 P L. 124	鉄鎌	埋没土 刃部			曲刃鎌。	
第153図19 P L. 124	鉄製品	床 一部欠			刃部と茎部はほぼ同長。茎部に木質が残存する。	
第153図20 P L. 124	鉄製品 刀子	埋没土 破片			刀子刃部片。刃部は短かく、細い。	

51号住居跡

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第155図1 P.L. 124	土師器 杯	床 完形	① 10.6 ④ 3.2	①細砂粒 ②酸化焙 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。	
第155図2 P.L. 124	土師器 杯	埋没土 1/2	① 11.6 ④ 4.0	①細砂粒 ②酸化焙 ③にぶい赤褐色	口縁部上半は横ナデ、下半は部分的に無調整が残るが、大部分は底部からのヘラ削り。	
第155図3 P.L. 124	土師器 杯	埋没土 1/4	① 12.0	①細砂粒 ②酸化焙 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。	
第155図4 P.L. 124	土師器 盤	床 口縁部の一 部を欠	① 19.3 ④ 3.7	①細砂粒 ②酸化焙 ③橙色	口唇部は横ナデ、口縁部は無調整。底部はヘラ削り。	
第155図5 P.L. 124	棒状礫	床 完形	315 g	珩岩		

53号住居跡

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第158図1 P.L. 124	須恵器 杯	カマド 1/2	① 11.9 ② 5.3 ④ 4.4	①粗砂粒 ②還元焙やや酸化焙 ぎみ③にぶい黄橙色	ロクロ整形、回転方向左回りか？底部は回転糸切り。	
第158図2 P.L. 124	須恵器 杯	埋没土 1/2	① 13.0 ② 4.8 ④ 4.7	①粗砂粒 ②還元焙やや酸化焙 ぎみ ③灰黄色	ロクロ整形、回転方向左回り。底部は回転糸切り。	
第158図3 P.L. 124	須恵器 杯	床 完形	① 13.0 ② 5.1 ④ 4.1	①細砂粒(含雲母) ②還元焙 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向左回り。底部は回転糸切り。	
第158図4 P.L. 124	須恵器 椀	カマド 1/3	① 13.6 ②6.7③7.4 ④ 5.6	①細砂粒 ②酸化焙 ③橙色	ロクロ整形、回転方向左回り。底部は回転糸切り。高台は貼付。	
第158図5 P.L. 124	須恵器 椀	カマド 1/3	① 14.6 ②7.6③9.0 ④ 5.3	①細砂粒 ②還元焙 ③浅黄色	ロクロ整形、回転方向不明。底部は回転糸切り。高台は貼付。	
第158図6 P.L. 124	須恵器 椀	埋没土 底部片	② 6.5 ③ 6.8	①細砂粒(含長石) ②還元焙 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。高台は貼付。	
第158図7 P.L. 124	灰釉陶器 椀	壁 1/2	① 14.4 ②7.8③8.1 ④ 4.4	①緻密 ②還元焙堅緻 ③灰黄色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転ヘラ調整。高台は貼付。施釉方法は刷毛塗り。釉調は不透明な緑灰色。	光ヶ丘1号 窯式期
第158図8 P.L. 124	土師器 甕	床 胴部下位～ 底部片	② 5.0	①細砂粒 ②酸化焙 ③明赤褐色	外面胴部は縦方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。底部はヘラ削り。	
第158図9 P.L. 124	須恵器 甕	カマド 胴部下位～ 底部	② 22.7	①細砂粒 ②還元焙 ③灰白色	輪積痕が残る。外面胴部下半はヘラ削り、下位は横ナデ。内面はヘラナデ。	
第158図10 P.L. 124	棒状礫	床 一部欠	285 g	粗粒安山岩	両側面に打ち欠きを加えられる。	
第158図11 P.L. 124	扁平礫	床 完形	595 g	粗粒安山岩		

55号住居跡

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第159図1 P.L. 124	土師器 杯	貯穴 1/2	① 14.6 ② 9.8 ④ 3.9	①細砂粒(含石英) ②酸化焙 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は左方向への2段のヘラ削り。底部はヘラ削り。	
第159図2 P.L. 124	須恵器 杯	埋没土 1/2	① 11.6 ② 6.4 ④ 3.6	①細砂粒 ②還元焙 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。	

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 器 類 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第159図3 P.L. 124	須恵器 椀	埋没土 底部	② 8.3 ③ 7.7	①細砂粒 ②還元焰 ③灰オリーブ色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。高台は貼付。	
第159図4 P.L. 124	土師器 甕	床 口縁部～胴 部上位片	① 19.4	①粗砂粒(赤色鉱物 粒) ②酸化焰 ③橙色	口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は横方向ヘラ 削り、内面はヘラナデ。	
第159図5 P.L. 124	須恵器 椀(転用硯)	床 完形	最大径8.7 ④ 1.3	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	口縁部を打ち欠いて硯に転用。椀はロクロ整形、 回転方向右回り、底部は回転ヘラ削り調整。摺面 に朱墨が残る。	
第159図6 P.L. 124	棒状礫	床 完形	570 g	粗粒安山岩	上面に擦痕、磨耗痕がみられる。	

56号住居跡

挿図番号 図版番号	種 器 類 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第160図1 P.L. 125	土師器 杯	埋没土 1/4	① 12.8 ④ 3.2	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、口縁部下半から底部はヘラ 削り。	
第160図2 P.L. 125	土師器 小型甕	埋没土 1/2	① 13.0 ② 12.1 ④ 11.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は頸部へ向け てのヘラ削り、内面はヘラナデ。底部は横方向ヘ ラ削り。	

57号住居跡

挿図番号 図版番号	種 器 類 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第162図1 P.L. 125	土師器 杯	床 1/4	① 10.6 稜径10.0 ④ 3.3	①粗砂粒(φ5~7mm の礫) ②酸化焰 ③橙色	口縁部下に弱い稜をもつ。口縁部は横ナデ。底部 はヘラ削り。	
第162図2 P.L. 125	土師器 杯	床 完形	① 11.3 稜径11.2 ④ 3.6	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部下に稜をもつ。口縁部は横ナデ。底部はヘ ラ削り。	
第162図3 P.L. 125	土師器 杯	床 1/2	① 11.9 稜径 9.7 ④ 3.7	①細砂粒(赤色鉱物 粒) ②酸化焰 ③橙色	口縁部下に稜をもつ。口縁部は横ナデ。底部はヘ ラ削り。	
第162図4 P.L. 125	土師器 杯	床 1/4	① 13.1 稜径11.4 ④ 5.1	①粗砂粒 ②酸化焰 ③浅黄色	口縁部下に稜をもち、口縁部・稜に凹線をもつ。 口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。	
第163図5 P.L. 125	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴 部上位片	① 22.0	①粗砂粒 ②酸化焰 ③明黄褐色	口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は頸部に向け てのヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第163図6 P.L. 125	土師器 甕	カマド ほぼ完形	① 19.8 ② 4.4 ④ 38.6	①粗砂粒(赤色鉱物 粒) ②酸化焰 ③橙色	輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ。外面胴 部は頸部へ向けての3~4段のヘラ削り、内面は ヘラナデ。	
第163図7 P.L. 125	土師器 甕	カマド 底部を欠	① 22.0	①粗砂粒 ②酸化焰 ③浅黄色	口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は頸部に向け ての3~4段のヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第163図8 P.L. 125	土師器 甕	貯穴 1/2	① 19.2 ② 8.0 ④ 29.0	①粗砂粒 ②酸化焰 ③浅黄色	口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は上位が左方 向、中位は縦方向、下位は右方向ヘラ削り、内面 の整形は器面が荒れており不明。 底部はヘラ削 り。	
第163図9 P.L. 125	棒状礫	埋没土 1/2	(469 g)	粗粒安山岩		

58号住居跡

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第165図1 P L. 125	土師器 杯	埋没土 底部片		①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	内面に「王」の墨書。	
第165図2 P L. 125	土師器 杯	埋没土 1/5	① 12.4 ② 8.0 ④ 3.1	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。	
第165図3 P L. 125	土師器 杯	埋没土 1/5	① 13.0 ② 8.8 ④ 2.9	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。	
第165図4 P L. 125	須恵器 杯	埋没土 1/2	① 12.2 ② 6.4 ④ 3.3	①粗砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。	
第165図5 P L. 125	須恵器 杯	南西柱穴 口縁部の一 部を欠	① 13.2 ② 6.0 ④ 3.8	①粗砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。	
第165図6 P L. 125	須恵器 杯	床 口縁部の一 部を欠	① 13.2 ② 5.8 ④ 3.6	①粗砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。	
第165図7 P L. 125	須恵器 杯	南東柱穴 1/5	① 13.6	①粗砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向不明。	
第165図8 P L. 125	須恵器 皿	埋没土 1/5	① 12.0 ②7.0③6.7 ④ 2.4	①細砂粒 ②還元焰 ③灰オリーブ色	ロクロ整形、回転方向不明。底部切り離し技法は不明。高台は貼付。	
第165図9 P L. 125	須恵器 皿	埋没土 1/5	① 13.0 ② 6.4	①細砂粒 ②還元焰 ③にぶい黄色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。高台は剥落。	
第165図10 P L. 125	土師器 甕	カマド 口縁部～胴 部上位片	① 18.4	①細砂粒(含雲母) ②酸化焰 ③明赤褐色	口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は左方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第165図11 P L. 126	土師器 甕	カマド 口縁部～胴 部上位片	① 14.8	①微砂粒 ②酸化焰 ③にぶい赤褐色	「コ」の字状口縁甕。口縁部から頸部は横ナデ。胴部上位は左方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第166図12 P L. 126	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴 部中位片	① 22.4	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	「コ」の字状口縁甕。口縁部と頸部下半は横ナデ、下半は無調整部分が残る。外面胴部は上位が左方向、中位が頸部方向のヘラ削り。内面はヘラナデ。	
第166図13 P L. 126	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴 部上位片	① 18.6	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	「コ」の字状口縁甕。口唇部に凹線が1条巡る。口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は横方向ヘラ削り。	
第166図14 P L. 126	須恵器 甕	カマド 口縁部・胴 部	① 24.3	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	口縁部はロクロ整形、底部と胴部の間に接合痕が見られる。外面胴部はカキ目、内面は同心円状あて具痕を擦り消している。	
第166図15 P L. 126	須恵器 甕	埋没土 胴部～底部 片		①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	14と同一個体か。	
第166図16 P L. 126	鉄釘	埋没土 端部欠			先端部を欠損する。	
第166図17 P L. 126	鉄釘	埋没土 完形			頭頂部がつぶれ体部と接する。	
第166図18 P L. 126	鉄釘	埋没土 完形			頭頂部を欠損する。	
第166図19 P L. 126	鉄釘	埋没土 破片			両端を欠損する。	
第166図20 P L. 126	鉄釘	埋没土 破片			両端を欠損する。	
第166図21 P L. 126	鉄釘	埋没土 破片			両端を欠損する。	

遺物観察表

59号住居跡

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第167図1 P L. 126	土師器 杯	埋没土 1/5	① 11.8 稜径14.6	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部下に明瞭な稜をもち、口縁部中程に凹線が1条巡る。口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。	
第167図2 P L. 126	土師器 杯	埋没土 1/2	① 13.0 稜径14.2 ④ 4.4	①細砂粒(赤色鉱物 粒) ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	口縁部下に明瞭な稜をもち、口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。	
第167図3 P L. 126	土師器 杯	カマド 完形	① 12.6 稜径11.0 ④ 4.7	①細砂粒(含雲母) ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部下に明瞭な稜をもち、口縁部中程に凹線が1条巡る。口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。	
第167図4 P L. 126	土師器 杯	埋没土 1/4	① 13.0 稜径11.4	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部下に弱い稜をもち、口縁部中程と稜上に凹線が巡る。口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。	
第168図5 P L. 126	土師器 甕	カマド 3/5	① 19.6	①粗砂粒 ②酸化焰 ③橙色	輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は頸部に向けてのヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第168図6 P L. 126	土師器 甕	カマド 口縁部～胴 部中位片	① 23.6	①粗砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は頸部に向けてのヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第168図7 P L. 126	土師器 甕	カマド 口縁部～胴 部中位片	① 23.6	①粗砂粒 ②酸化焰 ③橙色	輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は頸部に向けてのヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第168図8 P L. 126	須恵器 甕	カマド 口縁部～胴 部上位片	① 19.8	①粗砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向不明。頸部に波状文(単位不明)が2段施されている。	
第168図9 P L. 126	紡錘車	床 完形	17.2 g	滑石	擦痕状の整形痕が残る。	
第168図10 P L. 126	砥石	床 破片	(393 g)	粗粒安山岩	各面に擦痕(使用痕)が残る。	

60号住居跡

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第169図1 P L. 127	須恵器 杯	埋没土 1/5	① 11.2 ② 5.6 ④ 3.4	①微砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向不明。底部は回転糸切り。	
第169図2 P L. 127	須恵器 椀	床 1/5	① 15.4	①細砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向不明。	
第169図3 P L. 127	須恵器 椀	埋没土 1/5	② 6.9 ③ 7.3	①細砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。高台は貼付。	
第169図4 P L. 127	土師器 甕	床 口縁部～胴 部上位片	① 17.0	①細砂粒(含雲母) ②酸化焰 ③橙色	口縁部から頸部は横ナデであるが部分的に無調整部分が残る。外面胴部は横方向ヘラ削り、内面は胴部ヘラナデ。	

61号住居跡

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第171図1 P L. 127	須恵器 杯	床 1/5	① 12.8 ② 4.9 ④ 4.5	①細砂粒 ②還元焰やや軟質 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。	
第171図2 P L. 127	須恵器 椀	カマド 3/4	① 13.4 ②6.2③6.0 ④ 5.7	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい赤褐色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。高台は貼付。内面口縁部に漆が付着。	
第171図3 P L. 127	須恵器 椀	カマド 1/5	① 14.2 ② 6.0	①細砂粒 ②還元焰やや軟質 ③浅黄色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。高台は剝落。	

挿図番号 図版番号	種 類	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第171図4 P.L. 127	黒色土器 椀	床 ¼	① 13.8 ②6.4③6.6 ④ 5.1	①細砂粒 ②酸化焰(内面黒色 処理) ③にぶい橙色	ロクロ整形、回転方向不明。底部切り離し技法は 高台貼付時のナデで不明。体部下半にヘラ削り。 内面は全面的にヘラ研磨。	
第171図5 P.L. 127	黒色土器 椀	床 ¼	① 14.4 ②6.4③6.6 ④ 5.4	①細砂粒 ②酸化焰(内面黒色 処理) ③にぶい橙色	ロクロ整形、回転方向不明。底部切り離し技法は 高台貼付時のナデで不明。体部下半にヘラ削り。 内面は全面的にヘラ研磨。	
第171図6 P.L. 127	須恵器 甕	カマド 底部～胴部 下位片	② 16.8	①粗砂粒 ②酸化焰 ③橙色	内外面とも器面が荒れており整形の詳細は不明で あるが外面胴部の底部付近は横方向のヘラ削り。	
第171図7 P.L. 127	須恵器 椀(転用碗)	床 底部片	② 6.8 ③ 7.0	①粗砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り 後高台を貼付。内面底部に重ね焼き痕が残る、底 部は擦り磨かれ、墨痕が残る。	
第171図8 P.L. 127	棒状礫	床 完形	369 g	粗粒安山岩		
第171図9 P.L. 127	磨石	掘り方	3,862 g	粗粒安山岩	上面全体に磨り面がみられる。	
第171図10 P.L. 127	鉄製品	埋没土 破片			器種不明。	

62号住居跡

挿図番号 図版番号	種 類	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第174図1 P.L. 127	土師器 杯	埋没土 ¼	① 12.8 ② 12.0 ④ 2.9	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ 削り。	
第174図2 P.L. 127	土師器 杯	埋没土 ほぼ完形	① 13.0 ④ 3.7	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ 削り。	
第174図3 P.L. 127	土師器 杯	床 口縁部の一 部を欠	① 15.6 ② 14.0 ④ 3.8	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ 削り。外面底部に「前」の墨書。	
第174図4 P.L. 127	須恵器 杯蓋	床 ¼	① 14.2 ⑤ 5.2 ④ 3.6	①細砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。口唇部は折り曲げ。 摘は偏平で貼付。天井部は摘周辺に回転ヘラ削り。 内面の器面は擦り磨かれている。	
第174図5 P.L. 127	須恵器 杯蓋	床 ½	① 14.6 ⑤ 3.8 ④ 2.8	①細砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。口唇部は折り曲げ。 摘は偏平で貼付。天井部は摘周辺に回転ヘラ削り。 内面の器面は擦り磨かれている。	
第174図6 P.L. 127	須恵器 杯蓋	床 ½	① 15.2 ⑤ 3.7 ④ 3.6	①細砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。口唇部は折り曲げ。 摘は輪状で貼付。天井部は摘周辺に回転ヘラ削り。 内面の器面は擦り磨かれている。	
第174図7 P.L. 127	須恵器 杯	カマド 口唇部の一 部を欠	① 13.4 ② 8.2 ④ 4.2	①粗砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り 後周辺部を回転ヘラ削り。	
第174図8 P.L. 127	須恵器 杯	カマド ¼	① 14.4 ② 8.8 ④ 4.0	①粗砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転ヘラ削 りで口縁部最下部にも施されている。	
第174図9 P.L. 127	須恵器 杯	埋没土 口唇部の一 部を欠	① 14.0 ② 8.2 ④ 4.0	①粗砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転ヘラ削 り。	
第174図10 P.L. 128	須恵器 高杯	カマド 口縁部・脚 部の一部欠	① 19.6 ②5.4③13.0 ④ 12.0	①粗砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り、脚部は紐作りか内 面に輪積痕が残る。身部口唇部、脚部端部は折り 曲げ。身部の脚部周辺は回転ヘラ削り。	
第174図11 P.L. 128	土師器 甕	カマド 口縁部～胴 部上位	① 22.8	①粗砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部に輪積痕が残る。口縁部は横ナデ。外面胴 部はヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第174図12 P.L. 128	土師器 甕	カマド 口縁部～胴 部上位	① 23.0	①粗砂粒 ②酸化焰 ③浅黄色	口縁部は横ナデ。外面胴部はヘラ削り、内面はヘ ラナデ。	
第175図13 P.L. 128	土師器 甕	床 口縁部～胴 部中位	① 19.4	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は上位が左方 向ヘラ削り、中位は頸部へ向けてのヘラ削り、内 面はヘラナデ。	

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 類 種 類	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第175図14 P L. 128	土師器 甕	カマド 口縁部～胴 部中位	① 24.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部はヘラ削り、 内面はヘラナデ。	
第175図15 P L. 128	砥石	埋没土 破片	(19.7g)	凝閃質砂岩	各面に擦痕(使用痕)が残る。	
第175図16 P L. 128	偏平礫	床 完形	2,608g	粗粒安山岩	側面に打痕がみられる。	
第175図17 P L. 128	棒状礫	床 完形	434g	粗粒安山岩	中央、側面に打痕がみられる。	
第175図18 P L. 128	棒状礫	床 完形	388g	粗粒安山岩	上面に打痕がみられる。	
第175図19 P L. 128	棒状礫	床 完形	358g	粗粒安山岩		
第175図20 P L. 128	棒状礫	床 完形	423g	粗粒安山岩	上面に磨面がみられる。	
第175図21 P L. 128	棒状礫	床 一部欠	436g	変質安山岩	側面に磨面がみられる。	
第175図22 P L. 128	棒状礫	床 完形	578g	粗粒安山岩		

64号住居跡

挿図番号 図版番号	種 類 種 類	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第178図1 P L. 128	土師器 杯	埋没土 1/4	① 12.0 ② 8.8 ④ 2.7	①微砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ 削り。	
第178図2 P L. 128	土師器 杯	カマド 1/4	① 12.2 ② 9.4 ④ 3.2	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ 削り。	
第178図3 P L. 128	土師器 杯	埋没土 1/4	① 12.4 ② 9.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい赤褐色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ 削り。	
第178図4 P L. 128	土師器 杯	貯穴 1/2	① 12.8 ② 9.6 ④ 3.1	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ 削り。	
第178図5 P L. 128	土師器 杯	貯穴 1/4	① 13.0 ② 11.0 ④ 3.1	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ 削り。	
第178図6 P L. 128	土師器 杯	カマド 1/4	① 13.0 ② 11.0 ④ 3.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ 削り。	
第178図7 P L. 128	須恵器 杯	掘り方 1/4	① 11.8	①細砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向不明。底部は残存部分が少 なく不鮮明であるがヘラ削り。	
第178図8 P L. 128	土師器 甕	貯穴 口縁部～胴 部上位片	① 19.6	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部に輪積痕が残る。口唇部は折り返し。口縁 部から頸部は横ナデ。外面胴部はヘラ削り、内面 はヘラナデ。	
第178図9 P L. 128	土師器 甕	カマド 口縁部～胴 部上位片	① 21.6	①細砂粒 ②酸化焰 ③明赤褐色	口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部はヘラ削り、 内面はヘラナデ。	
第178図10 P L. 129	土師器 甕	カマド 口縁部～胴 部中位	① 20.4	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	頸部の一部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横 ナデ。外面胴部は上位が左方向、中位が縦方向へ ラ削り。	
第178図11 P L. 129	偏平礫	床 完形	1,396g	石英閃緑岩	台石として使用か。	
第178図12 P L. 129	棒状礫	床 完形	2,608g	粗粒安山岩	体部に擦痕がみられる。	

65号住居跡

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第180図1 P L. 129	土師器 杯	床 1/4	① 10.3 ④ 3.5	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。	
第180図2 P L. 129	土師器 杯	カマド 1/4	① 11.6 ④ 3.3	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。	
第180図3 P L. 129	土師器 杯	埋没土 1/4	① 10.7	①細砂粒(含雲母) ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。	
第180図4 P L. 129	須恵器 長頸瓶	埋没土 胴部片	② 8.2	①細砂粒(黒色鈹物 粒) ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向不明。肩部に2条の凹線が 巡り、凹線の間に刺突文が施されている。胴部は 下半に回転ヘラ削り。高台が貼付。	
第180図5 P L. 129	土師器 台付甕	カマド 1/4	① 13.6	①細砂粒(含雲母) ②酸化焰 ③台付甕	口縁部から頸部は横ナデ、外面胴部は横方向ヘラ 削り、底部付近は縦方向ヘラ削り。内面はヘラ撫 で。	
第180図6 P L. 129	土師器 甕	床 口縁部～胴 部中位片	① 17.8	①粗砂粒(含雲母) ②酸化焰 ③橙色	口縁部に輪積痕が残る。口縁部～頸部は横ナデ。 外面胴部はヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第180図7 P L. 129	土師器 甕	床 1/4	① 19.0 ② 5.0 ④ 35.0	①粗砂粒(含石英) ②酸化焰 ③橙色	輪積痕が残る。口縁部は横ナデ。外面胴部は縦方 向ヘラ削り、底部付近だけ右方向ヘラ削り。底部 は砂底。内面胴部はヘラナデ。	
第180図8 P L. 129	土師器 甕	床 口縁部～胴 部上位片	① 22.0	①粗砂粒(含雲母) ②酸化焰 ③橙色	口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部はヘラ削り、 内面はヘラナデ。	
第180図9 P L. 129	棒状礫	床 完形	592 g	石英閃緑岩		
第180図10 P L. 129	棒状礫	床 完形	689 g	粗粒安山岩		
第180図11 P L. 129	棒状礫	床 完形	574 g	粗粒安山岩		

66号住居跡

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第182図1 P L. 130	土師器 杯	埋没土 1/4	① 11.0 ② 8.6 ④ 2.7	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ 削り。	
第182図2 P L. 130	土師器 杯	床 1/4	① 11.0 ② 9.3 ④ 3.5	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい褐色	口縁部中程に凹線が1～2条巡る。凹線の上は横 ナデ、下は無調整。底部はヘラ削り。	
第182図3 P L. 130	須恵器 杯蓋	床 ほぼ完形	① 13.0 ⑤ 3.3 ④ 3.3	①粗砂粒(φ3～5mm の礫) ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。口唇部は折り曲げ。 蓋は輪状で貼付。天井部蓋周辺は回転ヘラ削り。	
第182図4 P L. 130	須恵器 杯	埋没土 1/6	① 11.8 ② 7.2 ④ 3.2	①細砂粒(黒色鈹物 粒) ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向不明。底部は回転ヘラ削り か?外面底部に自然釉が付着。	
第182図5 P L. 130	須恵器 杯	埋没土 1/4	① 13.8 ② 7.2 ④ 4.6	①細砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り 後周辺を雑な不定方向ヘラ削り。	
第182図6 P L. 130	須恵器 杯	床 底部	② 7.6	①細砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。	
第182図7 P L. 130	須恵器 椀	床 底部片	② 9.2 ③ 10.0	①細砂粒(黒色鈹物) ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。 高台は貼付。	
第182図8 P L. 130	土師器 甕	床 口縁部～胴 部上位	① 19.6	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	頸部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ。 外面胴部は横方向のヘラ削り、内面はヘラナデ。	

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第182図9 P L. 130	土師器 甕	床 口縁部～胴 部上位片	① 19.6	①細砂粒(含雲母) ②酸化焰 ③にぶい褐色	口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は横方向のヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第182図10 P L. 130	須恵器 杯	埋没土 底部	② 6.8	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。内面底部は擦り磨かれている。	
第182図11 P L. 130	砥石	カマド 一部欠	(166 g)	砥沢石	各面に擦痕が残る。	
第182図12 P L. 130	鉄釘	壁 頭部欠			頭部を欠損する。	
第182図13 P L. 130	鉄釘	壁 頭部欠			頭部を欠損する。	
第182図14 P L. 130	鉄釘	壁 頭部欠			頭部を欠損する。	
第182図15 P L. 130	鉄釘	埋没土 破片			両端を欠損する。	
第182図16 P L. 130	鉄釘	埋没土			両端を欠損する。	
第182図17 P L. 130	土錘	床 完形	17.4 g	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい褐色	器面に研磨痕がみられる。	
第182図18 P L. 130	棒状礫	床 完形	574 g	粗粒安山岩		

67号住居跡

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第184図1 P L. 130	土師器 杯	床 1/4	① 12.2 ② 8.2	①細砂粒 ②酸化焰 ③明赤褐色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。	
第184図2 P L. 130	土師器 杯	埋没土 1/2	① 12.2 ② 9.7 ④ 3.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい褐色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。内面見込み部に指頭痕が残る。	
第184図3 P L. 130	黒色土器 碗	埋没土 口縁部片	① 13.4	①粗砂粒 ②酸化焰内面黒色処理 ③灰白色	外面口唇部は横ナデ、口縁部上位は無調整、下位横方向ヘラ削り。内面はヘラ研磨。	
第184図4 P L. 130	須恵器 杯	埋没土 口縁部・底 部の一部欠	① 13.0 ② 7.0 ④ 3.9	①粗砂粒 ②還元焰 ③にぶい黄褐色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は一度回転糸切り、切り離した後2mm程度の粘土板を貼付し、再度ロクロ整形し、回転糸切りで切り離している。	
第185図5 P L. 130	須恵器 杯	埋没土 1/5	① 13.6 ② 7.6 ④ 3.5	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向不明。底部は回転糸切り。	
第185図6 P L. 130	須恵器 杯	床 口縁部の一 部を欠	① 13.8 ② 6.8 ④ 4.2	①粗砂粒 ②還元焰 ③にぶい黄褐色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。	
第185図7 P L. 130	須恵器 碗	床 1/6	② 7.8 ③ 8.0	①細砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。高台は貼付。	
第185図8 P L. 130	灰釉陶器 碗	埋没土 口縁部片	① 13.8	①緻密(黒色鉱物粒) ②還元焰堅緻 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向不明。施釉方法は刷毛塗り。釉調は不透明な緑灰色。	
第185図9 P L. 130	土師器 台付甕	埋没土 底部片	② 4.4	①細砂粒 ②酸化焰 ③明赤褐色	外面胴部は縦方向ヘラ削り。脚部との接続部は横ナデ、内面はヘラナデ。	
第185図10 P L. 130	土師器 台付甕	埋没土 脚部片	③ 8.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい褐色	脚部は横ナデ。	
第185図11 P L. 130	土師器 甕	床 口縁部～胴 部上位片	① 19.8	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい褐色	口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は横方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。	

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第185図12 P L. 130	土師器 甕	床 口縁部～頸 部片	① 19.0	①細砂粒 ②酸化焙 ③明赤褐色	「コ」の字状口縁甕。輪積痕が残る。口縁部から 頸部は横ナデ。外面胴部はヘラ削り。	
第185図13 P L. 130	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴 部上位片	① 20.6	①細砂粒 ②酸化焙 ③明赤褐色	「コ」の字状口縁甕。輪積痕が残る。口縁部から 頸部は横ナデ。外面胴部はヘラ削り。	
第185図14 P L. 130	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴 部中位片	① 19.6	①粗砂粒(含石英) ②酸化焙 ③にぶい橙色	口縁部から頸部上半は横ナデ、頸部下半は無調整。 外面胴部上位は左方向、中位は縦方向ヘラ削り。 内面は上位がハケ目、中位がヘラナデ。	
第185図15 P L. 130	土師器 甕	床 胴部中位～ 底部	② 4.0	①細砂粒 ②酸化焙 ③明赤褐色	外面胴部下半は縦方向、中位に横方向ヘラ削り。 底部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第185図16 P L. 131	須恵器 杯	埋没土 底部	② 6.7	①粗砂粒 ②還元焙 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。 内面底部は擦り磨かれている。	
第185図17 P L. 131	土錘	埋没土 端部欠	(6.0g)	①細砂粒 ②酸化焙 ③にぶい褐色	器面にヘラ削り痕が残る。	
第185図18 P L. 131	土錘	埋没土 破片	(2.3g)	①細砂粒 ②酸化焙 ③にぶい褐色	器面にヘラ削り痕が残る。	
第185図19 P L. 131	磨石	床 一部欠	(2,550g)	粗粒安山岩	上面に擦痕、側面に打痕がみられる。	

68号住居跡

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第187図1 P L. 131	土師器 甕	カマド 口縁部～胴 部上位片	① 23.0	①細砂粒 ②酸化焙 ③橙色	輪積痕が残る。口縁部上半は横ナデ、下半は無調 整。頸部は横ナデ。外面胴部はヘラ削り、内面は ヘラナデ。	
第187図2 P L. 131	土師器 甕	カマド 口縁部～胴 部上位片	① 26.4	①粗砂粒(赤色鉱物 粒) ②酸化焙 ③橙色	輪積痕が残る。口縁部は横ナデ。外面胴部は縦方 向ヘラ削り、内面はヘラナデ。	

69号住居跡

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第189図1 P L. 131	土師器 杯	掘り方 口縁部に一 部を欠	① 11.4 ② 7.9 ④ 3.5	①微砂粒 ②酸化焙 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ 削り。	
第189図2 P L. 131	土師器 杯	掘り方 1/2	① 12.1 ② 7.2 ④ 2.8	①細砂粒 ②酸化焙 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ 削り。	
第189図3 P L. 131	須恵器 杯	床 1/5	① 12.0 ② 5.8 ④ 3.5	①細砂粒 ②還元焙 ③灰色	ロクロ整形、回転方向不明。底部は回転糸切り。	
第189図4 P L. 131	須恵器 杯	床 1/2	① 12.2 ② 5.4 ④ 3.6	①細砂粒 ②還元焙やや酸化焙 ③にぶい黄褐色	ロクロ整形、回転方向不明。底部は回転糸切り。	
第189図5 P L. 131	須恵器 杯	床 2/3	① 13.2 ② 6.4 ④ 3.9	①細砂粒 ②還元焙 ③にぶい褐色	ロクロ整形、回転方向不明。底部は回転糸切り。	
第189図6 P L. 131	土師器 甕	床 口縁部～胴 部上位片	① 11.4	①細砂粒 ②酸化焙 ③にぶい褐色	「コ」の字状口縁甕。口縁部から頸部は横ナデ。 外面胴部は横方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第189図7 P L. 131	土師器 甕	掘り方 口縁部～胴 部上位片	① 14.8	①細砂粒 ②酸化焙 ③橙色	「コ」の字状口縁甕。口縁部から頸部は横ナデ。 外面胴部は横方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第189図8 P L. 131	棒状礫	床 完形	614g	変質安山岩		

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第189図9 P L. 131	鉄釘	床 両端欠				
第189図10 P L. 131	鉄製品	埋没土 破片			器種不明。	

70号住居跡

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第191図1 P L. 131 P L. 132	土師器 杯	埋没土 1/2	① 11.8 ② 10.2 ④ 3.1	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。内面底部に墨書。	
第191図2 P L. 132	土師器 杯	床 口縁部の一部を欠	① 11.8 ② 9.6 ④ 3.4	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。	
第191図3 P L. 132	土師器 杯	床 1/2	① 11.8 ② 10.4 ④ 3.5	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。	
第191図4 P L. 132	土師器 杯	埋没土 1/2	① 12.0 ② 10.8 ④ 2.5	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。	
第191図5 P L. 132	土師器 杯	埋没土 口縁部の一部を欠	① 12.0 ② 9.5 ④ 3.7	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。	
第191図6 P L. 132	土師器 杯	埋没土 口縁部の一部を欠	① 12.4 ② 9.3 ④ 3.2	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。	
第191図7 P L. 132	土師器 杯	埋没土 1/2	① 12.8 ② 9.3 ④ 3.2	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。	
第191図8 P L. 132	土師器 杯	埋没土 底部小片		①細砂粒 ②酸化焰 ③明赤褐色	底部はヘラ削り。内面底部に墨書、文字の判読不明。	
第191図9 P L. 132	須恵器 椀	床 1/2	② 8.4 ③ 9.0	①細砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部はナデ整形。高台は貼付。	
第191図10 P L. 132	土師器 甕	床 口縁部～胴部上位片	① 21.8	①細砂粒(含石英) ②酸化焰 ③橙色	口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は左方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第191図11 P L. 132	土師器 甕	床 口縁部～胴部上位片	① 19.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	「コ」の字状口縁甕。口唇部に凹線が1条巡る。口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は左方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第191図12 P L. 132	土師器 甕	床 口縁部～胴部上位片	① 21.8	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい褐色	口縁部に焼成時の歪みが見られる。口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は横方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第191図13 P L. 132	須恵器 椀	埋没土 底部	② 8.2 ③ 9.2	①細砂粒(赤色鉱物粒) ②酸化焰 ③明赤褐色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転ヘラ削り。内面底部は擦り磨かれている。	

71号住居跡

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第193図1 P L. 132	土師器 杯	床 完形	① 10.7 ④ 3.6	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。	
第193図2 P L. 132	土師器 杯	貯穴 1/2	① 11.4	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	器面が磨耗しているため整形は不鮮明ではあるが、口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。	
第193図3 P L. 132	土師器 杯	貯穴 完形	① 11.5 ④ 3.2	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい褐色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。	

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第193図4 P L. 132	土師器 杯	床 ほぼ完形	① 11.8 ④ 4.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい赤褐色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削りであるが、口縁部横ナデと底部ヘラ削りの間に極僅かに無調整部分が残る。	
第193図5 P L. 132	土師器 杯	床 ほぼ完形	① 12.0 ④ 3.7	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削りであるが、口縁部横ナデと底部ヘラ削りの間に極僅かに無調整部分が残る。	
第193図6 P L. 132	土師器 杯	貯穴 ほぼ完形	① 12.0 ④ 4.1	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削りであるが、口縁部横ナデと底部ヘラ削りの間に極僅かに無調整部分が残る。	
第193図7 P L. 132	土師器 杯	床 完形	① 12.7 ④ 4.2	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削りであるが、口縁部横ナデと底部ヘラ削りの間に極僅かに無調整部分が残る。	
第194図8 P L. 132	土師器 杯	床 1/5	① 12.8 ④ 4.4	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削りであるが、口縁部横ナデと底部ヘラ削りの間に極僅かに無調整部分が残る。	
第194図9 P L. 132	土師器 杯	床 完形	① 13.0 ④ 3.8	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。	
第194図10 P L. 132	土師器 杯	床 口縁部の一部を欠	① 15.4 ④ 5.7	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ。口縁部下半から底部はヘラ削り。	
第194図11 P L. 132	土師器 杯	床 3/4	① 15.8 ④ 5.8	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、横ナデ下に極僅かに無調整部分が残る。口縁部下半から底部はヘラ削り。	
第194図12 P L. 132	土師器 杯	床 1/5	① 16.6 ④ 5.3	①細砂粒 ②酸化焰 ③赤褐色	口縁部上半は横ナデ、横ナデ下に極僅かに無調整部分が残る。口縁部下半から底部はヘラ削り。	
第194図13 P L. 132	土師器 杯	床 1/4	① 18.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部と底部の間に弱い稜が見られる。口縁部は横ナデ。底部はヘラ削り。	
第194図14 P L. 132	土師器 杯	床 ほぼ完形	① 18.6 ④ 4.2	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部と底部の間に極弱い稜が見られる。口縁部は横ナデ。底部はヘラ削り。	
第194図15 P L. 133	須恵器 杯	床 完形	① 12.4 ② 7.0 ④ 3.4	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転ヘラ切り後回転ヘラ削り。	
第194図16 P L. 133	土師器 杯	埋没土 1/5	① 8.2 ②3.1②3.4 ④ 6.3	①細砂粒 ②酸化焰 ③浅黄色	台付甕脚部製作時に器種を変更か？口唇部は横ナデ。口縁部から底部は縦方向ヘラ削り。	
第195図17 P L. 133	須恵器 長頸瓶	貯穴 頸部より上を欠	② 9.0 最大径18.0	①細砂粒(黒色鉱物粒) ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向不明。肩部から胴部中程に凹線が5条巡る。胴部下半は平行叩目後左方向ヘラ削り。底部は不定方向ヘラ削り。	
第195図18 P L. 133	須恵器 広口壺	床 3/4	最大径17.6	①細砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向不明。外面胴部下半から底部は格子状叩、内面はハケ目。	
第195図19 P L. 133	土師器 甕	カマド 口縁部～胴部上位	① 15.6	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい褐色	口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は頸部に向けてのヘラ削り。内面はヘラナデ。	
第195図20 P L. 133	土師器 甕	カマド 口縁部～胴部上位片	① 20.6	①細砂粒(含雲母) ②酸化焰 ③橙色	口縁部から頸部は横ナデ、頸部に指頭痕が見られる。外面胴部は横方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第195図21 P L. 133	土師器 甕	カマド 口縁部～胴部中位片	① 18.4	①粗砂粒(赤色鉱物粒) ②酸化焰 ③にぶい橙色	輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は縦方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第195図22 P L. 133	土師器 甕	カマド 口縁部～胴部中位	① 22.8	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は斜め方向のヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第195図23 P L. 133	土師器 甕	カマド 口縁部～胴部上位片	① 24.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	頸部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は横方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。	

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 器 類 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第195図24 P L. 133	土師器 甕	床 胴部下半～ 底部	② 4.0	①粗砂粒(含む石英) ②酸化焙 ③橙色	外面胴部は縦方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。底 部はヘラ削り。	
第195図25 P L. 133	砥石	埋没土 完形	5.9g	軽石	軽石製の小形砥石。擦痕がみられる。	

72号住居跡

挿図番号 図版番号	種 器 類 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第197図1 P L. 133	須恵器 杯	床 ⅓	① 12.4 ② 4.2 ④ 3.7	①粗砂粒 ②還元焙焼成 ③灰オリーブ色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。	
第197図2 P L. 133	須恵器 杯	掘り方 ⅓	① 13.4 ② 6.2 ④ 4.2	①粗砂粒(φ5mmの 礫) ②酸化焙 ③浅黄色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。	
第197図3 P L. 133	須恵器 椀	埋没土 ⅓	① 13.6 ②7.2③7.7 ④ 5.9	①細砂粒 ②還元焙 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。 高台は貼付。	
第197図4 P L. 133	灰釉陶器 輪花皿	掘り方 口縁部片	① 12.8	①緻密 ②還元焙堅緻 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向不明。施釉方法は口縁部に 僅かに漬け掛け。釉調は透明感のある緑灰色。	
第197図5 P L. 133	灰釉陶器 小椀	埋没土 口縁部片	① 11.8	①緻密 ②還元焙 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向不明。施釉方法は漬け掛け。 釉調は不透明な灰白色。	
第197図6 P L. 133	灰釉陶器 椀	埋没土 口縁部片		①緻密 ②還元焙堅緻 ③灰色	ロクロ整形、回転方向不明。施釉方法は漬け掛け。 釉調は透明感のある緑灰色。	
第197図7 P L. 133	土師器 甕	床 口縁部～胴 部上位片	① 14.2	①細砂粒(含雲母) ②酸化焙 ③にぶい黄橙色	口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は横方向ヘラ 削り、内面はヘラナデ。	
第197図8 P L. 133	土師器 甕	カマド 口縁部～胴 部上位片	① 20.8	①細砂粒(含雲母) ②酸化焙 ③にぶい橙色	口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は横方向ヘラ 削り、内面はヘラナデ。	
第197図9 P L. 133	土師器 甕	カマド 胴部下位～ 底部片	② 5.8	①細砂粒 ②酸化焙 ③褐色	外面胴部は縦方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。底 部整形技法は不明。	

73号住居跡

挿図番号 図版番号	種 器 類 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第199図1 P L. 134	土師器 杯	カマド 口縁部の一 部を欠	① 10.6 ④ 3.7	①細砂粒 ②酸化焙 ③にぶい橙色	口縁部は横ナデ。底部はヘラ削り。口縁部横ナデ と底部ヘラ削りの間に無調整部分が残る。	
第199図2 P L. 134	土師器 杯	埋没土 ⅓	① 12.4 ④ 3.7	①細砂粒 ②酸化焙 ③にぶい橙色	口縁部は横ナデ。底部はヘラ削り。口縁部横ナデ と底部ヘラ削りの間に無調整部分が残る。	
第199図3 P L. 134	土師器 杯	床 ⅓	① 13.0 ④ 3.4	①細砂粒 ②酸化焙 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ 削り。	
第199図4 P L. 134	須恵器 杯	埋没土 ⅓	① 10.8 ② 6.2 ④ 3.2	①細砂粒 ②還元焙 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向不明。底部は不定方向ヘラ 削り調整。	
第199図5 P L. 134	須恵器 長頸瓶	埋没土 口縁部～頸 部	① 8.4	①細砂粒(黒色鉱物 粒) ②還元焙 ③灰色	ロクロ整形、回転方向不明。頸部中程に凹線が2 条巡る。	
第199図6 P L. 134	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴 部上位片	① 16.6	①粗砂粒(φ5mmの 礫) ②酸化焙 ③橙色	口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は頸部に向 けてのヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第199図7 P L. 134	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴 部上位片	① 23.2	①粗砂粒(含む石英) ②酸化焙 ③にぶい橙色	口縁部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ。 外面胴部は頸部に向けてのヘラ削り、内面はヘラ ナデ。	

挿図番号 図版番号	種 器 類 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第199図8 P.L. 134	棒状礫	床	368 g	珪質頁岩		

74号住居跡

挿図番号 図版番号	種 器 類 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第202図1 P.L. 134	土師器 杯	カマド ほぼ完形	① 12.2 ② 9.0 ④ 3.3	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。	
第202図2 P.L. 134	土師器 杯	床 1/2	① 13.0 ② 10.0 ④ 4.7	①細砂粒 ②酸化焰 ③明赤褐色	口縁部上半は横ナデ、下半は2段のヘラ削り。底部はヘラ削り。内面底部に「田」の墨書。	
第202図3 P.L. 134	土師器 椀	床 口縁部1/2を欠	① 19.6 ② 12.2 ④ 9.7	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部は横ナデ。体部上半は無調整、下半は左方向へ2段のヘラ削り。底部はヘラ削り。	
第202図4 P.L. 134	黒色土器 椀	中央小穴 底部片	② 7.6 ③ 7.6	①細砂粒 ②酸化焰内面黒色処理 ③橙色	ロクロ整形、回転方向不明。底部切り離し技法は高台貼付後のナデのため不明。内面はヘラ研磨。	
第202図5 P.L. 134	須恵器 杯	カマド 口縁部の一部、高台欠	① 12.3 ② 9.3	①細砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。高台は貼付。内面底部は全面的に擦り磨かれている。高台は打ち欠かれている。	転用硯
第202図6 P.L. 134	土師器 甕	カマド 口縁部～胴部中位片	① 20.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は上位が左方向へヘラ削り、中位が縦方向へヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	

75号住居跡

挿図番号 図版番号	種 器 類 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第203図1 P.L. 134	須恵器 杯	埋没土 1/2	① 12.0 ② 6.1 ④ 4.1	①細砂粒 ②還元焰 ③黄灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切りによる切り離しであるが、一度成形後薄い粘土板を貼付し、再度回転台に乗せ切り離している。	外面口縁部に墨書。
第203図2 P.L. 134	須恵器 椀	カマド 1/2	① 14.4 ② 7.4	①粗砂粒(赤色鉱物粒) ②酸化焰 ③橙色	ロクロ整形、回転方向不明。底部切り離し技法は高台貼付時のナデのため不明。高台は貼付であるが中程より欠損。	
第203図3 P.L. 134	灰釉陶器 小椀	埋没土 1/2	① 10.4 ②5.7③5.9 ④ 4.2	①緻密 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。高台は貼付。施釉方法は漬け掛け。釉調は不透明な黄灰色。	
第203図4 P.L. 134	灰釉陶器 椀	貯穴 口縁部の一部を欠	① 13.2 ②6.6③7.0 ④ 4.2	①細砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向左回り。底部は回転糸切り。高台は貼付。施釉方法は漬け掛け。釉調は不透明な灰白色。	
第203図5 P.L. 135	礫	貯穴 完形	2,055 g	粗粒安山岩	擦痕および炭化物の付着がみられる。	

76号住居跡

挿図番号 図版番号	種 器 類 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第205図1 P.L. 135	土師器 杯	埋没土 ほぼ完形	① 10.2 ② 9.1 ④ 3.0	①細砂粒(含雲母) ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部ヘラ削り。	
第205図2 P.L. 135	土師器 杯	カマド 1/2	① 10.4 ② 8.8 ④ 3.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部ヘラ削り。	
第205図3 P.L. 135	土師器 杯	埋没土 ほぼ完形	① 12.0 ② 11.0 ④ 3.3	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部ヘラ削り。	
第205図4 P.L. 135	土師器 杯	貯穴 ほぼ完形	① 12.2 ② 10.0 ④ 3.2	①細砂粒 ②酸化焰 ③明赤褐色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部ヘラ削り。	
第205図5 P.L. 135	土師器 杯	貯穴 底部片		①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	外面底部はヘラ削り、内面は横ナデ。外面に墨書、文字は判読不能。	

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第205図6 P.L. 135	須恵器 杯	埋没土 1/2	① 12.4 ② 6.8 ④ 3.2	①細砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転ヘラ切り後回転ヘラ削り。内外面の口縁部に重ね焼き痕が見られ、一部に自然釉が付着。	
第205図7 P.L. 135	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴部上位小片	① 21.8	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は横方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第205図8 P.L. 135	須恵器 杯	埋没土 底部片	径 6.7	①粗砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。底部の周辺部を打ち欠いている。	
第206図9 P.L. 135	瓦 丸瓦	Cd-1・ Ck-5 1/2	厚 1.7	①砂粒含 ②還元焰、やや甘い。 ③灰白色	凸面 縦方向ナデ。 凹面 全面布目痕。布の緩じ合せ有り。側端・広端面取り1回。側面・広端面 ケズリ。	二之宮洗橋 遺跡A区 1点接合
第206図10 P.L. 135	瓦 平瓦	床 ほぼ完成 -5	長 42.0 幅 27.9 厚 2.1	①砂粒含 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	凸面 縄叩き、後粗いナデ。 凹面 全面横方向ナデ。一部布目痕・糸切り痕残る。側端面取り1回。広端・狭端 面取り状の横方向ケズリ。 側面・広端面・狭端面ケズリ。	
第207図11 P.L. 135	瓦 丸瓦	床 1/2	長 37.0 幅 15.5 厚 1.2	①砂粒・小石含 ②還元焰 ③灰色	凸面 横方向ナデ、後一部縦方向ナデ。 凹面 全面布目痕。側端・広端面取り1回。 側面・広端面・狭端面 ケズリ。	行基葺き式
第207図12 P.L. 135	瓦 平瓦	床 破片	厚 2.1	①砂粒含 ②酸化焰 ③凸面黒色	凸面 密な縄叩き、後粗い縦方向ナデ。 凹面 全面ナデ。一部糸切り痕残る。側端面取り1回。側面・狭端面 ケズリ。	凹面・断面 にぶい褐色
第207図13 P.L. 135	瓦 平瓦	床 破片	厚 1.3	①砂粒・白色粒子含 ②酸化焰 ③にぶい橙色	凸面 縄叩き、後全面粗いナデ。 凹面 全面ナデ。一部布目痕残る。側端 幅のせまい面取り1回。側面 ケズリ。	表面半分 黒色
第207図14 P.L. 135	瓦 丸瓦	床 破片	厚 1.2	①砂粒含 ②還元焰 ③灰色	凸面 横方向ナデ。 凹面 布目痕。 端面 ケズリ。	胎土分析 IV章4節3
第207図15 P.L. 135	棒状礫	床 完形	477 g	変質安山岩		
第207図16 P.L. 135	棒状礫	床 完形	428 g	珩岩		

77号住居跡

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第208図1 P.L. 136	土師器 台付甕	床 脚部片	③ 12.8	①粗砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	外面は下半が横ナデ、上半が縦方向ヘラ削り。内面は横ナデ。	
第208図2 P.L. 136	棒状礫	床 完形	510 g	変質玄武岩		
第208図3 P.L. 136	棒状礫	床 完形	576 g	石英閃緑岩	端部に打痕がみられる。	
第208図4 P.L. 136	棒状礫	床 完形	435 g	粗粒安山岩		
第208図5 P.L. 136	棒状礫	床 完形	639 g	変質玄武岩		
第208図6 P.L. 136	砥石	埋没土 破片	(22.36 g)	頁岩	擦痕がみられる。	

78号住居跡

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第209図1 P.L. 136	須恵器 杯蓋	床 完形	① 14.7 ⑤ 4.0 ④ 3.1	①粗砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向左回り。口唇部は折り曲げ。摘は擬宝珠形を貼付。天井部摘周辺は回転ヘラ削り。内面は硯に転用のため墨が付着し、多少擦り磨かれている。	
第209図2 P.L. 136	土師器 甕	床 口縁部～胴部上位片	① 19.0	①粗砂粒(白色鉍物粒) ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部は横ナデ。外面胴部は縦方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。	

79号住居跡

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第210図1 P.L. 136	土師器 杯	カマド 1/4	① 11.8	①粗砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部下に稜をもつ。口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。	
第210図2 P.L. 136	土師器 杯	カマド 1/4	① 11.9 ④ 3.4	①粗砂粒 ②酸化焰 ③黄灰色	口縁部下に稜をもつ。口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。稜の僅かな部分は無調整。	

80号住居跡

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第212図1 P.L. 136	土師器 杯	カマド 1/3	① 10.2	①細砂粒 ②酸化焰(内面黒色処理) ③橙色	口縁部下に弱い稜をもつ。口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。	
第212図2 P.L. 136	土師器 甕	カマド 口縁部～胴部上位片	① 20.8	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部から頸部にかけては横ナデ。外面胴部は左方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第212図3 P.L. 136	土師器 甕	カマド 口縁部～胴部上位片	① 22.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	「コ」の字状口縁甕。口縁部から頸部にかけては横ナデ。外面胴部は左方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。	

81号住居跡

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第214図1 P.L. 136	土師器 杯	床 1/3	① 11.7 稜径12.4 ④ 4.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	口縁部下に明瞭な稜をもつ。口縁部は横ナデ。底部はヘラ削り。	
第214図2 P.L. 136	土師器 杯	床 1/3	① 12.8 稜径13.2 ④ 4.3	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	口縁部下に明瞭な稜をもつ。口縁部は横ナデ。底部はヘラ削り。	
第214図3 P.L. 136	土師器 杯	埋没土 1/3	① 12.2 稜径10.6 ④ 4.7	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部下に稜をもつ。口縁部は横ナデ。底部はヘラ削り。稜の僅かな部分は無調整。	
第214図4 P.L. 136	土師器 杯	床 1/3	① 12.4 稜径10.8 ④ 4.3	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部下に稜をもつ。口縁部は横ナデ。底部はヘラ削り。	
第214図5 P.L. 136	土師器 杯	埋没土 1/3	① 12.6 稜径10.8 ④ 4.7	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部下に稜をもつ。口縁部は横ナデ。底部はヘラ削り。	
第214図6 P.L. 136	土師器 杯	床 1/3	① 12.8 稜径10.3 ④ 4.6	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部下に稜をもつ。口縁部は横ナデ。底部はヘラ削り。	
第214図7 P.L. 136	須恵器 杯	埋没土 1/4	① 12.0 最大径13.8 ④ 3.9	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。口縁部下に受部が鐮状に付く。底部は回転ヘラ削り。	
第214図8 P.L. 136	須恵器 高杯	床 杯部1/2	① 10.8	①細砂粒 ②還元焰(内面酸化焰) ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。口縁部下に僅かに受部の痕跡を残す。底部は中程に回転ヘラ削り。脚部との接合に2～3条の沈線を巡らせている。	

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第214図9 P.L. 136	須恵器 高杯	床 底部～脚部 上位		①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。脚部に三角形の透かしを3カ所もつ。底部は中程に回転ヘラ削り。	
第214図10 P.L. 136	須恵器 甕	埋没土 胴部下半片	胴部最大径 8.4 孔径 1.0	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向不明。外面胴部は中程に凹線が1条巡り、孔の段には縦に列点文が施され、凹線より下位はヘラ削り。	
第214図11 P.L. 136	土師器 台付鉢	埋没土 口縁部 $\frac{1}{2}$	① 25.0	①粗砂粒(含石英) ②酸化焰 ③浅黄色	輪積痕が残る。内外面の整形痕は不鮮明。	
第214図12 P.L. 136	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴 部中位片	① 17.0	①粗砂粒 ②酸化焰 ③黄灰色	口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は縦方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第214図13 P.L. 137	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴 部中位片	① 20.6	①粗砂粒 ②酸化焰 ③黄灰色	口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は頸部に向けてのヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第214図14 P.L. 137	土師器 甕	床 口縁部～胴 部上位片	① 14.4	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部から胴部上位は横ナデ。外面胴部は横方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第215図15 P.L. 137	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴 部上位片	① 20.0	①粗砂粒 ②酸化焰 ③黄灰色	口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部はヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第215図16 P.L. 137	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴 部片	① 19.6	①細砂粒(含雲母) ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部はヘラ削りで上半は雑、下半は丁寧なヘラ研磨。内面はヘラナデ。	
第215図17 P.L. 137	白玉	埋没土 完形	0.4 g	滑石		
第215図18 P.L. 137	白玉	埋没土 完形	0.8 g	滑石		
第215図19 P.L. 137	棒状礫	床 完形	577 g	流紋岩	中央部に紐ずれ痕がみられる。	
第215図20 P.L. 137	棒状礫	床 完形	389 g	溶結凝灰岩	中央部に紐ずれ痕がみられる。	

82号住居跡

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第217図1 P.L. 137	須恵器 杯蓋	床 口縁部 $\frac{1}{4}$ 摘周辺を欠	① 17.4	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。口唇部は折り曲げ。摘は擬宝珠形で貼付、周辺を打ち欠かされている。天井部は回転糸切り後、摘周辺を回転ヘラ削り。	
第217図2 P.L. 137	土師器 甕	カマド 口縁部～胴 部上位片	① 19.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	「コ」の字状口縁甕。頸部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は左方向へのヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第217図3 P.L. 137	土製品	埋没土 破片		①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	器面に植物茎の庄痕がみられる。	
第217図4 P.L. 137	紡錘車	壁 完形	51.4 g	粗粒安山岩	体部は平滑面を形成する。	
第217図5 P.L. 137	鉄釘	埋没土 破片			両端を欠損する。	
第217図6 P.L. 137	鉄釘	埋没土 破片			両端を欠損する。	

83号住居跡

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第218図1 P.L. 137	黒色土器 椀	床 口縁部 $\frac{1}{4}$	① 12.6	①細砂粒 ②酸化焰(内面黒色 処理) ③灰黄色	口唇部は横ナデ。口縁部は左方向ヘラ削り。内面は全面的に横方向ヘラ研磨。外面口縁部に墨書。	
第218図2 P.L. 137	須恵器 椀	床 $\frac{1}{2}$	① 14.2 ②7.4③7.4 ④ 5.1	①細砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向不明。底部は回転糸切り。高台は貼付。	

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第218図3 P.L. 137	土師器 甕	カマド 口縁部～胴 部上位片	① 20.8	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は左方向ヘラ 削り、内面はヘラナデ。	

84号住居跡

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第219図1 P.L. 138	土師器 杯	埋没土 小片	① 13.0 稜径13.4	①細砂粒 ②酸化焰 ③明赤褐色	口縁部下に明瞭な稜をもつ。口縁部から稜にかけ ては横ナデ。底部はヘラ削り。	

85号住居跡

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第221図1 P.L. 138	須恵器 杯	床 1/3	② 7.6	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。 内面に朱墨痕が残る。	
第221図2 P.L. 138	須恵器 杯	床 完形	① 12.4 ② 7.0 ④ 4.0	①細砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。	
第221図3 P.L. 138	須恵器 杯	床 3/4	① 13.6 ② 8.8 ④ 3.9	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。	
第221図4 P.L. 138	土師器 椀	床 口縁部の一 部欠	① 18.4 ② 11.2 ④ 8.7	①細砂粒 ②酸化焰 ③明赤褐色	口縁部は横ナデ、口縁部下に僅かに無調整部分が 残る。体部は3～4段のヘラ削り。底部はヘラ削 り。内面上半に漆が付着。	
第221図5 P.L. 138	土師器 甕(台付甕)	床 口縁部～胴 部上位片	① 13.4	①細砂粒 ②酸化焰 ③明赤褐色	「コ」の字状口縁甕。口縁部から頸部は横ナデで 口縁部に指頭痕が見られる。外面胴部は横方向ヘ ラ削り、内面はヘラナデ。	
第221図6 P.L. 138	土師器 台付甕	床 脚部片	③ 10.8	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい褐色	脚部は横ナデ。	

87号住居跡

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第223図1 P.L. 138	土師器 杯	埋没土 1/2	① 12.1 ② 7.6 ④ 3.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい赤褐色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ 削り。	

88号住居跡

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第226図1 P.L. 138	土師器 杯	床 1/2	① 11.3 ④ 3.4	①細砂粒(含石英) ②酸化焰 ③にぶい黄色	口縁部下に明瞭な稜をもつ。口縁部は横ナデ。底 部はヘラ削りであるが、器面が荒れており単位等 は不明。	
第226図2 P.L. 138	土師器 杯	カマド 1/2	① 12.1 ④ 4.4	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部下に明瞭な稜をもつ。口縁部は横ナデ。稜 下は無調整。底部はヘラ削り。	
第226図3 P.L. 138	土師器 杯	埋没土 1/4	① 12.6 ④ 4.6	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい黄褐色	口縁部下に極弱い稜をもつ。口縁部は横ナデ。底 部はヘラ削り。	
第226図4 P.L. 138	土師器 鉢	床 口縁部片	① 21.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部中程に凹線が1条巡り、横ナデ。体部はヘ ラ削り。	
第226図5 P.L. 138	土師器 甕	カマド 口縁部～胴 部中位片	① 21.0	①粗砂粒(φ5mm礫、 赤色鉱物粒) ②酸化焰 ③橙色	口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は頸部に向け てのヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第226図6 P.L. 138	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴 部上位片	① 21.8	①粗砂粒 ②酸化焰 ③明赤褐色	口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は頸部に向け てのヘラ削り、内面はヘラナデ。	

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 器 類 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第226図7 P L. 138	土師器 甕	床 口縁部~胴 部上位片	① 12.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部はへら削り、 内面はへらナデ。	
第226図8 P L. 138	土師器 甕	床 口縁部~胴 部上位片	① 23.2	①粗砂粒 ②酸化焰 ③浅黄色	口縁部から頸部は横ナデ。内面頸部はハケ目(単位 不明)外面胴部はへら削り、内面はへらナデ。	
第226図9 P L. 138	白玉	床 完形	2.0 g	滑石		
第226図10 P L. 138	白玉	床 一部欠	2.1 g	滑石		
第226図11 P L. 138	棒状礫	床 完形	516 g	粗粒安山岩		
第226図12 P L. 138	棒状礫	床 完形	837 g	石英閃緑岩		
第226図13 P L. 138	棒状礫	床 完形	560 g	石英斑岩	中央に紐ずれ痕がみられる。	
第226図14 P L. 138	棒状礫	床 完形	597 g	粗粒安山岩		
第226図15 P L. 138	棒状礫	床 完形	852 g	変質玄武岩		
第226図16 P L. 138	扁平礫	床 完形	357 g	粗粒安山岩		

1号掘立柱建物跡

挿図番号 図版番号	種 器 類 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第227図1 P L. 139	土師器 杯	P 1 内 $\frac{3}{4}$	① 12.2 ② 10.8 ④ 3.3	①細砂粒 ②酸化焰 ③明赤褐色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はへら 削り。	

2号掘立柱建物跡

挿図番号 図版番号	種 器 類 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第228図1 P L. 139	土師器 杯	P 5 内 $\frac{1}{3}$	① 9.8 稜径9.0 ④ 2.6	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部下に明瞭な稜をもつ。口縁部は横ナデ、底 部はへら削り。	

87号土坑

挿図番号 図版番号	種 器 類 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第230図1 P L. 140	土師器 杯	埋没土下部 $\frac{3}{4}$	① 11.6 稜径10.0 ④ 4.0	①粗砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部下に弱い稜をもつ。口縁部中程と口縁部下 に凹線が巡る。口縁部は横ナデ、底部はへら削り。 稜は無調整。	

1号土坑

挿図番号 図版番号	種 器 類 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第238図1 P L. 139	土師器 杯	埋没土 $\frac{3}{4}$	① 12.2 ② 8.0 ④ 3.2	①細砂粒 ②酸化焰 ③明赤褐色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はへら 削り。外面口縁部に「明」の墨書。	

2号土坑

挿図番号 図版番号	種 器 類 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第238図2 P L. 139	土師器 杯	埋没土 完形	① 13.2 ④ 3.7	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横無で、下半は無調整。底部はへら 削り。	
第238図3 P L. 139	土師器 甕	埋没土 底部	② 7.2	①細砂粒(含雲母) ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	胴部は打ち欠かれたのか?外面胴部は縦方向へら 削り。底部は不定方向へのへら削り。	

9号土坑

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第238図4 P.L. 139	須恵器 蓋	埋没土 1/4	① 15.0 ⑤ 5.0 ④ 2.6	①微砂粒 ②酸化焰 ③明赤褐色	ロクロ整形、回転方向右回り。口唇部は折り曲げ。 摘は輪状で貼付。天井部摘周辺は回転ヘラ削り。	

11号土坑

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第238図5 P.L. 139	土師器 杯	埋没土 1/4	① 11.8 ② 10.0 ④ 2.7	①細砂粒 ②還元焰 ③にぶい赤褐色	口縁部上半は横撫で、下半は無調整。底部はヘラ削り。	

27号土坑

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第238図6 P.L. 139	須恵器 長頸瓶	埋没土下部 口縁部～頸部	① 10.0	①細砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。口唇部は上下に引き出されている。頸部に突帯が巡る。内外面に自然釉が付着。	
第238図7 P.L. 139	須恵器 椀	埋没土下部 底部	② 7.8 ③ 8.2	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転ヘラ調整後高台を貼付。体部は打ち欠かれ、内面底部は擦り磨かれている。	

28号土坑

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第238図8 P.L. 139	須恵器 杯蓋	埋没土 1/5	① 15.6	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。口唇部は折り曲げ。 摘は剥落で摘下に回転糸切り痕が残る。摘周辺は回転ヘラ削り。	

32号土坑

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第238図9 P.L. 139	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴部 中位片	① 20.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③明赤褐色	口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は上位が左方向、中位が底部に向けてのヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第238図10 P.L. 139	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴部 上位片	① 21.6	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	「コ」の字状口縁甕。口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は横方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。	

42号土坑

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第238図11 P.L. 139	棒状礫	埋没土 完形	343 g	細粒安山岩	器面に擦痕がみられる。磨石か。	

43号土坑

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第238図12 P.L. 139	土師器 杯	埋没土 1/5	① 8.2 稜径 9.2	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	口縁部下に弱い稜をもつ。口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。内面底部はヘラナデ。	
第238図13 P.L. 139	土師器 杯	埋没土 1/5	① 11.0 稜径 9.2 ④ 3.8	①細砂粒 ②酸化焰軟質 ③橙色	口縁部下に稜をもつ。口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。	
第238図14 P.L. 139	土師器 杯	埋没土 1/4	① 11.8 稜径 11.2	①細砂粒(含石英) ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部下に稜をもつ。口縁部は横ナデ、部分的に波状の凹線とハケ目が見られる。底部はヘラ削り。内面は口縁部が横方向、底部が放射状ヘラ研磨。	
第238図15 P.L. 139	土師器 杯	埋没土 1/4	① 13.8 稜径 12.4 ④ 3.9	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい赤褐色	口縁部下に弱い稜をもつ。口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。内面底部はヘラナデ。	

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第238図16 P L. 139	土師器 杯	埋没土 1/4	① 12.8 稜径12.2	①細砂粒(含石英) ②酸化焰 ③明赤褐色	口縁部下に稜をもつ。口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。内面は口縁部が横方向、底部が放射状ヘラ研磨。	
第238図17 P L. 139	土師器 小型甕	埋没土 口縁部～胴部上位片	① 11.2	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部は横ナデ。外面胴部は横方向ヘラ削り、内面胴部はヘラナデ。	
第239図18 P L. 139	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴部上位片	① 19.0	①細砂粒(含雲母) ②酸化焰 ③にぶい黄褐色	頸部に凹線が1条巡る。口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は左方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第239図19 P L. 139	土師器 甕	埋没土 胴部片		①細砂粒 ②酸化焰 ③明褐色	頸部は横ナデ。外面胴部は縦方向ヘラ削りで部分的にヘラ研磨、内面はハケ目後ヘラナデ。	
第239図20	紡錘車	完形	44g	蛇紋岩	器面に成形時の擦痕が残る。	

49号土坑

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第239図21 P L. 139	土師器 杯	埋没土 完形	① 8.8 稜径 8.0 ②7.4③3.2	①細砂粒(含雲母) ②酸化焰 ③橙色	口縁部下に弱い稜をもつ。口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。稜と稜下に無調整部分が残る。	
第239図22 P L. 139	土師器 高杯	埋没土 脚部片	③ 18.4	①細砂粒 ②酸化焰 ③黄灰色	脚部上半は端部へのヘラ削り、下半は横ナデ。内面上半は縦方向、下半は横方向ヘラナデ、端部は横ナデ。	
第239図23 P L. 139	須恵器 皿	埋没土 2/3	① 14.2 ②6.1③6.7 ④ 3.0	①粗砂粒(φ5mm 稜) ②還元焰 ③黄灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部が回転糸切り、高台は貼付し、ヘラナデ。	

57号土坑

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第239図24 P L. 140	土師器 杯	埋没土 1/2	① 12.8 ② 12.4 ④ 4.4	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい赤褐色	口縁部に凹線が3～4条巡る。口縁部は横ナデ。底部はヘラ削り。口縁部横ナデと底部ヘラ削りの間に無調整部分が残る。	
第239図25 P L. 140	土師器 杯	埋没土 1/6	① 14.0 稜径12.2	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部下に明瞭な稜をもつ。口縁部は横ナデ。底部はヘラ削りが施されているが単位・方向は不明。	
第239図26 P L. 140	須恵器 瓶	埋没土 口縁部～胴部上位片	① 10.8	①細砂粒(黒色鉱物粒) ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向不明。外面口縁部から胴部にカキ目が見られる。内外面の一部に自然釉が付着。	
第239図27 P L. 140	瓦 平瓦	埋没土 破片	厚 1.6	①砂粒含 ②酸化焰 ③浅黄橙色	凸面 縄叩き、後ヘラナデ。 凹面 全面ナデ。側端・狭端面取り1回。 側面・狭端面 ケズリ。	

74号土坑

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第239図28 P L. 140	鉄製品	埋没土 破片			器種不明。	

85号土坑

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第239図29 P L. 140	土師器 杯	埋没土 1/4	① 14.6 ④ 3.7	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。外面底部に墨書。	
第239図30 P L. 140	須恵器 杯	埋没土 完形	① 13.4 ② 10.2 ③ 3.8	①粗砂粒 ②還元焰 ③浅黄色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転ヘラ削り。	

31号土坑(墓墳)

挿図番号 図版番号	種 器 類 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備 考
第241図12 P L. 140	木製品	埋没土				

33号土坑(墓墳)

挿図番号 図版番号	種 器 類 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備 考
第242図1 P L. 140	陶器 菊皿	埋没土 完形	① 13.8 ②8.1③8.1 ④ 3.5	① ② ③灰白色		
第242図2 P L. 140	陶器 菊皿	埋没土 完形	① 13.9 ②8.3③6.9 ④ 3.8	① ② ③浅黄色		

35号土坑(墓墳)

挿図番号 図版番号	種 器 類 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備 考
第243図1 P L. 140	陶器 皿	埋没土 完形	① 11.1 ② 7.8 ④ 2.4	① ② ③にぶい黄色		
第243図2 P L. 140	陶器 皿	埋没土 高台部欠損	① 10.8 ② 7.1 ④ 2.0	① ② ③灰白色		

36号土坑(墓墳)

挿図番号 図版番号	種 器 類 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備 考
第244図1 P L. 141	木製品	埋没土 底部欠損			桜皮製の印籠で、漆加工が施される。	
第244図2 P L. 141		埋没土				ビーズ玉
第244図3 P L. 141	鉄	埋没土 刃部欠	長 13.8			

61号土坑(墓墳)

挿図番号 図版番号	種 器 類 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備 考
第245図1 P L. 141	摺鉢	埋没土 完形	① 35.1 ② 13.2 ④ 15.0		体部下半部に一ヶ所欠損部がある。意図的に欠いて埋葬したとみられる。	鉢かぶり。
第245図2	キセル	埋没土 火皿部	① 1.9 ④ 6.5		両面ともたいて潰されている。口縁は平坦となり、下部は内側にくぼむ。火皿は直接的に立ち上がり、現6.5ミリ、推定高7ミリ程度とみられる。	

64号土坑(墓墳)

挿図番号 図版番号	種 器 類 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備 考
第246図1 P L. 141	陶器 皿	完形	① 10.8 ② 6.9 ④ 2.1	① ② ③灰色		

92号土坑(墓墳)

挿図番号 図版番号	種 器 類 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備 考
第248図18 P L. 142	棒状礫	底面 完形	300 g	粗粒安山岩	一面に磨痕がみられる。	

遺物観察表

1号井戸

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第255図1 P L. 142	須恵器 杯	埋没土 底部を $\frac{1}{4}$ 欠	① 11.7	①細砂粒 ②還元焰燻焼成 ③黄灰色	ロクロ整形、回転方向左回り。底部は回転系切り。	
			② 5.7			
			④ 3.7			
第255図2 P L. 142	須恵器 椀	埋没土 $\frac{1}{3}$	② 7.4	①粗砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転系切り。 高台は貼付。	
			③ 8.0			

2号井戸

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第255図3 P L. 142	砥石	埋没土 端部欠損	(57.7g)	砥沢石	各面とも使用痕が残る。	
第255図4 P L. 142	砥石	埋没土 端部欠損	(25g)	砥沢石		
第255図5 P L. 142	砥石	埋没土 端部欠損	(28g)	砥沢石		
第255図6 P L. 142	紡錘車	埋没土 完形	34.3g	蛇紋岩	器面に成形痕が残る。	
第255図7 P L. 148	土製品 瓦塔	埋没土 軸部破片		①砂粒多 ②還元焰 ③灰白色	台輪・斗拱は粘土貼りつけ。台輪・大斗のみ残存。 大斗と肘木は、刀子状工具で切り出す。壁面は内外面とも横ナデ。(瓦塔B類か)	

5号井戸

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第255図10 P L. 142	須恵器 高杯	埋没土 底部～脚部 片		①粗砂粒(黒色鉱物 粒) ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。杯身底部の外面は 回転ヘラ切り、内面は丁寧なナデ。	

6号井戸

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第255図11 P L. 142	須恵器 杯蓋	埋没土 $\frac{1}{2}$	① 14.9	①細砂粒(黒色鉱物 粒) ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向不明。口唇部は折り曲げ。 蓋は偏平で貼付。天井部摘周は回転ヘラ削りで 自然釉が付着。	
			⑤ 4.1			
			④ 2.7			
第255図12 P L. 142	須恵器 盤	埋没土 $\frac{1}{2}$	① 24.0	①細砂粒 ②還元焰軟質 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回りか? 外面底部は回転 ヘラ削り、内面はカキ目。	
			② 19.6			

7号井戸

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第255図13 P L. 142	軟質陶器 内耳焙烙	埋没土 $\frac{1}{4}$	① 34.6	①細砂粒 ②還元焰 ③黄灰色	外面口縁部の上半は横ナデ、下半はヘラ削り、底 部は砂底。内面は横ナデ、把手は指頭痕が残る。	
			② 33.6			
			④ 5.2			

10号井戸

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第255図14 P L. 142	黒色土器 杯	埋没土 $\frac{3}{4}$	① 13.3	①細砂粒 ②酸化焰内面黒色処 理 ③にぶい黄橙色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転ヘラ削 り。内面は全面的にヘラ研磨。	
			② 6.2			
			④ 3.8			
第255図15 P L. 142	須恵器 杯	埋没土 $\frac{1}{2}$	① 11.4	①細砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転系切り。	
			② 4.6			
			④ 3.7			
第256図16 P L. 142	須恵器 杯	埋没土 $\frac{3}{4}$	① 12.0	①粗砂粒($\phi 5\sim 10\text{mm}$ の礫) ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転系切り。 内面底部に「ナ」の墨書。	
			② 5.2			
			④ 3.9			

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第256図17 P L. 142	須恵器 杯	埋没土 完形	① 12.4 ② 5.2 ④ 3.8	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	ロクロ整形、回転方向左回り。底部は回転糸切り。	
第256図18 P L. 142	須恵器 椀	埋没土 底部	② 9.0 ③ 9.0	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付で周辺はナデ。	
第256図19 P L. 142	土製品 甕形土器	埋没土 釜口～焚口 片	① 32.6	①粗砂粒(赤色鉱物) ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	底は貼付。外面釜口、底、底周辺はナデ。釜口下はへら削り。内面はへらナデ。	

11号井戸

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第256図20 P L. 143	土師器 杯	埋没土 1/2	① 13.2 ② 11.6 ④ 2.6	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい褐色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はへら削り。	
第256図21 P L. 143	土師器 杯	埋没土 口縁部の一 部を欠	① 12.9 ② 11.3 ④ 3.5	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整で指頭痕が残る。底部はへら削り。	
第256図22 P L. 143	土師器 杯	埋没土 口縁部片	① 10.8	①細砂粒 ②酸化焰 ③赤褐色	口縁部は横ナデ。内面に漆が付着。	
第256図23 P L. 143	土師器 杯	埋没土 1/2	① 11.7 ④ 3.5	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整で指頭痕が残る。底部はへら削り。	
第256図24 P L. 143	土師器 杯	埋没土 1/2	① 11.6 ④ 3.5	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整で指頭痕が残る。底部はへら削り。	
第256図25 P L. 143	土師器 杯	埋没土 1/2	① 11.8 ④ 3.8	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部は横ナデ。底部はへら削りであるが口縁部下に部分的に無調整部分が残る。	
第257図26 P L. 143	土師器 杯	埋没土 1/2	① 11.9 ④ 3.2	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はへら削り。	
第257図27 P L. 143	土師器 杯	埋没土 1/4	① 12.0 ④ 3.1	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はへら削り。	
第257図28 P L. 143	土師器 杯	埋没土 1/2	① 12.0 ④ 4.4	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はへら削り。	
第257図29 P L. 143	土師器 杯	埋没土 1/4	① 12.1 ④ 3.8	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はへら削り。口唇部の一部に煤が付着。	
第257図30 P L. 143	土師器 杯	埋没土 1/2	① 12.2 ④ 3.6	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はへら削り。	
第257図31 P L. 143	土師器 杯	埋没土 1/2	① 12.2 ④ 3.6	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はへら削り。	
第257図32 P L. 143	土師器 杯	埋没土 1/2	① 12.2 ④ 4.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部は横ナデ。底部はへら削りであるが口縁部下に部分的に無調整が残る。	
第257図33 P L. 143	土師器 杯	埋没土 1/2	① 12.3 ④ 3.6	①粗砂粒(赤色鉱物 粒) ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はへら削り。	
第257図34 P L. 143	土師器 杯	埋没土 1/2	① 12.4 ④ 4.6	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい褐色	口縁部は横ナデ、底部はへら削り。口縁部横ナデと底部へら削りの間に僅かに無調整部分が残る。	
第257図35 P L. 143	土師器 杯	埋没土 1/4	① 12.4 ④ 3.8	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はへら削り。内面の器面は荒れている。	

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第257図36 P L. 143	土師器 杯	埋没土 2/3	① 12.6 ④ 3.7	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。	
第257図37 P L. 143	土師器 杯	埋没土 2/3	① 13.0 ④ 3.6	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。	
第258図38 P L. 143	土師器 杯	埋没土 3/4	① 13.5 ④ 4.4	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。内面の器面は荒れている。	
第258図39 P L. 143	土師器 杯	埋没土 1/2	① 14.0 ④ 4.8	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。	
第258図40 P L. 143	土師器 杯	埋没土 3/4	① 14.4 ④ 4.1	①細砂粒 ②酸化焰 ③明黄褐色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。	
第258図41 P L. 143	土師器 杯	埋没土 1/2	① 14.7 ④ 4.5	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。内面の器面は荒れている。	
第258図42 P L. 143	土師器 杯	埋没土 1/2	① 15.5 ④ 4.6	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。口縁部横ナデと底部ヘラ削りの間に僅かに無調整部分が残る。	
第258図43 P L. 143	土師器 杯	埋没土 口縁部の一部を欠	① 15.8 稜径13.6 ④ 4.4	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部下に稜をもつ。口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。	
第258図44 P L. 143	土師器 杯	埋没土 1/2	① 16.3 稜径14.2 ④ 3.8	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部下に稜をもつ。口縁部は横ナデ、底部はヘラ削りであるが口縁部下に無調整部分が残る。	
第258図45 P L. 143	土師器 椀	埋没土 1/2	① 16.4 ④ 7.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。体部から底部はヘラ削り。	
第258図46 P L. 143	黒色土器 椀	埋没土 1/2	① 17.8 ② 10.0 ④ 5.8	①細砂粒(赤色鉱物粒) ②酸化焰内面 黒色処理 ③橙色	ロクロ整形、回転方向不明。内外面は口縁部、底部ともヘラ研磨が施されているが外面は整形の方向、単位とも不鮮明。	
第259図47 P L. 143	須恵器 杯	埋没土 完形	① 10.6 ② 8.2 ④ 3.6	①細砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は一定方向ヘラ削り。	
第259図48 P L. 143	須恵器 杯	埋没土 1/2	① 10.8 ② 7.3 ④ 3.6	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向不明。底部は一定方向ヘラ削り。	
第259図49 P L. 143	須恵器 杯	埋没土 1/2	① 11.8 ② 7.6 ④ 3.6	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向不明。底部は回転ヘラ切り後回転ヘラ削りか。	
第259図50 P L. 143	須恵器 杯	埋没土 ほぼ完形	① 13.5 ② 8.2 ④ 3.7	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転ヘラ切りで「X」の刻書。	
第259図51 P L. 143	須恵器 椀	埋没土 1/2	② 9.5 ③ 9.8	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回りか？底部は回転糸切り。高台は貼付で畳付け部分に乾燥時のあて具痕が残る。	
第259図52 P L. 144	須恵器 椀	埋没土 1/2	① 15.9 ② 9.6 ③ 10.4 ④ 7.2	①細砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り、内面に粘土を貼付しナデつけている。高台は貼付。	
第259図53 P L. 144	須恵器 短頸壺	埋没土 1/2	① 5.8 ② 5.6 ④ 5.2	①粗砂粒(黒色鉱物粒) ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向不明。底部は一定方向ヘラ削り。体部最下位に回転ヘラ削りが1段施されている。外面上半と内面底部に自然釉が付着。	
第259図54 P L. 144	須恵器 長頸瓶	埋没土 口縁部～頸部	① 8.8	①粗砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。頸部と胴部の接合部に指頭痕が残る。	
第259図55 P L. 144	土師器 小型丸底壺	埋没土 胴部1/2	胴部最大径 14.8	①細砂粒(赤色鉱物粒、雲母) ②酸化焰 ③橙色	外面胴部は横方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。底部はヘラ削り。	

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第259図56 P L. 144	土師器 台付甕	埋没土 脚部片	② 5.2 ③ 8.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	外面は横ナデ、内面上位はヘラナデ、端部は横ナデ。	
第259図57 P L. 144	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴 部上位	① 21.0	①細砂粒(赤色鉱物 粒) ②酸化焰 ③橙色	頸部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ。 外面胴部は横方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第259図58 P L. 144	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴 部上位	① 23.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	外面口縁部と内面口唇部に凹線が1条巡る。口縁 部から頸部は横ナデ。外面胴部はヘラ削り、内面 はヘラナデ。	
第259図59 P L. 144	須恵器 杯	埋没土 底部	② 8.8	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転ヘラ削 り。内面底部は擦り磨かれている。	転用硯か
第259図60 P L. 144	羽口	埋没土 破片			羽口片。	
第259図61 P L. 144	棒状礫	埋没土 完形	274 g	変質安山岩	器面に擦痕がみられる。	

12号井戸

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第260図62 P L. 144	陶器 片口鉢	埋没土 1/6	① 30.4 ② 19.0 ④ 16.2	①粗砂粒(φ5mm礫) ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向不明。口唇部は内側に折り 返している。高台は貼付。内面体部は擦り磨かれ ており、搦鉢として使用されたものか？	知多窯産 13C.代
第260図63 P L. 144	礫	埋没土 完形	1,267 g	石英閃緑岩	打痕、擦痕がみられる。	
第260図64 P L. 144	砥石	埋没土 破片		流紋岩		

15号井戸

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第260図65 P L. 144	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴 部上位片	① 20.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部はヘラ削り、 内面は横ナデ。	
第260図66 P L. 144	土錘	埋没土 完形	12.4 g	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	器面にヘラによる成形痕が残る。	
第260図67 P L. 144	土錘	埋没土 完形	17.3 g	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	器面にヘラによる成形痕が残る。	
第260図68 P L. 144	土錘	埋没土 完形	13.5 g	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	器面にヘラによる成形痕が残る。	
第260図69 P L. 144	土錘	埋没土 完形	14.2 g	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	器面にヘラによる成形痕が残る。	
第260図70 P L. 144	土錘	埋没土 完形	14.2 g	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	器面にヘラによる成形痕が残る。	
第260図71 P L. 144	土錘	埋没土 完形	10.7 g	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	器面にヘラによる成形痕が残る。	
第260図72 P L. 144	土錘	埋没土 完形	13.9 g	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	器面にヘラによる成形痕が残る。	
第260図73 P L. 144	土錘	埋没土 完形	16.3 g	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	器面にヘラによる成形痕が残る。	
第260図74 P L. 144	土錘	埋没土 完形	14.9 g	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	器面にヘラによる成形痕が残る。	

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 器 類 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第260図75 P L. 144	土錘	埋没土 完形	15.0 g	①細砂粒 ②酸化焙 ③にぶい橙色	器面にヘラによる成形痕が残る。	
第260図76 P L. 144	土錘	埋没土 完形	7.8 g	①細砂粒 ②酸化焙 ③にぶい橙色	器面にヘラによる成形痕が残る。	
第260図77 P L. 144	土錘	埋没土 完形	12.9 g	①細砂粒 ②酸化焙 ③にぶい橙色	器面にヘラによる成形痕が残る。	
第260図78 P L. 144	土錘	埋没土 完形	18.3 g	①細砂粒 ②酸化焙 ③にぶい橙色	器面にヘラによる成形痕が残る。	
第260図79 P L. 144	土錘	埋没土 完形	18.9 g	①細砂粒 ②酸化焙 ③にぶい橙色	器面にヘラによる成形痕が残る。	

18号井戸

挿図番号 図版番号	種 器 類 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第262図95 P L. 145	土師器 杯	埋没土 1/3	① 11.0 ④ 3.3	①細砂粒(赤色鉱物 粒) ②酸化焙 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、口縁部下半から底部周辺部 は無調整、底部はヘラ削り。	

19・20号井戸

挿図番号 図版番号	種 器 類 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第261図80 P L. 145	土師器 杯	埋没土 1/2	① 10.8 ④ 3.5	①細砂粒 ②酸化焙 ③にぶい橙色	口縁部の上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘ ラ削り。	
第261図81 P L. 145	土師器 杯	埋没土 5/6	① 11.0 ④ 3.3	①細砂粒 ②酸化焙 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。口縁部は横ナ デと底部はヘラ削りの間に無調整が残る。	
第261図82 P L. 145	土師器 杯	埋没土 1/3	① 11.0 最大径11.4 ④ 3.6	①細砂粒 ②酸化焙 ③にぶい橙色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。	
第261図83 P L. 145	土師器 杯	埋没土 完形	① 11.2 最大径11.6 ④ 3.5	①粗砂粒(赤色鉱物 粒) ②酸化焙 ③橙色	口縁部の上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘ ラ削り。	
第261図84 P L. 145	土師器 杯	埋没土 3/4	① 11.8 最大径12.4 ④ 3.8	①細砂粒 ②酸化焙 ③橙色	口縁部の上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘ ラ削り。	
第261図85 P L. 145	土師器 杯	埋没土 1/2	① 11.9 最大径12.2 ④ 4.3	①粗砂粒 ②酸化焙 ③橙色	口縁部の上半は横ナデ、下半は無調整が残るが一 部ヘラ削りが施されている。底部はヘラ削り。	
第261図86 P L. 145	土師器 杯	埋没土 1/2	① 12.3	①細砂粒 ②酸化焙 ③橙色	口縁部の上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘ ラ削り。	
第261図87 P L. 145	土師器 杯	埋没土 1/2	① 12.8 ④ 4.1	①細砂粒 ②酸化焙 ③橙色	口縁部の上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘ ラ削り。	
第261図88 P L. 145	土師器 杯	埋没土 完形	① 12.8 ④ 4.4	①細砂粒 ②酸化焙 ③橙色	口縁部の上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘ ラ削り。	
第261図89 P L. 145	土師器 杯	埋没土 ほぼ完形	① 13.0 最大径13.6 ④ 3.6	①細砂粒 ②酸化焙 ③橙色	口縁部の上半は横ナデ、底部はヘラ削り。口縁部 横ナデと底部ヘラ削りの間に僅かに無調整部分が 残る。	
第261図90 P L. 145	土師器 杯	埋没土 ほぼ完形	① 13.0 最大径13.4 ④ 4.1	①細砂粒 ②酸化焙 ③にぶい橙色	口縁部の上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘ ラ削り。	

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第261図91 P L. 145	土師器 杯	埋没土 1/5	① 13.4 最大径13.8 ④ 4.4	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部に輪積痕が残る。口縁部の上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。	
第262図92 P L. 145	土師器 杯	埋没土 ほぼ完形	① 14.0 最大径14.4 ④ 4.2	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部の上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。	
第262図93 P L. 145	土師器 杯	埋没土 3/4	① 15.8 ④ 5.2	①粗砂粒(赤色鉱物 粒) ②酸化焰 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。	
第262図94 P L. 145	土師器 甕	埋没土 胴部下位～ 底部	② 6.2	①細砂粒(赤色鉱物 粒) ②酸化焰 ④ にぶい橙色	輪積痕が残る。外面は胴部が縦方向、底部が不定方向ヘラ削り。内面はヘラナデ。	

23号井戸

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第262図96 P L. 145	土師器 杯	埋没土 口縁部の一 部を欠	① 14.1 ② 11.8 ④ 3.3	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部の上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り、所々に指頭痕が残る。外面底部に「オ」の墨書。	
第262図97 P L. 145	須恵器 椀	埋没土 底部	② 9.0 ③ 9.6	①粗砂粒(φ5mmの礫) ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付。外面底部に「大里」の墨書、内面は擦り磨かれている。	転用硯か
第262図98 P L. 145	須恵器 椀	埋没土 3/4	① 15.7 ②9.2③9.4 ④ 7.4	①粗砂粒(φ5mmの礫) ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付。	

25号井戸

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第262図99 P L. 146	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴 部中位片	① 20.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部はヘラ削り、内面はヘラナデ。	

27号井戸

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第262図100 P L. 146	軟質陶器 内耳焙烙	埋没土 小片	① 34.0 ② 30.2 ④ 5.1	①細砂粒 ②酸化焰 ③灰白色	外面口縁部は横ナデ。底部は砂底か？内面も横ナデ、把手は指頭痕が残る。	

28号井戸

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第262図101 P L. 146	須恵器 長頸瓶	埋没土 頸部		①細砂粒(黒色鉱物 粒) ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向不明。頸部に2条の凹線が巡る。頸部と胴部の接合部に圧痕が残る。外面の一部に自然釉が付着。	

29号井戸

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第262図102 P L. 146	須恵器 甕	埋没土 口縁部～胴 部上位片	① 30.6	①粗砂粒(φ5mmの礫) ②還元焰 ③灰色	胴部に輪積痕が残る。外面は口縁部・胴部ともヘラナデ。内面はナデ。	

32号井戸

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第262図103 P L. 146	土師器 杯	埋没土 1/2	① 13.2 稜径 8.8 ④ 4.5	①微砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部下に明瞭な稜をもつ。口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。稜は無調整。	

遺物観察表

4号溝

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第265図1 P L. 146	磁器? 青磁	埋没土 口縁部小片				
第265図2 P L. 146	土製品 土人形	埋没土 胴～足部		①細砂粒 ②酸化焙 ③にぶい橙色	型造りによる土製人形。	
第265図3 P L. 146	石製品 砥石	埋没土 端部欠損	長 4.45 幅 2.6 厚 2.3	砥沢石		
第265図4 P L. 146	石製品 砥石	埋没土 端部欠損	長 3.9 幅 2.25 厚 2.3	砥沢石		

5号溝

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第265図5 P L. 146	鉄製品	埋没土 破片			器種不明。	

18号溝

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第265図6 P L. 146	鉄釘	埋没土 両端欠損				

20号溝

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第265図7 P L. 146	土師器 杯	埋没土 1/3	① 11.4 稜径11.0 ④ 4.0	①細砂粒 ②酸化焙 ③橙色	口縁部下に明瞭な稜をもつ。口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。	
第265図8 P L. 146	土師器 杯	埋没土 1/3	① 13.0 ④ 3.7	①細砂粒 ②酸化焙 ③橙色	口縁部の上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。	

26号溝

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第265図9 P L. 146	土師器 杯	埋没土 1/4	① 14.8 ② 12.6	①細砂粒 ②酸化焙 ③橙色	口縁部下に弱い稜をもつ。口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。	
第265図10 P L. 146	土師器 杯	埋没土 口縁部小片		①細砂粒 ②酸化焙 ③にぶい橙色	外面口縁部に墨書。	
第265図11 P L. 146	土師器 杯	埋没土 口縁部小片		①細砂粒 ②酸化焙 ③にぶい橙色	外面口縁部に墨書。	
第265図12 P L. 146	土師器 杯	埋没土 口縁部小片		①細砂粒 ②酸化焙 ③橙色	外面口縁部に墨書。	
第265図13 P L. 146	土師器 杯	埋没土 底部小片		①細砂粒 ②酸化焙 ③橙色	内面底部に「土」の刻書。	

29号溝

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第265図14 P L. 146	瓦 平瓦	埋没土 破片	厚 1.8	①砂粒多 ②還元焙 ③表面黒色	凸面 密な縄叩き。 凹面 全面縦方向ナデ。一部布目痕残る。側端面取り1回。側面 ケズリ。	断面灰白色

温め状遺構

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第272図1 P L. 150	土師器 手握ね	埋没土 ほぼ完形	① 6.1 ② 5.3 ④ 4.0	①細砂粒(含雲母) ②酸化焰 ③灰白色	外面下位に指頭痕が残る、底部整形技法は不明。 内面は縦方向への強いナデ。	
第272図2 P L. 147	土師器 杯	埋没土 1/3	① 12.2 ④ 3.3	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部の上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。	
第272図3 P L. 147	土師器 杯	埋没土 1/3	① 12.2 ④ 3.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部の上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。底部に墨書。	
第272図4 P L. 147	土師器 杯	埋没土 1/3	① 13.0 ② 11.2 ④ 2.8	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部の上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。	
第272図5 P L. 147	土師器 杯	埋没土 ほぼ完形	① 13.5 ④ 4.5	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部の上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。	
第272図6 P L. 147	土師器 杯	埋没土 1/3	① 18.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部の上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。	
第272図7 P L. 147	須恵器 杯蓋	埋没土 1/3	① 15.0 ⑤ 4.7 ④ 3.2	①細砂粒(黒色鉱物 粒) ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。内面に引き出されたカエリをもつ。摘は偏平で貼付。外面天井部の摘周辺は回転ヘラ削り。	
第272図8 P L. 147	須恵器 杯	埋没土 1/3	① 12.0 ② 7.0 ④ 3.9	①微砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。底部に「T」の墨書が2カ所見られる。	
第272図9 P L. 147	須恵器 杯	埋没土 1/3	① 13.2 ② 6.4 ④ 3.9	①細砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向不明。底部は回転糸切りか。	
第272図10 P L. 147	須恵器 杯	埋没土 1/3	② 8.0	①細砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り後周辺から口縁部下位を回転ヘラ削り。外面底部に「き」の墨書。	
第272図11 P L. 147	須恵器 碗	埋没土 1/3	① 18.6 ② 12.8	①細砂粒(黒色鉱物 粒) ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り後中央部を除いて回転ヘラ削りし、高台を貼付。底部に「前」の墨書。	

グリッド出土遺物(瓦塔)

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第274図1 P L. 148	土製品 瓦塔	B P-14 屋蓋部		①砂粒・赤色粒子含 ②還元焰 ③灰白色	軒先、垂木は刀子状工具で切り出す。	瓦塔A類
第274図2 P L. 148	土製品 瓦塔	B区低地 屋蓋部		①砂粒・赤色粒子含 ②酸化焰 ③にぶい橙色	垂木は刀子状工具で切り出し、周囲を削る。	瓦塔B類
第274図3 P L. 148	土製品 瓦塔	B 1-12 屋蓋部		①砂粒・赤色粒子含 ②還元焰 ③灰黄色	軒先・垂木は刀子状工具で切り出す。	瓦塔A類
第274図4 P L. 148	土製品 瓦塔	B q-13 屋蓋部		①細砂含 ②還元焰 ③灰色	軒先と垂木は削り出す。裏面はナデ、一部赤彩。	瓦塔A類
第274図5 P L. 148	土製品 瓦塔	B v-19 屋蓋部		①砂粒・赤色粒子含 ②酸化焰 ③にぶい橙色	裏面垂木部。垂木は刀子状工具で切り出す。	瓦塔B類
第274図6 P L. 148	土製品 瓦塔	B g・h 屋蓋部		①砂粒含 ②還元焰 ③灰色		瓦塔A類
第275図7 P L. 148	土製品 瓦塔	B r・s -16 屋蓋隅部		①砂粒・赤色粒子含 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	隅木は刀子状工具で切り出し、周囲を削る。 第275図-9・11と同一個体。	瓦塔B類

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 器 類 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第275図8 P L. 148	土製品 瓦塔	C区 屋蓋隅部		①砂粒・赤色粒子含 ②還元焰 ③灰白色	隅降棟剝離。	瓦塔A類
第275図9 P L. 148	土製品 瓦塔	B v-18 屋蓋隅部		①砂粒・赤色粒子含 ②酸化焰 ③橙色	隅木は刀子状工具で切り出し、周囲を削る。 第275図-7・11と同一個体。	瓦塔B類
第275図10 P L. 148	土製品 瓦塔	B r・s -16 屋蓋隅部		①砂粒含 ②還元焰 ③灰白色	軒先・垂木は刀子状工具で切り出す。裏面全体赤彩。	瓦塔A類
第275図11 P L. 148	土製品 瓦塔	B x-23 屋蓋隅部		①砂粒・赤色粒子含 ②酸化焰 ③にぶい橙色	隅木・垂木は刀子状工具で切り出し、周囲を削る。 第275図-7・9と同一個体。	瓦塔B類
第275図12 P L. 148	土製品 瓦塔	B w-1 屋蓋隅部		①砂粒・赤色粒子含 ②還元焰 ③灰白色		瓦塔A類
第275図13 P L. 148	土製品 瓦塔	B m-13 屋蓋隅部		①砂粒含 ②還元焰 ③灰白色		瓦塔A類
第276図14 P L. 148	土製品 瓦塔	B r-14 屋蓋部		①細砂含 ②還元焰 ③灰色	裏面はヘラナデ。	瓦塔A類
第276図15 P L. 148	土製品 瓦塔	B p・q -14 屋蓋部		①砂粒・白色粒子含 ②還元焰 ③灰色	表面丁寧なナデ。裏面ヘラ削り。	瓦塔A類
第276図16 P L. 148	土製品 瓦塔	C e-6 軸部		①細砂粒含 ②還元焰 ③オリーブ灰色	部位不明。外面丁寧なナデ。内面不整方向ナデ。	瓦塔A類
第276図17 P L. 148	土製品 瓦塔	B t-16 軸部		①砂粒多 ②還元焰 ③灰白色	粘土剝離痕(台輪か)あり。内外面縦ナデ。	瓦塔B類か
第276図18 P L. 148	土製品 瓦塔	B p-15 軸部		①砂粒多 ②還元焰 ③灰黄色	内面斜めナデ。外面タテのヘラナデ。上端は横ナデ。	瓦塔B類
第276図19 P L. 148	土製品 瓦塔	B r-16 斗拱部		①砂粒多 ②還元焰 ③灰白色	斗拱部(大斗~肘木)。軸部から剝離。刀子状工具で成形。	瓦塔B類か
第276図20 P L. 148	土製品 瓦塔	2号井戸 軸部		①砂粒多 ②還元焰 ③灰白色	台輪・斗拱は粘土貼り付け。台輪・大斗のみ残存。 大斗と肘木は刀子状工具で切り出す。壁面は内外面とも横ナデ。	瓦塔B類か
第277図21 P L. 148	土製品 瓦塔	B y-0 軸部		①砂粒・赤色粒子含 ②酸化焰 ③灰褐色	軸部。内面に粘土紐接合痕。斗拱部は貼り付け。 壁付きの大斗~通肘木は刀子状工具で切り出す。 壁面・持ち送り部等白彩。	瓦塔B類
第277図22 P L. 149	土製品 瓦塔	C j-4 屋蓋部		①細砂粒含 ②還元焰 ③灰色	部位不明。外面丁寧なナデ。内面不整方向ナデ。	瓦塔A類
第277図23 P L. 149	土製品 瓦塔	B o-3 軸部か		①砂粒含 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	表面粗いナデ。	不明
第277図24 P L. 149	土製品 瓦塔	C k-9 軸部か		①砂粒含 ②還元焰 ③灰白色	表裏面ともナデ。	胎土分析 IV章3節 第8図9
第277図25 P L. 149	土製品 瓦塔	C c-4 軸部か		①白色粒子含 ②酸化焰 ③浅橙色	表面ナデ。瓦塔Bか。	胎分IV章3 節第8図10 ・4節7
第277図26 P L. 149	土製品 瓦塔	C a-9 軸部		①砂粒・赤色粒子含 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	全面ナデ。	瓦塔Bか
第277図27 P L. 149	土製品 瓦塔	B x-0 屋蓋部		①砂粒・赤色粒子含 ②還元焰 ③浅黄色	垂木先が一部残る他は表面剝離。瓦塔Aか。	胎分IV章3 節第8図12 ・4節6

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第277図28 P.L. 149	土製品 瓦塔	Bx-0 屋蓋部か		①砂粒・赤色粒子含 ②還元焰 ③灰白色	表面剝離。	瓦塔A類か

グリッド出土遺物(瓦)

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第279図1 P.L. 159	瓦 平瓦	C e - f -7 破片	厚 1.7	①砂粒・白色粒子多 ②還元焰 ③黒褐色	凸面 密な縄叩き。表面一部剝離。 凹面 全面ナデ。一部布目痕残る。側端面取り1回。側面・広端面 ケズリ。	
第279図2 P.L. 159	瓦 平瓦	Bx-24 Cd-5・ 6 破片	厚 1.7	①砂粒含 ②還元焰 ③にぶい黄橙色一部 黒色	凸面 密な縄叩き。 凹面 全面ナデ。一部布目痕残る。側端・狭端面取り1回。 側面・狭端面 ケズリ。	
第279図3 P.L. 159	瓦 平瓦	Bx-U Cd-1 Ce-7	厚 1.9	①砂粒・白色粒子含 ②還元焰 ③黒褐色	凸面 縄叩き、後粗いナデ。 凹面 全面ナデ。側端面取り1回。 側面 ケズリ。	
第279図4 P.L. 159	瓦 平瓦	Bx-0 破片	厚 2.0	①砂粒含 ②還元焰 ③表面黒色断面灰色	凸面 密な縄叩き。 凹面 全面縦方向ナデ。一部糸切り痕残る。側端・狭端面取り1回。側面・狭端面 ケズリ。	
第279図5 P.L. 159	瓦 平瓦	Ch-9 破片	厚 2.3	①白色粒子含 ②酸化焰 ③橙色	凸面 密な縄叩き。 凹面 全面ナデ。狭端幅せまい面取り。 側端・狭端面 ケズリ。	
第279図6 P.L. 159	瓦 平瓦	Ca-2 破片	厚 1.7	①砂粒・白色粒子含 ②還元焰 ③にぶい黄橙色	凸面 縄叩き。全面に糸切り痕残る。 凹面 全面縦方向ナデ。一部布目痕残る。側端幅せまい面取り。側面・狭端面 ケズリ。	
第279図7 P.L. 159	瓦 平瓦	CA-23 破片	厚 1.5	①砂粒・白色粒子多 ②還元焰 ③にぶい黄橙色	凸面 縄叩き。 凹面 全面ナデ。側端面取り1回。 側面 ケズリ。	
第279図8 P.L. 159	瓦 平瓦	Cf-7 破片	厚 2.3	①砂粒・白色粒子含 ②還元焰 ③表面黒色断面灰色	凸面 密な縄叩き。一部糸切り痕残る。 凹面 全面ナデ。側端・狭端面取り1回。 側面・狭端面 ケズリ。	
第279図9 P.L. 159	瓦 平瓦	ci-9 破片	厚 1.4	①砂粒・白色粒子含 ②還元焰 ③表面黒色	凸面 縄叩き。 凹面 全面縦方向ナデ。一部布目痕残る。側端・狭端面取り1回。側面・狭端面 ケズリ。	断面鈍黄橙 胎土分析 IV章4節4
第279図10 P.L. 159	瓦 平瓦	Cc-0 破片	厚 1.6	①砂粒多 ②酸化焰 ③橙色	凸面 縄叩き、後ナデ。 凹面 全面ナデ。側端・狭端面取り1回。側面・狭端面 ケズリ。	
第279図11 P.L. 159	瓦 平瓦	Bs-16 温め状遺構 破片	厚 1.5	①砂粒多含 ②還元焰 ③凸面黒色	凸面 縄叩き。 凹面 全面横方向ナデ。側端面取り1回。 側面・狭端面 ケズリ。	凹面・断面 灰色
第279図12 P.L. 159	瓦 丸瓦	Av-23 破片	厚 0.9	①砂粒含 ②還元焰 ③灰色	凸面 全面ナデ。 凹面 布目痕。側端面取り1回。側面 ケズリ。	
第279図13 P.L. 159	瓦 平瓦	Ch-9 破片	厚 1.6	①砂粒含 ②還元焰 ③褐灰色	凸面 縄叩き。 凹面 全面ナデ。一部布目痕・糸切り痕残る。側端面取り1回。側面 ケズリ。	
第279図14 P.L. 159	瓦 平瓦	Cd-1 破片	厚 2.0	①砂粒・白色粒子多 ②還元焰 ③灰色	凸面 密な縄叩き。 凹面 全面横ナデ。一部糸切り痕残る。側端面取り1回。側面・狭端面 ケズリ。	

遺物観察表

グリッド出土遺物(手捏ね)

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第281図1 P L. 150	土製品 手捏ね	C b-0	① 5.2 ② 3.8 ④ 4.3	①細砂粒 ②酸化焙 ③にぶい橙色		
第281図2 P L. 150	土製品 手捏ね	C i-5	① 5.8 ② 4.6 ④ 3.4	①細砂粒 ②酸化焙 ③にぶい橙色		
第281図3 P L. 150	土製品 手捏ね	C p-3	① 8.3 ② 5.4 ④ 4.1	①細砂粒 ②酸化焙 ③にぶい橙色		
第281図4 P L. 150	土製品 手捏ね	C j-7	② 4.9 ④ 4.2	①細砂粒 ②酸化焙 ③にぶい橙色		
第281図5 P L. 150	土製品 手捏ね	C n-3	① 7.1 ② 6.0 ④ 3.8	①細砂粒 ②酸化焙 ③にぶい黄橙色		
第281図6 P L. 150	土製品 手捏ね	B y-1	① 5.7 ② 6.4 ④ 4.0	①細砂粒 ②酸化焙 ③にぶい橙色		
第281図7 P L. 150	土製品 手捏ね	C h-8	① 4.1 ② 3.3 ④ 4.6	①細砂粒 ②酸化焙 ③にぶい黄橙色	底面に木葉痕がみられる。	
第281図8 P L. 150	土製品 手捏ね	C p-15	② 4.3 ④ 5.0	①細砂粒 ②酸化焙 ③にぶい橙色		
第281図9 P L. 150	土製品 手捏ね	B x-24	① 5.5 ② 3.5 ④ 2.9	①細砂粒 ②酸化焙 ③灰黄色		
第281図10 P L. 150	土製品 手捏ね	C k-14	② 4.4 ④ 3.9	①細砂粒 ②酸化焙 ③橙色		
第281図11 P L. 150	土製品 手捏ね	C a-1	② 4.8 ④ 4.0	①細砂粒 ②酸化焙 ③にぶい黄橙色		
第281図12 P L. 150	土製品 手捏ね	C f-4	② 5.0 ④ 4.4	①細砂粒 ②酸化焙 ③にぶい橙色		
第281図13 P L. 150	土製品 手捏ね	C d-14	② 4.6 ④ 3.8	①細砂粒 ②酸化焙 にぶい橙色		
第281図14 P L. 150	土製品 手捏ね	C c-2	② 5.4 ④ 3.6	①細砂粒 ②酸化焙 ③にぶい黄橙色		
第281図15 P L. 150	土製品 手捏ね	C b-0	① 7.3 ② 5.6 ④ 5.1	①細砂粒 ②酸化焙 ③橙色		
第281図16 P L. 150	土製品 手捏ね	C r-7	① 8.1 ② 5.5 ④ 5.5	①細砂粒 ②酸化焙 ③にぶい橙色	底面に木葉痕がみられる。	
第281図17 P L. 150	土製品 手捏ね	C i-11	② 3.9 ④ 3.2	①細砂粒 ②酸化焙 ③橙色		
第281図18 P L. 150	土製品 手捏ね	C j-9	① 8.0 ② 5.0 ④ 3.2	①細砂粒 ②酸化焙 ③にぶい橙色		
第282図19 P L. 150	土製品 手捏ね	不明	① 8.2 ② 8.0 ④ 5.0	①細砂粒 ②酸化焙 ③にぶい黄橙色		

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第282図20 P L. 150	土製品 手捏ね	B y-19	① 10.0 ④ 7.5	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色		
第282図21 P L. 150	土製品 手捏ね	B m-13	④ 6.3	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色		
第282図22 P L. 150	土製品 手捏ね	C l-13	② 3.7 ④ 2.7	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色		
第282図23 P L. 150	土製品 手捏ね	C g-9	② 4.0 ④ 3.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③明黄褐色		
第282図24 P L. 150	土製品 手捏ね	C e-2・3	② 3.6 ④ 4.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色		
第282図25 P L. 150	土製品 手捏ね	C e-5	② 5.3 ④ 4.6	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色		
第282図26 P L. 150	土製品 手捏ね	C b-2	② 6.4 ④ 3.1	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	底面に木葉痕がみられる。	
第282図27 P L. 150	土製品 手捏ね	C d-5	② 7.2 ④ 2.2	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	底面に木葉痕がみられる。	
第282図28 P L. 150	土製品 手捏ね	C e-6	② 5.0 ④ 5.4	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色		
第282図29 P L. 150	土製品 手捏ね	C b-3	② 6.0 ④ 1.7	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色		
第282図30 P L. 150	土製品 手捏ね	C a-20	② 4.7 ④ 3.2	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色		
第282図31 P L. 150	土製品 手捏ね	C f-6	② 4.0 ④ 2.9	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色		
第282図32 P L. 150	土製品 手捏ね	温め状遺構	② 5.3 ④ 3.8	①細砂粒 ②酸化焰 ③灰白色		

グリッド出土遺物(土錘・白玉)

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第284図1 P L. 149	土製品 土錘	C j-4 完形	長 5.5 径 1.8 重15.3	①細砂粒 ②酸化焰 ③黒色	器面にヘラによる成形痕が残る。	
第284図2 P L. 149	土製品 土錘	C k-5 ほぼ完形	長 4.9 径 1.8 重12.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③灰黄色	器面にヘラによる成形痕が残る。	
第284図3 P L. 149	土製品 土錘	C k-5 1/5	長 5.4 径 1.8 重13.4	①細砂粒 ②酸化焰 ③灰黄色	器面にヘラによる成形痕が残る。	
第284図4 P L. 149	土製品 土錘	C k-5 ほぼ完形	長 5.1 径 1.8 重11.1	①細砂粒 ②酸化焰 ③灰黄色	器面にヘラによる成形痕が残る。	
第284図5 P L. 149	土製品 土錘	C k-5 ほぼ完形	長 5.2 径 1.9 重13.7	①細砂粒 ②酸化焰 ③灰黄色	器面にヘラによる成形痕が残る。	
第284図6 P L. 149	土製品 土錘	C k-5 ほぼ完形	長 4.9 径 1.5 重 9.3	①細砂粒 ②酸化焰 ③黄灰色	器面にヘラによる成形痕が残る。	

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第284図7 P L. 149	土製品 土錘	C j-4 完形	長 5.0 径 1.75 重12.3	①細砂粒 ②酸化焰 ③浅黄色	器面にヘラによる成形痕が残る。	
第284図8 P L. 149	土製品 土錘	B r-15 ほぼ完形	長 5.0 径 2.2 重16.1	①細砂粒 ②酸化焰 ③灰白色	器面にヘラによる成形痕が残る。	
第284図9 P L. 149	土製品 土錘	C a-21 ほぼ完形	長 4.1 径 2.2 重16.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③灰白色	器面にヘラによる成形痕が残る。	
第284図10 P L. 149	土製品 土錘	C h-9 ほぼ完形	長 4.4 径 2.1 重14.8	①細砂粒 ②酸化焰 ③浅黄色	器面にヘラによる成形痕が残る。	
第284図11 P L. 149	土製品 土錘	C i-9 完形	長 4.3 径 2.4 重17.3	①細砂粒 ②酸化焰 ③灰白色	器面にヘラによる成形痕が残る。	
第284図12 P L. 149	土製品 土錘	C a-21 ほぼ完形	長 4.0 径 2.2 重12.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③灰白色	器面にヘラによる成形痕が残る。	
第284図13 P L. 149	土製品 土錘	C j-12 完形	長 4.0 径 2.4 重13.6	①細砂粒 ②酸化焰 ③灰黄色	器面にヘラによる成形痕が残る。	
第284図14 P L. 149	土製品 土錘	B w-0 ほぼ完形	長 5.3 径 2.5 重25.2	①細砂粒 ②酸化焰 ③灰白色	器面にヘラによる成形痕が残る。	
第284図15 P L. 149	土製品 土錘	C p-13 完形	長 6.0 径 2.35 重31.2	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	器面にヘラによる成形痕が残る。	
第284図16 P L. 149	土製品 土錘	B f-2 ほぼ完形	長 5.3 径 2.4 重26.4	①細砂粒 ②酸化焰 ③灰黄色	器面にヘラによる成形痕が残る。	
第284図17 P L. 149	土製品 土錘	A t-8 ほぼ完形	長 5.7 径 2.1 重29.4	①細砂粒 ②酸化焰 ③灰色	器面にヘラによる成形痕が残る。	
第284図18 P L. 149	土製品 土錘	A u-6 端部欠損	長 5.3 径 2.5 重24.4	①細砂粒 ②酸化焰 ③灰黄色	器面にヘラによる成形痕が残る。	
第284図19 P L. 149	土製品 土錘	A v-0 Pit内 完形	長 4.4 径 2.1 重16.6	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい褐色	器面にヘラによる成形痕が残る。	
第284図20 P L. 149	土製品 土錘	C j-4 1/4	長 3.9 径 1.7 重 4.8	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	器面にヘラによる成形痕が残る。	
第284図21 P L. 149	土製品 土錘	C j-4 完形	長 4.7 径 1.5 重 9.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③浅黄色	器面にヘラによる成形痕が残る。	
第284図22 P L. 149	土製品 土錘	C m-13 完形	長 7.5 径 1.6 重15.7	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	器面にヘラによる成形痕が残る。	
第284図23 P L. 149	土製品 土錘	B l-13 完形	長 3.5 径 2.0 重11.2	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	指頭による成形痕が残る。	
第284図24 P L. 149	土製品 土錘	A t-2 1/4	長 2.7 径 2.3 重 4.2	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色		
第284図25 P L. 149	土製品 土錘	B p-0 完形	長 1.7 径 1.5 重 5.3	①細砂粒 ②酸化焰 ③黄灰色	器面にヘラによる成形痕が残る。	
第284図26 P L. 149	土製品 土錘	C p-14 1/4	長 2.6 径 1.5 重 3.6	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色		

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第284図27 P L. 149	土製品 土錘	C h-10 ⅓	長 3.3 径 1.6 重 4.7	①細砂粒 ②酸化焰 ③灰黄色		
第284図28 P L. 149	石製品 白玉	B r-16 一部欠損	径 1.9 厚 0.85 重 3.5	①滑石		
第284図29 P L. 149	石製品 白玉	C i-9 ⅓	径 1.5 厚 0.3 重 0.8	①滑石		
第284図30 P L. 149	石製品 白玉	B q-16 ほぼ完形	径 1.4 厚 0.95 重 2.6	①滑石		
第284図31 P L. 149	石製品 白玉	B r-16 ほぼ完形	径 1.3 厚 0.6 重 1.5	①滑石		
第284図32 P L. 149	石製品 白玉	B n-16 完形	径 1.3 厚 0.7 重 2.3	①滑石		
第284図33 P L. 149	石製品 白玉	B r-16 完形	径 1.35 厚 0.9 重 2.2	①滑石		

グリッド出土遺物(土器)

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第285図 1 P L. 152	土師器 杯	C e-2 ⅓	① 11.4 稜径12.2 ④ 3.5	①細砂粒 ②酸化焰 ③灰褐色	口縁部下に明瞭な稜をもつ。口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。稜下に僅かに無調整部分が残る。	
第285図 2 P L. 152	土師器 杯	B x-23 完形	① 13.6 稜径14.2 ④ 4.8	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	口縁部下に明瞭な稜をもつ。口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。	
第285図 3 P L. 152	土師器 杯	J k-37 ⅓	稜径11.2	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部下に稜をもつ。口縁部の上半は横ナデ、下半は無調整。底部は櫛状工具によるヘラ削り。	
第285図 4 P L. 152	土師器 杯	J k-37 ⅓	① 12.7 稜径13.4	①細砂粒(含石英) ②酸化焰 ③黄灰色	口縁部下に明瞭な稜をもち、内面口唇部に凹線が巡る。口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。	
第285図 5 P L. 151	土師器 杯	C m-13他 ⅓	① 14.0 稜径14.0 ④ 5.6	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	口縁部下に明瞭な稜をもつ。口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。外面口縁部と内面に赤色塗彩が施されている。	
第285図 6 P L. 152	土師器 杯	J k-37 ⅓	① 13.0 稜径10.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部下に明瞭な稜をもち、口縁部中程に凹線が巡る。口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。	
第285図 7 P L. 151	土師器 杯	C e-6 ⅓	① 13.8 稜径12.2 ④ 4.8	①細砂粒 ②酸化焰 ③淡黄色	口縁部下に明瞭な稜をもつ。口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。	
第285図 8 P L. 151	土師器 杯	B r-15 口縁部の一部を欠	① 13.2 稜径11.0 ④ 5.2	①粗砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部下に弱い稜をもつ。口縁部は横ナデで下半は特に強いナデ。稜下は無調整部分が残る。底部はヘラ削り。	
第285図 9 P L. 152	土師器 杯	C f-7 ⅓	① 14.0 稜径10.4 ④ 4.6	①細砂粒 ②酸化焰 ③黄灰色	口縁部下に明瞭な稜をもつ。口縁部は横ナデで口唇部下に強い横ナデによる段をもつ、底部はヘラ削り、稜下に僅かに無調整が残る。	
第285図10 P L. 152	土師器 杯	C m-12 ほぼ完形	① 11.0 稜径10.2 ④ 3.3	①細砂粒 ②酸化焰軟質 ③橙色	口縁部下に稜をもつ。口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り、稜下に僅かに無調整が残る。	
第285図11 P L. 152	土師器 杯	C m-10 ⅓	① 11.2 稜径11.0 ③ 4.3	①粗砂粒 ②酸化焰 ③赤灰色	口縁部下に稜をもつ。口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。稜下に無調整部分が残る。	
第285図12 P L. 152	土師器 杯	B v-19 ⅓	① 11.6 稜径10.2 ④ 4.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部下に稜をもつ。口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り、稜下に僅かに無調整が残る。焼成時の歪み大きい。	

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種器 種類	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第285図13 P L. 151	土師器 杯	C h-7 1/3	① 11.7 稜径10.3	①細砂粒(赤色鉱物 粒) ②酸化焰軟質 ③橙色	口縁部下に明瞭な稜をもつ。口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。	
第285図14	土師器 杯	C区 2/3	① 11.8 稜径10.6 ④ 4.4	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部下に稜をもつ。口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。稜は無調整。	
第285図15	土師器 杯	C h-9 1/2	① 13.0 ④ 4.5	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部下に稜をもつ。口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。	
第286図16 P L. 151	土師器 杯	C n-12 口縁部の一 部を欠	① 13.2 稜径11.8 ④ 4.3	①粗砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部下に稜をもつ。口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。内面底部に放射状のヘラ研磨が施されている。	
第286図17 P L. 152	土師器 杯	B w-23 2/3	① 13.2 稜径11.6 ④ 5.0	①細砂粒(赤色鉱物 粒) ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部下に稜をもつ。口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り、稜下に無調整が残る。	
第286図18 P L. 151	土師器 杯	C p-13 1/3	① 13.3 稜径11.6 ④ 5.1	①粗砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部下に弱い稜をもつ。口縁部は横ナデ、稜下に無調整部分が残る、底部はヘラ削り。内面底部はヘラナデ。	
第286図19 P L. 152	土師器 杯	C区 口縁部の一 部を欠	① 13.4 稜径12.4 ④ 5.2	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい褐色	口縁部下に稜をもつ。口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り、稜下に無調整が残る。	
第286図20 P L. 151	土師器 椀	C n-12 3/4	① 12.5 稜径13.2 ④ 7.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③褐色	口縁部下に稜をもつ。口縁部は横ナデ、稜下は無調整、底部はヘラ削り。内面底部はヘラナデ。	
第286図21 P L. 152	土師器 杯	C d-3 1/4	① 14.4 稜径13.0 ④ 5.2	①粗砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部下に明瞭な稜をもつ。口縁部は横ナデであるが中程に段をもつ。底部はヘラ削り、稜の部分は無調整。	
第286図22 P L. 152	土師器 杯	C m-10 口縁部の一 部を欠	① 11.4 ④ 5.1	①粗砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削りで部分的に口縁部横ナデと底部ヘラ削りの間に無調整が残る。	
第286図23 P L. 152	土師器 椀	B x-23 2/3	稜径10.2	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。内面底部ヘラナデ。	
第286図24 P L. 152	土師器 杯	C m-13 ほぼ完形	① 10.2 稜径 9.8 ④ 5.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい黄褐色	口縁部下に稜をもつ。口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り、稜下に部分的に無調整部分が残る。内面は口縁部が横方向、底部が放射状のヘラ研磨。	
第286図25 P L. 152	土師器 杯	C l-10 2/3	稜径12.2	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部下に明瞭な稜をもつ。口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り、稜下に僅かに無調整が残る。内面は口縁部が横方向、底部が放射状のヘラ研磨。	
第286図26 P L. 151	土師器 椀	C n-12 2/3	① 10.9 稜径12.4 ④ 6.9	①細砂粒(含雲母) ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部下に明瞭な稜をもつ。口縁部は横ナデ、稜は無調整、底部はヘラ削り。内面底部に放射状ヘラ研磨が施されている。	
第286図27 P L. 152	土師器 椀	B 水田耕土 1/3	① 11.8 ② 5.9 ③ 9.9	①粗砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部は横ナデ。外面体部は左方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。底部はヘラ研磨。	
第286図28 P L. 152	土師器 高杯	B y-23 1/3	① 18.0 ② 11.3 ④ 19.9	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。外面脚部は縦方向ヘラ削り、端部は横ナデ。内面は上半が縦方向、下半が横方向ヘラナデ。	
第286図29 P L. 151	土師器 高杯	C f-2 杯身3/4	① 16.8 ② 9.4	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	脚部欠損、口縁部は横ナデ後内外面に放射状ヘラ研磨。底部はヘラ削り。	
第286図30 P L. 151	土師器 高杯	C k-8 杯身3/4	① 16.8 ② 8.6	①細砂粒 ②酸化焰 ③明褐色	脚部欠損、口縁部上半は横ナデ、下半はヘラ削り。底部もヘラ削り。内面は放射状ヘラ研磨が施されているが、詳細は不明。	
第287図31 P L. 151	土師器 高杯	C f-1 脚部片		①粗砂粒(含石英) ②酸化焰 ③にぶい黄褐色	透かしを4カ所もつ。外面は縦方向ヘラ削り後ヘラ研磨。内面はヘラナデで部分的に縦方向のヘラ跡が残る。	
第287図32 P L. 152	土師器 高杯	C f-1 杯身底部～ 脚部	③ 10.4	①細砂粒 ②酸化焰内面黒色処理 ③にぶい橙色	外面は杯身から脚部上半にかけて縦方向のヘラ削り、脚部端部は横ナデ。内面は杯身がヘラ研磨、脚部がヘラナデ。	

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第287図33 P L. 152	土師器 小型壺	B x - 23 胴部 $\frac{1}{2}$	胴部最大径 7.2 ② 3.6	①微砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部は横ナデ。外面は胴部・底部ともヘラ研磨、内面はヘラナデ。	
第287図34 P L. 151	土師器 甕	C n - 12 胴部下位 ～底部	② 6.8	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	輪積成形。外面は胴部・底部ともヘラ削り。内面はヘラナデ。	
第287図35 P L. 151	土師器 甕	B n - 13 胴部下位 ～底部	② 7.2	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	外面胴部はヘラ削り、底部は無調整か？内面はヘラナデ。	
第287図36 P L. 150	土師器 甕	C d - 5 胴部下位 ～底部片	② 7.0	①粗砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	外面胴部は縦方向ヘラ削り、その下位に横方向のナデ、底部に木葉痕が残る。内面はヘラナデ。	
第287図37 P L. 152	須恵器 杯	C g - 10 $\frac{3}{4}$	① 13.2 ④ 4.7	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向左回り。口唇部に凹線が1条巡る。口縁部下に引き出された蓋受けをもつ。底部は回転ヘラ削り。	
第287図38 P L. 152	須恵器 高杯	C n - 12 底部片		①細砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転ヘラ削り。底部の脚部との接合部分は擦り磨かれている。	
第287図39 P L. 152	須恵器 高杯	C l - 14 底部～脚部 片		①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向不明。脚部は3カ所に透かしをもつ。内面に自然釉が付着。	
第287図40 P L. 152	須恵器 甕	C e - 1 頸部～胴部 上位片		①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。頸部に輪積痕が残る。外面の胴部上位に凹線が巡り、凹線の上は横方向カキ目、頸部は縦方向カキ目。	
第287図41 P L. 152	須恵器 甕	C e - 2 頸部～底部 片	胴部最大径 10.2	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向不明。肩部に凹線が巡り、凹線上位に列点文、横方向のカキ目(1単位6条)。下位はカキ目、ヘラ削り。	
第287図42	須恵器 甕	C e - 1 胴部片		①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、注口部に凹線が1条巡り、凹線の下に列点文が施されている。	
第287図43 P L. 152	須恵器 甕	C d - 4 胴部	胴部最大径 10.8	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向不明。底部は不定方向ヘラ削り。胴部上半は3条の凹線で区画され、凹線の間には波状文(単位不明)が施されている。	
第287図44 P L. 152	須恵器 甕	C d - 4 口縁部を欠	胴部最大径 9.2	①細砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回りか？頸部に凹線が2条巡る。注口部は突出し、胴部注口部の上下に凹線が巡る。底部はヘラ削り。	
第287図45 P L. 152	須恵器 提瓶	C d - 1 胴部	胴部径12.4 胴部幅 8.8	①粗砂粒 ②還元焰軟質 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向不明。口縁部欠損。胴部表面はカキ目、裏面はヘラ削り。	
第287図46 P L. 153	須恵器 横瓶	C h - 8 胴部片	胴部径18.6	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向不明。外面胴部はカキ目。	
第288図47 P L. 153	須恵器 横瓶	C h - 7 胴部小片		①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向左回り。横瓶胴部の最後の貼付部分。外面はカキ目。内面はハケ目(1単位8条)。	
第288図48 P L. 153	須恵器 長頸瓶	C k - 5 胴部片	胴部最大径 20.0	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向不明。外面は平行叩痕が僅かに残り、全面にカキ目。	
第288図49 P L. 153	須恵器 瓶	C f - 3 胴部片		①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	内面に同心円状アテ具痕が残る。外面はカキ目を2段施し、カキ目上位にハケ目を短く施している。	
第288図50 P L. 153	土師器 甕	C n - 12 口縁部～胴 部中位片	① 19.6	①粗砂粒 ②酸化焰 ③明赤褐色	口縁部は横ナデ。外面胴部は縦方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第288図51 P L. 152	土師器 杯	B p - 17 $\frac{2}{3}$	① 10.8 ④ 3.7	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部の上半は横ナデ、下半から底部はヘラ削り。	
第288図52 P L. 151	土師器 杯	B r - 17 $\frac{1}{3}$	① 10.5 ④ 3.0	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部の上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。	

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第288図53 P L. 152	土師器 杯	B q-15 口縁部の一部を欠	① 10.9 ④ 3.2	①細砂粒 ②酸化焙 ③橙色	口縁部の上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。	
第288図54 P L. 151	土師器 杯	B n-13 1/2	① 10.9 ④ 3.4	①細砂粒 ②酸化焙 ③橙色	口縁部の上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。	
第288図55 P L. 151	土師器 杯	B d-16 2/3	① 11.3 ④ 3.3	①細砂粒 ②酸化焙 ③橙色	口縁部の上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。	
第288図56 P L. 151	土師器 杯	C d-22 3/4	① 11.2 ④ 3.2	①細砂粒 ②酸化焙 ③橙色	口縁部の上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。	
第288図57 P L. 152	土師器 杯	B 水田耕土 口縁部の一部を欠	① 11.4 ④ 3.1	①細砂粒 ②酸化焙 ③にぶい橙色	口縁部の上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。	
第288図58	土師器 杯	B 水田耕土 1/2	① 12.1 ④ 3.5	①細砂粒 ②酸化焙 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。	
第288図59 P L. 152	土師器 杯	B r-16 口縁部の一部を欠	① 12.4 ④ 3.9	①細砂粒 ②酸化焙 ③橙色	口縁部の上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。	
第289図60 P L. 151	土師器 杯	B n-12 1/2	① 12.8 ④ 3.4	①細砂粒 ②酸化焙 ③にぶい橙色	口縁部の上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。	
第289図61	土師器 杯	B r-17 2/3	① 13.0 ④ 3.9	①細砂粒 ②酸化焙 ③明赤褐色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。	
第289図62	土師器 杯	B r-13 3/4	① 13.9 ④ 4.4	①細砂粒 ②酸化焙 ③橙色	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。	
第289図63 P L. 153	土師器 小型甕	C d-22 口縁部・胴部の一部欠	① 10.0 ② 7.0 ④ 13.0	①粗砂粒 ②酸化焙 ③にぶい褐色	口縁部から胴部上位は横ナデ。外面胴部はヘラ削り後雑なヘラ研磨、底部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	
第289図64 P L. 153	土師器 甕	C n-12 胴部・底部の一部を欠	① 14.0 ② 6.2 ④ 22.0	①粗砂粒 ②酸化焙 ③にぶい黄橙色	口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は上位が横方向、中・下位は斜め方向のヘラ削り、底部もヘラ削り。内面口縁部はヘラ研磨、胴部はヘラナデ。	
第289図65 P L. 153	土師器 甕	C m-12 胴部下位～底部片	② 8.2	①粗砂粒 ②酸化焙 ③褐色	輪積成形、輪積接合部に刻みを入れている。外面はヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第289図66 P L. 153	土師器 甕	C m-12 胴部中位～底部	② 6.2 胴部最大径 28.6	①粗砂粒 ②酸化焙 ③にぶい橙色	外面胴部は中位が横方向、下位が縦方向ヘラ削り、底部もヘラ削り。内面はヘラナデ。	
第290図67 P L. 153	土師器 甕	C k-5 胴部～底部	② 7.2	①細砂粒 ②酸化焙 ③にぶい黄橙色	外面胴部はヘラ削り、部分的にヘラ磨き。内面はヘラナデ。	
第290図68 P L. 153	土師器 甕	C n-12 口縁部～胴部上位片	① 14.6	①粗砂粒 ②酸化焙 ③にぶい橙色	口縁部は横ナデ。外面胴部は縦方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第290図69	土師器 杯	B d-9 2/3	① 12.4 ② 9.2 ④ 3.4	①細砂粒 ②酸化焙 ③にぶい橙色	口縁部の上半は横ナデ、下半は無調整。底部はヘラ削り。無調整部分に指頭痕が見られる。	
第290図70 P L. 153	黒色土器 杯	B r-15 1/2	① 13.0 ② 5.8 ④ 3.8	①細砂粒 ②酸化焙内面黒色処理 ③にぶい黄橙色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。内面口縁部は横方向、底部は一定方向ヘラ研磨。外面口縁部に墨書。	
第290図71 P L. 153	黒色土器 杯	B q-15 3/4	① 14.4 ② 7.7 ④ 4.7	①細砂粒 ②酸化焙内面黒色処理 ③にぶい黄橙色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は不定方向のヘラ削り。内面口縁部は横方向、底部は一定方向ヘラ研磨。外面口縁部に墨書。	
第290図72 P L. 151	須恵器 杯蓋	Bp・q-13・14 天井部片		①細砂粒 ②還元焙 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向不明。外面天井部の摘周辺は回転ヘラ削り。外面に自然釉が付着。内面は残存部分は全面的に擦り磨かれている。	

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第290図73 P L. 154	須恵器 杯蓋	B x - 1 ⅓	① 12.8 ⑤ 3.2 ④ 3.0	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。口唇部は折り曲げ。摘は偏平で貼付。外面天井部の摘周辺は回転ヘラ削り。	
第290図74 P L. 153	須恵器 杯蓋	B x - 25 摘欠	① 14.0	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。口唇部は折り曲げ。外面天井部の摘周辺は回転ヘラ削り。内外面に重焼き痕が残る。外面に「ト」の墨書。	
第290図75 P L. 154	須恵器 杯蓋	B r - 13 ⅓	① 14.8 ⑤ 4.6 ④ 3.5	①細砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。口唇部は折り曲げ。摘は輪状で貼付。外面天井部の摘周辺は回転ヘラ削り。	
第290図76 P L. 154	須恵器 杯蓋	B x - 24 口縁部片	① 15.4	①細砂粒(黒色鉱物粒) ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向不明。口唇部は折り曲げ。外面天井部の摘周辺は回転ヘラ削り。外面に「メ」の墨書。	
第290図77 P L. 151	須恵器 杯蓋	B k - 8 ⅓	① 18.4 ⑤ 4.0 ④ 4.2	①粗砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。口唇部端部は折り曲げ。摘は端部が引き出された偏平で貼付。外面天井部の摘周辺は回転ヘラ削り。	
第290図78 P L. 154	須恵器 杯蓋	B w - 18 ⅓	① 20.0 ⑤ 4.4 ④ 4.0	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。口唇部は折り曲げ。摘は輪状で貼付。外面天井部の摘周辺は回転ヘラ削り。	
第291図79 P L. 154	須恵器 杯	B x - 25 ほぼ完形	① 12.0 ② 10.0 ④ 3.0	①粗砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は不定方向ヘラ削り。	
第291図80 P L. 154	須恵器 杯	C d - 22 ⅓	① 11.8 ② 5.6 ④ 3.7	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り後周辺部にナデ。	
第291図81 P L. 154	須恵器 杯	B k - 9 ⅓	① 12.0 ② 5.4 ④ 3.4	①粗砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り後口縁部最下位に回転ヘラ削り。	
第291図82 P L. 154	須恵器 杯	B y - 23 ⅓	① 12.2 ② 6.2 ④ 4.5	①粗砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。外面口縁部に「入」の墨書。	
第291図83	須恵器 杯	B w - 17 完形	① 13.2 ② 8.3 ④ 3.8	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転ヘラ切り、ヘラ調整。	
第291図84 P L. 154	須恵器 杯	C k - 2 ⅓	① 12.8 ② 8.2 ④ 3.4	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回りか？底部は回転糸切り。外面口縁部に「十」の墨書。	
第291図85 P L. 155	須恵器 杯	B v - 21 ⅓	① 13.4 ② 7.4 ④ 4.0	①粗砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り後底部周辺部と口縁部最下位に回転ヘラ削り。	
第291図86	須恵器 杯	B v - 17 ⅓	① 14.0 ② 9.0 ④ 3.3	①粗砂粒 ②還元焰 ③黄灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転ヘラ削り。	
第291図87 P L. 154	須恵器 杯	C b - 0 底部	② 6.0	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。外面口縁部と底部に墨書。	
第291図88 P L. 154	須恵器 杯	C c - 21 底部片	② 6.8	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転ヘラ削り。外面に墨書。	
第291図89 P L. 155	須恵器 杯	C e - 7 底部	② 7.7	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は不定方向ヘラ削り。	
第291図90 P L. 155	須恵器 杯	B x - 23 ⅓	① 11.6 ② 9.2 ④ 4.0	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転ヘラ削り。外面口縁部に墨書と火禿痕がみられる。	
第291図91 P L. 155	須恵器 杯	B x - 23 ⅓	① 16.0 ② 12.4 ④ 4.1	①細砂粒(黒色鉱物粒) ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転ヘラ削り。高台は貼付。	
第291図92 P L. 151	須恵器 椀	B l - 13 ⅓	① 13.8 ②7.2③7.4 ④ 5.4	①細砂粒 ②還元焰 ③黄灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り後高台を貼付し、高台内側はナデ。	

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 種類	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第292図93 P L. 155	須恵器 椀	B s-17 1/2	① 13.6 ② 6.2	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	ロクロ整形、回転方向左回りか？底部は回転糸切り後高台を貼付しているが高台は剥落。	
第292図94 P L. 155	須恵器 椀	B w-18 1/2	① 14.8 ② 9.5 ④ 8.2	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。高台は貼付。	
第292図95 P L. 155	須恵器 椀	C d-22 C d-1 1/2	① 14.6 ② 6.4 ④ 6.9	①粗砂粒 ②還元焰燻焼成(内面酸化焰) ③黄橙色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。高台は貼付。	
第292図96 P L. 155	須恵器 椀	B r-18 底部	② 6.4 ③ 7.0	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向左回り。底部切り放し技法は回転ヘラ調整のため不明。	
第292図97 P L. 155	須恵器 椀	C e-2 底部片	② 8.4 ③ 9.0	①細砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り。高台は貼付。外面底部に「上」の墨書。	
第292図98 P L. 155	須恵器 高杯	B u-18 底部～脚部片	接合部径 7.0	①細砂粒(黒色鉱物粒) ②還元焰軟質 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向不明。底部は回転ヘラ削り。脚部との接合部は回転ヘラ描きが施されている。脚部には4カ所に径1cm前後の円形の透かし。	
第292図99 P L. 155	須恵器 高杯	B s-18 底部片	② 16.2 接合部径 9.6	①細砂粒(黒色鉱物粒) ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転ヘラ削り。	
第292図100 P L. 151	須恵器 高杯	B q-18 底部片	② 9.0	①細砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。外面底部は回転ヘラ削り、内面はヘラナデ。脚部との接合面は凹線が付けられている。	
第292図101 P L. 155	須恵器 瓶	C a-2 胴部下位～底部	② 8.8	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部はヘラ調整。	
第292図102 P L. 155	須恵器 長頸瓶	C h-6 口縁部	① 8.0	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回りか？口縁部は段をもち、頸部中程に凹線が2条巡る。外面の一部と内面に自然釉が付着。	
第292図103 P L. 155	須恵器 水瓶	C a-20 口縁部～頸部	① 3.8	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回りか？頸部中程に凹線が2条巡り、頸部と胴部の接合部に突帯が1条巡る。	
第292図104 P L. 155	須恵器 長頸瓶	B r-15 頸部片		①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。	
第292図105 P L. 155	須恵器 長頸瓶	C o-11 口縁部～胴部上位片	胴部最大径 17.2	①細砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向左回り。頸部中程に凹線が2条巡る。外面に自然釉が付着。	
第292図106 P L. 155	須恵器 長頸瓶	B t-20 胴部片	胴部最大径 19.4	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向不明。頸部との接合部は底部方向へのナデ。外面には自然釉が付着。	
第293図107 P L. 155	須恵器 長頸瓶	B x-0 胴部片	胴部最大径 18.8	①細砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、内面に輪積痕が残る、回転方向不明、胴部最下位に1段のヘラ削り。	
第293図108 P L. 156	須恵器 短頸壺	B r-13 1/4	① 10.6 胴部最大径 20.8	①細砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回りか？胴部下位は回転ヘラ削りが2段施されている。胴部には凹線が5条巡る。	
第293図109 P L. 156	須恵器 短頸壺	B y-0 1/3	② 13.4 胴部最大径 24.2	①細砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向不明。底部はヘラ調整。高台は貼付。	
第293図110 P L. 156	須恵器 広口壺	B q-16 口縁部～胴部上位片	① 10.2 胴部最大径 17.8	①細砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向不明。口縁部下に凹線が1条巡る。外面には自然釉が付着。	
第293図111 P L. 156	須恵器 甕	B t-15 口縁部・胴部の一部欠	① 26.6 ② 16.2 ④ 41.3	①粗砂粒 ②還元焰 ③褐灰色	外面胴部は全面に平行叩、内面は器面の大部分が剥離しているため不明。底部はヘラナデ？	
第293図112 P L. 156	灰釉陶器 椀	C c-21 1/6	① 13.0 ②6.7③7.1 ④ 5.2	①微砂粒 ②還元焰堅緻 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向不明。高台は貼付。見込み部に重焼き痕が残る。施釉方法は漬け掛け。釉調は不透明な緑灰色。	大原2号窯式期

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
第293図113 P L. 151	灰釉陶器 椀	B g - 5 1/5	① 13.4 ②7.4③7.8 ④ 4.2	①緻密 ②還元焰堅緻 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転ヘラ調整後高台を貼付。施釉方法は刷毛塗りか。釉調は不透明な灰白色。	
第293図114 P L. 156	灰釉陶器 椀	C h - 10 1/4	① 15.6 ②7.8③8.2 ④ 5.6	①微砂粒 ②還元焰堅緻 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部回転ヘラ調整。内面は見込み部に重焼き痕が残り、硯に使用のために擦り磨かれ墨が付着。施釉方法は漬け掛け。	大原2号窯式期
第293図115 P L. 156	灰釉陶器 椀	C k - 5 1/4	① 16.8 ②8.2③8.4 ④ 4.9	①細砂粒 ②還元焰 ③灰黄色	ロクロ整形、回転方向不明。底部は回転ヘラ調整。	
第293図116 P L. 151	灰釉陶器 椀	B j - 6 底部片	② 9.4 ③ 10.0	①微砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向不明。底部は回転ヘラ調整後高台を貼付。内面に重焼き痕が残る。施釉方法は刷毛塗り。釉調は透明感のある黄緑色。	
第294図117 P L. 156	灰釉陶器 椀	C d - 1 底部片	② 8.8 ③ 9.0	①緻密 ②還元焰堅緻 ③灰色	ロクロ整形、回転方向不明。底部は回転糸切り後ヘラ調整。内面に重焼き痕が残る。施釉方法は漬け掛け。内面は擦り磨かれ、外面に「𠄎」の墨書。	
第294図118 P L. 156	青磁 椀	小片		①微砂粒 ②還元焰 ③灰色	外面に鎬手蓮弁文。片切彫による蓮弁。釉調は透明感のある緑灰色。	
第294図119 P L. 151	須恵器 鉢	C f - 4 5/6	① 15.0 ② 8.0 ③ 6.7	①粗砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向不明。口縁部は横ナデ、体部上半は縦方向、下半は横方向ヘラ削り。底部は一定方向ヘラ削り。	
第294図120 P L. 156	土師器 甕	C k - 5 口縁部～胴部 中位片	① 19.8	①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	「コ」の字状口縁甕。口縁部から頸部は横ナデ。外面胴部は上位が横方向、中位が縦方向ヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第294図121 P L. 156	須恵器 椀	B x - 0 底部	② 6.8 ③ 7.5	①細砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付。体部は打ち欠かれ、内面底部は擦り磨かれている。	
第294図122 P L. 156	須恵器 椀	B x - 1 底部	② 8.6	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付。体部は打ち欠かれ、内面底部は若干擦り磨かれている。	
第294図123 P L. 156	須恵器 椀	C d - 6 底部	② 8.4 ③ 9.4	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付。体部は打ち欠かれ、内面底部は擦り磨かれている。	
第294図124 P L. 156	土師器 杯	B p - 12 口縁部小片		①細砂粒 ②酸化焰 ③明赤褐色	外面口縁部に墨書、判読不能。	
第294図125 P L. 156	土師器 杯	B p - 12 口縁部小片		①細砂粒 ②酸化焰 ③明赤褐色	外面口縁部に墨書、判読不能。	
第294図126 P L. 156	土師器 杯	B r - 13 口縁部小片		①細砂粒 ②酸化焰 ③明赤褐色	外面口縁部に「八万」の墨書。	
第294図127 P L. 156	土師器 杯	B v - 5～7 口縁部小片		①微砂粒 ②酸化焰 ③橙色	外面口縁部に「十」の墨書。	
第294図128 P L. 156	土師器 杯	C b - b 口縁部小片		①微砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	外面口縁部に墨書、判読不能。	
第294図129 P L. 156	土師器 杯	B y 口縁部小片		①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	外面口縁部に墨書、判読不能。	
第294図130 P L. 156	土師器 杯	C h - 8 口縁部小片		①粗砂粒 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	内面口縁部に墨書、判読不能。	
第294図131 P L. 156	土師器 杯	B j 口縁部小片		①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	内面口縁部に「𠄎」の墨書。	
第294図132 P L. 156	土師器 杯	C f - 3 底部片		①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	内外面底部に墨書、内外面とも判読不能。	
第294図133 P L. 157	土師器 杯	C f - 14 底部小片		①微砂粒 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	内外面底部に墨書、内外面とも判読不能。	
第294図134 P L. 156	土師器 杯	B n - 0～14 底部小片		①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	外面底部に墨書。判読不能。	
第294図135 P L. 157	土師器 杯	B v - 19 底部小片		①細砂粒 ②酸化焰 ③明赤褐色	外面底部に「大」の墨書。	
第294図136 P L. 157	土師器 杯	B x - 25 底部小片		①微砂粒 ②酸化焰 ③橙色	外面底部に墨書、判読不能。	

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第294図137 P L. 157	土師器 杯	C d-22 底部小片		①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	外面底部に墨書、判読不能。	
第294図138 P L. 157	土師器 杯	C f-3 底部小片		①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	外面底部に墨書、判読不能。	
第294図139 P L. 157	土師器 杯	C j-7 底部小片		①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい黄褐色	外面底部に墨書、判読不能。	
第294図140 P L. 157	土師器 杯	C n-14 底部小片		①微砂粒 ②酸化焰 ③明赤褐色	外面底部に墨書、判読不能。	
第294図141 P L. 157	土師器 杯	埋没土 底部小片		①微砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	外面底部に墨書、判読不能。	
第294図142 P L. 157	土師器 杯	B j-6 底部小片		①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	内面底部に墨書、判読不能。	
第294図143 P L. 157	土師器 杯	B v-19 底部小片		①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい褐色	内面底部に「中万」の墨書。	
第294図144 P L. 157	土師器 杯	B x-23 底部小片		①微砂粒 ②酸化焰 ③にぶい褐色	内面底部に墨書、判読不能。	
第294図145 P L. 157	土師器 杯	C a-0 底部小片		①微砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	内面底部に墨書、判読不能。	
第294図146 P L. 157	土師器 杯	C f-1 底部小片		①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい黄褐色	内面底部に墨書、判読不能。	
第294図147 P L. 157	土師器 杯	C f-6 底部小片		①微砂粒 ②酸化焰 ③にぶい赤褐色	内面底部に墨書、判読不能。	
第295図148 P L. 157	土師器 杯	C h-8 底部小片		①微砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	内面底部に墨書、判読不能。	
第295図149 P L. 157	土師器 杯	埋没土 底部小片		①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	内面底部に墨書、判読不能。	
第295図150 P L. 157	須恵器 杯	B v~u 口縁部小片		①細砂粒 ②還元焰 ③黄灰色	外面口縁部に墨書、判読不能。	
第295図151 P L. 157	須恵器 杯	C i-9 底部小片	② 6.6	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、底部切り放し技法は回転系切りか？ 内外面に墨書、判読不能。	
第295図152 P L. 158	須恵器 杯	B q-14 底部片	② 6.0	①細砂粒 ②還元焰 ③にぶい褐色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転系切り。 内面に墨書、判読不能。	
第295図153 P L. 158	須恵器 杯	B r-14 底部片	② 6.4	①細砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転系切り。 内面に墨書、判読不能。	
第295図154 P L. 158	須恵器 椀	C q-10 底部片	② 8.5	①細砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部は回転系切り。 高台は剥落。内外面に墨書、判読不能。	
第295図155 P L. 158	須恵器 椀	C h-3 底部片	② 6.0	①粗砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向右回り。底部はへら切り後 高台を貼付。内面に墨書、判読不能。	
第295図156 P L. 158	土師器 杯	B r-17 口縁部小片		①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	内面口縁部に「+」刻書。	
第295図157 P L. 158	土師器 杯	C l-2 底部小片		①微砂粒 ②酸化焰 ③橙色	内面に墨痕が認められる。	
第295図158 P L. 158	土師器 杯	C d-3 底部片		①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい褐色	内面底部に「人」刻書。	
第295図159 P L. 158	土師器 杯	B p-14 1/2	① 13.8 ② 8.4	①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。底部はへら 削り。外面口縁部に「ケ」字状の墨書。	
第295図160 P L. 158	土師器 杯	B p-24 口縁部小片		①細砂粒 ②酸化焰 ③赤褐色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。外面口縁部 に墨書、判読不能。	
第295図161 P L. 158	土師器 杯	B p-5 口縁部小片		①細砂粒 ②酸化焰 ③赤褐色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整。外面口縁部 に墨書、判読不能。	
第295図162 P L. 158	土師器 杯	B p-13 口縁部小片		①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい橙色	口縁部上半は横ナデ、下半はへら削り。外面口縁部 に墨書、判読不能。	
第295図163 P L. 158	土師器 杯	B r-13 口縁部小片		①細砂粒 ②酸化焰 ③明赤褐色	口縁部は横ナデ、内面口縁部に墨書、判読不能。	
第295図164 P L. 158	土師器 杯	B n-11 底部小片		①細砂粒 ②酸化焰 ③明赤褐色	外面底部はへら削り。内外面に墨書、判読不能。	
第295図165 P L. 158	土師器 杯	A t-6 底部小片		①細砂粒 ②酸化焰 ③にぶい黄褐色	外面底部はへら削り。内外面に墨書、判読不能。	
第295図166 P L. 158	土師器 杯	A t-7 底部片		①細砂粒 ②酸化焰 ③橙色	外面底部はへら削り。内面に墨書、判読不能。	

グリッド出土遺物

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第295図167 P L. 159	土師器 杯	B i - 6 底部片		①微砂粒 ②酸化焙 ③橙色	外面底部はヘラ削り。内面に墨書、判読不能。	
第295図168 P L. 159	土師器 杯	B p - 12 底部小片		①細砂粒 ②酸化焙 ③橙色	外面底部はヘラ削り。内面に墨書、判読不能。	

グリッド出土遺物(砥石)

挿図番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 遺存状態	量 目	①胎土②焼成③色調	製 作 技 法 等 の 特 徴	備 考
第295図169 P L. 159	石器 砥石	B p - 16	長 6.45 幅 3.05 厚 1.7	砥沢石		
第295図170 P L. 159	石器 砥石	A x - 6	長 5.3 幅 3.6 厚 1.6	流紋岩		
第295図171 P L. 159	石器 砥石	B g - 6	長 7.0 幅 2.75 厚 2.2	砥沢石		
第295図172 P L. 159	石器 砥石	B e - 3	長 4.0 幅 3.15 厚 1.5	砥沢石		
第295図173 P L. 159	石器 砥石	A x - 4	長 3.8 幅 4.1 厚 1.4	頁岩		
第295図174 P L. 159	石器 砥石	B e - 5	長 3.25 幅 2.8 厚 0.6	砥沢石		

報告書抄録

フリガナ	ニノミヤヤチイセキ
書名	二之宮谷地遺跡
副書名	一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告
シリーズ番号	第162集
編著者名	原 雅信
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
編集機関所在地	〒377 群馬県勢多郡北橘村大字下箱田784-2
発行年	西暦1994年3月25日

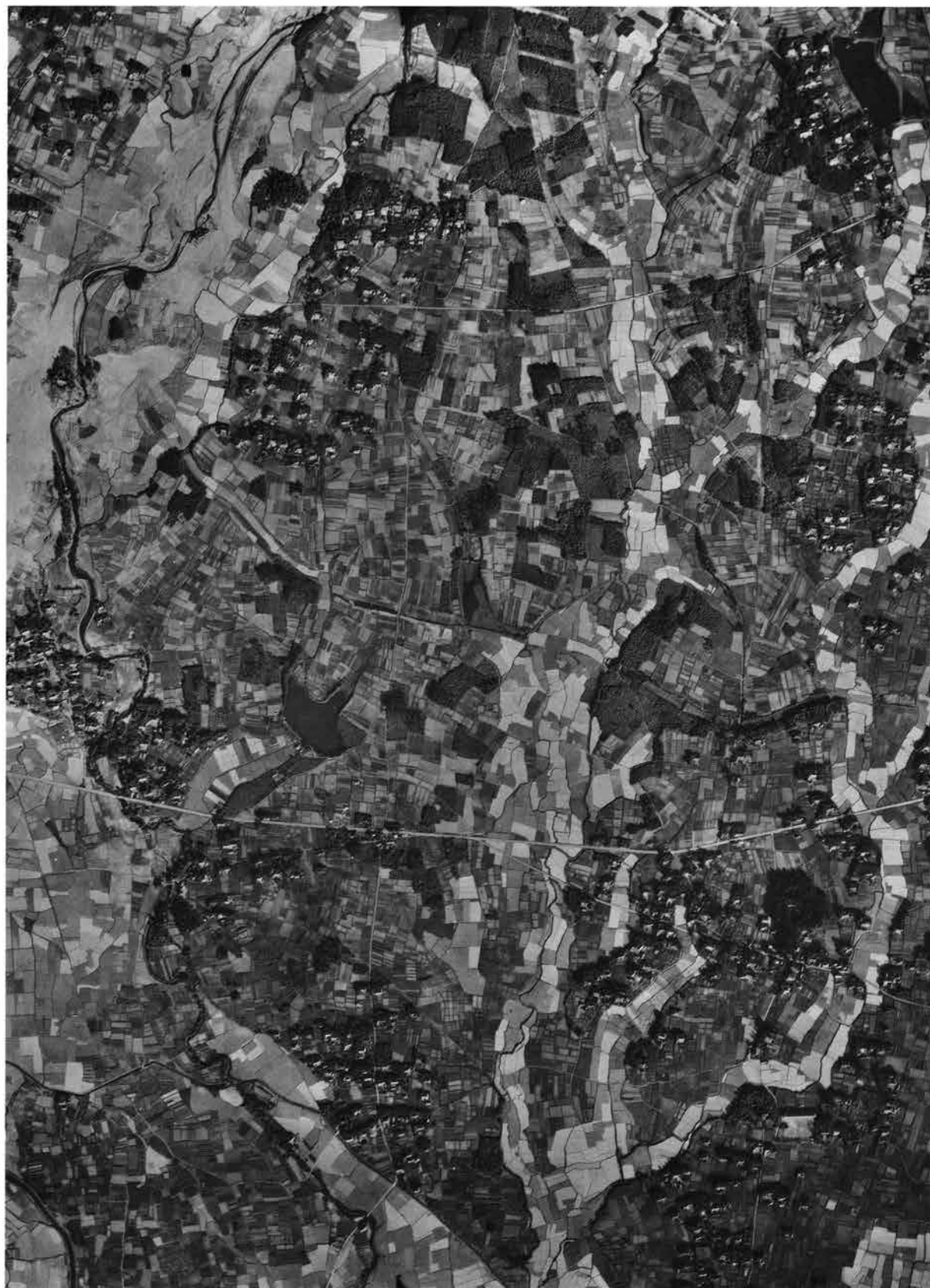
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯 °'"	東経 °'"	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ニノミヤヤチ 二之宮谷地	マエバシシニノミヤヤチ 前橋市二之宮町	10201	00122	36° 21' 45"	139° 9' 42"	19860901— 19870813	13,500	道路建設

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
住居	古墳後期 ～平安	竪穴住居 88	墨書土器 漆付着の土器	墨書土器には「金」「茶」「今」 等がある。 水田耕作に伴う灌漑施設と して溜井のほか、温め状遺 構が検出された。
		掘立柱建物 2	旧石器 土錘 瓦塔 手捏ね 瓦類	
		溝 31	鉄製品(鎌、鋏、釘) 平瓶 甕	
		土坑 97 (土壇墓 8 基を含む)		
		井戸 36 溜井及び温め状遺構		

写真図版



上空から見た遺跡周辺（昭和62年3月4日撮影）



上空からみた遺跡周辺



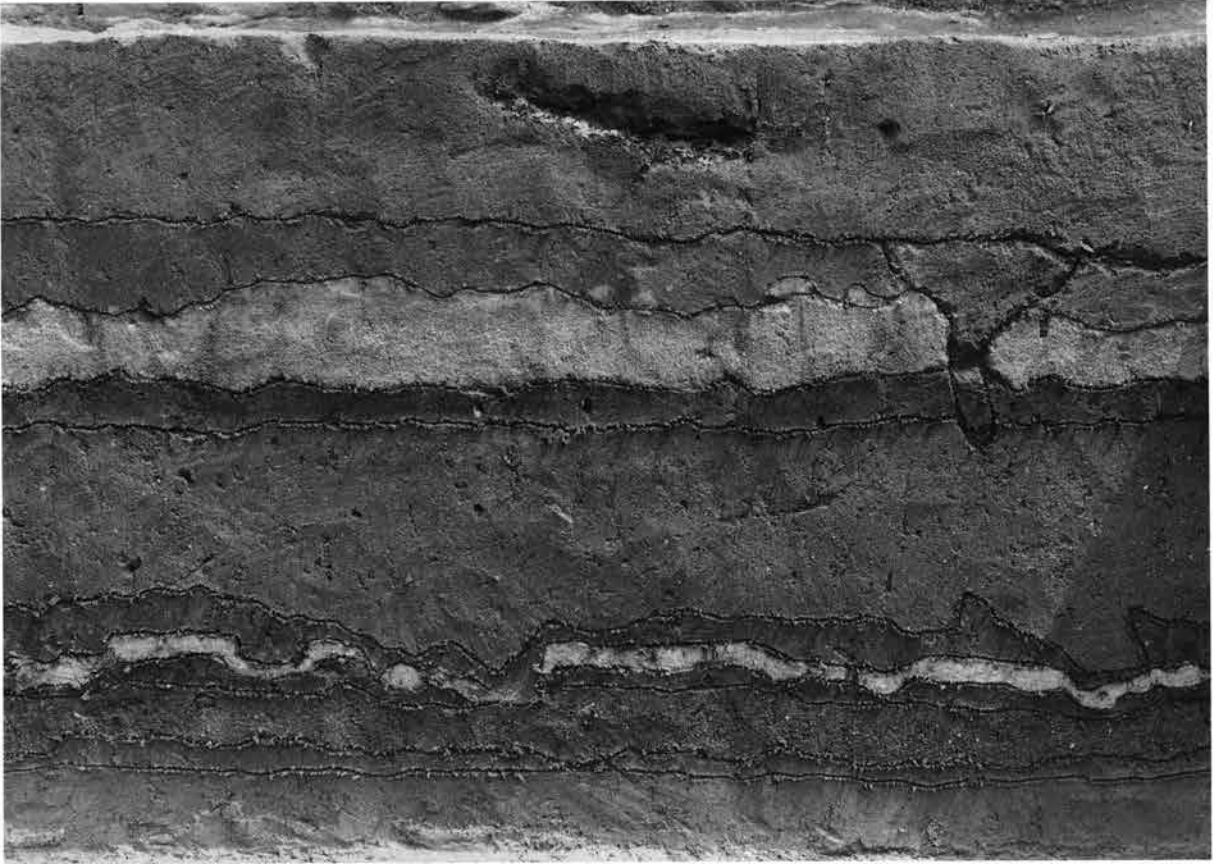
上空から見た遺跡周辺（昭和22年2月6日米極東空軍撮影）



1. 遺跡遠景 (東から)



2. 遺跡遠景 (東から)



1. 沖積地の土層 (Bx-18)



2. 沖積地の土層 (Cb-21)



1. Ba-2グリッド北壁断面



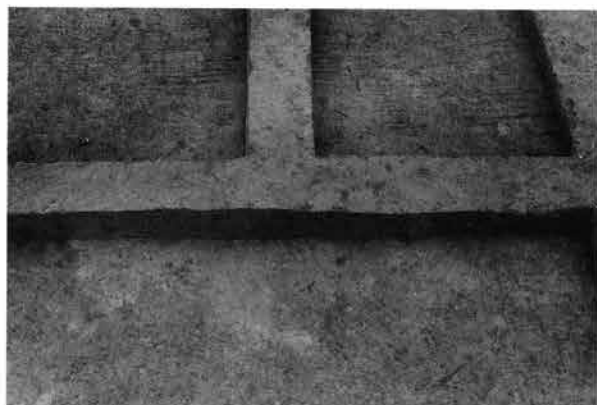
2. Au-1グリッド北壁断面



3. 暗色帯中落ち込み断面



4. 暗色帯中落ち込み



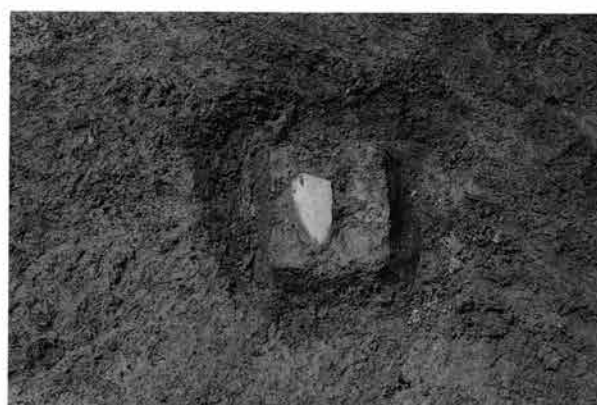
5. BPの落ち込み確認状態



6. 5の土層断面



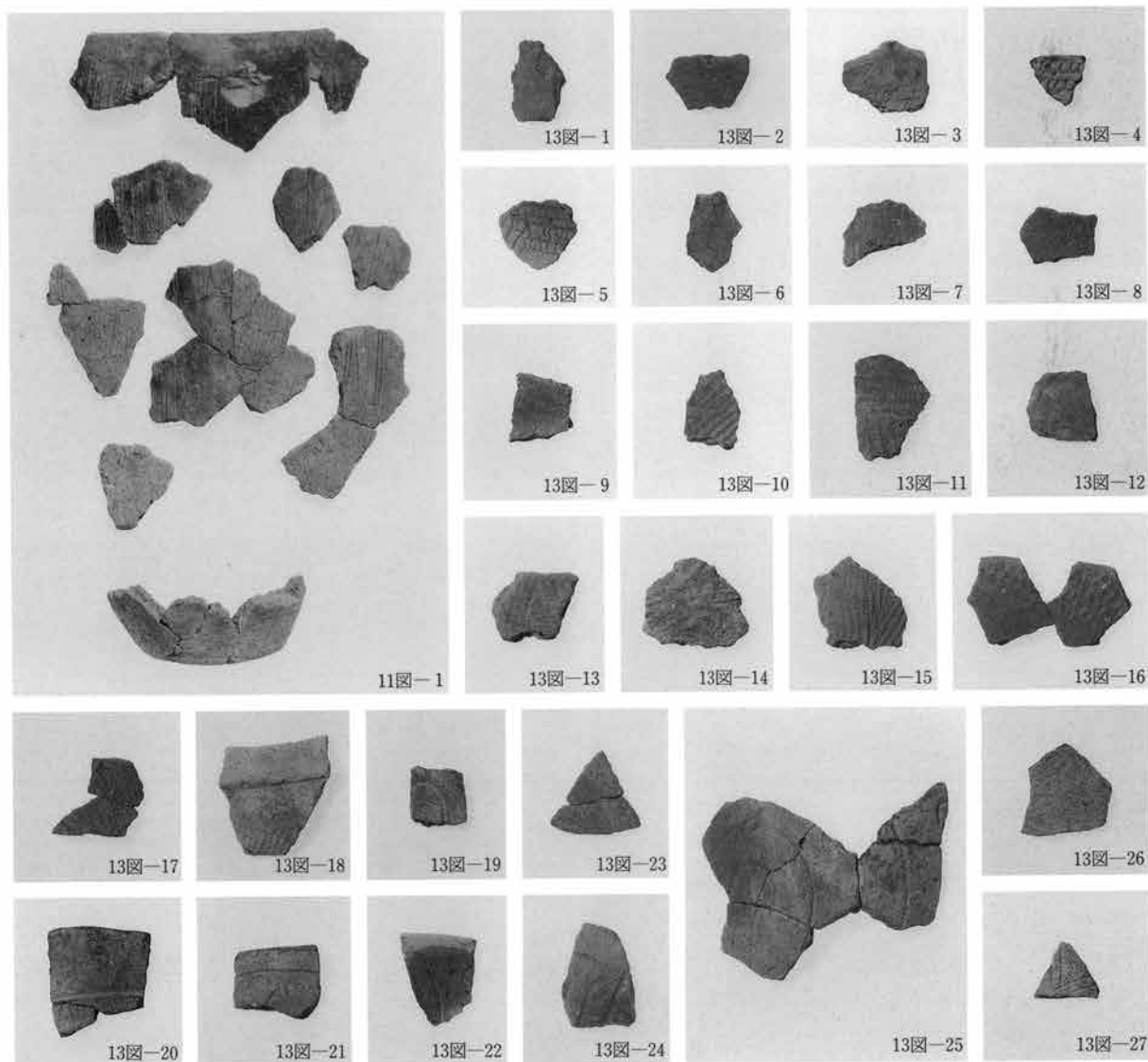
7. 遺物出土状態



8. 遺物出土状態



1. 縄文土器出土状態 (Au-18・19グリッド)



出土遺物



1. 1号住居



2. 1号住居掘り方



3. 2号住居



4. 2号住居掘り方



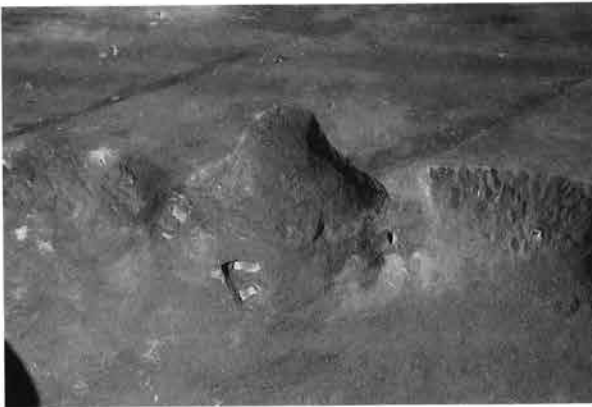
5. 2号住居カマド



6. 2号住居遺物出土状態



1. 3号住居



2. 3号住居カマド



3. 3号住居カマド掘り方



4. 3号住居遺物出土状態



5. 3号住居掘り方



1. 4号住居



2. 4号住居掘り方



3. 4号住居カマド



4. 4号住居カマド掘り方



1. 5号住居



2. 5号住居掘り方



3. 5号住居カマド断面



4. 5号住居カマド



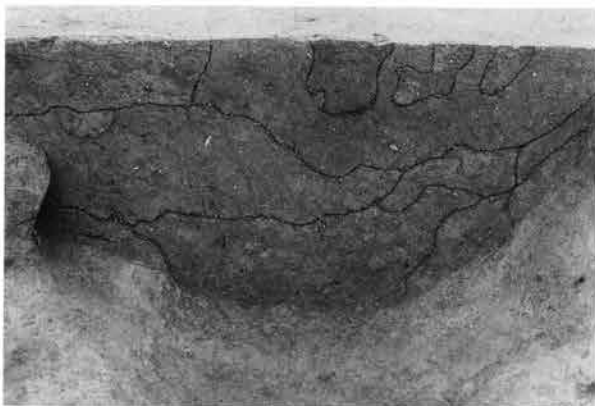
1. 6号住居



2. 6号住居遺物出土状態



3. 6号住居遺物出土状態



4. 6号住居カマド断面



5. 6号住居カマド



1. 7号住居



2. 7号住居掘り方



3. 7号住居カマド遺物出土状態



4. 7号住居カマド



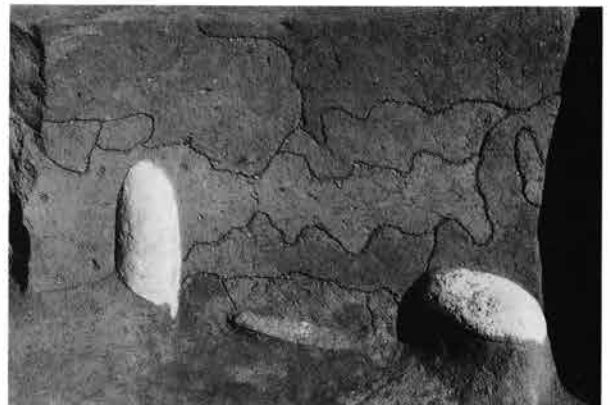
1. 8号住居



2. 8号住居掘り方



3. 8号住居カマド



4. 8号住居カマド断面



1. 9号住居



2. 9号住居カマド



3. 9号住居カマド断面



4. 9号住居掘り方断面



5. 9号住居掘り方



1. 10号住居



2. 10号住居掘り方



3. 10号住居カマド



4. 10号住居遺物出土状態



1. 11号住居



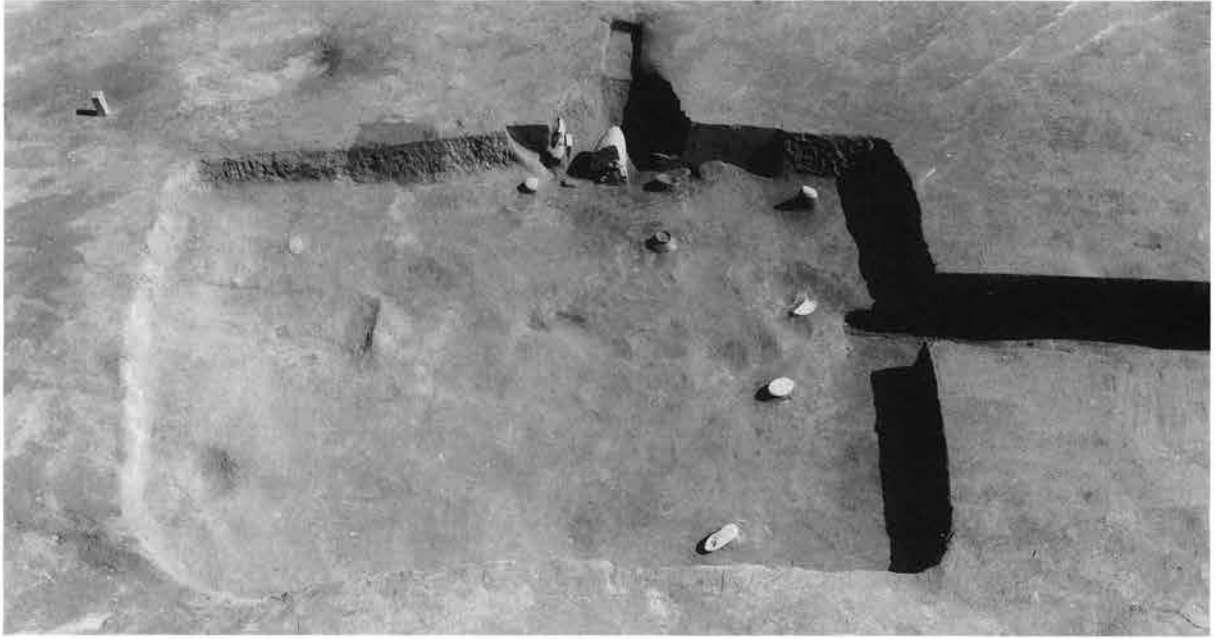
2. 11号住居掘り方



3. 11号住居カマド遺物出土状態



4. 11号住居カマド



1. 12号住居



2. 12号住居掘り方



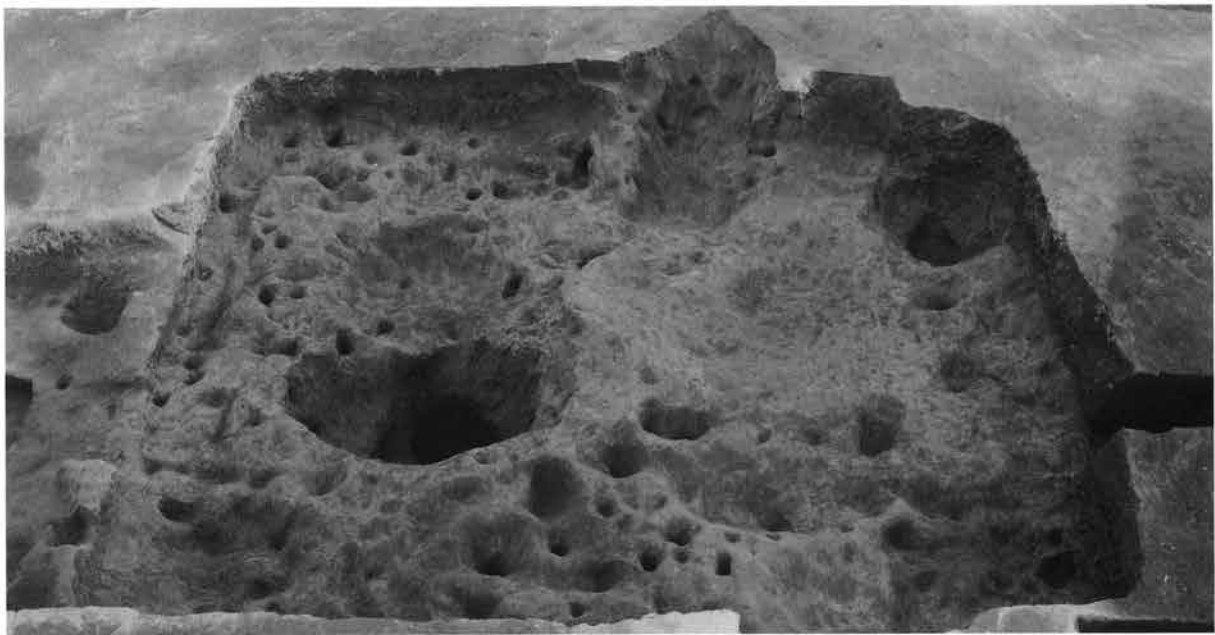
3. 12号住居カマド



4. 12号住居カマド掘り方



1. 13号住居



2. 13号住居掘り方



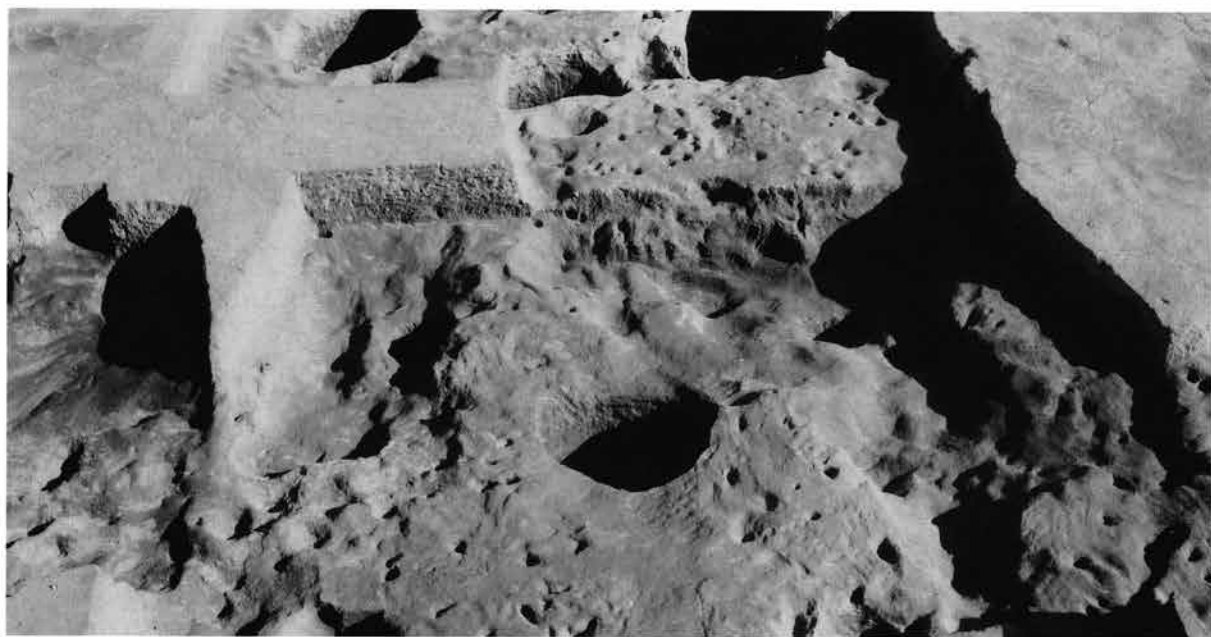
3. 13号住居カマド



4. 13号住居カマド掘り方



1. 14号住居



2. 14号住居掘り方



3. 14号住居カマド



4. 14号住居カマド掘り方



1. 15号住居



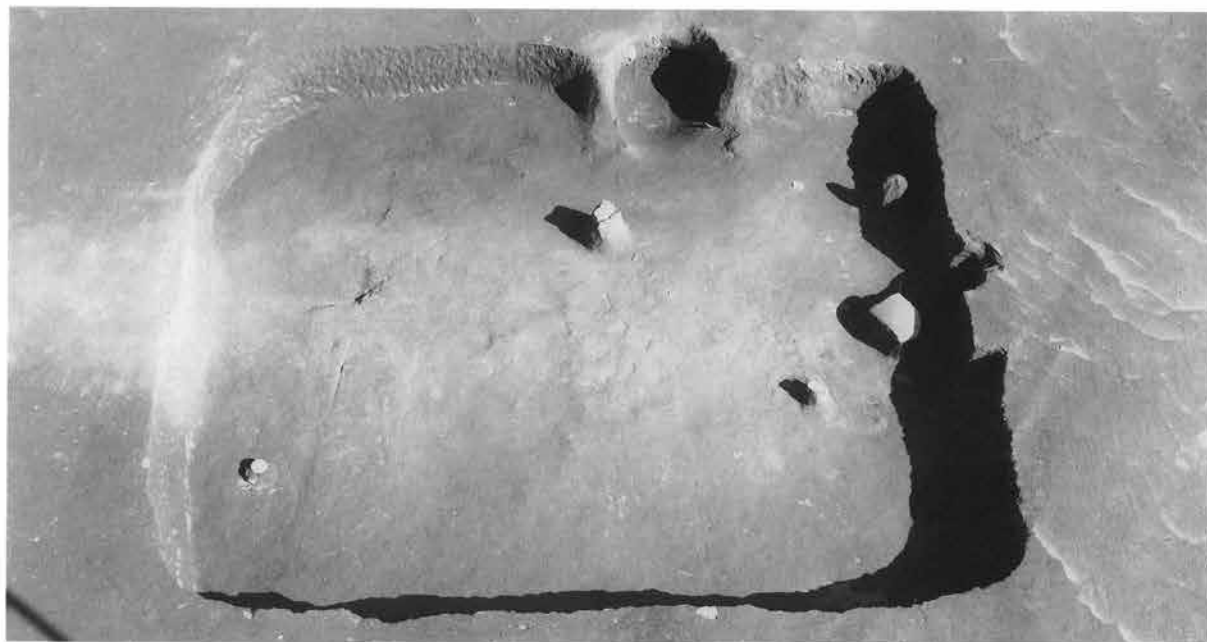
2. 15号住居掘り方



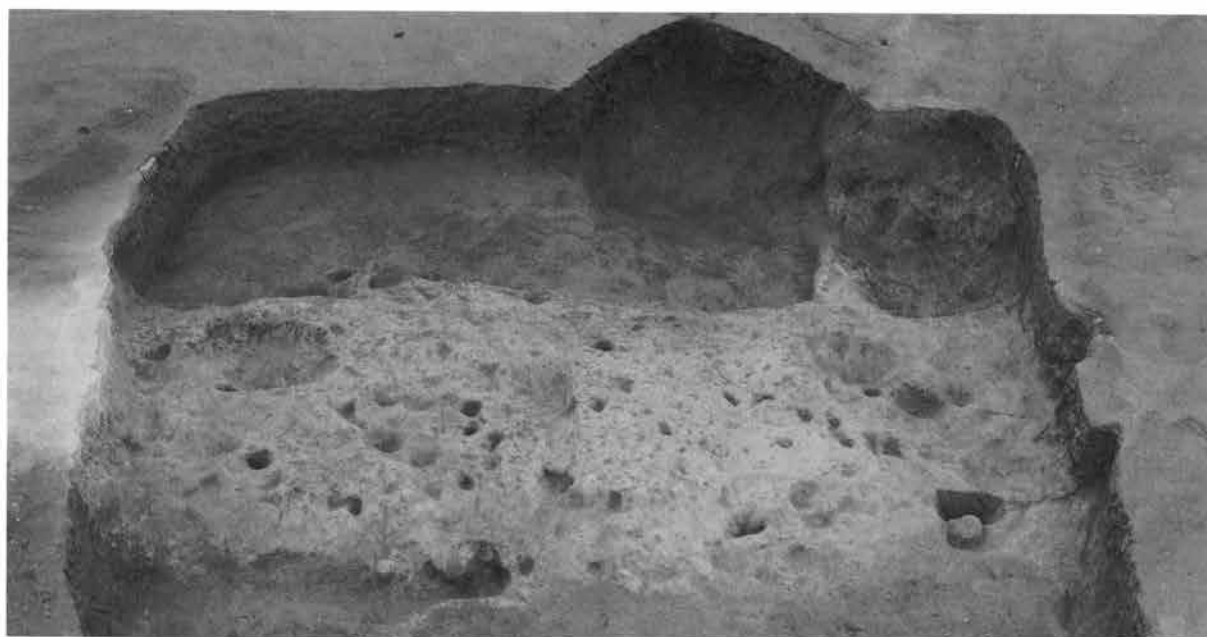
3. 15号住居カマド



4. 15号住居カマド掘り方



1. 16号住居



2. 16号住居掘り方



3. 16号住居カマド



4. 16号住居カマド掘り方断面



1. 17号住居



2. 17号住居カマド



3. 17号住居カマド断面



4. 17号住居遺物出土状態



5. 17号住居掘り方



1. 18号住居



2. 18号住居掘り方



1. 19号住居



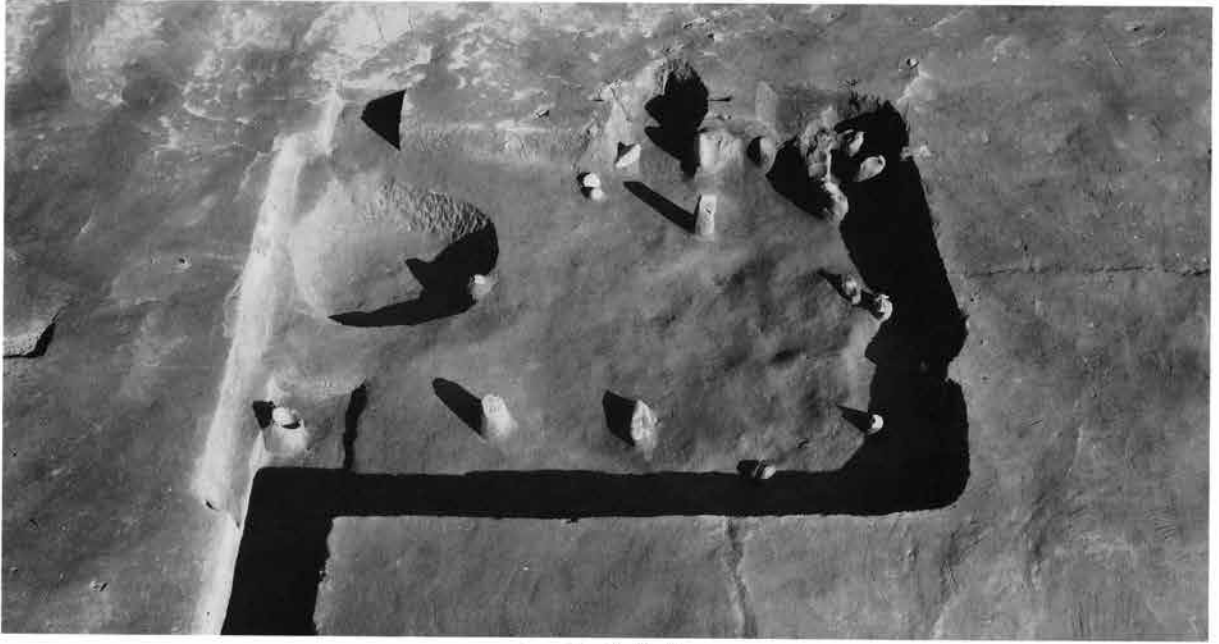
2. 19号住居掘り方



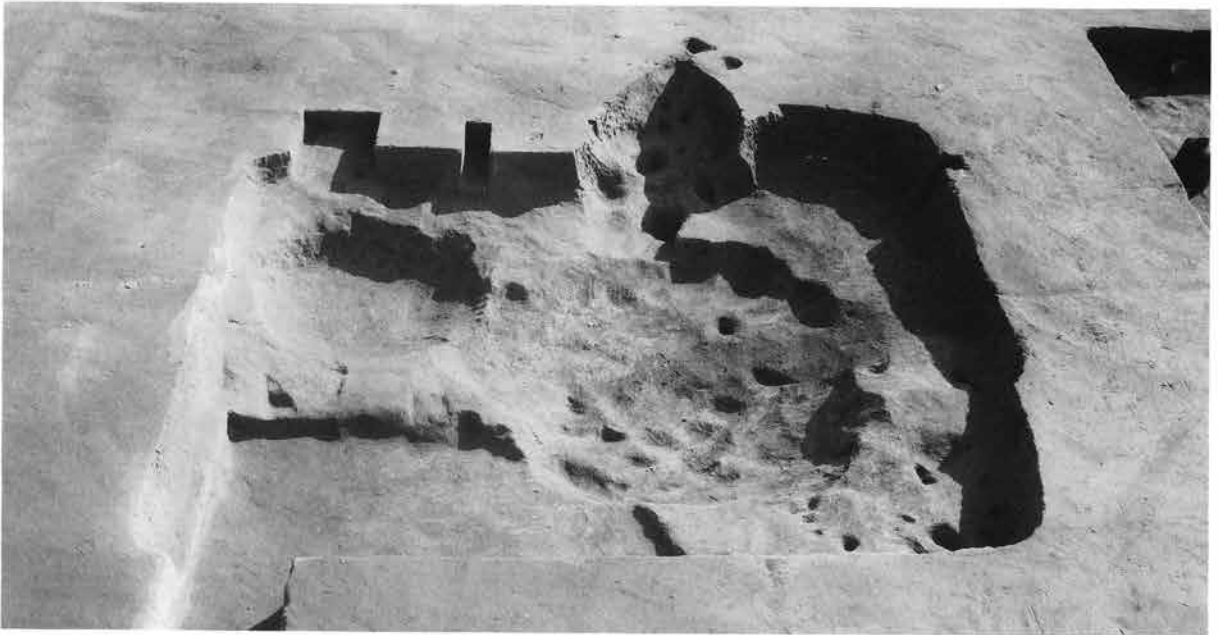
3. 19号住居カマド



4. 19号住居カマド掘り方



1. 20号住居



2. 20号住居掘り方



3. 20号住居カマド



4. 20号住居カマド掘り方



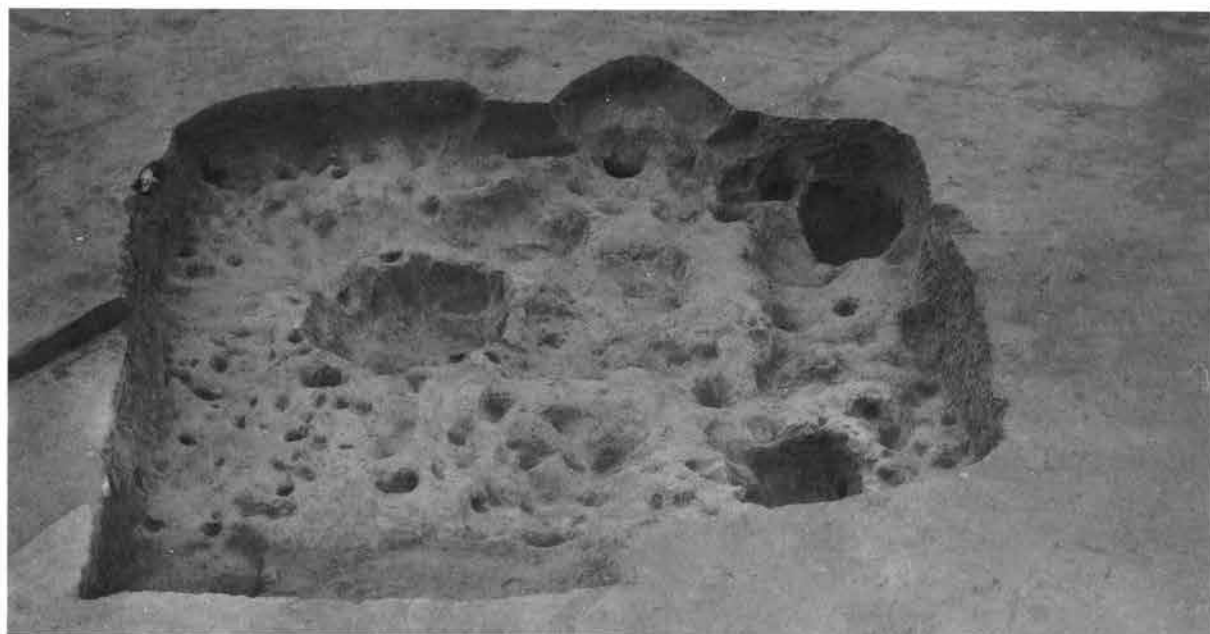
1. 21号住居



2. 21号住居掘り方



1. 22号住居



2. 22号住居掘り方



3. 22号住居カマド遺物出土状態



4. 22号住居カマド



1. 23号住居



2. 23号住居カマド



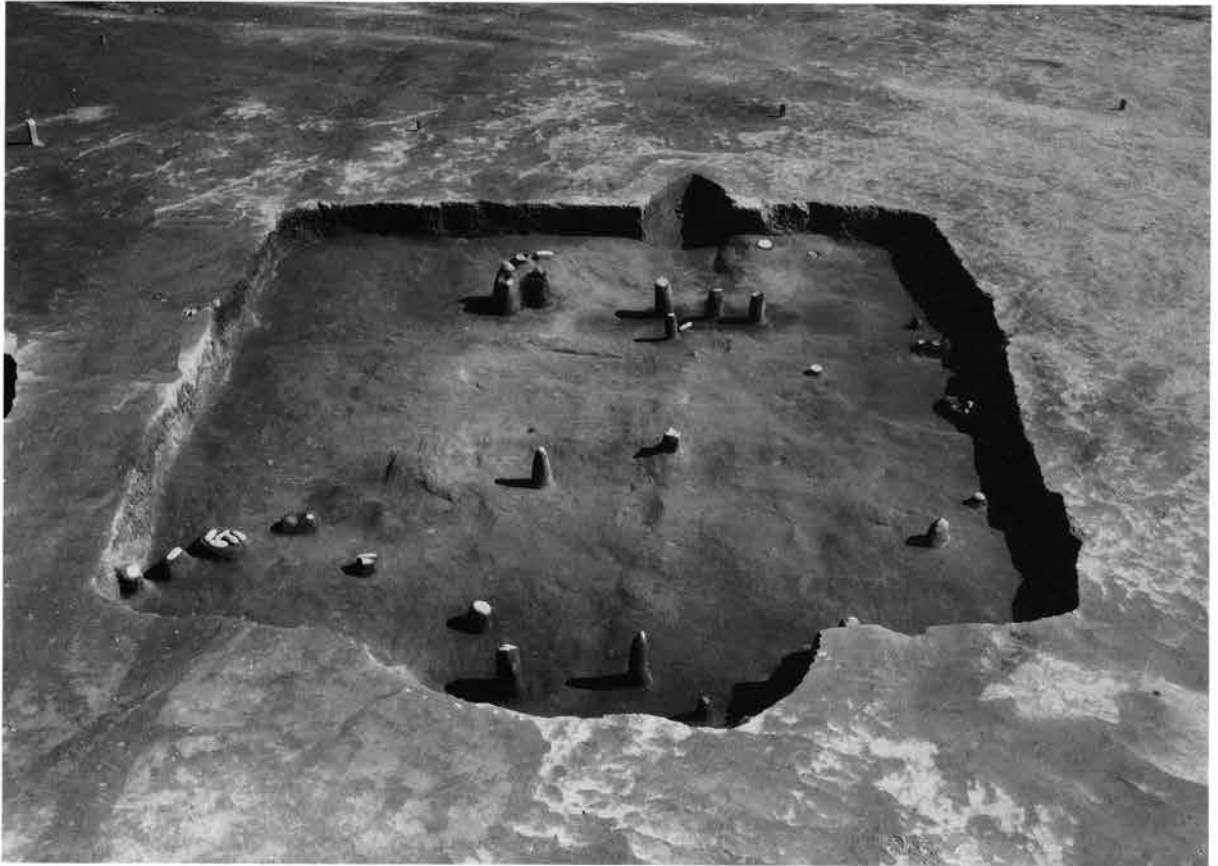
3. 23号住居カマド掘り方



4. 23号住居カマド掘り方



5. 23号住居掘り方



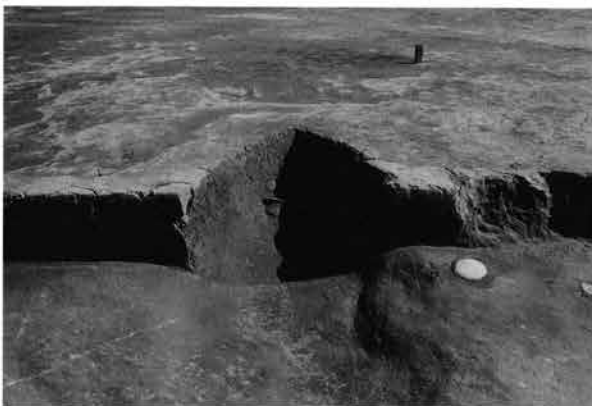
1. 24号住居



2. 24号住居掘り方



3. 24号住居カマド掘り方



4. 24号住居カマド



5. 24号住居掘り方



1. 25号住居



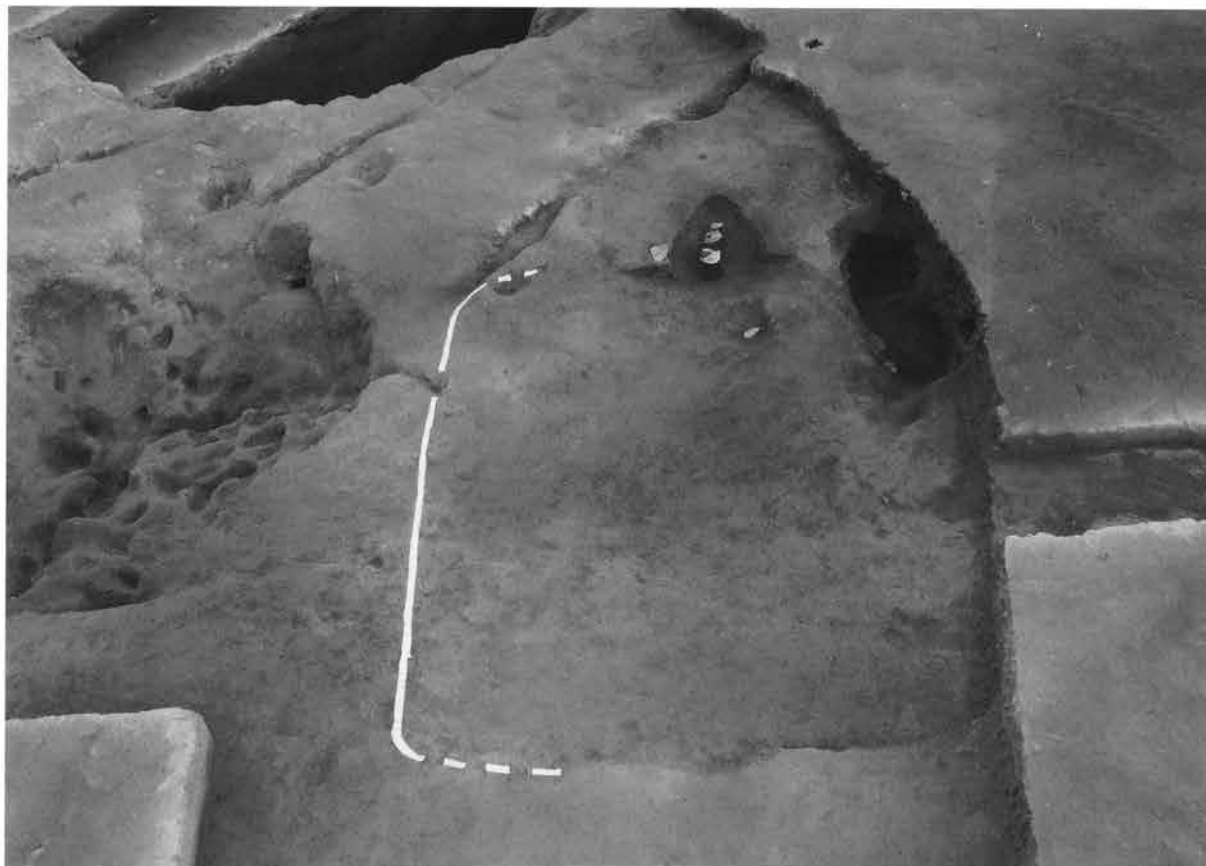
2. 25号住居掘り方



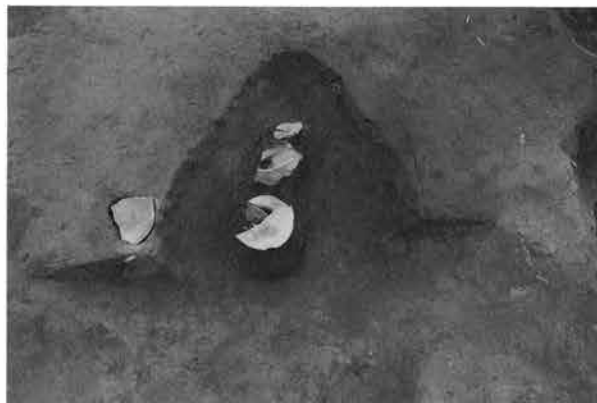
3. 25号住居カマド



4. 25号住居カマド掘り方



1. 26号住居



2. 26号住居カマド



3. 26号住居カマド遺物出土状態



4. 26住居カマド掘り方



5. 26号住居貯蔵穴



1. 27号住居



2. 27号住居掘り方



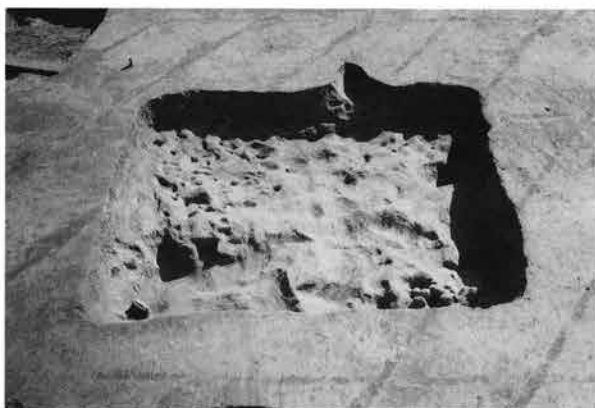
1. 28号住居



2. 28号住居



3. 28号住居カマド



4. 28号住居掘り方



5. 28号住居カマド掘り方



1. 29号住居



2. 29号住居



3. 29号住居カマド



4. 29号住居掘り方



5. 29号住居カマド掘り方



1. 30号住居



2. 30号住居遺物出土状態



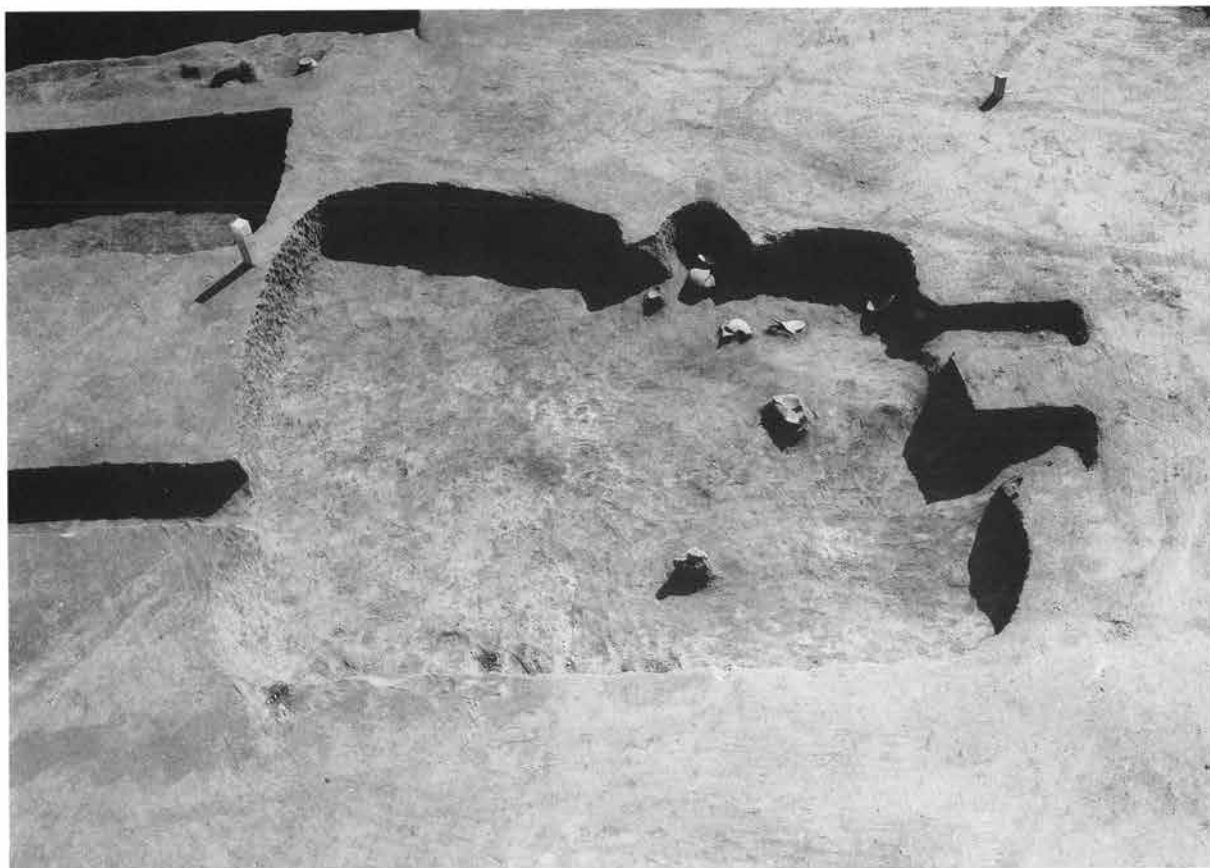
3. 30号住居遺物出土状態



4. 30号住居カマド



5. 30号住居カマド掘り方



1. 31号住居



2. 31号住居掘り方



1. 32号住居



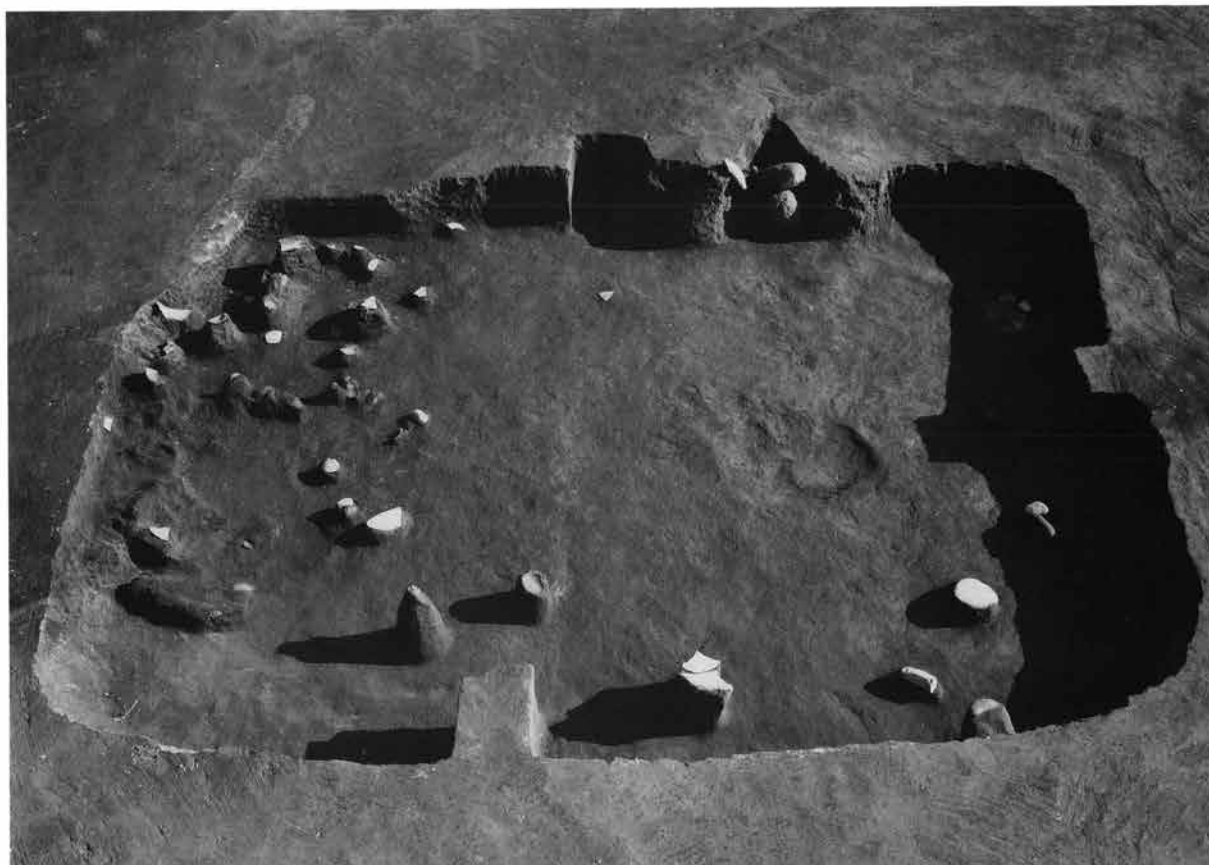
2. 32号住居掘り方



3. 32号住居貯蔵穴



4. 32号住居遺物出土状態



1. 33号住居



2. 33号住居カマド



3. 33号住居遺物出土状態



4. 33号住居カマド掘り方



5. 33号住居掘り方



1. 34号住居



2. 34号住居掘り方



3. 34号住居カマド



4. 34号住居カマド掘り方



1. 35号住居遺物出土状態



2. 35号住居遺物出土状態



3. 35号住居カマド遺物出土状態



4. 35号住居遺物出土状態



5. 35号住居遺物出土状態



1. 35号住居



2. 35号住居カマド遺物出土状態



3. 35号住居カマド



4. 35号住居カマド掘り方



5. 35号住居掘り方



1. 36号住居



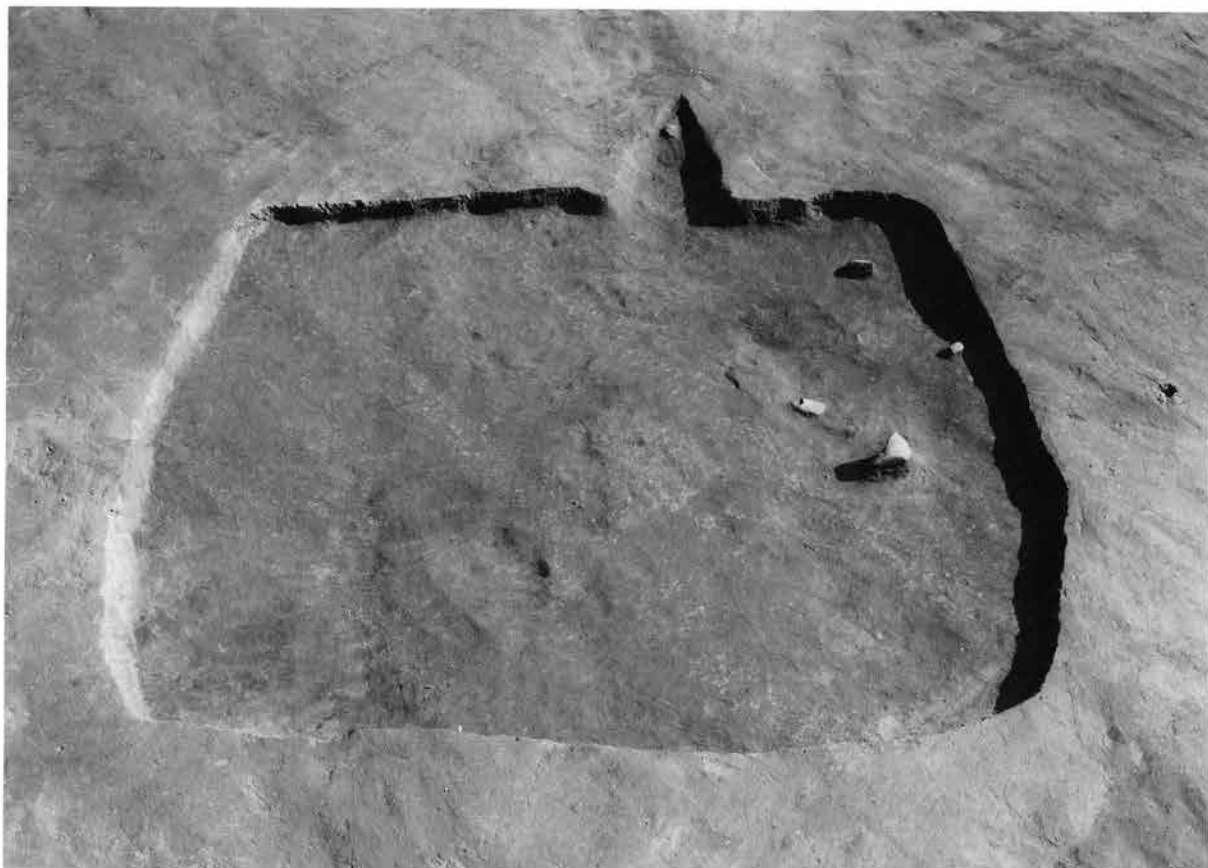
2. 36号住居掘り方



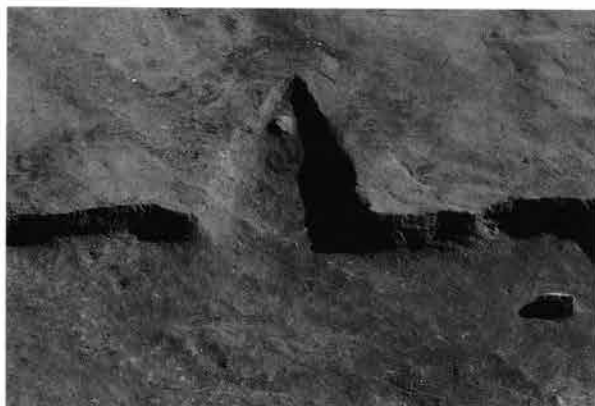
3. 36号住居遺物出土状態



4. 36号住居カマド掘り方



1. 37号住居



2. 37号住居カマド



3. 37号住居遺物出土状態



4. 37号住居掘り方



5. 37号住居カマド掘り方



1. 38号住居遺物出土狀態



2. 38号住居遺物出土狀態



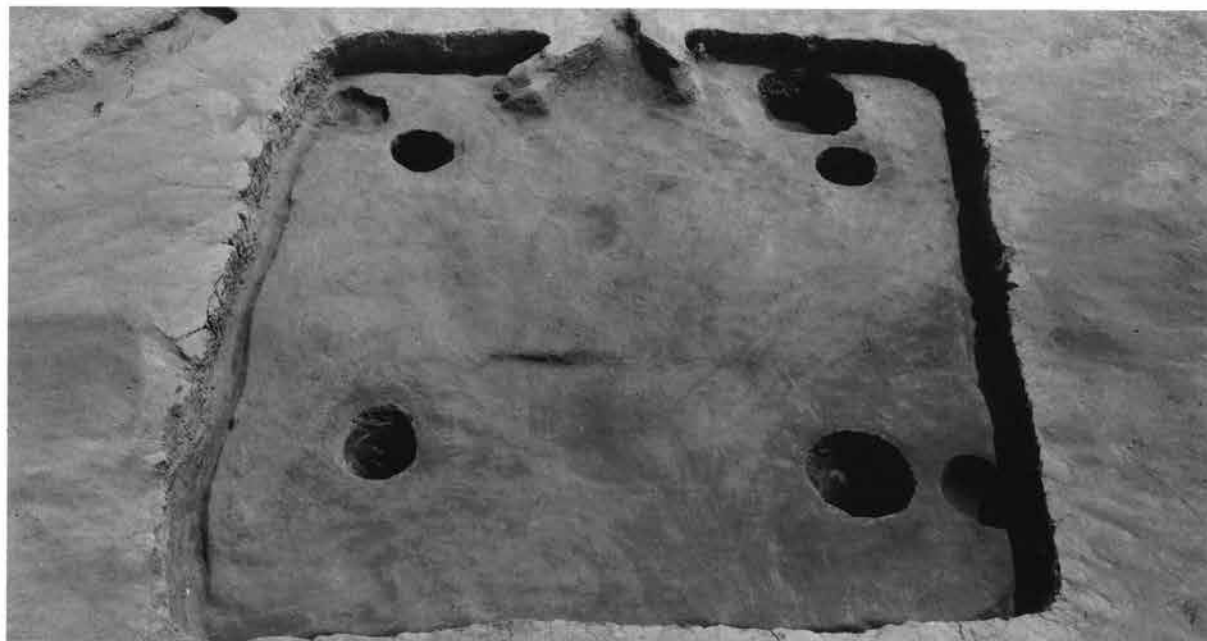
3. 38号住居遺物出土狀態



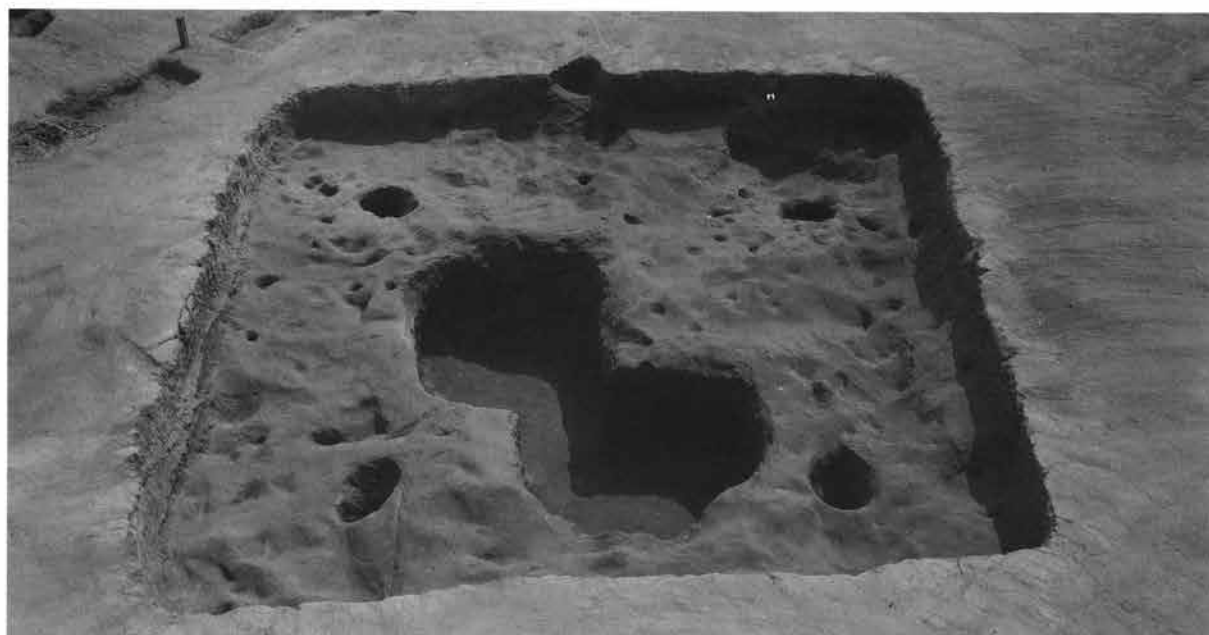
4. 38号住居遺物出土狀態



5. 38号住居遺物出土狀態



1. 38号住居



2. 38号住居掘り方



3. 38号住居カマド



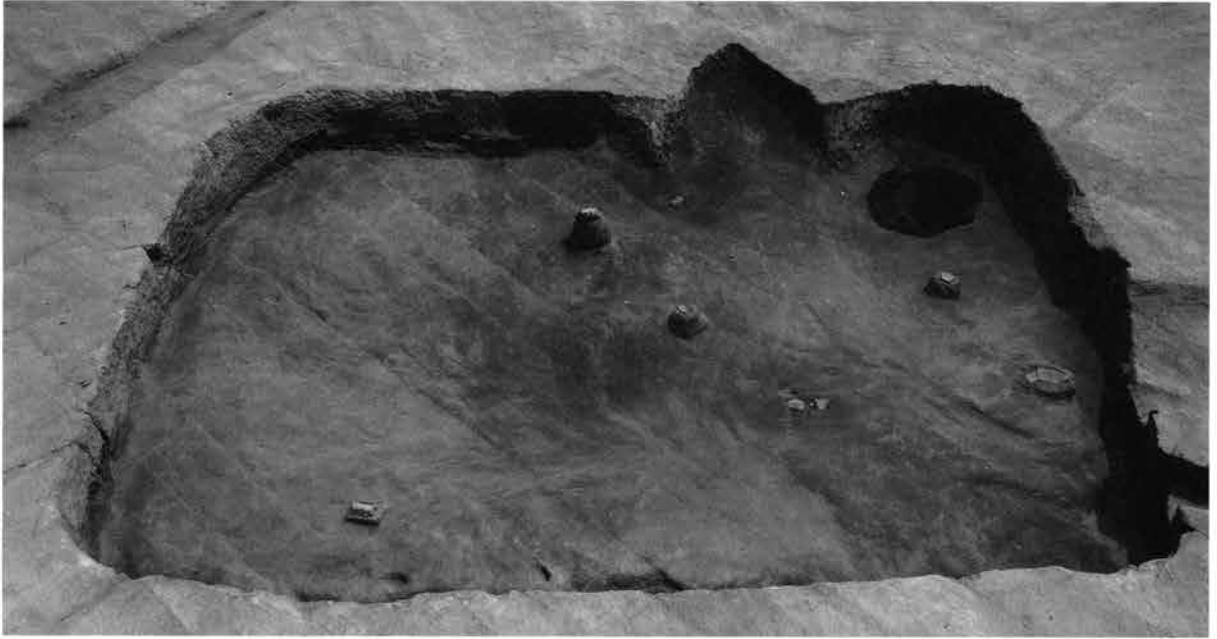
4. 38号住居カマド掘り方



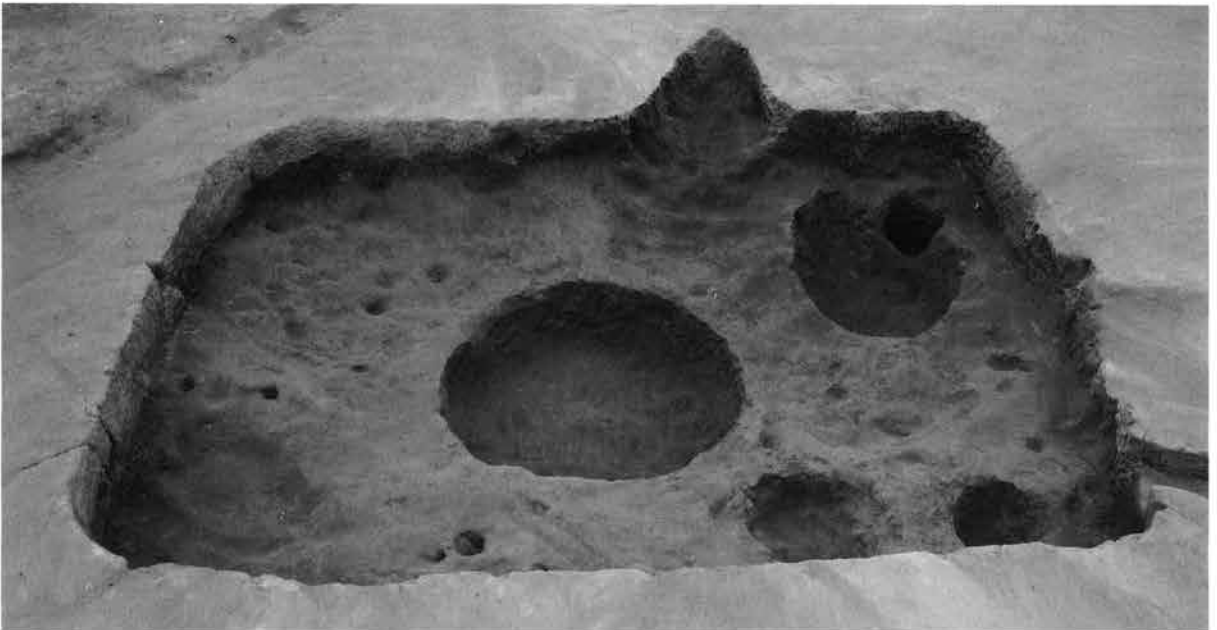
1. 39号住居



2. 39号住居掘り方



1. 40号住居



2. 40号住居掘り方



3. 40号住居カマド



4. 40号住居掘り方断面



1. 41号住居



2. 42号住居



3. 41号住居掘り方



4. 42号住居掘り方



1. 43号住居



2. 43号住居掘り方



1. 44号住居



2. 44号住居掘り方



3. 44号住居カマド



4. 44号住居カマド掘り方



1. 46号住居



2. 46号住居遺物出土状態



3. 46号住居カマド断面



4. 46号住居遺物出土状態



5. 46号住居掘り方



1. 47号住居



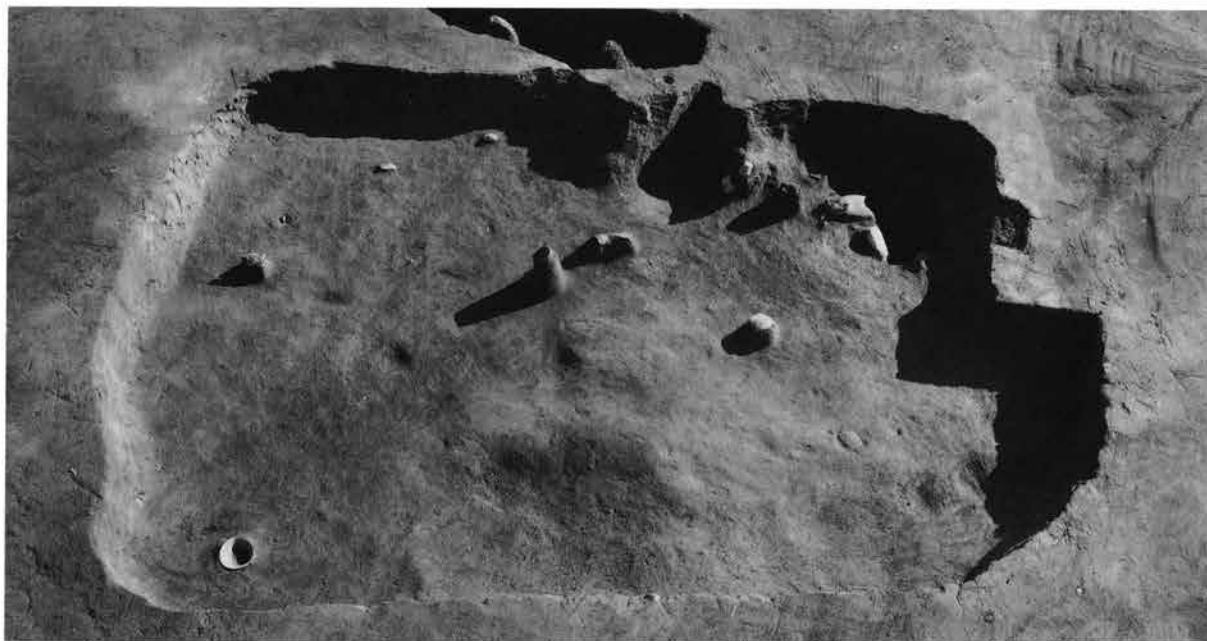
2. 47号住居掘り方



3. 47号住居カマド



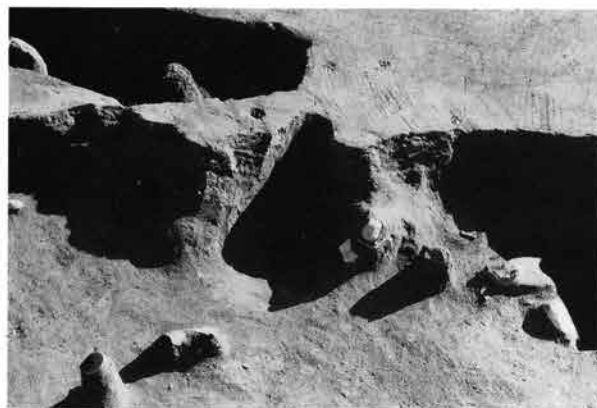
4. 47号住居遺物出土状態



1. 48号住居



2. 48号住居掘り方



3. 48号住居カマド



4. 48号住居遺物出土状態



1. 49号住居



2. 49号住居掘り方



3. 49号住居遺物出土状態



4. 49号住居カマド掘り方



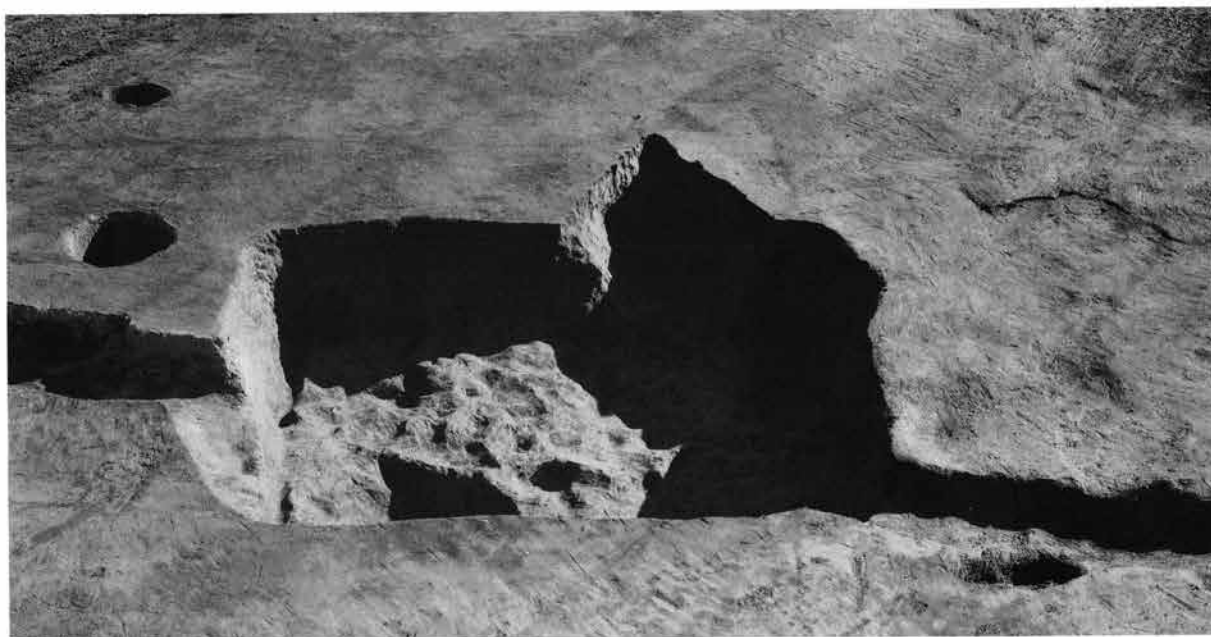
1. 50号住居



2. 50号住居掘り方



1. 51号住居



2. 51号住居掘り方



3. 51号住居断面



4. 51号住居カマド断面



1. 53号住居



2. 53号住居掘り方



3. 53号住居カマド



4. 53号住居カマド掘り方



1. 55号住居



2. 55号住居カマド



3. 56号住居掘り方



4. 56号住居



1. 57号住居



2. 57号住居カマド



3. 57号住居カマド遺物出土状態



4. 57号住居カマド掘り方



5. 57号住居掘り方



1. 58号住居



2. 58号住居



3. 58号住居カマド



4. 58号住居掘り方



5. 58号住居カマド掘り方



1. 59号住居



2. 59号住居カマド掘り方



3. 60号住居掘り方



4. 60号住居



1. 61号住居



2. 61号住居掘り方



3. 61号住居カマド



4. 61号住居カマド掘り方



1. 62号住居



2. 62号住居カマド



3. 62号住居遺物出土状態



4. 62号住居掘り方



5. 62号住居カマド掘り方



1. 64号住居



2. 64号住居カマド



3. 64号住居カマド断面



4. 64号住居掘り方



5. 64号住居カマド掘り方



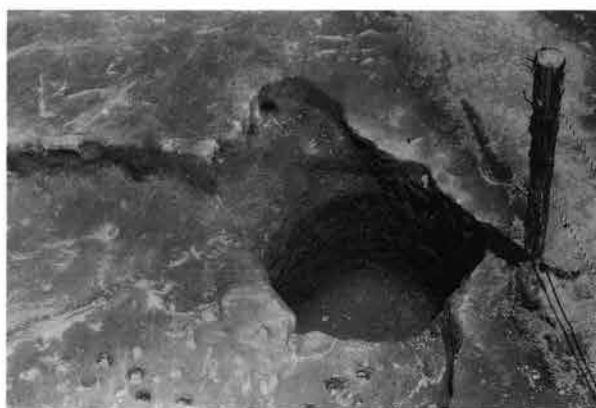
1. 65号住居



2. 65号住居掘り方



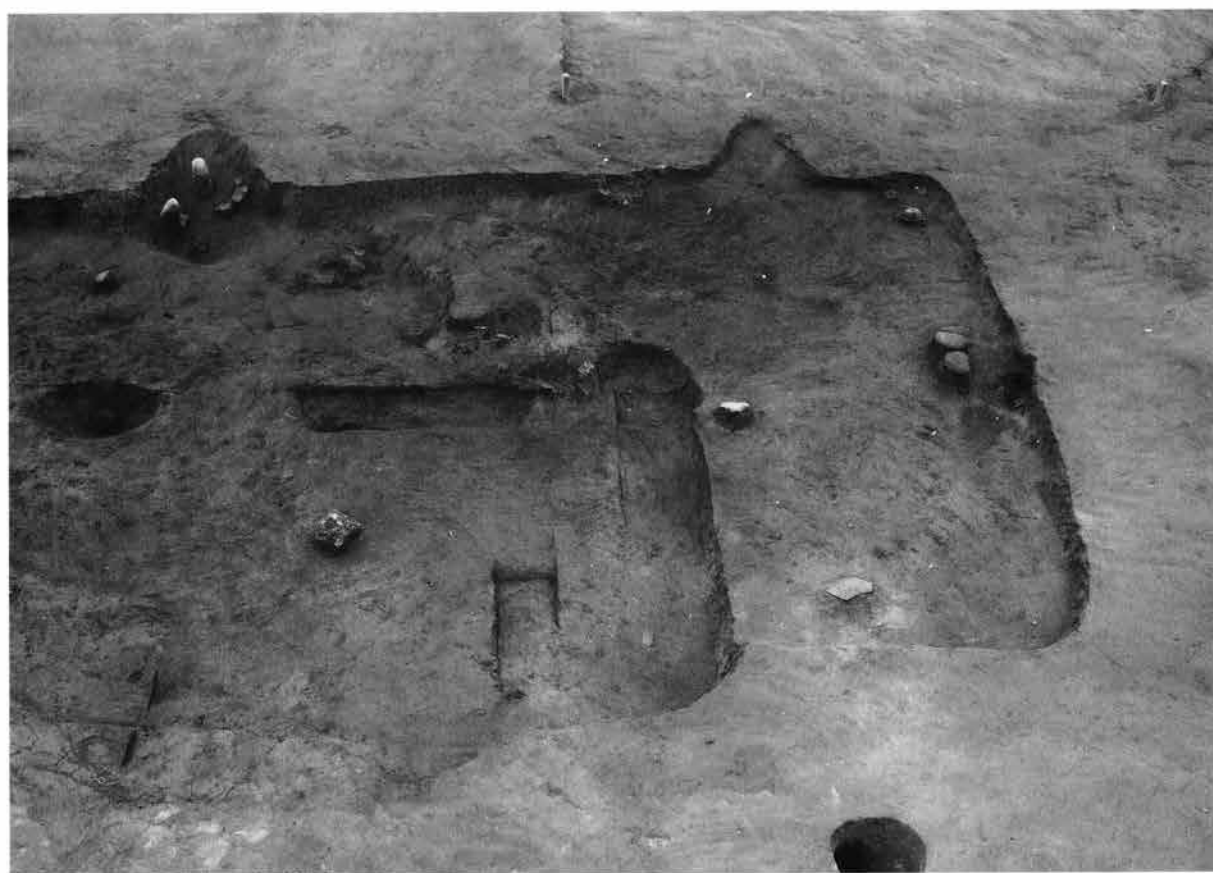
3. 65号住居カマド



4. 65号住居カマド掘り方



1. 66号住居



2. 67号住居



1. 68号住居



4. 69号住居



2. 68号住居掘り方



5. 69号住居掘り方



3. 68号住居カマド断面



6. 69号住居遺物出土状態



1. 70号住居



2. 74号住居



3. 74号住居掘り方



4. 74号住居カマド



5. 75号住居



6. 75号住居カマド



1. 71号住居



2. 71号住居掘り方



3. 71号住居カマド



4. 71号住居遺物出土状態



1. 72号住居



2. 72号住居掘り方



3. 72号住居カマド



4. 72号住居カマド掘り方



1. 73号住居



2. 73号住居掘り方



3. 73号住居カマド



4. 73号住居カマド掘り方



1. 76号住居



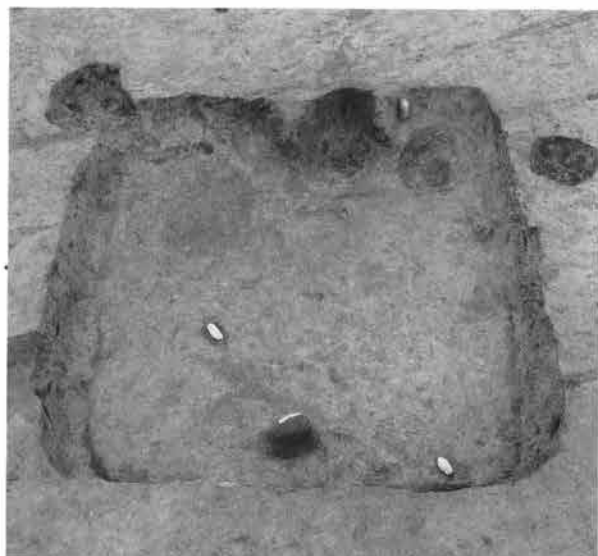
2. 76号住居掘り方



3. 76号住居カマド



4. 76号住居カマド掘り方



1. 77号住居



2. 77号住居掘り方



3. 78号住居



4. 78号住居掘り方



5. 79号住居



6. 79号住居掘り方



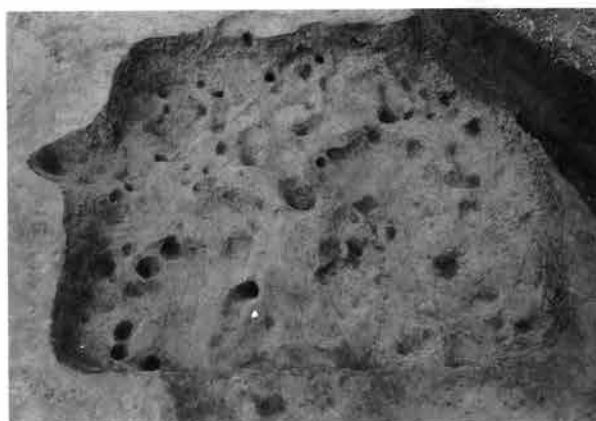
1. 80号住居



2. 80号住居掘り方



3. 81号住居



4. 81号住居掘り方



5. 82号住居



6. 82号住居掘り方



1. 83号住居



2. 83号住居掘り方



3. 84号住居



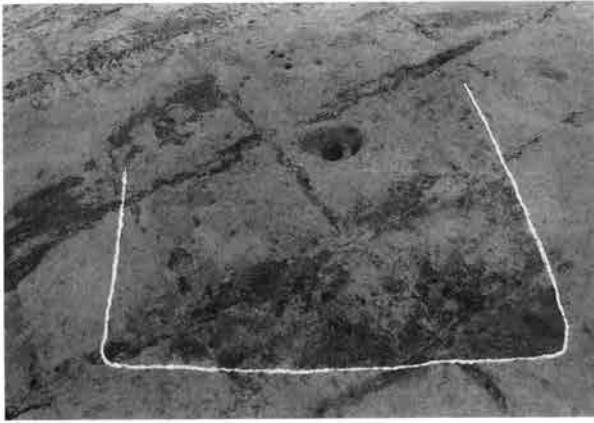
4. 85号住居



5. 85号住居カマド



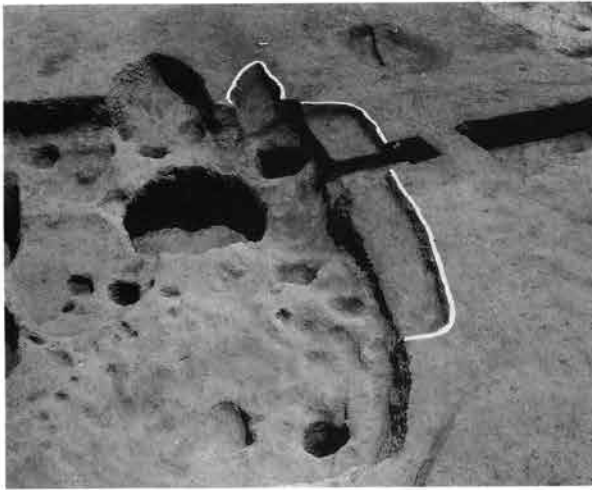
6. 85号住居掘り方



1. 86号住居



2. 86号住居掘り方



3. 87号住居



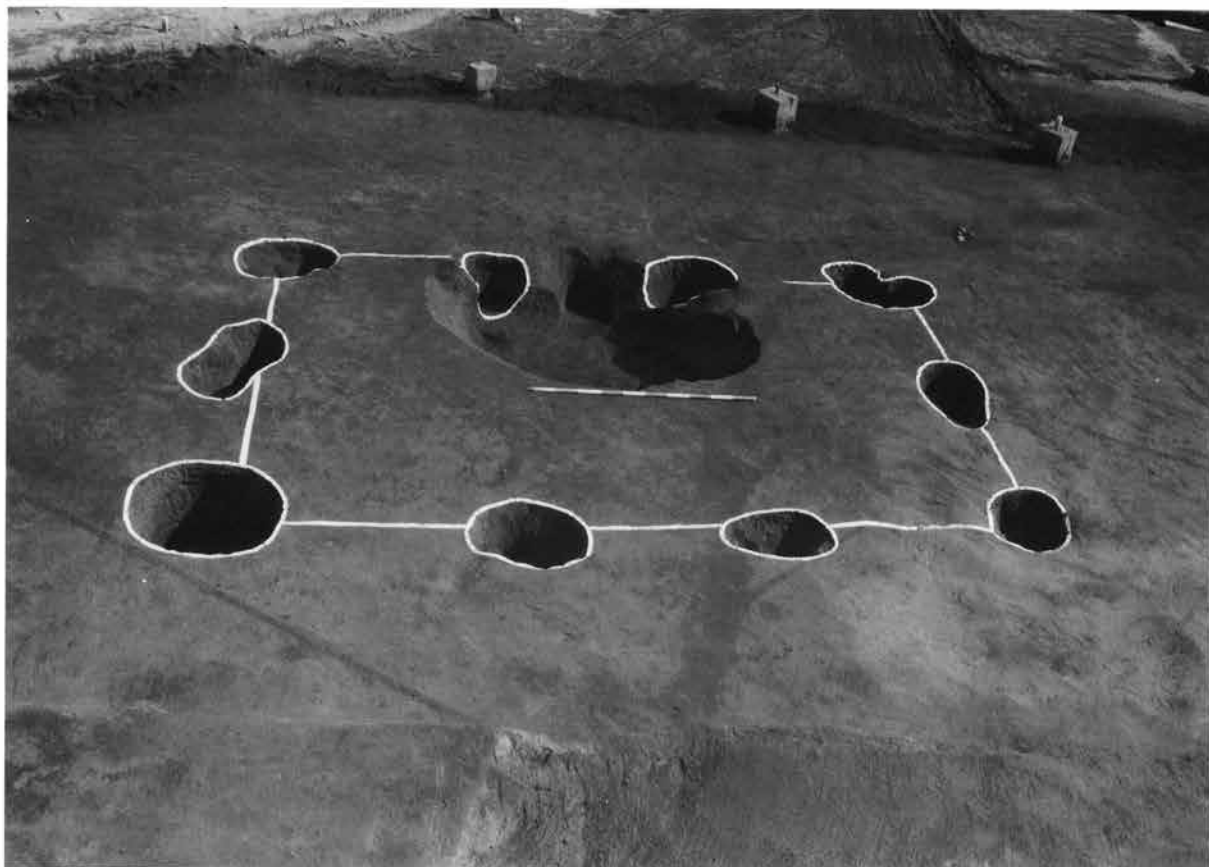
4. 87号住居カマド



5. 88号住居



6. 88号住居掘り方



1. 1号掘立柱建物



2. 2号掘立柱建物



1. 4号土坑



2. 4号土坑遺物出土狀態



3. 2号土坑



4. 5号土坑



5. 27号土坑



6. 32号土坑



7. 43号土坑



8. 44号土坑



1. 45号・46号土坑



2. 47号土坑



3. 49号土坑



4. 50号土坑



5. 51号土坑



6. 52号土坑



7. 70号～85号土坑



8. 70号～85号土坑



1. 86号·87号·88号·89号土坑



2. 87号土坑出土遺物



3. 87号土坑土層断面



4. 88号土坑土層断面



5. 87号土坑



6. 88号土坑



7. 98号土坑



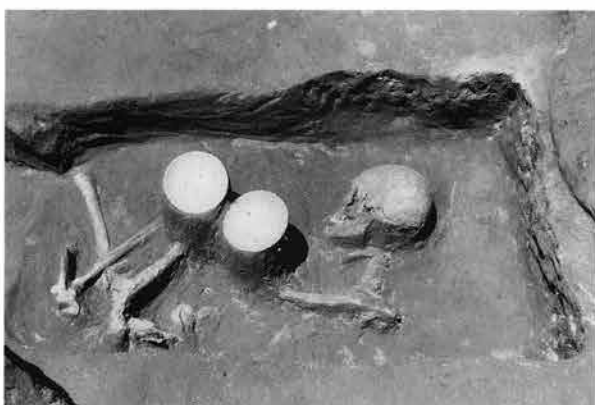
8. 99号土坑



1. 31号土坑 (墓坑)



2. 31号土坑 (墓坑)



3. 33号土坑 (墓坑)



4. 33号土坑 (墓坑)



5. 35号土坑 (墓坑)



6. 35号土坑 (墓坑)



7. 36号土坑 (墓坑)



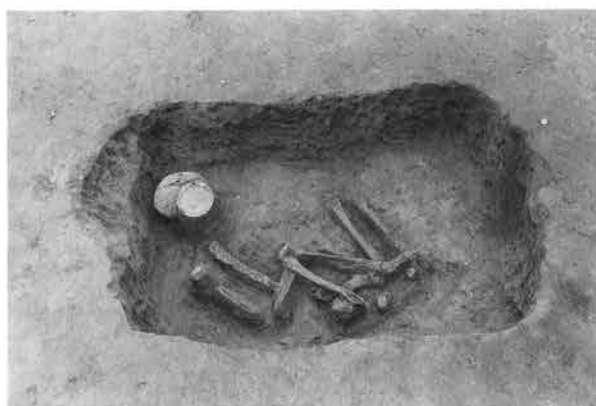
8. 36号土坑 (墓坑)



1. 61号土坑 (墓圹)



2. 61号土坑 (墓圹)



3. 64号土坑 (墓圹)



4. 64号土坑 (墓圹)



5. 91号土坑 (墓圹)



6. 91号土坑 (墓圹)



7. 92号土坑 (墓圹)



8. 92号土坑 (墓圹)



1. 1号・8号井戸



2. 2号井戸



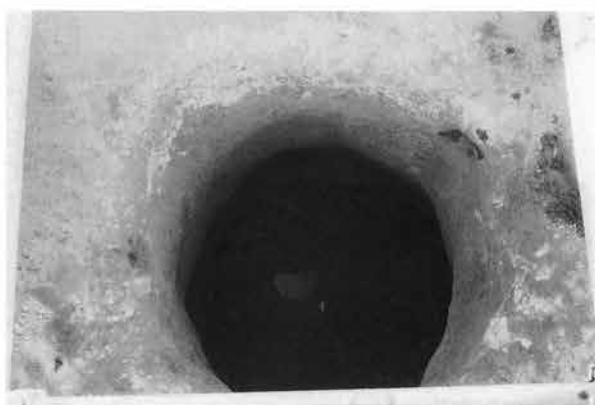
3. 3号井戸



4. 4号井戸



5. 5号井戸



6. 6号井戸



7. 7号井戸



8. 12号井戸



1. 9号井戸



2. 9号井戸



3. 10号井戸



4. 10号井戸



5. 14号井戸



6. 15号井戸



7. 16号井戸



8. 17号井戸



1. 18号井戸



2. 19号井戸



3. 20号井戸



4. 21号井戸



5. 22号井戸



6. 23号井戸



7. 25号井戸



8. 26号井戸



1. 27号井戸



2. 28号井戸



3. 29号井戸



4. 30号井戸



5. 33号井戸



6. 34号井戸



7. 35号井戸



8. 36号井戸



1. As-B下水田 (東から)



2. As-B下水田 (西から)



3. As-B下水田 (東から)



4. As-B下水田 (南から)



5. As-B下水田 (西から)



1. As-B下水田 (南から)



2. As-B下水田 B区 (東から)



3. As-B下水田 B区 (南から)



4. As-B下水田 B区 (西から)



5. As-B下水田 C区 (西から)



1. 1号溜井 (検出状況)



2. 1号溜井 (掘り方)



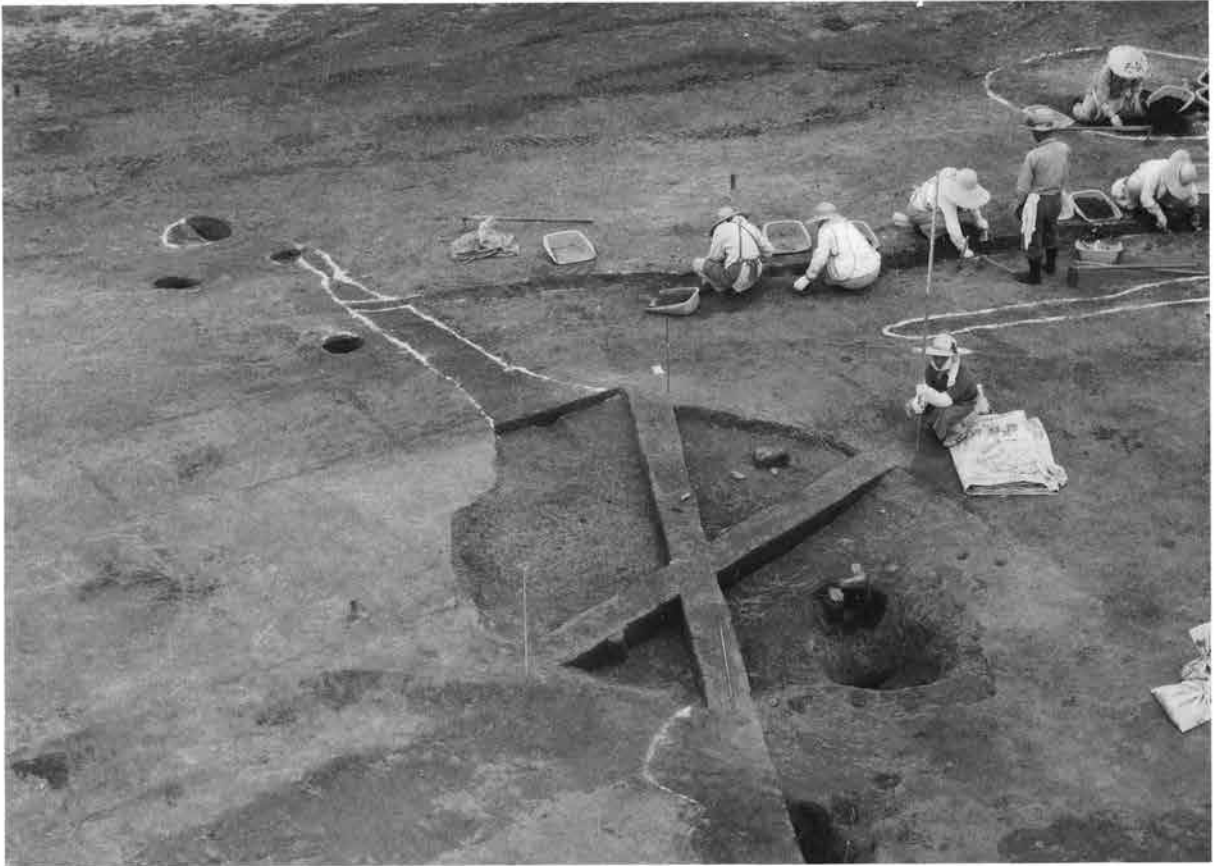
3. 1号溜井 (井戸部・石敷部)



4. 1号溜井及び温め状遺構



1. 3号溜井



2. 3号溜井調査状況



1. 温め状遺構



2. 温め状遺構



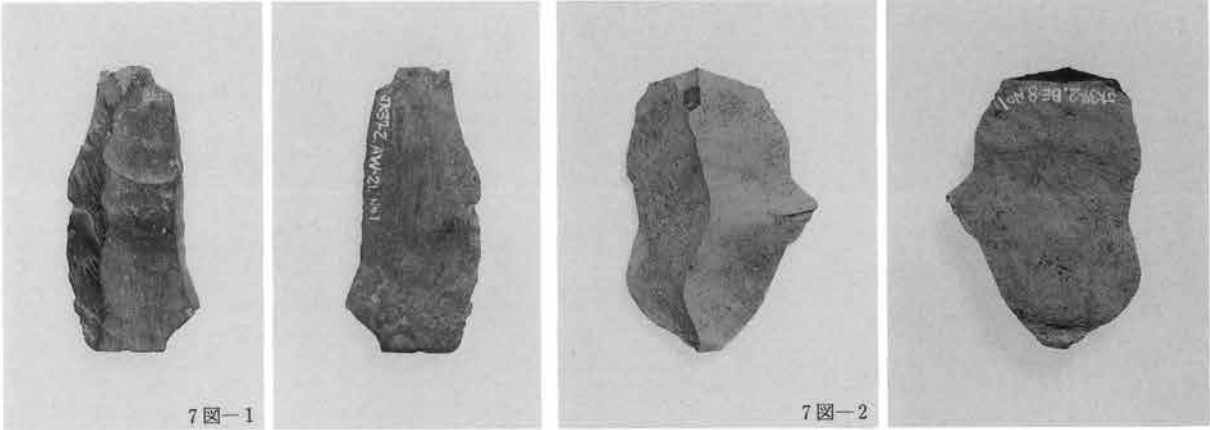
3. 温め状遺構 (東から)



4. 温め状遺構 (低地部)

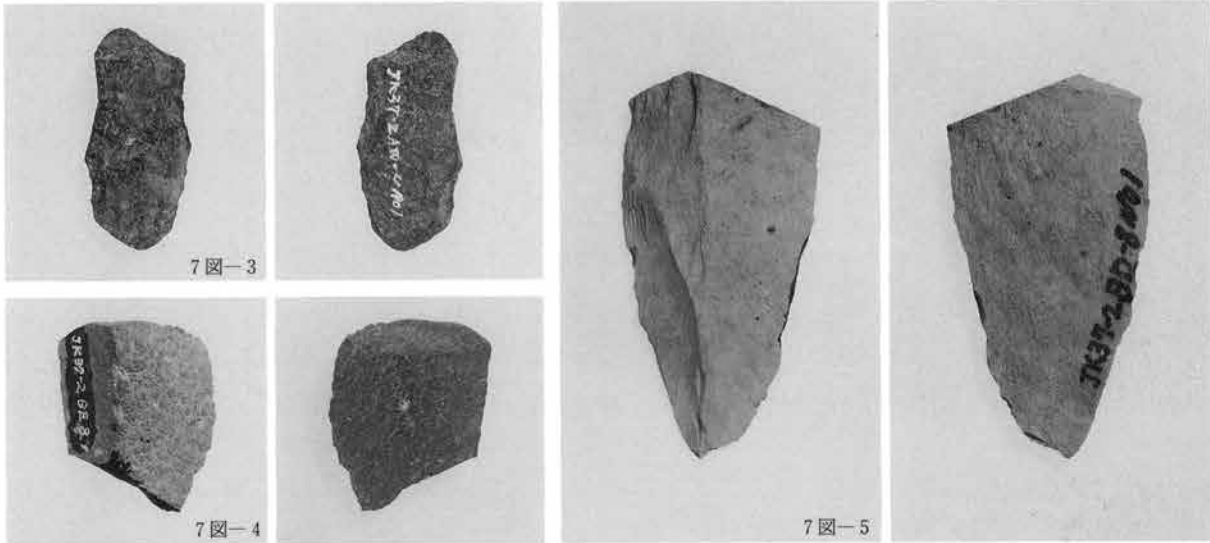


5. 温め状遺構 (降雨後)



7图-1

7图-2



7图-3

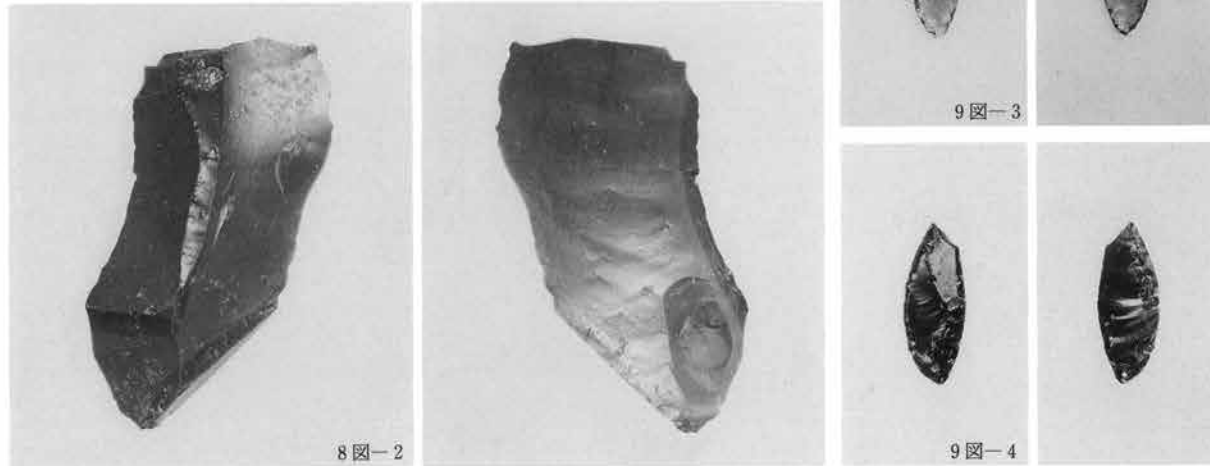
7图-4

7图-5



8图-1

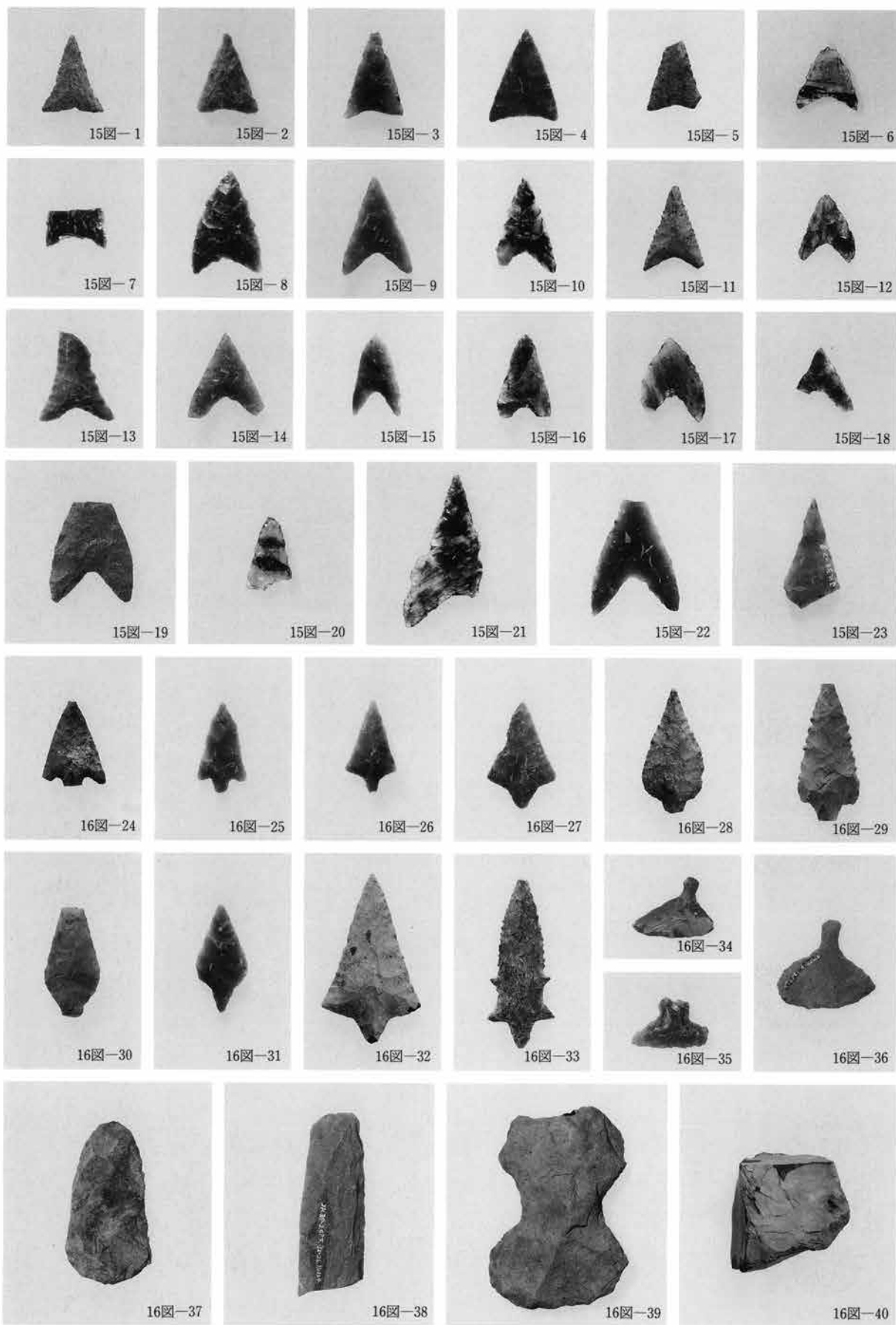
9图-3



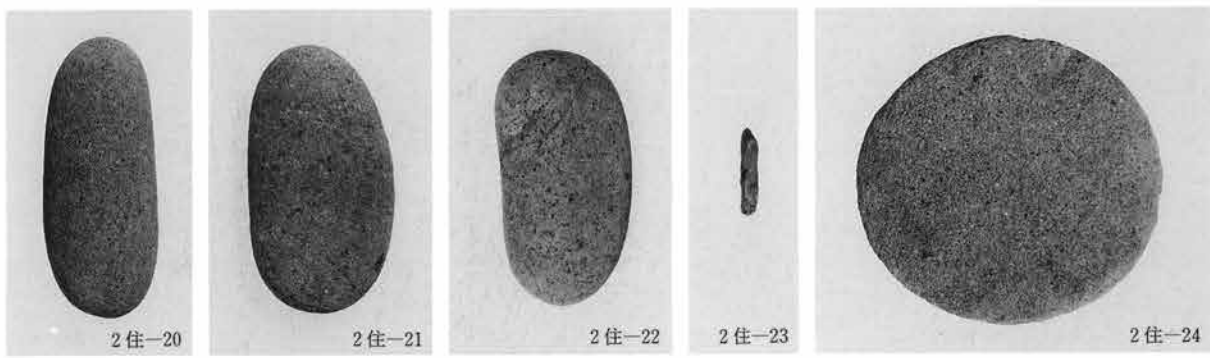
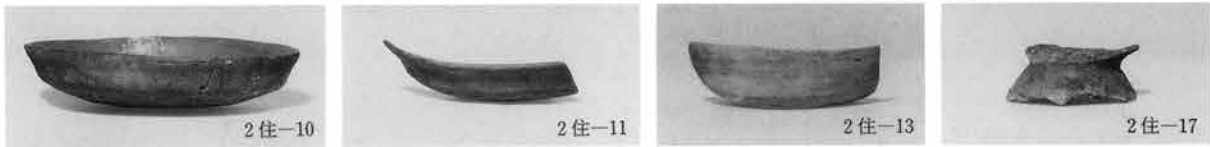
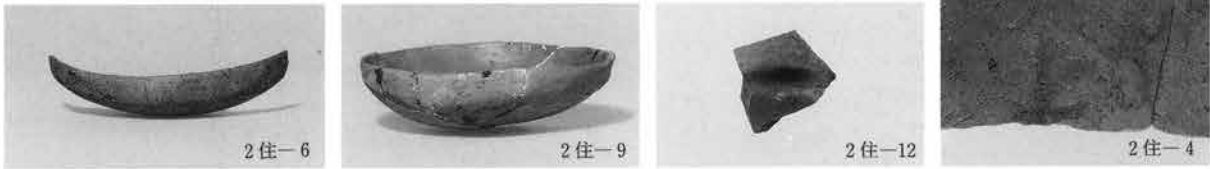
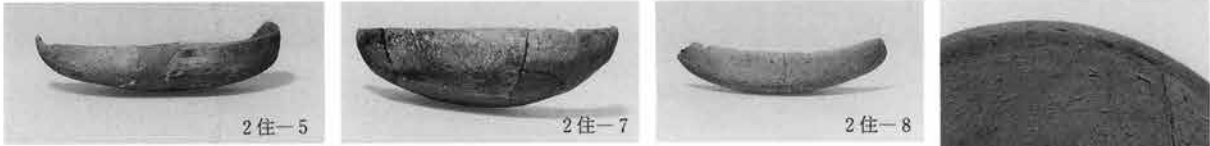
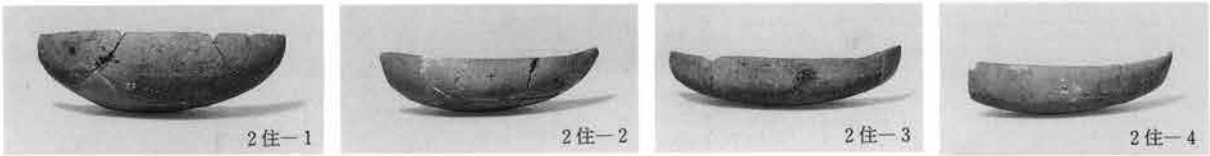
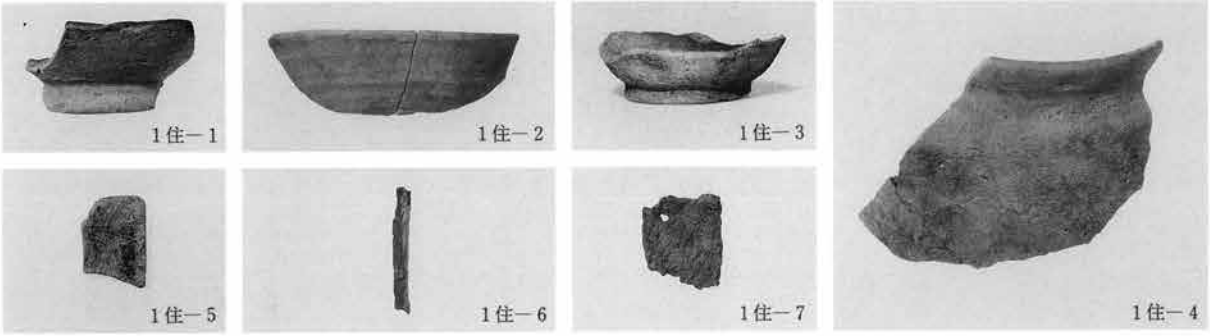
8图-2

9图-4

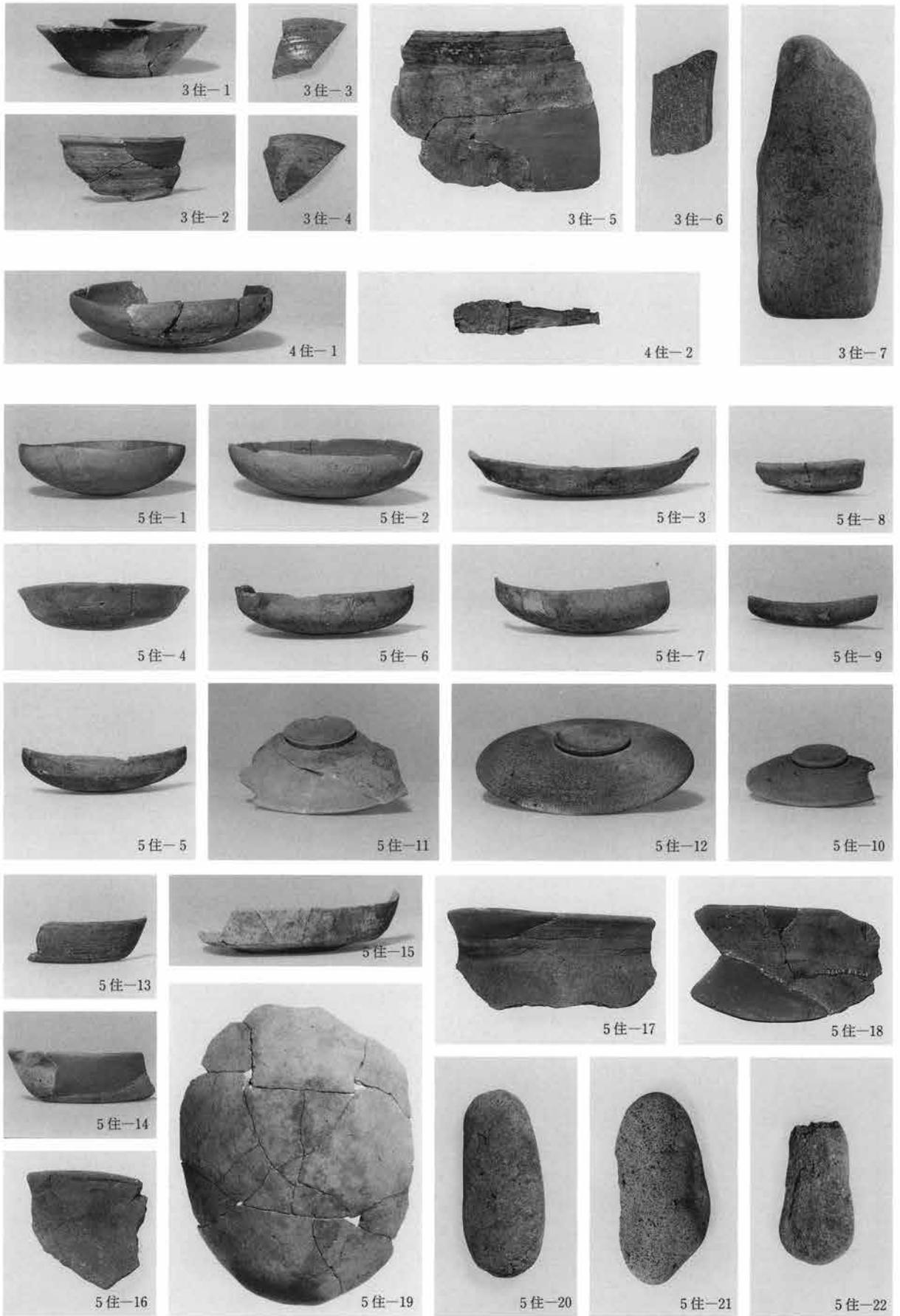
出土遺物



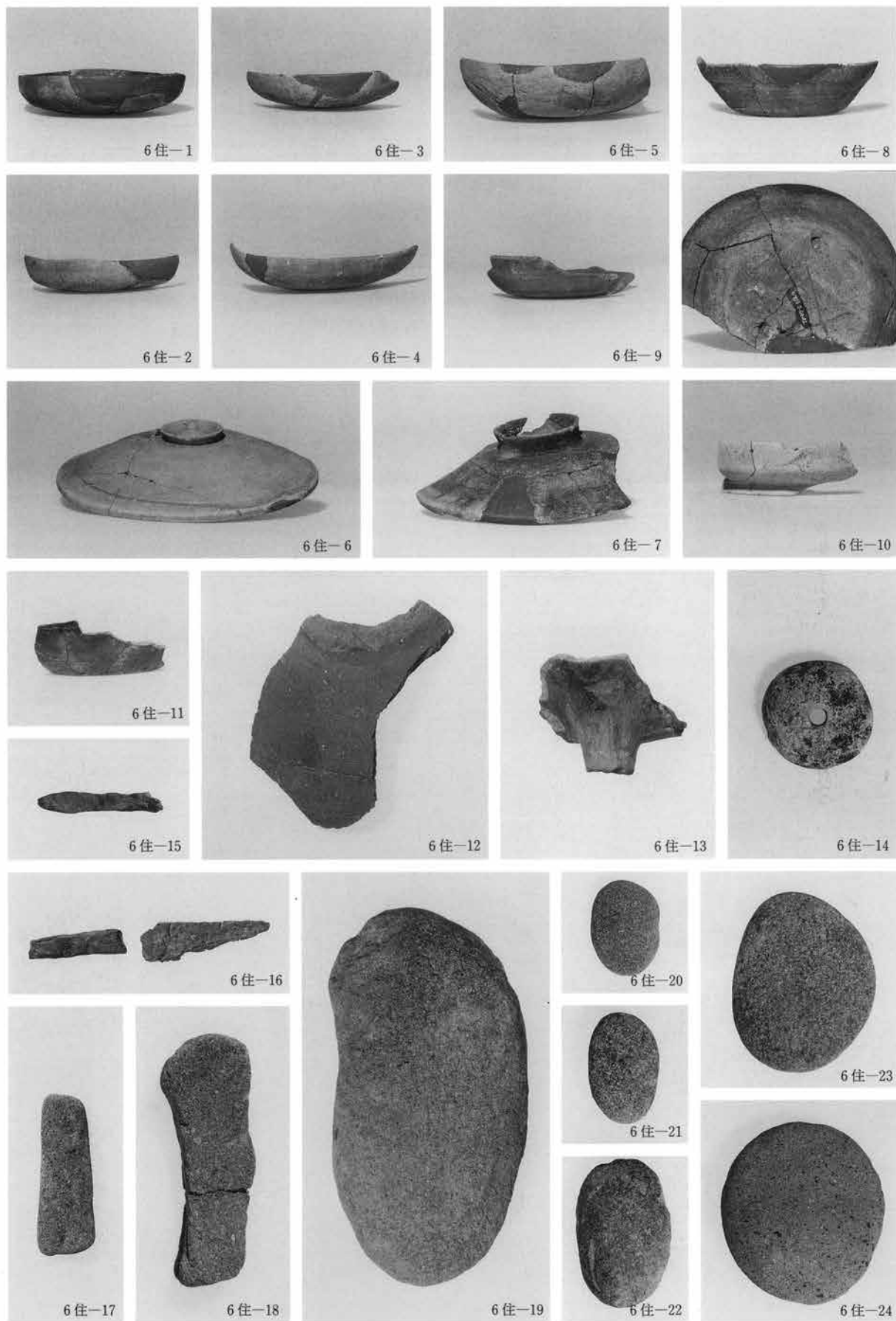
出土遺物



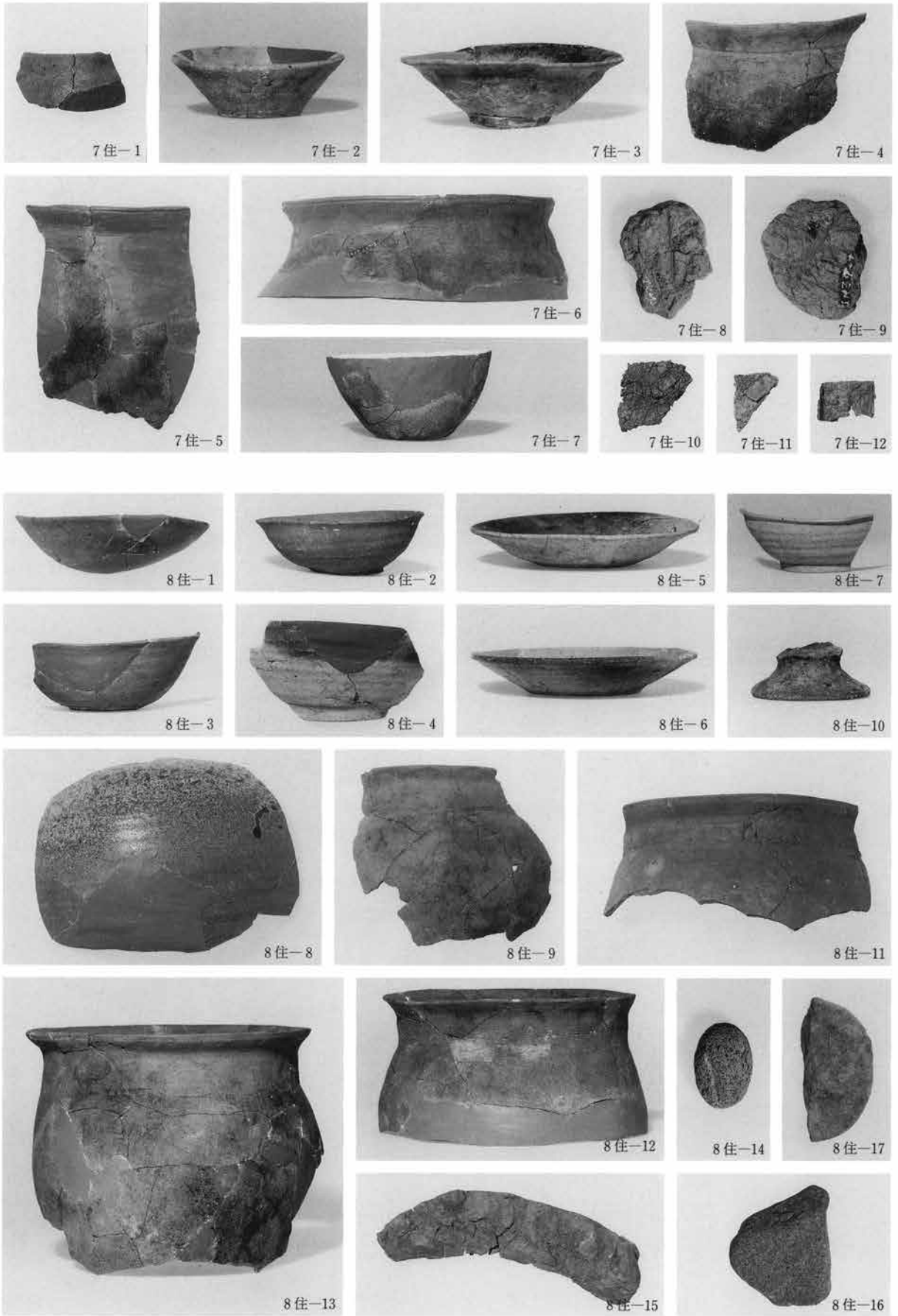
出土遺物



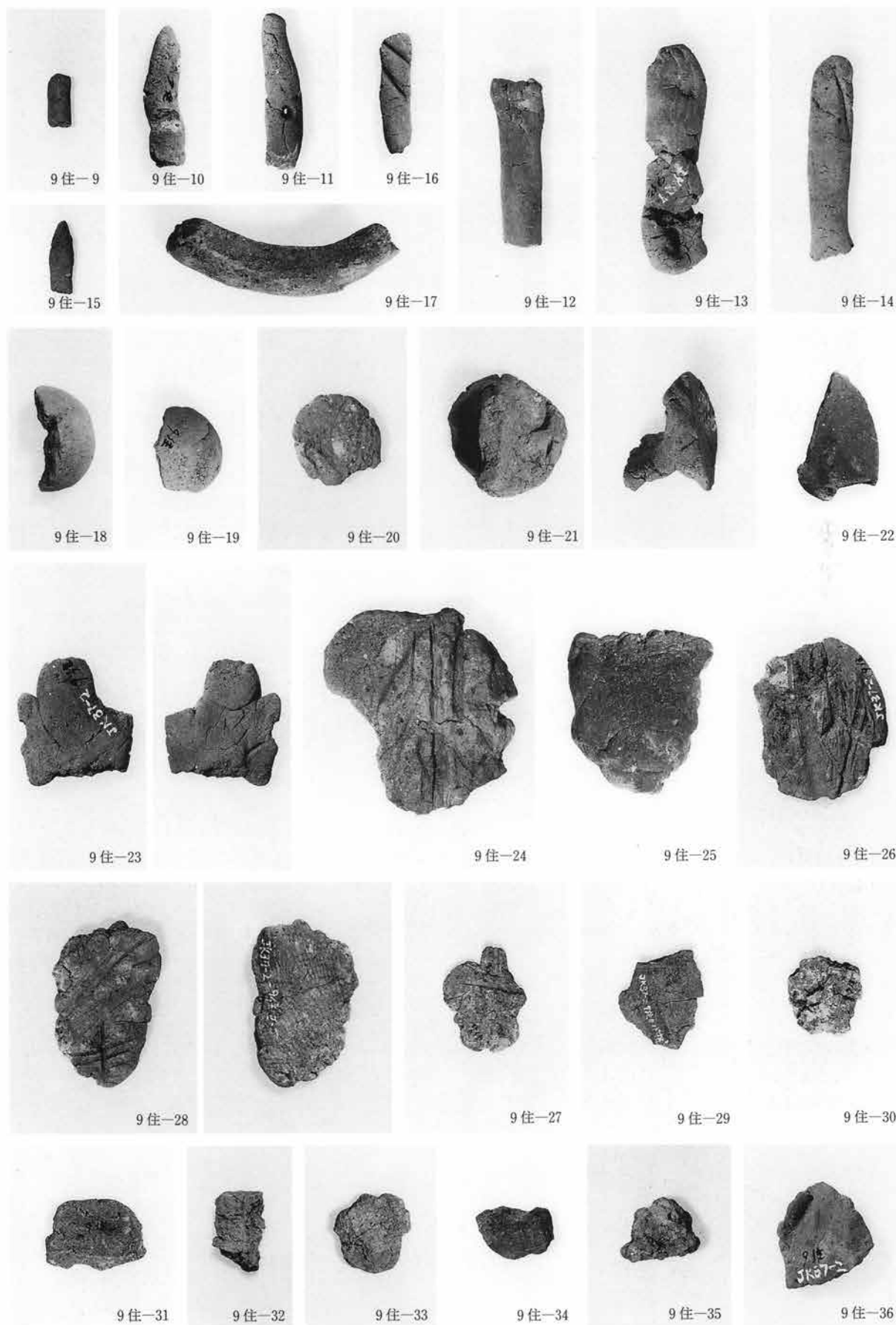
出土遺物



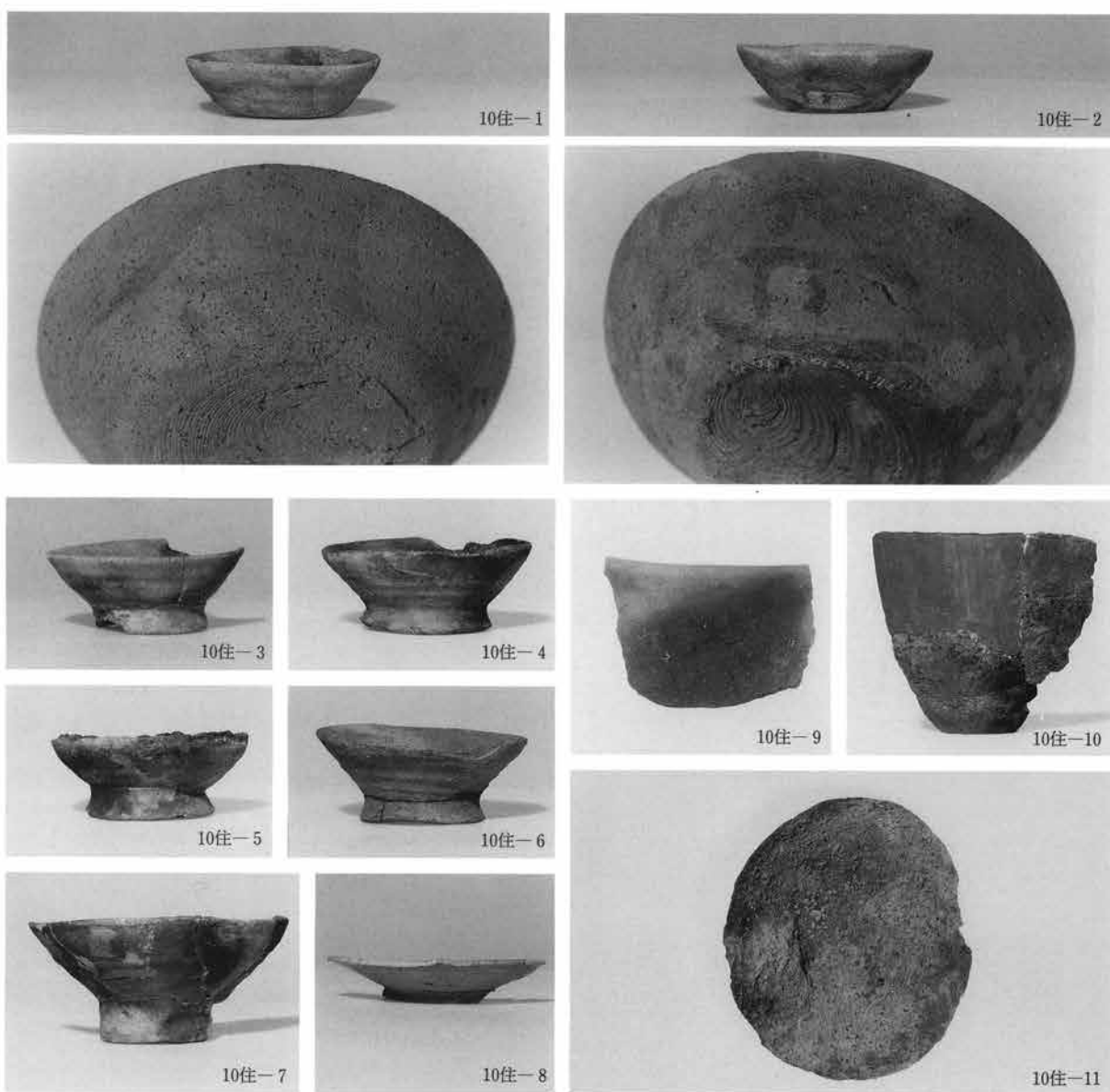
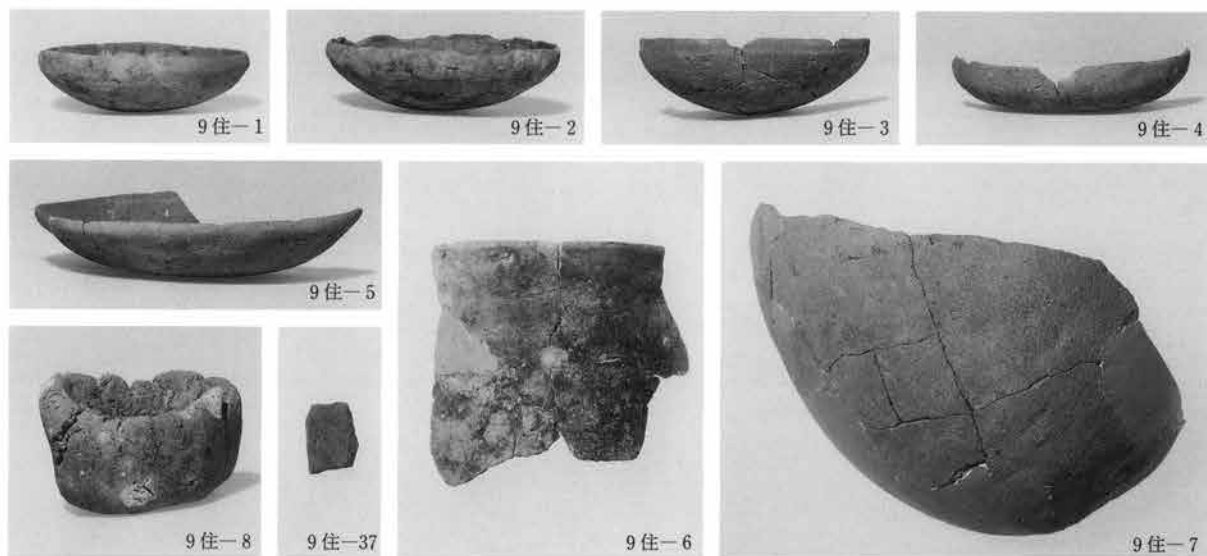
出土遺物

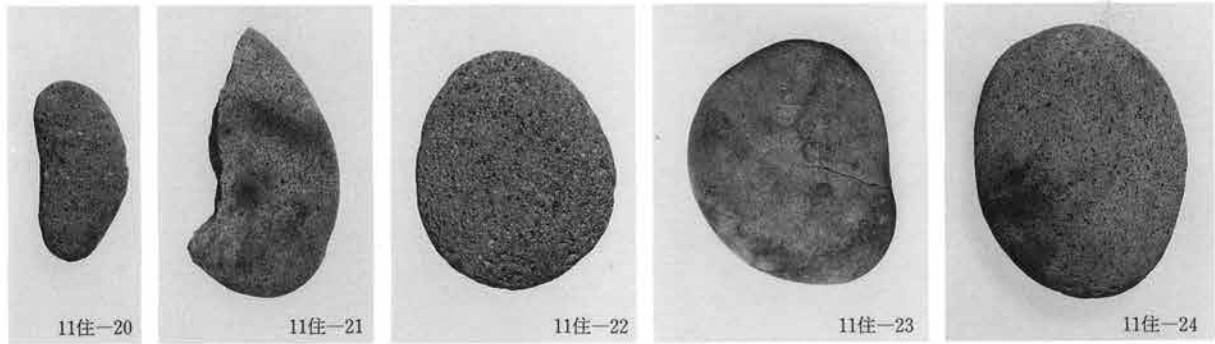
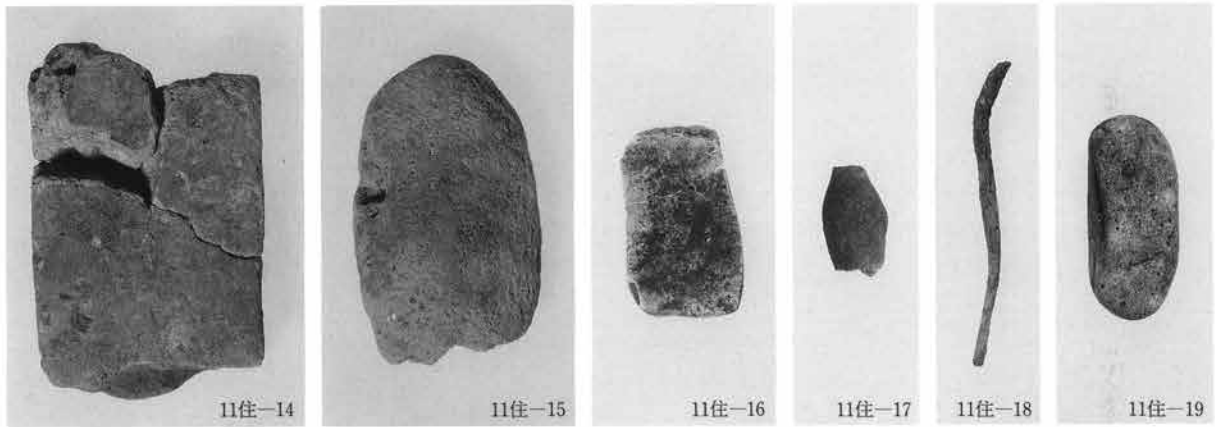
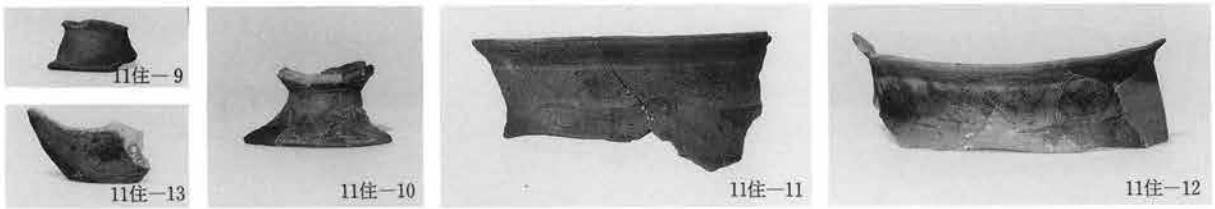
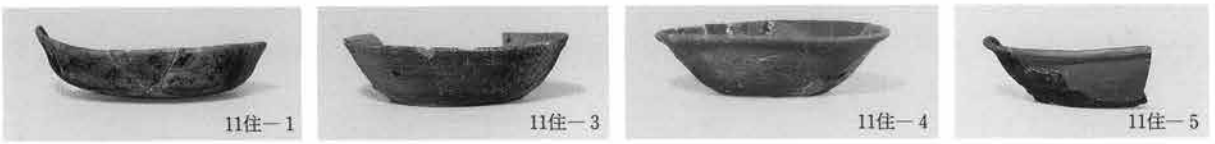


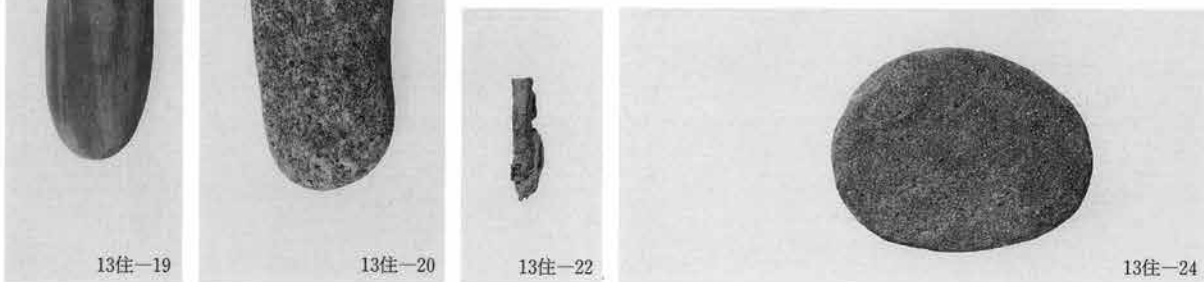
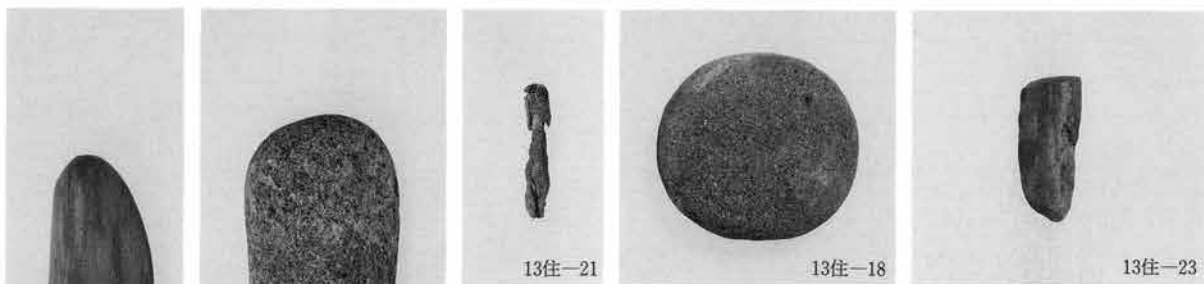
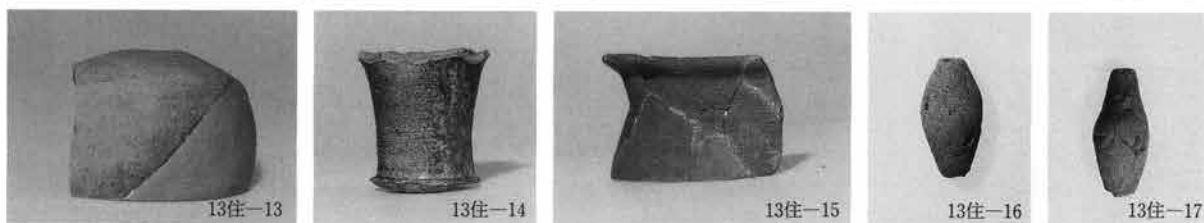
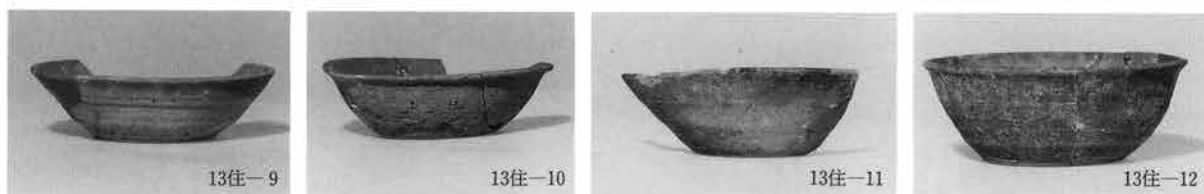
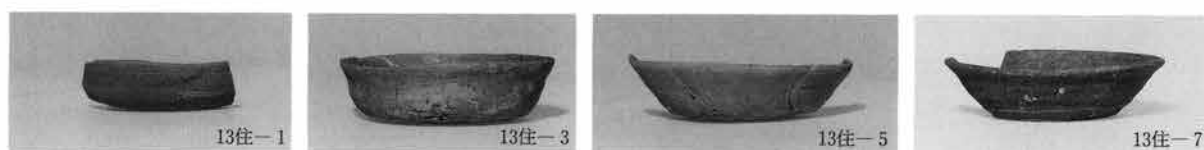
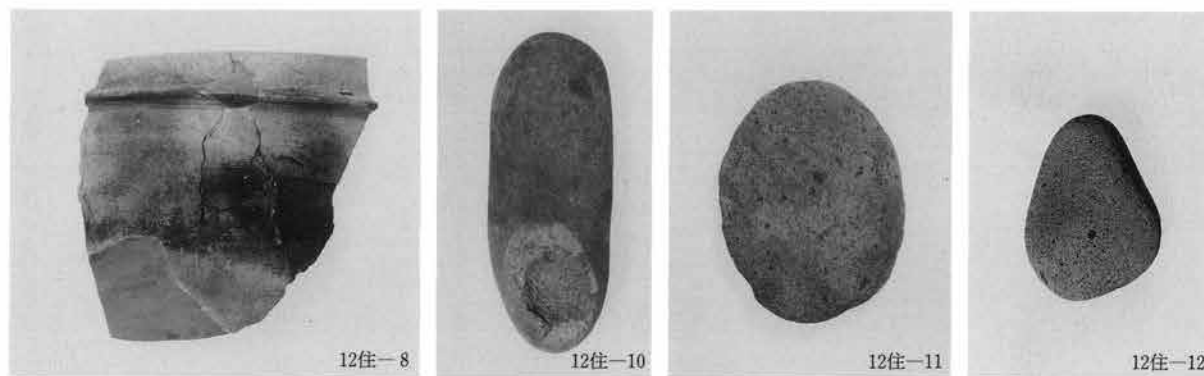
出土遺物

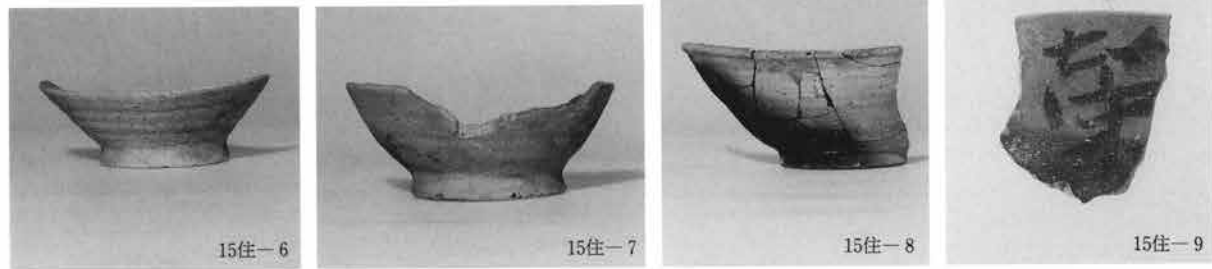
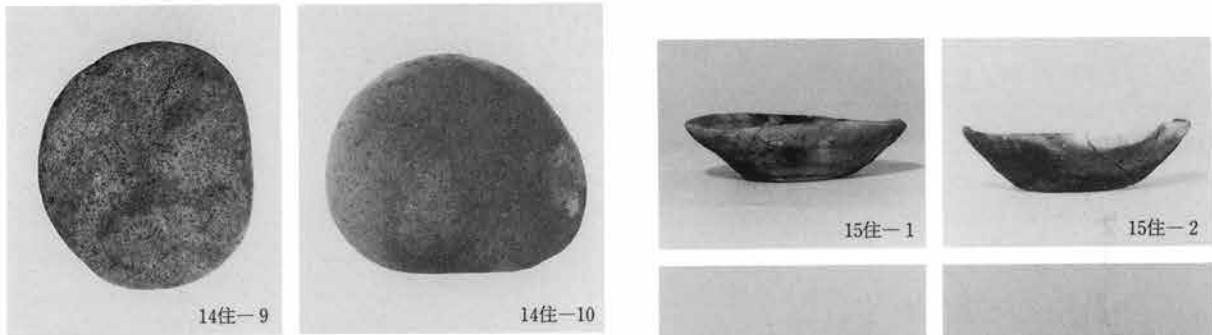
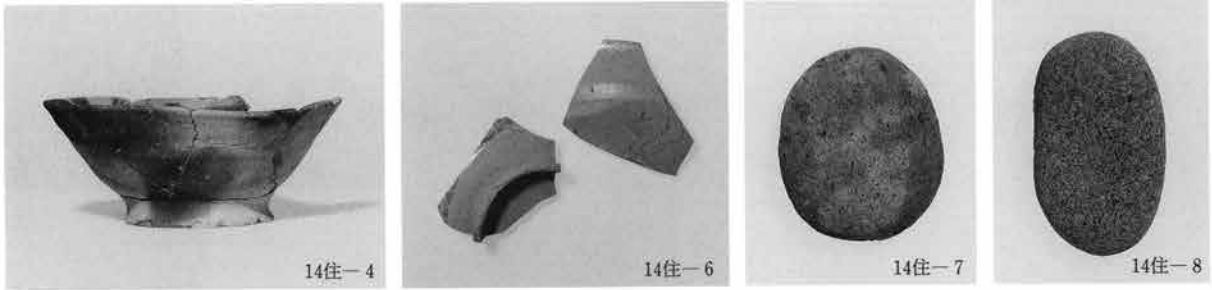
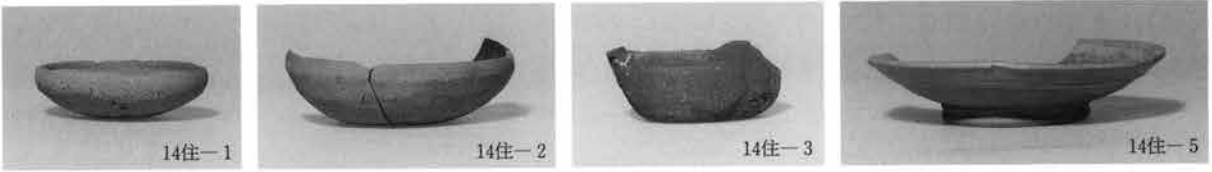


出土遺物

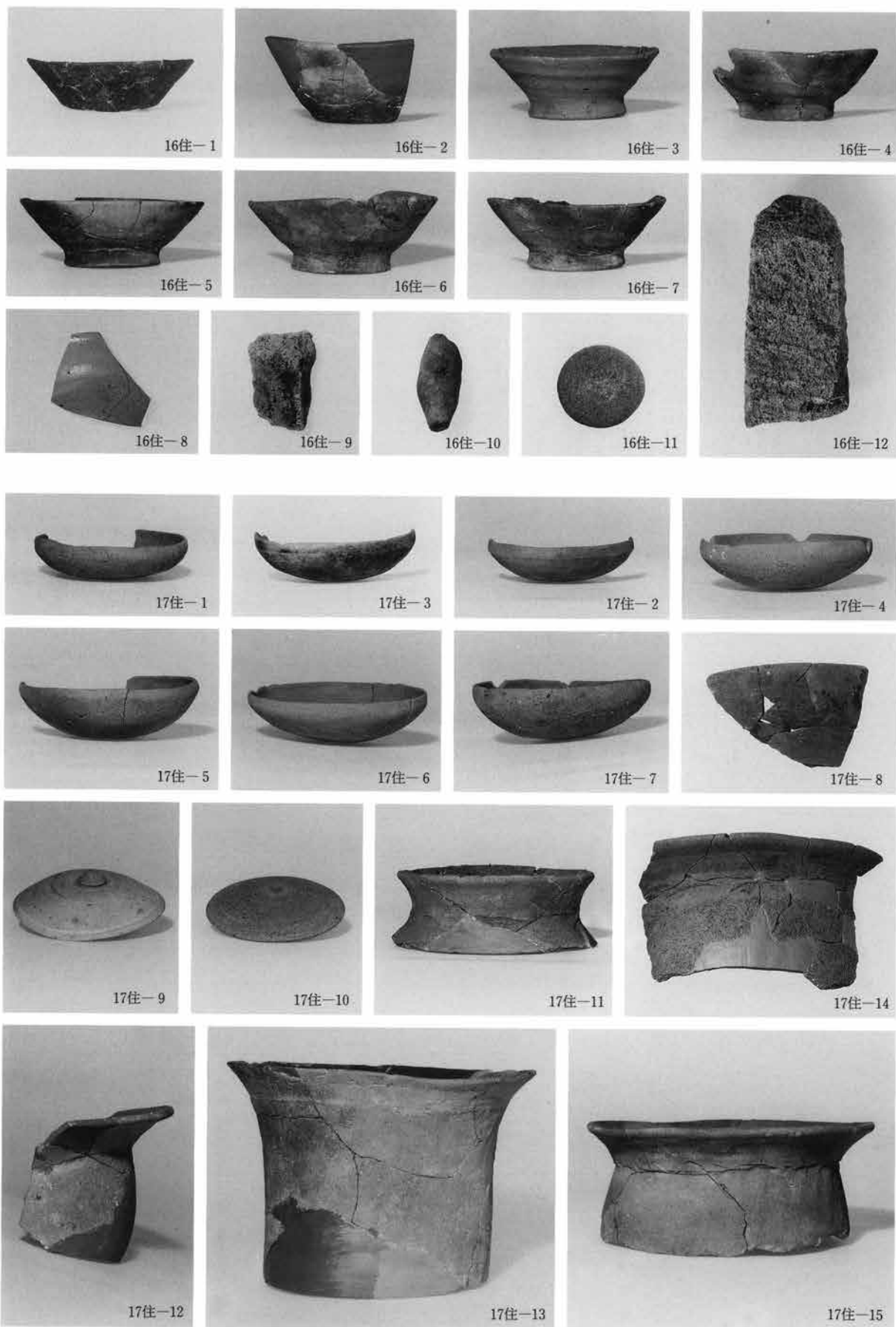








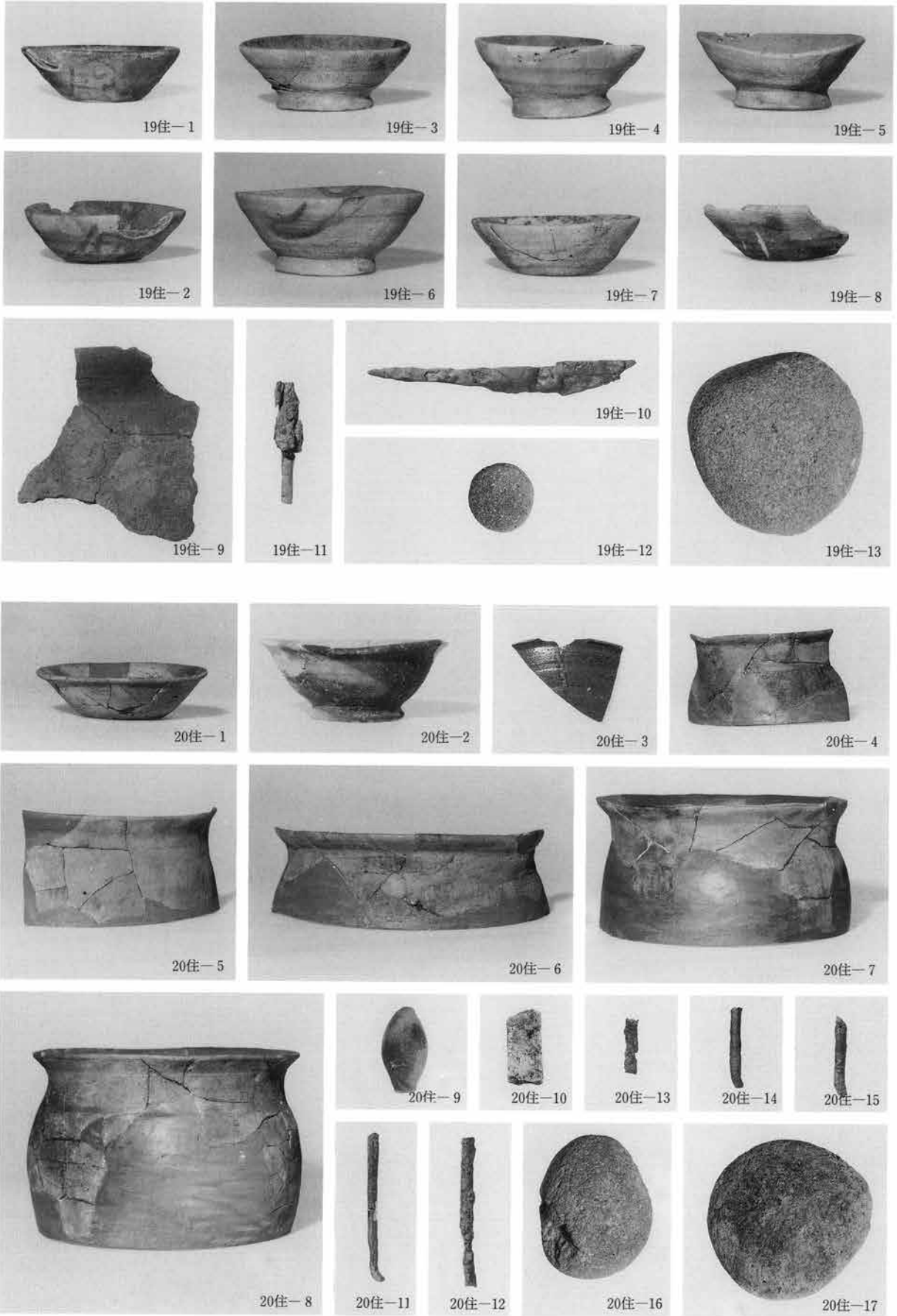
出土遺物



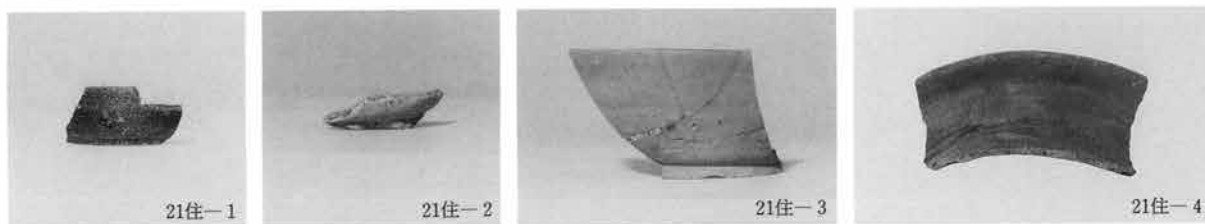
出土遺物



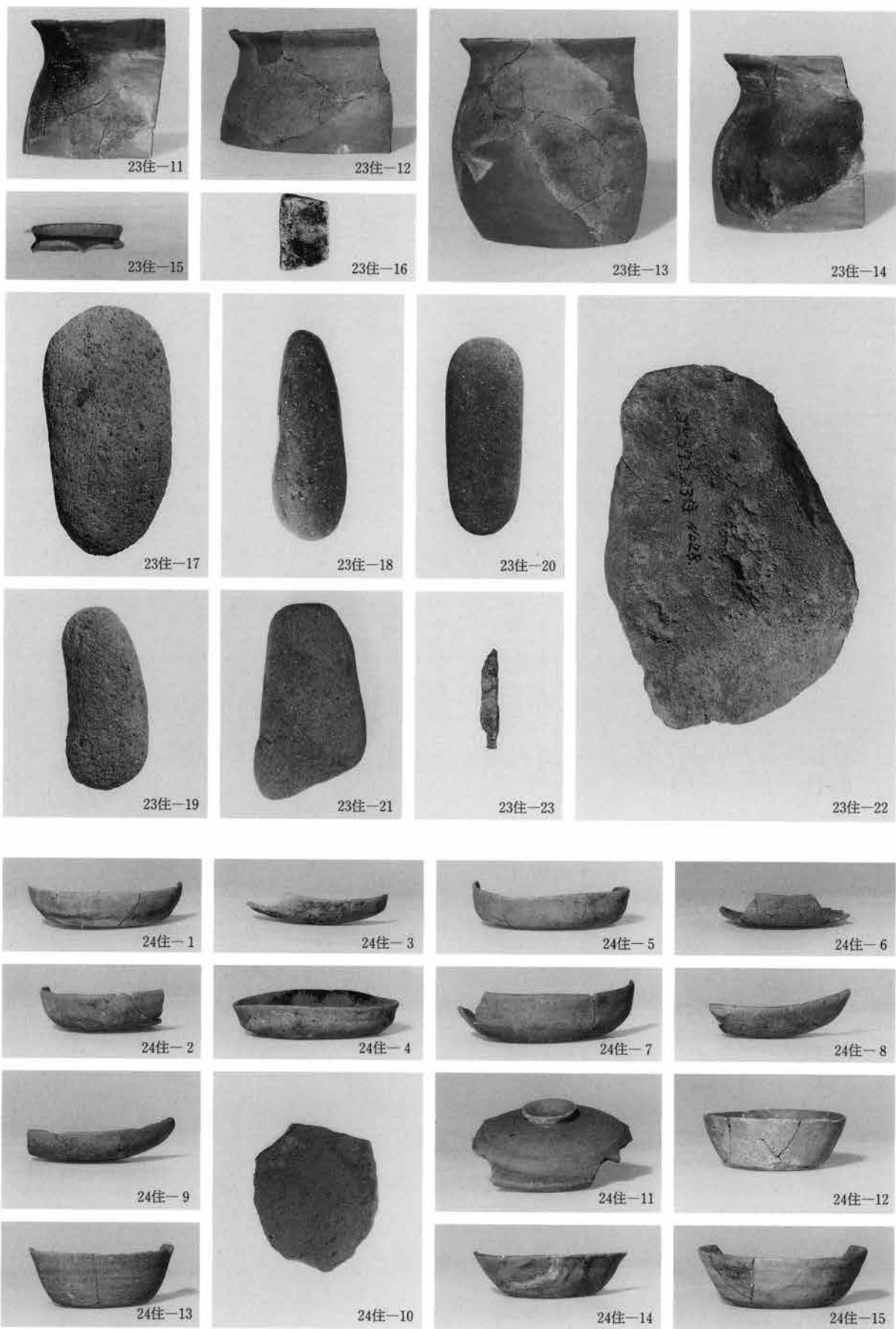
出土遺物



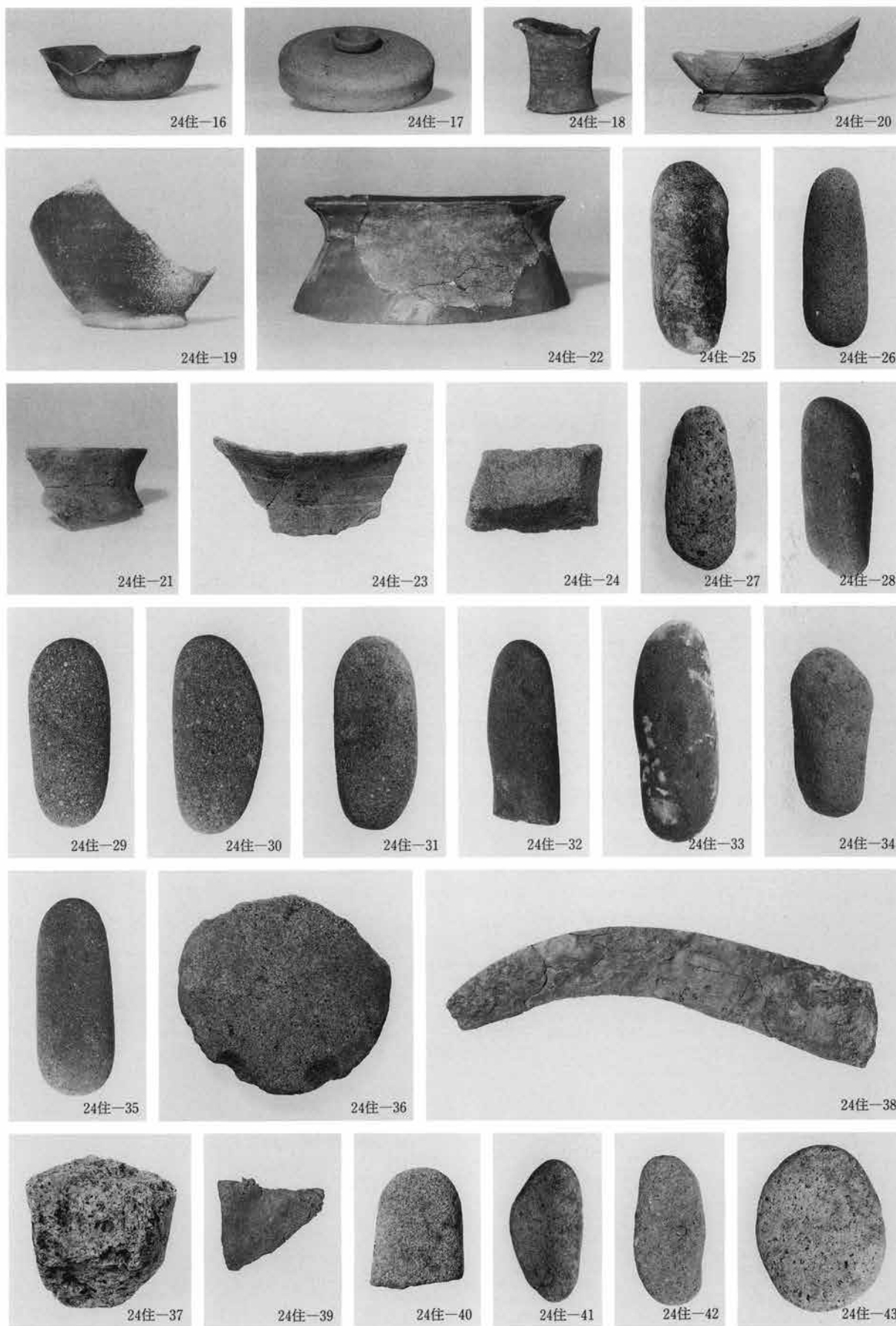
出土遺物



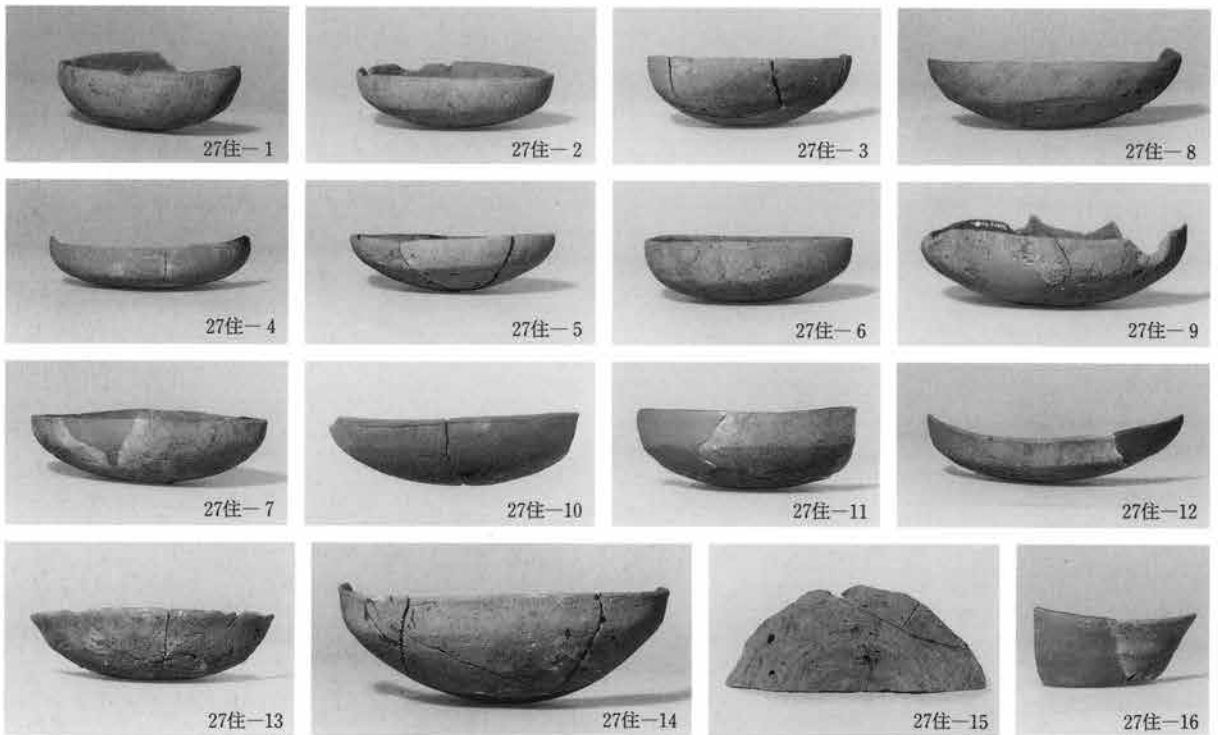
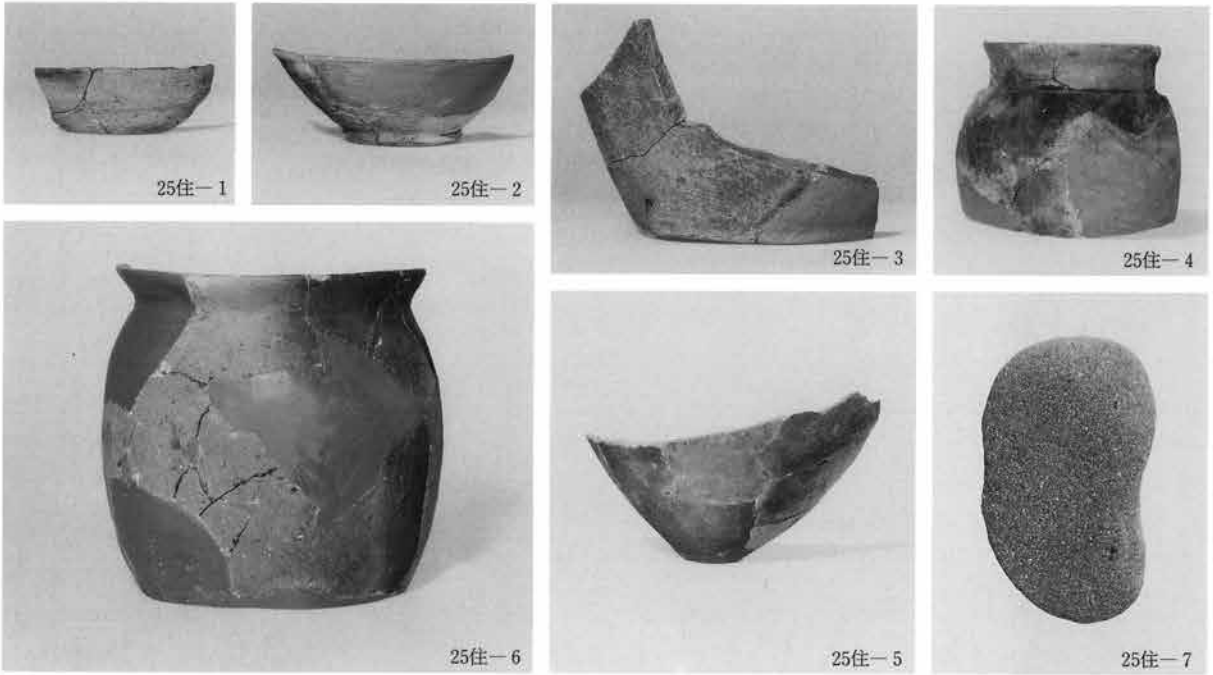
出土遺物

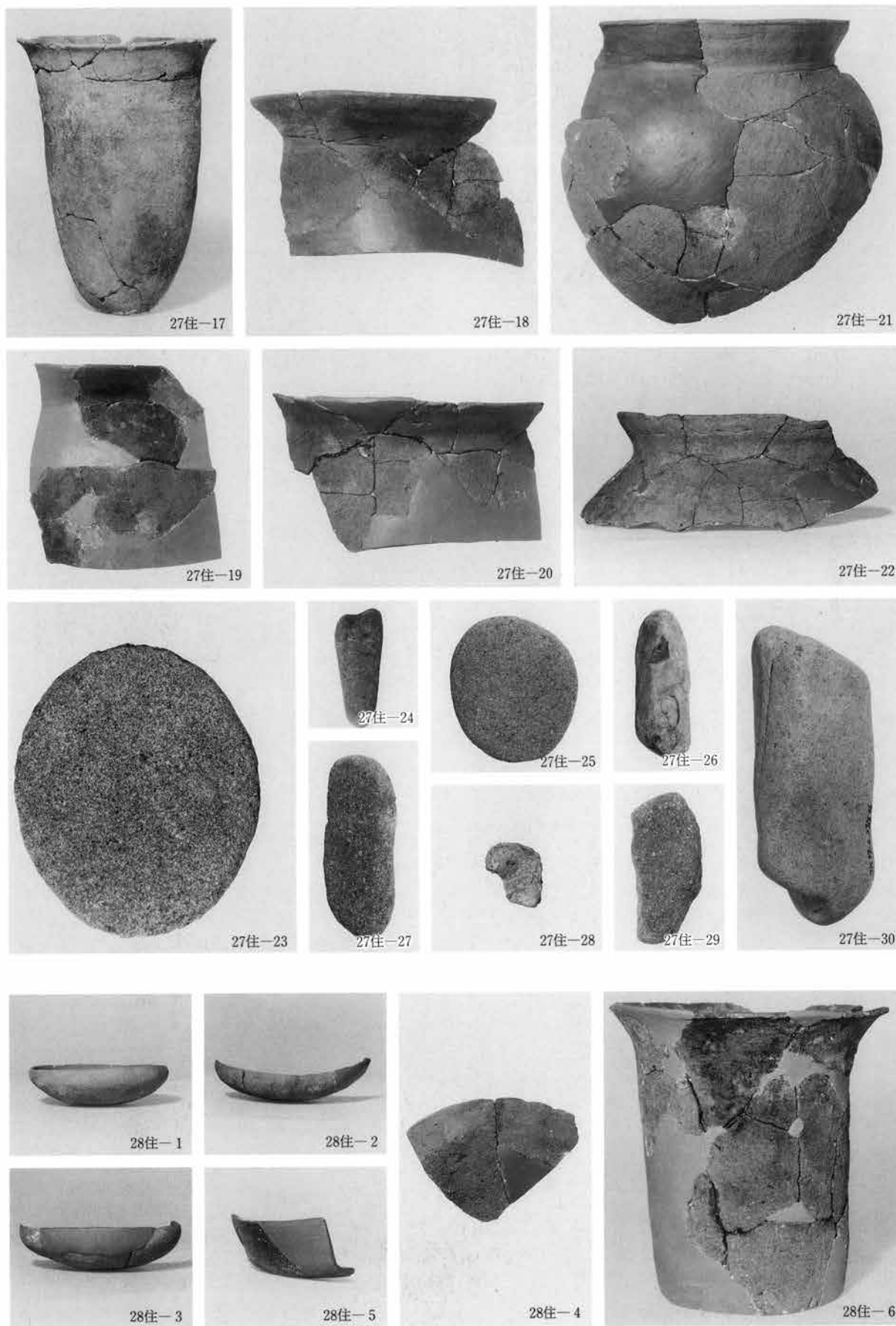


出土遺物



出土遺物





出土遺物



28住-7



28住-8



28住-9



28住-10



28住-11



28住-12



28住-13



28住-14



29住-1



29住-2



29住-4



29住-3



29住-6



29住-5



29住-7



29住-9



29住-10



29住-11



29住-12



29住-13



29住-14



30住-1



30住-2



30住-3



30住-4



30住-5



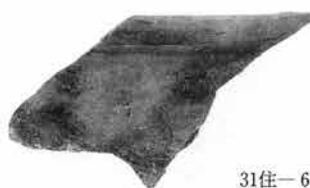
30住-6



31住-1



31住-3



31住-6



31住-7

出土遺物



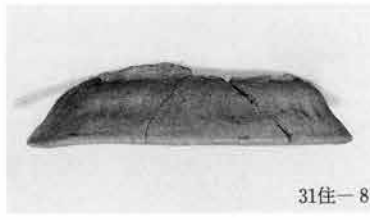
31住-2



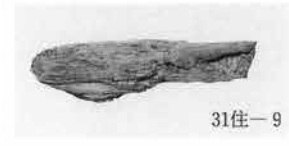
31住-4



31住-5



31住-8



31住-9



32住-1



32住-2



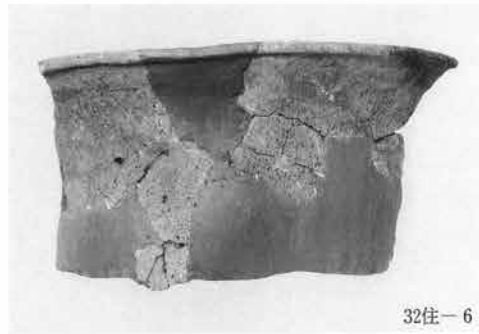
32住-3



32住-5



32住-4



32住-6



32住-7



32住-8



33住-1



33住-2



33住-3



33住-4



33住-5



33住-6



33住-7



33住-8



33住-9



33住-10



33住-11



33住-13

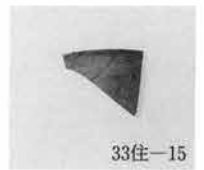
出土遺物



33住-12



33住-14



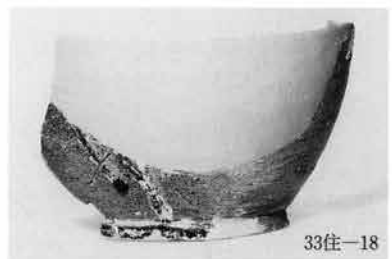
33住-15



33住-16



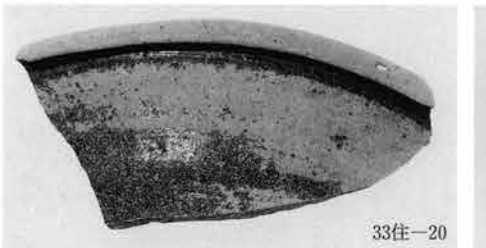
33住-17



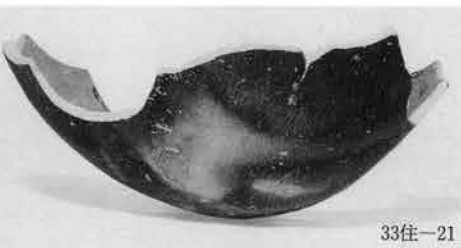
33住-18



33住-19



33住-20



33住-21



33住-22



33住-23



33住-28



33住-27



33住-24



33住-26



33住-30



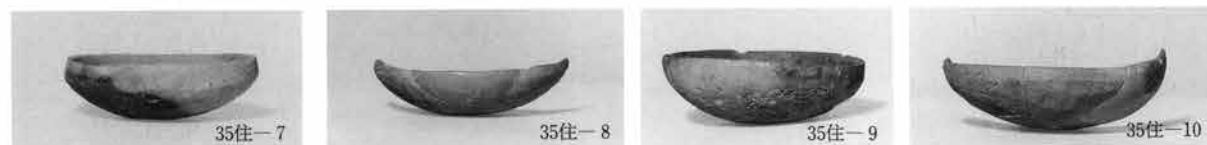
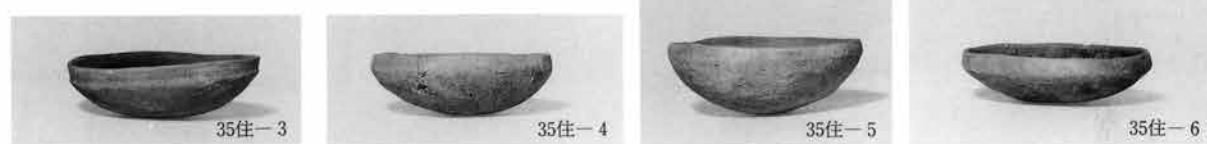
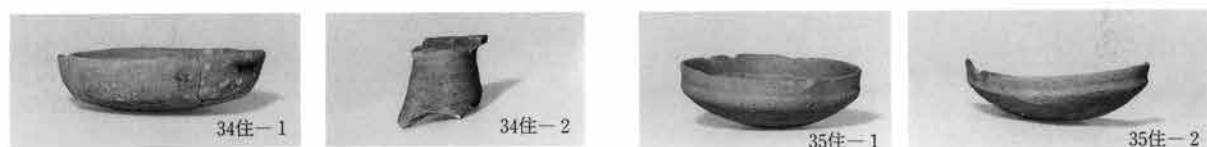
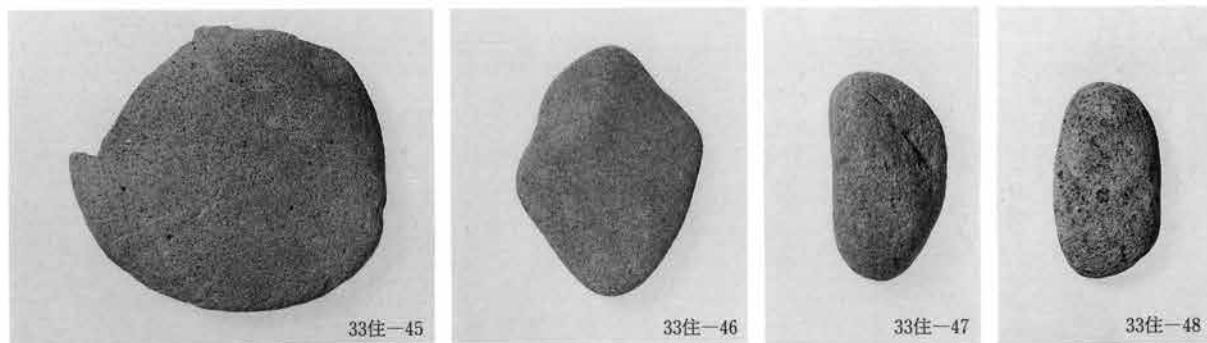
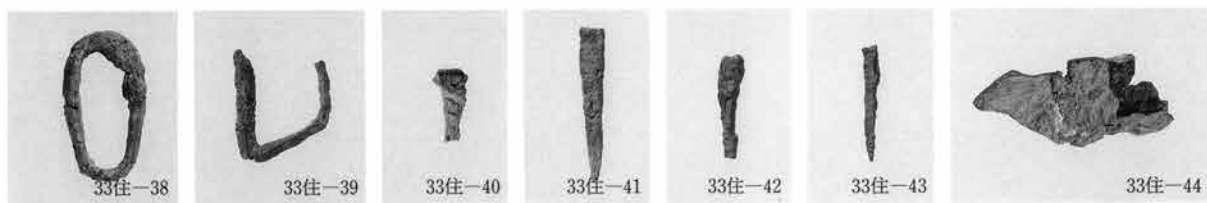
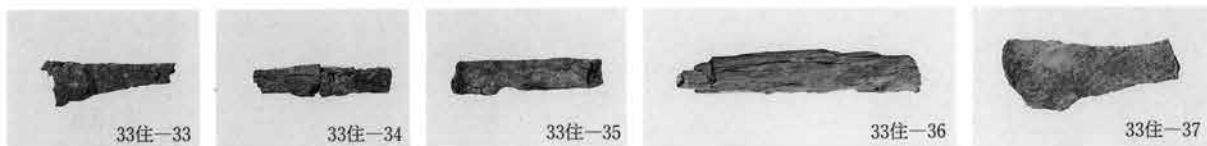
33住-25



33住-31

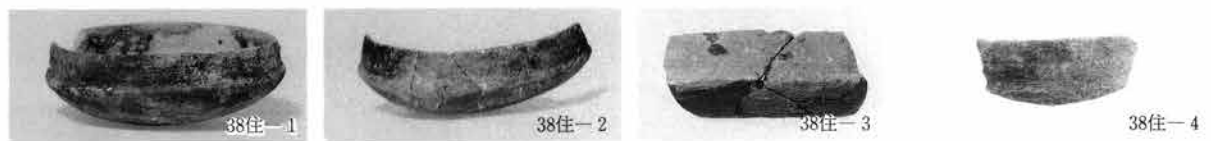
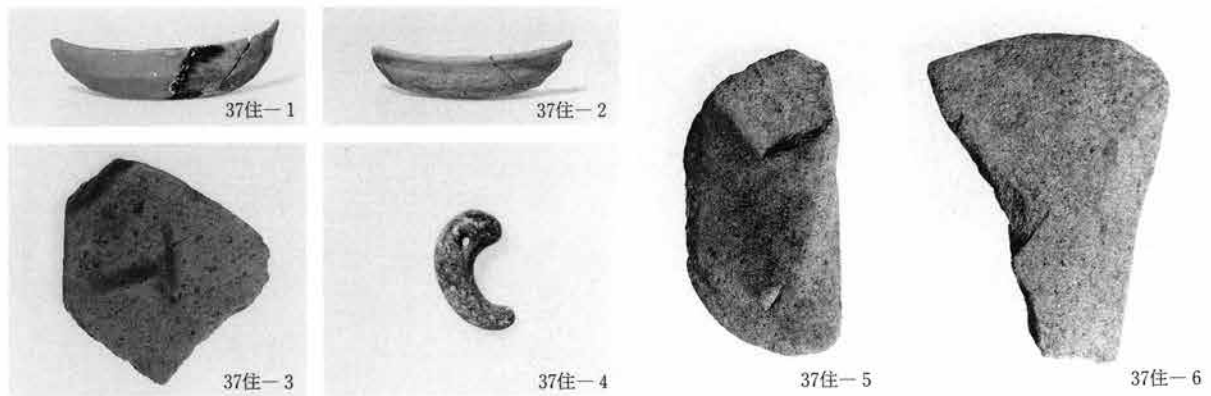
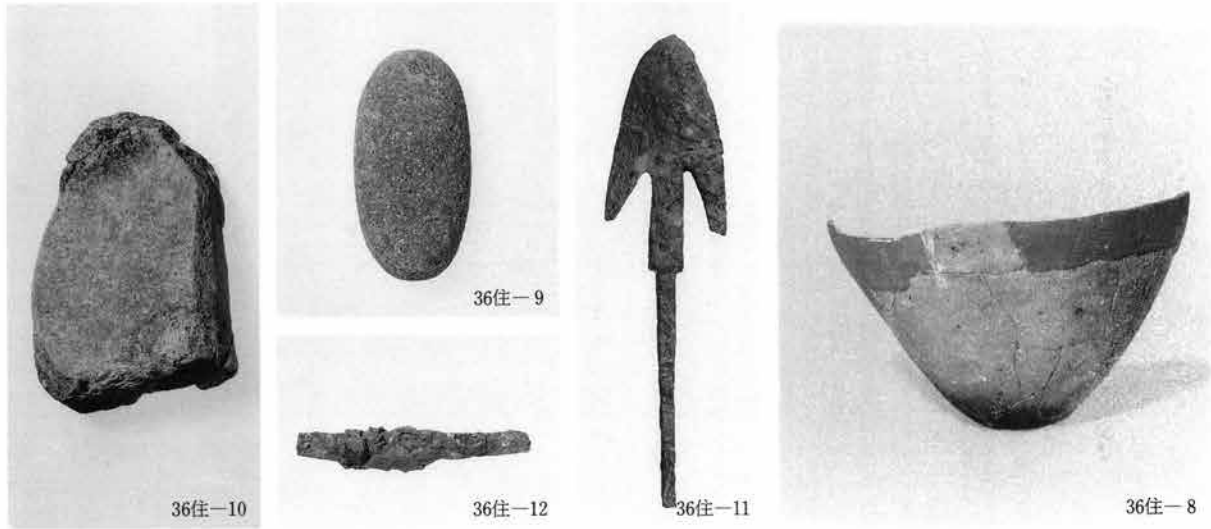
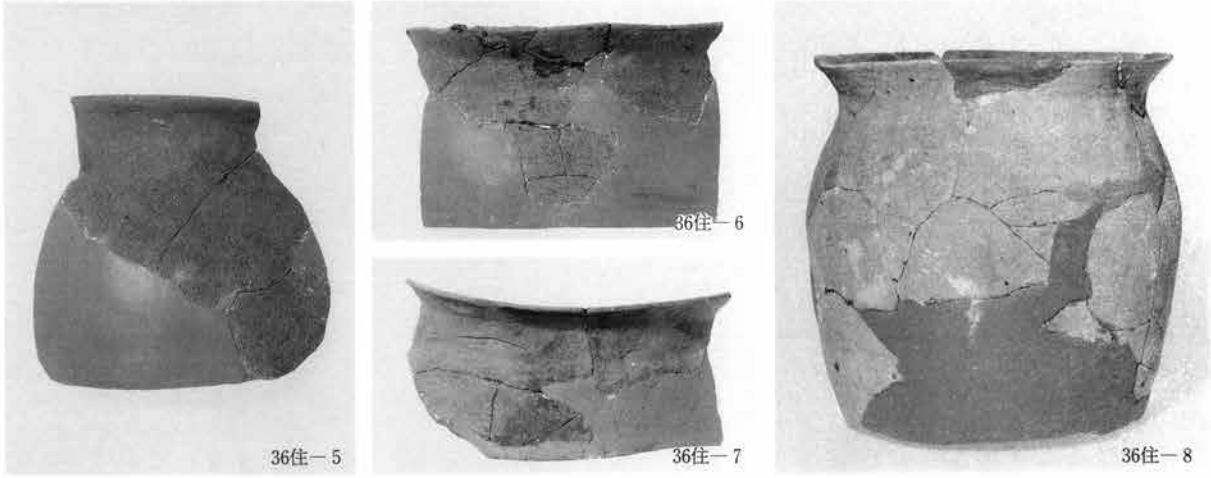
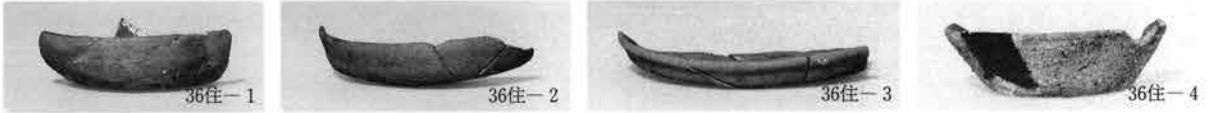


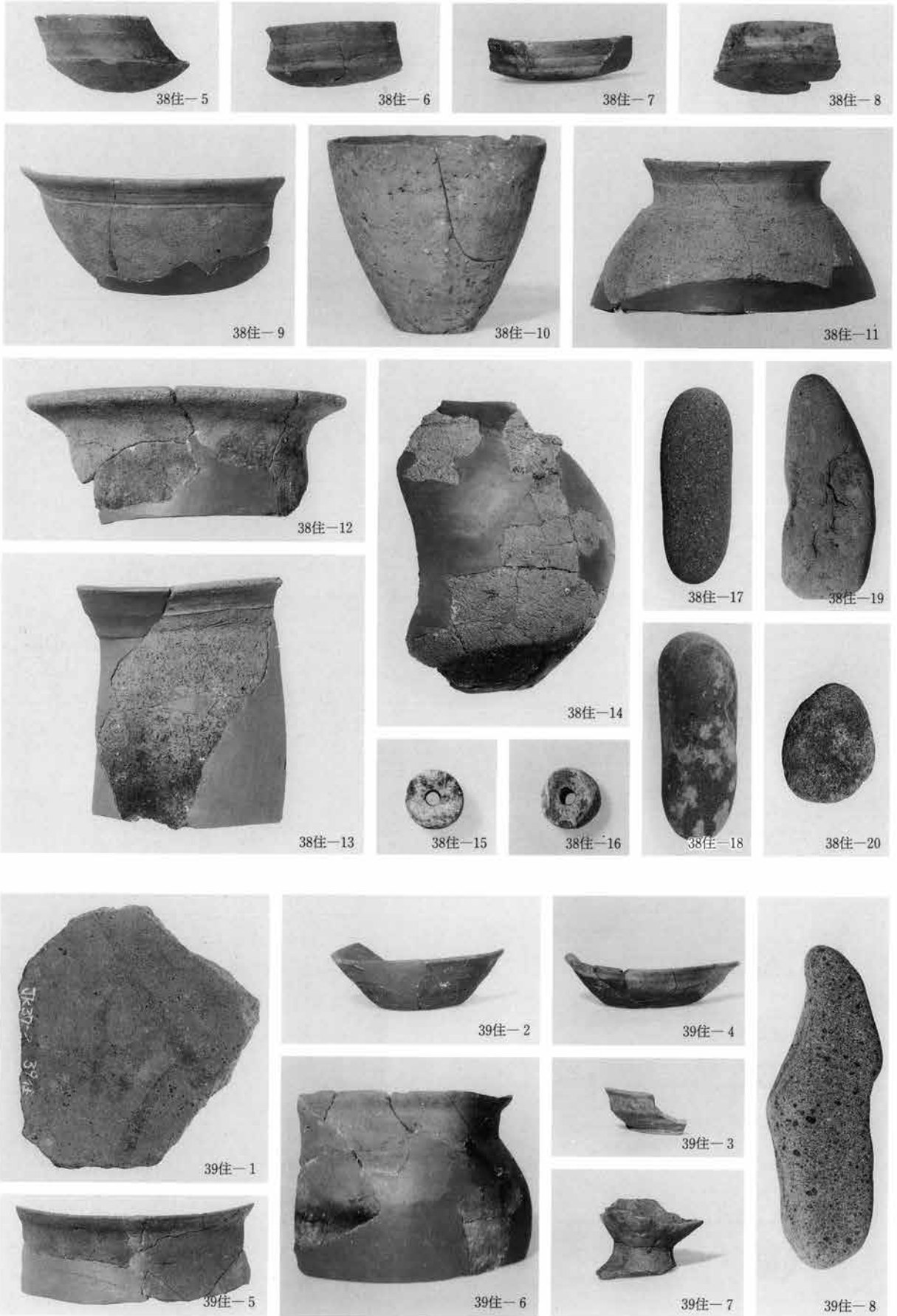
33住-32



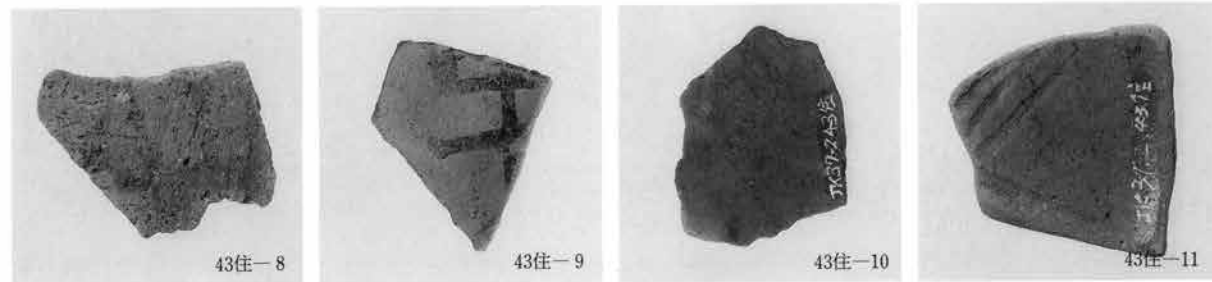
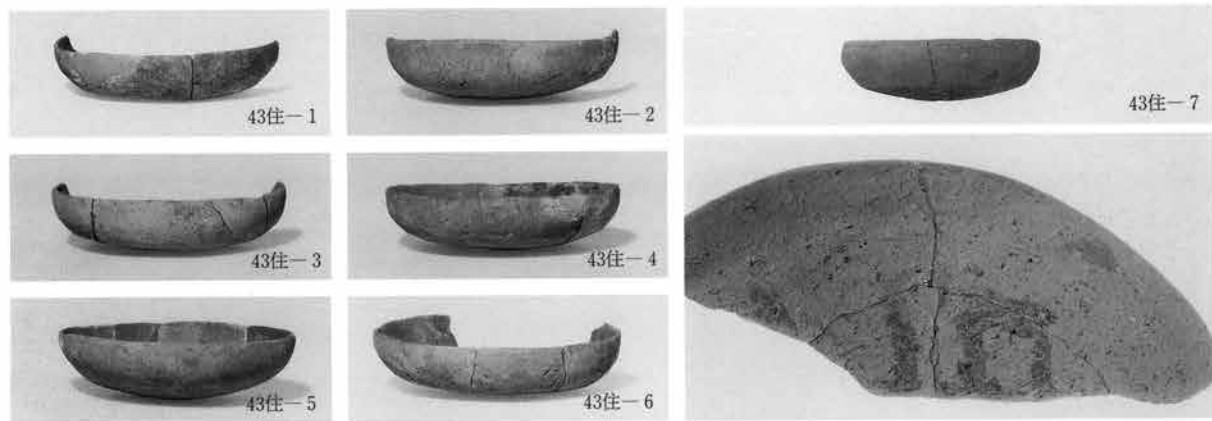
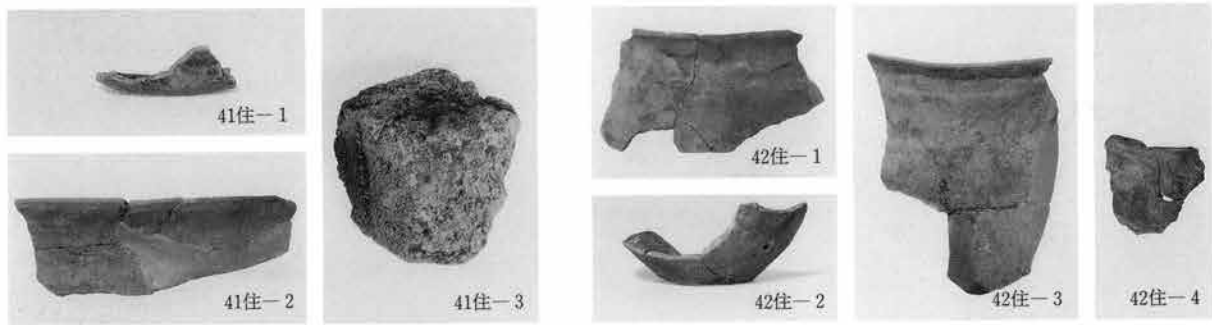
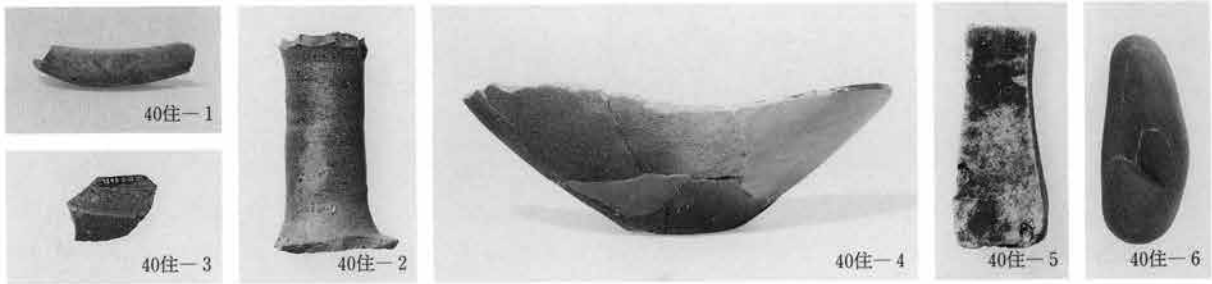
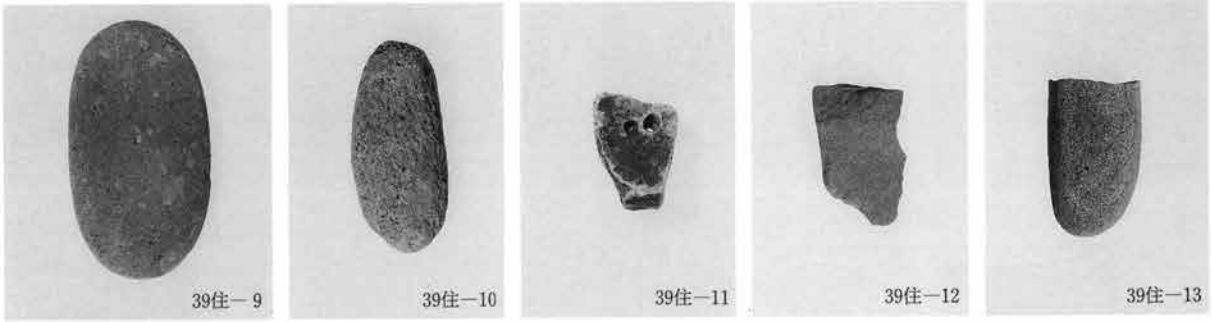


出土遺物

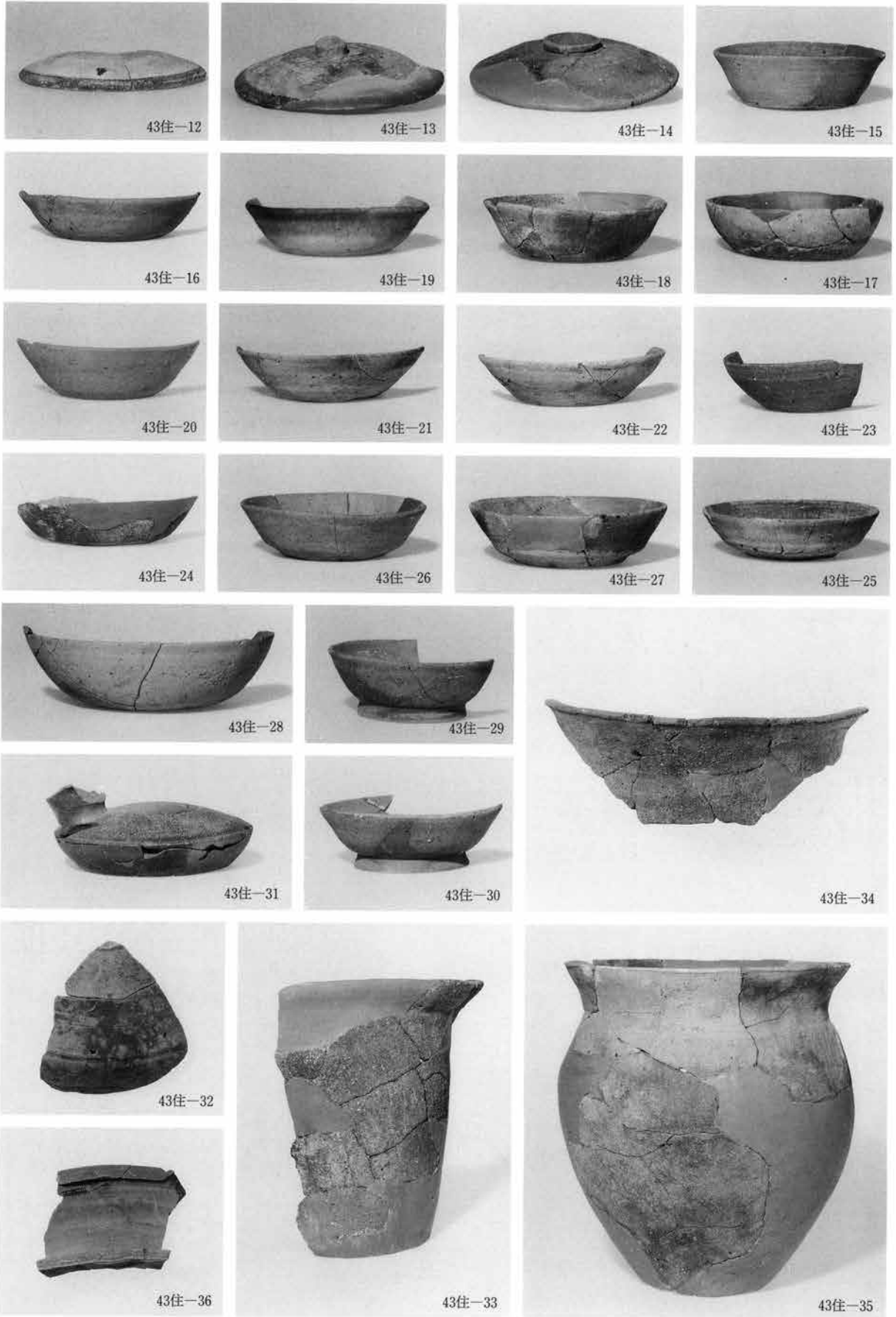




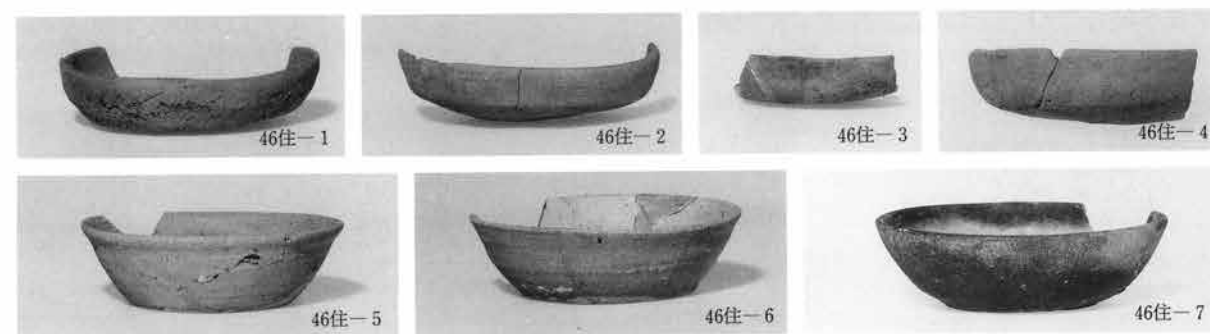
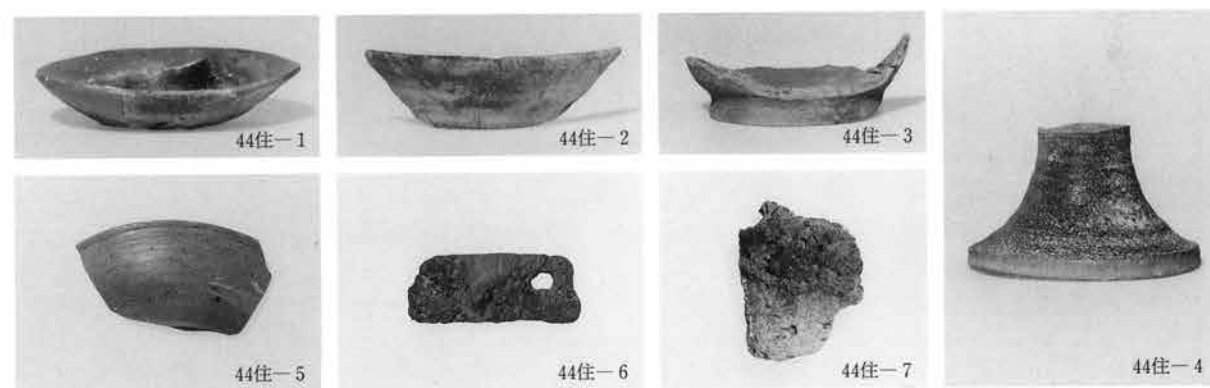
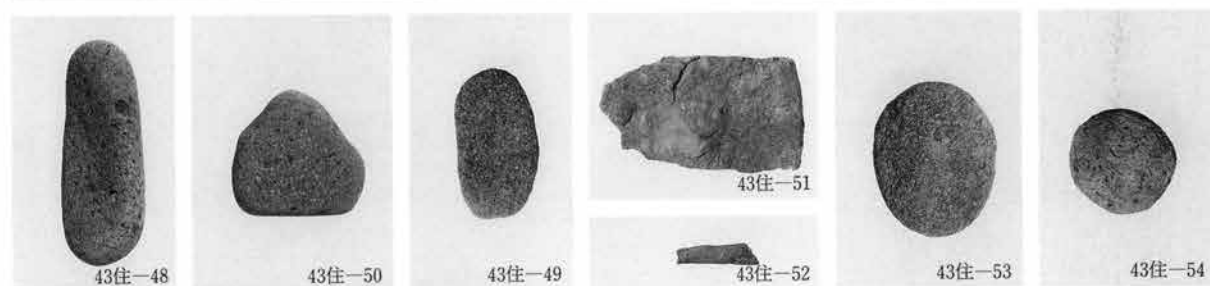
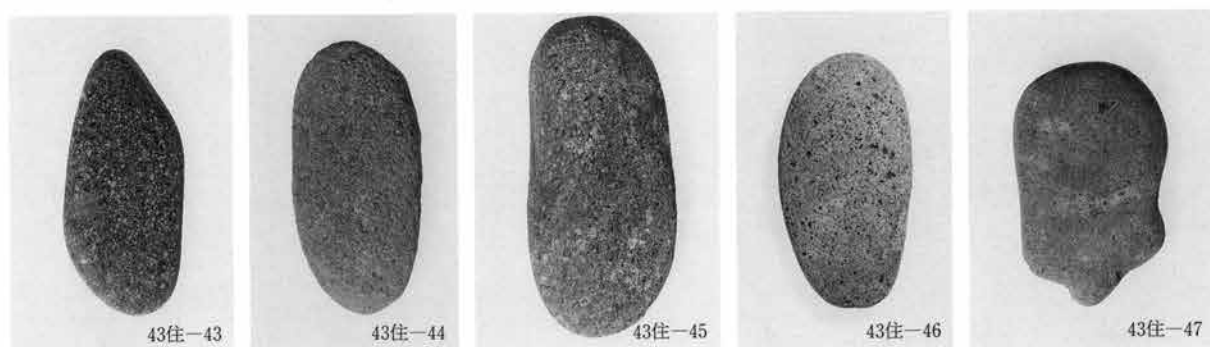
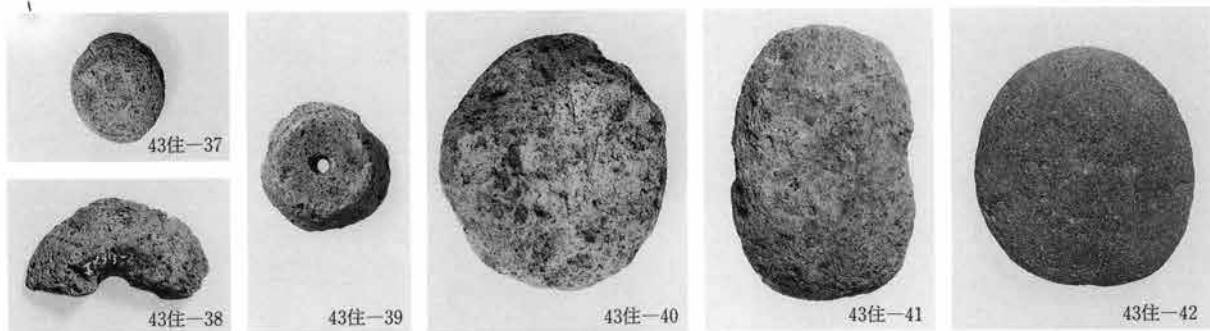
出土遺物



出土遺物



出土遺物



出土遺物



46住-8



46住-9



46住-10



46住-11



46住-12



47住-1



47住-2



47住-3



48住-1



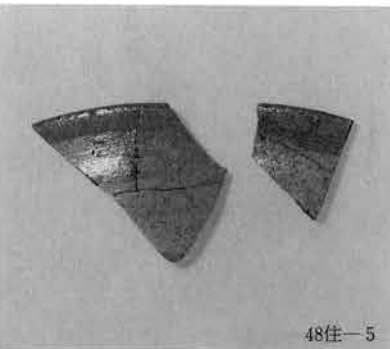
48住-2



48住-3



48住-4



48住-5



48住-6



48住-7



48住-8



48住-9



48住-10



48住-11



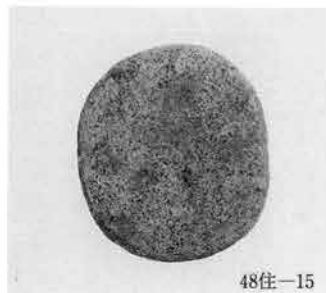
48住-12



48住-13



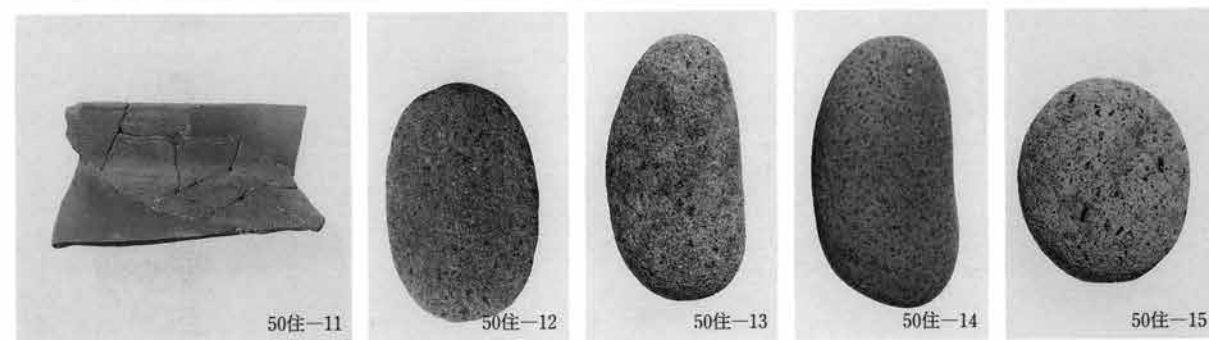
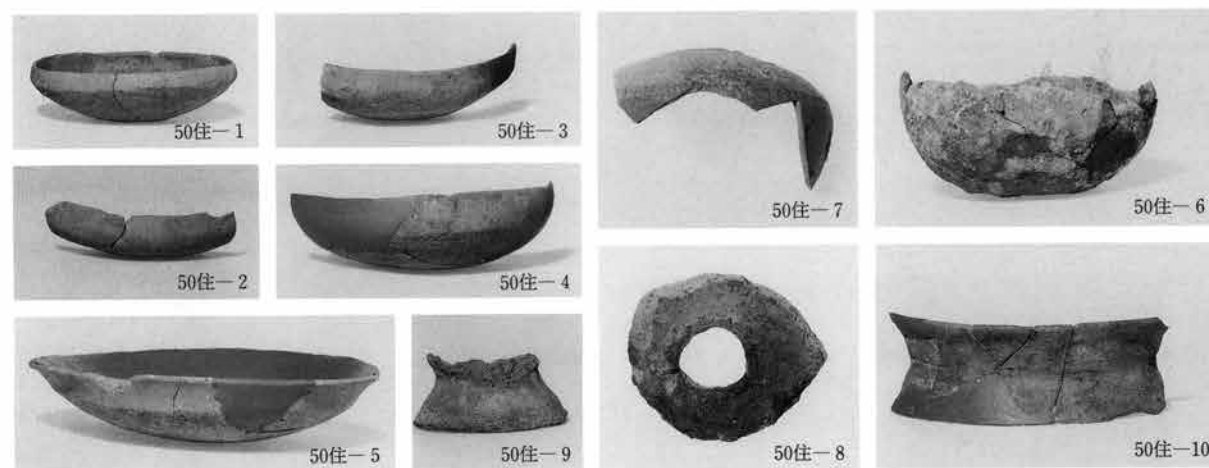
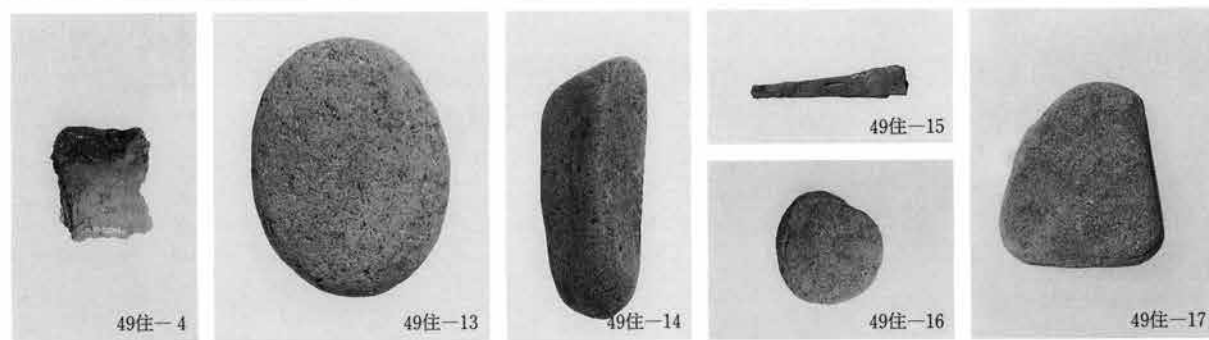
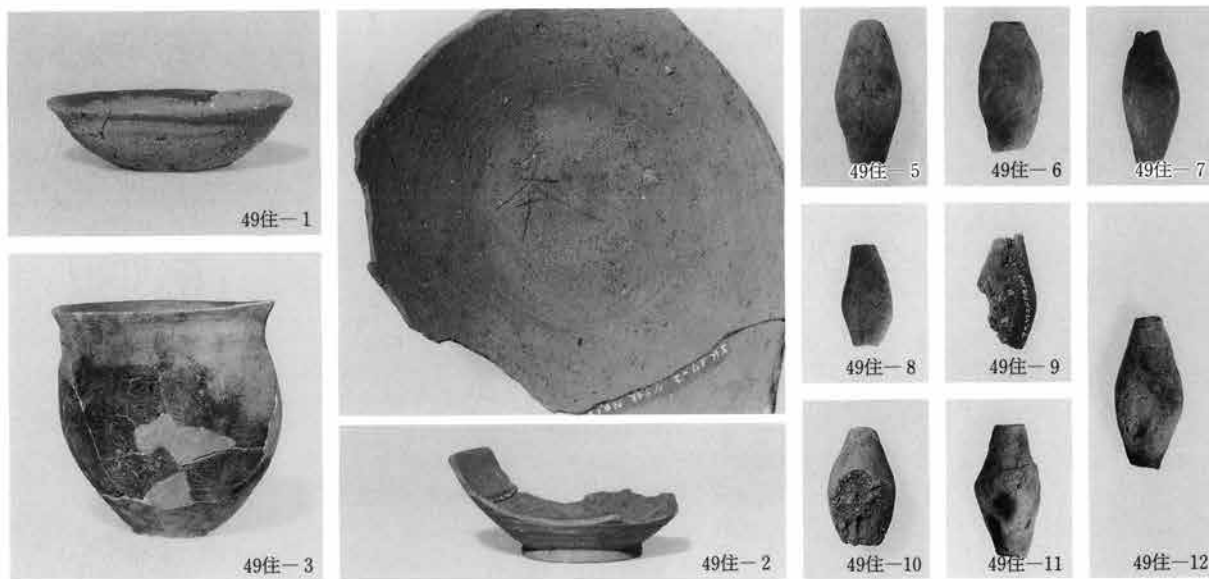
48住-14

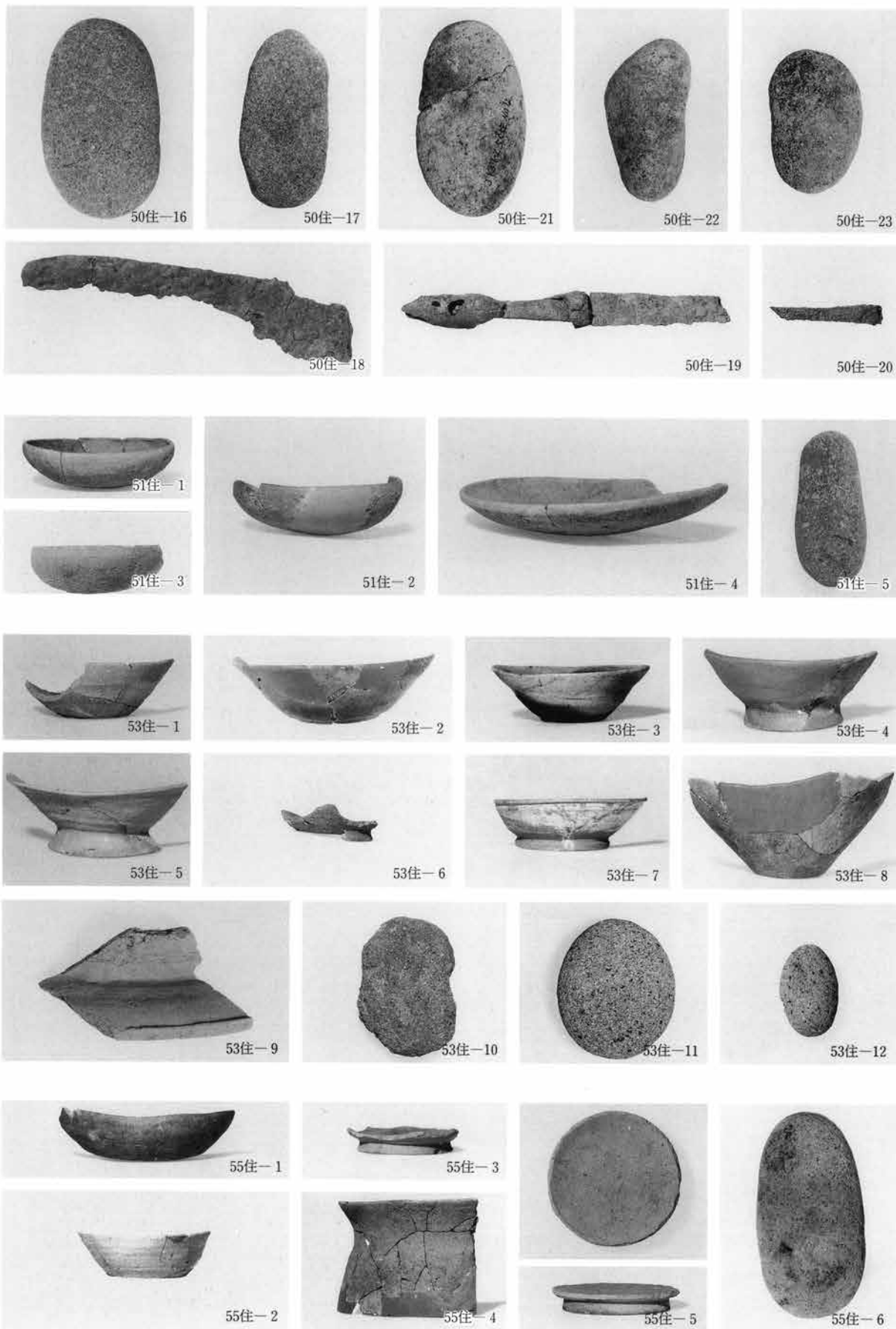


48住-15



48住-16





出土遺物



56住-1



57住-1



57住-4



57住-3



56住-2



57住-2



57住-5



57住-9



57住-6



57住-7



57住-8



58住-1



58住-2



58住-3



58住-4



58住-5



58住-6



58住-7



58住-8



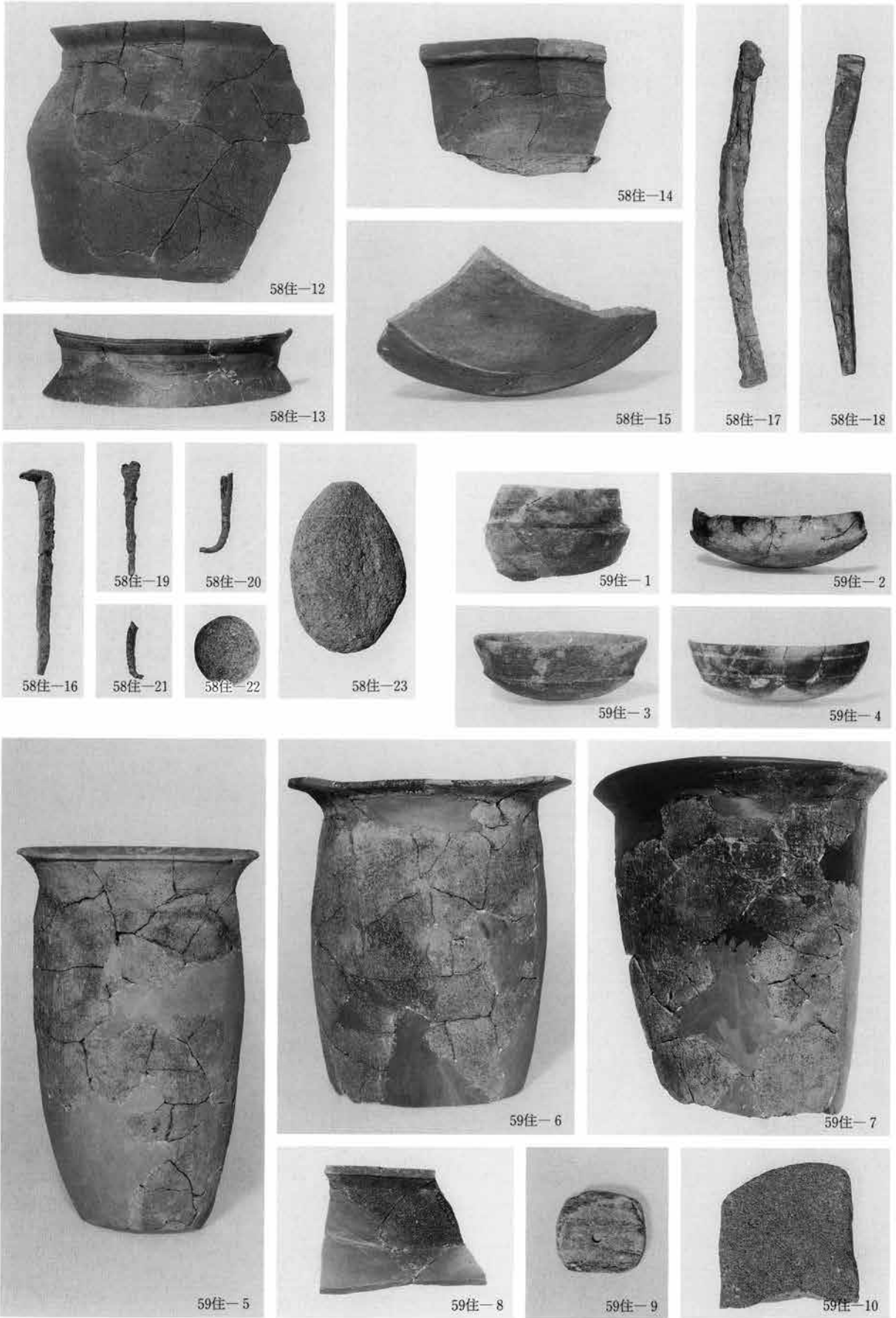
58住-9



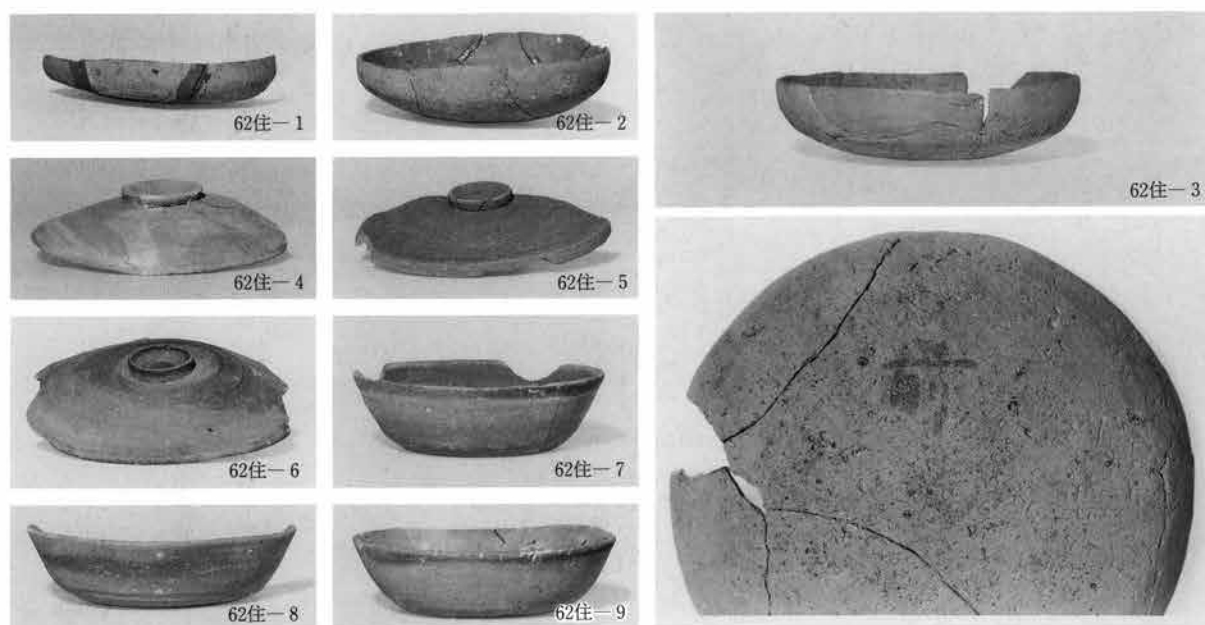
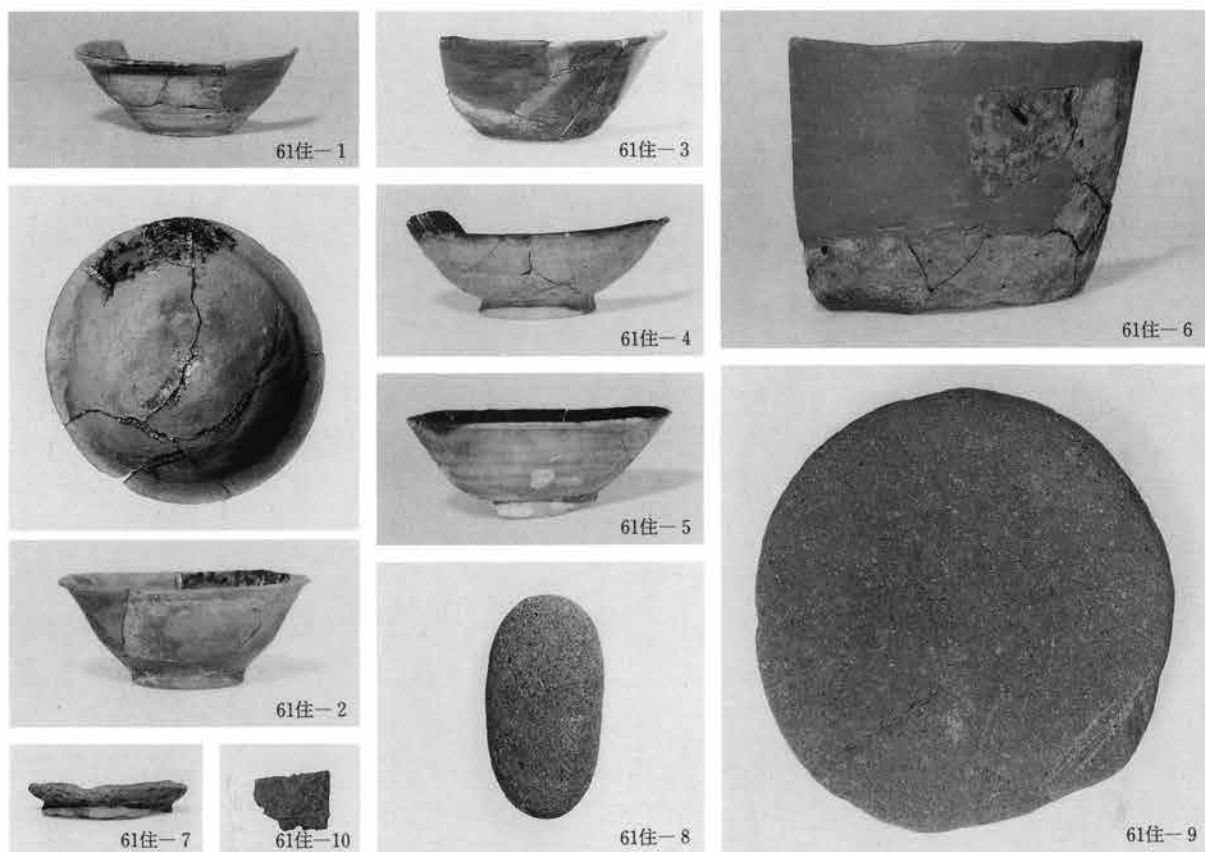
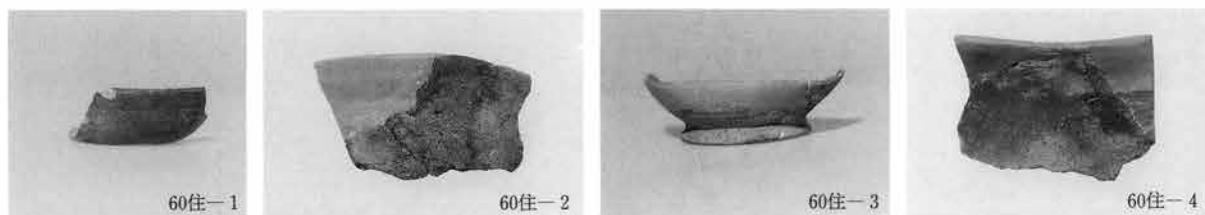
58住-10



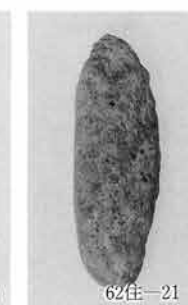
58住-11



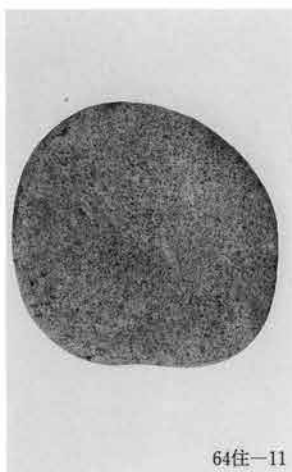
出土遺物



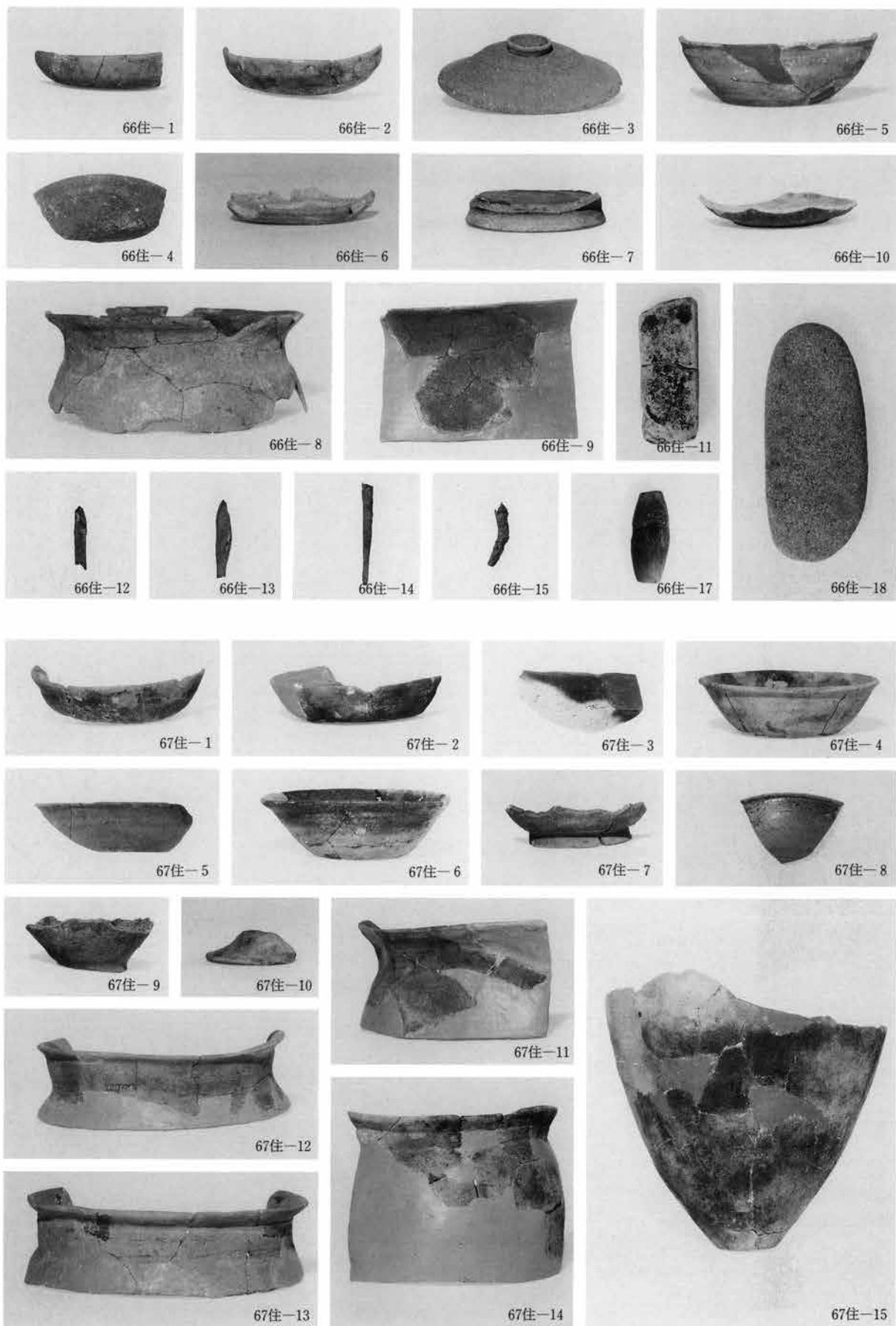
出土遺物



出土遺物



出土遺物



出土遺物



67住-16



67住-17



67住-18



67住-19



67住-20



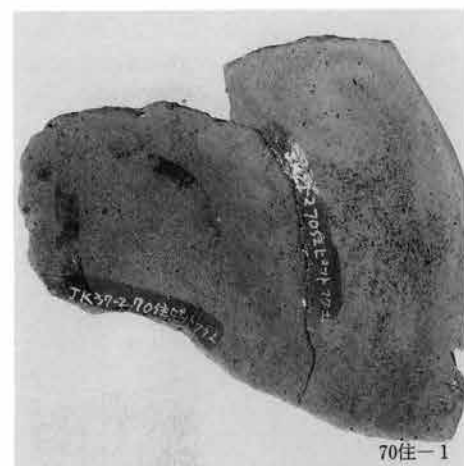
68住-1



68住-2



68住-3



70住-1



69住-2



69住-3



69住-4



69住-5



69住-1



69住-7



69住-8



69住-9

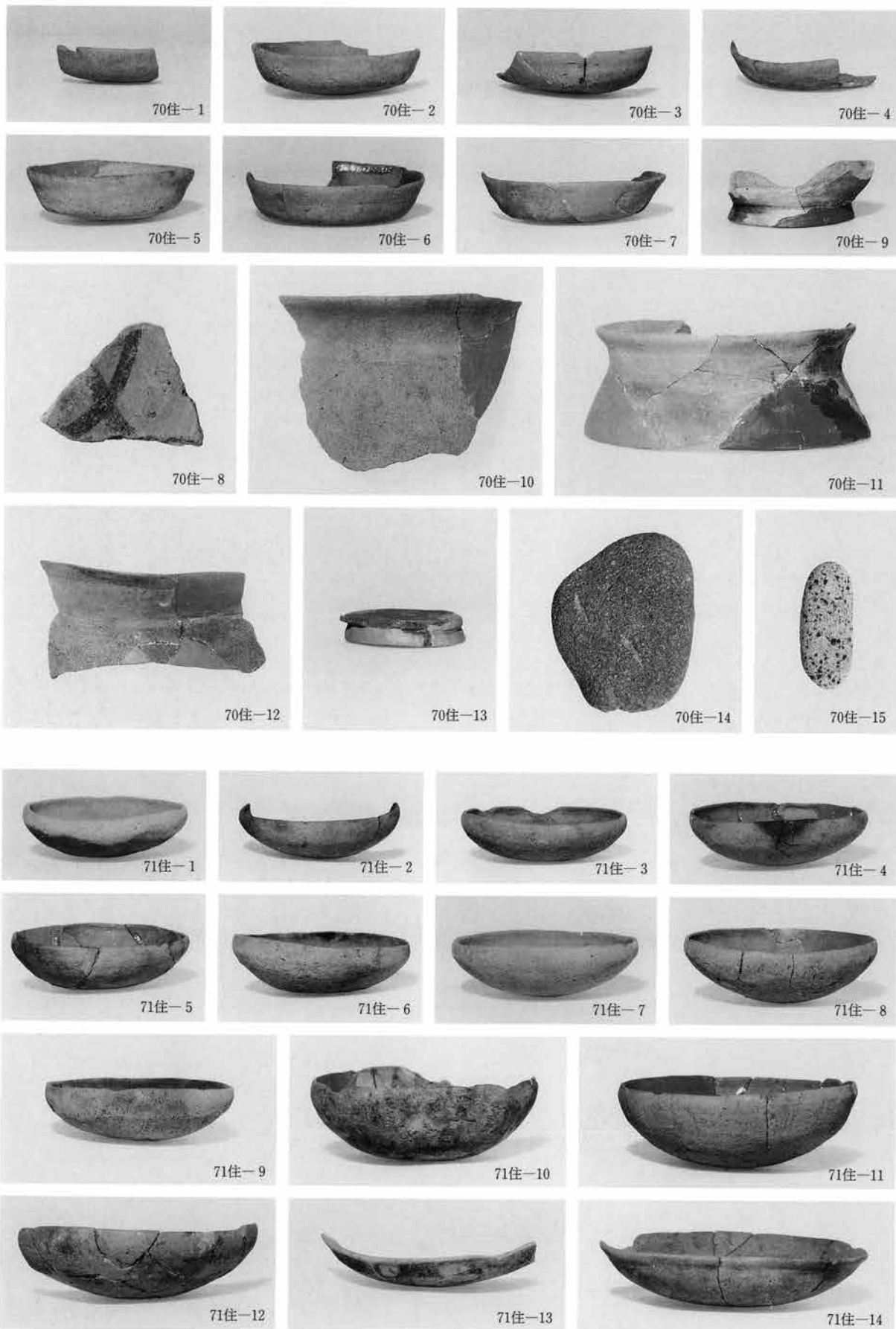


69住-6

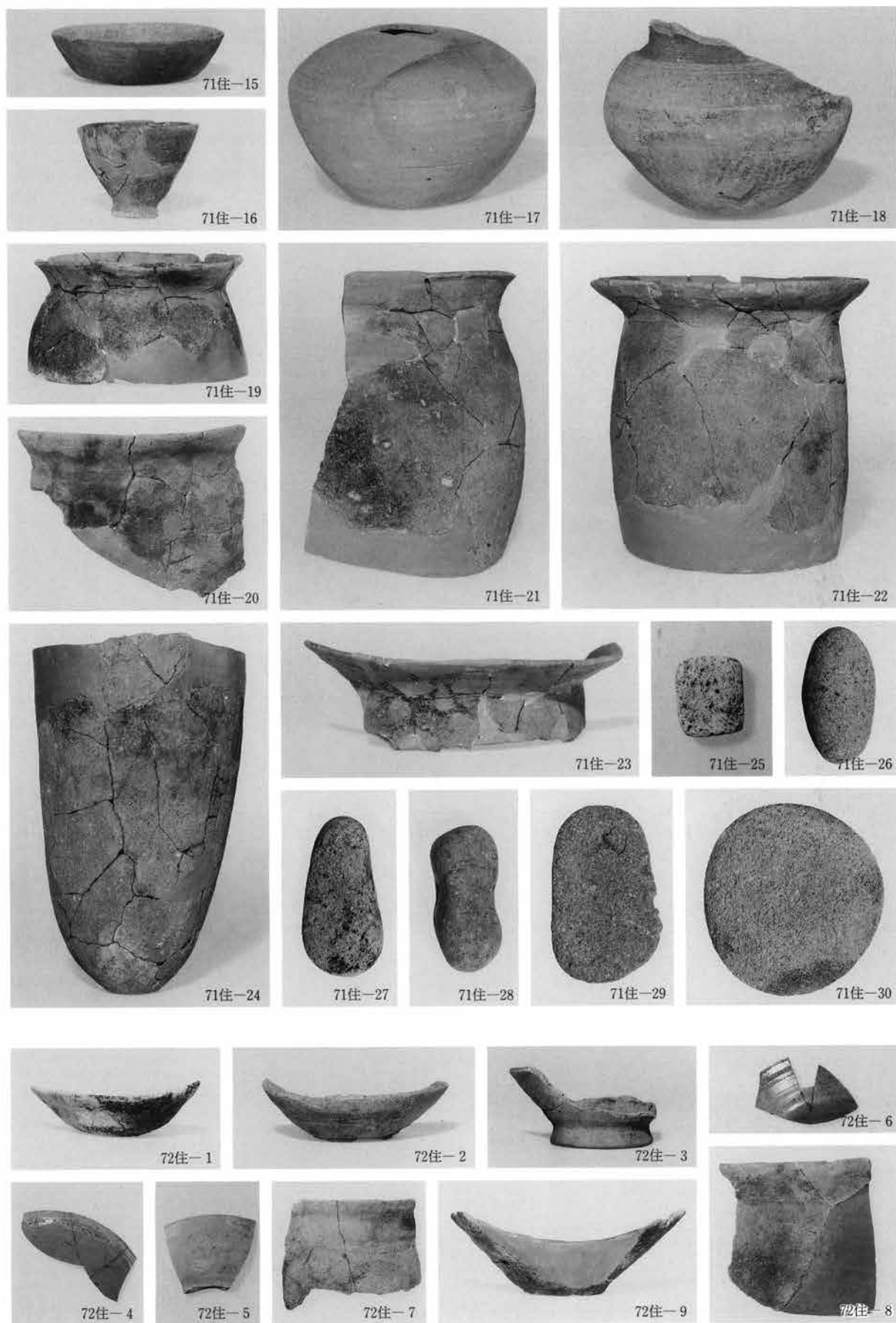


19住-10

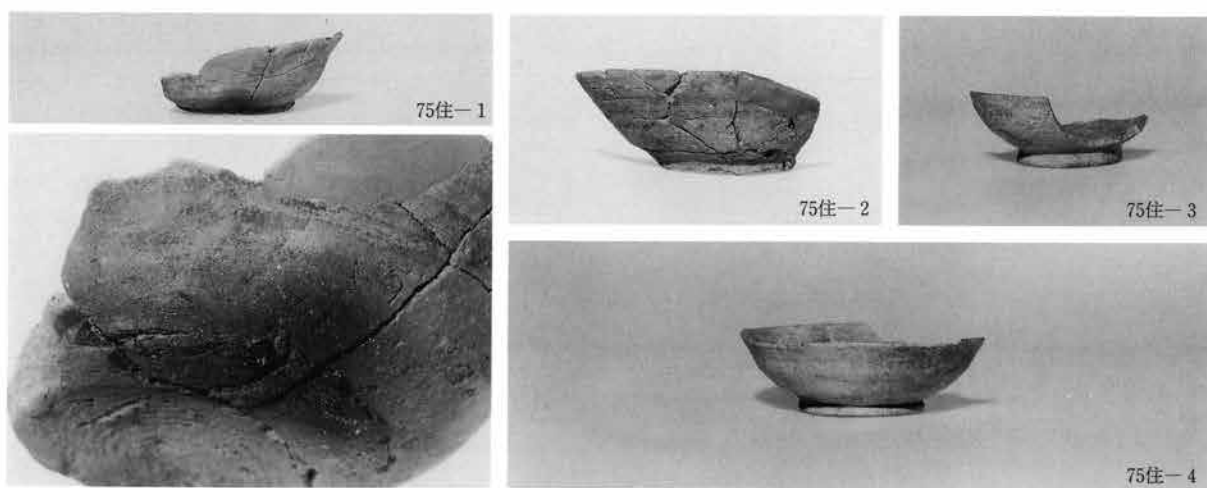
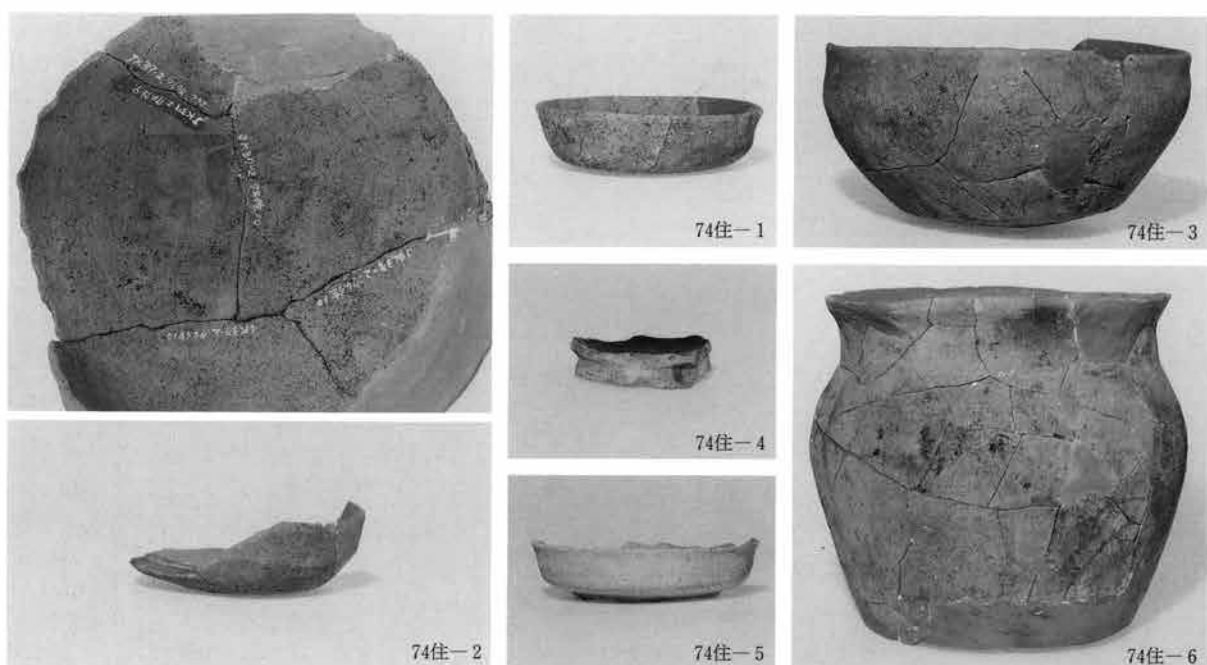
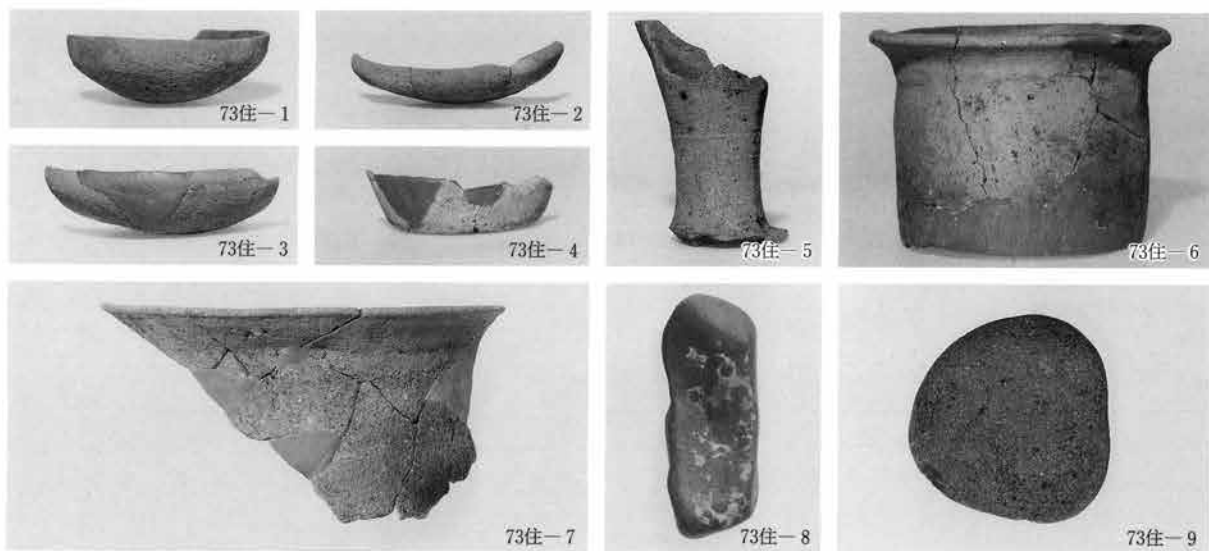
出土遺物

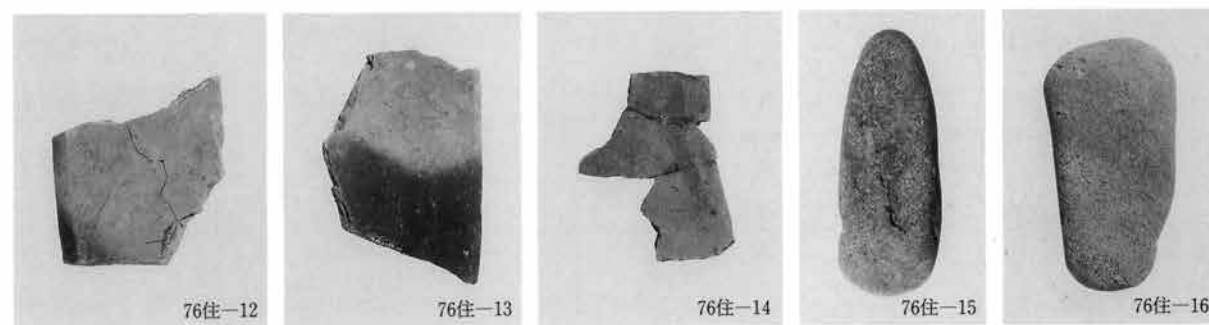
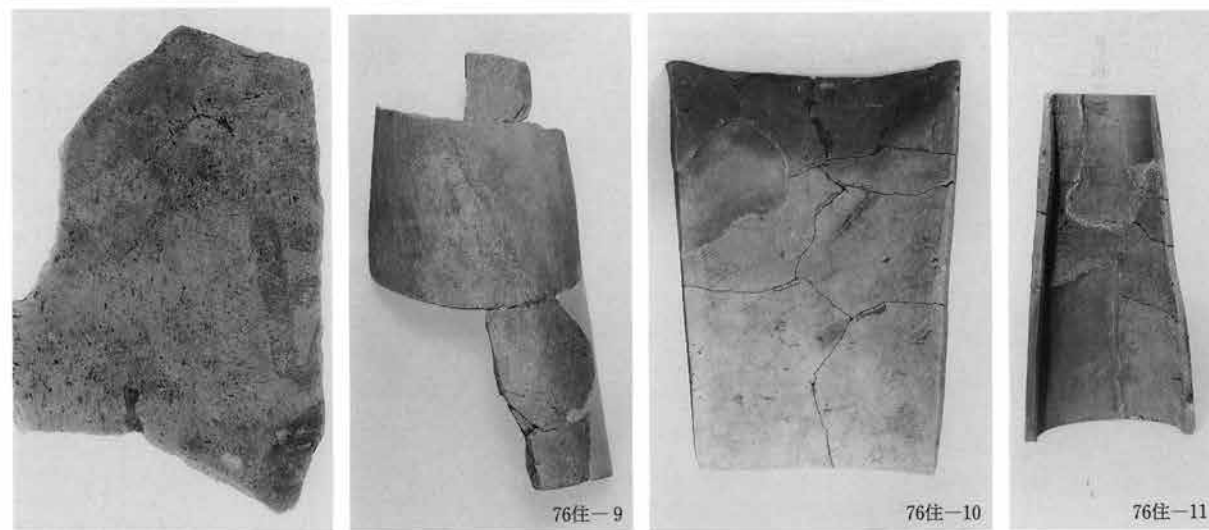
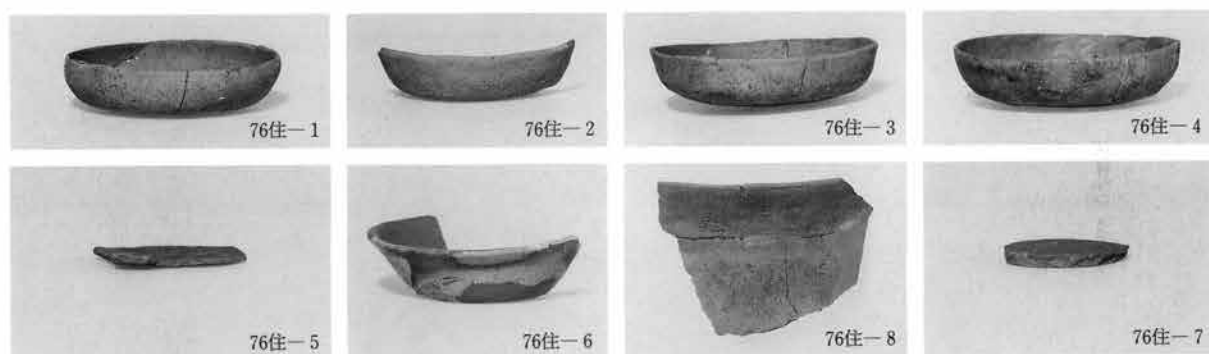
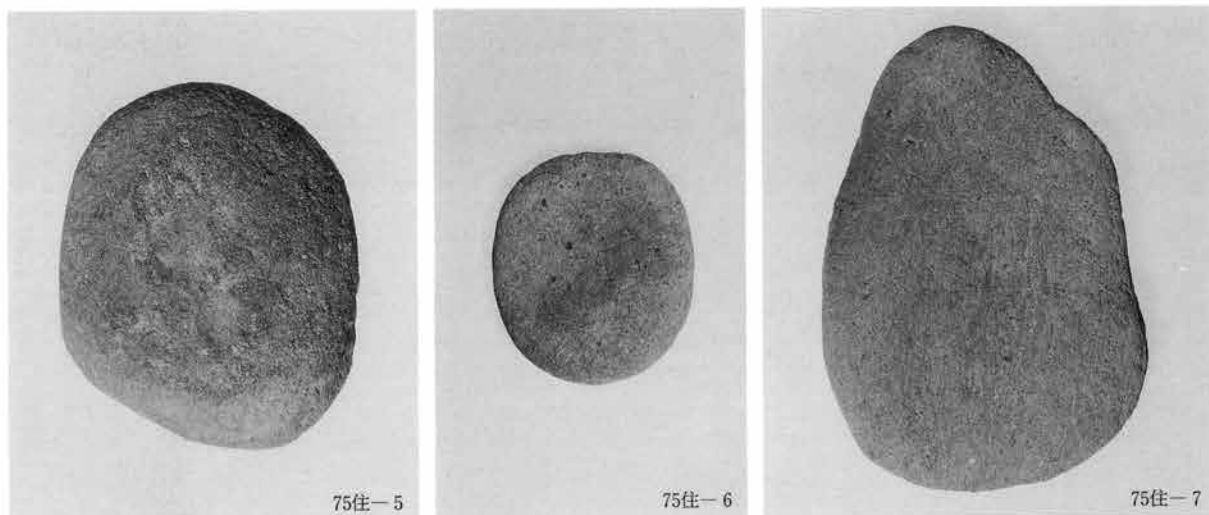


出土遺物

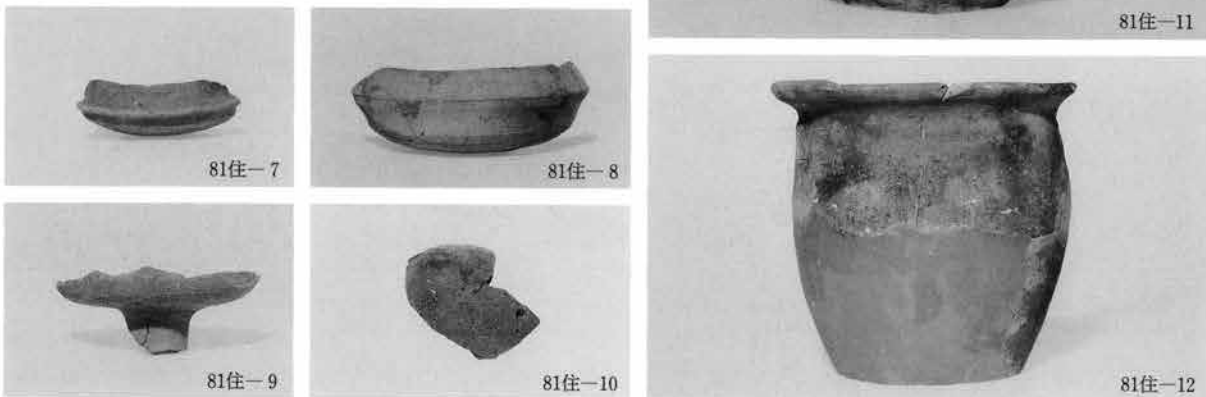
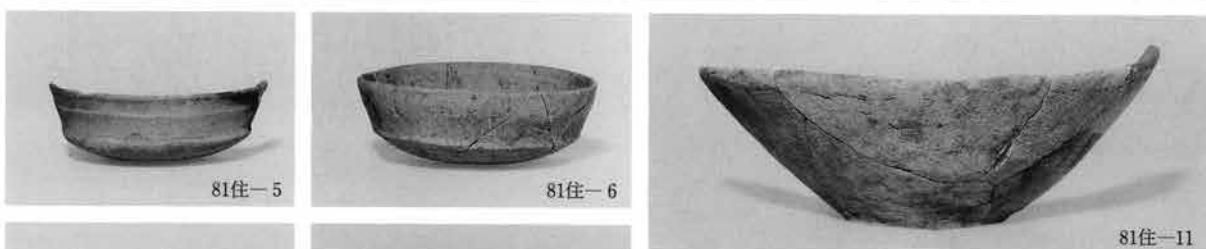
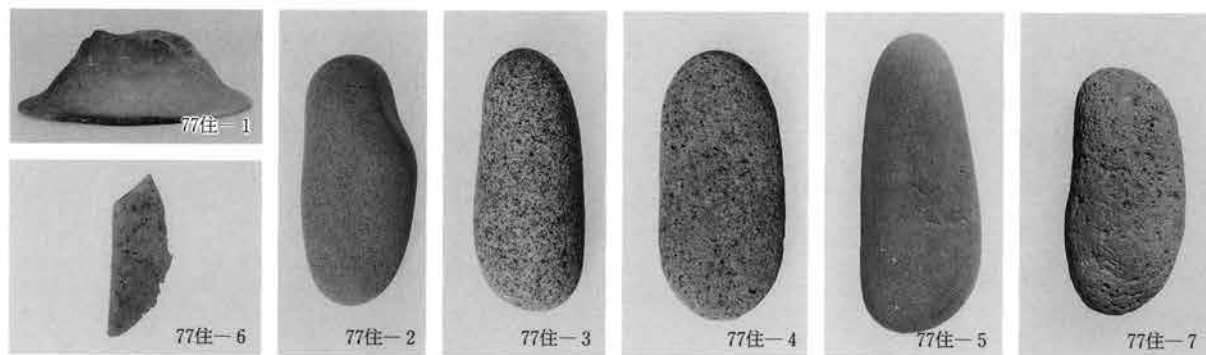


出土遺物

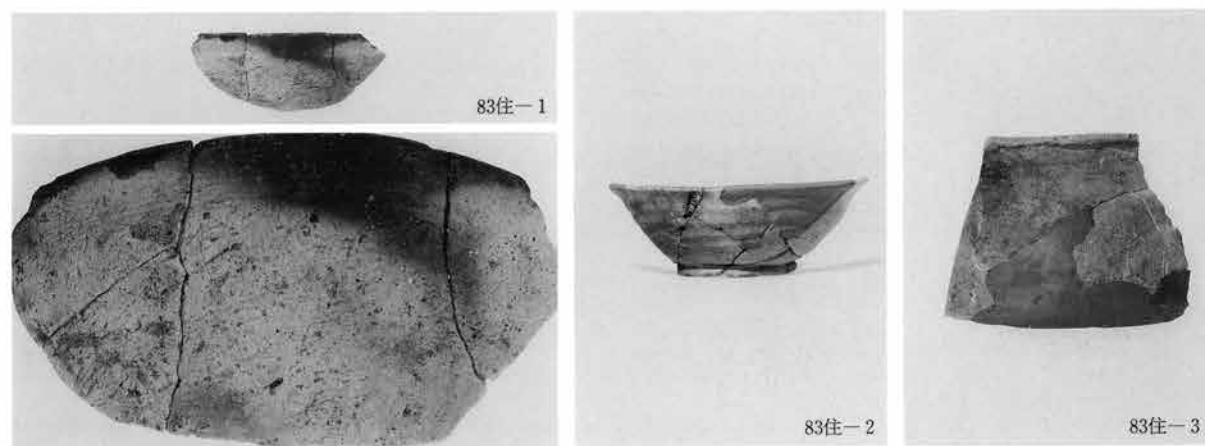
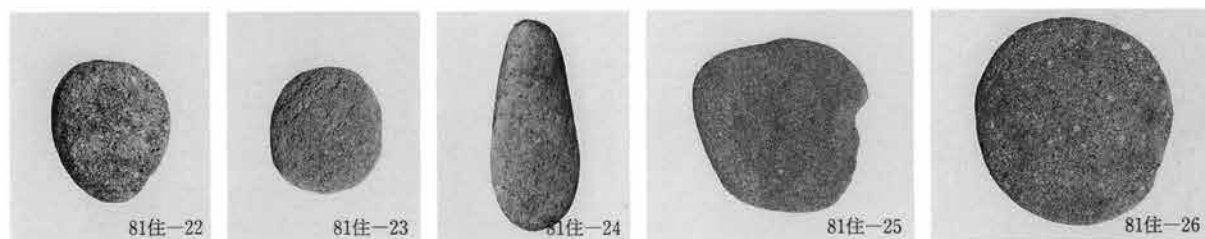
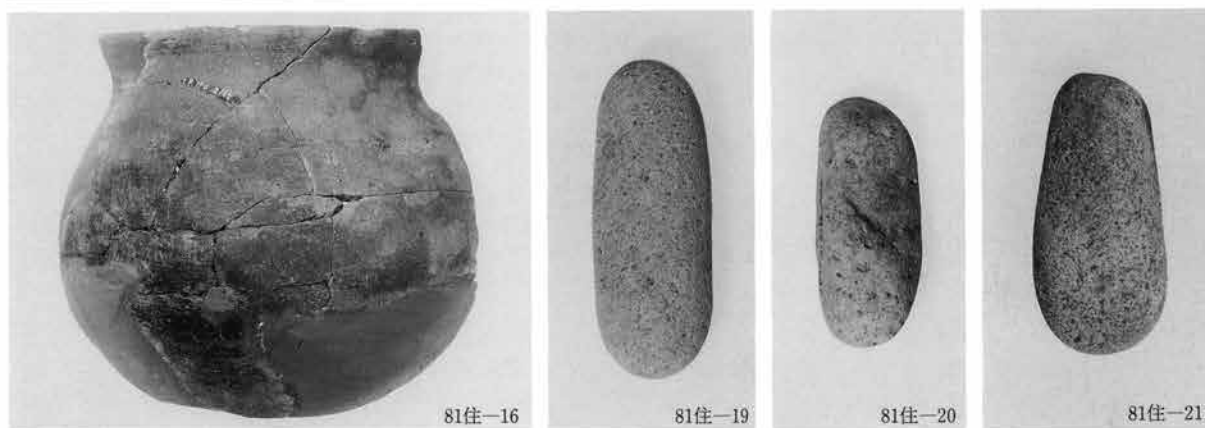
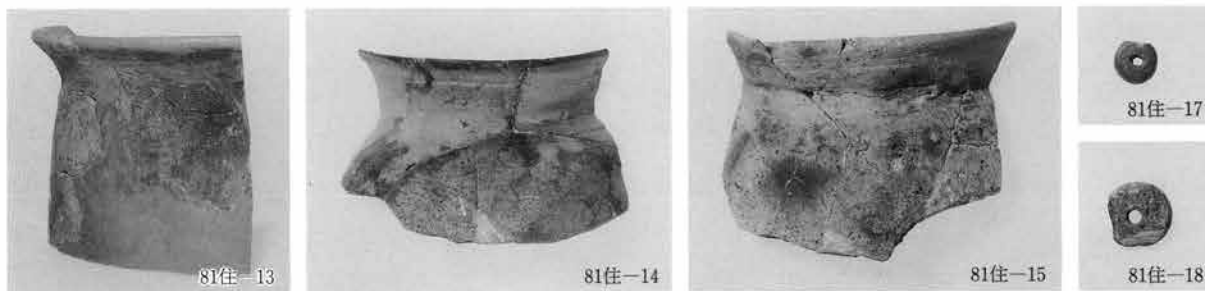




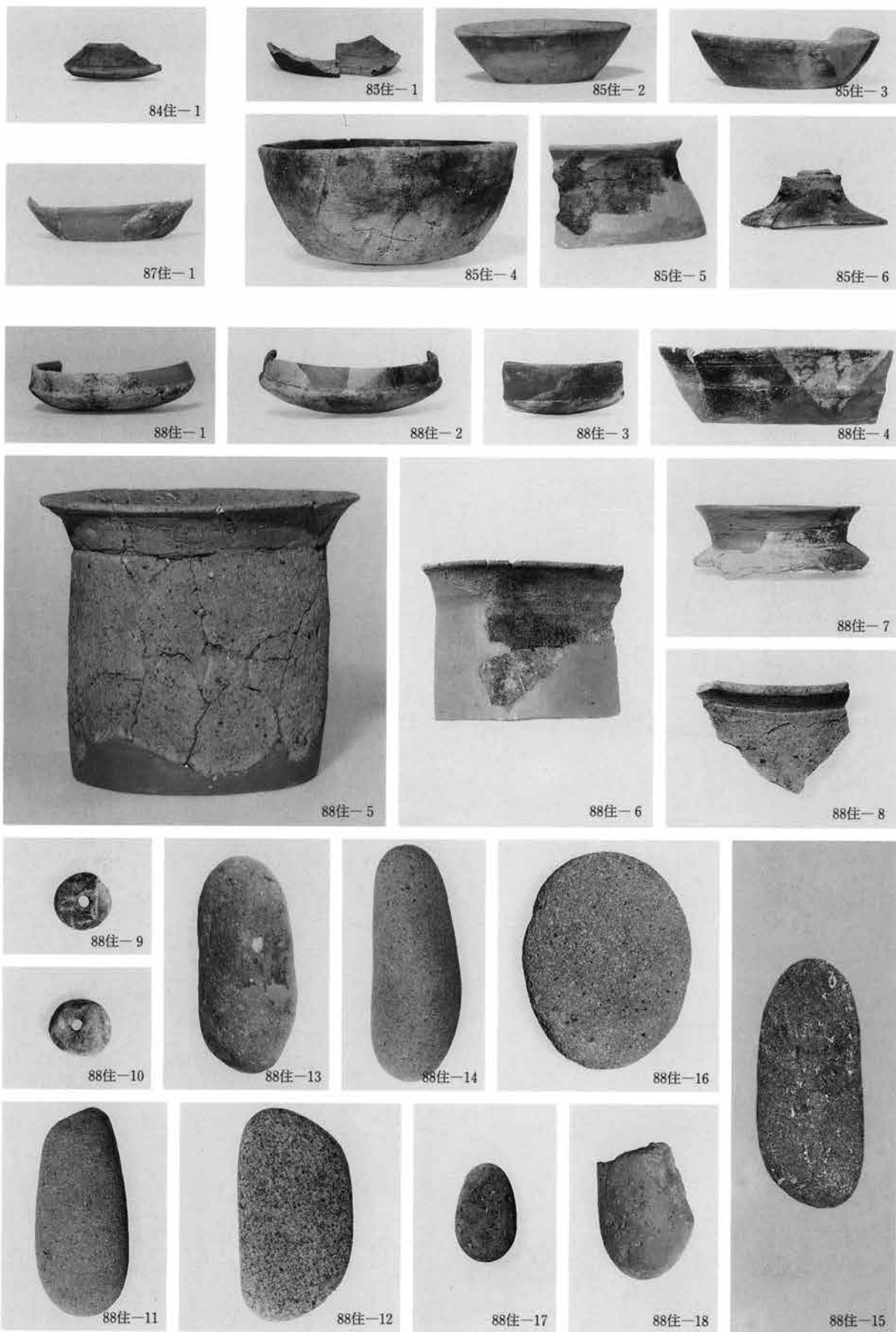
出土遺物



出土遺物



出土遺物



出土遺物



227図-1



228図-1



238図-2



238図-3



238図-1



238図-9



238図-4



238図-5



238図-6



238図-7



238図-9



238図-10



238図-8



238図-11



238図-12



238図-13



238図-14



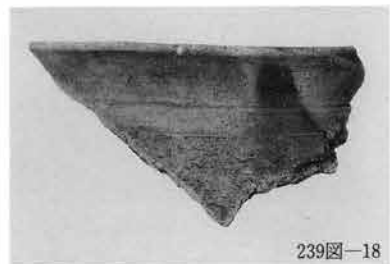
238図-15



238図-17



238図-16



239図-18



239図-19



239図-20



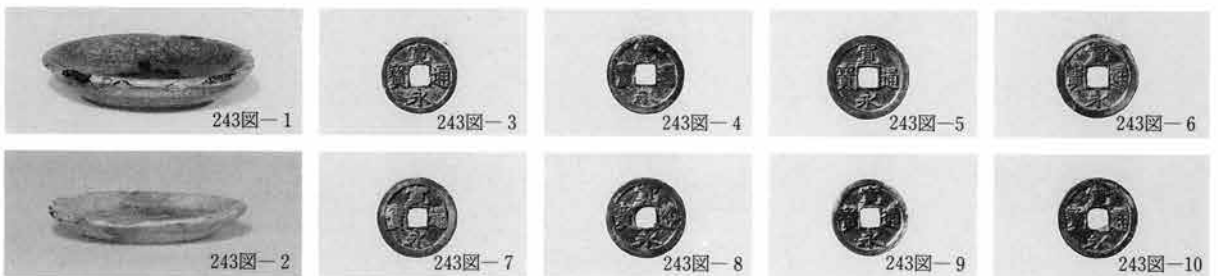
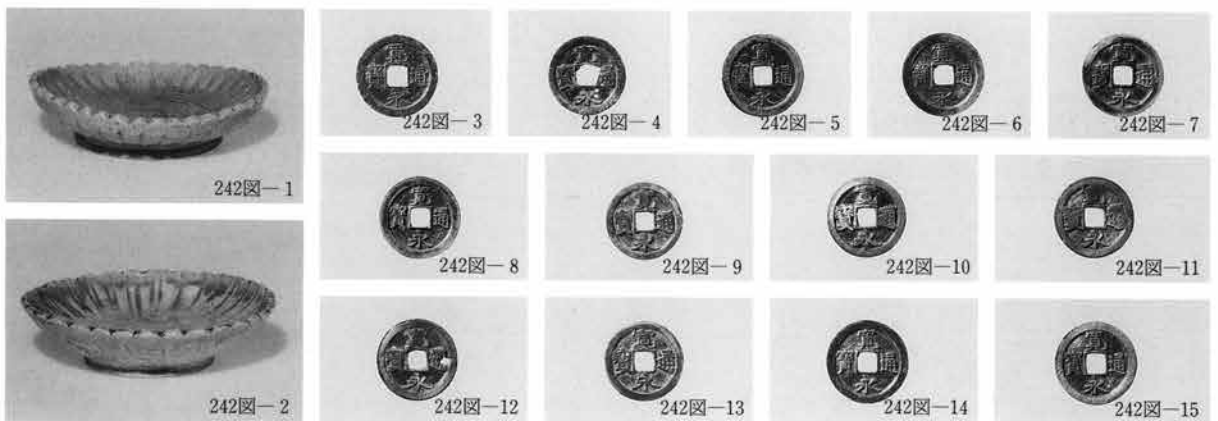
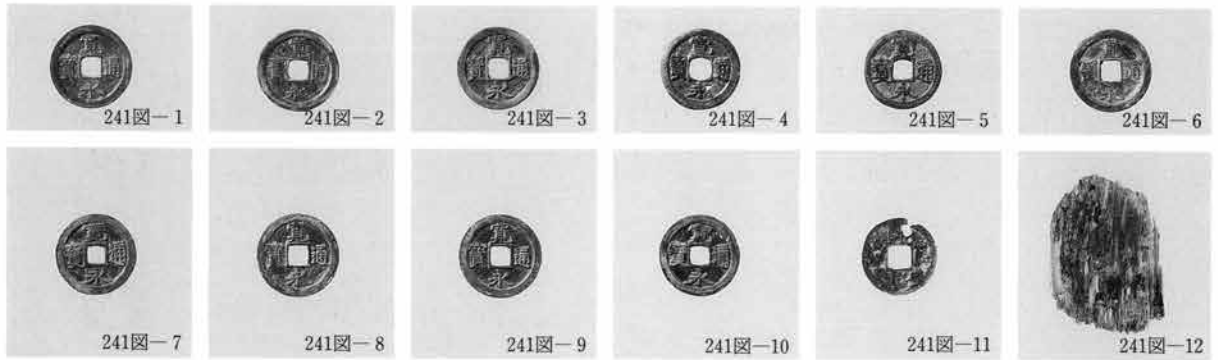
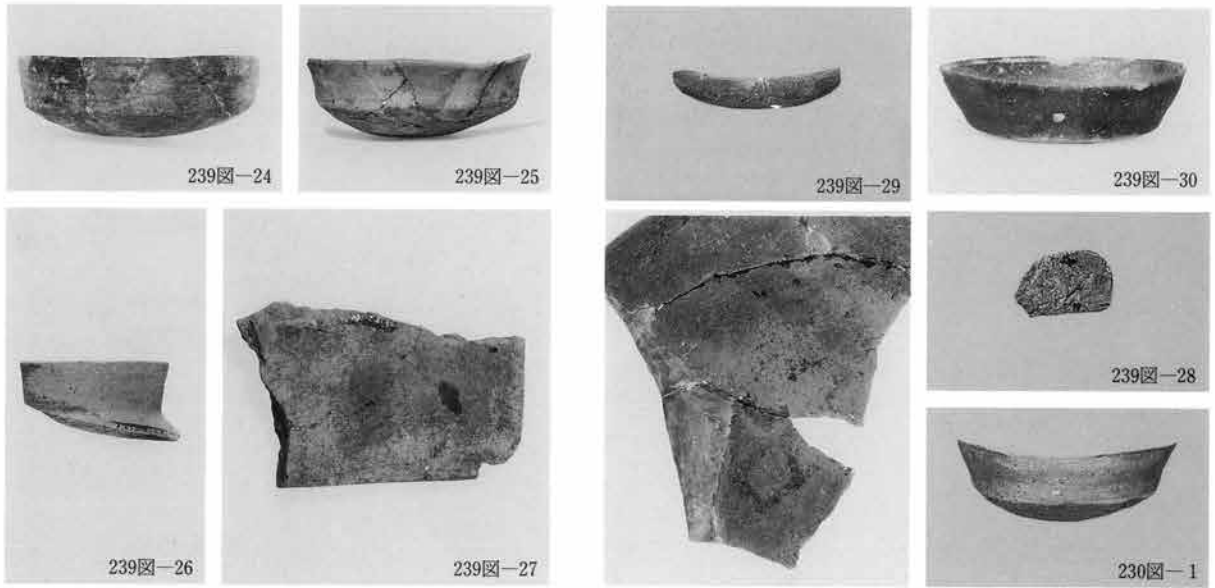
239図-21

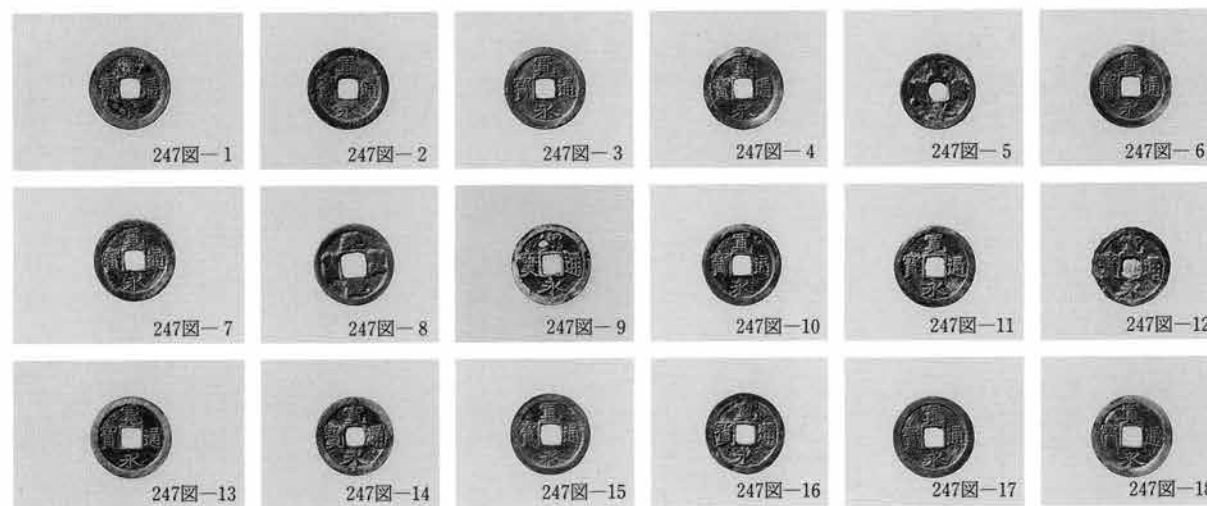
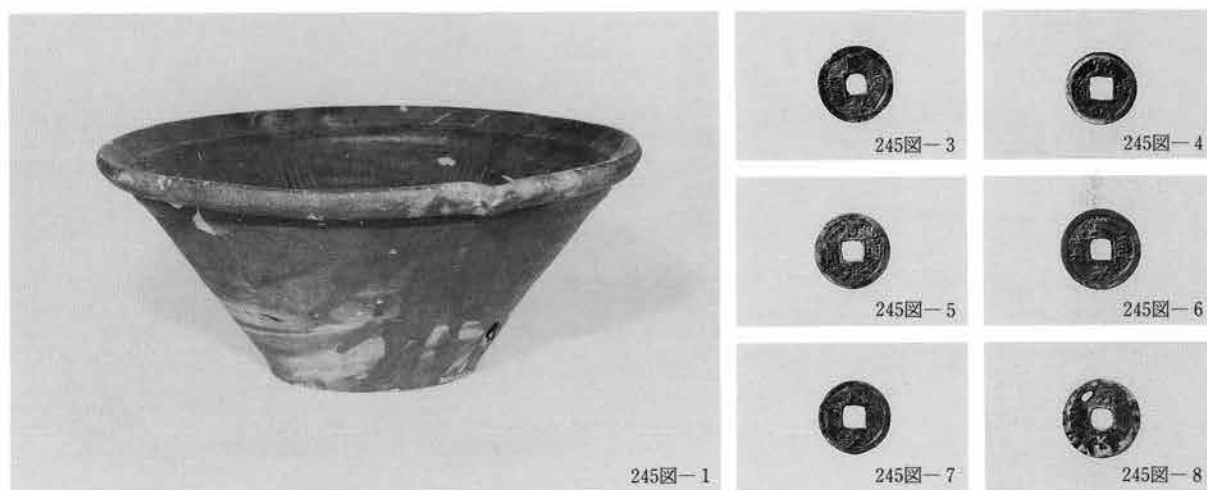
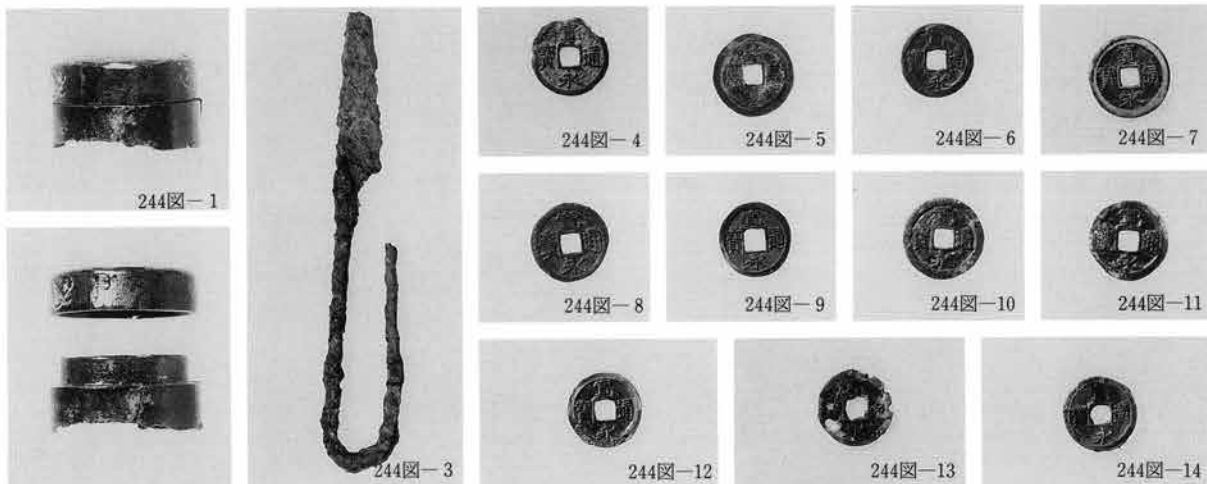


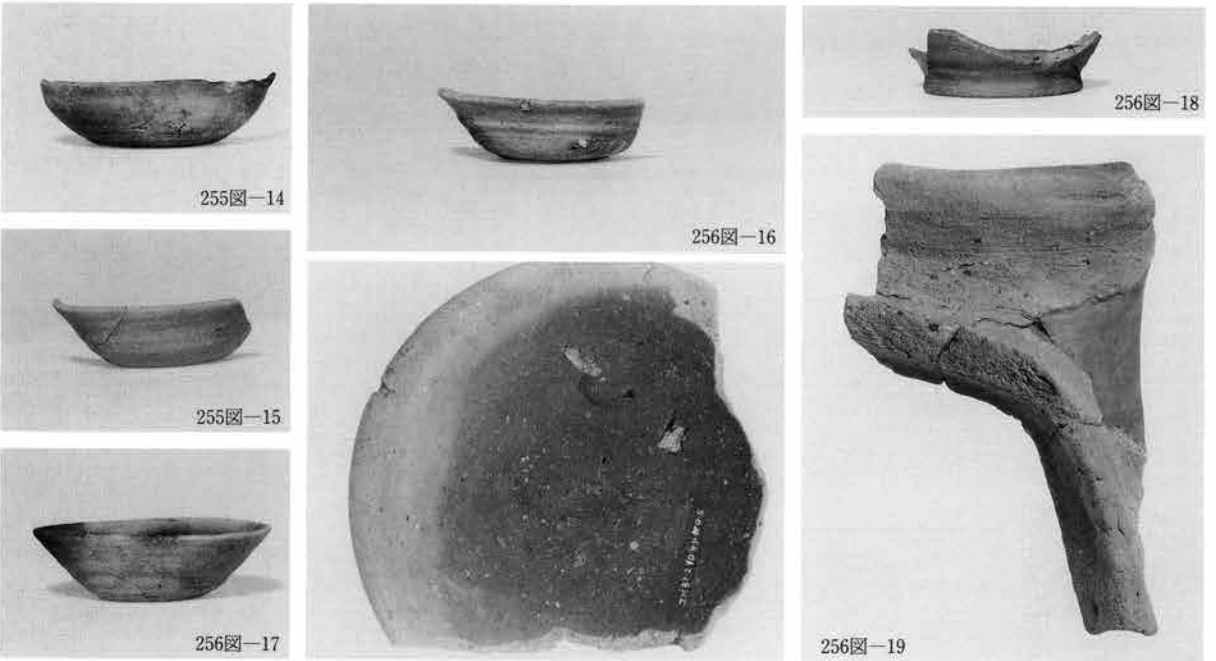
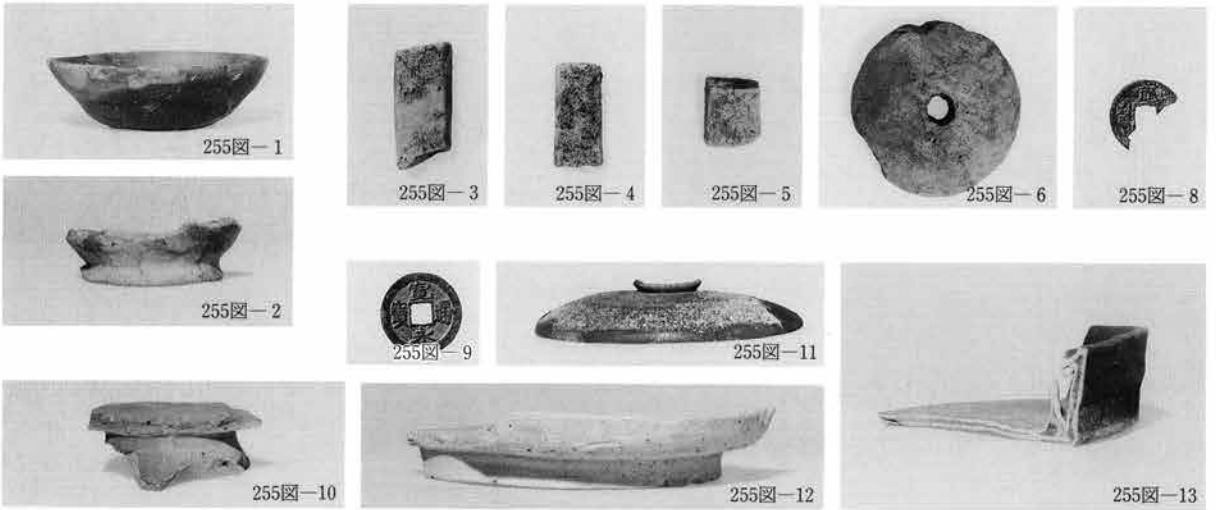
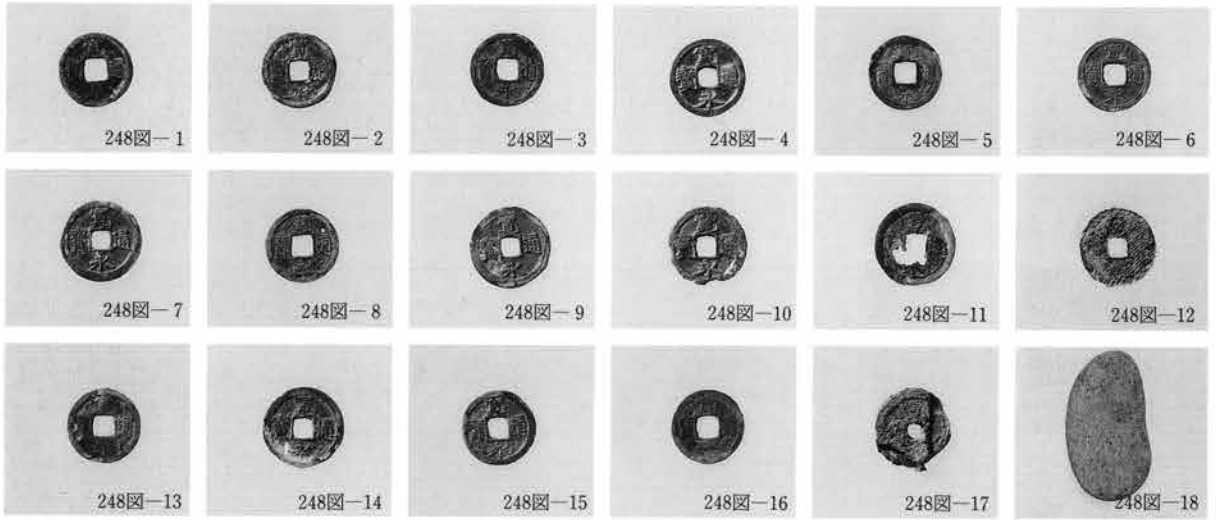
239図-23

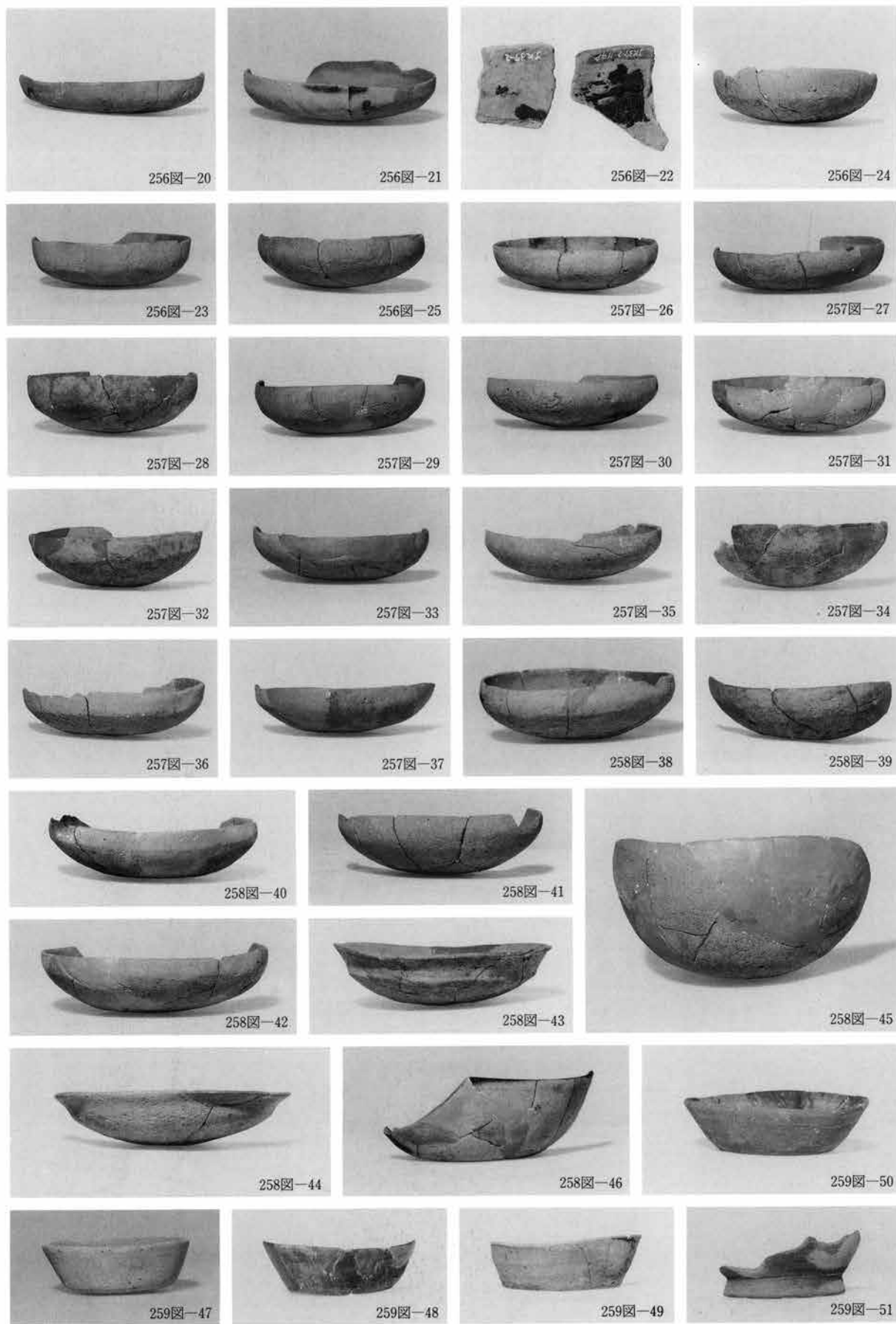


239図-22









井戸出土遺物



259図-52



259図-54



259図-55



259図-56



259図-53



259図-60



259図-57



259図-58



259図-61



259図-59



260図-62



260図-63



260図-64



260図-65



260図-66



260図-67



260図-68



260図-69



260図-70



260図-71



260図-72



260図-73



260図-74



260図-75



260図-76



260図-77



260図-78



260図-78



260図-79

出土遺物



261图-80



261图-81



261图-82



261图-83



261图-84



261图-85



261图-86



261图-87



261图-88



261图-89



261图-90



261图-91



262图-92



262图-93



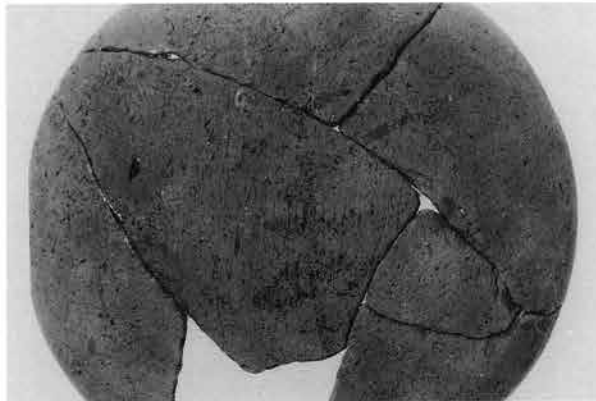
262图-94



262图-96



262图-97



262图-98



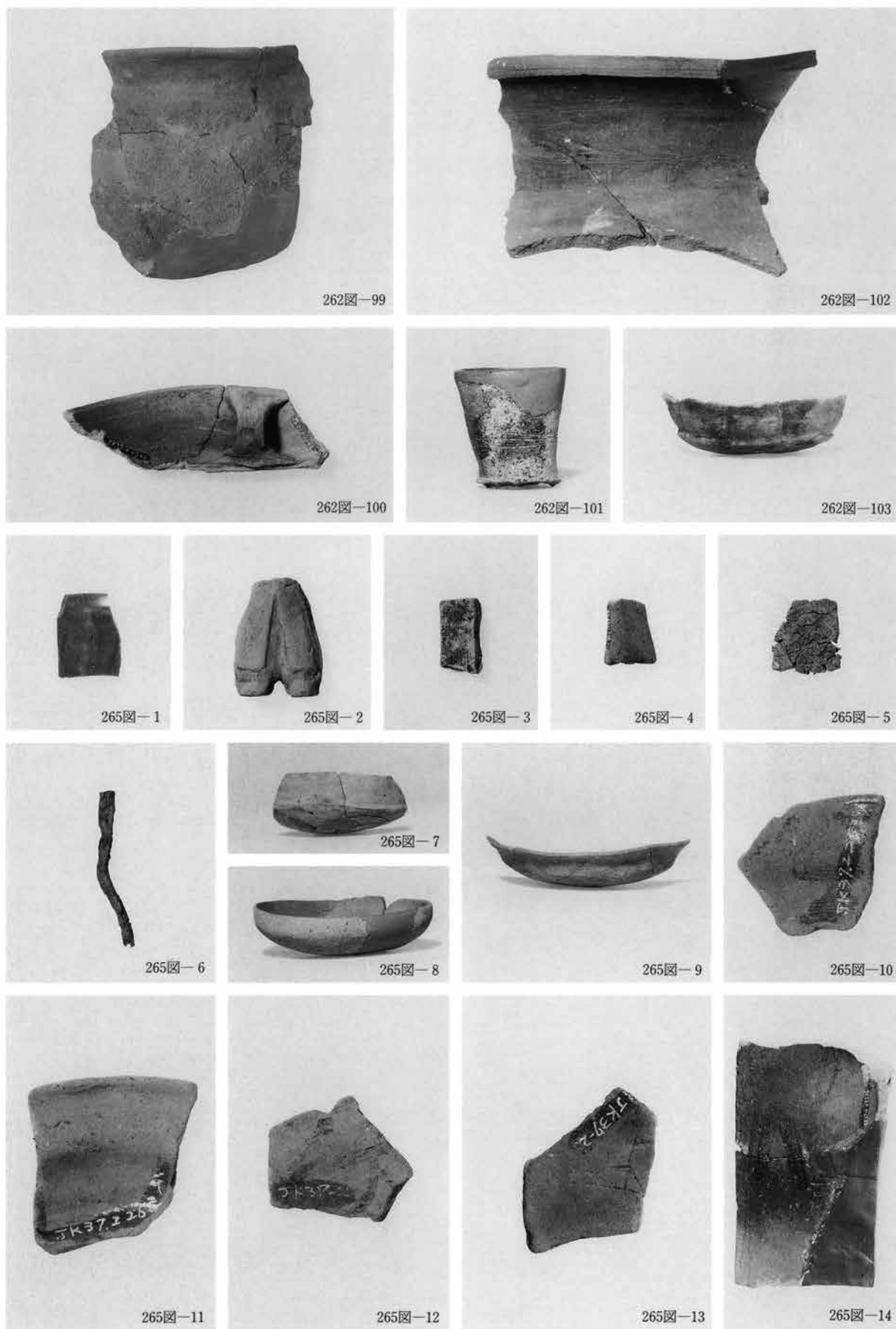
262图-95



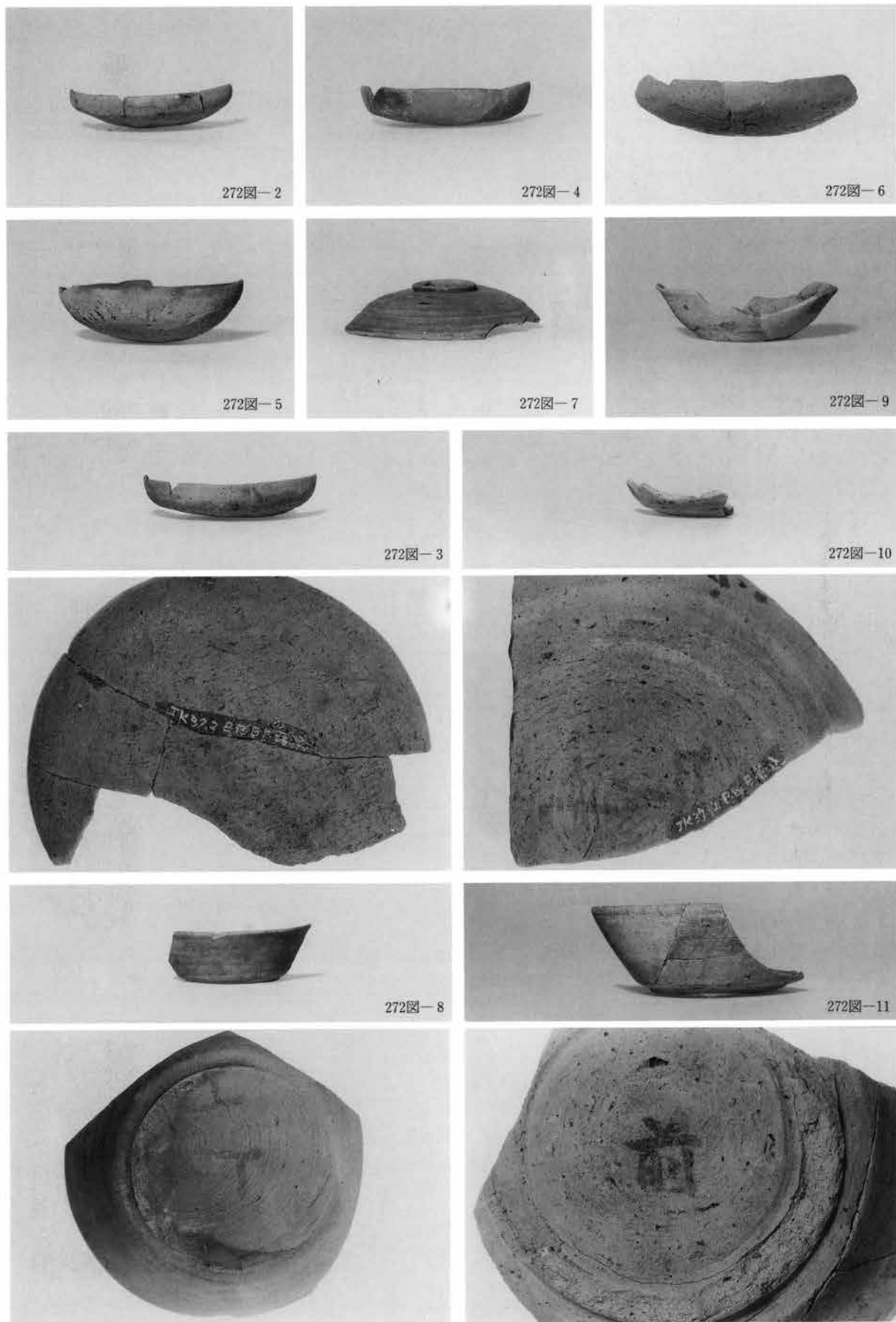
262图-98



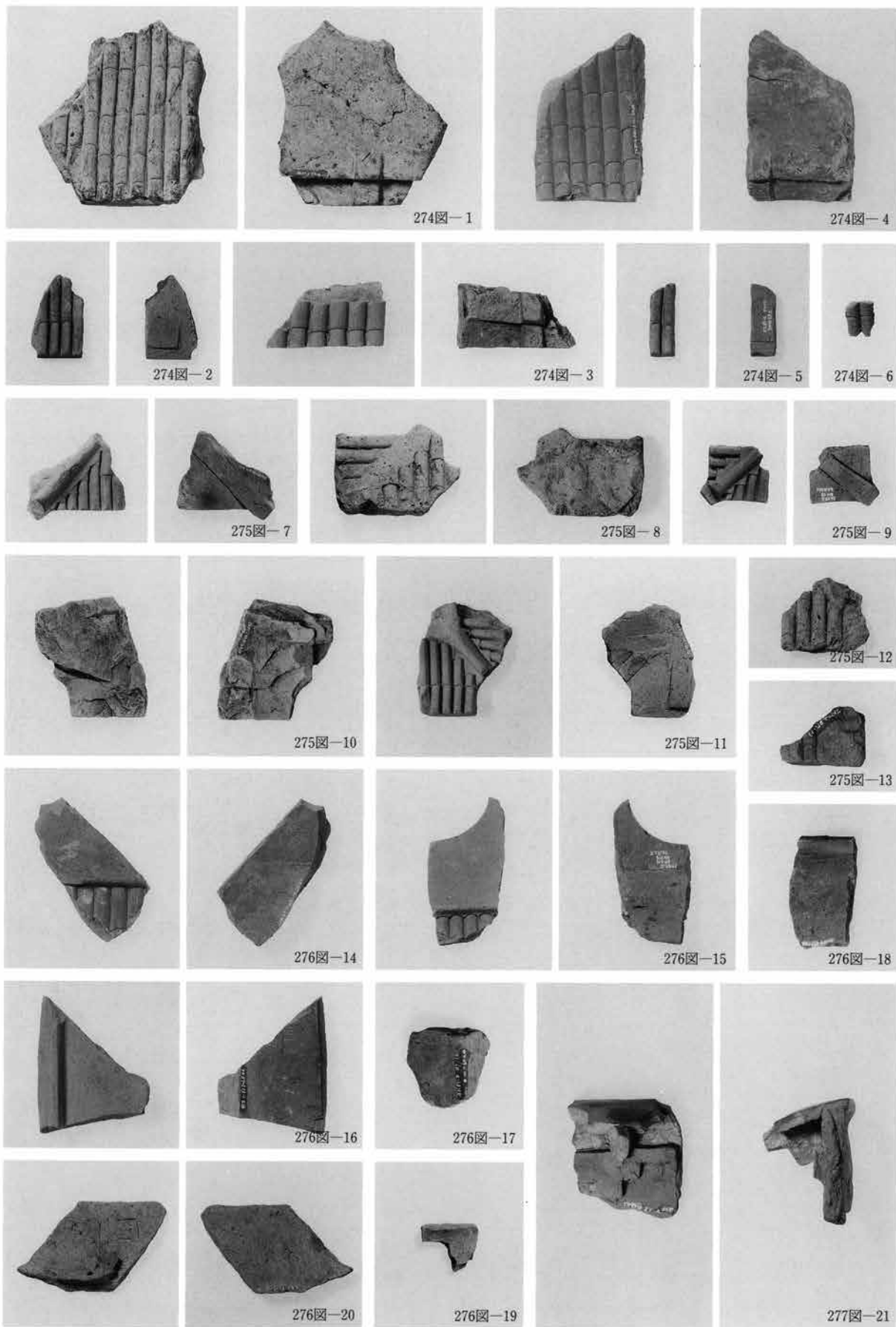
262图-95



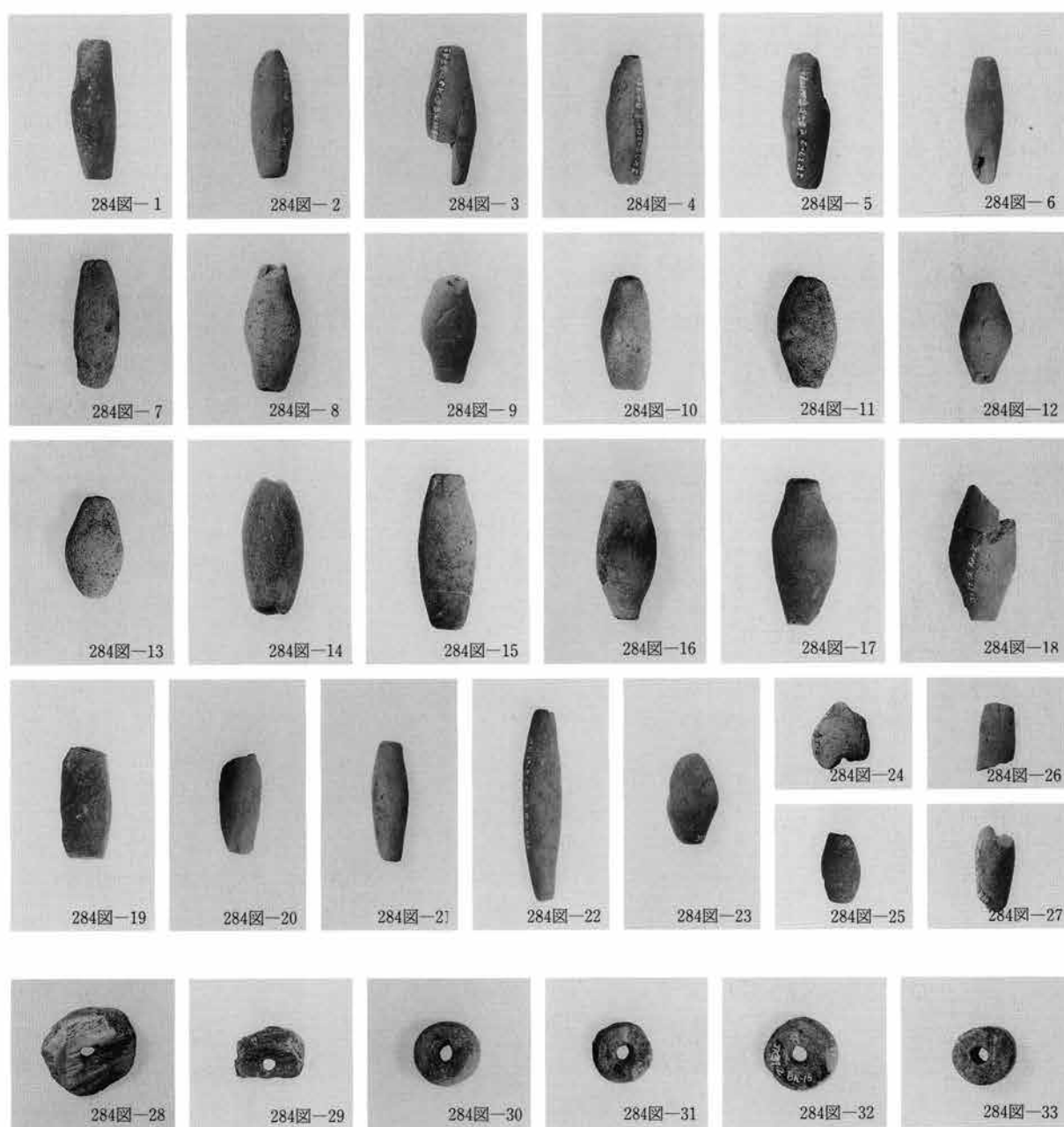
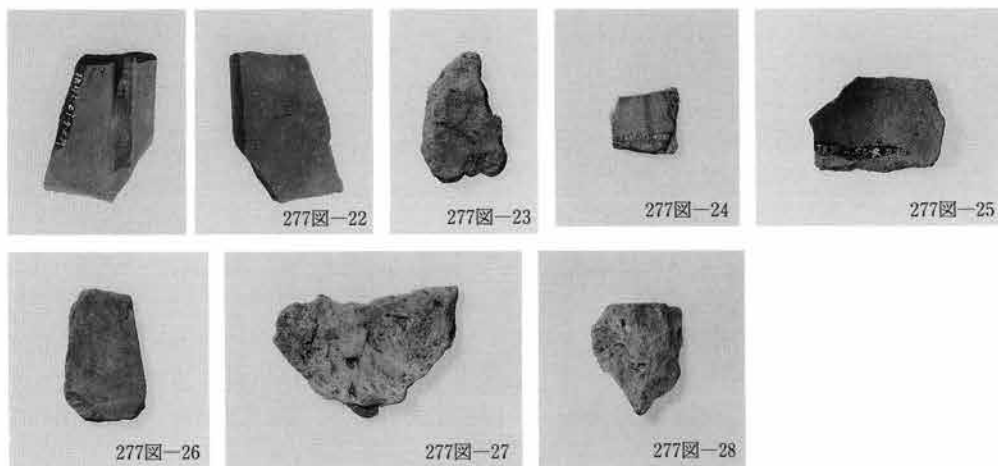
出土遺物



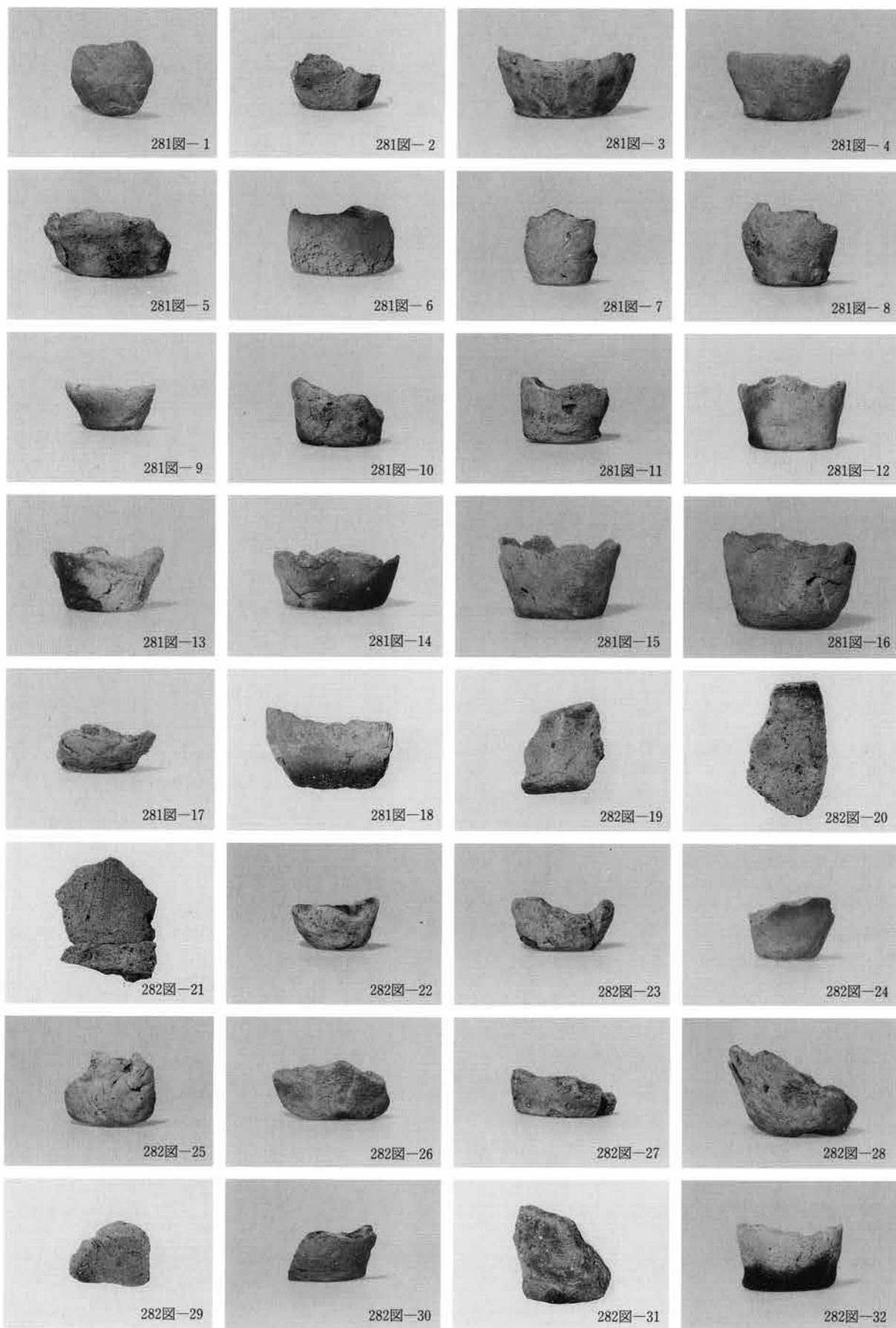
出土遺物

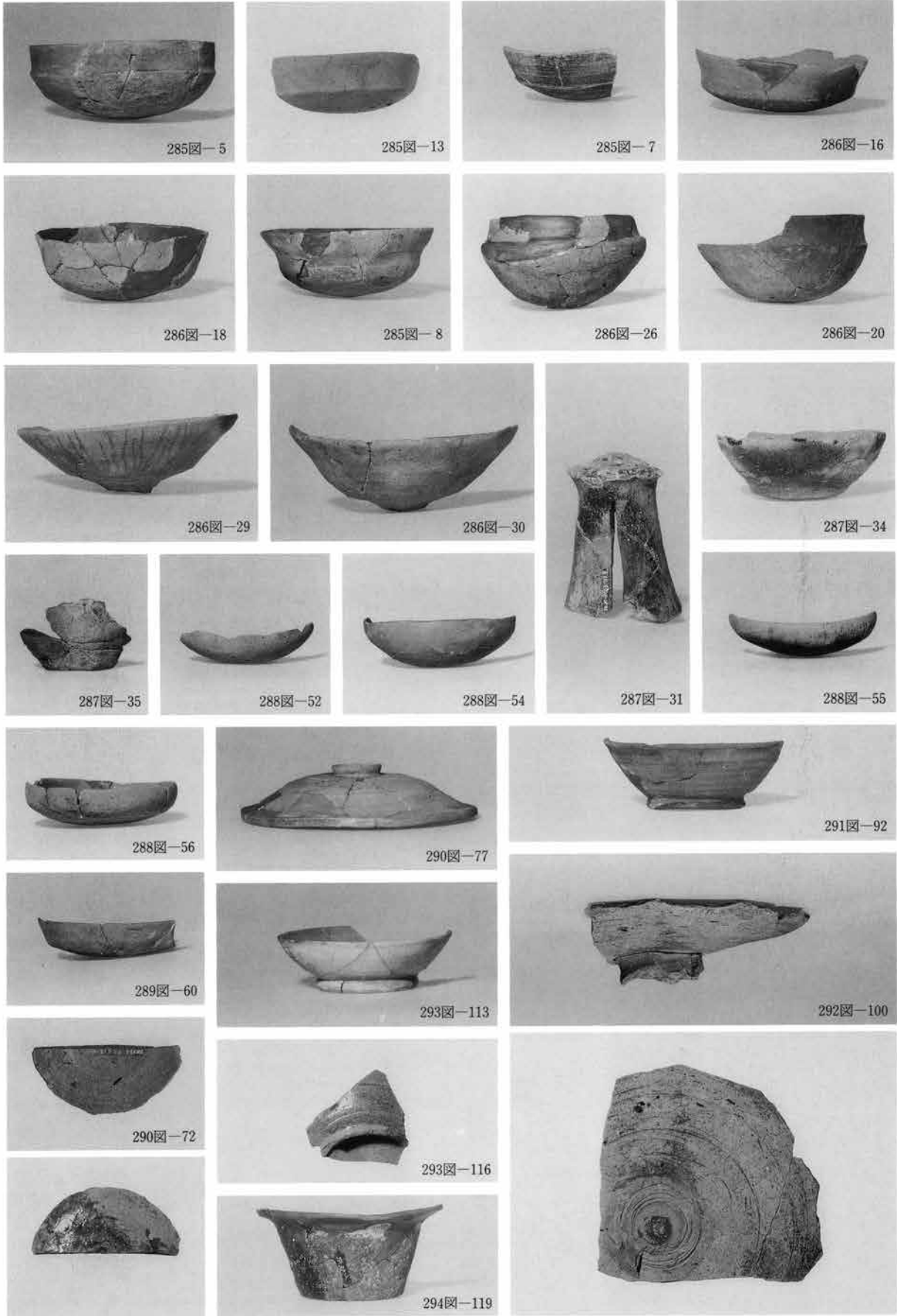


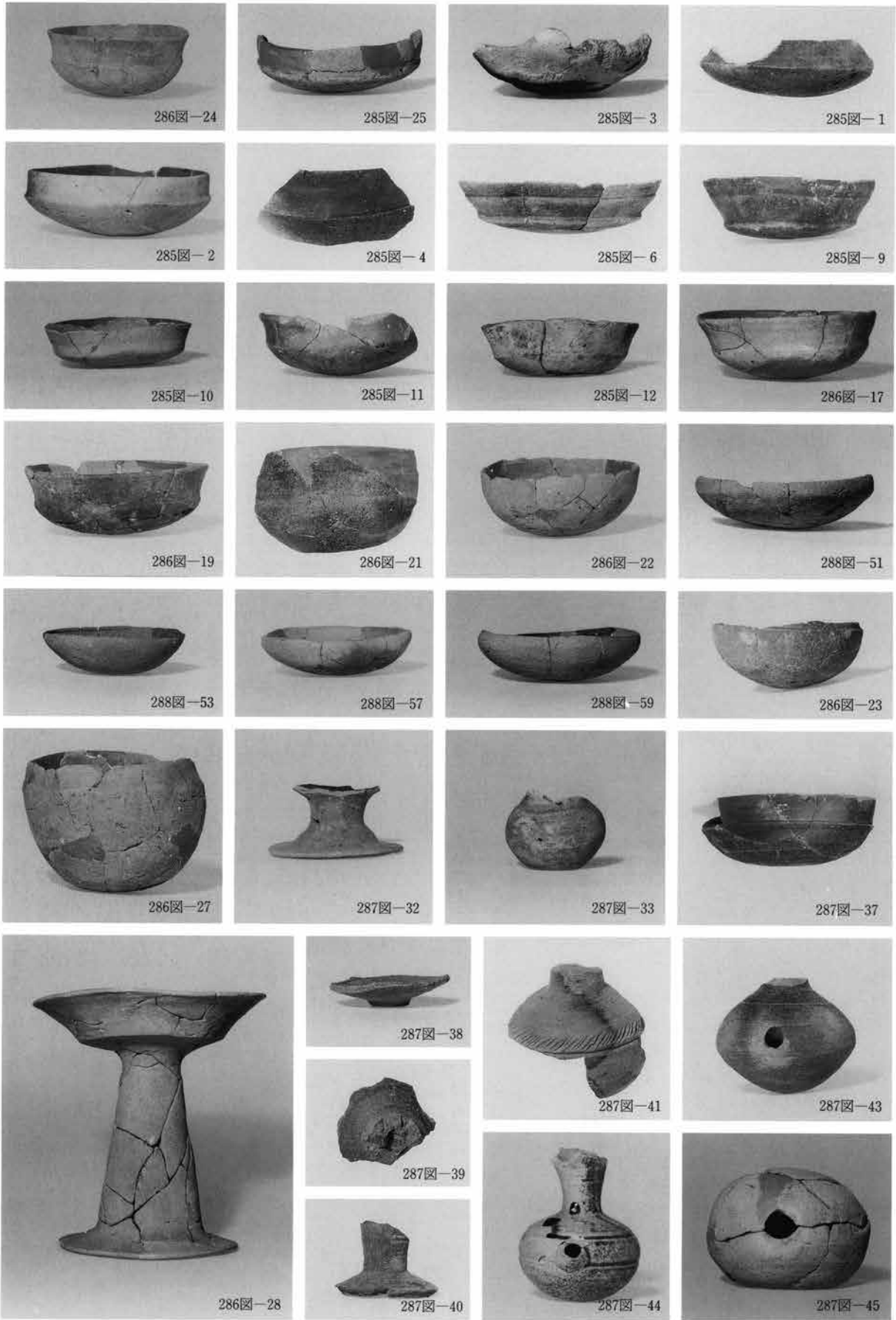
出土遺物



出土遺物







出土遺物



287图-46



288图-47



288图-49



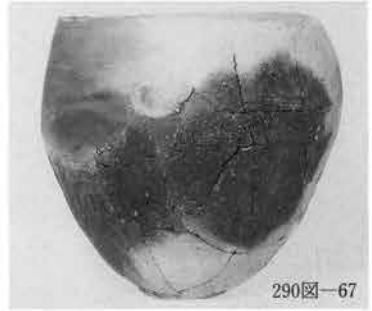
288图-48



289图-64



289图-63



290图-67



289图-66



289图-65



289图-68



290图-74



290图-71



288图-50



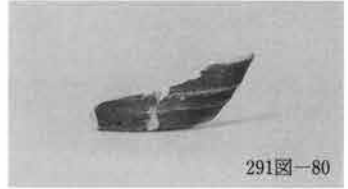
290图-74



290图-70

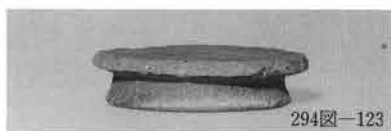


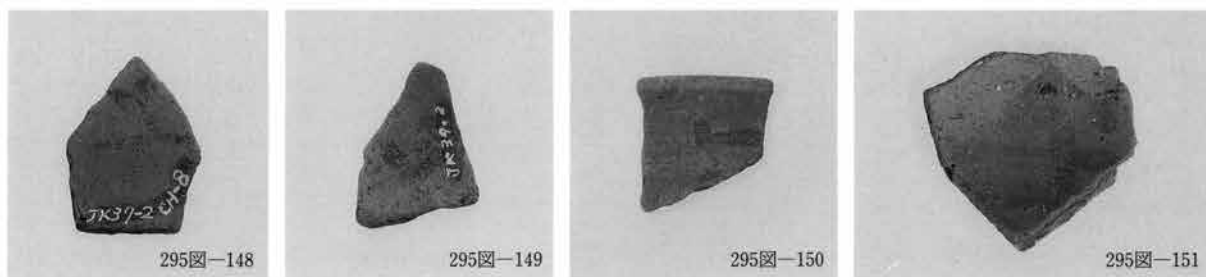
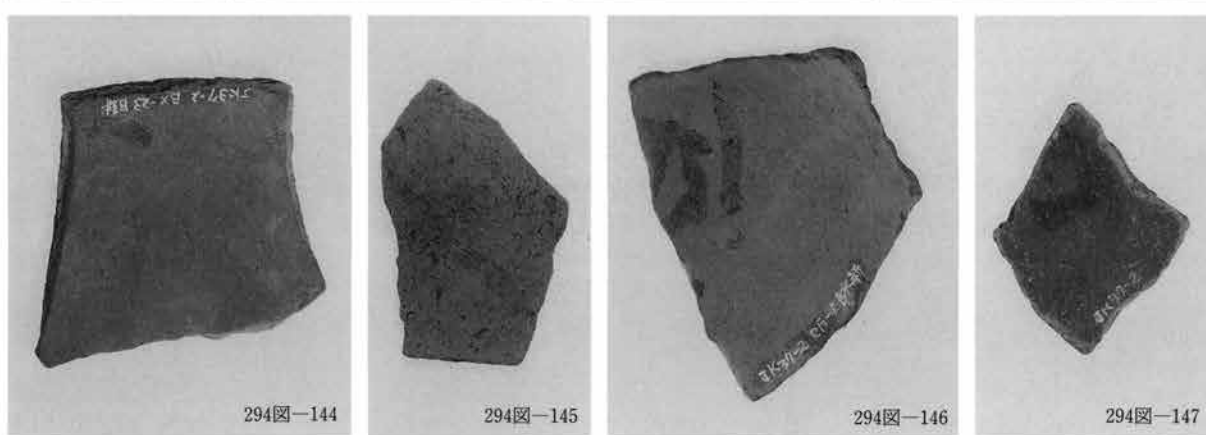
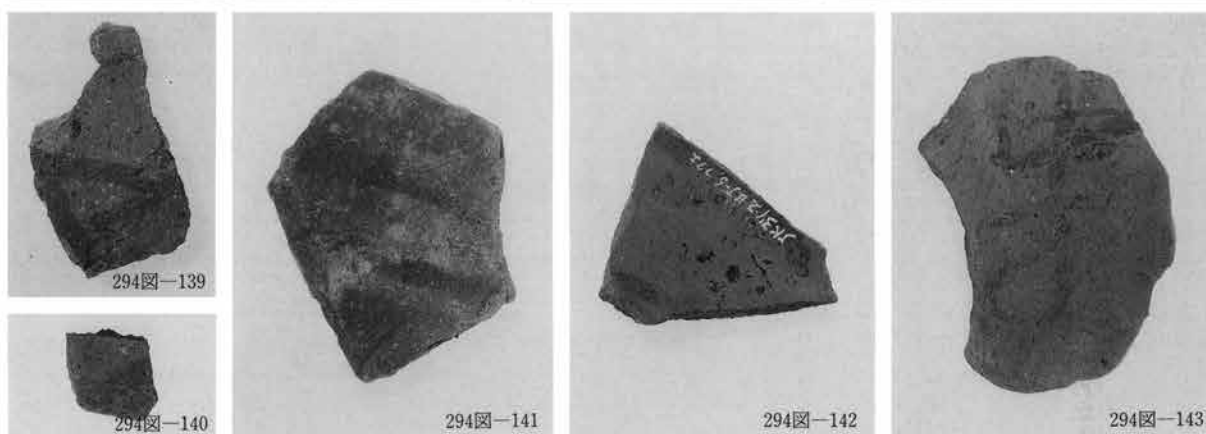
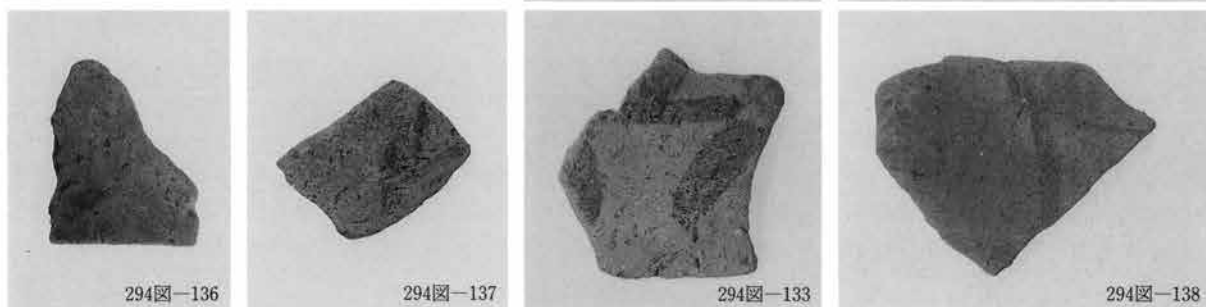
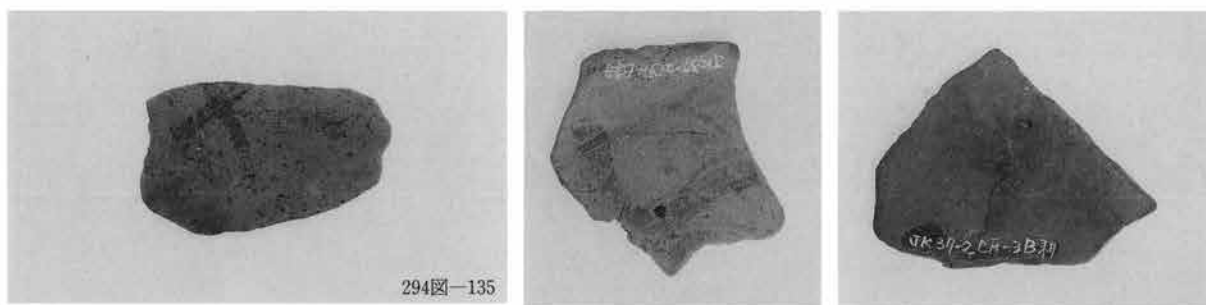
出土遺物





出土遺物





出土遺物



295図-153



295図-155



295図-156



295図-152



295図-157



295図-154



295図-158



295図-159



295図-160



295図-161



295図-162



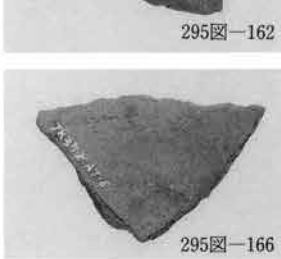
295図-164



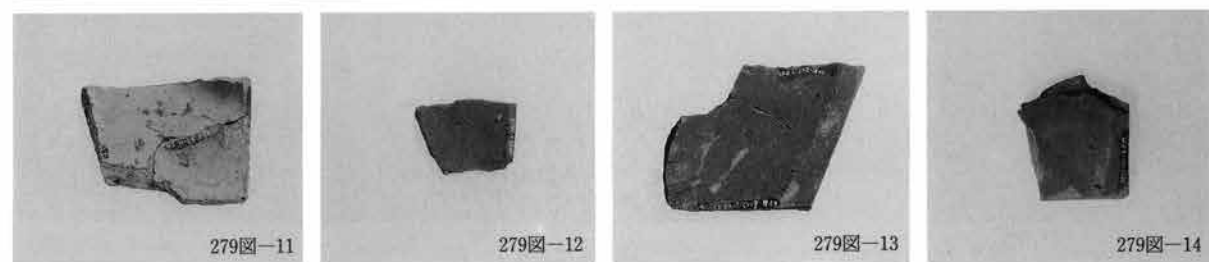
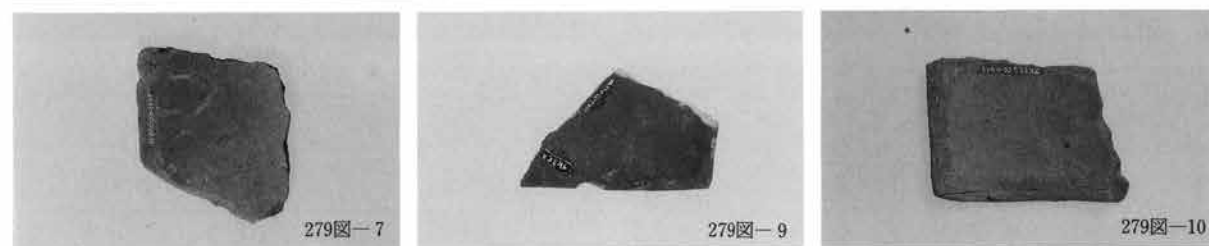
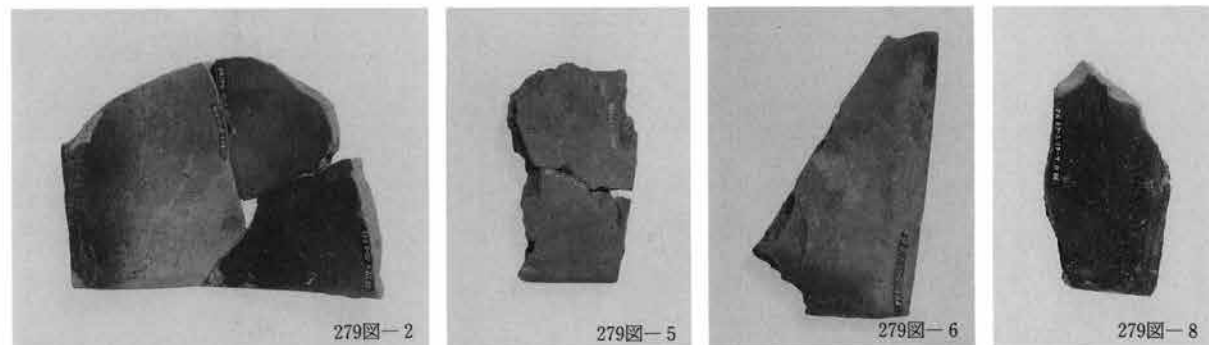
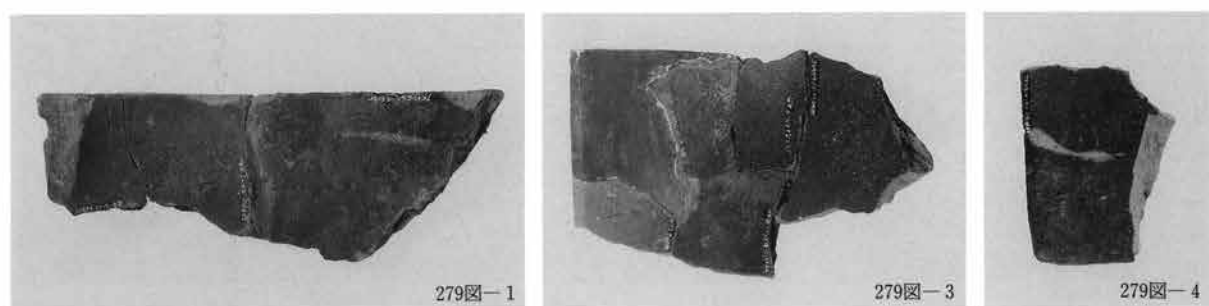
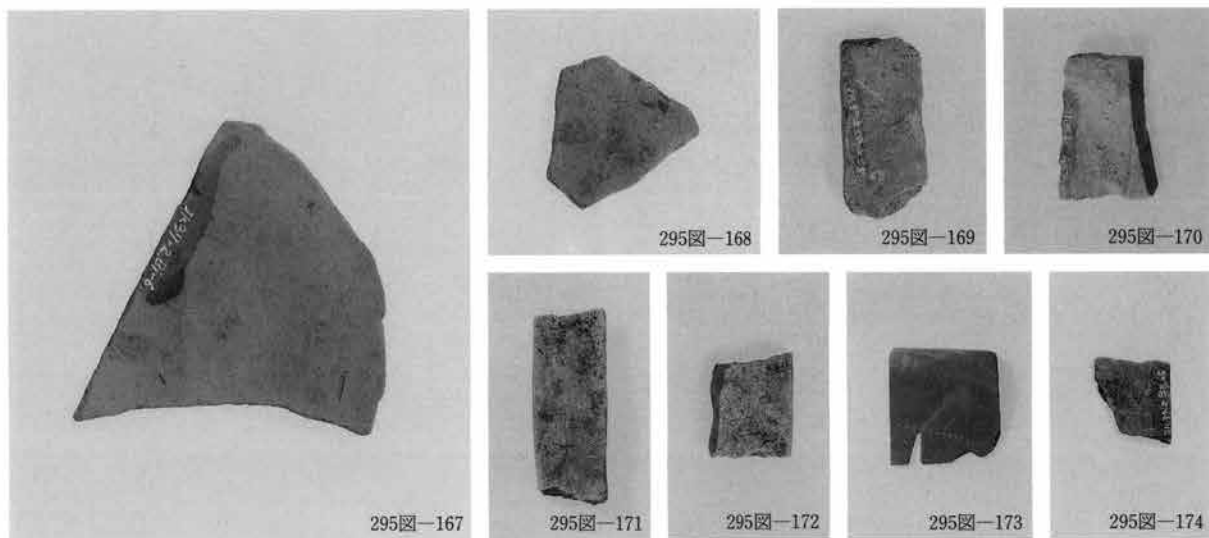
295図-163



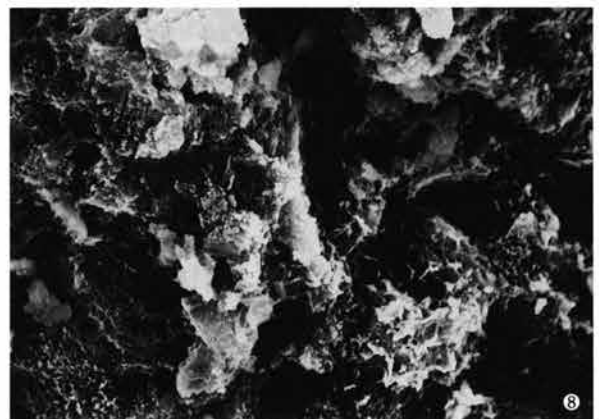
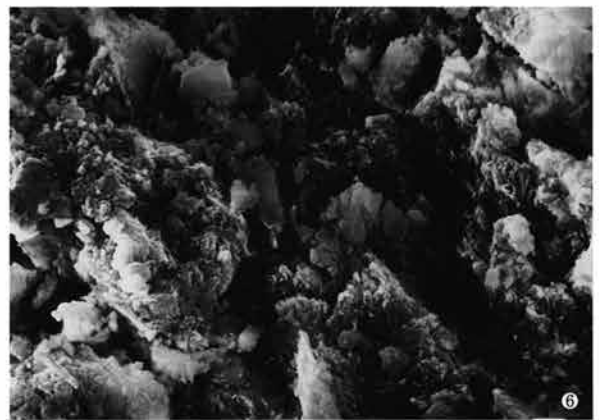
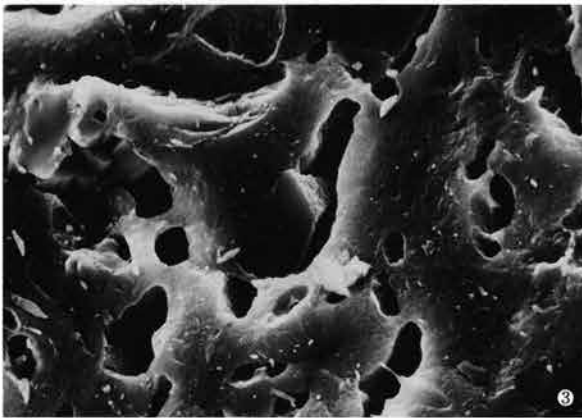
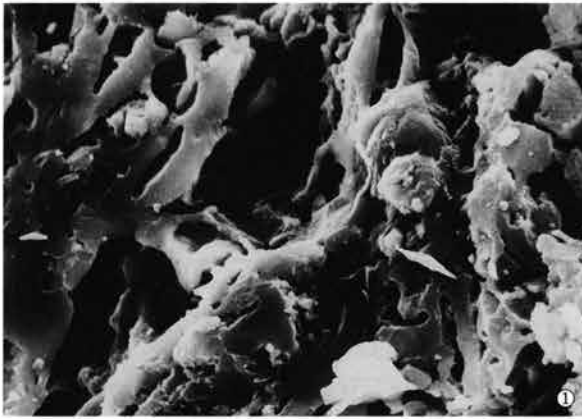
295図-165



295図-166

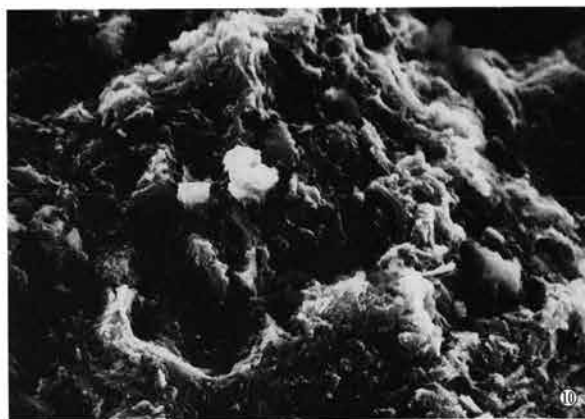


出土遺物



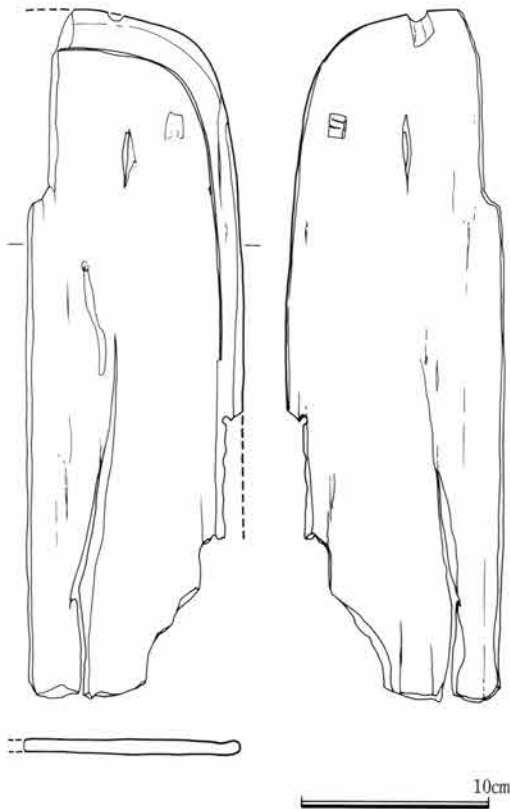
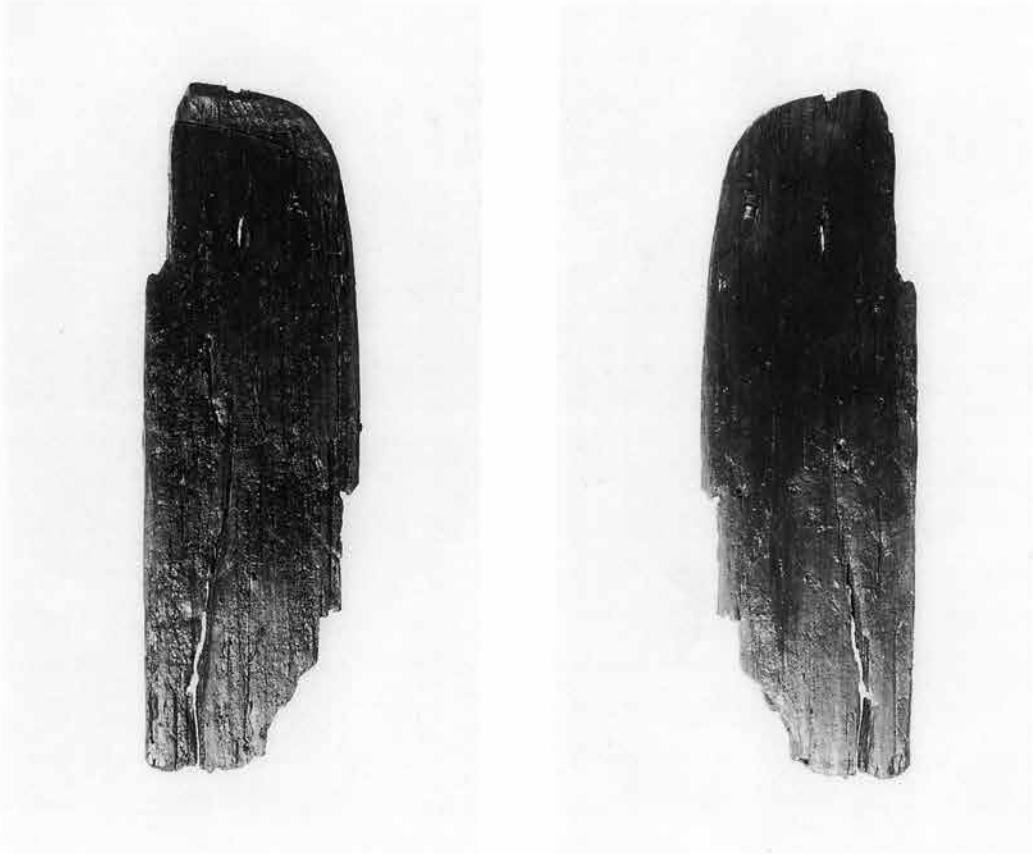
電子顕微鏡写真 (1)

(×5000)



電子顕微鏡写真(2)

(×5000)



15号井戸出土木製品

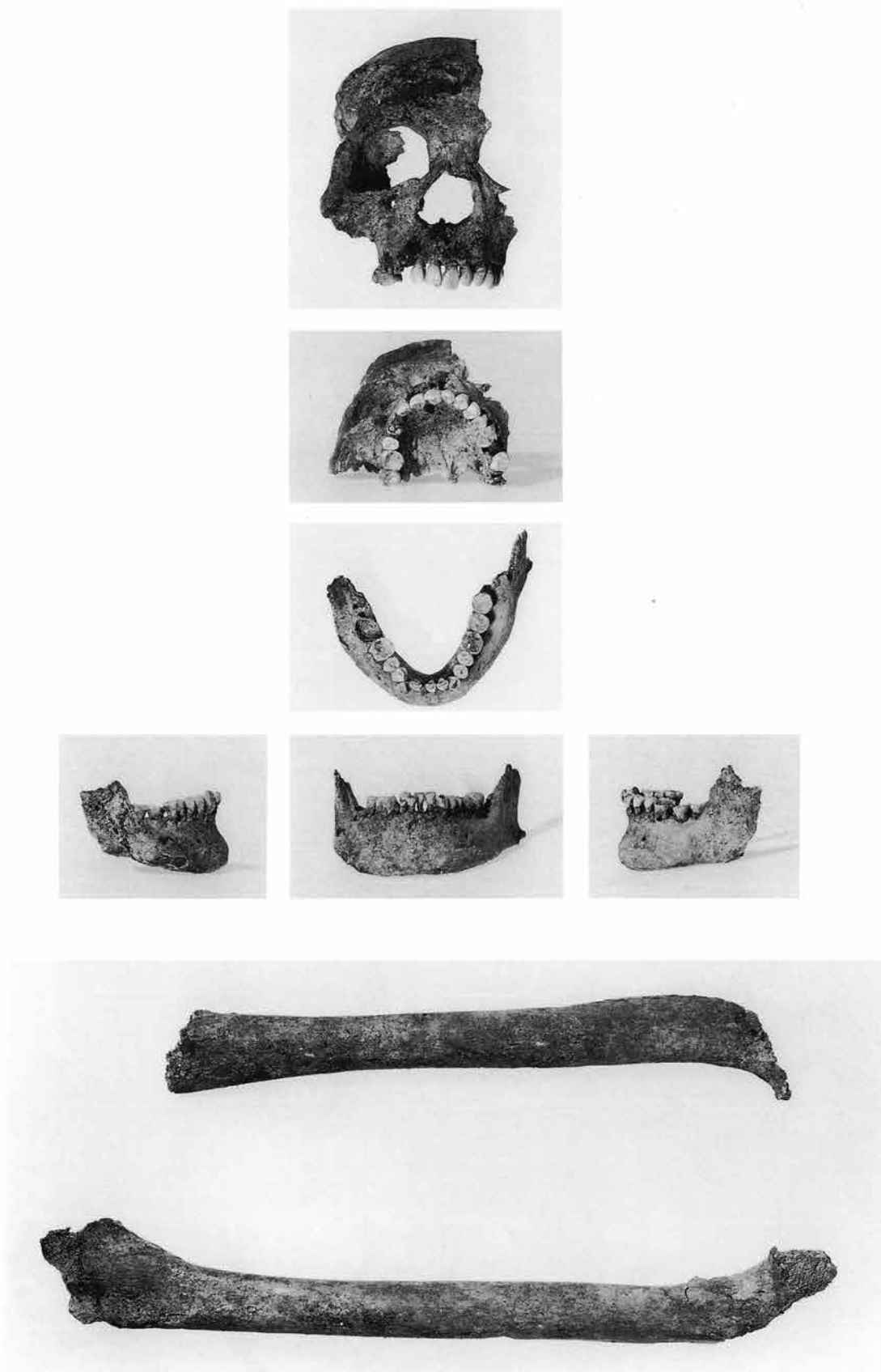
曲物底板（残存長36.7cm・幅11.5cm・厚0.8cm）

15号井戸の底面付近から出土した板目材による大型曲物の底板破片である。短軸23cm前後、長軸40cm前後の隅丸長方形に近い形状のものと思われる。内面の緑部には、短片側で1.2cm、長片側で2.2cmの位置に、側板受けの弱い段が削り込まれている。また桜皮製の止め具が1カ所残存している。整形痕は不明瞭である。緑部は両面とも磨滅がすすんでいる。

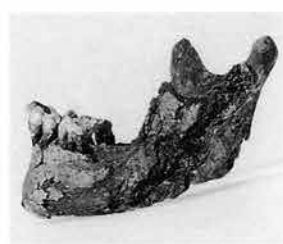
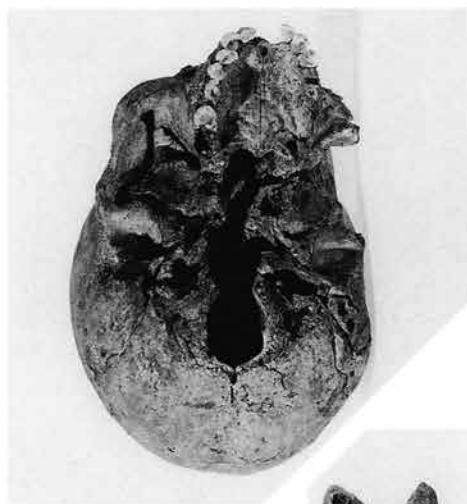
曲物底板プレパラートの顕微鏡観察による樹種同定

早材から晩材への移行幅がはっきりしていて、晩材の幅が広い。征目の放射組織はすべて柔細胞で1分野に1～3細胞である。放射壁上に多数の有緑壁孔がある。板目の放射組織が単列で、多くは10～13細胞高以下である。以上の観察結果より出土品の樹種はスギと同定できる。

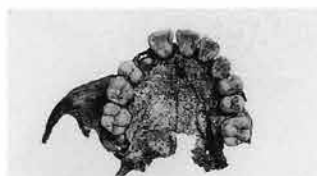
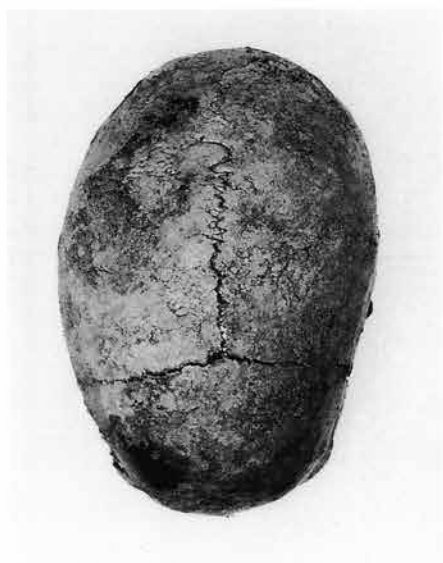
奈良・平安時代の曲物底板は隣接している二之宮洗橋遺跡や二之宮千足遺跡で出土している。ここではヒノキ風の利用が圧倒的であるが、二之宮千足遺跡でスギの曲物底板が1点出土している。



31号土坑（墓壙）出土人骨（約6分の1）



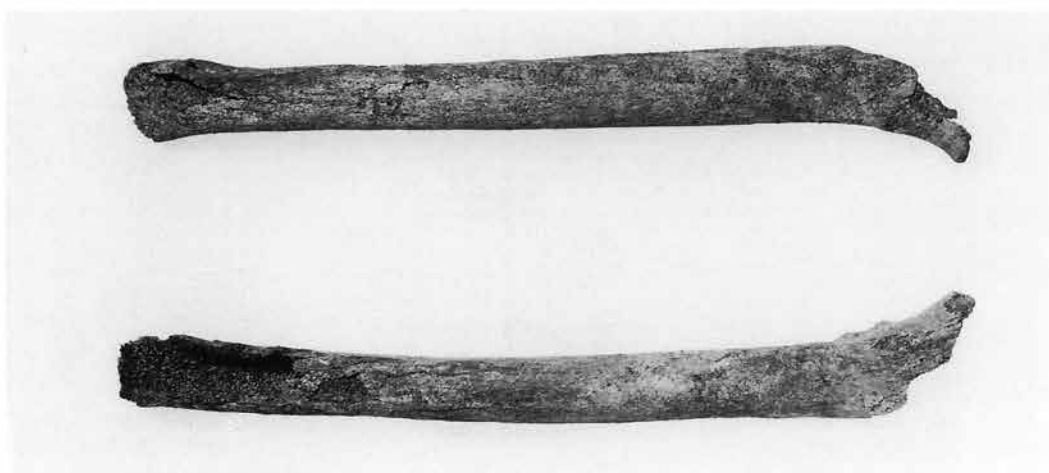
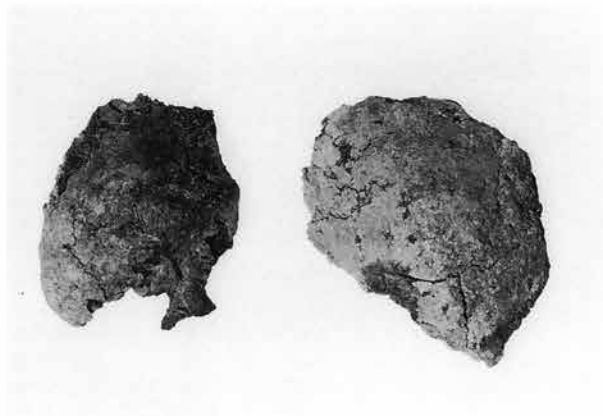
33号土坑（墓壙）出土人骨（約6分の1）



61号土坑（墓塚）出土人骨（約6分の1）



64号土坑（墓壙）出土人骨（約6分の1）



91号土坑（墓壙）出土人骨（約6分の1）

群馬県埋蔵文化財調査事業団
調査報告第162集

二之宮谷地遺跡

一般国道17号(上武道路)改築工事に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成6年3月15日 印刷
平成6年3月25日 発行

編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橘村大字下箱田784-2
電話 (0279) 52-2511(代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社

付図 二之宮谷地遺跡全体図

01-330

26

(6)

林田文

